

千恋*万花～福音輪廻～

図書室でオナろう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全問題解決大団円みたいな展開が原作に無かったので、オリキャラ投入で物語に変化を起こしつつ全ルートにおける問題解決をする二次創作です。基本的に原作沿いとなります。

目次

Chapter 1 開幕

稻上馨 1

友愛 7

始動 16

虚絶 26

陰陽 40

転機 55

Chapter 2 前哨

日常 67

到来 77

嚇怒 86

自由 100

Chapter 3 決戦

分裂 106

休息 117

死闘 139

温度 160

解明 176

友情 186

真相 197

前兆 207

決着 216

終焉 234

Chapter 4 再始動

魔人／遭遇	656
重なる	640
残影	625
安寧	609
父母の愛、娘の決意	591
激突	564
恋歌	547
Chapter 6 "Paradise Lost"	
愛おしい人を想って	532
一步	510
双影	489
別れ／待ち時間	452
伊奈神京香	439
吐露	425
混乱	408
同居	394
子犬	373
Chapter 5 恋心	
急転	354
理想と約束と……	333
進展	315
時間	293
無銘	284
苦悩	261
変動	249

顛末	1077
落差	1063
表裏	1040
飴玉	1022
協力	1011
咆哮	994
人返	978
目覚	962
Chapter 7 福音輪廻	
魔人 稲上馨	947
魔人回生（十年の愛よ、億の死として狂い咲け）	932
伊奈神奏	917
魔人君臨	901
否神／朝武	893
疑惑と決意	875
魔人／交差	856
逢魔	830
叢雨と叢雲／否神と不安	814
混線	795
敵名	773
暴走	751
魔性	732
最初	715
馬鹿	694
一転	676

無明 左手

11141096

Chapter 1 開幕

稲上馨

場違い、という言葉がある。

時折、自分が場違いでないかという疑惑を抱く。

祓う者、戦う者、護る者、仕える者——それらの中にいたら、絶対に浮いてしまう。

何せ——”殺すもの”、なのだから。

「……朝か」

目が醒める。

ゆっくりと身体を起こし、伸びを一つ。

殺風景な自室は何も変わらないのだが、今年の頭から変わった事がある。

両親が仕事の都合で家を出て行った。いつ頃帰ってくるかは未定……突然の事で大変なのは、いつの時代も変わらないか。

一人で飯の支度をし、一人で食べ、食休みを挟み、とある一室へと向かう。

そこは暗く、大仰な札の貼られた一室。まるで何かを封じるかのような見た目だが、当然だ。

ある意味では最も悍ましいものが、ここにあるのだから。

そこに佇んでいるのは、一振りの刀。我が家に代々受け継がれるそれは、決してあつてはならないもの。”最終手段”として存在するこの刀を抜き使命を果たす、という事は避けたい。

幸い父母の時代も、祖父母の時代もこれを抜く事は無かった。だが俺はどうだ？ 無い、とは言いい切れまい。

「杞憂なら、いいんだけどな」

目を伏せて、一瞥し部屋を後にする。

そういえば、手伝いを頼まれていたな……面倒だが、他にやることも無いのも事実。身体を動かすがてら、行くとするか。労働は何も考

えなくて済む。面倒なのは否定しないが、嫌いではない。できる事なら、何もしたくないが。

——俺の名は稲上馨。

——ただの人間だ。

……穂織の街は小さい田舎だ。

だからこそ近所付き合い等は深く、祭り事はほぼ街一丸となって行動する事になる。まあ実際には色々と違うところもあるのだが、俺の主観では、そう見えるという話だ。

家の代表である両親が留守の今、代理として俺はこうして顔を出さねばならないし、足りない人手分動かねばならない。

まあ知らない顔じゃなし、さりとして困る事でもないのだが。

「……困った」

だがより働くとなると、いかんせん疲れが早く来る。その分休息を多く入れねばならぬ、ということだ。効率的に物事は運びたいが、さて上手く行っている気が欠片もしない。

——これほど疲れるものだったか？ いや、慣れぬ事をしているからだろう。疲れなぞ、えてしてそんなものに違いない。

「慣れぬ顔出しは疲れるか？」

そんな風に頭を回す俺にかけられる声。落ち着きを払った、何処か厳格さを持つ声の主は限られてくる。

「玄さん。ひと段落ついたんですか」

ともなれば、顔を見ずとも分かるというもの。それが古くからの友人の祖父であるのならば、なおの事という奴だ。

「お前も奇妙な呼び方をするようになったな」

「いつまでも『廉くんのおじいちゃん』呼びじゃあ、ガキみたいでみつともないでしょう?。」

「違いない」

鞍馬玄十郎——旅館、志那都荘のオーナーであり、同時に俺の友人である廉太郎の爺さんだ。

この春祭りの実行にも大きく関わっているし、俺の一族が持つ元来

成すべき事を知っている。色んな意味で頭の上がない人になる。

「廉太郎はどうだ？」

「前の件で懲りたと思いますよ。でもまあ、本人の気質もありますからね。なんのканの言つて、あいつはいい奴ですからきつと大丈夫ですよ」

「廉太郎には甘いよな、馨」

「そりや友達ですから」

クツクツと笑いながら、廉太郎をフォローしてやる。少し前、女を取つ替え引つ替えしたみたいでえらくクラスの奴らから冷たい目で見られてたのを覚えている。

廉太郎——あいつくらいか、親友と呼べる間柄というのは。

「んで、なんですか？ 本題は」

「いやなに、少ししたら将臣が帰ってくるのでな。ウチの旅館の手伝いだ」

「将臣……？ ああ、廉の従兄弟の彼」

有地将臣という名前だけは知っていた。廉の従兄弟というのもあるが、廉の妹である小春がやけに熱を入れて教えてくれた、というのもある。なんでもイイ男だとか。

俺が幼少の頃は訳あつて都会にいたので知らないが、どうやら入れ違うように彼は出て行き、俺は来たらしい。以来ちよくちよく顔を出していたそうだが、実は一回も会っていない。すれ違つてはいるやもしれんが。

「ああ、この休みの間に手伝いに来るからな。それでまあ、なんだ……仲良くしてやってくれ」

「彼と俺のソリが合うなら」

「廉太郎とあれほど仲の良いお前の事だ、問題無いさ」

「なるほど。——さて、続きやりますか」

「長話だったな、すまん」

「いえ、楽しかったですよ」

玄さんと別れて、俺は自分の仕事に戻る。

それから仕事をしては休み、仕事をしては休みを繰り返して課せら

れた業務を終えた後、建実神社へと向かう。

まだ最後の——外せない仕事が残っているからだ。

神社の本殿に入って嫌にでも目につくもの……岩に刺さった抜けない刀『叢雨丸』。妖を斬りこの地を護った所謂神刀であり、それは空想や伝説などではなく、現実のものだ。斬るべき妖——否、祟りは穂織の山中に潜み、それと戦うものもまた存在する。

無論それを知るのはごく僅かな人間のみ。俺も知る一人であり、同時に……

「やはり、見ているな」

俺の視界に薄暗いノイズの塊のようなものが入る。ガキの頃からずっと見えていたソレが、大人たちの言う叢雨丸の精霊たるムラサメ様なのかは知らないが……いい加減値踏みをするような視線を送るのはやめてほしいものだ。

「安心しろよ、事が終われば消えるさ。どうせ俺は、夏の雪に千切れる陽炎に過ぎないんだからな」

もしもそうなら、俺を値踏みするのもわかるというものだ。誰が好き好んで俺のような奴を近づけさせるといいうのか。

まあ、こつちとしては仕事は仕事だ。知ったことではない。

「おや、早かったね馨君」

「存外、楽なものでしたので」

奥から現れる壮年の男性——朝武安晴さん。この神社の神主であり……そして、稲上を最終手段として欲した朝武。その現在の当主。

古き関係に当てれば、朝武と稲上は雇用主と雇われにあり——

今の関係に当てれば、家族ぐるみの付き合いが長くからある一族といったところか。

無論、彼の一人娘である芳乃さんとも幼少の頃より仲は良い。

「万が一の場合が発生した時の話を」

そしてこれから俺たちがするのは、朝武とその従者である常陸が祓うべき古くからの怨敵——祟りに関する話だ。

だが。

「馨君、僕はもう君がそこまで気を張る必要は無いと思うんだ」

やはり、この人は優しすぎる。

「稲上はその為にいる存在です。無いとは言い切れないのならば、その名を以て警鐘とし、生まれ落ちるならば滅する。ただそれだけです」

「昔からそんなの名ばかりだよ。真に受けないでくれ」

「それでも可能性は可能性。時が来たのならば、俺はかの剣にて魔を刈り取り、悪を滅しましょう。——たとえばそれが、己の友であったとしても」

仕事は仕事。

成すべきことは成さねばならない。

それが生きる限り裏切り続ける俺への罰なのだから、甘んじて受け入れなければならぬ。

もつとも杞憂が終わって欲しいのは安晴さんだけでなく、俺もであるが。

「君の両親だつてそんなに君が背負い込む事を良く思つてない筈だろ。もういいんだ」

「……ですが」

「君が真面目に物を考えているのは分かっている。僕らが少し楽観的つていうのも分かっている。でも馨君はまだ子供なんだ。そんなに大人ぶらないでくれよ」

そう安晴さんに懇願するように言われてしまつては、こちらは下がるしかない。

だが貴方は分かつていない……生きている限り裏切り続ける俺の存在は、決して許されてはいけないのだと。

「……わかりました」

芳乃さんの事を人一倍に大切に思つている彼が、何故ここまで俺を許そうとするのかは正直分からない。

——安晴さんの妻、秋穂さんは朝武の呪いと戦い続け、志半ばで没した。現実は無慈悲であり残酷……そう分かっている筈なのに、何故。

「ではいつも通り、討ち漏らしが起きた時のみ、俺は出ましょう。そし

て、億が一が発生した時にも」

「本当にすまないね……」

「いえ、仕事ですから」

仕事についての打ち合わせは終わった。

——もうすぐ黄昏時だな。

家に戻って、今日は身体を休めるとしよう。

野菜と米と魚が食えて、あとは風呂入って寝られればそれでいい
さ。

友愛

「だからよ、お前ならもうちよいい上手くナンパ出来んじやねーかなってさ」

「おい廉、ソレをほざく為に俺を呼び出したんじやあねえよなア？」

「え、そんだけだぜ？」

「テメエツ！」

朝っぱらから呼びつけておいて、こんなクソくだらない事を抜かす目の前の軟派野郎に吼えても仕方あるまい。

「うお、乗り出すなよ危ねえな。俺のあんみつが倒れたらどーすんだ馨」

「ふん、小春ちゃんに罵ってもらえ」

ここは廉の妹の小春ちゃんがバイトをしている甘味処『田心屋』。なおオーナーは昔からよく知る馬庭芦花……まあ、有り体に言えば幼馴染のお姉さんかな。

そんなわけで俺たちは男二人で寂しくあんみつを突いていた。

「そう機嫌悪くするなよ。俺の持ちだって言っただろ？」

「金の話はどうでもいい、俺とお前の仲だ。こっち分くらい出すさ。が、昨日代理仕事をやってから疲れて寝た俺を叩き起こして、挙げ句の果てにナンパの話ってのはちと割に合わねえんじやねえか？」

「なんだよ、その手の話は面白がって聞くのがお前だろ」

「いやそうだけどさ……」

俺も男だ、その手の話には興味がある。が、しかしだ。俺は生きている限り誰しもを裏切り続けている。よって結ばれる女性などないだろう。

どのみち、孤独に沈み血塗られた宿命を抱いて消えるつもりなのだから。

「んでなんだ、春祭りでナンパすんの？」

「出来たらかねえ」

「弱気だな」

「将臣帰ってくるし、流石にほら」

「従兄弟の前じやカツコイイとこ見せたいのか？」

「そういう言い方やめね？」

「おつと悪い」

軽口の叩き合いが心地いい。やはりこいつと接している時は気楽に、何もかもを忘れて只の人間としていられる。

……そうだ、俺は親友をも裏切り続けているんだ。ホント、救われないな。

自己嫌悪と嬉しさが入り混じる複雑な感情を機械的に処理していると、何やらずいと身を乗り出す廉。

「ところで春祭り明日だろ？ ——実は気になってるコとかいない？」

……何を聞くかと思えばそんな事か。

「いるはずがないだろ」

「え、常陸さんとか誘わないの？」

「何故そこで茉莉の話が出る？」

常陸茉莉——古くから知った仲であり、芳乃さんの護衛の忍者。そう、忍者である。本当に忍者なのだ。

気の知れた女友達と言うとしっくりくるのだが、別に男女のそういう訳ではないと感じている。

それに俺は……

「だってお前、常陸さんと仲良いじゃん。巫女姫様除いたらあんなに仲良い奴お前しか見たことねえぞ？」

「確かに茉莉とは仲が良いな。でもそれは早計だろ？ 別に俺もあいつも、そういう感情は持ちやいないし……持ったとしても違う人間に、だろうさ」

「なんでこう、お前は大人ぶるかね」

「大人になりたいのさ」

わけわからん、とだけ呟き、あんみつを食べる。

それからしばらくして完食したが、緑茶を飲みながら廉はいつになく真剣な表情で言った。

「……なあ馨。昔からお前が何で悩んでんのか知らねえし、俺じゃ役

に立てねえかもしれねえけどよ。愚痴を聞くくらいなら、俺でも出来っからさ」

「ああ、そんな時は遠慮無く頼らせてもらうさ」

……俺がお前に言えるほど弱ければ、何か変わったのかもしれないな。

なあ、廉——

……この街は優しすぎると常々思う。俺のような生まれるべきではなかった存在にも等しく接するのだから。

実のところ、俺の考えすぎなのだろうとも理解している。だがそれでも俺は考えてしまう。恐らくそうだった時、誰であろうとも、俺は冷徹に仕事を遂げるだろうから。

出来るというのは、罪だ——

……一族の使命は、成人した時に親から子へと伝えられる。が、俺は何の間違いか、幼少の頃に知ってしまった。それが原因で俺は壊れたのだろう。両親に感謝しているが、何故それをもっと隠してくれなかったんだとも思っている。

……ああ、時間さえあればきつと、俺は——だが、いざその時になれば必要なのは俺だ。

二律背反——使命を果たさなければならぬ俺と、何もかも捨てて自由になりたい俺がいて……きつと俺は、果たしてしまうのだろう。まったく嫌になる。なんでこう、難儀な性格をしているのだろうか。

「あは、何黄昏てるんですか」

ベンチに座って再び頭を回していると、何処か飄々としているような雰囲気を漂わせた甘い声が耳元から聴こえてきた。

「俺はお前より、一つ悩み事が多いんだ」

別に見る必要もない。

ひよいと隣に座ってきたそいつはよく知っている。

「へえ、それは是非教えて欲しいものですね」

「お前から良い匂いがする事、かな」

「口説き文句ですかそれ。それともそつちの話ですか」

「そつちの話って言ったらどうする？」

「やらしいですよ」

「男なんてそんなもんさ、茉莉」

隣に座ったのは茉莉。

廉を除けば、ここまで気の知れた仲なのはこいつくらいだ。自分たちでもわからないが、妙に気が合うというかなんというか。まあ、そんなに悪くない関係性と言ったところか。

「それで、俺を笑いに来たのか？」

「別に。相変わらず猫背が目立つものですから」

「理由になつてない」

「じゃあなんとなくて」

……昔からこいつの事はよくわからん。気が付けば懐にいて、飄々とした態度で煙に巻く。だが不快ではない。まるで猫のような女だ。もつとも、本心は存外単純なのかもしれんが。

「さつき、急に廉の奴に言われた。春祭り、お前を誘って行かないのかと」

そんな風に切り出してみると、茉莉はきよとんとした顔を見せてから、しばし沈黙考すると、やはり合点のいかぬ顔で聞いてきた。

「なんでワタシがそこで出るんですかね？」

「俺も知りたいよ。なんでお前なんだろうな」

「そういえば、芳乃様も言ってたんですよね。馨くん誘ったらーって」

「……何故俺が？ 芳乃さんは何を考えている？」

「そんなのワタシが知りたいですよ」

ふむ……何故なんだろうな？

けれどもまあ、周りの奴らが望むならば、それはそれとしてありなのではないだろうか？ 茉莉といえるのは心地いいし。

「じゃあ、回ってみるか」

悪くない話だとも思い、思い切って聞いてみる事にした。

「はい？ ……ワタシが、馨くんと？」

「ああ」

菜子は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。いや実に唾然とした顔をしているのだが、まったく良い顔が台無しになってるぞ。「まあ、確かに一人というのは味気ないですし。いいですよ、付き合います」

顔を戻してしばらく考えた後、あっさり俺の提案を飲んだ彼女が、付き合いますという言い方はやめてほしい。誤解される気が……いや、別にいいか。何を気にしてるんだ俺は。

「急な誘いに乗ってくれてありがとな、菜子」

「いえ、気にしないで下さい。それにワタシ、馨くんと回れて嬉しいですから」

「世辞でも嬉しいよ。そういうの」

ニコニコと微笑む彼女の言葉がたとえ世辞だとしても、それはそれで男冥利に尽きるというもの。

ただその言葉に何か思う事でもあったのか、ややムツとした表情を見せた。

「なんだ、気に障ったか」

「世辞じゃなくて、本気です。そこ間違えないうでくださいよ」

「なるほど、そりゃ悪かった」

ビシッと指差しながら言われれば、謝るしか出来ない。

「んでさ、ずっと気になってたんだけど。近くない？」

ただそれはそれとして……俺の真横に座ってるし、地味に体重かけてきてる感じするしで、本当に猫が近くで丸まっているような感じすらある。

さつき菜子を猫のようだと言ったが、いや本当にそうなるとは思わなんだ。

「あは、何か不都合でもあるんですか？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら、更に肩に寄りかかってくる菜子に反省の二文字は無さそうだ。

服越しだというのにとっても柔らかく、また不思議と良い香りがある。

「お前の身体がやべえ柔らかで俺がやべえ」

「ふーん、やーらしー」

「……耳に息吹きかけんのやめてくんない？」

「普通殿方はこういうのを好むと思うんですけど、違いました？」

「好物だけど、それは創作物の話であって現実じゃねえよ」

「ちえ、残念。もう少しそれっぽい反応して欲しかったなあ」

それっぽいってなんだそれっぽいって。俺は芳乃さんじゃねえんだから遊びがいなど無いというのは分かりきった話だろうて。

面白くなさそうなジト目を見せつつ身体を離す菜子を見て、やはり猫のようだという感想しか浮かばない。

猫の菜子……というと、さながらそちらの意味として捉えられかねないのでやめておこう。それ以上は必要無い。

チラリと隣に座る菜子を見る。

昔は起伏のきの字も無いチンチクリンだったが、それがよくまあここまで変わったものだ。

「——む、悪い。お袋からメール……なるほど。戻るまで店は開けなくていいのか」

「馨くんちのお店って何屋なんですか。割と昔から疑問だったんですけど」

「電気屋だが」

「の割には洋服とか模型とか色々ありませんでした？」

「今は雑貨屋も兼ねてる。もともと、最近はコンビニにお株を奪われてるよ」

ま、親父とお袋の本業は刀鍛冶だし、そっちの方が儲けが出るから構わんのだが。

しかし俺は刀鍛冶を継ぐつもりは無い。手伝い程度の技術は仕込まれているが、そもそも向いていないという大問題がある。

なんでってそりゃあ、色々考えて経験に従って善し悪しを見るなんて面倒だろう。労働ってのは何も考えずに済むから好きだが、刀工ってのはどうにも性に合わなかった。

最近ハサミや包丁、鎌や鉋の類まで幅広く扱っているようだ。おかげで妙に顧客が増えて稼ぎがいい。妥協しない奴らは金の羽振り

がいいと笑ってたお袋の姿は記憶に新しい。

「なるほど、時代の変化つて奴ですね」

「あと俺が和服の類よりも洋服の方が楽に着れるとガキの頃駄々こねたのもあるんだろうさ。あの頃から急に雑貨の類が増えた。まあ、雑貨屋というかここだと珍品屋みたいなもんとも言えなくもないし、何屋なんだかは実際俺もわからん」

まあ雑に雑貨という意味で雑貨屋なのだろう多分。

とかく店屋なのは確かだ。

「しかし、お前がこの時間に一人でいるのは珍しいな。道草食つてたからつてドヤされても知らないぞ」

「別にドヤされるほどの事でもないですよ、単なる買い出しですし。あつ、そうだ。なんなら一緒に見て回りますか？」

そう提案されては、断るのは難しいというもの。別に断る理由も無いし、家にいたつてやることは身体鍛えるくらいしかない。だったら人と接していた方が良いというもの。

しかし、何故だろうか。なんかやけに最近、茉莉と接している時間が増えてきた気がする。おかしい、一応避けている筈なんだが。

……まあ、それはそれとして。どうしてもしてやられたような気がしないでもない俺は。

「いいけど、それ意趣返し？」

と、困ったように聞くことしか出来なかった。

確かに俺は、茉莉の誘いに乗った。

……乗ったのだが。

「どうしたんですか？」

「芳乃さん、俺さ。茉莉と春祭りを一緒に回ろうつて約束取り付けてさ、んでその後買い出しに付き合ってたんだよ。」

……なのに、なんであんなの家で飯食ってるの？」

いつの間にかあれよあれよと朝武家に連れて行かれ、何の因果か晩飯を食べている。もちろん、安晴さんも芳乃さんとも一緒にだ。

「流されやすいのがいけないのでは？」

何でもないように芳乃さんはズバツと斬り込んで来やがる。いや
まったく否定できないし、実際その通りなのだから何も言い返せな
い。

「別に飯を食う相手もないからいいんだけどさ」

悪い気はしない。やや罪の意識に苛まれるが、それは生きている限
り終わらぬもの故割愛しよう。

「……けどもまあ、菜子の飯を食う事になるとは。避けていたんだが
な」

ただ、気の緩みからか口を滑らせてこんな事を言ってしまった。

別に俺は菜子の飯が嫌いなわけではないのだが、かと言って好きか
と言われるとそうではない。いや美味いんだけどさ——

「珍しい事を言うね馨君。君、菜子君のご飯が嫌いだったのかい？」

「えっ、ワタシそこだけ嫌われてた？　というかメシマズだと思われ
てた？」

「馨さん、あんまりそういうの言わない方が。ほら、菜子ショック受け
てますよ」

……おっと、いかな。誤解を解かねば。

ジツと見てくる菜子に声をかける。

「そういう意味じゃなくてだな……」

「では？」

「ええと、その……アレだよ、うん。なんていうかさ……」

正直な本音を言おうと思ったら、なんか急に恥ずかしくなってい
た。

絶対顔赤くなってる。頬を掻く指が止まらない。それでもしどろ
もどろになりながらも、なんとかかして言葉を紡ぐ。

「あの……ほれ。俺、んな料理上手じゃねーじゃん」

「前に食べたけど雑でしたね」

「るせえやい。んでき、こう……食べるとき、違うじゃないか」

「まどろっこしいんで結論言ってください」

急かされた……

菜子の視線は冷たい。

が、奴も思うまい。俺が何故口ごもるかを。

「……なんかさ、恋しく……なるんだ……」

本当に恥ずかしくて俯きながら、声まで小さくなった。

一度美味しいものを食べると味を占めるのと同じ理屈だ。俺にとって料理とはペンギンが空を飛ぶようなもの。いや確かに作ることは出来るのだが、まあ雑な味付けと献立になるので菜子の飯を食うとうにもまた食いたいと思うようになるのだ。

単に俺のプライドの問題である。美味しい飯を食いたいが為に友人にタカリに行くなど下賤な話だ。

「あは、そういうことでしたか。意外と可愛いところあるんですね。そのくらいなら言ってくれていいじゃないですか」

「男はフクザツなんだよ……」

さつきとは一転してニコニコとしながら「このこの」と脇を突いてくる菜子。お前地味に技術入れて突いてんな？ ドスドス入ってくるんだけど。

「恋しいって……え？ ま、まさか二人は……これが相思相愛——!?!」

人が羞恥心でズタズタにされているところで、何やらあらぬ誤解がまた生まれてしまっていた模様。

「ごめんなさい芳乃様。実は内緒でお付き合いしてまして。つい先日から」

「おい菜子。嘘はやめろ」

このバカ、いらんところからかいおつてからに——!! こいつ従える主人を弄るのにも容赦ねーなあ!!

この後、安晴さんが解説したことによってこの場は丸く収まった。

……いや本当に勘弁してほしいものだ。

始動

翌日、俺は待ち合わせの場所へと行く。30分ほど前に着いたが、どうせ茉莉子の事だ。そんなに待たされることも無いだろう。

その証拠に――

「早いですね、相変わらず」

「遅れるよかマシだと思ってるね」

茉莉子はすぐに来た。

普段の格好とそう変わらないが、少しだけ綺麗に見えた。可愛いではなく、綺麗。はてさて、何故だろうか。

「じゃ、行こうか」

「エスコート、お願いしますね。あはっ」

眩しく屈託の無い笑顔だ。

いつ見ても、そう思う。

春祭りは観光客で賑わう。

初めて見たときは人の波の多さに辟易したものだが、慣れてしまえばそれほどでもない。

温泉に刀に祭りに舞――なるほど、人の好むものが立て並べばこうもなろうという好例だ。こちらとしては騒ぎ立てる理由がさほど分からないが……どうも、人間ってのは不思議なものに惹かれるらしい。

「昔も、こんな風に何回か回りましたっけ」

「片手程度だけだな」

そもそも春祭りの時に外にいた方が珍しい。大体は面倒くさがって家にいたもんだ。都会の人混みを思い出して嫌になるからな。

生まれは向こう故、こっちの単純明快さに初めて触れた時、こうも楽なものかと感動した。あれだこれだと考えず、ただ場所を憶えておけば全部歩いていけるなんて、とても楽な話だろ？ あと健康にもいい。でも主流の和服は着るのが面倒だ。

もつと単純なのは”仕事”の時だが……まあ比較対象が悪いか。

しかし、俺は今年も出ていくつもりがなかったのでノープラン。こ

こは大人しく希望を聴くでしょう。

「どこ行きたい?」

「あなたとなら、どこへでも」

どこか蠱惑的にそう返してきた茉莉。胸の高鳴りとかそういうものよりも先に呆れが来る。

こいつのこの、飄々として余裕のある態度の鼻を明かしてやりたいもんだ。何でもなくどうでもいいことを思わせぶりな言動で、あらゆる方向へと向かわせてからかう。別に悪いことではないが、こうもいいようにやられると困る。

「あのな、そういうこと言う? フツー」

「あれ、グイグイ系の方が好みでした?」

「別にそういうのじゃ……ああ、もういいよわかったよ。テキトーに回ろう、アテなくさ。ほら」

そう言って茉莉の手を握る。

……思っていたよりも柔らかいな。てつきり、もう少し硬いものかと思っていたが。

「……えっと、これって……」

見れば顔がやや赤い。

ククク、だが俺は知っている。茉莉にからかいでは勝てない。だからこそ、想定外の一撃を用意する必要がある。

「——これで迷子にやならねえだろ?」

「子供じゃありませんよワタシは!」

期待通り、茉莉はガーツと吠えてくださった。

へへッ、一本だ。

「珍しいからってオマケつけるのは商売的によろしくないと思う」

「馨くんが出て来てるのが珍しいのか、それともワタシが出店回ってるのが珍しいのか」

「俺らが二人でいるのが珍しいか、まあどうでもいいけどさ」

珍しいコンビで回っているのがそんなにウケたのか、日常生活では顔馴染みの出店の方々にやたらとオマケをもらう事になった。

行く先々で付き合っているのかと言われたが、そうではないと言えば皆怪訝な顔をする。どれほど仲良く見えても付き合っていないのは目に見えているだろうに。

「何回言われた？」

「数えてませんよ」

焼き饅頭をかじりながらそんな事を言う。

こうして回ってみると、なんだか少しわかったような気がする。女性と回ってみるという楽しさが

「廉の奴がどうしてナンパをするのか、なんとなくわかったような気がする」

「それ、褒め言葉として受け取るべきですか？」

「ああ、なんか楽しいからな。お前」といって

「ふーん」

なんとも言えない視線を送られる。

いやそんなん送られても何もできんがな……女の気持ちってのはよくわからん。

腕時計に目を落とすと、そろそろ奉納の舞の時間だ。ここに暮らすものとして、普段なら一目見に行きたいところではあるが。

「菜子、そろそろ行ったらどうだ？」

「馨くんは行かないんですか？」

「まあ……ちと野暮用があつてな」

——今回は違う。

さつき菜子と回っていると、何か妙な感覚を覚えた。何かのピンとがあつたような……テレビのチャンネルがピタリとあつたような……

それにおかしな話だが——山の中にしか出ないはずの祟り、それと俺が出会った時に生じる衝動が発生した。

何が起きている……？　そういう風に警戒をしているからか、自然と身体に力が入る。

「何かありました？」

そんな様子を見て、祟りを祓う為に戦っている菜子は瞬時に気が付

いたようだ。が、彼女の杞憂とは方向性が違う。

「……さあね。先芳乃さんのところ行きなよ。俺は後で行く。別になんともないだろうけどさ」

「あとで聞かせてもらいますからね」

「はいはい、煮るなり焼くなりどーぞ」

なんか呆れた感じの視線を向けられながら茉莉子を見送る。

御誂え向きに、今俺のいる場に人は少ない。

”仕事”にならなければいいが」

最悪、洋の意匠の強い服では目撃者を始末しなければならなくなるやもしれん。身元割れを防ぐ為にも、着替えておくべきだ。

さて、あまり時間をかけるのも不本意だ。すぐに片付けるとしよう。

全速力で駆け出す。最短ルートを通り、バレなきやいの精神で他人の敷地を通ったりしつつ帰宅し、オマケを一通り居間にほっぽり込んでからサクツと着替える。

完全なる和服だ。これでもしもが発生しても多少の擬態効果はあるだろう。

また再び家を出て、自分と接続している”モノ”の送る衝動に耳を傾ける。無論、索敵の為に。

——いた……神社の方だな。微弱な感覚を捕捉した。

まだ夕刻には至らず。逢魔時とはなりたくないが、さて。

急ぎ足で神社に向かい、”モノ”が見たものを目で追う。それはすぐに見つかった。何故なら本来この穂織では山にしか現れぬ祟りへの衝動と同じものを感じるそれを探せばいい——瞬時に判別できた。

茉莉子ほど上手くはいかないが、気配を殺し息を潜め、物陰に隠れながら観察する。対象に近い人影は……1、2、3、4——固まっている。得物はまだ出さな、刀を抜く並びと帰る観光客が多い。始末するかは実物を見て決める。まずは見知った顔か否かの判断を……!?

「……何……?」

見えたのは見知ったところか馴染み深い面々。

廉と小春ちゃん、それに芦花さん……となるとあれが噂に聞く有地

将臣……なのか？

——あり得ない。何故ただの人間から祟りを見たときの、あの殺意にも似た衝動が生まれなければならない？ ”アレ”が誤認したのか？ 転じているわけではない、極めて微弱な感覚……あの男、一体何者だ？

「イナガミの」

「——ッ!？」

刹那、幼い少女の声が真横から聞こえた。気を張っていた影響か、咄嗟に手が出た。真横に振った手刀は……

「危ないのう」

何かに当たるわけでもなく、ただ空を切った。視界に入る人間を改めて注視する。幼い少女——だが、この感覚は神刀のそれと似通って、かつこの視線を俺は憶えている。ついこの前も感じたものと、なればまさか。

「あんた……ムラサメ様か？」

半信半疑、そして資格を持たぬものには見えぬその性質から声を潜めつつ尋ねる。

「如何にも。しかし何故吾輩を見れるようになった？ イナガミは外から来たはず……」

彼女は訝しげに俺に尋ねる。

……そう、ムラサメ様が見えるのは朝武の直系だけ。具体的には、朝武から派生した常陸——つまり菜子と芳乃さんだけだ。婿養子の安晴さんは見えないらしい。

つまり、俺が見える通りは無い。

両親も、祖父母も見えなかったのだから、その子である俺に見える筈が無い。

だが、そうじゃなかった。俺は臃げながらも見る事が出来た。何故なら——

「あんたが俺を見てると気付いたとき、”アレ”が見えるように視界を弄った。古い術らしいが知らん。俺にはピンボケしたものしか映らなかつたが……何の因果か、さつき急に焦点が合った」

家にある、”アレ”。

俺と接続している”モノ”。

それが勝手にチャンネルを合わせ出した。俺の意思など関係無く。すると合点がいったのか、一つ頷いた。

「なるほど、”アレ”が……お主、先祖返りだな。かつ、”アレ”に接続できるほど適していると」

「忌々しいことに、な。生まれながらの時代遅れ——そして生まれたことが罪である存在……かつてイナガミが求めた完成形を、新たな形を作らんとしていた新しき稲上が産み落とす事になるなんて」

本当に忌々しい。己の存在それそのものが滅び行く筈だった古き稲上の求めた傑作にして希望であり、新しき稲上が捨て去ろうとした過去の罪業だ。この世に生まれたことが消えぬ罪、生きる限り裏切り続ける大罪人。

「……故に生きていてはならぬ、と？」

だが何を思ったのか、ムラサメ様は嘆くように、俺に問うた。

「当然。始末を生業とし始末しなければ生きられない存在など、死んだ方がいい」

吐き捨てるように答えると、彼女は大きいため息を吐き……

「それが芳乃や茉莉、いやお主に纏わる人間総てを不幸にすると知りながらか？ 安晴が嘆いておるのは聞いていた。だが、何がそこまで駆り立てる？ 生きていたって、いいではないか。そう急ぐな。限りある生と受けた愛を無価値とするつもりか」

——何かを後悔するように、俺が目を見ていた事を突き刺してきた。

そんなことはわかっている……が、己の存在がどれほど罪深いかをこいつは理解していない。いいや、理解できるはずなどない。

裏切りと苦悩と血に塗れた俺なぞ、生まれるべきではなかったのだと——！

「——あなたに何がわかる」

感情が先走って有りがちなことしか出てこない。

やめろ、やめろ——哀れみの目を向けるな。何故軽蔑しない？ 何

故疾く死ぬと言わない？ 生み出し破壊するものがヒトなのに。そのヒトなのに殺すことしかできない甲斐性無しなど——!!

「そんな、お主……そこまで」

「黙れ！ 俺は……俺はッ！ 時が来たら消えなきゃならないんだ……！ この時代にはいらないから！」

何かを言われる前に遮る。

子供の癩癩にも似たソレは、ムラサメ様の目にはどう映ったのか。「のう……主の名は？ たしかに吾輩は主の名を知っている。だが、主自身の口から聞きたい」

失望か、呆れか……どちらともつかぬ再びのため息。嘆きか哀れみか、何故と問いたげな視線と声色で、俺の名を尋ねた。

名を尋ねられれば、応えねばなるまい。

「馨だ。稲上馨」

「馨、か。良い名だ」

噛み締めるように名を褒めるムラサメ様。……名を褒められるのは、悪くない。やはり俺の両親に間違いはない。間違っているとすれば俺の方だ。

「……ぬ？」

しかし、突如としてムラサメ様は何かを感じたのか……とても驚いた表情を見せた。

「これも運命……か。担い手が見つかったようだの。馨、しばらくそこにおった方がよいぞ。きつと、何処かで呼ばれるに違いない」

「だろうな。頃合いを見て、本堂に入るさ」

そうして姿を消すムラサメ様を見送り、俺は静かに座り込む。

……わかっている。

だがそれでも、俺は自分が許せない。

イナガミの血が流れる己が憎い。

単に度し難い異常者であれば、悩むこともなかったのだろう。しかし平凡な親より生まれた俺にあるのは平凡な精神。故に開き直れるほどのものでもなく……ああ、吐き気がする。

……しばらく待つこと一時間以上。

なんかもう面倒くさくなつて寝た……のだが。

「起きろ馨。いつまで寝ている」

「……んあ……？　玄さん……？」

玄さんに叩き起こされてしまった。

「少し来い。叢雨丸の担い手が見つかった」

……本当に呼ばれたよムラサメ様。あんたの予知すげーや。

と、なれば……それは稲上としての仕事になるのだろう。つまり、殺すものとしての己を露わにしなければならぬ時が近づいてきたというわけだ。

なるほど。最終手段であり、現状自由に動けるこの俺に声をかけるのも通り。

「わかりました。が、編笠か何かありません？　貴方も知つての通り、俺は自らに失望しています。そんな俺が栄えある担い手殿に会うとなると、恥ずかしくて顔も見せられません」

「相手は将臣だぞ。そこまで気を貼らんでもいいだろう。いや待て、お前その格好は……」

「はい。何か妙な気配があつたもので、”仕事”かと思ひまして」

「わかつた、しばし待っている。取ってくる」

あるんだ……と驚いていると本当に取つてきたよ編笠！　マジであつたの!?

「あ、あつたんっすね……編笠」

「まあ少し大きめだが顔が隠れてちょうどいいだろう」

「すみませんね、ホント」

これ三度笠か……いそいそと被り準備を整える。なんか人斬りみたいだな。いや本当に人斬りのようなものなのだが。

それから玄さんについて行き、本堂へと入る。

「待たせてすまん」

「大丈夫だよ祖父ちゃん。って、その人は……？　やつ、やっぱり俺地下行き？」

やけに怯えながら抜けた叢雨丸の前で座している彼が、有地将臣

か。

ふむ……見た感じに雰囲気も全て、都会の少年のような感じだな。それに衝動も来ない。誤診か？——まさかな、そこまで耄碌していいまい。

しかし茉莉じゃないが、からかつてやりたくなるものだ。ああまで素直な反応では、特に。

だからだろうか。だいぶ妙なイントネーションで彼に話しかけた。

「ああ、どうも。お初にお目にかかります、有地将臣さん。あつしは掃除屋つちゆうもんです。どうぞご贔屓に……ヒヒッ」

不敵な笑いを入れたせいか、更に怖がらせてしまったようだ。

「あ、あはは……どうも」

完全に引き笑いをしながら恐る恐るといった様子だ。おかげで見えない角度から玄さんに小突かれた。遊ぶな、ということなのだろう。

「てのはまあぐ冗談で、あつしは一応顛末を知らなきゃならん人間ですんでこの場にいるだけです。脅してすんませんね」

ケラケラと笑いながら謝罪する。

この様子だと、仕事は単にこいつの護衛か稽古あたりか。トーシロをいきなり戦場にほっぽり混むわけにもいくまい。

聖なるもの選ばれたということは、同時に邪悪なるものの存在を証明する。神秘の残らぬ地に、崇りにしろ妖にしろ——魔性は生まれぬが、反存在を持ち込めばいつ如何なることが発生しても不思議ではない。

……となれば困い込みか。この地に留める気だな。しかしどうやって？ 馬鹿正直に物事を明かすのには、恐らく芳乃さんが反対する……彼女、背負い込んでるからな。だが隠し事などいつか暴かれるというのに。

その辺は、安晴さんと玄さんの手腕に期待か。

胡座かいて座っていると、奥から安晴さんがやって来る。しかし芳乃さんの姿は無い。ムラサメ様もいるのに。

「待たせて申し訳……何してるんだい？」

「いえいえ、掃除屋の顔出しはいかんでしようて」

「……まあ、そうなんだけど……僕としては君にそうされるのは嬉しくないな」

む……いや、ダメだ揺らぐな。

出来るのは俺だけだ。ならば俺がやらねばならない。

覚悟を揺らすな、揺らすならばあの一度だけだ。

——あの女との約束だけだ。

「公私は別けねばなりませんまい。俺も貴方も、因果な星の下に生まれました。それだけです。そして彼もまた……ね」

小声で仕方がないことだと呟く。

——さて、始まるか。事がどう動き、俺の仕事がどうなるかは、全てこの男次第だな。

「あ、聴いてるだけでいいから」

……へ？

虚絶

結局、事がどうなったかと言うと。

有地将臣は婚約者になった。

芳乃さんの。

……安晴さん、芳乃さんから言うなど言われていたんだろうな。それで頭回してこのような形になった、と。

それにしたっていきなり同居つてのはやりすぎなんじゃないか。娘さんの友人になってくれそうだからって、ちとねえ。

それが昨日の顛末だ。

俺への仕事の話は特に何も無し。本当に知っておくだけで良かったらしい。まああと、俺が彼を記憶しておくというのも一つの目的だったのだろう。顔と名前と声が一致しないと、色々動き辛いものもある。居場所も分かれば、何の問題も無い。

……もしかして、俺の仕事が無くなるのか？ 神刀の効力がどれほどのものかは知らんが……そうしたら安心して任せられる。

それなら、俺は――

「……………ねみイ」

さて、今は早朝。

何処かへ行かれる前に、顔だけでも合わせておくべきかと行動したのだ。俺にしては比較的早く起きた所為で眠くて仕方ないのだが、あの場には『掃除屋』として……『イナガミ』としていた。

公私を別けねばならぬとは昨日言っただけだし、昨日が公なら今日は私だ。それに掃除屋の名前は好きじゃない。

家に帰って死にたくなくて、思わず包丁に手を伸ばしてしまったほどだ。が、あの女との約束もあり思い止まった。

――せめて、二十歳になるまでは生きろ――

……あの女は幼少の頃、”仕事”を知って絶望し、入水自殺を試みた俺を助け、頬を引つ叩き、そう言った。

答えを出すには早計だ。だから人生をもっと送ってみて、その上で考えろ。最低でも20になるまでは絶対に死のうとするな……だっ

たか。

親に伝えられ、えらいことになってしまったが……今思えばこの約束も案外バカにできなかった。

確かに生きることが楽しい。でも生きていれば生きていくほど、自身の罪深さが重くのしかかってしまう。

伝える事もできない。嫌われるのは嫌だ。だけど死んだら喜んで欲しい——我ながら支離滅裂な感情だ。

だからこそ、答えは変わらない。

死なねばならないんだ、俺は。

「……む、もうか」

負の感情と過去の出来事を処理していると、あっさりと神社の横の朝武家に着いた。何もしたくない何も考えたくない静かに朽ち果てたいと思うようなズボラ男であるこの俺の歩行スピードは遅い筈だが……はて？　まさか茱子の飯に惹かれているのか？　タカリに？　ダメじゃん。

でも今の時間なら飯は食い終わっている筈だ。奴の前で素直に食べたいなど言えばからかわれるのは目に見えている。

「呼び鈴は……あったあった」

呼び鈴を鳴らしてしばらく待つ。

するとドタドタと音が聞こえる。まるで急いで来るように。

……あれ？

ガラリと扉を開けて現れたのは、茱子だった。

……口の横にご飯粒付けてるけど。

「馨くん？　どうしたの？」

「いや、挨拶をと思って……あ、ご飯粒ついてるぞ。悪いな、終わるまで待ってる」

「あはは……すみません」

ガラガラと扉を閉める茱子を見送るが、何故すみませんなのかが分からない。というかどれだけの件が起きるのが遅くても、普段の流れから考えてみて、ここまで遅くなることはないはずだが……はてさて、何があつたのやら。

「お邪魔します」

「珍しいですね、馨さんがこんな朝早く起きてるなんて」

「挨拶しなきゃと思ってるね」

開口一番それかよと思わなくもないが、俺の朝のだらしなさは芳乃さんもよく知るところ。仕方ないことだ。

「挨拶って、俺に？」

まだ慣れぬ立場だからか、おずおずとそう尋ねる有地将臣。

「ああ、そうだ。はじめまして。俺は稲上馨。君の事は廉や小春からよく聞いてたよ、有地将臣君」

軽く挨拶をして、握手の意味も込めて手を差し出す。

「どうも、稲上……さん？」

握り返しながら、やや困ったように俺の名を呼ぶ有地将臣。

ふむ、ここは助け舟を出すか。

「呼び捨てでも、馨でも構わないよ。俺もそうする。廉の従兄弟だし
さ」

「もしかして廉太郎の言ってた気の合う奴って、お前？」

「如何にも。どうせ結構な頻度で顔を合わせるんだ。これからよろしくな、有地」

「将臣でいいよ。俺も馨って呼ぶし」

「じゃあ、お言葉に甘えて将臣と呼ばせてもらうとするか」

しかし……どうしても気になることがある。今朝この家で何かがあった。でなければ飯の時間が終わっていないはずがない。

茉莉の家事技術はかなりのものだ。一人分増えたところで俺が遊びに来たのと変わらん。と、なればやはり……

「安晴さん、茉莉のこと伝えました？」

「あはは、言いそびれてたんだ」

「なるほど……じゃあお前裸見られたってことかア？」

あ、お茶を飲んでた将臣と茉莉がむせてる。しかも顔真っ赤。ビンゴ、だな。

「大方、意識飛ばしたりとかして遅れたんだろ」

「なっ、なんでそこまでわかるんですか!？」

「風呂好きのお前のことだ。簡単に想像できる。朝風呂で全裸二人が相対すりゃあ、そりゃ一悶着つてもものさね」

「違います! ワタシはともかく有地様は裸じゃありませんでした!!
あと見られてませんから!!」

「ちよつと常陸さん!? やめてくれ!」

「ふーん、裸だったんだ、茉莉。じゃあ、胸でも当てられたか。これだからかうネタが一つ増えたな」

「最低です馨くん!」

「最低だよ、男だもん」

ガーツと掴みかかる茉莉にテキトーな返しをしつつ、体勢的によく見える胸を楽しませてもらった。役得役得。

と、そこへ。

「で、あなたは邪魔をしに来たんですか」

やけに冷たい芳乃さんの声。

そんなに嫌かね婚約者つてのは。どう見ても将臣は良物件だと思うんだが。

「挨拶だよ」

「その割には無駄話が多すぎです。話が終わったなら帰ってください。というか昨日もいたでしょう」

「立場が違うんだ。昨日は公、今日は私」

「そうですか。では私は舞の練習をしますので」

そう言い切って居間を出る芳乃さん。ふむ……これが単に嫌悪感から来ているのか、それとも巻き込むまいとするものか。恐らくは後者と見るが、さて。

「あんな冷たかったか? 彼女」

「頑なですな……」

「一体誰に似たのやら」

あんとあんたの奥さんだよ、なんて軽口を言う気も起きない。あそこまで頑固になられちゃお手上げだ。劇物であれこれ、ともならなきや。

「さて、じゃあ僕もお仕事してくるかな。将臣くんはくつろいでいいよ」

「あの、なんかそれだとバツが悪いんで、何かお手伝いとかさせてもらえませんか？」

「境内の掃除くらいしかできないけど、頼めるかい？」

「はい。わかりました」

いい奴じゃん。廉、小春、お前らの従兄弟めっちゃイイ男やぞ。

「……あとでぎやふんと言わせます……」

後ろで初対面の男に胸を押し当てた挙句気絶させた痴女が何やらほざいているが、気にしなくていいだろう。

「あ、そうだ馨くん。どうせ暇だろ？ 将臣君の話し相手になつてくれないかい？ 僕らは仕事あるし、茉莉君は茉莉君で色々あるし」

「ムラサメ様もいるでしょうが……わかりました。やりますよ」

まあそういうわけで今日は朝武家に世話になることとなった。茉莉の飯が美味しいのが悪い、うん。

……いや本当にあいつが悪い。マジで。

そして昼過ぎ。ギスギスした雰囲気昼を食ったりし終えたら、境内で掃除をしている将臣と、腰掛けて見る俺とムラサメ様という奇妙な構図が出来ていた。

「……帰りたい」

まあ、将臣の呟きにも同意できる。俺も初めは都会の利便性から田舎の単純性に映ったときは嫌になったもんだ。ま、面倒が少なくて済むからすぐ田舎万歳になったんだが。

「女だらけは辛いかな？ 将臣」

「そっちは平気だけど。朝武さんの態度が……けど仕方ないってわかってるんだ。いきなり婚約者なんて、誰でも嫌だろ」

「芳乃は決して悪い人間ではない。だが少し頑固が過ぎるというか、頭が硬いというか……普段なら友である馨にあんな態度は見せないから、色々と思うものがあるのだろう」

「あとテレビのチャンネルが少ないのが一番辛い」

「ご主人……真面目に言ったのがバカらしくなったではないか」

案外能天気なんだな、こいつ。ま、事情もロクに話さず困い込みなんてだいたい無茶が過ぎる。娘に甘いのも考えものだ。だが最低でも夜の山に入るな程度は言っているだろう。

崇りが活発になるのは夜の山のみ——力を貯めればその限りではないが。

「して、ムラサメ様——数百年ぶりに男と触れ合った気分は如何に？」

「馨、主はそんなに軟派な性格であったか？」

なんとなくムラサメ様に振ってみると、帰ってきたのは純粹なる疑問。コテンと傾げた首が可愛らしい。

「そういやそうか、見られていたのは主に安晴さんとの真面目な会話や、茉莉や芳乃さんとあったときに、絶妙に壁を作っている会話くらいか。」

俺の素、というものは知らないのだろう。

「残念、俺は元々こんな奴だよ？ アレも含めて全部俺さ」

「……難儀な奴よのう」

ジト目で睨まんでください。ほかアソーユーー人間なんですー。

ムスツとしてると将臣はああ、と呟いてから。

「馨ってムラサメちゃんが見えるのか？」

——なんだと？

「……ムラサメちゃん？」

「えっ、ああ俺はそう呼んでるけど」

ムラサメ様がムラサメちゃん。

ムラサメちゃん……ムラサメちゃんだと？ この威厳たつぷりで笑えない経緯を持ちながら、神刀の管理者であるムラサメ様がムラサメちゃん？

「くっ、くくく……っ！ む、ムラサメちゃ……ぷふっ、ムラサメ様がムラサメちゃん……アツハハハッ、ハハハハハ！」

「ツボるな！」

「いやギャグだろ!? 由緒正しき、正真正銘の神刀である叢雨丸の管理者がちゃん付けて笑うしかねえだろ！ やべっ、お前最高だよ将臣！ 天才！ さすが廉の従兄だ！」

「んん？ んー……ありがとう？」

なんで俺がウケてるのかわからないらしいが、単に外の人間にかかれば神刀の管理者もただの女の子扱いつていうのが面白かったただけだ。

それほどまでに無関係、だからこそ気軽に接せられる。俺もそうでありたかったものだ。

さて、質問には答えねば。

「ひー、笑った笑った……んで、質問は見えてるのかだよな？ 答えはイエスだ。が、俺は資格を持っていたり、朝武の血筋というわけでもない。ちと例外的な方法を使っているんだ」

「例えばどんな？」

「メガネみたいなものだ。茉莉が忍者であるように、俺にも別口の職業がある。その関係で見えたり喋ったりできるようになってる。接触はできんが」

「へえー。穂織には結構な頻度で来てた筈なんだけど、その手のことがあるなんて知らなかったなあ」

「知らせる必要も無いからな」

大声で言うようなことじゃないのは事実。稲上にしろ常陸にしろ朝武にしろ、表立って何かやってますなどは口が裂けても言えない。

伝説とは伝説であらねばならない。あやふやであることが望ましいのだ。

「必要無い……か」

将臣のため息は深い。しかし能天気だなんだと表現はしたが、こりや存外逸材やもしれん。探りが必要以上に入れず、必要事だけは知っておく……よくできた男じゃないか。

「まあ、気にするな。男女仲など得てしてそんなもの。廉のように軽い立ち回りをしなければ、お互い落ち着くところに落ち着くさ。安心しろ」

「そこまで重く考えてないよ。そーいや馨と常陸さんってすごく仲良さそうだけど、実は付き合ってたりするんの？」

「あ？ 俺と茉莉が？ おいおい冗談はやめろよ」

次に将臣から聞かれたのはそんなたわいのないこと。

こちらは面白くもなんともない。返すべき答えは用意してある。

「俺も茉莉もそういう関係じゃないし、意識もしてない。せいぜいが絡みやすい友達程度だ。それにあいつのことだ。惚れる男がいるとすれば、俺なんかよりもいい男だろう」

他の奴らにはこれを何回も言った。きっと茉莉も同じ返しをする。

「本当にそうかなあ。ムラサメちゃん的には？」

「何故吾輩に振るか気になるところではあるが……まあ、あの二人が実際にしてないのは事実だ。ただ、側から見るとまるでそういう関係かのようなやり取りで、差し障りの無い会話をしているといったところかの」

「うわ、タチ悪いな」

「言ってくれるじゃねえか」

ケタケタ笑いながら、伸びを一つ。

疑いの視線と呆れた視線を受けながら、身体をパキパキと鳴らす。何もせず話し相手になっっている、というのはなんとも楽だが、これはこれで落ち着かない。

「んー、ちよいい便所行ってくる」

一言断ってから、神社の便所へ向かう。

用を足して出てくると、何やら急いで去る様子の女性が見えた。はて、なんだ、迷い人か？ トコトコ出て行き、おそらく事情を知っているだろう将臣に問う。

「何があった？」

「子供が迷子になったんだって」

「サツには？」

「これからつてき。俺も俺で見てみる」

ふむ、迷子か。穂織の地は狭い。山に入らなければ、と付くが。しかし将臣を外に出して迷われたら困る。ので街を見に行くとしたら俺だな。

「……なるほど。子供探しは難しいが、俺は街の方を見よう。あれ、ム

ラサメ様は」

そういえば姿が無い。

さつきまでいた筈だが。

「子供が隠れそうなところを見てもらってる」

「手が早いな。あんまり出歩くなよ？ 迷子が増えても困る」

「わかってるよ」

そうして子供の特徴を聞いてから、俺は将臣と別れて街に出る。

しかし、正直なところを言えばほとんど俺の出る幕は無い。放っておいてもすぐに解決するだろう。人探しにおいて人海戦術に勝るものなど無い。ことネットワークが人間関係程度の田舎では。

だが、山に入られてると厄介だ。崇りと遭遇されていると困る。

「……あまり気は進まんが、山に行くか」

お荷物が一人程度なら、崇りに襲われても問題は無い。まだ有象無象だろうし、楽に”殺せる”。

街は警察に任せ、俺は山を見るとしよう。

神社手前の山道を通り、辺りを見回す。当然だがいない。声をかけるという手もあるが、事情を知らぬ子供には不審者に見えるだろう。何も知らぬ体を装い、街に戻すだけだ。

奥へと進み、更に見て回るも成果は無し。獣道には進まないだろうから切り捨て。俺のように慣れていなければガキが山奥で入水自殺などできやしまい。

となればやはり街、か——

しかし山に行って戻るだけで相当な時間を食う。気付けばもう黄昏時、そろそろ祟りが蠢き始める頃だ。離脱しよう。

街に戻り、それとなく顔見知りの人々に話を聴くと見つかったらしい。一件落着というわけだ。俺の仕事はなくなったし、神社に戻るとしよう。もうすぐ宵の口だしな。

「……ん？」

ちょうど境内に戻るべく歩を進めていると、人が山道を進んでいる痕跡を発見した。俺の靴跡ではなく、別の靴跡だ。しかも真新しい。穂織で夜中に山に入ることを許されているのは巫女姫——つまり芳

乃さんくらいなもの。だがこれは芳乃さんのものでも茉莉のもので
もない。というか彼女たちはここからは入らない。

「……まさか言っていないのか？ 冗談だろ？」

如何に土地知らずの観光客と言えども、普通は夜に山に行こうなど
とは思わない。ただでさえイヌツキだの何だのと白い目で見られて
るんだ。

もし行くとすれば、何も知らない奴か余程の阿呆か――

「前者だな……ッ！」

もはや一刻の猶予も無い。伝えたところで装備に時間がかかる。
準備する必要も無く行動できる俺が行くしかない。死なれても困る
し、それに祟りに喰われて祟りになられても困る。なっていたら――
『処理』するまでだが。

祟りとは人の憎しみなどを核として現れる怨霊めいたものを製造
する術式の類。起動させた者が不在となり、行き場を無くしてからが
本題となる厄介な奴だ。

だが核が無ければ現れることはないし、長く続いても五十年程度
だ。しかし穂織の祟りは百も続く。ともなればとても強力な核があ
るのだろう。

――そして、祟りに攻撃された人間には穢れが留まり、その人物の
暗い感情を糧として新たな祟りとなる。祟り殺されるとはこうい
うことだ。この地の祟りはやや異なり、特定の対象しか襲わない上、
そこまでの伝染性は無いようだが。

それを祓い還すのがこの地では朝武と常陸。

だがそれだけでは対応できぬ事態や、最悪の事態が発生した時に――
稲上の仕事が出てくる。

稲上の仕事はごく単純。

朝武か常陸のどちらかに予期せぬ異常が発生した時、代わりに祟り
を”滅する”こと。

次に人間が祓い戻せないほど侵食された場合、これを迅速に処理す
ること。

最後に……朝武か常陸、その両家の内どちらかから魔を是とする者

が発生した場合、これを抹殺すること。

万が一の事態——断絶などが発生したとき、穂織を滅ぼし無に帰すこと。

——俺より前の代では必要無い話だ。

何故なら他の血と混ざり、薄れた稲上の血ではせいぜいが第一の仕事くらいしか果たせないから。

……だが、俺だけは違う。

全てできてしまう。それに適した肉体と性質を持つて生まれ落ちたのだから。先祖返りによつて魔を殺すための魔に近いものとなり、そして魔を殺すためだけに古き稲上が残した”アレ”に選ばれるどころか接続されてしまうほどの適合——俺の意志はそこに無い。無い上に”アレ”が……妖刀『虚絶』が、俺の肉体を勝手に動かして殺すだろう。

……なんと罰当たりな存在なのだろうな、俺は。

友人を殺せてしまう、無辜の生命をも殺せてしまう上に、肉体すら殺すことのみの特化した存在。真に討つべき敵はもはや無く、存在価値の無くなった時に生まれ落ちてしまった。父母の希望を裏切り、友人なのに殺せてしまうなどと裏切り、殺すことを是とし殺すためだけに存在するなど生命すら裏切る。

この世に生まれたことが罪であり、俺の罪は死を以てして償われる……だが。

「来い、虚絶——」

あの女とは二十歳まで自決しないと約束した。父と母も生きてくれと言った。ならばこそ、最低限約束は守るべきだ……

どす黒い光と共に、左手に鞘に収まった一振りの日本刀が現れる。虚絶——邪悪を以て邪悪を征するための呪物。魔を殺すことを可能とする代わりに担い手に傷を与え、祟りや魂を喰らい溜め込み、それらを燃料としてより絶大な力を発揮する……

虚絶を呼び出すのは術の類。俺に習得するだけの環境も無いのだが、初めてこいつに接続されたとき、勝手に落とされていた。

強く握りしめて、地を駆ける。そのまま木々の枝を足場に跳躍——

これも虚絶が勝手に落とした技術だ。昔の稲上にとって、場を最大限活用した高速移動は基本技能だったらしい。

そして絶えず頭の中に響き渡る、衝動。

——殺せ——

——我が敵を殺せ——

虚絶の根底にある、始まりの稲上……その憎悪と殺意。それが現れたということは、間違いなく崇りが現れている。

早めに人を探したい俺の意志に反して、虚絶の声に従う肉体は崇りへと向かって行く。どうやら比較的近くにいるようだ。まっすぐ向かっている。

「……ミツケタ……！」

俺であつて俺でない声が狂喜の感情を告げる。視界に捉えるは漆黒の塊……崇りだ。

そこからの行動は素早い。

——敵は黒い靄を触手めいた形状に変化させ、俺目掛けて飛ばしてくる。

やる気の無い直線的な殺意など……

「ふん……」

虚絶を抜刀し、これを二連の袈裟斬りで迎撃。着地と同時に納刀。脚に力を漲らせ解放。敵の懐へと跳び込みつつ、横薙ぎの斬撃を放つた。

「——死ネ」

俺と虚絶が混ざり、絶対の殺意と共に眩く。

斬り抜け、斬撃射程範囲内で踏み止まり、その勢いを用いて180度旋回。崇りが霧散したのが見え、即座に柄を逆手と順手の中間に持ち替えて納刀——同時に右腕に痛みが走る。裂けたか？ まあ、あとで確かめればいい。

とりあえずは片付けた。まだ出ていなければだが。衝動が送られてないあたり、一応は安全だろう。

周りを見渡してみると、血が続いている。辿っていくとある一箇所ですて切れているが、何かが転がっていったのか、不自然に荒れている

坂があつた。

鬼が出るか蛇が出るか……人であればいいが、などと思いつつ滑り降っていく。多少の怪我なら放っておいてもすぐ治るのが我が身――何も問題は無い。

そうして滑り降り切ると、真っ先に入つたのは倒れた人影と、それに寄り添う人影。

この感覚は……

「ムラサメ様と……将臣!? 無事か!？」

予想外の展開であり、予想通りの人物を見つけた。痛む腕を無視して駆け寄り、事情を聞く。

「ご主人には山に入るな、とは言つてなかつたのだ……それでこうなつてしまった。吾輩が言つておけば……」

「後悔は後にしろ。それより先に山から担ぎ出す。報告は？」

「すでに済ませた。だが持てるのか？」

「言つたら、担ぐんだよ」

虚絶を家に転送し、流血し始めた右腕も動かして気絶している将臣を左肩に担ぐ。

ぐっ、流石に重いな……

「馨、その腕はどうした!？」

「虚絶の代償だよ……っ……!？」

バランスが崩れる。だが問題は無い。

「最短で跳ぶ。先導頼んだ!？」

「任せよ!？」

浮遊して進むムラサメ様の後を、将臣を落とさぬよう慎重に跳躍して追う。時折腕が痛みを告げるが無視するしかない。流血が祟つて意識も少し鈍い。

痛みと重さに耐えながらも、何とかして山から抜け出すことが出来た。

「……馨君かい!? 将臣君は!？」

山道を抜けてすぐに慌てた表情の安晴さんと会つた。

近くには完全武装の芳乃さんと茉莉もいて、これから乗り込むつも

りだったのだろう。

「肩に、担いでますよ……頼めます?。」

「すまない、ちゃんと伝えていればこんなことには」

「謝るなら、将臣にしてくださいよ。俺は仕事を果たしただけですから。祟りが出てましたが、殺っておきました……っお……!。」

将臣を渡しながら答えていたが、痛み在所為で呻き声が漏れてしまう。指を伝って流れた血が、下の小さな血溜まりに落ちて水音を立てたのか、後ろの二人もギョツとした目で俺を見ていた。

「馨さん、腕が……!。」

「気にしないでくれよ……こんなもん、ツバ付けときや治るから」

「でも、そんなに血が流れて——駒川さんに診てもらった方がいいですよ!。」

「芳乃様もそう言ってますし、それに全然大丈夫でもなさそうですよ? 結構やせ我慢してるんじゃないんですか。怪我人は大人しくしててください」

「あ、ちよつと……!?!。」

帰ろうとしていたら、菜子と芳乃さんに捕まえられて、俺まで朝武家で待機していた駒川の下へと連れて行かれてしまった。

陰陽

「……虚絶を抜いたね？」

「緊急時だから仕方ねえだろ。それでカマイタチ一つなら安いもんだ……イテツ、もうちよい痛くしないでくれよ。ほぼ治りつつあるつてもイテエもんはイテエんだよ」

「うるさい。君はいつもそうだ、放っておけだのなんだのと……いい加減にしてくれ。杜撰に扱うのは、誰であつてもいけないことだ」

将臣の容体を見終わつた後、先に止血措置を行つていた俺の腕を診に来た女。

「……この女は駒川みづは。医者の一族で知られる駒川家の出身となる診療所の主で、朝武家お抱えの医者。」

そして、俺がガキの頃やつた入水自殺を未遂にした張本人だ。

つまり俺が二十歳まで生きるという約束をした相手でもある。自分でもさっぱりわからないが、どうしてもこいつだけにはツンケンした態度を取つてしまう。感謝はしてるんだけどな。

「……うん、やっぱり治りかけ。肉体の修復の方が早いね。ちゃんと血は拭いた？」

「葉子に拭かれたよ……ああ、芳乃さんは将臣に付きつ切り。玄さんも来てるつてさ」

「へえ、やっぱり彼女……まあいいか。この様子なら、君の言つてた通り放つておいてもすぐに元通りになるね。でも包帯は巻かせてもらうよ。あと、治つたら治つたでちゃんと見せること。いいね？」

「はいはい、わかつたよウツセーな。親じゃねーんだからさ」

「私は君のご両親からまたバカなことしないかどうかを報告するとう役割があるからね」

「……親父イ、お袋オ……なんでこいつなんだよオ……」

「まさかとは思うけど、また企てたりしてないよね」

「大丈夫だつて。この前、包丁眺めてても約束が頭にあつてやる気にならなかつたからさ」

「そもそも考えないということをしらないのかな」

「……努力はしてんだけどさ、無理なんだ。どうしても……」
「……そうかい」

この女ほど、俺の狂った性格を理解している人間はいないだろう。親父にもお袋にも、いい顔はしているから多少はバレていてもその奥底まで行っていないはずだ。

俺の事情を知っているのは身内を除けば、この女と玄さんと安晴さんの三人だけ。他には誰もいない。

芳乃さんと茉莉も、表向きの最終手段である稲上しか知らん。祓うことはできないが、殺すことはできるといふことも知っている。虚絶を振るえば代償が起きるのも。

「さて、こんなもんかな。終わったよ」

「悪いな、世話かけた」

「前の一件に比べれば、なんともないさ」

包帯の巻かれた腕を動かし、手首を曲げ、握り拳を作り、調子を確かめる。ふむ、概ね問題無い。明日には元通りだろう。

しかし今回の一件、非は確実に向こうにあるな。将臣が哀れだ。

「まったく呆れたな。関わらせまいとして山に入るなまで言っていない。叢雨丸を抜いた時点で立派に関係者だろうに」

「陰口とは感心しないな」

「俺にや解せんね、ホント。まあこれで是が非でも関わらなきゃならんっつーわけだ、彼は」

芳乃さんはやはり無関係な人間を巻き込みたくない、という善意から黙っていることを選択し、安晴さんも茉莉もムラサメ様もそれに従ったのだろうか……俺からしてみれば甘い、としか言いようがない。

そも神刀に選ばれた時点で崇りの攻撃対象だ。土地に係わりの薄い俺ですら対象なのだから、安易に想像がつく。

「幸い命に別状はないんだろ？ あとは本人次第だ」

「馨としてはどう思う」

「そんなの戦ってくれた方が気が楽で済むからそっちだよ。俺の仕事もなくなるし。けども、戦場に迷い込ませるわけにもいかん」

「なるほど」

難儀なもんだね、まったく。

器具を片付け終わった駒川が立ち上がったので、見送りの言葉をかける。

「んじや、お疲れさん。ちゃんと寝ろよ駒川」

「あのね、君が人を心配できるような立場かい。私は馨の方が心配で仕方ないよ」

「違いねえや。ま、大丈夫だ。俺はちゃんと最低20まで生きるよセンセ。他ならぬあんたとの約束だ。絶対に破りはしないさ」

「どーだか」

悲しげに笑いながら去る駒川を見送り、気を取り直して空き部屋から居間に戻る。

開けて早々、安晴さんに頭を下げられた。

「本当にすまなかった、馨君。僕が一言言っておけば、君に虚絶を抜かせることもなく、将臣君を危険な目に合わせることがなかった筈なのに——」

「頭上げてくださいよ。過ぎたことは気にしても仕方ありません。今は命があることを喜びましょう」

「でも、また君に仕事をさせてしまった……」

実はこうして”仕事”をするのは珍しいことではない。前戦のダメージが響いている菜子の代わりに芳乃さんを護衛したり、芳乃さんが負傷した時は代わりに出撃したこともあった。

が、今回のような一件も稀にあつたことだ。そこまで気にしているわけでもない。

だから安心させようと、ついでに安晴さん以外誰もいないから、俺は口を開いたのだが……

「別に人殺しに発展するような展開でもありませんでしたし、単に虚絶に殺せと急かされて祟りを殺っただけです。仕事にも入りません」

「ごめんね……本当は僕らの問題だから、僕らが解決するべきことだったんだけど……また君に助けられた」

「いいじゃないですか。人助けも案外悪くないもんです。ま、殺しが

天職なんですからね……ハハ」

お互いに変にネガティブな方向の会話へと進んでしまい、沈黙してしまつた。

むむ、いかん。いかんぞ。何か気の利いたことを言わねばこの人が罪悪感に苛まれてしまう。

……あつ、そうだ。

「目が覚めたら説明するんですよ」

「ああ、そのつもりだよ」

「……俺については、そつちの裁量に任せます」

「いいのかい？」

「ええ。貴方は信用に足る人ですから」

そんな話をしてしていると、ドタドタと降りてくる音が一つ。

居間に入ってきたの茉莉だった。

「あ、馨くん……大丈夫でした？」

「問題無いよ。単に虚絶の反動だ、負傷したわけじゃない」

「本当に？」

「疑い深いなア。ウソ言つてどーするよ」

「……よかつた……」

「悪いね、心配かけて」

ホツと胸を撫で下ろす茉莉の様子からして、どうやら本気で心配していたようだ。まったく、あの程度傷にも入らないと何度言えば分かるやら……

ガサゴソと台所の方を漁っているが、どうしたんだろうか。

「簡単ですが、夕餉ですよ」

「俺に？」

手前に用意されたのはおにぎりが三つに、具の少ない味噌汁と漬物。夜飯にしちやあ質素だが、仕方ないことだとは理解している。

が、俺が疑問なのは別の箇所だ。

「あれ、安晴さんや芳乃さんは？」

「僕らは君が診てもらつてる間に済ませちゃつたよ。さすがに長々やつてられないからね」

「……の割にはあったかいな。おにぎり」

「作り置きだと、味気ないでしょう？ それにこれくらいならサツと作っても間に合います」

「そっか、ありがと」

微笑まれては、笑い返すしかない。

……やっぱり、こいつの笑顔は――

「さて、僕はお邪魔かな。席を外すよ」

「えっ」

そそくさと退散する安晴さんに呆気に取られてしまい、菜子も俺も止めることすらできなかった。

そうして残されたのは俺たちのみ。玄さんを含めた全員は、今頃将臣の周辺。つまり……言っちゃアレだが、二人きりだ。

いや、何そんなに考えているのだろうか？ 二人きりになることなど多かつたのに、何故だ？ どこに戸惑う要素がある？ 今日の菜子が、やたらしおらしいからか？ ……わかんねえ。

「い、いただきます……」

とにかく飯だ飯。空腹なのはいかん。おにぎりを左手で掴んで――

あれ？ 左手で飯を食うのは失礼に当たるんじゃないか？

ん、んん……これ仏教の話か？ いやでも……仏教ってか、神前において左手は不浄とかなんとか……じゃあ左利きはどうなるんだよって話だが……ええいままよ、もう右手使って食べてしまうとするか。

「やっぱり慣れませんか？」

右手に持ち換えようとしたとき、菜子がそう言った。

「えっ、いや別に」

「……右腕、無理に動かさない方が」

「あー、ほら、見ろよ大丈夫だろ？ こんなブンブン回しても平気なんだから――」

と、腕を振り回していると近付いてきた菜子に止められる。

「菜、子……？」

ジツと見つめられて、なんかその瞳に吸い込まれてしまいそうで。

なんでもない筈なのに、動くことも何もできない。

ただただ、菜子に視線が釘付けになってしまう。

「手伝います」

「あの……」

「見てて危なつかしいです」

「えっと……」

「ワタシは心配なんです。お味噌汁こぼされても困りますし」

「まあそうだけど……」

「箸、左手で使えますか？」

「うん、無理」

「じゃ四の五の言わないでください。ホント、昔から馨くんは……ほ

ら、あーん」

「あ、あくん……」

この後めちやくちや恥ずかしかった。

「はー、えらい目に合った」

あの羞恥プレイを潜り抜けた俺は、流石に夜も更けてきたので帰宅することに。菜子も泊りがけとは行かないから帰るとのことと、さっきまで散々あーんだの世話を焼かれた奴と隣り合わせというわけだ。いや恥ずかしい。

「気遣いは嬉しいんだけどさ、ちよつと恥ずかしかったな」

「別に誰もいなかったですし、恥ずかしがるようなことないと思うんですけど」

「そうかねえ」

ホント、なんでこいつこんなになんでもない顔をしてるんだろ。こっちは顔から火を噴きそうだったのに。

気恥ずかしさから早歩きになると、左手をぎゅつと掴まれた。

振り向いて菜子の様子を見るも、俯いていて表情がよく見えない。

「あ……手を、繋いでください」

眩かれたのは、そんな可愛らしい頼み。

「いいけど……なんでだ？」

別に構わないからと握りつつ、何故と問うてみれば――

「――何処かへ、行ってしまいそうだから……」

「――」
凍り付いた。

何故？ 黙っていたはずだ、なのにどうして茉莉はまるで俺の最果てを知っているような発言をしている……？ まさか、聞かれ――いやそんなはずはない。音量は小さかった。

「あ、あは……何言ってるんでしょうね、ワタシ……」

急に恥ずかしくなったのか、頬を赤らめつつ目を逸らして、無理に普段の調子でそんなことを言う。

ホントに何を言っているのか、とも思うが……

「案外、可愛いところあるんだなお前」

「言うことがよりもよつてそれですか!？」

失礼な話だが、そんな茉莉を見て可愛いと思ってしまった。我ながら何故？とも思うが思ってしまった以上は仕方ない。

「ま、そう心配すんな。いなくなる時があるとすりや死ぬ時だけだ」

「……心配なんですよ。ワタシの知らない間に、死んでいたりしたら……」

「お前も俺の頑丈さは知ってるだろ？ そう易々とくたばりはしない」

「でも、あなたは虚絶を振るえば蝕まれる。痛みと傷を伴って、苦しみや流血と引き換えに祟りを倒す……運が良ければ無傷で祓えるワタシたちと違って、馨くんは倒そうとすれば必ず傷付くじゃないですか……!」

不安な声が伝えたいのは、俺にとって普通であること。

――なんだ。そんなことか……と処理してしまう程度の、何でもないこと。

不安げな茉莉を安心させるべく、手を離して肩を持ち、そして目線を合わせる。

「茉莉、大丈夫だ。お前たちの背負う重荷に比べれば軽い」

「そういうことじゃなくて――!」

「——茉莉」

遮るように彼女の名を呼ぶ。

「俺を信じてくれないか」

「……バカ」

「悪いね」

肩に置いた手を戻すと、間髪入れずに手を握りしめられる。苦笑しながら握り返し、別れ道までずっと歩いた。

「おやすみ、茉莉」

「おやすみ、馨くん」

そのやり取りを最後に、俺たちは各々の帰路につく。

……何が信じてくれないか、だ。吐き気がする。裏切り続けるこの俺が言うに事欠いて「信じてくれ」だと？ ——愚かしいことこの上ない。信じられる要素がどこにある……!! お前は今も彼女たちを騙して、本音を隠して、挙げ句の果てに死のうとすることをやめられないクズだろうが!!

死なねばならないと思う俺、生きると約束した俺。

果たして、どちらが優先されるだろうか……

家に着く頃には、腕の痛みは全て消えていた。



ムラサメが稲上馨をはじめてみたとき、その黒々として濁り切った瞳に驚いたものだ。

人柱になることを是とし、それによつて死病から逃れようとした己がそこにいた……と言つても過言ではなかったのだから。

稲上の家系の宿痾は知っている。

しかし年代を置くことにより段々と解放されつつあった。

馨の父——稲上千景の代では、ほとんど消えつつあり、本来馨の代で完全に消えるだろうというはずだったのに。

何の因果か、馨は先祖返りを果たして生まれた子であり、それ故に殺すことに適した己と元来の使命が原因で病むほど、とても繊細な人物であった。

声をかけてやりたかった。死に急ぐな、やめろと、救ってやりたかった。似通った境遇にある人間が闇へと堕ち行くのを、ただただ見ていることしかできなかった。

芳乃の母、秋穂に頼んでなんとかして説得しようとしたが……彼が入水自殺を試みたと聞いた段階では、もう遅かった。約束だけが生きる縁であり、他は全て自身の死へと向けられたその姿は、あまりにも悲しいものだった。

秋穂が亡くなってからは、娘に重荷を背負わせることの罪悪感と無力感にさいなまれる安晴の嘆きや使命に身を焦がすことを是とした芳乃、単に使命を果たす補助機械であろうとする菜子に、生きているだけで自殺願望が高まるほどに壊れてしまった馨など、彼女にとって大切な存在たちがボロボロになっていくのを見ているしかなかった。だが、今は違う。

将臣の登場により馨はムラサメと接することが可能になり、芳乃や菜子の心境に一石を投じられるかもしれない。全てが変わりつつある。上手くすれば、改善に向かうかもしれない。

「だからもう、ご主人……ちゃんと起きるんだぞ……」

眠る将臣の頭を撫で、不安な声で呟く。

「……あのバカ者を、なんとかせねばな……」

見ていられないどころの騒ぎではない。

死から逃げ生に依存した愚者だと自嘲するムラサメにとって、死を望み生を罰とする馨の存在は——

「酷い話だ……古い鏡を見せられておる。

——あんな女が、いたのだったと……」

終らぬ悪夢をそのものであった。



「……朝……か」

布団から身体を起こし、右腕の包帯を取る。

やはり治っていたらしい。傷一つ無く、元通り。

駒川に知らせるのは……いいや、あとで。別に奴も分かっているだ

ろうしどうでもいいや。

寝間着の単衣の着物を脱ぎ捨て、朝風呂と洒落込む。でないとあまり目覚めが良くない。余程のことでもない限り、朝は何もかもが鈍い。身体を拭いて、その辺に転がってたズボンを引っ掴んで履く。

上は着てないが、まあ別に誰と会うわけでもなし。今しばらくはいだらう。

「飯は……ありや、ねえや。パンの一つや二つあった筈だけど」

……仕方ない、予定変更だ。

作ろう。

——できた飯は、ここ最近よく食べている某子の飯とは雲泥の差があった。どこか寂しさを覚えるが、まあ自分だしこんなもんかとも妥協できる。

飯を食い終われば、食休みを挟んで身体の調子を確認める。軽い運動をして、何も違和感が無ければ問題無いということだ。結果は当然、問題など無かったわけだが。

「……手持ち無沙汰だな」

何もしないのも暇なので、包丁をくるくる回して遊んだりしていたが、手遊びは所詮手遊び。すぐに飽きがくる。だがゲームという気分ではないのも事実。寝るといいうのもまた違う。

何も考えたくないし、何もしなくない。それは俺の本質だが……それはそれとして、何もしないとなんか違う日くらいある。

……ウチに習作の真剣あったよな。庭で素振りでもしてよ。どーせ壁あるし、ウチの周りに家もそんなにねーし、人の通りもそんなにだし、見られても文句言われるくらいだからいっか。

——んじやまあ、遊んでるか。

その内何もしたくなくなつて、ごろついでパソコンいじるようになるだろ。

……一時間やって飽きた。

ので、汗を流して布団戻ってノートパソコンを起動する。穂織にパソコンだのスマホだのはそこまで通つてないが、親父の趣味と仕事を兼ねてで、ウチにはそういうものがある。なので勝手に使わせても

らっている。まあ、そこまで頻度は高くない。月一程度だ。

「……ネットは偉大な」

ただ情報を流し見るだけで外のことかわかる。都会の奴らが熱中するのも頷ける……が。いらん人間関係だの色々と面倒くさそうで、積極的に触れようとも思わんが。

三十分も持たなかった。すぐにやめてしまい、毛布を被って目を閉じる。寝てしまおう。それが楽だ――

そう思って寝ようとしたが、鳴らされた呼び鈴で嫌々布団から出て行く。脱ぎ捨てた単衣を羽織り、無茶苦茶な和洋折衷になってしまっただが、問題は無い。

「へーい……今出ますよ」

サンダルを履き、ガラガラと扉を開けて顔を出すと、そこにいたのは――

「何お前ら、デート?」

「開口一番それって元気そうですね。心配して損しました。デートしてましたけど」

「常陸さんも悪ノリしないで」

「菜子と将臣。つまりマコンビ。」

「んで、何の用? 冷やかしなら帰れよ」

「あ、そういうのじゃなくて。お礼を言いに来たんだ」

「礼……ああ、昨日のね」

「ありがとう、助けてくれて」

「気にすんな。それより身体に大事は無いか?」

「ああ。動く分にも、何の問題も無いよ」

「そいつは行幸」

しかし何故ウチに来たのだろうか? しかも二人で。気になって尋ねてみるも、どうも気分転換にデートしていたら、将臣が俺に礼が言いたいと来た模様。まあ別に構わないのだが……

「おい、何の冗談だ? デートをしてる時に他の男の話をするなんて無粋だねえ、将臣」

「常陸さんにも言われたけど、譬もそう思うんだ」

「ああ無粋も無粋。女の子に対する配慮が足りないと思ったらありやしない。デートだぜデート。ちゃんと相手してやれよ？　ま、こいつが相手なら無粋な方がむしろちょうどいいくらいかもしれないけど」

ケラケラと笑いながらチラリと不満気な視線をくれる茉莉を見る。「気を付けろよ将臣。こいつ、思わせぶりなことをしてその気にさせてくるからな。俺も何度かコナかけられた」

「二人は本当に仲が良いんだな」

「有地さんはワタシと馨くんの関係に夢を見過ぎです」

「ただの腐れ縁だよ、俺と茉莉は」

「うっわ絶対嘘だ」

「事実ですよ〜？」

「嘘じゃないモン」

いやだからなんでそんなに二人とも仲良いねみたいな目線送るの？　どう見たって男友達みたいな雰囲気じゃないか。何を誤解する要素があるというのか。なあ茉莉……と視線を向けると一転して真面目な表情に変わる。

「そうだ、都合いいから今報告を」

「なんだ？」

「祟りがまた出ました」

昨日の今日で……？　いや待て。霧散を確認後即時離脱したから、喰いそびれたのが再生したのか。

——チツ。確かに、これは失態だ。

苦い表情が表に出たのか、和やかな雰囲気は一蹴されてしまった。「わかった。宵の口になり次第、俺が確実に始末する……お前らは寝てていい。楽な仕事だ」

自分の蒔いた種は自分で刈らねばなるまいて。人としてごく当然のことだ。自然とそう口にして、家の中に戻ろうとしたのだが。

「無理はしないでください。ワタシと芳乃様が片付けます。そう二人で決めました」

「昨日のことか？　気にするな、安い授業料だ。俺に任せろ、今度はへマしない」

「いいえ。馨くんは下がっててください」

凜とした目で見つめられ、そう断言された。

「……そこまで言うなら、普段通りにしてやるよ」

元よりよつぽどの事態がなければ出るつもりも無い。俺が原因だから俺の手で仕留めたかっただけだ。確実に潰してくれるなら、それに越したことはないが……尻拭いを頼んでいるみたいで少し思うものはある。しかしどうせ意見を変えないだろうから、大人しくしよう。

「——怖くないのか？ 崇り神と戦うこと……」

将臣が俺に尋ねる。

なるほど、不安を覚えない人間などいないだろう。しかし……俺は別だ。

「将臣。俺はお前らとは色々構造が違ってな、恐れも嘆きもほとんど感じない。あるのは——」

「なんだよ？」

「ずっと頭の中に響く、”殺せ”って言葉だけさ」

言い切ってピシヤリと扉を閉める。

——おしゃべりが過ぎたな、まったく。

■

「祓うんじゃないくて”殺す”……？」

「はい。崇り神を祓えるのは巫女姫だけですが、稲上のように手段を選ばなかった結果、崇り神を”殺す”ことを可能とした一族もいます」

馨の家から離れ神社に戻る途中、将臣は茉莉から稲上について聞いていた。

「手段を選ばなかったって、どんなの？ 安晴さんからは何か叢雨丸みたいな刀を持っているとしか聞いてないんだけど」

「ワタシも詳しいことは知りませんが、馨くんをはじめとしたこの土地の稲上一族は、代々受け継がれる刀——『虚絶』を用いているんですよ」

「拒絶？」

「虚を絶つ、と書いて虚絶だそうです。ただこの刀が問題で……」

茉莉子の声が小さくなつていき、何事かと思うが、彼女は意を決したように語り出した。

「曰く付きらしくて、あまりいい話も聞きません。一度ムラサメ様が妖刀であると言っている場面も耳にしました」

「妖刀って、じゃああいつ!？」

「祟り神を斬り付ける度、自身の身体が損傷していく諸刃の剣……どれだけ一撃で仕留めても、傷は必ず付きます。——有地さんの想像通りですよ」

「そんな、俺のせいだ……」

先日、助けに入った馨が怪我をしたと聞いていたが、そういう事情があつたとは。つくづく己が原因で嫌になる。

性根が良い将臣にとつて、自分のせいで誰かが傷付くのは、堪え難いことであつた。

そんな彼を安心させるように、茉莉子は言葉を選ぶ。

「でもあの通りピンシヤンしてたから、そこまで気にしてないと思いますよ? 元気な姿を見れて、きつとホツとしてるはずですよ」

「だよ、な」

「……ワタシも芳乃様も、馨くんとは子供の頃からの縁なんですけどね。実はあんまり知らないんです。彼がどういう事柄に巻き込まれているのか、とかは……」

——頭に響く殺せという言葉

——構造が違う

——手段を選ばない

——代償を強いる妖刀

将臣も茉莉子も、それを知るべきではないような気がしているものの、親しい相手が苦しんでいるのなら助けになつてやりたいと思つてしまえるほど、優しい人間だ。

「……常陸さん。もしかしたら馨は、呪詛以上に厄介なことに巻き込まれてるんじゃないかな」

「かもしれない。だけど事情を知っているであろう両親も安晴様

も、何も答えてくれないんです。ムラサメ様から馨くんの話が出たのも、7年前くらいからで——」

「何を隠してるんだよ、あいつ……」

呪詛も祟り神も問題だが。

思った以上に馨もまた大きな問題なのかもしれないと、将臣は心中で不安を感じた。

転機

夜。

適当な服装で夕飯を終えてから家を出て、屋根を足場に朝武家へ向かう。その屋根の上から茉莉と芳乃さんが出たのを確認した後、降りて軒下に座り込む。今日は仕事服ではない。普段通り人も寄り付かないだろうから。

「……月が綺麗だな……」

虚絶を抱えるように、身体に立てかけて片膝を立てて月を見上げる。

「馨、隣失礼するぞ」

「ムラサメ様」

そんな俺の横に、ムラサメ様が現れる。座るわけではないのは、その特異な性質からだろう。

「ご主人に、お主のことを話した」

「ん、予想より早かったな」

「昼間、茉莉とお前に会いに行った時にピンと来たらしくてな。安心せい、ご主人にしか話しておらん」

「……そうか」

「ちと耳を傾けてみたが、今は安晴の真意や、そして古き朝武が都より呼び寄せた魔物殺しの一族『伊奈神』についても話していた」

「……」

伊奈神——それが稲上の本来の字。

俺は稲上であって、伊奈神であるなりそこない。

「自罰意識が強すぎるのだお主は。7年前の入水自殺未遂もそうだ……何故そこまで己を生きていてはならぬものと定める？ 主は確かに殺す者であり、虚絶と接続してしまった存在。だが誰もが稲上馨に生きてと願う、そう思っている。それを無下にしてまで死に飢える……その心はなんだ？」

ムラサメ様は俺の顔を覗き込みながら、逃げることは許さんとばかりに強い口調で問う。

気が緩んでいたのか、あるいは将臣の登場で役割が無くなるかもと期待していたのか……スラスラと言葉が出てくる。

「……殺せてしまうから。虚絶に使われる端末でしかない俺に、意志は無い」

「……そうか、そこだったのか……」

「虚絶ある限り崇りの可能性は潰えない。俺を触媒に蘇る可能性もある。だから、俺が消えれば、憂いが無くなるかな……って。それに、友達も殺さなくて済む」

「——それで妥協して二十歳までか？ 過ぎたら死ぬつもりか？」

「それは……」

そうだった、などと言える筈がない。

ムラサメ様はまるで駄々をこねる子供を宥めるような声で、俺に告げる。

「この世に生まれたことが罪ならば、生きることが背負う罰と言えるだろう。お主はそこまで周りの人間が信用できんか」

「俺は殺す者だから、きつと殺せてしまうから」

「答えになっていない。信用できないかを答えるのだ」

逃げの一手すら封じられた。

——やけっぱちになったのだろうか、口が滑る。

「………したいさ。でも、したところで虚絶は殺す」

「主の虚絶への信頼は厚いのう……確かに虚絶は殺すことのみの特化した妖刀の中の妖刀だ。だが如何に崇りに等しい憎悪と殺意の魂が中に宿っておろうが、結局は人が作ったものであるうが」

「だからって——！」

「主が魔に近いのであれば、その感情を糧に振じ伏せることすらできる筈だ。もつとも、主は己こそが憎いのだろうな……」

………縋るにはあまりにも脆い希望だ。

黙りこくる俺から離れるムラサメ様に顔も向けず、ただ月を見上げる。

「今から吾輩はご主人の覚悟を問うてくる。主はどうする？」

「それだけは、決まっているさ」

しばらくすると、誰かが歩く音が聞こえ――

「馨」

「来たか、将臣」

左手に虚絶を握り立ち上がり、月が見下ろす軒下で、ムラサメ様を連れた将臣と対峙する。その手には叢雨丸が握られており、万全の態勢であるのは見て取れる。

「聞いたよ、お前のこと」

「それは小事であつて大事ではない。今俺がやるべきことは、お前に問うことだ」

虚絶を抜刀し、彼に向ける。

「安穩より死を友人とすること――お前はそう望んだな」

「そんな大層なものじゃない。俺は、自分に力があるのに女の子に任せっきりののが嫌なだけだ」

「それだけか？」

「ああ、それだけだ」

意地。

男ならば誰しものが背負っているもの。

俺にはあるか？ ……あるようでない。

だが人が戦う動機などそんなもので十二分だ。

鞘に収め、真剣に将臣と向き合う。

「ならばよし。何、俺もつく。いらぬ煩悶を抱いては正道に迷うだろう？ 先導、露払い、尻拭い……全部やるから安心しろよ」

「――ありがとな」

「はっ、気にすんな」

つかつかと歩き出し、山道へと向かう。

「さて、行くか」

「ああ」

何故だろうな？ 崇りに会いに行くのは殺意と憎悪に塗り潰されてばかりだったが……今日は、やけに清々しい。

ああ、まったく――不謹慎な話だが今宵の殺しは、少しばかり楽しそうだ……

「ごご、ご主人……なんで黙っておるのか……？」

「怖いのか？」

「ごっ!? いいや、吾輩は怖がってなどおらんとも！ そうだとも！」

「わっ！」

「わきやあーっ!？」

まだ遭遇していないようで、しかも歩いてても十分に間に合うから体力温存も込めて歩きで山道を進んでるが、後ろで漫才を繰り広げてる二人はそれを分かっているのだろうか。提案したのはムラサメ様なのだが。

「将臣ー、ムラサメ様ー。ふざけてると置いてくぞー」

「おい勘弁してくれよ」

「ふざけてなどおらぬ！ 吾輩にとっては大事な問題なのだ！」

「ま、中身生娘だもんなア」

「きききき、生娘だど!? お主は女子に対する配慮とかそういうものはないのか！ この馬鹿者！」

「悪いね。でも探知はムラサメ様の方が高精度だからしつかりしてもらいたいんだけど」

……なんだこのデコボコは。

俺上手くやっていけるか心配だぞ。いや俺が火種か。いかなな。

そう思っていると後ろでは一転して真面目な会話が聞こえる。

叢雨丸に選ばれるのは必然——故、その担い手の行動には必ず意味がある……話を簡単にまとめるとこうだ。

「馨はどう思うんだ？」

「俺に聞くか？ やるべきことが見えていて、成したいことがあるのなら、それで十分だろ？」

そんな話をしながら進んでいくと、見慣れた背中が二つ見えた。

「よお、お二人さん。忘れもん届けに来たぜ」

「馨さん、何を……って、有地さん!？」

「あちやあ、来てしまいましたか」

茉莉子としてはある程度予想できていたのだろうが、芳乃さんには完

全に予想外だったようだ。まあ接している時間が俺たちの方が長いから必然と言えれば必然。

背負い込み癖が裏目に出てばっかだね、ホント。

「何を考えてるんですか二人とも！ 馨さんは普通有地さんを止める立場でしよう!？」

「悪いけど腹括った男に理屈は通じないよ。将臣は自分の意志でここにいる。俺はあくまで、道中の護衛をしてきただけさ」

焦りと混乱で声を上げる芳乃さんをあしらい、説明しろと将臣に視線を投げる。

「俺にも深く関わってる問題だから来たんだ」

「帰ってください。無理に関わる必要はありません」

「帰るようならそもそもここに来てない」

睨み合いを始めた二人を見て、俺はため息を吐くしかない。お互いに頑固だからノーガードで真っ向から意見の殴り合いが発生する……なんとも面倒なことだ。

「もう諦めなつての。あんたが思っている以上にこいつは関わりがある。意地張ってどうこうって話じゃない」

「芳乃様、こうなつてはもう仕方ないと思います。今更戻したところで崇りと会わないという可能性も捨て切れません」

「ご主人が選ばれたのは必然だ。だからこそ吾輩もいた方がいいと思うし、それに叢雨丸の力もあれば、馨もいる。芳乃が心配するようなことは起きないはずだ」

「ぐっ……もう勝手にしてください！ でも大人しくすること、いいですね！」

いや矛盾してるやんけ、とか突っ込んだら負けだろうか。揚げ足取ってややこしくはしたくないので黙っているが。

しかし……何故だ？ 普段ならもう崇りを感知して衝動が送られて、勝手に動き始める頃なのだが、今日は何故かその様子が無い。接続自体に異常は無いが、となると……将臣かムラサメ様か叢雨丸か。

ま、本質的に虚絶もまた崇りの一種。神力の塊に影響されてその力が弱まっても不思議ではない。だがこれは困ったな。

——感知術式を起動する。

が、やはりあやふやなまま。どうにも調子が悪い。

今日は役立たずかと思つた直後、眩い光が目に入る。どうやら、叢雨丸を戦闘用に解放したらしい。

膨れ上がる神気の奔流は莊重にして厳麗。およそ邪気と評せるものは無く、数百年分の力がそこにある。

ムラサメ様の姿は見えないが感覚的に恐らくは叢雨丸の中に戻つたのだろう。

「——ッ」

「馨くん？」

これは……来る！

崇りだ！

「……将臣！ 芳乃さんを！」

「っ！」

「へっ？ ひゃあ!？」

攻撃対象は芳乃さん——間に合わないと判断した俺は近くにいた将臣に声をかけ、彼は押しつけることでその攻撃から庇い、そして叢雨丸で一撃を防いだ。

現れる崇り。

数の暴力とあるが、全員が近接戦ではあまりよろしくない——！

近くにいた将臣に崇りは狙いを定め、触手を伸ばす。恐れが先に来たのか、奴の動きが遅い。あれでは仕留められる。

跳躍——鞘から虚絶を半分ほど抜き、それを盾にするように間に割って入る。ギンツ、と鈍い重さがかかるが、切ってもいないし腹で受けたので代償は生じていない。

「恐れるな！ 臆せば死ぬぞ！」

「わ、わかつて……うわあっ!？」

立ち向かおうとする将臣の襟首を掴み退け、自身が接近しようとする芳乃さん——

いや、ダメだ！ 俺を避けるように第二射が……!？

急に芳乃さんが倒れ込む。よく見れば

攻撃を察知し巫女服の裾を掴んだ将臣のフオローだったようだ。が、今度は下がれたの何だのと揉めている……ええい、クソ。なに足の引っ張り合いをしている……!!

「菜子ー!」

「わかってますー!」

菜子に呼びかけて、バカをやっている二人に向かう攻撃から守るべく、防戦に徹する。

無数の触手を片っ端から迎撃するが、虚絶から送られる衝動が極めて小さいためか、だいぶ俺寄りの技量になっている。

殺しの剣術に関しては玄さんも頭を抱えるほどメチャクチャだが、それでもその技量だけは本物だと言っていた。しかし守りの剣術となるとこれが難しい。

「……っ。するもんじゃないな、キャラじゃないことは——!」

「今のうちに下がって!」

菜子の叫びに我を取り戻したのか、急いで後退する二人。それを確認した菜子も下がり——俺も納刀して距離を置く。居合は便利だからどうしても使えるようにしておきたくなってしまう。

しかし……

「何をするんですか!?!」

この二人、案外似た者同士なのかもしれない……?」

「有地さんが怪我をしていたかもしれないですよ!」

「朝武さんだってあの時危なかった!」

「なっ……あそこからちゃんと躲すつもりだったんです!」

「俺もそうだった!」

あの……

「だいたい真っ直ぐ行ってどうやって! どう見ても横からだった!」

「一瞬竦んで足を止めたのは誰ですか! 馨さんが割って入らなかったらどうなってたか!」

「お二人とも。じゃれ合いはそこまでにしていただけませんか」

おっと、マジの菜子は久々に見たな。俺は崇りの様子を伺うとしよ

う。

「でも！」

「なんですか。文句があたりで？」

うわ殺気すら籠ってら……

「そ、そうだね。ごめんなさい……」

「……この場は茉莉が正しいわね」

「とにかく目の前の崇り神に集中してください」

「わかっている。今は一刻も早くお祓いを完了しないと——！」

「抜かるな！ また来る！」

見え透いた大振りの一撃。

避けるのは容易く、誰も怪我を負ってはいないが——

「今なら……！」

この一撃は、誘いの一手だ……!!

「芳乃様！ 今はダメです！」

「突き立てさえすれば終わる！」

まんまと寄せられた芳乃さん目掛けて触手がもたげる。

乗るはずがない、と思っていた俺たちは一手遅れた。もし遅れを取

り戻せるとすれば——

がむしやらに突っ込んで、真っ向から斬りかかる将臣だけ。

叢雨丸が祟りを裂き——いや浅いな。

傷を負ってなお健在だが、祟りは俺に向かってきてしまう。

……そりや俺が祟りに近いからな。補強するには持ってこいだ。

だが自由な芳乃さんにケツを見せるとは愚かな奴め——

「このお——ッ!!」

鉾鈴を突き立て、祟り神が地に伏せる。そこに素早く斬り込み、一刀の下に断ち切る将臣。

……前衛二人に遊撃二人かなこりや。まあ、一見落着か。ホツと息が漏れる。俺は全く役に立たなかったが、生きているんだ、よしとするさ。

へたり込んでいる将臣に駆け寄る芳乃さんと、叢雨丸から出てきたのか、現れたムラサメ様が話しているのを見て安心する。

「……しかし短刀持つてくりやよかったな」

「虚絶で受け流すのも、無理がありますもんね」

「てか、元来の得物は短刀なんだけどさ。俺」

「……そうでしたっけ？」

「そうだよ。」

などと茉莉と話していると、変な光景が見えた。

「疲れてんのかな……なんかさ……芳乃さん、服……メチャクチャになつてんだけど。パンツ見えてるんだけど」

何故か巫女服の前掛けの部分だけが無くなってる。

「け、怪れない!? 大丈夫!？」

「だ、大丈夫ですよ……?。」

「よ……よかった……まとめて切ったかと思ったよ」

「そう、大事が無くて良かった……つてそんなわけありますかあああああつ!!」

……一難去つてまた一難とはこれだな。

後ろに振り返りながら上着を脱ぎ、茉莉に渡す。

「腰巻にしてって」

「あは、意外と初心なんですな」

「……芳乃さんのは初めてみるし」

「そういえば昔、見られてましたねワタシは」

……いやまったく。

忘れたい話だ。

「青春だな」

「青春ですな」

山を降りて着替えた芳乃さんは、将臣に説教をするつもりだったみたいだが、逆に将臣の覚悟に聞き入っているようだった。

そんな様子を見て、外野の俺らはお茶を飲む。

「同じ屋根の下で暮らすんだ。顔を合わせる度に負い目を感じるのは、ゴメンだよ。だから手伝わせてくれ」

「……そんなこと言ってまた下着を見るつもりなんでしょう?。」

「その件は誠に申し訳ありませんでした」

「ピンクでしたね」

「可愛い趣味してたよな」

「やめてください二人とも!! 追い出しますよ!?!」

「はい」

茶々を入れたら怒られてしまった。まあ当然かと思いつつお茶を一口。

しかし話は手伝う手伝わないに逆戻り。将臣は手伝うと頑なに主張し、芳乃さんは大人しくしてろと頑なに主張する。

「大人しくしてるべきです。それが有地さんの安全に繋がりますから」

「いやですー、絶対に手伝いますー」

「子供ですか!」

「どっちが!」

あのさあ……

「面倒くせえなこいつら」

「やれやれ、どっちも子供だの」

「仲良きことは良いことです」

見てていたたまれない。こっちも好き放題言葉が出てくる。呆れて物が言えるという奴? まあいいや。

と思っていると、茉莉が声を低くして言う。

「でもお祓いの最中、しかも崇り神を前にじやれ合うのはよしていただきたいのですが」

「うぐっ……」

「……まあ、仕方ないさ。別に喧嘩するなどは言わんけど、殺しの場でバカやられると困るんだ。終わってからにしてくれ」

正直なところ、あそこまで二人が揉めるのは想定外の事態だった。

「にしても……久々の憑依は疲れるのう」

「精霊でも疲れるんだ」

「そりゃエネルギーコントロールには神経使うから疲れるだろ。ムラサメ様は神力、俺はアレって差はあるけど、似たようなもんだ」

横から言葉を選びつつ、分かりやすい例として自分を挙げてみる。

「馨は物理的な疲労になるが、吾輩は精神的なもの……になるのか？
とにかく疲れたのだ。少し休む」

「休むって、前に休む必要は……あつ、普通にしていればってそう
う」

「うむ。何、用があったら強く念じれば良い。ではなご主人、芳乃」

そう言つてムラサメ様はスツと姿を消——

「あと馨。お主バカな真似はするなよ。やったらご主人を焚き付けて
叢雨丸で斬らせるからな」

「いきなり物騒な!」

——その前に、俺に警告をして今度こそ姿を消した。

「さて、そろそろお暇するかね」

「用件がなければ、ワタシも帰ろうと思うのですが」

「うん、大丈夫よ。おやすみなさい」

「二人ともおやすみ」

「んじや、おやすみ」

「おやすみなさいませ」

ガラガラと戸を開けて朝武家から去る。

「昨日の今日でまたお前と帰るのかよ」

同じ帰り道なので、また茉莉と同じだ。

「あら、ワタシじゃ不満ですか?」

「いや、満足だよ。お前はいい女だからな」

まあ不満も無いのが事実。

それほどというものでもない。

「……なあ、茉莉」

「なんですか?」

「普通っていいな。無理に動かされることもない、自分の意志を保つ
たまま、自分のやりたいようにやれる……なんて素晴らしいんだろ
う」

「それ、ワタシに対する皮肉ですか」

ムツとした表情の茉莉に対して何か失礼なことを言ったかと探る

が、何一つ出てこない。

皮肉……とあるが、果たして何を以て皮肉とするのか？ 俺は何となく思ったものを口にした。

「なんだお前、自分が機械か何かだと思ってるのか？」

「……」

「おいおい、冗談はよせよ。呪詛の終わりまで尽くすって決めたのはお前だろ。そりやお前の決定した選択してもんじゃないのか？ どこまで行っても常陸菜子は常陸菜子だ。それ以外の何者にもなれやしない。だから機械じゃないだろ」

偽らざる本音を語り、菜子を元氣付けようとしたが……どうも失敗したみたいだ。更に黙りこくってしまふ。

だから、だったんだろうか。

「殺すために生まれて、何度も死のうとした俺とは大違いなんだからさ」

——なんて、口を滑らした。

「……それ、どういう……意味なの？」

菜子の口調が崩れる。彼女の素だ。

驚愕に支配された声と目が、俺を射抜く。

しまったと思ってももう遅い。俺は自分で失態を犯したのだ。

「いつ、いや！ 言葉の綾だつて！ 気にすんな！ じゃあな！ 腹

出して寝るなよ！」

「あつ、待ってっ！」

会話をぶった切つて跳躍まで使つて逃げ出す。

——やべえ、なんてこつた……何言つてんだ俺は。

日常

「むう……」

「ダメか？」

あれから少しあとのこと。

再びの祟り祓いに出撃した俺たちは、前回よりもスムーズに事を終えた。が……

「いや、俺は独学というか、基本的に捨て身なんだ」

「捨て身って、あんなに避けたりなんざりしてるのにな？」

「あー、性能が違うからできることも違ってな。とにかく魔に近い俺だからできることであって、人間にはおススメできない」

将臣から急に、戦い方を教えてくれなんて言われてしまった。

当然だが今はムラサメ様も誰もいない。朝武家の外で話してる。

「でもほら、なんかじゃないか？ 心構えとか、何処が弱点とか」

「心構えつつあって……なんだろうな。とにかく死なないように立ち回るくらい？ それにどこでもダメージ入るんだから考えるだけ無駄さ。あと刀は最近使い始めたし、教えられることは何も無い」

「子供の頃から虚絶に選ばれたのなら、使わされるとかで慣れてるのかと思ってたんだけど違うんだな」

「ガキの頃だと身体が未熟でな。刀に振り回されちゃう。だから短刀で打ち合って、隙あらば虚絶で斬ってた」

虚絶からガキの肉体は自身を完全に活用できないと判断したのか、俺が出撃するときは、大抵が短刀と虚絶の二本持ちだった。高校に上がる前に、やつと虚絶をメインにし始めた程度。もともと短刀の方の才能があったことから、刀は玄さんにつけてもらった最低限の修行程度……あつ、そうか。

なぜ忘れていたのだろうか。将臣の祖父である玄さんなら刀の使いや剣術に精通している。

「玄さんはどうだ？ あの人は昔から刀に触れてるし、お前のことを

よく知ってるだろうから体力作りも効率的に行けそうな気がする」
「やつぱさうだよな。俺も祖父ちゃんに頼もうって考えてたんだけど、その前に何かやれることはって思ってた声かけたんだ」
「相手が悪かったな。そうだ……その、あのだな。俺さ……やつちやつたんだ」

都合が良いからと、しかし失態が失態故にしどろもどろになりながら語り出す。

もともと決めていたのだ、事情を知っている将臣かムラサメ様に相談をしようと。

「何？もしかして犯罪？」

「ちげーし。いや、この前さ、菜子と話してたらうっかり口滑らして……言っちゃったんだ。俺のこと。死のうとしたーとか、殺すために生まれたーとか……あはは。あでも、別に関係に変化が無いから平気だとは思うんだ。けどほれ、あいつに無用な心配を押し付けたみたいでなんか不安で……なんとかかなりそうな方法とか知らないか？」

それを聞いた将臣は、もはや呆れを通り越して虚無の表情とともに。

「バカだろお前」

痛烈に罵倒してくれやがった。

更に将臣は俺に対してグサグサと言葉の刃を突き立てていく。

「元から気になってたけどさ、お前矛盾してるよな。隠したいの知っている人には判断を任せるっておかしいだろ」

「うっ、それは……だな。自分でもよくわからんのだよ」

「ムラサメちゃんが呆れたのもわかった。生きたいのか死にたいのか、どっちかわかんないんだろ馨」

ぐうの音も出ない正論だ。

死なねばならないと定めているが、しかしその実、個人としては生きたいのか死にたいのかだけは考えていない。それを考えたら、決意にヒビが入りそうで怖い。

「死ななきゃいけない義務感だつて、多分……合理的に考えてるからだろ？獅子身中の虫みたいなものだし、同じ立場になったら間違

なく俺も感情とか全部無視して考えたらその答えに辿り着く。けどさ馨」

「悪いがその話はここまでだ。それ以上は必要無い」

揺らぐ危険がある。

中断しなければ。

「おい——！」

「俺は先に帰らせてもらう。手首、大事にな」

逃げるように跳躍し家へと向かう。

……優しいのは美德だが、合理に徹せないのは、それこそ悪徳だろうに。

何故それを理解しようとしない？ 合理がもたらす結論の、何が悪いというのか。

翌朝。

「あ……学校、行かなきゃ……」

相変わらず朝は苦手な俺なので、死体のように起きて死体のようにシャワーを浴びて、朝飯食って着替えて荷物持って登校する。

「ねむ……」

ふらつく猫背な身体を倒れないように努力しつつ、上着の違和感を無視しながら歩く。

俺の通う学校……鵜茅学院の男子制服の上着は丈が短く、開けてるとだらしないからとして大半が閉めているが、生憎俺は面倒なので羽織って終わりである。シャツも第2ボタンまで開いており、不良と見られても不思議ではない。

ついでに言えばズボンも寝惚けて転んだりなんんだりで若干痛んでおり、何もしていないと言うのに、まるで暴力に明け暮れた番長めいた印象すら与えるだろう。

まあこっそり上着の内側生地を弄って短刀を仕込めるように改造してはあるのだが。

学院に通じる唯一の坂を上って、ああ面倒だと思いつつ歩を進める。この調子だと、遅刻ギリギリになるだろうか？ どうせ始業式し

かないんだ。どうだっっていいだろう……

と、思っていたのだが。

「おっと、噂をすればだな。よお寝坊助。相変わらず酷いカツコだな」
「うっせ……着ないよかマシだマシ」

何故か校舎前に廉がいた。いや、廉だけでなく、将臣に小春ちゃんに芳乃さんにムラサメ様に茉莉——オールスターというわけか。

「……ああ、おはよう、みんな」

挨拶をするが反応を聞く必要も無い。誰かが口を開く前に通り抜けようと足を動かして……

「まあ待てよ、馨」

やけにニヤついた廉に引き止められる。

「なに」

「聞いたぜ？ お前、常陸さん誘って春祭り回ったんだってな。口ではああ言いつつもってツンデレかよ」

はあ、それか。呆れた表情でもできているだろうが、それっぽいことを言っただけでやろう。

「ま、俺はお前とも将臣とも違って、コナをかけたら寄ってくる女がいるってことだ」

「いきなり俺を巻き込むなよ!?!」

「ああ、お前はコナかけられる側だったなアすまんすまん。だって小春ちゃんが——いって!?!」

「馨さん、ちよっと」

将臣にお前の可愛い従妹がどれだけイイ男かを紹介してくれたかを説明しようとしたら、小春ちゃんに足を踏まれた。

この子ったら俺の扱いも年々荒っぽくなって……感慨深くなっちゃう。

「いふあい」

間髪入れず茉莉に頬を抓られる。

「コナをかけたら寄ってくる、なんて言い方はやめていただけませんか」

「ふあってひゃ」

「せめてコナをかけ合った結果妥協すると言ってください」

それでいいのか？　とも思うが朝っぱらから面倒なことになった。早く逃げよう。

「ひゃい」

「わかればよろしい」

……口を滑らしてしまつて一週間近く、少し疑問の視線は感じるが、俺と菜子の仲に問題は無い。

一時はどうなるかと思つたが、平気そうだ。

「あー……面倒くさかつた」

「廉太郎、こいつ本当に馨か？」

「朝のこいつはこんなのだぜ。どんな馨を見たかは知らないけど、もし理想を持つてたなら捨てちまいな。どうしようもねえ奴だから」

「うん。なんか、アレだな」

「アレってなんだこの色ボケ婚約者。てめえが巫女姫とアレな関係だつて嘘吐きまくるぞコラ」

「やめてくれ。でも俺より朝武さんへのダメージにならないかそれ」

「のつぴよびよんだぞ」

「会話しろよ」

「将臣、諦めろ。このロクでなしの頭が回り出すまでこれが延々と続くぞ」

「うわっ、最悪だな」

いや眠くて会話続けるのダルいだけだから。頭回ってるから。大丈夫だから。ええい貴様ら、そんな微妙な表情で見つめるんじゃない！　俺はまともだ！　まともじゃないけど！

「仲良くするのはいいんですが、このままだと遅刻しますよ？」

芳乃さんの一言で我に返り、俺たちはいそいそと校舎に向かう。途中、将臣が俺らの担任の中条比奈実——俺にとっては昔世話になった比奈ねーちゃんだが——に連れられて職員室に連れて行かれたが、まあ取り立てて騒ぐこともないだろう。

将臣の転校挨拶回り、始業式も何の問題も無く終わった。『明日か

「らよろしくお願いします』で終わってしまい、さてとつとと帰るか
教室を出て下駄箱に向かうと――

「やっぱり来た」

「げっ、駒川……」

「どういうわけか駒川が待ち伏せしてやがった。いつも通りの白衣
に身を包んだ姿だが、その視線は険しく青筋が立っている。腕組みを
しているのも相まって、なんかラスボスみたいだ。」

「君のことだ、どうせ真つ先に帰るだろうと思つてここにいたが……
まさかその通りに動くとは」

「なんだよ、あんたは俺じゃなくて芳乃さんとか将臣とかに用がある
はずじゃなかったか？」

「もう忘れたのか？ 私は言ったぞ、腕が治ったら見せに来て」

そんなことを言う駒川に、俺は完全に停止する。

「は？ そんなこと言われたか？ だって腕に怪我なんぞしたこと
は……」

「あつ……」

前に将臣を助けるついでに始末しようとしてしそびれた崇りに虚
絶を抜いた代償のことか！ やつべ、完全に忘れてた……

「今更思い出したか」

「戦略的撤退！」

もう説教はごめんだ。朝っぱらから（自業自得だが）足踏まれたり
頬抓られたりされて、始業式の退屈な話を聞いてただでさえ早く家に
帰りたいんだ。

なので後ろに振り返って疾走。近くの窓から逃走しようと思った
が――

「稲上君」

「うおっ!？」

進行方向に比奈ねーちゃんが現れたので急ブレーキ。

そんな俺を見て彼女はため息を一つ。

「また駒川先生に怪我の完治を見せなかったの？」

「えつと、それは……」

止まった俺と止めた比奈ねーちゃん。

そんな珍光景を見ても生徒の大半は無視するか、いつものかと言って通り過ぎる。

ぶつちやけると学院でもかなりの名物だ、俺と駒川の追いかけては。知らないのは新入生くらいだろう。

何故って虚絶を抜く事態になれば必ず負傷し、必ず駒川が見て経過を見せに来いと言う。俺は大抵それを忘れて登校するまで顔を出さない。学院の嘱託医である奴は校舎内で俺を見るとひっ捕まえる。でも説教をされるのが嫌で逃げる。だが逃走ルートを先読みされて捕獲されるのがいつものオチ。

よって生徒たちにとって、たまに起きるバカと先生の追いかけてっこでしかないのだ。

——だったが。

「テメエ！ 卑怯だぞ駒川ア！」

後ろから迫る駒川に対して俺は負け惜しみを叫ぶ。

「いい加減、君との鬼ごっこにも飽きた。これからは大人らしく、手段を選ばずに行こう」

「ち、ちくしょう……！ 布団が待ってるのに……」

「もう、いい加減にしなさい。素直に謝ればいいのになんでできないのかな」

「それが俺なんです……って何？ なんで駒川も比奈ねーちゃんも俺の腕掴んでるの？」

諦めて説教を聞き流そうと思ったが、なぜか二人は俺の腕を掴んでズルズルと引きずり始めた。え、なにこれ。なんで俺宇宙人みたいに連行されてるの？

「私にも仕事がある。だったら君は逃げるだろ？ だから中条先生に協力してもらおうことにした」

「いつまで経ってもヤンチャなんだから、ホント……あと学校ではその呼び方やめてって言ったでしょ？」

「いや待って、ストップ。これ羞恥プレイ……やめて歩くから！ 逃げないから!! 離せて!!! 頼むから離してくれって!!! 恥ずかし

いから離してくださいってば——!!!」

実際のところ、その気になれば振り解くことなど容易いが、それをやればまず間違いなく二人が傷付く——物理的に。なので当然できない。つまり完封されたのだ。

しかし恥ずかしさのあまりジタバタと暴れて、余計拘束されてまた教室に連れ戻される。

「ごめんなさい、遅くなりました」

そう比奈ねーちゃんが言った相手は将臣と芳乃さんの婚約者コンビwith茉莉とムラサメ様。無茶苦茶呆れた視線が突き刺さる。他には誰もいない。

「あの……何してるんですか?」

芳乃さんとムラサメ様はため息、将臣が疑問、茉莉に至っては無言。四者三様の反応である。

「傷の経過を見せに来なかった挙句、出会い頭に逃走しようとしたこのアホを捕まえててね。申し訳ない」

「私はその手伝いを」

「もう……離して……恥ずい……」

「まあ……なら逃げないだろうし、いいか」

腕を離されて自由になったので、そそくさと離れて適当な椅子に座る。が、こっちに近づく比奈ねーちゃん。いやもう勘弁して。

「逃げないから離れてって」

「本当に?」

「もう羞恥プレイは嫌です中条先生」

「ちゃんと反省すること。いいですか?」

「はい」

反省するかどうかは俺の肉体次第なのだが、今度からこうはならないよう上手くやろう。

向こうでは駒川と将臣の自己紹介とか、実は会ってたんだよーとか色々聞こえる。だがいつまでも一般人の比奈ねーちゃんを置いておくわけにも行かない。とか思っていたら。

「では、私はこれで。——馨、ちゃんと言うこと聞くのよ?」

「へーへー。わかってるよ、ねーちゃん」
「もう」

そう言って苦笑しながら教室を後にするねーちゃんを見送ってから、意外そうにしている将臣に顔を向ける。

「あんだよ」

「撃って結構なクソガキだったんだな」

「うっせ。ニヤつくなぶっ飛ばすぞコラ」

なんか腹立つので吐き捨てる。

向こうの方では芳乃さんと駒川が叢雨丸を抜いた後の変化とかについて話している。

「何事も無いみたいで、安心しましたよ」

「でも、言ってくれれば私から行ったのに」

「混雑したりで大変になるかもしれないし、それに学院に二つほど用事がありましたから」

「一つはそこにいるバカですね」

「ええ。そこで不貞腐れてる、人との約束を忘れて逃げようとしたバカですよ」

なんかバカバカ言われてるんだけど。

「ホント、バカですよね馨くんは」

「茉莉もかよ……」

なんか集中砲火食らってるんだけど。

「いくら身体の治りが早いからって、見せろと言われてたものを見せずに忘れるのは最低ですよ」

「向こうもわかってるからいいじゃんか」

「わかっていたとしても見ない限り信用できない。ほら」

「はいはい。この通り綺麗さっぱりですよ」

右腕の袖を捲って、完治したことを見せる。しばらく眺めたあと、駒川は俺の頭にチョップを一撃食らわした。いてえ。

その後は将臣の様子を見るために長くなるようだから帰っていいと言われ、お言葉に甘えて帰った。

そういえば将臣の奴、いつ修行を頼みに行くのだろうか？ 遅くならない内にやるとは思うのだが……ま、いつか。
グータラしよう。

到来

おーやってるやってる。

チラリと覗き見ると、玄さんと稽古に励む将臣の姿が。

ここは公民館。何故隠れるように修行をしているのかはわからないが、即断即決とは男らしいことだ。

翌日の放課後、気になって何処へ行くやらと学院から尾行してみたが、なるほどこれは無粋な真似だった。

邪魔者はそそくさと退散することにしよう。

「……あ」

そう思つて公民館を後にすると、将臣の後をつけていたであろう菓子と遭遇した。こいつもどうやら学院からつけてたらしい。制服のまままだ。

「忍者らしく間諜か？ 趣味が悪いね」

「失礼な。単なる好奇心ですよ」

「ま、主人の男にコナかけるつてのはどうかと思うが」

「それに関しては大丈夫です。きっと有地さんは、ワタシなんかよりももっと素敵な人を好きになるでしょうから」

「なんかつて、可愛い美人ちゃんが何を言うやら」

いつも通りからかわれるのかと思つていたが、それに対する菓子の反応は普段と異なつた。

「かわつ……せ、せめて美人だけにしてください」

何故か顔を赤くしてそんなことを言う。

あれ……おかしいぞ。冗談だと流されるのだとばかり思つていた。何？ なんかあつたのか？

もしかして綺麗だとはよく言われてたけど可愛いなんて言われたことは特になかつたり？ となれば……

「ははーん、さては恥ずかしいんだな？」

「恥ずかしくありませんからにえー！」

「噛んでるじゃん。いや、なんだ。言われ慣れてるのか思つてたけどそうじゃないのか。うん、少し安心……は？」

……なんで安心してらんだろ、俺。

理由が一切わからぬ。別に可愛い子が可愛いとか言われるのは自然なことであつて、むしろ言われてないことを聞いたら見る目が無いと言ふべきだろう。

なのに何故俺は安心した？ 相手は菜子だぞ？ どこも安心する要素は無い。

「あは、嫉妬ですか？」

隙あらばからかってくる菜子。そのニヤついた表情がやらしい。

「嫉妬……何をバカな。じゃあ聞くがお前は俺が見知らぬ女からカツコいいとか言われて妬くか？」

「妬きませんけど……なんか面白くないですね。なんか」

「なんでだろうな？」

「ワタシに聞かれても困ります」

「だよな」

何故なのかを知る必要があるな。

もし分不相応な望みがあるとするのなら、それは捨てねばならぬ。いい。

それから数日が経つたが……日に日に将臣の疲労が目に見えるようになってきた。そこまで身体を動かしていなかったというのもあるのだろうが、祟りを想定した修行ともなれば尋常なものではないだろう。

しかしアレでは……祟りとやり合う時に疲労の方が先に来てまとも動けないのではないのだろうか？ どこかでフリーの目を作るよう進言しておくべきか、それとも……

まあいい昼飯だ。

ガサゴソと荷物を漁り、ビニール袋を取り出す。その中身は――

「馨さん、それは」

「ん？ 昼メシだよ、芳乃さん」

「生卵じゃないですか」

一つの生卵。

今日は寝坊したので昼メシを作るのも面倒くさくて生卵をビニールに入れて持ってきたのだ。

ヒビを入れてから割って、片方に黄身と白身を移し替えて飲む。出たゴミはビニール袋に入れ直して昼メシ終わりつと。

「卵そのまま食う奴なんて初めて見たぞ俺」

うっせー。面倒なもんは面倒なんだよ。

……しかし最近、奇妙な夢を見る。

誰かの嘆きと困惑であろうものが流れ込む夢だ。

——何故？

思考の主が何者かはわからないが、少なくとも俺に流れ込むということはつまり……崇りに関係することだ。

だがその夢は決まって同じ終わりを迎える。

——殺意と憎悪が夢を終わらせるんだ。

やはり……俺自身の始末も視野に入れた方がいいか。

崇りや呪詛が何であれ、俺には関係無い。だがそれが誰かに害をなすならば排除しなくてはならない。

それに崇りの始まりは、過去にあった朝武のお家騒動が原因だ。人によって生まれた崇り……俺がそうならないとは言い切れない。

やれやれ……殺しは嫌なんだがな。

——誰だって嫌か、そんなの。

それからしばらくしないうちに、また転校生が来た。

レナ・リヒテナウアーという女子だ。中々聞かない名前だが、家業の手伝いの経験則から考えるに欧州圏の姓だろうか？

……しかしまあ、見事なモノをお待ちのようで。

デカイ。金髪巨乳とは夢のあることだ。素晴らしい。

「なあ将臣、お前もうコナかけたのか？ さすが、廉の従兄だな」

「違う。祖父ちゃんの旅館の従業員になるから、その関係で案内しただけだつて。常陸さんと一緒に」

「はん、茉莉と……ねえ？ 両手に華とはいいご身分だな」

さつき小さく手を振られていた将臣に聞いてみると、どうやらもうコナをかけていたらしい。手が早いことで感心するよ。

リヒテナウアーの席は俺の近くになってしまったが、まあ問題は……

——アネギミ……——

頭の中に響く声が一つ増えたってことだ。

……この感覚、夢のと同じだ。穏やかだが裏にひそむものがある。しかしアネギミって、姉貴ってことだよな。崇りの中にあるものが外の人間を姉呼び……？ 誤認だろうか。

参ったな。存外、世界は狭く出来ているのかもしれない。また関わりが深そうな……

動揺は顔に出ていない。大丈夫だ。

そして休憩時間。

リヒテナウアーは茉莉に話しかけに行って、その関係から集まった女子とあれこれとガヤガヤしている。

さて、何故俺がどうでもいい筈のリヒテナウアーを目で追っているかというのだ。

……虚絶の燃料の一つが反応しているっぽいというのもあるが、実はあの女を見たとき、はじめて将臣がここに来た時と同じく、微弱な衝動が送られてくるのだ。

大なり小なり……いやこの場合は小なりか。とにかく、何かしら崇りに連なるものがある……と見て間違いない。何せ将臣は担い手だったのだ。燃料の一つの奇妙な反応と極めて微弱な衝動。怪しむ理由としては十二分だ。

しかしなんかファツキンワサビとか聞こえるけどなんだよファツキンワサビって。彼女、日本語上手とか流暢だが、どうも妙なところまで妙な間違いをしているのは何故なのか。

温泉を怨霊、豊を崇り——いやまさかな。彼女の親族が目撃者や関係者だとすると、辻褄が合うんだが……流石にあり得ないだろう。

とか考えていたら女誑しだのなんだとの聞こえる。どうやら廉が視線を向けたら迎撃されたらしい。

「廉太郎君サイテー」

「違う、誤解だ。二股だけは本当にやってない。アレは尾ひれが付いているだけ」

将臣には教えてなかったらしい。

なので茶々を入れに行こう。

「厳密に言うくと、同じクラスの女と別れた後、すぐに他の女と付き合い出して、すぐ別れた。それが二股に見えたんだろ」

「言わんでいい」

「が俺には解せんね、どうも。別にいいじゃないか、人生経験の一つだ。甘いも辛いも棲み分けてこそその人生。そこに非難される要素がどこにあると言うか」

俺としては本当に理解できない話だ。別れ話もよくあること。廉だからと目立っているだけで、取り立てて騒ぐようなことではないだろう。

しかし庇われた本人は物凄く微妙な顔を見せる。

「……お前、それ女子の前で言うか?」

「正論だぜ?　なんか不満かよ。不当に言われているのはお前だぞ、廉」
「向こうからすりや廉太郎が引つ掻き回してのほほんとしているのが気に入らないからだろうし、不当とは思わうぞ」

将臣の発言にウンウンと頷く廉。

「よくわかんねえわ、恋愛とかってさ。面倒くさそうだし……」

まったく解せないのでボヤキながら、椅子と机の距離を調整して、机を脚場に椅子をキコキコと揺らす。

「の割には、常陸さんにコナかけたんだって?」

「あ?　どこ情報だよ田宮」

よくつるむ内の一人、田宮から予想外の攻撃がすっ飛んで来て思わず出所を尋ねる。

「親父から聞いたよ。春祭りのとき、なんでも楽しげに回ってたんだって?　隅に置けねえなあ」

「そんなに変か?　俺と菜子が二人で回るのは」

「いやいや稲上。巫女姫様のお付きの人である常陸さんと最も親しい

のはお前だけだぜ？ 親しい男女が和氣藹々としている祭りの場で二人きり……こりやもう邪推するつきやないでしょ！」

「大平まで……」

同じくつるむ大平にまで言われる。それが聞こえた廉は――

「そうだ！ 聞きそびれてた！ いやーまさか本当にお前が常陸さんを誘って回るとは思わなかったんだ。それでどうよ、なんか甘酸っぱいことあったかよ？」

おい声でけえぞ。おかげで女子に気付かれ……気付かれたアツ!?

散り散りになっていたクラスメイトのほとんどがドタドタと駆け寄ってくる。どいつもこいつも目エギラギラさせてやがる。

えーつと……こういう時は、どうしよう。とりあえずホントのこと言おう。

「何もなかったぞ？」

「嘘でしょ。で、本当のところは？」

「柳生、無い袖は振れないって言葉知ってるか。そういうことだよ」

女子の柳生に問われるも何事も無いと返すしかない。

「茉莉ー、助けてー」

「仕方ないですねえ、馨くんは」

休み時間いっぱいを使って誤解を解いたが、とても疲れたよまったく……

昼になったので、いそいそと飯を取り出す。この前は生卵だったが、今日はちゃんと作った。

……まあ、茉莉の弁当とは天と地ほどの差があるのだが。地味に将臣が羨ましい。美味しいもの食えて。

「馨もどうだ？」

「あ？ 悪い、聞いてなかったわ将臣」

「お前も一緒に飯を食わないかってこと」

「いいぜ」

将臣と廉に誘われて昼と一緒に食うことになった――が、ここに変化が生じていた。

「……ああ、リヒテナウアーさんがいるのね。けど男三人女一人じゃ、

少しアレじゃないか?」

「いいんだって。レナちゃんがお前に話があるってさ」

「ふーん」

そう、件のリヒテナウアーも同席していたのだ。

「レナで構いませんよ」

「じゃ遠慮無く。ああ、俺の事は馨でいいよ」

まあ向こうの人だし、これくらいフランクなのは当然なのだろうか。いや、フランクだが硬いところは硬い……みたいなの? ま、なんでもいいや。

「それで、なんだい? わざわざ俺を呼ぶほどの質問が、レナさんにはあるのかな?」

「はい。実はカオルの横顔がとても綺麗で、何かゲイシヤのメガタ……? 何かかをされているのか気になって」

「それを言うなら女形だよ。でも、残念。俺は別にそういうのじゃない。天然だ」

そう、俺の横顔……というか目元が見えない感じの位置で見ると、これがどういうわけか綺麗な女性に見えるのだ。

しかし俺は至って普通の男性。中性的でもなければ童顔でもない。少し肌が白っぽいだけだ。

ただ、顔のラインが女性的っぽく見える……らしい。自分じゃ全然わからないケド。

「……あれかあ。レナちゃんと将臣にも見せるか? お前の女装姿」

「ああ、見返り美人風の奴? 一年前に撮ったな」

一年前、クラスの連中とふざけて女装し、更に見返り美人風に、夕暮れを背に写真を撮ったが、いや我ながらとても良くできていた。

本当に、あまりにも良くできていて、学院の一年の奴らに『夕暮れ時にはとてつもない着物の美人が出る』なんて噂されちまったもんだ。

なお比奈ねーちゃんもこっさり写真撮ってたらしく、あとで問い詰められることになったが割愛しよう。

「生卵食ったり、女装したり……俺には馨のことがよくわからないよ」

「女装も案外楽しいぜ将臣。合っていようが合ってなからうが、笑えてさ。ま、あの写真に関しては例外的だったが」

さて、そうこうしている内に授業も全て終わり、あとは帰るだけとなった。片付けも終わったし、今日も一足先に帰ろうとして立ち上がろうとしたとき――

――殺せ……――

――殺せ――

――殺せ！――

――殺せ！！――

――殺せ!!!――

刹那、頭の中で強く響く殺意。

虚絶が祟りを感じし、今まで神力に押さえつけられていた反動からか、衝動を送りつけるどころか暴れ始める。

肉体が制御を失い始め、勝手に動こうとする。行き先はもちろん山。とつとと殺しに行きたくて仕方ないということか。

いやダメだと強く思い、止まらなく無理矢理に足を動かした結果――

「カオル!? 大丈夫ですか!」

ガタンと大きな音を立てて、机と椅子を巻き込んで、倒れ伏した。痛みによって衝動に囚われていた肉体が完全に制御を取り戻す。

駆け寄ってきたレナさんに起こすのを手伝ってもらい、再び騒ぎ出す虚絶を無理矢理に黙れとねじ伏せる。

「ごめん、助かったよ……ああでも気にしないで。ちよつとコケただけさ」

「なら、いいのですが……」

「ありがとう、じゃあね」

軽く挨拶をしてから教室を出る。

フラつく身体が転ばないように意識を強く持ち、よたよたと歩を進める。まだ帰り始めだからか、人気は少ない。

「……黙れ、亡霊め……」

その意思を明確に言葉にして呟き、今回の初めての事態に困惑する。

狩りそびれも含めたら、たった三回だけだ、殺してないのは。それにいくら神力の塊である叢雨丸の影響によって多少俺への衝動が抑えられていたとしても、普段のこいつは祟りが出てもそれほど騒ぎ立てなかった。

最終判断はあくまで俺に任せる……といったような感覚程度でしかなく、これほどまでに暴れているのは初めてだ。

将臣やムラサメ様と接していたのはまだ二週間とちよつと程度のはず。祟りの頻度も考えると、たとえ出撃しなくても二週間でここまです騒ぎ立てることは決してなかった。

これほどまでに騒ぎ暴れるのは、よほど強力な祟りが出たときくらいだが、ついこの前奉納の舞を行い大凡は払った。

今までの経験から考えれば、あり得ない事態だ。

……なんとか家に着いた。

制服から私服に着替えて、顔を洗って布団に倒れ込む。

「耐えなければ……!!」

今日を乗り切ればいいだけだ。

今日さえ乗り切れば——!!

だが自身を拘束するものなどない。

夜まで待てば良いのだが……縫れるほどの希望は、無い。

嚇怒

——始まりにあったのは、怒りだった。

何故？

何故神の使徒たる汝が、我を否定するのか。

我らが抱きし千年の怨讐を、何故守り神の破片なる汝が否定するのか。

——”ソレ”は、憎んでいた。

——”ソレ”は、羨んでいた。

——”ソレ”は、望んでいた。

殺すべし、殺すべし。

呪いは呪いを以て贖われるべし。

死なぬものに死を。終わらぬ悪夢に終焉を。奪われたものには、相應しい断罪を。

永き千年の時で憎悪を絶やさぬように、魔に成り果ててなお魔を討ち滅ぼさんとして、魔を喰らって憎悪を研ぎ澄ませる妖刀と化してなお、その始まりは保たれていた。

偶然とはいえ共に滅ぼすに相應しい端末も現れた。端末もまたあらゆる魔を滅ぼし最後には消えることを是とした。我らは同じ思いを束ねる塵殺の刃——

だというのに。

あろうことか数百年も寝ていた分際で、人に戦うことを与えておいて、目が覚めてみれば言うに事欠いて『担い手から離れる。彼を自由にしろ。そなたも眠れ』だと？

……ふざけるな。

男のえり好みをする貴様なんぞに戒められる我が憎悪ではない。

——担い手としては我が端末の方が遥かに優秀、戦士としてもだ。

我は貴様のように守るべき民に戦いを強いるものではない。望むものに望むだけの力を与えるのみ。

貴様の戒めを渋々受け入れ観察したが、あんな様では討ち亡ぼす者として相應しくない。

それに担い手と管理者の所為で、端末の美しいほどに研ぎ澄まされていた覚悟が鈍ってしまった。

我は討ち亡ぼす覚悟を抱くものにこそ必滅の力を与える刃。

自らの血と傷を以て、虚を絶つ、死の剣なり。

——故に滅ぼすのは我だ。

無駄な抵抗を続ける端末の意識を労わり、深い眠りへと落とす。制御の無くなった肉体を操作し剣を携え、殺すべき魔の存在する場へと疾走する。

端末は我が怒りを殺意と誤解し、我を封じることと専念した結果、無駄な労力をかけた上にもう夜になってしまった。

——証明しよう、我らの殺意と憎悪を。

……もし”ソレ”の意志を解すものがいれば、鼻で笑ったであろう。

貴様の憎悪と同調させられた端末の意志は、一体何処にあらうか？

——と。

かの剣の担い手は、接続できてしまうほどに魔に近い。”ソレ”と担い手が同意した、と思っただけでも、事実は決してそうではない。

現実など……得てしてそんなものであらう。

一方その頃——

「繋がらないな」

さて出撃だと勇んでいた婚約者御一行は、昼間から妙な動きをしていた響に連絡を取ろうとしていたが、結果は芳しくなかった。

かれこれ連絡をしようと試みてから三十分近く経過したが、返答は一切無い。

(ぐ)主人……響の奴、まさか)

(可能性としてはそうかもしれない、とは思えるけど……)

虚絶の危険性に関しては、実のところ響本人ですらよくわかっていない。ただ誰しにも崇りの殺害を可能とする代わりに、それそのものが肉体の制御を奪うほどの力と意志を持ち、崇りと呼んでも過言ではないほど恐ろしいものであるということだけが、虚絶のわかっている

ことだ。

前例が遙か昔のことである上に、外より来た者のため資料も無く、馨と虚絶の特異性の相乗効果は、発覚から十年近く経過しても未知数のまま。

魔に近いとは彼と虚絶の言であり、何を以て魔に近しいとするのかも不明。

……つまりはよくわからないままだ。

「今日は馨君無しで出たらどうだい？ 彼の様子なら僕が見に行ってみるからさ」

「お願い、お父さん」

「他にできることも無いからね。それに……ちよつと、確かめたいこともある」

過去、安晴は馨の父であり友人でもある千景から虚絶を勝手に奪つて崇りに挑んだことがあった。その時は代償の影響でえらい目にあつたものだが、それでも憶えていることがある。

——確実に、虚絶の中には明確な意志を持った者がいる。

単なる怨霊の塊ではなく、明確に何者かが存在していた。たとえ人柱になったものがいっても、千年もの間で呪いと共に朽ち果てる筈——だが現実はず違った。

再び、それを確かめねばならない。

「——将臣君。もしかしたら馨君はもう山にいるかもしれない。話を聞くに、彼は恐らく制御不能になっていると推測できるから、崇り以上に気をつけるように。ムラサメ様にも伝えておいてくれ」

「はい、確かに」

出て行く時に、安晴は将臣に耳打ちをする——過去の経験から推測した今回の事態を。

「大丈夫でしょうか、馨さん……」

「まああやつのことだ。どうせひよっこり顔を出すだろうて」

不安げな芳乃を安心させるようにムラサメは言うが、その実、嫌な予感を感じていた。

「……馨くん？」

「常陸さん、何か見えた？」

「いえ、気のせいでしょうか……なんかそれっぽい影が見えて……」

茉莉子は忍者だが、見えぬものは見えぬ。暗闇の中で疾走する影など特に。

——そう、疾走していたのだ。

彼らから離れた影は、その憎悪に塗れた声を出す。

「ドコ、ダ……タタリ……イ！」

虚絶は端末を駆り、夜の山を飛び回る。普段ならばすぐさま正確に探知し、撃滅に向かったであろうが今夜は叢雨丸への怒りから完全に見失っており、それはもはや悪鬼が如き有様。

「タタリ……ミツケタ、コロス……！ コロス！」

散り散りになっっているが今夜の祟りの合計は四つ。彼——いや”

彼女”は燃料にする前の祟りを意図的にチラつかせ、発見した祟りを誘う。

ノコノコと誘われて来たのは三体。一体は先に襲撃先を見つけたらしく不在だ。

だが虚絶には構わない。奴らが仕留めるより早くこちらが仕留めて優位性を証明すればいいだけのこと。さすればあの寝惚けた神刀も、我が端末の優秀さを理解せざるを得ないだろう——

「——オソイ」

消えた。

——いや、疾く動いただけだ。

その疾く動いた中で、素早く抜刀し一刀両断。前回とは違い確実に殺った……と、確信したのと同時に、残った二体が攻撃を仕掛ける。

片方が面、片方が点——分散した触手が虚絶の端末の周囲に伸ばされ、回避困難になったところに渾身の一撃が振り下ろされる。

が——その程度で死ぬのならば、この端末の命はとうの昔に終わっているし、虚絶となった”彼女”もまた、現代まで残っていないだろう。

「ハッ」

鼻で笑う。

鞘に納刀し、ダラリとした自然体のまま迫る触手に向かって駆け出す。高速で振り下ろされる直前、斜め右に大きく跳躍。ドゴンと大きな音を立てて触手が地を破壊した時には、すでに虚絶の端末は大きな隙を晒している祟りの上空。

「テン、チュウ——ッ！」

落下しながら抜刀し、さながら杭を突き立てるように逆手持ちの刀を振り下ろす。避けるのも間に合わず、祟りは串刺しにされて喰われた。

間髪入れず地面に突き立てた刀を逆手に持ったまま疾走。地面を斬り裂きながら第二撃を用意していた祟りに突っ込む。

素早く放たれる無数の触手——この隙間を掠らせながら潜り抜けて。

「シニサラセッ！」

刀を振り上げ、まず初撃で態勢を大きく崩す。そのまま順手に持ち替えて袈裟斬り——次いで横薙ぎの一閃。

無駄に損傷が増えてしまったが、確実に仕留めるには安い対価だろう。

「フム……マダイルカ」

やはりこちらの方が早かったかと、一人納得しつつ、端末の損傷を確認する。部位欠損でなければ、どれだけ深かろうとも三日もあれば完治する身体とはいえ、内臓系への損傷は一週間程度の療養を必要とする。もつとも、戦闘に支障が出るだけで生活する分には痛みで済むが。

虚絶の傷の代償は、たとえ虚絶自身であっても選べない。

どうやら右の額、胴体中央、左腕、右ふくらはぎ、右肩に傷が生まれたらしい。掠ったところは破邪の効果のある穂織の水で流せば良いのだから、つまりは無傷も同然かと考える。

いや、右目に流血が入らぬよう瞑っている以上死角が生まれているか。——まあいい。

「ワガタンマツガ、オクレヲトルハズガナイ」

痛み流血する身体を無視して、虚絶は端末に指示を送る。次は、巫

女姫と神刀の担い手に向かっている個体だ——！

「……石……？」

だが、虚絶の認識は甘かった。

彼らの戦いは刹那で決着が着いた。想定外の攻撃を、咄嗟の反撃であつさりとは断された崇りから落ちた、謎めいた破片を拾う。

これを見ていると、何か胸騒ぎのようなものを感じる。しかしそれが何かは分からぬまま……

「有地さん、本当に大丈夫ですか？ どこか怪我は？」

「えっ？ ああ、ほら、全然大丈夫だよ」

「よかった……でもなにしてるんですか。あんな風に突っ込むなんて」

「そんなに危なっかしかつたかな。気付いたら反応できて、俺自身よくわかんないけど」

「そういうわけでは……本当によかった」

何せ本当に咄嗟の反撃——それも牽制となるべき初撃で仕留めたのだ。あまりにもこつちが予想外で、将臣自身もこれほど上手く行つたのは偶然だろうとすら思う。

「しかしあの太刀筋、かなり綺麗でしたね。今までのドタバタしたのに比べれば、見違えるようでしたよ」

「ドタバタ……まあすつとこどつこいよりマシか」

「あれは抜き胴ですか？ 形が似ているので、剣道の類かと思ったんですけど」

「昔祖父ちゃんの影響でやってたから。全然やってなくて、あんな様だったけど」

「なるほど」

——と、茉莉が一息つけた時に。

ガサリと大きな音が立つ。

「——！ 二人とも、下がってくださいー！」

崇りの音とは大きく異なる、重い物が木の枝に乗ったような音。専門外である二人を下げるのは正解であり……

「ホウ、ヒタチノマツエイカ」

その疑問の声は誰が漏らしたのか。全員が驚愕の視線で”ソレ”を見る。

ダンツと大きな音と共に地に降り立ち、月光に照らされた鮮血が否応にも目につく。

「カカカツ、ドウダ、ムラサメマルヨ。ワガタンマツハユウシユウデアロウ。キサマラガヒトツシトメルヨリハヤク、ミッツシトメタワ」

そこに現れたのは、虚絶を携えた稲上馨。至る所から流血しながら、馨の顔で他人の表情と共に、初めて聞く女の声と混じった声で叢雨丸に対して勝ち誇る。

「馨?! お前、どうして——」

「ならぬご主人!! アレは馨ではない! 虚絶だ!!」

将臣が近づこうとしたのを、ムラサメが止める。

「う、そ——」

変わり果てたその姿は、紛れもなく魔人。魔と人の狭間の証人がそこにいる。あの時漏らした言葉の意味を今理解した茉莉が、愕然としながら見つめるも、眼中に無い虚絶は感心したようにムラサメへと声をかける。

「サスガダナ。ワガタンマツノイシガネムツテイルノヲサツチシタカ」

「端末だと……!! お主、人間をなんだと思っているのだ!? 永き時を生きる怨念め!」

「クク、クハハ——!! カエルノコハカエルダナ!! ムラサメマルモオナジコトヲホザイテイタ!!」

心底おかしいと言わんばかりに虚絶が腹を抱えて笑う。そしてギリリと叢雨丸を睨みつけて、極大の憎悪を乗せて呟く。

「ホントウニ、イイゴミブンダナア。キサマガオトコノエリゴノミナゾシテイルアイダニ、アワレナトモタケノオナゴガドレホドイノチヲオトシタカ……シラヌホドオロカデハアルマイ!」

刀を振り抜き、虚絶は叫ぶ。

「スウヒヤクネンブリニメガサメテミレバ、ソクナオトコガニナイテトハ!! モウロクシタモノダナ! タタカウベキデナイモノヲエラビチカラヲアタエルナド、キサマコソタタリガゴトキアリサマダ!」
「黙りなさい!」

「芳乃様!」

嘲笑し徹底して貶す虚絶を前にして、芳乃は毅然とした態度で立ち向かう。

「あなたがあの恐るべき虚絶である、というのはわかりました。ですがその身体はあなたのものではなく、稲上馨のものです! 彼に返しなさい!」

「アア、シツテルトモ。ワガタンマツ——カオルトイウナダツタカ。ダガ、ワレトワガタンマツハ、カツテソノイシヲドウイツトシタ。

……忌マワシキ魔ヲ討チ滅ボストナ。

ユエニ、ワガタンマツヲワレガアヤツルコトハ、セイトウデアル」
だがそんな芳乃の言葉さえも、虚絶には一切通じない。彼女は彼女の中で完結している。千年の時を経て朽ち果てぬ憎悪は伊達ではない。

「——我が望ミハ、端末ノ望ミ。ソクノニナイテトハチガイ、センシトシテモスグレテイル。タシヨウノソクシヨウナドモンダイデハナク、マタワガニナイテニフサワシイセイシツモアワセモツ……ドウダ。キサマガエランダニナイテナド、ヒカクニナルマイ」

まるで自分の最高傑作を自慢するかのような態度で、虚絶は語る。
だが、そんな態度が琴線に触れたのか、遂に将臣が踏み出す。

「あんたが言いたいことはつまり、叢雨丸に意志があるとかそういうことでもなくて、要はプライドの話だな?」

「プライド……? ナンダソレハ。ワレガシヨウメイシルハタダヒトツ。」

ワレト、スバラシキワガタンマツノユウイセイニホカナラナイ。

——我ラガ抱キシ千年ノ復讐。ソノ誓イヲ、無下ニ扱ツタ叢雨丸ニナ」

腰を深く落とし、両手で刀を構える虚絶。

その構えは一見すると素人のソレだが、しかし一切の隙は無く。魔を滅ぼすために全てを投げ打った一族の末裔の肉体が、後の神速に備えている——！

「有地さん！」

芳乃が叫ぶ。

「朝武さん、常陸さんを連れて下がって!! こいつは俺が……ムラサメちゃん！」

「応ぎー！ いつまでもしがみ付く怨霊に一泡吹かせてやろう！」

将臣とムラサメは、虚絶が何故敵意を漲らせているのかを臆気ながらに理解した。

虚絶は、叢雨丸を見返すために事を起こしたのだろう。

だが——

「気に入らないな——」

「気に入らぬのだ——」

わかるが、とても気に入らない。

そんなに人間らしい感情があるのなら、何故。

怨みばかりを先行させるのか。復讐ばかりを先行させるのか。素晴らしい端末と褒めるくらいには子孫に対する愛があるように——

「怨みだけならお前が祟りだろう——！」

「ヌカセ、アオニサイドモガ——!!」

地を蹴って爆裂する。その踏み込みは疾すぎる。捉えられない、弾け飛ぶように駆け抜けてくる。背負うように刀を構えて、強烈な兜割りを見舞おうとしているのだけ辛うじてわかる。

だからこつちに来るのは、正面から迫り来る敵の太刀筋の軌道を見定め、

「——オッ！」

「ヌウ……ッ!？」

渾身の力を以ってして、鏢迫り合いを挑む——!!

ガイーンツと鈍い音が響き渡り、神刀と妖刀が激突し担い手と端末が睨み合う。

「ぐ、っ……………」

「ズニノルナ……………!!」

だが力の差もあれば技量の差もある。重い、重すぎる。虚絶の刀が重すぎる。千年の重みを乗せた刀身かと錯覚してしまいそうなほどに。

「けど——!」

だからこそ負けない。

叢雨丸に選ばれたのは必然だから。選ばれた者なりに、戦い続けた者に力を示さねばならない。少なくとも、戦える者だと認められるくらいには……………!

が、しかし。

「……………ま、さ……………おみ……………?」

呆然とした声と共に押されていた力関係が一瞬で消滅する。

「そうか……………俺は……………」

虚絶を退けながら、へたり込む。

「世話かけた。戻ろう……………話すよ、色々」



肉体を取り戻した時、虚絶の怒りが伝わってきた。

なるほど。確かに千年もの間研ぎ澄ませてきた復讐の叫びを、肝心な時にいなかった奴にいい加減にしろと否定されては怒るといいうのだ。

……………案外、こいつも微かに人間らしい部分があるんだな。

ただ叢雨丸の発言を支持する……………というわけにはいかない。可能性はあるのだ、肝心な時に動けるものが必要だろう。

「……………まずは一つ、すまなかつた。危害を加えようとして」

しかし話はそう単純ではない。血塗れの身体を拭きに一旦家に戻って服を取り替え、それから再び朝武家を訪れた俺は、まず真っ先に全員に土下座した。

「安晴さんにも、本当にすみません……………もつと早く伝えておけばよかった」

「鍵開けっぱなしでもぬけの殻、なんてもしかしたらと思ってたけど。まさかここまで暴れるとは」

とかなんとか話しているが、実は芳乃さんと茉莉子からの視線がめちゃめっちゃ痛い。まるで突き刺さるようだ。

「何を隠していたんですか、全て教えてください」

「いや、芳乃さん。別に知ったところで今回ののは虚絶が——」

「いいから教えてください。お父さんと有地さん、それにムラサメ様も知っていたんでしょう？　ちゃんと真実を言っているかどうか、見ていてください」

「……やべーことになった」

芳乃さんがとても怖い。

茉莉子は無言のままだが怖い。

……ええい、腹をくくるか。

「虚絶には、稲上の祖先が抱く復讐の意志がある。普段は崇りを感じると殺せだど物騒なことを言うけど、身体を奪うほどでもなかったんだ。せいぜい崇りを優先させるために操作するくらいで。でも今日は違った」

「叢雨丸ですね」

「……実は叢雨丸に『いい加減にしろ』って言われて渋々見守つてみたら、将臣が不甲斐なかつたのにそのままでもいいみたいな態度見せられたっぼくて……それで虚絶の奴、怒ってさ。それで今日の一件に繋がってるんだ」

「俺の所為つてことだよな、それ」

「いや、虚絶としては将臣にこれといって悪感情は無い。哀れみとかの方が強い。問題は叢雨丸の担い手が完璧でないのにも関わらず、有事の際に行動できる俺たちを否定したことだ」

まあ、とはいえこつちの怒りは八つ当たりじみたものであるのは否定できないが。

「まあ、虚絶も女だし……叢雨丸の女性だしで、女同士にや色々あるんじゃないのか？　俺にはよくわからんよ。とにかく、今回の一件で落ち着いたみたいだから、よっぼどのことがない限りまたこういうのは

起きないだろう」

あと驚いたことと言えば、虚絶と叢雨丸は女であったということか。

虚絶は稲上の祖先……伊奈神京香という女性が核となっているみたいだ。

さて事情説明は終わり。恐らくは叢雨丸も今回の件で面倒くさくなつて関わろうとはしないだろう。

「待つてください」

もう話すべきことは話したとして帰ろうとしたが、遂に無言をやめた某子に手を掴まれて止められる。

「隠していること、まだありますよね。死のうとしたとか、殺すために生まれたとか」

「……そ、それは……えっと」

「教えてください。もう、何も知らないのは嫌なんです。ワタシは」

「もう白状してしまえよ、馨。隠すのは無理だ」

「無駄に黙ってるからややこしくなるつてのは俺が実演してるだろ？」

「ここらで本当の事言っておけよ」

ジツと見つめられて、そう宣言されてしまわれては——ああちくしょう、その目で言われたら断れない。

「安晴さん、どこまででいいんですかね……？」

「全部じゃなきゃダメなんじゃないかな。まあ、黙つてた僕が言うのもなんだけど……そろそろ、伝えるべきだと思う」

「……わかった。全部だ。」

言つたところで、俺のやることは変わらない。むしろ今回の虚絶の暴走は、やるべきことを確実に成し遂げられるという確証に繋がるといふことだ。

「稲上の使命は、崇りになりかかつてる人間を殺すこと……誰であってもね。過去の一件で朝武に雇われた最終手段つてのはそういうことさ。たとえそれが、あんたたちであったとしても——」

「だから、死のうとしたんですか。殺しを生業とする自分を恥じて」
「違う。時代遅れなんだよ、そんな使命は。だっていうのに親父とお

袋が愛した子供が、先祖返りして人殺しに最も適した存在だなんて罪そのものじゃないか。それに将臣もいる……祓う方法はいくらでもある。つまりなんだ、俺は駒川と約束した二十歳まで生きてみるってことくらいしか生きる理由が無い」

芳乃さんと菜子は俯き、その表情を伺うことはできない。

ああ……お通夜ムードになっちまった。まあそうだろう。今までにこやかに話していた友人が過去に自殺をしようとして失敗してて、かつ今も生きている理由が特になんて語っちゃえば。

「まあ気にするな。そこまで死に急ぐつもりは毛頭無い。虚絶が必要になるような事態があるだろうし、呪詛が無くなってしばらくするまでは絶対にしないさ。単に俺は、人より自滅衝動が強いただけって話だよ」

「本当にそれだけなんですか」

「心配性だなあ、芳乃さんは。今までそんな素振りも見せてこなかったろ？ 内面の話だし、答えはもう見つかってる。問題無いよ」

まあ、答えは見つけるつもりがない……というのが事実だが、黙っていても問題は無い。

芳乃さんは何処から納得行かなそうにしながらも、言葉に偽りが無いというのを周りの人間に確かめた上でとりあえずは飲み込んでくれた。

菜子は何も言わず、ただ一言。

「わかりました」、とだけ。

それからは普段通りの談笑で、将臣の修行についてバレかかったりしたが、些細な問題だろう。

俺にとって、とても重要な問題は――

「……」

「……」

帰り道、菜子と気まずい空気のままのこと。それだけだ。

もうすぐ別れ道なのに、一切口を開いていない。やばい、どうしよう……

と、とにかく謝ろう。

「悪かった。黙ってて、嘘ついてて」

「……いいです。そんなの」

「そう……なんだ。あ、そろそろだな。じゃあ——」

また明日と言いかけて……

ポスツと、茉子が飛び込んできた。

「……なんだよ」

「……なんで、あなたなんですか」

「……知らない。あと胸ぐら掴まれても困る」

胸に顔を埋めながら胸ぐらを掴むなんて器用な真似をしているが、
一体どうしたんだろうか。

「バカです、救いようのないバカですよ馨くんは」

「自覚してる」

「——せめて、頼まれなくなつて生きてくださいよ……」

「本当にごめん。許さなくていい」

声を震わせている彼女になんて声をかけたらいいか、俺にはわからない。ただ謝罪の言葉を述べながら、背中に手を回すしかできない。

まだ顔を埋める茉子は、さつきよりも声を震わせながら——

「……じゃあ、約束してください」

「俺にできることなら」

——生きて——

それが、その日彼女から告げられた最後の言葉だった。

自由

「……生きて、か」

朝の眠気を湯浴みで飛ばしながら、先日の夜言われたことを、また口にする。

生きろと命じたのは駒川。

生きてと願ったのは茉莉子。

この違いは何処から生まれたのか。生きろと生きて——単に言い方の違いというだけで終わるものではない。

いや、考える必要は無い。生きろと命じられて受け入れて約束した、生きてと言われて約束した。だったら不慮の事態で死ぬ以外の死に方は許されない、そういうことだろう。

……今日はえらく早くに起きた。

普段ならもう一度寝るかーぐらい思うのだが、今日はなんだかそんな気になれなかった。

やけにリアルな感覚で、昨日茉莉子の背中に手を回した感触が残っている。やけに小さく、暖かく、柔らかい。どれだけ経っても、あいつは『女の子』だったんだな……とも思うし、恐らくは芳乃さんも——

「……何考えてる……」

不要な思考だとしてカット。ええい、朝っぱらからいらぬ煩悶を抱いてはロクなことがない。

しかし、生きて……とは。どうやって生きればいいんだろうな？

生きろならば考えずに済むから楽なんだが。

——それを探ることを、一つの目標としてみようか。それがわかるまでは死ねない。

……随分人間らしいんじゃないかな、こういうの。

「……生きて……ねえ……」

学院の暇な時間を使って、頭を回す。どうやって生きればいいのか。何をして生きればいいのか。本音を言えば何もしたくない、何も考えたくない。万事が面倒くさくてだから頭を回していない。それ

は生きているのか死んでいるのか……

「……難しいな、ホント」

一人ボヤいても仕方ない。

あまりにも難題だ、これは。理詰めで物を考えているからだろうか。どうしたらいいのかまったくわからない。

「へーい、罄つちー、飯食おうぜー」

「なんのマネだよ廉」

「ありやそんなにアレだった？」

「控えめに言って寒気がした」

「全然控えめじゃねーじゃん。んで、どうするよ」

チラリと確認すると、いつも通りに将臣もいる。が……

「悪い、今日は一人の気分なんだ。ちよいと黄昏させてくれ」

ダメだ。生きてという言葉に頭を回してばかりで、他に集中できない。授業すら聞き流すどころか聞いちゃいねえ。それほどまでに生きて対してどう生きればいいのかを考えてばかりだ。

「埋め合わせはするからさ」

「いいって。んな大事でもねーだろ」

「それもそうか。将臣にもよろしくな」

「へいへい」

一言断りを入れ、弁当を持って学院の外へと向かう。平屋だからな、屋上も無いし。

フラリと出て行き、ふと当てがないことに気が付く。考えるために離れたつもりだったが、その実考える場所は思いついていなかった。

「参ったな……」

まあどこでもいいか。フラフラ歩いて、適当に目についたベンチに腰掛けて飯を食う。

食いながらどうやって生きたものかと考える。生きろではなく生きて——ああ、まったく、本当にわからない。何が正しくて何が間違っているのか……

食い終わってからも、考えて考えて……グルグルと渦巻く疑問に答えが出ない。

しばらく頭を悩ませてから、はたと気が付く。今何時だ？ 時計に目を落とせば休憩時間はとうに過ぎてる上に、もう授業は始まっていた。今から戻っても、ここからなら十五分近くかかる。

財布の類は一通り持つてるし、鞆には教科書程度だが……いいの？ はつきり言ってる間に合っても半分以下しか受けられないぞ？

でも行かないのもアレだしな。
と、そこまで考えて。

今俺はどうしたいのかと思う。
ぶつちやけ面倒くさい。

バックれた方が早い。

でもバックれたらバックれたで……別に怒られはしないか。呆れられるだけで。

都合よく比奈ねーちゃんから電話がかかってくる。

「ねーちゃん？」

『稻上くん、どこほつつき歩いてるんですか？ もう授業始まってますよ』

「……悪いけど俺サボつから。全部欠席にしといてくれて構わない。

ごめん、比奈ねーちゃん」

『えっ？ あっ、ちよつと馨……!?!』

困惑するねーちゃんに心の中でもう一度謝罪しつつ、俺は電話を切って立ち上がる。

……なんか、気分がいい。

今はじめで、明確に自分で考えて自分で決めた気がする。今までだって学院行くのは学生だから当然だと考えて、だから戻ったであろうことは予想できる。

だけど違う。俺は明確に自分の成さなきやいけないことと、自分のやりたいことを天秤にかけて、やりたいことを取ったんだ。

何とかだから、みたいな理由じゃない。利益と不利益で考えたら不利益だ。でもその不利益を是として、俺は不利益を自ら選んだんだ。

そうか、これが自由か。これが生きるってことか。惰性で生命活動を続けてるのは訳が違う。

生きて、の答えではないだろうが……だがそうか、これが俺が選んでいなかったもの……!!

「はっ、最高だな——」

上機嫌で歩き出す。さて、家帰って弁当の容器洗って……それから何をしようか？ 時間は山ほどある。何もしないのも選択の一つだ。

ああ、日常とは、こうも楽しいものだったか——!!

頬が緩む、気分が高揚する、足が軽くなる。

「ああ生きるさ、生きてやるとも……!」

生きろと言われ約束した。

生きてと言われ考えてみた。

だったらこうして考えてアレコレ試してみることこそが、どうやって生きればいいのかの答えが見つかる筈だ。

生まれたことが罪である存在が生きてと言われたなら、どう生きればいいのか。普通に触れ続けられ、異常との境目が見えてくる——俺の生死の答えは、そこにある……!」

「——で？ サボったのは初めての自由に選択したことにテンションを上げてしまったからというオチなんですね？」

そうして得た自由を謳歌し、何をしても新鮮味を感じるほど満たされていたのだが。

「何故このような」

「中条先生が「不良になっちゃったかなあ……？」とか言っていたので、無用な心配をかけることが得意なあなたに説教をしに来ました」「ワタシはいつも通り」

「あんたまで説教かよ!」

学院に置いてきた鞆を届けるついでに、家に乗り込んできた巫女姫忍者コンビに正座させられてしまった。

「いいですか。例の隠し事は事情が事情ですし、私でも似たようなことをしたでしょうから不問ですけど、それでも信頼されてなかったというのはショックです」

「そっから？ いやでもあれは……」

「私たち友達じゃないですか！」

「あつ、吹っ切れたなコイツ！」

「ええ！ 巫女姫の立場に縛られる必要はそれほどないのだと理解しました！ 有地さんのおかげです！」

「あいつ来てから展開が多すぎるんだよちくしょう！」

説教とは程遠い、醜い言い争いというか……我ながら何をしているのだろうか？

「馨さんは深く考え過ぎなんですよ！ 明日はきつといいことだらけくらいの感覚でいいんです！」

「ガキの頃に命の話だぞ!? 無茶言うな！」

「今でも変わらないじゃないですか！ 抱え込んで一人で悩んで。相談くらい乗りますよ！ だというのにあなたは……子供のときから変わってません！」

「なにを！ 立派に変わったよ！」

「菜子か私が引つ張り出さないと家から出てこなかったクセに！」

「たりめえだよ！ 慣れねえ土地だったしな！ お前だって木に登ろうとしてすつ転んで泣いてたじゃねえか！ 宥めたのってほとんど俺だぞ！」

説教はどこへやら。

完全にヒートアップした俺たちは過去の出来事を掘り返しつつ罵倒なんだか罵倒じゃないんだかよくわからないことを言い合う。

「つか重荷を背負ってるお前に余計な世話かけられるか！」

「重荷を背負ってるのはあなたもでしょう！ お父さんたちには話せて私じゃダメな理由はなんですか！」

「子供じゃん！ 大人じゃねーじゃん！」

「なっ……子供じゃないもん！ 私より有地さんの方が子供っぽいのに！」

「子供だ子供！ 将臣を引き合いに出してる時点だな！」

「二人とも」

あまりにもドスの効いた声でそう言われては、止まる以外できない。

……というか、それは卑怯だろ茉莉。

「不毛な争いはやめてください。近所迷惑ですよ」

「……ぐっ、返す言葉も無い」

「ぐぬぬ」

「芳乃様、落ち着いて端的に」

「そうね、そうよね。なにやってんだろ、私……ごめん茉莉」

軽く深呼吸をした芳乃さんは、佇まいを正してから

「馨さん。もつと人を信頼して、弱いところを見せてください。相談とか、してください。私たちじやダメなんですか」

と、俺の身を案じるように言った。

……この様子だと、あの後色々聞いたな？ ムラサメ様か安晴さんかは知らないが、出所はいっぱいあるわけだし。

言われてみれば確かに誰かに相談することもなく、俺は自己判断に全てを委ねてきた。全て自分で判断して、自分で実行していた。相談などしても無意味だと勝手に断じていたが……ここまでバレたら、存外気楽に言えるのかもな。

「……努力してみるよ、芳乃ちゃん」

「またそんな懐かしい呼び方を」

「いいだろ？ たまには」

微笑む芳乃さんを見て、閉じた俺を外に連れ出してくれたのは、こんな笑顔だったんだと……今更ながらに思ったが。

——どうしてか、本当に心惹かれたのとは違う気がした。

Chapter 3 決戦 分裂

目が醒める。

……身体が重い。

布団から身体を起こし、首を一捻り。パキパキと鳴らしながら時間を確認。——五時？ 早すぎる、気合を入れないと起きられないはずなのに、何故……？

「目が醒めたか、我が端末よ」

疑問を打ち破る第三者の声。

肉体が反応し、布団を蹴るように後退。すぐさま枕元に置いてある短刀を手に取り構える。

「比奈、ねーちゃん……？」

だが見えたのは比奈ねーちゃんの姿。

しかしその瞳は冷酷な色を宿し、かなり古式の着物を着ている。違う、こいつは比奈ねーちゃんじゃない！

「いいや、誰だお前……！ 俺は比奈ねーちゃんに鍵は渡してない——！」

「まだわからぬか？ でハ、コチラのハウガキサマニハワカリヤスイナ」

腑に落ちなさそうな表情と流暢な言葉使いから一転。憎悪に塗れた表情と人ならざる気配、そして俺の声と混ざった女の声。

間違えるはずなど無い、これは……

「虚絶——!?!」

「カカカツ、イカニモ」

「なんでテメエが比奈ねーちゃんの姿してやがる……！ 今すぐその貌を変えやがれ！」

怒号と共に不快感をあらわにする。俺の姿ならまだしも、よりにもよって比奈ねーちゃんの姿をしているのが気に食わない。これが虚絶でなければ、本気で殺していたところだ。

「フむ、なラバこれでどうだ？」

毒々しい気配が消えたと思つたら、黒い靄がかかる。それが消えると同時に現れたのは……俺ではなかった。

——何故か、茉莉だった。

「貴様の記憶の中で印象深い女の姿を取ってみたが、如何に」

「不愉快極まりないな」

「では何を望む」

「……俺でいいよもう」

不快感を剥き出しに吐き捨ててやると、虚絶は再びその姿を変えらる。三度目にしてようやく俺の姿だ。

だがやはり着物のままだし、しかもそれ女物じゃねえか……

「で、朝っぱらから何の用だ。しかも叩き起こしやがって。生前の習性か何かを流し込みやがったな？ 余計な世話だっつーの」

意識は眠いのには身体は起きる気マンマンなのでめちやくちや気持ち悪い。

……ていうかこいつ、実体を持つてたのか？ 意志だけの存在だと思つてたんだが。

「黄泉道に迷い彷徨える者に実を与える術を応用し、あの管理者のような状態を意図して作り出した。誰しもに見えるだろうが、緩めれば見れる者が絞られる」

「人の思考を読むな。接続されてる身にもなれ」

「我が端末よ、れな・りひてなうあー……だったか。アレは、なんだ」

「レナさん？ ……いや知らない。将臣みたく、ちよいと神性に縁があるんじゃないか。にしては、お前が衝動を送るあたり怪しげではあるが」

「では洗う。駒川の者に尋ねる」

「勝手に動くつもりか」

「寺子屋があるだろう、貴様は」

いや五時だし、行って話を聞く分には問題と思うが……これがどうい状態なのかがわからないのはかなりまずい。

「……とりあえず俺の記憶を照会できるなら散歩するときの道を歩い

てこい。俺は家にいる」

「解せぬが、解した。その無益を成してくるとしよう。我が端末よ」
そう言い残して虚絶は家を出て行く。俺は今に行き、水を飲んで胡座をかいてテレビを眺める。差し障りのない、つまらない内容ばかりでいつも通り。

しかし、突然――

「……あれ……」

視界がブレる、意識がトぶ。

家にいるはずなのに、どうしてか建実神社の近くにいる。ただボーツとしていた筈なのに、自分の行動に異常なほどの疑問と魔への飽くなき殺意が溢れ出す――

「戻、れ……ッ!」

意識があつちこつちすつ飛んで仕方ないどころではない。混ぜられているところではない、ミキサーにかけられているようだ。

俺と我が混ぜあって、我が端末がズレる。俺と虚絶の境目が崩壊して、やばい――!!

どうやって?ぎ止めるべきなのか。何をすべきなのかを考えている筈なのに思考すら回らなくなりそうになったとき、虚絶が戻ってきた。

その途端混線した思考が急激に戻り始め、吐き気のようなものすら覚える。

「戻ったぞ我が端末よ。どうやら我と貴様の接続は、我が実体を得て行動する場合、近くばかりにいた影響で急激な距離変化が発生すると接続が解れ混ざる。我の方が質量が大きい故、貴様を呑むらしい」

「……てめ、そういうの、先に言え……ッ!! 気持ち、悪リイ……」

「水を飲み横になれ。意識の混濁は平常を保ち、原初の己が何を抱いていたかを強く抱け。貴様の始まりは確か……あの――「黙れ!!」――ふむ、失言か」

「ごちやごちやうるさいんだよ亡霊のクセに――! 水を再び飲み、近くの雑誌を枕に横になる。」

クソほど腹が立つが、こいつの発言は正しい。寝っ転がって自分の

中身を意識していくと、自然と混濁した意志が纏まり始める。

——笑顔が浮かぶ。

……これは幼少の頃見たもの。誰の笑顔だったか……とても綺麗な、笑顔だったのに……

「——よし」

時間にしておよそ一時間三十分ほど意識を集中し、自らを取り戻す。

……えらい目にあつた。まさかあれほどぐちゃぐちゃにされるとは……

「落ち着いたか」

「……朝から面倒だ」

「意志に罅が入っていなければ問題は無い。しかし貴様に関しては心配無用だ。その意志の根底にあるものは、崇りになろうとも砕け散ることはない。それほどまでに眩しい笑顔か」

「勝手に語るな」

……出てきた理由はレナさんについて調べるためらしい。整理していたら見えた。あと久しぶりに好き勝手動いて気分が良くなったから、肉の檻を欲したというのもある。

しかしその行動はただ一つ。あらゆる魔の撃滅。もしもレナさんが誤認でもされたら目も当てられない。

「で……どうする？ お前と駒川に面識無いぞ」

「適当な姿を借りる。貴様ではなく、他の者からな」

「不快にさせそうだから俺行くよ……なんなら接続のギリギリを維持して距離を伸ばしておいてくれ」

「御意。では行くぞ」

「待ってご飯食べたい」

「そうか、習慣は違うのだったな」

——こりや苦労しそうだ。

七時くらいなら起きてるだろうから、それくらいに一報入れとこう。

「……つまりなんだ。お前、刀から出てきてるのか」

「統括存在たる我が離れば必然的に我が端末に流れ込む。故、混線が発生するのも然り。我があの剣に入っていれば問題は生じん」

「そ。戻ってくれると助かるんだが」

「手が足りぬだろう。我が力を貸す」

「ありがた迷惑だこんちくしょう」

飯食つてのんびりした後、外に出たら出勤する比奈ねーちゃんとばったり会ったので遅刻する旨を伝え、虚絶を連れて駒川の診療所に向かう。

極限まで存在濃度を薄くし、俺以外の適当な姿を取らせた虚絶だが、その姿は古き良き大和撫子のような出で立ちだ。

というか、素材があまりにも良すぎる。本人の口から割らせた生前の姿を摸している筈なのだが、どこか美化しすぎただろうか？

「美化も何も、貴様の根底にあるものから派生した姿だぞ」

「……は？」

「無自覚か思考停止か。いずれにせよ貴様も男ということだ、我が端末よ」

いきなり何言ってんだこいつ。てかすぐそうやって人の思考を読むのをやめろ。

やれやれとため息を吐く虚絶を怪訝な表情で眺めていると、診療所が見えてくる。

「最大距離」

「対象のいる部屋から玄関よりやや離れた程度」

「不便だな」

「近すぎる弊害だ。慣れろ」

チツ、ほとんど離れられないな……

「荒療治だが、混線開始距離を保ち貴様の意識だけで耐えれば必然的に伸びるぞ」

「断る。俺が俺でなくなるなんてまっぴらごめんだ」

「それでこそ我が端末、素晴らしき存在よ。」

——む、この感覚は担い手、それに管理者か」

フラフラ歩いていると見えてきたのは何故か診療所の前でたむろつてる将臣御一行。ムラサメ様もいる。

「よ、おはよう」

と軽く挨拶をすると、ギョツとした目で隣の虚絶を見られる。見えないようにしているんじゃないのか。

「見える回線を持つ者には何をしようとも見える。しかしあの時は義憤に塗れた顔をしていたが、それなりに若い顔もできるものだな」

「あの、どなたですか？」

「巫女姫よ、我は我が端末を通して先日貴様と出会っている。我に啖呵を切ったその姿、忘れようにも忘れらぬ」

「端末……お主、虚絶か！」

一度襲いかかられた経験からか、ムラサメ様の表情は険しい。どうか全員が全員、その意識を戦闘用に切り替えているようだ。朝の雰囲気ではない。

「如何にも、我が名は虚絶」

「乗っ取るのはやめて今度は自ら現れたか亡霊め。いつまで磔を縛るつもりだ」

「縛るのではない。盟約と成したのだ。我らは魔を討ち亡ぼすがべくその命すら天秤にかけた。なんであろうと亡ぼすと決意した素晴らしき我が端末と我は、共に憎悪と殺意を束ねる者」

「それを縛るといふのだろうか！」

「否。我が端末は我が端末であり、我は我である。我と我が端末は、単に肉体を共有するのみ」

淡々と返していた虚絶がムラサメ様をギロリと睨みつけながら吐き捨てるように語る。

「だが縛るであれば貴様もそうだろうか。ムラサメなどと名乗り、父母から戴いた名誉なる名を乗らぬ貴様こそ縛られる者。哀れなる幼子よ、救いを求めよ。その先にこそ貴様の生がある。故、その使命を——「いい加減にしろ」——無駄話だったな」

一瞬で興味を無くした虚絶は表情は虚無のまま佇む。

「悪いな、朝っぱらから。俺は駒川に用がある。どいてくれないか」

「いや、俺たちもあるんだ。これのことだよ」

と、将臣が見せたのは透明な欠片。

先日、隴げながらに虚絶を通して見たものと同じだ。

が、刀から虚絶が抜けている所為で衝動等は送られてこないの
判別が出来ない。

……さて、これは……

「おい虚絶、動くなよ」

「あいわかった。何も無いに越したことは無い」

「そーかい」

要件が同じなら構わないやと入っていくついでに、虚絶は外に置いておく。話をややこしくされては困るからな。

「崇りのところに落ちてた、ね」

あの欠片は水晶のようなものであり、何か不思議なものであること。そして芳乃さんが触れようとしたとき、何故か静電気めいた反応を一つしたということくらいしかわからず、より精密な観測が必要とのこと。一つとは思えないのでムラサメ様が探してみるとのことだが、さて上手く行くやら。

「陰陽師の末裔であれじゃ、俺らはお手上げだな」

「でだ、馨は何の用だい？ 虚絶に関係することかな」

「いや近況報告。遂にその二人にバレたよ。あと虚絶が叢雨丸の態度に腹立てて暴れたりとか」

「……おい、重要なことだぞ」

大変微妙な顔をしながら、駒川は続きを促す。

「まあそれだけじゃなくてな。虚絶の件は調査が完了次第伝えるが……真面目な話もある。駒川、レナ・リヒテナウアーに憶えはあるよな」

「うん？ ああ、留学生の。でもどうして彼女が出てくるんだ？」

「将臣をはじめてみたとき、レナさんをはじめてみたとき……虚絶から微弱な衝動が送られた。が、一回きりだ。将臣が担い手だったことを考えれば、何かしら関係があるかもしれん」

そう言うのと駒川は「なるほど」と呟いたが、代わりに反応したのは
菜子と将臣だった。

「それ本当なんですか」

「嘘言ってどうするよ。虚絶が実体を持って現れたのもそこが所以
だ。しばらく考えて分かんのと叢雨丸への当てつけのためだけに
五時に叩き起こしやがった」

「でも、レナさんはどう考えたって関係者には見えないだろ」

「おかしいと思わなかったか？ タタリとオンリョウなんて間違いを
するかよ普通。どれだけ日本語が不自由でも、「み」と「り」は間違え
ても「せん」と「りよう」は間違えないだろ」

「言いがかりだよそんなの」

「だが、だ。もしも彼女の家系がこつちに来てたとき、祟りを見ていた
ら？ 否定はできない。それに虚絶が衝動を送った理由も知りたく
てな……裏は取っておきたい」

「いくらウチが古くからの資料があるとは言っても、流石に外国人の
出入りに関しては何週間洗い直すことになるかわからないよ。それ
でも構わない？ 当面はこの欠片を優先させてもらうけど」

駒川の言うことはもつともだ。

外国人の出入りの記録なんてはつきり言って残っちゃいないだろ
うし、下手をすれば百年以上前の資料を洗い直すことになるんだか
ら。

「構わねえよ。テメエの腕は確かだからな、時間かけてでも明確な情
報が出るってのはいいことだ」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「素直に褒めたつもりなんだがね。まあ少々危険だが……虚絶を通し
て祟りが見たものとかを洗ってみるのも手だし、詰まったら教えてく
れ」

「わかった。とりあえずリヒテナウアーで洗ってみるよ」

「任せるぜ、駒川センセ」

へへッと笑いながら要件は済んだとばかりに一歩下がる。

そこに耳打ちしてくる菜子。

「ビターな会話ですね」

「入水自殺未遂からの縁だしな」

「……本当に、あなたって人は」

呆れてくれるなよ、そういう風にしか考えられなかったんだしき。まあそんな風に俺の頼みたいことも聞きたいことも終わってしまつたし、本題も終わった。

あとは個人的に聞きたいことがある将臣が残り、俺たちは芳乃さんの希望で彼を待つことになった。

「戻ったか、我が端末よ」

「まだ待つぞ」

「御意」

出てきて早々、壁に寄りかかつて腕を組む虚絶に告げると、何故か虚絶は茉莉に近づき出した。

そのままジツと顔を見つめ――

「なるほど。やはり純情なものだな」

「はい？」

「いつの時代も、男女とは得てしてこんなものか。いやまつたく、何一つ変わってない」

「おい、静かにしてろ」

「知らぬは本人ばかりか……理解ある故苦労するな、巫女姫。いや、貴様も難儀なものだったか……さてはて、如何にして成り立つものやら」

「は、はあ……」

などと意味の分からないやり取りをした後、最大距離まで離れる虚絶。

本当に何のことやらさっぱり。今朝はこの女に引つ掻き回されて辛い。

それから戻ってきた将臣をからかいつつ、学院へと向かう。ムラサメ様と似たような状態である虚絶は最大距離を保つべく学院の敷地内に堂々というが、そう見える人間もないし問題は無いだろう。

後ろの方では廉が弁当を忘れただけの騒がしいが、さりとて気にする必要は無し。俺はとつとと食って、色々試すとしよう。

「カオル」

と、暇つぶしがてら虚絶に作らせた弁当を食べようとしていたところで後ろからレナさんに声をかけられる。

「カオルもわたしたちと一緒に食べませんか」

「君はよく俺を誘うよね」

「……ダメでありますか？」

シヨボくれたレナさんを見て良心が痛むが、しかし今日はそうはいかん。いや、今日もか。流石に虚絶との接触確認等は一人の方が都合いいというか……

ああでもダメだ。そういう子犬みたいな目をされてしまつては困る。大変良くない。しばらくのお見合いの末に折れたのは――

「……わかったよ。今日は乗るよ」

俺の方だった。

「ありがとうございます！ 大勢で食べるご飯は美味しいですからね」

「そうかな？ 色々と面倒だと思うけど」

「そういうものではないですよ。誰かと一緒にというだけで心が躍るのです」

そんなことを言われてもなと思いつながら向かってみれば、珍しい顔がいた。

「あれ、小春ちゃんいたんだ」

「いたんだって、酷いですよ馨さん」

「そうだぞー。俺の弁当を持って来てくれた可愛い妹をいたんだとは失礼な奴だな」

「ふん、ツンデレ兄妹どもめ」

「ツンデレじゃないです！」

「ツンデレじゃねえよ！」

「やれやれ、知らぬは当人ばかりか……この血筋は鈍いのが当たり前なのかね」

——貴様が言えたことか——

うるせえよ、タコ。俺は鈍くねえ。

茶々を入れる虚絶を罵倒しつつ、席を合わせる。

「あれ？ 馨くんの弁当の中身……なんか、古風ですね」

ひよいと覗き込んできた茉莉子のコメントは的確だ。何せ千年前の人間がベースとなっていて存在に飯を作らせたのだから。

極めて古風だ。ご飯に漬物に卵焼きに、あとは煮物が少しと焼き鮭。六時半から七時半までの一時間で作ってみると振ったが、さて。見てくれはいいがな。

「長年の居候してる奴を顎で使った」

「ああ……彼女ですか。これはこれで風情があっといういですね。今度やってみようかな」

「いいんじゃないか？ 好きだぜ、そういうの」

「あは、これでいい実験体が入りましたよ」

そんなやり取りをした後、飯を食べる。

……古風な味だが、懐かしい味。

千年の憎悪とは裏腹に、母親の味のような、慈しみを感じた。

しかし、飯の最中に下ネタはやめてくれないか廉。

——マナーがなってない。

休息

「ほう、ここが現代の茶屋か」

「急に出てきたと思ったら、甘いもん食いたってのは妖刀の名が泣くな」

「端末よ、我は貴様と影響し合っている。故、貴様もここに来たかったのだろう」

「否定はしねえよ」

休みだからと暇を潰していたら、急に虚絶が出現し甘味処へ案内しろとか言い出した。昨日飯を作らせ家の掃除をさせたことに対する反逆だろうか。まあ俺も食いたいと思う気持ちがあったし、否定しなかったが。

なので田心屋に連れて来たが……実体を持たせた上で、全員に見えるようにしているので迂闊な発言ができない。

「響は津京香という名を名乗れば良かったな」

「そ。手間をかけさせるなよ」

「御意」

そうして無表情と無感情のまま、虚絶は田心屋の扉を開ける。

「いらっしやいませー」

出迎えるのは小春ちゃん。

しかしこの千年前の亡霊は何を勘違いしているのか。

「頼もう」

……なんて、ぶちかましやがった。

「はい……っ？」

「頼もうと言った。貴公、頼もう」

「ええっと、何名様ですか？」

「……どうなっている……？ 馨」

「はあ……二名だけど、席空いてるかい？」

「あつ、馨さん！ はい、空いてますよ。でも相席ですけどいいですか？」

話のわかる俺がいたからか、先程までの困惑した表情からパアーツ

と明るくなる小春ちゃん。子犬みたいで可愛い。

しかし、相席……相席か。大丈夫かコレ。いや、俺が手綱を握ればいい。うん。

「ま、仕方ないことだ。こっちは構わないよ」

「じゃあ、ちよつと待っていてください。聞いてきますので」

そうしてトコトコと歩いて行って、しばらくもしないうちに小春ちゃんが戻ってきて案内される。

そうして相席となったが……なった先が、だ。

「渦中の人間と会うとは、これもまた宿痾か。実に呪わしきかな巫女姫。我らは断ち切れぬ鎖の下に集うというわけか」

「……ホント、ごめん。みんな」

「いや、いいんですけど……何故？」

「甘いもん食いたって」

将臣に芳乃さんに、レナさんに茱子の席。いやはや、なんというか困ったというか……うむ、参ったな。

「表が無いぞ」

「メニューは後から来るよ」

「随分と変わったものだ、服装や慣習が似通っていても本質が異なっている。これも時代か」

千年前の遺物に振り回されて困ってしまう。俺を含めこのバケモノ大和撫子を怪訝な視線で見つめるそんな中、はじめて虚絶の人間態を見たレナさんは興味深々といった様子で尋ねてくる。

「カオル、そちらの女性はどなたですか？」

「我は響是津京香。貴公は……れな・りひてなうあー……？ だったか」

「はい。気軽にレナと呼んでください」

「何故、名で呼ばねばらなぬ？ 我と貴公は此度、はじめて顔を合わせた。故、親しくもない。慎みを持つがいい。意中の相手に呼ばせる程度こそ、女子らしいというものよ」

「イチユウの相手とは、一体なんですか？」

「意中の相手なぞ、意中の相手だが」

「申し訳ありません。わたし、日本語はそれほど堪能ではなくて……」
「恥じることはない。貴公の努力は無価値に非ず。無意味に非ず。誇れ、りひてなうあー」

……こいつこんなキャラだったか？

「して、りひてなうあー。貴公、恋をしたことがあるか。意中とは即ち其れだ」

「おおー、なるほど……イチユーとはそういう。表現が多くて困ってしまいます」

「素直に表現できぬ人種故、面倒くさいのだ。その馨のようにな」
「なんかすごくいい話みたいなの霧囲気にまとまってるけど、こいつの本質が破壊であると思うともすごく微妙な気分。」

「そうこう待っていると、奥から小春ちゃんだけでなく芦花さんも出てきてメニューを渡してくれる。」

「あら、馨」

「や。邪魔してるよ」

「女の人まで連れてきてまあ……」

「と含みのある表情を見せてから隣の人形めいた虚絶に目を向けるが、当の虚絶はメニューを眺めている。」

「金が、違うな」

「そりやそんだけ経てばな」

「ぷりん、ぱふえ……貴様の記憶にあるものだな」

「……そりやね」

「なんか、手のかかる妹持ったみてえ。ご先祖様だけど。そうしてげんなりしていると、こっそりと耳打ちしてくる将臣。」

「……マジで虚絶？」

「マジ」

「嘘だろ」

「……信じたくねーよ」

「虚絶の生前はいいところのお嬢様だし、しかも彼女の最新の情報というのは安土桃山時代で止まっている。何せそこからずっと穂織の地にいるし、しかも中々外に出られなければ接続先もほとんどいない。」

俺のような奇跡が起きて、やっと数百年ぶりに情報更新だ。

「貴公、我はこれを」

「みたらし団子ですね。お飲み物はいかがいたしますか？」

「抹茶以外に何かあるというのか。茶屋だろう」

「……あー、なんかごめんね、芦花さん。不快ならすぐ出てくからさ」

「いえ、大丈夫ですよ。緑茶ですね」

そんなわけでみんな思い思いに注文していくが、俺は羊羹と珈琲にした。意外と合うんだなあ、これが。

「常陸の末裔よ、何故我を見る」

「いえ……別に」

「我が憎いか。それとも妬心か」

何か思うものがあるのか、視線を向けた茉莉に一瞬で反応する虚絶。いや喧嘩は勘弁してくれよ……

「違います」

「よかろう。知らぬのならば知らぬままでいろ。最果てに待ち受ける喪失と出逢うその時まで」

「……」

不穏な空気が流れる中、はたと気がついたようにレナさんが再び虚絶に声をかける。

「キョーカはわたしたちとそれほど年齢が離れていないように見えますが、カオルとはどういう関係なのですか？　もしかして……カップル？」

「馨とは単なる親族に過ぎん。あと我は既婚者だ。既に子供もいる」

「キコンシヤ、コドモ……ええ!?　けけけ、結婚されているのでありますか！　えっと、その……おいくつでありましようか？」

「齢か。三十路だ。夫と結ばれたのは十五程度だったな。過去のこと故、臃げではあるが」

「ぜ、全然そう見えませんでした……これが東洋の神秘……!　ファツキンです」

突っ込みたい。

君が話してるのはとつくの昔に死んでいる人物で、俺のご先祖様な

んだって言いたい。子供いるって言ってたけどその子供の末裔が俺だって言いたい。

でも言えない……だって言ったらややこしくなる！

「……馨さん、大丈夫ですか？」

「ありがとう。芳乃さん……気持ちだけでも嬉しいよ」

微妙な顔を察してか、芳乃さんの気遣いが身に染みる。

が、何を勘違いしたやら。

「接続に問題は無いはずだが。逆流したか」

「ちげーよ」

「ならばよい」

もうやだこいつの相手……疲れるよ。

「して馨よ。我は疑問なのだが」

「はいはいなんですか」

「近頃も未だ一夫多妻の慣習は残っているのか」

「……なんで？」

「そんな男、我が知る限りでは女ばかりにかまけているように見えるが、如何に」

と、将臣を見ながら言う虚絶氏。

言われた側は顔を面白く変化させ、見ている側はやや冷淡な視線になる。しかしそんなことは意にせず、虚絶はペラペラと口を回す。

「貴様、女子に囲まれているのは衆道を隠すためか。何、恥じることはない。よくある話だ」

「違いますからね？」

「では何の為に……そうか、それは秘匿であつたな。狭く早い土地故、駆け回っているものと考えていた。古き都でも陽が三度落ちれば噂は巡っていたものよ」

「そういうことなんで、内密にお願いします」

「だが答えてもらうぞ。貴様、女子の好みは？」

「はい!？」

「三者三様、否。四者四様。侍らせる女子は選り取り見取り。見目麗しい子ばかりだ。馨は「可愛い子ならなんでも好きだ」などとくだら

ぬ発言をしていたが、男子としてあげるのならば誰だ」

「おい俺を巻き込むな」

「答えを知っているのに黙っているからだ」

「知らねえって」

「甲斐性のない男め。送り狼になるくらいはやってみせろ。——さあ答えよ」

「え、あー……」

未だかつてないほどに困惑する将臣と、それをジツと見つめる芳乃さん。なんだかんだで惹かれあっているみたいだが、さて。

そんな風に眺めていると茉莉がチョイチョイと肩を突き、俺を呼ぶ。なによなによとちよいと寄ってみれば。

「性格、よく似てますね」

「ご先祖様だしな。似てない方が問題だ」

「……何年前なんですか?」

「千年」

「千年……?」

「千年」

千年……とぶつぶつ呟き出したのでそつとしておこう。まあ千年など途方の無い数字。遙か彼方の事柄だ。

「い、言わなきやダメ?」

「それしか娯楽もあるまい。我とて暇だ。コイバナ……? なるものなのだろう、これは。年頃の童はこのようなもので盛り上がるという」

「どこ情報ですかっ」

「違うのか」

「いや違わないけどそんな性癖暴露大会じゃなくてこう、もつとなんていうか、フワツとした感じの……」

「ふむ、やはり更新は必要だな」

すつとこどつこい虚絶ちゃんがまた何か言おうとしたとき、運ばれてくる注文の品々。

揃い切ってみれば和洋折衷、ここも様変わりしたものだとしみじ

み思う。芦花さんが経営に関わりだしてから、だいぶ方向性を変えたのは知っていたが……大抵ここに来るときは廉とあんみつを食いに行くくらいだからな。

てか、芳乃さん甘いもの好きだったんだな。あんなに嬉しそうな顔をしているのはガキの頃くらいしか見たことないぞ。

「甘いもの、好きだったんだ」

「あれ、言ってますでした？」

「俺、家に押しかけて外に連れ出すお転婆姫様しか知らねーよ」

「……それは言わないでください」

「ヨシノはお転婆だったのですか？」

「違います。これは馨さんの嘘で——」

「暇だからって人ん家押しかけて野っ原かけつこと木登り対決を挑み、へ口へ口になって追っかける俺を見て今度は茉莉の家まで競争だとか……付き合わされるこっちの身にもなってくれ」

「あー。ありましたね、そんなことも」

「茉莉!？」

「三人は昔から仲良しなんですね」

茉莉がしみじみと呟き、そんな様子からレナさんは通りでと納得している。しかし件の婚約者殿ははえーつといった様子でしか見ておらず、能天気なことだ。

「だから将臣、気を付けろよ？ この女、誕生日が俺より早いからって姉貴ぶりやがったんだ。いや本当に。お前も尻にしかれないようにな」

「前から思ってたけどお前って結構口悪いよな。今日しみじみ思ったよ」

「なんだよ、人が親切心で教えてやってるのに」

「朝武さんからの視線が怖いんですが」

「わー芳乃おねーちゃんこわーい。馨くんビビっちゃうなー」

「本当に恥ずかしいからやめてくださいっ」

「はいはい、わかりましたよ」

顔を真っ赤にしながらプンスカと怒る芳乃さんが可愛いもんだか

ら、いくらでも遊べそうだがやめておこう。

しかし予想外の面を見て将臣もご満悦らしい。だいぶ面白い顔をしている。

「でもしばらくは馨くんもねーちゃんねーちゃんって呼びながらワタシたちの後ろをトコトコ付いてきてましたよね。まるでヒヨコみたいで可愛かったですよ」

「おまつ……!? この流れでそういうこと言う?」

「ワタシだけが芳乃様をからかっていいんですよ。あは」

「面倒くさいオタクはお前は」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべて俺の黒歴史を明かす忍者と、何故か勝ち誇ったドヤ顔を見せる巫女。

焦る俺を見て何を勘違いしたやら、レナさんがまた間違った知識に振り回されていた。

「これがツンデレ……カオルはとても良質なツンデレなのでありますね!」

「待つて。どう見てもツンデレじゃないでしょ」

「カオルはツンデレだとレンタロウやコハルが言っていたのですが……?」

「純真無垢な子に何吹き込んでんだあのすつとこどっこい兄妹」

そこでふと、菜子が少女漫画を収集していることを思い出した。良質なツンデレの例を挙げるとすれば、その中にあるのではないだろうか?

「というかよく見たら……穂織でしか出回ってない奇怪な和洋折衷の服に変えてるな、レナさん。今気づいたわ、」

「ツンデレのなんたるかは多分、菜子に聞きや出てくるよ。ああ、そうだ。服を変えたんだね。気付くのが遅れてごめん」

「えへへ……どうでありますか、似合ってますか」

「ふーむ……これは……」

マジマジと微笑むレナさんを見つめる。

素材が良い。服装自体は菜子や芳乃さんと同じタイプで、そこまで新しいものではない。虚絶の古式ゆかしい着物と比べれば洋の意匠

がとにかく強いが。

……まず目に付くのがそのたわわに実った胸部装甲。芳乃さんのと同じモデルだから強調するようになってしまっている。が、こればかりは仕方ない。俺も男だ、大艦巨砲主義にはロマンを感じる。もちろんそれだけではない。いや、ここからが本題であり、真実魅力的なところだ。

「うん、すごく似合ってる。素敵だよ。ま、俺は普段着の君を見てないからあんまりどうのこうの言えないけどさ」

——首だ。

首が、いい。

普段と違った髪の毛のまとめ方から、首がすっきり見えているし、まとめた髪が頸にかかっている。黄金比とはこれこの一絵、並ぶものが無い。

こりやダメだ、扇情的過ぎる。お子様には見せられないほど美しい。目を奪われる。やばい。

「とても嬉しいのですが……その、どうしたのですか？ 首をジツと見て」

「んー、君に見惚れてた」

「わお、カオルってばストレート」

素材が良いってのは、良いことだないやホント。ニコニコと笑うレナさんを見ながら、まっさか首に劣情を感じてましたなんて言えるわけもないので噛み砕いて処理しておく。

「お前も大概だよな、女の子を口説くときは」

「はん、フットワークの軽いお前には負けるさ……何？」

何故か俺の後ろに廉がいて、会話に混ぜられていた。

「なるほどね。休日の有意義な過ごし方としてみんなでどっか行くこうって話だったのか」

支払いを終え、外に出て事情を聞いてみると、適当に知り合いを誘ってなんかしようとする将臣と廉が考え、待ち合わせに田心屋を使っていたようだ。まあ女ばつか拾ってくるのは想定外だったみたいだが。

だから小春ちゃんが廉を監視するべく早引きしようとしていたが、芦花さんに止められていた。当たり前の話なのだが、年頃の女の子は難しい。

「そうだけど、いや馨も隅に置けねえなあ？ 昼間からナンパかよ」

「廉太郎。この人、馨の親戚。あと既婚者だし子供もいるぞ」

「マジ!? ……どう見たって大学生くらいだぞ……?」

「サンキュー将臣」

将臣のフォローがなければ多分話がややこしくなっていただろう。心から感謝。

しかしそうなると困った顔をしつつ、廉は言った。

「けども、それならお前はパスか。色々借りようとか思ってたんだけど、その人の案内とかあんだろ?」

「童、馨に用があるのか」

「童ってまた古風な……いや別に用ってほどじゃ」

「我は構わん。どうせ馨も断るまい。それに、久方ぶりに童の戯れを眺めるのも悪くなかろう。近頃は穏やかなるものとは縁が無い故、心落ち着かせるのも一興だ」

「……えつと?」

「着いてくけど気にするなつてき。それに元気な子供の姿に癒されたいって」

「ほー、なるほど。まあ、最近はどこも大変だよなあ」

まあ勝手に納得してくれたので良しとしようか。それで俺への用とはなんだつたのか。それが気がかりだ。

「久しぶりに山で釣りしようかと思つてき。それでノコギリと鉋を貸してもらおうかって」

「ああ、釣りね。いいじゃないか。行くし貸すよ」

さて用意しなければと思つたが、何故か将臣に止められる。

そのまま芳乃さんと茱子を交えて小声で話しているが何を? と
思ひ耳を傾けてみれば。

「昼間って大丈夫なのかな」

「舞は奉納しましたし、経験から言っても昼は問題無いはずですが

「……どうしましょうか。鉢鈴を持っていくべきかしら」

「念には念を入れて、装備は整えておきましょう。馨くんもいいですか」

「……まあ、そこにいるし。問題無いよ」

「なんだ、昼間の祟りについてだったか。その祟り絶対殺すファントムがいるからそこまで心配はしてないし、いざとなれば俺が出れば終わりなのだから何の問題も無いや。」

「というわけで一旦家に戻り、俺はノコギリと鉋を持ち出す。虚絶の格好はそのままだが何の問題も無いとのこと。そうしてまた合流し、山道に入った。」

「竿が見当たりませんが、どうするんです?」

「ふっふっふっ、竿ならここに」

「あ、自前のボロンとかやめてくださいね。引きますから」

「ナチュラルに下ネタを想像する常陸さんに俺はドン引きだよ。流石の廉太郎でもそんなことは……」

「何故わかった」

「お前なあ!? マジでいい加減にしろよ! そういうの良くないぞ!」

「……大丈夫かコレ。」

「真面目に小春ちゃん呼ぶべきだったか。」

「我が端末よ、いつの時代もあの愚行はあるものだな」

「知りたくなかったそんな日本史」

「隣の千年前の遺物から衝撃の日本史が出てきたが、しかしそうした事柄に疎い二人は――」

「自前の……?」

「サオ……SAO?」

「当然のことながら理解できるわけもなく。」

「お二人は知らない方がいいですよ」

「仕掛けた俺が言うのもなんだが、うん。知らない方が二人のためだと思う」

「気にしない方がいいよ」

「疎外感を感じる……そっちだけわかって」

「そうですよ。教えてくれたっていいじゃないですか」

下ネタを知らない純真無垢な二人を汚さぬよう、汚れた三人はなんとかしてあれやこれやと言葉を濁すが探究心にはどうしようもない。

なので廉が手頃な竹を採取し、さつくりと針と糸を使って釣竿に変えたのだが、意外にも待ったをかけたのは虚絶だった。

「待たれよ、鞍馬の。そのようなひ弱なミミズで魚を釣る気か」

「お手軽なのはミミズだし、本格的なのになると額が大きいしで、学生は大抵こんなもんですよ。響是津さん」

「餌ならばそこらに転がってるではないか」

と、虚絶は言い放つと、そこらの木に止まっていた鳩をムンズと捕まえて掲げる。

「食いつきが良く持ちが良いものこそ狙い目。いざとなれば焼いて食べる。しかし鳥はさほど餌としては優れてはおらんが」

「おお、豪快な……」

とかなんとか言いながら鳩を放し、用は済んだとばかりに黙る。時折時代錯誤な発言が飛び出して、俺はヒヤヒヤするのだが。

そうしてたどり着いた先は――

「……………かよ」

「ほう、これまた貴様に縁深いところだな……端末よ」

よりにもよって、ガキの頃入水自殺を試みた水場の下流だった。厳密に言えば、自殺の下見に来たとき、足が着きそうだからとやめた場所だ。

「どうした譬、そんなシケたツラして」

「……………いや、少し思うものがあっただけだ。色々あってな、古い話だが」

「あれか？ 将臣みたく溺れたとか？」

「そうなのか？ 初耳だぞ」

「……………それを言うかねお前」

聞けば将臣、子供の頃に足をつったかなにかで溺れたとのこと。前歯を折ったり石を飲み込んだりで大変だったようだ。芦花さんが助

けて事なきを得たそうだが……

「大袈裟だな、将臣」

「お前に比べればな……」

「いや違う。この程度では死なない。この上流に深いところがあつてな。子供ならあそこは、確実に死ぬだろう」

「やめろよそういうの。特にお前はさ」

「悪かったよ」

冗談になつてねーよとボヤきながら事情のわからなさそうな廉が渡したイタドリを手に取る将臣に、すまんなど声をかけておく。

しかしイタドリ……イタドリか。苦い思い出があつたな。

「あは」

「……絶対忘れねえ」

騙しやがった記憶を思い出してジロリと睨みつけると、愛想笑いを向けてくる。許さねえ。

まあいいや……

「俺にもくれよ、イタドリ」

「ん？ 珍しいな。馨がスカンポ食うなんて」

「まあ色々あつてな。虚絶は？」

「——蛙だ」

食うかを聞こうとしたとき、そこにはカエルを装備なさつた虚絶が。

あ、ヤな予感。

「鞍馬の。糸と針を」

「おっと、抜け駆けはズルいですよ」

「許せ。童心に帰つた、ということだ。故に——」

全員がイタドリに気を取られていた所為で、手に持ったカエルにほとんど気付いていなかった。

スタスタと近くの岩に近づき——

右手に持ったカエルを叩きつけてこれを殺し、そのまま指を突っ込んで皮を剥いだ。

「蛙こそ餌に相応しい……現地調達に限るな」

一同絶句。俺も絶句。やるだろうとは思っていたが本当にやるなよ。しかもみんな見てるところで。そのまま肉塊をちよいちよいと針につけ、竿に糸を括り付けて釣りを始める虚絶。

「……えっと、食べる？」

興味津々にイタドリを見つめていたはずの芳乃さんとレナさんも、眼前で行われた凄惨な現地調達に思わず閉口し、そんな様子に気が付いた廉がフオローの意味も込めて尋ねるも――

「わ、わたしはちよっと、今は……遠慮します。キョーカは結構荒っぽいのですね……」

「食べますけど……いやまさかああまで豪快なんて。なんていうか、イメージと違う」

……古式の餌調達方法は、ちよっと刺激が強かったみたいだ。とりあえず。

「手洗えよー?」

「解している。流石にな」

わかっているならいいやもう。

酸味しかないイタドリの話から山菜の話に移り、どうせなら夕食に使ってしまおうと採取することになった。

と、そういうわけで釣りをする組みと山菜集め組みに別れた――が。

「またお前とかよ」

「タダ飯でやつほしいとか言ってたのはあなたでしょう? ワタシを悪く言っても困りますよ」

……また、菜子と二人きりである。

いや、実はたまには釣りに洒落込もうとしたのだが、よりにもよって虚絶から

「女子を独りにするなど男の風上にも置けんな」

などと正論を言われてしまい、悩んでいる内に将臣と芳乃さんコンビ、廉とレナさんコンビが遠回しに山菜取りに行けと伝えつつ釣りに行き、虚絶はそのまま釣りを続行。気付けば俺たちだけだったというわけだ。

なお、距離の問題は山に潜む祟りを電波塔代わりに使って解決している。こういうとき、人から離れた我が身は便利なものである。

「なんか、くつつけられたような気がしてならねー」

「あは。意識しちゃってるんですか？」

「誰がお前なんか」

「なんかとは聞き捨てならないですね。えいつ」

「どわっ!? やめろのしかかるな!」

ニコニコしながらいきなり後ろからのしかかってくる菜子に対処しながら、フリリフリリと歩いていると、妙なところに生えているヨモギを見つける。

「あんなところ生えてるんだ。昔お前にヨモギとトリカブトの件でビビらされたっけな」

「ええ、ビビらせてあげましたね。……その頃にはもう、ねーちゃん呼びじゃなくなっていましたか」

「ねーちゃん呼びはホント一月もしないうちに終わったよな。さて、山菜だったな。お前に散々仕込まれてつからわかるけど、何年ぶりかね……」

ガサゴソと山菜を探り、あーでもないこーでもない必要なものを見分けてつ、ついでに自分の分も確保しておく。

「ふふっ、こうして馨くんと山に来るのはいつ以来でしたっけ」

「さあね。少なくとも、あんまり会わなくなって以来じゃないか。具体的には……あの雨の日以来だな」

「雨の日……そうでしたね。あれは、雨の降る寒い日でした」

——芳乃さんの母、安晴さんの妻、秋穂さんの葬儀以来だ。

あれ以来、俺たちはそれほど会ってもいなければ会話もしていなかった。事務的な話だけはしたが、春祭りの前後で久しぶりに友人らしい会話をした。それ以降は無いとばかり思っていたのだが、将臣の登場で大きく変わってしまった。

「まったく、奴が現れてから何もかもが変わっちまった」

「いい変化ですよ。芳乃様にとっても、みんなにとっても。もちろん、ワタシやあなたにとっても」

早く助けて！ あばばば……」

「テンパるなテンパるな。えーつと……」

ガタガタを足を震わせている茉莉子から視線を外し、周りの様子を確認する。ちやうど近くにそれなりの太さの枝はある。俺が乗る分には問題無さげだが、しかし茉莉子を抱えて降りるとなると体重がかかりすぎて折れるような気がする。

さて、この場合は……

「俺めがけて飛び降りれるか」

「無理ですっ」

「即答か、困ったな。はあ……動くなよ」

茉莉子の隣の枝に飛びつき、そのまま鉄棒のように一回転。勢いを利用してその枝の上上がり、茉莉子の腰に手を回す。

「ひゃっ!!? いきなり何を……?」

「黙ってる。舌噛むぞ」

そうしてヒョイとお姫様抱っこの形にして……重っ!? こいつ信じらんねえくらい重てえ!?! なんだ何突っ込んでんだ一体! あつやべつ。ミシミシ言ってる。こうなりやヤケだ!

足場にした枝を踏んで跳ぶのではなく、あえてそのまま普通に落ちた。その甲斐あってか、枝が折れるわけでもなく、そして俺たちは問題無く地面に戻って来れた。

抱えた茉莉子を下ろしながら、俺は思ったことを素直に言う。

「……なあ、茉莉子。登るのは行けて降りれないのは百歩譲って理解を示そう。だけどさ、なんでお前変に重いのか?」

「女の子に体重の話題振ります? 普通」

ジト目で見られますも。

「いやお前の身長と運動量から体重逆算した上でやったけどさ、それにしたって色々変な重さがあつてな」

「そりゃ爪とか丸太とかマキビシとか色々持ってますもん。忍者ですから」

「そんな重装備は何のために——」

はあ、と呆れながらため息を吐きつつ尋ねたとき、茉莉子はおらず、代

わりに転がっているのは丸太だけ。

何してんだかと思いながら、まあどうでもいいかと戻ろうとして。

「無視は酷いですよ」

「変わり身で死角に回り込んで背後を取ってる女に言われたかねえ。なんで取った」

後ろから抱き着くように密着された上に、首に手を回された。変わり身使ってやるのがそれかよ。

「というかマジでなんで急にこんなことをしてるのか理解に苦しむ。教えて茉莉。」

「なんとなく?」

「ムードがねえ」

「なんでですか。友達と一旦別れて山の中で二人つきり、その上背中におっぱいまで押し当てられてる……これはもうムード満々じゃないですか」

えなにこの雰囲気。

「なんでこのエロ女は誘うようなこと言ってるの? ——俺は困惑するしかない。というか吐息が耳にかかってくすぐったい。」

「いくら女友達とはいえ何をしているんだらうか。しかも茉莉と。いや本当に。」

「黙り込んでじやって……結構初心なんですわねえ。ワタシで興奮しちゃったんですか? あはっ」

「はー? 誰が初心だしイ? 俺アお前よか余裕だと思っただけ?」

「お前も初心じゃないかなと思っただけですけどワレエ?」

「動揺しちゃってまあ……可愛いですよ。ええ、とつても」

「うわウツゼ! そこまで言うなら俺ぜってえお前じゃ勃たせねえからな! マジで! 茉莉に魅力なんて感じてやんねー!」

「はあっ?! ワタシだって女の子ですよ! ム力つく相手であつても男の子に眼中にないとか言われるとショックです! いいですよ、そこまで言うならワタシだって馨くんなんかで興奮しませんから!」

「ギャーギャー」と言い争っているが、吐息がくすぐったくて仕方ないのでそろそろ抜けるとしよう。

ちよちよいと身体を動かして隙間を作り、そこからクルリと回転しつつ茉莉の背後を取る。

構図的にはあすなる抱き返しに等しいが……まあいいだろう。身長差はそれほどないとはいえ、少なくとも爪先立ちしないと俺と茉莉の身長差は埋まらない。なのでいい具合にすっぽり収まってくれた。

「……なんです急に。これでご機嫌取りですか」

なんか急に不機嫌そうな顔をしながら、これまた可愛らしいジト目をこつちに向けてくる。

「なに拗ねてんのさ」

「拗ねてません」

「まあしてやられるのにも飽きたし、たまにはこつちからつてのもいいだろう?」

「ワタシはよくありません」

「いつまでも年下扱いされてたまるかってんだ」

「そういうところですよ馨くん」

「なにが?」

「わかってないなら……あれ、今パキツて音が——」

「マジ? って——」

視線の先には釣りに行っていた方々。

「あ、あれ……? 何しに来たんだお前ら」

「そ、そうですよ。釣りはどうされたんです?」

予想外の客におもつくそ固まるしかできない。体勢もそのままだ。

「ま、茉莉の助けてって声が聞こえたから来たんだけど……」

と、おずおずと言う芳乃さんだが、妙に顔が赤い。赤面する要素はどこにあるというのか。

「まさか二人がその……そういうことをしようとしてたなんて! ご

めんなさい! お邪魔よね! どうぞごゆっくり!」

「……しようとしてた?」

「そういうこと……?」

「ナニってことだろ」

呆れた廉の発言に二人してはて? と首を傾げる。別にやましい

ことなんて何一つしていかないはずだが、俺は。

……しかし芳乃さんの顔は赤いし、レナさんに至ってはあわあわ言いながらリングゴみたいに真っ赤になって俯いている。

一体何が……？

「た、たまにはこつちから……とか、ご機嫌取りとか拗ねてるとかないとか……年下扱いとか重いとか……とと、とにかくダメです！」

「待ってくれ、レナさん。俺らそんなことしてないってば」

「そうですよ。単にじゃれあつただけで何もやましいことはしてません」

「でも興奮だとか言つてたのであります！ つまりそういう……エツチなことはダメです！ しかもそそ、外でなんて！」

あ、どうしよう。

めつちやくちや心当たりがある。

あんとき割と大きな声で言い争つてたから――

「盛んよな、年頃の童は」

「お熱いことで」

「わかつてるだろお前！ ニヤつくんじやねえぞ将臣！ ああもう、違うんだって!! なんとか言つてくれよ菜子！」

助けを乞う意味も込めて菜子に声をかけるが無言。いや、なぜ俯いている？ 今更気が付いたので離れて前に回り込みつつ、顔を見る。

「……菜子？」

「……」

顔が赤い。

「なんか……人に言われると、恥ずかしくなっちゃいますね……」

「そういうとこだぞ菜子」

つまりなんだ、このエロくノ一。

――ガチで照れてやがる。

「つまり、お互いに売り言葉に買い言葉でふざけあつてたつてことでいいんだなっ」

「おっしやる通りでござります」

「そーだよ」

「ま、馨の発言はアレなことが多いし、常陸さんも思わせぶりなこと言うので、こりや予想出来たことだけど」

結局あの後、理解ある将臣と廉が解説をする側に回ってくれたことで事なきを得た。虚絶は釣った魚を満足気に眺めていて使い物にならないだったので数える必要は無い。

「やっぱり二人は付き合ってるのでありますか?」

真顔で言われて、思わず菜子と顔を見合わせて――

「こんな男なんかごめんです」

「妥協先としても選びたくねえ」

互いに罵倒した。

「仲良しですねえ」

「昔から菜子と馨さんは、ああして口では言い合ってるけど、素直になれば結構二人とも可愛い感じになったりするんですよ」

「いわゆるツンデレって奴だよ」

「やっぱりレンタロウとコハルは正しかったのですね」

「面倒くさい男女の典型か。いや、それともこれが素なのか……度し難いな」

「それで付き合っていないは無理あるよ」

―― 帰り道すら好き放題言われて、誠に遺憾であった。

「自らの行為がもたらした正当な結果であるぞ、我が端末よ」

「助けなかったお前に言われたかねー」

「してどうだ。山菜の天ぷらに魚の煮付けは」

「美味しいよなお前の飯。妖刀なのに」

「夫が味に飽きても困るのは目に見えていたのでな。使用人ではなくたまに我が作っていた」

「ご先祖様って、すげー!」



将臣から見て、虚絶の人間態は何処かで見ることがあったが、それがなんであるかはどうしても想像がつかなかった。

だが今日の帰りに、廉太郎から尋ねられた疑問が、彼の疑惑を溶かした。

——なあ、気のせいだと思っただけだ……響是津さんって、なーんか常陸さんに似てね？ いや性格も見た目も全然似てないけどさ、どうしてか似てる気がしてならないんだよなあ——

はて、言われてみれば確かにそうだ。馨や虚絶自身は、適当に作ったパーツの寄せ集めなどと言っていたが、今思い返してみれば何処となく似ている。

だからと思いついて、ムラサメに聞いてみたのだが。

「……それは吾輩の口から言っただけのことなのかな」

「なんとなく想像はついてるんだけどさ。長い間見てきた観点から何か言えない？」

「馨も茉莉も、恐ろしいほどに面倒くさい性格だから、それが答えとしか言えぬなあ。それよりもご主人！ あの虚絶が釣りをしたとは本当か！ ええいやつめ、吾輩が物に触れられぬことへの当てつけだな……！」

「今度、色々試してみるか。俺を通して食べてみることも可能かもしれないし」

「うむ、前向きに頼むぞご主人」

ニコニコと楽しげにしているムラサメの頭を撫でつつ、似たような経緯を待つムラサメも、釣りをするときにはカエルを解体するのかなどと、どうでもいい疑問を抱いた。

死闘

——夢だ。

穏やかな森の中で白い狼と金髪の女が見える。

その狼はただ、その女の側にいれるだけで幸せそうだった。

——違う夢だ。

何処か見覚えのある場所で刀を携えた二人の男が見える。

双方共に怒りを宿し、殺意を向けてあつて相対している。

——更に違う夢だ。

光の中に優しい笑顔をした子が見える。

はて、あれは……誰だったか……？

——また違う夢だ。

闇の中に困った表情の男と引き止める子供が見える。

ああ、これを忘れてはならない。忘れてなるものか。

——やつと会えたな——

深い奈落の底から声が二つ響く。

それは再会を祝した歓喜の声なんかじゃない。憎悪と殺意だけだ。

何故、何故、何故、何故、何故、何故——!!! 疑問と嚇怒、憎悪と

殺意、方向の違う二つの呪い。

俺はそれを知っている。知らない筈がない。

——アネギミノイノリヲケガスフトドキモノメガ——

——ケツゾクゴロシドモヲシユゴスルジヤシンメガ——

叫ぶ呪い、響き合う殺意。

生と死の輪廻。呪怨と福音の狭間。

——愛と憎しみの名の下に。

いざ、この崇りを、成立しせめん——

「……なんだ、あの夢は……」

普段の朝は、頭の巡りが悪い筈なのだが、今日は妙な夢を見た所為

でやたらと回っている。

——しかし、なんだ？ 何故かはわからないが胸がざわつく。頭にざらつきがある。それだけじゃない、何処かに行けば何かに会えるという確信と、何処かに行かねばならないという強迫観念がある。

——我が憑代の中に眠る崇りの中でも、特に強力な反応を示すものが二つ——

虚絶が言うには二つの反応。

二つ……つまり、崇りは一つではないということか……？

実のところ、穂織にある崇りの始まりを俺はあまり知らない。常陸の始まり……つまりは殺された方の朝武が呪詛を残したということだけだ。

……崇りを起動するには、まず聖邪どちらにせよ力ある物体が核とならねばならない。その後怨念を残せば何かしらの形となつて崇りは起動する……

何かしらの形を指定することは誰にもできない。崇りに近い虚絶ですら、この形になったのは想定外だったのだから。それが本当に呪いなのか、あるいは害なす存在を生み出すのか……

そこで、臙げな記憶から二つの事例があつたことを思い出した。

俺が殺してきた崇りの姿形はそう変わらない。泥の塊めいたものだ。しかし——崇りには二つの行動パターンがあつた。

一つ、朝武か常陸の者……あるいは、将臣のように特殊な関係者だけを狙う崇り。知らずに夜山に入ったバカ共を守るために何度か出撃したときに目撃していたし、ここ最近はこちらばかりだ。

二つ、無差別に攻撃する崇り——これはとてもレアなケースだが、こいつに限っては並みの崇りを超えるほどに強力だったことが多々ある。

大抵、バカ共の救出時に俺が重傷を負うのはこいつが出現した時だった。だがそれは奇妙なことに、芳乃さんが出てくると単調な攻撃しかしてこなくなった。

……俺は殺す者だからいいとしても、何故か茉莉にも苛烈な攻撃を仕掛けていたが。

——崇りには謎が多い。

この虚絶もそうだが、穂織の崇りに関しても。

……何故だろうか、今日はとても嫌な予感がする。

「我を呼び出してやるのが料理とはな」

「お前の飯が美味しいのが悪い」

「童のようなことを」

「童だよ俺は」

昼になつてもざらつきとざわめきは止まらない。それどころか更に酷くなった。頭の中で聞こえる言い争いは更にはつきりとして聞こえ、俺の中に俺以外の何かがいるような気がしてならない。

気持ち悪ければ、一人だと気が狂いそうなので虚絶を呼び出して会話して気を紛らわせているが、いつまで持つやら。

しかめっ面と共に、虚絶の作った昼飯を食べていると、珍しく虚絶が感情らしい感情を見せてこう言った。

「……不味かったか」

それはなんとというか、子供の嫌いなものをうっかり出してしまった母親のような、そんな感覚を覚えるもの。

子孫だからか？ あるいは、彼女とつらなる存在だからか？ いいや、俺の中に彼女の子供の残滓でもあったのか？ 理由は知らない分からない分りたたくもない。俺なのに俺じゃない奴らが騒ぎ立てていて気持ち悪い。

殺せだけじゃない。守れとか助けろとか見届けろとか呪えとか奪えとかとかとか……

「いや、美味しい」

「そうか。ならばいい」

「……けどな、悪い。今日は騒がしくて仕方ない。どうしたらいい」
「方法は二つ。元凶を排除すること——己が意志を以ってして振じ伏せることだ」

「振じ伏せる……」

「だが百の年月を背負う怨念を、たかが二十も生きていない小僧が振

じ伏せることなど到底できん。ただ一つ、それを味方にするほどの……暴走するほどの意志が無ければな」

暴走するほどの意志——不可能に近い。

「だが貴様は魔に近い存在。死を認めぬのならば潜む祟りを食い潰してまで肉体は生にしがみつくこともできる。全ては心一つなり……我が千年、”私”であれたのもそれが所以」

「つまりなんだ、祟りみたいはその場限りの燃料でも諦めなければなんとかなる……とでも？」

「極論はな。頭を悪くして言えば、気合いと根性で不可能を可能にする……と言ったところか」

「バカだな」

「だがそれがまかり通ることもある。いわば祟りとは、行き場をなくした強すぎる執念だ。貴様にもあるのではないか。深遠に沈んだ、誰にも穢されることを許さず、そのために生きて死ぬるような何か」

「……そんなもん、あるのかねえ」

考えてみれば死のう死のうとバカをしていた俺に、そんなものがあるのかなど、鼻で笑えてしまう。

まあ、その時になってみないとわからないか。そうそう死ぬつもりはないが。

「まあ良い。それでどうする、夜になればはつきりと知覚可能にはなるだろう」

「答えは決まってる——人中で騒ぎ立てやがって。殺す」

「それでこそ、我が端末だ」

はつきりとした答え。それは殺すこと。殺さねばならない。

たどえそれが嘯きに唆されて決めたことでも、人の頭の中でギャーギャー騒がれては、家主も怒るといものだろう……

虚絶を封じている部屋に行く。

呼び出すのではなく、これを直接家から持ち出すというのは何年ぶりだろうか。

いやそんなことはどうでもいい。

——殺すべし。

——現世に迷い出る悍ましきものは殺すべし。
今はそれが正解だ。

夕刻。

日も傾いて来た。

それと同時に声が響く。虚絶だけではない。

——あの忌まわしき裏切り者を殺せ——

——あんな過去の遺物なぞ殺してしまえ——

——我が敵を殺せ。無念を晴らせ。殺せ、殺せ——

虚絶を片手に携え、元凶がいるであろう場所を目指し始める。

人通りも少なくなってきたので刀を持ち歩いていても問題はあるまい。いざとなれば崇りを用いて過負荷をかけ、記憶をあやふやにしてしまえばいい。

しかし山に向かうはずの足は、街中を進み続ける。

……まさか、崇りは街に出たのか？ だとしたら、何故——？

頭が冷える。

嫌に冷静になる。

まさか、まさかと思いつながら衝動の導きに従って歩き続ける。歩いて、歩いて、歩いて——たどり着いた先は。

「駒川の、診療所……？」

どういうわけか駒川の診療所だった。

衝動が更に深まる。それと同時に嫌な予感が脳裏をよぎる。冷たい汗が頬を伝う。

戸を開けようとして、すんなり開いた戸。鍵はかけられていない。

あり得ない。この時間ならば既に——

なんだ、つまりは——

「駒川アツ！」

あの女の名前を叫んで、勢いよく診療所内に侵入する。衝動が示す場所は、駒川がよくいる部屋で。

「——」

それを見たとき、自然と頭が冴えた。

部屋はめちやくちやだ。本棚は倒れ、壁や天井は傷だらけ。ガラス窓も割れて、無残な姿を晒している。

けれどそんなことはどうでもいい。

重要なのは、部屋に当然のように佇む、獣にも見える形状にまで変化した祟りと。

そんな部屋の隅で倒れ込む駒川。

……ああ、そうか。そういうことか、

すんなりと響く声どもの雑念が消えて行く。虚絶を握る手に力が入る。

脚に力を込めて、祟りが俺に気付くと同時に――

「テメエエエエエエエ――ッ!!!」

高速を以て踏み込み、一瞬で奴の懐に飛び込む。

”何があっても、こいつはここで殺す”

そんな思いが爆発するように、俺の中から殺意が溢れ出す。

何もさせずに殺してやる――！　そうした感情が俺を突き動かし、流れるように抜刀。

神速の居合は信じられないほどに祟りの胴に刀身を食い込ませた。が。

「――ッ!？」

食い込んだまま終わった。

斬れていない……！　祟りを斬る祟りであるはずのこれが斬れないとなれば、出てくる答えはただ一つ。

この祟りは、邪なる存在であるにも関わらず神力を持っていてのだ。

その事実にも固まり、展開された触手への対応が遅れる。

「チィッ！」

舌打ちをしつつ、食い込んだ刀身を引き抜いて後退する。

飛んでくる触手を迎撃し、再び踏み込んでもう一撃と睨んだ瞬間。

「ガッ……!？」

代償で膝が、破損した。

それだけではない。左腕の肩関節に裂傷が入ったらしい。ダラリと垂れ下がる。

それを逃すほど崇りは優しくない。

続けて放たれた第二射は、あっさり俺の心臓と右腕を貫き、そのまま壁に叩きつけた……

■
崩れ落ちる響。

どしやりという音を立てて、自らが生み出した血溜まりに沈み込む。

崇りはそれを無感情で眺めながらも、反射的に殺してしまった存在に対して少し、罪悪感めいた視線を向けた。

——いやまさか、殺せてしまうとは。

崇りの素体となったものに引き摺られたのか、崇りは動きを完全に止めて——

「いや、まさか……心臓ヲ潰されるトはハナ——」

その死体が起き上がったことに驚愕した。先程貫いたはずの穴は完全に塞がり、傷があったという証拠は服に空いた穴と着いた血だけが物語る。

男女の声が混ざりながら、それは崇りに対して容赦無く告げる。

「——ダガ、我ト俺ノ意志ガ合一シタ今……ソノ程度デハ死ニハシナイ」

そう。

心臓を貫かれる直前、響は願った。

——こんなところで死ぬるものか。奴を亡ぼすまでは死ぬるはずなど無い。生きると約束し、彼女に生きてと願われたのだから——

それが彼と接続する崇りたちの共通の祈りである、まだ終われないというものに呼応し、突き立てられた触手を分解し再構成。更に魔に近い肉体と崇りを燃料として、死ぬ前に心臓を再生させるという荒業を以ってして死を回避した。

たとえどれだけの再生能力を持っていたとしても不可能な話だが、

馨の肉体とは——魔とはそういうものだ。不条理を不条理のまま成し遂げる。

人間寄り過ぎる馨であっても、数多の怨念を束ねてしまえばそれすらも可能とする。

要は、気合いと根性で不可能を可能にしたのだ。

虚絶との合一が深まり、今の馨にはその崇りがどういうものなのかをよく理解できる。

「ヤハリ”マトモ”カ。理性モ有レバ思考モ動イテイル。ダガ同時ニ——才前ヘノ尽キ又憎悪ガ俺ニ燻ツテイル。我ラニ由来セヌ、俺タチ以外ノ憎悪ト嚇怒ガニツ……憑代ナル剣ヨリナ」

その崇りは何らかの物によって呼び出されたのか、粗雑なものではない。混ざりつ気のない、純粋な崇りだ。

更に個我のようなものがあり、こちらを明確に観察している。つまり人間と同じようにまともに頭を動かしている。

崇りに近付いた馨にとって、その程度は手に取るようにわかる上、刀の中にいる崇りの中でも、特にこの崇りに対して凄まじい憎悪と殺意を束ねる存在が、これを今すぐに殺せと叫んでいる。

しかし神力を宿している以上、この獣めいた崇りの正体はもしか、哀れにも呪詛の憑代にされてしまったものかもしれない。

「言葉ヲ使エヌ獣……ソノ神力ガ泣イテイルナ。サゾヤ名ノアル者ノ成レノ果テガソレトハ、アマリニモ無残。デ、アルノナラバ——」

しかし、馨はそんなことはどうでもいいとばかりに刀を拾い上げる。

虚を絶つ刀を抜刀し、逆手に持ち変える。

——数年ぶりに。

自罰意識の塊と、他罰意識の塊が、その意志を束ね極大の殺意を持って神力を宿す獣の崇りと向き合う。

「我が、俺ガ。ソノ宿痾ヲ一時ノ眠リヘト誘オウ。ソレニ——」

虚絶に食われていた崇りが燃料として消費され、刀身はまるで創作物の光剣のように黒い光刃を纏う。更に赤黒い稲妻を迸らせる刀が、その素晴らしき本性を剥き出しにする。

「——ナンダ、案外俺モ情ニ流サレル人間ラシイ。ソコデ寝テル女ヲ傷ツケタ以上、才前ニドンナ事情ガアロウトモ……ソノ首、一度落トサナキヤ氣ガ濟マナイ——!!!」

だが素晴らしき本性を剥き出しにしているのは、間違いない。

——馨なのだろう。

夜の診療所にて、人知れず闇の戦いが幕を開けた。

——荒れ狂う触手。

——それらを全て迎撃する刀。

触手が千切れて溶け消える度に、馨の肉体を虚絶の代償が蝕み、流血が弾ける。しかしそれが発生した瞬間から崇りと意志力によって高められた修復力が瞬く間に再生させ、その代償を踏み倒す。

触手より早く動き、崇りを断ち切りきらんと刀を振るう。しかし神力という相反する性質を有する崇りには通らず、あくまでも食い込むに留まる。知ったことかそのまま切り裂くが、浅い。

崇りはたまらず大きく後退し、束ねた触手を刀のような形状に変化させて無数に展開。斬撃の暴風となって襲いかかる。

黒い刀はそれらを全て見切り、効率的に破壊していく。更に切った触手を喰らい、その場で燃料を調達する。それどころか馨の中で暴れている二つの殺意がまだだと言わんばかりに暴走し、神力すら押し切らんと出力を増大させる。

奇妙な話だが、崇りの方がこの戦いにおいて理性的に対応していた。一方の馨は、みづはに被害が及ばぬようと場所を選ぶだけで、あとは何も考えずにひたすらに死ねと言わんばかりに斬り込むのみ。

防御を捨てた、完全なる捨て身の剣は荒れ狂う崇りを真っ向から圧倒するほどの暴虐を示すものの、いかんせん相性の差だけは覆せず、防御の上から叩きつけることで無理矢理にダメージを通しているに等しい。

だが。

「——マダダ」

自らを蝕む代償を踏み倒しながら、馨はもつと寄越せとばかりに自

らの内に接続されている祟りどもを燃やし尽くす。

千年の蓄えを贅沢に飲み干しながら、自らの怒りすらも薪をくべるが如く燃やし、更に目の前の怨敵から食った部品すら使い潰す。

これほどまでの大盤振る舞いであっても、この祟りに対して意志を滾らせる二つが全てを賄い切ってしまっている。千年の呪いに匹敵するどころか超えるほどの極大の出力を生み出す二つの意志が、馨と虚絶を通してその殺意と憎悪を存分に見せつける。

しかし祟りも押されるだけではない。近くにあつた棚を拾い上げ、投げつける。無論それを両断し、突撃する馨。

だがそこに投げつけられる薬品瓶。回避は出来ない。かといって受ければ祟りに一撃を許す。

で、あれば――

大きく頭を振りかぶり、薬品瓶に叩きつける。頭突きによって破壊されると同時に傷が修復。更にその勢いを利用して空中で一回転。順手に持ち替えた刀を大きく振りかぶり、叩き斬るように振り下ろす。

ゾブリと食い込む刀身。しかしどれだけ出力を上げても食い込むだけに終わる。

生じた隙を逃さぬとばかりに迫る凶手――引き抜きが間に合わず、全弾が直撃する。人間が立ててはならない音を立てながら吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

バキリと、嫌な音が左腕の肩関節から鳴る。関節が外れた上に、どうやら左腕の骨が折れたらしい。妙に痛む。だがしかし、放つておいてもすぐ治るもの。どうやら神力が通ってしまい、やや速度が低下しているが、これならば裂傷が治るのと同じ程度で済む。

ならばと彼は器用に立ち上がり、食い込んだ虚絶を右手に呼び出す。

「否、マダ足りナイ。カラ、モットカラ――」

呼応する祟りたち。

今や爆発的に増大した出力は可視化されるほどに膨れ上がり、黒い靄が身体から立ち上るほど。

——人が見れば正しく魔人だと言わんばかりの外見。

再び壮絶な激闘の開始点と化す両者。黒と黒がぶつかり合い、鮮血が舞って傷は塞がる。辺り一面には鮮血の溜まり場と斬撃痕、あるいは破壊痕しか残らず、そこが先程までは静かな診療所だったなどとは想像もつかないほど荒れ果てていた。

無尽蔵に回復し暴虐の限りを振るう馨と、理性ある故に押されてしまい、崇りを流し込まれ、食い千切られる度に獣の姿から通常の黒の塊に弱体化を始めてしまう崇り。

正しく消耗戦。だがそれでもなお、三十分以上も戦況が拮抗しているのはひとえに神力を宿すが故に。

永遠に続くかと思われた膠着は、崇りの一手で大きく変わる。

「——!!」

崇りが咆哮し、打撃と斬撃の結界を生み出す。死を回避するなど不可能。対処はできても確実に致命打が通る——事実、一本の刀では対処しきれない。特に神力を通して幾分か能力が低下しつつあるこの状況では。

しかし、それを覆してこそその千年の復讐。

刀を横に一閃——それと同時に空間に斬撃が生まれる。無論、漫画のように一閃で無数の斬撃を発生させたわけではない。単に崇りが触手を生み出すのと同じこと。

斬撃の属性を帯びた崇りを空間に出現させて全てをぶった切った。

だが、流星に無理が祟ったのか。

肉体の至る所に裂傷が生まれ流血する。特に内蔵の類もやられたのか、吐血し、反応が先程までに比べてコンマ数秒単位で遅い。

——その遅さが命取りになった。

崇りは素早く接近し体当たりを食らわせる。ゴツ、と鈍い音がして馨の肉体はまるでボールのように飛び、部屋から玄関の方まで叩き出された。

大きな物音を立てて、戸に激突する。当たりどころが悪く、肋骨が一や二は逝ったらしい。が、問題無い。

治って当然という思い込みと意志力が驚異的な速度で傷と肋骨を

修復する。痛みが走るものの、ただ痛むだけ。呻き一つも上げる価値は無い。

ギリ貧とはいえこちらが有利。更に出力を引き上げれば相性ごと粉碎できる。こちらの肉体が過負荷で停止する前に仕留めればいい。殺られる前に殺る、なんと単純なことか。

決断的に出力を更に引き上げ、損壊を再生で踏み倒し——見知った気配を察知して、困惑からか出力が低下していく。

バカなと思いが告げて、その一瞬だけは、魔人は人間に戻った。が、それも刹那のこと。

魔人に再び回帰し、彼は泥仕合に身を投じる。

自身でも止め難い殺戮の意に従って。

……それとほぼ同時。

先日、単独行動をしていたムラサメが発見したもう一つの欠片を回収した将臣たちは、それをみづはに届けるべく彼女の時間が空いている夜中に診療所へと向かっていた。

しかしその途中、霊的存在に関わりがある……それこそムラサメが見える者にしか見えないはずの、崇りに反応して現れる芳乃の獣耳を見えている上にムラサメまで見えているレナを、あれこれ言われても困るからと連れてきて。

「有地さん、先程から何か……」

「……扉が開いている」

辿り着いた彼らを迎えたのは、開きっぱなしになった扉。

そして——

「これって……血、ですよね」

「だの。しかも何かが叩きつけられたのか、異常な形に凹んでいる」

「——まさか!」

「おい待てご主人!」

血と凹んだ扉。

いても立つてもらえられず、土足のまま診療所内へと踏み込む将臣。開けようと、扉に近づいた瞬間——

「——え」

扉を内側からぶち破って何かが通路の壁に激突した。埃が舞ってそれが何なのかはわからない。

だが、聞き覚えのある声が届いた。

「——シブトイ」

その聞き覚えのある声は間違いない。それを確かめる前に影は部屋の中に突入し、床や壁を削るような音が聞こえる。

「ご主人！ 急に走るでない！ 何があるか、わぶっ!?」

立ち尽くす将臣に追いついたムラサメが衝突し、妙な声を出す。

それとほぼ同時に、黒い塊が壁を破壊して別室へと吹き飛ばされる。それを追撃する人影。

——間違いなく、馨だ。

「かお……っ!?」

その名を呼ぼうとしたとき、黒い塊——崇りから刀のような触手が将臣めがけて飛来する。

(しまった……!)

化け物みたいな速度で動く馨に意識を取られたからか、触手に反応できなかった。その全てが心臓、肺、頭部、腿を狙った射線。受ければ即死する——!

だがそれら全てを弾き返す一陣の風。

——茉莉だ。

「早く下がって！ 祓えるものが無い以上、ここはワタシが……!」

「邪魔だ、茉莉!」

時間稼ぎの殿を担当しようとした声が上がったが、代わりに飛んできたのは邪魔だという声。殺意のままに出力を引き上げて動く馨が尋常ならざる速度で崇りへと接敵。再び最大接近距離での、一撃絶命の威力を秘めた暴虐同士の応酬が始まる。

黒が飛べば赤が舞う。赤が飛べば黒が舞う。共に爆ぜながら一刻も早く相手を滅ぼすために力を振るう。

関節が外れ折れっぱなしの左腕を揺らしながら、己の身を赤く染め、燃え尽きる崇りを迸らせた魔人が黒の獣と身を削り合う。

「才前ハ、俺ガ——!!」

憎悪を纏った声と、声なき咆哮が響き渡る。

「なんなのですか、あれは……!?!」

怯えを纏ったレナの言葉。

闇と闇の潰し合いは、何も知らぬ者に恐怖すら抱かせる。こと憎悪や殺意と言った黒い感情を糧として破壊的な戦闘行動をするそれに怯えることを、誰が責められようか。

「今の馨とあの崇りに近づくな！　もはや崇り同士の戦いにすら等しい……!」

「いいですかレナさん。私から離れないように」

「は、はい……」

一方前線にいる将臣と茉莉は、損傷と再生を繰り返して崇りと激突する馨の状態が目に入る。

「常陸さん、あれ……」

「左腕の関節が外れて、骨が折れてるみたいですね……普通なら痛みで動けないはず。膝が壊れていたようにも見えますし……本当に、何が……」

崇りを祓う武器を持っていようとも、常人では入れぬその死の舞踏に竦んで立ち尽くすしかない。

彼らは故を知らぬから、何故か虚絶に耐性のある崇りとししか映らない。しかしその膠着状態に変化が生まれる。

逆手と順手を駆使した猛攻によって徐々に追い詰めていく馨——虚絶が食い込む頻度は下がり、往來の斬れ味を取り戻していく。

退がる両者。

跳ぶ馨と迎え撃つ崇り。

刀を杭の如く突き立てんとするが、落下より僅かに早く迎撃が命中する。それすら無視して、突き立てて——

しかし、馨はここに来て失敗を一つ犯した。

再生による代償の踏み倒しは、損傷が生まれた瞬間に再生させることで行われる。

つまり、生まれた後に広がってしまった損傷は、踏み倒しが間に合

われない。なので何処が壊れてもいいように、自身に集中する必要がある。が――

相打ち狙いのカウンターであっても、先に攻撃されたからと言って、なによりも優先すべきは己の代償――だがここで彼は、受けた攻撃からの復帰を優先した。

故に。

「――、あ」

爆発的出力を引き出し運用していた代償がここに来て現れる。

――右腕がひしゃげた。血飛沫が弾け、神経と肉が壊れ、皮膚は裂傷によってズタズタになる。骨も砕け、常人ならば腕を捨てるしかない状況であっても、高まった再生が後出しの形で強引に元通りに修復していく。

しかし早かったのは、痛み。代償を修復するため痛覚抑制に回していた出力が離れ、脳に損傷を伝える。

出力が基準値まで低下し、先程までの爆発的出力は影も形もない。それどころか再生に回ってしまった全出力による強制修復に由来する痛みが、破壊の痛みと共に馨の内で暴れまわる。

「――ツツツ?!?!」

声にならない雑音が如き絶叫。

無理な体勢で対応し、踏み倒すべきものを間違えたことから彼は空中で制御を失って床に墜落する。

「馨くんー!」

「ク、るナ……アツ!!」

割って入ろうとする茱子を言葉と視線で止めた瞬間、祟りが倒れ伏した馨めがけて無数の触手を飛ばす。

だがこれに対して身体を無理矢理起こしながら、なんと同じく黒の触手を影から展開することで完璧に防御――できていない。

続けざまに繰り出された本体の突進を受け、無様に吹き飛ぶ。ゴロゴロと転がりながら、倒れた家具にぶち当たり、山積みになっていたそれらがガラガラと落ちてしまう。

当たりどころが悪かったか、頭を切って流血しながらもなんとか意

識を保った馨は、自身が挟まってしまったのを悟る。同時にジェネレーターである虚絶から離れて、コンデンサである肉体に残留していただけの祟りを、強制的な出力上昇による無茶苦茶な運用した所為か、完全に平時の状態に戻り切ってしまった。

今頃になつて外れた関節の痛みと折れた腕の痛みが襲うが、今なお破壊的な激痛を生む右腕に比べればなんのその。

しかし動けぬ、何もできぬ。無力を噛み締めて見ることしかできないのか――

「――いいや、まだだ……！」

否、断じて否。

腕が折れた？ 使えぬほど傷んでいる？ ジェネレーターが無い？ コンデンサに燃料が残ってない？ 出力不足？ そんなものはやる気の無い奴の戯言だ。本気を出せるだろう。まだ頭が回って身体が動くならやれることはまだまだある。

――無いのならば、作ればいい。

幸い燃料の原材料はここにある。それを使えば肉体再生分は賄える。限界まで、いや限界以上に引き出せば戦闘も可能だろう。

だからと心の奥底に潜む、馨自身が持つ激情を燃料に――

――ヤメロ、カエツテコレナクナルゾ。ヤミニミヲヤツスツモリカ。アネギミヲマモルノダ――

その時、昼間まで頭の中で騒ぎ立てていた声の一つが、やけに落ち着きを払った声で彼を諫めた。

いや、諫めるどころではない。気付けば接続されていたものの大半が切断され、残っているのは虚絶とのラインのみ。

……本人は認めたくないだろうが。

今、稲上馨はこの場にいる誰よりも無力となった。

「――虚絶！ レナ姉さん君を守れ！」

「ギョイ――」

だがただでは終わらない。終わるはずもない。内なる声が示す、レナを守れという言葉に従う為に千年前の亡霊を呼び覚ます。

床に刺さった刀より黒い泥が現れ、人型を形作り、それは響是津京

香を名乗ったヒトガタとなる。

「……使えぬか」

端末の損傷具合から刀を使える状況でないと判断し、祟りからの猛攻に対し防戦で応じる茉莉の援護へと向かう。

「常陸の末裔、この場は我と貴様で耐えるぞ」

荒れ狂う触手を素手で叩きのめし、本体を殴りつけ、鉄山靠めいたタツクルからの勢いをつけた回し蹴りによって吹き飛ばし、距離を無理矢理に会得しつつ、虚絶はそう言った。

「構いませんが、どれほど」

「管理者が神力を担い手に流し込むまでだ」

「ふざけるな！ 人の身に神力を流せるものか！ 吾輩が何故こうなっているのかはお主もよく知るところであろう！」

「ふざけているのはそちらだ。足手纏いが二つ、死に体が一つ、半端者が一つ、戦力が一つの現状で取りに戻れなど無茶を言う」

ムラサメの言うことはもつともである。人の身に余る力を流せないと宣う虚絶の言を採用できるはずがない。

だがこの場において虚絶の提案は合理そのものであった。

「貴様として選択肢が無いことはわかっておろう。それにりひてなうあーの存在は未知数だ。そんなものを抱えて皆死ぬなど認められない。二つに一つだ」

「ふえ？ ……わたしです、か？」

「りひてなうあー、我が端末……馨の近くにいろ。あの状態ではほとんど役に立つまいが、盾にはなる。行け」

「で、でもキョーカ……」

「行け！」

声を貼る虚絶に押され、オズオズと家具に動きを封じられた馨の近くに向かうレナ。

それを見て虚絶は更に言葉を続ける。

「担い手。貴様はここで終わりたくあるまい」

「当然だろ……！ それしかないならやるしかない」

「彼に戦う力を与える管理者。ごく僅かな時間であれば問題あるま

い。それに通せるものなど他にはないだろう。あれは神力を宿しているが故、我らでは通りが悪い。あそこまで追い込んだが……」

「――来ますっ!」

茉莉子の警告。

殺意の軌跡を描いて向かう触手。それらを素早く二人は迎撃――したが故に暴れ回る触手が室内を破壊し、埃を撒き散らす。

「……視界が!」

視界を奪われた茉莉子は、次いで放たれた触手の一撃に対応できずに吹き飛ばされ、壁に激突した後、床に倒れ伏した。

「茉莉子!? しっかりして、茉莉子!」

倒れ伏した茉莉子に駆け寄る芳乃。それを逃さず触手はまとめて始末せしめんと飛来する。

「戦場で情を先走らせるな!」

それに対して同じように触手を伸ばした虚絶が防ぎ、最悪の事態は免れる。だが致命的な隙を晒した虚絶に対して、増やした触手で襲いかかる。それを庇って吹き飛ばされる将臣。

「ご主人!」

「大丈夫、まだ――!」

そうそう何度も受けられないとは分かっているが、あと二発程度ならなんとか……攻撃を分析しながら、同時に不利であるこの状態を開するにはと考える。やはり虚絶の言う通りに……

「担い手、今すぐに神力を宿せ。時間が無い」

「何があつたんだよお前」

「我はあくまで”私”を中核とした憎悪の結晶……端末に燻る憎悪も、食らった憎悪も高まりつつある。そこまで我が我を保っていららん」

「――ムラサメちゃん!」

「だがご主人の身が……」

「やるんだ!」

もはや一刻の猶予も無い。

将臣の決意を組んで、だが洩々といった様子でムラサメは提案を飲

み込んだ。

「少し時間を稼げ、虚絶。レナ、芳乃！ なんでもいいから物を投げて牽制しろ！」

「わ、わかりました！」

「ええつと……ええ〜いつ！」

その辺にあつたものを掴んで投げつける二人。それは攻撃ではなく牽制。崇りは馨との戦いで理性がほとんど失われたのか、反射的にそれを迎撃し続ける。その隙間を縫うように虚絶が攻撃を仕掛け、崇りを釘付けにする。

「覚悟しろよ、ご主人——！」

その間にムラサメは将臣の頭をひつ掴み、突然唇を重ねた。

「——？」

「ん……っ」

いきなり何をしているやらと、意識を保ちながら事態を見ていた馨は思うが、すぐにそれが間違いであつたと気付く。

神力の譲渡なのだ、これは。

……にしては、少し美味しすぎると場違いな感想が出てくるが。

しかし流された本人にしてみれば、体内に炎を宿されたようなもの。絶対的な力が体内で荒れ狂い、解放を求めて絶叫している。なるほどこれはそう長くない——だからどうした。

将臣は崇りへと踏み込む。

虚絶と目が合う。

”あとは貴様が仕留めろ”

雄弁に語っているその目に応え、大きく右腕を振りかぶる。が、ここに来て崇りは狙いをレナに変えた。

「——ひっ」

芳乃が気づくより、ムラサメが反応するよりも早く、触手がレナの喉めがけて突き進む。

それを防ぐのは——

「させるか……っ!!」

動けないはずの馨が、レナの盾となるように前に立った。

自らの内に語りかける声が、守れと強く念じたが故に、彼はその一時のみ出力を増大させ、挟まった状態からその脚力のみで脱出。咄嗟にレナの元へと向かったのだ。

しかし、馨の右腕は使用不能。左腕は折れっぱなしで役に立たない。まともに使えないのは脚だけだ。

であればどうするか——必然である。

「ごめんよー」

「へ？——ひゃあっ!?!」

レナに足払いを仕掛け、コケさせる。

すると彼女目掛けて飛んでいた触手は空を切り——

「くたばれエ——ッ!!」

将臣は叫びと共に、その右腕を祟りにぶち込んだ。ズブズブと入り込み、祟りは苦しみのたうち回りながら、その黒を霧散させていく。

「……祓え、た……う？」

「本当に、祓えたんですね……」

「ご主人、すぐに抜き取る！」

ムラサメによる再びの接吻。

炎が引いて、唇が離れたときに残るのは激痛。だがそれよりも先に右腕に見えた黒が、将臣の意識を塗り潰していく。

崩れ落ちる将臣に駆け寄る三人。

一方、馨は尻餅をつくように崩れ落ちると、虚絶に声をかける。

「……腕」

「痛むぞ」

「両方ダメなのは癪だ」

「わかった」

虚絶は折れた左腕を掴み、それを容赦無く力づくで曲げた。変な方向に曲がついていた腕は元の形に戻るが——

「——ッ、オア……ッ!!」

如何に痛みに慣れたとはいっても、ズタズタの肉体では負荷が大きすぎる。そのまま肩関節もはめ直され、激痛によって辛うじて保たれていた意識は途切れはじめて——

「後は、頼む」

「御意」

意識が切れる直前。

茉莉を助けている虚絶の姿が、彼の目に妙に残った……

温度

……痛む身体によって意識が浮上する。

不自然な右腕の痛み、反応の鈍い左腕、なんとも言えない息苦しきめいた感覚。

見覚えのある筈なのに見覚えが無い天井。少なくとも自宅ではない。

「……何処だ……？」

弱った身体を布団から起こし、まずは自分の肉体を確認。目立った傷は特に無い。——右腕を除けば。

巻かれた包帯をめくり、様子を見る。裂傷の痕に新しく出た皮膚によつてやや変色している。まるで火傷の痕のようだ。これまた放っておけばどうとでもなる類だが、しかし右腕を動かそうにもあまり言うことを聞かない。

いや、動くと言えば動くのだが……動かす度に痛みを伴う。しばらくは使い物にならないだろう。

辺りを見回す。その景色を見て完全に思い出した。朝武家の空き部屋だ。

なんで俺の家じゃない？ 虚絶がいるんだから送ったって……しかも服も変えられてるし。血塗れだとまずいのはわかるが、誰がやったやら。

……どうせ虚絶あたりだろうが。

騒ぎ立てていた声は静まり返っている。少なくとも平時と同じだ。虚絶は眠っているのか、うんともすんとも言わない。

頭に違和感を覚えたので左腕の確認がてら触って確かめる。折れた骨も元通り、関節も問題無し。普段なら二日三日跨がないと完治しないが、どうやら寝ている間に燃料でも使つて治したのか、すこぶる好調で健康体の腕そのもの。完治している。

ただギヤップがあるので、反応がやや鈍いが。

「……頭に包帯？」

痛みも何もないので引っぺがし、近くの窓に映る自分を見て確かめ

る。結果は当然何もない。勝手に治る程度の浅い傷だったのだろう。一つため息を吐き、どうしたものかと頭を悩ませようとしたとき、何かを忘れていることに気が付いた。

「……シャワー、浴びよ」

頭が重い。

シャワーでも浴びよう。右腕の傷はほぼ塞がっている。染みることはないだろう。

よっこらせと立ち上がり、バランスが取れずフラフラと歩きながら風呂を目指す。何度か世話になっているので場所自体は覚えているのだ。

しかし、誰もいない。将臣の奴はこっちに担ぎ込まれているだろうから、そっちの対応に——
いや待て。

あいつ、神力を流し込まれてなかったか？ 虚絶という制御装置無しで祟りを扱うようなものだぞ？ 無事なのか？ 死んでないよな？ それに茉莉は大丈夫だったのか？

……急に怖くなった。

俺が無力だったから、こうなった。誰の所為だと言われたら誰の所為でもないのだろうが、俺は俺を責めなきゃ気が済まない。

兎にも角にも頭の眠気を取り払うのが先決だ。

だから意を決して、脱衣所の扉を開けて——

「あっ」

「えっ」

……全裸の茉莉と、目が合った。

「……ごめん」

「……油断し切ってたワタシの落ち度ですから、お気になさらず」
その後。

着替えた茉莉に、居間で正座しながら謝罪した。

そんな謝罪はあっさりと流され、茉莉はクシャツとその顔を嬉しさと悲しみの混じった表情に変えた。

「でも、本当によかった……心配したんですからね」

「ホント、ごめんね。無茶苦茶やって。けどお前たちが無事でよかったです……それで、将臣は？」

「ここで尋ねておかないと、間違いなく俺は逃げるだろう。自ら逃げ道を断つべく、死刑を待つ人間のような心情で聞いた。

「……怪我自体はそう重くないですが、まだ目が醒めてないんです。まる一日寝ていて……」

「……そう、か……」

俺の失態だ。

俺がもつと手段を選ばず迅速に片付けていたら——こんなことにはならなかった。

「けれど、虚絶の言葉を信用するなら、そこまで時間はかからず目が醒めるだろうって」

「奴の言うことを信用するなら、か……起きたら無茶させたことを謝らないとな」

胡座に戻しつつ、虚絶に起きろと声をかけてみるが反応はやはり無いまま。よつぽど出られない理由でもあるのか、ここまで沈黙しているのは珍しい。いや、反応している最近が異常だったな。

「一先ず、芳乃様とムラサメ様を呼んできます」

「ああ、頼んだ」

「……それと。馨くん、もうあんな無茶しないでください」

「……善処するよ」

釘を刺されちった。

まあ實際死にかけたのだ。これからは気をつけるとしよう。

……我ながら、食らった一撃を分解してそれを含めた燃料で死ぬ前に再生させるなんて意味不明な方法だと思っただが。

待つというほど待たずに、二人はやってきた。安堵の表情を浮かべる芳乃様に対して、複雑そうな表情を浮かべるムラサメ様。やはり虚絶が神力の流し込みを強要したからだろうか。

「目が醒めたなら、呼んでくれたらよかったのに……」

「ごめんね、基本的に傷は翌朝には治ってたものだから、つい」

「つい、で腕の傷もそのままに湯浴みをしようとするものがおるか。バカ者」

「返す言葉もございません……」

愛想笑いで誤魔化すと、三人揃ってため息を吐く。それほどまでに俺がアレなのだろうか。アレだわ。

さて、本題に入ろう。

「それで、ムラサメ様。あんたのその険しい表情は不甲斐ない俺への怒りかな」

「そうではない。あの状況ではあれが最善だったとわかっておる。だがな馨。吾輩の表情は心配事に由来するのだ」

「将臣のことだろう?」

「それもそうだが……お主のことだ」

「俺?」

なんとも言えない表情のまま、ムラサメ様は心配事の 하나가俺にあると言った。また小言かなと思うが、しかし違う。芳乃さんも茉莉も、真剣な表情に変わっている。

それほどまでに重要な何かがあるとでもいうのか。

「馨、お主は今——人よりも崇りに近づいておる。虚絶曰く、少しばかり出力を上げ過ぎたのが原因とのことだが……」

出てきたのは予想していたことであり、だがとても重要なことだった。

「あー、駒川が倒れてるの見たのが切っ掛けだったかな。あの時確か、心臓潰されたけど死ぬより早く治したからそれが原因かも」

「心臓……!?! 馨さんまさか、死んで——!」

「修復自体はものの数秒で終わったから別状は無いよ? でなきやもう死んでる。まあそういうところから崇りに近づいているってことなんだろうさ。で? それからなんだって?」

「そういう訳で奴はお主を人に戻すべく、しばらくは刀に籠って中にある崇りの接続を解除する……と言って消えていった」

「なるほど。さつきから声かけても起きないわけだ。崇りを喰らう崇りであるアレでどうにかなるなら安い話だな」

「だが今のお主が力を振るえば更に崇りに近づいてしまい、やがては帰ってこれなくなる。よつて馨、これからしばらく戦闘行動は厳禁だ」

「へいへい。大人しく人間生活を楽しんでますよ」

あの声と言っていた、戻って来れなくなるってのはそういうことかと一人納得する。道理で接続が強制解除されたわけだ。それでも、言った張本人がレナ^姉さん^君を守れと接続してきたのは笑え……ないな。「ま、本気で大人しくしてるから安心してくれ。よつぽどのことでもない限り何もしない」

「なーんか、怪しいですねえ」

「正直、馨さんってわりと嘘つくからあんまり信用できないのよね」

ジト目で好き勝手言ってくれる主従二人。が、反論できないレベルで騙したり嘘ついたりしたから何も言えない。言えるとしたら文句だけだ。

「ひでえなお前ら。まあいいや、それで、駒川は無事か？ 大した傷は無かったように見えたけど」

「みづはさんなら、もう回復して診療所を開いてますよ。とはいえ、まだ診療所の修理は先で、部屋が少ないと言っていました」

「なるほどね……ま、あの女が生きててよかったよ。で、なんであの時レナ^姉さん^君がいたの？ 確かに怪しいとは睨んでたけど」

「……姉君？ 一体誰を言ってるの？」

不思議そうに呟く芳乃さんを見て、思った以上に流されていることに気がつく。これはマズい。大真面目に大人しくしているとしよう。崇りに近くなるとこうまで影響が出るものか。虚絶の存在の大きさを改めて実感する。

「レナさんのことだよ。どうも、同居人の一人が彼女を姉と勘違いしてるらしくて。俺もその影響を受けて、妙な発言をしちまうのさ」
「本当に大丈夫？」

「うお、あんまり近づかないでくれ。いい臭いがしてどうにかなりそうだ」

「からかわないで。こっちは真面目なの」

「あれ、芳乃さん昔みたいな口調だね。どしたの」
「……」

ズイと迫る芳乃さんの口調が柔らかかったもんだから尋ねてみたが、彼女はピタリと固まってしまった。よく見ればやや顔が赤い。

「い、意識したら恥ずかしくなつてきちゃった……」

「あ、わかる。俺も芳乃ちゃんつて言うとなんか気恥ずかしい」

「と、とにかく大丈夫なんですか。そっちです」

「多分ね。人と話して自分を見失わなけりや、そうそう墮ちることもない筈だよ」

対処法は頭に入っている。

なので問題はない。それよりもレナさんのことの方が気になる。

「それで、レナさんのことでしたよね」

「うん。何があつた？」

「どういうわけか、私の耳とムラサメ様が見えたんです。それであれこれ言われても困るからと、連れてきたら巻き込んでしまいました」
「見える、ね。ますます怪しい。何がどうなってるやら。将臣と同じパターンだと何かしらの関係者という線が濃厚だけど……ま、その辺は本人にも聞いてみるしかないか」

とにかく、レナさんは黒だったようだ。それから話を色々聞こうとしたが、怪我人は寝てろということなので渋々部屋に戻り布団でぐったりすることにした。

「馨くん？ 入りますよー」

しばらくすると、何故か菜子が入ってきた。

「もうお昼が近いですから、軽めの食事です。お昼ご飯は少し遅めに なりますけど」

「昼が近いのになんで風呂入ってたのさ」

「あのですね。ワタシと芳乃様は、昨日から付きっ切りで有地さんとあなたの看病したんですよ」

「お前だって怪我してたじゃん」

「あの程度怪我にはなりません」

おにぎりが乗った皿を畳に起き、えっへんと胸を張る菜子に、ふー

んと返事をしながら腹に手を当てる。

された側はピシツと固まってしまっているし、なんか顔も赤い。既視感がすごいぞ。

「……一体何を」

「硬いな。サポーター入ってんだろ。無理するなよ」

「無理をする馨くんには言われたくないです」

「じゃあ反面教師にしろ。というわけでお前も休んでおけ」

雑に言い放ち、気にしても仕方ないと左手に持って食べる。前に右腕をやられた後、気になって調べたのだが要はいつもの宗教的屁理屈だったらしい。仕方ない理由がある俺には関係無い。

しかし、俺が気にせず食っていると、茉莉はどうにも浮かない様子だった。

「どしたよ」

「休むって、どうしたらいいんでしようかね」

「布団でぬくぬく、せんべいもしゃもしゃしながらゴロゴロするとか。お前だったら何も気にせず少女漫画読むとかになるんじゃないか」

「何も気にせずとか無理ですよ……だって芳乃様が家事やって怪我しないかとか気になっちゃって」

「過保護な親かお前は。昔っからの付き合いだし、結構前から世話してるから気になるのはわかるさ。俺だって急に芳乃さ……芳乃ちゃんが自分で家事やり始めたとか言ったら驚くし心配だよ。器用なのは知ってるけど」

まあこいつにとつてみれば、一から五まで世話してた大切な人が急にその一から五をやるわけだ。そりゃ気になるってもよな。

というか、まだ俺がこいつらを年上だと思ってた頃から茉莉の過保護は割とあれだった気がする。イタドリ of 酸味は毒性に由来するとかトリカブトとヨモギはよく似ているとか……思い出したらなんか母親みたいだなあとか色々感じる。

残ってた分を食べ、ありがとうと言う。

「でも、ワタシは平気ですから。心配しないでください」

「その言葉が現在進行形で説得力を失ってるの自覚してないのか茉莉

子」

そんな屈託の無い笑顔で言われても、こちらとしては非常に疑ってしまう。

いや疑わしい俺が何を言っているやらだが、しかしそれにしたって割と菜子は無茶を是とするから疑わないという選択肢が無い。

「あは〜」

「可愛く首かしげても騙されんぞ」

「だけど無茶が必要になることがあるじゃないですか」

「そういう言い方は嫌いだよ、大人っぽくて」

「同じこと言ってたの忘れたんですか馨くん。しかもその返しワタシ言いましたよ」

「うぐっ……」

確かにそんなことを言っただし、言われた記憶がある。無茶だなんたの話は俺に対するブーメランになるから嫌いだ。

だがとにかくこいつを休ませなければ。俺より治りが遅いんだ。無茶をするからこそさせないようにしなければならぬ。

しかし……どうやったらこのワーカーホリックを止められるのだろうか。従者面を引っぺがして、ただの常陸菜子にして休ませるには何が――

そこまで考えて。

いつそ困らせてみてはどうかと、閃いた。

菜子をこの部屋に引き止め、何かするのを諦めさせる方法は……あるな。

だったらそれを、最適なタイミングで行うだけだ。

「まあなんでもいいんだ。とにかくお前も休め。胴への一撃は内臓や骨に影響が出ていてもおかしくはない。駒川の目を疑うわけじゃないが、念には念というだろ」

「ワタシにとって芳乃様のお世話は日常なんです。それを休めと言われても……」

「わかったわかった。もう言わない。好きにしろ」

とはいえ初期段階の説得は失敗。

何処かの誰かに似て、だいぶ頑固になっちまった。

「さて、ワタシそろそろお昼の準備をしますね」

「あ、待ってくれ」

と、去ろうとする菜子呼び止める。

不思議そうに立ち止まる菜子を見て、この作戦に対する恥ずかしさが出てくるが仕方ない。

やらねばこいつは止まらない。

「……えっとさ、少しの間でいいんだ。手を——握ってこないか」

「なんですか急に。あは、もしかして甘えたいんですか？ 可愛い
ですねえ」

「まあそうとも言おう」

「……え？」

意地の悪いにやけた表情から一転、本気で困惑している菜子を見て、作戦の成功を確信する。

どうだ、割と重傷だった俺に手を握ってこないかと言われるのは
思いの外、困惑するだろう。

するにしろしないにしろ、少しくらいはこの部屋に留まらせること
はできるだろう。世話をさせてやるものか。

「だからその……いや、やっぱ、なんでもない。気が向いたらでいい
よ、うん……」

だがしかし。やはり年頃の女の子に対して手を握ってくれなんて
頼むのは恥ずかしくて、どっち付かずの妙ちくりんな態度になってし
まった。

なんだか顔を合わせられなくなって、布団に潜り込んでしまう。な
んと情けないことか。

……いや、正直本気で恥ずかしい。

幼馴染の女の子に、一般に青年と呼ばれてもおかしくない年頃にな
って、手を握ってくれとかさ。どういうプレイなんだか思われか
ねない。

悶々とした羞恥心に苛まれ、どうしたものかと顔を埋めて困り果て
る。

「……もう、しょうがないなあ」

何処か呆れたような、けれども優しい声が聞こえたと思ったら、被ってた布団に隙間が生まれるのを感じる。

「よいしょっと……これでいい？」

そのままモゾモゾと布と布が擦れる音がしたと思ったら、背中からダイレクトに人の温もりが伝わる。

まるで子供を宥める大人のような優しい声色と、茉莉に包まれているという状況から余計に羞恥心が生まれて、もつと顔を埋める俺は、なんか色々違う状況になってしまったことに対して――

「お前……何してんの？」

本気で困惑する以外の方法はなかった。というか、今気付いたが茉莉の敬語が外れてる。本当に素の茉莉だ。

「後ろから抱き締めてあげてるだけだけど」

「手を握ってって言っただけじゃん……」

「嬉しくないの？」

「いや、嬉しいけど……なんか、恥ずい」

「この前したし、それにもつと前には、馨くんは抱き締めてくれたじゃん。それと同じことだよ」

「……耳元でそういうの言うのやめてくれない？ 卑怯だぞ」

「あはっ、照れちゃって……そういうところは昔から変わってないんだね」

「頭、撫でるなよ……」

「ふふふつ。ワガママなんだから」

ああ言えばこう言うとは正にこれか。暖簾に腕押し感が凄まじい。あと胸が当たってもつと恥ずかしい。

てか、他人の家で何してんだろ俺たち……

「ねえ、いつまでこうしてて欲しい？」

「それは……少し昼飯が遅くなるくらいでいいよ」

「――ああ、そういうことだったんだ。素直じゃないし、卑怯だよ」

「卑怯なのは茉莉だ、こんなの……」

「わかっててやった馨くんの方が卑怯じゃん……」

——近い。

こんなに茉莉が近くに感じるのは初めてだ。

茉莉の温もりが、茉莉の柔らかさが、茉莉の吐息が、茉莉の臭いが、茉莉という存在が、今抗えぬ魔性めいてそこにある。

全然思考がまとまらないし、ずっとこのままがいいと考える自分もいる。まるで母と手を繋ぐ幼子のような安心感さえ覚える。

だけどこれ以上は男として、理性的なブレーキがマズいという確信もある。一体どうすればいいのか。希望と絶望の狭間、あるいは天国と地獄の狭間か。

好きでもない女に、半ば欲情しつつ姉性めいたものを感じるなど——ああ、まったく……俺はとんだインモラルらしい。人のことを笑えないレベルでアレだ。我ながら度し難い男だこと……

更に茉莉と俺の距離が縮まり、心臓の鼓動すら聞こえてきそうな程に密着する。大真面目にどうにかかなりそうだ。

「……馨くんの臭いがする」

「そういうの、やめない？」

「やめちゃって、いいの？」

「……………いや、その、他人の家で何やってんだろな——俺たちって思っただけで…………」

「——あ」

そう言った途端、茉莉はマヌケな声を出して——

「あ、あはは……………あ、あは——……………なんちやって……………？」

「疑問形にしたところで遅いってば」

「あわわわっ……………!! いい、今すぐ離れます！ 今すぐうどん用意してきます！ というわけでワタシはこれにてドロンです!! はいっ！ ま、また来るね！」

「あのさ……………ありや、行っちゃったよ」

電光石火の如く茉莉は布団から脱出し、顔を真っ赤にしながら敬語と素が混じっている中、何をトチ狂ったかまた来るなどと言って去ってしまった。ちゃんと皿も回収している辺り、らしいと言えばらしいのだが。

「これ、寝れるかな」

芳乃さんの家で、菓子に抱き締められて、彼女の香りに包まれた布団——絶対に寝付くなんて無理だ。

「……女の子って、すごいや」

ボヤキながら、布団を直して横になろうかとした時。

部屋の隅から頭だけ出していたムラサメ様を発見した。ちょうど俺の頭の向きとは真反対で、ああ、つまり、なんだ。死角にいた彼女からしてみればさつきまでの醜態を見せられていたわけで。

それを如実に語る小悪魔的微笑を見てしまえば、諦観と悟りが飛来するのも致し方あるまいというもの。ため息を吐きながら、俺はこの幼刀に一言。

「スケベ女」

「表出ろお主」

——喧嘩を売ることにした。

「うるせえこの覗き魔め。あの醜態をずっと見てやがって」

「見てるこつちが背徳感に満ち溢れるほどお主らのやり取りはイケナイ香りがしていたぞ。単なる添い寝が、どうしてあそこまで淫らな雰囲気になるのか。吾輩にはわからんなア？」

「お子ちゃまにはわかりませんよーだ」

「はっ、甘え上手でまるで童のような響に言われたくないわ。なんなら、吾輩が甘やかしてやろうか？ 幼い肉体に対して見合わぬ精神、これをギャップもえ……？ というのだろう」

「まーた将臣から変なこと学んだな……」

ムラサメ様のポンコツ化が深刻すぎて俺には何も言えない。しかしニヤニヤしながらその幼い姿のまま、まるで意地悪な姉のように振る舞われるのは……うん、大変そそってよろしい。

姉貴みを感じる。

——じゃなくて！

ええい、クソ！ 色で頭がバカになったか!? 何をトチ狂ってるんだ俺はっ。

姉性フェチとか業が深すぎるだろう……!! そんなんだから菓子

に弟気質とか言われるんだ!! 愚か者め!

「クククツ、面白い顔をしておるぞく? それほどまでに嬉しいか」
挑発するようにニヤニヤと近付いてくるムラサメ様。

ちくしょう、この……ロリババア! ——なーんて思うわけでもなし。この幼刀にどうやって一泡吹かせるかは単純だ。

からかうのが好きなら、素直になればいい。茉莉がよく使うテクニツクだ。

「じゃあ、膝枕してよムラサメ姉さん」

「のじゃっ!? 急にムラサメ姉さんとか言い出してどうしたのだ」

そら、面白いように動揺した。

へへへっ、甘いんだよムラサメ様。からかいにおいて俺に勝てるのは茉莉くらいだ。

「んー? いやロリオカんに甘えてみるのも一興かと。する側でいると楽しいけど、される側になるとダメなんて、まだまだ鍛錬が足りないなア?」

「ロリオカ……っ!? わ、吾輩は叢雨丸の管理者だぞ! もう少し威厳のある言い方をせんか!」

「はっ、悔しかったら物理干渉を可能にして膝枕の一つや二つでもできるようにしてみろっつての。この出歯亀幼女が」

「ぐぬぬぬ……っ、覚えておれく!」

悔しさのあまり捨て台詞を言っつて何処かへと向かっていくムラサメ様。

ふっ……勝った。完全勝利だ。

「そういえば、馨君は今日どうするんだい? 流石にその腕じゃ一人で身の回りをやるには不便だろう」

「あー、考えてみりやそうですな」

昼飯のうどんに悪戦苦闘し、持ってきた茉莉に食べさせてもらった後、仕事が一息ついた安晴さんがやってきて、そんなことを言った。

「まあでもそこまで世話になるわけにはいかないし、晩飯だけいただいて帰宅しようかなと思います。風呂は……どうしましょうかね」

「傷があるし、一応入っていったらどうか。傷口自体は塞がってるわけだし、お湯であっても問題は無いと思うけど」

「じゃお言葉に甘えて」

「けれど、血塗れでウチに来た時は驚いたよ」とボヤク安晴さんに「すみません」と返しつつ、確かに血塗れだったなあと回想する。

話を聞くに、あの後目覚めた駒川によって怪我人三人の処置を迅速に開始。

将臣が意識が落ちていたので最優先、茉子は意識がまだあったので手当てをした後安静に、そして俺はしばらく虚絶が肉体を動かさず、朝武家についたら身を清潔にしたり服を借りたりなんだからしようだ。

「しかし、これは人の手には余る代物だ。昔、僕も虚絶を担いで挑んだことがあったけど、あの時は確か内臓——心臓と肺がボロボロにされた拳句、腕や膝も代償で破壊されてね。でも目が覚めたときにはほとんど治ってた。あの時は秋穂に泣きつかれちゃったし、千景や遙香さんにも殴られたなあ……」

「親父やお袋に殴られるって何してんですか。あの人たち手を出すことは滅多に無いのに。ってあれ、安晴さん……虚絶を使ったってどうやって?」

「いやあ……秋穂にばかり任せてられないって、千景からぶんどって無理矢理使ったんだ。その時に中に何かいるってのは知ったんだけど、まさか君のご先祖様だったとは。彼女から見て、僕はだいぶ印象に残ってたみたいだね。会ったときには妙な反応をされたよ」

「妙な反応? と首を傾げる。」

あの殲滅にしか興味無さげな奴が何故安晴さんに反応したのだろうか。

「確か「無念を抱える者よ、我はそのような悲劇を二度と無いようにせねばならない。望むのならば再び求めよ。さすれば、我は貴様を塵殺の刃とせしめよう」——だったかな」

「俺だけ使ってりやいいものを……! あの子、コナかけやがってっ!」

「まあまあ。彼女、求めるものには与える性格みたいだし、いざとなっ

たら求めろよくらいだと思っよう？ そんなに気にしないでほしいな」「ですがあいつは貴方を使い潰す気で——！」

「使い潰すなら、僕はとつくにあの時死んでるよ。あの時に代償を治癒したのは間違いないく彼女だ。その意志は殺戮に塗れていても、何処かに人の心がある。間違いなくね」

心当たりはあるが、信用ができない。きつとこの人もそうだ。奴を信用するなんてリスクが大きすぎる。

「まあ、君もあれだ。少し芳乃たちと触れ合って、昔みたいなのんびりしなさい。最近は色々あつて疲れただらう？」

「まー、そうですね……何も考えずにのんびりしますよ」

そう結論を出すと、仕事に戻る安晴さんを見送った。

もうやることもないので、布団で横になる。

「……菜子の臭いだ」

是が非でも想起させる、昼前の何とも言えないあのやり取り。

あの時は、本当にどうかしていたのだろう。お互いに……

結局、陽が落ちるまで悶々として過ごした俺は晩御飯にやはり苦戦した。何せ右利きである。掴めはしても細かい作業は無理だ。刀を振るだけなら例外だが。

また菜子に助けてもらいながら、晩飯も終えて風呂に入る。その程度であれば片手でも十二分だ。

……湯に浸かると、まず痛みが先に来た。どうやら崇りに近づいた影響とでも考えればいいのか。それとも単に傷口が痛むのか。

存外、定義とは往々にして曖昧である。

「……ふいー」

痛みとは言っても、熱いお湯に浸かったみたいなのヒリつく痛みだ。それほど気にするものでもない。

鳥の行水と親に言われるほど、そこまで長くは入らない。とつとと上がって着替えてしまう。

右腕を動かしたくない為、左腕しか袖が通っていないが問題あるまい。

「お世話になりました。おやすみ」

貸してもらった服は洗って返すと伝え、心配そうにする芳乃さんと安晴さんに別れを告げて帰路に着く。

「今日はえらく着いてくるな」

「片手しか使わないんでしょう？　ワタシが一応いないと、いざつてときに不便ですよ」

「ごもつともで」

家まで菜子に送られたが、それは些細な問題。

帰宅した後、服は畳んでおき、転がった寝間着の単衣に着替えて布団に入る。

慣れ親しんだ布団だが、しかし……人肌に触れすぎたからか、やけに冷たく感じた。

解明

目が覚めてまず確認したのは、右腕の具合だ。動かしても痛みは無い。相当早く治った。更に言えば傷痕も何もかもが元通り。数日前の腕になっている。が、しかし。

崇りに近づいた状態で破邪の効能を持つ湯に触れた所為か、またなんととも言えない違和感が残っている。

諸々を考えれば学院に行ったところで、どのみち早退させられるふだけだろう。間違いなく駒川ならそうさせる。今の俺は重傷から急激に回復したが、未だその後遺症は未知数。あとで奴にも顔を出さねば……

やむなし、今日は休むかと決める。

ご近所さんな比奈ねーちゃんに会いに行こう。

朝食もまだだった比奈ねーちゃんに誘われて、彼女の家でご飯を食べながら、事情を説明した。

「……なるほど、わかったわ。病み上がりだから無理しない方がいいもの」

「毎回ごめんね、比奈ねーちゃん」

「いいのよ。休んでいる程度で済んでるんだから。でもびっくりしたのよ？ 急に馨が怪我をしたって駒川先生から聞いて。山で落石を避けたら落ちちゃったんだってね」

「死んでないから安いもの、違うかな」

「違わないわ。生命は重いもの」

久しぶりに比奈ねーちゃんに頭を撫でられ、くすぐったい思いをしながら甘んじて受け入れる。

「ねーちゃんには、頭上がないや」

「いつまでもねーちゃん呼びは恥ずかしいから、何か別のとか無いの？」

「俺にとつて、ねーちゃんはねーちゃんだよ」

「ホント、口は達者なんだから……」

呆れるように、でも少し嬉しそうにそんな反応をする比奈ねーちゃんを見て、俺はこんな人を守りたいのだと、強く思った。

「……さて」

それから比奈ねーちゃんの出勤に合わせて帰宅し、俺は着替えることにした。腕は動くが、さて問題も多い。洋服はお気に入り以外の奴以外はほとんど全滅だ。出血で。

たまには和物で行こう。とはいえ、穂織らしく何とも言えない和洋折衷な服なのだが。

「……似合わねえ」

まあ、いつも洋服か和服かのどちらかを選んでいた身としては、いかんともし難い違和感を多分に含む。

だが四の五の言ってられんのも事実。考えるのも面倒くさい。

それに、気合いを入れるのは死装束かアレだけでいい。

虚絶に触れることはしないでおく。どれほど動くかの確認をしたので、家の倉庫に転がっていた竹箒の柄を、庭で振り回してみる。

理想像を描きつつ、現実との擦り合わせを始めて、一瞬で悟った。

……なるほど、治ったのは表面上だけらしい。反射神経に対して腕の実動が遅すぎる。コンマ単位の遅れではない、秒単位の遅れだ。遅く、鈍く、そして粗雑な太刀筋——これでは役に立たない。

左腕と比較しても差が大きい。自在に動く左に対して、右はワガママな子供だ。

大人しくしているのは一日程度と考えていたが……そうも言ってもらえんな、これは。一度破壊され、新たに再生された神経が馴染むまでは、戦闘に参加できない。ただ秒単位……あと二日もすれば今までと変わらないほどに戻るだろう。これが十秒単位で鈍かったら一週間は無言だ。

しかし肝心なのは、祟り寄りから人間寄りに戻るまでどれだけ時間がかかることか、だが。

「して……どうしたものか」

安静にしているというのは、確かに重要だ。

だが安静にできるかと言われれば、きっとできない。何せ物が無い。買い物をしなくてはいかんし、診療所にも行かなければ。

事態が事態だ、奴に報告しておく必要がある。

今日はやることが多い……

そう思いながら風呂掃除なり皿洗いなりを済ませる。放つたらかしではいかんせんマズい。

雑事をこなし、先日の茉莉の言葉が脳裏をよぎる。なるほど、確かに休めと言われて休もうとして、何をして休みというのか、これがわからない。

先日、茉莉——そこまで考えて、あの温もりと柔らかさと香りと、したごとと言ったことと言われたことが鮮明に蘇る。

顔が熱くなる。ブンブンと頭を振って要らぬ煩惱を払う。

何を考えているんだ俺は……盛った中学生でもあるまいし、元より恋も愛も知らぬ静かな男。性にもそこまで興味は無い……あつ、ごめん嘘。人並みにはある。

ああもう、ダメだちくしょう……調子狂いっばなしだよ。

大の字に寝転がり、もうやってられんと諦める。

朝っぱらから、なんか疲れた。

比奈ねーちゃんに癒されたい……

そうこうしながら昼飯も終えて、ぐったりしていると、携帯が鳴り響く。果たして誰だと思いつながら手に持ち……それが駒川からのものだと知って急いで出た。

「俺だ。どうした」

『馨、調子は？』

「生命活動に支障は無い。が、右腕の反応が鈍い。そもそも崇りに寄ったこともあって、元に戻るまでは役に立たん」

『まあ大人しくしていることだ。それで、有地君が目覚めたらしい。それで今から芳乃様のところへ向かうんだけど、君も来てくれないか』

「治りかけの怪我人に出て来いとはお前らしくもないな。何かあったか」

『例の欠片の事で、少しね』

「わかった。俺も向かおう」

別に武装する必要も無い。

気楽に行こう、気楽に。——ただし、土産は持ってな……！

「ちやろー、元気してる？」

「開口一番それとか、君は相変わらず妙な性格だね」

朝武家に着いたときには全員揃っていた。まあ俺の家は茉莉の家と並んで遠いところにあるので仕方ない。診療所の方が近いくらいだ。

将臣への土産を片手にフラリと現れてみれば、全員が将臣の部屋にいるという状況。なので割と狭い。

「よお、お互い大変だったな」

「お前こそ、腕ひしやげてたぞ」

「もう治った。反応は鈍いがな」

「無茶苦茶だろ」

「そりや人間とは言い難いモン」

いや元気そうよかった。

ただ奴の右腕に何か違和感を感じるが、それは一体……？

まあいい。

「で、医者のお前が怪我人呼び出すくらいだ。少しどころの騒ぎじゃねーんだろ？　あるいは、俺に聞きたいことでもあったか」

「その両方だ。あの場でいの一番に駆けつけてくれたのは君だからね」

「そういえば、触りは聞いたけど詳しい話はまだだったね。順を追って説明してくれないかい？　整理の意味も込めてね」

安晴さんの提案に頷いた駒川は、まずは崇りについて話そうと決めた。

「まずあの祟りは、山から下りてきたんじゃない。私の診療所で発生したんだ」

「バカな……!?　あり得なかったぞ、そんなことは！」

「何か理由があるはずだ。突然現れるのは、理屈に合わないよ」

「……なるほどな。道理で——混ぜてなかった上に神力まで宿してたわけだ」

「馨、詳しく頼めない？ 君の意見が聞きたい。私の話はその後の方がいいだろう」

駒川に言われて、記憶を手繰り寄せる。色々と抜けがあるが、あの祟りに関してはかなり印象に残っている。混乱しないように、説明順を選びつつ俺は自分の見解を語った。

「あの祟りは、何らかの理由によつて診療所内に呼び出された……無差別攻撃型の祟りだった」

「無差別攻撃型つて、祟りは恨みある存在にしか襲いかからないんじゃないですか。馨さん、何を知ってるんです？」

「過去、俺が殺してきた祟りは大まかに分けて二種類いた。人が侵入したから発生した祟りと、初めからそこにいた祟り……前者は朝武だけ、後者は誰であっても襲った」

ここで一区切りをつけ、周りを見渡す。ものすごく噛み砕いて言ったので話が通ってる。

あとは感覚的な話だ。理解させるのが難しいし、説明も難しい。が……やるしかない。虚絶のフォローもない以上、頑張らないと。

「そもそもこの話、祟りは強力な憑代があれば、誰であつても起動できるほど簡易的な術式だ。中核となる怨みを骨格に、吸い上げた有象無象の暗い感情を肉や皮として現れる。つまり、基本的に雑食なんだ。

だが純粹な、混ぜりつきの無い祟りが生まれることもある。それは生まれた直後か、あるいは——有象無象を振じ伏せるほどの力や性質を持つ例外か。

あの祟りがどちらにせよ、原型が神聖なモノだったのか、微妙かといえ神力を宿していたという事実の方がルーツ探しには重要だろう」と、ここまで話終えて、俺は最大の懸念を伝えた。

「あと、あくまでこれは憶測でしかないんだが……祟りは二つある可能性がある。差別する祟りと無差別な祟り——同じ憑代を中核に、同じ姿と異なる性質で現れても不思議じゃない。

それに虚絶の中にいる祟りでも、診療所に出現した個体に対して極めて強い殺害衝動を送り付けてくるのが二つ……自滅衝動なのか、あるいは他殺衝動なのか。奴らが俺に対して殺せ殺せと言っていたのは覚えてるんだが、もうちよつと具体的に言つてた気がする。

それにその中の片割れが、どうにもレナ^姉さんを姉^君と勘違いしているみたいで……おつと、これはレナ^姉さんの話するべきだな。

とにかく、これくらいか……長話になっちまったな」

とにかくわかるものを片っ端から説明するような形になってしまったが、仕方あるまい。専門家は起きられないし、俺は人間だ。祟りの術式構成は知っているが他は微妙。

しかし確信と憶測が何かしらの形で答えに繋がったのか、駒川は欠片を見せつつ言葉を続けた。

「譬の話を聞いて理論的にも確信できた。この欠片が、祟りの発生源だ。この目で黒く染まり、泥が氾濫して祟りになるのは見たけど、そういう仕組みだったとは」

「それは祓った祟りから回収したものだよね。となると、祓うだけじゃ終わらないということかな」

「間違いなく。推測するに、穢れを祓うことではなく、この欠片——今後は憑代と呼称しましょうか。これに宿る怨みをどうにかすること、で根本的解決になるかもしれません」

そんな話をしていると、将臣が何やら不思議な顔をしていた。

どうしたものかと尋ねると、奴は祟りと身近に接してきたお前だからこそ聞きたいことがあると告げてきた。

「なあ、祟りや憑代が宿している怨みつてのは、夢とかで見るものなのか」

「ああ、見るぞ。厳密には夢ではなくその対象の主観の追体験か、あるいは意識や記憶の混入が近いか……どれだけ通しやすいかでも変わる。——おい待て将臣、お前まさか……!?!」

「ああ、そうさ。俺は……」

「俺だけじゃない。駒川にも……いや全員に言っておけ。知っている奴が多い方が都合が良い」

そうして将臣は改めて語る。

殺される夢、下衆な笑顔を浮かべた鎧武者、返せという声——どれも意味深な要素だった。

「……推測が真実かもしれないな。でもこれで確定したのが、間違いなく憑代は一つになりたがっているということだ」

そうやって駒川は将臣が所持していた欠片の所在を聞き、リビングにあるのでそちらに移動する。

そして憑代と憑代を近づけると——それらが光り輝き、勝手に動き出して合体する。

なるほど、確かに一つになったとなれば、これが光明となるかもしれない。

「私はこれを削ってみたんだ。調査のために……あの祟りは、それが切っ掛けとなって現れたのかもしれない。欠片を傷つけられた怒り……砕かれた怒りなどが原因で、馨の言うところの無差別攻撃型は現れたとも仮定できる」

「そうになると、ワタシたちに対する怒りが、祟りとなっていたってことですよね？　そこから考えてみれば、朝武への呪いというのは長男のものではなくて、利用された犬神のものだったのでは……？」

と、菜子が言ったときに皆はそれは盲点だったみたいな反応をしていたが、俺にはさっぱりわからなかった。

……長男に利用された犬神？　一体何を言っているやら……

「どうしたのかな馨君。腑に落ちない顔をして」

「犬神……って、なんですかね」

「……へ？」

安晴さんに聞かれたので聞き返してみたら、予想外の反応が返ってきた。訳を聞いてみれば知ってるものかと思っていたらしい。いや知らんがな。

というわけで詳しく聞くと、朝武の呪いの始まりは、犬神を利用して生まれたという。

——もう読めてしまった。が、解せないところはまだある。

「……神が根底にあるなら無差別だろうな。人じゃねえんだし……で

もおかしいんだよ。祟りは原則として、その始まりを変えることはできない。千年過ぎても魔性殺すべしを貫く虚絶のように。だってのに、憑代は一つに戻りたがっている上に攻撃されたら影を出す……？どっちだよ、お前……」

正直、材料が足りない。

叫ぶ二つはなんとなくわかった。長男と犬神に由来するものであるのには違いない。

……が、長男の呪いは朝武だけを呪ったもの。犬神の怒りは人全てを対象にしたものと仮定して考えると、憑代が二つなければならぬ。

一つの憑代で二つの祟りを生み出し、かつ混ざらないほどに個我を保てるなど……無茶苦茶だ。

「……お前らは何を知って、何をしたいんだ。血族殺しの朝武殺すべしか？ それとも人類殺すべしか？ 一つの憑代で二つの祟り———どれだけ強力なものを使ったんだ。この憑代の正体ってなんだよ……人間には不可能だぞ……人殺しを続けて血を啜る妖刀になつた虚絶を用いても十年と保たない……お前は誰だ、何なんだ……？」

わからない、わからない、わからない。

致命的にまでわからない。何が最初にあつたのかが。

「警、落ち着け。わからぬものはわからぬ。今、吾輩たちに必要なのはこれからどうするか、だ。お主の困惑は最もだが、それは後で考えればよい」

ムラサメ様に咎められ、俺は思考の牢獄から抜け出す。

そうだ、今大切なのはこれからのこと。祟りがどうのこうのは終わってから考えればいい。

「こんな風に憑代を完全な形に戻した上で、丁寧に祀り上げれば、もしかしたら……」

「呪いが……解ける……？」

「断言はできませんが、きっと現状打破には繋がるでしょうね」

朝武親子の希望的観測に対して、あくまでも現実を突きつける駒川

の態度は、どこまでも医者らしい。命を預かる者として、気休めは言わないということか。

「とにかく必要なのは、欠片集め……そうだムラサメちゃん。もしかしてレナさんは、何か欠片に関係してるんじゃないかな」

「そうだな。それに馨の中にいる崇りが反応したということは、大なり小なり関係があるはずだ。吾輩が見えることも気がかりだしな」

将臣の発言にムラサメ様は同意。

学院が終わり次第、見舞いに来るそうなので、そこが狙い目ということだろう。

欠片集めか、崇りの謎か。

天秤が傾くのは当然、問題解決だろう。

そうして駒川は帰ろうとしたのだが……

「ああ、そうだ。常陸さん。寝てろとは言わないけど、あんまり動かない方がいいよ」

「みづはさんは大袈裟なんですよ」

「馨じゃあるまいし、そういうこと言わないの」

「大丈夫ですって」

呆れた表情の駒川に、今回ばかりは同情する。大袈裟だなんだは俺の発言ならいいのだが、茉莉だとあまり洒落になってない。やせ我慢なのかどうかはわからないからな。

「本当に平気なの？」

「はい、何でもお任せください」

と、将臣の疑問に対してドヤ顔で宣言し胸をトンと叩くが……

「——ッ!？」

「……茉莉、お前な」

「お、おまかせくらはい……っ」

「言わんごつつちやない。痛みが引くまで動かないこと。それから衝撃を加えるようなことは厳禁。いいね？」

「……はい……」

涙目で駒川に返事をする茉莉を見て、ああこりやあダメだと痛感する。駒川は帰ったが、将臣以上に心配だろう。

というわけで昨日散々世話になった礼も兼ねて、俺が一肌脱ぐとしよう。

「大人しくしてるんだな。家事は俺がやってやるよ、昨日世話になったし」

「すみません馨くん……あ、でも家事できますよ。昨日は全部ワタシが——」

「知ってる。だからこそだ」

「そーですか」

「そーだよ」

プイとそっぽを向く菜子はまるで拗ねた子供だ。

……やれやれ、こんな意固地な奴だったっけか？ 右腕の慣らし運転にはちようどいい機会だ。たまには本気で家事をしよう。

「そーいや馨。お前が持ってきた見舞い品ってなんだ？」

「あー、アレ？ ——官能小説」

「バカじゃねえの」

「エロ本じゃなくて芸術だからノーカンだろ」

……チヨイスとしては巫女ものだが、当てつけとしてはちようどいいだろう。

友情

それから三十分とかからない内に、レナさんは見舞いにやってきた。

ついでに、あのすつとこどつこいツンデレ兄妹も来たので、何もすることのない将臣にはちようどいい刺激だろう。

……廉が持ってきた紙袋の中が気になるが、いやまさか……いつぞや、エロ本を貸してやるとか言ってたが。

「最近、ここも賑やかになってるよな」

「いい傾向ですよ。色々な意味でも」

「だな」

隣に座っている茉莉とそんな感想を呟きながら、さあて家事をするかと意気込んで、いざ動こうとしたのだが。

「あ、私がやりますからいいですよ」

「いやね、芳乃ちゃん。俺ア君に世話になったんだし、その礼も兼ねてだね」

「あなたの世話はワタシですよ」

「じゃかしいつ。とにかく、何か手伝わせてくれ。じゃないと気が済まないんだ」

「でも怪我は治ったばかりだし、それに今はお客様です」

「俺と君は友達だろ。たまには頼ってくれ」

「普段頼ってばかりですから、そこまで迷惑はかけられません」

と、芳乃ちゃんと平行線の会話を続けるハメになった。もちろん、お互いに一步も譲らないのでああでもないこうでもないと言い争いめいたやり取りが続く。

「二人は何をしてるんだ」

「あ、将臣。芳乃ちゃんが俺に家事を手伝わせてくれないんだ」

「有地さん、昨日治ったばかりの馨さんが家事を手伝わせてと言ってくるんです。どう考えても静かにしていた方がいいでしょう」

「なるほど。色々あるのはわかったよ。でも俺の一番の疑問は……」

見舞いに来た連中を連れて現れた将臣は、言い合う俺たちからやや

視線を外して、ちょうど俺の足に目を向けた。

胡座をかいているが、左膝辺りには――

「なんで常陸さんは馨の足を枕にして横になってるの?」

「なんか重いと思っただらお前、ホント何してんの」

「にやーん」

なんか知らぬ間に茉莉に膝枕として使われてた。しかも使いやがってる張本人は、猫か何かのような態度を見せるばかり。

猫……猫か。思い立ってプラプラと茉莉の顔の近くで指を揺らししてみる。するとペシツと叩かれて、ああ猫だと理解する。

「おい茉莉にやん、重てえから退け」

「デリカシーが無いですね。恥ずかしいから退いてくれくらい言えないんですか? 昨日みたいな可愛げ見せてくださいよ」

「はあ? 誰が見せるかメス猫め。あんなもん眠気に当てられておかしかっただけだ。てか客に失礼だろ客に」

「……あつ、皆さんこつちに来ていらしたんですね」

状況を確認すると、いそいそと身体を起こす茉莉。まだ来てないと思っただらけてたのかこいつ。

まあ……素はかなりアレだしな、茉莉は。俺といい勝負してるんじゃないか?

「そういえば、なんで馨さんが巫女姫様の家にいるの? 学校休んだって聞いたけど」

「ああ、それね。小春ちゃんは どうして将臣が怪我したか知ってるかい?」

小春ちゃんの疑問と、カバーストーリーを知るべく尋ね返してみる。辻褄を合わせないと面倒だしな。

「診療所で本棚の下敷きになったのは知ってるよ」

「オーケー。そこまで知ってるなら話が早い。元々、診療所に向かったのは俺の所為なんだ。山に用事があつて色々やってたんだが……落石を避けたら落ちて気絶してな。偶然、近くにいた将臣たちに連れてかれた」

「あー、お前の家遠いもんな。だから担ぎ込まれたのか」

「その通りだ廉。将臣は本棚の下敷き、菜子はそれを庇って負傷とまあ、三人まとめて怪我人に早変わりだ」

スラスラと吐き出した嘘は、言葉を変えて真実だ。だから芳乃ちゃんに生暖かい視線を向けられても俺は嘘”は”言っていないし、本当の事を黙りながら言葉を変えているだけ。孵化器がやるのと同じテクニク——と言えば聞こえが悪いな。

が、しかし知らなくていいことは知らせる必要も無い。知られたところで問題無かったりあつたりするものだが、それはそれこれはこれだ。

「んでまあ、昨日までここで世話になってたが、目が覚めて帰ってな。今日は様子見がてら休んでたら、その寝坊助が起きたと聞いて冷やかに来た」

「お前のおかげで寝坊したんだけど」

「そりゃ悪かった。だが美人の介抱は美味しかったろ？　それでチャラにしてくれよ」

お互いに軽口を叩きながら、一応追求はされても平気なようにしておく。レナさんがやけに妙な視線を向けてくるが、多分真相や何が起きてるかを理解しているのだろう。

だがしかし、何故将臣が起きてきたのかが謎である。わざわざ連れて来てまで。これではまるで何か目的があるかのようではないか。

と黙って話を聞くと、どうやら玄さんから見舞いがてら家事の手伝いをするようにと言われていたレナさんが、その旨を伝えに来たとのこと。

しかし頑固者の芳乃ちゃんはこれを遠慮する。

「つかさ、芳乃ちゃんは何を意固地になってるんだよ。人の好意は素直に受け取るもんだぜ。というわけで俺にも手伝わさせろ」

「あ、馨さんは菜子と一緒に休んでて」

「えー。なんでさ」

「そうですよ芳乃様。ワタシは普通に動けますよ」

「菜子は休んでて」

「えー……」

さつきまで涙目だったアホの子が何か言ってるが無視だ無視。無
言で背中をど突いてくるが無視だ無視。

「しかし、大旦那さんからはマコに家事を任せていると聞きましたよ
？ それにカオルは……うん、何か信用できません」

「酷くないかな、あね……レナさん」

「そもそもカオルは自分が怪我をしていたということを忘れてません
か」

「いいんだよ俺は。頑丈だし」

そう言い放つと、全員がため息を吐いた。そこまで俺は変なことを
言っていないつもりなのだが。

呆れ返った廉は、仕方ないといった様子で俺に尋ねる。

「なあおい馨よ。お前は山の斜面を転げ落ちて丸一日寝てたんだよ
な」

「そうだな」

「常識的に考えれば自分が滅茶苦茶なこと言ってるってわかんない
？」

「動くし痛みも無い。休んだのはあくまでも様子見だから問題無いな
ら家事程度いいじゃん別に」

二度目のため息。

何がいけないのか本気でわからない。

「なら家事だったって何やるつもりだったよ」

「風呂の支度だろ、飯もだな。あとは洗いや掃除と……まあ概ね全
部？ 菜子の代わりをやろうとしてたし」

「テメエ病み上がりなの完全に忘れてるな！ マジで動くなよ！ 巫
女姫様、レナちゃん、このバカに働かせちゃいけない。こいつ間違
いなく頑丈だとかすぐ治るからでかこつけて無理しようとするって」

なんか罵倒された。

病み上がりなのは昨日だし、もういいと思うんだけどなあ……

「なあ小春ちゃん、俺なんで罵倒されてんだろ」

「普通の人はいくら一宿一飯の恩義があっても、病み上がりに家事を
全部やるうなんて発想しないよ」

「そうかあ?」

「廉兄でもそんなことしないよ」

「……そっかあ」

「おいそこの二人、ナチュラルに俺を貶すな」

廉が指差してくるがまあいいだろう。つまり俺はよくわからんが間違えてるということらしい。しかしこれだと来た意味が無いというか、なんというか……

「とにかく、いくらそう言われてもお客様に手を煩わせるわけにはいきません」

往來の頑固さで話をまとめようとした芳乃ちゃんだが、ここでレナさんはすかさず一手を差し込む。

「ヨシノ、料理のさしすせそを知ってますか?」

料理のさしすせそ……って、なんだっけ?

聞いている俺がなんだっけとなってしまうが芳乃ちゃんの様子に変わりは無い。つまり覚えているということか。

でも芳乃ちゃんだしなあ……

「知ってますよ。砂糖、醤油、お酢、せ、せ、せ……は、ええつと……

背脂? ソース?」

「随分味が濃さそうだね。日本的とは言い難い」

将臣の毒舌が光る。

……で、本当のところはなんだっけ? ろくろを回しながら俺もボヤク。

「砂糖、塩、酢——までは覚えてる。せがなんだったかは忘れた。そは

……ソルト?」

「なんで英語なんだよ馨。味噌だろ」

「お兄ちゃんの言う通りだよ。ちなみにせは醤油ね。確か、古い読み方に由来してるんだっけ」

はえーと感心しながらえへんと胸を張る小春ちゃんに拍手をする。

が、背脂にソースという都会でしか見かけないような味マシマシの発言をした芳乃ちゃんはというと。

「ぐっ……確かに料理の経験はほとんどありません。でも、私はいつ

までも茉莉に頼ってられないし、こういう時こそ役に立ちたいんです」

「なるほど、ヨシノは可愛いですね」

ニコニコしながらそんなことを言うレナさんだが、それはなんというか口説き文句めいたというか。彼女は天然タラシという感じだな。

「では手慣れた人とやってみたらいいですね」

「けれどやっぱり迷惑じゃ……」

「友達とは助け合いですよ、ヨシノ」

「芳乃様、別に一から十まで任せるといってもないので、意固地になる必要ありませんよ。というよりも、流石にここまで硬いと失礼かと」

「……わかったわ。よろしくお願いいたします」

レナさんの説得もあつてか、やっと折れた芳乃ちゃんを見てこの頑固さはどこから来たものやらと少し疑問に思う。今まで頼られる立場だったからなのだろうか？ 兎にも角にも将臣が芳乃ちゃんにとって対等の存在となつてくれるのを祈るばかりだ。

「んーと、じゃあ俺たちは撤収した方がいいかな？ 流石に多くて邪魔だろうし」

「生憎、わたしは料理に関しては修行中なので、そちらを頼めますか？」

「ありや、そうだったんだ。よし、じゃあ小春と俺で巫女姫様のサポートだな。腕の見せ所つてね」

と、自信満々に言う廉を見てふと疑問が浮かぶ。こいつが飯を作っている姿が想像できないのだが、いやまさかそんなペンギンが空を飛ぶよう真似はできない。

「将臣、あいつ料理できたっけ？」

「確か旅館の手伝いがてら仕込まれてたと思っただけ。小春も同じだよ」

「……マジか。ちと信用できねえ」

「料理だけは私より上手なんだよね、廉兄つて。お姉ちゃんのところまでバイトしてるのよ」

「小春は割と不器用だもんな。いや、不器用は言い過ぎた、うん。覚えが悪いだな」

「むっ、何き。料理スキルをナンパのためだけに向けてる廉兄に言われたくないよ」

「今時は飯の一つや二つ作れないと女にモテねーっての」

そんなこと言ってるクセに童貞卒業した時は人にうるさく感想言っつけてきやがったんだよなあ。いや誰が友人の性事情を聞きたいかってーの。

……しかし、俺はどうしたものか。一応料理はできるし。

「なあ、俺は——」

「あ、馨さんは茉莉子の監視がてら休んでてください。この子ったら、隙あらば仕事しようとして……」

「あは、そういうわけでワタシに構ってくださいね。馨くん♪」
「……はーい」

どうやら俺は、茉莉子にやんの飼い主役らしい。シヨボくれながら返事をする、芳乃ちゃんは一安心といったように肩を撫で下ろした。

なおその時の俺は、まるで母親に怒られた子供のようにだったと、後日レナさんが呟いていた。

鞍馬兄妹と芳乃ちゃんが料理担当、レナさんが将臣のベッドメイキング……いや、布団メイキングか。まあそんなこんなで別れることになった。俺はさっき言った通り、茉莉子にやんの飼い主役なので居間からキッチンを眺めている。

さつきチラツとレナさんを連れて外に向かう将臣が見えたが、裏仕事関連だろう。

食材を見て何をするかとか、色々聞こえてくるし、何より廉と小春ちゃんの的確に芳乃ちゃんをフォローしてるしで、俺としては一安心だ。

そんな感じで眺めていると、ズボン越しに爪を立てられる痛みが走る。見れば茉莉子にやんが不服そうに見つめてきている——下から。

まあ、つまりなんだ。また膝枕してると言えばいいのか。甘えられ

てると言えばいいのか。

「なんだよ茉莉にゃん」

「昨日の続きをしませんか」

「見られるよ」

「見せつけるくらいで行きましょう」

「おいお二人さーん。エロチックな会話は控えてくれると助かるんだけどー。小春が真っ赤になったし、巫女姫様も動揺しちゃってるしで俺が大変なんだけどー」

「へーい」

「申し訳ありません」

怒られちったなー。ねー。と適当にやり取りをしながら、この猫の頭を撫でてやる。くすぐったそうに目を細めながら、髪型が崩れると文句をつけてくる茉莉に、さてどう反応してやったものかと苦笑しながら撫で続ける。

「茉莉」

「なんですか」

「やっぱなんでもない」

「あは、変な馨くん」

会話も続かない。

たまに寝返りを打つ茉莉の頭を撫でているだけ。

手を止めて、悪戯してやろうと腕を膝まで動かそうとして、その手を握られる。

「昨日の続きってそういうことかよ」

「あは、本当にするわけじゃないじゃないですか。それとも……言えないことを想像してたんですか？ やーらしー」

「やらしくない男なんていません」

「お見舞いに官能小説持つてくる人に言われても説得力無いですよ」

「それは……」

ニヤニヤしながらゴロゴロと寝返りを打ち、言葉で丸め込んでくる茉莉。そろそろ足が痛くなってきた。

「ごめん、足痛い」

「じゃあ添い寝してください」

「……ダメだ」

「なんで？」

「ダメだったらダメだ」

「あは、恥ずかしいんですか？」

「他人の家でなんでこんなことやってるんだらうって気にならないのかお前はっ」

「あ……」

「今更顔を赤くしても無駄だぞ。俺の家かお前の家ならともかく、流石にだな……」

顔を赤くしながらススツと離れていく茉莉を呆れた目で見る。

「いやな？ 確かにお前にとつちや自宅みたいなもんだよなここは。でも客もいれば個室でもないんだし、こういうのやめない？ 別に付き合ってもないんだしさ。ガキの頃の姉弟関係めいたものを引きずるのもさ」

「それ、そういう関係になりたいってことですか」

「いや全然。恋愛とか面倒くさそうだし、別にいいかなあって」

そんな風に返すと、なんだかその返答が気に入らなかつたのか、なんとも言えない表情を見せた後、茉莉は「面倒くさそうって……」と呟いて口を聞いてくれなくなった。

——俺は何かしたのか？ でも単なる個人の感想みたいなものだし、した覚えもないのだが。

恋愛に関して、茉莉の地雷を踏んでしまったのかもしれないが、何が悪かつたかわからないので謝るのはやめておこう。下手に面倒なことになっても困る。

それから晩御飯が出来たりなんだりするまで、茉莉は不貞腐れたように俺を無視し続けた。

帰り道ですら無視。そこまでするかと思つたが、彼女にとっての地雷を踏み抜いたのは確かなようだ。



—— 茉莉が馨と出会ったのは、幼少の頃のこと。その初対面は、彼の両親が穂織に戻ってきたとき。

帰ってきたという報告回りで、常陸家に顔を出した千景と遙香の陰に隠れるように、背の低く気弱そうな少年——つまりは馨がいた。

今からでは考えられないことだが、幼少の頃の馨とは喋らなければ動きもしない、何を考えているかも分からず、ただ仏像か何かのように佇む、不思議な人物であった。

どれだけ声をかけてもウンともスンとも言わず、父母から何か言われても一言二言で終わる。実に困った少年……そんな印象を受けた。ただ茉莉にとっては所詮その程度の存在であり、馨にしてみても所詮その程度。お互いに両親が知り合いだから知り合っただけの、すぐに消える縁であろうと見ていた。

学校が一緒にクラスが一緒であろうとも、虚無がそのまま形となったような馨に触れることもなかった。

そんな関係が一変したのは、馨が朝武家に訪れたときのこと。あまりにも静かすぎる馨を見兼ねて芳乃が遊びに連れ出したのだ。もちろん、茉莉を連れて。

そこで彼女は初めて、困ったような顔をする馨を見て、こんな顔もできるんだなと思ったのだ。芳乃が連れ回し、困ったような顔をしつつも、やっと笑顔を見せるようになった頃、茉莉は納得した。

「この子は放っておいたらダメな子だ」と。

段々と口数が多くなった彼から話を聞くに、どうやら両親の鍛冶仕事の関係やあまり他人と接する環境でもなかった上に、そもそも他人と接するのが面倒だとか思ってたようだ。

「……何もしたくないし、考えたくない」

とは本人が常々思っていることらしく、今考えてみれば虚絶の呼びかけがあつたからかもしれない。

だがそんな馨が気に食わなかった茉莉が、一度だけ彼を家から引っぱり出したときがあつた。

そのときの彼は、ひどく驚いた顔をしていたのを覚えている。もっ

と笑えと、こんな風に笑ってみてと、笑顔を見せた。

……そこまでは覚えているのだが、そこから先は臆げだ。

ただいつの間にか廉太郎と意気投合して友人になっており、いつの間にかあんな風な性格になっていた。

長年の付き合いのある茉莉であっても、何があつたのかがわからな
い。とりあえず、殺人の使命と殺せてしまう己で狂気を抱いていたの
は確かなのだろうか……。どういふ化学変化が起きて、ヒヨコみたいに
後ろを着いてきた男の子が、あんな飄々とした男になってしまったの
か。想像もつかない。

「……最低だよ馨くん」

……帰宅した後、茉莉は布団の中で一人愚痴る。

過去に、呪いが終わったたら何がしたいかと馨から尋ねられたことが
あつた。その時茉莉は、「恋を試してみたい」と言った。それは今でも変
わってないし、普通の女の子らしいことともしてみたいと思っている。
「いいんじゃないか？ 楽しそうだし」

あの時はそう笑って肯定した彼が、そう、よりもよつて肯定した
彼が、そんなことは忘れたと言わんばかりに微妙な表情とどうでもよ
さげな態度で面倒くさそうだしと言つたのがショックだった。

「あのアホ、どうしてやりましょうか……？」

茉莉は決意した。

必ずかの邪智暴虐なすつとこどつこいに仕返しをしなくてはなら
ないと決意した。

具体的には、どちらが本音なのかを聞き出してやろう……。とか。

真相

あれからしばらく経過し、俺たちは完全に学院に復帰した。

俺は未だに虚絶からの返事が無いが、ほとんど人間寄りになったのは感覚的にわかる。芳乃ちゃんの家からお湯をもらってきて指を突っ込んで痛みを感じるかどうかをチェックしていた。あと数日とかからない内に元通りだろう。茉莉はまだドクターストップがかかっているが、これもそろそろ……と言った具合か。

一番寝ていた将臣が完全に戻っているあたり、人生つてのはそういうもんじゃない。

欠片もだいぶ集まったみたいだが、道は遠い。しかしその果てがどうなるかは、俺も知らんのだ。

そして朝方には祟りが起きたらしくて、芳乃ちゃんに耳が生えてるのを確認した。

「で、なんだい急に呼び出してさ。レナさん」

「少しカオルに聞きたいことがあったんです」

そんなこんなで昼休み。珍しくレナさんが飯を食べるより先に俺を連れて、校舎の外へと出てきた。話があるとのことだが、なんだろう告白かね。

いや真面目な話だろうし、十中八九祟り関連だろう。

レナさんは真面目な顔をしながら、意を決したように——
「キョーカは一体、どうなったのですか」

と、言ってきた。

……いや、待って。あいつら祟りの説明はしてたけど虚絶の話はしてなかったの？

さて困ってしまった。

「レナさん、もしかして虚絶の話聞いてない？」

「ムラサメちゃんたちからは、ややこしくなるからカオルに聞けと言われましたが……」

「ちよつと待ってね。——おい、ご所望だぞ帰って来やがれ。いつまでも黙るほど仕事あるわけでもないだろ」

実際に口して呼びかけてみる。
数秒待って、久しぶりに奴の声が響いた。

——何用だ——

出てこいと念じながら、まさかこんな風に返事されるとは思いもしなかつたと少し考える。

すると俺の影がドロリと伸びて、それが人型を形作り、やがては見慣れた虚絶の人間態となる。

「……この姿では久しいな、りひてなうあー。我に何用だ」

「キョーカ！」

花が咲いたような笑顔を見せて、虚絶に飛び付くレナさん。百合の花が咲き乱れそうな絵面である。

しかし虚絶は無表情。全く風情を解せない奴だ。だが疑問が一つ。今朝呼びかけても返事が無かつたのに、何故今になって帰ってきたのだろうか。そこだけだ。

「単に、端末ではなく本体に身を移していただけのこと。なすべきことは完了したので、貴様に再接続しただけだ。寸分の狂いもなく、今の貴様は人間だ」

「ありがとよ」

「それで、どうしたのだりひてなうあー。貴公が我に抱き着くなど……我は貴公の母君ではないぞ」

「あつ、申し訳ありません……まるで、幻みたいに消えたキョーカが心配でして……でもこうしてまた会えて嬉しいですよー」

「我を、心配……だど？」

「はい。だって何であつても、キョーカはキョーカなのですから」
「解せぬな」

そう言い放ちながらも満更でもない、柔らかい表情を見せる虚絶。こんな顔ができたものだと思いつながら、ということとはと本体である刀を呼び出そうとする。が、ウンともスンとも言わない。どうやら接続したものの、まだ力は使うなということか。

とにかく、今は事情を説明しようか。

「さて、レナさん。こいつの本当の名前は虚絶——虚を絶つ刀に宿る、

俺のご先祖様さ」

「改めて名乗ろう。我が名は虚絶。千年の憎悪を束ね、塵殺の刃にて復讐と絶滅を目的とする残影なり」

彼女を剥がしながら、虚絶は改めて名乗りをあげるも、レナさんとしてはピンと来ない模様。

なのでもっと噛み砕くとする。

「要は、ウチの一族に伝わる祟り神用の刀の精霊……ムラサメ様みたいなもんさ。あれより可愛げが無いけど」

「ご先祖様の、精霊？ カオルとキョーカは複雑な関係なのですね。あつ、だから結婚していて子供もいると言っていたのですか」

「如何にも。齢は享年だ」

「キョーネン……しかし、今まで何処にいたんですか。急に現れて急にいなくなつてびっくりしちゃいましたよ」

「馨……我が端末の意志が落ちたが故に、その肉体を我が操作していた。それに魔に近しくなっていたため、そちらの対処もあつて中々現世に実体を見せられなんだ」

説明を受けてもちんぷんかんぷんな様子なのだが、まあこれしか言いようがないのも事実。他にはどうしようもない。

「ま、そんなわけで俺と虚絶はすぐ近くにいますし、離れることもできるってわけだ。限度あるけど」

「不思議な関係ですね。でも、なんだか漫画みたいでワクワクしますっ」

「そうだったら良かったけどね……んで、そんだけ？ なら戻すけど」「名残惜しいですが、あまり時間もありませんし、そうですね。キョーカ、またお会いしましょう！」

「我は懐かれた、と見ればよいのか？ わからんな」

とかなんとか言いながら俺の中に戻っていく虚絶。
「……けども、虚絶や俺に深入りするのはいくくない。知ったところで、なんとも言えない苦味しか残らないしさ」

「人は苦味も好むものですよ」

「それは知りたいって解釈でいいのかな」

「カオルが話してもいいと、わたしを信頼してからで構いません。話して欲しいと思っても、少々わたしには難しそうな事柄のようですから」

「じゃ、君が本当に後悔しないつもりなんだと判断できたら、また声をかけるよ」

そう告げて、俺たちは教室へ戻ろうと歩き出す。

しかし、途中で将臣にお姫様だっこをされている菜子を見かけた。

「マサオミってばプレイボーイなんですね。あんな風にマコでお手玉してるなんて」

「それを言うなら手玉にとっているだね。ま、お手玉でもニユアンス通じるし、目くじら立てるほどでもないけど」

しかしなんでもない光景のはずなのだが、やや疑問を感じる。

菜子が本気で恥ずかしがっているということはつまり、そういうことなのか？

まあいいか。あいつが誰に何を思おうと知ったことではない。

「カオル？」

そもそも俺と菜子の距離は近すぎるのだとこの前改めて実感したばかりだろう。何を気にすることがあろうか。というか最近思い出したが、その昔あいつ恋がしたいとか言ってたような気がする。

いいじゃないか、あの二人。というか間違はなく意識してるってアレ。いやでも将臣は芳乃ちゃんの婚約者なわけだけど、あいつそもそも誰かを好きになったのか？ とか色々あるし。

……そうだよ、将臣も芳乃ちゃんも婚約の話忘れてるんじゃない？

「カオルっ」

「……あー、悪いね。ボーツとしてた」

「嫉妬ですか？」

「菜子みたいなこと言うな、君は。別に嫉妬じゃないよ。珍しくあいつらがじゃれてるから驚いただけさ」

「確かに、二人がああしているのは珍しいですね」

出歯亀をするほど無粋じゃない。

とつと戻ろうと言って、レナさんと俺は教室へと戻った。

……何か、引つかかる。

だがそれはきつと、ガキの頃の思い出がそうさせているに違いない。

無意識的に自分を特別視していた、というわけか。やれやれ、これじやいつまで経つても子供のままだな。

大人みたく、上手に処理していききたいものだ。

——オマエハ——

声が響く。

誰かの声だ。聞き覚えは……無いようである。

——ワタシトオマエハ——

しかしそれつきり、声は静まった。

何が言いたかったのかはわからないが、どうせいつものことかと思考を打ち切る。

俺の知る由も無い。

——ドコカ、ニテイル……——

夜。

流石にまだ力が使えない関係から、今日は茉子と一緒に留守番をすることになった。

「昼、将臣にお姫様だっこされてたけどどういいう経緯だ？」

気になったので初っぱなから聞いてみると、茉子は失敗談を明かす子供めいた態度を見せる。バツの悪そうな顔のまま、なんとも情けない理由を言った。

「実は木から降りれなくなった子猫を助けようとしてまして」

「お前ホント無茶するよな。それで落ちて抱えられたってわけ？」

「はい……」

「呆れて何も言えんな」

はん、と鼻で笑い、床につつ転がる。

しばらくすると、茉子が不自然にあたふたし始める。こいつの過保護は今に始まったことではないが、しかし——それにしたって慌てず

ぎだろう。

「なにソワソワしてんのさ」

「心配じゃないですか！ 今だって芳乃様と有地さんだけじゃ対応できなない事態が起きてるかもしれないし！」

「そこまで信頼ねーのは問題だぞ茉莉。お前が見てきたあの二人は、一人欠けただけで何もできなくなるほど弱いか？」

「そういうわけじゃ——」

「そういうわけ以外のなんだったんだ。ムラサメ様だっている。いざって時のやりようはいくらでもある。ちつたあ周りを信用しろ」

そう言ったあと、俺は内に響いていた声に内心で呼びかけてみる。が、返事はない。何かしらの意志を持っているのならば、虚絶ほどではないにしろ、ちよつとくらい意思疎通が図れると思ったのだが……違うらしい。

意外と暇であるが、しかし他人の家。自由に動き回するには遠慮がある。ので、俺は横になってゴロゴロするか……と思ったが、ちよつどいい話相手呼び出せるようになったことを忘れていた。

「虚絶、事態をどう見る？」

「どう見るも何も、それしかないならやるしかあるまい」

「やっぱな」

「うわっ!?! びっくりした……呼んだなら呼んだって言うてくださいよもう」

「常陸の末裔か。久しいな」

「ええ、お久しぶりですね」

どこか敵意を滲ませた態度と視線を投げる茉莉だが、虚絶はまったく気にしていない。それどころかそもそも認識してもいないようだ。「して、我が端末よ。回路は繋ぎ直した。故に戦闘行動も可能であろう。更に言えば、あの一件の影響で貴様と我の最大距離もかなり伸びた。この地であれば真反対にいても問題無いだろう」

「急に伸びすぎだろう。流星に怪しいぞ」

「まあ、そこまで必要になる事態はあるとは思えんが」

嬉しい誤算ということか。

さて、本来の責務を果たしてもらおうじゃないか。

「おい虚絶、構え」

「年若い女子がいるのに千年も経った未亡人がいいか。変態め」

心底侮蔑したように顔を歪め、そんな言葉を吐き捨てる虚絶。俺は
といえはいきなりそんな反応されて困惑してしまふ。

そして呆れ返ったようにため息を吐くと、茉莉子を見て一言。

「この寂しがりやの童に構ってやれ。常陸の」

「……はい？」

「母性よりも姉性を好む度し難い変態には付き合ってられん。一足先に帰るぞ」

と言って再び影に消えていく虚絶。

そして舞い降りる沈黙の天使。

困りに困って、俺はこの前の失態を謝ってなかったことを思い出した。

そのあとは早い。行動までのラグはほとんどなかったと言っても過言ではない。

「あー……この前は悪かったな。思い出したよ、お前が何を望んでいたのかを」

「……えつと……？ ああ、あのことですか。なんでそんな大事なことを忘れてしまふんですか」

「過去のことは臆げでな。正直自信無かった」

「なら、そうですね……許して欲しかったら、馨くんの初恋を教えてください」

そう意地の悪い笑みを浮かべた茉莉子だが、こちらは初恋といってもそれらしいものがわからない。

いや、思い浮かぶには思い浮かぶのだが……あれは初恋だったのだろうかという疑問がある。

そうして悩みながら黙っていると、何を勘違いしたのか、更にニヤニヤし始める。

「あは、言えない相手が初恋なんですか？」

「……初恋は誰だったのかを思い出してただけだよ。でも、それらし

いのは一つを除いてないんだ。しかもそれが初恋かどうかもよくわからなくて」

隠しても仕方ないので素直に言うと、少し意外そうな顔をしてから、茉莉は楽しげに尋ねてきた。

「その子のこと、教えてください」

「全然覚えてないんだ。ただ……とても笑顔が綺麗な子だったのだけは、絶対に忘れない」

「ほほう、中々にロマン溢れる話ですねえ。それで、続きは」

「……ガキの頃、まだ面倒くさいクソガキだった俺を、一度だけ家から連れ出してくれたんだ。その時見せてくれた笑顔が忘れられない。でもその子が男なのか、女なのか。こっちに来る前なのか来た後なのか思い出せなくて……」

そこまで言って、茉莉がとても驚いた顔をしているのが目に入った。

そんなに意外だろうか？　こういうの、結構ありがちだと思うんだけど——

「……茉莉、もしかして、心当たりあるのか？」

「いっ、いや……ワタシには、無い……ですね……うん。無いですね、はい」

「??? そっか、無いか……実はさ、一度でいいから会ってみたいんだ。会って、あの時連れ出してくれてありがとうって言いたい」

偽らざる本心を口にする、どういいうわけか茉莉が恥ずかしそうにしながら。

「ず、随分惚れ込んでるね……」

と、そんなことを言った。

「惚れ込んでいるってか、恩人だしさ」

「そんなに大切に想っているのに、顔も名前も忘れて、覚えているのは笑顔だけって、馨くんは酷い男の子だね」

「言うなよ……」

「でも、きつと会えるよ。ううん、必ず会える。だって——ずっと側にいるんだから」

なんて、茉莉にしては珍しく、本気でそう思っているのだとわかるように、笑顔を見せながらそう言った。

——その笑顔が、誰かの笑顔と被ったような気がしたけど、俺にはそれが誰だか、わからなかった。

「……茉莉は、優しいな」

「あは、褒めたって何も出ませんよー」

「けどありがとう、少し……安心した」

む、この感覚はそろそろだな。

「さて、そろそろあいつら帰ってくるみたいだし、迎えてやりませんか」

「大丈夫かなあ、怪我とかしてないかなあ……絶対大丈夫だよね馨くん……」

「いきなり沈むなってーの」

目前に控えて急にあたふたしだした茉莉を宥めながら、俺は帰ってきた三人を迎えるのだった。



「どうしましょう、芳乃様……ワタシが多分初恋っぽくて……」

「もう諦めて言えばいいんじゃないかしら」
ぎっくりと。

茉莉は言葉の刃を突き立てられた。

芳乃と一緒に入浴したので、物は試しと相談を試してみたのだが、茉莉の不安な心は容赦無く芳乃によってトドメを刺された。

「そんなもの、相談するまでもない。馨に言えばよいのだ。自分こそその笑顔である」と

「ムラサメ様まで……でも言えないですよ。あんな風に美化されちゃったら、どうしたらいいのか、わかんなくなっちゃって」

馨は完全に忘れていたが、茉莉は完全に覚えていた。

目の前の自分が初恋らしき人物に、誰かはわからないけどとても笑顔が綺麗で忘れられない。もう一度会いたいなどと言われてしまえ

ば動揺するのも当然だろう。

「というか、菜子は何を初恋かもしれない程度でそんなに動揺してるのだ。いつまでも初恋を想い続けるほど、馨も重い男ではなからう」

「けど、まさかそんな事になってるなんて。馨さんは結構ロマンチストだと思ってたけど、これは予想外だわ」

ムラサメから見た馨とは、言ってはなんだが割と軽い男だ。生娘だとかなんだとか言ってきたことを含めて、そこまで初恋を重んじるような男には見えない。

一方芳乃から見た二人の関係は完全に友達のものであったし、自分にはそうした感情を向けられてないのは自覚している。つまりそんな事になっていたとは思ってもしなかった。

「……あんなに言われちゃったら、夢を壊したくないって思っちゃうよ……」

「菜子は優しいのね」

「いつぞや見たあの時もそうだが、放っておけない弟を気にかける姉のようだな」

「二人ともからかわないでくださいっ」

そんなこんなで、風呂場からは楽しげなのか恥ずかしげなのか、とにかく賑やかな声がしばらく絶えなかった。

しかし渦中の男どもは。

「なあ、覗きに行かね？」

「お前って本当に最低の屑だな」

「はーん？ 初対面のレナさんの胸に顔を埋めたラッキースケベに言われたかねーし？」

「なんでそれ知ってるんだよ!？」

「蛇の道は蛇だよ、将臣」

——実にアホらしい会話を繰り返していたのは、言うに及ばない。

前兆

朝、妙な温もりと重さを感じて、将臣は目覚めた。

「……は？」

訂正。

目覚めたと同時に思考が停止した。

だつて目の前に、何故か芳乃がいるのだから。

(なんで?)

寝惚けた、にしてはおかしい。抱きつくような姿勢なのは、単に寝相の問題だろう。だがしかし、一度居間を通らねば将臣の部屋には行けない。

つまりは何かしらの異常か何かがあつたと見るのが妥当で……

(……女の子だ)

しかし健全な男子はどれだけ頑張っても桃色な思考には勝てない。いや勝とうと思えば勝てるが、芳乃と過ごす日常がもはや根付いていた彼には、その誘惑に耐えきれなかつた。

無防備が過ぎる——なんとということか。けしからん。バカなことしか考えられない。

(い、いや待てつ。この状況を誰かに見られたら事情説明がややこしくなる！ だったらここは、一旦抜け出して——)

身体を起こしてとりあえず時間を確認——普段起きる時間よりやや遅い。習慣付けているのに、何故？ とも思うが、これも何か原因があつてのことだろうか。

……そこまで考えて、何かが視線の先を横切った。

——違う、何かが落ちている。

黒い、黒い雫が。

「——ッ」

すぐさま枕元に置いてあつた叢雨丸を手に取り、臨戦態勢を取る。

黒い雫はシトシトと落ちて、沼のように床に広がり……その中からゾブリと腕が生えてくる。まるで地面から何かが這い出でるように、それは現れた。

「——ム？ ナゼココニワレガ……？」

刀を携えた、和装の男。

しかしその声は男女の声が混じった歪な声。

——それはいつかの夜に見た、復讐の化身。

将臣の記憶に新しい、千年前の亡霊。

「虚絶……なのか？」

「ニナイテ？ ナゼワレガキサマノモトニイル？ ナニガアツ……タ……？」

虚絶の表情が、信じられない形へと変わる。そう、それはさながら意地の悪い表情を浮かべた茉莉のような……そこまで理解して、将臣は目の前の存在が、“あの” 馨の祖先であるのだと思い出した。

そして、やばいと本能的に悟った。

なんだかんだ言つて、この女は——

「ソウカ……ヨルノイトナミヨリメザメタバカリダツタカ。イヤ、スマナンダ。ワレハカエロウ。アトハ、トシワカキダンジヨダケデ、ユルリトアイラムカエニオチルトイイ」

あのろくでなしの祖先であり、復讐の化身であっても、根っこはそう変わっていないのだ。

一人だけシリアス担当みたいなポジションだったのに、こんな根っこだったとは……絶望しながらも一筋の望みを託して挽回をする。

「いや待ってくれ！ そういうのじゃない！ むしろやばいんだ！ 助けてくれ！」

「ナニツ？ マサカ、キサマサクバンコヲシコンダノカ……!? ヤルナ、ニナイテヨ。イヤハヤ、コレハセキハンガヒツヨウダナ。マツテオレ、ヨウイシテクル」

「そうじゃなくて！ 何か妙な事が起きてるみたいなんだよ！」

このポンコツ妖刀めと内心毒づく将臣だが、一方わざとらしい勘違いをしながらも、虚絶はこの事態の異常性は理解していた。

時間をおけば馨が起きるかとも思ったが、中々起きて来ない。しかも熟睡してるのか、呼びかけても「比奈ねーちゃん……もう子供じゃないよお……」とか寝言を発するのみ。

使えん奴だと思いながらも、さてどうにかしてやるかと優先順位を立てる。

「トニカク、キサマハミコヒメヲオコセ。ワレハカンリシヤトヒタチノヲヨンデクル。タンマツハネテイルノデシバシマテ。カマワヌナ」
「あ、ああ。任せた」

部屋を出て行く虚絶。

とにかく起こさねばと、叢雨丸を床に置いた時、妖しい赤に発光する憑代を見た。

(赤……う？ そんな話は聞いてない)

みづはからの報告では黒の筈だ。なのにこれは――

その謎を解明するためにも、今は彼女に起きてもらわないと。

「おーい、朝武さーん？」

「……すー……」

「起きてつてば」

「……う、あえ……う？」

あつさり起きたが、しかし、今二人の顔は近い。

だから状況を確認した芳乃はズザーつと身を離してから、一言。

「よ、夜這いですかっ!？」

「違う!」

……何故こんなことになったのだろうか。誰か俺を助けてくれと思いながら、落ち着いてもらうためにも状況を説明する。

「多分、朝武さんが俺の部屋に入ってきたんだよ。理由はわからないけど」

「……あつ、本当だ。私の部屋じゃない……でも、どうしてだろう……?」

「夢遊病じゃないよね」

「そんなことは今まで一度も無いですね」

「憑代が赤く光っているのも、何か関係があるかもしれない」

「確かに、赤いですね」

むう、と頭を悩ませているとドタドタと足音が聞こえ、バタンと大きな音を立てて扉が開かれる。

現れたのはとても素晴らしい笑顔をした、ムラサメと菜子――

「ご主人！ 昨夜はお楽しみだったな！」

「ワタシお風呂の支度をしてまいりますので、どうぞこゆっくり呼んでくる、とは言っていたが。」

手段を選ばないとは言っていない……ということであろうか。

「あの……すつとこどつこいッ!! 何を言い触らしたんだよオ——ッ!!」

将臣の叫びが、朝の静寂を切り裂いた。



「……なんで俺、君の家にいるの?」

目が覚めてみれば寝間着のまま朝武家の居間にいた。

いや、意味がわからん。しかも何故か虚絶の本体がある。

「実は私も知りません。有地さんは?」

「なんか、黒い雫が突然垂れてきて、それが広がった沼みたいなところから、刀を持った虚絶が主体の馨が出てきた」

将臣の言葉に引っかけりを覚え、合点がいった。

ということは、虚絶が呼び出されたのか。なら俺にも教えろと声を向けてみるが、返事が無い。つまり何処かへ行っているということか。

でも何処へ……

「虚絶ならば、レナを呼びに志那都荘へ向かった。どうも憑代が奇妙な状態だな。確認の意を込めて呼んできてくれと頼んだのだ」

「なるほど。あいつなら適当に殻を被って誰のフリでもできるからな。適任ってもんか。で、俺から離れてったと」

ムラサメ様の言葉から状況を整理しつつ、一人だけ寝間着というのは恥ずかしさを感じる。

「連れてきたぞ。あと端末よ、服だ」

「サンキュー……そしておはよう、レナさん」

服を受け取って挨拶をしてから居間から出て着替える。

ものの数秒とかからずに終えて、寝間着は畳んで手に持っておく。再び居間に戻ったとき、場には神妙な雰囲気がいっぱい溢れていた。とりあえず虚絶と同期し、記憶ややり取りを確認する。

……なんだか愉快なことになっていたらいい。俺も見たかったし混ざりたかった。まあ余談だろう。

これからは真面目な話だ。そんな和気藹々としたものは、その辺にでも捨て置けばいい。

さて、と一つ起き、ムラサメ様は切り出した。

「レナ、今身体に何かあるか？」

「うーん……ここにしていると耳鳴りがしますね。あ、でもそれだけです、それに全然気にするほどでもないですよ」

そう笑うレナさんの様子に嘘は見えない。ならばとムラサメ様は視線を芳乃ちゃんと将臣に向けた。

「二人はどうなのだ？」

「俺はなんか熱っぽいかな」

「私もそうです。熱っぽくて、それで夜中には乗っ取られたみたいで」

熱っぽい、耳鳴り、症状はバラバラだが、芳乃ちゃんに耳が生えていることを考えれば、憑代が原因となるだろうことは簡単に予測できる。

「馨はどうだ？ 突然現れたようだが」

「俺らは別で考えてくれ。少しややこしい。だけど、憑代に呼ばれたのは確かだ——何が、かはわからないが」

そう言いつつ、虚絶と確認を取り合う。

実際、俺が呼ばれたか虚絶が呼ばれたか、それとも燃料の祟りが呼ばれたのか……検討が付いていない。虚絶もそのようで、少なくとも俺たちは該当していないとのこと。

咄嗟に俺の身体を動かしていたようだ。妙な呼び出し方をされた所為でまた祟り寄りに変質したかとも思ったが、そんなことはなく、そのままらしい。

まったくもって謎が多い。

「憑代が元に戻った所為で、呪いが強くなった？」

「呪いに変化は無さそうだ。どちらかといえば、これは憑代が何かしらの力を散らしているのだろう」

「——恐らく、集合の波長のようなものか。端末と我がここに呼び出された由縁から鑑みれば、そういうことであろう」

「やはりな。と、なれば意識が無くなった肉体を、憑代が操作していたというのが正解か」

「じゃあ、昨日のあれは憑代の所為だったのね……よかつた」

昨日？ 昨日何かあったのか？

しかし二人の様子から見ても、何かがあったようには見えない。ムラサメ様は少し暖かい目線を送っているが……まあ、つまりはそういうことなのか。

「けれど、どうしたらいいんだろうか？」

「それなんだが、これを利用できると思えるのだ」

ムラサメ様が我に妙案有りといった様子で、そんなことを言った。

そうして夜になった。

「憑代に身体を明け渡すって、大丈夫かな」

「あくまで操作させるだけだし、問題はないよ。俺と虚絶の関係性のようなものかな、端的に言えば」

学院から戻った俺たちは、朝武家に集合し、憑代の習性を利用することにした。具体的には、憑代に操作させて欠片を集めるという作戦だ。

不安そうな芳乃ちゃんを眺めながら、俺は刀をクルクルと弄ぶが、しかし。

彼女らに黙ってとある仕込みを行なっておいた。

虚絶と俺だけがなんとなく察している事実がある。運が良ければ、あるいは悪ければ、真相を知れるやもしれん——とも思ってたな。

俺たちの想定通りなら……確実に、釣れる。

片方の内、どちらかが……

「馨？ 黙ってどうしたのだ」

「いや、なんでも」

思考の渦から引つ張り出され、今回の俺の仕事を再確認する。

芳乃ちゃんを囿に欠片を探す作戦において、戦闘を主に担当するのは将臣と茉莉だ。では俺は？ となるが、これは単純。俺の仕事はシンプルにイレギュラーが発生したときの対処のみ。

実に——わかりやすくていいじゃないか。

元よりそっちが本業だ。まあ、大規模な戦いになるかもしれないが。何が起きるか全くわからない以上、一切の油断は許されない。

「さて……んで寝たの？ 芳乃ちゃん」

「これから寝るところです」

一応用意しておいた布団に巫女服のまま入って、瞼を閉じていた彼女に声をかけたら違ったらしい。

「子守唄でも歌ってやろーかー？」

「結構です。茶化さないでください」

「へいへい」

怒られちった。

また刀を弄りつつ睡眠を待つ。

しばらくして、今度はムラサメ様が。

「眠ったかの」

「……まだです」

あ、これダメな奴だ。

皆が漫才みたいなやり取りをしていらのを横目に、俺はそそくさと部屋を抜け出す。そのまま居間に戻り——

「虚絶」

「承知した」

極秘裏に、俺個人の意思でやるべきことをやり始める。

分離して目的地に向かう虚絶を見送り、座り込む。さて、どうなることやら。上手く行ってくればいいが。

まず間違いなく、これが露見した場合俺は非難されるだろう。だが、それでも、確かめねばならぬことなのだ。あの祟りはどっちで、奴の真意は何なのか……それを知れば良い。足手纏い一人を守る程

度、何の問題も無い。

……そんな思考があっさりできる自分が憎い。だがこれしかない以上、手段は選んでいられない。

あの憑代が、俺の想像通りの効果をもたらし、そしてあの中にいるものが俺の想像通りならば——間違いなく、今日は、決戦になる。

だが確証は無い。

少なからず不安を抱えながらも、茉莉から芳乃ちゃんが虚ろな目で動き出したと聞いて、それを追いかけ始めた。

狩りになるか、それとも——

全ては神のみぞ知る、か……………



一行が、動き出した芳乃を追っているのとはほぼ同時期のこと。

街から一つ、フラフラと歩きながら山へ向かう人影がいた。

「行かなくちゃ……………」

謔言のように繰り返されるその言葉。

確かに、彼女の意識は存在する。

しかしそこには人間性と呼べるものがない。あるのは、強烈な衝動に突き動かされる自我のみ。

行かなければ、行かなければ、行かなければ——何故？

即座に思考が停止する。そうしてまた再び衝動が突き動かす。フ

ラリ、フラリと歩きながら、謔言のように繰り返し、山を目指す。

……それを見る影が一つ。

「……………これは、想定外だな。単に連れてくるだけであつたが」

影は一人頭を抱える。

「仕方あるまい……………結果良ければ、という奴か。なんとかして、無事に帰してやらねばな」

影は打算のみで動き、端末はそれに同調した。が、これは彼らの目的を達成しつつも、まったくの別方向に動いたことには動揺を隠せない。

「ガワか、それとも中身か……どちらに用があるのだ？
影は闇に溶けていった……
そう呟くと、影は闇に溶けていった……
貴様は――」

決着

歩く、歩く、歩く――

憑代を抱えた芳乃ちゃんを追いかけ続ける。意識が無いはずなのにしっかりとした足取りで動くのは如何様なものか。

いや、そんな不条理が神秘って奴かね。

「しかし、何処まで行くんでしよう」

「欠片のところまでとかじゃないかな」

「さあてね。知るのは憑代だけだ」

そんな会話をしながら追いかける。

しかし、彼女の獣耳が出っ放しというのが気がかりだ。朝からずっと……いや、恐らくは昨日の夜から、か。

何に反応した、というのがわからないのは困る。

「ムラサメちゃん、祟り神の気配は？」

「すまぬ。憑代の反応が強くて見えぬ」

「……こつちもダメだ。憑代がデカすぎてウンともスンとも言わねえ」

まあ、実際を言えば殺戮衝動を送る虚絶がない所為で、わちやわちやと頭の中で騒ぎ立てる奴らの声もつとうるさいのだが。

おかげで何も感知できん。

――コロセ！ コロセ！ ウラギリモノヲコロセ！――

――ヒトツニモドセ、カイホウセヨ。オワラセルノダ――

……ただまあ、何か変化があったらしく、正反対のことを言っているのが気がかりだ。

なんとなく、事情が読めてきたような気がしないでもないが……しかし、これでもし上手く行ってしまうえば、真実を知ることができなくなってしまうのか……

いや、何を考えている。

呪いの終焉は喜ばしいことだ。終わらなきゃいけないことなんだ。

確かに探究心はあるのは否定はしないが……

雑念を払い、意識を戦闘用に切り替える。

人には見せられない、暗い焰が灯る。俺も戦いに餓える心があるのか、そうした場に暗い愉悦を見出すこともある。

だがそれ以上に俺は稲上だ。殺すべきものを殺し、破壊すべきものを破壊する。ただそれのみ。

そんな風に思いながらも追跡を続けていたが、ある時ふと彼女の足が止まった。

「動きが止まった……？ 将臣、ムラサメ様。準備を」

「わかった。ムラサメちゃん」

「うむ、ご主人」

叢雨丸の神力が解放され、同時に茱子もクナイを構える。俺は虚絶を鞘に入れたまま、すぐに抜刀できるようにする程度で済ます。

芳乃ちゃんが憑代を掲げるような動作をする。すると一瞬だけ極光が生まれ——何も起きていない。

「……今のは？」

「大きな気配が広がったな」

疑問だらけの将臣の声に答えるムラサメ様。

しかし、俺にはわかった。

……間違いなく、想定通りだ。

——確実に憑代の性質と、崇り神は別物だ。今まで術式起動かと思っていたが違う。憑代と差別崇りと無差別崇りの関係性は複雑だということくらいしかわからんが……少なくとも、呪いも崇りも、元に戻したら終わりそうなのは確かだ。

俺は専門家じゃないんで、どうのこうのは言えないが——

「——来る」

瞬間、気配を感知する。

近すぎる……しかし虚絶は何をしている？ まさか、同意したことを破ったのか？ まあそれならそれで構わないが……アレが何故姉君と呼ぶのが謎のままなのはモヤつく。

「朝武さんを頼んだ。崇りは俺が」

「わかりました」

「必要ならフォローに回る」

前に出る将臣。

対峙するように木々を掻き分けて現れる崇りが一つ……一つ？

奇妙だな。俺すら呼び出すようなもので、一つ……？ 疑問が頭を支配する。だが現実には刻々と時を刻んで進んでいる。

「シ——ッ！」

将臣は触手を斬り払い、続けて接敵。素早く袈裟に斬り下ろし、逆袈裟に斬り上げる。二撃を使用するようになったのは、確実に仕留めるという意思表示か。なんにせよ、これほどまで育っているなら心配はいらなそうだ。

「欠片を回収したぞ」

「よし。様子を確認する」

芳乃ちゃんに目を向けると、その様子に一切代わりはない。だが憑代は赤く光り、耳も出たまま。

どうしたものかと少し頭を悩ませるが、続けてみるか。

「……待つてください。今、何か音が——」

作戦継続を提案しようとした瞬間に、茉莉が告げる警告。

その言葉は秒とかわからず実現する。ゆらりと木々の奥から姿を現わす崇り。その数は……二つ。

「二体か……っ！ ええい、骸に集るハイエナの真似事か！」

「二つ？ ややデカめの崇りにしか——」

「バカ言うな将臣！ こいつら重なってるだけだ！ ——茉莉、後ろを確認しろ！」

「来てますっ！」

俺たちが崇りに気を取られている隙に、最悪の形で予想が現実になった。俺すら呼び出すほどの力で一や二で終わるはずがない。こくなるのはなんとなく察していたが、それにしたって早すぎる。何処から来てるんだか——！

「嘘だろ、数が多すぎる……！」

「呑まれるな！ 有象無象だ、強力な個体はいない！ だが、このままではまずい！ ムラサメ様、数は!?!」

「十や二十では足りぬ！」

「下手するとそれ以上ですか……」

周りを見渡しても崇り、崇り、崇り、崇り、崇り——それこそ百や千の崇りがいると言っても過言ではない。まだ囲まれてはいないが、時間の問題。

即座に切り抜ける為の案を出しては切っていく。残ったのは囷か、上に逃げる。俺や菜子なら上に逃げられるが、将臣と意識の無い芳乃ちゃんには難しい。——却下。

囷作戦なら俺が行けばいい。注意を引いて適当な場面で撤退。後日また挑む……だが虚絶がない以上、崇りを利用した力の制御効率が落ちていく。使ったところで半ば暴走しているようなものだ。

意志を以って振り伏せる——？ まったく無茶を言ってくれるっ！

「逃げるしかない……っ！ ムラサメちゃん、案内頼んだ！」

「了解した！ 全員、こっちだ！」

将臣は芳乃ちゃんを抱えて駆け出す。もちろん俺たちも遅れは取らず、同化を解いたムラサメ様に先導される将臣を追いかける。

「有地さん、叢雨丸はワタシが！」

投げ渡される叢雨丸を受け取る菜子を狙った触手の一閃。

——無論、反応可能だ。踏み込みに転じ、射線に飛び込みながら抜刀し、刀身で強引に狙いを逸らす。

「殿は俺がやる！ こういう時の為にいるんでな……っ！」

そう宣言しながら、逃げる四人より少し離れた位置で崇りからの攻撃や、抜けようとする崇りを片っ端から迎撃する。

できるできないのではない、やると決めたならばやるのだ——高まる意志に呼応して性能をそれなりに引き出した肉体で、発生する代償を無理矢理に踏み倒しながら、まだまだと内に燻る亡霊どもを焚き付ける。

「食い殺されるためだけにいるなら、俺に大人しく食い潰されちまえよ浅ましい亡霊ども!! それが嫌なら奪って、殺して、食い尽くせ——!!」

襲いかかる祟りどもを後退しながら迎撃する中、叫んだ声に応えるように闇夜が蠢き出す。

暗い黒の沼が俺の足元に広がり、そこからまるで冥府に垂らされた一筋の糸を掴むように無数の白い腕が這い上がり、祟りに襲いかかる。

叩き潰し、引きちぎり、抉り、分解し、吹き飛ばされて、破壊の渦を巻き起こす。白と黒が交わり、凄惨な殺し合いを作り出す。

それを確認しつつ、速度を一定のまま保とうとした時、俺目掛けて飛んできたのは――

白い腕。

暴走したか!? と動揺してももう遅い。しかしそれはまるで俺を突き飛ばすように押し、再び祟りの足止めに戻っていった。

体勢を元に戻して、全速力で将臣たちを追いかける。

「無事か!」

「そっちは!」

「踏み倒した! あと囨を少し置いてきた!」

「……あれ? 私、部屋で寝てたはずなのに……?」

撤退戦をしながらあれこれ報告をしていたら、芳乃ちゃんが起きた。
た。

「えっ、ええっ!?! な、ななんでも有地さんが私を抱き抱えて――っ!?!」

ちっ、近いです! 離れてください!」

「さ、騒がないで! 緊急事態! 舌噛むよ!」

「芳乃様、落ち着いてください!」

「お主ら状況がわかっておるのかのう……」

やれやれ、締まらないのはいつものことか。

割と窮地のはずなんだがと、漫才のようなやり取りをしている三人を見て、少し安心しながら、俺たちは逃走を続けた。

「ここならばしばらくは安全だ」

「はあ……っ、はあっ……はあ……っ」

「大丈夫かご主人」

「怪我は、無いから大丈夫……だ」

しばらく逃げ回り、ムラサメ様の誘導でかなり離れた場所まで来た。将臣の呼吸が荒いが、まあ一人抱えてあんだけど走り回ったんだ。無理も無い。

「あの……大丈夫ですからそろそろ下ろしてください」

「あつ、ああごめん。嫌だったよね」

「別に嫌というわけでは……助けていただいて、ありがとうございまして」

なんか甘酸っぱいやり取りしてるなあと腰を下ろして眺めていると、茉莉が近づいてくる。その視線は血塗れになった俺の身体に向けられていて、ああまた小言かと苦笑する。

「踏み倒したし、戦闘には支障無いさ」

「……心配なものは心配なんです」

「悪いな、そういう仕様だし」

何処か不満げな顔をする茉莉を宥めながら、未だ帰ってこない虚絶に不安を覚える。

——俺たちはレナさんの記憶を読み取るつもりだった。

彼女が欠片を家族代々受け継いでいるのは聞いたが……崇りが彼女を見て姉君と呼ぶのが気がかりだった。だから虚絶を飛ばし、その記憶を全て見て彼女の側に何かあるのかだけは探りたかったのだが。

駒川の調査も進展は無いらしく、最終手段として取ったが、何があつたやら。

「私が眠っている間に、一体何が？」

「芳乃は憑代に身体を動かされ、山に向かった。そして憑代が一際強い信号を飛ばしたのだ」

「それで出てきた祟りを倒したんだけど、二体三体……いやそれ以上に増えて逃げ回ってたんだ」

「すまぬ、吾輩の考えが浅はかだったのだ。こうなるとは思わなんだ……」

謝罪するムラサメ様。

黙っていても仕方ないと思いつつ、立ち上がって隠し事を喋り出す。

「まあ、現実つてのは往々にそんなもんだよムラサメ様。俺も薄々と予想していたけど黙ってたし」

「馨、お主なあ……」

「俺を呼び出すほどの信号なら、多分とか思ってたんだ。黙つてて申し訳無い。確証も無かったから悪戯に不安にさせたくなかったし」

バツが悪いので視線が合わせられない。

「……しかし、虚絶が来ないな……志那都荘に向かわせたが、何かあったと見るべきか」

「虚絶……？　　そういえば、確かに彼女が出てきそうなのに静かですね。それよりも志那都荘に向かわせたとは？」

「レナさんへの疑いが晴れなくてな。白のはずなんだが、崇りに姉君と呼ばれて欠片を持っていた黒だ。虚絶に記憶を一通り見てきてもらおうかと」

「……馨、それ本気で言ってるのか？」

将臣が静かに問う。

「無論、本気だ」

「お前な……っ！」

胸ぐらを掴まれるが、俺は態度を変えない。変える必要も無い。

「人情に流されるのは良いことだが、俺は生憎と手段を選ぶつもりはあまり無い。それに記憶の読み取りに関しては彼女に一任している。何も来ないということはやってないということだ。億が一も想定して飛ばしていた」

「言い訳のつもりか」

「好きなように取れ」

「——そうかよ……っ！」

手が離れ、吐き捨てるように将臣はそう呟いた。

今は仲間割れをしている場合ではないが、事実報告を欠かすと面倒なことになるのは実践済みだ。

「だがお前の怒りはもつともだ。俺は最低なことをしたと自覚してい

る。が……彼女はきつと、何かしらの関係があるか、あるいは彼女そのものに、なんらかの秘密が隠されている。それは間違いなく叢雨丸や俺たちの知らない歴史に通じているものだろう」

「だからって！」

「知れば良し、知れなければそれまでだ。ついでに虚絶の人間性も——」

そこまで言いかけて、頬に鋭い痛みが走る。

「ご主人!? 怒りはわかるが何を——！」

ムラサメ様の驚いた声が聞こえる。芳乃ちゃんと茉莉の息を飲む音が聞こえる。

「……殴ったな」

「殴って悪いか」

どうやら俺は、将臣に殴られたようだ。奴の表情は怒りに満ち溢れている。

「気は済んだか？ 今バカをやっている暇はあまり無い」

「……少しはな。でも俺は今のお前の行動を許せそうにない」

「そうか。すまなかつたな」

「謝るなら俺じゃなくてレナさんに謝れよ。それで俺は許してやる。向こうがどうかは知らないけどな」

「……じゃあ、そうするよ」

やはりこうなったか。

バカ正直に話すんじゃないかった。面倒な流れになった。

しかし場を持ち直さねば。俺の所為で崩れたのならば、俺が直すのが筋というものだろう。

「それで、どう見る。虚絶から何の返事も無いことはレナさんに何かしらあったということかもしれない。それにあれだけの量だ、全ての欠片が祟りになった可能性もある」

「ならあれを全部片付けたら欠片も全部集まるってことだよな」

「ご主人、前向きが過ぎるぞ。いや、吾輩の言えたことではないが」

「むしろ現実逃避では？」

などと俺たちは好き勝手に言っているが、将臣の発言に同調したの

は芳乃ちゃんだった。

「でもどうにかしなければならぬのは事実です。それに、戻るにしてもこのままじゃ……」

そう、一番の問題はそこだ。

放置するには危険すぎる。かといって正面から挑むには足りない。

八方塞がりだ。捨て身以外に方法は無い。

「神力を俺に流して一気に……」

「ダメだご主人。あれはもうやらんぞ」

「なら俺が燃料を使い切る勢いで……」

「馨くんは死ぬ気ですか!」

「ムラサメ様、何か目くらましみたいなことできましたよね」

「うむ。それで数を減らしつつ、朝まで耐えるか」

結局出たのはゲリラ戦。

しかし、ゲリラ戦をやるには戦力が足りなさすぎる。

だが、次の瞬間――

「――アッ!?!」

茉莉が、何かに吹き飛ばされた。

そのままその何かは素早く将臣に接近、一瞬で吹き飛ばす。

完全に虚を突かれた俺は何もできず、その接敵を許す。

それは、深紅の瞳をしたレナさんで。

その赤は憑代のものと同じで。

――虚絶の気配を内包していた。

思考が停止した。理解が追いつかない。そんな風に隙を作ってし

まい、胴に拳が突き刺さる。

ガクンと崩れ落ちる身体を振り上げられた奴の右脚が弾く。その

振り上げられた脚は高速で振り下ろされ、左肩を引き裂かんと衝撃が

走る。無理矢理に地に伏した俺を跳ね飛ばす二連撃の蹴り。空に打

ち上がって、落ちてきたところを容赦無く突き刺さる掌。

「――ご、は……っ!?!」

無様にゴロゴロと転がりながら、なんとか視線を向け、どうなっているのかを目にする。

「レナさ——」

「ヨコセ……!」

芳乃ちゃんから憑代を引ったくり、彼女は掲げる。

それに呼応するように周りから崇りどもが現れる——が、しかし。

崇りは溶け落ち、黒い沼のように広がってレナさんの周りに集まる。彼女の影からも黒い泥めいたものが溢れて、意識を失ったのか倒れ伏した。

そして、倒れた彼女を守るように。

その泥は形を変えていく。

そうして姿を現したのは、巨大な黒獣。

いや——狼のような姿をした、崇り神だ。

「合体した!?!」

茉莉が身体を起こしながら驚愕する。

そりやそうだ、前例が無い。

「なんと……っ! 一つに束ねおったか!」

「このようなことが……!?!」

ムラサメ様も芳乃ちゃんも、崇り神は単騎という認識からその事実にとただただ驚愕するしかない。

だが——

「将臣、お前の案が通りそうだぜ。数の有利を捨ててくれて助かった」

「まったくくだな。向こうから勝手に一つになってくれるなんて」

立ち上がりつつ、さっきまで喧嘩してた奴に声をかける。

「身体は?」

「問題無いな。レナさんの身体だし、全然」

「なるほどね……俺も連撃をもらったが、全く問題無い」

「——ムラサメちゃんツ!」

「応ぎ!」

再び神力が迸る。

ならばこちらも負けてられんと黒い焰を燃やし尽くす。

あれからは神力を感じられない。崇りとして完璧になった所為か……まあ、殺しやすいのならば問題は無い。

——怨みの叫びを轟かせる。苦しみ嘆けと呪いを紡げ。お前らはそういう存在だろうか。

内側に意識を向ければ、更に奴らが狂い哭く。殺せと、奪えと、絶望させろと。そこに束ねられるは終末を求める意志。嘆きか怒りか、憎悪か復讐か。

——だがどうでもいい。

暗い力が氾濫する。いつぞや診療所で発現したほどの出力ではないが、むしろ食い潰されるほどの過剰出力でないことが助かる。

「え、三人ともちよつと!? 何いきなり戦意を漲らせてるんですか!」

「二——速攻で落とす!」

芳乃ちゃんが慌てているが、実際冷静じゃないのはこっちだ。

崇りが動きを見せないうちに、速攻で仕留めなければマズい。いつレナさんに攻撃するかもわからないし、時間をかければ不利になるのはこっちだ。

「挟む!」

「あいよ!」

右に展開した奴に合わせ、左に展開する。速度は将臣に合わせた。

そのまま間合いを詰め、踏み込む。刀を滑らせ、ほぼ同時の攻撃――

!!

さあ、どう出てくる……っ。

刹那、黒獣が動いた。

身を回転させ、触手のような尾を引力に任せて振り上げる。

「——くっ!?!」

臂力が違いすぎる。

宙を舞う俺たち。呆然としている将臣を見て幾分か冷静さを取り戻す。空中の無防備な状態から、燃料をブースターのように噴射。将臣を抱えつつ着地し、殺気を背後から感じる。

「チィ——ッ!」

舌打ちをしつつ、今度は右側から噴射しつつ後方に噴射。180度ターンを描きながらザリザリと靴底を擦り減らしつつ、飛び込んできた黒獣を回避する。

振り下ろされた前脚によって地面は砕け、土の下地が剥き出しになっっている。

「前脚一本であれだけの膂力かっ」

「パターンも能力も増すよなそりや……っ！」

将臣を下ろし、その場に佇む黒獣と睨み合う。それは低い唸り声を上げ、俺たちを威嚇するようだ。

「破壊力が桁外れ……だがそれでもレナには傷一つついてない。吾輩たちを引き離すのが狙いか？」

ムラサメ様の言う通り、レナさんから引き離された形になる。

だがそれにより、奴は明確に獣の形をしているというのがわかった。

「将臣、明確な形だよなアレ」

「だな、おかげで動きが見えやすい」

「と、なれば生前のクセも抜け切っておらんと見て間違いない。吾輩のように」

まだ虚絶を呼び戻すタイミングじゃない。彼女は最後の切り札だ。最高のタイミングで確実に仕留めるためにも――

黒獣が頭を低くする。

そして尾を揺らめかせ、こちら目掛けて攻撃を仕掛ける。打ち下ろすようなその攻撃は、あまりにも速く――故に見切り易い。

「芳乃様、少し乱暴ですけど……っ！」

「きゃっ!？」

茉莉が芳乃様を抱え、ひよいひよいと避けている傍で、俺はむしろ接敵していく。将臣たちは後ろに下がっているが。

「ドっちだ、お前ハ――!!」

俺の声に俺でない声が混ざる。

その声は自分が何をしたいのかと問う自問の声にも似て、だがしかし、自責の声にも似て、そして嚇怒と憎悪に塗れたもののような、そんなもの。

接近すると同時に振るわれる前脚。

その場で跳躍する――身体を回転させながら抜刀。素早く尾を切

断。額に裂傷が生まれる。踏み倒しつつ、返す刀で横に振り抜く。ギンっという音を立てて噛み止められる。

その紅蓮の瞳と目が合う。

流れ込む意志——それはシンプルに。

——アネギミデハナカツタ。ユエニ、リヨウスル——

ああ、なんだ。つまり。

散々騒ぎ立てていたのは人違いで、しかもガワを利用する……ねえ

？ 俺が人の事を言えるほど偉い立場ではなく、むしろ記憶を覗き見るといふ最低なことを企てた。

しかしそれでも——

「用がアルのハ、ガワだケか——！」

振り切る。代償で骨が折れるがすぐに元に戻る。

ガワにしか用が無いのなら、死に絶えろ。個人に用が無いなら、その怨念を抱いて消え果ててしまえ。

どうせ死にたがっているんだろう？ だったら死ぬ、今すぐ死ぬ。

殺意が渦巻く。

憎悪が燃え上がる。

嚇怒が咆哮する。

刀を振るう。

黒を切り裂けば赤が吹き出す。段々とレナさんが倒れている位置まで移動しながら、俺は黒獣に猛攻を仕掛ける。

いつの間にか尾が再生している。封じるには切り落とさない程度に留めるしか——!?

そこまで考えた時、複数に増大した殺意を感じる。視線を動かせば、虚空に浮き上がるいくつかの黒い刀。

即座に後退すると同時に、すぐ前まで俺がいた場所に黒が降り注ぐ。

——判断が遅れていたら死んでいた。無茶をすれば死ななかったろうが。

「一人で突っ込むな！ 死ぬ気か馨！」

「あんなもんで死ぬならとっくに死んでる……それよりも、あの尾が

厄介だな。生え変わるとは」

ムラサメ様の小言に反応しつつ、さつきまでの戦闘で得た情報を整理する。

「叢雨丸や虚絶では斬り落とせるから実質的に効いてない。更に致命打を叩き込まない限り、奴の再生の方が早い——」

「なら、俺か朝武さんがその致命打を打ち込めばいいんだな」

「そうなるが……茉子、頼めるか？」

振り向いて茉子に尋ねる。

ダメならダメでなんとかするだけだが。

「——わかりました。ワタシが止めます。それに、一つ策が思いついたので」

「ありがとう。任せる」

随分と頼もしい声と表情で買ってしてくれた茉子に感謝を伝えると、将臣と芳乃ちゃんに声をかける。

「膳はこつちが揃える。確実に仕留めろ」

「はいっ」

「ああ」

返事を聞いて構える。

恐らく、次の行動は——

「——!!!」

黒獣が吼える。空気にすら轟くその叫びは、本能に眠る絶対的恐怖を呼び起こす。

それは月を喰らう冥狼の咆哮のようで、死界の底で慟哭を上げる者にも見える。

しかしそんな感傷は一瞬にして消えた。

——疾い。

黒獣が突撃してきた。そのまま尾を劔のように揺らめかせる。膂力がなによりも違いすぎる。回避しかない。

身を動かすと同時に、確認する。

「茉子!？」

芳乃ちゃんの叫びが響く。

茉莉は立ち止まり、完全に立ち向かうつもりだ。俺はすぐに動こうとして――

茉莉を信じて、動くのをやめて、こっちのことに集中した。

「茉莉、ダメ――ッ!!」

振り下ろされるその一撃は、地面もろとも砕いた。

何を？

そう、丸太を。

意識があるなら、変わり身すら通用する――なるほど、あいつのセンスはキレがいい。なら俺がやるべきことは――

上空から現れた茉莉が、クナイで尾の根元を突き立て止める。

「芳乃様！ 先端を――」

「えっ、あつ、はいっ！」

動きを完全に止めた黒獣に近づき――

「やああああつ！」

鉾鈴をその先端に突き刺した。黒い煙が吹き上がり、悲鳴のような叫びが木霊し、黒獣は無理矢理にでも動こうとする。その膂力で振り切るつもりだろうが……

「――そいつを」

俺が眩き、黒獣の背後で寝てた”彼女”が起き上がり引き継ぐ。

「マツテイタ――」

刹那、俺は地面に刀を突き立てる。

「虚絶ッ！」

「サア、ヨモツヒラサカガキサマヲヨンデルゾ!!」

黒獣の足元に黒い沼が広がり、そこから突き出るように現れたのは真っ白な無数の腕。それらが黒獣にまわりつき、その動きの一切を封じる――！

将臣が駆け出した。

そして一切の抵抗を許さずに、叢雨丸を、その脳髓に突き立てる。ドロリと祟りは溶け落ち、穢れのような黒を撒き散らして――消えた。

それは一瞬だったのか？

あるいはもつと時間があつたのか？

わからないが、地面に転がる大きな憑代の欠片が目につく。

つまりは、終わった……ということだろう。

「ご主人！ 大丈夫か!? 穢れに飲み込まれたかと思ったぞ！」

「なんとか未遂で終わったよ……」

なんかスゲー怖い会話が聞こえてくるが、まあ俺も似たようなものかと切つて、大人しく虚絶を中に呼び戻す。

何があつたんだろうか。

——あの衝動に飲み込まれたりひてなうあーに取り憑き、家に戻そうと思つたのだから。失敗したので我は咄嗟に身体を動かす方向に変えたのだ——

なるほどね。

道理で返事もしなかつたわけだ。

「もう、茉莉！ そういうことならそうって言つてよ！」

「申し訳ありません、芳乃様。流石に時間が無くて……でも怪我するつもりもなかつたんですよ」

ポコポコと茉莉を叩きながら心配して損をしたみたいな感じの態度を出している芳乃ちゃんを見てほっこりしていた。が——

——端末よ——

ああ、わかつてる。

あとで片付ける。

連鎖反応的に現れたアレをあとで処理せねば。

「……しかし、これで終わったんでしょうか？ ムラサメ様」

「うむ。祟りは消え、穢れも祓つた。憑代も落ちているし、芳乃の耳も消えておる」

「あ、ホントだ。なら……」

そうして彼女は憑代を拾い合わせ、一つに戻す。

極光が収まった時、そこには——

「……あれ？」

やけに響く、将臣の間抜けな声。

「一個、足りない——!?!」

おかしなことに。
憑代は完全な形を取り戻していたが。

一箇所だけ、欠けていた。
どうやら俺たちはまだ、この件を解決したわけじゃないらしい。

■
朝武家に戻り、茉莉と馨は自宅へと帰る。

衝動に連れてこられたレナを泊めるといふアクショントこそあれど、今日のところは一応これで、ということが終わった。

しかし。

「——ククク」

悍ましい笑いが山奥より木霊する。

ゆらりと姿を現わす黒い人型。その右腕には刀が握られ、物騒な雰囲気を漂わせている。

さあ殺しに行こうと歩を進めて——

「待てよ、亡霊」

殺し屋に呼び止められる。

バカな、殺し屋は帰った筈——亡霊の意識は混乱した。

そんな様子を呆れるように見つめながら、殺し屋はその左手に携えた妖刀を握りしめる。

「何ビビってんだよ。俺が何かを忘れたか？ はっ、復讐一色なんてご苦労なことって。ま、そうだな……奴が出てくるならお前も出てくる、だろう？」

だからなんだと言うのだ。

亡霊は刀を構え、殺し屋と対峙する。

あくまで自然体の殺し屋と、完全に殺すための体勢である亡霊。勝ち目はどちらにあるのか、火を見るよりも明らかだ。

「シネ——！」

踏み込む。

こちらの方が疾い。

そのヘラヘラと笑う顔を凍り付かせるべく、首を狙った一閃を——
「話にならん」

放とうとした両腕が切り飛ばされた。

黒い刀が何処へと飛ぶ。

神速の抜刀術——後の先を取る居合の本質。

刀を上には振り抜いたまま、極大の殺意を宿した視線と怯えた視線が
交差する。

「——もういい。消えろ」

そのまま振り下ろされ、一刀の下に断ち斬られる。

ズルズルとその黒が刀身に喰らわれ、それは一つの燃料と化す。

殺し屋の肉体に裂傷が生まれるが、それはすぐに塞がる。

「さて、帰るか」

殺し屋は静かに刀を納め、帰路に着いた。

その刹那の殺人を見ていたのは、輝ける月夜のみ……

終焉

古い記憶。

朽ち果てた屋敷。

灰色の空。

黒い月。

墓標のように地面に突き刺さる武器。

知らないはずなのに知っている場所。

そこで俺は見たこともない、和装の女と対面していた。

「……ね、私さ。疲れたの」

女は語る。

俺は口も開けない。

「もしも全部が終わったら、私を眠らせて」

そう言った女の顔は嬉しそう。

「みんな、疲れたみたいなの。だからもう、眠らなきゃ」

あるいは、罪人のよう。

「ああでも私は地獄に行かない。螺旋を描いたのは私だから」

それとも――

「……ま、本当に地獄つてものがあればの話だけどね」

そう言つて、どこか空虚に微笑む女を見て、俺は何も思えなかった。

「君の記憶を勝手に見ようとして、本当に申し訳ない」

翌朝。

「無論、この最低最悪の行為に対する言い訳は存在しない。よって思う存分罰を与えてくれ。死ぬと言えれば死のう。殺せと言えれば殺してみせよう。無様を晒せと言うならば無様を晒そう。さあ――」

俺は朝武家で土下座をしていた。

傍には虚絶を置き、死ぬと言われればすぐに腹を切れるようにしてある。

「望むる罰を言うがいい。罪を背負う俺を裁くは君の声に他ならな

い」

「……ええつと、カオル？」

「言葉を紡げ、罰を語れ。俺はその通りに、罪を償おう」

「あの……」

「さあ——ッ！」

困惑するレナさん。

土下座する俺。

それを微妙な表情で見つめる皆。

「……あのな馨。確かに俺は謝れとは言ったけど、そういうのじゃないと思うんだ」

将臣がそういうのが、俺としてはこういうの意外に何があったというのか。

「いわば俺がやろうとしたのは腹を開いて内臓を見る行為に等しい。ならばこそ命を捨てても釣り合いが取れるだろう」

「……なんか、想像してたのと違う」

「馨さん……」

「誰だつてそういう謝罪をされたら動揺しますよ」

なーんか好き勝手に言われているが、俺にはそれ以外が思い付かない。

「あの……カオル？」

「なんなりと、罰を与えてくれ」

「罰とかそういうのはどうでもいいのですよ」

「……人の記憶、一生を単なる謎解きの為に覗こうとしたんだぞ？」

「カオルにはカオルの事情があるのは知っています。掃除屋でしたっけ……？ とても、重圧のかかる立場と仕事でしたよね」

「厳密には殺し屋だけだな。それで？」

レナさんはまるで俺を労うように。

「あなたはあなたとしてやるべきことをやったまでじゃないですか。頭を下げるほどではありませんよ」

なんて、笑って言っただけだ。

「だけど俺は……！」

「わたしが仕事の為に命ある魚を裁くように、カオルも仕事の為にわたしの記憶を見る必要があった。ただそれだけのことで、言ってくれば見せましたよ？ 水臭いです」

「……そういう言い方はズルい」

「時に心は冷やして動くものだと、オカミから教わりましたので」

ああもう、なんか滅茶苦茶だ。

土下座し続けるのもバカらしくなって胡座をかいて、微笑むレナさんに対する負い目と羞恥心から視線を逸らしてしまう。

「……じゃあ、ホントにいいんだな。何もしなくても」

「はい。今まで通りのカオルで、今まで通りに友達でいてくれれば、わたしはそれで十分だと思いますよ」

「ふん……後悔しても知らないからな」

捨て台詞みたいな言葉を聞いても、レナさんは「カオルは可愛いです」なんて言う始末。

自分の仕事を、なすべきことをなそうとしたと褒められて、たとえばそれが薄暗いことでも、嬉しくなるものは嬉しくなるだろう。

それに、この稲上としての仕事を褒められたのは初めてだ。今まで皆、俺に重荷を背負わせることを謝ってばかりだったから……

血と死を是とする俺を、褒めてくれた――

更に恥ずかしくなって、顔が熱くなるのを感じる。だからなのか、単に頭がおかしくなったのか、妙ちくりんな態度と声で妙ちくりんなことを言い出した。

「けど友達だからとか不問にされたからとかだとしても、やるべきことが生まれたなら無理矢理にでもやるからな」

「ふふっ、仕方ないなら受け入れますよ。むしろウエルカムですっ」

「うっせえ、比奈ねーちゃんみたいなこと言いやがって。お前なんか……」

「ほほう？ わたしなんか、なんでありますか？ ほらほら、恥ずかしがらずに言ってください、カオル」

「おお、おっ、お前なんか、お前なんか……お前なんかさん付けしてやんねーからな！ 呼び捨てにしてやるし！」

身体を寄せるレナから逃げようと上体を逸らしつつ、俺は奇妙なことを言った。いやなんだよ呼び捨てにしてやるしつて。素直にならない反抗期か俺は。

……素直になれないのは事実だが。

「わお、それはそれで嬉しいですね。なんだか今までのカオルから少し壁みたいなものを感じてましたから」

「うぐぐ……っ。あ、でもいつだか綺麗だつて言ったことは本心で……ああ違う!? 俺は何を言ってるんだ!! 忘れて! いや忘れろ! とにかく俺はお前をレナと呼ぶ! そんだけだ!」

プイツとソツポ向きながらそんなことを声高らかに宣言するマヌケを、レナはまるで手のかかる弟か何かを見るような視線と表情で見ている。

「……あと、ありがと。褒めてくれて」

「カオルはずっと頑張っているのですから、これくらい当然です。……色々思うものもあつて誇ることは難しいでしょうが、折れずに逃げずに、それを成し続けるというのは、すごいことですよ」

「できてしまうとしても、折れずに逃げずに……か。改めてありがとう、レナ。もう少し考え直してみる……」

誰もが俺に謝っていた。

その中でも、たとえ何も知らなかったとしても、彼女は俺を肯定してくれた。

……俺でなければ救えなかった命もあつただろう。

決して褒められた使命でもなく、決して誇つていい呪いでもない。だがそれでも、なすべきことをなしただけ、ずっと頑張っていたのだと言ってくれた。

——それがたまらなく嬉しかった。

「……ね、馨くんは弟感あるでしょう?」

「あれは見事なまでに手のかかる子供よな。吾輩びつくりじゃぞ」

「なんだか昔の素直じゃない頃みたいね、あれ」

「馨つて割と可愛げあるんだな」

……外野がうるせえ!

あと、将臣は俺を許す許さない以前にレナの了解を取らなかつたことに文句があつたらしい。

行為そのものが非難されていた、というわけではない……ようだ。なんか、意外。

それはさておきと、昨日の報告に移る。

「お祓いは上手く行ったのに、最後の一個だけ無かつた？」

「そうなんだ。ほら、レナさん」

そう言つて憑代を見せる将臣だが、その顔色は優れない。不安が残っているのだろう。

しかし俺は、ふとレナのことを思い出した。彼女に対する殺戮衝動が生まれたのは、崇りの中核である憑代を所持していたから。

それと同じことが起きたのは誰だ？ 将臣だ。だが将臣は担い手だつたからと思考を打ち切っていた。

……まさか、な。

「……将臣。少し、動くな」

「は？ まあいけど」

ジツと将臣を見つめる。

外面ではなく、中身へと見るものを移していく。

満たされた神力、その中にある、聖邪双方を併せ持つ砕かれた欠片

瞬間。

——コロセ——

——殺せ——

——殺すのだ！——

騒ぎ立てる衝動。頭を駆け巡る殺意。殺せ、殺せ、目の前の存在を殺せと叫び行動させようとする亡霊ども。

……間違いない、在る。

すぐさま見るのをやめれば、亡霊どもは誤認だと錯覚して鎮まってい

なるほど……

「神話において、伊邪那岐は振り向いた時初めて伊邪那美の状態を理解するわけだが、それと似たようなケースだな」

「比喻を交えられても俺困るよ」

「じゃ言葉を変えようか。お前だよ将臣、お前こそ最後の欠片だ」

「ふーん、俺がね。って、俺!?!」

「厳密には、お前の中にある……ってところだけだな」

あたふたと自分を触って確認し始める将臣を眺めつつ、ハナからちゃんと見ときやよかったと後悔した。

……最初のアレはそういうことだったのか。いやはや、レナの情報が出揃うまですっかり忘れてたが——ホント、振り向けばいたな。

「それに関しては多分、先にムラサメ様の方が気付いてたんだろうな。さつき用事がある、とか言って茉莉と芳乃ちゃん連れてどっか行つたし」

「でも、俺の中って……いつの話だろう?」

「ガキの頃にでも食ったんじゃねーのか? ほら、お前水場で死にかけたーって話があつたら? そんなときとか」

「色々飲み込んだし、そうかもしれない」

思い当たる節はいくつかあるが、今重要なのは将臣の中に欠片があるということだ。

だが——

「けど、これがあつて俺は選ばれたんだよな。叢雨丸に」

感慨深そうにそんなことを言った将臣だが、俺がそれに待ったをかける。

「……違う。お前は欠片の有無に関わらず、有地将臣であるのなら叢雨丸はお前を選んだ」

「欠片が関係無いってのはどういうことだよ」

「いつだか、虚絶が言っていたんだ。叢雨丸は選り好みしている。貴様と違って我は求める者にこそ力を与える……って」

「つまり俺は、他に選ばれる理由があつたってことになるのか」

「ああ。実は有地家の家系図と歴史を洗ってたが、神力と関わる話は出てこなかった」

そう、こいつと初めて会った日の翌日、玄さんから有地家の資料を片っ端からもらって洗い直したのだ。もしも何かしらの血であるのならば、とかを探るために。

が、結果はゼロ。

つまり将臣本人に選ばれるだけの何かがあったのだ。欠片以外に

「それと類似した例がある。レナだ」

「わたしを姉と呼ぶタタミ神のお話ですね」

「聴いてたなら話は早い。リヒテナウアー家はあくまで一度穂織を訪れて、単に欠片を持っていただけだというのに、何故五百年近く前の存在であろう崇りが姉と呼んだのか……そして何故、崇りはレナのガワに用があったのか……」

「ああ、そうだ。ガワに用があるってどういう意味なんだ？ 言葉通り取っていいのか？」

その問いに少し黙り、的確な例を探す。

「……着ぐるみと、そのアクターの関係性だ。レナ・リヒテナウアーという肉体には用があるが、レナ・リヒテナウアーという個人はどうでもいい——それがあの崇りから感じ取った意志だ」

「わたしではなく、わたしの身体……？ 一体どういうことなのでしょう」

「わからない。が、少なくとも……お前はそこまで関係してなくて、向こうが勝手に用があるだけだろうな」

結局そこで止まったのだ。

だが偶然とは思えない。

欠片無くとも選ばれたであろう将臣、肉体だけを求められるレナ——生まれも育ちも、穂織の因縁とは無関係な二人が、何故聖邪双方から特別視されるのか。

……崇りに接続すれば、恐らくは答えは出てくる。だがしかし、そこまで行けば稲上馨という人間は消え、その魂と同化した崇りだけがそこに在ることになる。

つまりは、『帰って来れなくなる』ということだ。

「しかしひと段落ついた今、知る必要もそこまで無いんだろうな。知ったところでどうしようもない。個人としては、知りたかったころではあるが」

そう言つて、窓から見える空を見つめる。

蒼い——とても、蒼い空だ。

見ているこつちが清々しくなるような蒼の空。

……答えは何処に？ それは誰も知らない。

「待たせたな、ご主人」

「ムラサメちゃん」

「最後の欠片を集めに行くぞ」

どうやら、準備は終わつたらしい。

俺も処刑人として、その終わりを見届けなければ。

そうして四人で本殿に向かうと、そこには巫女服に着替えた芳乃ちゃんと、側には葉子がいた。

……しかし、本殿なのにどうして少し息苦しいんだ？ なんだ、不調か？ 俺の身体は。

「来たんですね。場を整える為に、先程まで舞を奉納してたんです」

芳乃ちゃんの発言を聞いて、道理で少し不調だと納得する。神聖な場に不浄の端末である俺がいれば、そりゃ不調にもなるってもんか。

「それに吾輩の神力を散らして濃くしておいた。これでより剥がれやすくなっているであろう」

……訂正。

多分これ長時間いたら不調どころか自壊し始めるんじゃないか。神力は確かに俺の身に存在するが、基本的に魔寄りなので水と油、炎と氷のように相容れぬのだ。

まあ顔に出しても仕方ない。黙っていよう。

「有地さん」

「憑代を持ち、強く念じるのだ。さすれば自然と出てくる」

「……」

憑代を葉子から受け取つて将臣が目を閉じて数秒としない内に、憑代は白く輝き、その姿を完全なものとしていた。

「……完成してる」

「五百年の因縁が……」

「本当に全部、揃ってる……」

「やっと終わったんですよ、芳乃様！」

「おめでとうございますー！」

現実味が無い。こんなにもあっさりと終わってしまったなんて。

本当に終わったのか？

「しばらく様子を見なければわからぬが、恐らくは大丈夫だ」

だがムラサメ様の安堵した表情からは、気休めも一切感じられない。やつと、呪いは終わりそうだということに間違いは無いだろう。

「あ、ムラサメ様。元に戻ったところで性質は……」

「うむ。あとは安晴に言っただけで祀って貰えばよい。さすれば呪詛に向かっていた力が加護として使われるようになる」

「なら、お父さんと呼んできますっ」

そこからは早かった。

芳乃ちゃんに呼ばれてすぐ駆けつけた安晴さんによって祈祷は順調に進み、そう時間もかからない内に必要なことは全て終わった。

「これであとは、毎日欠かさずに祈祷をすれば、安定するだろうね。」

「ま、これも神主の仕事だ、僕に任せてくれ」

「ありがとう、お父さん」

「今まで何の役にも立てなかったからね……お安い御用だよ」

安堵した表情で言葉を交わす二人を見て、ああ……やつとあの二人も普通の親子に戻れたんだなと感慨深くなる。

「将臣君も、ここまで巻き込んで申し訳なかったね」

「いえいえ、全然気にしていませんよ。それに、巻き込まれたからこそ役に立てたんですから」

——役に立てた。

俺は？

……役に立ってすらいない。

必要とされてすらいなかった。

そんなことはわかっている。

不要と断じたのは他ならぬ俺だ。俺が俺自身を今の時代には要らないと決めたのだから何を悔やむ必要があるのか。

誰にも褒められず、誰にも必要とされない、讃^アえられ^ンない殺^ンし屋^グ。それが俺なんだと、俺自身が良く知っているだろう。

「本当に、運命みたいだったな」

「そうだな。ご主人だけでなく、ここにいる全員がこうして出会えたのも、運命だったのだ」

運命……ムラサメ様の笑顔が眩しい。

「それはわたしでもありますか？」

「無論だ。レナがいなければ、丸く収まることはなかったのだからな」
「そう言ってもらえるのは嬉しいですね、ふふっ」

嬉しいという言葉を聞いて何か引っかけかりを覚える。レナに褒められたとき、俺は無自覚だった何かを垣間見たような気がした。それに通じる何か……嬉しいと重なっている？

わからない。だから黙って事態を見守るしかできない。

「わたしも、皆さまと会えて嬉しいでありますよ。これからもよろしくお願いしますね」

「はい、こちらこそ」

「今後とも、よろしくお願い致します」

「いやあ、芳乃にこんな風に接してくれる友達ができて良かったよ。今後とも、娘をよろしくね」

「お父さん!? そういう挨拶はちよつと……!」

「あれ? マズかったかな? ははは」

不意に笑っていた安晴さんが、真剣な表情で俺を見る。

そして――

「馨君、今まで……今まで本当にありがとう。娘たちの助けになってくれて。君は自分を死地に送り込み、ただ見ているだけの僕らを憎んでいたかもしれないけど、君がいてくれたからこそ救われた命もあつたし、場面もあつた」

「……っ」

「君にとって僕ら大人がどういう存在かはわからない。だけど、今だ

けはただ、君に守られていた一人の人間として、感謝をさせてくれ——今更そんなことを、言ってくれた。

そこで初めて自分の本心を自覚する。

……ああ、そうか。俺はずっと、自分を肯定して欲しかったのか。初めて出たときも、皆言っていた。

「どうして」とばかりしか言わなかった——

今更だ。

今更すぎて何も思い浮かばない。

ただ嬉しくて、けれど今更すぎて悲しくて。

——会って少しだって言うのに、レナもらった、一番欲しかった褒め言葉も後押しして、感情の抑えが効かなくなった。

「……だったら、なんで——」

「なんで俺を……」

「俺を、ずっと褒めてくれなかったんだ——!! 父さんも母さんもっ！ あんたも秋穂さんもっ！ 駒川だってそうだ！ どいつもこいつも俺にそんなことをしなくていいなんて言っつて!!」

「それは……すまない」

「謝罪なんて欲しくなかった！ 心配よりもずっと先に言っつて欲しかった！ 大人なんだからっつて子供を心配ばかりしてないで、たまには褒めて欲しかったんだ……っ!! よくやったでもなんでもよかったのにっ！」

「馨さん、落ち着いてっ」

「落ち着いていられるかっ!! どうでもいいことばっかり褒めて！」

肝心な本来の仕事は一つも褒められやしない！ 存在そのものが裏切りだからっつて言っつても、やるべきことが重荷だとしても、それでも……っ!!」

支離滅裂な慟哭と共に、枯れたはずの涙が頬を伝う。

「……人を助けたんだよ……たまに目撃者の記憶を消したりもしたけど、それでも命を助けるには助けたんだ……なのに……」

「馨くん……」

「お疲れ様でも、なんでもよかった……誰もそんな言葉かけてくれなかった。二人みたいに、俺も……」

そこまで言つて、心に抱えていたものが全て吐き出せたのか、やっと思つて感情が落ち着いてきた。

「……すみません、おかしいこと言つて。一番自分を否定していたのは俺なのに、他人に肯定して欲しかったなんて、虫が良いですよね……ガキの世迷言でした。忘れてください。それじゃあ、俺はこれで。何かあつたら呼んでください」

涙を拭い、フラフラと立ち上がつて本堂を去る。

そのまま山道に入つて、ある場所を目指す。

そこまでは、あつさりと着いた。

過去に俺が入水自殺を図つた場所。

成長した今では、溺れることすら難しそうだ。

「……人間つて、面倒くさいな」

「そうでなければ我のようなものも生まれていない」

座り込む俺と、それを見下ろす俺の姿をした虚絶。

「なあ」

「どうした」

「……嬉しかったんだ、褒められて」

「そうか」

「おかしいよな、死にたがつてたのは俺なのに」

「童なぞ、得てしてそんなものだ」

「そっか……そっか」

……大人に、なりたかつたな。



——褒めて欲しかつたんだ——

その慟哭が頭から離れない。

涙を見せることなく己を律していた彼が、あそこまで取り乱すなんて初めてだった。

「まさか、僕らが追い詰めてたなんて……これじゃ大人失格だな」

自嘲を含ませた、安晴の呟きが昼食の最中の居間に響く。

「お父さん、馨さんだつて責めるつもりじゃないと思うの。多分あれは、欲しかった言葉と自分の真相を知って感情が高ぶった結果だと思うの」

「そうかな……」

「今度、ちゃんと話し合ってみたらいいんじゃない？ やつとお互いにひと段落ついたんだからさ」

「そうだね、そうしてみるよ」

芳乃と安晴の会話を聞きつつ、茉莉は馨の慟哭を聞いて、昔から謎だったことが一つ解けた。

自分が忍者修行でこんなことを褒められたというと、決まって羨ましそうな顔をしていたこと。

彼が自分に対する否定感を募らせていたことを知ったのは最近だが、想像以上にとても繊細な性格をしていたのではないだろうか。それが弟っぽいところを生んでいたのではないか。

「……どうしたのだ、茉莉？」

「いや、やっぱりワタシは馨くんのことを知らなかったなあつて」

「ま、馨も繊細だしこのう……でも、明日にでもなれば、普段通りに戻ってるじやろうて。切り替えの早い男だ、それこそ心配よりも信頼をしてやれ」

ムラサメの言葉は馨の本心を上手いこと拾った発言で、そんなことを上手く言っただけならなあと茉莉の心に影を落とす。

それから時間は過ぎて夕食も終えて、茉莉は帰路に着く。

だが道筋は決まっていた。

今日は、必ず――

「……茉莉？」

「馨くん、ちよつとデートをしましょう」

この面倒な男の側にいてやると決めたのだ。

二人並んで夜道を歩く。

デートなどと言って連れ出したが、実際には茉莉の家まで送ってく程度の道でしかない。

「終わったな」

「うん」

言葉少なく、二人は呪いの終焉を喜ぶ。でも今は違う、茉莉がやるべきことは謝ることだ。

ずっと、その働きに感謝していなかったことを。

「ごめんね。ずっと謝ってばかりで。レナさんみたいにワタシ、あなたにありがとうとかそういう言葉言っただけであんなよかったのに……」
「いいさ、今更の話だ。あとで、安晴さんにも謝らなきゃな」

だがそんなことを言われても、馨にしてみれば自分勝手な願望と慟哭だ。自分が謝りこそすれど、しかし謝られる筋合いは無い。

そこでプツリと会話は途切れる。無言で歩き続けて、馨かふと呟く。

「……恋、したいんだよな」

「うん。やっとできるようになったから」

幼少の頃からの夢。

恋をしたい、人間になりたい。巫女姫の道具じゃなくて――

「ワタシはここから初めて、ワタシを始められるんだ――」

そう歓喜を乗せて紡いだ言葉に、彼は優しげに微笑むだけ。

だがそこで、茉莉は馨が何をしたいのかを知りたいと思った。幼馴

染なのに、ほとんど知らない。だから、知りたい。

「馨くんは？ 終わったなら、どうしようと思ってたの？」

「死のうと思ってたよ。でも……今は、どうしようかな。何も無い」

困ったように悩みながら、馨は問う。

「……何をしようか。何をしたらいいと思う？」

「自分で考えてよ。自分の人生、自分が主役でしょ？」

「それもそうだな。俺の人生は俺のものだ、他の誰でもない……けど、そうだな……パツと思いついたのは」

馨の脳裏に浮かび上がったのは、人に本当の事を話さずに孤独であ

ろうとした自分。それが必要無くなったのであれば。

「誰かの幸せを見てみたい、かな……」

——なんて、呟いた。

「きつと俺じゃあ、伊奈神の血塗られた運命を引き継がせてしまうだろうから。周りの人間が幸せになるのを見ていれば、それはそれで楽しいかなって」

卑屈なそれを聞いて、茉莉は変わったようでも変わってないのだなと察して、櫛を飛ばすように言った。

「ネガティブな願いだね。もつとがつついたら？」

「いいんだ、これで。俺は……いや、なんでもない」

悲しげに笑った彼を見て。

どうしたら変わってくれるのかと、茉莉は無性に悲しくなった。

Chapter 4 再始動 変動

「……なんか、しみりしちまったな」

朝起きて、昨日の醜態と、夜中に茉莉を送っていった時の会話を思い出す。

……結局、昨日は俺が癩癩を起こしただけで、それ以上でもそれ以下でもない。変に気を使わせてしまった。

「……恋をしたい……か」

いいと思う。

思うのだが、思うのだが——なにかこう、モヤついたものを感じる。やはり姉貴のように、ずっと側にいてくれたからだろうか？ 姉を取られる弟のような気分なのか？ ……自分でもさっぱりわからない。まあ褒められて癩癩を起こすような男だ、どうせロクでもない感情だろう。

「誰かの幸せを見ていたいのには本当なんだよ、茉莉……」

きつと言っても信用してくれないだろうからと、一人呟いた言葉が虚空に溶けていった。

いつも通り、学院へと向かう——その前に。

俺は私服に着替えて学院まで向かった。早朝にそんなところに行くなど、目的はただ一つ。

「よ、将臣。ムラサメ様」

「おはよう。珍しいな、俺のトレーニングに顔出すなんて」

「馨、落ち着いたのか？」

「無論。癩癩を起こしてもすぐ立ち直れるくらいには大人ぶってるかな。あー……悪かったな、あんな醜態を晒して」

あまりにも昨日の醜態が響いてか、頭を搔いて俯くしかできない。「醜態ってか……当然のことだと思うぞ？ 皆お前の事情には心を痛めてたし、それにいっぱいはいった。別に馨がああしたって、

誰も文句はつけないさ」

「うむ。馨の献身から考えれば、あの程度は癩癩にすら入らん。むしろ正当な報酬を望んでいるのと同じじゃな。気付けなかつた吾輩たちが負い目を感じるのであって、お主が醜態だと思ふ必要は無い」

だが将臣とムラサメ様からしてみれば当然らしい。あんな褒めて欲しかったなどという子供の感情を正当だと言われればこちらが困るというか……なんでそんなに肯定されているのか逆にわからない。

「終わった余韻をぶち壊した上に、世話になつた人に負い目を与えたんだぞ。あれを醜態と呼ばずになんと呼ぶ」

「まあ否定できないけど……でもこれで、馨も解放されたんだし、今から腹を割って話していけばいいんじゃないか？」

「そう……だな。やっと壁も何もなく、これから俺は俺を始められるんだ——」

「そうじゃそうじゃ。ついでに吾輩に泣き付いてもいいのだぞ？ 菓子ばかりに弱い面を見せてはあやつも流石に困ろう。もつと他を頼ってみろ」

「うっ……それはあんまり大声で言わないでくれ」

いつぞや抱きしめてられたことを思い出して、顔が赤くなる。

ニヤニヤするムラサメと、頬を染めて目をそらす俺。そんな様子を見て将臣は何がなんだかさっぱりわからない様子のまま。

「馨は常陸さんに甘えたのか？」

「——」

ズバリ、当てられた。

硬直した。停止した。何も言えない考えられない。

その空白を容赦なく抉るムラサメ様。

「そうだぞご主人。ご主人が診療所の一件で寝ていたとき、馨は茉莉に向かつて少しだけ側にいてくれなどと言って、心温まる光景のはずなのにどこか背徳感すら感じさせる添い寝をしていたのだ」

「やめてよおっ!? アレ俺は手を握って欲しいって言っただけなんだけどー！」

サラッと暴露された事実には、慌てて反論するが、幼刀とその担い手

のすつとこどつこいどもはニヤニヤしながら俺を見る。

「ははあん。馨、お前割と甘え上手だろ？ 弟っぽい可愛げもそこからだよな。芦花姉とかに可愛がられたんじゃないのか？」

「ちちちちげーし!? その昔芦花さんにおんぶされた時をたまに思い出すとかしてねーし!？」

「はははっ！ お主自爆しておるぞ。そんな風に年相応の顔を見せよ。吾輩、お主の子供っぽいところは結構好きだぞ？」

「ッ！ 朝から面倒くせえ！」

「……朝から何をしとるんだお前たちは」

と、そんな風にワチャワチャしていると呆れ顔の玄さんが現れた。

「将臣が遅い上に、何やら騒がしいと思つて来たが……なんだ、馨。そんな拗ねた子供のような顔をして」

「い、いや……なんでもないですよ。ちよつと恥ずかしい話を蒸し返されて慌てただけです」

「しかし驚いたぞ、お前からたまにはまとめ鍛えてくれと言われるとは。もう、終わったと聞いたがまだ必要なのか？」

そう、先日帰つたあと、感情の噴出具合から考えて俺はまだ精神的に安定を欠いていると認識し、ここはひとつ身体を動かして修行かなと思つたのだ。

というか、少し要らぬ煩悶が多い。朝早起きして身体を動かすのは面倒だが、煩悶で苦しむのはもっと面倒だ。

「いえ、俺は……その、昨日昔からずつと本業を褒めて欲しかったと自覚しましてね。否定していた分際で身勝手が過ぎるというのに、それで癩癩を起こすなどまだ子供だと痛感したんです。だから身を鍛えれば自然と精神が付いてくるかと」

「……そうか。お前もまだ、子供だったのだな」

玄さんの様子が変わったのを察し、俺は先に手を打つ。

「謝るのはやめてくださいよ？ 俺が素直に言い出せなかったのが悪いだけなんですから。人と人が言葉も無しにわかり合うなんて難しいんですし、過ぎたことです」

「それもそうだな。なら……孫を助けてくれてありがとう、馨」

「いえ、俺のやるべきことでしたから。けど……むず痒いっすね、なんか」

「むず痒く思っておけ。感謝されるのも、褒められるのも、人間いつまで経っても慣れないのだからな」

そう言つて豪快に笑う玄さんに釣られて俺も笑い出す。いやまったく、まだまだ人生経験の足りないガキだな俺は……

さて、と俺たちは一旦そんな談笑を止め、将臣に目を向ける。

「なあ将臣。俺がいるんだし、元通りの生活に戻つても……あ、お前どうすんだよ？ 帰るのか？ 戻るのか？」

「む、そういえばお前はどうするのだ将臣。ワシはどちらでも構わんが」

事と次第が落ち着き、基本的に発生しても俺だけで対処できるまでレベルは低下した。なので将臣は都会に戻つても何ら問題は無いのだが――

「俺は残るよ。トレーニングも続ける。何回も転校するのもアレだし。それに……ここがいいんだ」

ここにいと、迷いなく断言した。

奴はどうやらここが気に入つたらしい。いや、それ以上の理由もあるのだろう。きつと。

それは恐らく……いや、勝手な推測か。これ以上はやめておこう。年頃の男子には繊細な話題だ。

が、ここで俺たちは失念していた。

「残るのは構わないが、巫女姫様との結婚の件はどうする？ 何もないでいつまでもあそこに世話になるといふのは、難しいぞ」

「あ……」

「そーいやそーだったなア」

考えてみれば将臣は芳乃ちゃんの婚約者としてこの地に縛り付けたのだ。もはやそれが意味をなさなくなつた今、さて困つたといったところか。

まあウチの一部屋くらい貸してやってもいいし、玄さんも一室くらい準備はあるだろうけど。

「戦いが終わったばかりですぐ決まるといっわけでもあるまい。今日は少し軽めにするから、集中を妨げない程度に考えておけ」

「ありがとう、祖父ちゃん」

「気にするな。それから将臣……迷惑をかけたな」

「気にしないでよ。家族だろ？ 俺たち」

「ふっ、そう言ってもらえるとワシも嬉しい」

祖父と孫の団欒も終わり、俺は玄さんと将臣の修行に付き合った、が……

割と厳しいメニューのはずなのに、俺の肉体はサラリと流してしまった。慣れているはずの将臣が汗をかいているというのに、俺はほとんど汗もかかず疲れも無い。

「……なんか、便利過ぎると不安になるな」

「見てるこっちは羨ましくて仕方ないけどな」

「よせ、ロクでもない肉体だ」

魔に通じる存在は、常にその器をベストコンディションに保つと家の資料にはあつたが、俺も似たようなものだからか、普通の人間に比べてスタミナがあると見て間違いない。

しかしそれすらも食い破って痛みと疲労を生じさせる虚絶とは……

「うん、いい運動になった。ありがとうございました」

「あ、ありがとうございました……」

全てのメニューを終え、息も絶え絶えな将臣を横目に玄さんに頭を下げる。いや、本当にいい運動になった。

「馨お前、ひっでえな……!」

「軽い打ち合いだろ？ あんなの」

そう、玄さんの提案で朝の軽い打ち合いは俺と将臣でやることになったのだが、竹刀を逆手に使って最大接近距離での立ち回りで攻めたらそっちに慣れてない将臣にはだいぶ重い負荷になったらしい。

「軽いって……世界の何処で実戦殺法を軽い打ち合いで持つてくる奴がいるんだよ」

「ご主人が馨のような対人特化型に慣れていないというのもあるだろ

うが、もう少し加減をしたらどうだ？ 一応剣道なのだからな」

「あつ、忘れてた」

ムラサメ様がやれやれといった様子で見ってくるが、忘れてたものは忘れてたのだ、仕方ない。息を整えた将臣は何か考えるような雰囲気を出したあと、急に玄さんと俺に聞いてきた。

「二人は俺と朝武さんの結婚ってどう思ってるの？」

……なんとなく読めては来た。

そんな気はしていたともいうが。

「ワシはとやかく言わん。お前と巫女姫様で決めればよい。不安は多少あるが、お前のことだ。良い方向に持って行くだろう」

「俺からすりやお似合いだしいいんじゃないかなとは思うさ。芳乃ちゃんの幼馴染としてなら、ちと女つ氣が多いのが気になるが……ま、余談だな」

あれだけの死線を潜り抜け、弱いも強いも見た仲だ。魅かれ合っても不思議じゃない。

「……あんまり、長く悩めないか」

「存外答えは近くに転がってるもんさ。すぐ見つかる。俺みたいに回り道しなきゃな」

「今日明日で出てくる答えでもあるまい。だがケジメだけはしつかりしろよ」

……どうやら俺の観察対象は、将臣と芳乃ちゃんになりそうだな。家に戻り、軽くシャワーを浴びて制服に着替える。今日の弁当を用意し、朝飯をササつと食って家を出る。

さつき通った道をまた通るといふのは結構微妙な感じだが、朝に身体を動かすというのも悪くない。普段は昼間の暇な時間を使うが、今度から朝にしてみようかな。

「……ん？」

学院での昼。

いつも通りに一人で飯を食おうとしていたとき、それは目に入った。

隣の席で弁当を広げている将臣と廉。

しかし……しかしだ。

将臣の弁当が、菜子の作ったものには見えない。菜子は割と見栄えも気にするので、不揃いということはそれほどない。それに加えて中身がかなりシンプルなものばかり。あの凝り性が時間が無い以外の理由でそんなことを――

と、そこまで考えて。

「……なるほど」

将臣に視線を送る芳乃ちゃんを見つけて、納得した。

なんだ、存外……単純かもな。

こりや婚約解消は無いと見て間違いないだろう。

さつさと飯を平らげて、忘れないうちに用事を済ませようと動き出す。つかつかと歩いて向かうのは、いつものメンツで固まっている女子グループの中にいるレナだ。

「よ、レナ」

「あら、カオル。どうしたのでありますか?」

「いやなに、お前に野暮用がな」

そんな風に切り出してみると、菜子と芳乃ちゃんを除いた女子……ええつと、小野だな。柳生とは割と喋るから覚えてるんだけど、あんまり関わりが少ないんだよな。

まあいいや。小野が信じられないものを見るような目を向けてくる。

「稲上君、いつの間にレナちゃんのこと呼び捨てにするようになったの?」

「知りたいかい? ま、教えてあげないけどね」

「えー、ケチー」

「ケチで結構。レナとは色々あったからね……さあて、レナ。野暮用の話なんだけだよ」

「はい、なんでありませんか?」

不思議そうなレナに対して、俺は何でもないように。

「今度の暇な日に、俺とデートしない?」

そう、言った。

「デートでありますか。いいですねデート——ででで、デートオツ!? カオルにはマコがいるのにそういうのはいけません!」

「いやだからあれは誤解だって前言ったじゃん。まあ本当のところを言うと、色々世話になったからそのお礼を兼ねて何かしなないとって思ってる」

なんか可愛い生き物みたいな顔と赤い頬をしたレナに呆れながら、そういう意図は無いということ伝える。

……というか、何か詫びをしなければと思つて色々考えたらデートみたいな感じになったからデートって言っただけなんだけど。

「急にそんなこと言つて、鞍馬君に何か吹き込まれたの?」

「これでも立派に年頃の男子のつもりなんだけど? 下心丸出しの方が逆に信用されたかな」

「そもそも稲上君に下心あるのか疑問なんだけど」

「あるさ。実際俺だつて女の子に……いや、やっぱ言うのやめよ。ちよいと品性が無さすぎる。おい柳生、なんだその目は」

「まさか稲上君がそんな大胆だったとはーつて思つただけだよー? だつて春祭りに常陸さん誘つてデートしたのにねー」

「だからあれは一緒に回つただけだつて……」

なんて周囲から見た俺像と割と乖離している事実には驚きつつ、レナに返答を聞こうかと思つたのだが。

「茉莉? どうしたの?」

「馨くんとレナさんが……デート……」

——茉莉のやけに驚いた声が、教室に響いた。

「なんだよ茉莉。そんなに俺がレナを誘うのが変か?」

「そうよ茉莉。どうせ馨さんのことなんだから手を出す心配も無ければ、微笑ましく終わるわ」

「……馨くんが、他の子と……」

聞いちやいねえ。

「おーい」

「いたつ!? ……なんですか一体」

仕方ないのでデコピンをして無理矢理目を覚まさせてやる。

不満げな視線を向けられても、こちらとしては非常に困るのだがね。

「なんだってお前がフリーズするのがいかなのだろう。お前以外の女の子に声かけるのがおかしいか」

「あ、ああ、そういうことでしたね、はい。わかっていますよええ。いやいいんじゃないですか？　ワタシとしては驚きましたけど」

……表情は笑顔だが、露骨に動揺している。慌てているわけではないのだが、どこに動揺する要素があったのだろうか？

大丈夫なのだろうか。妙なこと言ったつもりは無いんだが……

「そっか」

「そうですよ？」

「ならいいんだけど……」

あとで時間作って、何があつたのかを聞いておくか。

さて、と気を取り直してレナと向き合う。

「それで、返事はどうだ？」

「えーっと、わたしは構いませんけど……いつ休みになるかはわかりませんよ？」

「構わない。都合の良い時を教えてくださいればいいさ。そっちに合わせるよ。後日改めて、ね」

「はい。楽しみにしますよ」

「期待されちゃったか。頑張るよ」

そう言つて俺は離れようとして——芳乃ちゃんに耳打ちする。

「弁当、作つたんだね」

「なっ——なんで……!？」

「くくくつ、俺を舐めるなよ」

あたふたとする芳乃ちゃんに微笑みつつ、俺は自分の席に戻るのだった。



夜道を一人歩く菜子の頭の中は、とても複雑だった。

馨とレナがデート。

弟のように思っていた彼が、女の子を誘った。いつまでも弟のような、異性とは思えなかったような人が、いつの間にかそんなことを……

(恋をしたいと願うワタシへの当てつけですか)

なんだかムカムカする。

恋をしたいと願っているのは知っているクセに。する相手がまだ見つかっていないのも知っているクセに。

(なにませちやつてるの……)

ここ最近馨に振り回されっぱなしだ。初恋の件もそうだし、急に甘えてきたときもそうだし——別に好きでもなんでもない筈なのに、どうしてここまで頭の中を占めているのか。

その理由はすぐにわかった。

中々変わらない自分と比較しているからだ。

(ワタシはまだスタートラインに立ったばかりなのに、馨くんはもう踏み出してる)

妬心……とはまた違った感情。どちらかと言えば生意気な弟とかそのあたりが一番近い。

(……ワタシが初恋なのに、もう一度会いたいとか言ってるのに、他の女の子に目を向けるとかどうということなんでしょう)

本人が忘れているのだから仕方ないと納得しているが、それでも乙女心とは複雑だ。彼女自身にもわからないほどに。

ただそこまで考えて——これではまるで、自分が彼を意識しているような……と気が付いて、一気に顔と耳が熱くなる。

ブンブンと頭を振って迷いを振り払う。

(なんですかもう！　ワタシは少女漫画のヒロインじゃないんですから！)

唯一の趣味である少女漫画……確か最近読んでいたものもフワフワした天然ヒロインに主人公が振り回されるタイプの作品だった。

決してヒロインにはなり得ない日陰者である自分を重ね合わせたところで、ただ虚しくなるだけ——

「シけた顔してんな。似合ってねーぞ?」

自己を卑下することが自然であった茉莉にとって、その言葉が聞こえたとき、遂に自分も幻聴を聞くほど弱ったかと思った。

まあ幻聴だ。好き勝手に言っても文句あるまいと決めて、少し普段は見せない面に従うことにした。

「いきなり現れてなんですか。あなたの所為で割と悩んでるんですよ」

「ありやそうだったか、それは悪いね。けどどうした? 俺で悩むなんて珍しい」

「デートですよ」

「あー、デートね。うん。別にいいじゃん」

「いいって……あなたはワタシが初恋の人だって忘れてるから気が楽でしょうけど、乙女心は複雑なんですよ」

「……え? そうなの? お前だったの? あの、綺麗な笑顔の子は随分とすつとぼけた反応をする幻聴だ。怒りを通り越して呆れが来る。」

自分でもわかるほど、今ものすごくムスツとした顔をしているのだろう。

だから茉莉は、俯いていた視線を上げて――

「一度だけ引つ張り出して、笑顔はこうするんだって教えたのはワタシだもん! 言ったじゃん。ずっと側に、いる……って……!?!」

本当に馨がいるのを、やっと認識した。

「……えつと……あー……ごめん、なんか」

しどろもどろになりながら、とても申し訳なさそうにしている馨を見て、今まで何を言っていたのかをもう一度考え直して、羞恥心が勝った。

「ごっつ、ごめんなさい! 忘れてくださいっ! じゃまた明日!」

「あつ……行っちゃまった」

本当に何を言っていたんだろう。

久方ぶりに本気で疾走して帰宅する茉莉は、今日は早く寝ようと思心した。

「……多分あれ、初恋より憧れだったんだろうって思ったんだけど……」

一方、残された馨は過去に見た茉莉の笑顔とは憧れだったんだなあ
と思い出していたが、言う相手もおらず、そもそもその目的を達成でき
なくなったので、一抹の寂しさを覚えながら、フラフラと家に戻った。

余談だが、茉莉はあまり眠れなかったことを記しておく。

苦悩

フラリフラリと歩くいつもの通学路。だが今日は少し違う。いつも通りに将臣のトレーニングの見物をしていたムラサメ様が、帰りに家に侵入してきて、俺を叩き起こしたのだ。

「おはよう、馨。吾輩が起こしにきてやったぞ？」

「え……？ ムラサメ様……？」

そんな感じで始まった今日。

……まあ、別に害は無いしで問題はないのだが、女の子が自分の家にいると思うと結構ドキドキした、とけだけ言っておこう。

だってムラサメ様可愛いし。いや本当に。

「馨、学院にいるときはどうしたらいいと思うかの？」

で、人が慣れない環境で割と落ち着かないでいると、いきなりムラサメ様にそんなことを言われた。

「いきなりだな。確かに一番暇な時間だし、困ってるのは目に見えているけど……存在が存在だし、中々難しい」

「吾輩が勝手に学院の中を散策しても構わないのだがな。じゃが、それではご主人を始めとした吾輩が見えるものの集中を欠くことになるだろう」

「いつそ認識されちまえば楽なんだがなあ……んー、まあ暇だったらちよっかい出しに来たら？ 具体的には将臣とか。触れるのはあいつくらいだし」

資格無き者に見えるようにする方が困難だ。レナは長期間憑代に触れ続けた影響で見えるだけで、将臣に至っては奴が憑代だったからというトンデモ理論が残るのみ。

元より見える朝武の直系、および常陸は論外。俺は見えるようにしているし、その気になれば触れるようにもできるが、人を魔に近づけるといって以上口クなものではない。

そもそもムラサメ様がどういう術式で管理者となったのかが不明の為、虚絶のように1から10を行き来できるよう設定することも難しい。ハードもソフトもダメ、エンジニア側もダメとくれば八方塞が

りだ。

更に触れられるのが将臣だけとなれば……

「こりや難題だな。伝説は知ってるから違和感無く受け入れてもらえるだろうが、どうやって実在を証明したもんかね」

「……やはり、難しいかのう」

どこか悲しげな表情をするムラサメ様。五百年も苦しみ続けたんだ、流石にそろそろ救いがあってもいい筈なんだけど、どうやったらいいのか……俺にはわからない。

そう、”俺には”わからないだけで、他の奴ならいい案が出てくるかもしれない。

「そうシヨボくれた顔するなって。俺じゃ方法が思いつかないだけだ。もつと人に聞くんだよこういう時は。この手のものは抱えたって仕方ない」

「む、そこまでする必要は無い。忘れておらんか、吾輩はもう五百年もの時を過したのだぞ。観測者側には慣れてる」

しかしそんな俺の提案は、一瞬でいつも通りに戻ったムラサメ様にバツサリと切られてしまう。が、ここで諦めてはならない。

……いつぞや夢で聞いた、みんな疲れたという言葉が頭の中に残っている。この人も疲れている。年端もいかない子供だったのに、生と死の狭間で干渉できずにただただ眺めて——傲慢な独善、いやたとえ歪んだ偽善だろうとも、俺はそれを見過ごせるほど恩知らずではない。

「嘘つけ。あんたも寂しがり屋だろ？ でなきやそんなことは言わない筈だ。俺が言えた義理でもないが、素直になってくれ。俺はあんたの五百年が報われるべきだと思ってる」

「むう……」

「将臣や芳乃ちゃんにも聞いてみるよ。その方がムラサメ様にとつきつといいからさ」

なんとかして、ムラサメ様の孤独を癒してあげたいと思いつながら、その具体的な考えはまとまらない。

しかし偉大なる先人であり、同時に古き良き大和撫子といった格好

と風貌のムラサメ様と二人だけで歩いているというのは、とてもその……あれである。男の子的に大変マズいのである。

「ジー……」

「な、なんだよう」

「いやなに、お主も女子と触れ合おうと照れるのだなと」

「そりやそうだよ、男だし」

ジト目で何処か楽しそうなムラサメ様から逃げるように早足で歩き出す。

ロリにドキドキするって俺はやはり……うーん……そんな度し難い性癖をしているつもりは毛頭無いのだが。

そうして迎えた学院での授業……なのだが。

「ふんふんふふーん……」

鼻歌を歌って教室を覗くムラサメ様。

何かそわそわした様子の将臣。

たまにチラチラと視線を送ってくる茉莉。

そして色々情報過多で疲れそうな俺――

はつきり言おう。

むっちやこの短時間が濃い。

「……くっ」

普通ならば先生の授業など聞き流して、後でそれなりによい記憶力と茉莉を頼って如何にかするのだが、そうも言ってもらえない。柄でもなく集中して聞いているし書いている。

でなければ笑ってしまう。

……あいつらこんなに着きなかったっけ？

「……助けて」

小さく呟いた言葉は授業の喧騒に消え、俺は机に突っ伏した。

「……はあ……」

「どーしたよため息吐いて」

「いや、疲れただけ」

「？ 今日授業なんて楽なもんばっかだろ」

「色々あるんだよ……」

昼休み。

ぐったりした俺を見かねた廉が声をかけてくる。

「そういや昨日、レナちゃんをデートに誘ってたけど、デートコースとか大丈夫なのかよ」

「鞍馬さん家の廉太郎君があれこれ言ってたのを覚えてるから大丈夫ですよーだ」

「余計なもんばつか覚えてやがって」

「あんなに楽しいげに話すお前を忘れられるかよ」

絶妙に嫌そうな顔をしている廉だが、実際初デートの時は随分と楽しげに報告してくれたもんだ。小春ちゃんも「良かったね」と言うくらいには。

……それがどうして、こんなに女癖の悪い男になってしまったんだか。

いや、女癖の悪いというよりも、こいつがさっぱりし過ぎているのか。

「何よその目は」

「いや別に？ さてと、飯にするか」

そんな風にいそいそと弁当を取り出すとき、目に入ったもの——それは百面相。険しい顔をしたと思えば、途端に頬を緩めてバカ面に。

まあなんだ……将臣君や、君めちやくちや愉快的顔してるやで。そんな風にエセ関西人的語尾になってしまいうくらいには愉快だ。

元を辿れば京都にいた由緒正しい貴族の家系なんだから、喋れたつておかしくはないんだけど、生憎とウチは分家だ。本家より本来の形に近い分家ってのも不思議な話だが。

「廉」

「みなまで言うな、わかってる」

「行くぞ」

「おうさ」

そんな面白将臣君に気が付いていた廉と共に、渦中に身を投じる。空いていた前の席に座り、様子を見てみる。すると視線に気が付い

たのか彼は一言。

「あげないぞ」

「芳乃ちゃんの手作り弁当が楽しみでそわそわしてたのは丸分かりだからいい」

「な、なんでわかったんだ」

「昨日の今日でお前と芳乃ちゃんの様子、それから某子の作った弁当ではない弁当。それだけあれば十二分、俺を舐めるなよ将臣。時間だけならお前より上だからな」

「うぐつ……」

痛いところを突かれたと言わんばかりの面白い表情をしているのでクククと笑い、わざと将臣の弁当に箸を伸ばす。

が、ガシツと手を掴まれて止められる。

「ふーん、惚れた女の手作り料理は渡さない……ってか？」

「いきなり何言ってるんだよ!？」

「凶星だな。隠しても無駄だ……が、黙ってるさ。安心しろ」

大声を出して動揺し切っている将臣に対して小声で反応しつつ、怪訝そうな廉には「からかっただけだ」と言っておく。

「ま、こんな具合だし、飯をもらおうとするのは諦めろ廉」

「将臣があんなに幸せそうな顔してるのは久しぶりだから、俺も食べてみたかったんだけどなア」

「ダメだ。絶対に渡さないからな。何があっても」

「はいはい、わかりましたよー」

おちよぼ口をしている廉が可愛くない。小春ちゃんなら可愛いのに。男女の差とは不思議なものである。

しかし唐突に、真剣な表情に変わった将臣。はてさて何のことやらと思いつながら眺めていると、こんな言葉が飛び出てきた。

「朝武さんのお見合いの話についてなんだけどさ、知ってるよな」

「そりゃ聞いたことぐらいは」

「……それを俺に言うかね」

身内にお見合い話が飛びかかった身としては困る話題だ。が、友人の恋の悩みだ。力になってやろうじゃないかと隠しつつ、話を聞き始

めた。

「今まではどんな人が候補だったんだ？　巫女姫様ともなると、やっぱり大物か」

「お前な、いくら由緒正しい血筋とはいえ外に出ればただの神社の一人娘だぞ？　そういうのは無い。それに、巫女姫様にも恋愛の自由はあるんだぞ」

廉の発言を聞きつつ、そっぴやそっぴやだったなと忘れていた事実を再確認する。

ぶつちやけると俺はあんまり知らない。玄さんとかの街の顔役がお見合いには一枚噛んでいるので、そっちに近い廉の方が詳しいだろう。

俺が詳しい……厳密に言えば稲上が詳しいのは、少し暗めのお見合い事情の処理だな。

過去にあつたらしい、表には言えないそういうのが。

朝武とウチの本家筋——それなり以上の力を持っている家系が、あらゆる意味で無用なものが入らないように睨みを利かせている以上、基本的には無いんだが……利益欲しさに強行手段を取ろうとする奴だっていた。

「そんな奴らを」処理”してきたのが忍びである常陸と、崇りの拡散を防ぐためにある稲上だ。

もつとも、朝武が肩書きを返上して以来、ここ百年程度は大した事も無かったと記録にあるし、せいぜいが写真を持参して本人に直接渡す程度で済んでるのは過去の歴史のおかげか、穂織を守る連中のおかげか。

それでも一応睨みは効かせねばと、要らぬお節介だが無いよかマシな感じで本家は穂織に味方している。

「……ま、廉の言う通りだ。それに穂織はイヌツキだなんだと白い目で見られてる。過度なしがらみを産む存在はこつちとしてもごめんだし、大物でも近寄ってくるのは利益目当てだ。そんなもんは本人に届く前に弾かれる。たまに直接写真を渡しにくるものもいるが、彼女に一蹴される。ウチの本家のような例外こそあれど、基本的にはごく普

通の人が候補に選ばれる」

「本家って……警の本家ってすごいところなのか？」

将臣はわかるのだが、廉にもそんな始めて聞いたぞみたいな反応さ
れても困る。

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「聞いてねえぞ」

「そっかあ……ま、端的に言うとうちの血筋は由緒正しい京都貴族の
末裔でな。それなりの財力と干渉力があるのさ。穂織への干渉を止
めるならこれは方法の一つって訳で、どうしようも無かった時用に来
てたは来てた」

……まあ、俺の存在が長らく続いていたその話を全部無かったこと
にしたのだが。

何せ狩るべき稲上から、狩られるべき魔に近い存在が生まれるな
ど笑えない笑い話だろう。

「なるほどね。でも、どうしてそんな貴族様がこんな田舎に来たんだ
ろうな？ 確か五百年前に急にやって来たんだろ？」

「そんなもん本家の資料を漁ってくれとしか言えねえな。俺ら分家
にや資料は全く無いし。もしかしたら程のいい厄介払いだったかも
な」

「稲上さん家も大変なことだ」

「本家も本家で最近苦勞してるらしくてな……おっと、関係無い話か。
悪いな二人とも」

本家の話を始めるとロクな話が出てこないのでさっさと打ち切っ
てしまう。特に金と土地の話はモメるからな……

将臣が何か納得のいったような雰囲気だが、まあつまりそういうこ
となのだろう。稲上家の謎が一つ解けたみたいな感じで。

「ああ、ごく普通の人を選ばれるっても、多少条件があつてな。えーつ
と、なんだけか」

「街の顔役の親類縁者とかだよ。祖父ちゃんも関わってるんじゃない
かな？ なんだかんだ言って顔役の一人だし」

「廉太郎は無いな。でもそういう風には選ばれるってことか」

「ひでえなこの野郎。事実だからって何でも言っていいてもんじやねーからな。あ、でも馨にも話は来たんだっけ？」

「俺の従兄弟だよ。名前だけ上がった。あと例外と言えはお前だな将臣」

「叢雨丸を抜いたってだけで婚約者になれたってのは驚いたぜ？」

「本当は色々と考えた末に——なんだが、事情を知らないこいつにはわからんだろうな。」

事情……そこまで考えて、今朝のムラサメ様とのやり取りを思い出す。

事情を知っていれば、駒川や安晴さん、それに玄さんのように見えなくとも納得する……のか？ でも崇りが消えた今、どうやってそれを信じさせる。叢雨丸を折った将臣の存在だけで、その理由足り得るか？

「馨？」

「いや考え事」

やはり答えが出てこない。他人を頼ろう。

しかし俺が悩む間に話がだいぶ進んでいたようで、付いていくのに少しの時間を要した。芳乃ちゃんレズ説とかいう噂があったとか初めて聞いたが、お見合いを片っ端から断り続けたから……とのことらしい。

「けれど、どうした？ 急にそんなこと聞いてきて」

「いつ、いや別に？ なんでもないからさ」

「なによその中途半端な態度」

もう隠すのは無理だと判断して俺から切り出してやった。

「廉、こいつ芳乃ちゃんに惚れてんだよ」

「ツツツ!？」

「なんだ、そんなことかよ。隠してるつもりだったんだなあ、それで」
慌てて周りを見渡す将臣がおかしくって笑ってしまふ。あれで隠しているつもりとは……腹芸が似合わない男だな。

「おおお、お前ら!?! てか馨!?!」

「安心しろ、この程度の音量なら喧騒に消える。それに誰も聞いてな

い」

「むしろ気付かれない方がおかしいレベルでわかりやすいんだよ。おわかり、ボクちゃん」

「うっせえ！ こちとらそんな余裕無かったんだよ！」

「じゃ、今は余裕生まれて持て余してるんだな」

「それは……まあ、うん……」

なんとというか、弱々しい。

自信が無い、というわけでもないだろうが。

「ま、ずっと同じクラスの俺たちですら所詮知り合い程度で壁を感じるし、昔からの付き合いの馨や常陸さんにも少し余所余所しい。その上二人とも一歩引いた感じだった……お前が来てからだぜ？ あんないつぞやみたいに愉快な感じになったのは」

「だな。意外かもしれないが、俺はちよいとしたきっかけがあつて二人とそんなに話してもいかなかったんだ。するとしても事務的なことばかり。本当にお前の一件がきっかけでまたふざけ合えるくらいには戻ったよ。——ありがとう」

「よしてくれよ。俺は何もしてないんだし」

「変化になってくれた、それだけで十二分だ」

そんなこんなで弁当ももう少し。

結局いつも通り、一番早く食べ終わるのは俺だった。

「将臣、芳乃ちゃんが好きなら気持ちだけでも伝えろ。変に拗らせる」と面倒なことになる。それに、お前も彼女も生真面目だからな。真剣に言えば、真剣に考えてくれる」

「お、おう」

「んじゃ、俺はお先に。廉、アドバイスしてやれ。従兄が困ってんだぞ」

「ういうい。さて将臣、何が聞きたい？」

「え、えーつと……」

なるほど、これが青春かと思いつながら二人から離れていく。

見てる分には微笑ましいが、しかし……これは、当事者になると面倒極まりなさそうだな。

……まったく、物好きな奴らだ。
嬉しいやら苦しいやら。

誰かに想いを向けられるのも、誰かに想いを向けるのも、どちらにしても何処かで傷が生まれる。

——実に面倒だ。

こんなものの、どこがいいんだ……？

俺に教えてくれよ菜子。それを望むお前なら、きっとその答えを――

恋とは、俺には度し難いものだど決着を付けてからしばらく経てば、もう学院も終わり。さて帰るかど荷物をもとめ始めたときに、比奈ねーちゃんが寄ってくる。

「稲上君、駒川先生から放課後保健室に来るようにと」

「……？ わかりました。すぐ行きますよ」

「また何かしたの？」

「多分違うと思う。じゃ、また明日」

ヒラヒラとねーちゃんに手を振って、教室を出て保健室に向かう。一体どうしたというのだろうか。

というか、普段なら診療所にいる筈で、最近の事情も考えれば学院に来る筈など無いのだが。

「来たぜ駒川。俺だけ呼び出すなんてどうしたよ」

「例の件が片付いてしまっただね。その報告さ」

入って早々に薄暗い話題。

例の件——恐らくはレナの件か。となるとリヒテナウアーを洗い終わったってことでいいんだな。

「リヒテナウアー家のことか？ いくらお前でもそう簡単に情報は……」

「出揃ってしまったんだよ。驚くほどに「何も無い」……つまりは真っ白なんだ。資料を取り寄せるまでもなく、リヒテナウアーはこっちに関係が一切無い」

「マジか。ってなると祟りはリヒテナウアーじゃなくてレナに、しかもそのガワに用があったってことかよ？ つくづく意味わかんねえ」

リヒテナウアーが白。

レナも白。

黒いのは祟りだけ。ますます謎は深まるばかりでお手上げだ。

「とにかく、リヒテナウアー家がそうじゃないなら八方塞がりだ。私だけじゃどうしようもない」

「悪いいな、助かったわ。で、そんだけ？」

「それに関係してもう一つ。彼女、確か玄十郎さんのツテで来たんだよね？」

「なんかそうらしいな。噂程度には」

「だったら恐らく、志那都壮に宿泊記録が残っている筈だ。そつちを当たれば何か出てくるかもしれない。けどもしもつと昔なら——」

「なるほどな。デートがてら、当たってみるのも手か。サンキューな」

「デート？」

「ああ、レナとするんだ。デートってか、なんだ。お礼も兼ねた街巡り」

「ふーん、そうかい。ま、私は構わないけど、存外妬心を抱きそうな子もいるよね」

妬心。

そこまで考えて、昨日の茉莉とのやり取りを思い出す。あんな肩透かしに終わったのは初めてだし、というか……あれはどうしたらよかったのだろうか。

ニヤニヤしている駒川にもどう反応したものかと悩み、とりあえず差し障りの無い反応をすることにした。

「そーかい。もう邪魔だろ？ 帰るぜ」

「月並みだが、気を付けて帰るんだぞ」

「比奈ねーちゃんでもあるまいし……じゃーね」

一足お先にと扉を開けて、目の前で待っていたであろう奴と目が合う。

窓から差し込む光を背にした彼女は、学生服だというのに神秘的だった。

「待ってたんだ」

「昨日の仕返しです」

「可愛い奴。なら俺は本音を言えればいいのか？ 実はアレは初恋じゃなくて、憧れだったんじゃないかと思ってたんだって」

「へ……？」

間抜けな顔して間抜けな声を出した茉莉がなんだかおかしくってケラケラと笑い出してしまふ。

「な、なんで笑うの。人が真剣に悩んでたっていうのにつ」

ムスツとした顔でする抗議。学院だというのに素が出てくるほど彼女は本気で悩んでいたみたいだ。

「あははっ、いや、ごめん。そっか、お前真面目だもんな。言っただろ？ 初恋かもしれない程度のものでしかないって。なにマジに受け止めてるんだよ」

「で、でもあんな言い方されたら意識しちゃうってば！ もう一度会いたいとか綺麗な笑顔とか……とにかくそういうところが卑怯なの！ 馨くんは！」

「あ、それは、その……」

「……まあ、許してあげるけど」

「そーかい。なんかお前の女の子らしいところ、久しぶりに見た気がするよ」

「久しぶりって、確かにそうだけど。というか女の子らしいところって何？ ワタシちゃんと女の子だよ」

「拗ねるなよ、そんなつもりは無かったんだ」

実際、女の子らしいところとは年相応の、と付く。今まではお互いに従者と始末屋として接していたところもある。

そういう意味で、こうしてどうでもいいことを話し合って、拗ねたりなんだりは本当に久しぶりだ。

パイとそっぽ向いた茉莉の頭をわしやわしやと撫でると、彼女はくすぐったそうにしながらも「そんなので誤魔化せませんよ」と何時もの調子に戻っていた。

昨日構ってやれなかったし、ちゃんと向き合ってやらないとなア。

「……？ なんですか。急に手を差し出して」

だから、手を出して。

「ちよつとで悪いけど、デートしてもらえるかな？ 俺の初恋かもしれない人」

なんて、からかってやったりするのだ。

「構いませんけど何処行くんですか」

「田心屋」

「奢りで」

「いいよ」

……どうやらダメーじになってないようだ。

「なにがデートしてもらえるかなですか。あんな気色悪いセリフ言つてときめく女の子がいると思ってるんですか。今時あんなの漫画でも出てきませんよ。ワタシはあなたと付き合い長いですからね。他意は無いはわかってますけど、普通は引かれますよ」

「ごめん」

「いいですか？ 大体あんな言葉で女の子がその気になるわけないじゃないですか。もう少し普通に誘ってください。いちいちデートとか言わなくていいです。普通に何処かへ行かないくらいでいいんですよ。あれでキュンキュンする女の子がいれば相当なメルヘンです」

「うん」

「そもそも馨くんは女の子の扱いが下手くそですし、その手のイロハもわかってないでしょう。どうせ廉太郎さんから又聞きしたテクをうる覚えで使っているだけですよね」

「はい」

「ダメですよそういうのは。ちゃんと女の子には真摯に対応しなくてはなりません。みんながワタシみたいに馨くんのへなちよこ態度に慣れているわけではないのですから」

着いて早々パフェと紅茶を注文し、来るまでの間はどろどろそうかと思っていたらこのザマである。

——ボロクソに言われている。

呆れ返った茉莉子は、さつきから一切そのジト目と不満気な表情を変え、ることなく俺を容赦無く罵倒している。

「更に言えばなんですか、憧れかもしれないって。あの時初恋かどうかを聞いたんですよワタシは」

「だって、考え直せばなんか恋とは違うかなーって」

「今考え直せばでしょう？ 当時はどうなんですか。わかりませんけど」

「なあ。さつきから黙ってりや、まるで自分を意識して欲しいみたいな発言ばつかったのはどういう意図なんだ？」

「……あ」

「あつてなんだあつて。レナと俺がデートするのがお前にとってそんなに大きな事かよ。俺とお前は半分姉弟みたいなもんだしき、別になんともないだろ？」

唾然とする茉莉子に対して、何を今更と呆れながら問う。

そう……結局、何処まで行っても俺たちは姉弟のような幼馴染ではない。だからこそ、異性として見るのは極めて難しい。所詮は踏み込み過ぎて家族にも等しい、あくまで仲の良い友人止まり。

お互いにお互いが特別になるなど、決してあり得ないのだ。

それに俺の血は呪われている。芳乃ちゃんじゃないが、誰かにこれを背負ってくれなどは到底言えない。

「茉莉子？」

黙ってしまった茉莉子に呼びかけると、彼女はハツとしたように一瞬身体をビクツとさせると、慌てながら答えた。

「た、確かにそうなんですけど……なんだか、そんな弟みたいな馨くんがいつの間にかそんなのになっちゃって生意気だなあつて」

視線はフラつき、あたふたとした様子から伺える通り、何か隠しているに違いない。というか挙動不審だ。

「本音はどうなんだよ」

流星に毎回あんな反応をされては困る。知れるなら知っておきたい。俺の所為なら解決してやりたいし。

根負けしたのか、茉莉子はおずおずと、決して視線を合わせることは

無く、小声で喋り始めた。

「……わかんないよ、本当は」

「わからないねえ」

「だってワタシたち、姉弟みたいになんか一緒じゃん。だから今更何か変化なんて想像できなくて、急にこんなことになって——どう考えたらいいのかな」

「どうってお前、どうせ変わんねえよ。それに俺の面倒くささは菜子もよく知るところだろ？」 どうせ最期までお前の弟分さ」

そう言い切ると、今度は視線を合わせて真面目な顔に変わった。さつきから忙しい奴だ。

「それはダメです。姉的存在として見過ごせません」

「本気でそうしようとしたら文句言うクセに」

「うっ……で、でもダメだからねっ。ちゃんと人並みに幸せとか恋とか色々求めること！ 約束だよっ」

「……難しいなあ。まあ、善処はしてみるよ」

人並みの幸せってなんだろうさね。

俺は今まで通りの生活で十二分に満足なんだが。

と、困っていると注文の品が運ばれてくる。俺がプリンパフェ、菜子が抹茶パフェだ。

今日は甘いものが食べたい雰囲気なのでプリンパフェにしたが、うむ、甘くて美味しい。

この前は確か……何食ったっけ？ たまにフラツと寄って食べてくけど、意外と食べたものは覚えてない。まだメニュー全制覇はしてなかった筈だが。

と、そんな風にスプーンを動かしていると、物欲しげな視線を感じる。

「……食べたいの？」

「いえ、別に」

「ふーん」

菜子の態度は素っ気ないが、チラチラと視線が向かってくるのが露骨にわかる。あんまりにも鬱陶しいので食べる手を止め、ススツと

前にいる茱子に向けてプリンパフェを押し進める。

「ちよつとやる」

そう言えばやけに驚いた表情でこつちを見る。

「食いたいんだろ?」

「平気ですよ」

「なら視線を向けるな鬱陶しい」

「うぐつ……仕方ないじゃないですか、美味しそうなんだし……」

「……わかった。ほれ」

もう焦れつたのでスプーンで一口取ってから、茱子にズイと突き出す。

「口開けろ」

「えっ、これ、あーんですよね?」

そんなわかりきった事を言ったから、また再びあたふたと慌て出す茱子。さつきと違うのは顔が赤いことくらいだろうか。

……というか、友人の家であーんやってるんだし、もつと恥ずかしいことをしてるんだから気にする必要も無いのでは? 公衆の面前とはいえ、人目に付きづらい位置。それにお前将臣と鮎の塩焼きで甘酸っぱいことしたとか聞いたぞ本人から。

ははあん、まさか……

「恥ずかしいのか」

「当たり前ですっ」

「将臣とデートしたときと似たようなもんなのかア?」

「〜!? それいつの間知ったんですか!」

「蛇の道は蛇だよ茱子。あーんなんて俺たち割とやってんだし、今更恥ずかしく思う必要は無いぞ。それに――」

……少し、本音を言い淀む。

これこそ誤解されないだろうか? いや、茱子はきつと俺を理解しているから、そんなことはないだろう。

たまには素直になってみる、というのも悪くない。

不思議そうに小首を傾げている茱子を見つめ直し、本音を告げた。「年相応に可愛いところを見せてくれるお前は好きだよ」

——すると。

「あ、あはく……昨日の仕返しですね？　ふふ、ワタシはそんな手には引っかかりまひえんによっ！」

顔を真っ赤にして動揺し、言葉を囁んでしまった。

……やはり台詞回しに問題有りだなあ。そんなつもりはないんだけどなあ……

「囁んでるじゃん。昨日の仕返しって……あー、うん。あれね。うん。てかいいからほれ、食え」

「食べさせなくていいですからっ。自分で食べますっ」

スプーンを手に取り食べると、それはまあ幸せそうに顔を惚けさせるが、しかしその数秒後には突如して再び顔を紅蓮に染める。

忙しい奴だなあ、とまた思うのだが——なんで茉莉が顔を真っ赤にしていたか俺も理解した。

「……馨くん」

「……言うな」

これ関節キスじゃねーかと。

今更何を、とは思うが俺下手したらあーんよかレベルの高いことを茉莉に要求していたのかもしれない。

返されたスプーンを再びパフエに戻して食べ始める。

「忘れよう」

「はい」

無かったことにしなければ。

それこそ公衆の面前で何をしているやら、である。

その後話すことも無く、無言でパフエを食べていたが、唐突にケータイに電話が入る。

さて何事やら……と思つて確認すると、意外な人物からの電話だった。



「悪い、ちよつと電話出てくるから外にいる」

「あつ、はい。わかりました」

いそいそと席を立て店の外に向かう馨を見送った茉莉は、本当に何をしていたんだろうか——と深くため息を吐いた。

初恋かと思っただらそうじゃないかもとか言われて。

でも年相応の面が好きとか言われて。

急に可愛いとか言われて。

どこまでも変わらないなんて言っただりするけど、十分に変わってきているような気がして。

(……顔が熱い)

頬の熱がまだ冷めない。

相手は弟のような人なのに。本人も認めているのに。

どうして妬心のような、複雑な感情が渦巻いてしまったんだろうか

「ふふくん？ 青春してるね、常陸さん」

「わっ!? ま、馬庭さん……びつくりさせないでくださいよ」

いつの間にか笑いながら、芦花がひよつこりと茉莉に話しかける。

「馨と何やら甘酸っぱいことしてたみたいだけど、どうしたの急に？

何かあった？」

「まあ……お互いによくわからない部分の擦り合わせをしていたら、自分でも更に知らないしわからないことがスルツと出てきたくみたいな感じですかね」

茉莉にしてみても、さっぱりわからないことばかりだ。そもそもなんで自分がここまで馨に執心しているかもわからない。

「二人は結構、不思議な関係性だね。アタシ、馨から初めて話を聞いたときはびつくりしちゃった」

「あは、普通は想像付きませんよね。巫女姫の従者のワタシと馨くんが友達だなんて」

と言っ、ああそうかと理解した。

稲上はどこまで行っても稲上——元来の使命を知る者以外には、単なる変人貴族の末裔ということが終わっている。

幼少の頃から自分たちの存在意義を知っていた二人にしてみれば

その触れ合いは自然だが、周りの人間から見れば不自然極まりない。武家だった朝武、それに従える常陸——そして何故か田舎の穂織に來た京都貴族の稲上。どう考えても組み合わせが悪い。武家に忍者に貴族とは……

しかし、稲上は魔物殺しに総てを捧げた一族だと判れば違和感が無い……が。

それでも何故、稲上が魔物殺しとなったのかわからない。

「しかし、馨もあんな顔するんだね」

「馬庭さんは、馨くんがこんな人だって知ってたんですか？」

「ううん、全然。廉太郎と小春ちゃんと遊んでいるときも、一步引いた感じだったし。同い年の子たちと比べても……なんていうかな、歪な感じがちよつと」

「歪——」

困ったような表情で言う芦花の発言は、近くですつと見てきた菜子からしても納得の行くものだ。

彼の境遇と心情、暴走する殺意と意志を無視して行動できてしまう現実。

年相応の経験よりも先に、年不相応の絶望を見た子供。

そして、必要とあらば友人を殺さねばならないという使命。

あれで歪にならない方が不自然だ。

「そんなにわかりやすいんですかね」

「わかりやすかったよ？ 流石に同年代の子たちの中に入れて目立つっていうか。今だと……昔に比べてだいぶ落ち着いたかな。年相応の顔は、たまにしか見えないけど。アタシが初めて馨と会ったときは、一番ギラギラしてた頃なんじゃないかなあ」

芦花が馨を初めて見たとき。

——それが本当に子供なのかと恐怖心すら抱いた。

生きているのか死んでいるのかわからない雰囲気、腐って澱んで黒く濁った目、ゆらゆらとした立ち振る舞い、どこか破滅的な発言、笑っていない笑顔、機械的にジツと観察するような視線——

生き物としても相容れない、恐ろしいもの。

「ただ少しすると、急に落ち着いてほんの少しだけマシになったんだけどね」

「……」

マシになった——入水自殺未遂だとすぐに察せた。しかし離れていた時期があったとはいえ、全然知らない事実がポロポロと浮かび上がってくる。

「やっぱりワタシ、全然知らないなあ……友達なのに」

「お姉ちゃん代わりとして嫉妬？」

「急にレナさんとデートするとか言い出して何マセちやったのかなあ」と

「……あれ？ 常陸さん知らないの？ 馨って廉太郎と一緒にナンパするくらいには軽いんだよ」

「なあっ!? おかしいと思っただらそういうことですか！ 又聞きどころじゃなくてそういう風に口説いてたんですか！ 本当にロクでなし！ ワタシをチョロい女か何かと勘違いしてるんじゃないのかなあのバカ！」

芦花から明かされた真実に、茉莉は驚きのあまりこの場にはいないバカを罵倒した。

昔からロクでもない男だし、甘えてきたりと色々と思うところはあつたが。

いや何故そうなったと茉莉は声を大にして言いたい。ナンパしてたとか全然知らなかった。

馨がナンパ？ 全然似合わない。似合うはずもない。決して似合っていない。そもそもあんなヘタレ男がナンパなどできる筈がない。どうせむしろ女の子に変な男と思われて終わりだろう。

が、しかし——

「常陸さんって、馨のことになると色んな顔するんだね。なんだか意外」

そんなことを言われて、そういうものなのか？ と疑問を抱く。

「そうですか？ 自分ではわからないものでして」

自然体で接している以上、仕方ないとは思うのだが。

「うん、本当に楽しそうで見てるこっちも楽しくなってくるくらいには」

などと笑顔で言われてしまえば、そういうものかと納得してしまうものだろう。

「常陸さんはさ、馨のことをどう思ってるの?」

「どうなんでしょうね。どこまで行っても姉弟みたいな関係で終わりそうな気がしますけど」

「漫画のヒロインみたいなこと言っちゃって」

「あは、ヒロインじゃありませんよワタシは」

さてはて、そこは菜子にもわからない。

そんな風になっていると、渦中の男が戻ってくる。

「あーびっくりしたー……ん、芦花さん? どしたの?」

「馨が留守にしたから、常陸さんと話をね」

「へー、珍しい組み合わせだね。何、俺の陰口?」

「陰口というよりも……意外な一面? ほら、馨って今と昔じゃだいぶ雰囲気違うじゃない」

「昔の話は勘弁してくれ。面白いわけでもないでしょ」

「え〜? いつだかおんぶしてあげた時にねーちゃん呼びしてくれた話題とかあるの?」

「やめてよお!! 比奈ねーちゃんもそうだけどうしてそういうトコばっか覚えてんだよお……」

ニヤニヤと笑う芦花と弱った様子でガツクリと項垂れる馨を見て、つい笑ってしまう。そんな菜子を見て、片方は微笑み、片方は更にへこむ。

「さて、じゃアタシはお仕事に戻るから」

「ああ、うん。あとあれだ、この前また食器見つけたから休みの日持つてくよ」

「りよーかーい」

仕事に戻る芦花に田舎特有の狭い話を振りつつ、馨は菜子の対面に座る。

「悪いいな、親父から色々ね」

「千景さんから？ 珍しいですね」

「ま、安晴さんから色々報告されてたみたいだし、仕事も落ち着いたみたいでさ。まだいくつか残ってるし、それに本家でまたなんかあったみたいで……その火消しだったさ」

やれやれと面倒くさそうにため息を吐く馨の様子から、相変わらず本家と分家で色々あってどちらも大変なのだなと察する。

「ま、シケた話はどうでもいい。親父もお袋も、まだ帰ってこれないってことさ。ついでに計画書なんだとか……家帰ってやること増えちった」

プリンパフエを食べながら、おーおーやだやだと言いながらも満更では無さげな雰囲気。

相変わらず素直じやないなと思いながら、同じように食べる。

そんな風に通り過ぎして、田心屋を後にする。もちろん代金は馨持ち。やっぱり払うと言った菜子に対して、二言は無いとゴリ押しした。

「少しは機嫌直ったか？」

「機嫌というか、単にモヤモヤしていただけですよ」

「お前が急になってなったら、まあ知ってる側としては納得するだろうけど、それはそれとしてモヤつくだろうしな」

なんてことの無い理由だったのだとやっと分かって、ああなんだと納得する。急な展開に驚いただけで、他は大したものではなかったのだ。

——もつと探せば他に何かあるのかもしれないが、菜子は敢えて考えないようにした。考えてはならないと、彼女自身が戒めた。

「あ、そうだ。ワタシ、色々考えて宴会というかそんな感じのお祝いをしたいなあと思ったんです」

「何の？」

「ひと段落ついておめでとう……みたいなの？」

「あー、そうか。宴会か。いいなそれ、伝えてみたらどうだ？ 俺はちよいやることあるから場合によっちゃ出れないかもだけど」

馨はそう言いながら、ふと何かを思い出したかのように――

「あ、そうだ。可愛いとか好きとか本音だから。おべっかじゃないぜ」「主語を付けてよっ!? それだと告白みたいじゃん!」

「本音を言うんだから告白では?」

「まあそうだけど、そうなんだけど……」

そういう反応が欲しかった訳ではない。しかしこのすつとこどつこいのロクでなしは中途半端に真面目だからこういう反応をするのが当然――

実に、乙女心とは複雑である。

「……というか、馨くんナンパしてたんだって? 芦花さんから聞いたよ。ワタシの知らないところで何してたの」

「あ? それ? 物の試しにとってやってみただけだ」

「それで鍛えたテクでワタシにコナかけてたんだ。ふーん……」

「あいつって!?! やめろ肘を入れるな勘弁して!」

しかしその辺の女の子と一緒にくたにされていたというのは、茉莉としては見過ごせないことだった。

無銘

「……お、終わった……」

柄にもなく早起きして、昨日親父から送られてきた計画書のコピーを取り、それに不備が無いかを確認していた。

計画書は何かというと、シンプルに叢雨丸のレプリカ作成だ。もちろん、ただの刀でしかないので、折れないように計算すると——など、だいぶ無茶な数字や人数制限をより厳しくするとかそういうことになっている。

ついでに言えば土台となる岩ごと作るため、とんでもない予算とかがあつてまあ……不備が許されないわけだ。

まだ計画段階だし、あくまで一つの案として……程度でしかないが、これも重要なこと。

叢雨丸のイベントが無くなった穂織は大丈夫なのか？ という心配から始まり色々と計算した結果、近いうちに財政難になる可能性が非常に高く、楽観視ができない。よって代わりとなるものを……というのがこのあらましだ。

「さて、とりあえず持っていくか」

虚絶まで引つ張り出して確認したのだ、決して不備は無い……と思いたい。というかそうなると俺の二時間が無駄になる。

書類を茶封筒に入れて、鞆にしまい込む。とつとと安晴さんに渡さねば。

眠たい身体に鞭を打つようにひたすらに歩く。歩いて歩いて歩き続ける。いつも通り朝武家に向かうだけなのだが、二時間も慣れないことやっていた所為か、なんだかシンドい。

——精神状態の影響を受けやすい肉体故、致し方あるまい——
……とは接続しているご先祖様の談だが、そんなこと言われてもとは思う。疲れるものは疲れるし、漲るものは漲る。

人間である以上はそこに帰結してしまう。いや、人間とは言い難いか。

人間でありたいんだけどな——

欠伸をしながら歩き、そして辿り着く。ここ最近頻繁に訪れている所為か、茉莉じゃないが、だいぶ俺も毒されていたらしい。呼び鈴を鳴らすことなく入ろうとしてしまった。

「……いけね」

すんでのところで踏み止まり、呼び鈴を鳴らす。しばらくすると出てきたのは――

「よ」

「珍しいな聲。まだ家でグータラしてる頃なのに」

「ちよいと仕事があつてね。上がるぞ」

将臣だったが問題は無い。

鞆から茶封筒を取り出して朝武家に上がる。居間に向かって開口一番。

「ちやろー」

うわ、なんかみんな微妙な顔をしてる。そんなに酷いかなこれ……割と気に入ってるのに。

「まあいいや。どうもです、安晴さん」

「どうしたんだい？ その茶封筒」

「親父殿から、とだけ。アレですアレ」

「ああ、アレね。わかった。あとで見ておくよ」

「一応忘れない内にと。あとすみませんでした」

「いいって、気にしないでよ」

「お言葉に甘えさせていただきます」

さて、やるべきことも終わってしまったし、今日は一足早く学院に行っているか……とか思っていたのだが。

「は？ 風邪？」

『はい、芳乃様が』

いつまで経っても御一行様来ないし、朝のHRで今日は休みだと比奈ねーちゃんから伝えられたしで割と困惑してしまい、どうせ暇しているであろう茉莉に電話をかけたなら芳乃ちゃんが風邪を引いたという事だった。

「何かそんなに疲れるようなことあったっけ？ 最近」

『ほとんど完徹状態だったみたいですけど、何があつたんでしょかね。今朝からやけに有地さんとよそよそしいというか』

「あー……うん、だいたい分かった。だからアレだ、お前もそつとしておいてやれ」

『……？ まあ、わかりました』

「じゃまた。菜子、頑張れよ」

『はい？』

ゲロ甘な渦中に身を置く菜子が哀れでならない。強く生きる……とか思つたが考えてみればあいつそういうのからかうの好きだったから問題無いな。心配して損をした。

むしろ恋をしたいのなら良いモデルケースが手に入ったのでは？
俺は訝しんだ。

「……さあて、どーしたもんかな」

休み時間もほとんど終わりだ。

見知つた奴らしかないが、気楽に接せるのが廉かレナしかいない。その廉とレナにしたつて、他の奴らともよくつるむ。俺だけには構つてはくれない。

——意外と寂しい。

将臣もいない、ムラサメ様もない、芳乃ちゃんもない……それに菜子もいない。

いるはずなのに、いない。

疎外感よりも先に寂しさが来る。昨日菜子も言つてたが、姉弟みたにいつも一緒——それに俺の、憧れの人がずつと側にいてくれた……だつていうのに、何故俺はずつと忘れていたのだろうか。

「……」

自分自身が、愚かしくて仕方ない。

本当はありがとうとか、俺はお前に救われたんだとか、色々言いたいのに——実に今更だ。

次の授業の支度しながら、あの日の笑顔を思い返す。あの綺麗な笑顔は菜子だった——菜子こそが、俺の始まりだった。

何も無かつた俺に、火を灯してくれた恩人……

「——茉莉」

小さく彼女の名を呟く。

我ながら実に狂っている、壊れている。

彼女が従えるべき巫女姫よりも、俺を優先して欲しいと思うなんて。いいや……優先して欲しいんじゃない。

——いつも通りに、ただ側にいて欲しいんだ。

本当にそれだけでいい。

いつか彼女が恋を実らせる、その時まで。

だけど彼女の弟分であるのは、最期まできつと。

「カオルー、一緒にご飯食べましょうっ」

「俺と食べても面白くねえだろ」

「わたしが面白いからいいのです」

「そーかい」

レナが俺の隣に座って、弁当を広げる。

「物好きな奴だな、お前も」

微笑むレナに、どうしたらいいものかと適当な言葉を投げるしかない。弁当を広げながら、ふと思いついてジツとレナを見つめる。

……何が、違う気がする。

祟りがガワに用がある——とは知っていたが、実のところ具体的に何のためにはわからなかった。祟りの始まりは犬神ならば……

「カオル？」

「悪い悪い、見惚れてた」

「またそういうことを言ってる」

あまりにもジツと見てたものだから、小首を傾げられてしまう。それっぽいことを言ってる煙に巻こうとしたら、察したような視線を向けられてしまった。

レナはこちら側だし、まあ別に構わないんだけど……

「あ、デートの話なんですけど、今度の土曜日に休みをもらいまして。そこでならできますよ」

「ん。わかった。そんな感じで。待ち合わせは……学院手前の坂にしようか」

「了解であります」

「……なあ、レナ。お前割と言葉遣い固くない？」

弁当をつつきながら、不意にそんなことを言ってみた。「であります」とか割とその、比較的妙に固い印象を受けていたから気になっただけなのだが。

「？　そうでありますか？　今でも固いのですか……」

「いや俺の印象つてただけだ。ごめん、やっぱなんでもない。けつたいなことを言ったわ」

「ケツタイ?！」

「あつ、ごめん。方言出た」

たまーに、本当にたまーに方言が飛び出る。親戚に会いに行っても基本京都言葉だし、俺も影響されたのだろう。しかし、俺の作る料理は相変わらず雑な味なこと。見てくれだけはいいんだがなあ……

話題にも困ったので、昨日の話を振ってみる。

「昨日、菜子とパフェ食べに行ったんだ」

「おおー、それは楽しそうですね」

「誘い文句はボロクソに貶されたけどな。あいつ、ホント容赦無くこつちを罵倒しやがって……しかもなんだ、俺がナンパしてたつていいじゃねえかよ。肘入れるほどか」

「ふふふつ、マコとカオルは本当に仲良しですね」

「そりゃ姉弟みたいなものだし。ガキの頃からずっと一緒だ」

……しかし、たった一日会えないだけでどうしてこんなにも苦しいのか。

将臣の甘さが移ったのだろうか。いつぞや虚絶が言っていたが、俺も覚悟が鈍くなったもんだ。

ふと弁当に目を落としてみると、最後の一口だけになっていた。対してレナは半分ほどで、あいも変わらず早い自分に微妙な感想しか浮かばない。

「……ありや、早かったな。これじゃ話し相手くらいにしかねれない

や。俺だけ喋ってもあれだし、レナはなんか面白いことあったか？」
「んー、わたしはですねぇ——」

そんな風にレナの話を聞いて、それなりに楽しかった。
ただ昼食も終われば、また寂しさが飛来する。

——恋煩いか？——

続く授業の中で、珍しい奴が茶化してくる。無論、そんな筈がない。
いやあり得ない。俺が恋などする筈も無ければ、していい筈が無い。

——難儀な——

よりもよつて、そんな螺旋に落としたお前が俺に言うかと嫌悪感
を感じながら、ノートを取り続ける。

しかしふと気になって、奴の素体となったご先祖様は如何にして男
に惹かれたのかを考えてみた。

……当然だが、俺は虚絶を知っていてもご先祖様については何も知
らない。名前くらいだ。更に言えば、この刀が如何にして呪物となっ
たかは、理由は知っていても経緯は知らない。

稲上は魔物殺しの一族……なんて聞こえのいい肩書きだが、結局は
どこまで行っても人殺しを是としてきた一族でしかない。確かに魔
物と呼ばれるものを狩って来たのだろうが、数だけで言えば人間を殺
した方が多い。

戦いを是とする訳ではない。

殺しを是とする歪んだ血筋。

貴族がどうしてそこまで変わり果てたのかはわからない。資料も
無ければこいつも語ろうとしない。

だから俺が知っているのは、常に殺しと共に在ったということだ
け。

——過去を知りたいか——

知ったところで何になる。

答えは何一つ変わらない。

——虚を絶つ、故に虚絶。そう呼んだのは外部だ。我ら一族にとつ
て、この刀は単にけつたいな物もまとめて斬れる、良質な無銘の刀に
過ぎぬ——

……なんだって？

虚絶が不意に語り出した真実に、心が揺さぶられる。

——無銘は苦痛と共に生まれ出た。美しい刀を打つ刀工に、意図して殺人のみを突き詰めた剛刀を要求した。それこそが始まりだ——
殺人のみを突き詰めた刀など、そのなんと異端児たるや。

千年前であろうが、刀とは基本的に美術品の側面も持ち合わせている。武器としての刀、美術品としての刀……どちらに比重を置くかは打つ者次第だ。親父は今の時代に合わせて美術品としての面を重んじるが実用品を打っていた方が気が楽だ、なんて言ってたっけ。

だが剛刀とは同田貫の類。しかも本拠は九州だ。いくら大元の延寿派の始まりが京都にいたとはいえ、狙って見つけられるものでもあるまい。

時代背景的に考えても、京都貴族の伊奈神が気楽に行けるものではないし、その頃は普通の貴族である以上、本来なら無縁である筈だ。だというのに剛刀を打たせた。しかも殺人のみを突き詰めた一振り。

——飾りも遊びも皆無、ただひたすらに質素。あの時代として見ても馬上太刀に匹敵する二尺八寸の長物。しかし反りは浅く、全て含めれば三尺以上にも届く。武家はともかく、普通の何もしない貴族ならば無縁……貴様の言う通りだ——

打刀の叢雨丸と比較しても、虚絶は確かに長い上に装飾は一切施されていない。ガキの頃から触れていた所為で感覚が麻痺していたが、太刀とも打刀ともつかぬ、刀としてあからさまに異端児である。

一体何のために？ わざわざ美しい刀を打つ刀工に無骨な剛刀を打たせたんだ。意図がわからない。無理難題どころの騒ぎじゃない。もはや嫌がらせの類だ。

——それはな、端末……いや、馨よ。これを要求した者が、他者の苦痛を是としこれによって生を実感する破綻者であったからだ——

その発言に驚愕し、シャーペンが落ちた。

他者の苦痛によって生を実感する破綻者が、美しい刀を打つ刀工に対して求めた苦痛。誇りや矜持を無視して、意図して専門外の事を要

求し強要する——打った側はどれほどの苦痛と苦悩を強いられたものか、想像もつかない。

——打った者は、破綻者の常軌を逸脱した要求と脅迫により銘も刻みたくない、その刀すら見たくないと思避した。やがて心を擦り減らし切って生まれた一振りだが、人が虚絶と呼んだ刀だ——

矜持と誇りある製造者の息子として、これが如何に惨たらしいことか、多少ではあるが理解できる。やりたくないことを強要され、なおかつ異端児を作れと強いられればそうもなろう。

先生に差されたので適当に答えつつ、虚絶の言葉を待つ。

——破綻者は求めた、更なる苦痛を。踏み躪り、殺し、奪い、喰らい……その最果てに、復讐鬼と化した”私”に討たれた。その刀を奪い、魔物と呼ぶに相応しい人間を討つべく、貴族だった伊奈神は人殺しを是とする殺し屋となった——

呪物と化すだけの土台がありながら、墮天するまで命を喰らい啜った妖刀……叢雨丸のような美しい伝説もなければ、苦痛より生まれ出て、他者に苦痛を与え、そして苦痛を殺す為の苦痛となった人の業。なんと悍ましい刀か。なんと虚しい真実なのか。

——実際、魔物と呼ばれるものも殺したとも。祟り神の類との殺し合いも征した。だがやはり、その刃が求める敵は人だった。あまりにも永き刻の中で、魔が宿る憑代として完成し、悪を以って悪を征する妖刀へと至った——

……だが何故、伊奈神京香はこの刀に宿ったのか。この刀の本来の持ち主である破綻者とは何者なのか。そして、虚絶の統括者たる『虚絶』とは何者なのか。

それに関しては一切答えなかった。

——そして放課後。帰宅してやったことは家に置いてある虚絶を引っ張り出して、柄を外して茎を見ることだった。

無骨な刀剣に銘は確かに刻まれておらず、故に虚絶というその名さえも、誰かが呼んだだけという名も無き刀——ではなかった。

「……なんだこれ……？」

聞いていた話と違う。自然と疑惑の声が漏れて、表情も怪訝なもの

に変わり果てる。

とても掠れていてよくわからないが、茎には何かを書いてあった跡があった。

銘は確かに刻まれてはいない。

無銘であるのは間違いない。

だが何かが書かれていたのだ。

無銘の刀に、何かが――

時間

今自分が見ているものが夢だと理解しているのは、奇妙な浮遊感があるからではない。

それは夢だと確信しているからだ。

……理由も無く。

モノクロの視界。

俯瞰視点で見てるような感覚。

その光景は惨劇そのものだった。

村だったのだろうか？ それらしき場所に無残に事切れた亡骸が無数に転がっている。老若男女の区別無く、悍ましいほど平等に。

そして動く影が二つ。

刀を持った黒衣の人物と、血塗れの誰かだ。

やがて黒衣の人物が刀を突き立て、また一つ骸が増える。生者はそいつを除いて皆死んだ。

「ああ——そうだ」

不意に。

黒衣の人物が呟く。

「そういう表情こそ、生きてるってものだ」

その視線が、何故か俺の方へ向き。

「なあ？ お前もそう思うだろ」

明確にこつちを認識して、そいつが言った。

——そいつは俺を見ていた。

確かに俺を認識していた。あり得ないとか夢じゃないのかよりも先に、そいつを認識した時にまず感じたのは恐怖だった。

いてはいけない。あれは俺と同じで時代には不要なものだ。だといふのになれを見るだけで背筋が凍り、吐き気を催し、本能的恐怖を呼び覚まされる。あれは人である筈なのに、人ではない。人の形をしながらその中身は極めて異質な、それこそ宇宙悪夢的な代物。天啓にも似て、だが決して理解できないもの。

俺と同じで時代には不要なものだが、あれと俺は同じではない。

あれは――

そこまで思考して、その人物が迫っていたことに気が付く。

黒衣――それは真つ黒な和服。貴族的な意匠を備えながら、しかし実用的な印象を与えるもの。

女性としては結構な長身であり、だが酷い猫背がそれを打ち消している。

何処か見覚えのある顔立ちに、何処か見覚えのある髪型。色白の素肌はまるで闇から浮き上がるかのよう。

その瞳は腐って澱んで黒く濁ったもので、右手に持った質素な刀に一切の穢れが無いのとは対照的である。

「……なんだ、お前」

その女は空虚な雰囲気を漂わせながら、失望したように。

「案外、まともなんだな――」

だが楽しげに、俺を嗤った。

途端、世界が暗転し場面が変わる。それを俺は知っている。いつぞや見た、朽ち果てた屋敷だ。

そしてやはりいる。あの見知らぬ女が。

「過去っていうのは消えないの。私のように。あるいは、彼女のように」

女は心底から吐き捨てるように、その表情を歪める。

「そう。私がここにいても、先客である彼女もまたここにいます。虚を絶つ由縁は、そこにあるんだからね」

言い切った後、女はその端正な顔を微笑みへと戻して俺に向かって言った。

「あなたは確かに、彼女と同質。それでも稲上馨という人間はただ一人。忘れないで、何処まで行っても人は人のままってことを――」

「……っ!?!」

勢いよく身体を起こす。

見回しても、見慣れた自室の光景。どうやら夢は醒めたらしい。

「……あの女は、一体……」

思い出すだけで恐怖を掻き立てられる、あの黒衣の女。あれは果たして何者なのか……

寝汗も酷くて気持ち悪い。とつととシャワーを浴びよう。

そうして汗を流してさっぱりしてから時間を確認する。まあ、普段通りの時間だ。いつもはギリギリまでグータラして、遅刻寸前を狙って行くもののだが、今日はそういう気分じゃない。とつとと弁当を用意して、飯食って行こう。それでまた、あいつらに進展があったのかとからかってやるんだ。

……だって、昨日割と寂しかったし……

そんな折、ケータイにメールがすっ飛んでくる。果たして誰かと思えば菜子。

……あいつがメールなんて珍しい。何があつたのやらと思つて開いてみれば――

どうやら、将臣と芳乃ちゃんが正式な婚約者となったというか……付き合い始めたらしい。

早いなあいつら!?! 昨日風邪とか言つてたけど実は嘘なんじゃないか!?! 別に構わないけどつまりなんだ。あいつ惚れた女が風邪で弱つたから自分も休んだのか。健気だねえ。

さて、根掘り葉掘り聞かんとな。

夢のことなど忘れて、俺は楽しげに学院に向かうのだった。

「なあにこれえ」

昨日ぶりに割と早めの登校だったが、教室入って開口一番こんなことを言う俺を許して欲しい。

黒板の前に用意された席に、将臣と芳乃ちゃんが座っている。まるで記者会見のようだ。その前にブラツと並んでカメラとかケータイとかを向けているクラスメイトたち。

シャッター音とか聴こえてくるし、どっからどう見ても記者会見である。田舎とはいえ情報の巡りが早すぎないか?!

「あら、早いですね。ワタシもつと遅れるものかと思つてましたよ馨くん」

「おはよ……いや、まあ、ヘンな夢見たとか色々あるんだけど……これ
どういうことなの？」

ヒヨイと隣に近づいてきた茉莉と軽く挨拶しつつ、この状況は果たしてなんなのかと訊ねる。まったくもって理解が追い付かないこの現実には、一体何がどうなって生まれ出たのか。

「芳乃様と有地さんが正式に婚約者となったのが嬉しい安晴様がものすごく勢いで色々な方面に知らせたみたいで、その真偽確認兼質疑応答の記者会見みたいなき感じですね」

「それでいいのか安晴さん」

「それでいいんだと思いますよ」

「……はーあ、なーんか疲れたわ」

プロポーズの話とかを質問されてノリノリで答えている将臣を見ながら、元氣だなあとか思う。

が、しかし――

「どうしたんですか？ 今日はやけにワタシとの距離が近いですねえ。あ、もしかして昨日寂しかったんですか？ あは」

意識などしていなかったが、茉莉と会えて嬉しいのかだいぶ距離が近かった。ニヤニヤとした表情で楽しげな視線を向けてくる茉莉が、こっちの顔を覗き込んでくる。

ここでツンデレ的の反応をすると多分また面倒な感じになるので、また素直に反応してやろうじゃないか。

意を決して茉莉に、本音を告げた。

「ああ。寂しかった」

「そ……そう、ですか」

が、どうやら受けが悪かったようで。

茉莉はどこかきこちなく、ただそうとだけ返した。なんとも言えない表情から、失敗したと一瞬で悟り、とりあえず反応を伺うことにした。

「引いてる？」

「驚いただけですつ。ま、馨くんは甘えん坊ですからそんなことだろうと思っただけだよ」

「以心伝心で何よりだ。——で、なんか寄りかかってない？」

「朝から砂糖たっぷりだからワタシも疲れました。少し寄りかからせてください」

「いいよ」

「ありがと」

肩に寄りかかってきた茉莉子が快適なように、適当に調整してやる。だが悲しいかな、普通に立ったままでは辛いので、二人で壁を背に寄り添うような体勢となっている。

……正直、すごく安心する。妙な話といえば妙な話なのだが。

「ん、満足しました」

「そ、よかった」

ニコニコしながら離れていく茉莉子に、少し名残惜しさを感じながら、まあ仕方ないかと甘んじて受け入れる。

それと同時に将臣と芳乃ちゃんへの事情説明が終わり、会見が再開されていた。となれば——

「さて、遊ぶか」

「ですね、遊びますか」

俺たちは言葉少なく決意した。

遊ばねば……将臣と芳乃ちゃんで。人混みの後ろの方に陣取り、質問があるので挙手をする。

「はい、そこの方」

廉、お前だったのか、司会。

親友よお前は何をしてるんだと思いつつもヒョイと顔を出して二人に聞いた。

「お二人は昨日休みましたよね」

「はい」

「俺は茉莉子から風邪とお聞きしていたのですが。小野の質問に対する、二日前から付き合い始めたという言葉から考えるにやってたしかなできないので、実際昨日ナニをしていたのかが知りたいです。あは。というか普通に考えて茉莉子がいるんだからお前休む必要ねえよなあ将臣イ……！」

どよめくギャラリー。固まる二人。

俺の言わんとすることを理解した将臣が顔を真っ赤にした芳乃ちゃんの代わりに抗議してくる。

「ダメエ馨何言つてんだアツ!？」

「るせえ答えろやこの幸せ者め！ 割と寂しかったぞ！ 恋人が風邪だから休みますなんて健気じゃねーかよ！」

「男に言われても嬉しくない！ 単にプリン作って風邪引いた朝武さんに食べさせてあげただけだって！」

「あはっ、やーらしーイ！ お前隠語かオラア!? さてはしつぽりか？ しつぽり褥の温もりを感じてたんだろ！ 俺は頭脳指数が高いからわかるんだぞ！」

「褥の温もり……?？」

「朝武さんはわからなくていいから！ 本当に何もしてないって！」

「手エ出してねえのかよ甲斐性無し！ キスの一つや二つする暇あっただろうが！ どーせ二人きりになるタイミングとかあったらろ！」

「キキキスなんてできるわけないじゃないですか!? まだ抱き締めてもらっただけですっ！」

「朝武さん落ち着いてっ！」

あ、芳乃ちゃんが自爆した。

「……馨お前色々質問しすぎるからもうダメな」

そこで落ち着きを取り戻したので、廉が待ったをにかけてくる。抗議の視線を向けながら反応した。

「なんでだよ廉」

「っーかうるせえ。お前ら喧嘩すんなよ。そんな不満気な視線見せても……あーあーわかったわかった。これでラストな」

「へいへい。んじゃ、新郎の将臣君に質問。——抱き締めたとき、芳乃ちゃんから良い匂いした？」

「しました」

「有地さん!？」

「おー、やーらしー」

またギャラリーがどよめいて、フラッシュ音がパシャパシャと鳴

る。俺には無用の長物だが、しかし……スマホいいなあ。買い換えたいなあ。無用の長物だけど。

そんな光景を見てみると、それなりに年相応の感情が沸くというもの。

「ぐえっ」

「やらしいのは馨くんです」

しかし、そんな感慨は一瞬で破壊された。後ろからよく知る誰かが容赦無く首根っこをキメやがった。とても柔らかな感触と良い匂いが役得だがそれも言ってられない。

「まつ、茉莉……オ！ ギ、ギブギブ……！ 締まって……あと当たってる……っ」

「というわけでワタシから質問です。ズバリ、お二人は今後ご一緒の部屋で過ごすのですか？」

「まつ、まままま茉莉まで何を言ってるの!？」

「申し訳ありません。ですがつい気になって……あは」

「ッ！ッ！」

「しまった、馨くんとの身長差だとだいぶ締めちやうんだった。ごめんなさい、大丈夫ですか？」

やっと解放されて、ゲホゲホと咳き込みながら酸素を求め。なんのかんの言って、頑丈でも苦しいものは苦しい。あとでなんか仕返ししてやる……！

「せめて羽交い締めにしろよお前……」

「つい反射的に……」

「ま、いいけどさ」

忍びとして鍛えられたら咄嗟に出てくるというのは自然なこと。それを責めるつもりは毛頭無い。俺とて意識をしなければ出てくるのが殺人技巧でも不思議では無い。

「それで、どうなんですか？」

「んー……まだ早いんじゃないかなと思います、はい」

「そうですね、まだ付き合い始めたばかりですし」

「ちえー」とか茉莉が言っているがお前どんな想像してたんだよ……

この後も質問はしばらく続き、かなりカオスな展開となった。童貞なのかどうかかすっ飛んでいたが、お前たちにもう少しアレは無いのかと思った。うん。

果ては先生まで乱入してあれこれと話がややこしくなり、結局は比奈ねーちゃんが邪魔つけな連中（語弊があるが……）を追い出して会見を強制中断させ、事態を収束させた。

ねーちゃんは穂織に住んでいるが、出身ではないので、その辺りの意識が他とは違う。彼女からしてみれば、巫女姫はローカルアイドル的存在ではないのだろう。

いや全く、いつも頼もしい限りだ。

さて、今日も今日とて授業が始まり、俺は適当な態度でテキトーに授業を受ける。

……普通であれば、と付くが。

今日の異常といえば、それこそお付き合いを始めた二人しかないが、ここで常人には関係の無い話を忘れてはいないだろうか。

（カオル。ムラサメちゃん……ですよ？ 覗いているのは）

（……だろーなア）

席の近いレナが困ったように小声で尋ねてきたので、実際確認した上で返事をする。ムラサメ様が見える人間は全員気付いているが、件の二人はだいぶ幸せ気分が抜け切らないのか割とボーツとしてたりする。

……まったく羨ましい。視線を感じると集中できなくて困るのだ。

（……親心かな。ムラサメ様、かなり面倒見がいいから、ちよくちよく学院に来てただけだ。ここまで露骨なのは初めてだ）

（とても可愛らしいのですが……少々気になります故、控えてもらいたいものですね）

ふむ……まあ、確かにそうだな。

少し話をしてやるとしよう——そう決めて虚絶を廊下に出現させ、俺と虚絶の位置を呪術で入れ替えることにより教室から脱走する。

——まさか、我がこのような使われ方をするとはな——

虚絶の困ったような声が聞こえ、こんな声も出せるもんだなと少し感心する。が、しかし即座に打ち切ってムラサメ様に近づき、小声で話しかける。

「よ、ムラサメ様」

「脱走とは感心しないのう」

「まあまあ……話しない？　せつかくだし。俺とあんたの仲だろ」

「吾輩たち、出会いは十数年前だが、実際言葉を交わすようになったのはつい最近じゃぞ」

「別にいいじゃん。ほら、行くぞー」

「……ま、お主とくだらぬやり取りをするのも悪くない」

上手く先生と鉢合わせないようにしながら、ムラサメ様と校舎の外に出る。そのまま木陰の下に俺は腰掛け、彼女はフワフワと宙に浮かぶ。

「……して、ムラサメ様。やっぱり寂しいの？」

「寂しいのではない。ご主人と芳乃が不安で見に來ただけじゃ」

「俺が言えた義理じゃないけど、あんたも大概面倒くさいよな」

なんでもないように言うムラサメ様に呆れながら、この堅物からどうやって本音を引き出したものかと悩む。

——おい、指されたぞ。何を答えればいい——

ええつと……同期するからちよいと待て。ああ、英語の例文か。これならこの部分を言えばいい。

——やれやれ、英吉利だの亜米利加だのの言葉は日本語に比べひのもことば複雑だ……鎖国とはよくできた構造だったな——

「おい、吾輩の相手をしてくれるのではなかったのか？　馨」

「あつと、ごめんっ。ちよつと虚絶がさ」

ムスーつとしたムラサメ様に謝りながら、全くあの浮かれポンチめと内心毒づく。お前の相棒が微妙な気分なんだぞ。気を利かせてやれって。

……いや、奴らの一瞬は彼女の五百年より重いのかもな。無理も言つてられんか……

雑念を振り払い、単刀直入に彼女に対して切り出した。

「——あんたさ、芳乃ちゃんに妬いてんだろ」

「む……」

「五百年の孤独、そこにやっと現れた温もり。俺たち定命の者には想像も付かない暗闇に差し込んだ光。いくら恋人ができたって言っても、悠久の傍観者たるあんたには、それを独占するだけの権利と義務が——」

「——それは生者にのみ許された権利であり義務だ。死者どころか世界にへばり付いた亡霊に過ぎぬ吾輩には、その資格は無い。それに吾輩はお前と違って、命の重さと向き合うことなく逃げたのだ。それは決して許されるものではない」

だがムラサメ様は断固たる態度と、かつて自ら人柱となることを是とした覚悟を武器に、俺の言葉を叩き斬った。

真剣な表情と絶対零度の言葉で、彼女は自身の内に燦る闇を語り出す。

「よいか、馨。吾輩は命ある者ではない。お主が己を崇りに近い人と言うのであれば、吾輩は人に近い精霊だ」

「だからって——」

「だからこそ、じゃよ。吾輩は人として生きる、人として死ぬという選択肢を与えられてなおどちらも選べず、ただあらゆるものから逃げた「なりそこない」だ。そんな愚か者がご主人の手を取って良い筈があるものか」

彼方を見据えるムラサメ様の目は遠い。

「吾輩はな……与えてもらった命を無価値にしたのだ」

「俺も同じだろっ」

「同じであるものか。お主が吾輩のような極め付けの阿呆と同じである筈がなからう。お主はあくまでもその使命に揺らいでそれを選択した。吾輩は選択すらせずに逃げたのだっ」

「だからなんだよ!? お互いに自分という存在が許せない！ そこに何の違いもありやしねえだろうが！」

「違うのだ！」

居ても立っても居られず、同じだと語れば彼女はそうではないと否

定する。俺たちにしては珍しく、声を上げて睨み合うまでヒートアップしていた。

「……ムラサメ様、どうしてあんたは意固地なんだ。まだ子供じゃないか。俺より年下じゃないか。素直になれよ我儘言えよっ」

「吾輩はもはや人ならざるムラサメだ、ムラサメの前身であつた女は既に消え果てたのだ。人柱になつたときになっ」

「カツコつけんな！ 時間かかつて無理矢理にでも陽だまりに引張り出してやるっ！俺にはあんたの手を引くことはできないけど、あんたを先導するくらいはできるからな！」

「なっ——!?!」

もうあんまりにも頑固だし平行線なので、ムラサメ様の自罰意識など知つたことかと、俺は遠慮無くそう言い放つた。

唾然とした顔が大変珍しいが、この人、要は俺と同じで人だけじゃないと自己を定義した所為で自らは超越者的存在だとしているのだ。

俺に生きてと願つた茉莉子のように、俺はこの人に”生きて”欲しい。報われて欲しい。

あんまりじゃないか……年端もいかなかった子が、ここまで変わり果ててしまうなんて……あんまりじゃないか——

「俺は、あなたに報われて欲しいんですよムラサメ様……尊敬する人が報われて欲しいと願うのは、とても自然なことじゃないですか——」

「……」

——本音を言えば、ここに帰結する。

俺はムラサメ様を尊敬している。

これは嘘偽りの無い、本音だ。

「……やれやれ、そういう話か。報われるべきだ救われるべきだの話をしたとき、お主もその一人に入つてるとわかつてるのかのう」

「そりや当然。けれど、俺は……まずはあんたから、と思つただけだよ。俺はあとでいいんだ」

何処か呆れたような表情で、ムラサメ様は俺に問う。しかしそんな

ことは当然理解している。そして、他ならぬ彼女も俺を心配しているということも。

根負けしてくれたのか、ムラサメ様は静かにフツと笑うと、少しだけ本音を語った。

「そうじゃな——確かに、吾輩は温もりを求めておるのは事実だ。じゃが、流石に恋人との時間を奪うほどではない、というのもまた事実。」

ただ時折、ご主人が吾輩に触れてくれればそれでよい。見えるものだけが、見えておればな」

とても穏やか表情で告げられた、その言葉。

——何故か。

何故か俺は、その言葉に深い共感と理解を覚えた。あり得ないことだが、ムラサメ様にとつての将臣は、俺の人間関係の中で対応する存在は無い。

だというのに、それに深い共感と理解を覚えた……はつきり言えば、絶対に理解も共感もできない筈なのに。

俺は孤独であろうとしただけ——ムラサメ様の耐えた時間と環境、それと並べてみれば雲泥の差だ。普通であればそれを憐れみこそできて、理解と共感はできない筈だ。

「さて、そろそろ戻れ。吾輩も吾輩なりに上手いこと立ち回ってみせるさ。なあに心配はいらぬ。実はな、今でも十二分に幸せだ。——お主にこうやって案じられるのも、悪くない。では、またな馨」

「またね」

話はそれまでだと言わんばかりに姿を消す彼女を見送り、虚絶とまた位置を入れ替えて内に戻す。

静かになってしまった。集中ができるようになったが……それでまあ、少し寂しい。

……十二分と言われても。

やはり尊敬する人が限られた人としか触れ合えない、その存在を覚できないというのは、中々に応えるものだ——

そんなしんみりとした感傷を抱えながら、流れる時間に身を任せるしかできない。

……というか、相談しよう相談しようって思ってた結局してなかったな。何やってんだ俺は。——とにかく、昼休みとかその辺で相談するぞいやマジで。

「……なあ、あのさ」

とかなんとか考えていたのだが……

「近いんだけど……」

「そりゃ近いんだから当然です」

昼休み。

というか飯の時間になった途端、茉莉が俺の隣に移動してきた。しかも隙間が極限まで小さい。腕を動かせば茉莉に当たるくらいには近い。

いい匂いする。

「レナもなんで俺の隣にいるのさ」

「いてはダメですか」

「……ああ……うん……そう……」

困って廉に助けると視線を送れば、サムズアップで返されるのみ。いやお前助けるよ、流石にキツイ。

「茉莉はわからなくもないけど、レナの理由は……？」

「ふっふっふ、それはですねえー」

レナは何故か得意げにその大きな胸を張りながら。

「カオルは毎回早く食べ終わってしまうので、おかずの交換が中々できなからですっ」

……なんて、どうでもいいことを言った。

多分今、ものすごく変な顔をしていると思う。

「そんな顔をするほど意外でありますか」

「いや……俺の飯なんて美味くないしやめとけて。というかそんなことかよ」

「そんなことではありません。わたしはカオルの事をあまり知らないのですから、大事な事です」

「そ、そう……かな？　嬉しいけど、さ」

女の子二人に挟まれるなんて初めてだ。どうしたらいいのかよくわからない。むっちゃんいい匂いして困る。

「あ、あの……二人とも？　少し離れてくれない？　ちょっととき、健全な男子としてはかなり大変と言いますか、その……」

「寂しがり屋の馨くんが寂しくないように側にいてあげてるんですから、甘んじて受け入れてください」

「マコと普段からこれくらいの位置にいるのですから、平気でありましょう？」

「ま、茉莉はいいけどレナはダメだつ。こいつなら昔から知ってるから平気っちゃ平気だけど、レナはその……えっと……もう少し自分が如何に魅力的かを自覚した方がいい」

「へー、ワタシは魅力的ではないということですか」

「面倒くさいなお前な！」

流石にもう構ってられない、構ったら疲れる。しょうがないからジト目を向ける二人を無視して弁当を広げる。

「……あの、やっぱり離れてくれない？　腕がね……」

「——胸に当たりそうだから、でしょう？　はいはい、わかっていますよー。ワタシ、貴方のことは粗方知ってますから」

「以心伝心で何よりだよ……というわけでレナ、もう少し離れてくれ。流石にな」

「カオルもそういう顔をするんですね」

「なんだよそりゃ」

そういう顔ってどんな顔だよ。

まあいいかと食べ始める。時折横から無言で茉莉がおかず放り込んできたり、取られたり、レナと交換をしたりしたが、逆を言えばそれくらいで終わった。

……気分的には大変疲れたが。

「二人に相談なんだが、如何にしてムラサメ様の友好の輪を増やすことができると思う？」

一息ついたところで、本題を切り出す。

「それはまた……難題ですね」

「けどいつまでも変わらないというのも問題だろう」

「ワタシは、正直どうしたらいいのか思いつきませんね。レナさんから何か意見は？」

「まずいると伝えて信じてもらえる人たちに伝えていくのはどうでしょうか？ 見えないけど知っている人もいますのでありますよね」

……なんでもないように言われた一言が、あまりにも盲点だった。完全に思考の外だった。

ムラサメ様が見えずとも、その存在があることを知っている人はいる。そういう人たちのように、俺たち見える組が、信じてくれそうな奴らに対しての橋渡し役になればいい。

……なんて単純なことだったんだ。とても簡単な答えだったのに、どうして気付けなかったのか。

感極まって、レナの手を取って感謝する。

「それだ——マジでありがとう！ そうだよな、見える見えないより先に存在証明だよな！ いやホントなんで気付かなかったんだろう……とにかくありがとな！ 助かった！」

「お、おおー……どういたしまして。でも、カオル。あまり手を握らないでくれませんか……？」

段々と尻すぼみになる声に合わせて、視線は外れていくし頬に赤味が差していく。レナが異性と接触するのは苦手だと、聞いた話からは推測していたが……いやここまで来るか？

だとしたらかなり初心だぞ？ 余計なお節介だが心配になる。

「悪い悪い。ついクセで」

パツと離すとそれはそれで、何処か名残惜しそうな視線を感じる。無論それは異性愛といったものではない。慣れておくべきかとか、そういう打算的な名残惜しさだ。

俺としては彼女が異性に慣れるのを手伝ってあげたいところだが、さてそれはいわゆるセクハラだろう。エロ本じゃあるまいし。

「……明日のデートで手でも繋ぐ？ 慣れるがてら」

「か、考えておくでありますよ」

「男としては前向きに検討してくれると嬉しいね」

「どちらにとつていいのやら……では、わたしはこれで。あとはお二人でゆつくりしてくださいね」

「へ？」

「はい？」

笑顔で手をヒラヒラと振りながら自分の席に戻っていくレナ。

時間を確認すれば割とどころかかなり余っている。少なくとも30分は硬いだろう。

「二人でゆつくりつたつて……なア？」

「とりあえず、外にでも行きますか」

「だな」

教室の中というのも味気ないので、俺たちにしては珍しく学院の外に向かう。とは言っても、外というか学院の裏山だが……

「こんなところあるなんて知らなかったな」

「普通は縁が無いところですからね」

そんなやり取りをしながら、スカートの中身見えたりしないかなーとか邪念を抱きつつ、スイスイと進んでいく茉莉の後ろを着いて行く。

中身がスパッツだと知っているが、役得は役得なのだ。というか、普通男ならそういうの嬉しいだろ。

……まあ、相手が茉莉だし見てもそういう感情や展開は皆無だろうが。

「……何見てるんですか」

しかし女の子はそういう視線に敏感である。足を止めてジト目……というか猫みたいな口元と、ニヤリとした小動物的表情を向ける茉莉にゃん。無言で手刀を落としてこないところに彼女の優しさを感ずる。

バレバレなので隠しても仕方ない。大人しく白状しよう。

「いやキュートでセクシーな太ももがね」

「太もも？」

「太もも」

が、しかし。

ここで意外なことが起きた。

太ももを見ていたと言っただけであり、こいつのことだから「お昼から盛んですね、あはっ。やーらしー」とか言ってくるものだと思うのだが……

「……あ、あんまり見ないで……」

しおらしい態度で、スカートの裾を引っ張って太ももを隠すような体勢を取って、若干満更でもなさそうに、だけどまあ恥ずかしいのか頬を朱色に染めている。

……可愛いんだけど。

そんな茉莉子の姿を見て、俺も動揺してしまう。

「な、なんだよう……そんなしおらしくなって、今更意識されても困るんだけど」

「ちっ、違いますっ！ わ、ワタシはほら、足……太いですから……」
「えっ、あっ……そ、そうかア？ むしろ色々鍛えてるんだからそれに肉付きが良くないとおかしいんじゃないか？」

茉莉子の足が太いと言われても、何か違う気がする。比べる相手が違うのではないだろうか？ 俺は好きだけど。

「いつ、いいから見ないでっ！ 恥ずかしいのっ！」

「うん」

「……見ないでね？」

「じゃあ茉莉子の顔だけ見てるさ」

「バカ」

バカってなんだバカって。足見ないように上見てると何も変わらんやろがい。それから無言で歩き続け、それなりに景色の良いところで腰を下ろす。

「落ち着くね」

「ああ」

肩に寄りかかってくる茉莉子に、なんかやけに今日は甘えてくるなど疑問に思う。

ただ、それはそれで心地良いからこのままがいいと思う自分もい

て、なんだかおかしくって笑いそうだ。

「ワタシも、なんだか寂しかった」

「そっか」

「手、握って」

「今日の茉子は甘えんぼだな」

視線を合わせる必要も無い。ただ俺たちは、お互いに寄り添ってればそれでいい。

望み通り、その小さな手を握る。

……普通の女の子としては異質な、やや硬い掌。それでも彼女は紛れも無く女の子で、恋がしたいと願う普通の女の子。

「ねえ」

「ん？」

「芳乃様と有地さんが付き合ってたって聞いて、ワタシほつとしたの」「なんでさ」

「芳乃様、もう因縁に囚われなくていいんだって……ワタシたちの償いは、実を結んだんだって。だから、ほつとした」

「そうかい」

「……あと、馨くんが苦しむ理由が一つ減ったから」

「優しいな、茉子は」

「そうかな」

「そうだよ」

茉子の温もりを感じながら、腕時計に目を落とす。俺たちの速度から言っても、そろそろ戻らないと授業には間に合わない。

「そろそろ戻ろうぜ。遅刻しちまう」

「あ……っ」

手を離し、ゆっくりと寄りかかる茉子が倒れないように支えつつ立ち上がり、どうせこいつも着いてくるだろうと思いつきながら歩き出して

グイッと、腕が引っ張られた。

振り向くと、俺の手を掴む彼女がいる。

「茉子——」

俯き加減でもわかる、寂しげな瞳。

「もう少し……ワタシの側にいて欲しいの」

「本当にどうした。何かあったのか？」

「わかんない。わかんないけど……馨くんの側がいい」

「……菜子」

顔を上げて――

「お願い、行かないで――」

やけにしおらしい、彼女らしくない細く弱い声。

そして不安げな雰囲気を感じさせる、寂しげな表情が俺を引き留める。

いつも飄々として余裕を持ちながらも、心の闇を何処かに潜ませた菜子じゃない。弱い部分を曝け出して甘えてくれている、等身大の常陸菜子――

「わかった。じゃ、サボろうぜ」

なら俺は、彼女が俺にしてくれたように、俺も彼女にとっての支えになってあげたい。

たとえ一時であったとしても、彼女が弱みを晒け出せるのが俺しかないというのなら、俺はそれを受け入れよう。

……それに今までワガママ一つ見せてこなかった菜子がワガママを言ったんだ。付き合ってやらないと失礼つてもものだろう。

「うんっ、サボろ」

花が咲いたように満遍の笑顔を見せた菜子は、紛れも無く俺があの日見た、忘れられない綺麗な笑顔と同じだった。

あの日のあの笑顔は、やはり彼女だったのだなと強く実感する。

また二人で腰を下ろし、景色を眺める。

何も言わずに握ってきた手を握り返し、寄りかかる彼女に少しだけ体重を預け、目を瞑る。

菜子の鼓動と温もり、木々を通り抜ける風の音――それくらいしかわからないが……

「くくっ……」

「何？」

「別に」

「そ」

叶うのなら。

もう少しだけでなくて、ずっと——



昨日のことを思い返すと、胸にぽっかりと穴が開いたようだった。こうして二人だけの空間にすることで、それが如何に自分にとって異質な状態であったかと悟る。

(……ダメだな、ワタシ……)

馨に体重を預けながら、茉莉はそんな自分を自嘲する。

大抵、甘えてくるのは向こうなのに、今日は自分から甘えてしまっている。それが悪いとか、それに罪悪感を覚えているわけではない。

……ただ、立場が逆になっているだけだ。

家族にも、芳乃にもムラサメにも見せることの無い、自分のどうしようもなく弱いところ。それを知っていて、かつそれから来るものにごうしようもなくなったとき、頼れるのは馨だけだった。

そこにいるだけで頼りになる……とは大袈裟な話だが、実際幼少の頃からそう感じていたのは事実。

都合良く甘えていたと言えばそこまでだが、そんな茉莉を拒絶することもなく、ただ受け入れてくれていた。

ずっと隣にいてくれる。

決して自分から離れることのない、大切な人……

たった一日だけ離れただけなのに、どうしようもなく不安だったと、彼から寂しかったなんて言われて、思わず喜んでしまった。

ワタシも同じ気持ちだったなんて——

(醜悪ですね、こんな感情——)

半ば独占欲にも等しいが、それと比べればあまりにも醜いと彼女自身がそう思って止まない。歪んでいると思っている。

その自罰意識から絶対にここから離れることはない、絶対に特定個

人に執着することはない。

——だから絶対にワタシの側にいてくれる。

——離したくない。逃したくない。離れないで。行かないで。嫌いにならないで。ワタシは——

結局、授業をサボってまで二人だけの時間を確保したのは、そうした感情に従っただけ。止められなかった、止まれなかっただけ。

ごく僅かな時間とはいえお勤めを放棄し、色々あるであろう彼の時間を奪ってまでするほどのことかと言われれば、決してそうではない。授業をサボる価値があったのかといえればいつでもこんな時間は作れる。

……寂しいと言っていた譬だって、別にここまで必要とは思っていないだろう。朝の触れ合いだけで満足している筈だ。

(だけどワタシは——嫌な女です……)

醜悪な感情に蓋をすることもできず、卑怯な方法を使って他の誰にも邪魔されない、安心できる時間が欲しかった……なんて言ったら、失望されてしまうだろうか。

妬心じゃないって言いながら、実は他の人に心を開いたことに対する妬心だったって言ったら、驚いてくれるだろうか。

「……あつたかいね」

「だな」

——だとしてもこの温もりを誰にも渡したくない。ワタシだけの温もりであって欲しい……それが何の感情であるかは、決して考えずに。

それはきつと、漫画で言えば集中線的な場面であろうと自分を納得させて。

ただ今だけは、この刹那だけは——

(レナさんにも、ムラサメ様にも渡さない……)

二人だけで。

——何の邪魔も入らずに。

「ね」

「ん」

「——今だけ、ワタシだけの馨くんできて」

「本当にどうしたんだよ」

「そんな気分なの」

「はいはい……たまにはお前に甘えられるのも、悪くない——」

日光が映す影は一つのまままで。

どうでもいい話だが。

丸々一限サボった二人は、当然怒られた。

ついでに色々と邪推された。

進展

「起きろ、端末よ」

「う、お……お……お……っ」

「——起きろ」

眠い感覚から無茶苦茶な引力と共に意識が覚醒される。

眠たい目を擦りながら、眼前のご先祖様にも一つ文句を言う。

「フツ—に起こしてよ……」

「普通では起きまい」

「否定できねー」

フラフラと立ち上がり、洗面所で顔を洗う。

「レナとデート、かア……」

言い出した俺が言うのも何だが、あんまりデートという気がしない。

いや、デートというつもりは元々なかったのだが。

「うっし、がんばろ」

俺は人と会うときは必ず30分前に着くようにしている。

別に茉莉が相手ならどうでもいいが、仕事柄1分1秒が惜しい場合もある。俺の性質の関係上、起きるのは苦勞するが、普段より早く寝れば良いということ。

……昨日はちよつと茉莉とサボった件が尾を引いて中々寝れなかったから、虚絶に起こしてもらったが。

「……身に付いた習性ってのは、時として何の役にも立たねえな」

適当な段差に腰掛けて、プラプラと足を揺らして待つ。

——それ見ろ、寝ているべきと言ったではないか——

うるさいな、そういう奴なんだから仕方ないだろう。

——まあ良い。でーと、なるものは我には縁無き故、せいぜい足掻くといい——

ふん、これでもナンパの経験ならあるから平気だつっ—の。

——そういうものでもあるまい。女子に恥をかかせるなよ、貴様——

……わかってるよ。

それから待つこと30分きっかり。

「おはようございます、カオル」

「ああ、おはよ。レナ」

レナは時間ぴったりに来た。誤差はコンマ数秒とかそういうレベルの話で、ここに気質の違いが現れているというべきか。

ただ彼女は改めて俺の姿を認識すると大層驚いたように。

「カオル、どれくらい待ったのですか？」

と、少し罪悪感にも似た雰囲気を見せながら尋ねてきた。

別に待つのが嫌というわけではない。遅れるのよりよっぽどマシだ。別に誤魔化す必要も無し、なら本当の事を言ってしまうおう。

「ぴったり30分。人に会うときは30分前に場にいるってのは俺のクセでね。中々意外だろ？」

「確かにカオルらしからぬ話ですね。起きるの大変だったでありますし？」

「そういうものでもないさ。存外、往々にしてそういう時は起きれるんだよ。じゃ、デートと洒落込もうか」

そう言っただけで差し出した手は、すんなりと繋がれた。

デートコース……なんて言っても、穂織にそんな良いものは無い。大型デパートのある田舎の方がデートには困らないだろう。

これが地元民であれば、そこまで悩む必要も無いのだが――

「すごいですよカオル！ こんなところがあつたなんて知りませんでした！ 目からウラ、ウロ……コ？ という奴ですね！」

「そうそう、目からウロコね。ま、中々縁の無いところだ。俺みたいな物好きには縁深いが」

流石にレナ相手にただブラブラとするのもあれだし、古馴染みの骨董品屋に連れてきた。

ま、骨董品屋と言いつつ、アンティークよりレトロな方が多いのだが、それはまあ時代の流れから見ても仕方ないこと。俺たちには手も

出せないような値段から、ガキの小遣いでも買えそうなものまでピンキリだ。

「……ん。どうした、何か気に入ったのあったか？」

さつきからレナの視線が釘付けになっているものを見る。

それはやや古風な首飾りであり、五輪の花を模したものであろうか。白と灰色を基調に、所々黒の差し色が入った独特だが美しいもの。価格は少々貼るが、質の良いものであることを祈るばかりだ。

……買うとしたら、であるが。

「欲しいの？」

「欲しいと言えば欲しいのですが、あまり付ける機会が無いと悩んでしまいました」

「あー、旅館だもんな。でもいいんじゃないか？ 記念がてらとかでさ」

困ったように悩むレナに対して、こんなことを言っただけなのに俺は買い物で悩んだことはあまりないので心中不安である。

欲しいものは買う、欲しくないのは買わない。ていうか考えるの面倒だからそれ以外の判断材料は要らない。

……我ながら大変考えの浅いことだ。

「むむむ、やはり悩ましいであります」

と、ここで妙案が思い付いた。

俺、考えてみたらレナには迷惑をかけてばかりだったな。勝手に睨んで、勝手に記憶を覗こうとして、許してもらったとはいえ負い目があるのは否定できない。

詫びも兼ねていつそ贈り物にしてしまえば……いや迷惑か。好きでもない男に贈り物されても。

が、しかし。

結局俺は――

「……俺が買おうか？」

言っちゃったよ。

「はっ？」

鳩が豆鉄砲を食らったような表情。レナにしては珍しい、そんな

顔。あんまりにもおかしくってつい笑ってしまいそうになったが、それを堪えて訳を言う。

「贈り物なら、あっても付けない理由が増えてそれっぽくなるだろ？」

あとついでにお前はタダになるし、俺は色々迷惑かけた詫びになる。どうよ」

ところがそれを聞いた途端にレナの表情は呆れたものになる。そして一言。

「カオルは変なところで変に気を効かせるでありますね」

「……マジ？」

「わたし、前に気にしてないって言いました。もう忘れたのですか？」

「覚えてるけど俺が収まりつかないというかなんというか……まあぶつちやけると贈り物させて欲しいなーって」

「最初にそう言ってくださいよ」

「素直じゃねーのは知ってるだろ。じゃ、改めて……お前に贈り物をしたいんだけど、いいかな？ レナ」

恥ずかしさを感じながら、苦笑めいた表情をしているのだろうとぼんやり思いながら尋ねたそれは。

「はいっ」

満遍の笑みとともに受け入れられた。

少し財布が寂しくなったが、とても嬉しそうな彼女の姿と引き換えと考えれば、実に安い話だ。

それから骨董品屋を出て、普段は中々お目にかかれないところを紹介していく。

「ちなみにあの坂を上ると夕陽がよく見えて綺麗だったりするんだぜ」

「それはロマンでありますね、今度は是非行ってみます」

「あとは……そうそう、あそこの花屋は珍しい品種も揃えててな。ついでに花言葉も一緒に書いてあるから贈り花にも安心だ」

しかしだ。

そんな風の中々レナが行きそうにない、あるいはあんまり縁の無いところを中心に、それなりに面白くなればと思つて回っているが……

どう考えてもこれ、観光案内だよな。デートじゃないよな。

……てか、デートつて何をすればいいんだろうな？ 茉莉とだつてこんな感じで……バカ！ 今はレナの隣にいるんだぞ！ 他の女を考えるなど無粋極まりない！

ここは何か、もつと妙なものを——!?

「レナ、鮎を食べに行かないか？」

「アユ？ まだお昼には早いですよ」

「ちよつとだけだから大丈夫だつて。小ぶりだし」

「構いませんけど、どうしたんですか」

「いや、まあ、色々とね？」

我ながら実に無能である。

……さつき他の女の事をとか言った矢先に茉莉と将臣がブラついた時のことを思い出してなぞるなど、ああ……まったく——どこまでも使えない男だ、俺は。

そうして鮎を食べに行くために、串焼き屋まで歩く。その道中、たわいのない話で盛り上がったり、あるいはくだらないことに微妙な反応をしたり——まあ、結構新鮮で楽しかった。

「そういうえば、カオルのご両親の話は全く聞きませんね」

「しても面白くないよ。特にウチの家系は関係性が面倒でな……」

そんなこんなで鮎の塩焼きを片手に、二人でベンチに腰掛けてる現在。

「複雑なのですね」

「本家と分家はいつの時代も微妙な仲なのさ。……うん、相変わらず美味しい」

流石に実家の複雑極まりない醜悪な因縁はこの子には伝えたくない。惨たらしい話ばかりだからな。親父もお袋も、その辺りは極めて面白くない、吐き気を催すような思い出がある。

そんなもの考えたくもないし、理解したくもないし喋りたくもない。

忘れるように、鮎の塩焼きをもしやりながら、その味に舌をうつ。

「おお、とても美味しいであります！」

「そいつはよかった。紹介した甲斐があったもんだ」

顔を綻ばせて喜ぶレナを見て、俺も嬉しくなる。彼女のこういう可愛い面を見れるというのは中々無いから、結構レアな感じだ。

俺にとつてのレナ・リヒテナウアーは基本的に何処か妙な言葉遣いをしながらも、芯がしっかりした強い女の子といった印象がある。

そういうものから逆算していくと、今こうして無邪気にははしゃぐレナは、普段の印象とはまた違った魅力がある。

「——美人だなア」

大変絵になる。

金髪巨乳の美少女が、和の意匠を持った独特の衣服に身を包み、鮎の塩焼きを笑顔で頬張っている。

……綺麗だ、本当に。

「うん、綺麗だ」

比べたりなんだりとかするのは失礼極まりないが、レナは普通の女の子よりも可愛いではなく綺麗が先に来るのだ。

芳乃ちゃんと同じ、と言つても過言ではない。なんのcanので似た者同士などころあるしな。

ムラサメ様は尊敬の念が先に来るのでやや例外的な判定。小春ちゃんは言うまでもなく可愛いタイプだ。

芦花さんは……どうだろうか？ あの人はお姉さんだから例外的な判定か。

——と、そこで。

「か、カオル……」

「んあ？」

はたと気が付いた。——何に？

レナが動揺した表情と、赤く染まった顔していることにだ。

何があつたのかと周りを見渡すが何も無い。となれば原因は俺にあるわけだ。しかし俺が何か……いや待てよ？ 脳裏に浮かんだ可能性、そんな漫画みたいなきこ……？ とも思いながら、恐る恐る尋ねる。

「もしかして、口に出てた？」

「はい……それはもうはつきりと」

……どうしよう。

意図せずとはいえ、女の子に正面から綺麗だなんだの言ったのは初めてだ。

「あ、あはは……なんちゃってー……」

恥ずかしさで思考が一杯になって、何処ぞの忍者みたいなことしか言えない。なんてこったという後悔と、顔の熱でまともではなくなっているのを自覚するが、どうしようもできない。

結局二人して赤い顔で俯き、顔を逸らしながら鮎を食べ進めるしかない。

「……なんか、ごめんな……」

「き、綺麗とか美人とか言われたのは嬉しいからへーキでありますよ」でも、と彼女は口籠る。

年頃の女の子に綺麗はマズかったかとも思いながら、俺は大人しく次の言葉を待つ。

そして、しばらく待つて——ついに少し不安そうに彼女が紡いだ。

「——マコにも、そのようなことを言ったことがあるのですか？」

言っちゃあなんだが。

それをここで言うかね、君。

「あー……そう来たかア」

デートのときに他の女の事を思い浮かべるなど無粋極まりないと言ったのは俺だから、あえてレナを責めたり戒めたりするわけにもいくまい。

なので甘んじて受け入れよう……だが、よりにもよって今ここで莱子の話題か。

……将臣とも、あいつはこんなやり取りをしたのだろうか？

モヤモヤする。

甘えられる人を取られたとすら、心の何処かで感じていた。

しかし将臣は芳乃ちゃんを選んだ。

……そして莱子はきつと、俺よりも素敵な相手を見つかるだろう。

そうに決まっている。

思考が混沌としてきたので一度深呼吸して落ち着きを取り戻す。さて、どう答えたものか。隠すようなことは何も無いが、答え方にも気を配らねばならないのが現実だ。

「……んーつとねえ……言ったか言っていないかで言えば、言っていないな。あいつには」

「マコには、ということは他の子には言っているということでありますね」

「え？ いや別にそういうわけじゃないよ。俺が綺麗だって言ったのは、芦花さんと芳乃ちゃんとレナ……それくらいだって」

するとレナはなんだかよくわからないけど、なんだかよくわからない小動物めいた大変可愛らしいぐるぐるお目目で俺を叱責した。

「ダメでありますよ！ そんな風に女の子にすぐ綺麗とか可愛いとか言っては！ 大変軽い男だと思われてしまいます！」

「べ、別にいいじゃん。友達にしか言っていないんだから」

「そういうところがいけないのです。カオルは誰にでも、言うべきと思っただけ言うのでしょ」

「まあね？」

「正直レンタロウよりオンナタラシですよ。本当に下心が無い分タチが悪いです」

ジト目と共にそんなことまで言われるが、ここまで言われる謂れはない！

「そこまで言うか!? てか廉よりタチが悪いってなんだよ!? いやまあ、確かにさ、俺はアレだよ？ その……どうしようもなく人間としてはダメな奴だよ」

「そういう話ではないですよ」

「そうなんだ」

「そうですとも」

どういうものなのかね、と思いながら食べ終わった鮎に刺さった串を弄ぶ。指先でクルクルと回したり、ジャグリングしたり……

「早いのでありますね」

「許してくれよ。職業柄だ」

レナはまだ鮎が半分より少し少ないくらい残っている。早いのはいいことだが、しかしこういう時は良くない。

「ぶちそうさまでした。美味しかったです」

「そいつは何より……さて、次は何処行こうか？ 俺の都合で振り回したんだ、今度はお前が振り回してくれよ」

正直なことを言えば、ぶっちゃけ俺はネタ切れだ。あとはもう彼女も知っているとろしかないしでかなりマズい。

……穂織ってこんなにも何もないところだったかア……こりや客も来ないわ。交通も悪ければ曰く付きの噂もあるし、しかも目立ったものは温泉と刀と舞だけ——よくまあ、今まで持ったもんだ。

「変なとこばつかだったろ？ 遠出でも構わないぜ」

「わたしの行きたいところ、でありますか。カオルと色々回れるだけでも楽しいのですが……そうですね、行きたいところは——」

純粹に退屈であろうと思つて声をかけたが、だいぶ好意的に受け取られていたようで嬉しい。

しかし、レナからの提案は——

「カオルの家に行つてみたいです」
「え」

……思考が完全に停止した。

そうなりながらもなんとか引つ張り出した言葉がこんなものであった。

「女の子ちゃんが男の家に行きたがるつて迂闊に言うのは、どうかと思ふ」

将臣や廉ならここで上手く色々な方向に持ち込んで行くのだろうが、生憎と俺はそういうのがいざ目の前に来ると、一般的な反応しかできないというか……そんな経験も無いし。

「あはは、カオルは真面目ですね」

「お前だって女の子なんだから、たとえ親しい男でももう少し警戒心をだな」

「そういうことは決してしないと信じていますから」

屈託の無い笑顔でそう言われてしまうと、俺はもう困るしかできない。呻き声だか困り声だか唸り声だか判別のつかない声を出しながら、顔の熱さを実感する。

「信じられるのは嬉しいけど……ウチ、街の東側の端っこだぞ？　ここから行って帰って来るだけで、だいぶ時間食うぞ。やめとけって」「むう、それは残念です」

茉莉子の家が西側の端っこなので、その真反対であるウチは東側の端っこ。この辺に当時の関係性というか、そういうところが見えてくるが、今考えるとたとえ従者やお抱えの傭兵といっても四六時中一緒にはいたくあるまい。

というか、未だにそのままだしな。

引越にするにしても難しいし、とか色々あるし。

まあどうでもいいんだけどさ。

「なら、カオルのオススメのお店に行きたいです！　アユを食べたらなんだかお腹空いちやいました！」

「オーケーオーケー。そういうことなら昼だな、うん。さあて、なーにあつたかなア……？」

物を食べたら逆に腹が減る、なんてのは珍しい。それだけ彼女が元氣ということだろう。

……しかし、そんな天真爛漫な彼女であつたとしても憑代に引かれ動き出すほどに、それ相応の何かを抱えているんだろう。

——俺では、彼女にとって助けになる友人足り得ないのだろうか？

……少しだけ不安が差し込んだ。

昼を食って、それからもあれこれ回りながら楽しく過ごしたが——

「——結局、ここになるよな」

「半日でほとんど周り尽くしてしまいましたね」

2時手前に差し掛かる頃にはもう、目ぼしいところは一通り周り尽くしてしまった。あとはお互い知っているものばかりだし、と考えたときに、レナが「デザートを食べましょう！」なんて言っただけの手を引っ張って田心屋に連れてきたのだ。

——めちやくちやドキドキしたし、今もしてるんだが、一切表に出していない……つもり。

だってすごくいい匂いするし、柔らかいし、あったかいし。

そんな俺の内心を知ってか知らずか、レナはガラガラと戸を開けて店内に入る。……俺の手を握ったままで。

「いらっしやいませ！……あつ、レナ先輩」

「おおー、コハル！ 会えて嬉しいですよ。さつ、カオルも入って入って」

どうやら出迎えてくれたのは小春ちゃんのようなのだ。

グイグイと手を引つ張られて素直に入るが、実際考えても意外な組み合わせなので、俺が顔を出せば小春ちゃんはそれはもう大層驚いた。

「へ？ 馨さん？」

「やあ。今デート中。というわけで席空いてる？」

「あつ、はい。ご案内しますね」

そうして案内されれば、レナはあつさり手を離して席に座った。

……なんか俺だけドキドキしてたのがアホみたいだ。慣れてないんじゃないかったのか。いや、単にきつとそういうのじゃないはず。弄ばれてはいないはず……

複雑な感情を整理しながら座ると、メニューを持ってきた小春ちゃんが一言。

「常陸先輩といない馨さんは珍しいね」

「そんなに意外かい？」

「てつきり、何時も一緒だと思ってたから」

「なるほどね。でもこれ以上は無粋だからやめよう。デートの最中に他の子の話はね」

「勉強になります」

「大袈裟だよ」

決まったら呼んでくださいと言ってから戻る小春ちゃんを見送った後、レナがメニューを見ながら尋ねる。

「……お昼は無粋でありましたか？」

「いや、あの時は俺も他の子を思い浮かべたりしてたから自分のことを棚に上げる感じにしたくなって黙ってた」

「マコのことを考えていたのですよね」

「まあ、そうだけど今はお前に夢中にさせてくれ。レナ」

「すぐそういうことを言うのはやはり問題かと」

「ダメ？」

「言い回しがダメです。もっとう、漫画みたいじゃなくて普通にすると良いのでありますよ」

「そっかー」

手厳しいレナに苦笑しながら俺もメニューを眺める。しかしそうか……言い回しか。今度から気を付けよう。

その後？

特に何もなかったさ。デザートを食べて、店を出て、また学院でと別れておしまい。

志那都荘へと向かうレナにヒラヒラと手を振って見送っただけだ。

「さて……」

傾き始めた太陽に向かって歩いていくレナが見えなくなったと同時に、俺は後ろを振り向いた。

もちろん誰もいない——が、しかし俺にはわかる。人にして人ならざる我が身は、こと異質なものを区分することに優れている。特に常人と異なる性質などはよくわかる。

——なので、この穂織で最も常人と異なる性質を有しているのは誰か……そう考えたとき、途中から俺を尾けていたのは誰なのかは、あつさりとうわかった。

「出てこいよバカップル」

「誰がバカップルだ!？」

「バカってなんですかバカって!？」

本当に小学生のような挑発に軽々と乗って現れた将臣と芳乃ちゃん。

——昼を食った後からか、こいつらが追いかけてきていることは把握していた。

気配が隠しきれないというか、俺には確実にバレるというべきか。将臣が特殊性の塊なので、それと同じくして動く気配など自然と絞れるというか。

「人のデート覗き見たアいいご趣味じゃねえか」

「うぐつ、そ……それは……」

狼狽える将臣だがこつちからすれば何をしてるんだと言いたくなる。

「大方、茉莉とムラサメ様が気を利かして二人でデートでもしてこいつて言つたんだろ？ ついでに足りないもの買ってきてとか」

「すげえ、全部当てた」

「馨さんは茉莉が絡むことになるって頭が急に良くなるから」

「よーしーのーちゃんー？ 君の恥ずかしいエピソード今ここで暴露してもいいんだけどー？」

「なっ!? そ、それはやめてください！ 子供の頃のお転婆な話なんてしても面白くないでしょう！」

「クハハハつ、悪い悪い」

幼馴染特有の脅し合いをする俺たちと、そんな状況に少し微妙そうな視線を投げつけてくる将臣。

ふむ……ちよつとからかうか。今の俺は多分、人をからかう時の茉莉のような表情をしているのだろう。顔の動きからなんとなくわかる。

「愛しの女が取られて嫉妬ジエラシーか？」

「……そうだよ」

おや、意外にも膨れつ面だが素直に答えた。と、なれば――

「なるほどなるほど。これはもう俺はお邪魔虫だな。ちなみにこの時間帯なら陽が落ちてくるのもそろそろだから、夕陽をバックに……なんてロマン溢れることもできるぞ。あとはごゆっくりー」

「なななっ、なんてことを言うんですか!? で、でも夕陽に照らされてなんて……あううう……」

ナニを想像したのやら、顔を真っ赤にして恥ずかしげな表情をする芳乃ちゃん。うん、お前がからかうのもよくわかるぞ茉莉。

と、帰ろうとしたのだが――

「あつ、馨」

「んあ?」

今度は将臣に呼び止められた。

はて、何かしたのだろうか? いや特にからかう以外に何をしたわけでもないのだが。

そうして不思議そうにしていると、急に真剣な表情になって。

「ムラサメちゃんのこと、ありがとな」

なんて、頭を下げられてしまった。

どうした急にも言えなくて完全に困惑する。本当に何か感謝されるようなことをしたわけではないのだが。

あんなもん感情の発露だし。

「お、おいおい。頭上げてくれよ。別に俺は――」

「俺、浮かれ過ぎててき。ムラサメちゃんが寂しくなるとかそこまで頭が回ってなかったんだ。昨日、本人からお前と話したこと聞いてハツとしたよ」

「お、おう……?」

「俺くらいしか触れ合えないのに、そんな俺が離れたら元通りじやないかって。だから彼女と接せる人が増えるようにしなきゃなって思っただ」

「……お前、よく自分の女の横で他の女のこと言えるよな」

「真面目なんだよ、茶化さないでくれ」

「ムラサメ様がいなければ呪いの解決も無かったのですから、私たちも少しでも何かお礼がしたくて」

あつ、芳乃ちゃんが復活した。

「ちようど常陸さんが色々終わったお祝いをしたって言ったから、それを上手く活用してなんとかしてみようと思う。馨も、ムラサメちゃんが独りなのは嫌なんだろう?」

「そりや尊敬する人、報われて欲しい人が永遠の孤独に包まれたままってのは嫌だよ」

そこで先日のレストランとの会話を思い出す。信じてくれる人に伝えて

みては、と。

「……ま、ゆつくりと信用を勝ち取ってくしかねえわな。ムラサメ様が見えるのは俺たちだけだが、”ここにいろ”って知ってる人もいろわけだし——内祝いみたいな雰囲気になるのはどうにも避けられないが、むしろそれくらいでいいのかもな」

「もちろん馨さんも来ますよね?」

芳乃ちゃんに言われて、俺ははたと気が付く。

ムラサメ様の存在を明かすということは、必然的に祟り神や呪いのことを明かさざるを得ないわけであって……つまり俺の——稲上の正体にも触れる必要がある。

流石に祝いの席に暗い話を持ち込むのは……難色を示さざるを得ないのは仕方ないことだろう。

「うーん……行きたいは行きたいけど、ムラサメ様の話を振ると色々明かさなきゃいかんだろ? となると暗い話な俺がいても平気かね」
「流石に一から十まで明かすつもりもないよ。その辺は適当にそれっぽいこと言えば大丈夫だって」

「それにレナさんだって、別にあなたのことを全て知っているわけではありません。ただ有事の際に必要な存在だと言っただけですから」
それなら安心だ。

つてことは、あれは絶妙にすれ違っていたんだな。褒められたのは嬉しいけど。

「了解了解。んじゃ、基本参加の方向で。急な用事が入らなきゃ行けるさ。暇だしね。日時はまだなんだろう? あとで伝えてくれ」

いつになるかは知らんが、ムラサメ様を知る人が増えることは素直に嬉しい。ああ、本当に楽しみだ——

「けどムラサメ様って飯食えるのか? 将臣に触れられるけど、他はダメなんだろう?」

「この前パフェを指に取って食べさせてみたらすんなり行っただぞ」

「お前彼女いるのに他の子に指舐めさせるとか変態かよ」

「違うからな! 合意の上だからな!」

「色々試した結果ですっ!」

「なんかごめん」

「こいつらも楽しそうで何よりだ。

が、そうだな……あいつはどうしてるんだろうか？」

何処へ行くのかは知らないが、二人に別れを告げて家に帰る俺の脳裏にはやはり——

夜。

家を出て、いつも通りの道を歩き、いつも通りにあいつを待つ。

そして——普段より少し遅く、彼女はやってた。

「遅かったな」

「今日はお風呂を貸してもらったので」

「湯冷めしないのか？」

「むしろいい具合に身体を動かさせていいんですよ」

「そっか」

歩幅を合わせて、茉莉とそんなたわいもない話をしながら歩き出す。

「レナとデートしたよ」

「知ってます。どうでした？」

「楽しかったさ。俺はね。彼女がどうかは知らないけど」

「きつと同じ筈ですよ」

そう微笑みながら言われてしまえば、俺はそう言いくるめられてしまう他ない。

「けど、流石にウチに来たいなんて言われるのは想定外だった」

「彼女、中々に小悪魔的ですよね」

「俺を信じてるからそんなこと言ったらしい」

「あははっ、信じられるのは良いことですよ。ワタシだって信じてますもん。馨くんならどうせ手は出してこないって」

「それは男として喜ぶべきか悲しむべきか、どっちかねェ」

「あは、普通なら悲しむところでしょうけど」

「だよな」

そうして会話をしていると、いつも通りに分かれ道に差し掛かる。

ただ今日は――

「……家まで送ってどうか？」

「どうしたんですか？」

「なんとなく」

「そうですか」

苦笑する茉莉と、別段何か変なわけでもない俺。

ほんの少しだけ彼女は悩んでから――

「じゃあ、お願いしちゃおっかな？」

ちよつとだけ照れた顔で、そう言った。

「何照れてんのさ。可愛い奴」

「あんまり可愛いって言わないでください。これでも恥ずかしいんですよっ。」

「へえ。お前押されるのに弱いんだ」

「語弊を招く言い方はやめてくださいっ」

「事実だろ」

「そうですけど……」

「……」

何でか言い澀む茉莉を不思議そうに眺めていると、彼女は俺に対して。

「……」

「馨くんだって同じのクセに」

ちよつと赤みの差した頬と、拗ねたような表情で、斬り込んだ一言

を放ってくれた。

悲しいかな。まったく反論できないので、俺も奇妙な反応をするし

かない。

「じゃ相性抜群ってこと？ まあデートで鮎の塩焼きを食べに行くく

らい同じだからな」

「何してるの。レナさんとのデートなのにワタシの行動をなぞらない

だよ」

「正直、意外と何もなかったんだ。許してくれ。でも……将臣とお前

がって思ったらモヤついた」

「あは、嫉妬ジエラシしちゃってる？」

「……するさ、お前は俺にとつて……」

つい、本音が漏れる。

するに決まっている。しない筈がない。だけど――

「……菜子はどうなんだ？ 妬いてくれるか？」

「ワタシ？」

自分だけが、というのは性に合わなくて、つい彼女に尋ねてしまった。

「ワタシは……」

視線が逸れる。表情も見えない。

「……ワタシも、するかな……」

だけどやけに、その言葉から彼女が今どういう状態かというのは連想できた。

きつと、俺と同じだ。

……本音を言つて、恥ずかしい。

しばらく無言で歩き続け、菜子が足を止める。

「ん、ここままでいいかな」

「そうか」

「じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そうして、俺は彼女に背を向けようとして。

「菜子」

「？ 何ででしょうか？」

「……またな」

「またね――」

また明日とは言えないけど、また会おうと言つてから、今度こそ、俺は家に戻るのだった……

理想と約束と……

デートから2日。

昨日は田心屋に食器を見せに行ったりしたくらいしか話すことがない。せいぜい、趣味のガーデンニングをやったくらいか。

何もなく学院に来て、何もなく過ごす。その筈だったが――

「明々後日にやるんだ」

「はい、そうになりました」

「ん、予定空けとく」

一限目が終わったと同時に茉子から話しかけられて何かと思ったが、どうやらお祝いのことだったようだ。

明々後日……休日だが、仕込み等を考えても結構早い方だな。しかし一体誰が来るやら。

「俺以外には誰に声かけたの?」

「廉太郎さんと小春ちゃん、レナさんに馬庭さん……あとは玄十郎さんとみづはさんですね。今のところは馬庭さん以外は了承を頂いていますね」

「また安晴さんの酒が回りそうなメンツだなア」

しかしそうか。芦花さんはまだ未定か。小春ちゃんが行けるなら、流石に開けるのは難しいんだろう。

でも駒川も来るのか……これじゃあ、アレだな――

「けど駒川来るなら酒飲めねーな。ったく、別にいいじゃないか。夜な夜な酒飲んで酔っ払ったって……」

「ほほーう? 馨くんは夜な夜なお酒飲んで酔っ払ってた時期があるとか?」

「あつ」

失言に気付いたときにはもう遅い。

「あは……」

茉子は一瞬にして笑顔を見せる。しかしそれはトキメキを感じるような優しいものではない。圧倒的な威圧と恐怖を感じさせるものだ。

普段より数段低い「あは」が、俺に怒ったときの駒川と同質の存在を覚醒させてしまったことを淡々と示してくる。

「い、いや……ほら、一時期自棄になってたろ俺。やっぱりさ、色々悩んで、でも誰にも言えなくてこう……」

やましい理由というわけではない。実際、生きろと言われても悩むときがあったのだ。それで苦しくなって、眠ろうにも眠れないときがあったため、逃げるために酒に手を出した。夜な夜な酔いに逃げて――それが両親に見つかって以来、色々と話したり駒川に助けを求めたりなどして、ある程度の踏ん切りはつけられたが……

「事情が事情ですし理解は示しますけど、あなたには甘いみづはさんがするなと言ったというのは、多分自棄酒が関係無いところですよ
ね」

「ちつ、違うよオー？ そんなことないよオー？ 週一のペースで350の缶を開けてただけで、別に毎日って訳じゃないよオー？」

ズイとジト目で迫る葉子から顔を逸らしながら、妙に高音域な声でうっかりボロを出してしまう。

そう……意外と酒が美味かったのだ。

酔いで忘れる、ということをしなくなった後、今度は何気無く何の思惑も無しに酒を飲んだのだ。そしたらこれがまた美味く感じて――週一ペースで350の缶を一本、という風にコソコソやってたら両親にバレて怒られ、話を聞いた駒川にもこっ酷く怒られた。

医学的根拠から酒を否定されてしまえばまあ仕方ないと納得したが、それ以上に如何に魔人の身と言えどアルコール依存症とかになつたら嫌だろ？ と言われれば同意してしまう。多分そつちが主な理由だった。

以来、飲むのはやめた。当時は成人後の楽しみは多い方がいいというわけではなかったが……今はそう思っている。

……まあ、たまに親父の酒に付き合ったりして少しだけ飲んだりしたのだがそれはそれ、これはこれだ。

「それはいくらみづはさんでも怒りますよ」

「ぐうの音も出ない」

呆れ顔でため息を吐く茉莉だが、そうされても何一つ文句は言えない。

——逃げるために酒を飲んでいたはずが、いやまさか普通に美味しいからとかいう理由で飲むようになってしまうなど……まあ、ここ二年以上はほとんど飲んでいないので味など忘れてしまったが。

「まあいいさ。時刻はさつき聞いた通りでいいんだな？」

「はい。変更があれば、またワタシから伝えます」

「ん、サンキュ」

連絡も終わり、離れていく茉莉を見送る。

……何故かは知らないが、どうしてか必ず俺への報告は茉莉を通して行われている。

理由は不明であるが、しかし俺としては茉莉の隣にいられるので役得である。

「ん？ 馨も呼ばれてるのか？」

「まあね。多分いの一着だったんじゃないかな」

玄さんが来ると聞いて渋り、しかしレナも来ると聞いて参加を決意した元気の廉がヒョイと声をかけてくる。

……まあ構想段階から声がかかっていたというか、俺も関係者だしな。

「ふーん……」

「なんだよ」

「意外だなんて思っただけさ。お前、こういうの割と付き合い悪かったじゃん？」

「あれは……色々あったんだよ」

ワイワイ騒ぐのはあんまり好きじゃない……ということもあつてか、大袈裟なイベントにはほとんどと言っていいほど出たことがない。

だから廉が意外というのもわかる。小春ちゃんも芦花さんも意外だと言うだろう。

……もちろん、それは何も知らなければの話だ。知っている側から見れば、出なきやいけない話である。

「便利だよねえ、色々あったって」

何処か拗ねたようにボヤク廉。

そりゃそうだ。こいつからしてみれば目まぐるしく状況が変化しているし、その理由も知らない。疎外感を感じても仕方ないことだろう。

「仕方ねえだろ。知つてもつまんねーことばっかだし、色々あったで済ませた方がいいんだよ」

「そりゃわかってるんだけどさ。昔からお前は——俺に何も言ってくれねえもんな」

その言葉を聞いて、罪悪感が頭を支配する。

「悪いな」

「いいって」

口数少ないやり取り。

俺が黙るときはそういうときだとあいつも察しているのだろう。

それ以上は何も言わずに、将臣に絡みに行った。

「あつ、そうだ。馨さん、当日の仕込みを手伝ってもらえます？ 多分

茉莉一人じゃ忙しくなっちゃうと思うから」

そして俺は申し訳なきそうにやってきた芳乃ちゃんを見て、あの力は本当に人に手伝わせる気のない阿呆だなど、自分のことは棚に上げて、それを了承するのだった——

どうせ安晴さんも芳乃ちゃんも手伝わせまい。手伝わせても俺が将臣か。まったくあいつは基本一人で何でもやろうとする。

そういうところが放つて置けない。

なんか不安だなア……

予鈴が鳴り響く中、順調に進んでくれるものかなと心配した。

あと、ついでに自分の英語力も心配した。

……ラテン語とかそつちは多少齧っているんだけど、英語はなーんか苦手なのよね、俺。

「ほら稲上、こゝろ答えて」

「……げっ」

——今日も疲れそうだ。

放課後も過ぎて、夜になればいつものように茉子の帰り道に同行するため、いつもの場所に向かう。

ただ、今日は違った。

「どうした将臣。芳乃ちゃん放っておいて茉子の相手か。ケツの軽い男だ」

自然と表情が険しくなり、低い声になる。

茉子の隣に将臣がいた。

——ムカつく。

どうしてお前がそこにいる？

お前は芳乃ちゃんの隣にいるべきだろう？　なんで茉子の隣にお前がいる？　そこは……

「なんだよアレか？　まとめて食うつもりか？　お前が色情魔であるなら殺すべき魔物だ。ふざけた真似をしてみろ、今すぐにでもその首を落としてやる」

沸き立ち荒ぶる妬心に従い、将臣目掛けて無茶苦茶なセリフをぶちまける。はつきり言おう、正気ではない。それほどまでに今将臣に対して妬心と疑心を抱いている。

……単に俺が筋の通っていないことが嫌いということもあるが、妬心の方が多くを占めている。

「落ち着けて馨！　そういうのじゃないから！　全然違うから！　怖い顔やめて！」

「ならどうしてお前が茉子の隣にいる」

「元々常陸さんに聞きたいことがあったし、それに俺はお前に用があったんだよ」

「俺に？」

奴の真剣な表情と声から考えて嘘は言っていないようだ。

まあ、そういうことなのだろう。恐らくは裏の話か。疑心は完全に静まるが、妬心はそれはそれとして少し燻っている。

……その理由は考えないフリをしてきたし、きつと違うだろうと思いついていたが……まあ、そんなオチだったのだろう。

——クククツ、貴様も男だな——
茶化すな虚絶。

……認めようとしてこなかったが、こと此処に至っては致し方あるまい……認めよう。

——見て見ぬフリをしていたし、気付かぬフリをしていた貴様らしい、その最果てだ——

やめろ、そんなの俺がわかってる。

——まさか、一度は否定したことが事実とはなア?——
もういいって!

——愛い子よな、馨。そういうところは”私”に似たか。奥手なのはいかなぞ? お前はとて一途で純粋な男なのだからな……クク、ハハハツ——

らしくない笑い声が内面に響く。

実に俺の先祖だ、ロクでもないところがよくわかったよ……

「……馨? どうしたんだ? 急に黙って」

「馨くん? 大丈夫ですか?」

「え? あつ、ああ、わかってる。大丈夫だ」

いかにいかに。

奴と”昔みたく戯言で楽しんでしまった”な。俺らしくもない。

将臣と茉莉に笑顔を見せながら、別になんでもないと言う。

さて……

「んで……じゃあどうするんだ? 俺に用があるなら、立ち話だと面倒だろう。茉莉には悪いが、先に帰ってもらおう感じが」

「そうなるな。ごめんね、常陸さん」

「いえいえ。全然気にしてませんよ。有地さんも馨くんも、送ったり待ってたりしてくれてありがとうございます」

茉莉を省くような形になってしまい、将臣が謝ると、茉莉は笑顔でそう言って、ペコリと頭を下げた。

「では、おやすみなさい。また明日」

「うん、また明日」

「ああ、おやすみ」

家路に着く菜子を笑顔で見送ってから、俺たちは向き合う。

先ほどとは違つて、真剣な表情でだ。

「……さて、立ち話もなんだ。ウチ来るか？」

「頼む。割と寒い」

「いくらあつたかい時期とは言つても夜に薄着はやめとけつて」

割と薄着派な将臣には、穂織の夜中は風が透き通つていてかなり冷たいらしい。俺は慣れてしまったものだが。

上着を貸しつつ、将臣をウチに案内するのだった。

■

「着いたぞ」

「悪いな、道忘れててさ」

「いいさ、一度来たきりだろ？ 早く入れ。俺が寒くなつてきた」

「……悪い」

上は肌着だけの馨が家の鍵を開けて家に入っていく。それを後ろから見ていた将臣は、馨の家を改めて見る。

前に来た時は、馨に礼を言うために菜子に案内してもらつた時のこと。あの時は余裕も何もなかったから、全然覚えても気にしてもしなかったが、今見てみるとかなり異質だ。

（……まばらな配置の家。馨の家はだいぶ現代的だけど、他の家はかなり微妙だ。それに道は整備されていると言えるけど、中心に比べれば——）

「何もない」という印象を強烈に与えさせる家の配置と場所。東側の端っこにあることといい、意図的なものを感じずにはいられない。それを無理矢理にそれっぽく見せかけているような……とにかく歪だ。

（……馨、お前は……）

将臣が菜子の帰宅に同行したのは、彼女の家が意外と遠いのだと知つて、流石に送りが必要だろうと思つたのと、彼女が何故ムラサメが見えるのかが疑問であつたこと。

そして、彼女しか知らないであろう馨の真実を知りたいと思つたことだ。

『ご主人。吾輩は確かに昔から馨を見ておるが——馨の内面は駒川の

者以外は知り得ないだろう。芳乃や茉子であつてもだ』

『馨さんは昔から一人で考えて、一人で決めてる印象があります。でも私たちも自分の事で手が一杯だったから、本心と接する機会はありません無かつたんです』

『……ワタシは、馨くんのことを何も知らないんですよ。有地さんが思っている以上に、ワタシと彼は距離があるんです』

ムラサメも、茉子も、芳乃も、稲上馨がどういう人間かを知っているが、しかしその本質……いや、どういう考えをしているのかを必要以上に知らない。

馨は何が好きで、何が嫌いで、いつ生まれてなどは知っているが、その根底にあるものは臆げにしか分かつていない。

ただ三人とも、馨と長らく接していた所為もあつてか、言いたくないことなら無理に知る必要は無いと思つて引き下がつてしまつていた。

……茉子だけは何か察しているようだが、それを問い詰めるほど将臣は割り切れなかつた。

(……それとなく聞ければいいかな。ちよつと長くなりそうだけど……朝武さん拗ねないといいなあ)

きつと知らない、何処かでひどいすれ違いが起きそうな気がする。

将臣は、茉子や芳乃ほど馨という人間を知らないし、理解し切れなくてもいい。

「お邪魔します」

ただ悪い男ではないし、根っこは非常に純粹で少年的な人物だ。友達としてもかなり面白い奴だし、できることなら歩み寄りつてやりたい。

……いや本当に弟のような人だなと思う。

何処か寂しさを感じさせる家に入りながら、しかし愛しの彼女に無理言つて来たことに由来する心配事を胸の奥底に抱いた将臣であつた。

「珈琲でいいか？」

「ああ」

「ミルクと砂糖は」

「一応用意しておいてくれ」

「へーい」

テキパキとコーヒーを用意する馨に返事をしつつ、将臣はリビングを見渡す。

これといって特徴も無ければ、無駄なものがほとんどないリビング。ビニール袋や雑誌が至る所に放ったらかしなのは馨の気質からだろうか。

（写真だ。あれは……）両親の結婚式の写真かな？ その隣は、小さい頃の朝武さんと常陸さんと馨の写真だ。あとは……廉太郎という写真なんかもあるな）

リビングの壁には綺麗な状態を保った写真がいくつか飾られている。馨だけが写っているものもあれば、他の人と一緒に写っているものもある。幼少の頃と思われる写真は純真無垢な笑顔を見せているが、歳を重ねる毎に段々と馨の表情は苦笑めいたものになっている。いる。

——そして将臣は、その写真の中に芳乃を更に大人っぽくしたような女性が写っているものを発見した。

同時によく知る安晴も写っている。と、なれば……答えはすぐに出た。

（……この人が、朝武さんのお母さん。名前は確か、秋穂さん……だったよな）

芳乃によく似ている。いや、芳乃が秋穂によく似ているというべきか。しかし内面は安晴寄りだったりするのだと過去にムラサメが語っていたのを思い出す。

なるほど、本当にそっくりだ。

「秋穂さんの写真が気になるのか」

「えっ、あ、まあ……」

「本当にそっくりでな、二人は。本人も言ってたぞ。「私たちコピーアンドペーストみたいでしょ」とか」

いつの間にか用意してきた馨がコーヒーをテーブルに置きつつ、よいこらせとジジ臭い呟きと共に座る。

「ま、詳しいことが知りたきや安晴さんの惚気に付き合うことだな。俺はあの人を語れるほど長く接していた訳じゃない。あまりにも短い——それこそ、ただ月並みに優し過ぎる人だったとしか言えないくらいにはな」

何処か遠くに視線を向ける馨の表情は、悲しげなものであった。あまりにも早すぎる離別——それがどれほどの喪失と絶望を与えたのか、将臣には計り知れない。

だが彼は、それが関係者一同にとって、とても大きな意味を持った出来事であり、そういう意味では未だ部外者と言っても過言ではない自分は何も言うべきではないと理解していた。

少し暗い雰囲気になってしまったな、とも思いながら冷めないうちにとコーヒーを飲む。

暑くて苦く、酸味もある。が、しかし——

「なんか、美味しいなこれ」

それはそれとして美味しい。

コーヒーなんてどこも同じだと思っていたが、世界は広いらしい。それを聞いて馨はパツと身を乗り出して喋り出した。

「わかるか？ 何せ豆を直接挽いてるからな。マシーンでやってもいいんだが、手回しでゴリゴリやるのが結局一番なんだ」

「お、おう？」

「紅茶もいい茶葉が手に入れば味が大きく変わるが、でもな将臣。珈琲にしろ紅茶にしろ、淹れる奴の淹れ方次第では最終的な味が変化するんだ。面白いだろ？」

目をキラキラさせながら早口で語る彼を見るのは初めてだった。今までは年不相応に大人びた面か、子供っぽい面しか見られなかった。やはり年相応の面もしっかり持っていて、普段は隠れてしまっているのだ。

——どうにかしてやりたい。

傲慢で偽善、要らぬ世話かもしれないが、将臣は本気でそう思って

いる。

「……つと、興味無い話だったよな。悪りい悪りい。庭造りと植物の手入れ、それから珈琲と紅茶を嗜むことくらいしか趣味が無くて、ついついお喋りになっちまう」

「いや、気にするなよ。それに俺、馨のそういうところが知りたかったしき」

「俺は彼女持ちの男に口説かれてるのか？　もう少し言葉を選んだ方がいい。じゃないと女の子にボロクソに貶されて知らないぞ」

やけにその実感のこもった言葉には頷くしかできない。

——そういえばこの前、朝武さんと芦花姉のところに行ったとき、少し前に愉快的な馨を見たんだーなんて言ってたけど、それがそうだったのかな？　……なんて思ったとき、きつと馨の言う女の子は茉莉のことなんだろうと察した。

「んで、お前茉莉子に何聞いたんだ」

楽しげ、神妙——そしてムスツとした顔にジト目。茉莉子の事になるとすぐこれだ。わかりやすい、露骨すぎる。

忙しなくコロコロと表情を変える馨の姿は新鮮で、普段は一切見せることないものもたまに見えるが、今日は本当に馨本来の人間性というかそういうものが剥き出しになっている。

「だーからそう警戒するなよ。単にどうしてムラサメちゃんが見えるのかって気になっただけだから」

「む、その話か……茉莉子はなんて？」

「端的に言えば朝武さんの親戚に値するからとは教えてくれたよ。ただその後のことは聞いても教えてくれなかった。シケた話になるだろうからって」

「そうか。——つまり、シケた話をしに来たってことでいいんだな。将臣」

「ああ」

空気が一変する。

馨は残ったコーヒーを飲み切ると、何から話たものかとボヤク。

そして、静かに語り出した。

「稲上と常陸と朝武。はつきり言っただけでその関係が良好になったのは結構最近の話だ。大昔はビジネスライク以外のものが無かった……と言っても過言ではない」

「なんか想像付かないな。だって稲上は崇り神討伐のために……」
「違う」

彼が言ったことであるのに、他ならぬ彼に否定された。しかも即答で。

その表情は重く、そして……

「崇り神を殺すために呼ばれたわけじゃない」

苦虫を噛み潰したような顔。

重々しく開かれた口から放たれたのは――

「……伊奈神は、常陸家に対する圧力と始末するための処刑人として呼ばれたんだ」

信じがたく、受け入れ難い真実。

疑問が頭を支配される。圧力と処刑人？ どういうことだ理解できない。

「え？ なんでだよ？ どうして忍びである常陸家を始末する必要がある――」

親戚で忍びである常陸に対する圧力をかける必要はない。家臣だったのだろうか？ だというのに何故？ そんな関係ではないだろう。

近くで見ても、常陸と朝武の関係は良好なのに……

「お前、忘れてないか？」

渋い顔をする将臣を諭すように、馨は無表情で言葉を続ける。

「安晴さんは最初に言った筈だ。――ムラサメ様を認識して話すことができるのは、直系の血筋に限られている……と」

そこで……脳裏に浮かび上がった可能性。直系の子孫であるのに別れたもの。呪いの始まり――神を捧げて贄とし水晶を砕いた男。

死んだ人間、あの忌まわしい輪廻を描き出した人間……

「まさか……」

凍り付く。声が震える。

それを見て馨はそれを――

「かつて朝武の血筋は二つに別れて争った。逆恨みから争いを起こし、そして死んだ長男――そうだ、常陸の始まりはそこにある」

一切の慈悲無く、虚無以外の何者でもない表情とともに、ただ容赦無く肯定した。

「詳しい話は知らんが、死んだ連中以外は恩赦で許されたらしい。だが家臣として迎えるのは論外。故に合意の上で、汚れ仕事の忍びというわけだ。もつとも、他の家臣たちはそれを認めるのは難しかっただろうが」

「――だから、常陸さんはわざわざ遠いところから毎朝来てるのか」
「そうなるな。そして不安要素に対するカウンターで稲上は呼ばれた。魔物狩りなんて言うが、結局は人殺しさ。そういうことだったんだよ……殺す事態になったら殺すだけ殺して出てけ。だからここにいる。まあ、ウチは本家からの逃走用資金とかあって動けないんだけど」

なんてことだ。

あんなに身を粉にして尽くしている女の子に遙か昔の因縁を背負わせる？ 何故だ？ 何なのだその不条理は？ ふざけるなよ。かつて必要であったとしても、今なお続けるものではない。

自然と将臣の顔が憤怒に歪む。

幼少の頃から家族のように仲の良い三人の間にあつた闇は想像以上に暗く、そしてみんな違う真実を刻み込まれ、追い詰められ、そして自然と何処か歪んで行つた――

「……クソッ」

心の底から吐き捨てる。

――酷い話だ。あんまりにもあんまりじゃないか、こんなのは。報われない。身を呈してあの呪いと戦ってきた三人が、根本からしてどうしようもないところで蝕まれていたなんて。

そりゃ馨も褒めてくれと叫びたくもなる。褒められずに謝罪されてばかりであるのならば、それは必要なことだと考えてもおかしくない。

糞食らえだ——こんな宿痾。

「おいおい、そんな怖い顔するなよ」

「茶化すなよっ……逆にどんな顔して欲しいんだお前はっ」

「まだ話には続きがあるんだよ将臣。とりあえず聞けっ」

一番心を痛めているのは馨である筈なのに、まるで早合点をした子を宥めるような表情と声でそんなことを言う。

——お前だって好きな子が不当な扱いを受けているのなんて殺したいほど嫌だろう？ とか思うには思ったが、鼻歌交じりでカップに新しくコーヒートを注ぐ馨を見るとそこまで焦る事でもなさそうだとは考えられた。

「一口飲んで。落ち着くぞ？」

「……やっぱり美味しいな」

「そりやいい豆使ってるからな。豆の分くらいは美味くないと困る」

熱さと共に入ってくる苦味と酸味が、怒りでヒートアップした頭に届く。しばらく無言でコーヒートを飲み、ちようど半分になったくらいで、馨は続きを話し始めた。

「すでに場所移動の話は朝武家から何回も出てるが、向こうが断っているんだ。もう過去の因縁は無い。全て時代と共にもう終わった話だ。心配なら菓子に聞けばいい。補強してくれる」

「……そっか。なら、よかった」

「あと俺の話だが……まあこればかりは仕方ない。けどもう呪いを生み出そうにも苦労するぞ」時世だ。それこそ虚絶を用いなければ数日で消える雑魚しかできんさ。そんな程度なら、その心配は無いよ」

ケラケラと笑いながら「ほら、なんでもないだろ？ あとは気の持ちようで解決するのさ」と眩き、残ったコーヒートを飲み干す。

その姿はまるで、無理矢理自分を納得させているようにも、それだけではないとして受け入れているように見えた。

自分の心配は空回りだったみたいだ——その事実には、安心した。ところが。

「んでだ、将臣……ちよつと芳乃ちゃんには言えない夜遊びしない？」
馨がやけにいい顔でそんなことを言う。

「お前存在そのものがシリアスなものに出てくる言葉割と最低だよな」
もはやその落差に呆れを通り越してはあ、となるしかない。

「その夜遊びってなんだよ」

しかし恋人に言えない夜遊びとは一体……いやまさかなと少し恐怖しながら尋ねる。そして――

「これからクレープ焼く。んでコーヒー飲みながら食う。俺食いたいし。ものがねえからシュガーバターだけどいいよな？」

「あつ、これは朝武さんには言えない夜遊びだわ。頼む」

「へへ、任された」

帰ってきた答えにYESで即答した。

そんなこんなで出来立ての、異常なほどに綺麗な形のクレープが皿に乗って出てくる。ついでに準備していたコーヒーも入れ、夜遊びの準備は整った。

「クレープ好きなのか？」

「ああ、パンケーキと並んで大好物だね」

「ちよつと意外かも。甘いもの好きって」

「ま、魚と野菜と米食えりやいいって公言してつからな。意外なのは否定しないさ」

バターが溶け切らない内に食えよー、と言ってからひよいひよいと食べ始める馨。それに倣って食べ始めると、すぐにあることに気が付いた。

――馨の料理にしてはやけに美味しい。

いや、普段が不味いというわけではない。少なくとも将臣は自分以上であるとしている。ただ廉太郎や小春、それに芦花と茉莉――料理ができる人たちと比べると見劣りするの事実だ。

見た目は一級レストランみたいに寸分の狂いも無い完璧なものなのだが、肝心の味がとても雑なのだ。濃すぎたり薄すぎたり……食べ「ほう」とは思えるが美味しいかと言われると味の雑さが先に来て何とも言えない。

そんな彼が作った料理にしては珍しく、田心屋で出してもおかしくないものだった。

「昔、芦花さんの作ったクレープを食ってさ。以来どハマりしちまったんだ」

「芦花姉が？」

「ウチに用事があって来た時に、気紛れに作ってくれたんだ。その味が忘れられなくて再現するために色々やっていたら……クレープとパンケーキだけは美味くなってな」

「朝武さんに食べさせてあげたら？ 甘いもの好きだし」

「お前がいるだろ。教えろってんなら教えるぜ？ 一通り基本は頭に入ってる」

「んじや、今度お願いしようかな」

そんな風に二人は友人らしい一時を過ごし、友人らしく笑い合い、友人らしく冗談を言い合って、友人らしく楽しんだ。

だからこそ。

将臣にとつて、馨が何故自殺を選んだのかわからなかった。

何故なんだ？ 何がそれを選択させたんだ？

——そうして気が付けば、ほとんど無意識の内に言葉がスラスラと吐き出されていった。

「言いたくなかったらいいんだけど……なんで馨は自殺を選んだんだ？」

将臣は死のうとしたという事実は知っていても、その理由を知らない。絶望したから自殺する……というのは、なんだか馨らしくないし、もし言っていたら周りの大人たちが全力でどうにかしようとするだろうし、芳乃も茉莉も止めることが簡単に想像できる。

……しかし、馨は誰にも何も言わず死のうとした。突然のことだった。相談できる相手は両親がいるというのに。

彼にはどうしてもそこがわからなかった。

そして、同時にそこに何か……馨の人間性の根底があるのではないかと薄々感じていた。

「……死線を潜り抜けた仲であるお前になら、言ってもいいか。これは駒川だけしか知らないことだ」

そして馨は彼に言う義理も無い筈なのだが、しかし何を思ったの

か。彼自身すらわからぬ衝動に身を任せ、何故死を選んだのかを明かし語った。

「俺はな、将臣。」

——理想像そのものになつていないと気が済まない人間なんだよ」
寝耳に水という言葉があるが、馨から出てきた真実は、将臣にとつてみれば、突然隕石が眼前に落ちてきたような衝撃だった。

……なんだそれは？ 理想像そのものになつていないと気が済まない？ 無茶苦茶だろ、どれだけ厳しく険しい生き方なんだ——将臣とて男。理想像を思い描くし、その通りに生きたいと思つたことがあるが……自分の性格や、環境を考えれば全て夢想到に終わる。

——せいぜいが、こんな風になれたらなあ、というボンヤリとした蜃気楼だけだ。

だが目の前の男は、愛した女の幼馴染は、蜃気楼を現実のものにしないと気が済まない……その何と度し難く、苦しいことか。

「人に生まれたんだ。人として生きて、人として死ぬ。俺は最初にガツンとそう決めた。自分はこう生きて、こう死ぬってな——」

今も昔も変わらず、馨の願いは一つだけ。

——人として生き、人として死ぬ——

魔に近しくして生まれた少年が抱いていた、何の変哲も無い願い。

だが、彼は魔人として生まれたから、魔人として死ぬしかないのだと定義した。

「けど俺は魔人だった。魔人であるのが現実だった。人として生きて死ぬんだって決めたのに、蓋を開ければそれは叶わぬ願いだ。普通の人間なら、そこであれこれ考えてどうこうするんだろうが、俺は違う。それが叶わないなら、生きていたくもない——」

人として生き、人として死ぬ。それが願いであり全て。

自分はこう生きて、こう死ぬ——そう定めたこれを、最初に貫き通そうとした時に、最大にして最強の壁にぶち当たった。

最初に決めたのは人としての生、人としての死だというのに、友を殺す為の存在であるという、最初の現実には彼はぶちのめされた。

「ま、一種の潔癖症みたいなもんだと思ってもらえば分かりやすいな。

有り体に言えば、何があっても絶対に間違えたくないし失敗したくないだけ。マンガやアニメの主人公みたく思い通りに行かなくなったりから、自分が憎くてたまらなくなるのさ」

「そんな……そんなのって、生きられないじゃないか！」

「生まれた時から死ぬ時まで間違い一つなく、賢者の如く生きて死ぬ。失敗したからこそ学べた？ 必要な失敗だった？ 失敗してよかった？ ——はっ、そんな戯言絶対に吐いてたまるか」

自分がこれと定めた道を走れない？

——なんとという無能。

——まったくもって無様極まりない。

——恥晒しにもほどがある。

——筋が通っていない。

——吐き気がする。

馨とはそう思い、そう考える人間だ。

「やると決めたら押し通す。それ以外の選択肢なんざ在りはしない。途中でやめよう？ 今からでもゴールを変える？ ブレーキかけて道を探そう？ ク、ク、あはっ、ハッハハハハッ——なあって思えるわけねえし選べるわけがねえよ。大っ嫌いだ、ふざけんなってな！」

一度決めたのならば、後は徹頭徹尾雄々しく貫き通せなければ我慢ができない。理想型そのものになっていなければ気が済まない。傷一つ付かない理想の己であり続けていたい——それこそが、稲上馨という人間……彼の中にある最果ての真実だった。

「そこで諦められるようならなア、俺は自殺を選んでねエんだよオ！」

理想を目指して何が悪い！ 擦り傷一つ憎んで何が悪い！ 絶対

！ 完璧！ 完全！ 無敵！ 最強！ 最善！ 最高！ 男の子な

ら憧れて当たり前だろ！」

……自分は人として生きて死ぬ。そうしたいのにそうできないから。そんな己に価値も意味も無いから。

絶対でもない、完璧でもない、完全でもない、無敵でもない、最強でもない、最善でもない、最高でもない。

最初に思い描いた夢すら追えない。ならばと代替案を考えようと
しても、それすら何一つ受け入れられない。

では死ぬ。

それこそ馨が、自分自身に下した判決である。

「……なんて悲しい性なんだよ、馨……！」

「駒川も同じことを言っていたさ。だからあいつは、俺に向かって”
生きろ”と言ったんだ」

馨の脳裏に浮かぶのは、過去に自分の自殺を止めて、命を捨てよう
とした己に対する怒りを見せたみづのはの姿。それが今の彼の原動力
の一つ。

「決めたんだろ？ だったら貫けよ、強い男の子なんだろ——あいつ
はそう言っただけに笑いかけたよ。一度の傷を嫌がるのも仕方ない。
だけど魔人が人として生きられないとも決まったわけじゃない。こ
れは失敗じゃなくて必要なことだ。傷のように見えて傷じゃない。
最低でも二十歳まで生きろ、それでもダメなら、その選択を尊重する
——」

しかし、ふと彼は顔を変える。

憧れの光に身を焦がされた殉教者ではなく、ただ一人の人間として
の顔へ。

「……本当に二十歳まで生きるしか考えてなかったが……彼女に生き
てと言われてしまったんだ」

そこで生きようと決めたのは、約束を守ると決めたならそれを成し
遂げるという自分の性だけではない。

本当は、ずっと見て見ぬ振りをし続けてきた理由があった。

「——その辺はいいか。大声で言うようなもんじゃない」

「好きなんだろ、常陸さんのこと」

間髪入れずに弾き出された言葉。

—— たっぷり1分以上の沈黙。

そして視線があつちこつち行った後に、空のカップに手を伸ばし、
中身を見て止める。

それから表情が面白いように百面相を始める。そこでやっと、ああ周りから見たとき自分もこんな顔をしていたときがあっただろうなア……と、将臣は納得した。

ぶつちやけ、あれで隠せているつもりなのだろうか。関わりの浅い将臣が見ても、馨が茉莉に好意を寄せているのは露骨だった。茉莉がどうかはわからないが、少なくとも姉的な感情ではないのは確かだろう。

そして、一言。

「……………まア、うん……………」

内心きつき認めただけで、他人に言うのが恥ずかしいからと黙っていたこの男は、物凄く小さな声で、常陸茉莉への好意を、他者に認めた。

「……………ま、流石に惚れた女に生きてと言われたら生きようと思えるわな」

そう、結局はそれだ。

心の底から愛している女性に生きてと願われた。それだけで生きる理由になる。

……………それに、色々考えてみて、無意識下で理解していたことがある。「人として生きて死ぬ。それが貫けないのなら迷わず死ぬ。これは変わらんさ。押し通すのも変わらん。そして生きれば、傷を負い続ける自身を責め恨み続け——事あるごとに飽きもせず懲りもせず、己は何と罪深く度し難い存在だと苦しみ呪うんだろう」

しかしそう言い切って、彼は笑う。

「でも——それでいい。それがいいんだ。そうでなければならない。理想を貫けない、間違ってしまう、間違えてしまった苦しみを抱えてでも、生きるということが人の生であり、後悔を抱えて終わるのもまた人の死。過去を振り返ったときに、ああ——こんな失敗もあったと認めて先に進めば十二分だ」

……………そう口にして、ストンと胸に落ちた。

どうやら今の今まで、俺はそこまでたどり着きながら気付いていなかったらしい——馨は静かに笑い出す。

「やつと判った。ずっと知らなかった。生きるということは苦痛を感じる事だったんだ。間違ってた——その事実死ぬほど後悔しているし、今でも死ぬべきとすら思っている。これからもどんな些細な間違いであっても嫌だと思っている。だけどそれはそれだ。そんな間違いもあった、失敗もあった。それだけなんだ」

もう、死を選ぶ必要など無い。

生きるということはそういうことだと理解して、納得したのだから。

「死んでるように生きてくれないからって、生きてるように死んでいくけど、これからはそれをやめる。死んでるように生きてやるさ。俺は生きたい……生きたいんだ」

生きるという前提から間違えていた。

だからこそ改めて始める。貫き通してみせると決意した。

「次に自殺を選ぶ時が来るとしたらそれは——俺が本当に人として生きられないとわかった時か。あるいは……茉莉子を、愛せなくなった時だろうか」

——眞実人で無くなったのなら、それこそ……自分が死ぬべき存在になったのだろうか。

神刀の担い手と、妖刀に選ばれし者。

あらゆる意味で対極に位置する、光と闇が如き存在たちは。

「だからな将臣。もしものことがあったら……頼めるか？」

「ああ。そのときは必ず俺が」

初めてその位置を確認し、理解をして、一つの約束をしたのだった

急転

そうして迎えたお祝い当日。

集合時間よりも結構早く着いた俺は、茉莉子と顔を合わせた。

「……と、言うわけで芳乃ちゃんの要請により救援に参った」

「助かります。じゃ、これが献立です。ワタシはこれをやってるので馨くんは——」

別に何でもなく、彼女はサラリと流して料理を作り始める。俺も献立を見て彼女のやってないものを作り始める。包丁捌きだけは俺は絶対に人並み以上のものだと自負している。味付けはヘツタクソだが。

「あ、それ取って」

「ん、わかった」

二人で黙々と準備を続ける。

俺は俺がやって問題無いものを作り、茉莉子は茉莉子がやるべきものを作る。そこにそれ以上のものはない。

そう、何も介在しない。

ドキドキしないし、いい匂いなんてしない。ごくごく普通の話。

目で追う必要も無い。

確かに、俺は茉莉子が好きだが……別に今まで以上を求める気は欠片も無い。何故か？俺が彼女に抱く愛は姉弟愛と異性愛と、彼女の優しさに甘える心が入り混じってしまった歪な愛。決して真つ当な愛ではないからだ。

それは理屈だ……という人間もいるだろう。

だが冷静に考えてもみる。彼女は俺に弟を求めている。そして俺は彼女を女として求めていると言ったら、互いの認識の不一致から面倒なことになって、お互いに後味の悪い結末を迎えることになるだろう。

心の底から好きだからこそ、それだけは避けなければならない。

——なんて考えて、呆れたため息しか出てこない。

……いや本当に、俺は茉莉子しか見えていないらしい。というか茉莉子

以外に惚れそうな女はいないと断言できるほど茉莉に夢中だ。

割とレナや芦花さんに心惹かれてそうなものだと思つてはいたのだが、驚くほど冷静かつ的確、そして絶対的にそうではないと断言できる。

ならば俺は、茉莉が望むなら彼女の弟分であり続ける。惚れた女に望まれているのならば、それはそれで悪くない。個人の心としては、それ以上になれたらなあとは思わなくもないけど、俺は人を不幸にしてしまう考えや事情が多すぎる。

ま、好きな人の幸せを横目で見れるなら、なんでもいいさ――

「馨くん？」

「いや、なんでも」

「変な馨くんですね」

「そうかア？」

「そうですよ」

「そっか」

そんなやり取りをしてみれば、クスクスと笑う茉莉に吊られて俺もケラケラと笑ってしまう。

――初々しいな。もつとガツンと行かんか――

いや、枯れた身みたいなものだし……

――男ならがつつけ。狼になれ。甲斐性を見せろ。大抵こういう場合というのは、お互いに満更でもなかったりするのだ――

お前もわかってんだろ？ 茉莉はあくまでも俺を弟としてしか扱ってない。だっていうのにそういう風に立ち回ったらアレじゃないか、インモラルじゃないか。

――今更いんもらるもクソもありはすまいて……重症だなこれは

何がだよ。

――もういい、面倒な奴らめ。我に話かけるな。こんな面倒とは思わなんだ――

お前から声かけてきたんだろ!?

めちやくちや言うなやお前な!

——まったく”私”に似たのか、”アレ”に似たのか。いやどちらにも似たのか。この面倒臭い恋愛感情もそうだが、余計なところばかり似おつてからに——

という独白を吐き捨てるように呟いた後、虚絶は俺からの呼びかけを無視するようになった。

好き放題言つてこれとか本当にご先祖様過ぎて何も言えない。こういう余計なところも似たのだろうか？ いやまあ、ウチの家系はみんなこんな感じだしなあ。

親父も婆アも伯父貴も、本性は面倒というかややこしい人だし。

「……………」

まあいいか。

茉莉の隣は、今だけは俺のものだ。

——ほんの少しだけ。

こんな俺を、彼女の隣にいさせてくれ。

ほんの僅かな時間でも……

——それなりに面白い感じだな——

——面白いけど、趣味悪いわね——

——そういう人間だからな——

——知ってる。けどどうするの？——

——恋煩いはどうしようもない——

——使えないわね。過去の力も何も意味もなしていない——

——愛は狂気であり、そしてあらゆる要素に対して勝るものだ——

——だから／故に——

——今度こそ殺してやる——

——今度こそ死に絶えろ——

「……………んでさ、生物はいつ届くの？」

「有地さーん？ いつですかー？」

「あ、それなら3時くらいって」

「そりや二人で回すには無理だな。虚ぜ……………あダメだ。あいつ拗ねて

口聞かねえ。将臣、お前できる？」

「え、俺？ 見栄えも味も保証出来ないぞ」

「無いよかマシだ。あとは芳乃ちゃんや安晴さんにも手伝って——」

「それはダメです。ワタシたちでなんとかしましょう」

「将臣、芳乃ちゃん、安晴さん。この石頭説得しよう」

——結局。

中々折れない茉莉子を見兼ねて将臣がレナと小春ちゃんに救援を求めたくらいで、芳乃ちゃんと安晴さんによって彼女の砦が陥落され、なんとも言えない雰囲気の中二人がやって来てしまい、もうどうしようもねえやと準備を進めることになった。

まあ、人が増えることはいいよな。うん。

「背中にへばり付くのはあまりよろしくないかと思うけど？ ムラサメ様」

「やかましい。吾輩にも色々あるのだ」

客も揃って配膳を始める中、姿を消して将臣の背中にへばり付くムラサメ様を発見したので、虚絶のように見えなくした腕を伸ばして彼女を呼び止めた。

なんで見えたかって？ メガネ様様ってことで。ピント合わせりや見えるのさ。余計なもんまでな。

「恋人持ちの男だよ？」

「吾輩にはご主人以外の何者でもない」

「違いねえ」

「恋か何かかとも、最初は思ったのじゃがな」

「え」

ムラサメ様の口から恋とか飛び出してきた所為で、極めて間抜けな声しか上げられない。きつと表情も間抜けなものだろう。

「だが相棒、戦友、友人——いくらでも当て嵌まるが、恋だけは絶対に違うとわかった。恋であるのなら……吾輩はもつと喰い付いたであらうからな」

「わあお、肉食系」

「温もりに飢えておるのは事実じゃろう。一度だけ抱いてくれとでも迫ったろうさ。まあ、そういう意味では惚れているのじゃな」

クツクツと笑いながら、ムラサメ様は心酔する的な意味で惚れていると発言した。

そんな彼女に、やはり俺は畏敬の念を抱く。純粹に、カッコいいのだ。そうした感情を正確に理解し、己を律し、自己を確立しているというのは。

——男の子なら憧れて当然だろ？

……だけどきつとこの人は、その憧れはダメな憧れだと優しく正してくれるんだろうけど。

「というか馨。油売ってていいものか？」

「大丈夫。ちよつとくらいは——」

「馨さんっ、仕事してくださいっ」

ヒョイと顔を出した芳乃ちゃんに怒られる。

「怒られたのう」

——全然大丈夫じゃなかった。

「さて仕事仕事……おい廉、テメエも来いよー。どうせ暇してんだろー？」

「お前、俺を口実にサボろうとしてない？」

「にやアん、別にイ？」

「キモっ」

「ひでえ」

廉のガチで嫌そうな顔を見て、ちよつとショックを受けた。

いやお前……友達だからって言っていることと悪いことあるんだぞ？

割とガチで凹みつつ、配膳を続け——不意に、駒川と目が合った。

「やあ」

「よお」

普段通りの、味気ない挨拶と絶妙に合わない視線。奴はいつもと同じように、少し寂しげな笑顔を見せる。俺はどうしたらいいのか、実は未だにわからないから……ただ顔を逸らして、黙るしかできない。

「あー……その……なんだ」

ただとりあえず言うべきことがあるのは事実。

しかし俺の深遠を知る人間はほとんどいないので、下手に妙なことを言つてはならない。故に――

「色々、言つたわ。うん」

端的に伝えること。

それが最適解だ。

「そつかあ。言えたんだね」

「ああ、言えた」

「でも変わらないんだろ？」

「根本だけはな。変えられない」

「それでいいさ」

珍しく安堵した表情と声で奴はそう言い、俺の頭をクシヤクシヤと撫でる。もうそんな歳でもないのだが、散々迷惑をかけたんだ。これくらい安いものだ。

「もういいだろ」

ただまあ、口と身体は素直じゃない。

恥ずかしさに負けて、頭を撫でていた手を掴んで離させてしまう。

そんな様子を見て、奴はケラケラと笑う。

「素直じゃない奴」

「うっせ。今日はパーっと騒げ。んで寝ろ。たまにはしつかり気晴らししとけ。俺もあんたも、似たようなもんだからな」

「心遣い感謝するよ」

周りの奴らはまだ俺たちに意識は向けていないが、しかしあまり話し込むのも考えものだ。それに俺と駒川の間に飾った言葉は必要無い。

――これだけでも十二分だ。

「あ、お酒は程々にするんだぞ」

「わかつてるってばっ」

……訂正。

信用されていなかった。

別にいいじゃん、ビール瓶一本空けるくらい……

そんなこんなで準備は完了。

あとは乾杯を残すのみとなったのだが……

「普通なら僕が何かを言うべきだろうけど、それじゃつまらないので、将臣君から何か一言言ってもらってからにしよう」

ここで安晴さんまさかのキラーパス。

ギョツと目を向くこの間抜けが、昨日俺の真実に踏み入ってきた男と同じとは思えん。

「いやいや。俺じゃダメでしょ安晴さん。ここはやっぱり、朝武さんとか常陸さんとかがやる場面ですって」

「あ、ワタシは丁重にご辞退申し上げますので」

「私もなので、是非有地さんに」

とても素晴らしい笑顔とまるで音符が付いていそうなくらいに弾んだ声の菜子。対照的に、控えめに微笑みながらキラーパスをぶん投げる芳乃ちゃん。

一瞬で勝てないと悟ったのか、視線は俺へと向けられる。

焦った表情が面白い。

「馨っ！ 頼む！ お前慣れてるだろ!？」

「はっはっはっ。そんなの思えるわけねえし選べるわけがねえよ。面倒は嫌いだ、ふざけんなってな!」

「教えて昨日の言い回しするかお前!？」

「まあ俺のキャラじゃないし諦めろや。お前がやれ。面倒嫌いだし。つかやりたくないし」

「……ええー」

「まあどんなこと言っても許されるさ。気にせずやれよ」
付き合ってられんと横になる。

ただし位置の関係上、俺の眼前に広がる光景は菜子の（自称）太いおみ足という楽園である。

「わああ、眼福」

とても眼福。

めっちゃ……いや、品が無いからやめておこう。

「っ!?! 見ないでくださいっ」

しかし顔を真っ赤にした茉莉子は、グイッと下腹部を隠すように服を掴み、そしてついでに俺を押して反対方向に向かせてしまった。

ちえーつとか言いながら身体を起こす。

向こうでは将臣と芳乃ちゃんがあれこれと揉めてる。あ、ムラサメ様が将臣を丸め込んだ。

で、硬い挨拶から行ったら旧友に茶化されてやんの。プークスクス。

「今日は憑代を無事奉ることができたお祝いなんだけど、まあ色々知らない人もいるから、とりあえず事情を説明させてくれ」

おっと、本題かな。

「本当に祟り神って存在がいてさ、まあ夜な夜な暴れてたんだよ」

……あれ？ ムラサメ様の紹介も兼ねてるのにそっち行っちゃう？ 普通にムラサメ様を紹介すりやいいのになんで……？

「それを朝武さん、常陸さん、そして馨が今まで命を賭して祓ってくれていたんだ」

厳密には違おうと突っ込もうとしたが、当然ながらその辺はシケた話になるのでやめておくことにする。祝いの場には似合わない。

「ええーっ!？」

「じゃあ、伝承は本当にあったことなんだ……」

「いやいや、冗談キツイぜ将臣。流石に嘘……いや待てよ？ おい馨、

お前よく駒川先生と追いかけてっこしてたけど——」

疑惑の視線がこちらに突き刺さる。

仕方ねえ……言うか。

「ま、俺は三人とは違ってちよいと傷が出来やすかったただけだ」

「ついでに治りやすい身体だからと言って医者に報告しなかった悪ガキさ」

「駒川ア!？」

予想外の伏兵である。

お前が言うのかよ。てか納得したような顔をするなその今知った三人。

「ごめんごめん。でも追いかけてっこの理由まで聞かれそうだから先手

を打っておかないと」

駒川の言ったことも事実だが、とにもかくにも、話は元に戻さねば。「まあそうだけども……とにかく、ほら、アレあったろ。俺や将臣が倒れた話。あれの真相は崇りとの戦いってワケ」

補強がてらそう言うのと、いの一番に食い付いたのは小春ちゃんだった。

「本当ですか？ 巫女姫様」

「はい。全て本当の事です」

こくんと頷き、しかしと続ける。

「それももう終わり。憑代を奉ることで崇り神の怒りは鎮められました。あんな事件は二度と起こりません」

……まあ、不安要素はあるがと付くが。

このまま何も無ければいいんだがね。

「そ、それなら良かったけど……」

「なるほどねえ、こりや色々としか言えんわな……ビビったけど」

「裏で色んなことがあったんだね。全然知らなかったよ」

芦花さんと廉はスツと飲み込んだようだが、小春ちゃんは少し不満気……というか、色々と感情が見えている。まあそれだけ将臣が愛されているということだろう。

……ふと思っただけど、従兄妹同士ってどうなんだ？ 近親相姦になるのか？

いやまあどうでもいいか。

結局くっ付いたのは芳乃ちゃんだし。

「それでなんだけどき、三人はムラサメ様の伝説を知ってるよな」

「うん、御神刀を作るために人柱になった女の子の話だよ。でもまー坊、それとこれって何の関係が……？」

「この話のオチは、ムラサメちゃんは実在するっていうところに繋がってるんだ。こんな風に」

と、将臣は座っているムラサメ様の頭を撫でる。しかし見えない人間には虚空に手を置いているようにしか見えない。特に今日知った三人は目を見開いている辺り、かなり異常な光景のように見えるのだ。

ろう。

——俺は見える見えないも自由だし、違和感も無いのだが。

「ずっと昔からここを守り続けていたんだ、ムラサメちゃんは。だから多くの人に知って欲しい。ほとんどの人には見えないけど、俺たち見える側がその橋渡し役をすればいい」

そんなカツコいいことを言っているが、ムラサメ様を撫でているので割と締まらない。気恥ずかしそうなムラサメ様はレアな光景だ。

しかし将臣は急に視線を俺に向ける。

「んでさ、馨もちよつと顔を出させてやったら？」

顔を出させる、とは。

つまるところ、虚絶を出せというのだろうか。あの女を？ いやま

あいいいんだが……

「それ必要？」

「あの人も昔から戦ってきたろ」

「……わーっつたよ。皆さまあまり驚かれないように。俺のご先祖様の慣れ果てだからな」

そう言つて手を前に伸ばす。

発言の意味がわからない人の方が多く、中には首を傾げているものもある。玄さんですら怪訝な顔をしている。そんなに……いや不思議だわ。

そうして強制的に外に出す。

シトシトと黒い雫が俺の腕から垂れる。それが床に黒い沼を作り上げ、人型がその中から浮かび上がってくる。

真つ黒な人型。

ホラーすぎて小春ちゃんが怯えている。

「……祝いの席に我を呼ぶとは、余程面白い男だな……神刀の担い手」
黒い人型が響是津京香と呼ばれた人型を形成し、黒い沼は消え、彼女は開口一番将臣にそんなことを言った。

「子どもには、改めて名乗ろうか。我は虚絶。貴公らには響是津京香の方が通りが良いか。まあ、そういうことだ」

「……つまり何？ お前はその……よくわからない存在みたいなご先

祖様を親戚って紹介したの？」

「だって楽じゃん」

「マジかよ。そりゃ子持ちなワケだ」

シヨックを受けた廉には呆れ返るしかできん。

「もういいか。我は貴様の、そのどうしようもなく面倒な感情に頭を抱えているのだ。故に端末よ、しばらく起こすな。我は寝る」

しかし虚絶は面倒くさそうにそう言い捨てて、俺の中へと戻っていった。そんなに嫌か。てかそんなに俺の頭の中に頭を悩ませるのか。

「き、消えちゃった」

「あー、大丈夫だよ芦花さん。どーせ人の頭ン中勝手に覗いて勝手に疲れてんだ。いい気味だよ」

「なんだか複雑なんだね」

「単に子孫とご先祖だけじゃ表せないのは事実だけど、複雑かどうかはまた別だよ。あ、ちなみにレナと将臣、それから茉莉と芳乃ちゃん、は初めからムラサメ様が見える組で、見えてないけど知ってる組が玄さん、安晴さん、駒川。んで俺は最近見えるようになった組ね」

あ、廉が玄さんを問い詰めに行った。

やれなんでそんな女の子の事を教えてくれなかったんだとか……お前ブレねえな！

「あー、将臣。そろそろ締め入っつけ。俺の所為で余計長くなったしな。飯も冷める」

「と、いうわけで今日はムラサメちゃんもいるし、気になる事とか話したい事あったら俺とかの見える組に言ってくれ。間に入るから。以上！ 憑代が奉られて良かったね！ これで穂織は安寧だ！ 乾杯！」

高々とグラスを掲げる将臣。意外と様になっているが中身はウーロン茶だ。俺？ そりゃビールよ。飲みすぎなきやいってお墨付きだ。存分に楽しませてもらうんだよ！

『乾杯！』

「……乾杯」

ただやっぱり、自分が此処に出て良かったのかなと思うところがあ
り、少しだけ遅れてしまった。

——それからはどんちゃん騒ぎだ。ムラサメ様への質問、将臣の余
計な一言で芳乃ちゃんが妬心を燃やしてあーんしてたりなんだから
……大人組は酒も入ってなんだか楽しそうだし。

「」
久しぶりに飲むビールの味はわからない。美味しい飯に楽しい時間
……あとは酔いを回す酒。充実感と満足が先に来て味とかそういう
のは後回しになっている。

でもそれでいい。

一歩引いたところから見守っているのがちようどいい。

「何黄昏てるのさ」

「テメエもよく知るネタでだよ」

「そうかい。じゃあほら、注いでくれ。実は楽しみにしてたんだぞ？」

君とこうしてお酒が飲める日をね」

「親かってーの」

ヒョイと横に来て、空のコップを差し出してくる駒川に対応しつ
つ、本当に親のような奴だなア……としみじみ思う。親代わりと言っ
ても過言ではない。別に親父やお袋から愛情を感じなかったとか、そ
ういうわけではないが……

「なあ、駒川——」

「おい馨！ お主もこっちに来て！ 主役であろう！」

「あー、悪い。呼ばれたから行ってくるよ」

「ああ、行っておいで。君も楽しめよ？」

「言われなくても——はいはい、行くよ！ ムラサメ様は寂しがり屋
だなア！」

——やれやれ、今日は楽しく忙しそうだ。

その後は色々あった。

掻い摘んで話すと、将臣が玄さんに勧められた酒で酔い潰れたり、
芳乃ちゃんが慌てながら介抱したり、酔った廉がモテないことに泣き

出したり……あとは芦花さんも彼氏が出来ないことを嘆いてたな。

……あれ？　なんか大抵モテないことに嘆いてるなコレ。まあ田舎だし……顔見知りだしなあ。

「よし……と」

結局夜遅くまでやったが、酔い潰れそうになってる大人や片付けも考え出すと、あんまり回ってない組が色々を世話を焼こうとしてしまう。

今日はもういいだろ？　なんて駒川に丸め込まれて俺は大人しくしていたが、まあそれも悪くない話だ。

潰れた将臣は芳乃ちゃんに任せればいい。頭が回ってる廉と小春、それにレナが完全に酔いが回った玄さんのフォローをしながら帰っていた。駒川も芦花さんも帰ったし、あとは後片付けに不備がないかを確認するだけ。

……まあ、あれやこれやと語ってはみたが。

結論から言えば、俺たちらしく、グダグダとした終わりだったというとき。

「月、デカイな」

「そうですね。今日は一際」

だからこうして茱子と帰るのも、当然と言えば当然だ。

「そうだ。どうでもいい話だけどき、月が綺麗ですねってのは信憑性の無い俗説なんだとよ」

「それ、今言うことですか」

「話題がねえんだよ」

「今日のお祝いの話題があるでしょう」

「全部楽しかったろ？」

「それは極論」

「手厳しい」

笑い合いながら歩く、月下の道。

いつも通り、何も変わらない。自覚しようが何をしようが、何一つ変わることもない。

そう、変わるはずなど無かったのに。

「あの……馨くんはさ」

「ん？」

不意に茉莉が真剣な表情で俺と向き合う。

そして――

「好きな子とか……いるの？」

なんて、いきなり言ってきた。

「えっ……あー、そういうこと。まあお前も色々あるもんな。特に願いの話とか」

――どうしよう。

まさか眼前のお前が好きな子ですなんて言えるわけもなし。別に好意を伝えても結ばれるつもりは無いと言えればいいのに、何故かそれは絶対に出来ないと確信した。

悩んで、悩んで、悩んで、悩んだその果てに、困ったような顔と共に口にできたその言葉は――

「いないかな」

なんともつまらない、そしてなんとも臆病な嘘だった。

「そっか」

茉莉はそれを何でもないように受け止めて、何でもないように返した。

そうして無言のまま、いつも通りの別れ道に到着する。

「またな」

「うん。またね」

微笑む彼女と別れて、やはり何一つ変わらない日常だったなど今日を締めくくりながら、俺は一人家に向かうのだった……



「楽しかった？」

「ああ。普段とは全く違って、話せぬ者とも話せたし、食べれぬ馳走も食べられた。これが楽しくない訳がなからう」

馨と茉莉が別れたのと同時刻。

ムラサメと将臣は、外で月を眺めながらそんなことを話していた。

「のう、ご主人。吾輩が人柱になる日もな、こんな月の夜じやった」
「そうだったんだ」

「消え逝く灯のような扱いじゃった。多くの者が別れを惜しみ宴を開いた……そして吾輩はこう成り果てた。だというに、五百も経つてみればかつてと似ているようで、しかし確実に違っている事が起きるとはな」

寂しさを含ませた笑い声が響く。

しかし次には花が咲いたような笑顔を彼女は見せた。

「じゃが、嬉しかったぞご主人。今、吾輩はここにおる……それが実感できた」

「なら良かったよ」

「さて、そろそろ冷える頃合いじやろう。戻って芳乃の温もりでも分けてもらえ」

「前々から思ってたけどムラサメちゃんも結構アレなところあるよね！」

このネタでからかわれるのは一体何回目だろうか。まだキスもできていないと言ったら馨は吹き出すほど驚いていたし。

応援してくれるのは嬉しいが、どうしてこうみんな微妙な感じなのか。一番まともにアドバイスしたり応援してくれるのが女に飢えている廉太郎だけというのが、将臣の中でなんとというか腑に落ちない。

……なんだかこう、ちよつと違うね？ とか思ったりするのだ。

「けど風邪引きたくないし、戻らないとな」

そう呟いて立ち上がり、隣にいる戦友に微笑んで手を伸ばす。

「これからもよろしくな、相棒」

その手をがっしりと握り、彼女もまた微笑む。

「応え。こちらからもよろしく頼むぞ、相棒」

そうして二人が戻ると、ゆらりと影から人が現れる。

(……行きましたか)

——それは菜子であった。

彼女はそのまま本殿の扉を開け、中へと入っていく。事前に安晴か

ら借りていた鍵を使ったのだ。

彼女の前にあるのは、静寂と憑代のみ。

「ワタシのご先祖が残した呪いは……もう、終わったんですよ」

今の今まで罪滅ぼしの為だけに人生を費やしてきた。だがそれももう終わり。中々決心が付かなかったが——彼女は今日のお祝いと、馨との少しのやり取りを通して、ずっと昔から抱えていた本音と向き合うことを決意した。

これからの人生は、そのために使うと。

自然と言葉が紡がれる。

「ワタシは……人として、人間として生きて——」

その続きを言おうとして、止まる。

何もかもわかっていなのに、言えない。

だけでもそれは終わるのだと決めた。振り払うように、彼女は本音を曝け出した。

「好きな人に好きだって言って、抱き締めたり温もりを感じ合いたい……」

言い切った途端、ストンと何かが落ちたような感覚がすると同時に、彼女の中に眠っていたモノがはつきりとした形になって現れる。蓋をしていた筈の醜悪な感情が滲み出る。

好きな人……とは誰か。

——ワタシから離れない人。

——ワタシが離れない人。

——ワタシが求めている人。

——ワタシを求めている人。

茉莉はその答えを知っている。

だけど自分はその人の隣にいる資格は無いとわかっている。醜く歪んだ狂気に従って男女としての温もりを求めてしまうなんて、純粹に慕ってくれているその人への裏切りに等しい。

わかっている……わかっている。その人が女としての自分ではなく、姉としての自分を欲しているのだと。だけどそれでも、それでもとそれ以上を望んでしまう。

……けど、自分では彼を幸せにはできない。何処まで行っても自分たちは姉弟モドキ。他ならぬ彼が言っていたこと。抱く愛は姉弟愛と異性愛と、彼の優しさに甘える心が入り混じってしまった歪な愛。決して真つ当な愛ではない。

姉を求める彼に、女として接しようだなんて不幸以外の何者でもない。だから――

――ワタシは彼と結ばれちゃいけない。彼の本当の幸せと時間を奪ってしまうから。

そうに違いない。
決まっている。

だけどそれでも、心の底から好きだから。彼が望むのであれば、姉として。好きな人の幸せを応援したい。

……同じ人なのに、人として生きられなかった人。
その人と、人として――

「あは――愛おしいですよ……」

溢れ出す感情は、理性で押し留めるのも不可能だった。

彼女は今、かつてないほどに本心を剥き出しにしている……

――ミツケタ――

……刹那、無音の中に音が響いた。

扉は閉めてあるのに、何故か嫌な風を感じる。

――コイガシタイ……アイシタイ……ソノカンジヨウ――

――アネギミト、オナジネガイ――

――アイスルトハ、ナンダ――

「――何者ですかっ」

周囲を見回しながら声を張る。

しかし音とも声とも取れない何か、空間に響き渡るのみであり、菓子以外には「何もない」……

「……」

クナイを抜き、構える。

――そして、ゾワリと背筋が凍った。

祀られている憑代と呼ばれる水晶から黒い靄が立ち上っている。

そしてその靄からシトシトと暗く黒い雫が垂れ落ち……床に沼を
作り上げる。

——インネンカ。ソノチガナガレルオマエガワタシノモトメルコ
タエトオナジトハ——

その中から、何かが生まれた。

獣の如き四足歩行の影。

赤光の瞳、剣を連想させる尾。

それは——あの日見た、完全な姿となった祟り神。

「——そんなんっ!?!」

動揺が先走った。普段の冷静さが消し飛んだ。終わったはずなの
に、どうして、どうして——!?!

呪いの再来。

終わっていなかったなんて……!?!

完全に顕現すると同時に、彼女めがけて飛びかかる祟り。

思考が動揺一色に染まり上がっていた茉莉の反応は、一拍どころか

二、三拍遅れている。

無論、回避も防御もできない。

得物がクナイである以上、大物の突進は避けることでしか対応でき
ない。しかし避けられもしない、防げもしない——

(……あは、ここでおしまいですか……)

胸に飛来するのは無念。

(せっかく、決意したのになあ……)

こんなところで終わりたくない。

やっとひと段落ついて、やっぱりと思ったのに。

(……皆さん、ごめんなさい……)

だけど現実はどうしようもない。

馨くんも、こんな風にどうしようもない現実に打ちのめされたのか
な——? なんて考えて。

(先に逝ってるけど……ちゃんと生きてね……)

ただ一人。

弟のように思っただけでも、ずっと心惹かれて想っていた男の子の、

寂しげな笑顔を思い浮かべながら、その意識を闇に沈めた……

——筈だった。

不意に意識が浮上する。

(閻魔の審判はえらく早いものですね)

なんて内心自嘲しながら、瞼を開ける。

しかし祟り神の姿もなければ、本殿は何一つ変わっていない。

(——どういうこと？ アレは幻覚なんかじゃない……なら、何もしなかった？)

血筋的に憎んでいる自分に何もしないなんてあり得ない。

もしかしたら、芳乃様に——!? そこまで考えて、考えよりも行動よりも先に声が出る。

「わんっ！」

……某子の思考は停止した。

(犬の鳴き声……？ それに、なんだか視線が低い。足元に散らばっているのは、ワタシが着てた服……!?)

その時。

子犬の鳴き声が、満月と星々の輝ける夜に木霊した。

それはまるで母を求める鳴き声のようでもあり——

いいや、敢えてこう言おう。

ただの困惑した咆哮だった……

Chapter 5 恋心

子犬

「……あんだよ、うつせえな……」

俺が早朝に起きたのは、珍しいことにキャンキャン犬が吠えているからだった。家の前でキャンキャン鳴いてやがる。クソうるせえ。しかもなんだ、この辺で犬飼い始めたなんて聞かねえから、野良だよな。

……仕方ない。

野良なら追い払うか。

「ギャーギャーうるせーんだよ、ったく……」

文句をボヤきながら玄関を開けると――

「わんっ！」

漆黒の塊が俺に飛び込んで来た。

「おわっ!？」

急な対応もできずにそれを胴に喰らう。咄嗟にそれを抱え込みながら、倒れ込みそうな身体をなんとかして押さえ込む。

「なんねなんね……」

なんだと思つて視線を下に向けて見れば。

真つ黒い子犬だった。

いや、真つ黒い子犬というのは語弊がある。正しくは泥に汚れた子犬だった。白い毛が漆黒と勘違いするほどに汚れている。ウルウルと俺と視線を合わせて同情を誘うような声で鳴いてくるし、テシテシと前足で俺の胸を叩いてくるが、生憎と犬語はわからない。

「……あー、服が汚れちゃったな」

懐かれる要素など無いはずなのだが、動物の相手をするのは嫌いじゃない。というのも、奴らの自由気ままさは尊敬にすら値するから……って話なんだが。

っーかこいつ、飼いだか？

……んー、首輪もねえし違うのか？ まあウチで預かってもいいん

だが……

「てかなんだお前。さつきから申し訳なさそうに鳴いたりシヨボくれやがって。人間みてえだなオイ。……まあ、とにかく風呂入るがてらこいつも洗うか……」

服が汚れちまったと言った時、何処か申し訳なさそうな雰囲気をしたり、そんな感じの鳴き声を上げている辺り、かなり賢いというか、人間慣れしているのやもしれん。

まあ、いいか。

猛烈に抗議したそうにキャンキャン鳴き始めた子犬を無視して、俺は家の中に戻るのだった……



(いやいやいや、ワタシですよワタシ!! 菜子ですよ!?)

しかし当の子犬……というか子犬になってしまった菜子はそれどころの騒ぎではなかった。

昨晚崇り神と接触したと思われる結果、何故か子犬になってしまった彼女だが、芳乃の安全を確認することもできず、不慣れな犬の身体に振り回されて散々苦勞し、拳句疲れて寝てしまい、やつこのことで恐らく自分だと分かるであろう馨の元に向かったのだが――

「なんだよその視線は。新聞紙の上から動くんじゃねーぞ。床汚れるから」

(ダメかあ……うう、わかるって信じてたのに……)

……このザマである。

必死になって行ったというのに、一切気付いてもらえずに完全に子犬扱い。泥だらけの身体の所為で今は新聞紙の上にチョココンと座っている。

「さて、風呂付けるか」

「待て端末よ」

風呂を付けようと動いた馨を止めるのは、突如として実体化した虚絶。

今度こそわかる人が来た！ そう喜んだのだが……

「この犬、どうにも穢れめいたものを感じる……巫女姫の家より貰った温泉水があつたな。あれを使い」

「あー、この前のね。お前がそういうならそうなんだろう。わかつた」

「嘘でしょう!? 虚絶ですら気付かないって今のワタシという状態なんですか!?!」

鼻の効く二人がこのザマでは、もはや終わったも同然。

「あれ? ということは……ワタシって気付かれない? これヤバイですね、果てしなくヤバイですね——どうしよう」

望みが絶たれた。ので自力でどうにかするしかないが、どうしようもない。チエックメイトという奴だ。

「……なんだ子犬よ。我を見て」

（気付いてください〜!）

「鳴かれても困る。が、しかし……この感覚は何処かで……?」

（ワタシです……常陸菜子です……今、あなたの頭の中に呼びかけています……常陸菜子なんです……）

「いや、そんな筈はあるまい。人であるのならばもつと露骨だ」

（気付いてない!? もう、どうすれば……）

最後の希望すら無残に千切れた。

縫るものなど何も無い。ガツクリとうなだれて、悲しげに一つ鳴く。

だから彼女は聞きそびれたし、見そびれた。

「……そうか、貴様か……」

小さく呟かれた言葉と、あまりにも愉悦に歪んだ亡霊の表情を。

「あとは風呂が沸くまで待機。んで風呂上がったら洗濯か。寝間着汚れたし……やること多くて困るわ」

「安心しろ馨。朝餉と服の用意は我がやっておく。ついでに洗濯も回しておいてやろう」

「助かる。任せた」

風呂場から戻ってきたのは下着一丁の馨。なんでもないように転がってたズボンを履いて座っているが、中々見ないものを見てしまっ

て、ついつい視線で追ってしまおう。

(うわ、すごい……ぱつと見細く見えるから中々気付かなかったけど、ちゃんと殿方って感じの身体してる……)

「……なんか邪念を感じる」

(気付いて下さい気付いて下さい!! ワタシですから気付いて下さいっ!!!)

「わふん、じゃないよまったく。どつから来たのか知らないけどさ。そんなつぶらな瞳で見られてもね。……って、あー動くな動くな。床が汚れるだろ」

(違うんですよお……)

心底面倒くさそうな声と共に新聞紙の上に戻される。

と、その時である。遂に風呂が沸いた電子音が鳴る。すると馨は子犬の葉子を抱えて何処かへと向かう。

(へ? 一体何処へ? ……ああ風呂場ですか。って、ワタシ今裸も同然だからこれってセクハラなんじゃ——!?)

今更な事実にあたふたと暴れ出すが。

「暴れんな面倒くせえ……テメエ自分が泥だらけだと分かってんのか?」

再び心底から面倒くさそうな声と共により強く抱えられてしまい、抵抗すら無意味なものとなってしまふ。

(すごく今馨くんの匂いがする……ってなんでこんな思ってるの!! ワタシ変態みたいじゃん! いやいやでもでも、きつと芳乃様だって好きな殿方の裸が目の前にあったら普通じゃないよね。うん、多分。きつと、めいびー)

まったく何処の誰へ向けたものかわからない言い訳を葉子がしている最中も馨は移動を続け、遂には脱衣所に到達してしまふ。

「そうだ馨」

「なにさ」

一通り着替え等を用意していた虚絶は去り際に一言。

「しっかりと洗ってやれ。貴重な体験だぞ? その子犬にとつてもな」

「? よくわかんねえけど、まあ洗ってやるさ。流石に俺も湯船に浸かるけど」

そして、茉莉に視線を向けて――

(ククククツ、貴様も貴重な体験をするといい。惚れた男に全身を撫で回されるなど、中々あるまい……楽しみめよ)

彼女の脳内に響く愉悦に満ちた声。

――わかっていたが、わかっていて敢えて黙ってこうしていた。

つまり茉莉だと気付いていて、しかし面白そうだからという理由一つで黙っている。

このロクでなし、あまりにも最低すぎる。茉莉は決意した。必ずかの邪智暴虐な虚絶に一泡吹かせねばならん。

「わふっ!? わんわん!」

「ハッハッハッ! 元気なことだな、貴様も。馨、あとはじつくり楽しみめよ」

「は? ……行っちゃまった。お前も妙な奴に声かけられて大変だなあ」

去った虚絶に怪訝な視線を向けつつ、わしゃわしゃと茉莉を撫でる馨。

(あつ、これ……気持ちいい……っ……ふあ、なんだか本当に犬になつたみたい……っ)

だがしかし事態を完全に理解して爆弾を残した虚絶。事態がかなりマズイことになってしまっている上に想い人の素っ裸を見るかもしれない茉莉。そしてさっぱりわかっていない馨。

実に混沌とした状況である。

「さーて風呂入るか。大人しくしてろよー」

(えっ、あつ、脱がないで見せつけないでせめて最初にお風呂に入らせてえええっ!!!)

さっさと呪力で手を作って茉莉を固定しつつ、馨は素っ裸になっただけ。

(あ、あああ……こ、これが……せめて見るのならこんな形で見たくなかったよう……)

ブラブラとモノが振動で揺れている。乙女心が折れそうだ。手の拘束が外れて、ヒヨイとまた抱えられて風呂場へと入っていく。(ううっ、なんだろう。このイケナイことしてる感は……ワタシ、何してるんだろ……)

「んなシヨボくれるなよ。ほら撫でてやるからさ」

(ひゃんっ!! す、すごっ……ダメツ、手つきやらしいよ……!)

「ほーらこのことかどうだー?」

(あっ……ひんっ!!)

「あ、お前メスなんだな。付いてない」

(何処見てるの!?)

「なるほどね、尻尾の付け根トントンでやたらイイ声出してたのはそれかア……性感帯?」

(馨くん!! 馨くん!! 馨くんっ!!! 最低!! セクハラ!)

「わーわー。噛むな噛むな……ほら流すぞー。はい目エ睨れよ……つて難しいか。目のところだけ覆って……ほい」

湯船のお湯を桶に汲み、それを葉子に流す。すると泥で気持ち悪く固まった毛が解けていく。

「おーおーよしよし、いい子だねお前は。さて次はつと」

そのままわしゃわしゃと弄られるが、不思議と悪い気はしない。むしろ心地いいくらいだ。

そう、心地いいくらいなのだが――

(ひ、んっ!! 指が変なところにまで、え……っ)

色々といかがわしい状況と、肝心の葉子自身が桃色な雰囲気であるのは……まあ、つまりそういうことなのだ。人と犬では感じ方が違う……というか、人に置き換えると大変やらしい状況である。

「あとは股だな」

(股!! ダメだよそんなところ! たとえ泥に汚れててもダメだつて!)

「……また暴れ出した。じゃあ浸けてやるか」

渋々、といった様子で馨は再び水を汲んでそこに子犬の下半身を浸ける。しかし面倒になったのか、そのまま彼女を小脇に抱えて湯船に

浸かった。

「ふいー……あー、あつたけえ。ほら、持つておいてやるからお前もあつたまれ」

と、そんなことを言いながら両手で器用に持ちつつ菜子と共に湯船に浸かった途端、急に光が湯船から放たれる。

「……なんだ？ 光ってるって……何が？」

（あ、あれ？ ワタシの身体光って——）

刹那。

極光が二人を包んだ。

■

重い。

——とても重い。

いや軽いと言えば軽いのだが、先程抱えていた子犬と比べるとあまりにも重い。

「……あれ？」

というか、子犬がいない。

何処へ行つたやらと前を見ると、見慣れないものが俺の下腹部に見えた。普通ならもう一人の自分が見えるのだが……桃か何か？ と勘違いする丸みを帯びた物体。ついでに胸板に感じる柔らかさと硬さ。

状況が違いすぎる。

……何がどうなってるんだ？

とりあえず好奇心には逆らえずその物体に手を伸ばし——

「ひゃん!?」

指が触れたところで、耳元に嬌声が聞こえた。聞き慣れた筈の彼女の、聞き慣れない声。

ギギギと身体を引いて、俺にもたれかかっているものを確認する。

——水に濡れ薄く上気した肌。

——しっとり張り付いた黒髪。

——状況がよくわかっていないぼんやりとした目。

——初めてこんな間近で見た彼女の顔。

——なんだかやらしい唇。

——結構大きかった乳房と可愛らしい乳首。

——白魚のように細い指。

——スラリとした身体のライン。

——ちよつと待つてすごいエロいんだけどお前。

——むっちや扇情的なんだけどお前。

——てかなんで裸で俺にもたれかかっているの？

えっ？ えっ?? えっ???

理解できないしたくない。でも理解できるようにしよう。

——というかなんだらうこの感覚。幸せと言えば幸せなんだけど全然嬉しくないというかなんというか。

どうせ見るならもつとムードのある時とかに……

「あつ、あれ？ 喋れる……？ ワタシ、戻ってる!？」

しかし向こうはさっぱり俺に気が付いていないらしい。

恐る恐る視線を合わせて、一言。

「……茉莉、なんだよな……？」

「え？ あ、うん。そうだけど……一体何がどうなっ——」

——ここでお互いに状況を完全に把握した。

——単刀直入に言おう。構図としてはほぼ正常位だ。しかも互いに素っ裸。その上狭い浴槽なので密着させないと入り切らない。

「……っ」

——思わず唾を飲み込む。

俺は今……好きな人の裸を見ているどころではなく、好きな人と裸で密着している。

………使い古された言葉だが、先人に倣って俺も敢えて言おう。

——目の前に惚れた女の肢体がある。

——細い線でありながら、程よく肉感的な、とてもそる——彼女の、カラダ……

——これを見てまともでいられる男などいない。

——身体を離して見つめ合い、茉莉の視線が前と後ろを行ったり来たり。ついでに俺の視線も上下に動く。

……すごい。

やましいけど仕方ない。許して。でもこんな形でこいつの裸を見
たくなかった。

そのままカーツと茉莉の顔が赤くなり……

「……つてえ、なにこれえええつ?!?!」

耳元で叫ばれるがそんなことはどうでもいい。問題は彼女の下腹
部と俺の下腹部がほぼ同じ位置にあることだ。

「うわあ……っ?!? 股が擦れて……っ」

「ちよつと何硬くしてるの!?! お尻に当たってるんだけど!!」

「テメエこの状況がどういのかわかってそのセリフ吐いてるんだよ
な!?!」

「そんな大胆にセクハラされると困るよっ!」

「何が困るだ怒れよコラア!」

「怒れるわけないじゃん!」

「じゃあ嫌がれよ! どう見たってこれ素股だろ!?!」

「す、すま……っ?!? いきなりナニ言ってるの!!」

「つか退けよマジで! 意外とこの体勢辛いんだぞ!」

流石にこの体勢のままは絶対的にヤバいので、咄嗟に手で茉莉を押し
したらプニツとした感触が伝わる。

「ん……っ」

また再び風呂場に響く嬌声。

多分胸でも触っているんだろうけど気にしてられない。

もたれかかるような体勢ではなくなり、そのまま俺も身体をズラし
て普通に座つて向かい合う形になる。

ついでにいきり勃つたモノを太ももで挟んでとりあえず隠してお
く。そのまま視線を逸らす。

これで一安心。——というわけでもなく、今度は茉莉に怒鳴られ
る。

「なんでおっぱい触つたの!?!」

「うっせえなとつと風呂上がれや! 俺が上がれねえだろ!?!」

「女の子のおっぱい触つておいて何その反応!?! もっと色々ある

「でしょ!?!」

「柔らかくて感動しました! 勝手に触ってごめんね! 早く出る!」

「ワタシだって傷付くよその言い方!」

「だからごめんね!」

「こつち向いて謝ってよ!」

「向いたら見えちゃうだろ!?!」

「……馨くんになら、いいけど……」

「へ……? お前何言って……」

あまりに突然のことで、俺はどう反応したらいいのかわからない。とりあえず視線は逸らし続けるけど。

いやなにそれ勘違いしろってこと? 勘違いするぞ俺。でもわかってる。どうせ家族的感情からってことだろう。うん。

と、完全にお互いが沈黙していると、風呂の扉が開いて――

「なんだ。せつかくゆつくり楽しめと助言してやったのに、何を躊躇っている。常陸茉子にも我は言ったのだがな、楽しめと」

とんでもない爆弾を投げ込んだ虚絶。

「デメエ――ツツツ!!!」

「最低ですよこの亡霊っ!!!」

俺たちはこのゴミクズクソロクでなしご先祖亡霊に対して、有らんなりの罵声をぶつけまくった。

……結局あの後、虚絶は茉子の服を用意し、先に茉子が出て俺が後から出た。

今は洗濯を回しつつ、しまってたあった和服に袖を通した茉子と居間で正座して向き合っている。

「とりあえず、色々ごめん」

「ワタシもちよつと急展開すぎておかしかったから謝らないで。というか、ワタシの方こそごめん」

「じゃ両成敗で」

「うん」

改めて頭を下げて、ごめんとお互いに謝って気持ちを切り替える。さて、聞き出さなきやいけないことがいっぱいある。虚絶が朝飯作ってる間にどれだけ聞き出せるかな。

「……スースーする」

「悪い」

「いいよ別に」

……流石に下着は用意できず、俺が昔使ってた単衣の着物と適当な上着を貸した。サイズが多少ズレているため、スースーすると言われなくても謝るしかできない。

仕方なさそうに微笑む菜子には、本当に申し訳ないと思っている。さて、ここからは真面目な話と行こうか。

「んで……ありやどういう状況だよ？ 何があつて犬になつてた？」

「正直ワタシにもわからないの。昨日日本殿で憑代の中から出てきた祟り神と接触してからこうで……」

だが、どうやら当の本人もさっぱり状況は理解していないらしく、帰ってきたのは困惑した表情と言葉だけだった。

しかし、祟り神と接触したとはどういうことなのだろうか。既に祟り神は消えた。万が一……とは考えていたが何かが違う気がする。まさか、菜子の血に反応して……？ だったらもう死んでいる筈だ。

疑問に従い、菜子に尋ねる。

「なあ、祟り神と会つたつて言つてたが——そりや祟り神と同じ姿の別存在じゃないのか？ 清められてから結構な時間が経ってるし、多分中身の方が……」

「ごめん。ワタシ専門的な話はわかんないから、端的に言つてくれないう？」

「んーと……そうさね。犬神の方が反応したんじゃないかってこと。恨み以外でな」

「恨み以外で？」

「恨みならお前はもう死んでる筈だ。そうじゃないなら、別な目的があるかもしれない」

「別な目的……」

茉莉はいまいちピンと来ないのか、訝しげな顔で悩み始める。

「おい、貴様ら。できたぞ。冷めぬ内に食うがいい」

「だつてき。食おうぜ。んでその後芳乃ちゃんち行つて服回収して、駒川んとこ行つて色々考えようぜ」

「わかつた。そうしよつか」

しかし……茉莉と二人だけで飯を食うのは、初めてなような気がする。

「あ、先に芳乃様に連絡入れとかないと。電話借りるねー」

「ういうい。お好きにどーぞ」

トテトテと電話へ向かう茉莉を見送りつつ、俺は用意された朝飯に手を付け始めるのだった。

ザ・和の朝食という感じでもとても美味しかったです。はい。

「……どう見ても夫婦か何かであろうに……」

「なんか言つたか?」

「気の所為だ」

まあそういうわけで俺たちは二人で芳乃ちゃんちに向かうことになつたのだが……

「ね、手繋いでくれる?」

出た途端にこれである。

つい先ほど裸で触れ合つたので意識をするなという方が難しいが、しかし茉莉とて不安なのだろう。

「ん、まあいいけど」

「あは……ありがと、馨くん」

そんな風に心底から安心したような笑顔を見せられてしまえば、こっちは見惚れるしかできない。

まったく惚れた弱みという奴である。

「……お前が嬉しいならなんでもいいけどさ」

そして顔を背けて頬を掻くくらいしかできない。しかも熱い。赤くなっているんだろう。

まあそりやそうだ。

……正直なところ、平静を保とうとかなり無理をしている。菜子は一旦人に戻れたし、なんだか光明が見えそうでもう完全に普段の調子だが、一方俺は何が何だかわからない内に惚れた女の素っ裸を見て、拳句の果てに勃ったモノが尻に当たったりとか胸触っちゃったりとかまあ色々あったわけで。

純粹に恥ずかしいが、そこは俺。

多少の感情の切り離しと適切な処理というものは身につけている。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

故に煩惱なるもの一切よ、ただ安らかに死に候え——とにかく自分を冷静に保ちながら、俺は菜子の小さな手を握り、そして芳乃ちゃんちに向かうのだった。

「心配したのよ菜子。さっきまで連絡も何一つ寄越さな……あつ、ふーん。朝帰りね。今日はお赤飯かしら？」

着いて俺たち……というか菜子の格好を見た芳乃ちゃんは開口一番これである。

「待つてくださいい芳乃様！ これにはとても深い事情があるんですっ！」

「そうだぞ芳乃ちゃん！ 事情も聞かずに赤飯コースはよろしくない！」

「えっ？ でも菜子の服が馨さんの物ってことはつまりそういう……」

「あー、わかりました芳乃様！ ワタシと一緒に本殿行きましょう！ それで少し理由がわかるはずですから！ ねっ！」

「あつ、ちよつと菜子引つ張らないでー！」

……なんだか嵐のように二人は本殿へと向かっていく。俺は置いてけぼりを食らったのでとりあえずお邪魔しますと言ってから家にかかる。

「なあ馨。その……遂にやったのか？」

「テメエもか将臣イ！ ちげえよクソ真面目な話なの。祟り関連で

な」

「……！ わかった、ムラサメちゃんを呼んでくる」

「助かるわ。あと駒川にも連絡取つとかねえと」

朝から忙しなく動く。

今日は本当に忙しくなりそうだ。

それからしばらくして服を持った茉莉と芳乃ちゃんが戻ってきて、ムラサメ様もその少し後にやってきた。

そうしていつものメンツが揃ったところで、茉莉が昨日の話と今朝の話 시작했다。

「……つまり茉莉は、憑代から出てきた祟り神らしき存在と接触してから子犬になってしまったということじゃな」

「はい。それで一番鼻の効く馨くんと虚絶を頼ったのですが……」

その瞬間茉莉は苦い顔をした。当たり前前だ、互いに醜態と醜態を晒したのだから。

そしてそのまま沈黙し、頬に赤みが差す。何を思い出しているんだろう。なんか「チラツと見たエイリアンが……」とか聞こえてくるしちよつと待てお前俺が視線逸らしてる間にナニを見たのかお前。やめてよお……!!?

「「ジュー……」」

その様子を見た途端、三人はわざわざ口に出しながら俺をジト目で見てくる。

「な、なんだよう……」

「馨さん、茉莉に何したの？」

「いや、別に何もしてないよ芳乃ちゃん。だからそのジト目はやめて欲しいな〜って。うん」

「……本当に？」

「ほ、本当だよー。馨君嘘吐かない。嘘吐けない」

大変怖い表情をしている芳乃ちゃんに内心とてもビビリながら、嘘は吐かない。でも本当にあったことは隠しておく。でない絶対面倒くさい。

——胸揉んだとか絶対言えない。裸見たとか絶対言えない。

「し、心配なら茉莉子に聞いてよねえ〜……」

そそくさと芳乃ちゃんから離れつつ、俺はムラサメ様に視線を向ける。

「それでムラサメ様。何か変化は？」

「茉莉子が犬に変化したこととは別の問題等は無い。純粹に茉莉子の問題だけに取り組んでも良いだろう。今のところはな」

……一先ずは安心か。同時に問題が起きていたら困っていたところだ。

「しかしどうやって戻ったのだ？ 茉莉子」

「馨くんの家にあつた温泉水をかけてもらったら元に戻った……って感じでしようか」

「確か虚絶の奴が穢れに近いものを感じたーとか言ってたっけ。詳しい仕組みはわからないけども、ここのお湯を引つ掛けりや何とかなるのは間違いない」

「そんな漫画みたいなの……いや冷静に考えたら色々漫画みたいだったな。ここら辺の話」

将臣の感想はもつともだが、事實は小説よりも奇なりという言葉があるように、現実とはえてしてそんなものだ。

と、ここで俺はふとどうでもいいことに気付いた。

「てかお前いい加減着替えてこいよ」

服を持っていているなら着替えてくればいいのに……茉莉子がすっかりそれを忘れていることに。

言われてハツとした様子を見せ、しかし何処か悩ましそうにしながら一言。

「後にする」

「あっそ」

「えつと……話を戻すけど、茉莉子が犬になったのは呪いなの？」

芳乃ちゃんの軌道修正により再び空気が変わる。

「馨、お主の見解は」

「呪いじゃなくて単に中にいた犬神が、何かに反応して茉莉子に取り憑いたと睨んでる」

「あの血筋だから、ではないと?」

「だったらもう茉莉は死んでいる筈だ。神が無慈悲に命を奪うのは昔からのお約束だからな。そうしないなら何か理由があるんだろうよ。ムラサメ様はどう睨んでる?」

「大体同じ考えじゃが、吾輩は呪詛返しの種類であると思う」

「それは違う。呪詛返しはあくまでも呪詛が起動している時に破られたら、反射的に作用するものだから、将臣の中から取り出した時点で発動していないと辻褄が合わない」

「……ならば何故茉莉が?」

しかしここで、悩む俺たちに一石を投じる声が。

「なあ。思うに常陸さんが取り憑かれたのって偶然なんじゃないか。ほらさ、意志自体はあるんだし血筋云々じゃなくて事故みたいなもんだったり……」

将臣の言ったことは確かに納得が行く。事故と言われれば何となくそんな感じがする。

俺の中にいたあの思念が犬神の物だとすれば、茉莉に反応しなかったのが奇妙なくらいだ。つまり茉莉そのものに関してはさして反応する理由もないんだろう。

しかし反応するだけの理由を茉莉が持ってしまったから……となってもあるか? 神が起きる理由なんてあるのか?

「何か心当たりとかある?」

「いえ、特には……神様が反応するようなことなんて血筋以外にワタシには無いと思います」

「とにかく、みづはさんのところに行って話してみよう。そうすれば何かわかる筈よね」

「じゃな。向かうぞ」

「あ、ワタシ着替えてきます。流石にこの格好だと色々誤解生むので」
……結局その後、貸した服はどうするかというところで揉めそうになったが、そんなことよりも先にと優先して、とりあえず貸した服の問題は棚上げしておいた。

やけに生暖かい視線を送る将臣と芳乃ちゃん、そしてとても楽しそ

うにニヤニヤしているムラサメ様を見て、なんてこつたいとか思ったりもした。

駒川の診療所に行つて早々に、俺たちは事情を話して今わかっていることと、いくつかの推論を伝えた。

「なるほどね。またややこしそうな話だ」

と、奴は言つて引つ張り出した資料をパラパラとめくり、何やらブツブツと呟きながら視線を動かした。しばらくして……

「昔とはいえ、類似した事例はある。けどトリガーとなる要素が確認されている場合が基本だね。今回の件、確かに常陸さんは襲われるだけの理由があるけど……だったら前提が崩れてしまう」

そんな風に、顔をしかめながら言つた。

「前提？」

「芳乃様、朝武家の呪いを考えてみましょう。あれは朝武を等しく呪つたものであるのにも関わらず、直接の血筋である常陸家は呪われていなかった。荒神になった犬神の思考がどれだけ憎悪一色になっていたとしても、崇めるべき自らを無下に扱つた人間の血筋くらい簡単に見分けが付く筈でしょう」

「なるほど。確かに私の方だけで、茉莉の方は短命でもなければ耳も出てなかった。言われてみれば違和感がある……でも、だとしたら私に反応しなきゃおかしいわ」

芳乃ちゃんの言う通りである。

もし血筋だけが反応するとしたら、芳乃ちゃんに反応してないとおかしい。それに憑代に近い上に、接してる時間が長いのは彼女だ。いくら奉られて薄れ始めたとはいえ、薄れる前の状態で反応してないと辻褄が合わない。

「まあつまりだ。常陸さんでなければならぬ理由が血筋以外に必ず存在しているということなんだろう。何か、心当たりは……確か無いなかったね」

そう、心当たりが無いのが現状。

打破する要素が無さすぎる。

「——いや待て。ある筈だ……常陸さん。昨日君は、憑代の前で何を考えていた？ それと何を発言した？ 思い出せる限りでいい。」
普段、と何か違うことをしたか、教えてくれないか」

しかしここで駒川、我に妙案有りと言わんばかりに真剣に茉莉に問う。

「違うこと……」

「考えてみれば確かに違うな。わざわざ安晴から本殿の鍵を借りて、人気の無くなったところで敢えて入ったのだ。のう、茉莉。何をしていたのじゃ？」

更にムラサメ様も続けて言う。

「えーっと、ちよつと待ってくださいね。あの時、あの時……ワタシが何を考えて何を言つて何をしていたか——」

腕を組んでうーんと悩んでいた茉莉だが、何か思い当たる節があったのか、ハツとした表情に変化した途端、顔が真っ赤に染まった。こいつの真っ赤な顔を見るのは今日2度目である。

「……あ、え、どうしよ……」

「茉莉、隠して困るのはあなたよ。この件、放っておいたら大変な事になるかもしれない」

「え、あ、そうですけど。芳乃様の言う通りですけど。でもその……」

「下手をすればお主の命に関わることだぞ。何をそこまで言い淀む」

「そつ、それは……えつとですぬ……あはく……」

「別にほら、俺たち相手だしそんなに考えなくてもいいんじゃない？

初めから事情知ってるんだしよ」

「ッ！」

ムラサメ様、芳乃ちゃん、将臣の説得を受けて更に顔を赤くしながら、唇をキュツと噛みしめる。そこまで考えるほどつてお前十二考え
てんだお前……

「茉莉」

「常陸さん」

「あー！ もう！ わかりました！ 言います！ 白状します！ だ
から迫らないで下さい怖いです！」

茉莉はズイと迫った俺以外の面子を手で押して遠ざけるほどには元気だ。あ、ムラサメ様は将臣が引つ張ってった。

そうして茉莉は意を決したように――

「その……えっと、ワタシはあの時……い……について」

「あんだって?」

思わず速攻で聞き返した俺は悪くない。だって意を決した表情で、あまりにもか細い声だったんだからさ……そりやそうなるってもんだろ。

「だから! ……その、こ………について……」

「いや聞こえんから。そんなに恥ずかしいことか?」

「だからっ! ……察してよ、馨くん……」

「は? 俺が知ってるお前の秘密だったって、せいぜい昔からこ――」

そこまで言いかかって、思わず俺も止まってしまった。

つまり、つまりだ。茉莉はあの日、俺に好きな相手はいるかと問うた後に本殿に向かって……恋について考えていたら犬神が反応した……?

いやいやいや、なにそれ。ふざけてんのか。どうして犬神が恋で反応するんだよお前さ。

「馨、何か知ってるんだね?」

「へっ!? あ、まあ知ってるけど……どう考えてもおかしいっていうか、よりもよってそれに反応するか普通? みたいな……?」

「教えてくれないか」

「ダメっ! 言っちゃダメだからね馨くん!」

「無茶言うなや! 恥ずかしかろうとあれくらい普通だろうが!」

「ダメなものダメなの!」

「もう隠せないから!」

ゼーハーゼーハーしながら言い争いに発展しかかったが、周囲からの死ぬほど冷たい視線がヒートアップした頭を冷やす。俺がここまで口走った以上、隠し通せない。

冷静に努めてながら、茉莉に尋ねた。

「……告白か暴露か、好きなのは」

沈黙の末、苦渋の表情と共に茉莉が選択したのは――

「……わかりました、腹括ります」

告白だった。

ぶつちやけ俺としても助かる。

大きく息を吸い込んで、そして吐く。

(見た感じ)茉莉は、羞恥心を完璧な精神強度で押さえ込みながら――
「……………あのう、恋について……………考えたり、呟いたりしてました……………あは」

本当に年頃の女の子のように、静かに言った。

惚れた弱みだろうか、やたらと可愛く見える。見惚れてしまいそうだが、そうなってはならんと意識を切り替える。

「恋とか愛……………?」

「すまん、吾輩少し混乱してきた」

「――私でもいいはずなのに、何で茉莉のそういう気持ちに……………?」

「それを言い出したら俺も引つかかっておかしくないんだけど……………」

――ますます分からん。

全員の反応からしても逆に分からなくなった。

……………何故恋に反応した?

「恋って、茉莉は気になる人いるの?」

「い、いえ。全然。だからどんな基準で好きになるかとか気になって昨日馨くんに好きな人いるかって聞いたけど、いないって話だったの
で」

「ふーん、そっか。そっかそっか」

……………なんだろう? なんてか芳乃ちゃんが俺と茉莉にとっても優しい視線を送ってくる。ま、まさか俺のバレてる? ——まあ将臣にバレるくらいだし全員にバレてると思っただ方がいいか。

「まあでもこれではつきりした……………とかしてしまった、かな」

「何がですか? いやワタシの内心は暴露しましたけど」

「単純な話だよ常陸さん。君が恋をすれば中にいる存在が帰ってくれる可能性があるってことだ。憑代と同じ理屈だよ」

「あー、はあ。ワタシが恋をしなきゃいけない。確かに単純ですねー
——えっ？ 待ってワタシが恋を？ ……本当に？」

啞然とする茉莉子。

そりや俺だつて啞然とするしかない。

……誰だつて好きな子が他の誰かに恋をしなきゃいけないってのは動揺するだろ？

同居

茉莉が恋をする。

……まあ人だから当然のことだろう。いつかはそうなる。それが必然だ。

だが今回は事情が事情だ。

普通に恋をしろなどと……かなりの難題だろう。利己を先走らせず、純然たる恋愛をする。なんと難しいことか。

「気が重い」

ガサゴソと着替え等をまとめながら一つ呟く。

——それでいいと思ったのは俺だ。

——そうでなくてはならないと思ったのは俺だ。

「もし、もしそうだったのなら……俺がそう口にすることが許されても……」

——結局、きつと俺はその直後にこう付け足してしまうのだろう。

『お前の事を永遠に忘れられない誰かなんて、もう忘れてくれ』……と。

「ケツ、人魚姫気取りか俺は……」

なんと醜い。

勝手に気持ちを押し込めて、いざ伝えてみれば忘れてくださいなど都合が良すぎる。それならばいっそ正面から雄々しく愛に敗れた方が格好がつくと言うもの。

……そんなこともできやしないが。

「……はあ。やってらんねエ」

——恋煩いなど面倒だ、と言っていた男がこのザマとはな——

「うるせえ。人間そんなもんだ」

——……知らぬは本人ばかりか——

「は？」

——忘れろ——

……さて。

唐突だが何故俺が着替えをまとめているか、といえはだが……

まあ、少しばかり時を遡って話をしよう。

——あの後。

まあ、そんなこんなで恋だ云々だはとりあえず置いておいて、子犬になることへの対処の話へと移った。

「常陸さん、これからしばらくは芳乃様の家で暮らしてもらえるかな。色々都合が良い」

「万が一、という時も楽ですもんね。わかりました。じゃあ戻って着替えとか持つてこないと……」

駒川の提案は合理であるし、そこに口を挟む必要は全くない。むしろ行き帰りが無くなる分楽になるという奴だ。

こんな形で茉莉と芳乃ちゃんの距離が物理的に近づくとは思わなんだが。

「あと馨。君も暮らしな」

「ん、わかった」

反射的に返事をして……あれ？

俺が暮らす？ 何処で？ ——話の流れからして芳乃ちゃんの家だよな。てかそれ以外あり得ん。

つまり……同居？ 茉莉と？ えっ、ちよつと待って。

「……………っつておい待ちやがれ！ お前何言ってるんだ!! なんだって俺が芳乃ちゃんの家で暮らす必要があるんだよ!」

気付いているクセにそういうこと言うの本当にお前なア……!

とか思いながら聞き返す。

俺いる？ いらんでしょ。

「だって君しかいないだろ。魔の存在について詳しいの。ムラサメ様だって間違いをするんだし、他の観点から見れる君を置くのは合理的だ」

「いやまあそうなんだけど、独り身としては色々複雑というか……恋とかどうでもいい人間としては恋人同士になった男女の家で過ごすとか砂糖吐くんじゃないかとか……ね?」

「ダメだ、暮らしなさい。そんなこと言っている場合じゃないのは、馨

がよく知っているだろう?」

「うぐぐ……」

ぐぬぬと口を噛む。いやだって……ねえ? とか色々悩んでいると、駒川は声を潜めて俺に一言。

「——ま、いい機会じゃないのかな。距離を詰めるにはさ」

「なっ!」

よりにもよって俺を知るお前が、そんな事を言うのか!? ……驚愕以外の何者でもない。啞然とする俺に「頑張れよ」と肩を叩いた駒川を見ても、周りの奴らはそれほどピンと来てないようだ。

……バレてると睨んだけど違った? いやまあ……菜子にさえ気付かれてなければなんでもいいんだけどさ。

「……一旦俺も家に戻って着替えなりなんなりを取ってくるよ」

……とまあ、こんなオチだったわけだ。

同居……ねえ。

なんでみんな、菜子と俺の距離を縮めようとしてるんだ。いらんお節介だよ全く……

荷物は一通りまとめ終わったが、俺は未だに自宅に留まっていた。

正直行く必要性がそれほど感じられない。合理ではあるが、俺がいたところで何も変わらない。

「……はあ」

ゆらりと立ち上がり、虚絶……いや、敢えてここでは無銘刀と呼ぼうか。それが置かれている部屋に向かう。

……打刀とも太刀ともつかぬ、無骨で異形の刀。幼少の頃から身の丈ほどもある大剣のように認識していたが、今や長めの刀くらいの認識しかない。

本当の意味で、これが必要とする日はもう来ないが……俺を端末と言うのであれば、本体と端末である以上、最期まで付き合ってもらおうぞ——

鞘をひっ掴み、敢えて本体を持っていくことを改めて決意する。置いておいてもいいのだが、そういう気分ではない。

……死なば諸共、と似たような感覚と言えはいいのか。とかく、こいつは俺と心中するくらい当然なのだ。

振り回したんだから振り回される。

復讐心としては当然だろ？

「……行つてきます」

荷物を纏めて持つて、誰もいない寂しい家に一言告げて出て行く。

……本当に少し寂しくなる。

いやはや、毛布の香りが恋しくなるものだ。

そういうわけで安晴さんに事情を説明すると

「なるほどね。ま、自由にしてくれよ。ほら、もう我が家みたい気軽に気兼ねものだろ？ なんなら僕の秘蔵のプリン食べてもいいからさ」

とかまあ……その……快承してもらった。少し俺相手に甘いのはどうかと思わんでもないが、いいか。

「世話になるって言つてもねえ……」

「なんじゃその辛気臭い顔は」

「色々あるのさ、ムラサメ様」

結局何をするわけでもなく、芳乃ちゃんは舞の奉納。将臣は資料の読み漁り、菜子が家事やつて、俺とムラサメ様は暇潰しに外でボーッとしている。

「今日はいいい天気だなア。花が咲いて、小鳥も鳴いている……」

「吾輩、たまにお主の言う言葉がイマイチよくわからんぞ」

「いいんだよ、わからなくて」

適当に流しつつ、はあ……と一つため息。

そんな俺を見兼ねたムラサメ様は、心底面倒くさそうに言った。

「菜子と一つ屋根の下は落ち着かんか」

「いや考えてみようぜ？ 惚れた女と物理的に距離近付いてしまったら困るだろ。今まで上手くやって来れたのは調整しやすい位置だったからなのに、それが無くなったんだ。ため息も吐きたくなるだろ」
「要はドキドキしてんじやろ」

「はっ」

「いつそ告白すれば良からう。茉莉も満更ではあるまい」

「……無理だよ」

感情が絡まってごっちゃんになっている。したいような、したくないような……それ以上を求めているような、いないような。

「では聞くが、馨は茉莉が自分以外の男と笑顔でいるのにはどう思う」「どうって……妬くかどうかってことか？」

「それ以外の何があるのだ。ぶっちゃんけ吾輩はご主人が構ってくれないとそれなりに妬くぞ。兄を取られたようだな」

「なにその情報」

「ムラサメちゃん情報じゃが？ まあ参考までに知っておけ」

ドヤるムラサメ様。

——可愛いんですけど、微笑ましくて。

まあでも妬くか妬かないかなんて分かりきった話だ。ムラサメ様も人が悪い。昔から決まっている。

茉莉が他の奴といたって——

……と、そこまで考えて。

不意に頭をよぎったのは、いつぞやの光景。

茉莉をお姫様抱っこする将臣の姿。

「」

口に出かかっていた言葉が、ピタリと止まった。

妬く必要も理由も無い。茉莉がそう選んだのだから——
だから……だから……だから。

だから俺は——

嫌だ。

俺俺の隣しにかいて知くらない茉茉莉子の子子が取られる。

——そんなのは嫌だ。

嫌だけど、でも俺は……きつと……

「顔が雄弁に語っておるぞ」

呆れたムラサメ様がそんな風に言う。

だがその視線は何処か優しい。

「——吾輩と同じ目じゃな、馨」

「そんなこと……！」

「茉莉と一緒にいいのだろう」

「っ！ それ、は……！」

咄嗟に出た否定の言葉すら、内心を言い当てられて続かない。加えて俺自身、それが凶星である以上、もう何も言えないのだ。

……そう、俺は別に急でなければきつと、この想いを適当に処理できた。けど事態は急を要する……いや、茉莉が恋をしなくてはいけない。

好きな子が誰かに心惹かれて行くのを、指を啜えて見ていることしかできない。

それでいいと思ったのも事実。

諦めようと思えば諦められるのも事実。

しかし俺はどうしても、諦め切れない。理由がわからない。俺が不幸の塊だってわかってはいるのに、何故か……

「頑なに否定する理由は当然わかっておる。じゃが押し留めることでは更に苦しむだけぞ」

そう言われても……というのが偽らざる本音だが、それを言っても仕方ない。だから黙り込んでおると、ムラサメ様はふと。

「——昔話をしてやろう」

——なんて、急に言い出した。

何事かとも思ったが、とにかく聞いてみよう、彼女の語る言葉に耳を傾ける。

「かつて、愚かにも死にかけの女に恋をした男がいた。そ奴はごく普通の男じゃった。だというのにも関わらず、ある日医者に担ぎ込まれる死にかけの女に一目惚れした」

どうやら過去に見た恋の話のようだ。先人として、何か思うものがあるのだろう。故にこの話を振ったということか。

しかしムラサメ様の表情はとても懐かしいものを思い出すような

ものであると同時に、とても優しいものだった。

「それから色々あつて男と女は言葉を交わすようになった。無論、男は女に向かつて愛を伝えたとも。じゃがこれまた必然的に、先の無い女はそれに喜びを覚えたが、同時に悲しみと共に断つた」

しかしそれはガラリと変わり、とても楽しい表情に。

「男はそれを受け入れた。何の迷いもなくだ。きっとそう言うであろうと思つていた、と笑いながら。同時にそれでも、実らぬとしても其方を愛していると告げた」

そして楽しいな表情で告げられたその言葉は、あまりにも潔すぎる男の引き際と、それはそれとして好きは好きだと告げたということ。

非常に参考になる話だ。俺と似たような状況で挑んだ男がいたのだから。

「……そして、その女の死はあっさりと訪れた。今際の際、女は男に謝つた。こんな女の事は忘れてくれ、其方の心を奪つてすまない」と

ムラサメ様は俺を見つめる。

「男はなんと返したと思う?」

「そりや、忘れられないとか?」

「いいや。決して忘れない。其方こそ我が運命であつたのだから……とな」

戯けたように男の言葉を告げたが、その表情はとても穏やかな——こう言つてはなんだが、何の未練も無く、静かに死に逝く人が浮かべるような——とにもかくにも、あまりにも穏やかで、言葉では言い表せないほどに”女性”であつた。

普段の威厳と少女が混在するムラサメ様ではない。そこには確かに、”ムラサメ”となる前の少女がいたんだ。

「結局その男は、最期までその女への愛を貫き、妻を娶る事も無く駆け抜けた。まったく……運命であつたとしても、命を繋ぐことに文句なぞ付けんというに……バカめ……逝くまで操を立てんでも……」

後半はよく聞き取れなかったが、何やらムラサメ様とは深い関わりのある話らしい……ということはわかつた。

もつとも、それが彼女にとってどれだけの意味があるのかは、知る

由も無いが。

「さて、そんな男が女に問われたことがある。何故先の無い自分に愛を伝えたのかだ。はつきり言って通る理由も無い。周りも何故と疑問に思っていたのう」

「死にかけだったんだろ？ 言っただとしてもそれじゃ時間も何も無いし、断られるだろうことは予想できるよなア」

正直、まったく解せない。

その男がその女をどれほど愛していたのかは知らない。だが、愛する故に愛に敗れに行く理由がさっぱりわからない。

——胸に秘めたっていいじゃないか。

それで良いと思えるなら。

「理由は単純じゃった。伝えないよりも伝えたい。敗れるからこそ伝えたい。正気ではなく理屈ではない。愛という名の狂気は全てに勝るのだ」

だが、出てきたのは理屈を通り越した、どうしようもない話。

「なんだよそれ。最強じゃないか」

ムラサメ様の言葉は、最強だった。

——全てに勝る。理屈ではない。

「譬、そういう答えもあつたと覚えておけば良いのじゃ。これは一つの例にすぎん。そう悩むな」

まるで手のかかる子供を嗜めるような表情を浮かべて、彼女は微笑む。そこに安心と信頼を覚えるが、しかし……この話は、あまりにも強すぎる。

俺はそこまで強い男では無い。

——ああ……まったく、何故俺は素直に『弟として見られるのは嫌だ』と言えないんだらうか……吐き気がするよ。

「どうしたらいいんだらうな、俺」

「これは受け売りだが、愛とは逃げることはできない、立ち向かうしかないのだとも言う。お主なりの方法で、お主なりに立ち向かってみればいい。吾輩も力にならう。見てきたものは多いからな」

「立ち向かうしかない……か。わかったよ、色々考えてみる」

こういう時に頼れるのがムラサメ様だ。ホント、この人には頭が上
がらない。えっへんと胸を張る彼女を見て、頭を撫でようとして手を
引っ込める。

……俺は彼女に触れられない。

彼女に温もりを別けられない。尊敬している人に、触れられない。
好きな人に想いを伝えられず足踏みをして、理屈に勝ると知ってな
おあれやこれやと屁理屈を付けるか。

……なんと情けない男だ。

「馨、そんな顔をするな。初めてのことに戸惑うのは当然だろう」

そんな俺を見兼ねて、ため息を吐いた後、ムラサメ様は姉か母のよ
うな表情と優しい声で言った。

「そりやそうだけどき」

相変わらず俺は反抗期のガキのような対応である。いやまったく
ダメな男だ。

「悩んだら誰かに言え。吾輩でも誰でもいい」

「……うん、頑張る」

ふんす、と腕をグツと握り、改めて決意する。

みんな頑張ってるし、俺も頑張らないと――

なにやらムラサメ様は用事があるらしく、あの後何処かへと向かっ
ていった。

なので俺はさてどうしたものかと頭を悩ませながら、家に戻って――

「あつ、おかえり」

「へっ？ あつ、うん……ただいま」

居間にいた茉莉子に、笑顔でおかえりと言われて、一瞬何も考えられ
なくなる。なんだかそういうのって、こう……その……恋人っぽく
て、いやまあそれなりに願望はあるが実行に移せない俺にとってはつ
まりまあそういうわけで……

とかく、しどろもどろになりながら返事を返す。

そんな様子がいさしくなかつたのか、彼女はクスクスと可愛らしく
笑っていた。

「なんだか最初の頃の有地さんみたい。どうしたの？ この家でおかえりつて言われるの、そんなに慣れてなかった？」

「ま、色々あるのさ」

「？ なにそれ」

不思議そうにする菜子。

お前におかえりつて言われるとすぐドキドキする……なんて、言えるわけもなし。

しかしそうか、将臣の奴……美人と一つ屋根の下でよくまあ身持ちを固くできたな。正直すごいと思う。俺なら一週間保つかどうか……

——けど、菜子と同居か。

ガキの頃のお泊まり会みたいにはいかなくなつちまったのを喜べばいいやら、悲しめばいいやら……

折り合いをつけるのも大変だと内心ため息を吐きながら、座つてまた頭を回す。

だがここで俺は、現実的な恋愛や男女のお付き合いに関して非常に知識が欠けているのではないか？ ということに気が付いた。

——なるほど、そりゃあ確かに答えも出ないわな。後々で廉に聞こう。多分、そっちの方が求める答えが出てくる筈だ。

「流石に芳乃ちゃんの家でウチでの自堕落な生活はできんさねエ」

だが同時に、普段通りの生活はできんわなと一人呟く。俺の生活は物凄くテキトー極まりない——はつきり言おう、アレなものだ。自身の性質……最善を保とうとする肉体に任せつきりで何にも考えていない。腹が減ったら飯を食う、本当にその程度くらいだ。多分普通の身体なら……贅肉と仲良くやることになっているだろう。

「みんな気にしないと思うよ」

そんな俺がどういう人間かを理解している菜子は、キョトンとした顔でさもなんでもないように言うが、割と俺としては死活問題である。何せアレだ、男としてどうなんだ？ 格好つかない生活を晒すつてのは。

「俺が気にすんの」

と、告げてみれば、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて。

「見栄張ってるんだ」

「張るさそりゃ」

「意外かも」

「そーかい。しかしどうやって暇を潰したもんかねエ……」

何も考えずに静かにしていた気分ではあるが、他人の家でそれはちよつと……という奴だ。こういう時は何かしていないと落ち着かない。何かしてれば何も考えずに済む。

「あ、なら馨くんにはかできないことあるけど」

「は？ 力仕事なら将臣にでも任せりゃいいだろ」

しかし、俺にしかできない事と言って何故茉莉子は擦り寄ってくるのか。お前俺に裸見られてるって忘れてない？ お前がいいならいいんだけどさ……俺だつて男だよ？ そんなにアレ？ 弟分？ それはそれでちよつとへこむな……見られたし。

色々と悶々と考える俺を知つてか知らずか、彼女は花の咲いたような笑みを浮かべて――

「ワタシに構つてっ。あは」

……沈黙、そして停止、からの再起動。

天然ですか。そうですね。可愛いですね。天使でしょうか。誤解しそうですねですが許されますかこれ。

「……ダメ？」

固まる俺が悩んでいるのかと思ったのか、上目遣いと小首を傾げて小さく呟く。えらく甘えた声と態度だ。

そんなことを言われたら、そんなことを言われてしまったら……

「いいけど」

「やった」

受け入れる以外の選択肢は存在しない。

えへんと喜ぶ茉莉子を見て、もうなんでもいいかと考えをやめてしま
う。

「んでどんな風に構えばいい。リクエスト受け付け中」

「いつもみたいに」

「やー、テキトーね」

テキトーに構うとはどういうことなのか非常に不思議だが、求められたなら応えねばなるまい。

隣り合わせで座る俺たちは、さして何をするわけでもない。構え、と言われたところで……

いや待て。

——忘れてないかコイツ。

「菜子さ」

思い立って声をかける。

「ん？」

「その……今朝のこと忘れようとして無理してる？　へっぽこな俺見て色々忘れようとしてる？」

するとどうだろうか。

唾然とした表情から、無表情へと変化したと思ったたら即座に驚き、ついでに顔を真っ赤にして俺を突き飛ばした。ひでえ。

「何しやがる!？」

「何思い出させてるの!？」

忘れてたんかい。お互いに動揺から声を上げてアレコレ言い出す。

「今の今まで忘れてたのかお前!？」　意識してた俺がバカみてーじゃねーか!？」

……なんか、色々こう、その……思うものがあるんですが。

「——スケベ!？」

醜態を思い出してか慌てて俺に掴みかかる菜子。痛いっす。

あと顔がいい。可愛い。羞恥とか色々混ざったその表情イイ。

「せっかく忘れてたのに!？」

そしてプンスカ怒りながら猛抗議。胸を隠すようなポーズなのは今朝のことを反映してなのだろうか。それとも単なる偶然か。

……さてどうしたものか。

菜子が関わると大変馬鹿になると自負しているが、この場は俺が収めないと面倒くさい。朝の誤魔化しがバレたら何を言われるやら。

「あー……ごめん」

まあ有効なのは謝罪だろう。
さつさと謝るに限る。

「……まあ、あんな自白をさせられて、そつちに意識向いていたワタシとしてはアレですけどね……」

「そつちもごめんってば」

「わかってますよ」

パイとそつぽ向きながら渋々といった様子の茉莉を見て、とりあえず謝るのは正解だったかと安心する。

……てか猫被ったなコイツ。被るような話題でもないと思うんだが。

ま、そつちも好きだけど。

「でも許す代わりに約束してください」

しかし茉莉はまだ終わらないと、ムスツとした表情で俺に言う。

「何を？」

「ワタシも忘れますから、今朝見たものを忘れてください」

「……そ、それかア……」

結構な無理難題にどもってしまふ。

忘れようとして忘れられないのはよくある話だと思う。まさしくその状況で俺も困っている。

……正直言おう。鮮明に思い出せる。

これ忘れよう意識したら逆に思い出すパターンだ。やべえどうしよう。

そんな風になんとか頭の中に浮かぶ茉莉の裸をかき消そうと努力していると、途端にジト目になった茉莉が一言ボソツと。

「……えっち。鼻の下伸びてるよ。やらしー」

……刹那、顔に熱が帯びるのがわかる。

——バカなことを言っているだろうか。茉莉にえっちって言われるの……アリだな。って、俺は何を考えているだこのバカツ!! 大変よろしくない!!

つか鼻の下伸びてる!? えっそんなに俺ってわかりやすい!? やばいぞこれ……!!

「——マジ？ そんなに伸びてる？」

やべえやべえと思いがら尋ねてみたが……

「嘘です。でもそういう事を言うってことは考えてたんですね」

ジト目は続いたまま、カマかけに引つかかかってしまったことを淡々と告げた。その視線と声の熱が冷たく、罪悪感が刺激される。

「あつ……いい、いやその……えつと……はい。忘れようと意識したら逆に鮮明に」

「それは当然でしょう。意図して忘れるのなんて記憶操作くらいでしかできないんですから」

「あれ解き方わからない人間に対してやるものだぞ。俺が自分にやつても大した効果が無い」

「普段通りに努めれば忘れるんじゃないんですか。変に意識したりせずに」

「確約はできないけども、やってみるさ」

どうかかみたいなため息を吐いた茉莉子は、そっぽを向く。

……できる気がしないが、案外早く風化しそうなもんだ。

ただ、うん……すごかったなあ……と。

女の子——だった。

めちやくちや女の子——だった。

……気持ち悪いな俺。

好きな子の裸を思い返してすごかったあの女の子だの……キモい以外の何者でもない。ただの変態じゃないか。

「馨くん？」

「なんでもない」

流石に、知られたくないなあ……

混乱

揺さぶられているのだろうか。

まだまだ眠っていたいのにな誰かが俺に起きろと言っているかのようだ。

……というか、家には俺一人のはずなんだが、何故にこうも？

ああ、虚絶か……いや待て。あいつなら無理矢理起こしてくる筈なのに、どうして揺さぶっているんだ？

「……………きて……………さ……………」

何か言ってる……けどまだ寝ていたい。飯なんてどうでもいいから寝ていたい。適当にパンとか突っ込めばいいから寝ていたい。

「起きて……………」

……あれ、この声って……………？

「起きて下さいっ—」

はつきりと聞こえた声に目を醒ます。ゆつくりとその声の方向を向くと——

「……………なんでお前……………？」

とても困った顔をした茉莉がいた。

……はて、何故茉莉が俺のトコにいる？ 合鍵を渡してないのは確かだ。ならば余計にわからない。

——これは夢だろうか？ 俺が茉莉と長く接していたいとほんの少し、本当にほんの少しだけ、そんな願望を抱いていたからこそ見ている夢なのか？

「なんでって忘れたんですか？ とにかく起きて顔でも洗って下さい。じゃないと朝食に間に合いませんよ」

呆れた声と顔。それを見て記憶に何かを感じて……………ああ、そうかと。

全て思い出した。ここが何処でどうしてこいつがここにいるのかも。

「……………ありがとう」

とりあえず返事をして、欠伸を一つ。

——眠気も全部ぶっ飛んだ。寝起きから茉子の声を聞いてハツキリと目が覚めた。

……いやお前、好きな女の子に通い妻みたいなことされたら目エ覚めるだろフツ。

「すぐ着替えて行く。待っててくれ」

「わかりました」

居間に向かう茉子を見送りつつ、ガサゴソと着替えを漁り制服を取り出す。

しかし、そうか……ギリギリまで寝かしてくれたのか、あいつ。有難い話だ。

「そうだ、お前調子どうよ」

着替えて飯を食って、そのまま学院へと向かう中で、俺はふと茉子に声をかけた。昨日はあの後、犬になることはなかったが、さて今朝はどうだったのか。

「今朝に一度なりましたね」

「はあ。規則性は無し、か……」

「いつも通りトレーニング行こうとした時になってびっくりしたよ」

「ふーん……俺が叩き起こされる訳でもなし、かと言って今の茉子から何かを感知できる訳でもなし……」

そこまでボヤいて、だが俺はふと気がつく。将臣がそう言ったということは、つまり茉子の——

「将臣」

「なんだよ」

「……見たな」

「何を!？」

「芳乃ちゃんという人がいながら……お前エツ!」
「違アう!」

キシヤーっと掴みかかり、睨み合う俺たち。朝っぱらから元気なことだが、ぶつちやけ俺だつて見てみたいよ茉子の……あつ、いや……それよりすごいの見てたわ俺。うん。

——でも健全な男子的に言わせてもらおうと全裸よりエロく感じるんだよね、下着はさ。

いやでも本物はすごかったな……じゃない!! ええい、思春期のガキか俺は!?

グギギと睨み合いながら、一つため息を吐いて落ち着いた後に——さてどうなのかを聞いた。

「……実際」

「朝た……芳乃を起こしに行ったよ普通にさ。見てないって」

「ホント?」

「ホントホント」

「騙したら殺す」

「信用してくれよ」

「茉莉に後ろから胸押し当てられたりお姫様抱っこしたりしたの俺は思うものあるからな」

「面倒だなお前」

「面倒だよ俺は」

取っ組み合いをやめつつ、ため息を吐く将臣を俺は笑う。面倒でない俺など俺ではない……と言ったところか。だがしかし、やはり思うのだ。

羨ましいぞちくしょうと。

……昨日から気持ち悪いな俺。

先程までのやり取りは全て小声。近くにいたムラサメ様以外には聞こえなかったろう。現に茉莉と芳乃ちゃんは不思議そうな顔をしているではないか。完璧。

「でも茉莉、大丈夫なの? また急になったら今度は隠すのが大変になるんじゃないかしら」

心配そうに言う芳乃ちゃんの発言はもつともだ。家の中で起きたのならとにかく、外ともなると隠すのも難しければ、更に復帰したとしても茉莉は素っ裸だ。

——しかも抑制も出来なければ常に暴走状態。何がトリガーかわからない。はつきり言えば詰んでいる。

「……つかお前普通に過ごしてるけどいいのか？ 駒川も待機しておくとは言ってたけどさ」

だつていうのにこの女、普通に制服着て学院へ行こうと考えたようだ。俺たち全員が怪訝な顔をして見たつて当然の話だろう。

「平気ですとも。だつてほら、こういうのは大抵一日一回つて相場が決まっているでしょう？」

ドヤ顔をしながらえっへんと漫画やアニメ知識的な考えを抜かす菜子を見ては、今度は呆れたため息しか出てこない。

……こいつは本当に変なところで楽観的だなあ……

確かにお湯は手元にある。水筒にお湯を入れてきたので何も問題は無いと言えは無いが、当然ながら何も起きない方が嬉しいに決まってる。

「……朝からこの調子なんです」

「マジかよ……」

芳乃ちゃんの補足を聞いてゲンナリする。こりや……マズいのは？

「まあ吾輩が学院のなかにいて随時見ておくことにしてもよいのだが、物理干渉がきんのぞな。こちらは憑代を見ておこう。馨、虚絶を貸してはくれぬか？」

「——だとさ」

ムラサメ様の提案を虚絶へと伝えてみると、俺の影から黒い霧が蠢き、そのまま菜子の影に入った。

「もしなつたとしても虚絶が服を回収するし、普通の人間には反応不能な速さで入れ替わりもしてくれるから何とかなる……と思う。あと伝達が早い」

「心配性ですなあ。大丈夫ですよ、あは」

いや本当に心配なんだつて。

なんか楽観が過ぎる菜子に、俺たちは一抹の不安を覚えながら登校するのであった。

さて、そんなこんなで授業を受けつつ、菜子を見て状況を確認する。

しかし何一つ変わらない。感覚的な話でも、視覚的な話でも、だ。

——ふむ……均衡が崩れると子犬になるということか——

そんな中で、虚絶は分析結果を告げる。

——どうやら、中にいるものが何かしらのものに反応した場合、均衡が崩れてしまうようだ——

なるほどな。

菜子の座っている椅子の横に獣がいる。が、獣が反応すると椅子に座っている菜子を押し退けて……という構図か。

と、なればもうどうしようもない。本人の努力でどうにかというものではない。獣側との対話が必要だな。けど応じてくれるもんかね……

——難しいな。回線が違っている……魔と神の境の狭間に通じる回線など、人の身には無理な話だ。向こう側からこちらに合わせられなければ通じん——

ちっ、不可能か。

……無理をするにはやや厳しい……ともなれば、クソツ……

——貴様が想いを告げれば全て丸く収まるというに。この軟弱者め——

じゃあかしいわいつ。

俺が伝えても、彼女は俺を異性として見ていない。それが事実だ。それだけで終わる。

——いや貴様、本当に貴様、おい貴様……貴様は……貴様な……

なんだかとても言いづらそうにモゴモゴと虚絶は言うが、最終的には「忘れる」とだけ言って勝手に切り捨てた。なんだよお前……本当にき。

——あの女の本心はまた別だ。そして恐らく、子犬になることをどうにかする条件もまた、恋などではない……——

しかし急に虚絶は続けた。

何を急に？ しかも菜子の言葉が嘘だって言うのか。

——恋などという次元は通り過ぎていて、奴は既にな。それに、誤

魔化したという線もある――

……どうということだ？

――我が思うにな、常陸茉莉子は既に恋をしている。恋をしているからこそ獣が反応した。そして常陸茉莉子は想いを明かすことを拒み、敢えてあのような言葉を使った……そう見ている――

虚絶の発言は確かに可能性がある。が、しかし茉莉子が敢えてそのような事を言う必要があるのかわからない。別に何かそうする必要なんて……

と、そこまで考えた時に。

虚絶が、淡々と告げた。

――あの場に、常陸茉莉子の想い人がいた……とすればどうだ――

思考が止まった。

茉莉子の想い人が、あの場にいた……？

……もしかして、あいつ横恋慕だったのか？ それとももしかして

廉だったりとか……

絶対に俺ではない筈だ。間違いない。

――愚かだな馨よ……実に愚かだ――

心底呆れた声で、彼女が吐き捨てる。

それだけ伝えると、一切応えなくなった。

……まさか、俺……？

いや、あり得ない。

それこそあり得ない話だ。

彼女は俺を異性として見ることはない。

俺だけが異性として見ているんだから。

ただそれだけの事だ。

それから更に時間は過ぎて昼休み。

なにやら女子トークが向こうの方で繰り広げられているが、俺の知らぬところだ。年頃の女の子らしく恋バナに花を咲かせている。

んで、かくいう俺たちはと言えば。

「……なあ馨、マジな話お前どうするんだ？」

「するわけないだろ」

将臣が割と深刻そうに言ったことを切り捨てる。

「やるだけやってみるのもアリだと思うぞ。というかデートくらい誘ってみたらどうだ」

「普段と何一つ変わらんさ。彼女は俺を異性として見ていない」

——俺たちも恋バナだよ。

「おつ、なーに話してんだよ二人とも」

「廉」

そして女に飢える男が聞こえてきたワードに反応してヒョッコリと顔を出す。丁度いいか、こいつに聞きたいこともあったし。

「いやな、廉太郎。そのだな……」

「俺が片想いしてる。それだけだ」

将臣が言うか言わないかを悩んでいるらしいので、さっぱり小声で切り出してみると、その従兄弟コンビは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔どころか、非力な赤子にブレーンバスターを喰らった大人のような顔をしていた。

それくらい間抜けだった。

「おまつ!?! 馨!?!」

ひどく驚いた様子で間抜けな声を出す将臣とは対照的に、廉はしばらく間抜け面を晒した後に、キリッとした顔に戻ってから静かに一言。

「常陸さんだな」

………今度は俺が沈黙した。

いや、あの……そんなにわかりやすかったかな……どう考えてもどっちつかずで中途半端な感じだから余計わからないと思ったんだけど。

「………なんでわかったの……?」

「あれで気付かねえのは無理あるだろ」

「いやでも……ほらさ」

「てかやーっと自覚したかって感じ?」

「色々あつたんだよっ」

心底呆れた表情の廉にヤケクソ気味に返してから、俺はソツポを向く。

当の俺だけ長い間気付かなかったのに、周りの奴らにはバレバレつてのはなんか割に合わねえ……

多分面白い顔をしていたんだろう。そんな俺を覗き込むなり二人が笑い出す。

「なんだよ、拗ねんなよ馨。ほら、俺に相談してみろって」

「聞きたいことと言えばどうして男女は付き合うのかぐらいだ」

「……は？」

「そもそも恋愛に対する知識が無い」

だってそもそも話、俺恋愛についてさっぱり知らないし。

そういうことだと素直に言ってみれば、何やら将臣と廉は顔を見合わせた後、「すまん」と告げてから俺から距離を置いてから何やら小声でコソコソと話している。

「真面目に答えるなよ？ 答えたら理詰めで余計告白しなくなるだけだぞ」

「んなこたあ俺もわかってるつーの。てかどう見ても両想いなんだから勇気を出しや全部解決じゃねえか」

「それが異性として見てないだろうからってよ」

「ええ……マジかよ。馨お前本当にお前って感じだわ……」

「……正直両方とも面倒くさいと思う」

「ああ。俺も小春からたまに二人が田心屋でイチャついてるのは聞いてる。で、その片割れの馨がこれなら、常陸さんも多分拗らせてる可能性高いぞ」

「こっちは弟分ではないからダメだと思ってる、向こうは姉貴分ではないからダメだと思ってるってパターンだな。死ぬほど面倒くさい」

「真面目に夜這いしろって言うか？」

「なんかそれが手取り早い気がする」

「……マジな話どうするよ？」

「俺たちじゃ非力すぎる。いくらなんでもなあ……」

……長いな。

ちやんと答えてくれるかね。奴ならばと思つたが……いや頼むぞ親友。

「とりあえずなんて言う」

「理屈じゃねーとしか言えねえだろ。変に説明するとあいつもと拗らせる」

「頼むぞ廉太郎」

「これももう当人たち次第だけだなア……」

大分長い作戦会議が終わつたらしいのだが、それにしたつて物凄く微妙そうな顔をしている将臣と廉が近づいてくる。

「なんだその顔は」

なんか割と癩に触つたのでとりあえずジャブを試してみると。

「自分の胸に聞け」

「右に同じく」

フツツに殴り返された。

……俺の所為かよ。まあいい。

「んで答えは」

「理屈じゃねーから衝動に従え。以上」

「使えねえな親友」

「ポンコツなのはテメエだよ親友」

ポンコツかよ、お前だつて芦花さんに恋をしたら同じように悩むだろうに……

と、その時である。

「はて？ 何故ここに子犬がいるのであります？」

——気の抜けたレナの声。

子犬というワード。

ギギギと首を動かしてみると。

茉莉が、また子犬になつた。

——すまん端末よ。服が落ちるということは我が服を回収したら出られなくなつた。ついでに報告が遅れた——

「ぶ——ッ!？」

「な——ッ!?!」

将臣が吹き出して、俺が愕然とする。

——ラグは無し。早い、早すぎる。瞬間と瞬間の隙間とでも言うべきだろうか。速度とかそういう域のレベルではない。

しかも光るわけでもない。

つまりなんだ、絶対的に感知不能と。

これは紛れもなく、神の不条理に他ならない。

……変な感じだけだね。

「わふう……」

いやわふうじゃないよ俺を見るなよ……

レナに抱えられ、そのたわわな果実を横顔に受けながら子犬菜子が俺を見つめている。

……え? マジ? 俺?

なんか芳乃ちゃんからも無言の威圧を感じるし、将臣なんて「はよ行け」みたいな感じだし、なんか虚絶に至ってはさっきから「役得しろ」とか宣ってくるんだけど、マジで俺がやんの?

「あれまホントだ。ていいうかなんで子犬? レナちゃん知ってる?」

「全然知らないであります。でもなんだか何処かで会ったような……?」

「それにしても、常陸さんどこ行っただら? 急に居なくなっただかあったのかなあ」

もう隠しようがねーじゃねーか!?

柳生がキョロキョロと見渡すと同時に芳乃ちゃんが青ざめていき、いや待って!?! 君さっきは俺に任せたみたいな雰囲気出してたよね

!?! レナは関係者だからいいかと思ってたの!?!

——何を躊躇っている。助けてやれ——

……どう、やって?

しっ、自然な展開が思い浮かばないんだけど……

——動け——

いや、その……

——何度も言わせるな動け!——

虚絶の叱責と同時にウルウルと泣きそうになりながらレナの腕の中で腕をテシテシと動かして視線を送ってくる茉莉。

ただ事情を知らなければ可愛い仕草にしか映らるので。

「おー可愛い子可愛い子……よーしよし」

あ、小野が撫でくり回してる。

——早く行け！ 貴様、いつまで馬鹿をやっている！——
再びの叱責。

ついでに将臣からも「はよ行け」的な視線が強くなっている。芳乃ちゃんは……アワアワし始めたからダメだなこりや……

——やる気があるのか？ はっ、そんなザマでは何処とも知れぬ馬の骨に取られても知らんぞ——

別に俺のというわけでもないだろ！ なんだその……そんな言い方は!?! むしろ芳乃ちゃんのだっつーの!!

——ああもう……!! そこまで似ることないじゃない!?——
……は？

思考が別の意味で停止する。

虚絶なのだが、そう、虚絶なのだが……普段の奴は超常的な言葉遣いと抑揚をするのに、なんでかこの一瞬はとても人間のように、何処にでもいそうな感じで、普通に声を荒げていた。

……猫被つてたのか？ こいつも。

——好きな女の子のピンチでしょ！ 男の子ならカツコつけなさい！——

あつ、うん……うん。

なんか気圧されて、間抜けな返事と共に俺は動き出す。

「あー……レナ？ それね、俺の知り合い。のでプリーズ。すぐ戻してくるよ」

「カオル、とても目が泳いでますが……」

「うーん？ アイがスイミング？ オーケーオーケー。藪からステイックな言い草で確かに疑問だよなア、うん」

動揺しながらの発言故に、あまりにも珍妙で素っ頓狂な物言いとなってしまう。

「カオル？ 大丈夫でありますか？ わたしの目を見て……ほら」
しかしレナは俺が何故そんな風になっているのかがわからないので、頬に手を当てて目と目を合わせてくる。

「――」
思わず。

比喻でもなんでもないが。

俺は、彼女に魅了された。

何故かなと言わなくていいだろう。

ジツと俺を見つめてくる、その澄んだ青空のような瞳に吸い込まれた。

それだけだ。

それだけの理由だ。

それだけの重大な理由だ。

何度も見たし、もっと間近で見たことだってあるのに。

――青空のようだとも。

――あるいは、宝石のようだとも。

”俺以外の何か”が、俺の中で蠢いていたような……ツッ!

「痛っ!?! なんだよ!?!」

痛みを感じて手元を見れば、近づかれて腕を前に出してたのを莱子に噛まれたらしい。なんだよ急に。

「おろろ？ 噛むのでありますか」

「あー、気にしないで。俺には当たりが強いだけだから。渡してくれるか？ 知り合いのところに預けてくる」

心配そうなレナにとりあえず渡すように言う。時間もギリギリで、もうすぐ授業も始まってしまいが、ちよつと場所を変えて戻すだけだ。大して時間もかかるまい。

学院自体は端の方にある上、物陰も多く、誰に見られる可能性も限りなく少ない。ある意味では好都合だが好都合ではないとも言えるのだが……ま、最悪見られたら俺が仕事をすれば良い、それだけのことだ。

「……まあ、カオルがそう言うのなら」

ただ奇怪な反応だったのも事実。

動揺が表に出ていたのか、レナからの視線には疑惑がありありと見えている。

なんとも言えない雰囲気醸し出しながらも、まあ……と言った感じで茉莉を差し出してくる。

「ありがと」

受け取ると、パタパタと尻尾を振りながらテシテシと前足で叩いてくる。

「はいはい、散歩ね」

適当に言いつつ、教室を出て行く。

教師への言い訳？ まあなんかテキトーにだ。

他の奴らが何言ったって構わんがね。

フラリと外に出て、一番人目に付きづらい所の物陰へと向かう。

ただ流石に裸足で地面には立てさせないために、床のある所になったから結構微妙な感じだが……気にしても仕方ない。

さっさとお湯をかけてやって、例の光が見えたらそっぽを向いておく。

「なに見惚れてたの」

多分素っ裸なのにいきなりこれを言ってくる辺りこいつ元気だなア……

「噛むほどのことかよ」

「前に言わなかった？ ワタシだって妬くんだよ」

「そーかい」

その妬くは、きつと姉として……なんだろうが。

空回り？ いや、独り相撲か。

そんな虚しいことがしたいわけでもないのに。

勇気も無い、何も無い。

俺は彼女との関係性が壊れることに怯えている。

「虚絶」

「わかっておる」

さっさと呼び出して服を渡させる。

俺は目撃者がいないかを見るのと同じでのガードか。

しばらく布がゴソゴソする音を背後で聞きつつ、しかし決して振り向かないようにしていると――

「端末よ、何故貴様は戻らんのだ？」

急に、そんなことを聞かれた。

「いや誰かいないと面倒だろ」

「……貴様忘れてないか？ 我の姿なぞいくらでもある。故にどうとでもなるとは貴様が言ったこと。もう一度聞くぞ？ 何故貴様はここにいる？ そして常陸菜子よ。何故端末に帰れと言わなんだ？」

「あー……」

「……あつ」

……えーつと、なんでだろ？

二人してウンウンと唸っていると、呆れ返った声と共に一つ。

「要は貴様ら、二人だけの時間が欲しいのであろうよ。誰にも邪魔されず、自分だけが隣にいる……という時間がな」

「んなわけあるかア！」

「違いますッ！」

反射的に振り向いて反論するが、虚絶の姿は無い。いつの間にか戻っていたようだ。

と、なれば当然眼前に広がるのは――

「……」

「……………」

制服を着かけの菜子。

なんか……半脱ぎみたいでとてもその……淡い水色の下着も見えて……

思考が止まる、ぐちゃぐちゃになる。どうしようもない程に動揺して何も言えない。振り向こうにも振り向けない。

「あ……あー、えつと……あの、あのだな菜子……？」

「えっ、あつ、はい……っ？」

だからなんとか、無理に言葉を捻り出そうとして……

「……下着、似合ってる」

いや何を言っているんだ俺はと。

「あつ、いや悪いい！ 忘れてくれ！」

口に出した後にやっと、ハツとして後ろを向くことができた俺は、間違いなく愚かな男だ。

気持ち悪いとかもうそういう次元を通り越して最低である。真剣に死にたくなってくる。ていうか死ねよ俺。

最近最低なことばかりだぞ。

こんなの合わせる顔が無い。

つかなんだよ下着似合ってるって。

せめてさ、エロいよなお前つてくらいにしろよ。まだそっちの方がマシだぞ。気持ち悪いぞ俺よ。

「急にそんなこと言って恥ずかしがってどうしたの？」

後ろから呆れた彼女の声が聞こえてくるけど、なんか納得行かねー。普通は女の子がキャーみたいな場面なのになんで俺が……

「どうしたもこうもねーよ」

「裸見てるのに」

「言われてみりやそうだけどき、ほら」

「気を遣ってくれてるんだ」

「いくら仲良くても女の子だろ」

そう言うと、何故か茉莉子が黙った。

というか完全に停止している。何も聞こえない。

「どっ、どうした？ なんかあったか？」

「……」

「茉莉子？」

声をかけても無言のまま。

なんだか非常に怖くなっている。女の子と言われるのには慣れてなかったのか？ 可愛いとかは言われ慣れてないとか言ってたけど、そんなこと一言も……

あつ、俺の所為で変に意識させてしまった感じだなこれは。だってこいつは恋をしなきゃ——

「——ワタシが、”女の子”……って言ったんだよね？」

突然聞こえた、その含みを持った言葉。

「へ？」

「女の子」って見てるんだ」

「だってそりやお前女の子じゃん。生物学的に」

何を当然なことを、どうしてそんなに年を押しように聞くのだろうか。

自分が女の子って自覚があんまり無いのかこいつ。そんな訳ないと思うのだが。

「そつか……そうだよ」

「逆になんだと思ったんだ」

「なんだと思う？」

「そういうのやめない？」

「やだ。やめない」

本当にどうしたんだろうか。

なんていうか、茉莉らしくない。

などと思っていたら、パキリと何かを踏む音。

俺たち以外の誰か——間違いない。

「誰ですか!？」

先に反応したのは茉莉。

その声に応えるように姿を現したのは……

「レ……レナ？ どうしたお前」

さつき別れたばかりのレナ。

てことはこいつ、授業抜け出して——

「また、何かあったのかと思って付いて来たのですが……」

どうやら心配だったから付いて来た程度の話らしい。とりあえず安心。

と、ここでレナの視線が奥の茉莉に向いていることに気がつく。しかも茉莉もレナの方を向いているのでモロバレだ。

半脱ぎみみたいな姿の茉莉がな。

あつと気が付いてももう遅い。

一瞬にも満たない時間の間にレナの顔が真っ赤に染まり上がる。

「は、は……ハレンチにや!？」

「違いますから落ち着いてください!？」

「マジで違うんだけど!？」

「だってカオルとマコは……どう見てもアレであります!？」

「アレってなんですか!？」

「てかお前マジでさっさと服着ろよ!？」

「ふふふ服ウツ!? ファツ禁です! なんというファツ禁! カオ

ルもマコも外でプレイするヘンタイなのですか!？」

「なんでそうなるかなアツ!？」

「ワタシ見られる趣味なんかないもん!？」

収集がつかなくなってきた。

とか頭で考えているが俺自身色々誤解されて気が気でない。冷静じゃない。

……好きな女の子といかがわしいことしてたと思われたら……ねえ？

「そういうその……やらしい話じゃなくてな? 色々あつて茉子が犬になつちやつたりしたんだよ」

もうどうにでもなれの精神で明かしてみると――

「マコが……メス犬に?」

素晴らしくトンチンカンな発言をした後、「メス犬……メス猫……受け攻め……ふしゅうく……」などとうわ言を言ってから煙を出して倒れ込んだ。

目を回している辺り、本気で気絶しているらしい。

「……ええ……」

どうしよう……

「これ、レナさんに事情説明しないとですな」

「その前にテメエいい加減に服着ろよ!！」

風邪引くぞ茉子。

吐露

所変わって志那都荘。

「それは大変でしたね」

「わかってもらえて何よりです……」

結局あの後、俺と茉子は適当な理由をでっち上げて早退。ついでに気絶したレナも早退させて事情を説明した。

「けど、アブノーマルなプレイに興じていたというわけではなくてよかったです。ヘンタイになってしまったのかと思ってしまいました」
……なんでそういう方向行くかなって。

が、しかしだ。レナの言うことは何も間違いではない。どう考えてもそつちに転ぶのは致し方ない——とでも言ったところか。普通であれば。

ただ彼女はこちら側であるからこそ、また妙な事に巻き込まれたかくらいで済むと思っただが気絶する程とはこれいかに？ というかそんなにエロ耐性無いかね君……？

ちよつと純情が過ぎるのではないかとも思いつつ、とりあえず話が通って何よりだと一安心。茉子迫真の説得もあつてすんなり受け入れられた。

「……しかし、恋を知りたい神様ですか。なんとも色々考えさせる話でありますね。タタミ神となる前に何か、恋に関係することでもあつたのでしょうか」

不思議そうなレナの発言。

言われてみれば確かに不思議である。

あの犬神は、レナを見て姉君と言っていた。横恋慕とはまた違った話だろうが、その姉君の恋の行方が、犬神にとって何か遺恨となるようなものであつたのだろうか。

神々の恋というのは、得てしてロクでもないものだが……さてこの地の神様は何をどうして恋を知りたいと思うようになったのだろうかね。

少しの沈黙の後、レナは俺たちに対してとんでもない事を言ってきた。

た。

「カオル、マコ。二人でデートをしてみてもどうでしょう。普段から仲の良い二人なら、普段してないことをすれば恋人っぽく見えたりして、それが解決に繋がるんじゃないかなと思うてあります」

「恋人のフリ……ですか」

茉莉と俺がデート。

……いやこれ逆に難しくね？ どうするんだよ。奴ら曰く「側から見れば恋人のやりとり」とか言われてるんだぞ？ どないせいっちゃうんじゃないや。

うむむと俺が唸っていると、慌てたようにレナは補足を挟む。

「あつ、いえ。別に無理にする話ではないと思いますので、これは一つの方法として考えておけば良いかと。わたしも正直、なんと言ったらいいのやら……といった感じなので」

レナ自身もその場しのぎでしかないことを自覚しているのか、やや険しい顔をしていた。

そして、レナはどういうわけか――

「カオル、申し訳ないですけど席を外してもらえますか」

なんて言った。

ま、女同士色々あるんだろうさ。

「ん？ ああ、そういうね。了解」

特に抵抗する理由も無く、俺は部屋の外で待機することにした。もちろん聞こえないようにやや離れたところに移動している。

――でえとなるものか。よかつたな――

そしていきなりこのザマである。

うるせえなクソツタレ。余計惨めになるだけだろうが。

――……はあ――

てかお前もお前だよ。

何猫被ってたんだか。俺相手に被ったところで意味なんてねえだろう。

――あのね馨。あれは猫被りじゃないの――
うおつ、いきなり変わるな気色悪い。

——そもそも、私は虚絶じゃないから——
は？ と。

その発言に首を傾げていると、暗闇の中から現れたのは……いつぞや夢で見た和装の女。長い黒髪と相まって、大和撫子というものを具現化したようなものだ。

何処と無く見覚えのある顔立ちは、何故か忌避感を与えてくるが、その理由は全くわからない。

「こうして顔を合わせるのは初めてだね、子孫殿」

そいつは心底呆れ返ったジト目を俺に向けながら——

「改めて。私は伊奈神京香——遙か過去の亡霊、そして殺し殺されの輪廻を描き出した張本人。あなたの憎むべき存在の一人だよ」

とても優雅に、見る者を魅了するような美しい一礼と共に……自らを伊奈神京香と……そう名乗った。

始まりとなった復讐鬼の女。

この地の稲上の呪わしき因果を紡いだ女。

強いて憎むとすれば、この女が俺の憎悪の矛先ともなるが……

「あつそ」

そんなことはどうでもいい。

問題は——

「で？ あんたは出てくる理由が無いよな。魔物を憎み殺し続けるだけなら虚絶の方が都合いい筈だが」

「あら、所々で出てたつもりなんだけど虚絶の愉快な点だと思われてたのかしら」

「てつきりもう残滓くらいしか残ってねえと思ってたよ」

「残念ながら意志力……ううん、気合と根性で魂を現世に縛り付けるくらいは余裕余裕」

「化け物め」

「笑えない冗談だなあ」

ケラケラと笑う、この化け物の目的だ。

「はっ、数千年前も憎しみを滾らせ続けて殺せ殺せと嘯く女を化け物以外の何者と言えばいいんだよ」

「元が大き過ぎたってことか……なるほど」

「説明しろよご先祖様」

「後でね子孫殿」

はぐらかされるのも想定内だ。

まあここで誰かに聞かれても面倒なだけだし、ここはご先祖様に乗ってやるとするか。

腕を組んで壁に寄りかかると、そこのご先祖様は顔を覗き込んでくる。ムカつくので顔を逸らすと、また覗き込まれる。イタチごっこをするつもりは無いので仕方なく向き合って文句をつけてやる。

「やめろ」

「ほんとそういうところそつくり」

「……似てんの？ あんたと俺が？」

直系の子孫とは言えない関係なんだが、何故似ているのだろうか。先祖返りの所為か？ いやでも……と、頭を悩ませていると、ご先祖様はシンプルに切り込んできた。

「好きな相手に素直になれないところとか。実際さ、大好きなんですよ。あの女の子のこと。夜這いかけたら？」

「んなはしたない真似出来るか。それこそ裏切りだ」

「どうかなあ。あの子、多分ムツツリスケベだし」

「関係あんのそれ」

てかえらく現代語に慣れているなあ。

「そりゃキミから色々吸って学習してるし。ああ、いつそ古文の授業にしてあげた方がよかった？」

「勘弁してくれ。それとナチュラルに頭読むな」

「ごめんごめん。年頃の男の子だし色々と桃色な妄想もするよね」

「……そんなこと……」

「ちなみに私は好きな男をネタに——」わー！ わー！ うるせえやめろや！ 誰がご先祖様の性事情聞かせろって頼んだよ!?!……今の入ってのはだいたい純情だねエ。別にそういう意味でもないのに」

んな大昔のジョークを言われても……とか思いながらため息を吐く。化け物とは言ったが、人の視点に立ては俺も化け物だ。そう警戒

することもないのかもな……

「……あっ」

しかし急にとても間抜けな声を出すご先祖様。はてどうしたのやらと顔を上げると、とても間抜けな横顔を見せている。

「おいおいなんだその間抜け面は……って、あ」

そしてその間抜けを笑いながら、俺もまた間抜けな声を出して、間抜けな表情をする。

—— 菜子とレナが、それはもうすごい表情で俺たちを見ていた。呆れ、怒り、悲しみとかとかか……まあ色々なものを乗せた視線をジツと向けている。勘弁してくれ。

レナはともかく、菜子に至ってはなんか殺意みたいなものまで出してるぞオイ。

「誰ですかその女」

絶対零度の声と視線がご先祖様に叩きつけられる。

「絶対今アマって思ったよこの子!? びっくりだわ。えっ、ちよつと待って、いい子やなあとか思ってたんだけどいきなりぶぶ漬け食らわしてくるって……」

しかしご先祖様、これをスルリと回避する。ワチャワチャと表情が変化して、何処と無く言い回しがどつかの誰かそっくりだからとても気になる。

「馨くんから離れて下さい」

そんなヘラヘラしたご先祖様に痺れを切らしたのか、だいぶ敵意を持って菜子が言い放った。こんなにつんケンしたコイツを見るのは久しぶりだが……なんだ、どうしたんだ？

だご先祖様は余裕綽々といった表情で実に楽しそうに笑いながら。

「わーおこれってジエラシーってヤツ？ あは、実物をもっと可愛いや。キミもそう思うよね？ レナちゃん」

菜子を可愛いと評価してからレナにキラーパスをした。もちろんレナは想定外なので——

「ひよわっ!?! 急にわたしに振られても!?!」

……可愛い。

「んー、まアこんなもんかな。また後でね馨。私帰るから。あとレナちゃん。ちよつとキミね、やらしいの直結思考はどうかと思う。気をつけるんだぞ、お姉さん心配だからな」

と、ご先祖様は言い放ち、ドロリと影に溶けて消えた。

その様子を見て、茉莉は何かを納得したような表情を浮かべたが、しかし一瞬で不機嫌な表情になってツカツカと近寄ってくる。

「な、なんだよう」

「変な香水とか付けられてない？」

「いや全然」

「……」

ズイ、と顔を寄せてスンスンと匂いまで嗅がれてしまう。小声で「あは、馨くんの匂いだ……」とか言ってるの聞こえてるぞお前。

——ひゅー、愛されてるねえ？——

やかましい！

——もういつそ告白しちやえよオ——

出来ないんだよ俺は！

彼女が俺を異性としては見れないだろうし、そもそも俺は魔人だし

……不幸にするし……

そう返したところで。

——ふーん……魔人ねエ？——

さつきまでの浮ついた声が鳴りを潜め、冷たく恐怖すら覚えるような、嘲りの声が響いた。

呆れ返るようなため息の後に京香は——

——大きく出たな小僧。殺人技巧に振り回されて、殺しと戦いの区別すら付かぬ愚者が。魔人を名乗るなよ貴様。雑兵狩りで驕ったつもりか——

元来の彼女の口調と共に、稲上馨の異常性を斬って捨てた。

唾然とするしかない。復讐鬼であったことは知っていたが、まるでそれは初めから戦いに生きた者の発言そのものだった。

自己否定はまあいい。というか、実際魔人としては底辺だろう。

力だけで見れば。

だが存在としてはほぼ同じの筈だ。人並み外れた性能を持ちながら、それを十全に使えば人なぞ塵芥のように潰せてしまう俺たちは紛れもなく魔人だ。

だというのに……魔人を名乗るなど言い切った。その心中がわからない。

——つーかさア？ キミ馬鹿だよ。人を不幸にする？ だから何よ。どうせ生きている限り迷惑かけるしかないし、別にいいじゃん

でも、俺は……

——なるほどね、キミは刀の怨念に突き動かされてきたのか。だからそういうネガティブな発想に繋がると。よし来た、ここはご先祖様に一つ任してみなさい——

どうするつもりだ？

——まあお楽しみ。虚絶の話の後にも——

「……もしかして、キョーカなのですか？ あの人は」

「まあ……君のよく知るキョーカの中身というか、複雑な話らしい」

レナの疑問にサツと答えつつ、余計なことしかしねえなフアックご先祖様と内心毒を吐く。芳乃ちゃんも茉莉もご先祖様には色々複雑な感情を抱いているであろう……とは予想していたが、まさか俺が極めて複雑な感情を抱くことになろうとは。

「んで、話は終わったの？」

「ええ。別に大した話ではないので」

「でもこれは乙女の秘密なのでカオルは聞かないで上げて欲しいのであります」

「へいへい。そこまで無粋じゃないよ」

話を戻せば乙女の秘密。

なら首を突っ込む話でもあるまいて。

「じゃあ、いつまでも世話になるわけもいかんし、俺たちはここらで帰るか？」

「そうですね。確かにお邪魔でしょうし、帰らないと。またなっても

困るだけだから」

まあ事情説明くらいしかするつもりもなかったし、乙女の秘密とやらが予想以上に長引いた感じだしな。

茉莉もさつきと帰ることに異議はないようだ。こいつだって迷惑になるのは嫌いだろう。

ただ……

「そうですね」

少し寂しげなレナを見ると、罪悪感というか……悪いことをしたなあという気分になってしまう。

考えてみれば彼女、気付けば渦中にいるのに、必ずと言っていい程に知らなくていいんだと言われる側なんだよな。

……知る側も知らない側も辛い、か。

世の中つてのは不公平に出来てる。

悲しい程に――

なんとかかしてやりたい。なんとかかしてやりたいが……正直、あんなに人の良い彼女にこんな血と憎悪に塗れた話を振りたくもないし、関わって欲しくもない。彼女はここに来るべきじゃない。

「レナ、その……あんまり教えられなくてごめん」

「? 何故そのようなことを? 別に私は、なんだか悪いことをしてるみたいで少し童心が踊ってたり、このまま甘いものでも食べに行きたかったなあと思ってるだけではありませんが……」

……はい?

あつさりとそう返されて俺は啞然とする。横で茉莉はクスクスと笑った後に、困惑する俺に捕捉を入れる。

「ほら、レナさんはこういうこと馴染み無いですから、結構ワクワクしてたりするってさつき言ってたんですよ」

「……つまりなに? 俺の勘違い?」

「で、ありますね」

「ですね」

「はっず……」

赤っ恥かいたよう。

顔の熱を自覚して頭を抱えると、それを見た茉莉は腹を抱えて本気で笑い、レナはオロオロしながらも小さく笑っていたのだったとき。

「カオルは可愛いですねえ」

「やめてよお!？」

そんなどつかの黎明みたいな言い方されると余計に恥ずかしいよレナアアア——ツ!!

■

「あー、恥かいた」

「あは。真っ赤になってたの可愛かったよ」

「うるせー」

帰り道。

馨の隣を歩くことの嬉しさと楽しさに密かに心を躍らせながら、茉莉はレナとのやりとりを思い返していた。

——馨が出て行った直後。

レナは真剣な表情に切り替えて、茉莉を見つめた。

その視線は気を抜けば飲み込まれるほどの威圧を持った力強いもので、相対する彼女もまた姿勢を正して言葉を待つ。

「マコ」

「なんででしょう」

「カオルのこと、好きですね」

「.....」

単刀直入に言われた本題に、茉莉はシンプルに沈黙した。実にたっぷり1分以上の沈黙である。

「何故.....それを?」

動揺という動揺を隠せず無様を晒しながら、これまた沈黙と共に無理なポーカーフフェイスで問う。

しかし帰ってきた答えは——

「隠すならもう少し上手く隠さないよ。マサオミとカオルを同じように扱っていると自分では思っているのではありませんが、あまりにもロコ、ロコ.....コロモ、じゃない。ロコツ? という奴ですよ」

ああ無情かな。

診療所での公開処刑を超える切開であった。更なる動揺が茉莉を駆け巡る。多分彼女はボロボロだろう。もはやポーカーフェイスは崩れ去り、等身大の常陸茉莉が現れている。

それほどまでに焦り、そして動揺した顔だ。

「そんなにですか……!?!」

「そんなにであります。多分クラスのみんなも察してると思いますがよ」

「え、マジですか。ワタシ忍者なのに……」

「ニンジャでも無理なものは無理と、古事記にも書いてあるのですからマコも諦めては?」

なんだか間違った日本史をぶつけられながら、茉莉は深い諦めのため息を吐く。

(……ワタシ、そんなにわかりやすいかな……)

そこまでわかりやすかったかと思いついてみるが、茉莉としては『いつも通り』をしているだけに過ぎない。例えそれがどつからどう見ても好きだということがモロバレなものであったとしても、彼女にとっては隠し切れているものなのだ。

(馨くんには、バレて……ないよね? ——怖いよ……ワタシとあなた

たの関係が壊れるの、怖くて……)

ただ、もしそれがバレていて、気を遣われていたとしたら……やっぱり、怖い。もしも想いを告げてしまったら……と思うと怖くてたまらなくなる。

そんな様子を察したのか、レナは安心させるように言った。

「カオルはニブチンだから、気付いていないので安心してください」

「ホント、ですか?」

「はい、ホントです。こういうことでウソは言えませんので」

「……よかったあ……」

心底ホッとした様子の茉莉を見ながら、レナは内心馨がそんなに敏感な男ならこんな面倒な事になってないなと感じた。

……いや、馨が敏感で積極的な男でも茉莉が面倒くさいので大して

変わってないかもしれない。

脳内を駆け巡る雑念を振り払い、レナは茉子の言葉を待つ。

しばらくして彼女は。

「ま、そうですね。ワタシは確かに馨くんのが好きです。愛していますよ」

己の内面を隠す事なく、素面でこう告げた。

「そこまではつきりと言えるならなんで……」

「だからこそ、なんですよレナさん。ワタシと馨くんの関係性は兄と妹、姉と弟の表裏一体……必要に応じて互いの立場を変えて甘え合う。それが延々と続いてしまったから、ワタシは彼に想いを伝えられない」

その言葉にはなるほどと、レナは頷いた。

が。直後である。

「馨くんは兄としてワタシの弱いところを受け入れて、甘えさせてくれた。弟としてワタシに弱いところを見せて、甘えてくれた。先に来るものは、家族愛なんです」

……はて？ と。耳を疑うような発言が飛び出てきた。

(いや全然ハト外れですよマコ……)

「ワタシを姉か妹として見ている。異性として見ることは無いし、ワタシだけが彼を異性として見ている。無理に想いを告げて苦しめたくないし、拒んだ後悔をさせたくない」

悲しげに語る茉子の言葉を聞いて、レナはふと疑問を覚える。

馨が茉子を特別扱いしている、そして茉子も馨を特別扱いしている。馨も茉子も想い合っているというのに、かつての関係性から異性として見るにはあまりにも難しいと思ひ込んでいる。実に面倒な……だが二人の極めて複雑な事情を考えれば、その面倒くさい部分を切り捨てられない。

(言ったらこれ絶対に否定される流れですね。うーむ、わたしでは難しい問題です)

そしてかなりの頑固者である二人に、想い合っているのだと伝えるも否定されるのが関の山だ。

二人のうちどちらかが、想いを伝えねば二人は決して結ばれない。伝えてしまえば転がり落ちるように結ばれる……そういう確信がレナにはあった。

（これは……どうしたものでしょうか？ デートで意識が変わると良いのですが）

……まあ、その第一歩にして最終段階が難しすぎるのだが。

妬心を煽ったとしても、彼らは妬心の上手なやり過ぎ方を知っている。まずそういう方法は難しいだろう。

（マサオミとヨシノみたいに、どつちかのエンジンがかかりやすければ良いのですが、これでは厳しい……どちらも奥手すぎるのです。いつそエロ同人みたいな展開でも起きたら……あっ、起きてアレでしたね……）

なんかもう泣きそうになった。

超奥手、かつ相手を思いやるからこそ身を引き合う男女なんて相手にしたくない。裸を見たりしてまんざらでもなさそうなのに「いやそんな事は……」は無理があるでしょと。

が、しかし。

両方とも可愛らしくて仕方ないのだ。

「レナさん？」

「はっ、失礼しました。とにかくマコはもつとアピールしてみるのですよ」

「アピール……」

と、ナニを想像したのやら、茉莉は頬を赤らめて俯く。そんな様子に愛らしさを覚えてついつい抱き締めたくなったが、そこはレナ・リヒテナウアー。見事に耐えてみせた。

……が、顔がニヤケているのはご愛嬌か。

「……アピール……裸見たっていいって言ったのに、手も出してくれない馨くんへのアピール……」

ただ茉莉からしてみれば、裸見ても馨の馨くんが馨さんになった程度くらいしか反応してくれないような相手に、どうやってアピールしたのか……というところだ。

そもそもそういうこととして鬱陶しく思われないだろうか？ また変な誤解されないだろうか？ 色々と不安がある。

「マ、マコ？ どうしたのですか？」

「でも鼻の下伸ばしてくれたし……きつと魅力が無いってことじゃないと思うけど……」

「何もその……そういうアピールではないのですが……」

「だってレナさん、馨くんですよ？ 人のおっぱい触っておいてうるせえ出てけとか言う馨くんですよ？」

「それはきつとテンパってただけでありますよ」

「それにしたってワタシに黙ってナンパしてたりとかするし、きつと……ワタシより素敵な人見つけてるだろうし……ワタシはあくまで初恋っぽいし……」

拗ねた顔をしながらそんな事を言われてしまえば、「どう考えても初恋どころか現在進行形で恋してるのでありますよ」と言いたくなかったがここはグツと堪えた。

「何が笑顔の素敵な女の子なの……忘れてたクセに……」

「と、とにかくマコ！ 普通にそれとなく好きだというのをアピールしましょう！ 例えば恋人繋ぎしてみたりとか、そういう感じで！」

——このままでは危険だ。惚気られる。

眼前の危険を前に、レナは回避行動を取った。……正直、興味は尽きないところではあるが。

ただ唯一、気になったことがあるとすれば。

「……マコはカオルのどんなところを好きになったのですか？」

「へ？ そうですね……どんなところと言えるほど具体的ではないのですが」

「——カッコいいところも悪いところも、バカなところもダメなところも、全部含めてどうしようもなく——」

「愚かしいほどに大好きなんです。正直、殺されたっていいくらいに子供の頃から、ずっと」

ああ、これは最強だと。

理由がどうでもいいくらいに愛しているのだと。

聞いたこつちが後悔するほどに、レナは砂糖を食わされた。
そして双方共に死ぬほど面倒くさい事実には、自分が人を好きになつたらこうはならないようにしようと、固く誓うのであった……

伊奈神京香

「……」

「……」

そんなこんなで、帰ってきたはいいのだが……俺たちは特に喋ってもいなかった。

「やはり戻ってきておったか。何かあったの……なんじゃお主ら？ そんなに黙って」

もちろんこんな様子ではムラサメ様とてびっくりする。呆れたというか、珍妙なものを見る顔が可愛い。

——ちよつと浮気者じゃないの馨——

うっせー、可愛いもんは可愛いんじゃない。

てか随分気軽に出てくるよなアンタ。なんだよ、今更になって。とりあえず目的だけ話せ。どうせ報告くらいしかやることないんだからさ。

——ま、一言で言えば私が出てくる理由が生まれたから……かな——

ヘラヘラした声が鳴りを潜め、落ち着いたトーンで話されたその目的は、納得が行くが極めて不穏な、そして不透明なものだった。

……出てくる理由。

魔物を殺せと暴れ始めるほどの憎悪を持った復讐鬼が出てくるだけの理由。

復讐者が出てくる理由なんて、復讐対象がいるくらいしか思い浮かばない。だが俺はこのご先祖様についても、虚絶についても、そしてかつての伊奈神がなんであったのかも知らない。

俺が知っているのは、俺のやるべきことくらいだった。

——その線はあながち間違いじゃない。でも……キミが知る必要は無い。これは私と奴の話だ。死んでも因果な鎖で結ばれた、ね——
教えるつもりは無いと容赦無く打ち捨てられる。だがここまで関わっておいて、それはないだろう。どうせ俺の身体を使うんだから、関係無いってのは筋が通らない。

——いいやダメだ。これは私の話だ、唯一の願いだ。奴が出たのなら私が殺す。私がそう決めた。ならばそれを貫き通す、死してなおも。それが出来なければ私がここに存在する意味など無い——

その言葉を聞いて、ああ——と。

ようやく、この女に俺が似ているという事実を受け入れられた。

”これは俺だ”。間違いなく”俺”なんだ。これと決めたことを成し遂げられないなら生きている価値も無い。本当にそれはよくわかる。

……なら、無料という奴か。

——ただ……アレがもし本当にアレのままなら、必ずキミのところにもやってくる——

……何故俺に？

いや、こいつの復讐対象は破綻者と聞いた。ならば無差別というわけか。でもご先祖様がやると言うんだ、なら任せる方が筋が通ってるってもんだらう。

——あんまり面白くもないし、できることなら話したくないから、黙らせて。でも気にしないで。アレが本当に来たら、今度こそ私が殺す——

その声は極大の憎悪を纏い、闇より暗い奈落の奥底より、天に轟く恨みの叫び。

数千年にも渡って研ぎ澄まされた、復讐の刃にも等しい。この女は、確かに人ではあるが、同時に復讐の魔人でもあるのだ。死してなおも、その憎悪と絶望から解放されることなく。

なるほど、全て終わったら解放してくれと言うわけだ……

「……馨？ どうした、黙り込んで。茉莉が色々と報告してくれているというに。さてはお主……エロい妄想をしてたんじゃろ？」

その声にハツとする。

どうやら二人は話を始めていたらしい。俺はというと中に潜むご先祖様との会話に夢中になっていたから、外からはブーツとしているように見えたようだ。

……とはいえ、ムラサメ様。すぐにエロい妄想と揶揄うのはやめて

いただけないだろうか。小悪魔的表情がよくお似合いなので非常にその……良い。

「ニヤニヤしながら言われても困るよムラサメ様。あと違うから。俺将臣と違ってそんなにエロくねーもん」

「ではズバリ、茉莉の裸は」

「とつてもエッチでした」

「かーおーるーくーんー?」

「ごめん」

「よろしい」

なんか漫才みたいだな。実際、漫才みたいな感じで茉莉は満足気な顔してるし、ムラサメ様はウンウンと頷いている。

……まあ、気を取り直すにはいい機会だったか。

「しかしどうした、そこまで眉間に皺を寄せて。何かあったのか?」

「まあ、多少は」

「あの女、ですね」

「のう、茉莉よ。お主何があつた」

あまりの茉莉の変貌ぶりにムラサメ様、怪訝な顔をしながら俺に意味深な視線を向ける。いや、俺の所為じゃないから……

「俺なんもしてないよ?」

「ま、そうじゃろな。そうなら下手くそな言い訳が飛んでくる」

「ひつでえ。……まあいいや。顔を出させる」

「はいはい。呼ばれて飛び出て即参上。伊奈神京香お姉さんです」

刹那、この女は闇の中から現れた。

同時に……白けた。

いや、冗談でも比喻でもなく。ムラサメ様も茉莉も白い目でこのクソご先祖様を見ている。

もちろんクソご先祖様、真顔でこんなこと言ったからな。

そしてご先祖様はそんな俺たちを見て一言。

「なんだよう、私の話したんだし、聞きたいことがあつたんだろ? だーから出てきてやったつてのにそりゃねーだろお嬢ちゃんたち」

バリバリの文句であった。

呆れたため息を吐きながら、この場を仕方なく円滑に回してやろうと、渋々声をかける。

「えー、この人、どうも虚絶とはまた別な存在らしいです」

「端的に言えば私は亡霊。キミたちのよく知る虚絶は刀そのものの意志。以上」

いや待てお前、そんな重要なことをサラッと吐き出すな!?

それ見たことか、ムラサメ様は啞然としてるし茱子に至ってはさっぱり理解してない顔だぞお前!

「えー、私帰りたいからこんな端的に言っただけなのに」

「人の頭を勝手に読むなっ」

「ごめんごめん。まあでもそんな感じ。ちよつと色々あつて出てくることになったよ」

そう言つて後は知らんとばかりなご先祖様だが――

「待たんか、伊奈神の者よ」

そこに待つたをかけたのはムラサメ様だった。意外にも茱子は黙っている。

「おっと、伊奈神の者つて呼び方されちゃうかー私。一応キミより五百と十余くらいは年上なんだけど」

「そなたから見れば全て童じやろうて」

「はっ、違くない。んでなにさ」

よいこらせ、とババくさい発言とは裏腹にとても雅に座るご先祖様。めちやくちやサマになつてると感心してしまう。

そしてムラサメ様は、静かに尋ねた。

「虚絶とは、なんだ」

その表情は真剣と警戒が入り混じるもの。完全に今、ムラサメ様は京香に対して最大限の警戒をしている。声色にもそれが現れており、普段のそれよりも数段低く硬い。

「何って言われてもねえ? 呪いと絶望から生まれた刀であり、数多の殺戮を通して完全に呪物になったもの。ついでに言えば私の家族を殺した奴が使つてた刀で、曰く怨恨の宿り木なんだつてさ。無秩序

に降り積もる怨恨がやがて魔物——鬼になる。人が自ら生み出した魔物が、人を殺すために歩き出す……祟り神として、だっけか。仔細は省くけどまあ色々あってこっちに流れた」

それに対して京香はと言えば、ヘラつとした表情と声で、あっさりと言状して終わりだ。

けれどあからさまに何かを隠している雰囲気を見せているし、その上で関わってくるなという強い意志を感じる。

「では、その刀の意志とは？」

「さあ？ 怨恨の中身なんて知らないわ。私は私の憎しみを以ってして、この怨恨が鬼とならないように方向性を与えてやってるだけよ」京香にとってはつまらないことらしい。その退屈げな表情がはっきりと語っている。

「夫も子供も殺され、復讐も果たしたのなら、死んでもなお忌むべき相手に吠え面をかかせてやりたいものでしょう？ それに、流石にまた私みたいなややこしいモノを生み出しても困るし。だから人柱となつて、内に潜み燻り狂うその鬼に方向性を与える役割を担った」

そう言い切ると、だが何処かバツの悪そうな顔をしながら——

「……まあ、私もだいぶ魔人だから、それもあつたんでしょう。無秩序に死を振り撒くよりかはマシだけど、そうした魔物と呼んでも過言ではない存在への殺意に変換されてしまった、ってオチね」

なんて、さっくり言つてのけた。

まあ、なんだ。つまり俺が突き動かされ続けたものは、最悪よりマシだったと。

恵まれていたのだなあ……と、しみじみ思う。俺は本当に、運が良かったらしい。下手をすれば俺が鬼の端末となっていた可能性もある。笑えない話だ。

「話はそんだけ？ なら今の事話そうか。シケた話とか私嫌いだし。そう、その二人のデートとか！」

この重たく苦しい筈の話を、サラッと流して話の続きを——いや待て。

……なんで俺と菜子がデートすることになってるの？

レナからの、あくまでも”提案”であるのに何故この女はさも俺たちが自然にするものとして扱って話しているのか。

「む？ なんじやと。お主らやつとでーとするのか？ 賭けは芳乃の勝ちじやな」

「やつとつてなんだよやつとつて!？」

「いや、芳乃が「あの二人はそろそろ、いい加減にデートの一つや二つをして砂糖を仕入れてくれる筈」とか言ってるのう」

「芳乃様あ!？ 最近やけに夜中進展とか惚気聞かせてくるようになったのつてそういう意図だったんですかあ!」

茉莉の叫びから、どうやら芳乃ちゃんが愉快なことになっていることを俺はやつと把握した。

てか君そうか、そんなに愉快な子だったのね……いや多分俺たちの中で一番愉快的な性格してるかもしれない。

ケラケラと笑うムラサメ様と京香だが、一方俺たちはなんかもう盛大に疲れた。ため息しか出てこない。

「……茉莉」

「……なに」

「疲れた」

「あとでお昼寝しよ」

「そうする」

「……ん？」

何か妙な返事だったような気が……もうなんでもいいか別に。なんか二人がやけにニヤついてるが知らねー。俺は疲れたんだ。ちよつとくらい寝たい。

「で、何故お主らでーとをするのじや。あ、いや、別に吾輩としては遅すぎるくらいだが——」

「その弁明は何処に向けたものなんですか、ムラサメ様」

「気にするな。口を滑らせただけだ」

ジト目の茉莉の質問に対して、なんか腑に落ちるんだか腑に落ちないんだかわからない返しをするムラサメ様。

口を滑らせたつて、だけの話なんですかねえ……？

で、理由だっけか。

「いやあ、ほら。茉莉が犬になったってのは知ってるの通りだけど、あれレナに見られてたんだよね。その関係で事情を説明したら、とりあえずデートしてみたら？　って話になって」

「なるほどな。確かに家族のように仲のいいお主ならば、普段してないことをすればそれっぽくはなるであろうな。今更感溢れる話だが」

口では納得したようだが、なーんか表情が納得していかないように見える。いや絶対に納得していかないというか不満げというかなんというか……とにかく、そんな感じだよ。うん。

しかしそんな俺たちを知ってか知らずか、我がご先祖様はさぞかし暇そうに一言。

「てかさあ、キミら明日デートするんだよ？　ちゃんと段取りとか服とか気合い入れるんだぜ」

「は？　明日？」

「だってその茉莉ちゃん、このままだとマトモな生活送れないでしょ。だったらさっさと行動した方がいいじゃん」

「そりやそうだけどさ。でも待てよ、俺はまだ一言もするとは——」
「じゃ、あれ見てしないって言える？」

呆れ顔でご先祖様は俺の隣——つまり茉莉を指差す。

もちろん、彼女は……

「あー、デートですね、はい。デート……馨くんと、デート……」

実にまんざらでもなさそうな声と、何処か楽しそうな表情で、ぶつくと何かを言っていた。怖えよ。

「流石に乙女の純情を弄ぶ真似はするなよなア？　馨」

「はい……」

真顔で言われると、なんか否定したら殺されそうな気がしたので、俺はすぐさま頷くのだった。

意志が弱いつて？　うっせえやい。

——ま、俺も……役得だとは思ってるし……

ちよつと嬉しいのも事実だ。

「あれで良かったのかのう」

「ああでもしなきゃくつつかないでしょ?」

「それはそうじゃが……」

本殿の中で憑代を見るムラサメと京香は、例のデートの話をしていた。

主に話題は、無理矢理にでもセツティングした話だが。

「考えてもみなくて。あれじゃあ一生かかっても燻らせてるままだよ? それに、お節介というか、見ててやきもきするような、恋愛劇だからねエ……ちよいと私思うのよ。劇薬無いと進展しないなアーってさ」

和装で胡座をかくという器用なことをしながら、京香はそうボヤク。

何せ彼女は、馨と刀が初めて同期した時からその複雑奇怪で面倒くさい内面を知っている。そして茉莉の内面もまた、今朝取り憑いた所為でこっそりと仕入れている。

「第一、お互いを好きすぎるあまりお互いに身を引き合うって何処の創作物だつてーの。面倒だったらありゃしない」

「らしいと言えづらいがの。しかし、二人の境遇を思えばさもありなんとという話ではないか」

「どうかね? ま、綾ちゃんほら、母親目線だし。あの有地君だけか、彼の前くらいでしか年相応な面は見せられないもんね」

「む……」

綾——それこそが、ムラサメとなる前の彼女の名前。

京香から出てきたことも驚きだが、それよりも彼女にとっては。

「綾はもう、死んだのだ。ここにいるのはただのムラサメじゃ」

かつての己と今の己は、明確に線引きするべきだと、さっぱり切つて捨てた。

しかしそれは、渋々といった様子でもあり、そこに彼女の抱く複雑な思いが垣間見れる。それを見逃す京香ではないが——

「キミはキミだ。名前が変わろうとも、人とは違う存在となったとし

ても、他の誰にもなれやしない。そうして誤魔化すのはやめなよ」
言葉と表情は優しいものだ。

それこそ子供に言い聞かせる親にも等しい。彼女自身の優しさと呼べるものは、確かに含まれているし、本音ではある。

だがその内面はと言えば、コイツも面倒クセな……と。

面倒極まりない人々しかいない穂織にウンザリしていた。

(昔から面倒極まりない連中しかいないね、ここ。あの兄弟戦争もクソみたいな理由だったし。しかもそれで”アレ”と来た。こりやあ

——”馨が殺したがる”のも、無理はない……か。

いやはや、困ったもんだね姉上。あんたくらいだと思ってたよ、死ぬほど面倒な人間は)

——そう。

虚絶とは単なる怨恨だ。

京香が入って初めて、魔物への殺戮者となる。

その成り立ち故に、魔物と呼んでも過言ではない人間への絶対的殺意の衝動を与えるが、何処まで行ってもただの人間である朝武、常陸両家に対する『確実に殺すであろう、殺せてしまう』だけの理由は、彼女が”持ち得ない”。

例えば。

茉莉がどうしようもなく人の不幸を好み、他者を蹂躪して破壊する事を、異端と知りながらも止められない、止まらない人間であったとすれば、京香の殺意が彼女を殺していた。

反社会的なサイコパスとでも言うべき人間が、京香の殺意の対象だ。誤認等是有り得ない。彼女は本物の破綻者を知っていて、殺し合いまでしただから。

だが当然だが、現実の茉莉はそうではないし、京香が殺すだけの理由は……揚げ足を取ればあるにはあるが、当の本人からすれば、家族の仇程のものでもないし、大した話でもない。

では、馨が苦しめられていた、殺せてしまう理由の持ち主とは誰か？

——それは他ならぬ、馨自身だ。

(さっさと告白して付き合ってくれれば、多分お互いに笑って流せるネタになるんだけどねえ……今のままだと自覚したら余計に縮こまっちゃう)

深く馨の人間性を理解している京香だからこそ言える。

馨にとって菜子も芳乃も、そして将臣も『殺したいほどに羨ましい』対象なのだ。

引き金が引かれれば、馨は暴走し穂織を滅ぼす。

もつとも、そう簡単に魔物と成り果てる程度の存在ではないし、彼は自らを戒めるのは上手だ。それにもしもの時は自身もいる。

京香が馨の身体を勝手に使っていたのは、適当な憎しみの対象を与えてそうならないようにしてやるという意味合いもあつたが、まあ暴走の方が先だったのも事実。

(無自覚でいてくれよ馨。私みたいな悲劇は、私一人で十分だ。もしそうになったら、私が止めてやる。私の所為だからな——)

幼い馨は本能的に、伊奈神の始まりが朝武の始まりと相容れぬ上に、総ての苦しみの根源を察したのだ。

刀は千年もの間、怨恨の宿り木として呪いを溜め込んでいる。そしてその中にいた京香から、恐らく知ってしまったのだろう。

伊奈神の始まりは、誰の所為とも言えないものだ。異形の血族として生まれたのも、殺しの輪廻に身を置いたのも、誰が悪い訳でもなく、ただ間が悪かった——としか言えない。

だがそうなのは朝武の所為だとも言えなくはない。だからこそ大義名分が与えられれば嬉々として殺しに行くだろう。

貴様らに与えられた祝福とは、我を苦しめる呪いなのだ。

故に死ぬ、俺に殺される。その罪を償えよ——と。

「……どうしたのだ？ 苦い顔をして。吾輩ではなく、そなたがそのような顔をする理由もないであろう」

「いや、別に。世の中つてのは因果なモンだなあ……つて嫌になつて

るだけさ」

愛しい女を殺すことに躊躇いと迷いもあれば、思い留まることなく息をするようにできるし、考え直して単なる八つ当たりだと知ってやめられる。何せこじつけにも等しいのだから。

しかし一度大義名分が得られれば殺せてしまう。

それでも人として生きて、人として死ぬと決めたのだから、それを封印してそうならないように無自覚を無自覚のまま消していく。生きると言われ、生きてと願われたのならば、人として当たり前前に生きて死ぬためにそれらは魔人として切つて捨てる。

(よりにもよって、奴に似たか……馨)

奇しくもそれは、京香の総てを奪った破綻者が、破綻する前の状態と同じであり、人の望んだか魔人を望んだかというのは、絶対的な違いなのだ。

仇は魔人を望み、馨は人を望んだ。

如何なる世の中であつたとしても、二人の選択が変わらない限り、魔人は魔人にしかならぬし、人は人にしかならぬ。そういうものだ。(さつさとくっつけて、確実に芽は刈り取っておかないとねエ)

余計なお節介だし、そうならないのは目に見えているが、破綻者に殺された側としてはたまつたものではない。

「あ、そうだ綾ちゃん」

「ムラサメと呼んでくれぬか?」

「えー、可愛いのに。それにキミの本当の名前で呼びたいんだよ私が」
「ダメなものはダメじゃ」

「ちえー。腹決まつたら教えてよね」

ぷーと文句を言いながら、京香は内心を上手く隠しつつ、ムラサメを如何に素直にしたものかと悩みながら、そろそろ可愛いことになつてそうな向こうを覗き見ようと、いたずらっ子のように思考を回し始めた――

制服から着替えて、さつさと家事も終えて、あとは芳乃と将臣が帰宅するまで暇になつてしまった菜子。

「……俺昼寝する」

そんな状況で、馨は心底疲れ果てた顔でそうボヤキ、横になって瞼を閉じた。

しばらくすると規則的な寝息が聞こえてきて、完全に眠ったのが実によくわかる。

そう、茉莉はこの時を待っていたのだ。

「寝た、よね」

小さく呟き、気配と音を殺してゆつくりと近づく。なんだかいけないことをしているような気分だが仕方ない。

そのまま馨の隣に寝転び、寄り添うようにして瞼を閉じる。

(このままだと、お二人が帰ってきた時に起きられるかな……)

お勤めとこの添い寝。

果たしてどちらが大事なのかと問われれば、それは当然、茉莉にとってみれば添い寝の方が絶対的に大事なことだ。

(ま、いつか……安晴様に見られるけど、正直なんだっていいやもう。今は美味しい思いをしたいし……)

好意がバレてるのでは？　と思うと怖いのは事実だ。しかしバレてるかもしれないなら、いつそ開き直ってしまえばいいのだろうか？

茉莉は訝しんだ。

そして実行した。それだけである。

……いくらでも言い訳できるし。

普段の彼女から信じられないほど、蕩けた顔で瞼を閉じた。

いい夢が見られそうだと確信しながら、茉莉はちよつとずつ近づいて、ほぼ密着するくらいのところまで、寝惚けたとでも言い訳すればいいかと考え付いて、もう面倒くさくなって、抱き着いて寝た。

「なー？　面白いもん見れたでしょ？」

「うん、確かにそうだけど……君は誰だい？」

「……あれ？　こっちじゃなかったっけ？」

「戯け！　今のそなたは虚絶の姿ではなからうて！」

「あつ」

——大人組が締まらない感じで覗き見していたのは、実に少年的であつた。

別れ／待ち時間

闇夜の中に、誰かがいる。

「ふむ……陽が落ちて陰が登らねば、我が身は未だ窮屈なまま、か」
冷たく低い声。

彼女を知る者がその声を聞いたのならば、啞然とすることであろう。

……まるで、あらゆるものを無機質に、客観的に、機械的に捉えているかのような声であると。

「して、これは悩ませてくれる。今憑代となっている者に迷惑をかけるほどの、不出来なものではなく、むしろ好感が持てるというもの。故に……さつさと器を探さねばな」

しつかりとした足取りで歩く先は神域。

鍵無くば開かぬ扉を、如何なる魔技を用いたのか開けること無くすり抜ける。

「——偶然、というわけでもあるまい……抜け殻がある筈だ」

眼前の仕掛けを見ながら、一人呟く。

「まあ一人に取り憑いたままでは、怪しまれるか。適当に拝借させてもらおうとしよう」

だが、それには目下の悩みがあった。

「……だが、困ったな。拠点をこの憑代として、手足の調達なぞ上手く行くものか……」

しかし、今日に限っては——全てが自由だった。

「——ああ、今日は都合が良いのだった。目が無いというのは実に素晴らしい」

クツクツと笑いながら、憑代の住む場へと戻っていく。

「子供の頃以来か、宝探しなぞ。いやしかし、これはこれで乙なものだな……」

楽しげに、愉しげに、嗤いながら——闇夜の中に潜む者は、何処へと消えた。

「そうだ。拝借したら甘味でも食べよう」
……とても普通な呟きを残して。

■
竹刀が竹刀に弾かれる。

——寸分の狂いも無い、完璧な軌跡だ。完全にこちらの太刀筋を見切られている。

そのまま高速の切り返し。

受け流しも弾きも出来ない。対応出来る技術が無い。

よって、後退するしかできない。

「ダメだ。太刀筋が寝惚けてる。話にならない」

距離を取った俺を見て、圧倒的力量差と共に、冷たく言い放たれるその言葉。

俺の知る伊奈神京香という女は、何処かへラつとしたお気楽な奴だが闇を抱えた人間だったが、認識を改めねばならない。

こいつは、根っからの戦士だ。

なるほど、こりや不器用にもなる訳だ——

しかし、俺は愚直に撃ち込むしかできない。再び地を蹴り接敵、袈裟に竹刀を振るう。

それをゆらりと。

最小限の動作と、最小限の移動距離で回避し、そして——

「腕の延長線で刀を振るな。このザマでは棒切れを持つてると変わらん。刀は武器だ。刃物だ。殴るな。突くな。斬れ。貫け」

容赦無い叱責と共に、左の肘打ち。

斬り込んだ体勢から強引に身体を捻ってそれを回避した瞬間、目にするのは弓を引くが如く引き絞られた右腕。

——突きが来る。

認識した刹那、強烈な勢いを付けて放たれるその一突き。

その異形の血族たる力を完璧に使い、そして真剣であれば人の身など軽く吹き飛ばすであろう圧倒的破壊力を秘めた、一撃絶命の攻撃。

生じた一瞬を決して逃さぬ、正しく殺人技巧。

さて、ここからどうやって逃れたものか。

避けるか？ 防ぐか？ いや技量が足りない。

——受けたら死ぬ。再生が間に合わない、殺し切られる。

「だったらっ！」

であれば強引に避けられるようにするしかない。

迫る竹刀に対して、逆手に持ち替えた竹刀をその軌跡に横殴りにするよう、無理矢理にその軌道をズラす。

無茶なやり方故に、俺の竹刀が宙に飛ぶ。

無論それは予想通り。跳躍し、後ろに回り込みつつ竹刀を順手で掴み、首裏を斬りつけるように振るう。

だが。

「最低限の負荷で弾き隙を作れ。防ぐならば確実に防ぎ、避けるならば確実に避ける。半端をすれば狩られるぞ——このようにな」

再びの叱責と共に、突き出した腕を腰に戻し、回転しながらの横薙ぎが竹刀目掛けて振るわれる。

受けきれない状態で、力を込めた一撃——無様に撃ち落とされたが、墜落前に地面に足を向けて着地したが、受けた勢いが殺し切れず距離が離れる。

——どこまで離れた？

咄嗟に顔を上げると、居合の構えで俺を見据える京香の姿。

……迎撃か？ それとも追撃か？ どっちだ？

斬り込むか、斬り返すか。その一瞬の迷いをまるで読み取られたように、奴は意識の隙間を縫うように——

「扱を迫れ。惑わし殺せ。見え透いた剣には裏と力があると知れ」

……叱責。

俺の眼前に現れ、再び居合斬りを放つ。

——直撃だ。

「——っ!？」

激痛が走る。追撃の袈裟斬りが見える。咄嗟に軌道に差し込んで防ぐ。続けて二撃、三撃とこちらの反撃を悉く潰す為の、再び一撃絶

命の攻撃を入れる隙を作るための連撃だ。

「握るなら攻め続けろ、握られたなら守り続けろ。攻防とは即ち流水の如し。なればこそ瞬間と瞬間の隙間を奪い、切り返せ」

一切の隙を生じない攻撃を繰り返して、防戦一方に追い込んでなおこの言い草。簡単に言ってくれやがる。

だが、だ。

技量が足らず弾き返せないのならば、その攻撃を外させれば必ずしも隙が生じる。そこを狙うしかない。

一撃の軌道を見る——袈裟斬りだ。体勢は立て直している。ならば防げ。軌跡に刀身を滑らせろ。

——防いだ。

次は横薙ぎ。次も防げ。

思考と同時に腕が動き、竹刀と竹刀がぶつかって離れ、腕が外側に大きく弾かれる。

……これが弾き返して奴か。ぼんやりと把握したが、同じものをやれと言われたら無理だ。

——だからこそものにする。

外に動いた腕での反撃は、大振りの上段か横薙ぎか突きに限られる。

京香は……横薙ぎだ。これでは回避しなければ首を落とされる。

もつとも、通常の反撃であればの話だが。

素早く腰に竹刀を当てる。抜刀術の体勢——姿勢を低くして懐に飛び込む。

そして奴よりも早く、腕を振るい胴を斬り裂く——!!

「見事なり」

楽しげな声。

そして一際大きく響く、竹刀のぶつかる音。——防がれた？ どうやって？

鏑迫り合いの状況から、驚愕と共に視線を動かす。

「それは己が技術か。その齡とその環境でよくぞここまで研ぎ澄ましてみせた。だが切り返しだけで殺せるほど甘くはないぞ」

撃ち合いを始めて、やっと褒められたが、しかし確実に殺つたと思つた一撃を難なく防がれた。

横薙ぎの斬撃を、咄嗟の逆袈裟斬りで防がれた。化け物め。

「――並みの者であれば、これで死んでいたがな。場数を少しでも踏んで、死地に身を置いたものであれば、死中に活を求めるのは当然だろう」

――鎧着て刀持って和弓担いで馬に乗ったスーパー鎌倉武士どもみたいな常識を持ち出すんじゃないやねえーッ!!

そういやウチの直系のご先祖様も、歴史的に見ても族滅という恐ろしい言葉が頻繁に出てくる時代で傭兵モドキやつてたぐらいにはバーサーカーなんだっけか……いやそもそも歴史的に内乱と戦闘に明け暮れていた時代の人ならば基本的にバーサーカーなのでは？

てか京都とかでも市街地戦起きてたんだっけ？ 日本人戦闘民族説。

いや戦闘民族だわどう考えても。舐めたら殺すを500年くらいやってたし。

悲しくなりながら、容赦なく繰り出された拳を無防備な腹に受けて、俺は青空と対面して地面さんと仲良くなった――

「戦いにおいて殺気と呼べるものは、相手に向かってこれで殺します、死んでくださいと宣言するに等しいよ。キミはそれがあまりにも先走り過ぎている」

起き上がって適当なところに腰を下ろした俺は、眼前のご先祖様から容赦の無い叱責を受け続けていた。いやそんなこと言われても困るし……

「不満そうだね」

「朝っぱらから起こされて何をするかと思えば慣らし無しで撃ち合いとか氣イ狂ってるんじゃないかねーのか」

「やかましい」

「クソが」

悪態を吐けば切り捨てられたので更なる悪態を吐く。多分、俺今すごい顔してると思う。茉莉には見せられないくらいなの。

「基本的に一撃で仕留めるのは、暗殺の類。そういう意味では暗殺者向きね、馨は。短刀ならそれでいいけど、刀——特にその無銘みたいな異形において一撃で仕留めるのは余程の達人でなければ無理。キミのやり口と致命的に噛み合っていない」

「しかもタメになるのがムカつく」

「奪い取るのは敵手の未来、一矢二矢三矢と積み重ねて如何に必殺に至るかっつてのよ」

「……ふーん」

確かにそうなのだが。

まったくもって正しいのだが。

「……で？ それがデートに臨む事と何の関係があるんだよ」

——なんでか知らんがこの女、朝に「おら起きろ！ デートに挑むための下準備すんぞ!!」とか叩き起こして、何故か将臣と共に学院に向かえと言ひ、そして行ってみればいきなり出てきて「構える馨。遊んでやる」とか言い出してこれである。

何故俺は朝っぱらからご先祖様にボコられなきやならんのか。しかも好きな女の子とのデート当日に。

……カツコつかないんじゃない。

「いや昨日の醜態見せといてカツコもクソもあると思う？」
「うぐっ……」

人の頭を読みやがったコイツ……

京香の言う醜態——つまり昨日の昼寝、その後のことだ。

……妙にあつたかと思つて目が覚めてみれば、なんでか茉莉が隣で寝てた。しかも抱き着いていた。

めっちゃいい匂いした。

ほっぺ突つついてみたらめっちゃ柔らかかった。

頭撫でてみたら髪めっちゃサラサラだった。

——魔性だったとも言える。

てかズルかった。あんなに安心した顔で、可愛い寝息立てて、なんかもう、ズルかった。

余計好きになるしかなくね？ いやマジで。

「何だらしない顔してんのさ」

「うつせえ！」

ニヤつきながら言ってるじゃねえ！

……しかも、まあ起こすのも忍びないしと二度寝したら、今度は起きた彼女に膝枕されていたのだ。

それを見られた。バツチリと。将臣と芳乃ちゃんに。

もちろん、からかわれた。

もう昨日は散々だった。

初めて「話しかけんなチクショー！」とか捨て台詞吐いて風呂入ってふて寝したよ俺。

「俺びつくりしたよ。まさか帰ってきてみれば常陸さんがお前を膝枕しててさ」

「お前も大概テンションがイカれてたが、一番テンションヤバかったの芳乃ちゃんだよな」

隣で休んでいる将臣の言葉で、ふと昨日一番ハツチャケていた芳乃ちゃんの言動を思い出す。

——二人ともこれはもう夢のある話じゃないの？

——なんで茉莉は平然と膝枕してるの？ そしてなんで馨さんは平然と受け入れているの？ やっぱり赤飯じゃない

——あつ、今私すごく後悔してる。茉莉、後でまた馨さんに膝枕してくれる？ その顔を映像に残したいから

——将臣さんこれももうプリン案件ですよ。プリンですよプリン

——お父さんズルい！ 一部始終見てたんでしょ!? ズルい！

——どうして二人は尊いのか

「……ぶっ飛んでたなア……」

「俺あんな芳乃初めて見たよ」

「俺も初めてだよ」

目をキラキラさせながら、尻尾があったらブンブンしてそんな感じにハイになってた芳乃ちゃん。

まるでガキの頃に戻ったみたいだ。

「でもこれからはそれを間近で見れるのはお前だかな将臣」

「あー……それもそうか」

「あの子を幸せにしるよ？ 婚約者殿」

「気が早いな！」

「ハハッ、仕返しだ」

「何のだよ」

「なんかの」

ケラケラと笑い合う俺たちだが、ご先祖様はそういう雰囲気ではな
いらしい。ジト目が俺を射抜いている。

「何男色と寝取りに目覚めてんの？」

「はあー!? テメエっコラア!! 俺が茉莉以外に心奪われる理由が無
いんですがコラア!!」

「どーかねー。あ……ムラサメちゃんに姉貴味を感じてたり、可愛い
とか思ってたたり、膝枕されるのも悪くないかもとか思ってたりするク
セに」

「うぐっ……」

言葉に詰まる。

だって事実だし。

「流石にやりすぎでは」

ボコられた俺を見かねて玄さんが助け舟を出してくれるが――

「おいおい玄ちゃん、私の血筋の倅が恋愛クソザコナメクジなんだよ
? ケツ蹴っ飛ばしてもこのザマだよ? へなちよこ過ぎるでしょ」

「あの……玄ちゃんはやめていただけませんか」

「馨にや玄さん呼び許してるのに私はダメかい? 不公平だねエ」

困った顔の玄さんと、さぞ楽しそうな京香から分かる通り、この人
ですら手玉に取られている。……というか、俺のご先祖様であるのと
根っからの剣士であるのもあって、玄さんがタジタジだ。

「しかし玄ちゃん、将臣君には剣術仕込んでないのかい？」

「そもそも仕込めるほど基礎があった訳でもなし。鏑を落とすなら
ば、慣れている方が良いというものでしょう。それにワシは、剣術が
どうにも合わなかったのですよ」

カラカラと笑ってそう言う玄さんだが、反対に京香の目は極めて冷

徹だ。間違いない、気付いている、見抜いている——俺の知らない玄さんの一面を。

「なるほどね。あの鞍馬の倅が、なんで剣術使ってないのか気になってたけど、そういう理由かア。時代の流れかしらね——」とでも言うと思っただか？ 疼かせてくれるな、まったく……真剣があれば鯉口鳴らして誘ってたところだ」

一気に冷え込む口調と、凶悪な笑み。

伊奈神京香は、激動の時代を生きていた人間だ。死と隣り合わせ故に弱者から強者まで常日頃より殺しと友人である時代——必然的な話だ。

故にこの、強者との立ち合いを望む面は、彼女の数少ない悪癖と言えよう。

ただ玄さんとしては全然やりあう気は無いようだ。全然雰囲気が変わってない。

「む、それは困りますな京香様。あの剣術、老体には応えます」
嘘つけ。

あんた俺とまともに打ち合えるほど動くじゃないか。

何シレッとシラを切ってるんですかね。そんな苦笑した感じで。

「ふん、老境でありながら衰えが見えんぞ。それどころか更に研ぎ澄まされている。密かに剣術を遊ばせているな？」

「家族より剣鬼になる気かと呆れられる程、かつてより振ってます故、そう簡単にやめられるものでもありません」

「違いない。すまんな玄十郎。無理を言った」

と、なんだかお互いにちよつと未練みたいな雰囲気を出しつつスツと普段通りに戻る。それを見ていたムラサメ様は感慨深かそうに――

「あの玄十郎がまさか、ここで一戦交えぬとは。角が取れて丸くなったのう」

と、俺にとっては恐怖でしかないワードを呟いた。

「そうなの？ ムラサメちゃん」

「おうさ。昔は馨の祖父と頻繁に剣の腕を競っていたし、強い者とは

「戦を交えたいとギラギラしておったぞ」

「若い頃の祖父ちゃんの話ってあんまり聞いたことないけど、なんていうか少年漫画的だったんだな」

「じゃが根っこはあの廉太郎と似て、結構アレじゃったぞ？」

「……ねえ玄ちゃん。ムラサメちゃんがキミの黒歴史を暴露しそうなだけど？」

「むっ、ムラサメ様!? 何の話かはわかりませんが、あまりにそのようなことは困ります!!」

「わははは！ お主は変わらんな本当に！」

「聞こえてないっすよムラサメ様ー」

「すぐくわちやわちやし始めたが、俺はものすごく気になっていることがある。こいつがはぐらかしたネタ——つまりこれとデートの関係性だ。」

「で。これがデートと何の関係あるのか答えろよ」

「え？ 大抵の問題は刀振ってる間に解決してるものだからほら」

「どーせ自分が遊びたかったんだろ」

「バレたか」

「いたずらっ子のような笑顔。」

「その言葉を聞いて苛立ちが天を突いた。」

「チエストーオッ！」

「すぐさま竹刀を振りかぶり、殴りかかる。」

「誤チエストにぶっわすー！」

「が、しかし流石は剣士。」

「フツ—にこちらより早く殴り倒され、俺はまた青空さんと対面して地面さんと仲良くなるのだった——」

「それから数分と経たずに、俺はボロボロの気分で完全回復した身体を動かして帰路に着く。」

「——なーんか、損した気分だ。」

「のう馨」

「あんだよムラサメ様」

「不意にムラサメ様から声をかけられる。何事かと思っ見てみれ」

ば、何やら不思議そうな顔が目に入った。

将臣も訳を知らないようで、不思議そうにしている。

「昨晚、何か感じたか？」

「いや、何も。だったら起こされてる筈だし……」

——我も知らんな——

おっと、どうやらご先祖様は引つ込んだようだ。虚絶の方が反応した。

ただ奴が感知していないとなると、ムラサメ様の話は一体？

すると、とても神秘的な顔をしながら……

「実は昨晚、ちょうど日を跨ぐ頃か。それくらいに、何者かが本殿の前にいたのだ。黒い……そう、黒としか言えぬ何者かが」

衝撃的な事実を言い放った。

頭が冷える。思考が研ぎ澄まされていく。人の暖かみを持つていたものが全て取り外され、必要無いからと遠ざけていた冷酷な始末屋としての中身が溢れ出す。

「……本当に？」

「嘘を言っただろうする。じゃが、崇り神ではなかったのは確かだ。故に困った」

「ムラサメちゃん、どうする？」

将臣は言葉少なくそれを伝えるかどうかを聞くが、帰ってきたのは否定だった。

「……某子の犬の話が目下の課題だ。吾輩たちで留めておこう。その黒が敵であったとしても、戦力が欠けているのが事実なのだからな」
「確かにそうだね。……ちゃんとデート頑張れよ？」 馨

「え？ 待って？ どういうことだよ」

デート頑張れって……言われても。

本気で困惑する。だって偽デートなのに気合を入れる必要とか無くね？ というか話の前後があんまり繋がらないような……

そうやって顔をしかめさせていると、二人が揃ってため息を吐く。

そして——

「偽恋人を本物に出来るチャンスだぞお前」

「この機に乗じて茉莉に想いを告げてしまえ」

異口同音に、絶対的に不可能なことを言いやがった。

「……お前らなア……」

俺はもう、逆に呆れ返るしかできない。

……まあ、なんとなくは想像が付いている。しかしだ、しかし……結局俺自身の踏ん切りが全く付かないのだ。

「……わかってるよ。合理で見れば、ここが一番ベストなんだろう？でもさ……」

求めている。

伝えたい。

なんでもいいからこの気持ちに終わりを打ちたい。

けれどそれ以前に俺は——彼女に相応しくないのが事実だ。

……どうして俺みたいなの、こんな奴のことをと思わなくもない。いつそ本当に片想いであれば、ここまで苦しむことはなかっただろう。

「無理だよ、俺には」

……逆にわからなくなった。

彼女に好かれたから好いているのか、彼女を好いただけなのか。

茉莉の好意を、なんとなく察しただけに、俺はどう考えてどう動いていいのか、まったくわからない。

逃げられないし、立ち向かうには迷いが多すぎる。

……こういう時、察しの良い自分が殺したい程に憎くなる。

知らないことが罪だとしても、知りすぎることでもまた罪である——それをこうも味わうことになろうとは。

「……難儀だな、好きになるって」

愛とは狂気だ。何せ憎悪と紙一重なのだから。正気のままではこんなものとは向き合えない。

狂わねば呪いとなるし、狂ったところでより狂わねば素面でなぞいられない。

無防備であればきつと、求めてしまうし、きつと茉莉も求めてしまうんだろう。けれど、俺は……まったくわからない。

……いや、正直に言えば。

関係が変わることによって、茉莉が俺の更に身近になるのが、あまりにも怖い。

近すぎる故に、彼女を失望させないだろうか？

俺という存在がどうしようもなく愚かだと知って、逆に苦しまないだろうか？

やがて新しい恋を見つけた時、変な男に引つかかったと後悔しないだろうか？

「わかってても、どうしようもない」

自嘲が漏れ出す。

いや、自嘲だけでなく羨望もまた溢れ出す。終わった奴らは気楽に言ってくれるものだ、と。

「馨……」

「ホントさ、気付いてしまったって感じだよな。知らなければ、ある意味気楽だったってのに。どうして俺は——」

きつと俺は、本当に愛しているのに、君に愛していると伝えられない。

君にそう伝えられるほど、俺は強くない。全然覚悟が決まらない。

ああ、茉莉……どうしてお前は……俺なんかを……

他に何も喋ることなく、帰ってきてみれば。

「……ただいま」

「おかえりなさい」

やっぱり慣れない。

笑顔の茉莉に迎えられるのは。

「眉間にシワ寄ってますよ」

「わかってるよ」

「……大丈夫？」

「平気だって」

まあ、余計な心配をさせたくないし、悩んでるのは……大した話とは言えないものだ。

所詮、俺が彼女に想いを告げられない、というだけに過ぎないのだから。

——それは大した話であろう。貴様と彼女にとってみれば——
……なんだよ急に。

お前は何なんだ、何者なんだ虚絶。

——ふむ、我は我でしかなかろう。我という存在は、我でしかない。
”私”が”私”であるように、貴様は貴様でしかない——

……京香とは違うのか、お前は。

——さてな。知ったところで無意味だろうよ。今の貴様にとって意味あることは、その狂気を如何にして伝えるだけの勇氣を持つことだ——

なんだろうか、この違和感。

何かが違う。京香とも、虚絶とも。絶対的に、何かが。

こいつは本当に虚絶なのか？ だが……京香以外は有象無象だぞ？ なんだ、なんなんだ？

——悩みなよ端末。柄にもないことをするからそうなる。貴様は元より考えたくなければ働きたくもない人間だろうが。惑わば死ぬぞ——

……それは。

——クククツ、お前は既に答えを得ている。なればこそ、後は心に導かれるだけだ。頭と心は、似て異なるもの故に……な。せいぜい馬鹿になることだな、馨——

とても楽しそうに告げると、奴は消えていった。

……馬鹿になれ、と言われても困る。どうやって馬鹿になったものか。それが問題なのだから。

「馨くん」

「なんだよ菜子」

ジツと、彼女に見つめられる。

ただただ無言で見つめられる。

見つめられるから見つめ返すと、少し顔を逸らした。

「顔逸らすなよ」

「……恥ずかしいの」

消え入りそうな声。

よくよく見れば頬が仄かに赤い。

……意識して、くれているのかな。なんだか意地悪をしたい、いたずらしてやりたいという小学生男子並みのダメな感じが湧き上がる。

多分馬鹿になれの馬鹿とは違うが、別な意味で馬鹿になってる。

だから――

「ひゃっ!？」

珍しく驚いた、とても可愛らしい声に顔。

そりゃそうだ。俺が肩を掴んで顔を寄せてるんだから。

「目を逸らさないでくれ」

「そ……っ、そんなこと言われても……」

「ダメか？」

「あの……なんで？」

「それ、は――」

なんて言い訳しようか、考えてなかった。いやもう、いつそ言い訳なんか要らないんじゃないか？俺が茉莉子の好意に気付いたように、茉莉子もまた俺の好意に気付いてるかもしれない。

だつたらいつそ、このまま――

「……茉莉子の顔が、見たいから」

「え……っ?」

「それじゃ、ダメか？」

素直になつてみるのも、悪くないかもしれない。

――すると茉莉子は困つたような苦笑とは裏腹に、顔を合わせることはないけれど、嬉しそうな声で。

「ダメじゃないに、決まってるよ……」

……やばい。なんて可愛い生き物なんだ。こんなに可愛い子が俺に好意を向けてる可能性があるって信じられんぞ。

肩を掴んだまま、顔を覗き込む。

「……近いよ」

「じゃあ離していいの?」

「やだ」

「……はい？」

やだっってお前……

「どうせなら、このまま——」

「おっ、おい茉莉……？」

熱で浮かされたような瞳が、俺を写している。

淡い朱に染まった頬が、はつきりと俺に向けられている。彼女はどこか意を決したような表情なのに、なんだか魅力的で仕方ない。

「……馨、くん」

「あー、馨君だけど？」

小さく求めるような声に、なんとも間抜けな返事しか言えない。他のことなんて考えている余裕が無い。余裕なんて奪われてしまった。

「馨くん」

もう一度、求めるような甘い声。

彼女の白い手が、俺の頬に添えられる。

「あの、茉莉さん？」

「……」

「おうい」

返事は無い。

ただ熱に浮かされたような、蕩けた瞳が向けられるだけ。

「……」

「……」

なんだか全部どうでもよくなって。

そのまま、俺たちは。

まるで甘い蜜に惹かれるように——

「二人とも？ 玄関で何してるの」

「うおあっ!」

「わひゃあっ!」

芳乃ちゃんの声に驚いてバツと離れる。

見れば芳乃ちゃん、とてもご立腹なムスっとしたお顔をしていらっ

しやる。

「あ、あはー……べ、別に何もしてませんよ!? 本当に何もありませんか
らね芳乃様!?」 ねっ! 馨くん!」

「へっ? あっ、うん。そうだな! 何も無いよ! だからその……
ムスつとした顔やめてくれないかな芳乃ちゃん!」

慌てて誤魔化す菜子に合わせて、とりあえず俺も誤魔化す。いや無
理あるだろとか色々思うものはあるが、一度言っただ、引っ込みが
つかん。

……ていうか、あのままだときつと……うん。

——間違い無く、キス……して、たんだろう……なア……

「へえー……」

低く呆れた声に、冷え切ったジト目。芳乃ちゃんのこういう声も好
きだ。

……じゃなくて! そんなこと考えてる暇があるのか無いだろう
!

「なんでもいいんだけど、ウチの玄関で変なことはしないでね。馨さ
んも菜子も、そういうことするなら部屋でやること。いい?」

「はい……」

「わかればよろしい」

そうして居間に戻っていく芳乃ちゃん。

なんとも言えない雰囲気になった俺たちは、何を話すわけでもなく
居間に向かう。

……あれ? 芳乃ちゃんなんか妙なこと言ってたか?

——気のせいだろうよ——

まあ、そっか。

——やれやれ……どちらもどちらか。求めれば答えるクセに——
なんか言ったか。

——いや、何も——

……なんか、腑に落ちない。

それから朝飯を食って、気付けばもう学院に行かなきゃいけない時
間。

とは言え、俺と茉莉は今日は休みだ。将臣と芳乃ちゃんを送る側になろうとは……という感じだが、なんだろう。ちよつと……なんといつか、まあ……うん。

気が早いな我ながら。

「それじゃあ茉莉、行ってくるわね」

「お気を付けて。ご一緒出来ず申し訳ありません」

「いいのよ。そんなに気にしないで」

……と、さつくり挨拶をしていたが、何を思ったか芳乃ちゃん。何か茉莉に耳打ちしている。

「キスの邪魔してごめんね」

「あつ、あれは馨くんが意地悪するからですつ。ワタシからじゃありませんっ！」

「いいや、馨さんみたいなヘタレが自分から手を出す筈ないもん」

「実感こもりすぎでは。芳乃様」

「別に将臣さんに手を出されないうことを不満に思ってるわけじゃないわよっ。」

「まあ、ほら、お二人はそこまでベタベタするよりもーっただけでしょうっ。」

「何処かの誰かの、なんとも言えない距離感のイチヤつきを見せられてああはならないと決意したの」

「あ、あは……それはそのう」

「というか、私キスもまだなのに茉莉は早いわね」

「申し訳ありません……」

「謝らないでよ茉莉。いいじゃない、それくらい積極的な方が」

……何を話してるんだろうな？　なんか茉莉が忙しそうだ。

そう言えば、と隣にいた将臣が不意に声をかけてくる。

「馨、お前玄関で何してたんだ？」

「まあ、色々だよ」

「……そーかい」

なんだその含みのある表情と声は。

お前だつてこの前、人が外出てる時に芳乃ちゃんとしつぱりした雰

困気になってただろう。

「あとで教えて、ムラサメちゃん」

「よかろうご主人。全て教えてやるとも」

「ちよつと!？」

ムラサメ様は卑怯だぞ将臣!

……いやまあ、別に知られたっていい筈なんだけどなア。何故だろ
うさね？

——しかし、安晴さん異常に勘が鋭かったなあ……どうしてわかつ
たんだ？ 芳乃ちゃんとムラサメ様は見たからわかつて当然だけ
ど、その後は俺ら普通だったぞ？

これが大人かね。

と、そんな風に頭を悩ませていると呼び鈴が鳴る。はてこんな朝つ
ぱらから誰なのだろうか？ 近場にいた芳乃ちゃんが扉を開けると、
何故かレナがいた。

「おはようございますです」

「おはようございます、レナさん。でもどうしたんですか？ 何か
あったとか……?？」

「マコからデートをすると聞いたので、大丈夫かを見に来たのです」

「ああ、莱子だものね」

「ええ、マコでありますから」

「ちよつとお二人とも!？」

「それに相手がカオルでありますから」

「確かに。馨さんだからね」

「おおい!？」

なんかすげえ言われ様。

そんなに俺たちって……あー、否定できんわな。

いや待て。なんでレナそれ知ってるの？ 多分莱子だよな出所は。

「なんて言ったのさ莱子」

「だって、いざしてみようかってなったらとりあえず報告しておくべ
きかなって」

「律儀だねお前は」

……まあなんでもいいんだけどさ。

てかさろそろ時間だな。引き止めるのも悪かろう。

「そろそろじゃない？ 学院間に合わなくなっても知らないぜ」

「おっとこれ以上長いすると悪いから、さっさと行こうか」

「そうですね、二人の邪魔でしようし」

「しつかり楽しんでくださいね」

「では、頑張れよ」

そう声をかけると、まるでこれ以上はお邪魔虫みたいな返答をみながらしてからさっさと行ってしまった。

話し声も聞こえなくなり、本当に俺と茉莉の二人つきりに——なっちゃった。

……うん、なっちゃったよ。

「……ねえ、馨くん」

「んあ？」

「やっぱり、やめる？」

まるで、何かを確認するような言い方。ただやめて先延ばしにするとかそういうものではない。

——俺たちは、この機を逃せばきつと、いや絶対に今のままでズルと堕ちていくだけだ。

そんなもの、人間関係としても最悪極まりないし、互いにこの狂気と向き合うことなく目を背け続けるだけ。

立ち向かうしかない、向き合うしかない。

そうしなければ俺たちは、本当の意味で前に進めない。

俺たちにとってお互いの存在が、最後の鎖だ。事態がある程度解決する前の、呪わしき状況に繋ぎ止めているのは俺たち自身だ。

それを振り払うことこそ必要、そしてこのデートで互いに振り切らなきゃ、苦しみ続けるだけだ。

だから。

「やめない。やろう、デート」

「……うんっ」

俺はまるで自分に杭を打つように、その言葉を口にして、彼女もま

た、自らに杭を打ち込むように、笑顔で頷いた。

—— そうだ、結ばれたいとかそうじゃないとかはどうでもいい。

俺たちは未だに始末屋と従者だ。

微かに人の部分を曝け出しているだけだ。

本当の自分とか、そんな大仰なものではないけれど、最後の鎖を外して、本当に始めるんだ。

そう、”人生”って奴を——

……昼過ぎ。

犬になっても困るし、ついでに学院を休んでデートなものだから何も知らん連中に見つかると思えば、違和感の無い時間帯を選んだ俺たちは、ようやく家を出た。

目的地は田心屋。

あそこならそれっぽいことできるだろうという、実に合理的な理由から選んだので、甘いもクソも無いのだが……まあ、それでいいならそれでいいかみたいなの、うん。

隣で歩く茉莉は、あらかじめ水筒を持ってる。そりやなったら困るしな。

ただまあ、デートだったのにその仏頂面は……どうしたもんかね？と、ここで初めて犬になった日の事を思い出す。あれはもはや朝帰りだったけど、確か手を繋いでいた筈だ。

なら——

「手」

「？ 手がどうしたの？」

「出せよ、繋ぐぞ。デートなんだし」

「あ、そう……だね」

どこかぼんやりした声が帰ってくる。大丈夫かねと頭を悩ませていると、掌に彼女の温もりを感じて——いや待て。

温もりはいい。いいんだが……なんで、指と指が絡んでるの？ これ所謂恋人繋ぎだよな？

「そういう繋ぎ方するかお前」

多少の抗議と嬉しさを隠す意味も込めて、ややツンケンした物言いをする。

「恥ずかしいんだもん。」

「だってデートじゃん。今日一日は恋人なんですよ?」

しかし、茉莉は笑顔でそんなことを言いやがった。

顔が熱くなる。そのまま目を逸らす。

なんだこれ、なんなんだこれ。こういう展開かよこれ。

「あは、どうしたの?」

「……見てわかれ」

「はいはい、恥ずかしいんだね。馨くん、本当にそういうところだよ?」

「何が!」

「えへへ、ナイショ」

ニコニコと笑いながら、口に指を当ててそう言う茉莉に、思わず見惚れてしまう。ダメだ俺、本当に今日はダメだ。朝も昼も……このままだと夜もダメそうだな。

……ああもう、これやり直すとか鎖を外すとか以前に、馬鹿になってないか俺……

それからは無言だ。

話が続かない、というかこの状況が心地良くて話す必要も無いと言うべきか。歩幅を合わせて、手を繋いで歩くだけだっというのに、それがとても幸せだ。

けどそんな時間ほど、えてして早く過ぎ去るのは必然だ。気付けばもう田心屋の前にいる。結構な距離があった筈なのに。

「手、離すか?」

「もうちよつと、このまま」

惜しむ声を聞いて、より強く握る。

そのまま戸を開けて――

「いらっしやいませ。ってあれ? 馨に常陸さん?」
キョトンとした顔の芦花さんと目が合った。

「こんな時間にどうしたの？　というか、学院はどうしたのかな」

どうした、と言われてもデートしていると返せばいいのだが……なんでか俺も茉莉も、言い出せない。

「流石にサボりなら苦言を……って、まあ！　そんなにぎゅつと手を握り合ってデートだったんだね！　いやお姉さん気付かなくてごめんね。奥の席でいいよね？　すぐ案内するから」

「へっ？　芦花さん？」

「あつ、あの？」

しかし手を繋ぎっぱなしだったのを見られて、そのまま大人な態度から小悪魔お姉さんの態度に早変わりして、あれよあれよと奥の席へと案内される。

「……えつと、芦花さん」

「何かな？」

「確かにデートしてるけど、やけに嬉しそうだね」

「そりや中々進展の無い二人が学院サボってまでデートしてるんだし、ワクワクしない筈がないよ」

「あ、あの馬庭さん。この事は出来れば内密に……」

「うんうん。わかってるよー」

なんか、スゲーニコニコしながらこうも通りがいいとなんというか逆に気になる。

「さて、ご注文は？」

そして流れるように注文を尋ねる辺りもう楽しそうだ。こんなに楽しそうな芦花さんは中々見たことない。

まあ、楽しそうならいいか。

「ワタシはコーヒーで」

「俺は和紅茶で」

「普段と逆だね」

「まあ、そりや……デートだし」

「待って二人とも。何かデートを勘違いしてない？」

「普段してないことをすれば、それっほいかなって」

すると芦花さんは信じられないものを見たような表情で、俺たちに

対して容赦無く叱責した。

「それならどうして二人はオシヤレをしてないの！ 普段してないことをって言っても、ただ普段着に変わったただけで、たまに放課後ウチ来る時と同じじゃない！」

「……言われてみれば、そうですね」

「つつても、俺たちが普段と違うことをするのって難しいんだよな」

全くの正論なので、頷くしかできない。そんなぼんやりした俺たちを見て、深いため息を吐いた後――

「よしわかった。常陸さん、ちよつと時間もらえる？ オシヤレしよう」

「オシヤレ……ですか」

「お下がりで悪いけど、雰囲気合いそうな服の一つや二つあるからさ。女の子なんだから、可愛く着飾らないと」

「えつと……じゃあ、行ってくるね」

「あー、うん。行つてらっしゃい」

押し切られたのか、それとも乗り気なのか。煮え切らない返事しながら、茉莉は芦花さんに連れられて奥へと向かっていった。

……さて、暇になってしまった。

運ばれてきた和紅茶を飲みながら、どんな服を着てくるのかと、年甲斐も無く期待していた自分に気づき、どこまでも茉莉が好きで仕方がないのだなど、自嘲した。

それから約30分程か。

不意に芦花さんが奥から出てくる。

茉莉は出てこないのは何故か。サプライズ？

「おまたせ、どうどう？ 馨的には期待大？」

「そりや当たり前だよ」

「だつてさ、常陸さん？」

「この格好ではちよつと……馬庭さん！」

はい？

なんだかトンチンカンなセリフが奥から聞こえたぞ？ 多分俺す

「ごい間抜け面してるぞ？」

「どんな過激な衣装着せたの？ 青少年のなんかが危ない感じ？」

「そんなことしないよ！ というかアタシのお古なんだからそんなのあるわけないってば！」

「でも茉莉子の反応はどうもそんな感じだけど」

「ううっ、スースーします……！」

「……待ってて馨。連れてくる」

「へ？ あ、うん」

突撃、すごいよ芦花姉さん。

再び奥へと向かった後、声が聞こえてくる。

「恥ずかしがってないで行かないと、ほら」

「で、でもこんな格好初めてで不安なんですっ」

「大丈夫だっ。常陸さん可愛いんだからさ」

「だからって……」

「馨も悲しむと思うな？ せつかく着替えた常陸さんに期待大なのに〜？」

「なんか俺ダシにされてるんだけど。」

「う、ううっ……わかりました……行きます……」

「なんか折れてるんですけど。」

「というか茉莉子の奴、こんなにヘタレだっけ？ ああでも、いつだか足見たら恥ずかしがってたから、本人はその魅惑のおみ足が見えるのを嫌がってるのかもしれないな。」

「なるほど、そりや芦花さんも俺をダシにするわ。頑固だからなあ、茉莉子は。」

「そうしておずおずと出てきた彼女は——」

「あ、あんまり……見ないで……」

「普段の洋混じりの和装とは全く違って、青と白の清掃な洋服に身を包んでいた。赤いネクタイが中々にチャーミング。髪型も変えて、右側にお団子を作っている。」

「スカートとニーソ（俺は詳しく知らないので間違えてもよくわからんが）の間から見える絶対領域の素肌が……あつ、スカートの裾を」

握って隠しやがった!

「……………やらしいよ……………」

「ごめん」

「そ、それで……………どう、かな?」

「あ……………えっと……………その……………うん」

「似合って、ないよね……………」

「馬鹿言うなお前っ、似合ってるに決まってるだろ。つか俺が言い淀んだのは見惚れてたんだよっ」

落胆したような目線と声を認識すれば、そうではないと声高く宣言したくなるもの。例えそれが自分の恥ずかしい本音であったとしてもだ。

「へ……………っ? そうなんだ」

「おべっかじゃないからな」

「うん……………うんっ」

本当に花の咲いたような笑顔を見て、俺は思わず頬が熱くなるのを感じる。そうした羞恥心からか、彼女から目を逸らしつつ――

「あと、なんだ……………茉莉、綺麗だ」

ポロっと、隠しておきたかった本音が漏れ出た。

「綺麗……………可愛いじゃなくて?」

目を逸らしているのだからないが、声は若干不満気だ。しょうがないだろ可愛いよりも綺麗が先に来たんだからっ。

「不満かよ」

「なんだか、ちよつと微妙な気分かも」

「ごめん」

「謝らないでよ、もう」

呆れたような声を聞き、少し普段の調子を取り戻して、視線を彼女に向ける。普段とは全く違う色の服装に、全く違う髪型。

オシャレってすごいな。普段だって目も眩むほど魅力的なのに、それ以上に引き上げるなんて。この場合は芦花さんの目利きがすごかったのか。

とりあえず、感謝しなければ。

「芦花さん」

「なあに？」

「最高。ありがとう」

「どーいたしまして、って言いたいところだけど……デート中に他の女の子に目移りするのはいただけじゃないなあ」

「女の子って歳かよ。立派に女性じゃんか。ま、気にしてる芦花さんも——」

「可愛くて好きだけども、と続けようと思ったのだが……いやそれはダメだろうと。」

「今俺は茉莉とデートをしている。茉莉の彼氏（代役）なんだ。やべえ代役でも嬉しいんだが？ おい朝のシリアスどこ消えた。」

「……しかしこの失礼な発言をどうやって取り消したのか。それっぽいことそれっぽいこと……」

「——実に少女的だ。なあ茉莉？」

「矛盾してるよ、馨くん」

「え、マジ？」

「……どうせ可愛いとか言おうとしたんでしょ」

「うぐっ……」

「別にいいけど、ワタシだって妬くんだからね」

「わ、わかってるよ」

「ダメじゃん俺。」

「しかしそんな漫才をしている俺たちが面白かったのか、クスクスと芦花さんが楽しげに笑う。」

「そして——」

「なんだか本当に、恋人みたいだね。二人とも」

「……そう、言った。」

「てか言われた。言われてしまった。」

「……だってさ」

「うん……」

「……」

「……」

二人揃って、目を逸らして黙り込んでしまう。

いやだつて……ね？

「純情過ぎないかな。……まあ、いいや。それで何食べるの？」

「なんかそうだな、デートっぽい洋菓子とか」

デートっぽい洋菓子つてなんだよ、というすごく微妙な顔をされてしまう。我ながら何を言ってるやらという感じだが、仕方ない。

「馨くんの食べたいのでいいのに」

「お前和菓子より洋菓子の方が好きだろ」

「覚えてたんだ」

「思い出したんだ」

へへつと笑い合う。

「あー、うん。わかった。なんかそれっぽいね。うん。アタシちよつと今日は糖分控えめにしようかな」

そんなことをボヤキながら、奥へと向かって行く芦花さんを見て、悪いことをしたかなと思いつつも、対面に座る菓子の、その珍しい姿に目を奪われる。

「スースーするとか言ってたけどさ、丈は制服と変わんねえぞ？」

「スパッツ無いのは初めてというか、あんまりないから」

「の、割にはお前の忍び装束はだいぶギリギリの絶対領域だし、しかも露出激しいよな。スパッツ無いし」

「あれは、なんだろう。お勤めだから気にならないのかな。先祖代々だし」

それは知らなんだ。

……まあ機会があればじっくり見せてもらおうかな。

「しかしまあ、洋服ね。本当によく似合ってるよ」

「あ、ありがとう」

モジモジと恥ずかし気に小声で返事をする菓子が大変いじらしいのですが、ご先祖様私どのようなにしたらよろしいのでしょうか。

——抱けば？——

フアックご先祖！

テメエ本当に使えねえな！

——馨がプラトニックすぎるんだよ。てか私に話しかけんな。茉子ちゃん見ろよ——

はい……ごもつともで。

「そのさ、一通りあれこれやった後、どうしようか」

「ね。ほとんど行き尽くしてるし」

「ま、テキトーに回って帰るか」

「そうしょっか」

そんな具合でさっくり決めてからしばらくすると、至って普通の——いや、結構な量のあるパフェが運ばれてきた。多分二人でちょうどくらいか。

「なるほど、デートで定番の二人で半分こって奴だな」

「確かに、ちょうど二人前くらい？ あ、馨くんからでいいよ」

「いいのか？ 好きだろ、こういうの」

「たまには馨くんのそういう顔が見たいの」

「嬉しいこと言ってくれるね、まったく」

じゃあ遠慮無くとスプーンを取って……そこで気が付く。

スプーンが一つしかない。

なるほどなるほど、アレをしろってんだな？ この前は何をやってるやらって感じだったが、今日は意識してそうしろと。なるほど。

ヒョイと掬って、それをズイと茉莉に差し出す。

「ん。口開けろ」

「ワタシのスプーンは？」

「無い。だからほれ」

「それなら、ワタシからやりたかったな」

なんて可愛いことを言いつつ、素直に目を閉じて口を開けて待機する。相変わらず可愛い奴だな、とか色々思いながら食わせてやる。

「あーん」

「あーん……うん、美味しい」

赤みの差した頬で、笑顔を見せてくれる。とても可愛い。

「そっか」

俺も照れてしまうが、まあ頑張って笑顔を見せる。

「スプーンちょうだい」

「え？ 俺も？」

「嫌？」

「……菜子がしたいなら」

「じゃあさせてっ」

「うん」

そう言われたらもう断れない。

大人しく諦めて、俺も受け身になる。

彼女にスプーンを渡すと、そのまま掬うのではなく、俺の隣へと移動してくる。

そうして一口分を掬ってから。

「はい、あーん」

「……あーん」

一拍置いて、口の中に広がる確かな甘さと同時に、絶対的に言葉に出来ない幸せを感じる。

「あは。顔、だらしないよ」

「マジか」

「嬉しかった？」

「もちろん」

「そっか。じゃ、お願い」

「ん。なんだか、恋人っぽいな。こういうのって」

そう言うと、菜子はなんとも言えない表情を見せた後、はにかみながら――

「今日一日は恋人でしょ、ワタシたち。そう言ったじゃん」

そういう言い方はやめると、暗に言われた。つまりなんだ、今日は恋人なんだと。

……嬉しさと恥ずかしさで頭茹だりそうだ。

それからしばらくパフェを食べて、なんとも言えない幸せを互いに噛み締めながら、しかし今日一日だけしかこういうことができるという何処と無い寂しさも覚えていた。

……言えば、確かに、なれる。

彼女もきつと、それを望んでいる。

でなければ今の今までの、あのなんとも言えないアプローチめいたものをする筈がない。

でも、なんだろう。

なんだか、腑に落ちない。

それでいいのか？

まるで弱みに付け込むようだ。

——やはり、俺たちはやり直すべきだろうな。

「それじゃ、デート頑張ってね〜」

「はいはい、頑張りますよ〜」

「ご馳走さまでした」

ニコニコと楽しげに、しかし俺たちがそれっぽいことをしていた時にガン見していた芦花さんに見送られながら、俺たちは田心屋を後にした。

「さて、ぶらつくか」

そう言つて手を差し出すと、菜子は何も言わずにぎゅつと握りしめる。

「うん。……あの、スカート大丈夫かな」

「芦花さんを信じる。大丈夫だ。ただ忍者機動したらパー——いや、まあ、見えるだろうけど。普通にしていりゃいいのさ」

「……はあ、締まらないね馨くん。もうちよつとムード考えてよ」

「悪い、善処する」

心底呆れた声と、ジト目で正論を言われたので素直に受け取っておく。

けれど、洋服の菜子——まるで普段とは別人だ。これなら一目見て菜子と気付く人間も少ないだろう。

ただ時間もいい時間だ。そろそろ学院から帰る奴らが街に出る頃だし、騒ぎになっても面倒なのは事実。

さてどうしたものか。

「ね、鮎食べに行かない？」

「お前ネタねえからってそれでいいのかよ」

「あは」

「誤魔化すな。ま、目標が無いよかマシか。行こうぜ、あそこ」
歩幅を合わせながら、プラプラと歩き出す。

不思議と誰も気付かないものだ。茉莉がよく行っている店の人も、俺を知っている人も、誰一人とて気付いていない。

……まあ、暖かく見守られているという線もあるのだが、どうでもいいか。

しかし茉莉と歩きながら、今俺はあることに気が付く。

……ここはあの串焼き屋に向かうルートじゃない。何も無い、というかごく普通の裏路地だ。人氣がほとんどない。

「……茉莉?」

何を考えている? という意味も込めて、彼女の名前を呼ぶ。

茉莉は応えるように振り向くと、握っていた手を解き、そのまま俺にポストと飛び込んできた。

「ワタシさ」

顔を胸に埋めながら、彼女は小さく呟く。

「今日が終わるの、嫌」

「それは……それは、俺も……俺も嫌だ」

やっと、本音が出てきたような気がする。俺も彼女も――

「……今日が終われば、またいつも通りの――よくわからない関係になるんだよね」

「そう、だな」

「……もう、それでいいんじゃないかなって、ワタシ思うの」

「茉莉……」

静かに顔を上げ、俺と視線を合わせて、茉莉は何処か諦観を纏った声で、言葉を続ける。

「だって、ワタシには芳乃様みたいな勇氣は無いし、馨くんだって、踏ん切り付かないんだよね? だったら、今のままで、墮ちちやえば――」

その言葉を聞いて、もはや思考は置き去りになっていた。ただ反射的に動くように俺は――

「ダメだ」

そう、否定していた。

気付いてしまった？ 気付かれていた？ だからどうした。そんなものは些細な話だ。

心底驚いた表情の彼女を見て、自分たちがどうなりたいたいのか、どうあるべきなのかをはっきりさせなければならぬと、強く思う。

「ダメだ菜子。それじゃ俺たちは堕ちるままだ。そんなの……そんなのこそお互いに不幸なまま、苦しみ続けるだけじゃないか」

「馨くん……」

「俺思ったよ。今日さ、その服に着替えたお前を見て、お前の色んな顔も姿も見たいって。もう姉とか妹とか兄とか弟とか、そんなところで妥協なんてお互いにできないって」

だからと。

今度はふざけてじゃなくて、はっきりと理由を——彼女を離したくないという想いを込めて肩を掴む。

「だから俺、今踏ん切り付いたよ。ありがとう菜子」

「じゃあ——」

喜しさの宿る声に、驚きながらも嬉しさの笑顔を見せる菜子を正面からはっきり見て、俺は遂に——

「やり直そう、二人で。今度こそ。だから——！」

「……うんっ」

「……だから、そのう……えーっ……」

裏路地。

二人きり。

ほとんど密着して後一步。

そして見つめ合っている。

役満であるのにも関わらず、何故か……言葉が出てこない。恥ずかしいだとか、多分色々混ざってると思う。

期待に満ちた表情の菜子が物凄い呆れ顔になっている。

「馨くん？」

ただ名前を呼ばれただけなのに、なんか物凄く悪いことをしたよう

な気分だ。いやめつちや悪いことをしてる。

「えっ!? あっ、いや、そのな! だから俺は、そのお前が、えつと……
その……あー……」

「ちよつと?」

「……………」

——ホント、どうしよう。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」ねえってば

言葉が、出てこない……

「……………」

「……………」待ってるんだけど

だから俺は——

本当に情けないことだが——

「ええつと……友達から、やり直しませんか……?」

死にたくなるほど情けない、そんな……あまりにも無様過ぎる告白
をした。

「……………」友達?」

「うん……………」

「ふーん」

ニヤリと茉莉が意地の悪い表情を浮かべる。

そしてそのまま——

「あは……その先、言ってくれないんだ」

ヒョイと背伸びびして、耳元でそう囁いた。吐息と囁き声がめちやエ
ロい……じゃなくて!

顔を離して目を逸らしながら、

「言おうと思ったけど言えなかったんだよ!」

なんともさもしい言い訳。

クスクスと笑われてしまい、顔を熱を感じながら名状し難い変な声を出す。

そして笑いながら茉莉は――

「バカ」

「うぐっ……」

「ヘタレ」

「でっ、でもさあー!」

「ワタシのなけなしの勇気を出した告白はダメだって言ったクセに、自分はダメダメな告白だなんて酷いよ馨くん」

「え。あれ告白だったの!? 気付かなかった……」

「は?」

「あつ。いやごめん!」

「もう」

まるで子供を見守るような生暖かい声と表情である。

さつきまでのムードは何処へやら。俺たちはあまりにもアホらしい、すつとどどっこいな雰囲気に変わり果ててあーでもないこーでもないというザマ。

なんと、情けないことか。

うぐぐと情けなさの後悔でぐちゃぐちゃになりながら、しばらく何も言えず何もできない状況が続く。

そんな中で、茉莉はため息を吐いてから優しく言った。

「いいよ、ワタシ待ってる」

「へ?」

「友達で待ってる。だからちゃんと伝えて。あんまり待てないけど」

「……ありがとう」

でも、と茉莉は続ける。

「待って欲しかったら、ワタシのお願いを聞いて」

「いいよ。俺にできることなら、なんでも」

”なんでも?」

「……できることならだからな」

言葉を間違えたかと考えつつも、しかし茉莉の頼みならばよっぽど

の無理難題でもなければおおよそ叶えてやるつもりだ。何せ俺のあまりにも情けない無様を見た上で待つてくれるのだし。

すると茉莉が急に赤くなつてモジモジし始める。

……なんだ？ おいまさか抱けとかそういうのじゃないよな？

勘弁してくれよ？ そういう展開なら勃つには勃つけど、全然気乗りしないからな？

そして。

「……キ、……キス……して……」

消え入りそうな声で、そんなことを言つてくれた。

「……キスつて、あのキス？」

「ちゅー、だよ」

「マジで言つてんの？」

「本気だもん」

「なんで？」

「恋人の時間が、終わっちゃうから」

はつきりと目を見て、けど顔は赤らめたままで、茉莉は俺に向かってそう言った。

恋人の時間が終わってしまう——確かにそうだ。これくらいしなければ素直になれない俺たちが、次に素直になれるのはいつなのか。

……それにこいつが、この服を次に着てくれるのはいつなのか。

頬の熱を感じながらも、とにかく俺は返事をする。

「わっ、わかつたけど……その、誰かに見られたりとかしないか？」

「あは、気にするんだ」

「そりゃあ、今は俺の……恋人、なんだし……」

「……ズルいよう」

「ズルいのは茉莉だっ」

赤面しながらはにかむ彼女から、目を逸らしながら呟いて、俺は深呼吸を一つ。

そうして視線を元に戻した時、見えたのは——

「おい端末。また犬になつたぞ、この小娘」

「空気読みやがれよオツ!!」

わふう、と一鳴きする子犬の茉莉と、それを抱えて服だ下着だを持った虚絶。

……もう、なんだよクソがあ……

「……キスもお預けかよ」

「だからあれほど強気で行けと言ったろうに。して、どうする。湯を使うか？」

「街中で素っ裸はマズい。とりあえず戻んぞ。茉莉、いいよな？」
「わんっ」

そうして締まらない俺たちは、ガツクリと肩を落としながら、朝武家に帰還するのであったとき……

双影

「ふむ、外れか」

黒は奪い取った憑代の調子を確かめて、静かに自分の期待から大きく外れていたことを落胆する。

「倅であるのならば、と思ったが……基礎も出来上がっていないとは」
やれやれとため息を吐きながら、むうと唸る。この性能では確かに満足しないが、必要分は十二分に備えている。夜遊びとでも言い訳しながら調査をするには、ちょうどいい憑代だが――

「近過ぎる、というのも難点だな。さてどうしたものか……とりあえず、今日はこれを使う――いや、待て」

そこでふと、自分があの存在から奪い取っていたものを思い出す。そうか、あれを使えば都合良く動かせる上に、拠点としている憑代に危険が及ぶ訳でもない……

「これを手足として扱うのは、目を逸らさせてからだな……」

ポリポリと頭を掻きながら、憑代の身内が接近してきたので、意識を即座に戻して、自身は闇へと沈んでいった――

――やはり、私では奴のようにはいかな――

――実体の無い虚絶だからこそできる芸当、そして虚絶の外殻である京香だからこそできる芸当……なればこそ、殻の器が余計に欲しくなる――

――どうやって開けたものか――

――そして、我が剣をどう取り戻したものか――



帰ってきて、お湯かけて、それでいつも通りな朝武家の居間で俺たちはとてもぐったりしていた。

「……なあ、茉莉」

「何？」

「なんか、ごめん」

「いいってば。ワタシだって子犬になっちゃったんだし……」

——ぐったりしながら、お互いになんかもう……萎えてた。

茉莉の顔を見れば、完全に疲れ果てているのが如実にわかる。あと可愛い。俺は早急に茉莉ニウムを摂取しなければ死に至る。が、茉莉ニウムを摂取しようとする社会的死が待っている。悲しきかな。

「アホなこと考えてるでしょ」

ムスツとしたジト目と心底呆れた声。

そんなにわかりやすいかなあ、俺って。あ、わかりやすかったわ。恋心バレバレだったわ。うん……

それよりも萎えに萎えまくって全然キスの雰囲気でもないんだが、どうしたものか。

「キスどーするよ」

「今日一日は恋人、つまり午前零時を超えなければセーフだから」

「夜這いしろと?」

「なんでそうなるの!?!」

「いやご先祖様が前々から夜這いでもした方が早く済むぞって五月蠅くて」

「まあ、でも……夜這い、してもいいけど……」

「お前な、困るよそういうの……」

彼女の満更でもなさそうな困り顔は、淡い朱色に染まっている。声そのものは渋々といった感じだが、視線は若干の期待と俺に対する「どうせ夜這いなどできないのだろう」という呆れに満ちていて、君が好きになった男がこんなにも情けない男ですまない……と真剣に思う。

——というか、いざそういう関係になった時、据え膳を用意されても食えない男じゃなからうか、俺よ。

なんか、全然手が出せない気がする……大丈夫か? こんな男で失望されてそう。

「まあ夜這いかどうかはともかくとしてだ。だって芳乃ちゃんの部屋だしできることならしたくない」

「ワタシが馨くんのいる部屋に移ればいいだけなんだけどね」

「それじゃ逆夜這いだ、はしたないからやめろ。第一夜這いつてのは基本的に男からするものだったっの」

「なんで詳しいの」

「ご先祖様」

「でもいざそういう時になったら夜這いしてくれるの？ 馨くん絶対できないでしょ」

「……否定はしない。でも絶対は訂正しろ。俺だつて男だ。それなりに欲求は……あー……どうだろ」

ちよつとそういう場面も想定してみる。……うん、全然手を出せなくて逆に菜子に食われそうな気がしてきた。

まあ色々あつたとは言え、俺も年相応の男。致したことの一度や二度は必然的にあるが……基本的に逃避目的だもんなア。

なんか、まともに性欲に従ったこと自体が無いからどうしたらいいのかね。

「ごめん、期待に添えないかも」

「どーせそんなことだろうと思つてた」

「……まあ食われたら食い返してやるさ」

「受け身なのは変わらないんだ。あは、可愛いね。そういうこと」

「うっせーやい。で、真面目にキスはいつするんだよ」

「うーん……夜？」

「夜這いじゃないならおやすみのキスでもすりやいいのか俺は」

「あ、ちゃんと唇だよ？ 頬とか額とかで日和らないでね？」

「わかつてるよ。流石に日和らない」

……流石に、そこは彼女の求めている行為を理解しているつもりだ。

しかしまあ……夜……ねえ？ ムードこそあれど、ちと難しいような……いやでも菜子が欲しがつてるんだし頑張るぞ俺。やるぞ俺。

もう見られても仕方ない。兎にも角にもキスをするぞ。

……いやそれでいいのか？ 菜子のそういう顔を誰かに見られるのは嫌だな……

「……ちよつと考え過ぎて疲れた。茱子ニウムを摂取させろ」

「なにそれ」

「なんか」

茱子ニウムなる未知の物質を聞いたご本人、大変奇妙な顔をなさっている。それまるで、そう……なんだろう。憧れの人の私生活がだらしなかった時みたいなの、ジト目ともなんともつかぬそれだ。

だが次の瞬間には、そんな呆れた状態から一転、まるでネコの口のように口をニンマリさせてから、両手を広げて――

「はい」

「はいじゃないが」

「好きなだけ摂取していいんだよ」

え？ ……いいの？ マジで？

俺合法的に茱子ニウム摂取できるの？

許されるのか？

「じゃあ……うん。摂取する」

しかし考えてもみて欲しい。

自分が本気で好きになった女が、蠱惑的かつ魅力的な、赤みの差した優しい表情と共に両手を広げて待っている……これに抗える男がいるか？

――いやいやない。

そして俺も抗えず、素直に茱子に近づいていく。そのまま彼女との距離がほとんど無くなった時――

「……っ」

意を決して、俺から茱子を抱き締めた。

「あ……」

小さく溢れた、啞然とした声。

けれどそれよりも早く、俺の背に手が回されている。

「なんか、いいな、これ」

「うん」

「……あのう、俺に摂取させてくれるんじゃないかなかったですかねエ？
だいぶだらしない顔してるぞお前」

顔を合わせてみると、茉莉子の蕩けた表情がよく見える。さつきまでの誘う表情とは大違いだ。

……まったく、これじゃどっちが撰取しているのかさっぱりわからんなあ。

「好きな人を間近で感じられるんだから、当たり前だよ。あは」

「……やっぱホントごめんな、カツコつかない男で」

「ちゃんと見せるべきところで、甲斐性を見せてくれると嬉しいな。主にワタシ相手に」

「頑張る」

けど……茉莉子の匂いだ。

茉莉子の匂いしかしない。心地良い。

叶うならずっとこのまま……

——そんな時だった。

机の上に置いてある俺の携帯電話が鳴り響く。

特に離れることなく、俺は彼女の背に回していた腕をそっちに伸ばして確認する。

……電話の主は将臣。

「もしもし」

少しばかり声が強張る。

まさか、まさかと心が焦る。

『馨、今いいか』

「どうした」

やけに呼吸する音が聴こえてから。

『……芳乃に、耳が生えた』

——言葉の理解を、脳が拒絶した……

日も暮れる頃。

将臣とムラサメ様と共に帰ってきた芳乃ちゃんの頭には、犬耳が生えていた。

「……何があつたんだ？」

「え、えつと……」

「その、なんと言いますか……」

何かあったのかと聞いてみれば、二人して赤面して顔を逸らす。

ふむ、と一つ眩き、隣にすわ……いや待て、何故お前は腕を絡めてるんだ茉莉。いいけど。まだ恋人だからいいけど。いつそ毎日やってもいいけど。

「茉莉さんや」

「なんでしよう馨くん」

気を取り直して彼女と顔を見合わせながら尋ねる。

「A？」

「B近くのAかと」

「細かいな」

「芳乃様は結構スケベなので」

「茉莉?! 私そんなじゃないもん!」

「ていうかちよつと古い気がするなあ、恋のABCって……」

わちやわちやした雰囲気及早変わりしながらも、しかし、俺たちの間には何とも言えない空気があった。

実際、恋人関係になったことで、将臣と芳乃ちゃんの心労は測れないものとなっているだろう。

だが、キスでもして耳が生えたと仮定するならば……

「ムラサメ様、多分これは肉体的接触による反応だと思うんだけど……将臣ってなんか穢れと近かったことあった?」

「いや、あの夜の後であつても湯はしっかりとかけた。残っている筈もない。それよりも馨、お主の方は何かあつたか?」

「俺こそ何も……けど、何か忘れてるような……」

確か俺は核心に近づいたことがあつた筈……だ。

思い出そうとしても、思い出せない。

あの憑代を一つに集めようとした夜のこと何故か、異常なくらいに臆げになっている。

覚えているのは操られたレナと、無数の崇りに……それから狼型の崇りとの戦闘くらい。

……何か、確信を得ていた筈だ。

でなければレナの記憶を見ようとはしない……のに、何故だ？ 何が足りない。

俺の記憶は何処へ消えた？

いや情報は覚えている……なら思い出せ、整理しろ。

犬神、長男、二つの崇りに性質の違う呪い——!?

待て。

待てよ待てよ。

声は二つあった。

崇りへの殺意は二つあった。

……俺たちは基本的に、間違っていた……？

「……殺された犬神を奉って鎮めただけで……長男の呪いそのものは

どうにかしてない……？」

ふと漏れた呟き。

けどそれはしつかりと響いていた。

でなければ、将臣も芳乃ちゃんも茉莉もムラサメ様も、こんなに驚いた表情はしない。

「二つの憑代、出てきた犬神らしきもの……あの憑代は清められてるのは事実。と、なれば……消されかけてる呪いが何処かの何かを通して干渉して来ている……？」

そこまで言って——

「……そもそも……」

茉莉が。

「……なんで殺されたのは犬神だと、資料には書いてあるんでしょうね……？」

——俺が知りたかったことを、呟いた。

犬神。

崇り神となつてしまった神。

朝武の長男に殺された存在。

……だが何故、俺たちはそれを自然に受け入れていたのだろうか？

呪ったのは長男で、憑代を一つ戻せと怒り狂っていたのは犬神。

——根本的な話だが。

どうして殺されたのが神だと、はつきりと記されているのか？

「……なるほどね。確かにそれは疑問だ」

仕事を終えて戻ってきた安晴さんも交えての、再びの意見交換。

「言い方は悪いけど、将臣君と接触した事によって芳乃に耳が生えた……という事だね？」

「はい、確かにそうなんです」

「前例なんてあるわけがないけれど……耳そのものは穢れに反応するものの筈だ。普通なら……でもそれはあり得ない」

——穢れが存在しない筈の将臣との接触によって発生するなどあり得ない……

澁い顔をしながら、安晴さんは茉莉子を見る。

「茉莉子君、君は本殿で犬神の形を取り戻した崇り神と接触した」

「はい」

「……そして、馨君。君は呪いそのものはどうかしてない可能性がある、と考えている」

「……そうです。巫女姫が短命である事と崇り神の存在は、同じものが根底にあると辻褃が合わない」

沈黙が居間を包む。

「でもムラサメ様によれば憑代の穢れは祓われ、呪いと呼べるほどのものもなくなっている……そうだね芳乃」

「うん。だからどうしても答えが見つからなくて……」

「正直、この辺りの事柄が専門外な僕が言うのもアレだけど……芳乃に干渉している、というよりもこれはサインなんじゃないかなと考えているんだ」

サイン？

……それは考えたことがなかった。

確かに俺たちは呪いだとはかり考えていたが……言われてみれば不思議なものだ。

意外そうにする俺たちを見て、安晴さんは言葉を続ける。

「崇り神が強力になればなるほど、耳も実体を得ていくけど、別にそれ

が生活に支障が出るほどの問題をもたらした……というわけじゃない。イヌツキは周りからの評価だしね。確かに秋穂も、誰にでも見えるようになったことが一度や二度あったけど、それで何か、という事はなかった」

彼の言葉を黙って聞き入る。

「楽観的と言われればそこまでだけど、それは……ある意味で犬神からの警告なんじゃないかな。終わっていないとかそういう。耳と祟り神は連鎖していたこと、そして憑代は清められた結果、祟り神ではなく犬神の意志を持ったものが現れたことから考えて、つまり……」
そこで一旦言葉を区切り、とても言いづらそうにしながらも、しかしその迷いを飲み込んで――

「将臣君に何か、良からぬものが隠れているのかもしれない可能性もある。正直疑いたくなんてないけどね……可能性は可能性だ」

彼なりの考えを述べた。

それを聞いて将臣は重い顔をしたが、しかし次の瞬間には迷いを捨てるように言った。

「俺、一旦この家を出て行った方がいいですかね」

「っ、ダメです！」

誰よりも早く、芳乃ちゃんが将臣の手を取ってまで止めた。

焦り切った表情というよりも……これは腹を決めた表情だ。

「出て行ったら余計に苦しむだけだから、ダメですっ」

「でも……」

「でもじゃありません！　そもそも私は巫女です！　確かにあなたの恋人……ですけど、それ以前にお祓いとかそういう事には慣れてます！」

なーんか、お熱い雰囲気。

渋る将臣を逃がさないとばかりに顔を近づけて芳乃ちゃんは続ける。

「そんなに信用無いですかっ」

「そういうわけじゃない！　でも俺に何かいるなら――」

「何かいるからこそ私の側から離れないでください！　離れたら相談

に乗ることも、被ってあげることもしできないじゃないですか！」

……あつ、これ俺たち蚊帳の外だわ。

面白くなさそうだけどまあ……みたいな顔をしているムラサメ様が怖い。

「将臣さんから離れたら……寂しいんですよ、私だって……」

「芳乃……」

「——だから、今ここではつきり言います。責任も何も感じないで、ただ私の側に……ずっといてください。恋人として、婚約者として」

「……わかった。俺いるよ、ずっと」

……顔を見合わせてちやつてさ。

人の恋路をマジマジと見つめることになろうとは……って奴だが、こりや砂糖吐きそうだ。

芦花さんには悪いことしたなあ。後で謝らないと。

「あの、お二人とも……？ 顔を近付けるのはどうかと……」

「わあっ!？」

「ひやつ!？」

茉莉に水を差されて、二人の世界から帰還する。顔を真っ赤にしてまあ可愛らしいこと。

そんな二人を見て、それから俺に視線を向けて呆れ返る茉莉。ムラサメ様は色々と複雑そうな顔をしているが、それでも何か嬉しそうだ。

んで、目の前で娘が彼氏とイチャついてる姿を見た父親殿は。

「うん、二人とも熱くなるのはいいんだけど、時と場所を考えた方がいいよっ。」

「ご、ごめんなさい」

「別に謝らなくてもいいよ。あつ、ここはあれかな？ 君なんか娘はやらないぞ！ って典型的な親バカをやればよかったかな？」

「お父さん、そういうキャラやっても全く似合わないと思うけど……やってみたかったの？」

「え？ そうかい？ ……そっかー、似合わないかー……」

訝しむ芳乃ちゃんに、シヨックを受ける安晴さん……楽しそうだ

なアおい！

肩身狭いぞ俺たち。

「まあ、なんだ将臣君。ちゃんと芳乃の側にいてあげてくれよ？」

「もちろんです。俺は彼女の婚約者なので」

「ううっ、なんか恥ずかしくなってきた……」

向こうでは男二人がガツチリと握手して、渦中の芳乃ちゃんがさっきの言動を思い出してか顔を赤くしている。

なんだこれ。

そんな風にボケーっとしてると、ムラサメ様がいきなり眼前に現れる。ムスツとした顔は何処か面白くなさそうで、まあつまり妬いているのだろう。ジェラッてるのだろう。可愛い。

「馨、吾輩に構え」

「茉莉みたいなこと言わんでくださいムラサメ様！」

「吾輩は寂しいと消えるのだ」

「俺じゃなくて将臣に言ってくれよ!？」

「今ご主人は芳乃とねんごろじゃ。ふりー……？　なのお主だけじゃろ」

「それは、まあそうだけど……そうなんだけど……ちよつと待っててくれよ。ムラサメ様」

フリー……とは言い難い。

何せ俺は茉莉に予約を取られた、というかほとんど茉莉は俺を取る気だ。

多分早めに甲斐性を見せないと、男が格好付けるべき場面全てにおいて俺が茉莉の男にされる。

……いや何言ってるんだと思うかもしれんが、これは極々単純な男心の話だ。

好きな女にはカッコいいとこ見せたいという気持ちに偽りなど存在しないのである。

けれどまあ、醜態を晒しまくってるんたけどネ……

「……まあ諸々の理由含めて、将臣はこの家にいた方がいいのは事実か。お前、自分が厄ネタだと思ってるみたいだが、元々そっちのお祓

いだなんだの方が専門だしな、ここ」

「そうなんですよね。忍者が従者ですけど」

「ま、何かあっても馨も常陸さんもいるし、確かにここにいた方がいいんだらうな」

「元々出てけなんて言うつもりもなくて、この家にいた方がいいって言うつもりだったけどね」

……決め手は芳乃ちゃんの言葉だろうけどな。俺も菜子にあれ言われたら落ちる。

「まあ今日はとりあえずみんな休んだ方がいい。明日からはまた資料だなんだと頭を回すことになるからね。それにまだ菜子君の問題も……」

何故かそこで安晴さんが言葉に詰まった。

……あ。

今更思い出した。

俺たちのデートの成果、完全に言うの忘れてた。

「ご、ごめん二人とも！ 芳乃と将臣君の事で頭が一杯になってたんだ」

「いえ、別に謝らなくても。ワタシより芳乃様と有地さんの方が大事ですし」

「して、お主らでーとしたのだろう？ どうであつた。何か変化は？」

急にジツと視線が集中してきて身構えてしまう。芳乃ちゃんも興味津々といった感じだ。耳の問題はどうした。

いや、何か変化は……というか変化しかなかったんだけど……

困りに困つて菜子を見る。

菜子も俺を見て、仕方ないと言わんばかりにため息を吐いた後――

「あは、皆さん聞きたいんですかあ？ やらしーですねぇ……」

「……………え待ってくれ菜子」

蠱惑的な表情でそうぶつ放したので、思わず口を挟んだ。

「なんですか？ そんな鳩が豆鉄砲を食ったような顔して」

「そんなことなかったじゃん」

「ふーん、そんなこと言うんだ。色々したし、してくれたのにな？」

「主語を入れる主語を！ 無駄にエロチックに物を言うんじゃない！」

「でも一番肝心なことはしてくれなかったよね」

「なっ!? あっ、いや、それ……は、そのう……えっと……し、仕方ねー
だろ……っ」

顔が熱い。

パイとそっぽを向いてしまう。チラッと視線で四人はどう反応してるのかを見てみたら。

——無言。そして視線が痛い。

普段通りのやり取りでしかないからか、判断に困っているようだ。

……ならば、ここは俺のプライドを守るために——

「まあ本当の事を言いますと、ワタシたち友達からやり直すことにしました」

「……うん？ それだと常陸さんと馨が付き合ってたような……？」

「ええ。代理とは言え一日は恋人ですので」

「待つて菜子。もしかして肝心なことって……」

更に視線が集中する。

……やばい、バレかけてる。どうしよう。こうなりやヤケだ。

有る事無い事言いまくってやるぜエツ!!

「いやほら、恋人なんだから区切りは必要じゃない？ だから改めて友達からやり直しましょうってお話であって……」

「はーん……っ？」

芳乃ちゃんの相槌が怖い。

「だってよ、今までは姉だか兄だか弟だか妹だかよくわからねえ立ち位置なわけじゃん。そいつをはっきりさせようとしただけだよ。それに加えて恋人との別れもやっときゃ、犬神もなんかアクション起こすだろうって算段さ。なあ菜子」

「……ヘタレ」

「あ？」

「なんでもないっ」

「……変な菜子だな」

……ヘソ曲げちまった。

茉莉もプイとそっぽを向いてしまう。実際胸張って恋人になりましたとは言えないわけだし、何も変な事ではない筈だが……？

「今のは馨君が悪いね」

「うむ、馨はもう少し察してやるべきだ」

「よくわからないけど、なんか常陸さんに謝っておいた方がいいんじゃないか？」

「ほーん……」

なんでか知らんが安晴さんとムラサメ様からは俺が悪いと言われ、将臣からは妥当な案を言われ、芳乃ちゃんは低い声とジト目で俺を見るばかり。

……いや、ホントなんで？

結局その後、将臣と芳乃ちゃんは存分にイチャついて、俺たちは砂糖を吐きながらそれを見ていた。

……いや、暗い雰囲気は何処へやら。何が起きようとも絶対に解決してみせるという意気でなんかも熱血的な。

芳乃ちゃんだって耳なんざ大して気にしてないし、将臣だってなんか覚悟決まってそうだし。

で、俺はというと風呂から出て後は寝るだけなので、今は借りてる部屋でボケーっとしてる。

いや。

ボケーっとしている、というよりも。

本気で夜這いするかどうか悩んでいるのだ。

だって、結局キスは有耶無耶なままだし。

……どう思うよ。

——それ私に聞くウ？——

いや、だってさ。したいし、するつもりだよ俺。でもよ、無理だろ。今は。

茉莉は芳乃ちゃんの部屋で寝泊まりしてるんだぞ？ いくら将臣と芳乃ちゃんが完全にイチャコラ決めて同じ部屋に行ったとしても

き。

——いいじゃん。その隙狙つてさ——

……何してんだろって気になるでしょ。流石に俺、幼馴染の女の子の部屋で恋人とイチャつきたかねえよ。

——あー、まあ……うん。そいつあアレじゃん？ お疲れ？——

だあーから聴いてるんだよ！

別に連れて来たっていいんだけどさ、なんかそれだと……うん。情けない以前の話じゃねえかなど。

——ムード無いのは事実だね——

だろ？

だから困ってんだよ。

——ふーむ……つと、来客みたいだよ？——

はあ？ と聞き返す前に音も無く扉が開く。そんなことが出来るのは忍者くらいなもので、まあつまり——

「来ちゃった。あはっ」

「来ちゃったじゃねえよ、ったく……」

寝間着姿の茉莉が視界に映る。

悪戯っ子のような笑顔を見せて、片手に枕を持って……枕ア!?

いや待てお前ここで寝る気かよ!?

「……寝るの？ ハニで？」

「ダメ？」

「っ、好きにしるよ」

不安そうな声で言われてしまえばもう断れない。

落ち着け俺……俺はヘタレだ、バカだ、肝心なところで送り狼にならないチワワだ……女の子にカツコいいところを見せられない子犬なんだ……よしっ！

——何がよしだよお前!?!——

うっせえ!! 今の俺は完璧だ! 無敵だ! 最強だ! 女の子に手を出せない、据え膳出されても食べられないダメ男なんだあーっ!!

——どう考えても食う場面だろここオ!?!——

芳乃ちやんと将臣大變！

茉莉も大變！

そしてまだ正式に付き合ってもいない！

一日恋人とは言えども限界はある！

あと俺は今日はそういうことしないって決めた！

以上！

——律儀！ もっと男見せろよ！——

だアつてろーオツ！！

「よいしょつと……」

「と、隣か……」

「恋人だからね」

「だな、うん」

当然だが、布団の上に座ってボケーっとなっていたので、茉莉が俺が使っている布団の上に、しかも俺の真横に座ることとなっている。

……めっちゃいい匂いする。

それよりも、寝間着の茉莉を見るのは初めてだけど——なんだろうか、普段より無防備に見えて、女の子って感じがする。

「……」

「？ なあに？」

「いや、見惚れてた」

「あは。素直だね」

「……二人きりだし」

クスクスと笑う茉莉。

こんなにも可愛いが……いやマジで可愛いな。

窓から差し込む月明かりが普段とはまた違った魅力を引き出している。

——急に肩に重みを感じる。

きつといつぞやのように寄りかかっているのだろう。

「馨くん、首筋噛んでいい？」

「なんだ急に。猫みたいだな」

「猫……あむっ」

寄りかかっていた体勢を崩して、そのまま俺の正面からもたれ込むようにして、首筋を噛んでくる。ガジガジ噛まれるというか、甘噛みだなこりや。

「本当に噛む奴がいるか」

「……でもまあ悪くない、かな。うん。」

ゆっくりと左手で彼女の髪を撫でて、不意にそのおみ足が目に入る。

悪戯心に火が付いた、とでも言えばいいのか？　ともかく俺は無心にも等しい精神状況でゆらゆらと足に指をつーつと這わせた。

「ひゃあ!？」

「おっ、いい反応」

噛むのをやめて離れる茉莉。

足を触られるのは恥ずかしいらしく顔が赤い。けれど噛む方がよっぽど恥ずかしいと思うんだが。

「もう！　女の子の足に気軽に触っちゃダメだよ」

「いや理不尽だな。お前噛んでるんだから足触っても文句ねえだろ」

「うっ……でもワタシが気になるの」

「気にする仲かねえ？　ほら、こっち来いよ。意地悪しないからさ」

「……ホント?」

「やらないって」

またおずおずと隣に……ではなく正面に戻ってきてやってっぱりもたれかかってくる。やっぱり猫みたいだなと思いつつ、彼女の背中に片手を乗せる。

「……好き、大好き」

「そっか」

「やっぱり待てないかも。言葉にしたら溢れ出して、止まらなくて、溶けちゃいそう」

「そりゃ困るな。カッコつけられない」

「でも馨くんのカッコつけてるとこ見たい」

「じゃ我慢してくれ。な」

「……うん、ちよつとだけなら」

……ああ、そういやなんかもう色々順序があれだけど……どうせ二人きりだし。

今……かな。

「茉莉」

「？」

彼女と目が合う。

相変わらず吸い込まれるように綺麗な目だ。

「あー……つと、そのさ、ほら。約束」

「……約束？」

「言い出しっぺのお前が忘れるかね」

「あつ！ ごめん、すっかり忘れてた。芳乃様の耳の話が、やっぱり強くて」

「まあそうだよな。てことはあれか？ お前もしかして……来たいから来たのか？」

そう尋ねれば、すぐに顔を真っ赤にしてモジモジとしながら、視線を逸らして小さな声が聞こえる。

「そつ、それもあるけど……ほら、恋人同士のお二人だからワタシお邪魔かなあつて。有地さんにお側にいてあげたら？ みたいなこと言っただし……」

「まあ、あの二人踏み切れれば躊躇い無くなるのに、するまでが長いもん
な」

いや待て。

それなら、将臣がそうしなかった場合はどうするんだ？

けど茉莉はこの家で一番早くに起きる。ならバレもしないか。

「……ま、いいよな」

「うん……」

どちらから、というのは野暮な話だ。

気持ち的には俺からだった筈だけど、実際にはなんてわからない。

「……んっ」

気付けば茉莉の香りと、茉莉の感触しかしてないんだから。

唇に暖かい感触。

強いて言えば、茉莉子の味がした。

とても一瞬で——けれど永遠とも思えるような。

この歪だった関係に別れを。

もう一度歩き出す為に。

必ずの再会を誓って。

今更だけど、やっと。

「あは……キス、できたね」

「……そう、だな……できたな」

ゆつくりと離れる。

はにかむ彼女が可愛くて仕方なくて、もう一度と求める気持ちもあるけど、それを何とか押し留めて身体を横にする。

……ただ恥ずかしくて、顔が合わせられないけど。

「おやすみ、茉莉子」

「おやすみ、馨くん」

隣に温もりを感じながら、瞼を閉じて、なんとかして寝ようと努力した。



……茉莉子は確かに完璧に抜け出した。

音も無く抜け出したが、一つだけ失念していた。

(……茉莉子がいない？ 何処へ？ ……まさかね)

何の偶然か、芳乃が目を覚ます可能性があったことを。

もちろんデートで何もなかったなど毛頭考えていないので、芳乃はいそいそと寢室を抜けて向かう。

もちろんその先は……

「将臣さん？ 起きてます？」

「……んん？ そろそろ寝るつもりだったけど」

将臣の部屋だ。

何のためにと問われれば。

「茉莉子が抜け出して、多分馨さんの部屋に行ったと思うんですけど」

「見ちやうの?」

「何もなかったみたいなの雰囲気でしたけど、絶対に嘘です。二人きりになった菜子が行動しない筈なんてないんだから」

「確かに。まあ見るだけ見てみようか」

(……ごめん常陸さん、馨。好奇心には逆らえない)

こうして共犯者を一人確保した芳乃は、将臣と共に静かに移動する。

「……ほう、何やら面白そうなことになってるのう」

そんな二人に気が付いたムラサメもまた、二人を追いかける。

ここに三馬鹿結成せり。何の障害も無く部屋の前まで辿り着いたが、扉は閉まっけていて、開けようにも気付かれないようにというのは難しい。

「ひゃあ!」

(今だ——!)

中から菜子の嬉しいのか恥ずかしいのかわからない悲鳴が聞こえた瞬間、神がかった技と速度を以ってして隙間を作り上げる。

少しというには結構な幅だが、この部屋の扉はやや調子が悪く、ただ雑に閉めただけではこれくらいの幅ができるのが普通だ。

(わあ……俺は芳乃を甘く見ていたかもしれない)

かなりアグレッシブな芳乃を見て、もつと色々な芳乃が見てみたいと思う自分が如何にバカかを自覚しつつ、まるでトータルポールのような構図になりながら覗き込む。もちろんムラサメは宙に浮かんで覗いている。

つまり芳乃を一番下に、将臣、ムラサメという構図だ。

それでやるのが覗き。実に年相応のバカバカしさに溢れた事だ。

そしてそのやり取りを見続けるという事は——

必然的に彼らが唇を重ねていることも目撃するのであって——

「……えっ、何あれ。なんでそんなにラブロマンスみたいな感じでキスができるのよ菜子く!」

「ま、まあまあ落ち着いて。多分寝たと思うけどほらさ」

「わかってますっ。わかってますけど！ 私たちはほら、なんと
いうか……」

（まあ言っちゃあれだけど、やらしい……と言えそうだったなあ）
「いや、接吻でやらしくなるなどという接吻じゃったのかお主ら。
ご主人、まさかと思うが舌を入れていないじやろうな？」

「入れてない！ というかそんなことなんてまだできない！」

結局。

居間に戻った三人は、ある意味で衝撃的な光景を見て思ったことだ
の自分たちはやれどうだったとかを粗方喋った後、初めて（意識が
ある時に）二人同じ部屋で眠るとい貴重な経験をしたのだった。

「……で、結局あの二人、本当に付き合っているのかのう？ 茉莉と馨
じゃぞ」

「あっ」

一步

「ふうむ……妙なこともあるものだな」
再び。

黒は憑代を変えて神域の前に現れた。

「どうやら、奴らに何か……あったようだ。これでは逸らした時、完全に目が逸らし切れん」

しばし沈黙考し、そして黒はクツクツと自嘲しながら呟いた。

「ならば今しばらくは沈黙してやるか……そちらの方が都合が良い。騙す……などと人は言うが、本心を隠すことなど誰でもしているように……」

かつてより黒は、人と同じことをしている筈だった。

だが同じことをすれば、やれお前は狂ってるだのなんだのと言われる。

それが疑問で仕方なかった。

「解せん、やはり。」

——咲き誇る花よりも朽ち果てた枯木。

——美しい人よりも醜い死体。

——熟れた果実よりも腐った果実。

……ただ好むものが違うだけ。そしてそれを欲して動くことに何の罪があるものか。

誰だつて殺していよう、生きるために」

人より外れた感性であつても、人として生きようとすることに何の罪があるのか。傲慢にも否定されれば、それはこの黒とて手が出る。

黒は行動や思考こそ極めて人を外れているが、それさえ除けば戦乱に明け暮れていた時期の人間としては、”極めて穏やかで非好戦的な性格”をしている。

——そうおかしなことに。

「馨……お前と実際に顔を合わせてみたいものだが、ああ——それは先の話か。クククツ、楽しみにしているぞ」

馨の名を呼び、楽しげに笑いながら消え行く黒。

「神に愛された者の末裔と、神に愛されなかった者の末裔……愛は平等に不平等だが、さて……」

妖しいほどに透き通った、蒼ざめた月光にに照らされたその黒の姿は。

——鞍馬小春、その人であった。

「この娘はあまり夜遊びをするタイプではないようだし、次はどの身体を借りたものかな」

彼女らしからぬ、人ならざる魔性の笑み。

それはその内に燻る者が、如何なる者かを如実に語っているのだ。た。

それとはまた違う何処か。

——ゆつくりと茉莉は目を覚ます。

「……ここは……？」

愛おしい彼の隣で眠っていたはずなのに、まったくわからない何処か。

横たわっていたはずなのに、石に背中を預けるように座っていた。辺りを見渡すと、セピア調の世界だった。

山の中だろうか？ 木々と草花が生い茂り、だがどれもこれもセピアに染められていて、その元来の美しさを察することはできない。

「目覚めたか」

「……あなたは」

そしてそのセピアの奥から、闇より切り出された狼が、赤光の瞳と共に茉莉を見つめ、小さく人語を話した。

かつての神、そのなれ果て——そして常陸の始まりが穢した神。

……罪の象徴。

「……何やら面倒なことになっているらしいな」

「知っているんですか!？」

「ふん、貴様の感情を見ているのだ。記憶程度は容易い……故に、人間たちがあの大罪を償おうとしているのは察している。そして貴様があの非道な男の血を引いていることもな」

狼はなんでもないようにそう語ると、さぞつまらなさそうに茉莉へと問いかけた。

「……答えてもらおう」

「っ、何ですか」

茉莉はその問いに至る前の宣告が、まるで死刑宣告にも思えた。罪深き血族に生まれ、罪深き者として私心を殺して機械の如く尽くしてきたが、やはり心の何処かでは与えられる罰に恐怖を抱いていた……。「あの伊奈神の男、貴様と恋人になっていると考えていいのかが。」

聞かれたのは、そんななんでもない……というか、確かに狼には理解不能なことであり、茉莉は一際間拔けな表情を見せてしまった。

「……えっと、それはそうですね」

恋人なのは否定する必要が無い。しばらく手を出してくれないだけで。

そこがもどかしいし、いつそ食べてくれたらもつと甘えて行けるのにとか色々思うところはあがあるが、茉莉の中ではもう恋人同士なのであった。

「では何故、あのような煮え切らん態度なのだ」

「カツコつけれない雑魚だからじゃないかと」

「……やはり人間は理解できん。とにかく、奴とは恋人であるのだな」

「はい。馨くんはワタシの……恋人、です」

「ふん……ではそれが人を好きになる、誰かを愛する、という感情か……」

狼は何処か納得するように――

「たださらさらと流れる波――このような暖かく、優しい光を持ちながら、何故……何故貴様らは……」

しかし、だからこそ理解し難いと言わんばかりに、あらゆる感情がごちゃ混ぜになった声で、そう絞り出した。

しばらく茉莉をジツと見つめていた狼だが、ふと鼻で笑い。

「――呪い殺してやろうかとも思ったが、興が削がれた。故に貴様らの償いを見定める。その上で、命の行く末を決めよう。件の話も、手

を貸してやる」

そう、神としての確かな威厳を見せつつ告げた。

唾然とした顔をしているのを感じながら、彼女は狼に問う。

「……いいんですか？」

「確かに許されることない罪だが、償おうとしているのもまた事実。違うか」

千年もの間、荒ぶり呪っていた神が、まさかここまで落ち着いてるとは……菜子の素直な感想だ。問答無用で殺されるかと思っていたし、実際それだけのことをした家系であるが、いくらなんでも見逃されるというのは少々意外だ。

ここまで話を通じるのならば、もしやと。

「あのう……犬になるの、どうにかなりませんか？ 真面目な話、あなたにとっても効率的に恋を学べないと思うんです」

「む——そうか、そういう形で現れていたか。その程度であれば造作も無い。人とは違い、交わした契約を勝手に切るなどはせん」

「ありがとうございます。これでなんとか……えっこの時に犬になるなんてことはなくなりそう」

犬になることはないということに安心するあまり、ある意味では大変健全な下心がポロツと出てしまったが、狼はこれを大人な気持ちでスルーした。というよりも、突く必要性も感じなかったただけだが。

「……そろそろ目覚める頃合いか。貴様は普通に過ごすがいい。それだけで十二分だ。それで私の知るべきものも見えてくる」

狼はそう告げて、背を向けて去る。

それと同時に眩い光が見えて——

「……朝……？」

ゆっくりと身体を起こして周囲を確認する。当然ながらまったく見慣れてない場所……つまりは馨が借りている部屋だ。

(そうだ、昨日——)

その瞬間、昨夜のやり取りを全て思い出す。喜びと羞恥が半々、確かな熱となって身体を駆け巡る。

やっと恋人になれた……キスだってできた。でもしばらくはお預

け。

(あんまり、待てそうもないなあ)

我慢弱い自分を笑いながら、隣で眠る馨の頭をゆっくりと撫でる。くすぐったそうに身じろぎしている姿がとても愛らしくて、愛おしい。

人であつて人ではないが故に自死を選んでしまうような思考で、歳不相応に幼くて、根っこはどうしようもなく、肝心なところで決められないヘタレ具合——自分でもよくまあこんなロクでなしを心底から好きになつてしまつたものだと思う。

一体いつの間に、幼い日の思い出は恋の記憶になつたのだろうか？ 茉莉にとつてその始まりは重要なことではないが、実際気が付けば好きになつていた……という奴だ。

それがこうして実つて、兄と妹／姉と弟から男女の仲になつていく。

「……あは」

笑みが溢れる、愛情が溢れる——いつそのまま寝込みを襲うのも

……

(っ?! ダメダメ！ まだカツコつけたところ見てないからダメ！

よし、ワタシは我慢できるワタシは我慢できるワタシは我慢できる……そう、ワタシは機械の如く冷静な常陸茉莉です。うん、大丈夫)

大変健全な下心と劣情によつて淑女にあるまじき行為を働きそうになつたが、はしたないのは嫌いだらうしそもそも主とその婚約者がそういう行為に至っていないのだから従者としては待つべきだろう……そう結論づけ、色々と悶々としながら部屋を出て行く。

一旦芳乃の部屋に戻り着替えて——そこで彼女の姿が無いことに気がつく。

「ふふふ、我ながら完璧ですね」

——何処が完璧なのだ。昨夜のことであれば他の者に見られていたぞ——

「なつ、にやにやにやにをそんなバカな!？」

——やかましい——

内より聞こえたあの狼の声と、それにより告げられた真実に動揺して珍妙な声を上げるが、ふとここで狼の側から話しかけてきていることに気がつく。

ならばと内側に声を送ってみる。

(……………こうですか?)

——そうだ、喋らずとも通じている。伊奈神の男と似たようなものだ——

(けどどうして? 別に用があるわけでもないでしょう)

——ふん、貴様から話ができるようにせねば不便だろう。手を貸すと言った手前、眠らねば話せぬなど面倒だ——

(確かに……………ですがその、いいんですか?)

——くどい。私は“貴様個人”を見定める。行動で示してみろ——

罪深き血族として、その罪を償う機会を、かつて穢した神より直々に与えられている。茉子はそれ故に遠慮し、狼はそれ故に行動しろと言う。

とても数奇な関係だが、茉子は不思議なことに、どうもこの狼に他人の気はしなかった。

そう、何故かまるで親と接しているような……………

とにかく恋を教えるために、そして一族の罪を償うために、全力を尽くさねば。

茉子は決意を新たに、まずは朝食の支度を始めるのだった——

……………愛して欲しい、か——

(はっ?)

——気にするな。時に独り言を言う時もある——

……………ただし彼女は。

着替えるために寝間着を脱いだ時に、自分が自分で引くほどの変態であることを自覚するのであったとき……………

「……………えっ、ええ……………ワタシ……………嘘……………ええ……………」

「こ、これでは年若い痴女が股を濡らしながら恋人の隣で寝ていたことに……………寝惚けてナニをシてたんだろ……………」

■
ギリギリと何かの音が聞こえる。
それは鎖の軋む音、繋がれたら杭が傷む音。
冷たいけれど心地良い、鉄とはまた違ったもの。

ああ、この思い出は、果たして誰の――

「……最悪だ」

下腹部の痛みで目が覚めた。

……痛い。

――耐えたツケだな――

わかっているよそんなの。

二度寝する……フリでもしておく。

――じゃあ刀握れば？――

シモ？

――ノーシモ。ほら、虚絶――

ああ、それね。

モゾモゾと布団から手を伸ばして柄を握ると、自然と頭が切り替わっていき、当然のように痛みも引いた。

……嫌な切り替えの仕方だなあ。

――でも便利でしょ――

まあね……

さてと身体を起こして着替え始める。

時間を確認すると、大体芳乃ちゃんが起きるくらい。(ただし弁当を作る前までの、だが)

今日は普通に学院がある。が、さて菜子の様子次第ではまた待機となるわけだが。

「おはよー……」

「お、珍しく早いな聲。なんかあったのか？」

「毎日二度寝決める訳でもねーよ」

汗を流し終わった将臣とぼったり会っていきなり心外なお言葉をいただいたので、こちらもそれ相応の対応をさせていただく。

しかし将臣はニヤニヤとしながら――

「昨日はお楽しみだったな」

「……は？」

「こいつ、見てたのか？」

「何お前菜子のキス顔見てんの？ 殺すぞ」

「するっと出てくる殺害宣言。」

「昨日の今日でこれである。」

「いいのか俺。」

「物騒だな!？」

「物騒？ 何を言うか。お前だって芳乃ちゃんの蕩けた顔を誰かに見せたいか？ 見られたいか？」

「無理だな」

「即答。しかもキリツとした顔で。」

「例え相手が誰であっても、思うものはあるな」

「だろ？」

「……まあでも置いておいてな」

「は？」

「だーから！ 置いといてくれよ！ 言いふらすつもりもないって！」

「……まあ信用してやる」

――お前らのちよめちよめ覗いてやるぞちくしよ。

くだらないことを思いながら、俺は居間へと向かった。

「はい」

「ん……あれ、なんか量多いな」

「昨日の事もありますから、精は付けとかないと」

「サンキュ」

珍しく腹の調子が良いのでお代わりを貰ってみたが、菜子に多く盛られてしまった。まあ一理あるので、そんなに気にすることでもないが。

「てかお前、今日学院行くの？ 着替えてるけど」

「その事なんですけどワタシ、夢で犬神と話したんです」
いきなりの発言に全員の箸が止まる。

いや、いきなり過ぎて……でもアクションが起きたってというのは重要だ。

「もしかして、昔のことですか？」

「ご心配ありがとうございます、有地さん。でも彼はもうしばらく見定めると、そのために犬にならないようにすると。それから芳乃様の耳の問題についても、手を貸してくれると言っていました」

……意外な展開だ。

まさか、最大の敵——という訳ではなかったが、一番謎に包まれた存在が手を貸してくれるとは。

信用できると言えば嘘になるが、しかしこれほど心強い味方もいるまい。

現に安晴さんもムラサメ様も啞然としている。

「そ、それは……本当なのかい？ 菜子君」

「はい。一度交わした契約を一方的に破るつもりはないと。一応、ワタシの方からも声はかけられるので、意思疎通はできます」

「それは、吾輩たちの行動が評価されてということなのか」

「多分……そう、ですね」

なんとも言えない空気が漂う。

そりやそうだ、先祖の尻拭いを必死になってやってきて、その行動を殺されて利用された張本人から評価されるとは。

「……無駄じゃ、なかつたんだっ。私たちのこれまでは……っ！」

絞り出すような声と共に、俯いて嗚咽を漏らす芳乃ちゃん。安晴さんは無言だが、その心中は察するに余りある。

……正直、そっちの不幸でおまんまを食っていた一族としては、かけるべき言葉などあるわけもないし、それにそもそも……

うむ……やっぱ俺、いいのかな……菜子に好きだって伝えるのが許されるのかな……

——いや過去のことばっか気にしてもしょうがないでしょ。なんか気の効いたセリフでも考えておきなさいよね——

頑張る。

おろおろと慌てる菜子と、えぐえぐしながらなんとか平気に振る舞おうとする芳乃ちゃん。

本来は親戚の筈なのに、どうしてこうまでしてすれ違ってしまったのか。

過去に責任があるとは言えども、確かに罪はあるとは言えども。

その罪科は永遠に帳消しにできない。

咎人も、罰を下す者も、もはや何処にもいないのだから……

今日の朝飯は、嬉し涙の味がした。

……波乱な朝食を終えて、ひとまず落ち着いてから学院に向かう。初々しく手を繋いでいる将臣と芳乃ちゃんだが、彼女に耳が生えていることから察するに事態は変化していない。

強いて言えば、大神の参戦だが、如何に神とてしばらくは様子を見ないとわからないようで、まだアレコレとは言えないらしい……つて菜子が言ってた。もつとも物理的に見るんじゃなくて、感知になるそうだから近くにいる理由もないけど。

芳乃ちゃんの後ろを歩く菜子のケツを眺めながら、隣にいるムラサメ様の微妙な雰囲気を感じる。

まあ、将臣お兄ちゃんが取られちゃムラサメちゃんとしてはあんまり面白くないか。

「むう」

「妬いてるのかい、ムラサメ様」

「当然じゃ。月下でああも言ってくれたクセに」

「まあ、あんまり構ってあげられてないみたいだな。俺もこう……微妙だし」

「肉体があればのう……しかし、結局吾輩の身体はどうなったのであろうな」

言われてみれば確かに。

魂を抜き出された肉体は朽ち果てるのみ。けれどムラサメ様は肉体がどうなったのかは知らないらしい。

普通に考えて残っている筈は無いのだが、神刀に捧げる人柱の肉体だ。可能性はあるが……年代経過的に考えても難しいだろう。

「吾輩はいつも通り憑代を見ておく。馨、虚絶、頼んだぞ」

「任されて、ムラサメ様」

——任せよ——

いつも通りに校門でムラサメ様と別れ、靴を変えて廊下を歩く。

のんびりと歩いていると、芳乃ちゃんに何か言われたのか、急に茉莉がトテトテと寄ってくる。

「お昼、二人きりで食べない？ またほら、あそこで」

「ん？ いいけど。芳乃ちゃんの入れ知恵？」

「聞こえてますよ。どうせ馨さんはヘタレですからお膳立てしないと何もしないでしょう」

「余計なお世話だよっ!? 将臣、お前の彼女なんだからなんとかしろよー!」

「付き合ってるんだろ二人とも。何もそんなに言う必要あるのか？」

——付き合っている。

その言葉を聞いた瞬間に茉莉の視線が地獄めいた絶対零度に切り替わった。ジト目を通り越したそれは、もちろん俺を射抜いている。怖い。

というか笑顔になっている。とても魅力的で可愛らしくて綺麗で、本能的恐怖を呼び覚ます笑顔に。

「あは」

あは、じゃないよ茉莉。

怖いよ茉莉。

可愛いけど。

「……………いや……………その……………」

「恥ずかしいのか？ 言うのは。俺たちなんて穂織中に知られてクラスメイトから公開処刑食らったけど、それ以上に？」

「あ、あの、だな……………」

「？ どうしたんですか馨さん。夜中にき、キスなんてする仲なのにもしかして……………」

二人から凄まじい重圧を感じる。

やばい、一步も動けない。茉莉の笑顔も二人の「なんだこの雑魚」つて感じの呆れた顔も、この俺を縛る鎖と化している……！

しばらく見ていた二人は同時にため息を吐き、顔を見合わせて――

「A行けたけどそもそもA以前はまだ？」

「多分B行ってますよ。でも肝心のA以前はまだですね」

「告白？」

「告白」

大変不名誉な発言がいくつか聴こえてくる。ま、まさか……バレてる……？ いやいやいや、そんなバカな、ありえない。流石にあの二人もそこまで――

と、考えていたら視線が合う。

ビビる俺。

そして。

「かっこ悪いな」

「情けないですね」

「ええ。まったくのへなちよこです」

――間違いなくキミは雑魚だ――

容赦無く放たれた口撃。

ガクリと崩れ落ちて、ぐおおおと唸る。

「何してるんですか、稲上君」

「あつ、比奈ねーちゃん。いや聞いてよ、こいつら俺のこと雑魚って言ってくるんだよう。なんだよどいつもこいつも俺のことをやれへタレだなんだって言ってさあ」

「ねえ、馨」

「うん」

「へタレだなんだ言われたくなかったらまず私をねーちゃん呼びするのやめたら？ 子供っぽいよ」

「ね、ねーちゃんもかよお……いいもん、お前らみんな知らねーもん。レナに慰めてもらおうもん……」

比奈ねーちゃんにすら裏切られた俺はブツクサと文句を言いなが

らふらふらと教室に向かつていく。

「……カツコつけて欲しかったなあ……」

「常陸さん、もしかして馨と——」

「あつ!? いえ!? 別にイっ!? そういう関係ではなくてですわね!」

「ああ、隠さなくても大丈夫。あの子のこと、よろしくね?」

「は、はいいい! あばっ、あばば……」

「っ!? 茉莉!? なんで倒れてるの茉莉!」

「ダメだ芳乃! 多分中条先生から馨をよろしくって言われたから色々妄想しちゃったんだよっ」

「ま、眩しい笑顔……わ、ワタシ……それに比べて、ワタシはなんて汚れてえ……」

「……大丈夫かしら」

……あれ?

振り向くと比奈ねーちゃんに抱えられる茉莉がいて、それを「手遅れだったんだ……」みたいな雰囲気で見ている将臣と芳乃ちゃんが出て……あれ?

——……茉莉ちゃん、結構スケベな女の子だしなあ……十二想像したんだか——

あんだって?

——忘れなよ——

????

それからしばらくは特に何も無かった。

……いや無かったと言えば語弊になるか。事情を知るレナにあれやこれや聞いてみたり、たまたま来てた駒川に話を通してみたり、一応できる限りのことをやった。

そんなこんなで昼休み。

もはや耳なぞ知らぬとばかりに休み時間に静かにイチャついていたお二人のバカップル加減は天元突破。砂糖を振りまいてその上からブドウ糖液糖を垂れ流したような甘さを教室に見せていた。

あーんとかそういう恋人っぽいことなんてしていない。ただ側にいてご飯食べて談笑しているだけ。なのにもはや夫婦が如き空間を

形成している。

……なんか前に比べて二人とも更に壁を取っ払った感じだな。

もちろん、それに顔をしかめる人などいない。何せみんなの巫女姫様が、普通の人と同じであったとしみじみしているのだ。もはやクラスメイト全員が「ふっ……長かったなここまで」みたいな雰囲気を出している。

廉はともかくお前らそんなに付き合いあったっけ？　そしてレナは興味津々に二人を見てるし。

「二人とも幸せそうですね」

「ああ、こりゃ心配要らない感じだな」

心底から安心したような茉莉子を見て、こいつもやっとな肩の荷が降りてきているんだなあとしみじみ思う。

「それじゃあ芳乃様、ワタシたちはちよつと席を外させてもらいますね」

「ええ。二人で行ってらっしゃい」

そんなこんなで俺たちが移動するために軽く報告すれば、芳乃ちゃんも笑顔で手を振るし、将臣に至ってはサムズアップだ。

ハハハと乾いた笑いを出しながら、茉莉子と出て行こうかと席を立つと――

「二人だけって珍しいな。普段なら教室でイチャついてるのに」

実際珍しい光景なので、いつも通りにみんなが飯を食おうとしていた廉がそんなことを言う。

「悪いな廉。色々あつて」

「まあなんでもいいけどよ。てかなんだよその手は」

「手？」

「常陸さんと手繋いでるだろ。それにガッチリ指まで絡めてさ。何？　遂に？」

……指摘されて初めて気が付いた。

いつの間にやら隣にいる茉莉子の手を握っていたし、指も絡めてる。はてそんなに甲斐性があるはずなどないのだが……？　でも茉莉子からやったってわけじゃない。無意識か？

「ふふっ、ご想像にお任せします。ほら行きますよ、馨くん」

「おっと、引っ張るなよ。歩くから」

俺が答えるよりも先に茉莉子が答えてさっさと教室を出て行く。手を繋いだまま廊下に出て、顔を見合わせて、少しだけ笑い合う――

「なあ将臣、遂に馨の奴、常陸さん落としたの？」

「んー？ もうとつくの昔に二人とも落ちてたんじゃないか」

「普段の馨に比べてだいぶ浮かれてる感じがあったし、常陸さんも雰囲気ちよつと変わってたし、なんかあったのかね」

「そんなわけではないですよ！ 別にあの二人が付き合い始めたとか、夜中に首を噛んだり噛まれたりをしてたとかそういうのじゃないですからね!!」

「へー。そうなんですかア……ん？」

「そうだね。確かに……うん？」

「……なあ今さ」

「……気のせい」

「ちっ、違いますよ!? あの二人はお互いに好きなのに中々踏み切れなかったんじゃないんですからね!!」

「あ、やっぱりカオルとマコは結ばれていたのですね！ とっても喜ばしいことでもありますよ！ 付き合い始めるまで短かったような、長かったようなでありますが」

『付き合い始めたアアアアっ!!』

「バカなそんなバカなまたは嘘だろおいよオ!? えっ!? あのナンパをするときもヘタレで、むしろ向こうから情けをかけられるような馨が常陸さんに告白したア!? いやいや、ちよつと待ってください巫女姫様!? 天地がひっくり返って月が落ちてこないと告白もしないし相談もしないあいつが常陸さんと付き合い始めたア!」

「落ち着くのでありますレンタロウ。カオルもマコもバレバレだったので、お互いに気付いたというだけでありますよ」

「いやだつてよレナちゃん、あいつのダメ男加減知ってるだろ!? 将

「臣なんてよく分かつてるはずだ！」

「確かにカオルは可愛げの方が先にくる人ではありませんが、それでもきつとマコの心を驚掴みにするロマンチックな一言を言ったに違いないであります！」

「おい廉太郎。いくら馨が告白そのものができていないって言ってもだな。常陸さんが結構グイグイ行くタイプで……」

「……カオル……それは……」

「将臣さん！ 言っちゃってる言っちゃってる！」

「へ？ あつ、やべっ！」

「これは稲上君が受けて常陸さんが攻めね！ でしょ典子？」

「ごめん成美。クラスメイトで掛け算は流石に引くよ。不純な目で見ちやいけないでしょあの二人」

「なあ、鞍馬の奴が騒ぎ立てたから多分他の教室にも聞こえてるよな」
「そうだな。でも中条先生が職員室で遂に馨が常陸さんにとってボヤいたのを聞いたって話もあるからどのみちバレてんじやね。まあお似合いというか、それ以外考えられない組み合わせだからやつとかつて感じだけどさ」

「……えっ、何これは。」

「移動しようにも固まってしまっう。」

「——廉兄！ お兄ちゃん！ 馨さんと常陸先輩が付き合ってたって本当！」

「おうマジだぞ小春！ こりやマジだ大マジだ！ 芦花姉にも報告するぞぞ！ 祖父ちゃんにもな！」

「これはお菓子持つてくべきかな!? どうしたらいいんでしょう巫女姫様！」

「えっ、あつ、ま、菓子は洋菓子が好きなのでそっちを持つてくのがいいです……よ？」

「……えっ。」

「あの、えっ。」

「……芳乃ちゃん……っ！ 君ってヤツは嘘がつけない、いい子だな……っ！」

思わず血を吐くように言ってしまう。

付き合っているとバレるのはまだいい!! 100歩譲って告白がまだなのもいいさ!!

でも首を噛んだりって見てたなああのスケベ巫女! んで将臣もいたってことはムラサメ様もいたわけで!!

ああもうなんだこの羞恥プレイ!? 昨日の恥ずかしいこと全部見られてたのかよ!?

で、これはワザとやってんのか!? 謀られたのか!? しかも将臣も将臣だ! レナのアオローを台無しにするどころか、俺の菜子をよくもまあグイグイ系なんて表現しやがったなあ!?

ふざけんなよ! 菜子は可愛いんだぞ! 割と受け身なんだぞ! 俺が更に受け身だから相対的に攻めに見えるだけなんだよ!! そこ間違えるな! ガチ勢舐めんな!?

そこでふと、振り向いてしまったことに気がつく。

そうだ菜子! 菜子は――

「……………ツ?!?」

顔を真っ赤にして爆発していた。

……………照れるんだ。昨日は余裕綽々だったクセに。

「菜子?」

「……………な、なんだか凄いいことになってしまいましたね……………」

「もう気にすることもないって思えばいいわけだ。……………まあ俺の菜子を好き勝手に言われるのは気に入らんが」

「つ……………そういうの卑怯です」

急に真っ赤な菜子に卑怯と言われる。こういう時に卑怯かどうかとか言うのは、大抵菜子がときめいてるみたいの場合なんだが、さっきの言葉の何処にそんなものがあつたのか? ……我が恋人ながらよくわからん。

「……………まあなんでもいいけど行くぞ。廉にドヤされるのもごめんだし、さつきとカツコつけないとなア」

さつきとは逆で、俺が彼女の手を引っ張って学院の裏山まで向かう。

きゅつと握り返された手は小さくて、柔らかくて、暖かくて、とても愛おしいものだった。

着いてみればとても静かなものだ。

腰を下ろして弁当を広げている菜子を見ている、風が通り抜け木々の揺れる音がはつきりと聞こえる。

「ん？ 今日のはやけに和風というか古風だな」

「馨くんの好みに合わせたんだよ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

可愛い奴。

わざわざ俺の質素な趣味に合わせなくてもいいのに。

まあ、嬉しいけど。

ただ喋るネタが無い。

将臣と芳乃ちゃんの場合であれば、芳乃ちゃんの最近本格化してきた料理や、お互いの知らないネタを話せるのだが、俺たちの場合はお互いにほとんど知り尽くしている。困ったほどに。

「ね、なんでレナさんだったの？」

「は？」

ところが急に、菜子はそんなことを言った。レナの名前を出したのは……そう、今朝の……ああ、そういう。

「お前は俺をヘタレと言う。芳乃ちゃんも情けないという。将臣だって雑魚って言う。廉と小春ちゃんはほら、俺のダメ男加減を知っている。だから慰めてくれそうなのはレナだけ……って話だけだ」

「人選には納得いったけど、ワタシ彼女なんだよ？ もうちよつと何か無いのかな」

「お前ズバズバ言うじゃん」

「あ、もうお父さんとお母さんには報告しておいたから。ひと段落ついたら報告来てね、って伝言。お母さんから」

「……ははは、おじさんとおばさんをどう説得したもんかなあ……」

菜子の親父さんとお袋さんは比較的仲の良い方ではあるが、親父さんの方は俺が菜子と一緒にいることにはあまり良く思っていないかつ

た。

……と、言うよりも適合した魔人である俺そのものに良い思いなどできるはずがない。

一応、個人では可愛がられてたけど、大切な一人娘を殺すやもしれん相手というのは、親としてはゴメンだろう。

……こりや本当に一戦交えるやもしれんな。

「だ、大丈夫だよ。いざとなったらワタシも説得するからっ」

ふんすと気合を入れる菜子だが、それでまあ許されるのだろうか？

可愛いから頭を撫でてやろう。

「さらさらだな」

「女の子の髪は、女の子の命って言うでしょ？」

「なるほどね」

くすぐったそうにしているけど、前とは違って喜色を思いっきり出している。デレデレしている。可愛い。

撫でる手を止めて箸を持つと、やや抗議的な視線が向けられたが無視する。流石に腹が減った。

適当なおかずを摘んで一口。

「相変わらず美味しいな」

「ん、よかった」

「でも本当に俺の好みに合わせなくてもいいんだぞ？ 手間だろ」

「ワタシがしたいからしてるの」

「ならいいけどさ。……うん、腹減ってる余計に美味しい」

「空腹は最高のスパイスって言うけど、やっぱり本当なんだ」

「まあな。けど愛情だなんだと注ぐのは結構だが、それでマズけりや世話ねえ話だつてなんでわかんねえんだか」

愛情が最高の調味料になるのなら世のメシマズは生まれていない。

むしろ愛情があるならマズイとかはつきり教えてやるべきなのではないだろうか？

「……ま、お前と食う飯なら、どんなにマズかろうが笑って受け入れられそうもんだけど」

「ふーん？ 最愛の人こそ最高のスパイスって考えかな？ あは」
「むしろ主き——……いや、すまん、忘れてくれ」

……なんかこういうのって恋人というよりも夫婦みたいな距離感ではないのだろうか？ もっとこう、イチヤイチャとかしなくてはならないのだろうか？ でも冷静に考えると俺たちは基本イチヤついてたわけで……

「どうしたの？ そんな百面相して、箸止まってるけど」

「ああいや、別に。なんでもない」

訝しむ茉莉を誤魔化しつつ、早くカツコつけた言葉を考えねばと頭を捻る。

……一応、男女仲ではあるが、あれでは情けなさすぎるし茉莉も見たがってるし、頑張らねえと。

——食べ終わってくつろいでいると、気付けばもうすぐチャイムだ。

「……教室戻るの億劫だなあ」

「……大事になってそう」

二人してため息を吐いて頭を抱える。

そのまま顔を見合わせて——

「ま、俺がヘタレなだけで全部終わるか」

「ですね。問題無いかと」

あ、猫被った。

こいつの猫被りの基準よくわかんねえけど、まあ敬語の茉莉も素の茉莉もどつちも可愛いけどさ。

また手を繋いで戻ると面倒になりそうだからと、俺はいそいそと校舎へと向かうべく足を向ける。

「さっさと戻るぞ、茉莉」

声だけかけて、ポケットに手を入れて歩き出すと、ひよいと腕を組まれる。そこまで甘えてくる奴ではなかった筈だが、なんだ吹っ切れたのか？

「甘えん坊の茉莉にゃんはどうしたんですかな」

「……」

「いや黙るなよ。困るだろ」

大抵こういう時の茉子は、なんか俺にして欲しいとかそういう感じだが、ただ雰囲気的には違う。

もうしようがないので、組まれた腕を外して顔を覗き込む。流石にまたサボろうと言われても余計面倒になるから認められないのだが。

「……っっ！」

しかし茉子にやん、どういうわけか顔を真っ赤にして唇をきゅつと結ぶ。

……俺の顔だぞ？ 見飽きてる俺の顔が近くに来てどうしてそうなるんだ。

とにかくなんか喋ってくれないかねと、声をかけようとした。

「ま——」

グツと茉子との距離が無くなる。

「ちゅっ……」

茉子が近い、近すぎる。いい匂いするし、唇に柔らかい感触が……っつてこれキスじゃん!?

……それは不意打ちのキスだった。

微かに触れ合うだけの、昨夜のとは全く違う、まるで確かめるかのようなキス。

一瞬と永遠の狭間を行き来するものじゃなくて、一瞬だと分かりきっているからこそその——

啞然として固まってしまう。

「あは……隙好きだらけですよ？」

してやったり、みたいな不敵で魅力的な笑顔。それでも恥ずかしいものは恥ずかしいのか、朱色が灰かに差している。

だから俺は。

動揺のあまり——

「……もしかして日にち伸ばして欲しかったらキスしなきゃダメ？」

「が、我慢できなくなっちゃっただけ……だから……そのう、くくく……っっっ」

そのまま俺を通り越して、トタタと走り去る茉子。

どうやら俺の彼女は可愛いが、少々欲に素直すぎるようだ。

これ、真面目に早くカツコつけないと食われるな、俺。

——頑張ろ。

……もちろん顔を真っ赤にして駆け込んだ茉莉のお陰で、教室に帰ったら死にそうな思いをした、とだけ。

——ていうかさ。

今更気が付いたけどナチュラルに俺と茉莉、昨日のこと引きずってね？ 意識しないとダメってヤバくね？

……いやおい、どーすんだこれ……？

愛おしい人を想って

……質問責めと主に俺のヘタレ具合をからかう祝辞でボロクソにされ帰宅した俺は、着替えることもせずにごつたりと居間につつまがっていた。

「……どいつもこいつも、なんなんだよお……言いたかねえよ。なんで茉莉のそういう顔を教えてやらなきゃならねえ」

なんだよ、もう初体験は済ませたのかとかそういう話題聞きやがって。

そんなもんどうして教えてやらなきゃならねえ。そんなもん俺だけが知ってりやいい。

まあのおつぴきならない理由で教えろとしたら向こうの両親……いや、どうだろ……うーん……駒川か？ シただけなら。

——流石にシヨットガンマリツジはごめんだ。なったら責任取るけど。

「独占欲の強い彼氏を持って、ワタシは嬉しいですよ？」

転がる俺の頭上から茉莉が覗き込んでくる。もちろん頭の上には下半身があるのでスカートの中、スパッツが見えてる。

……あいつも着替えていない。着替えるなら冷蔵庫の中身を確認してからだと。

「スパッツ見えてる」

「あは、やーらしー。このまま顔に座ってあげましょうか？」

「興味はあるしされたら嬉しいけど、さてそういう行為はまだ早い」

……茉莉の蒸れたスパッツとかご飯三杯イけそうだな。うわ、気持ち悪いぞ俺。死ぬほど気持ち悪い。

——というか！

「お前昼飯の時彼女とか言ってたし、俺もその気になってたけど！でもまだ一応友達だろ!？」

「早くカッコつけないとワタシが我慢できなくなって食べるけど」

「待ってくれるんじゃないよ」

「今日のことから考えて多分友達なんて思っていないよね。ワタシは

……我慢できなくなっちゃったけど」

「うぐっ……」

実際、今から友達の距離感に戻っても無理だ。俺の方が耐えられなくなつて言葉無く求めてしまう。

つまりおおっぴらにするんだつたら俺がカッコつけないといけないわけであつて。

友達で待つててくれている茉莉になんて失礼な真似を……いや待つてんのか？ これつて。

「確かにワタシ、馨くんのカッコいいとこ見たいけど、そもそも馨くんがカッコつけられるまでどれだけかかるの？ 無意識でこれつてことはもう要らな——」

「いやダメだ！ これはな！ 男の小さなプライドなんだよ！ 惚れた女にカッコつけたいんだよ！」

「いつカッコつけてくれるの？ ワタシはいつきゅんきゅんすればいいの？ ワタシはいつ馨くんに甘えればいいのか？」

「——明日だつ！ 明日には腹決めて言うよ！ 正直お前に隙だらけされるの最高に良かったけど!!」

——大口叩いたねえ？ あと半日で考えつくのかい？——
頑張るんだよなもん！

稲上馨は男の子オ——ツ!!

「明日にはお前の心をグツと掴むようなロマンチックな一言かはわからないけど、とにかく俺がどうなのかを伝える！ あんなへなちよこじゃなくてはつきり言つてやる！」

「ホント？」

「ああホントだ。嘘言つたつて仕方ない。必ず伝える、必ず言う、必ず教える。約束破つたら何したつていいつ！」

……後戻りはできないぞ？

だがちようどいいハンデだ。

「だから俺はお前に愛してつて伝えるからな！」

「……ノーカンにしておいてあげる」

「あつ」

呆れた顔。

ポロっと出てきた言葉。

……もうダメだな俺たち。

待っててあげるとか言われた筈なのに、お互いに結局待ってていない。

なんかもう、告白そのものはできていないのに、付き合っているような状態になっている。

——なんて我慢できないんだろうな、人間って。

……そうだよ。ポロっと出てくるなら行けるじゃん。何を躊躇っている。もう躊躇う理由なんてない。

というか俺が我慢できないのは目に見えている。腹を決めろ、カッコつけろ、こういうのを求められてたんだから！

「……いや、やっぱりごめん。今からって言ったらどうする？」

「いいよワタシは。いつでも、どこでも」

「よし……じゃあ——」

深呼吸を一つ。

立ち上がって、菜子をしっかりと見つめて——

「俺は……俺は、お前が……好きだ。今更になつたし、その……お前の発言に気付かないで勝手に彼氏ヅラしてその気になつたマヌケだけど、そんな俺で……えっと、やっぱり、いい……です、か……？」

……出てきた言葉は、やはり無様なものだった。しかも敬語まじりだし、さつきポロっと愛しているって言えたのに、気合い入れて言ううとすればこれである。

——なんと情けない男よ——

実際情けない。

「……」

ただまあ、言われた側はと言えばなんとも顔を綻ばせていることか。

そして彼女は——

「本当にワタシでいいの？」

「菜子じゃなきゃダメなんだ」

「芳乃様を優先するよ」

「構わない」

「ロクでなしの子孫だよ」

「俺なんて魔人だぞ」

「足、太いよ」

「ばっちこいだが」

「……えっちだよ?」

「??? いやまあ……いいじゃないか、うん。健全に不健全で」

最後の質問が意味不明で本気で困惑したが、彼女の的にはとても大事な質問だったようで、心底から安心した様子を見せている。

「——あは、やっぱりダメだなあ……ワタシ……」

そんな小さなつぶやきが聞こえたと思ったら、突然こっちに抱き付いてくる。倒れないように抱き止めると、どうも押し倒したいのか、妙に力を入れてきている。

ここは……押し倒されてやるか。

力を抜いて、茉莉に押し倒される。

そのまま見つめ合って——

「……んう……っ」

唇が、押し当てられる。

瞼を閉じて、彼女の味をはっきりと感じる。

甘くて切なくて、溶け落ちるほどに甘美な味に、そして茉莉の愛——

息が苦しくなってもなお離さない、離れない、離れたくない。唇を重ねたまままでいたい。永遠に口付けていたい。

だから限界まで重ね合って、ゆっくりと離れて息を整える。

赤く染まった頬で、吐息を漏らして息を整えている茉莉は、とても扇情的だった——

「……茉莉の唇は、あつたかいな……」

「……アナタの言葉で教えて、もう一度。ううん、何度でも」

「俺はお前が好きだ。愛しているよ、茉莉」

「ワタシもあなたが好き。大好きだよ、馨くん」

「……ごめんやっぱ恥ずかしい。この一回で勘弁して」

「芳乃様の家だから？」

「まあ」

するとそのまま茉莉は、首に噛み付いてくる。昨日とは違って、まるで食べるように甘噛みをしてくる。

かぶかぶと甘噛みされながら、無言でそうしてくるかお前とか思いながら、されるがままに受け入れる。拒む理由も無いし。てか噛みながら舐めてくるな。

「なんだよう」

「ヘタレの馨くんには甘噛みでお預け」

「ん？ ……ああ、そうだな」

「キスだけでそうなるって、ちよつとやらしーよ」

「お前がエロいのが悪い。んな扇情的な感じになりやがって」

……ちよつと意地悪してやろう。

虚絶の蓄積された記憶を漁り、あるものを引っ張り出してなんとなくやり方を察する。

「茉莉、こつちを向いてくれないか」

「あむ……なあに？」

「――仕返しだ」

今度は俺からキスをする。

一瞬だけ驚いて、けれどすぐに茉莉も体重をかけてくる。

ただ重ねるのは唇だけじゃない。

「んむ……っ!？」

茉莉の柔らかい唇の隙間を通して侵入させた舌。

……まあつまりなんだ、フレンチキスって奴だ。とは言っても所詮素人の浅知恵。二、三回くらい舌で舌を突っついて、恥ずかしくなつてやめる。

本当ならもつと絡めてやるべきなんだろうが……まあヘタレなので。

茉莉が驚いて固まったようなので、離れて顔を見る。真っ赤になつて、目を見開いていて……らしくないからこそ、より魅力的に映る。

「そつ、そういうことするって……つまりその……したい、の……？
今から、ここで……」

視線を逸らして、潤んだ瞳と上気した肌に、消え入りそうな声で、そんな可愛らしいことを言う。

そんな度胸があつたらこんな情けないことになってないんだがなあ……そうならまず間違いなくあの日、俺は茉莉に愛していると素直に言えただろう。

「ただの仕返し」

「なにそれ。その気にさせるだけしてお預け？」

「えー、だって付き合ったその日にとかなんか違うじゃん」

「厳密に言えば昨日からのはずだけどね」

「……まあ、そうだな。行為そのものは待てなかったな、お互いに」

……結局のところ、俺たちはあのデートの告白擬きをやった時から、その気になっていたんだろう。

その気になり過ぎて、何かと理由をつけてそれらしい行為をしたがる。待ってくれと言った俺も、茉莉の気持ちに甘えてしまったし。

結局言葉を言えなかったのは……きつと、

……きつと……なんだ？

待てよ、俺どうして言い渋ってたんだ？

ポロツと出てきた、腹決めたらすぐに言えた。ならあの場で言えなかった理由があるはずなのに……

まあでもヘタレだからって理由一つでもいいか……周りからそう見られたし、そうしたいのだから、意地張る理由も無くなったんだろ。

そうだな。そうに違いない。

まさか茉莉を■[■]■[■]したいなんて言えるはずないもんな。特に、本人に対しては。

「馨くん？」

「いや、なんでも」

これは胸に秘めておこうか。

流星に言えない。

「――表層に上がってない？」

晩飯の時間に、芳乃ちゃんのをさっぱりわかってない声が響く。

茉莉が犬神からの伝言を伝えたが、生憎俺にもさっぱりわからない話だった。表層について……はあ？

「ええ。なんでも、有地さんの中には呪いの残滓の残滓が残っているそうで、それに反応して耳が出ているようなんです。深いところにあるので、まずは表層に上がるのを待つ必要がある、と」

「ふむ、残滓の残滓であればある程度は納得が行くな。いつぞや、祟り神に腕を突っ込んだのだから」

「ただ、当然呪いですから有地さんの身体を使って何かしでかすかもしれない可能性もあるそうで、警戒するに越したことはないとも言っていました」

表層に浮かび上がらないとどうにかできない。つまり表層に浮かび上がるということは何かアクションを将臣の肉体で起こさざるを得ない、ということ。

俺と茉莉がいるし、もし気付かなかったとしても、そうなれば俺が勝手に起動するだろう。

待つ姿勢で何の問題もないということだ。

「……てか、随分協力的だな。全面信用できるのか？」

「嘘をつく理由も無ければついたところで見返りもない、です」

「なるほどね。確かにそうだ」

なら逆に信頼できるというもの。

利益がないのであれば、見極めるためにこつちを騙す等はしなさそうだ。

ただし渦中の将臣と言えば。

「部屋割りは昨日みたいなことしないで今まで通りの方がいいな。残念だなア？ 馨」

なーにがだこんちくしょう。

ニヤニヤしてるのがムカつく。廉に告げ口してやろうか。

「うっせーよ将臣。いいんだよ、俺アちゃんと告白したんだから」
「いっただよ」

「帰ってきた時、ポロツと出たのをノーカンにしてもらった時に」

「……カツコつかねえな」

「言うな……」

なんとも言えない雰囲気が出る。

結局カツコつけた言葉を言えなかった。いやでも、彼女が求めているカツコつけた場面ってこういうものだったらしい。後で聞いてみたら「こういうのでいいの。嬉しいから」とかなんとか。

あと「舌入れられて、よかった」とも。

「正直、見ていたのだがのう」

「あ、あはく……ムラサメ様、忘れてください」

「いやじやいやじや、吾輩はあんなに淫猥で甘えるような接吻を忘れてならない。馨も茉莉も互いに求め合って止まないような、あんな接吻を忘れとうない」

「何してたんだい君達は……とやかく言う気は無いけれど、一応人の家だつてこと忘れてないかな？」

「すみません……」

安晴さんに咎められて、二人して沈み込む。そしてふと思い浮かぶのは、この問題が解決したらどうなるかの話。

……俺はまあ家に帰る。

茉莉はまあ犬神の方針に従うだろうが、けどこの家に住み込みつてわけじゃなくなる。

また離れている時間の方が長くなりそうだ。

けど、茉莉のいない生活……か。

ククツ、おかしいな。いくらなんでも、おはようからおやすみまで会える方がおかしっていうのに。

でもずっとそれが続けばいいと思ったのも事実。茉莉とずっと一緒にいたい、二人で色んなものを背負ったり、背負わされたりしたい。……本当に愛おしくて仕方ない。

「茉莉、終わったらどうする？　今まで通りにするの？　それとも馨さんの家にも行く？」

「や、芳乃ちゃん。それは早いと思うんだ。多分今まで通りだろ」

「ん、通い妻も面白そうですね。ちよつと遠いのが難しいかなあ」

????

なんで茉莉は満更でもなさそうに言ってるんだ？　ちよつと気が早くない？

「あ、馨くん。一緒にお風呂入りますか？」

「ん？　俺構わないけどお前が大丈夫なの？」

「……」

「黙んなよ」

お前の裸くらい見慣れたし、なんか別にあたふたする理由も無いし。

まあ役得だしどうでもいいかなとか色々思うのだが、茉莉は顔を真っ赤にして固まっている。

とりあえず向こうがダメみたいだ。

「少しは煩惱を抑える練習をするといい。お前ちよつと欲に素直すぎるぞ」

「なんか、馨くんにそう言われると腹立ちますね」

「そーかい。あ、お代わり」

「……はい」

不服そうな茉莉だが、そうムスツとした顔で見られても困るというか。

いつも通りの量をもらって食べてると、意外そうな顔を安晴さんがしていた。

「馨君は、割とそういうの耐性あるんだね」

「こいつのはもう見慣れてますよ。子犬騒動で朝っぱらから苦労させられましたからね」

「おや、そうだったのかい。……うん？　ちよつと今、付き合い始めたばかりのカップルから聞こえてはいけない言葉が聞こえてきたような」

「気のせいっすよ」

「そうだよね。うんうん」

安晴さんを誤魔化しつつ箸を進める。

照れ隠しなのか、あるいは本気で怒っているのか。隣にいる茉莉から肘打ちをされているが、まあ些細な問題だろう。

今重要なのは芳乃ちゃんの耳問題なのだからな。

その後は特に何もなく寝たけど……途中、目が覚めて水を飲みに行くときに、なんかうるさかったような記憶がある。

発情期の猫みたいなの……そんな感じの鳴き声が聞こえたような……いやきつと気のせいだろう。

方角的には山とは離れているし、あの山に基本的に野良はいない。何かの物音を聞き間違えたんだろう。



(……はあ……)

悶々とした気持ちを押し込めながら、芳乃の隣で横になる茉莉。

眠らなければならぬというのに、結局眠れないし、風呂から上がって結構経っているのに身体の火照りは収まらない。

(……ずるい。というか酷い)

腹を決めたとは言い難い、環境に押されての情けなくて可愛らしい告白。

そのクセ、キスに舌は突っ込んでくるしそういう気分にならせておいてお預けにするしたたかさ。

せめてもの仕返しにからかってやろうと風呂の話題を持ち出してみたら容赦無くセメント対応をされる。

(……ホント、なんであんなの好きになっちゃったんだろ)

割と最低だと思う。立派に興奮しておいて付き合ったその日についてのはちよつと違うとか言って先延ばしにするし、意外とがっしりしてるし、顔がいいし……なんでからかう側のワタシがこんなに辱められてるんだろ——とかそういうことを考えて、また一つため息を心の中で吐く。

(キス、すごかったな……舌、入れられて……溶けちゃいそうだった)

まるで蛇のように唇を開けて侵入して、舌を突っついてくる。それがたまらなく気持ち良くて、もつとして欲しいのに、仕返しに過ぎないという理由一つでやめてしまう。

本人のそんなつもりは無いのだろうか、あれでは酷いお預けだ。

(次はワタシが主導権握らなきゃ)

これでも蠱惑的忍者で通っているのだからとふんすと気合いを入れる。

と、同時に——先日の夜に自分が何故? と唐突に思い浮かぶ。

そのまま思い出すのはキスで感じた唇の暖かさ、確かに奥に湧き上がって熱となった情欲——されるがまま、滅茶苦茶にされてもよかつたという被虐心。

(……どうしよう……どうしたら、いいんだろ……?)

茉莉の内に燦る情動が荒れ狂って、思考を溶かしていく。愛おしくてたまらない人に、触れて欲しいのに触れられない。

胸は怒りと情で高鳴っている、求めている。叫んでいる。

——もうどうすればいいかは分かっている。何を躊躇っている……? と、心が訴えかける。

さあ、その獣性を解放してしまえ。一匹の雌になってしまえと。

(……は芳乃様の部屋。それに隣には芳乃様が眠っている。なら変なことしないで寝ないと——)

そう思っても眠れない。眠れるはずなどない。

瞼を閉じれば愛しい人の姿が浮かび上がり、自分の名を呼ぶ声が再生され、口の中に広がる彼の味と共に、弄ばれた心地良さが明確に蘇る。

頭は恋の狂熱にうなされ、胸は愛されたい女として高鳴って仕方ない。トクントクンと鼓動が響き、どうしようもできない感情に支配されていく。

(……ワタシって、思ってた以上にいやらしい子なのかな……)

だからこそやめなければ止まらなければ。

理性に反してじわりと熱を帯びて濡れる。その奥が疼いて擦り寄せてももつともつとと渴望して止まらない。

(あ、あ——)

理性が察した時にはもう遅かった。

手が伸びた。それに触れた。嬌声が漏れた。はしたない水音が立った。

慕っている主の隣で情欲に溺れ、それが露見したらという恐怖すら快感に変わった。

籠が外れて絶頂を求めて止まらなくなる。

求めたい、求められたい、甘えたい、甘えられたい、愛されたい、愛したい、食べられたい食べたい総て残らず余さず一つたりとも逃したくない——それら全ての感情が色を帯びて掻き立てる。

(……眠ってる、なら……早くシないと……)

情欲を迎えに堕ちる——

「かおる、くん……っ……ん、あ……か、おる、くん……っ」

あとと言うまでもない。

……ただひたすらに想い人を想いながら茉莉子は、自分を慰めた。

「う、わあああああ……く……ッツツ」

熱も情も収まり、慰めた結果より濡れた身体をどうにかするべく、もう一度風呂に入った茉莉子は自己嫌悪の念に襲われていた。

「いやホント、取り返しがつかなくなってから不安になるのはなんぞなんだろ……」

自制が出来ずに行為に至った。まあそれはいいだろう。

ただし主人の寝ている真横で、大胆にもと付いた瞬間に……変態の烙印を押されるのは間違いない。というか茉莉子が茉莉子自身を変態だと思っっている。

「……気付いてない、といいなあ。寝てるといいなあ……」

起きていないことを願うしかない。

「するんじゃないかった……本気でするんじゃないかった本当にするんじゃないかった真面目にするんじゃないかったああああ……なんで才ナ——いやいや、言っちゃダメです。そんなこと言ったら馨くんに才

ナ陸さんとか不名誉なあだ名付けらちやう……」

想像を絶する後悔に襲われていると――

――仕方なからう――

意外なところから、意外な声をかけられた。

「……そういうものですかね？」

素直な疑問なので素直に尋ねる。

犬神が恋を知りたかったのはそういうところ含めてなのだろうか？

――そもそも、想い人とまぐわいたいと思うのは当たり前ではないか。それを慰めることの何が悪い――

「……まあ、そうなのですけれど……」

――……あのお方もそのように思っていたのだろうな。だが……

不意に茉莉子の視界に、全く違うものが映る。

それは山奥、セピアではなくモノクロの記憶。視線の前には、唯一色の付いた金髪の、仙女の如き女性がとても穏やかな笑みを浮かべている。

――それは死に逝く女が浮かべる穏やかな微笑。見るもの全てを魅力してなお有り余る、”女”の強さに溢れたもの。

「――あなたも、恋をすればきつとわかるわ」

その言葉を聞いた瞬間に、茉莉子の内面にはある感情が再生される。

――何故あなた程の存在が一介の人間などを。

――何故裏切りに等しい行為を働いた相手を。

――何故自分から奪った相手を助けるようなことを。

――何故？ 何故？ 何故なのです姉君。

――何故あなたは、覚悟を決めてそこまで為すのですか？

――どうして、私の隣に……

(……これは)

”それ”がなんなのかをはっきりと把握する前にそのモノクロの記憶が終わる。

間違いない、犬神の古い記憶であり、彼がこのような行動をする理

由だ。

——ふん……見たか——

「あつ、その……すみません」

——……私の記憶を垣間見た程度で謝る。貴様は本当にあの男とは違うな——

静かに茉莉子をそう評価すると、犬神はふと思いついたように彼女に尋ねる。

——貴様、死にたくないな?——

「はい?」

——答える——

死にたいか死にたくないか。

そんなもの当然死にたくないに決まっている。

でもそれだけが彼の求めている答えではないと察した。

「それはもちろんですよ。死にたくないのは誰でも当然です。ワタシは自分の為に死にたくないと思つてますけど、それ以上に、馨くんの為に死にたくない。彼と一緒に歩みたいから死にたくないと思つてます」

それだけは胸を張つて言える。

この気持ちに偽りは無い。茉莉子の表情は、なんとも形容しがたいが、穏やかというよりも悟りすら開いたものだった。

——死に逝く女が浮かべる、そんな表情。

——……なるほど——

奇しくもそれは、犬神の古く、だが決して色褪せることない記憶にある顔と似ていた。

——愛とは、難儀なものだな——

「愛とは、矛盾するものですよ」

——ふん、言つてくれる——

何処か納得したような、そうでないような、そんななんとも言えないけれど、微笑ましい感じの声。

彼女の脳裏に描き出された、パイとそつぽを向く闇の狼の姿は、何処と無く素直になれない最愛の人と似ていた。

「……茉子が、すごい声を出してた」

「しかも、色々……すごい。私起きてたとか言えなかったぐらいにすごい」

「……あ、あれがもしかして……オナ……!？」

「つつ、つまり茉子は、茉子は——」

「茉子がいやらしい子になっちゃった——!？」

「……実は起きていた芳乃は、将臣の部屋に逃げたくて仕方なかった。」

”
恋歌

……ここはどこだ？

瞼を開けると同時に感じたのは、奇妙な違和感と、夢か幻かといった浮遊感――

「――憎い」

突如として声が響く。

身体が動かない。

(……なんだ!? 表層に上がるってこういうことか!?)

渦中の将臣は、この状況に目星をつけながらも、何もできない不安とともに、ただ何かを待つしかできなかった。

「憎い、憎い、憎い――お前だけが栄光を勝ち取るなど許せるものか。血族を躊躇いなく殺したお前たちなぞ、永劫に死に続ければいい……」

(これって……まさか、呪いの――)

闇が人を……鎧武者を形作る。

しかしそこには貌は無く、目の部分であろう場所に赤い光が見えるのみ。

まるで人形のようにですらあり、あるいは人としてのあらゆるものを無くした姿でもあり。

「俺にお前たちを、愛ささせろ……■……!!」

――その中に垣間見たものは。

紛れも無い、怨恨の魔物だった。

魔ま刀を鳴らし、狂い慟さげ哭び、そして身を破壊する程の、たった一つの愛情に従って■■を望む鬼。

それは十年の恋■■。

餓えた四肢に情欲の暗い歓びが燻り滾り咽びながら、渴いて今も疼く恋心すを携えて決して逃さず必ず愛す。

我が永劫の恋よ——億の花となりて狂い咲け。
闇の情動を掻き集め、目障りな神の■を穢してやる。

苦しみ嘆けと顎門が零すは久遠の悪夢、喰らい尽くすは永久の夢。
内に燻る猛毒が切に切に、絢爛たる輝きを消し去れと、我が総てに語りかける。

だから……いざ震えろよ。

楽園より追放されたならば、そこで求めても得られなかったもの、
手に入れる前に消え去ったもの——その損失を、ここで帳消しにするのみだ。

過去の底で蠢く、呪わしき魔物の咆哮を聞け——

「——はっ……!?!」

身体を起こす。

(……あれは、なんだ……?)

将臣の心中に浮かび上がるのは貌無しの鎧武者。その叫びはこちらからすれば全く知ったことではない。

だが、だが——最後に垣間見た者は何なのか。狂気の恋心に従い、
底無しの恋歌を謳い上げる者。

(……あいつ、は……なんだ?)

——鬼、あるいは魔物。

そうした漠然とした感想だけが浮かび上がる。

そして。

「しっ、らく……えん——」

自然と口から出てきたのは、失楽園という謎めいた言葉。

将臣としてそういう時期があったので、その意味は知っているけれど、
だが何故失楽園などという言葉が零れ落ちたのか。

全く関係がない筈なのに。

(表層に上がってきたのは、怨念の筈だろうか？ ならあれは……いや、
きつと違う。怨念であっても違うものだろう)

そんな不思議な確信があった。

恋、情欲、恋歌、情動、鬼、魔物、魔刀、怨恨……どれもこれも、朝

武家を蝕んだ呪いとは結びつかない。

——それは相反して矛盾しながら、しかし正当に存在して一切の矛盾の無い奇妙な慟哭。

結びつかないのに、結びついている。深く、深く……

(……なんだ、俺たちの知らないところで、何かが起きている？ いや、起きていた……？ それが今となって、声を上げている……？) 全然わからない。

わからないが、何故か……何故それが何かわかってるし、知っているような——

「叢雨丸」

自分の内から湧き上がる、不安と恐怖を押し殺すように叢雨丸を握り、祈るようにその名を呟く。

「——俺……どうしたらいいんだ……？」

呪いとは別の、慟哭の恋歌。

それは果たして何なのか、それを誰かに尋ねるべきなのか、それも終わった後にかすかすにかするべきなのか。

迷いの霧は晴れず、また叢雨丸は何も答えることすら無い。

だから迷いを振り払うように、彼は日課のトレーニングに急いだ。脳裏に浮かんだモノを、忘れるように。

——おや、そろそろかな……——

——怨恨の魔物が目覚めつつある、ということは……蓋が外れかかっている——

——これは、使える——

そして黒もまた、嘲笑していた。

既に魔物の叫びは、蒼天に轟いていた。



「菜子の首筋が噛みてエ」

——馨、お前そんな変態だっけ？——

「人間なんざみんな変態だよ」

——むむむ、むつ、むむ……——

「何がむむむだ」

朝っぱらからなんか元気だ。

少なくとも茉莉子の首元をはだけさせて、そのまま噛んで吸って舐めて心行くまで楽しみたい。

——おーい、コ……狼くん。キミの方はどう？——

——……そっちの男の無欲さに呆れている。こちらの方が余程健

全だ——

——んー、まさか……ねえ？——

——可能性はあるぞ。こと、その男の特異性を考慮すればな——

……？

おい、京香。どうした。急にチャンネルを狭めて。

——いやいや、独り言よ独り言——

……ホントオ？

——ホントホント——

ま、いっか。

んー、と伸びを一つ。身体をパキパキと鳴らしながらゆっくりと起き上がる。今日も普通に学院があるので、あれこれ考えられないのだが——

「確か今日は休診日だから、駒川のところの話が持つてけるんだよな」

ある程度話は通してあるとは言えども、本業の邪魔にならない程度の情報と、現在良い方向に向かっているというこことくらいしか話してないのも事実。ここらでしつかりと説明しておくべきだろうというのか、昨日の夜中、寝る前に話していたことだ。

夜中……と言えば、発情期の猫めいた音が聞こえていたような気がしたが、まあ……気にするほどでもないか。

「あ、起きてた」

「おっはー、茉莉子」

「おはよう、馨くん」

……茉莉子は何か知ってるかなあ？

「茉莉ー。昨日の夜中さあ、なんか変な音聞かなかったか？　こっ、発情期の猫の鳴き声みたいな高い音」

「……………さあ？　ワタシ、ぐっすり寝てたので」

「そっか。じゃあ俺の聞き間違いか。この家もだいたい経つからな、そういうこともあるよな」

納得する俺に対して、何故か気まずそうに沈黙し続ける茉莉。視線まで逸らして、何か音に心当たりでもあるのか？　あつ……………あー、もしかしたらあれか、脚でも攣って艶めかしい声でも出たのか？

——お前は鬼か——

……………は？

鬼って何がよ。

——そのままにしておいた方がいいよ、馨——

芳乃ちゃんじゃないけどきーにーなーる……………

——キモいからやめなつて——

わかっている。似合わんのがわかっている。俺は多分「やめてよお!？」とかのヘタレ受けみたいな男だと自覚している。

……………襲つてやりやあいいのに——

無理だろ。多分グダグダになるぞ？　絶対に俺が優しくしてつて言うことになるぞ？

——カッコつけるよ、甲斐性見せろよ、男の子だろ。むしろ茉莉ちゃんは誘い受けなんだからさ——

そうかア？　どう見ても茉莉は食べる側だろ。

——いいや、彼女は受けだね。女の勘でわかるものさ。女の子つてのは、男のイイとこ見てみたいんだから、ちゃんと馨から食べてやるんだぞ？——

……………頑張る、と言いたいところだけどそんな風にする暇あるのか？　耳の問題が解決してるわけでもなし、あんまりそういうその……………そういう行為をするのはちよつと、違うような……………

——てかなんだよその反応、生娘かよ。言えるだろ、同衾とか自慰とか。今風に直すと……………——

やめろはしたない！

如何に歳を食えどもあなたは女性でしょう!? 変な知恵を俺から吸い上げて変なことを言わんでください!! よろしくないです!

——えー、耐性なさ過ぎるよ馨ー。タマ付いてんの? ちゃんと勃つ? 男のケツの方が興奮する? それともロリの方がいい? B以上の膨らみには興味無い? ——

付いてるし勃つよ!?! あと普通に可愛い女の子が好きで胸の膨らみは……: どうだろ?

——ま、なんでもいいけどサ。ちゃんと優しく抱いて、甘い夢を見せてやれよ——

なんだその言い方は……いやもう、なんかもう……朝から疲れる。内心グツタリしながら、気まずそうどこか恥ずかしげな菜子に声をかける。

「……あー、その、なんだ」

「は、はいっ」

「今日は何の味噌汁?」

「お麩ですけど」

「っしやあ! 朝から気合入る」

菜子の言葉を受けてガツツポーズを取る。

実は俺、菜子の作る味噌汁の中で麩の味噌汁が大好物なのだ。

本人はそんなに胸張ってる訳でもないし、味噌汁であれば豆腐とかめの味噌汁の方が得意だーと言うのだが、俺は麩の方が好きだ。

「相変わらず好きですね。お麩のお味噌汁」

そんな俺を見て、まるで手のかかる弟を見るような視線を向けてくる。恋人になったというに、この辺はさっぱり変わってない。

……もう少しこう、男として見てほしいところではあるが……いや、俺が散々女の子の子として見ないようにしていたんだ。罰や咎だと思っって甘んじて受け入れよう。

そういう菜子も好きだし。

「お前の作るって付ける。菜子のじゃないとどうも麩の味噌汁はな」

「毎日飲みたいですか? お味噌汁」

「ん? あー、叶うことなら。菜子の作るメシは美味いからな。でき

ることなら毎日食べたい」

「ふふふっ、そっか。毎日食べたいんだ、ワタシのご飯」

「そりゃな」

気を良くする理由がさっぱりわからんが、菜子は今にも小躍りしそうな程にとても喜んでいいる。ニコニコとした笑顔はやけに嬉しそうに見えて、なんかキスした後みたいいな浮かれた雰囲気。今の問答の何処にそれを生むのあった？ と疑問を感じる。

「なんか嬉しそうだな」

「だって好きな人に自分の料理を毎日食べたいって言われたら、作る側として嬉しいことこの上ないよ」

「そういうもんか？」

「そういうものだよ」

「ふーん……ま、なんでもいいけど。すぐ着替えて行くよ」

「はい、待ってますから」

トテテと去る菜子を見送り、制服を引っ張り出していそいそと着替え始めると同時に、不意にプロポーズといえば……というのを思い出した。

プロポーズといえば、結構前は毎日味噌汁を作ってくれ、みたいなものが流行ったという。臃げな記憶だが。

つまりだ、俺は菜子に誘導させられてプロポーズ紛いなことを言っ
てしまった訳であって――

「……悪くないな」

菜子と恋人から夫婦になる。

それはそれで悪くない、というか。

「外堀埋められてるのでは？」

けれどもまあ、なんでもいいや。

菜子にそれ以上を求められるというのは男としては、彼氏として冥利に尽きるってものだし、それにこっちとしても嬉しいこと。

なるほど、がつつかれるのは悪くない。

朝食の席で聞いたのは、将臣の見た夢の話。確かに表層に上がって

きているようだが――

「……あとなんだかわからないけど、他に何かあるような、変なものを垣間見たんだ。いや何かはわからないんだけど、とにかく変な……」
だが怨念、つまり呪いの残滓の中に何かが含まれている。

ただ心当たりが無い上に、変なとしか形容できぬものであるらしくて、その表情と声は沈んだものだった。

「ご主人、あまり気を沈めるな。不安になるのはわかるが、今ご主人は怨念を宿しておるのとそう変わらん。馨のように喰い潰せるわけでもなし、虚勢でもいいから胸を張るのだ」

「わかってるよ。でも、俺はあの声が、叫びが、恋歌が……頭から離れない」

「恋歌じゃと？」

ムラサメ様は大層不思議そうにしているが、実際不思議だ。

恋歌……恋歌って……なんで恋歌？

「恋歌って、恋よね？」

「はい。確かに恋ですね」

そつちの主従コンビの言う通り、確かに恋だ。怨念や呪いとは何の関係も無い。むしろ対極に位置する感情だとも言えよう。

「好きであればこそ嫌い、嫌いであればこそ好む。愛憎とは陰陽の如き関係にして矛盾の螺旋、なればこそ愛する事と憎む事は同じである……昔千景のアホがふられてこんな風に斜に構えてた時期あったけど、呪いの中に恋を見出すか。不思議なものだね」

ボソリと呟かれた安晴さんの言葉を聞いて、親父の何と情けない部分に幻滅しながら、しかし一理あるとは感じる。

確かにそうだ、好きと嫌いはその対象に関心があるからそうした感情が湧き上がるもの。無関心であれば何も感じる筈がない。

であれば、呪いの中に恋を見出したということは、なんらかの意味を持つ筈だが。

「なあ馨、怨念って混ざるのか？」

「混ざる……というか、怨念なんてものは主体となるものが代表しているだけで、基本的には混ざり物だ。混ざりつけ無い怨念なんての

は、生まれた時くらいか、なんらかの条件が重なった結果として保たれているくらいなのレアケース。だからお前が恋を見出したのであれば、混ざってたものが見えたただけだろ」

「そうかな……」

「ま、気にすんな。表層に上がりつつあることも考えれば、すぐに無くなるだろ。気疲れしたなら芳乃ちゃん成分でも摂取しておけ」

だが、しかし。

次の瞬間には重い雰囲気朝食の場が凍り付いた。何故だろうか？ 俺はそんな変なことを言っただけでもないのだが。

大変微妙そうな顔をした将臣だが、はて……？ というかムラサメ様も何言っただけコイツみたいに見てくるし、茉莉も呆れてるし、芳乃ちゃんよくわかってなさそうだし、安晴さんの表情はいつも通りだからよくわからんし……

「なんだその……なに？ 芳乃成分って」

混乱の中、将臣がさっぱりわからないと言わんばかりにボヤク。

もちろん俺は答える、優しいので。

「お前だけが芳乃ちゃんから摂取できる成分。さしずめ、芳乃ニウムと言ったところか。ちなみに俺は疲れると茉莉ニウムを摂取するぞ」

「ははあ、さてはお前馬鹿だろ」

「惚れた女に馬鹿になって何が悪い。あとおススメはムラサメイオンな。あれは効くぞ。めっちゃ癒される」

「……おう、吾輩初耳なのじゃが」

「ムラサメイオンの方はワタシも」

ムラサメイオンはムラサメ様が変な行動や可愛らしい行動した時に発生する成分であり過剰摂取するとムラサメ様萌えになってしまう……まあ余談か。

ところが急に芳乃ちゃんは我が意を得たりとキラキラとした目で、ぱあっと明るい表情になりながら、俺の手を取った。

……柔らかい。

「わかりますっ！ ワタシも疲れたら将臣さん成分を摂取しないと中々気が休まらなくて」

「だよね芳乃ちゃん！ いやあ、俺もそうなんだよ。茉莉ニウム摂取しないとやつてられなくてさあ」

「そうですね！ 気を休める為にも将臣ウム摂取しないと上手く行きませんかよね」

「ちやろー☆」

珍妙な掛け声を上げながらハイタッチしてアハハと笑い合う。そんな間柄な俺たちを見た、俺の彼女と芳乃ちゃんの彼氏は。

「ねえ有地さん。ワタシちよっぴり微妙な気分なんですけどどうですか？」

「すげーわかるよ常陸さん。いくら馨と言えどもなあ」

「あは、ジエラってますねえ〜」

「常陸さんだつてそうだろう？」

「もちろんです」

とても仲良さげでしたとさ。

ちゃんちゃん。

「ふむ、なるほどね。仔細はわかった」

別に学院ではさして何も無かった。

いや、厳密に言えばそういうわけでもないのだが、さしたる話でもない。せいぜい、俺が茉莉と別々に飯食つてたらざわつかれたくらいか。

そして今は駒川の所で情報を伝え終わったところだ。

「実際、犬神の分析が無くとも待つていけば勝手に表面化して祓うことになったろうね。ただ不安の感じ方がだいぶ変わってしまったらうけど」

「結果として色々と良い方向に繋がってきた、ということですね」

「その通り。ただ……恋歌、ね」

将臣からの報告を受けて、やはり駒川もまた恋歌の話聞いた途端に訝しんでいた。

「確かに古来より、愛情とは狂気であると語られることは多いけど、怨念の中に恋歌を叫ぶ者がいる。けど馨の見解では混ざり物の一つが

現れたのかもしれない……と、なれば」

そこで言葉を区切って、不意に俺の方を見つめてくる。

そして――

「……この件は君と深く関わっているのかもしれない」

「俺？」

本来、まったく関係が無い筈の俺が関わっている可能性があるとして、真剣な顔で指摘した。

「君からの報告があったように、虚絶の中には犬神の怒りや呪いの意志めいたものもあった。けれどそれらは憑代の完成と共に消えた……なら、それらに覆い隠されていた何かが剥き出しになって、有地君が怨念の中にそれを垣間見たのかもしれない」

なるほど、と頷きかけたが……それでも解せない。混ざり物とは言えども、俺に関係するなど……と。いくら虚絶の中で有象無象を啜っていたとしても、現に犬神は純粋なままであるし、規模こそ小さいが呪いも純度を保っている。

であれば他が浮かび上がるとしても、俺には何の関係も無い筈だが

「虚絶には意志があり、その中には伊奈神京香も存在していた。ならば彼女たちのように、恋歌を叫ぶ者が潜んでいても不思議じゃない」

「――そうか」

虚絶には謎が多い。

そして俺も知らぬものだってある。恋歌を叫ぶ者が虚絶に由来しながらも無関係であるのならば、偶発的に混ざって意志を保っているとしても不思議ではない。

「それにそもそも……何故朝武は犬神の存在を知っていたのか。何故伊奈神は魔人として生まれたのか。何故有地君は叢雨丸に選ばれ、何故馨は虚絶に選ばれたのか――」

言われてみれば、という点ばかりがわからない疑問として残っている。将臣は何故選ばれたのか。いつぞや虚絶は選り好みをしている……と言ったが叢雨丸は何を選り好みしているのか。

何故俺は魔人として覚醒したのか、神を知りながら何故神を斬った

のか。

「これは私見に過ぎないけれど、あらゆる事態が何処かで繋がっていると思うんだ。それも大昔に」

駒川のそれは確かに推測に過ぎないが、何処と無く何か確信めいたものがある発言だった。

「まあとりあえず、怨念を祓うことに集中した方がいい。明日には更に表面に出てくるだろうし、何があっても対処できるようにしておいた方がいい」

「そつちに関しては抜きありません。既に準備は整えてあります」
「なら安心です、芳乃様。私は知識があるだけで基本は無力ですからね」

あらゆる事態に備えているのもまた事実。恋歌の謎は置いておいてもまだ大丈夫だろう。

全てが終わったなら、俺は虚絶をどうにかしなくてはならない。怨恨の宿り木であるあれもまた祟りであるからな。

そんな風に考えていると、駒川の視線がまた俺に向けられる。そのまま茉子へと移って、しばらく行ったり来たりしてから。

「そういえばサラツと流されたけど、常陸さんの子犬問題は解決したんだよね。で、結局馨はどうしたの」

「ん？ 付き合ってるよ、茉子と」

「ふーん……えっ?」

「いやだから付き合ってるって」

眼鏡を外して目を擦ってから、再び眼鏡を戻す駒川。何やってんだコイツと思いつながら言葉を待っていると、今度は茉子を見て。

「常陸さん、このアホをよろしくね」

「はい、みづはさん。このアホはワタシがちゃんと支えます」

「え何その結婚前夜みたいな反応は!? てかお前は俺の親か!」

「ある意味では親みたいなものだと言ってくれたらう?」

「いやそうだけど、そうだけど! ……うーん、うーん……」

「それで告白はどっちから?」

「秘密ですつ。あは」

……まあ二人が楽しそうだからいいか。

あれやこれと盛り上がる二人から視線を外して、所在無さげにムラサメ様を見る。

え？ 芳乃ちゃんと将臣？ 向こうでイチヤついてるよ。

「ムラサメ様あー……」

「わかったわかった、構ってやる。ほれ、馨。吾輩に存分に甘えるが良
い。お主の姉代わりとして少し付き合ってやる」

大層仕方なさそうにため息を吐いた後、優しい顔で、本当に手のかかる弟の相手をするような口調で、ちよいちよいと手招きされればこんなもの堕ちるしかない。

俺はムラサメ姉さんに構ってもらいながら、駒川と茉莉の話が終わるのを待ちつつ、イチヤつく二人の会話を聞き流していた。

……レナ、助けて……

助けてくれえ……レナあ……

俺はしんどいよう。

「馨、今他の女子の事を考えておつたら」

「そんなバカな」

「……こりや茉莉も大変じゃろうて」

「ハツハツハ、その手の話で茉莉に迷惑は——」

「今こうして吾輩に甘えながら、恐らく頭ではレナの事を考えつつ、そして茉莉が構ってくれるのを待っているであろう」

……完璧に当てられたんですが。

呆れた顔でムラサメ様は続ける。

「ご主人がそういう時は顔に出るが、馨はまったく出さん。故に気を付けるよ？ お主は可愛いからな、そういう内面とのぎやつぶを見られては色々と危険だ」

「かつ、かわつ?!? いやいやいや、ムラサメ様、何をおっしゃって!?!」
「尊敬する人には報われて欲しい、姉のように思っているからこそ甘えてくる。可愛い弟分ではないか」

ニコニコと屈託の笑顔で改めて告げられるとその……とても困る。大変困る。なんでかってそりやあ……可愛いし綺麗だから。

つてか俺には茉子がいるんだぞ!? 茉子を愛してるのに何でムラサメ様でドキドキしてるんだ浮気者か!!

——立派に浮気者だと思うケド——
やめてよお!?

わかってても言わないでよお!?

……てか、お前なんか知ってるか。

——……いや、何も。初耳——

まあ、お前が言うならそうなんだろうけど……大丈夫かな。

——きつと大丈夫さ。キミらなら、何が来たって平気だよ——
だといいけどさ。

——……やはり目覚めていたか——

——私と奴が離れている影響だな。蓋が外れては怨恨も溢れ出す
というもの——

——そして……——

——……こんなのじゃ私も結局、奴と同じ……か。血は争えないつ
て話だね、ホント。生きているだけで傍迷惑なんて——

——ああ、まったく……吐き気がする——

——だがお前が仕掛けてくると言うのなら、今度こそ私が殺して
やる。潜むだけならば互い争うこともなかったろうが……——

——……カウンターとして動かないとな。けれども巻き込まざる
を得ない……腹、括るか——

で、あらかた話した後そのまま珍しく5人で帰ることになった。
なんかこういうのって気分が良い。

しかし、駒川に何か言うのを忘れていたような——

あつ。

……すっかり忘れてた。

リヒテナウアー家の洗い直しで、志那都荘でちよろつと資料か何か
見せてもらおうとか、あのデートの前日に考えてたのに。

……まあ、いつか。変にはじくり返すとロクなことにならん。俺に

しろ何にしろ、知らないことは知らないままでいい。

しかし、帰ってみればだ。

「将臣は裏で叢雨丸振ってくるって」

「芳乃様は？」

「見学だつてさ」

「そっか」

「で……お前はなんで俺の足に座ってんの」

ゆらゆらと揺れる菜子の後頭部。

胡座かいて座つてたら、本当に猫みたいに真ん中に座つてきて、そのまま棒アイス食べ始めた。

身長差と私服の構造的に谷間が見えそうになったりとかしてる。というか棒状の物を食べているとなんかエロい。

「そうしたいから」

「胸見えそう」

「見ていいよ」

「あとお前のケツがやべえ柔らかで俺がやべえんだけど」

「やらしーよ」

「……アイスクれ」

「ん」

食べかけのアイスを受け取り、一口。

まあ……美味しい。冷えてて。

欲しかったのは一口だけなので、素直に渡す。

「今日は、何もしなかったね」

「そだな」

正直これを何もしないと数えるのには無理があるような……いやしかし、菜子が何もしなかったと言うのであればこれは何もしなかったのだろう——うん。

残った棒を口に咥えつつピョコピョコ動かしている彼女を、そのままの体勢で抱きしめる。

「あは、どうしたの？」

「物欲しそうだったから」

「急にそういうことするのズルいよ」

「ズルいズルくないの話は堂々巡りだからやめようぜ?」

宥めるように言えば、渋々と言った様子で黙ってしまう。そのまま残り棒を華麗にゴミ箱へ投擲した後、振り向くこともなく、そのままこつちに体重を預けてくる。

「甘えさせて」

「はいはい。茉莉にゃんは甘えん坊ですな」

「前から気になってたんだけどにゃんって……なんでにゃんなの?」

「猫みたいだからにゃん」

「可愛くないよ」

「知ってる。可愛いのはお前だからな」

「おだてても何も出ないよ」

別に顔を合わせる訳でもない。

ただ俺が背中から抱きしめて、茉莉が体重を預けてくるだけ。

感じるのは彼女の温もりと香り、あとは……まあ柔らかさくらい。

「あったかいね」

「うん」

「……終わったら、またデートしよ?」

「そうだな。一息ついたら、またデートだ。今度は、本当の恋人として」

「うん……」

急に、上目遣いで見つめてくる。

見下ろす形になってしまったが、それでも彼女は微笑んでくれる。けれど視線は物欲しげに、欲するものをなんとなく察したから。

「……今日はキスしないぞ?」

「馨くんのケチ」

「毎日するようなものでもねーだろ」

「それはそうだけど、やっぱりダメ?」

「ダメ」

「えー」

……真面目な話。

自分を抑えられる自信は、それほどない。
そして今というか、この件が終わるまでそんなことをしている場合
ではない。

激突

——またこの夢か。

動けぬ身体と奇妙な浮遊感。

二日目にして将臣は呆れるほどに対応していた。

(……ここに来る前はこういうのに遭遇したら絶対に慌てただけだなあ……)

慌てる理由も無いというか。

いや、恐らくは最初に祟り神と会ったのが効いているのだろう。

……もしかしたら編笠被つてた馨を、叢雨丸を折ったあの日に見たからかもしれないが。

(あれ怖かったな……真剣に殺されるかと思った)

将臣にとつてみれば、馨こそが非日常への誘いだっただけというのが事実だ。叢雨丸も婚約も、まだありそうな——それにしたってだいぶ都合がいいが——話で済んだ。

ところが編笠被つた和装の自称掃除屋など、これを非日常以外の何者と言えいいのか。

ま、中身はだいぶ可愛い奴だったが。

そして——

——愛を喰らえ、我欲に塗れろ、恋心を満たせ、猛毒が満ちる——

(……今度はハッキリしてるな。この声、何処かで……)

先日とは違い、怨念の中の恋歌がハッキリとしている。響き渡る狂気の恋歌の声には憶えがあるのだが、しかし何故か釈然としない。

そして何よりも——

(理解できない)

その恋歌は本当に愛している相手へと向けられる、確かな愛情がある。だが確かな愛情があるのに狂っている。それは愛故に狂うなどという生半可なものではない。

……それが、この恋歌にとつての正常なのだ。

故に理解できない。

将臣の持つ芳乃への愛には、その異常性が存在しない。
支離滅裂な恋歌は、更に響き渡って止まらない。

——永遠の楽園を奪われて、鎖と杭は我が身に融けた。愚かなり、蒙昧なる玉石の女王よ。交わらざる愛の名の下に、我が心の抛り所を何故貴様は奪ったのか——

(鎖と杭……？ 玉石の女王の交わらざる愛って、比喻か何か？)

——この魂に刻まれし恋やみを見るがいい。血の輪廻に刻まれし怨恨の福音を知れ——

……その声は、恋歌は、近づいている。

まずいと思った時にはもう遅い。貌の無い鎧武者は眼前に存在している。ジツと覗き込む赤光が、ありとあらゆる熱を奪い去って止まらない。

——冥くらきかつての幸福が、光の果てと消え去った。ああ、悍こましき魑魅魍魎よ。どうか我が身を愛して欲しい——

(……え？)

愛して欲しい。

それは誰しもが抱く願い。寂しい想い。そして——

——女神の笑顔、我が初恋よ。何処へと消えたのか。どうか嘆きに応えて欲しい。今一度其方と合間見たい——

”それ”は、将臣の中に暗い奔流となつて流れ込んできた。

——逃がさない、逃がさない——

(来るな……っ！)

——あの日からずっと、その願いは——

「——この願いは、俺のモノだ」

その奔流の中に、ハッキリと”男”の声が聞こえる。

それは怨念の声などではない。その声は——

「なあ、俺を見ろよ■■。■■になつたと見惚れてくれ。俺はお前を愛している。だからこの声に応えて、振り向いてくれ——」

(——お、ま……え……!?)

記憶が塗り潰される。

想いが塗り潰される。

思考の中に憎悪が滾る。

憑代を砕け、神を穢せ、人こそ支配者、石と獣が何をほぎこうが知ったことか。

誰だつて殺している。何かを殺している。お前らだつて十や二十など軽く超えているのに、どうして俺だけが悪鬼羅刹などと呼ばれねばならんのか。

残虐を好んで何が悪い？ お前たちとて篡奪者の末裔だろうが。今なお篡奪しているだろうが。

何故、何故、何故、何故何故何故何故何故何故——

——いいだろう。

望むるならばなつてやろう。

我は悪鬼羅刹。

神に唾吐く魔人。

血も涙も無ければ、義無く仁無く死虐に悦を見出す真正の外道と成り果ててやる。

……俺を愛さぬ家族など、俺を魔人だと非難する弟など死に絶えろ、総て残らず冥府へ堕ちてしまえ。

元よりそこが生まれ故郷だ。

獣の分際で何が守護名代だ。

その女は我々など愛していないだろうが。

愛していたのは始まりだけだろうが。

そしてお前はその女しか愛していないだろうが。

愛していない獣なぞに守られる一族など、愛されねば生きられなかった一族など、死んでしまえばいい。

誰かに導いてもらわねば歩めぬ人間なぞ、すべからく滅んでしまえ。

そうだ。

この怨念は、朝武の長男は、別に暴君でもなんでもない。

ただの……その時代として見れば普通な、しかし現代的にはまさしく暴君のような人間だったが、その時代として見れば人ができていた弟や先代と比べられ、ならばと堕ちたのだ。

誰の所為でもなく、自然と。より際の際へと目指す。ただそれだけ。

ただそれだけの意志を貫き呪い続けていた。
そして消え行く意識の中。

怨念の声とはまた別の、あの恋歌の声が聞こえてくる。

「もちろん、お前も愛してるよ……将臣」

吐き気すらする穏やかな声。

愛情と殺意が同時に存在する狂った声。

——そこで、やっと理解した。

愛憎は表裏一体。

コインの表と裏。

……だが狂気さえあれば。

いかなる狂気であっても、それを繋ぐ狂気であれば。

それは同時に存在できる。

矛盾を内包しながら、魔性として。

狂気に塗り潰された彼の意識は、闇の底へと消え去った——

——それはいつかの記憶。

怨恨の炎の中で外道と犬神は対峙している。

「では仲良く恨み憎み合おうじゃないか。久遠の怨恨を、後世に響かせよう」

「やめろ……やめてくれ！ 私ならばいくらでも構わぬ！ だから姉

君だけは——」

「クククッ、ハハハッ……では向こうでその姉君に伝えるのだな。

——何故己を愛してくれなかったのかと！

——何故人間なぞ選んだのかと！

——名代を務めた己が馬鹿を見たとな！」

「まあそもそも……誰が守ってくれと？ 誰が一族を愛してくれと？

誰が名代など務めてくれと？ 誰も頼んでいないのだがなア？

——現実を知れ、■■■■。

姉君とやらのおかげで俺のような外道が生まれただけでなく——」

「……まさ、か……っ」

「真実、黄泉より這い上がった者……神が如き者も生まれている」

「さあ喜べ！　そして呪え！　いずれ穂織には絶叫する奈落の使徒が来たりて！」

「貴様の姉の恋——万の徒花に終わったそれが、やがては億の死を咲かせるのだ。そいつはきつと狂い咲かせることだろうよ」

「さて、外道と共に呪い続けようじゃあないか犬畜生。死の花が咲き誇り総てが死に絶える、その日までな……」

「ふざけるなっ、ふざけるな——!!」

……目が覚めた。

とても頭がすつきりしている。気分が良い。

為すべきことを為すだけ。

さあ、行こうか。

刃を携えて歩き出す。

そして向かうは本殿——

「よお、朝っぱらから物騒なもん担いでどうした？　将臣」

「退け馨。俺は諸悪の根源を壊す」

の、前に立ち塞がるのは稲上馨。

やれやれ、といったような表情と態度のまま、彼は言葉を続ける。

「憑代壊せば丸く収まると？」

「要らないだろ、あんなもの」

「……はあ、暴走してるのかア。よりもよって面倒くせえ」

「二度は言わない、退け。俺は芳乃と幸せになる為に、憑代を壊す」

叢雨丸を構えて睨みつける。

内心に燻る呪いの残骸に囚われた将臣にとって、憑代はなによりも消すべきものだ。

それを感知した馨はため息を吐き——

「犬神に頼まれてここにいたが……どうやら吞まれすぎてみたいだな。いつぞや俺のようなものとなれば、引き摺り出して鎮圧するか……」

腰に携えた、その刀を引き抜く。

その表情は冷たく、無慈悲に――

「暴れるお前相手じゃ、ムラサメ様や芳乃ちゃんだと分が悪い。茉莉は……ちよつと心配だ。とりあえず、落ち着くまで遊んでやるよ将臣」

「言つてろ……!」

踏み込んで斬りかかる。

普段よりも、何よりも調子が良い。過去最高の踏み込みと剣の軌跡。

だが、しかし。

ギイイン……と鈍く、また高い金属音が響き渡る。

叢雨丸の刀身と噛み合う虚絶の刀身――鏢迫り合い。

二人の視線が交差する。

片や敵意、片や呆れ。しかし場を支配し、そして全てであるのは、この瞬間は力のみ。

「邪魔をするな――」

「贖罪を穢すな――」

鏢迫り合いから離れて、向かい合う二人の好敵手。

例え今は狂気に突き動かされようとも、その事実が変わることない。

「馨ウ――ツ!」

「将臣イ――ツ!」

吼える二者。

蒼天の下、神前において行われたのは、呪いに突き動かされてしまった友人を止める為、そして最愛の女とその主人の贖罪を穢させない為の戦いであった。

「せ――っ」

袈裟斬り。

「ふん……」

それに対し、流水の如き刀の軌跡が刀を弾く。

「へえ、弾きつてのはこういう感覚か……」

「遊んでんのか!？」

「これを戦いと呼ぶのかよ?」

独り言に返された激昂を、挑発を以って切り返す。

最初の激突から既に数分。攻めるのは将臣だが、守る馨がその場の主導権を握っていた。

将臣と馨——その力量そのものは拮抗しているが、性能だけで言えば馨に軍配が上がる。しかし武器の相性差を考慮すると将臣に軍配が上がり、そして馨が本来の得物である小太刀を持てばまた馨に軍配が上がる。

奇妙な構図ではあるが、その奇妙な構図が崩れることがあるとすれば、外的要因に他ならない。

……今回のように。

続く将臣の剣撃、それを馨は危な気に弾いていく。

(……疲れさせろってもねえ)

——しようがないでしょ。呑まれてるんだから——

袈裟からの振り上げを、初段は弾き、しかし次段は横に身を逸らすように移動して回避。反撃に軽い斬撃を放ち、それが叢雨丸によって流される。

(言って聞かねえ。本人の意志になっている以上は荒っぽい手段にならないを得ない……やっぱりムラサメ様の神力散らして様子見た方がよかつたんじゃないか)

——いや、キミと同じで同調している。彼の暗い部分が怨念との同調により増幅されている以上、ほとんど効果は無い。やるんだったらキミが同調を断ち切ってからだね——

将臣を肉体的に疲労させ、その隙に怨念との同調を切らねばならない。

内面に潜む京香の言葉に、あまりにも面倒だとも思いながら、けれどそれで済むなら良いものかとも考え直し——

(……なら攻めるのみ)

ここで自分から攻めるという選択を、取った。

しかし馨は峰打ちなどという器用なことはできないし、そもそも彼の膂力で鉄の塊を振り回せば普通に死にかねない。故に守りに徹するというのは正解であり、攻めに回るともなれば流しやすい攻撃に限定されてしまう。

と、なれば危険も少なく疲労を蓄積させられるのは――

「――」

「居合か……っ！」

静かに鞘に刃を収め、じつと構える。

後の先を取る――その宣言は硬直を産む。迎撃か強襲か、双方の択は二つに一つ。

一拍、そして。

「は――っ」

馨が、跳んだ。

(疾い……だけど居合斬りなら確実に横薙ぎになるから――！)

客観的事実に基づく考えに従い、ここは素直に受ける――そう選択した。

受けて弾き飛ばされるまでは計算済み。受けた後の動き次第でこちらの動き方を決める。

怨念と同調しているとはいえ、将臣の判断は正しかった。

「え――」

横薙ぎの斬撃に対応する為に動かした腕が、ぬるりと突き出された馨の手に掴まれる。

――そう、正しかったのは剣での戦闘に限った話だ。

現実では距離を詰められ、腕を掴まれ、虚絶は抜かれてもいない。つまり、馨は将臣を疲労させる為の攻めに肉弾戦を選択したのだ。抜刀術とその為の接近すらブラフ。

それにそもそも、馨は殴るだ蹴るだこつちの戦いの方が得意だ。子供の頃から身体を十全に使った戦いばかりしていたのだから。

「そオ、ら――ッ！」

ぐるりと視界が蒼天を映し出す。

投げられた……その現実よりも先に背中から激痛が走る。意識の

外から地面に叩きつけられることは二度目だが、これはあらゆる痛みを凌駕する痛み。

「か、は……っ!？」

困惑と共に呼吸が完全に乱れる。

増幅された痛みが身体中を駆け巡って、ダメージよりも精神的な疲労感をもたらす。

それは痛めつけ、肉体を疲労させる為の投げ技。腕や足を破壊する、意識を刈り取るなどという直接的なものではない。

——激痛と共に彼我の差を明確にする為、その為だけの技。

競い合う、殺し合う為の技ですらない。ただひたすらに弱者を蹴る為の技だ。

そして将臣の視界に入るのは、軽く跳ねて勢いを付けた脚を落とし、てくる馨の姿。

無様だろうと意識を落とされてはならない——そう判断してコロコロと横に転がってそれを避ける。反撃とばかりに叢雨丸を操り、逆袈裟斬りを見舞うが、いつの間にか取り出され、左手に逆手で握られていた小太刀により受け流される。

続く斬撃の嵐を、巧みに小太刀を操って防ぐ。一撃、二撃、三撃——それはまるで舞踏のよう。

(やっぱり馨の方が上……なら無理矢理にでも……!)

(あの投げ方でまだここまで動くか。予定変更、一気に決める)

だがその舞踏の中で両者は戦闘が長引くことを嫌い、短期決戦を選択。

やはり先方は将臣。内に燻る衝動に身を任せたような、圧倒する無数の剣撃を押し付ける。対する馨はそれを的確に迎撃し、その一瞬の隙を伺う。

刃と刃の応酬、金属音と共に睨み合う二人。

叢雨丸が軌跡を描けば、それを押し留めるかのように小太刀が動く。何度も何度も、輪廻のようにそれらは繰り返される。

が、その合わせた剣が百となろうかという時に。

「——そこだあっ!」

「っ!？」

その軌跡と傾向を見切った将臣が、叢雨丸を巧みに操り、遂に小太刀を弾き飛ばした。

——それは素人の偶然ではなく、こんな形とはいえ、有地将臣の持つ才覚が発揮されたことに他ならない。

予想外の一撃。

馨の思考と動きが停止する。

そして将臣は、二度と邪魔されぬよう殺してしまおうと思い立ち、叢雨丸を構え直して、渾身の突きを放つ。

如何に馨が魔人と言えども、これならば対応できまい。勝利を確信し、後はその白銀の刃が彼の胸を貫くだけ——

そして腕が伸ばされ始めた時、ガクンと切っ先が地面へ突き刺さる。

何が起きた——？

「……な……っっ」

「甘い」

それは馨の脚。

渾身の突きを、なんと刀身を脚で踏みつけて撃ち落とすという神業。

そして馨の姿が消え、背後からタン……と何かが墮ちたような音。

飛ばれた——！ 振り向いたと同時に、胸に圧力を覚え、力もうとも身体は倒れ行く。仰向けに倒されたと同時に目に入るのは、またしても馨の脚。

踏み倒されたと同時に空いていた左脚で叢雨丸を持つ右腕が踏み付けられる。

（——やば……っ）

詰みだ。

そして馨は、まるで死神のように虚絶を抜刀する。

「少し静かにしてろ」

冷たく見下ろしながらそう言い放ち、虚絶を構え突き下ろす。

それは喉目掛けての一撃。確実に殺す為の一撃。

だからそれは困る。

そうされれば、憑代が破壊できない。

だから逃げてしまおうと、将臣の身体から黒い人型のようなモノが抜け出ようとして――

「捕マエタゼ、コノクソ野郎」

ピタリと止まる刀身。

伸ばされた左腕が、その人型の胸倉を掴み上げて、まるで引き摺り出すように持ち上げる。

混ざる男女の声。今の響は、魔人を殺す魔人としてそこにある。

「邪魔スルナヨ、才前。コノ時間ナノ二菜子ノ飯ガ食エナイダロウガ

――ッ!!」

そして。

彼らしい咆哮と共に、その刀身を人型に突き入れた。



人の形を失いながら将臣の中に戻る黒を見て、上手く行ったかと安心する。

――将臣を殺そうとすれば、同調を解除して逃げ出す筈だ。だからそこを狙って釣って沈黙させる。

殺すように殺さない制御は虚絶に。

引き摺り出すのは俺が。

疲労で引き摺り出しても良かったが、時間をかけすぎると面倒になるという理由もあってこちらを選んだ。

で、やったことと言えば将臣を動かしていた怨念の持つ回線を切り離しただけだ。これで表層に上がりつつも、将臣の意識に働きかけるのは時間をかけねば不可能となった。

「……俺は、なんてことをしようとしたんだ……っ」

正気に戻った将臣が、懺悔するようにそう吐き出す。その罪人のような表情は、まるでいつぞやの俺を見ているようだ。

将臣の上から降りて、とりあえず声をかける。

「気にすんな。そういう時の為に俺がいる。未然で終わったんだぜ？
安心しろよ」

「わかってるけど……やっぱり……」

「自分を責めんなよ。んな大事でもあるまいし。操られて憑代を破壊
しようとしたって程度でそんなに——」

「そこまで気にするなよと言葉を続けたのだが、将臣からすればどう
もそういう訳にはいかないように。」

「違うっ！俺はお前を殺そうとまで考えたんだぞ!？」

「まだ身体も痛むだろうに、上体を起こしてそう叫ぶ。悲痛な顔だ
が、正直な話そんなことで何故悩むのか。」

「……しよーがねーだろ、そればっかは。操られてた時のことを我が
事と思うなよ」

「でもー」

「将臣っ！」

もうあんまりにも見ていられないので、将臣の言葉を遮って名を呼
ぶ。

そのまま視線を合わせて、胸倉を掴み上げるような形で無理矢理立
たせる。

「いつぞや俺はお前に斬りかかった。そして今度はお前が俺に斬りか
かった。そんだけだ、それで終わり。思うものあるなら芳乃ちゃんに
でも泣きつけ。俺は気にしてねえ。むしろお前を止められてホツと
してるよ」

「馨……」

「しよげた顔すんな。んなキャラじゃねえだろお前は。そういうのは
俺の担当だったの。それを見てテメエは喝を入れる方だろうか」

「……っ」

「ご主人！何があつた!？」

そんなやり取りをしていると、ムラサメ様が近くに寄ってくる。
さて問題。

今俺は将臣の胸倉掴み上げてるし、将臣には土汚れが付いている。
近くには叢雨丸と虚絶が転がってるし、しかも俺が仕込んでいる小

太刀まで転がっている。

「ここから導き出される答えとは——？」

「お、お主ら……っ！」

ムラサメ様はそれらを視認した途端に怒りを露わにする。

あつ、やべ……という顔をする将臣が見ものだが、俺も多分そういう顔してる。

そして——

「何故何も言わずにやったのだ馨！」

「俺エ!？」

「大方、怨念の影響を受けたご主人を止めたのだろう!? それは感謝しよう! よくやったとも! だが何故それを吾輩に伝えなかったのだ!」

「だって攻撃する将臣だよ!? 荷が重いでしょ!」

「目眩しの一つや二つ吾輩でもできるわ戯け! どうかその方が手っ取り早かろう!」

「……あ」

——実は。

人が気分良く寝ていたら、茱子の中にいる犬神が「あの者が呪いに突き動かされている。止める」とか叩き起こしたのだ。

まあそりや仕方ない話。

……ただ寝惚けた頭で虚絶を担いでさっさと本殿に向かった後に、誰にも報告してないことを思い出したのだ。

ただ京香の見立てから判断して少し荷が重いだろーと思ひ、俺一人で当たってしまった。

つまりなんだ、俺のミスだ。

必要以上に将臣を痛めつけたのは。

「おい、馨……」

「い、言うなよ将臣……ごめんて。そのなんだ、踏み倒したりだ投げ飛ばしたりだして……」

「いいけどさ。それより離してくれ」

「悪い」

掴んでいた手を離すと、将臣は一つ深呼吸をしてから俺を改めて見る。

……やっぱこいつ、顔がいいな。

「助かった。ありがとう」

「本業だからな。それより平気か？　一応、痛みだけデカイのを選んでんだが」

「ん？　まああれくらいならなんとか」

「ダメだご主人。駒川の者のところで診てもらえ。如何に加減しようとも警の技だぞ」

「過保護だなあ、ムラサメちゃんは」

「心配しているのだぞ」

そんな風に笑顔で話し合う二人を見て、これでとりあえずひと段落かと一息つく。

……正直、小太刀で弾いた所為で腕が結構痛い。ま、ほっときや治るだろ。

そして散らばった武器の類を回収して家に戻れば、既に待機している皆様方。

「——というのが事の顛末ですね」

「将臣が暴走させられて俺が殴った。以上」

朝食の席……の前に事後報告。

ムラサメ様もちろん一緒だ。あとさつきムラサメ様から「一人で解決しようとするな。如何に本業と言えどもな」と苦言を申された。仰る通りで……

「吾輩は今夜、祓魔を執行するべきだと思う。表層に上がりきったのであれば、早急に対処するべきだ」

ムラサメ様の提案に反対する理由も無い。実際全員が首を縦に振った。(安晴さんには芳乃ちゃんが通訳してた)今日は学院があるが、休んでしまえばそれでいい。

というかもう学院どころでは無い。必要なのは早急なお祓いだ。

「手法としては前回、憑代をご主人から出した時と同じ形になる。引き剥がしてしまえば、清められた憑代に戻ろうとも受け入れられない

「からな。馨も同行しろ、万が一に備えてだ」
「任されて」

「吾輩が言うべきはそれくらいか」

「沈んだ空気が一旦消える。」

「俺も本当に一息つく。……色々疲れた。」

「俺ちよつとシャワー浴びてくる。後でみづはさんのところ行ってくるよ」

「そうした方がいいですよ。馨さんに投げられたりしたんですから」

「おおふ、芳乃ちゃん。あんまりその複雑そうな目を向けんでくれ。」

「俺も反省してるんだ、真面目に」

「私が言えた義理じゃないけど、馨さんはできるとわかってるなら黙って解決しようとするの、よくないと思うわ」

「……はい。申し訳ありません」

「芳乃ちゃんにも素直に頭を下げておく。確かに寝惚けた頭で、とはいえどもスマートな解決法ではなかったのは事実。甘んじて責められるとしよう。」

「さて——と視線を向ける。」

「既にここに来るまでに覚悟は決めた。」

「俺の大好きな彼女様は、一体どのような——」

「まあ事情は知ってます。彼から教えてもらいましたから」

「あつ、うん」

「その上で言うのであれば、やっぱり一人より複数の方が良かったかと」

「うん……それだけ?」

「それだけです」

「なんか、腹決めて損した。」

「なんでもないようにサラツと流した菜子に毒気を抜かれてしまい、俺もなんか肩の荷が降りた。」

「至ってフツツな態度の菜子が不思議ではあったが、まあ、いいか。」

「なあ馨」

「んだ将臣」

「お前って、何が得意なんだ？」

朝食食って、俺は菜子の味噌汁が飲めたことにホクホクしてのんびりしていたら、横で身体を休めている将臣からこんな質問が。

「得意って、何がよ」

「技の話」

「あー」

「投げたり踏んだり飛んだり短刀使ったり……お前ってもしかして万能？」

「いや全然。どれも平凡だよ」

将臣の疑問はもつともだろう。俺自身、始末屋で刀を使うとは言ったが、実際の得物は何かと言われれば全部としか答えられない。

切った張つたにルールなど無い。

故にありとあらゆるものを使い倒す——それが俺の知る限りの全てだ。

「俺にそっちの才能はあんまり無くてな。殺しは上手いが、戦闘はダメだ。身体の性能差で有利に立っているだけだし」

「あれの何処がダメダメだよ」

「刀の扱いだって上手くねーぞ？ 踏んで突きを止めるなんて菜子の親父さんの猿真似だ。俺より菜子の方がスムーズにやれる」

突きを踏んで止め、そこから背面に回って攻撃するのが忍者の技だ——とはいっぞやあの人と立ち合った時に言われたこと。実際に喰らってみればわかるが、あれは意味不明だ。

今回は咄嗟に出た手だったが、リスクが過ぎるぞアレ……よくまあ菜子もできるもんだ。

「京香も言ってたろ、俺は暗殺者向きだって。性能のおかげで使える技が多いだけで、所詮三流だよ」

「お前が三流なら俺はどうなるんだよ」

「そもそもお前、普通に俺と打ち合えるって異常だからな？ しかもベースは剣道だぞ、才覚は俺よりあるだろ」

「……言われてみれば」

こちとら魔人の膂力で殴ってるのに平然と打ち合うのは自信無く

なるから勘弁して欲しい。まあこつちも慣れないことしてるから……つてこれじゃ言い訳だな。

実際短刀を弾かれたのは想定外だし、そこで踏み飛びを使わされたんだ。俺が侮り過ぎていた。

——しかし気になるな。

もし俺が殺す気でやっていたら、将臣も十全な状態でかかっていたら、一体どつちが勝ったのだろうか？

一人の男として、この好敵手との決着は真面目に着けてみたいところだ。

——おつ、なんか少年マンガみたいな雰囲気だね——
内面からおちよくられる。

うっせ、気になるんだよ。

——ま、昔みたく小太刀と無銘刀による二刀、そしてあらゆる手段を講じてでも殺すスタイルに戻れば勝てると思うよ私は——

ロクな思い出が無い時期じゃねえか。

やめろや、その頃の話を持ち出すのは。

——無心で徹底した殺しを成し遂げる魔人……”勝つ”為ならこれが一番だよ。でもね、キミはこのままでいいんだ。そうなる必要なんかない——

……まあ、な。

——頼むよ馨、人として幸せになってくれ。英雄にも魔人にもなるな——
わかってるよ。

俺は……茉莉と普通に生きるって決めただ、人間として。

幸せにできるかどうかはわかんないけど、とにかく努力する。

「魔人ってなんだろうな」

不意に、何かを考えるように尋ねられる。

魔人とは何か——その答えなんて人それぞれだが、俺の意見を上げるとすれば。

「人にして人ならざる者だろ」

ただそれだけだ。

人ではあるが、人ではない。

「俺、怨念の記憶を少しだけ見たんだ。あいつは魔人だって自分を定義していた」

……ふうむ。

そう言われたってなあ、京香。

内面の彼女に聞いてみると、即座に実体化し、しかめっ面で吐き捨てるように語り出した。

「バカ言わないでよ将臣君。あんな出来損ないが魔人なワケないじゃん。所詮一族を呪っている程度で終わってるし、自分の行為を棚上げしてんだからただのガキよ」

……どうも本物と会っている所為か、その辺りの定義は厳密らしい。というよりも魔人やなんたるかを知らぬ奴が魔人を語るのが我慢ならん……って感じか。

「本物の魔人ってのはね、同情を引くようなモノは何一つ無いの。理解出来ず、相容れず、そして生物として異質で、人である筈なのに人として生きる上で何かが致命的に破綻しているし、それを自覚して秩序で見れば悪だと理解しながらも絶対に止まることない怪物」

その判定で行くと他ならぬ京香自身もまた魔人となる……とは本人の内心だ。中途半端に流れ込んできやがる。全部流れるかいつそ流れなければ特に無いというに。

実際、京香的には数千も呪い続けて挙げ句の果てに意識を気合と根性一つで保ち続けながら、一応は正気——とは言えども、復讐の衝動が増幅されてしまえば誰しもを魔人殺しに変えてしまう程に壊れているが——な自分など魔人に他ならないのだという。

……復讐者なのだから魔人とは違う気もするが。

「先天だろうと後天だろうと、人という生命体の基本から見て根本的に狂ってる——それこそが魔人。バカなクソガキと魔人を一緒にされちゃ困るわ」

どれだけ憎もうが死を望もうが、所詮一族“だけ”しか呪わず、土地を殺すわけでもなく”人間”の絶滅を望むわけでもない。

……ああ、まったく……”クソほども魔人でもないゴミ”だな。

魔人とは人と相容れず闇の奥底より咆哮を上げる者。死を狂い咲かせろ。凶星ならくより来たる魔物とは、すべからくを■してやるしてやるくらいので胸を見せてもらわねば。そうだ、魔人とは、魔人というのは——
「……だからこいつは所詮その程度。よくある頭目争いに負けて恨み節をぶち撒けてる敗北者が、魔人を自称しただけの話」

その通り。

結局のところ、やったことは呪いを謳い上げることこそせず、精々が短命にする程度。そんなものは魔人などではない。”俺以下の負け犬”だ……

——強制停止——

——強制切断——

——反転……収束……回線変更……——

「無価値だし無意味な、とてくだらないことだよ」

そう言い切った京香の表情は、哀れむようにも、あるいは憎むようにも、そして軽蔑するようにも見える。

複雑であり、同時に単純。もはやそれは人間の持つあらゆる感情を単一に凝縮したような有様だ。

「おおっと、そろそろ時間じゃないかな二人とも。診療所に行った方がいいと思うけど」

「あ、ホントだ。どーする？ 芳乃ちゃんは舞の奉納だし、茉莉は茉莉で忙しいし、空いてるの俺だけだけど」

「じゃあ頼む。流石に一人だと不安だ」

「へいへい」

「よくもまあこんな器用にやるもんだね」

診療所で診てもらった将臣だが、さしたる異常は無かったようだ。一安心。しかし医学的にはかなりおかしい状態なので、駒川は頭を抱えながらため息を吐いた。

「……地面に投げ付けられて痣も無ければ骨の類に異常無し。馨が後頭部を叩きつける投げをしなかったから背中に集中している筈なん

だけどねえ。まあとりあえずあまり運動はしない方がいい。殺る気無く加減したものは言っても、その本質は人体破壊術の類だ」

「しばらくはトレーニングを休みますよ」

「それと経過も見せてくれ。そうだな……一週間見せに来てくれ。有地君はどっかのバカと違って逃げないから平気だろうけど、釘は刺させてもらおうよ」

「言われてるぞどっかのバカ」

「どっかのバカって誰ですかねー？　ちやろー☆」

「馨」

「ひでえ」

まあそんなのはどうでもいい。

とうかあの技って……誰のだろうな。咄嗟にできたというか、あの場面ならあの技だって即決したんだよな。

……確か京香は黙ってたよなあ。ウチの一族のものかね？

「それで馨の方はどうしたんだい」

「付き添い」

「ああ、なるほど」

粗方話は通してある以上、あーだこーだ言わなくていいってのは楽な話だ。

とかなんとか考えていると、急に駒川はこんなことを言った。

「しかし、これで有地君の祓魔が無事終われば、君もあの家にいる理由が無くなるな。常陸さんが子犬になる理由も無くなったわけだし」

「……あつ」

そういえばそうだ。

確かに……俺がいる理由が無くなってしまふ。茉莉と離れてしまふ。

それは嫌だが、仕方ないことだとは理解している。けれども俺は茉莉の側にいたいし、茉莉に近くにいて欲しい。お勤めは大事だ、彼女はきつと芳乃ちゃんの側にいることを望むだろう。

……ああ、こういう時に将臣が羨ましい。四六時中一緒にいれるなんて。

俺だって叶うなら菜子と一緒にいたい、ずっと……ずっと。

なんか、近いのに遠距離恋愛みたいな雰囲気だな。

「おっと、何やら甘酸っぱい感じの雰囲気だね馨」

「そっか、お前帰っちゃうと常陸さんと過ごす時間減るもんな」

そんな微妙な変化を察してかニヤつかれる。ちくしょう。

「うっせえな。俺だって年頃だ、恋人と長くいたいんだよ」

「これは真面目に芳乃と説得して常陸さんを自由にすべきか……？」

「まあ、なんだ。その辺はじっくり話し合うといい。もうみんな、呪いだなんだのとは別れを告げるべき頃合いだろうし」

駒川の言う通りだが……不穏な気配はまだある。

特に京香が起きるだけの理由——恐らくは破綻者も何処かにいるのだろう。だがこれは俺の……俺たちの血筋の問題だ。

呪いとか仕事とか一切関係無い上に、そもそもこの話はウチが原因だからな。関わらせる訳にもいくまいて。一人で解決しようとすれば頼れと言われるが、こればかりは言う訳にはいかない。

人の中でも最もタチの悪い人種と会うんだ。崇りと向き合うよりも遥かに辛い。

……俺らだけで、殺る。

目には目を、歯には歯を——魔人には魔人を。

それが終われば、きつと俺は……

「おかえりなさいませ、二人とも」

帰って来れば、手が空いていた菜子が出迎えてくれる。

「ただいま、常陸さん」

「ただいま……菜子」

「有地さん、どうでした？」

「全然痣もできてなくて、医学的には不思議極まりないからしばらく見せに来てくれて」

「なるほど。今のところは大事ではないと」

「……そうだ、ちよつと台所借りていい？ 作りたいたものがあつて」

……ふうむ。

案外、芳乃ちゃん用のプリンかな。

「はい、構いませんよ」

「ありがとうね。あとは二人でこゆっくり」

スタタタと台所へ向かう将臣。

……診療所での話の所為かね？ まあいいか。

「あは、気を遣われちゃいましたね」

「だな」

えへへと笑う茉莉。

……柄でもないが、たまには思ったことを素直に言うでしょう。その方が多分……この話には一番良い。

トコトコと居間に移動してから、腰を下ろして向かい合う。

「毎日お前の飯食つてつてやっていると、なんか……夫婦みたいだな」

「言われてみればそうですね」

「あー、まあ……なんだ。その、いつまでこうして一緒に暮らせるかね」

そう言ってみれば、キョトンとした顔になった後、納得したような雰囲気を見せてから、優しく尋ねてきた。

「寂しいの？」

「ああ、とつても寂しい」

「そっか」

「……お前がそうしたいってわかってるんだけどさ」

実際あの日、彼女はそれを確かめたし、俺はそれで構わないと言った。

納得はする、理解もできる、けれど感情は歯止めがかからない。愛情とは極めて困った感情だ。

「でも……叶うなら、俺は……お前の側にいたい。だから——」

そんな困った感情に突き動かされながら——

「……もう」

困ったような、呆れたような、けれど仕方ないって感じがする彼女の声。

結局、その温もりを手放したくなくて、抱き締めてしまった。

「ちよつとでいいんだ。ちよつとだけ、こうさせてくれ。じやないと寂しくてしょうがないんだ……」

「別にこの生活が終わるって決まったわけでもないのに」

「常識的に考えて俺がこの家に世話になり続ける方がおかしいだろ。将臣のような大義名分があるわけでもなし、ただ恋人がそこにいるから俺もいたいなんてさ」

こんなもの、子供のワガママだ。

それでいいと納得した癖に、今更になってやっぱりヤダと思ってるなど。

「終わったらさ、色々話そうよ。ワタシたちはどうするかとか、そういうの」

「お前はもうしたくないんだ」

「ワタシ？　ワタシは……お勤めも大事だけど、やっぱりアナタと一緒にいたいかな」

背中が回されるのがわかる。

……お互いにお互いの温もりが欲しくてたまらないんだろう。

「お昼、どうしよっか」

「昼？　悩ましいよな。何がいいかな」

「夜に脂っこいものは違うでしょ？　かと言ってお昼に回してもいいけどそこまで、って感じじゃん」

「なら材料見て悩もうぜ。俺も付き合おうよ」

「ホント？　ありがと」

「で、二人はいつまでそうしてるのかしら？　私お腹いっぱいなんだけど」

ギギギと二人して声の主を見る。

巫女姫姿の芳乃ちゃんが、とんでもなく呆れた顔でそこにいる。

——菜子と即座に顔を見合わせる。

(……将臣の姿を見せるわけにはいかないよな。足止めするぞ)

(うん。芳乃様はしばらくここで足止めしないと)

小声で話し、そしてそのまま、また芳乃ちゃんの方を向く。

抱き合ったままなのはまあ……うん。

「ん？ 恋人に甘えちゃダメかな、芳乃ちゃん。舞の奉納お疲れ様」

「私だって将臣さんに甘えたいのに、二人は気を抜いた途端にすぐそうするんだから。見せられる側にもなってよね」

「あ、あはく……申し訳ありません芳乃様。つつい馨くんがいると、こう……」

「わかる、わかるわ茉莉。好きな人がすぐ隣にいたら自分だけを見て欲しくてついつい甘えちゃうわよね。うんうん、すぐわかる」

お、お……？

なんか我が意を得たりみたいな感じの、超納得してる表情の芳乃ちゃんがうんうんと頷きながらそんなこと言ってる。

足止め成功かこりや……？

「でも私思うの。たまには将臣さんから甘えて欲しいって」

「あー、確かに将臣の奴は全然甘えるタイプにや見えないよね。俺じゃあるまいし」

「茉莉、馨さんは参考になる？」

「なりませんね。馨くんは基本的に甘えん坊の寂しがり屋なので。でも大丈夫です。きつと有地さんに芳乃様から甘えてもいいんだということを伝えれば、弱音の一つや二つ言ってくれますよ」

うぐっ……いくら事実でも他の誰かにそれを実際言われると羞恥とか色々湧き上がってくる。

そして離れようとする茉莉がぎゅっと抱き締めてくる。しまった、こいつも成分補給しているのか……！

「も、もういいだろ？」

「ワタシがまだ足りないんです。あとたまにはカッコいいところ見せてください」

「芳乃ちゃん助けて」

「自業自得でしょ」

「なんか雰囲気昔みたいに戻ったね。俺への態度とかも」

「あんまり気を張る必要も無くなったから、かしら」

「の割には将臣に硬くない？ 敬語使つてさ。ああ、昔みたいに馨君って呼んでくれてもいいんだぜ？」

「茉莉の為に遠慮しておくわ。そんな風に呼んだらどんな顔されるかわからないもの。硬く見えるのは馨さんが私にそういう印象を持つてるからよ」

「ま、今の君とあの頃のわんぱくお嬢様は結びつかないからね。根っこが変わってないのはわかるんだけど、口調だけで硬く感じちゃう」「ところで私ばかり構ってていいの？ 茉莉がすごく可愛い顔してるけど」

そんな指摘に身体を離して顔を見る。

ムスツとした顔に、ちよつと膨らんだ頬。もつと構つてという色に見える視線に、どこか不満気な目つき。

——大変可愛らしい。

俺の彼女がこんなにも可愛い……いやマジで可愛いなコイツ。

「妬いてる？」

「面白くないだけだよ」

「妬いてるじゃん」

「妬いてないもん」

「可愛い奴。そういうところ好きだぜ、俺」

「……イジワルっ」

そそくさと離れてプイツとそっぽ向かれてしまう。

そんな様子がおかしくつてついつい笑いながら、けれどなんて声をかけようかを悩む。気の利いたことを言つてやりたいところだが。

「……何してんの？」

「あ、将臣。こりゃな、茉莉に拗ねられちった」

「？ 拗ねてるようには——」

と将臣が言いかけた途端、急に黙りこくる。何事だろうかと思つたが、多分知つてはいけない乙女の秘密なのだろう、うん……

「野暮用はもういいのか？」

「ああ、終わった」

「野暮用……？ 将臣さん、何を？」

「ま、ちよつとしたことだよ。それよりお疲れ、芳乃。向こうでお茶でもしよつか」

「はいっ」

そうニコニコと笑い合いながら、少し離れたところに行く二人……っておいおい!? 俺放置!? 待って! 助けて! お願いします!

そうした視線を投げかけてみれば、「あとは頑張れ!」みたいな感じの視線を投げ返してくる二人。そのまま居間から出て行ってしまい、多分どつちかの部屋に向かったんだろう。

「……はあ」

菜子に拗ねられるのは初めてだ。

いまいちどうしていいかわからない。

……というか、どうやって宥めたものか。

「菜子」

「……」

「こつち向いてくれない?」

「ヤダ」

「悪かったって。なんかもうちよつとやりようあつたよな」

「……」

「あのう、菜子さん? 俺お前に嫌われたら明日からどうやって生きていけばいいかわかんないんだけど」

「昨日までの生活に戻ったら?」

「もう忘れたよ」

ダメだな。圧倒的に拗ねてらっしやる。

もうこうなったら――

「菜子、今日は一緒に寝ようか」

「そこまで子供じゃないよ!」

ガーツと吠えるようにこつち振り向いてそんな事を言う。

……なにもそう拒否しなくても。

ちよつとシヨックだ。

「……まあ、馨くんから誘われるのは、嬉しいけど……」

「あ、そうなんだ」

「でもここでそう言うのはどうかと思うよ、ワタシ」

「ごめん、本当にどうしたらいいかわかんなかったんだ」

「知ってる。でも、妬いてるお前も好きだとか言われたら、どうしたらいいかわかんないじゃん……」

「——茉莉は可愛いなア」

すると顔を真っ赤にして、台所へと向かって行ってしまった。

頬がだらしなく緩んでいたのは、黙っておいてやろう。

父母の愛、娘の決意

——決行の夜。

俺たちは本殿の中、憑代の前にいた。

忍び装束に着替えた茉莉に巫女服姿の芳乃ちゃん、叢雨丸を携えた将臣……そして神主姿の安晴さん。

安晴さんがここにいるのは、彼の希望によるものだ。

『決して邪魔はしない。何もできなかった僕だけれど、せめて……見守らせてくれ』

ただひたすらに見守る側にしかなれなかった彼を思えば、この申し出を拒絶することなどできるはずもない。

危険ではあるが実際、何事も無ければ問題無いし、何事が起きたなら、それをどうにかするのが俺の仕事だ。

……まあ、身を丁寧に清めるとなると少々痛かったが。

なお犬神は特に何を言うわけでもなし、手を貸すと言っても多少の助言程度で済ましたようだ。見定めるのであれば、確かに納得のいく事だ。

——なあ馨、上手く行くと思うかい？——

そうなるように祈るしかない。

後は天運に任せる、それだけだ。

——キミって天運とか嫌いそうなのにね——

嫌いというか、好きになれないだけだったの。

でも他に継るものものない。やれる事を全部やったなら、最後に残るのは天運に任せるか祈るか。

俺たちにできることは少なかったが、やれるだけやったのも事実。よって俺は残つてることをやるだけ。

「ご主人、茉莉に叢雨丸を」

「わかった」

ちなみに叢雨丸を持つことは何故か、俺はできなかった。

奇妙なことに、叢雨丸を持つとか渡されるとかで『手に取る』という行為に移ろうとした場合、意識と言動に反して身体が全く動かなく

なったのだ。しかも無理に握らせようとすると絶対的に握ろうとしない。

……恐らくは本能的に相容れぬからだろうというのが俺、京香、ムラサメ様の見解だ。

まあわからぬことはわからぬしな。

「……え？」

ボソリと、叢雨丸を受け取った茉莉子が間抜けな声を出す。

「茉莉子？」

「あつ、いえ。なんでもありません。犬神がちよつとコメントをしただけです」

心配そうな芳乃ちゃんに、安心させるような笑顔で対応する茉莉子。しかし考えてみれば神刀と本物の神である。知り合いというか、関係があつても不思議ではない。

故にだろうか、それ以上何かを言うこともなく芳乃ちゃんは真剣な表情に戻る。

「お父さん、もうすぐ始めるから」

「ああ、離れているよ」

俺たちから安晴さんが距離を取るのを確認した後、ムラサメ様は言う。

「さて、ご主人……覚悟はいいな？」

「とつくにできてる」

怨念を取り出すというのは、何が起きるかわからない。前例が無いのだから。故に覚悟は問われ、そして間髪入れずに応えられる。

そして憑代を手に持ち、祈るように目を瞑り集中する将臣。

しばらくすると、その身から黒い靄めいたものが溢れ始める。

——その気配、この感覚、何と懐かしいものか。

いつぞや騒ぎ立てていたものと一致する。つまりは当たりだ。

「ッ……」

「未だ剥がれ切っておらぬぞご主人。まだじゃ」

その靄は形を変えていく。

集まり、離れ、そして何度も分離と結合を繰り返して繰り返して繰

り返して――

全て出たのだろうか？

そう思う頃には、黒い鎧武者がそこにいた。赤い目のような光を持ちながら、貌の無い鎧武者が……

「ア、アアア……アト、イツポデアルトイウ、ニ……イツ」

その怨嗟の声にも聞き覚えがある。

あの時崇り神を殺せ殺せと騒がしかった声。

「ナニ、ユエ……オレガ、オレダケガ……オレヲミトメテクレナカッタノダ、ヤツバカリヲ……」

すぐさま霧散するように揺らぎながら、何故何故とまるで子供のようになんかこと言う影。

ああ、なんだ。結局こいつは所詮この程度だったのか。

――本当に、くだらない。

これで魔人を名乗るとは笑わせてくれる。

魔性も無ければただの餓鬼ではないか。

……こんなものに呪われて死んでいった歴代の巫女姫たちの死はなんだったのだ。

ただの醜い妬みなどという、もったも低俗な理由で……

「チチ、ウエ……オレ、ハ……」

そうして消え果てる怨念。

気付けば静寂のみが残っている。呆気なく終わり果ててしまったのだ。

こんなシヨボすぎる恨み言をボヤいて消えたのだ。

奈落より深い恨みの叫びを天へ轟かし、虚しく闇へと吼えるわけでもなし。ましてや虚空の月を、輝く銀河を喰らうわけでもなし。

――なんと、情けないことか。

「終わったの……？」

「気配は消えた、な」

芳乃ちゃんから漏れた言葉に、そして確認するように呟くムラサメ様。

「本当に、終わったんだな……」

安堵の溜息を吐いてから、憑代を元に戻して茉莉から叢雨丸を受け取る将臣。

……本当にそうなのか？
終わったのか？

ならば何故——芳乃ちゃんの耳は消えていない……!?!
「っ、皆様！ まだ終わってません！」

静寂を切り裂く茉莉の警告。

全員がハツとしても何もわからない。

そして、それと同時に——

——馨！ あいつ霧散した怨念を消えるより早く再構築して新しい怨念として再誕しやがった!!——

「馬鹿なッ!?!」

消えるより早く再生すれば問題無い。

ああつまり、奴は間違いなく——気合と根性一つで再誕しやがったんだ……っ!!

ならばと行動を移そうにも遅い。

「馨?! 何があつた!」

将臣の問いも全てが遅い。

「芳乃っ!!」

「へっ? え——」

安晴さんの声が響くと同時に、芳乃ちゃんの後ろに闇が現れる。

その闇は何よりも疾く芳乃ちゃんに取り憑き……

バタリ、と。

まるで糸の切れた人形か何かのように、彼女が倒れ伏した。

「芳乃!?! おいしっかりしてくれよ芳乃!!」

「下手に動かすなご主人！ 芳乃の意識が無いのだぞ!」

焦る。焦る。

全員焦っているだろう。上手くやればこうならなかったとか色々考えているのではないだろうか。

だがそれよりも対処せねば。

「京香!」

咄嗟に京香の名前を呼ぶと、代わりに出てきたのは俺の声なのに京香の口調という奇妙な一人芝居めいたもの。

「わかんないよ私も!! けれど所詮消えかけの呪いを再誕させたところで最期の力を振り絞ったのには変わらない! というかこういうの詳しいのはコマのヤツだろ!!」

「コマって誰だい!?!」

「犬神の古い名前だよ安晴君!! 茉莉ちゃん!」

「……はい、わかっています」

——この状況で最も落ち着いていたのは茉莉。

「今の芳乃様は呪いが最終段階まで無理に移行させられているだけです。言わば綱引きをしている状況……犬神が言うには、皆で声をかけろと」

「……そうかつ。芳乃自身で振り切れるということか! 皆で声を届けるのだ! 生への渴望を刺激するのだ!」

ムラサメ様の発言に俺たちが頷くと同時に。

「そして有地さん、安晴様」

改めて二人に向き直した茉莉が、静かに告げた。

「有地さんは叢雨丸に力を貸すようにと念じてみてください。そして安晴様は——」

「……芳乃様に本音を伝えてください。

そうすればきっと——”あの人”が、それを届けてくれます」



「……おやおや、この彼岸の茶屋に来たる客人など最早見ることはなかったが……妙なこともあるものよな」

戯けたような声。

芳乃が目を覚ますと、そこは彼岸花が毒々しい程に一面に咲き誇る異様な野原であった。

辺り一面は紅蓮に染め上げられた世界。照らすのは黄昏の輝き。

キヨロキヨロと見渡して、そして彼女はその更なる異質さに気付く。
(いや、違う……これは彼岸花じゃなくて、蓮の花……)

紅蓮に染め上げられて狂い咲く花は、彼岸花などではなかった。それは彼岸花の茎の上に咲く蓮の花——更に言えば紅蓮などという生易しいものではない。

その紅蓮はドス黒い赤。言うなれば鮮血の類だ。芳乃自身、よく憶えている。この赤は血塗れになった馨の纏う赤と同質の色であり、いつぞや倒れていた将臣の流していた赤の色だ。

血染めの蓮の花——八熱地獄において、紅蓮地獄というものがあ
る。そこでは想像を絶する冷気に置かれて身体から噴き出る血が、赤
い蓮の花如き形相を見せるという。

神事に携わる者として、多少なりと知識は得ているが……それにし
てもこれは……

(悪趣味ね……なんだか)

違うものと違うものを組み合わせる芸術は生まれるもの。

そして芸術とは、すごいと思えどそこまで終わる。

だがこれは、理解できない。

そして、理解したくない。

知りたくない、見たくもない、分かり合えない……徹底して根本的
に、そして何の理由も無くただひたすらに相容れないもの。

「おい、聞いているのか？ うら若き乙女よ」

「ひゃっつ」

背後から聞こえる声に驚いて、ピョンと跳ねながら振り向く。

そこにいたのは黒衣の女がいた。

黒、黒、黒、黒……そして白。

貴族的な意匠を持ちながら動き易さも考慮された黒い和装、暗闇の
如き黒い目、濡鴉の如き黒い髪——不気味なほどに美しい色白の素肌
と相まって闇に浮かんでいるような、あるいは光が蝕まれているよう
な、そんな感想すら覚える。

(……あれ？ この人の顔、何処かで見たことがあるような……？
憶えがある……)

だが奇妙なことに、この女性の顔に見覚えがあった。

もちろん、芳乃はこの女性とは初対面だ。だが何故だろうか、何故か憶えのある顔だった。とても身近に感じるような、そんな面影が見える。

しかし、知り合いではないのもまた事実。奇妙な感覚だ。

知っているのに知らない、知らないのに知っている、見たことがあるのに見たことがない、見たことがないのに見たことがある。

矛盾とは違う。強いて言うならば兄弟家族の顔が似ているということが近いだろうか？

(私とお母さんが似ているように、この人も、私の知っている人と似ている……)

「ふうむ、まだ冥王の御許に向かうには早いと見える」

「あの、あなたは……？」

「私はただ六文銭を渡される役割だよ。だが安心しろ、お前は生の天秤の上に乗っている。そうそう間違えなければ冥府の門を潜ることもあるまいよ」

まったくと言っていいほど状況が飲み込めない芳乃に対して、何でもないように矢継ぎに言葉を投げる黒い女は、近くにある廃屋のような、ボロボロの古い家のようなものを指す。

「立ち話もなんだ、向こうで座って話をしないか。朝武芳乃」

「……さて、お前は何故ここに来た？ この彼岸の茶屋に客人など、普通は来るはずなど無いのだが」

ボロボロの外観には似合わず、新品同然の畳の上に優雅に座った女が、芳乃に怪訝な顔と声で問いかける。

「私は……あつ、そうだ、私は怨念祓いの途中で——」

そこでハツと思い出す。

怨念祓いの途中、姿を現した怨念の残留思念のようなものに取り憑かれて——気付けばこんな妙なところにあった。

芳乃が状況をはつきりと認識すると同時に、女は合点の行った表情をする。

「なるほど……今が鏢際という訳か、朝武芳乃。なればこそここに来たのは運命とも言えよう」

「と言うつ？」

「この地は死に損ないが住まう牢獄。故にこの地にいるものは死んでいないが、死にかけてもいるということだ。言わば生と死の狭間、その刹那……と言ったところか」

その言葉に、芳乃は冷静に状況を理解する。つまり今自分は、呪い殺される寸前であると。

「……そう、ですか」

「そうしよげるな。お前の生を望む者がその想いを、声を届けるのであれば、きつとお前の近くににいる者が届けに来る。さすれば自ずと、生への道は拓れる」

まるで安心させるように、どこか不敵な笑顔でそう語る女。

いまいちよくわからないが、兎にも角にも今はここにしているしかできない。

(きつと将臣さんたちが、助けてくれる……)

けれども芳乃は確信している。

こんな呪いなどどうにかする方法を見つけて、きつとみんなが声を届けてくれるのだと。

「ふっ、その愛に満ちた表情……妹を思い出す」

「そんな顔してました？」

「していたとも。とてもとても美しい……ああ、その優しい顔は女のみ許された表情だ」

しかしおかしな話だ。

何故こんなに、この女を見てそれほどまでに初対面の気がしないのか。

こんな風に表現する人を、知っているような知らないような――

「しかしお前も災難だな。このような場に出るなど普通はあり得まい。因果な星の生まれか？ とかく、私も因果な生まれであるが、そ

れ以上と見える」

「あなたは、どのような？」

単なる好奇心なのか。それともその、実に困ったと言わんばかりの表情を誰かと重ね合わせたのか。芳乃は不思議と掘り下げようとしていた。

すると女はキョトンとした顔を見せた後――

「この地の記憶は、余程縁が深くなければ持ち帰れぬぞ。まあ……そうだな、暇潰しにでも聞くといい」

そう前置きをしてから、黄昏に目を向けて話し始めた。

「ある所に生まれる筈の無い子供がいた。古の時代、現世に顔を出す前の子供は、神の物であるとされてきた」

「七五三に代表される話ですね」

「如何にも。ま、気に入った子がいれば、魑魅魍魎は冥府にて暮らそうと誘う。それが所謂死産に値するものだが……」

と、そこで女は言葉を切り、クツクツと笑いながら、何処か不気味な虚無感すら漂わせつつ、芳乃にとっては不思議なことを言い放つた。

「冥府の落とし子というものがある。しかし、死の神と人がまぐわったものではない。冥府”が”落としてしまった子供だよ」

なんだそれはと。

思わず疑問に満ちた表情をしてしまう。

「大抵、子供は冥府に杭と鎖で？ぎ止めている。だが、揺らぎが起きるとその子供は、冥府の杭と鎖を体内に宿して現世に生まれ落ちてしまう。あまりにも大きな揺らぎである場合のみだが」

そこで何故か。

芳乃は自らの魂がその続きを聞きたくないのだと、不意に気がついた。何故かはわからない。わからないが聞いてしまえば何か危ういと、不思議に。

だが女は芳乃が口を挟むより早く続きを語る。

「人の世に神の世の物を持ち込むのさ。その力は他を圧倒する……精神がただの人間であればへし折られるのみ。適応するなどあり得ん

のだ、人間ならばな。誰が言ったか。神の如き者でありながら、我は神に非ずと声高らかに否定する者——それは否神ひしんである、と」

そこまで聞いて、芳乃は何となくこの女がその否神と呼ばれた者か、それに近いしい存在なのだと察した。

「時にこんな話を知っているか。神と人の、小さな愛の物語を」

しかし女は急に、話を変えてきた。

「知らないですね。よろしければ、教えてもらってもよろしいですか？」

純粹に知らぬ故に、彼女はそう言った。

女は「それはすまなんだ」と謝罪した後、「所謂種明かしになるが……」と言った上で。

「仔細は省くが、最後に神は、その命を以ってして、違う者と結ばれた愛する者の子供を救うんだ。それを見た神の弟は、名代としてその一族を守護することになる」

そう語った。

だが——

「……けど、私は言ったよな。冥府の落とし子とは、揺らぎが起きれば生まれるものだ」と

更に、そう続けた。

芳乃が察したのは表情に現れたのだろうか、何処か満足そうに女は続きを語り続ける。

「傲慢で不公平な神の愛が、人に業を無理矢理に背負わせる……業を背負い苦しみ嘆き、他と違う己を必死に律して精一杯生きている者を横目に、奇跡とやらで救われた奴らは神に感謝しながら生きている」

「……それは……」

「まあ私はそんな不幸な側、というだけさ。気にするなよ。それよりもそろそろだな」

女がそう言うと同時に、芳乃の心中に声が響き渡る。

「芳乃ちゃん、俺は君まで見送りたいくないっ。だから目を覚ましてくれよ……!」

(馨さん……)

「芳乃様、そこで何を見ているかはわかりません。けれどアナタが見るべき景色は、恋人の隣で見るものでしょう?」

(茉莉……)

「芳乃、お主はここで終わるな! 始めたばかりじゃろうが! 戻ってこい!」

(ムラサメ様……)

弟分で放っておけない幼馴染と、今まで一緒にいてくれた従者……いいや親族と、ずっと昔から血筋に寄り添ってくれている先人の声。「芳乃、約束しただろつ。ずっと側にいるって! そっちに行くと俺、約束守れなくなるんだ! だから——!」

(将臣さん……)

とても愛おしい男性の声。

そして——

「秋穂からお前を頼まれたんだ。こんな終わりじゃ向こうに逝った時合わせる顔が無い……それに、まだお前に伝えていないことがたくさんあるんだ。だから芳乃、頼む……つ。お前に秋穂の言葉を伝えさせてくれ……!」

(……お父さん……)

一番苦しかったろうに、それを感じさせない程に父として振舞って、ここまで育ててくれた家族の声。

「一応聞くんが、六文銭は?」

「私はまだ、そっちへは行けない。だって自分の人生を、恋人という幸せを、知っちゃったから——」

まだまだ足りない。

もっともつと幸せになりたい。

していないことだってたくさんある。

あの四六時中デレデレバカップルに砂糖だって吐かせていないんだし。

だからと。

立ち上がって——女を見据えて、宣言する。

「私はまだ、死ねないっ!」

「……ふつ、そうだ。人とは生を叫ぶもの。そうでなくては。ではさ
らばだ、朝武芳乃」

「ええ。さようなら」

満足気に頷く女に踵を返して、静かに外へと歩いていく。

そして広がるは終末の黄昏に照らされる、狂い咲き誇る鮮血の蓮の
花たち。

その中心に、蒼い空の如き透き通った輝きが見える。

決意と共に近づき、それを見る。

「叢雨丸……」

その名を呟けば、応えるようにその輝きを増す。

想いを乗せて、神刀は確かに彼女の下へとやってきた。

朝武芳乃を、ずっと見守っていたある魂の残影と共に。

その柄を手に取り、両手でしっかりと構える。

視線の先にはいつの間にか現れていた黒い鎧武者。

「……ああ、まったたく」

疲れ果てたような。

あるいは、呆れ返ったような。

けれどもそれら全てはどうでもいい。

芳乃の為すべきことはただ一つ。

この黄泉への誘い手を、斬り裂くことだけ。

「やあああ——っ！」

全身全霊を込めて駆け出して、私は生きるのだと決意を叩きつける
ように叢雨丸を叩きつける。

そして迷いの霧が晴れるように鎧武者は消えながら——

「……昔話の中で、じつとしていて下さい……」

ただ静かに、無へと返した……

その瞬間、眩ゆい光が全てを覆っていく。

その中で芳乃は、ある輝きを垣間見た。

それは——彼女の母親である秋穂の姿。

(ずっと、ずっと側にいてくれたんだ……お母さん……)

もう声も思い出せない。

どんなことを話したのか、どんなやり取りをしたのかさえ忘れてしまった。

思い出そうにも思い出せなくて、だけど絶対に忘れ去ることなんてできない大切な人。

失われてしまった、幼き日の楽園。

その人は、ずっと側で見守ってくれていた。

その輝きの中に、更に母の記憶を垣間見る。

……それは余命幾ばくも無い時のやり取りであろうか？

ただひたすらに娘の幸せを願い、自分以上に幸せになって欲しいと、そう祈る。

けれど時間は無情にも迫っていて、娘の幸せを見るどころか、根本的な解決すら出来ずに丸投げするしかない無力な大人であること、悲嘆。

どれほど願おうとも、自分は先に逝って待っているしかできない。

娘と夫に重荷を背負わせることしかできないけれど。

二人は絶望なんかに負けないと知っているし。

それに――

(なんて綺麗な、笑顔……)

見せてくれなかった笑顔が見れた。

幸せを願っているからこそ、幸せを実感するからこそ泣いてしまうんだと。

(言ってくれなきゃ……わからないよ……お母さん)

どうせなら言っただけ良かった。

本音を伝えて欲しかった。

だけど中々本音なんか言えなくて、信じている人にしか弱さを見せることしかできない。

(親子だから、似てて当然かあ)

まあ親子なのだから、似ていなければ逆におかしい。

まるで夢から覚めるような感覚。

もう母の残影も、記憶も見れなくなってしまう。

だけでももう振り返ってはならない。

振り返ってしまえば母の祈りと願いに応えられなくなるから。

——芳乃、私よりも幸せになってね——

「うん。お母さんよりも、ずっと幸せになってみせるから……」

「戻ったか」

「——」

「引き留める役割をやってやったのも、あの娘が馨と仲良くしてくれた札にすぎんしな」

「——」

「クククツ、啖呵を切るのもそっくりだ。いつぞやの夜、あの娘に啖呵を切られたが……本当に似ているよ」

「ま、そこで見ているといい。これからの行く末と、彼女の生を」

■

みんなで呼びかけて、叢雨丸が光って——その眩しさに目を閉じて、また開き直してみると。

「……あれ……？ 私……」

芳乃ちゃんが、目を覚ましていた。

耳も無く、怨念の気配も全くない。

今度こそ、消えたのだ。

「芳乃、無理しないで」

「将臣さん……私、もう大丈夫です。みんなの声と、叢雨丸が道を示してくれたから」

「よかった——」

心底から安堵した表情の二人が抱きしめ合う光景を見つつ、昼前の芳乃ちゃんはこういう気持ちだったのかなあ……と甘さを感じる。

何分？ いやまあ、甘かったねうん。

抱き合う二人が一旦離れて、ここからは親子の会話に。

「お父さん、私……お母さんの思い出を見たの。だからお母さんに負けないくらいに幸せになるし、笑顔もやっと思えたんだ」

「そう、か」

「伝えてないこと、ちゃんと教えてね。色々聞きたいことも、知りたいこともあるから」

「ああ、もちろん。ちゃんと言うよ」

「……それから、その……お母さん、ずっと側にいてくれた……みたい」

「………芳乃が言うなら、きっとそうなんだろうね。秋穂が側にいたのは、本当なんだろう」

………実際、近くにいたんだろうな。

本当に。

「だから、落ち着いたら、お墓参り行こう。みんなで」

「そうだな。そうしよう」

そこで安晴さんと芳乃ちゃんの会話は途切れ、彼女は改めて将臣と向き合う。

「将臣さん」

「………え、俺？」

「あなた以外に誰がいるんですか」

うっ、なんかどっかで見たようなやり取りだなオイ……ちよつと菓子から視線を投げられたりムラサメ様から視線を投げられたりするけど無視だ無視。

「あなたを愛しています。一緒に、幸せになりましょう」

「俺も君を愛してる。だから二人で幸せになろう」

微笑み合う二人。

今日、やつと。

あの二人はある意味で、本当に向き合えたんだろう。

で、そこで大変微妙そうな顔をしている安晴さんと言えば。

「うーむ………ここは親の前でなんてことをと怒ればいいのか、見ぬふりをすればいいのか……馨君、茉莉君。君たちはどっちがいいと思う

「？」

シレッツと俺と茉莉にキラークラスを投げってきた。

「いや……ここはほら、大人しく砂糖を噛み締めましょうよ安晴さん。そういう空気でしょ？」

「そうですよ。見てはならないんです。ね、ムラサメ様」

「そうじゃのう。ここは二人の世界じゃしな」

「……なるほどね。おい二人ともー」

そしてハツとして、顔を真っ赤にしながらかこつちを見る将臣と芳乃ちゃん。

「僕は何にも見てないからねー」

「そういうわけでお二人とも、外野は気にせず思う存分にどうぞ」

「あー、まー、うん……普段俺と茉莉がやってることだし、夢中になっていいんじゃないかな？」

「お主らの思うがままにするといい」

「ちっ、違いますからね!? 忘れてたとか違いますからね!」

「そ、そうだよ!? 忘れてたわけじゃないからね!? 全員分のプリン作ってあるからね!」

あ、やっぱりプリンだったんだ。

その後、俺たちは家に戻り、将臣が作ったプリンを食べてから寝たのではなく、俺と茉莉は、なんとなく寝る前にプラプラと外を散歩していた。

「終わったね」

「今度こそな」

着替えるのも面倒だからと忍び装束のままだが、まあ……その、なんとさえいいか。

よくよく見るとやっぱりその格好はあまり人前で見せて欲しくないものだなと彼氏としては思うのである。

裏山に入って、ちょうど近場の、月明かりに照らされた川の側に二人で腰を下ろす。

「犬神はなんて?」

「ひとまずはよくやったって」

「そっか、よかった」

……まあ、恨むのも疲れているのだろう。

犬神がどんな性格なのかはわからないが、とりあえず茉莉とは愉快にやっているようでよかった。

「ね、馨くん」

「ん?」

「あの二人に負けなくらいに、ワタシたちも幸せにならないとね」

「……あー……まあ……そう、だな」

えへへと笑いながら言われると、なんだか恥ずかしくなってくる。

それに二人で家を抜け出して、茉莉に至っては忍び装束のままだしで、なんとというか……とてもその、とてもあれである。

——頬が熱い。

「照れてるの? 顔赤いよ。あは」

「うっせー、俺はこんなんなんだよ」

ニコニコしながら顔を覗き込んでくる茉莉から照れ隠しをしつつ、

一際綺麗な深夜の満月を見上げる。

「……なあ茉莉。また夜に、二人で月を見よう」

「うん。これからもずっと、同じ月を見ようね」

「ああ。同じ月を、ずっと」

あの二人の婚約と幸せになろうという誓いに比べれば、とても小さな約束だ。

だけど俺たちにとっては、とても大きな誓いだった。

手を握って、夜の涼しさの中で茉莉の温もりを感じる。

今日は一際、あったかい。

だから隣から聞こえる小さな嗚咽は、きつと気の所為だろう。

もしそうじゃなかったとしても、気の所為にしておこう。

彼女の重荷も、やっと降りたんだから。

「——っ」

だけど結局我慢できなくなったのか、胸に飛び込んできた茉莉を労

いも込めて背中を優しく撫でる。

「見ぬふりをさせてくれよ」

「……ごめんね……っ、ワタシ……ワタシ……っ」

「お疲れ、茉莉」

「うん……っ」

本当にお疲れ、茉莉――

やっと、終わったよ……

安寧

目が覚める。

もう見慣れた風景。

そして、見慣れないけど見慣れた彼女の寝姿。

「……やれやれ」

結局昨日、戻ってから泣きつかれて涙でぐちゃぐちゃになった服を洗濯カゴに入れるついでに、二人で改めて風呂に入ってから寝たのだ。

あ、別に変なことにはしてないぞ。ただ茉莉子が近くにいてくれと言うもんだからな、仕方ないだろ。

「茉莉子、起きろよ。今日普通に学院だぞ？　明日から休みだけど」

「うん……んん……」

「茉莉子さーん？」

隣で眠っている茉莉子の頭を撫でながら声をかけても、寝惚けた声が聞こえるだけ。そんな様子も可愛くて仕方ないのだが、起きてもらわねば困る。

ちなみに今日の朝飯は本人たつての希望で芳乃ちゃんが担当している。昨日、事が終わった後に急に「明日私にご飯作る。たまには茉莉子は休んでて」と言っていた。

前々から茉莉子に家事を仕込まれていたので全く不安など無いが、何か心境の変化があったのだろう。幸せになる云々とはまた別に。

「あ……馨くんだ……」

瞼が開き、トロンとした目がこちらを向く。寝惚けた顔で寝惚けた声。らしくない茉莉子の姿に大変こう、血が滾って心が踊るが、しかし朝起きなければ面倒である。

故に心を鬼にして接しよう。

「はいはい、馨君ですよー。起きてくださいいねー」

「うひひ、ワタシの馨くんだ……」

「うひひってなんだよ」

「あは……」

「ダメどころら」

だらしなく蕩けた笑顔を見せながら俺にペタペタと触ってくる菓子に半分呆れながら、そういうえば寝起きのこいつは甘えん坊になるのだったなと思ひ出す。

……あれは、まだまだガキの頃だったか。芳乃ちゃん、菓子、俺の三人で川の字になって寝たのだが、その日は珍しく菓子が一番最後に起きた。

何処かぼんやりとしながら、俺を確認すると急に両手を広げて——
『かおるくん、ぎゅーっしてっ』

とかそれはもう花が咲いたような笑顔で言い出して、大変可愛らしくて幼き日のことながらめちやくちやドキドキしたのだが、まあこんな具合だったのだ。

……それにしたって、ちよつと違うような気がするが……甘えん坊って、こういう甘えん坊だったかな？

「はあ……菓子？　そろそろ時間だぞ」

「ヤダ、もつとこうしてたい」

俺の首に腕を回しながら、大変不服そうにそんなことを言われても困る。

……
……
……
……
……
……

「いやほら起きないとさ」

「起きたら馨くん、つれなくなっちゃう」

「なんないよ」

「ホント？」

「ホント。むしろ余計につれるかもな」

ムスツとした顔をされても俺にはなにもできない。そんなこいつも可愛いのだが。

とにかく宥めて起きなければとそれっぽいことを言っておく。
が、しかし菓子はそのまま胸に顔を埋めてから——

「……馨くんの匂いだあ……」

……これ寝起きじゃなくて寝惚けてるだけじゃねえか!?

ああもう、道理で甘えてるにしては奇妙な面倒くささがあったわけだよ。可愛かったけどな。

ため息を吐いた後、仕方ないので肩を持って見つめ合う。

「うひひ……じーっと見てどうしたの？ ワタシはずうつと、ここにいるよ。離れないから大丈夫。大好きだよ……馨くん……大好きっ。あは」

優しい瞳を向けてから、にっこりと微笑みながら、蕩けた声で彼女は囁く。

や、やばい……このまま起きなくていいやとまで思えるほどにやばい。抱き締めていたくらいにはやばい。

だが俺は稲上馨。ロクに手も出せないヘタレな男だ。問題ない。

深呼吸を一つ……あつ、茉莉の匂い……俺今茉莉ニウムを摂取してる……じゃない！ 気を確かにしろ！

……そうだ、こう言えばいいんじゃないか？

「茉莉」

「なあに？」

「俺も茉莉が大好きだ。愛してる。だから結婚しよう茉莉。ずっと茉莉を離さない。茉莉、返事が欲しい」

……………
?????????
「可愛らしく目をパチクリしながら、ポケーっとしつつ俺をジッと見る。」

凄まじく長い沈黙に耐え切れなくなり、多分オーバーロードしているのだろうという予想を付け、ならばとダメ押しに――

「茉莉」

……………
「？」

「俺と結婚――」

「へっ!? あつ、えっ!? ワタシなんでこんな!?!」

途端に顔を真っ赤にしながらビクツと動く茉莉。

我ながら最低な発言だと自覚しているがこの暴走特急茉莉にやん

を正気に戻すにはこれしかないと思った。

……本当に最低だが。

「……おはよう、茉莉。可愛かった」

「あ、あはく……ありがと……？　つて、なんでワタシ、アナタに抱き付いて……そうだ時間！　時間は!!」

「寝惚けてたぞ。普段俺が起きるくらい。今日は芳乃ちゃんが朝飯担当だって話だったろ。気にするな」

名残惜しさを感じつつも、さっさと布団から出て——着替える前に未だに布団にいる茉莉を見て一言。

「つか、いい加減出てけ。間に合わなくなっても知らんぜ」

「ひゃわっ!!?　ぐごっ、ごめんね！　ワタシすぐ出てくからね!」

ヒューつと忍者らしく、しかし慌しく部屋を出て行った茉莉を見て、一つため息を吐く。

……なんで朝からこう、疲れなければならないのだろうか。

——実際結婚すんの?——

茉莉が望むなら。

——馨的には——

まあ、憧れはあるよね。

……飯を食って学院に向かうまでの道すがら。

いつも通りに着いてきたムラサメ様が急に隣に来る。ちなみに構図は将臣と芳乃ちゃんが手を繋いでいて、その後ろに茉莉で、俺とムラサメ様が最後尾だ。

「のう、馨よ」

「なんざんしょ」

「今朝方、お主の部屋から結婚とか聞こえたのじゃが、なんじゃあれは」

「ん?　寝言ー」

「……ホントかのう?」

「では俺と茉莉の秘密ということぞ」

「むむむ、気になるが……ま、無粋よな。じゃがご主人と芳乃、ああも

べつたりでは吾輩、そろそろどこえらい場面に出くわすかの。具体的に
は『まぐわい』とか」

「ムラサメ様って結構アレだよな、うん」

あなたは生娘の筈なのですがね。

……ほかあ心配ですよ。そんな耳年増みたいになって、実際年増か。
だって推定500歳だぜ？ 京香が推定1000歳だって考えると
まだまだ若いと思えるけど、普通に考えれば年増どころか化石であ
る。

「おい馨。愉快的ことを考えている顔じゃのう？」

「ひえっ」

にっこりと、あまりにも穏やか故に恐怖を与える笑顔を見せて下さ
るムラサメ様だが、それがまるで獲物を前にした肉食獣のそれにしか
見えない。純粹にビビる。

「まあよい。お主もお主で茱子を泣かせぬようにするのじゃぞ？ 泣
かせればそれなりに覚悟してもらおう」

「わかってるよ。泣かせるような真似はするもんか。大切な人なんだ
しき」

「あとそれはそれとして吾輩にもちゃんと構えよ？ 寂しいのじゃか
らな」

「うぐっ……た、確かに最近蔑ろにしている感がありますけれど、言っ
てくれればちゃんと相手しますよ俺は。ていうか、それは将臣に言っ
てやって下さい。あいつしか触れられないのですから」

まあでも将臣と芳乃ちゃんは、昨日やつと事が終わったばかりだか
らな。しばらくは邪魔をしたくないというのが、ムラサメ様の考えだ
ろう。

気持ちはわかるのだが、この人もつと素直になってもいいんじゃないやな
いか？ まあ意地張ったりして中々素直になれないのは非常にわか
るのだが。

「ふむ、まあ確かにご主人にも構ってもらわねばな。如何様にしたも
のか」

「将臣お兄ちゃん遊んでーとでも言えばいいんじゃないかな」

「それだと小春と被ろう。吾輩固有の強みで何かこう、二人に構ってもらえるような感じで……」

「……というか真剣にどうしたもんかな。俺」

「？ ……ああ、そうじゃな。いつまでも世話になる訳にはいかんと考えておるのじゃろ？」

実際そうなのだが……菜子と離れた生活ってもう想像つかないというか、菜子の飯が食えないのは辛いというか、菜子の寝間着姿が見れないのはちよつと損してる感あるというか、菜子のだらしない姿を見れないのは残念というか……

いやでもこれはある意味で逢瀬なのでは？ むしろより昂ぶる材料として使えるのでは？ 毎晩毎晩菜子と同じ月を見て過ごす……これはもう樂園なのでは？

「これはもう、菜子と離す訳にはいかん顔じゃなア」

「うわ超だらしねえ顔してる馨とかレアだな」

「昔からあんなのですよ、馨さんは」

「……ワタシとしては大変微妙な感じですね。もうちよつとカツコいい顔して欲しいなあ」

ふへへへ……と内心でほくそ笑んでいたが、周りの目は大変に冷たかったことをここに言っておこう。

『一泡吹かせる』

それが昨日、犬神から伝えられた意志だった。

実際その通りに行動して、救われたのだから感謝の念しか無いのだが、それはそれとして気になっていた事がある。

（あの、ワタシの先祖はどのような人だったのでしょうか）

愛を知らぬ子供にも見えたが、しかし外道であった。

故に菜子にとってみれば、その判断に困ったものだ。

—— 貴様も知っての通り悪鬼羅刹…… 恩を仇で返すどころかそれ以上に最低最悪な、魔人が如き所業を為した者だ——

(です、よね)

——正直な事を言えば、貴様があの男の血筋とは未だに信じられ
ぞ。確かに全てが全て、というわけではなからう。だがな——

(いやまあ、それはそうなくても仕方ない話ですから。それよりも、何
故あも手を貸してくれたんですか?)

——理由が無ければいかんのか——

手を貸したことに理由は特に無いと言わんばかりの態度。

……まあ確かに言われればそう納得はするだろうが、それにしたつ
てなんかこう……と、茉子は複雑な感情を抱く。

一応、腐つても怨敵の血筋であるはずなのだ。

——私は、あの少女を見て、己の為すべきと思つたことを為しただ
けだ。それが結果的に、あの男の怨念に一泡吹かせることに繋がった
だけにすぎん——

だが犬神はそれだけだとシンプルな理由を明かす。

茉子が芳乃に未だに仕える理由と同じで、為すべきと思つたことを
為しているだけ。

——為すべきことを為す、というのは最強の理由だ。恋や愛情など
の狂気に匹敵するほどの、鋼の狂気。

とはいえそこまで極まったものでもないだろう。そこまで至つて
しまえば、それはもはや狂気すら通り越した別種のものだ。

——それにもう、貴様らは十二分に罰を受け、そして罪を償った。
なればこそ、その行為に応えてこそ神というものだろう——

……なんのかんの言つて。

犬神は、彼なりとはいえ優しいのだ。優しいが故に祟り神となつて
まであの憑代を守っていたのだ。

それを今になって、しみじみと実感した。初めから贖罪の機会は与
えられていたが、あの怨念の呪いによってそれが遠ざかっていたの
だ。

……心の底から、安心した。

(……ありがとうございます)

——ふん。私に感謝なぞして何になる。貴様らの償いが実を結ん

ただけのことよ。しかし……

しばらく沈黙する犬神に不思議に思い、尋ねようとした瞬間。

——貴様、いや今朝のお前。なんだあのザマは。あれでは伊奈神も呆れよう——

(……そんなに酷かったんですかワタシ!?)

あまりにも強烈な問いが茉莉に突き刺さった。朝方、馨がとても言いづらそうに可愛かったとだけ言っていた、自分の寝惚けた時の行動。

犬神から見てもあのザマとまで言われるほどの醜態。

……何をしてしまったのだろうか？

——見るか？ 一応、復讐鬼より伊奈神の主観記録は流すことは可能だが——

(見ます——!)

そうして流れ込む馨の記憶。

それは今朝の寝惚けて大変になっていた自分の姿であり——

(……ええ……うひひつてなに？ ワタシどうしちゃってたんだろ……)

だらしなく甘える自分を他人の視点から見せられて、彼女はとてもその……寝惚けてだらしなく恋人を求める自分を恥ずかしく思った。いや恥ずかしいことは恥ずかしいのだが、しかしこういうのはちゃんと明確に意識のあるときにやりたかったとかまあ色々思うのだ。ていうかいくら起こす為にでも結婚して……

(……ひどいよ馨くん)

——何処が酷いというのだ？ あの男とて伊達や酔狂でお前に対してあのような言葉を吐くことはあるまい。それはお前が一番良くわかっている筈だ——

(それはそうなんですけどね……ただその、女の子としては色々ひどいと思うんです)

馨はタチの悪い男だ。

普段は言葉より行動で、欲しい言葉がある場面では拙く、けれど可愛らしく伝える癖に、不意にポロっと大胆な事を素面で言っただけでも

ないように振る舞う。

例えそうでなかったとしても、茉莉にとってはや魔性そのものだった。

……変な男、という意味で。

——さっぱりわからん——

(アナタだって、大切な人がいたんですよね？ 例えばほら、普段とは違う顔を見せられて心が動いたりとかしませんでした?)

——……心当たりはあるが——

(それと同じことですよ)

——そういうものなのか——

(ええ)

犬神はさっぱりわからない様子を見せながらも、自分なりに咀嚼しているのか、黙りこくっている。

中々に面白くて好ましいこの関係……茉莉自身、こうも仲良くやれるとは思ってもいなかった。

まあ共通の話題が暗い以上、明るい話に持ち込もうとお互いに考えていけば、それなりに上手くやれるのも必然であるが。

——しかし、お前たちは恋人らしいことというのはあまりしないのだな。あの二人を見て思ったのだが——

(まあ、毎日一緒にいられるだけで幸せですから。それだけで満たされるし、嬉しいんです)

——その割にお前は随分とまぐわいを望んでおるようだがな——

(そつ、それはいいじゃないですか！ ワタシが昨日も一昨日もその……お、おつ、オナ……オナ陸さんだったのは別に今この話に関係ないでしょう!?)

昨日は先に馨が寝付いたので、枕をこっそり持って行ってそれをオカズに。

一昨日はやはり芳乃の隣で背中越しに抱き締められた感触を思い出しながらこう。

犬神的には何をそんなに悶々として自慰ばかりしているのか疑問である。

動揺が表に出ないように努めつつ、頬の熱を感じながら授業を受ける葉子は、チラリと馨を見て——目が合つて小さく手を振られた。

「くっつ」

やっぱり恥ずかしくて机に突つ伏す。

——……何をしているんだお前は——

(乙女には色々あるんです!)

——バカなのか?——

(馨くんバカですよっ)

——それほど夢中というわけか。だが……裏切りとは感じないのか?——

(……はい?)

思わず間抜けな返事が出た。

裏切り……裏切りとは何故? というか何を裏切つたのだろうか

?

——奴が応える気配が無い。お前が思い悩んでいるにも関わらずだ——

(まあ……そうですね。もうちよつとこうガツガツ来てもいいとか、向こうから誘つてくれたらとか、いつそ押し倒してくれたらとか思いますが……)

まあ環境も環境だし、中々そういうことができなくても何の問題も無いのだし、それにそもそもこれは、自分自身の思惑だ。

その通りに動いてくれる恋人など、ただの人形だろう。

(自分勝手な願いですから、裏切られたとは感じないですよ。馨くんだって同じように、ワタシに何かを望みつつもそれが叶わないことがあるかもしれない。だから別に、裏切りとかワタシを軽視してるとかなんて考えたりしません)

——……やはり、わからん——

(愛は狂気であるって言葉があるように、そう簡単に表現できたりするものではないんですよ。あは)

——ふん——

犬神は素っ気なく返事をするが、何処と無く思い当たる節があるよ

うだ。そんな彼に可愛さを感じながら、もしかすると”あの方”もこんな風に可愛がつっていたのかもしれないと思いがたつた。

それはまるで姉弟のような。かつて最愛の人とそんな風な関係だった茉莉には、なんとなくそんな気がした。

(……もしかして叢雨丸は、アナタにとつて大切な人と関わりのあるものなのですか?)

だから。

昨日、叢雨丸を受け取った時に彼の呟いた『姉君』という言葉が……気になった。

神の姉というのであれば、人の常識で測れない何かがあるのだろうが、純粹に一人の人間として、気になったのだ。

……と、言うよりも。

何処と無く最愛の人に似ているこの神様を放っておけないという感覚がある。

——叢雨丸……と言うのか。あの刀を——

(へ? あつ、はい。ワタシたちはそうですけど……もしかして真の名があるのですか?)

——いや、良き名だと思つたまでよ、気にするな。……関係あるのか無いのかで言えばあるが……しかし、今は、言えぬ——

(なら、後で教えてくれませんか? 本当に気が向いたらでいいんです。教えたくなければ、教えないままで……)

——いや、知らねばなるまい。話さねばなるまい。お前たちの為に。だが私は未だお前たちに話す気にならんのもまた事実。故に

……待たれよ——

(わかりました。待ちますよ、ずっと)

——……お前は、そういう言葉を恋人に伝えてやれ。私などではなく——

(ふふっ、そうですね)

犬神の表情も、心境もわからないが、彼なりに茉莉を気遣っているのだろうと察して、彼女はその会話を閉じる。

——ああ、存外どころか、まるで友人か何かのように、この会話は

心地良かった。

■
昼飯は別に、必ず茉莉と一緒に食べるわけでもない。お互いに気が向いたらという感じだ。

だから――

「おいお前ら、俺を憐れんでんのか」

「憐れむというか、恋人が出来てからだと尚のこと一日で乗り換えたお前がわからんよ廉」

「つかお前、女癖の悪ささえなければ気遣いに家事全般に肉体労働に接客に販売にとこなせる上にルックスもいい優良物件なんだからさ。一人に落ち着こうとか考えようぜ廉太郎」

こんな風に。

今日は珍しく、男三人でバカな会話と洒落込んでいた。芳乃ちゃんは将臣を快く送り出し――きつと内心では夜寝るまでたつぷりとイチヤつく算段なのだろう。

ちなみに茉莉は特に何も言ってくれなかった。ちよつとショック。

うん……今日も茉莉の弁当は美味しいな。

「……そうかあ？ 俺ルックスいいかね」

「控え目に言っても都会で通用するぞ。従兄弟の俺が保証する」

「とうるか小春ちゃんの兄貴だぞお前は。あんな可愛い子の兄貴なんだから顔がいいに決まってるだろ」

「うーん、やつぱお前らに顔を褒められるとケツが心配になってきたわ。やめてくれ」

「俺に男色の趣味はねえよ！ 普通に芳乃を愛してるよー！」

「まあ将臣も廉も、どちらかといえば男受けしそうな顔立ちだよな。柔らかいけれどしつかりしてて、こう……」

「「やめろ馨！！」」

「悪いいな」

何もそんなに本気で顔を嫌悪に歪めなくても……そこまで嫌か。まあ嫌だろうな。

うーむ、老若男女問わず美しいものは美しく、心奪われるものは心奪われる。そんなものだと言は思うがね。

俺？ まあ男に好かれたらその時はその時だ。ちゃんと対応するさ。茉莉がいるしな。

「ところで馨。お前どこまで進んだんだ。将臣はほら、相談されたから何となく把握してるけどよ」

「ん？ あー……首を甘噛みされたのと、一緒に寝たのと風呂入ったのと、あとキスとちよつとだけ舌入れたのと……一番大事なのは同じ月をずっと一緒に見ようって約束したことかな」

「なんでそこまで行ってやることやってねーんだお前……」

「最近忙しかったからな。あいつもあいつで色々あったし」

「ふーん……ま、後始末かなんかがあったのか。将臣もそんな感じでまだ先って具合か？」

「大体そんな感じ」

「なるほどねエ」

なるほどと頷いた廉は、急に飯をかつこむように食べ尽くしてから、水を飲んで真剣な表情のまま――

「後始末、大丈夫だったのか？」

と、こいつについては珍しく、本気で俺たちを心配していた。

「まあ、無事に一件落着だよ」

「そうか……いやあよかったぜホント。それ聞いて安心したわ」

……言えねえな。

――まあ私に任せろ。さっさと終わらせてやるさ――

頼むぜ、ご先祖様。

――でさ馨。キミどーすんの？――

家の話か？

基本は戻るつもりだよ。確かに茉莉と触れ合える時間が短くなるのは嫌だけど、一般常識的に考えて俺は俺の家に行った方がいい。

それによ、お前にとっても都合良いだろ？

――まあ、ね。でも私に気を使わなくていいんだぜ？ 自分のやりたいようにしなよ――

いいんだよこれで。
そう決めたんだ。

「えっ、帰るのかい？」

帰ってきて、気付けば晩飯の時間。

話を切り出してみると、安晴さんのこんな反応。

「なんでいつまでもいると思ってるんすかね」

「だって君の事を秋穂はよく可愛がってたし、そもそも君は結構な頻度でウチに来てご飯食べるだろう？」

「いやまあ……そうっすけど……」

ぐうの音も出ない。

実際、俺がこの家で飯を食う頻度はかなり多い。あれよあれよと誘われて気付けば……ということがガキの頃から多く、最近で言えば菓子に誘われて食べていたり……まあ、都会のコンビニの利用回数くらいには多いと言えいいのか。

というか秋穂さんの事を出すのは卑怯だぞ安晴さん。確かにあの人は俺をやけに可愛がっていたが、それでも菓子や芳乃ちゃんと比べれば大した話でもなかったけど。

「けれどその、一般常識的に考えても長々いるのは失礼でしょう？」

「僕は全然構わないんだけどね。それにほら、菓子君とも離れることになるけど」

「大丈夫ですって。何もそこまで子供じゃありませんってば」

「寂しいって言ってたクセに」

「言わないでくれよ菓子……とにかく、戻りますよ。まあ結構な頻度で顔を出すでしょうけど」

菓子の横槍にぐったりとしながら、とりあえず自分の答えを告げておく。どうせ明日は休みなのだ、さっさと帰る支度くらいはしておきたい。

「寂しくなるけど、でもこれはいい機会か。菓子君をいつまでもここに縛るわけにもいかないし、この機会に役目から解放してあげれば――

「菓子って結構働いてないと気がすまない人間だから、まずは休日を設定する形の方が馴染みやすいと思う。具体的に言って週4休とか。もちろん土日はお休みで」

「お二人とも待つてください。実質的にそれ週6休では」

「それが何か問題？」

さもなんでもないように言う朝武親子だが、いきなり週6休はやりすぎではないだろうか。将臣なんて目をパチクリさせてるぞ。俺も啞然としてるわ。そして菓子は頭抱えてる。可愛い。そのまま菓子はうーんと唸りながら。

「せ、せめて土日含めて週3休に……」

「ダメよ菓子。馨さんと長くいれないでしょ」

「そんな急にお休みをもらっても困ります。確かにその、馨くんとは長くいたいですけど……」

それはとてもわかる。

四六時中一緒というのは一つの憧れだが、しかし実際そこまでやりたいかと言われるとそこまでは……と思うところもあるし、けれども二度と離れないくらいに一緒にいたいような……

ただ毎朝早起きしてここに来て、夜分遅くに帰るのが当たり前の菓子にとってみれば、いきなり急に自由にされても困るだろう。

週3休はちようどいい塩梅の筈なんだが。

「ま、まあほら。常陸さんだって今までの生活急に変えられたら困るだろ？　ここは本人の希望通り週3休でいいんじゃないか？　無理に自由にしなくても」

「まあ、確かに急いじやったか。とりあえず週3休にしてみる？」

「それでお願います」

……けれど、菓子の奴多分週3休でも困り果てそうな気がするぞ。その横でニヤニヤしていたムラサメ様が俺にコソコソと聞いてくる。

「して、馨。週3休の内お主の家に菓子が向かうのは何回じゃ？」

「予想では1回」

「それで済むかのう……?」

「俺だつて一人で庭いじりしたい時もあるしさ」

しかし、庭いじりの話を聞いた全員が変な目で俺を見ている。少なくとも目玉焼きに練乳をかける安晴さんにここまで怪訝な目をされる謂れはないだろう。

割と庭いじりの声は普通だったからな……聞こえてても不思議ではない。

その中で将臣がふと思いついたように俺に言う。

「そういや馨つて、いつぞや趣味らしい趣味が珈琲と紅茶と、庭いじりと植物の手入れくらいしかないとか言つてたよな」

「あー、よく覚えてたな将臣。俺ほとんど忘れてたよ」

いつぞやの約束だけは覚えていたが、そんな風に柄も無く自分語りをしたなあ。

……ただ庭いじりや植物の手入れという趣味は中々に渋いようで、廉や小春ちゃんからはジジくさいと言われたことがある。

花が咲いて枯れるまでの一生は、美しいんだと言つても中々に理解を得られないのは悲しいことだ。

「つかそうだなア。なあ将臣、なんならまたクレープでも焼いてやろうか?」

「うん。申し出は有難いんだけど、女子三人の目がね」

将臣の発言に視線を動かすと、そこには修羅が三人いた。

女の子って生き物は、基本的に甘い物が本気で好きらしい。

これは……えらいことになったなど。

キラキラと目を輝かせて見てくる女子三人……そのうち一人は化石だが……を見て真剣に後悔するのだった。

——女の子を化石呼ばわりは最低だぞ馨——
わあつてるよっ!

残影

唐突だが。

——彼女が自分の家に着いてくるというのはどういうシチュエーションを想像するだろうか。

恋人としての甘い時間？ それともただの暇つぶし？ あるいは休憩とか？ もしかしたら忘れ物を届けに来たり？

甘酸っぱかったり、特に無味無臭だったり、もしかしたら甘かったり辛かったりかもしれないし、その人の味がするかもしれない。兎にも角にも、普通は一大イベントというわけだ。

年頃の男子にしろ、女子にしろな。

……残念ながら、俺はどれにも当てはまらなかったがね。

パンケーキ食べたいから——とは。

素直なのはいいんだが、ちよつと……色気もクソもねーなど。

とは言っても急な話だし、物も無いので実際何も作れない。かと言つて買いに行くにしたつてそこまでそんな気はしない。

つまりお預けだ。

「ね」

「あ？」

「パンケーキは？」

「後日。そもそも結構家空けてたんだから買いに行くだなんだしねえとダメだろ。買い出しは後後。今は庭いじり」

庭に出て雑草だなんだを処理しながら、花壇を整理したりする俺を、軒下から眺める菜子。

……何が面白いんだろうか。

「あ、これは枯れそうだな。雑草かね……時間かけてもいいから毎日来るべきだったか。向こうの向日葵は時期になりや勝手に咲くから置いていて、あとこの木の枝が伸びすぎてるから切らなきゃ……それからなんか知らん奴が生えてんな。感覚的に雑草じゃねえから育つまで待ち。んでこつちが……あー、この雑草食い過ぎてるからあとで確実に処理。アロエは相変わらず鬱陶しいが問題無し……」

「感覚的につてどんな感じなの？　なんか庭造りつて感じしないけど」

「よーわかんねえけど、昔から俺は草木の枯れる順番がわかったり、養分吸いまくつてゐる雑草がわかったりするのさ」

「不思議だね」

「神様よか不思議じゃないさ」

言葉を変えれば死に敏感という訳だ。実際、これは人にも適応される。病を患う人間、呪われた人間、純粹に短命な人間、長寿な人間、何の間違いか死にぞこなつてしまった人間、死にかけたものの助かった人間――

ガキの頃は気持ち悪い程それを感じ取れた。自分の周りに生と死が満ち溢れて輪廻を描いていた。

入水自殺未遂くらいから、ぼんやりとしか感じ取れなくなつたし、今では意識してもほとんどわからない。植物だけは……庭いじりしてる内にある程度わかるように改めてなつただけだ。

けれど……いくら魔物寄りつたつて、なんでそういう生命を感じ取れたのかねエ？　理屈が合わねえつてのは不気味だが。

まあ、犬神の欠片が入つてたんだし、そういう意味で敏感だったのかね。

「菜子、どうせしばらく庭いじり回してるだけだから、家の中でくつろいでろよ。見てても面白くないぞ」

一旦手を止めて、菜子と向き合つてそう声をかける。

実際、いじつていればすぐに二時間三時間経つのだし、それまで一人でこれを眺めてろつてのは酷だろう。

もちろん菜子がいる以上、一時間で一旦止めるつもりだが。

――いや三十分にしろよ――

三十分で終わるほどヤワなもんじゃねーんだよ。

――庭師かキミは――

庭いじり見習いですが。

「んー、真剣な表情の馨くん見るのも中々きゅんきゅんして良いんだけど」

「なんでそんなとこにきゅんとするかな」

「あは、秘密だよっ」

「……そ」

優しく微笑みながらそう言われてしまえば、俺は頬の熱を見せないようにそっぽ向くことしかできない。

「……茉莉」

「なにー？」

「確かアイスはまだあった筈だから、好きに食べてていいよ」

「ホントー？　ありがとー」

……恥ずかしくて顔が見れないので、アイスで釣っておこう。その方が、きつといい。だってすぐく今、だらしない顔してるはずだから。ああ、もう……ホント茉莉のこと考えたり茉莉の笑顔を見たりすると、バカになっちゃうなあ。それがたまらなく心地いいんだけど。

……あんまり花を摘むのは好きじゃないが、恋人への贈り物だ。向こうも大目に見てくれるだろう。

何を一本、送ろうかな。

愛を伝える花言葉は何があったかねと考えながら、とりあえず雑草処理を始めることにした。



(……アイス食べてるけど……)

一方茉莉は、言われた通りにアイスを食べながら、家の中を見渡していた。

あいも変わらず殺風景な居間だが、飾られている写真などから確かな温かみを感じる。

しかし片付きすぎている。

いい機会だからと馨がやったのだろうか――

(怪しい)

「面倒だからゴミ捨て一週間先でいいだろ？」「ビンカンペットボトルは月3回ペース」「そもそも片付けたら逆によくわからなくなる」……

などと家事ができるのにしない馨だ。

当然ながら茉莉子からの信頼はゼロである。ちょうどいい機会だし、この面倒嫌いクセを矯正してやろうかとも思ったが、そういうところ含めて好きになったので思うだけで終わった。

「……よし」

まあ世話を焼くのも嫌いじゃない。

なので茉莉子は居間にゴミが隠されていないかを探し始めたが、珍しいことに全く存在しない。

ちやんと捨てた、ということだろう。だが……彼の部屋はどうか？ ある意味でまったく信用していない茉莉子は、馨の部屋に向かう。

ガラガラと戸を開けて出てきたのは、和室にはそぐわないたこ足配線とコンセントの数々。携帯電話の充電機に、ノートパソコンの器具等、もはやぐちゃぐちゃになっているが、ある程度の規則性はあるので、まあ本人が一番わかりやすいのだろうと抑えておく。

が、しかし。

しかしだ。

——おい、これはなんだ——

内面に潜む犬神が心底から理解できないという声を上げる。

茉莉子だつて理解できない。というか、理解したくない。

「男の一人暮らしの部屋。所謂縄張りですね」

——誰がそんな説明を求めたのだ。……いやなんだこの……衣類や本が散らばって足の踏み場も無い針山は——

足の踏み場も無い針山、という犬神の言葉すら生温いと茉莉子は確信する。

これはもはや……ゴミ畑だ。いくつかの衣類は脱ぎ捨てたのか放つたらかし、趣味の珈琲や紅茶、庭造りの雑誌があちらこちらに散らばっている上に、片付けていないペットボトルやビンが適当にまとめられて、その横っちょに気が向いたら入れると言わんばかりのレジ袋が置いてある。

「……掃除したのはリビングだけだったんだね……」

——収集癖のある者ならばともかく、これは……なあ、好く男を間違えたのではないか？——

「いいえ。こんなのだから好きなんです。それに無理に片付けるようにも言うつもりありませんし、ここはひとつ——彼女としてお節介を焼いてあげましょう」

ふんすと気合を入れてから、とりあえず転がってるレジ袋を引っ掴んでペットボトルだのキャンだのを入れていく。

「それにほら、ここは馨くんの部屋ですよ？　彼をからかうネタの一つや二つ仕入れたいじゃないですか」

忘れられがちだが、茉莉は結構な悪戯っ子だ。そういう心に火がついたというのもあるし、世話を焼きたいという気持ちもある。

ニコニコと楽しげに笑いながら——

「ついでにワタシへの愛を認め^{した}たポエムなんか無いかなーつと」

——お前……割と……その、あれだな——

「ふふふつ、ワタシはこんなのですよ」

犬神の呆れに胸を張って答えながら、片付けを始める。朝武家の掃除すら短時間で済ませる茉莉にとってみれば、この程度はお茶の子さいさい、朝飯前だ。流れるようにペットボトルとカンを片付け、一旦リビングの集積場へ置いておく。

また戻ってきて、今度は雑誌を種類別に分けて机の上に置く。これもそこまで時間をかけるものでもない。むしろ馨の庭いじりのごく簡単なものの方が時間をかけるだろう。

「さて、次は衣類……つと」

とりあえず手にとってシワを見る。

……大して着ていないらしいが、しかも面倒なので片っ端から手に取って洗濯機の中に突っ込んで回しておく。

と、ここで。

脱衣所と洗面台が同じであることから、かけられたバスタオルに目が行く。

(……どんな匂いするのかな……？つて、ワタシ何考えてるんだろ) ブンブンと煩惱を振り払って何か見落としがないか、もう一度馨の

部屋に戻る。

そうして見ていると、不自然に机の下に、中身がわからないように書類置きが置いてあった。

(……う・なんだろうこれ)

まあ面倒だからここに置きっぱとかなそういうのかな？　そう目星を付けてその書類置きを取り出して――

――いや、待ってと。

茉莉はその出てきたモノを見て頭を抱えた。

(……いやまあ、健全だと安心したけど……うん……)

それは成人向け雑誌……ただどちらかと言えば三次元ではなく二次元の方だ。大変淫らな少女のイラストがデカデカと載っている。

いつぞや、彼がレナから家に来たいと言われていたのを思い出す。もし条件が揃っていれば、馨はまず間違いなく家に上げてしまうだろう。

もしそこで「カオルの部屋を見てもいいですか？」などと言われてしまえばどうせ断る度胸もなく見せてしまうだろう。

そしてこの杜撰な隠し方のファッ禁雑誌を見つけてしまえば……オーバーヒート間違いなしだ。

「彼女として色々不安だなあ。もうちょっとこう……隠してよ」探そうと思っただけではない。

偶然見つけてしまったのだ。
それほどまで……杜撰だったのだ。

「……世話が焼けるなあ」

もつとわかりづらい所に隠しておいてあげよう。

とは……思っただけだ。

ただやっぱり年頃の女の子としては彼氏が持つてる成人向け雑誌の内容は気になってしまうワケで。

(ま、まあ……参考、程度に……いい、よね？　彼女として、彼氏の性癖は確認しておかないと……)

内心で誰かに言い訳をしながら茉莉は、その雑誌を読み始める。

——これは妹モノの成人向け雑誌……
まあいつか。

そこは気にならないよ？ でもね、やたらと使ってそうな折り目のついたページ……金髪巨乳で低身長気味なムチムチの義妹モノって……そういうの趣味だったのかな。

ワタシ……金髪巨乳はいかなと思う。ちよつと危機感持ちちゃうよ？ そんなこと無いとわかってるけど身近にいるし。

こっちは姉モノなんだ。ちよつと安心というか、まあ妥当だよね。馨くんお姉ちゃん求めてたフシあったし。中身は……あつ、折り目発見。どれどれ……ふーん？ 歳が三つ離れた幼馴染の甘々お姉さんと、なんだ。ふむふむ。

……でもなんで白衣？ 着たままって作画省略？ それともそういうプレイ？ 確かに結構えつちだと思うけど……も、もしなんだか退屈になったら……してあげよう……かな？

……でもたまに忍者モノあるのは……そのう……これも候補に入れとこ。

……大体姉モノか妹モノで基本巨乳だし、ワタシ的にはちよつと安心。ちゃんと馨くんも殿方って感じで嬉しいな。

少しだけ入ってた普通の成人向け雑誌の、気に入ってそうなページから逆算しても、ワタシの身体つきは結構すごいし、胸の大きさは……レナさんや馬庭さんには負けるけど、それなりだし。馨くんが興奮してるのは知ってるし、大丈夫。

でもたまにロリがあるのワタシちよつと気になるなあ……貧乳なら全然イイけど。というか女性優位モノ割と多いね。

もつと野生的になってくれてもいいのに。多分その気になれば結構……うひひ、ワタシは乱暴でもいいよ、馨くん。あはっ——

恋する乙女というよりも、これは恋の捕食者プレデターではないだろうか。

内面より様子を伺っていた犬神は心の中で、「姉君もこれほど積極

的であれば……いやこの娘があれなだけやもしれんな……」と考えたが、敢えて茉莉には伝えず、もう面倒見きれんと不貞寝をするのであった。



「思ったより時間かかっちゃまったな」

割と花決めに苦戦した、というのもあるが、純粹に久しぶりで時間がかかってしまった。

だが茉莉に渡す花は決めた。

「まあ……ちよつと重いけど、あれでいいよな。帰り際に花瓶ごと渡してやろつと」

しかし、思ったよりも汗かいたな……ちよつとシャワーでも浴びてくるか。

軍手を適当なところに置きながら家の中に戻る。

けれども居間に茉莉はいない。と、なれば……

「茉莉ー？」

「ひゃ、ひゃいつ!？」

「俺ちよつとシャワー浴びてくつから。多分俺の部屋いるんだろうけど片付けとかしなくていいからなー」

「ど、どうぞごゆっくりー!」

「……?」

いや、なんだってんだマジで。

……というか、なんで俺、茉莉が俺の部屋にいるんだろうって目星を付けたんだろうか? なんか入ってそうないメージあったんだよなあー。でも本当にいるっほいな。

まあいいかと考えて着替えを朝武家から持ち帰ったカバンから出してさっさとシャワーを浴びる。

そして出て、下着とズボンだけ着て居間へ向かうと、何故か頬を赤らめながらモジモジとしている茉莉の姿が。

「どうしたのさお前」

「なんでもないよっ!」

「……まあいいんだけど。ところで俺の部屋片付けたな? 洗濯機回ってたけど」

「あつ、うん。汚かったし」

「ありがと。でもあんまり甘やかさんでくれ。多分お前任せになっちゃうから。世話を焼いてくれるのは嬉しいけど、この辺は自分の問題だからな」

流石に茉莉がたまに遊びに来るのだから、その辺の整理はやっておきたかった。自分で。

そもそも面倒だからとやっていかなかっただけであり、決して出来ないのではない。これから茉莉がこの家にたまに来ることを考えると、まあそろそろ習慣づけるにはいい機会だ。

けれども茉莉は――

「ダメ?」

と、首をコテンと傾げて微笑みながらそう尋ねてきた。可愛い。

「いや、ダメじゃないけど……ほらさ、俺だつて男じゃん? あんまり世話焼かれるところ……いや嬉しいんだけどね。こう」

しどろもどろになりながらも、ちっほけなプライドを何とかして言外に伝えようとしたのだが、それを恥ずかしがっていると取られたのか、茉莉は更にニコニコとしながら言う。

「別に恥ずかしがることないじゃん。ワタシ、馨くんに世話焼くの好きだよ」

「いやそういう問題じゃなくてな。これはごくごく単純な、男心の話なんだよ。なんかヒモみたいでどうなんだと自分で思ったんだ」

もう隠したって仕方ないからいつそぶっちゃけてしまおうと思いついて言ってみたら、意外そうな顔をした後に、「なんかこれ解釈違いだけどこういうのもアリ」みたいな、とても名状しがたい表情をしてから、一言。

「本心を隠すのは上手なのはどうして……」

――待て。

隠す? どうして?

お前、まさか――

「……な、なあ……茉子？ 机の下に置いてあるアレ、見た……のか？」

震える声で尋ねる。

いや、別にアレは確かにお気に入りではあるが、しかし……本命というわけではないので見られたって問題は無いのだが……

「みみみみっ、見てないよ!？」

「そっ、そうかア」

顔を真っ赤にしてあたふたしながらこの反応……見たな。

まあいい。こっちの羞恥心と性癖が知らぬところで知られていたという問題を除けば、森に隠した木の葉――つまり本命は見つかっていないということだ。

さて、そろそろいい時間だし、昼飯と晩飯の材料を買いに行きたいところではあるのだが。

「……まあ、うん……そろそろ色々買いに行くか。ほれ、冷蔵庫の中何もねーし。お前どうするよ？ 昼」

茉子は当然休み。

だが家に戻らず俺の家にいる。いつまでもいたっていいが、しかし休みは休みだ。一人でゆっくりしていた方が気も休まるというもの。

俺と一緒にいいと言うならば、一緒にいるけれど……茉子だって家族といたい時があるだろう。

あまり俺ばかり構ってもらうのも悪いというか、こいつの自由な時間を奪ってしまっているというか。

「あー……そっか。どうしょっか」

「久しぶりに家族の時間を過ごしたらどうだ？ 報告とかそういうのもあるし。それにお前だって一人の方が気を遣わなくていいだろ？」

正直今日はお互いに休息を取るべきだと思っている。

最近は何々ありすぎだし、特に茉子は同居人と積もる話もあるだろう。なのでこういう提案をした。

……本音を言えば、俺だって茉子とゆっくり二人きりで過ごしたい

が。

「——じゃあ、明日」

ならばと。

いやなにがならばなのかはわからないが、やけに茉莉はちよつとだけ照れ臭そうに、決意を固めた表情で俺と向き合う。

「明日、デートしよ。それにその……もつと、恋人らしいことしたいな。二人で」

けれども、出てきたのはそんな可愛らしい言葉で——

「ああ、わかった」

だからそこで、なんとなく察した。

彼女が何を求めて、何を考えているのか。確かに俺は鈍感だが、ここで気付けないほど愚かではない。

見ぬふりをすりやあ、そりやもう愚かしいことこの上無い鈍感男になることはできる。けれどももうそうする理由も無いし、それに……茉莉なりの”お誘い”だ。勇気を出してくれたなら、それに応えなきや男が廢る。

——そうでなければ抵抗してもらえばいい。逃げてくれればいい。

俺だつて年頃だ。それなりに興味はある。

でも。

……女の子からお誘いを受けるほど手が出せない自分というのは、あまりにも情けない。かと言って経緯的にも一日くらい空白を置いておくものだとなんは思ってるし、正直こう……メリハリというか、そんな感じに分けるのは大事だと思う。

——だから茉莉からお誘いを受けるのは、想定外でもあり同時に想定内だ。今受けるのは想定外、けれどいつか来るだろうとは想定していた。

故にその前に俺から……と考えていたのだが、茉莉相手にはそれでも遅かつたらしい。

なるほど、付き合う時に「えっちだよ」と確認取るわけだ。

「んじゃ、これから帰るか？」

「うん。名残惜しいけど、明日はもつといっぱいられるから」

可愛らしく、そして綺麗な笑顔を浮かべながらそう言う菜子。

前は、その笑顔は古い思い出をより輝かせるだけだったけれど、今は——もつと見たいと、今の方がもつと素敵だと、そう思う。

「ああ、それなら——」

ちようどいいかな。



——ああ、青い緋衣草なんて馨君ロマンチックなのね。
一本。

馨から渡されて『これ、飾ってくれ』とだけ言われた、青い緋衣草。家に持ち帰ってとりあえず花瓶に挿して、リビングで眺めていたら、菜子は母のそんな発言を聞いて驚いた。

「お母さん、それどういう?」

「ああ、知らないの? 青い緋衣草の花言葉」

「全然。ワタシ、そこまでお花興味あるわけでもないし」

「ふふっ、調べておくといいわ。その方がきつと、菜子も楽しいわよ」

「……? よくわかんないけど、わかった」

結局、花は自分の部屋に置くことになった。

ちようどよく隙間も空いていたので、窓際に置くとこれが中々見栄えがいい。

陽射しがいい具合に当たる部屋であるので、光に照らされた青い緋衣草は絵になる。

久しぶりに新刊の出た漫画を読む前に、軽くインターネットで花言葉調べてみる。

「……そつ、か……」

それはすぐに見つかった。

緋衣草——つまりサルビアの花。

「青い緋衣草——花言葉、そういう意味……なんだ」

その中でも青い品種の持つ花言葉。

知ってしまったって、段々と顔が『女の顔』になってしまう。今日一番

の頬の熱を感じて、色々な感情がごちゃ混ぜになって――

「……『永遠にあなたのもの』って、ああもう……っ。卑怯だよ、ズルいよう……馨くんのバカあ……」

どうしようもない程に女の子としての自分をさらけ出しながら、最愛の人への文句のような、だが決して違う言葉を呟く。

『永遠にあなたのもの』……口では中々言えない男なりの、確かな愛の証明。

「永遠に、あなたのもの……永遠に……永遠……あは……」

しかし永遠にあなたのもの――とは、なんと言えばいいやら。

笑みが溢れて、胸の内には甘く暖かいものが満たされていく。

いじらしくて、愛おしくて、嬉しくて、幸福感が満ち溢れて仕方ない。本気で好きになって、いつまでも一緒にいたくて、同じ墓に入るならこの人でないと嫌だとまで想っている人から、自分は永遠にあなただけのものだと言外に伝えられる。

乙女としては喜ぶ以外に何をすればいいのか。

ただ。

昨日といい今日といい、どうして馨はやけにプロポーズめいた行動を取るのか。

全然キャラが違うはずなのに、どうしてかこんな風に手玉に取られている。本来なら自分が手玉に取る側のはずなのに。

（馨くんって、もしかして……素はこんな感じに振り回してくるタイプだったのかな。でも昔は静かで素直な性格だったし、それに戻ったと考えたなら――）

なるほど、全く違和感が無い。

色々と武装する必要も無くなったのであれば、根っこの素直な性格で自分と接しているからこそ、こんなにも振り回してくるように思えてならないのか……と、茉莉は結論づけた。

「明日、楽しみだな……あはっ」

明日が楽しみで仕方ない。

やっともっと、恋人らしくなれるのだから――

そして夜。

彼女は——奇妙な浮遊感と共に瞼を開けた。

「……はれえ……？　なんで、わたし外にいますか……？」

おかしい状況、まるで夢だ——と。

レナ・リヒテナウアーは身体を起こしつつ、そう呟いた。

辺りを見渡すと満月と月光のみが見える暗い夜空。光の当たり加減から言って、どうやら室内にいるようだが——

「ここは、一体……？」

瞬間。

屋敷が燃えた。

「ひゃあっ!?!」

炎であるのに熱くない。焦げ臭さも感じない。本当に夢なのかと、けれどそれは夢にしてはあまりにもリアリティがあり過ぎる。

怯えながら、視線を元に戻すと——

燃え盛る炎の中に見える背中。

切っ先より滴る血の雫。

炎に照らされた壁の鮮血。

打刀にしては長く、太刀にしては浅い異形の日本刀を握る人影が、燃え盛る屋敷の中で、自分に背を向けている。

漆黒の和装に、漆黒の髪は闇の中でもなお黒い。

その黒に浮かぶ白の素肌はまるで白夜のよう。

妖しくも神秘的な刃紋は炎によって映し出されている。

「……ああ」

その後ろ姿は。

あり得ない筈なのに、何故か。

「私は今……生まれたんだ」

楽しげな、愉しげなその声と共に、その刀を軽く振る。

それは血振りにして杜撰で格好をつけたものだが、その者が行うことであり得ない程に恐怖を掻き立てられるものになっている。

それを何と表現すればいいのかを問われれば、きつと——魔人以外

の何者でもない。

何故だろう、本当に。

レナにとつてその後ろ姿は……

「——カ、オル……？」

とても信じられない声が出る。

唾然とした表情のまま、そう呟いた。

服装こそ違えど、背格好も、髪型も髪の長さも、全体的な雰囲気も、仕草も、持っている刀も——何もかも。

さながら生き写しのように。

その黒衣の人物は、稲上馨に酷似していた。

「さて、では——始めるとするか……」

クツクツと笑いながら、そう呟き、刀を掲げる黒衣の人物。

炎と月光の中に、異形の日本刀を携えた魔人が、確かにいたのだ。

「——は……っ!？」

目が醒める。

外を見ても炎は無く、満天の星空が広がるだけ。

(……終わったのでは、なかったのでしょうか……？ それとも、始まったのでありますか……？)

言い表せぬ不安が、彼女の心中に生まれていたのだった——

重なる

翌日。

待ち合わせの場所に行くと、茉莉の姿があった。

「待ったか？」

「ほんのちよつとだけ」

「そっか。なら埋め合わせしないとな」

そんな俺たちにしては珍しく素直なやり取りをしてから、やつと気が付いた。

茉莉の服装は、あの時のデートで芦花さんからもらった洋服だということに。

「洋服にしたんだ」

「本当の恋人としてのデートだから、心機一転というか、そんな感じで」

「ありがとう。よく似合ってる」

「可愛い？ それとも綺麗？」

くるりと回りながら、微笑んでそんな意義悪な質問をしてくる。揺られるスカート裾、風で散った花びらがまるで彼女を彩るように。なんと絵になる、素晴らしく美しく、そして可憐な女の子であろうか。

……さて、彼氏としてはどう答えたものかな？

もちろん、答えはたった一つだけだ。

「ああ——とつても可愛い」

綺麗よりも可愛いの方がいい、というのは前学んだ。流石に二度も同じ間違いは……するかもしれないが努力しないよかマシである。

すると茉莉は少し驚いた顔をして——そんなに意外かね……？

「綺麗って言わないんだ」

「もう綺麗って言うほど、遠くないだろ？」

「……うんっ」

花の咲いたような笑顔で、俺の手を取る。ぎゅつと握ってくるその小さな手を、ぎゅつと握り返して。

「じゃ、行くっか」

珍しく彼女が俺の手を引いて歩き出した――

まあ行くのは田心屋なんだけどさ。

他に何かねーのかつて？ 刀無くなれば財政が危ういのが浮き彫りになるほど穂織は何も無いぞ。

目的地に着いた時、前回とは違って手を離すかなど聞かない。俺も離したくないし、菜子も離さない。

……なんともわかりやすいことだ。

「……わぁ」

戸を開けて早々に、目が合った小春ちゃんが仕事すら忘れて素を露わに、こんなことを呟いた。

というか心底から驚愕した表情はやめていただきたい。そんなに意外か。

「あのね君ね、そんなに変かな」

「変というか意外というか……いざ恋人になった二人を見るとこう、色々」

「色々って何ですか色々って」

「いやウチのダメ兄のこと思い出して……」

二人して顔を見合わせる。

……まあ、兄の愚行で苦労しているのだ。彼女も身近な人が付き合うというのは色々思うものがあるのだろう。

けれどそのあと、すぐに彼女らしい笑顔になってくれたので一安心。

「でも、素敵だなあって」

「素敵って、この関係になるまでぐっだぐだでしたよ？ 馨くんへタレだし、ワタシもワタシであんまりよろしくなかったですし。一步間違えばドロドロの関係になってたかも……」

「それでも幼馴染の二人が長年の想いを伝え合って結ばれるって、中々にすごいことだと思いますよ」

「……なんだかそう言われると、妙に気恥ずかしいですね。あは」

「ガールズトークするのはいいんだけどさ二人とも。小春ちゃん、悪いけど案内してくれない？ 流石に邪魔だろ。詳しい話は学院でさ」
「あつ、ごめんなさい。じゃあえつと……恋人の二人には——」

と、小春ちゃんはよりにもよって端っこの目立たない席に案内してくださいました。そんなに気を回さなくてもとは思ったが、こういうのも案外悪くないというもの。

——ただ。

「なあ茉莉子、隣に座ってどうした」

「隣がいいの」

「いや確かに客少なえからまあ……許されるっっちゃ許されるけどさ……」

茉莉子が俺の隣にぴったりと座っている。めっちゃいい匂いするし柔らかいしあったかい。

個人的には物凄く気になる。これじゃ茉莉子の顔が見れない……という変態的だが、しかし実際、いくら人が少ないとは言っても一つの席しか使っていないというのはどうなんだ？ とは思う。

「何頼もうかな。馨くん、何か希望ある？」

「んー、特には。俺だと食べてないものになっちゃうしさ。茉莉子の食べたいのでもいいよ」

……んん？

いや待て。なんで俺たち同じもの頼もうとしてるんだ？

「……ちよつと待った。なんで俺たち別々のものを頼もうとしてないんだ？」

「あつ」

普通に考えても、同じものを食べようとはするが、一つにして分け合うというのは中々……しかも互いに無意識にそうしようとしていた。どれほどまでに飢えているのかと。

「……まあ、そういうのがしたいなら全然構わないけどさ……。あんまり、茉莉子のそういう顔を、誰かに見られたくない……かな」

ただこんな可愛い彼女の彼氏としては、何処の馬の骨とも知れぬ奴らにそういう顔を見られるのは大変我慢ならんというか。周りの目

を気にするといつか。

一瞬だけぽかんとしたものの、茉莉はニヤニヤとしながら――

「あは、ジエラっちゃう?」

「めっちゃジエラる」

素直に答えると、ニヤニヤとした顔が可愛らしい笑顔に変わって――

「ありがと。大好き」

「お、おう……俺も好きだ」

やばい。

可愛い。こんなにも可愛い彼女が、更に可愛い。可愛すぎてやばい。もっと好きになる。こんなにも可愛いが……マジで可愛いな。

「じゃあ、羊羹にしよっか」

「お、いいな羊羹」

そんなこんなで決めて、そんなこんなで適当に飲み物も決めて、そんなこんなで注文する。

待ち時間の間、茉莉をチラチラと伺ってみたが、とても上機嫌に俺の隣で手を握っている。可愛い。

「楽しい?」

「うん」

「そっか」

何が楽しいのかはイマイチわからないが、とにかく茉莉が嬉しそうだからなんだっていいか。

「二人ともこの前よりもっとお熱くなっちゃってまあ」

そんな時、ヒョイと意地悪い笑みを浮かべながら芦花さんが現れる。

「そりや別に意地張る必要も無くなったしさ」

「ほほう? つまり馨は意地張ってもあんなにデレデレと」

「うっせえな、心底から惚れた女に素直な反応して何が悪い」

「だってさ、常陸さん」

「いざこうして聞くと、意外とむず痒いですね」

シレッと茉莉にパスを渡し、茉莉は茉莉でなんでか頬が赤い。

いやこの程度で照れられても困るといふか、なんといふか。

「あ、この洋服、ありがとうございます」

「いやいや、アタシのお古だけど気に入ってくれて何よりだよ。うん。それで二人は今日もデート？」

「まあそうだけど」

「この後は？」

「いや特には。な、茉莉」

「そう、だね。うん」

「ふーん……にひひ、これは後で感想聞かないと」

なんか意味深な反応した後、小声で何かを呟いた芦花さんはニコニコしながら奥へと戻っていく。何しに来たんだろ、冷やかしかな？

「……そういえばさ」

出てきた飲み物を飲みつつブーツとしていると、急に茉莉が声をかけてきた。なんねなんねと振り向けば、とても困った顔をしながら――

「芳乃様に今日のデートの感想を教えてって言われてるんだけど、なんて言えばいいかな。もう、隣にいるだけ幸せだから、その……」

嬉しいことを言ってくれると同時に、なんでそうなるのかさっぱりわからず混乱するようなことを言ってくれた。

少しモジモジとしているのが大変可愛らしい。

「そもそもなんで芳乃ちゃん知ってるの？」

「昨日、花渡してくれたじゃん。嬉しくって惚気ちやって」

「ああ、うん……よかった」

微笑みながらそう言われてしまえば、俺は安心するしかない。喜んでくれて本当に何よりだ。

そうして運ばれてきた羊羹は、相変わらずフォークは一つだけ。まあつまりそういうことだ。

「はい、あーん」

「……わかったよ」

ニコニコしながらヒョイと俺に向けて羊羹を差し出してくる茉莉には、逆らえない。

その後はしばらく、そんな風楽しくというか比較的恥ずかしく過ぎた。茉莉が楽しそう嬉しそうだったからなんでもいいが、たまには俺にもあーんさせて欲しい。ほとんど俺がされてばかりじゃないか。

「これからどうする？」

「馨くんとなら、どこでもいいけど」

「困ったなあ」

田心屋を出て、手を繋ぎながら歩きつつ、さてどうしたものかと悩む。

昨日のことから考えて、恐らく……なら。

「ウチ来るか？」

「……へ？」

「いやだからウチ。どーせ誰もいないし、二人きりになれるし……」

そう言った時、茉莉はポカンとした顔を見せてから――

「……なら、ワタシの家でいい？」

頬を赤らめながら、若干視線を逸らしつつ、小さな声でそう言った。

「ワタシの家……お母さんもお父さんも隣町に買い物に行くから、しばらく帰ってこないよ……」

隣町とは言っても車移動。大体二時間くらいだし、そもそも買い物含めで考えたら三時間近くかかる。

確かに平気だが……やっぱりあれなのかな？

「……エロ本出しっぱの男の部屋は嫌か？」

「いつ、嫌じゃないけど！ でもその……印象がね？」

「ま、そうだよなあ……じゃあ、お邪魔させてもらおうかな」

サラッとカマをかけて引つ張り出しながら、満更でもないけど複雑そうに反応する茉莉に微笑む。

なんか、今更だけど、すごくその……緊張するな。茉莉の家なんて何回も行ってるし、なんなら茉莉の部屋だって結構な回数訪れてるのに。

動揺を隠しつつ、俺たちはゆっくりと歩いて、彼女の家を目指すの

だった。

——久しぶりに訪れた茉莉子の部屋は、昔と何も変わっていないかった。丁寧に整理整頓されたダンスとか、所々に見える女の子らしさとか。

ただ窓際に青い緋衣草が置いてあるのが、大きな違いか。

……いやまさか、この部屋に彼女の男として来ることになるうとは。夢ではあったが、現実として起こると中々に実感が難しい。

しかし『永遠にあなたのもの』——なんて、だいぶ気取った花言葉の花を選んでしまったなあと、少し恥ずかしくなる。だが時期的に愛を伝える花言葉を持つ花はそこまで咲いてないというのもあって、ある意味では妥協だ。いや妥協ではないんだけど。

……いつそ薔薇を一本だけとか、そっちの方が楽だったかもしれないけど、庭には咲いてないからな。まあ機会があれば、ぜひ送りたいところだ。

茉莉子は、花がよく似合うから。

「ワタシ、お茶用意してくるね」

「ん。待ってる」

トテトテと部屋から出て行く茉莉子を見送りながら、一つ深呼吸をする。

……身体が硬い。

——なあ馨。これから初体験を誘うわけだけどき。キミ大丈夫かい？——

……めっちゃ緊張してる。

どんな気の利いた事を言えればいいのかな。

——お前が欲しいくらいでいいと思うよ——

だよ、なあ……

落ち着かず視線を泳がせていると、不意に白い物が目に入る。

それは——布団。

多分昨日の夜から敷きっぱなしのもの。

……これは、まあ、そういうことだ。

おかしいな。

一応、こつちから行くつもりだったが、まるで罨を仕掛けられていたかのような光景だ。

もうちよつと甲斐性を見せさせて欲しいというか、何というか——
「持ってきたよー」

「んあっ!? あっ、ああ。うん……」

戻ってきた茉莉に声をかけられて、無様なほど動揺した声を出してしまう。急いで彼女を目で追うと、ものすごい勢いでお盆がカタカタしていた。

……いや、誘ったお前が緊張してるのかい。よく見れば視線は落ち着かないし、モジモジとしている。

ガツチガチに緊張しながらお茶を一口……比較的、なんかどうでもよくなってきた。

対面に座る茉莉を見ると、何処か動作もぎこちない。そんなに緊張するのか。お前の方が俺よりがつついてたじゃないか。

でも実際、茉莉から仕掛けてくるということとは……無い。誘った割には。

と、なれば……俺のやることはただ一つだ。

——あのさ馨——

黙ってる。

つか出てけ。

なんかやりたいことあるんだろ。

——……いやあの——

うつせえ。

これからやることやるんだよ。

あんたは子孫とその彼女のまぐわいをマジマジと見たいのか。

——それならコマちゃんはどうなるのさ——

ノーカウント。

——あたしの扱いだけ酷くない?——

……切るぞ。

——あちよっ!?!——

強引に回線を切る。

これで俺から繋ぎ直さない限りは、京香の茶々も入ることはあるまい。

もう一口お茶を飲んで、覚悟を決める。

「茉莉」

「ひゃいっ!？」

「……こつちにおいで」

おずおずと隣に移動する茉莉。

視線を合わせていない内に、一応位置を確認しておく。

「……えっと……馨、くん」

「——っ」

不安げな瞳。

けれど何処か期待した雰囲気。

だから。

「んむ……っ」

「んん……っ」

有無を言わず、茉莉の唇を奪う。

強く抱き締めて、深く、深く、全て繋がるようにと身体を傾けて、布団へと倒れ込む。そのまま彼女の口内に舌を入れて、二、三回舌と舌を絡めてみて誘う。

応えるように舌が絡んでくる。

「ん……っ、あ……っ……んちゅっ、ちゅ……ちゅる……れる、あんむ……っ」

——もう言葉も何もいらぬ。

貪るように唇を重ね、染めるように互いの唾液を交換し、溶けるように舌を絡め、身の芯から心の芯まで繋がってしまえばいいと、何度も、何度も。

「んんっ、んちゅ……っむ……ん……っ……じゅるる……っ……」

ぴちや、ぴちやと湿った音が響き渡って、内に燻っていた情欲が燃え滾る。

もっと、もっと——最愛の人と、■し合うほどに愛したいと。

「あむ……ちゅ……つ、ちゅく……ちゅぱ……は、ん……つ、れえる……つ、はあ……むつ、んつ……ちゅぱ……んちゅう……」

淫らな音が獣性を掻き立てる。

甘く優しい香りが心を溶かす。

柔らかな感触が欲望を刺激する。

絡まる舌の味わいが理性を破壊する。

流し込まれる唾液の味が情動を解放する。

……茱子を。

常陸茱子を。

最愛の人を。

——愛■したい。

愛に餓えた四肢に、情欲の歡びが燻り滾り、心底から咽びながら、渴いて今も疼く愛情を携えて決して逃さず必ず愛■す。

かつて分断され、今は遠い場所にある悍ましい部分が慟哭を上げる。奈落の底から咆哮する。今すぐに彼女を愛せと。従わない理由が無い。

ただひたすらに、愛する。

どれほど時間が経ったかはわからない。息が辛くなってきた辺りで、どちらからともなく離れて、接吻のようで決してそうではない、唇と舌を用いた性行為は終わりを告げた。

荒い呼吸のまま見つめ合う。唇と唇の間にかかっていた唾液の架け橋はプツリと途切れ、それが茱子の胸元に垂れて大事な服に染みを作る。

「あ……ぷあ……んっ、はあ……つ、すごいね……キスって……ワタシ、やらしくなっちゃう……」

「……なんか、悪いな。堪え性のない男で」

「ううん、いいよ。全然……けど、ちよつと意外。だってワタシから行けるかなって思ってたから」

「少なくとも俺は、ひと段落ついたら恋人と褥を共にしたいと、お前の全てが欲しいと心底で渴いていた程には男だよ」

「……嬉しい」

蕩けて情欲を宿す瞳、上気して薄い桃色に染まった肌、荒い呼吸、どこか弱々しい姿勢、間近で感じる甘い吐息。

誰も見れない、俺だけが見れる茉莉のあられもない姿。そろそろ我慢の限界だ。

「あの……馨くん。ワタシその……えっただけど、引かないでね？」
「引くもんか。全部まとめて愛してやる。ダメな茉莉も、カッコいい茉莉も、可愛い茉莉も、綺麗な茉莉も、えっちな茉莉も。だから——」
しゅるりと彼女のネクタイを解き、胸元のボタンを開けていく。淡い水色の、ちよつと可愛らしい下着が見えたと同時に、もう一度茉莉の顔を見つめる。

ちよつと出鼻をくじかれたような、けれど羞恥と興奮の方が勝っているのか、嬉しそうでも目を伏せたその可愛らしい表情が、たまらなく愛おしい。

「いい……よな」

「優しくして……ね……？」

「努力する」

——あとのことは言うまでもない。

欲のまま、愛のまま——溶け合うように身を重ねた。

「馨くんのベッドヤクザ」

事が終わって、事前に茉莉が沸かしていた風呂に二人で浸かっていたら、ムスツとした表情と共にこんな一言が。

……まあ、うん……否定はできない。でも仕方ない。

『顔……見ないで——』

とか反応されたら意地悪の一つや二つくらいするだろう。幼い男子が好きな子に意地悪するように、俺もそんな衝動に従っただけに過ぎない。

というか、どれだけ愛しているのかを行為で示せと言ったのはそつ

ちのはずなんだが。

「ワタシ優しくしてって言ったけど」

「最中にもっと乱暴にしろって言ったじゃん」

「それはそうだけど……ううっ、あんなの忘れられないよう……」

何やらぶつくさと言いながら、だけど満更でもなさそうな幸福感に満たされた、女の子の顔している菜子がとても愛おしい。

優しくしろだ乱暴にしろだ、注文が多かったがまあ……可愛い彼女のお望みだ。出来る限りは答えようとしたが、どうにも……俺も狼ということだ。

色々と思い出したのか、お湯に浸かって赤くなった肌とはまた別な朱色を宿して菜子はその表情を羞恥に塗れたものへと変えた。

それを忘れるように、何かふと思いついたのか普段通りの表情に戻りつつ尋ねてくる。

「というか、なんであんなに……テクニクすごかったの？」

訂正。

全然普段通りだが、忘れ去ることはできなかつたようだ。

「なんでって……なんでだろうな？」

その辺を落とした記憶も無いし、正真正銘これが初体験だ。菜子がだいぶ良い声で啼いていたが、さて。

「ま、お前がマゾなんだろ。誘い受けのオナ陸さん」

「んなあっ!? わわわワタシの何処がマゾなの!? 　　というかオナ陸さんやめて!」

「あんまり寄っかかるなよ、狭いんだから」

慌てふためきながらこっちにガーツと掴みかかってくる菜子をいなしつつ、さっきまで腰抜けてた割には元気だなあとぼんやり思う。

……というか、ご自分を慰める頻度が高過ぎやしませんかねオナ陸さん。多分芳乃ちゃん起きてんぞソレ。想われるのは嬉しいが、暴走していただくのは想定外というか。

今日は初回だから一戦で終わったが、こりゃあ慣れたら夜が明けるとまで付き合わされるかもしれん……

「ごめんて。だからそう怒らないでくれ」

「……睦言といい、どうしてこういうところでだけ甲斐性あるかなあ」「さてなあ？ 俺は俺の全てを知っているわけじゃなし、色々と疑わしい。ただあの言葉に偽り無いし、その通りに俺はお前を愛し続ける。それだけは、何があっても嘘にしない。裏切りを疑うなら、何度だって問うてくれ。俺の答えは変わらない」

途端、茉莉がいじらしく目を伏せて、モジモジとし始める。

あんまりに可愛いもんだからくしゃくしゃと頭を撫でると、振り向いて俺に背中を預けてくる。

「それ好きだな」

「あは。だって、馨くんから抱き締めてくれるんだもん」

「……お前なあ」

花の咲いたような笑顔を、あの日見たとても綺麗で可憐な笑顔をこうして見せられてしまえば、こっちは降参するしかできない。

まあ、それがお望みならばと手を回す。

……俺は普通に抱き合う方がいいんだが。

「茉莉」

「何？」

「……芳乃ちゃんには、アレだけは内緒な？」

「……うん。アレだけは、ワタシとアナタだけの秘密だね。あは

……っ」

——アレ。

情事の最中、互いに果てる寸前に、昂ぶった心のままに告げてしまった、あまりにも恥ずかしくないすぎる永遠の愛の告白。

茉莉は嬉しそうに蕩けた笑顔をしているが、俺としては恥ずか死ぬものである。

らしくないというか、気取りすぎというか。

恋人としての更なる一步。

今まで足踏みしてた分、いぎ歩き出すとすんなり行けてしまうのか。

そう考えると、恋人になるまでのもどかしい距離感だった時の事も、存外悪くないと思えた。

……終わった？——

あつ、忘れてた。

回線中々繋げないようにしたつもりだったんだが。

……泣くよ、流石に……——

別に泣けば？

俺は茉子を優先するだけだし。

「風呂上がったらアイスでも食いてえなあ。なんか、夏場運動したみたい結構疲れた」

「あ、ワタシも食べよーつと。まだあつたはずだし」

結局、俺はそれからしばらく茉子の家で過ごし、おばさんたちが帰ってくるギリギリまでいたのだった。



(……すづ) かつたなあ……)

夜。

茉子はシーツを取り替えた布団に包まりながら、昼間の情事を思い返していた。

(すづ) ぐく、幸せだった)

幸福感と満足感に満たされて、更に求められているのだと感じて——もはや言葉では表せぬほどの幸福な時間だった。

——おい——

「わあっ!？」

そんな中、内に潜む犬神が彼女に声をかけたのだが、すっかり忘れて余韻に浸っていた茉子は無様な声を出す。

しかしそれも一瞬。すぐさま平常を取り戻した茉子は要件はきつと情事だろうと当たりをつけ、言葉を待つ。

——痛みが幸福とは随分倒錯した感情なのだな——

「……あ、あはく……見てたんですか」

——厳密に言えば見せられていた、か。伊奈神の者は復讐鬼を遮断していたようだが——

「別に痛みが幸福というわけではありませんよ。ただなんていうか……それすらも心地良かったんです。好きな人に求められて、その温もりを全部感じられたんですから」

——うむ。よくわかった。人間の感情などさっぱりわからんとな

「ええ……そんな自信満々に言われても」

自信満々に犬神は理解できんと明るいう口調で言い放ち、茉莉は呆れるというよりも困り果てた。

それでは恋を通じて知りたいことが知れないのではないかと。だが。

——まあ、有意義ではあった。理解できんが、しかしそういうものなのだろうとな。姉君もまた、理論や理屈を超えて矛盾した感情を得たのだろう——

理解はできんが納得はしたと。

犬神は確かに、愛について学んでいた。

——……してお前。あの男の、伊奈神馨の何を好きになったのだ？

「何……何って、具体的に言うのは難しいですね。ただ本気で好きですし、墓の下から先も一緒にいたいと考えてますよ」

——ならばあれか、喧嘩をしない関係性とも言うべきか——

「いえ、普通に喧嘩すると思いますよ。というか喧嘩の一つや二つして当然じゃないですか。喧嘩も無いカップルなんて、逆に不気味ですよ」

——……ふむ、喧嘩するのは自然とな——

「はい。でも喧嘩したって許し合えるし、それでも一緒に、側にいたいと思える特別な人……それがワタシにとって馨くんなんです」

——なるほどな……特別、か——

意味深な呟き。

そこで茉莉はふと思ひ出す。犬神がこうして恋から何かを探そうとする理由を。

「アナタにとってあの方は、恋でなかったとしても、そうした特別な方

だったんですよね」

——そうだな……喧嘩も散々した。苦言も申した。だがそれでもなお……あの方と過ごす日々は、不思議と心地良かった——

「あは」

——……なんだ——

「声、だいぶ柔らかくなってますよ？ 普段の威厳は何処へやらですすね」

——やかましい。ああまったく、見られたくないものを見られたな……——

拗ねるようにそうボヤク犬神。

そうしたらしくないとところが妙に年下を相手にしているような気分させてくれる。

だからだろうか。

「何処か、見たい場所とかありますか？」

そんなことを、優しい声で尋ねた。

——あるにはあるが……まあ、しばらく後で構わん。ではな——

やけに彼らしくない素直な答えだったが、後回しで構わないというのは、恐らくはもう少し恋人としての時間を過ごせということなだろう。

変なところで気を使う犬神に苦笑しながら、いつまでもこの愉快的同居人とこんな楽しい会話ができればいいなど、茉莉は思った。

中々に貴重なのだ。

彼女にとって、こんな相手は。

(馨くん……ワタシもアナタを愛してるよ)

眠る直前、最愛の人から告げられた言葉を思い返ししながら、心中で愛を囁く。

——俺は……お前を、常陸茉莉だけを永遠に愛し続ける。

君に捧げた、青い緋衣草の花言葉に誓って——

なんとも気恥ずかしい告白だが、茉莉にとってそれは、何よりも勝るものであったのだ。

魔人／遭遇

(またこういう夢ですか……)

夢の中。

レナはあの燃え盛る屋敷に似た、古い屋敷を見ていた。

「姉様！」

「まったくはしやいで……どうした？」

その中には二人の幼い子供がいる。

一人は落ち着いた紺色の質素な和装をした、少年とも少女とも取れる人物。黒い髪に黒い瞳、そして白い素肌はどこか神秘的にすら感じる。

もう一人は馨の祖先、京香を一回りも二回りも幼くしたような少女。

「父様が呼んでたよ？」

「ん、わかった。ああそうだ、さつきまで稽古してたみたいだが、怪我はないか？——京香」

そして少年のような少女は、妹と思われる幼い少女を京香と言った。

(キョーカ……ということとは、これは……キョーカの幼い頃の……?)

「うん。全然怪我なんてないよ！」

「そうか……いやよかった。お前は綺麗だからな、一生物の傷が出来ては、姉としても頭を抱えるよ」

「^{かなえ}奏姉様は本当に心配性なんだから、もう」

「クククツ、仕方あるまい。お前は私の大切な妹なのだからな。大事さい」

奏と呼ばれた少女の姿は——馨によく似ていた。

性別や口調などは違えど、全体的な雰囲気として、さながら女版の馨と言っても過言ではない。

だが本来、血の流れ的に言えば馨が奏の男版なのだろう。京香の姉である奏は先祖に当たるのだから。

「まあ良い。父上に会いに行ってくる。その後に構ってやろう」

それからしばらくして奏が戻ってくると、また京香はトテトテと歩いて彼女を笑顔で迎える。

「奏姉様」

「なんだ京香」

「んー、奏姉様は好きな人とかいるの?」

「むう、恋煩いの話か……きて、な。私は今まで尊敬こそすれど、愛情を抱いたことは無い。独り身というのも悪くないが、私とて女だ。男に求められ愛されたいと思う気持ちに偽りは無い」

「ならどんな殿方がいいの?」

「そうさな。自分の弱さと真っ向から向き合って、例え間違っていたとしても、はつきりと一本、筋の通った答えを出せるような人間……かな」

ほのぼのとした話題だったが、刹那。

——そう、我が憧憬こそがかの魔人よ……——

低く、狂気を纏った声が、レナの脳裏に響き渡った。

——迷わず、正面から向き合って答えを見出した。あれは強く、そして優しすぎる男だ、とても。でなければ自死を選べない——

狂気の中に見える、確かな尊敬の念。

憧れという言葉に偽りは無いはずなのに、だが何処か不気味なものを感ぜずにはいられない。

理解できるはずなのに理解できない。

徹底して相容れないそれ。

——その覚悟、その意志の頑強さ、素晴らしい。尊敬に値する——

だけど、その敬意は本物だ。

本物だからこそ、理解できない。本気で魔人に憧れている。本気で魔人を尊敬している。

恋煩いなんてものじゃない。

そんな次元を超えている。

——だからこそ、挑みたい。挑ませてくれ。魔性を飲み干した私と、魔性と向き合ったお前……どちらがより正解に近いのかを確かめる為に——

——だからその為にも、まずは鬼からだな——

「……また、こういう話でありますか」

起きて、伸びを一つ。

早朝に起きるのは慣れてきたとは言えども、理解できないもので叩き起こしてくるのはやめてほしい——レナはそう内心で愚痴りつつ、身体をパキパキと鳴らした。

「キョーカのお姉さん、カナエ……カオルそっくりな、いえ、カオルがそっくりな人」

馨と奏。

似た響きの名前に、よく似た外見と雰囲気。内面はわからないが、外見だけで言えば生き写しのようにそっくりだ。

「……わたしは、何も知らないのですね」

考えてみれば。

レナは知っているようで知らない。当然だが、彼女は永続的にこの地に留まるわけでもない。だからこそ最低限のことしか教えられない。

過去の因縁も、裏で行われていたことも。

「もつと、知りたい」

故に孤独を、今更になって感じた。

どこまで行っても部外者でしかなくて、お客さんでしかない。自分は渦中にいるはずなのに、渦中には混じれない。

……混じらない方が幸せなのだろう。それは分かっているても、巻き込まれたのならば最後まで付き合いたいと願うのがレナ・リヒテナウアーだ。

「わたしも打ち明けて、もつと仲良くなりたい」

家族に会いたいという帰郷感。

友人と更に仲を深めたいと思う感情。

何が起きて、何があったのかをもつと知りたいという孤独感。

それらを糧に、更に馴染みたい。

だからレナは、ちよつとくらい素直になつてみようと思った。

(……具体的に素直に、とは言つても如何にしたものでしょうか?)
仕事をする中で、そんな疑問にぶつかった。

(素直になつた人……カオルは参考になりませんね)

あれは素直過ぎる。

というか、あんな出来損ないのツンデレみたいな対応しかできない
ほどに根が素直で可愛らしい子だ。

結構本心を隠すことが上手なレナには参考にできない。

(素直……素直……マコ?)

馨つながらで茉莉もまた最近素直になつた組であると思ひ出す。

……確かに彼女なら何かヒントがと思つたのだが、ここでふと気が
付いた。

(あれ? 考えてみればヨシノだつて最近素直になつたのであります
から……つまり、もしかして参考になる人は、いない……?)

基本的に鞍馬兄妹やその他クラスメイトを除けば、自分が友好関係
を深めている人間の大半は最近素直になつた割には素直になり過ぎ
ているタチであると。

しかもその理由の大半が『気を病む事情が無くなつた』だつたり、
『素直に自分の気持ちを受け入れた』だつたり、『一步前に出てみよう
と勇気を出した』だつたり、『茉莉可愛いよ茉莉』だつたりとか、特に
一人は参考になるならないを通り越した、そういう次元の話である。

疎外感というよりも、自分自身への不信などに由来する心の壁だ。
まあ、将臣は例外的な存在だが。

(ふむ……となれば)

壁ではなく、純粹に知らないという点が自分の引つかかっている点
なのだろう。疎外感の中でもわかりやすい、自分以外が知り合いだか
らというものだ。

ああなんだ、そうなればやることは単純だ。

(より深いところに行けば良い、それだけです)

つまり、またみんなワイワイ遊べば良いということだ。

ならばまずは——と、思っていたところで。

「……コハル？」

早朝、本来なら全く見ることもない時間に小春の姿を見た。

私服に着替えているが、彼女らしからぬ落ち着いた配色の服装で、穂織らしい和洋折衷感は無く、純粋な和装。

そして髪は首元で、ヘアゴムによって一纏めにされているだけ。年頃の女の子らしくこの辺りに気を使う彼女にしては珍しく雑だ。

仕事の関係で早朝から外に出た時に、そんな違和感しか存在しない小春。しかも中に入るわけでもなく、建物の正面に立って無表情でいるだけ。

「コハル？」

気になつて声をかけてみると、ハツとしたようにすぐさま普段通りの彼女らしい活発な表情に戻る。

「……あつ、レナさん。おはようございます」

「おはようございますですよ。あの、つかぬ事を聞きますが何故ここでボーツとしていたのでありますか？」

「元々祖父に用があつて、さつき終わって門を見上げてたら色々思い出してたんです」

「おや、そうだったのであり……ますか……？」

違和感。

小春と過ごした時間が少ないレナですら感じる、あまりにも強い違和感。

全体的に鞍馬小春らしくない。どこか硬い。元々小春は人懐っこい性格で、そういうところは廉太郎によく似ている。呼び名は硬くても、態度そのものは非常に柔らかい子であるというのに。

この硬さ……覚えがある。

これはまるで——

(最初の時の、カオルみたいな……)

芳乃と茉莉の距離感とは違う。

彼女らは遠慮される側なのだから、わからないが故に硬いといった印象を受けた。

対して馨は親密な距離感を知っているのに、敢えてその距離に踏み入らない硬さがあつた。今の小春から感じるのは、そういった意図的に硬い態度だ。

「おっと、そろそろ朝餉の時間かな。じゃあ、私はこれで。さよなら、レナさん」

「? はい。オタツシヤデー」

しかしそんな違和感塗れの小春は微笑みながら手を振って帰路に付く。

(……本当に、コハルでありますかね……?)

思わず仕事の手を止めて、彼女は本当に”鞍馬小春”であつたのかを考える。あの行動はまるで、”誰か”が鞍馬小春を”演じている”かのような――

「……まさか」

そこまで考えて、刹那、崇り神や犬神の存在を思い出す。

そして――あらゆるものが解決する中、解決していない劇物は何か……そこまで至つた。至つてしまった。

――我が名は虚絶。千年の憎悪を束ね、塵殺の刃にて復讐と絶滅を目的とする残影なり――

レナは深層までは知らなくとも、稲上家と虚絶にまつわる話は聞いている。そして虚絶は毒を以て毒を制す類のものである、と。

つまり、唯一終わっていないこと。

この穂織の中に潜む火薬は――

途端、仕事を投げ出して自分の部屋に戻る。

途中で女将に呼び止められたような気がしたが、無視して部屋に駆け込んで携帯で電話をかける。

「――レンタロウ!」

『……レナちゃん? どうしたんだ?』

「コハルが! コハルに何かいるであります!」

『……っ!? マジで言ってるの?』

焦るレナに対して、その尋常ならざる焦り具合を言葉に垣間見た廉太郎もそちらの、知らなかった事情の方だと察すると同時に――

『確か小春の奴、散歩してくるとか言ってたって聞いたっけ……それで祖父ちゃんとか行ってたんだな。まだ時間はあるから、どんな様子だったのかを教えてください。それから将臣たちにも連絡を……』

『ただいまー』

『っ!? 帰ってきやがったか……っ。祖父ちゃんとかは任せました連絡する!』

「あつ、レンタロウ!」

プツリと切れた電話。

確証は無いが、何か嫌な予感がする。

それも強大な狂気が渦巻いているような――

だが今はそれどころでは無い。

知っている人々に伝えなければ……

(もつとみんなと仲良くなるためにも、これを早く何とかしないと……!)

焦りの中に見える孤独感。

レナはそれを押し殺しつつ、すぐさま情報を回し始めた。



小春ちゃんに、何かがり憑いている――

早朝、電話をしてきたレナから聞かされたのは、背筋も凍るような話であった。

――……恐れていたことが現実になった……つてところか――

京香も普段のちやらんぼらんな雰囲気は何処へやら、冷徹な面を出して俺と会話をしていた。

――しかし小春ちゃんに取り憑いたのがアレとは限らないし……でも出る時になったら私は出るよ――

それは構わないのだが……心配事と言えば鞍馬家そのものである。

小春ちゃんの中に何者かが潜んでいるのであれば、いつあの家族に危険が及ぶか分かったものではない。

ただ取り憑いているものを剥がし殺すだけならば容易い。小春

ちやんの肉体であればそこまで苦労はしないだろう。

……問題は人質を取られた時なのだがな。

——迂闊な行動はできない。だから……私もそろそろ、器を借りるとするよ——

借りる相手の候補はあるのか？

——ある。こと守ることに適した人選だし、あれだけ成長してれば私の技術を使っても問題ないだろうしね。じゃ、ちよつと行ってくる

——
気を付けろよ。

——ああ。キミもな——

京香の反応が無くなると同時に、廉に飛ばしたメールの返信が未だに帰ってこないことに気が付く。

……廉、小春ちゃん。無事であつてくれ。

昼間を過ぎて、夕刻に差し掛かって、そして夜に。

恐ろしいほど何もなかった。

廉に送ったメールに返信は未だに無い。

……菜子は何かあればすぐに駆けつけられるように芳乃ちゃんの家にいる。俺は相変わらず自分の家だが、しかし最も早く駆けつけられるのも事実だ。

「……ん？ 返信……」

やつと来た返信を見て、目を見開く。

——『こいつは、小春じゃない。小春がやるであろうこと全てをやつてない』

シンプルに、あの廉が小春ちゃんではないと言い切った。

それほどまでなのかと、思わず電話をかけてしまう。

「……廉、大丈夫か？」

『正直キツイ。段々と俺にも探りの視線を入れてきやがる……ああ、あんまり長いのは勘弁してくれ。あいつに更に更に探られる』

「なあ廉。無理するな、俺たちがいる。何かできることはないか？」

『……警。どうもあいつ、外に出たがってるみたいだ。夜分遅くに出

て行くと思う。場所はわかんねえけど、多分……巫女姫様のところか
もしれねえ。先に将臣には伝えておいた』

「俺はどうすればいい」

『後、着けてみる。着けるときには電話かけっぱなしにしておくから、
頼む』

「わかった。気を付けろよ、親友」

『あいよ』

そうして、更に静寂の深まった頃に。

廉から電話が、来た。



夜分遅くに、小春は私服に着替え外へ出て行った。

無論それを見逃す廉太郎ではない。電話をかけたっぱなしにしつつ、
その後を追い掛ける。

(この方角、やっぱり巫女姫様の方の——)

「もう、何さ？ 出てきなよ」

「っ!？」

気付かれた——!?

基本無力である廉太郎には、見なかったことにして去ると言う選択
肢がある。故にここは、大人しく出て行くべきだろう。

「……おい、何も言わずに出てくのはねーんじゃねーか？」

「しようがないじゃん。だってほら、夜這いみたいなものだし。だか
らお兄ちゃん、見逃してくれないかな？」

「お兄ちゃん”……ねえ?”」

更に確信が深まる。

レナからの報告以来、廉太郎はひたすらに小春を演じている何者か
を観察してきた。

故に——

「なあ知ってるか？ 小春はな、小生意気にも俺のことをお兄ちゃん
とは呼んでくれねえんだよ。あいつは俺を廉兄って呼ぶし、お兄ちゃ

んって呼ぶのは将臣だけだ。

それにな。あいつは俺がだらしくしていると苦言を言うし、ついでに言えば俺と些細なことですぐ言い争いになる。

今日は驚くほど何もなかった。

……おかしいんだよ、それ」

これは、小春ではないという明確な材料を全て揃えていた。

大事な妹に何をしたらと、怒気を交えながら睨みつける。

「テメエ、俺の妹に何しやがった。今すぐに小春を返しやがれ」
すると、”それ”は虚をつかれたような驚いた表情を見せて――

「ク――ッ」

「クククッ、ハハハハッ!!」

小春の声と、知らない女の声が混ざった声で、嗤った。

自嘲の笑いどころではない。ありとあらゆるものを笑う、悍ましい嗤いだ。

ひとしきり嗤った後、小春に潜む”それ”が姿を現わす。

小春の瞳が、闇の中でもなお黒い、闇を宿した瞳へと変色する。

「コレガ麗シイ兄妹愛トイウモノカ。イヤハヤ、良キ兄ヲ持ツタモノ
ダナコノ童モ」

「……………?!」

狂気。否、そんなものではない。

それが纏う雰囲気は、徹底して相容れない、生物として本能が拒むもの。決して理解できず、相容れず、同情の余地すらないナニカ。

小春の中に潜む者は、あらゆる人間から外れたところに存在している――!

「サテ、妹ヲ返セ……ダツタカ。イヤスマヌナ。私トシテモ、コノ童ノ
肉体デ荒事ハシタクナイ。ダカラコソ、私ハ巫女姫ノ住ウ地ニ存在ス
ル器ガ欲シイノダ。ソノ脚トシテシカ使ワヌ。妹ハ無事ニ返ソウ」

「器が手に入らなかつたらどうするんだよ」

「無論、使ウサ」

「……………やっぱか」

「元来デアレバ、ダガナ……才前ノソノ覚悟ト、ソシテ馨ト仲良クシテ

クレテイル礼ダ。素直ニ帰ソウ」

嘘を言っているようではない。

実際、何を感じるわけでもない。本当にそうなのだろう。

「……マダ、足ハ多少アルシナ。コノ童ダケハ、今宵ノ結果問ワズニ返ソウ。ソレダケハ真実、コノ地ノ神ニ誓オウ。明日ニハコノ娘ヨリ去ル」

「本当、なんだな……？」

「アア。コレダケハ偽リニハセン。疑ウノデアレバ存分ニ疑イ、何度デモ問ウガイイ。ダガ、ソレナリノ対価ハ払ツテモラオウカ——」

瞬間、廉太郎の視界に映ったものは鮮血と夜空。

「が、——は……っ!？」

「ドウモオ前タチハ馨ガ殺スナト言ウノデナ。精々腹ニ杭ヲ撃チ込ム程度デ済マセテヤロウ。安心シロ、死ニハシナイガ気絶シテモラウ」
理解できないという表情をしている廉太郎を見て、それはとても楽しみに笑った。

その表情は好きなものを見る子供のように純粹で、あるいは——

「アア、ソノ表情コソ……生キテルツテモノダ……」

生き甲斐を見つけたかのような表情。

(……ちく、しょう……しくじった……)

廉太郎の視界が黒く染まると同時に、小春は背を向けて立ち去るのだった——

歩き、歩き、歩き——遂に彼女は建実神社の鳥居をくぐった。

その奥に待ち構えているのは、将臣と茉莉。その姿を見た小春は訝しげにした後、何か納得したように——

「ナルホド。始メカラ気付カレテイタカ。マア、ソウコナクテハナ。デナケレバ張り合イガ無イ」

ニイ……と、凶悪な笑みを浮かべた。

「お前……廉太郎と小春に何をした!？」

「マタソノ手ノ質問カ。見テ分カラヌカ? 借りテイルシ、兄ノ方ニハ対価ヲ払ツテモラッタ」

「何者ですか、アナタは——」

牽制するような菜子の問いに、小春は——否、その中に潜む者は声高らかに宣言する。

「我ハ魔人……汝ヲノ死ヲ転ジテ、己ガ生トナスモノ」

古の、魔人であると。

「才前タチハ退イテクレナイカ？ 器ダケガ欲シイノデナ。無用ナ争

イハシタクナイ」

「……断る！ ムラサメちゃん！」

「応ぎー」

無言で構える菜子と、神力を解放する将臣。それらを見て、ため息を一つ吐いた後、魔人は小さく呟いた。

「フム、馨ニハ悪イガ……早メノ味見ト洒落込モウカ。京香ニ気付カレル前ニ、奪ワセテモラウトシヨウ」

そうして、魔人の周囲に黒い幻影の刀が二本生まれる。それはいつぞやの、崇り神が一度だけ使った刀を飛ばすものと全く同質のもの。つまりそれはあの日崇り神の中にこの魔人が存在していたということの証明に他ならぬ。

「サテ、ヤロウカ」

今宵。

魔人が、人に牙を剥いた。

自在に動く刃——とは、それだけで脅威となり得る。

更に本体もそれなり以上に動くのであれば、尚のことだ。

「ち、イ——！」

「ホウ……ヤルナ」

一撃を当てれば終わりであるはずなのに、まるで霧を掴むかの如く。

将臣の剣戟が如何に素直なものと言えども、それを百も繰り返せば一撃当たる——が。

魔人は小柄な小春の身体、そして彼自身が従姉妹に刃を振るうこと

を躊躇していることを最大限に活かして、迫り来る刃を一つ一つ丁寧に避けて、受け流していた。

「素質ハ確力、シカシ実戦ガ足りヌカ。コレデハ求メル域ニ届カヌナ……」

「何を！」

「我が憧憬ノ魔人ガ才前トノ戦イヲ望ンデイル以上、私ハ才前ヲソレナリノ域ニ押シ上ゲテヤラネバナ……有地将臣イツ！」

理解できないその言葉、しかし何処か心当たりがあるような、無いような。

しかし将臣の斬撃を、徹底して防御に徹する魔人は全て回避、流していく。それこそは圧倒的な差。強者と弱者の間に存在する、超えられない壁。

魔人と人との差ではなく——これは達人と素人の差。

小春の中にいる魔人は、魔人である以前に達人なのだ。その老境に至った技の数々は、玄十郎の技にも通じる無駄を徹底して削り取ったもの。

技の起こりを見据えて、一つ一つを丁寧に潰し、そして必殺の一撃を見舞う……小春の身体で放たれる拳はあまりにもか弱いが、これを蓄積されれば間違いなく突破される。

こと、この魔人は「戦闘」という行為において他の追従を許さぬ才覚を持っていると言えよう。

(ご)主人！…この者……尋常ではないぞっ)

(だ)ろうな……っ！…当たらない……！)

「ソラ、次ダ」

指をパチンと鳴らすと、今まで菜子が抑えていた自立する幻影刀がクンツ、と向きを変える。

「っ！ 有地さん！ 来ます！」

人の何倍も早く動くそれと競う時、如何に忍者とて初速で上回ることは、全力の魔人を速力で上回る事と等しく不可能である。

よって菜子の声を頼りに彼女の方を向くと、尋常ならざる速度で迫る幻影刀。将臣がその奇襲に、咄嗟に反応できたのはある意味奇跡的

だった。

手脚を狙った二本を避けるために、後ろにひとつ飛び。先ほどまで手脚があつた場所に突き刺さる二本。

そして再び茉莉は将臣の隣に位置を戻し、体勢を立て直す。

「……コノ杭、便利デハアルガ加減ガ効カヌ。ナレバ、コチラカ」

そんな様子を見て、魔人は加減の効かぬ杭を消し、拳を構える。

——黄泉の杭……何故こやつが——

(黄泉の杭とは、一体)

刹那、茉莉の中にいる犬神が反応する。黄泉の杭……それは初耳だ。こちら側について茉莉も長いが、そんな単語は初めて聞く。

——黄泉の神々が気に入った子供を逃さぬように打ち込む杭だ。これなくば黄泉の深淵に堕ちかねん。だが、何故この魔人なる者がそれを持っているのか……

犬神の脳裏にある光景が思い浮かび、そして——まさかと。

あの時、炎の中で嘲笑と共に言われた言葉。

『真実、黄泉より這い上がった者……神が如き者も生まれている』

『さあ喜べ！　そして呪え！　いずれ穂織には絶叫する奈落の使徒が来たりて！』

『貴様の姉の恋——万の徒花に終わったそれが、やがては億の死を咲かせるのだ。そいつはきつと狂い咲かせることだろうよ』

それを否定したくてたまらなくて、そんな馬鹿など言いたくて。だが神としての知恵がそれを告げている。この魔人は、間違いなく姉の行動の結果生まれ堕ちて覚醒した個体であると。

——だが、今は考えても仕方あるまい……我が力の断片を振るえるようにはした。これで隙を作れ——

しかしその思考を打ち切り、茉莉に自分の力——崇り神として影を操る程度のものだが——それを与えて補助に徹する。

「……デハ行クゾー」

二対一という不利な状況で、加減が効かないという理由一つで有利すら捨て去った魔人が、前方に跳んだ。

疾い、疾すぎる。遅れて音がやってくるど錯覚するほどに桁外れの

速度。不慣れな小春の肉体でありながら、さながら馨の踏み込み……いやそれ以上の”跳躍”。

更に跳躍で前方に踏み込むだけではない、前方に踏み込みつつ更に地面を蹴って空へ飛んでいる。そのままなんと身を軽やかに動かし、右脚を撃ち降ろす——!!

狙いは、将臣。

当然ながら魔人にとって一撃必殺である叢雨丸を封じるのは理に適っている。そしてそれを二人も察している。

故に将臣は——敢えて前方に転がり込んだ。

「ム……い！」

股の下を抜ける形。

空を切る脚が地面に叩きつけられると同時に、茉莉が動き出す。

腕を掴んで、最小限の動きで拘束せんと身を動かす。本体を気絶させてしまえば——という事だが。

腕を掴み返される。

そして茉莉が拘束の為に力を入れるより早く、魔人が不安定な体勢から——投げた。

「ヌウアツ！」

「く——あつ!？」

激痛と共に呼吸が完全に乱れる。

増幅された痛みが身体中を駆け巡って、ダメージよりも精神的な疲労感をもたらす。

それは痛めつけ、肉体を疲労させる為の投げ技。腕や足を破壊する、意識を刈り取るなどという直接的なものではない。

——激痛と共に彼我の差を明確にする為、その為だけの技。

競い合う、殺し合う為の技ですらない。ただひたすらに弱者を翻る為の技であり、かつて馨が使った技。

しかしこの程度の痛みが何というのだと、茉莉はついぞ影を動かす。蛇の顎を横った黒い影が手を掴む魔人へと迫るが、魔人は離して大きく後ろへ飛び、着地と同時に今度は将臣に狙いを変えて再び跳んだ。

(来るぞ!)主人!

(迎え撃つ!)

一点に集中。

迫る敵との距離、起こりを見る。

後の先が出来るだけの距離はある。故にこの場は有利。

小春を救う為に集中しろ、集中しろ——!

両手で持ち、正眼に構える。

「抜刀ノ真似事カ? ……笑止ッ!」

それを嘲笑う魔人は、拳を腰だめに構える。その一撃、当たれば肋骨の一つや二つは折れかねない程の速度だ。打つ側も無事では済むまい。

だが魔人の魔人たる由縁は、それすらも人間の身体で負荷無く打てるという、とんだ反則技にある。

そして——

魔人の横から、四枚の手裏剣。

——刃を潰されていない、本物だ。

「ッ、貴様——ア」

進行方向に来る以上、そして何より魔人は小春の肉体を傷付けずに返すと誓った以上、それに対処せざるを得ない。

……そう、廉太郎は電話を二本繋いでいた。

結局魔人は、小春の携帯電話を持っていなかった。

既に魔人と廉太郎のやり取りは、将臣と茉莉に伝わっている——!

急停止。そして迫る手裏剣を幻影刀で迎撃……すると同時に、将臣が踏み込んだ——

上段唐竹割りの構え。

防ぐには下がるか、先に一撃当てるか。だが背後からは蛇が迫り、前に踏み込むしか無いのに、前には今に振り下ろされんとする叢雨丸。

上空に飛ぶ? 無理だ。飛べば茉莉に隙を晒すことになる。

既にここまでの戦いで小春の肉体には恐ろしいほどの疲労が蓄積されてしまっている。特に蹴り降ろしを外したのは痛い。

(くっ、誓った以上無下にするのは私の信条に反する——かと言ってここで終わるのも……だが、これ以上は)

迫るそれらを前に、魔人は迷った。

迷った末に、一撃必殺を避けることにした。

後退——刹那、無数の蛇が左腕に噛み付き、肉体から引き剥がされる感覚を覚える。

(まさか、この蛇……!! 犬神はそちらか!)

悟ると同時に、小春の肉体から完全に引き剥がされる黒い人型。

蛇はそのまま小春を茉莉の元へと運び、彼女が抱き止める。

そして——

「……は？」

もう一度、一撃を当てようと迫っていた将臣の動きが止まった。

「え……っ？」

”それ”を目撃した茉莉もまた、動きを止めた。止めてしまった。

「ふん……惑わば死ぬる、それを心がけていた筈なのだがな。この私も鈍ったものだ」

黒い人型が、闇の中に浮かぶそれは、刹那の内に姿を変えていた。

それは——黒衣。

貴族的な意匠を持った、しかし動きやすさを第一にした黒い和装。単衣の類であるが、着物そのものに黒の美がある。

そしてその顔は、馨と酷似したもの。

いいや、馨そのもの。

——稲上馨と瓜二つの黒衣の人物が、そこにいた。

「か、おる……っ？」

(なっ……!!? この者、何故馨の姿を……?)

「は、はは……何かの間違い、ですよね……？」

——バカな……

彼らの反応を聞いて、初めて魔人は自己の顔を認識したのか、とても意外そうにした後、宛ら英雄に焦がれた少年のように顔を綻ばせたとはいきや、一瞬でその顔を嫌悪に歪ませる。

「……同じ顔を取ることになろうとは……我が転生といい、私といい、

これでは彼の選んだ女より我々の方が闇を担う半身として相応しいと主張する間女のようなではないか……！」

魔人にとってそれは許し難い何かであり、吐き捨てるようにそう叫んだ。

聞いたとしてもまったく理解出来ない。理解出来ないが、兎にも角にもこの魔人は本気でこの現状に怒り狂っている。

尋常ならざる怒気と尋常ならざる失望。それらが混ざりに混ざって自己への憎悪として現れている。

「ああまったく、吐き気がする……しかし、この場は私の敗北だな。有地将臣」

突然将臣に呼びかける。

ハツとなつて改めて叢雨丸を構え直す、魔人に戦意は無くむしろ讃えるような雰囲気すら感じられる。

「それなりの才覚を活かして私と渡り合うとはな。褒美だ、残滓とはいえ我が首、断つが良い。そして常陸菜子、如何にして我が誓いを知ったかは知らぬが、あの場の一撃見事だった」

「……は？」

……急に褒められた。

さつきまで退かねば斬ると言わんばかりの魔人は、急に二人を褒めた。

廉太郎に対価を払えと杭を打ち込み、そして小春の肉体を何の躊躇いも無く乗っ取っていた魔人が、である。

(ご主人、畏かもしれんぞ)

——気を抜くな。自称とはいえ魔人だぞ——

内に潜む二人が警告するも、二人としては「いや、どう見てもやる気ないけど」としか反応できない。

そんなやりとりをしている内に魔人は既に正座を組み、斬首の時を今かと待ちわびている。

「……む？ どうした？ 兄のことであれば問題無い。腹に杭を打ち込んだとは言えども、所詮幻影。後も残らなければ出血多量ということもない。後遺症も無いと見て間違いないだろう。それにあの場な

「らすぐ気付くであろうよ」

「て、抵抗……しないのか？」

「私は敗れた。ならば敗者らしく潔く斬られるまでよ。それにそもそも、私はお前たちを殺せないのな。この穂織に住まう者の内たった一人を除いて、殺すことは絶対的にできぬ身だ」

故にやれ、と。

それならせめて顔を変えてくれと将臣は切に願うし、それに偽物と言っても菜子とムラサメだって馨の斬首が見たいわけでもない。

ただ魔人はどうも納得いかないのか、訝しげな顔をしながら……

「どの道、この顔を斬ることになるのだぞお前たちは。予行演習と違ってやっておけば良い」

彼らにとつて、全く理解できないことを、さも当然のように言い放った。

いの一番に反応したのは菜子。その表情を驚愕に染めて、声を上げる。

「それは……どういう意味ですか!？」

「そのままの意味だ。お前たちが見た輪廻、福音の中の呪いを断ち切るその最後に立ち塞がるのは稲上馨——彼もまた、お前たちに刃を向ける魔性を内包しているが故にな」

「——ふざけるな! 馨は魔人なんかじゃない! 人間だ!」

「……さて、どうかな? 常陸菜子よ、お前は心当たりがあるのではないかな」

将臣の反論をどちらともつかない態度で流しつつ、その視線を菜子へと向ける。

愛しい彼と同じ目なのに、それはあまりにも生物として相容れない異質な目。

けれどそんな目で見られたことは、決してない……そう言い切れる。だが心の何処かで、かつて一度だけ見たような気さえもする。

——戯言に惑わされるな! お前の愛した男が魔性を備えていないことなど、お前が一番知っているであろう!——

犬神が惑わされるなど声を上げる。

その声に迷いを断ち切り、茉莉はしつかりと魔人を見つめて、言い切った。

「アナタの言ってることは違う。馨くんに、そんなものなんて何一つ無い」

「……言い切るとはなア。いやはや、それほどまで愛しているのか、それほどまで知っているのか……まあ、よい」

返答に満足したのか、魔人は目を伏せる。しかしそれと時を同じくして、その身より霧散する闇が現れる。

まるで崩壊するかのように。

「……ちっ、せめて等級を上げさせてやりたかったが、時間切れか」

正座から立ち上がり、二人を改めて見据えて魔人は言い放つ。

「因果だ。お前たちが相対するのは因果の鎖、因果の杭だ。次なる私がお前たちと刃を交えるかは知らんが、いずれ来たる決戦——その時まで己を鍛えておくといい。敗者からの助言だ」

それは宣戦布告。

それは勝者への忠告。

その発言にはこの魔人の持つ精神性がはつきりと現れていた。

まともだ。

まともなのだ。

魔人であると名乗り、実際に魔人が如き所業をしながらもそれさえ除けばまともなのだ。

気色が悪い。

なんだそれは。理解できない。

「ああ、そうだ。その娘はさっさと医者に見せてやるといい。割と雑に動かしたからな」

そう言い残して、魔人は闇へと霧散した。

後には、戦闘の跡しか残っていない。

「茉莉！ 将臣！ 遅れて悪い！ 無事か!?!」

意味深な発言に心を悩ませ、顔を暗くしていると、馨が遅れてやってきたのだった――

一転

廉が方向を確かめて報告し撤退。

俺が先行し、建実神社へ誘導。

茉莉と将臣の闇討ちにより、速攻をかける。

——それが本来のプランだった。

だが結局、廉は小春ちゃんの中に潜んでいた者に挑発され、俺は廉の救助に向かわざるを得なくなった。

……挑発に乗ってしまった廉を責めることはできない。廉からすれば家族の一大事だ。乗って当然な精神状態だろう。

血を流して気絶している廉を駒川の診療所に担ぎ込んでから急いで建実神社へと向かったが、どうやら終わっていたようで、暗い顔をした将臣と、小春ちゃんを抱えている茉莉を見ることとなった。

……何があったのかを聞こうとしても、何一つ答えてくれない。ただ整理する時間をくれと、皆が言った。

確実に何かあった、それも言いたくないような何か。その後小春ちゃんも診療所に入れられ、翌日となった。

——駒川から二人が目が覚めたと聞いている一番に飛んで行った。電話で起こされたが、しかしこれは俺が招いた事件……いくら謝っても足りないほどに、俺に責任がある。

……実は、聞いた瞬間”処理”してしまおうかと考えた。だが家から離れない以上は記憶操作と俺が乗り込む必要がある。

——俺は友人の家族の記憶を弄くり回せるほど冷酷になれなかった。結局俺は使命と自己を天秤にかけて、自己を取ってこのザマなのだ。

なにが殺せてしまうから、だ。殺せてしまうからなんて言うておきながら、その方が早く確実に済むって時に殺せないどころか傷付けることすらできない。

自分で自分を騙して、わかったようなことを言って、拳句この始末か。

もっと上手くやれた筈なのにと。

もつと何か……と思ってしまうのだ。

たればの話なぞ意味無い。これからどうするかが問題なのに、どうしても過去にばかり目が行ってしまふ。そう、どうすれば傷一つ無く理想の自分であれたのかという——なんて女々しいんだろうか。

傷を誇るのだと決めても、中々にそうはできない。

「よ」

「あー……悪りいな聲。台無しにしちまった」

「……気にすんな」

心底からの謝罪、すまなそうな表情。

そんな廉に言えたのは、たったこれだけのことだった。

ベッドに寝つ転がっている廉を見て安心するけれど、でも何故謝罪するのか俺にはわからない。

いくら自分から役を買って出たって言っても、俺たちの方がもつと上手くやれたかもしれないのに。

危険に放り込んだのは俺なのに。

「シケた顔すんなよ。小春に見られたらなんて言い訳するんだ？ 結

果良ければって考えろって」

「……だけど……！」

「ケツ拭いてくれてありがとな、馨」

やめてくれ。

俺に感謝なんかしないでくれ。

俺は、お前が思ってるような人間じゃないのに……！

「よしてくれ……」

「……まあ、お前と俺とじゃ立場も何も違うもんな。ただ俺はしくじった俺が許せないだけで、お前を責めるなんてできない。責めてくれとか言われてもできねーからな」

「わかってる」

「……なんて伝えたもんかなあ。俺のドジにでもしておくかア？」

そんなことをケラケラと笑いながら……ああ、やはり空元気なのだろう。

ただ急に真剣な表情になって。

「この件、お前関連か」

「ああ。俺の……正確にはご先祖様の因縁の筈だ」

「なるほどねえ……なんか、事情が複雑そうだなあ」

何か思わせぶりなことを言っていたのか、ただその頃には廉は倒れていたり、俺は聞いていない。

「あと小春に会いに行ってくれ。あいつ、筋肉痛がひどいからあんま動けねーんだって。きつと暇してるだろうから」

「お前は？」

「基本快調。ちと腹痛えくらい。穴空いた筈なんだが、不思議なもんだな」

「……そうか。よかった」

「じゃあまたなー」と気軽に手を振って小春ちゃんのところに行けと催促する廉。なんののかんの言っつて、こいつもこいつなりに小春ちゃんの事を兄として愛しているのだ。

「……」

そうして小春ちゃんの病室へ向かうと彼女は暗い表情をして外を向いていた。

「小春ちゃん？」

「……馨さん」

「将臣じゃなくて悪いね。身体、大丈夫かい」

「うん、まあ」

空返事、そしてどこか虚ろ。

昨日ことをどれだけ覚えていいのか。そして彼女が何を考えて何を欲しているのか。付き合いの深くない俺には、いまいちわからない。

「私、何をしてたんだろう」

「覚えてないのか？」

「ぼんやり、所々……廉兄の件は覚えてる」

「……そっか。君は悪くない。悪いのは奴だ」

「そう、だよね……」

……ただ小春ちゃんは何か自分が隙を見せたとても考えているのか、自罰的な表情を浮かべていた。

「廉兄は？」

「腹痛いらしいがかなり元気だ。不思議な話だけど、身体を酷使された君より回復早そうだ」

「じゃあ、あの言葉……嘘じゃなかったんだ。私言われたんだ。中にいた人に、出来る限りは被害を少なくしようって」

「……律儀だな。まるで狂人だ」

小春ちゃんの言葉を聞いて、思わずそんな感想が出た。

被害を少なくしようと言いつつ、だからと言って軽傷とは言え腹に穴を開けてみたりするなど……到底理解でき————ないということもない。

なんとなく、わかるのだ。

恐らく小春ちゃんの中にいた者は、俺と同じでこれと決めたことをやり遂げなければ気が済まないタチだ。しかも俺より数段酷い。

自分はこういうものなのだから、こういうことをすると決めたらやらねばならないとかで雁字搦めになった拳句……というタイプ。

で、自分ルールの穴は容赦無く突いてほくそ笑む。間違いない。

……京香の家族の仇、虚絶の本当の持ち主である破綻者である可能性が高いが、京香は確信を得ているのだろうか……昨日から帰ってきてないが。

「まあ、あれかな。色々と気にするなとしか俺言えないや。気休めだけど」

「……」

「とりあえず、早く元気になってな。廉も将臣もそれを望んでるだろうし」

「うん……」

「じゃあ、その、お大事に」

「ありがとう」

実際気の利いたことが言えるほど、コミュニケーションがあるわけでもない。こんな具合に差し障りの無い話をして、俺は彼女の元から去る。

——その途中、将臣たちとすれ違った。

「……後で話が」

「ああ」

「……それで、話は？」

その後。

二人の見舞いを終えた将臣たち……というか、茉莉もいれば芳乃ちゃんもいるしムラサメ様もいる……つまりいつものメンツだ。

少しの間、使つてない診療室を貸してもらつて話をする事になった。

「京香さんは？」

……やはり。

京香関係の話、か。となれば——

「呼び戻す。答えられる範囲で答えるよ」

——ん？ 呼んだ？——

帰つてこい。お前に用事がある。

——あいよ——

「んで、将臣。本題は？」

「……小春の中にいた奴は、魔人を名乗っていた」

「魔人……ね」

「何か知ってるか？」

「確証は無いが、予想は立っている。京香が戻り次第——」

「戻つたよ、馨」

「噂をすればか」

ちやうど切り出したところで、京香がぬるりと壁を抜けて戻ってくる。

ただその表情は険しく、そして——復讐鬼のそれであった。

「やーやー、将臣君。私に聞きたいことあるって？」

「……常陸さん」

「はい、伝えるしかないかと」

……？

「そういや二人は昨日何も教えてくれなかったな。となればそういうことかもしれないし、あるいは……まあ、それもすぐにわかる。」

意を決した将臣は、京香を見据えて――

「小春に取り憑いた魔人について、知っていることを全て教えてくれ」
そう、切り出した。

すると京香は無表情に変わり、「ちよつと失礼」と言うのを将臣の頭に手を乗せて――納得したような表情をした後、手を退かして。

「……やはり、奴か」

「っ!? 知ってるのか!?!」

「知ってるも何も――」

――奴は、私の……

私の、仇だよ。私から全てを奪った魔人であり、同時に……私が封じていた筈の存在。一体どんな手品使ったかは知らないけど、虚絶……奴が付けた名は転生だったっけ？ とにかく、中から抜け出して色々と手を引いているみたいだ」

そう、告げた。

――魔人。

京香の家族を手にかけて、ひたすらに人の不幸でしか生を実感できない破綻者。虚絶……いいや、あの妖刀『転生』の元来の持ち主。

転生……さしずめ、死を転じて生と成すが故に転生、と言ったところか。

他者の死を転じて己が生と成す……理解はできないが、魔人にとってはそれが生きるといふことなのだろう。

だが、俺の邪魔をするならば消すまでだ。茉莉子のためにも。

「封じていたとは……? 憑代と呪いのように混ざった、と言うことでしょうか」

「いいや、違うよ芳乃ちゃん。私は自分の得物をへし折られてね、咄嗟に奪って殺したんだ。その時にはもう、怨恨の宿り木として完成していたから……肉体は消したけど魂は保存されていたんだ」

「じゃから吠え面をかかせるために、そなたは封印を担っていたというわけか」

「そういうこと」

「……なるほど。通りで。」

つまりこれは、除霊のようなものか。

「では、抜け出したというのはどういうことなんですか？ 虚絶の中にいたということは、多分馨くんも察知できたんじゃないかと思うのですが……」

「……あの日、ほら、キミたちがお祝いをしていた日には私も奴も、同じところにいたんだ。その翌日くらいから急にいなくなつてね。ああ、馨は察知できないよ。だって腹の中を見るのは、搔っ捌いてみなきゃ無理だろ？」

いやそれ初耳なんだけど。

先に言えよ……言つてくれなきゃわかんないじゃないか。人に素直になれとか言いながらお前が素直じゃねえのはズルいと思う。てかやつぱこの人俺の祖先だ。

面倒くさい方向性が同じだ。

「……で、今回キミたちが遭遇したのは分体だろう。小春ちゃんはあくまでも足、奴ならきつと……本体とは別に、実働用の分体を確保していると思う」

かなり事態は進んでいるらしい。

京香の考えはほぼ当たっているだろう。さつき色々流れ込んできたが、次の私とか言っていたし、多分……ならばと。

俺は口を挟んだ。

「昨日悩んでたのは、俺の話か？」

「……それは」

「そこのお節介が流し込んできたが、なるほどね……なんとなく読めた」

黙りこくる四人を見つめながら、更に言葉を続ける。

「多分……これは堂々巡りだな。魔人を放置すれば魔人が俺を殺して自由になる。かといって魔人を殺せば俺が魔人の如き者となる……みたいな感じか」

将臣の聞いた魔人の言葉。

殺せるのはただ一人。虚絶と繋がっている俺だけが、恐らく魔人が唯一殺せる人物なのだろう。

恐らく魔人がいなくなれば、虚絶がより純度の高い状態になる。深く接続している俺に何かしらの悪影響があり、そしてそれが最後に立ち塞がる者となる……といったところか。

「馨、あんまそういう悲観的な——」

「お前が俺に魔物殺すべしを徹底させられるなら、魔人が俺に人殺すべしを徹底させられることも造作もない筈だろ京香」

「それは……」

「ま、魔人をさっさと殺って、俺を止めてくれればそれでいいさ。叢雨丸で斬りや多分、接続も無くなって虚絶の対応をするだけでいいだろうし。」

だからほら、頼んだぜ将臣。そうなった時はって約束だろ？ 自分の意思でそうするならまだしも、他人の意思で茱子を手にかけるのは死んでもゴメンだからな」

悲観する理由など無い。

過去の因縁を解決できた人間たちに不可能は無い。たかが魔人の一人や二人、のしてしまいうのも簡単だろう。

だからこそ俺は迷いなく、魔人殺しに挑める。その時になったら絶対にこいつらが俺を止めてくれると、確信しているからだ。

それに、実体の無い幽霊よりも、実体のある人の方が何百倍もやりやすいだろう。

……と、いう感じだったのだが……

「お前、死ぬ気か!」

怒りに顔を歪ませた将臣に胸倉を掴まれる。

……あれ？ 俺なにか言葉しくったか？ いやでも約束は覚えているし、それにあの場で俺の首を……なんて言った覚えはないんだけど。

「い、いやおい落ち着けよ将臣。そもそも俺は——」

「死なせてたまるかよ！ 他の方法を探してでもお前を助けてやる

！」

「……将臣君や。何も警は死ぬとかそういうことじゃなくて、単に虚絶の影響だろうから接続を叢雨丸で断てばいいって言ったただけだよ」

横から京香がフオローを入れると、とても間抜けな表情を見せてく
ださる。横では芳乃ちゃんは言わんこつちやないみたいな顔して
るし、ムラサメ様は「あれほど話を聞けと……」とかボヤいてるし、
菜子はなんか嫉妬してる顔……え？ 嫉妬？ なんで？ 今の何処に
ジエラつちやう要素あったの？ ホント可愛いよなお前。

「……まあ、なんだ将臣。その……約束つてそういう意味じゃなくて
な。俺一応人だからさ、叢雨丸で斬つても死にやしねーぜ？」

「あ……そ、そうか」

「つか、いつまでも死にたがりと思わんでくれ。死んだら菜子との約
束を破ることになるし、なにより菜子が愛せないだろ」

「シレつとそういうこと言うのやめてよう……恥ずかしいつてば」

菜子が照れ臭そうに目を伏せながら、そんな可愛らしいことを言
う。つついそんな彼女にクスツと来てしまつて、笑いが漏れてしま
う。

「こほん」

場が和んだのと同時に、芳乃ちゃんが咳払いを一つ。

「とにかく、将臣さんの考えているようなことはなく、馨さんの惚気と
菜子のデレデレはいつも通りということ。結局魔人を倒すことし
かない、ということですね」

「その通りだよ芳乃ちゃん。あの魔人を殺らなきゃ、穂織は滅びる。
絶叫する奈落の使徒の手によって」

芳乃ちゃんの一言に、京香も同調して魔人討伐に頷く。

しかし菜子は驚いた表情で――

「絶叫する、奈落の……」

何か心当たりがあるのか、あるいは犬神が反応したのか。とにかく
彼女らしからぬ声だった。こんな声を聞いたのは、中々……ちよつと
興奮する。いや、なんでだろうか。

「……菜子？ 犬神が何か言ったのか？」

「あつ、いえ。なんでもないと」

「そうか。まあ、かの神もかの神で色々あるじやろうしな」

犬神的にはこの件、どうなのだろうか？ 一応ここまで来ると協力してくれると嬉しいのだが、彼自身そこまで協力的ではないからなあ。

ま、協力する理由もあんまりないし。

しかしだ。

「さて……そろそろ学院行くか。このままだと遅刻ギリギリって、俺はいつも通りか」

……昨日あんなことあったのに、今日は普通に学院なのだ。

行かないとレナとの情報共有もできないし、行かねば。

え？ なんで俺には駒川からの一番に連絡が来たのかって？

……だってあいつ、俺のメルアド持つてるもん……駒川のメルアド持つてるのって、子供の中だと俺くらいしかないレベルだぞ。

まあ、そんなこんなで大急ぎで学院に向かう、朝から忙しい俺たちなのでしたとき。



——おい、あの娘と神刀の担い手だ——
急に。

色々と考えながら授業を受けていたら、某子の内面から犬神がそんなことを言った。

(いきなりどうしたんですか)

——あの一件で確信した。間違いなく魔人、そして伊奈神には……お前たちの始まり、その過去が関わっている——

(だからと言って有地さんとレナさんが出てくるのはかなり謎なのですが……)

——記憶を頼りに言葉をまとめたのだが、抜けが多くてかなわん。よって私の魂に刻まれている記憶を追体験させれば、完璧に伝えることができると至ったのだ——

(なるほど……う?)

記憶の追体験には外見が連想でき、性別が一致していないとダメである……という知識が茉莉子に与えられる。

何故将臣とレナなのかを考えるも、思い当たる節がほとんどない。将臣ならまだしも、何故にレナ? ……やはり合点がいかない。

まあいいかと思いを打ち切り、今朝レナには現状を報告し、二人は無事と伝えた時、心底からホツとしていた様子のレナは、中々に見れないものであったと思ひ返す。

考えてみれば茉莉子も実際、レナのことはあまり知らない。勝手に友人だと思っているが、それにしてお互いのことを知らなすぎる。

(……よろしくないですけど、いい機会と言えればいい機会ですかね)

芳乃に同性の友人が少ないことを茉莉子は気にしているし、これを機に二人が更に仲良くなってくればなあと考える。

(けど、馨くんが……最後に立ち塞がる敵って……なんだか、信じられない)

本人はそれくらいされるのは造作も無いと言っていたが、どうにも何か違和感がある。

——……その事に関してだが、あの復讐鬼が何か隠している可能性があるが——

そこでふと、犬神は京香のことを復讐鬼とばかり呼んでいることに気が付いた。復讐者でも魔人でも京香でもなく、あえて復讐鬼という表現を使い続けているのには、何の訳があるのか……

(何故、復讐鬼……鬼と?)

——あれは鬼だろう。あの男の言っていた、いずれこの地を滅ぼす絶叫する奈落の使徒ではない。あれは人にも魔人にもなれなんだ、鬼だ——

(あの男……ワタシの先祖が、魔人について言及を?)

——ああ。如何なる方法で知ったのかは知らんがな——

何故常陸の始まりは魔人について言及できたのか。犬神に腑に落ちないところがある。如何にその始まりは始まりと言えども、真正正銘ただの人間である筈なのに。

もしかすれば、などといくらでも推理できるが、それはそれ。彼は話を戻した。

——話を戻すぞ。復讐鬼は、担い手の記憶を見ただけで察した。それが不思議なのだ。考えてもみろ、顔も声も伊奈神馨……如何に憎い相手とて、言葉と戦法を見ただけでわかるものか？——

それを聞いて確かに、と思った。

茉莉が覚えている限り、即答していた。迷う様子もなく、知った瞬間に『やはり奴か』と。

それは微かな材料で確信できるほどの知り合いか、あるいはその特徴を知っているものだけに許されることだ。

——私が再びあの男と出会ったとして、言葉が同じでも顔も声も違っていれば一度は性格が似ているだけかと思うぞ。だが……あの女は憎悪の相手がどのような性格でどのような傾向なのかを深く、事細かに知っている。得物の名すらもだ——

(確かに、不自然ですね。封印していたとしても、憎い相手と話なんてすることはないでしょうし。だから何かを隠している可能性……と) 確かに怪しい。

今の今まで黙っていたのだ。極秘裏に始末するにしてみれば何か不自然さはあるし、馨すら知らないことを知っていた。更に言えば、馨が最後の敵となる可能性が浮き彫りになった時、動揺するわけでもなく悲観的になるなど言いかけていた。

……一体何を隠していて、何を知っているのだろうか、彼女は。

——まあ、お前は自分の男の側においておけ。流石に不安だろう——唐突にイチャつけと言われて、内心慌てつつも、まあ実際不安であるし、否定する理由もないかと茉莉は反応した。

(あ、あは……流石に見抜かれますよねえ)

——ふん、お前がわかりやすいのだ。だが当の本人が、ああも迷い無く受け入れているというのは、口を挟まざるを得なくてな……——
(ふふーん？ やっぱり優しいですねえ)

——やかましい。勝手に言ってる——

これがツンデレかと、本物とは中々にすごいのだなと、茉莉は場違

いだと思いながらも、犬神の可愛げある性格に苦笑していた。

——おやおや、馨の彼女サマじゃないか。なるほど、これは惚れ込むわけだ……——

……それを魔人は、近くで見ている。

とても、とても近くで。

——これならば、しばらくは黙っておこうか。向こうが勝手に深層に入るのを待っていれば舞台も整うものだ——

——そして、小さな愛が生んだ大きな呪いと対面するといい。それこそがお前たち朝武と常陸が、本当に罪を償うべき相手だ——

——だがまあ、馨はそんな罪だ罰だは気にしないだろうな。そうでなければ私が憧れん。きっと己の魔性に従って……そうするのだからさ——



帰り。

レナを連れて、俺はもう一度廉の元を訪れていた。

将臣は鍛錬があるので、このことで終わった後に芳乃ちゃんと共にまた顔を出すようだ。玄さんが行かない理由が無い筈だが……さて彼はどうしたのだろうか。昼間には間違いなく顔を出している筈だが。

だがそれにしたって。

「茉莉」

「はい」

「腕組まれると歩きづらいんだけど」

「馨くんはレナさんを結構な頻度で口説くので」

「あははっ。カオル、言われていますよ?」

「うぐぐ……」

茉莉がムスツとした表情で、まるで腕にしがみ付く猫のように腕に

引っ付いてきて、レナはそんな様子を見て笑っている。

いや、その……恥ずかしいんですけど。

「れ、レナあ……その、助けて?」

「ダメであります。そんなことをしてしまえばわたし、マコに酷い目に遭わされてしまいますでありますよ」

「えっ? そ、そんなことしないよな茉莉」

「馨くんは酷いこといっぱいしてもいいんだよ? 夜寝かせないとか」

「やめてよお……」

ニヤニヤと意地悪な顔をしながら上目遣いで見つめてくる茉莉。

——マズイ。

ただでさえベッドヤクザだなんだと言われてるんだ。茉莉と夜通しやり続けてしまった場合、間違いなく二人とも寝坊するどころか昼まで寝ている。

……で、また風呂入って……ってなることになる。そこでこの前みたく我慢できるかどうかはかなり……危険だ。誘われたら間違いなく襲う。だって茉莉、エロいんだもん……身体つきめっちゃエロいし、流し目がめっちゃエロいんだもん……

というかなんでこいつここにいるの? 魔人が何処にいるかもわからないのに。

「てかお前芳乃ちゃんといなくていいのかわよ」

「芳乃様から『馨さんとイチヤつきなさい。それで不安感とか色々解消してきなさい』という命を受けたので」

「職権濫用すぎる」

「ヨシノはオテンバですね」

「な? 前言ったように愉快な子だろ」

「はいっ、とつても愉快でありますよね」

「今度暇な時、また一緒に過ごしてみるといいさ。もつとわかる。たまには女子会、ガールズトークってのも悪くないだろう?」

「なるほど、そういうの楽しそうですね。ジョシカイ……わたし、ワクワクしてきました! となるとダンシカイもあるのですよね

？」

「まあ……あるにはあるけど……キラキラするようなものでもないぞ」

野郎の集まりなど、おおよそロクなものではない。目をキラキラとさせているレナには申し訳ないが、女子会にしろ男子会にしろ、同性特有のアレコレをグダリ合うものだ。

と、そこでも自分関係ありませんみたいな顔をしているネコなカノジヨに声をかける。

「お前も行けよ。そろそろ距離感取っ払って来い」

「へ？ ワタシ？ ワタシはほら、別に」

「お前だって俺と同じでヘタレなんだからさ、ちゃんとここらで一区切りつけるなりなんなりしろって。それにほら、レナだって色々聞きたいことあるんじゃないの？」

「はい。モチはロンですよ。マコにはそう、色々とかオルとのお付き合いとか、気になるでありますからね」

「お、お手柔らかにお願いします……あはく……」

意外と古いな、モチのロンって。

たははと笑っている茉莉と、微笑むレナを見るとこう……百合の花が咲いて見える。眼福というか何というか、これが乙女の花園か。

そんな風にイチヤつく茉莉とレナを後方で微笑ましく見守りながら、診療所に到着。

「ん？ また来たのかい、馨」

ヒヨイと顔を出した駒川が意外そうな顔をして俺を見る。二人には「ああ、お見舞いかい？ 廉太郎君も小春ちゃんも暇してたから、存分に話し相手になってくれ」とか言ってたクセに。てか茉莉だって二度目だろ。

「あんたも知つての通り、寂しがりなんですね」

「ふふっ、だいぶ可愛くなったもんだね」

「うっせ。それで、経過は？」

「二人は問題無く、だね。暇そうだし同じ部屋にしておいた。今はいつも通りにじゃれあってるけど、廉太郎君なんて腹に穴空いてた筈な

のにもう塞がってる……というか、傷跡も無くて普通に歩けてる。小春ちゃんも驚いてたよ。彼女、歩く度に身体が痛んで仕方ないっていうのに」

「不思議なもんだな、いやマジで」

「医者泣かせだよ、魔人ってのは」

俺は不思議なまでの再生能力に加えてあり得ないほどの健康体。魔人は廉の腹に穴を開けておきながら翌日には完全に塞がっている不思議な傷。小春ちゃんもまた魔人に肉体を酷使されているのにも関わらず酷い筋肉痛だけで済んでいる。

果たして京香は生前どうだったのか。不思議なものである。

「なんだ馨もいんのか」

そして顔を出してみればこの男あまりにも元氣すぎである。横にいる小春ちゃんすら「このダメ兄……！」と呟くレベルで元氣だ。

茉莉とレナは啞然としている。

「テメエ二度も見舞いに来てやったこの俺になんてことを。腹に風穴開けんぞ」

「どーせなら女の子三人の方が良かった」

「お前の見舞いに来てくれる女子なんているかア？ 女取っ替え引っ替えした悪名高き廉太郎だぞ？」

「いねエだろなア。悪名高きこの俺の見舞いに来る奴なんて、野郎か家族かレナさんや常陸さんみたいにその辺気にしてないタイプかだし」

……終わりがい。

せめて否定しろよ。真顔で言うな。

横で微妙そうな顔をしている小春ちゃんがため息吐いている。

「廉兄と馨さんのやり取りって結構反応に困るよ……。レナ先輩も常陸先輩もわざわざありがとうございます。こんなダメ兄のお見舞いに来てくれて」

「常陸さんもレナさんもありがとうな。小春の奴暇だ一人だ寂しいだで疲れてたから、来てくれて嬉しいよ」

しかしここでこの兄妹、揃ってツンデレなものだからお互いに視線

を合わせた後。

「なにさ！ 廉兄だって暇だ一人だ退屈だで死んだ魚みたいな顔してたじゃん！」

「なんだとお!? お前がそれ言うのか！ 将臣が学院行った後に寂しいだなんだずつと言ってたろ！」

……俺たちを無視してじゃれ合いを始めた。ギャーギャー吠えられると物凄く困るというか、小春ちゃんもいつもの調子が戻ってきたようだ。よかったよかった……

(いやなんでほっこりしてるのっ)

(止めろと!?)

(流石に診療所でありますからねえ)

茉莉子のツッコミに反応していると——レナは大変マイペースだったが……——二人はヒートアップして聞いてもないのにお互いの醜……態……かこりや？ いや違うな、うん。とにかくあれこれ言い始めた。

「なんで恥ずかしいこと言うのかなあ!? 廉兄だってお祖父ちゃんとお父さんとお母さん来た時に思わず涙ぐんでたじゃん！」

「俺腹に穴空いてたんだぞ!! 涙ぐむに決まってるだろうが！ つかお前だつてえんえん泣いてたろ！」

「うっ……廉兄のバカ！」

「あつそれ卑怯だろ！」

「二人とも。ここは診療所でありますから、お静かにですよ」

「あつ」

「まあ二人とも元気そうで何よりです。わたし、結構心配していたものですか」

「そ、そうですね。ワタシも何せ直接的に関わっているものですし、今朝見ただけでは不安でした。その元気な姿を有地さんに是非見せて差し上げて下さい。きつと喜びますよ」

苦笑と共に挟まれたレナのフォローを起点に、茉莉子も話の流れを戻していく。俺はと言えばまあ一眼見りやそれでよかったかなってすら思ってるし、特に何か言うことはない。

とりあえず、この二人は問題無さそうだ。
今日の眠りは、不安で浅くならないだろうな。

馬鹿

——俺を鍛えてくれ。

……急な話だった。

あまりにも急で俺は思わずこんなことを言ってしまった。

——むしろ俺が鍛えて欲しいんだが。

というのが昨日の、俺と将臣のやり取りだった。急過ぎる。

原因は恐らく魔人であろう。だが、俺が鍛えると言つても……いや別に出来るっちゃ出来るんだが……？

まあ基礎は入りきっているし、要は戦い方の話であろうと予想を付け、一応二つ返事で了承したのだ。

そんなわけでらしくなく早朝に起きて学院に向かう。

プラプラと猫背で歩いていると、見えてきたのは当然ながら将臣とムラサメ様。そして玄さん。

……てつきり葉子辺りも呼んでいるのかと思つたのだが、用があるのは俺だけらしい。

「鍛えろって具体的には？」

とりあえず鍛えろとしか言われてないので、玄さんに尋ねる。

「どうも将臣は実戦での勝ち方を考えた打ち合いをしたらしくくな。その辺りだ」

「まあた難しいな……てかあなたでも十二分に教えられるのでは？」

「ワシは向いとらん。お前も知つていよう」

「まあ、そうですね」

実際、玄さんが剣術を仕込むとなると長くなる。魔人は殺せずとも蹴れる以上、早急に対応が必要だ。ならば俺に白羽の矢が立ったのは必然とも言えよう。

と、なれば……

「ムラサメ様、あんたは将臣と一緒に色々考えてくれ」

「？ 考えるとはなんじや急に」

「そりや決まつてるだろ」

そしてきつぱりわかつてなき気な二人に向かって、俺はふつと笑う

と得意気に言い放った。

「殺す相手なりのの——殺し方って奴だよ」

瞬間、三人からの視線が冷めたものになる。具体的にやつまらないことを気取った風に言われた時の芥子みたいな感じ。

いや確かに思ったよ？ カッコつけ過ぎだって。でも俺だって年頃だよ、カッコつけたいと思う時くらいあるもん。それに加えて実際、殺す相手なりの殺し方を探らなきゃいかんのだし。

「ま、まあそのなんだ。とりあえず打ち合うぞ。戦いと殺しつてももの違いというか、小細工絡め手なんでもありの感覚をまずは憶えなきゃならんし」

「おう」

「というわけでお二人とも、色々見て気付いたことをよろしくお願いします」

「吾輩が力になれるかはわからぬが、わかった」

「うむ」

お互いに構えて向かい合う。

芯入りの竹刀だから……手本を見せるくらいはできるか。

「——始めっ」

玄さんの号令に合わせて、先手必勝と言わんばかりに将臣が突っ込んでくる。下に竹刀を向けているのなら、振り逆袈裟か横薙ぎか。

二つに一つ。よってここは何をするべきか。

答えは単純——

「——ふっ」

刀を持った右腕で、肘打ちをすること。ガスツと、将臣の右肩に肘が刺さる。体勢が崩れ、向こうの右腕が動く前に左腕を動かし——短刀を取り出す。

「なっ……!?!」

奴が驚愕するのと同時に、

「そこまで。将臣の負けだな」

玄さんが勝敗を告げた。

ムラサメ様は「なるほど」、なんて呟いているが本当にわかっている

のだろうか。

将臣に視線を向けると、とても抗議したような視線を向けてくる。ので、ドヤ顔をしながら。

「理解したか？　これが、殺す相手なりの殺し方ってことだ」

「これのどこが俺の殺し方なんだよ。ただの初見殺しじゃねえか」

「はははっ、そう怒るなって。確かに短刀を仕込んでるとは言っていないが、立派にお前対策だよ」

不服そうな将臣から短刀を外しつつ、適当な段差に腰掛けて解説を始める。

「俺はお前より才覚は劣る。剣の腕だけで見たら、お前の方が軍配が上がる。ならどうするのか。答えは簡単、剣戟に付き合わない」

「納得いったけど、それなら素直に退いたらいいんじゃないのか？」

「ダメだ。踏み込みの方が早い。迎撃で一撃必殺を狙うのが一番いい」

「……まあ要は相手に対応できない攻撃を如何にして繰り出すかってことか」

「正解。ま、こんな風に剣戟拒否でもいいし、剣戟に付き合う中で疲弊させて生じた隙を突いて殺ったっていいわけだ。更に言えば、別に勝つ必要は無い。逃げたっていいし、殺しに繋いだっていい」

何も一つの土俵に上がる必要は無い。要は生き残ればいいのだ。目的を定めてこれを達成するには如何にして動くか、ということに違いがある。勝ち負けなぞ二の次、必要なのは目的を達成することだ。

「そうじゃな。技の良し悪しではない、如何にその場の最適解を判断するかということじゃ」

と、ムラサメ様が将臣に言っているが、まったくもってその通り。自分に出来ること、出来ないことを把握しておけばあらかたなんとかなる。もしそうならないのならば、その時はその時だ。

「けど俺の下地は剣道だぞ？　馨みたいに手数があるわけでもないし、結局は剣戟に行くしかないと思うんだけど」

しかし、将臣の言葉はもつともだ。

剣戟せざるを得ない武器であるし、剣戟に特化しているからこそ強

い。ならばどうやって択を増やすか。

そこで出番となるのが、小細工だ。

段差から降りて、竹刀を構えて将臣に声をかける。

「よし。じゃあ将臣、上段唐竹割りを打ってみろ。それを俺が防ぐ。そして防がれた時に、お前は どうするか。まずはそれからだ」

よくわからなさそうな表情をした将臣だが、急に真剣な顔をする
と、遠慮無く竹刀を振り下ろしてきた。それを難無く竹刀で弾き――
お互いに動きを止めた。

「ここでまず二択ある。腕が上に行ってるからな」

「二択？」

「一つは玄さんにやられた初見殺し。弾かれても身体を揺らすことな
くもう一撃振り下ろす」

そう言った途端、ピンと来てなさそうな将臣の表情があまりにも愉
快な物へと変わった。横のムラサメ様は呆れた顔で話題が上がった
剣鬼を見ている。

「祖父ちゃん……ホントに人間？」

「バカを言うな将臣。あんなもの実戦でそうそうできるものではな
い。偶然力を上手く受け流せたから、少し馨を脅かしてやろうと思っ
ただけだ」

「初太刀を防いだら初太刀と全く同じ軌道で間髪入れずに二撃目が飛
んできた俺の身にもなってくださいよ……」

受けた側は冗談では無い。

完全に防ぎ、生じた隙を逃さず抹殺する気で短刀を振るつたとい
うのに、視界には一切姿勢をズラす事無くもう一撃振り下ろさんとする
玄さんの姿。

啞然としたね、ホント……

その後？ もちろん後退は間に合わなかったよ。力を入れて離す
より振り下ろしの方が早いのは必然だ。

……昔、菜子と模擬戦をした時は、クナイと短刀なので必然的に中
間距離からの踏み込みが多くなる形だった。体術を交えた戦闘にな
り……まあ、その時に初めてあいつの胸をうっかり触っちゃったなあ

……あの風呂場で触ったのはノーカンでもあるが、実は二度目だ。

ちなみにだが、茱子がクナイを基本的に使うようになったのは俺の所為だとこの前のピロートークで判明した。なんでも昔見た短刀捌きがかっこよくて真似してたら、おじさんに本格的に教えてもらったとか。あいつ刀もぶん回せるのに、わざわざクナイにこだわるのは利便性というよりも、俺への感情が結構を占めているらしい。

「まあワシのことは置いておけ。次に移ったらどうだ」

「おっと。ごもつともで。もう一つはすぐに体勢を変えて斬り返すこと。防がれたら防がれたなりに勢いを利用してって具合にな」

「要は更にもう一撃か、それとも縦がダメなら横にみたいなものか」

「そうそう。とはいえ前者なんてとんでもない技だ。さて、お前ならどうする？ この二択だったら」

「後者だな。確実に打てるもの、確実に俺が出来る方法で堅実に行きたい」

なるほど。実に堅実な選択だ。悪くない。だが堅実過ぎれば対処を簡単なものとしてしまう。

かなり綺麗なフォームで切り返してきたので、これまた丁寧に防ぎ、構えを解いて向き合う。

「さて将臣。こんな具合なんで、俺が鍛えるというよりも玄さんと実戦向きのトレーニングに変えた方が効果的だろう。まずはな」

「で、ある程度入ったらお前から小細工なりなんなり教えてもらおうと」
「いや、平行して行こう。多少の体術と短刀捌き、それから投擲くらいは仕込んでやるさ。で、それを玄さん相手に使ってみてあれこれ考えてみる。やれることは沢山あるんでな」

「それでなんとかなるもんかな」

こいつはすっかり忘れていたようだな。実戦で振るう得物が、二人三脚であるということ。つまるところは、だ。

「そこでだ。将臣、ムラサメ様。神力を斬撃から放ってみないか？」

俺が呪力をベースにあれこれできるのだ。彼らだってできて当然だろう。

「のう、馨。吾輩たまにお主のことがわからなくなるぞ」

「いや待ってムラサメちゃん。いけるかもしれない」

「ご主人まで乱心したか」

なんか目エキラキラさせながら、「やってみようぜムラサメちゃん！」みたいな雰囲気醸し出しつつ、きつと内心ではバトル漫画の主人公のようにカツコよく斬撃波で締めるシーンでも思い描いているのだろうか？ ま、男として憧れるよな、ああいうの。

「できるじゃろうが、そう無尽蔵にあるわけでもない。修行というにはいかなだろう。それより刀身に神力を纏わせての剣閃で、射程と威力を伸ばした方が堅実かつ無駄も無くて良いじゃろう」

が、しかし。

ムラサメ様はかなりバツサリと、呆れながら切り捨てた。確かに百年程の蓄積はあるうが、バシバシ使っていたら如何に神力と言えども空っぽになりかねんのだろう。

だが纏い斬りはいい案だ。今度俺も採用してみるか。カツコよさそうだし。

「……そ——つ、か……」

「そこまで凹むか、ご主人よ」

そして見事に燃え尽きたような将臣。こんなに凹んだこいつの顔を見るのは初めてだ。そんなに飛ぶ斬撃撃てなくて悲しいか。

ムラサメ様の発言、裏を返せば実戦なら飛ばせるつちや飛ばせるつてことなのに。いやでもわかるけどな。憧れるけどな。俺もやったよ、やれたけど。

横目で確認すると、ムラサメ様の言葉に将臣がグアーツと反応している。

「だつてさー！ カツコいいだろ！ 便利だろ！ 飛ぶ斬撃つて！ 斬撃波は男の子の憧れなんだよ！ なあ祖父ちゃん！」

「は？ あ、いや、まあ落ち着け将臣。確かに便利ではあるが、ムラサメ様にもムラサメ様の事情があるだろう。それにお前は、今は小手先の技より扱の話をしているのだし、それは置いておけ。………まあ、カツコいいし練習したいのはわかるが」

「おい玄十郎!? 吾輩の味方ではないのか！」

「玄さーん。ムラサメ様が裏切り者ってさー」

「違います！ ただその……男子たるものカツコいいモノには憧憬を抱くのは必然なのです！ だから決して裏切りなどでは……」

「馨！ お主はどうなのだ！」

「ん？ カツコいいのは好きだよ？」

なんか急に振られたけど、誤魔化しても何も面白みがない。ここは一つ、本音を言うことにした。

別に本音を言ったところで俺に不利益は――

「ぐぐぐ……つ、芳乃と茉莉に言いつけてやるからな！ お主らが吾輩を泣かせたと！」

「やめてよムラサメちゃん!? 芳乃に怒られるのだけはダメだ！」

「あつ待ってそれ卑怯ですよ!! 茉莉だけは堪忍して下さい！」

……朝からみんな元気だなあ。

――オマエもじゃないか、兄弟――

あ、虚絶。

何しに来たの？

――クククツ、オレが用も無く会いに来ちゃダメかよ？――

可愛くない。

――ひどいな、馨――

それだけ言うとな奴は引つ込んだ。

何しに来たんだとも思うが、しかし……なーんか、違和感あったよ
うな。気のせいかな？

それからしばらくは将臣とわちやわちややってから、家に戻って飯食って学院へ向かう。

「はい、馨くん。今日のお弁当です」

「ん、ありがとな。茉莉」

教室で弁当を茉莉から受け取る。

うん、実に楽しみだ。

そんな風にホクホクしていると、横からヒョイツと顔を出した芳乃
ちゃんが不思議そうな顔をして俺に言った。

「あれ、馨さんってお弁当自分で作るとかこの前言ってたような」

「ん？ ああ昨日ね、お前の飯が食いたいって言ったんだ」
「ほーん……？」

あつ、このなんとも言えない顔、変なこと考えてるな。
その予想通りに――

「もういつそ住み込みでいいんじゃないかしら」

「それ見たことか！ 君は相変わらず変なところですよ！ すごい子だよね！」

「菜子はどう思う？」

「ワタシそんなことされたら明日からどうやって生活すればいいのかわからないですよ。あは」

「昨日までの生活に戻ればいいんじゃないかしら」

「馨くんみたいな返しはやめて下さい、お願い致します」

「ちえ」

ちえじゃないよちえじゃ。

というかなんで彼女こんなに荒ぶってるんだ。お前の嫁だろなんとかしろ将臣イ。

と、視線を投げるが……

「……ムラサメちゃんと芳乃には不評……飛ぶ斬撃。安晴さんと祖父ちゃんには合意を得れたのに……馨もできるのに……」

朝方の件を未だに引きずってた。

……そんなに否定されて悲しむなよ。たかが相棒と彼女に理解されなかったただけじゃないか。理想を目指して何が悪い。男の子なら憧れて当然だろ。

「あー……将臣？」

「あ、馨」

「……そのだな。芳乃ちゃんが拗ねた顔してるぞ」

「将臣さんってば私より飛ぶ斬撃に気を引かれてるの、男の子って感じですけど複雑です」

「……ごめん」

えっ!?

そっちな?!?

困惑する俺を置いてけぼりに夫婦漫才が繰り広げられる中、チヨイと肘で突いて何があったのかを知りたげな茉莉子。

というわけで事情を説明すると微妙そうな顔をされた。

「そんな三角関係の少女漫画みたいなことになってるなんて」

「少年漫画みたいなことをした男の子らしい健全な悩みと言ってやれよ」

「いや、なんかもうワタシには何が何やら」

何が何やらってまあ単なる修行の筈なんだが。

しかし、もうすぐ授業も始まる。

……不思議なもんだ。

茉莉子と話したら、少しでも遠くに行くことが嫌になる。それほどまでに離れたくない、彼女を感じていたい。

……誰も見てないし、どうせなら――

「茉莉子」

「なんです――」

彼女を呼び止めて、ほんの少しの間だけ、唇を重ねる。

一瞬だけ見えたやけに驚いた顔は、なんだかおかしくって。一秒にも満たない時間だったけど、永遠のような……

離れると、顔を真っ赤にしてあわあわとしている茉莉子。

だからだろうか？ 前に向こうからこんなことをされたなと思いついて――

「……^{好き}隙だらけだよ。茉莉子」

つい、そんなことを言ってから、自分の席に戻る。

「……馨くんの意地悪」

後ろの方からそんな可愛い文句が聞こえたが、ワザと聞こえないフリをしてみるのだった。

「朝の、卑怯だよ」

「いつぞやお前だってやったじゃん」

昼間。

学院の裏に移動して、二人きりで食べていると、朝のキスの件を掘り返された。

不満げな顔している茉莉が大変可愛らしい。

「誰も見てないからって、あんな風にされたら……ワタシだって、欲しくなっちゃう」

そんな風に言われたら、どうしていいかわからなくなる。どういう意味で欲しいのか、という点においてだが。

「今日お休みにしてもらうんだから」

「だいぶ積極的だよな。誘い受けだけど」

「そ、そういう意味じゃないよ!?!」

「わかってるって」

流石にそこまで盛っちゃいない。

……むしろ毎夜毎夜オナ陸さんしてそうな茉莉の方が我慢できるのだろうか。いや本人がえっちだよって言ってた以上はとやかく言うつもりは無いのだが……求められたら応えるけどさ。

あ、そうだ。茉莉に渡そうと思っていたものがあつたんだ。

一旦弁当を食べる手を止めて、ポケットの中から贈り物を取り出す。

「ほら、やる」

「……鍵?」

怪訝そうに受け取った茉莉がマジマジと俺の渡した鍵を見ている。何の鍵か想像も付かないのか、まったくピンと来てないようだ。

ので、伝えてあげよう。

「合鍵。ウチの」

「合鍵かあ。なるほど……へ? 合鍵って……えっ、合鍵?」

何言ってるんだこいつと。驚愕した表情を向けられてしまうが、仕方ない。

そもそも合鍵を渡すというのは、昨日の夜中電話をかけてきたお袋に相談して決めたのだ。ちなみにその時初めて茉莉と付き合っていることを報告した。

そしたら一言。

「茉莉ちゃんに合鍵渡したら？　今あなたの合鍵使っていないでしょ」と。

それでいいのかお袋よ。

確かに使っていないし、今はオリジナル使ってるけどさ。そんな簡単に渡せって言うていいものか。

……まあ親に認められているのだ、いいやと思って持ってきた。

で、いざ渡してみれば信じられないものを見るような目を向けられる。……ちよつとシヨック。

「あー、なんだ、その、あれだ。来なくなったら勝手に入っていいから。好きにしてくれ」

「そ、それってその……同居しようって、こと……？」

——灰かに赤く染まった頬と、行為の最中に見せた、潤んだ瞳をちよつとだけ向けてくる茉莉。

そんなことを言われて、俺は——

「は？」

真剣に理解できなかった。

真顔で、そして即答。

さつきまで可愛らしかった茉莉の表情が、啞然としたものになるのも必然だった。

……こいつは何を言ってるんだ？

呆れた顔の俺を見て、茉莉はさっぱりわからなさそうに問う。

「えっ、違うの？　だってほら、青い緋衣草とかのことから考えて、遠回しなそういうことかって思ったんだけど……」

「いや、ただ普通に合鍵を渡したかっただけだけど……」

茉莉はそういうことだと思っていて、俺はまったくそういう意図はなかった。

恋人になつても、まだそんなところですれ違い続ける。小さなすれ違いだからから、あるいはお互いに何とも言えないすれ違いだったからか。

ジツと見つめ合って——

「あはっ」

「ククッ」

「あはははははっ!」

「ははははっ!」

どちらともなく、お互いに笑ってしまった。なんてバカらしいんだろう。合鍵一つでこんな漫才ができるなんて。

ひとしきり笑った後、普段の調子に戻った茉莉子が、笑顔を見せる。

「うん。じゃあ、遠慮なく家に行くね」

「ああ。好き勝手使ってる。文句は言わないから」

それから後はまあ、あーんしたりなんざりで楽しく過ごした。

……けど、すごいな。茉莉と過ごす時間は。彼女の表情を見るたびに、彼女の言葉を聞きたびに、彼女の側にいるだけで、心中の愛おしさが溢れ出して止まらない。

ああ茉莉、茉莉……俺の茉莉、愛しい茉莉……けれど直接愛してるとは中々言えない自分が憎いというかなんというか。

「馨くん」

「ん?」

「なんでもない」

「そっか」

食べ終わってから何をするわけでもない。ただ横で寄り添う茉莉の頭を撫でながら過ごす時間が、たまらなく心地良い。

彼女の温もりを感じる生活でありたいとすら思う。

けれども彼女の生活がある。俺ばかりが彼女を独占する……というのも、少し気が引ける。でも、ずっと隣にいて欲しいと思うのは彼女の恋人としての独占欲だろうか?

「ね、馨くん」

「なんだ?」

「放課後、馬庭さんのところで甘いもの食べない? ワタシ、アナタと行きたいなって」

「遅れるけど、いい?」

「あれ、何かあるの?」

意外そうな顔。

まあそりやそうだろう。俺の用事は基本的に存在しない。だからこれまで放課後の空き時間はほとんど茉莉子の為に使うことができた。そんな俺が遅れると言えば意外に思われるのも当然のこと。

「お見舞い？」

「いや、あいつらは今日家に戻ってくるらしいから、顔を見せるのは明日でいいだろうって。ただ放課後は——」

そう、何も朝だけではない。

……というか、朝だけでなんとかなるほど、訓練というものは甘くはないのだ。

そしてそれを聞いた茉莉子が、面白くなさそうな表情を見せてから抱き付いてきたのは、彼女の妬心が可愛い形で現れた……と見て間違いないだろう。

……茉莉子は可愛いなあ。



——放課後は将臣に付き合わんとならんのさ。

……男って。

いや、なんか悔しい。なるほど、芳乃様も微妙な顔するわけだ——と、彼女は理解した。

「面白くなさそうね、茉莉」

「だって仕方ないじゃないですかあ、芳乃様。合鍵くれて、キスマでされて、今日は一緒にいいって思わせるようなことしてくれたのに、オチがこれって……」

「そんなに将臣さんと馨さんが目の前でイチヤつくのが嫌？」

「別に嫌というわけでは。ただなんだか馨くんを取られたみたいな感じ。というかその言い方やめてください」

おはようからおやすみまで一緒にいられる二人が羨ましいと思いつつながら、目の前でじゃれ合いという名の実践的トレーニングを行う男二人を見る。

放課後の公民館、竹刀片手にギャーギャー言い争いながらじゃれ合っている将臣と馨——茉莉子は大きいため息を吐いた。

「ほら見る！ お前に時間割いてる所為で茉莉がため息吐いたじゃねえか！」

「見てねえのになんでわかるんだ気持ち悪いぞ!? てか言い出しっぺはお前だろ！ なんて朝より本気なんだよ！」

「お前を早くのしたら、その分だけ茉莉と長くいられるからに決まってるだろうが！ 墜ちろよオツ！」

「クツソ腹立つ！ 意地でも落ちてやんねえ！」

……聞こえてきた言葉はバカ満載だ。芳乃も茉莉も、呆れるしかできない。結局のところ、あの二人は野郎と打ち合うよりも彼女とイチャコラしたいのが本音であり、けれどやると言った以上やらないのもどうかと思つて、こうして放課後の公民館でバカらしい言い争いをしながらトレーニングに励んでいる。

なんと間抜けなことか。

「男つてバカじゃのう……なあ、玄じゆ……あやつめ、逃げおったか」「玄十郎さんならさつき「付き合いきれん……あとで戻ってまいりませう」って私に言つて廉太郎さんと小春ちゃんのところに向かいましたよ」

「どーせそんなことじやろうと思つたわ」

ムラサメの呆れ返つた言葉には全面的に同意する茉莉と芳乃だが、渦中の男たちと言えは。

「なんで防いだのに突きが飛んでくんだよ馨！ 早い横薙ぎ二連から繋ぐものじゃねえだろ!? 斬撃から背撃に繋いだりとか反則だろソレ！」

「んなもん身体の芯を揺らさないだけだつーの！ 散々言ってるだろうが！ 手足を有効に活用しろつて！ そういう時は掌底なり肘鉄なり打ち込むんだよ！ 動きの起こりは見えんだろ！」

「届かねえ！」

「置け！」

「無茶言うな！」

「近接戦なんだからわかりやすいだろが！」

(あ、将臣さんが吹っ飛ばされた)

(うつわあ、馨くん結構えげつないのを加減して打ってる)

横薙ぎの斬撃から、勢いを利用して蹴りに繋ぐ——当たりどころが悪ければ骨をやられるものを、極限まで加減して放つ。もちろん対処はできず飛ばされるし、追い討ちと言わんばかりに飛び込み斬り。それをなんとか避けて、またもギャーギャー言い争いながら徹底して実戦を染み込ませる作業に戻る。

無茶な注文に対してできるわけないだろという当たり前の反論しながら防戦一方。勝負というより最早八つ当たりでは？ 茉子は訝しんだ。

茉子もまた、馨とそれなりに手合わせしたことがあるが、彼との戦いにおいては『何をしでかすかわからない』という最強の敵が存在する。投げたクナイをキャッチアンドリリースされた時など変な悲鳴が出たし、鎖鎌を使ってみたら鎖部分を引っ掴んでくるし、手裏剣は斬り払うわ、鉤縄と鉄線を利用した三次元攻撃に対しては身体力一つで応戦するなど、かなりやりたい放題やってくる。

魔人の力を振るってくるのは構わないのだが、ゴリ押しを通り越した何かはやめて欲しい……茉子のささやかな願いである。

「冷静さを失うなご主人。如何な猛攻と言えども、必ず付け入る隙がある。流れを掴むのじゃ」

「わかってるけど！ そうさせてくれないっ！」

「それを奪い取るのがお前のやることだろが！ 寝言言うな！」

「マジでお前廉太郎に有る事無い事吹き込んでやるからな！」

「はアツ!? ふっぎけんな！ あのヤローのからかいはクソウゼエんだよー！」

「知るかバカ！」

「んだとバカ！」

「——隙あり！」

「のわあっ!？」

「元気ね」

「元気ですね」

「元気じゃのう」

アホアホ男組は多分、どちらかが倒れない限りこのままであろう。
「テメツ、汚ねえぞ将臣イ！」

「なんでも使えつて言ったのは馨だろがッ！」
もう放っておこう……彼女たちはそう決めた。

ところが、ここでムラサメに電流走る。

……あの二人、どこまで進展したものか？ なにやら今日のやり取りから考えて、より深まった気がしてならない。
のであれば。

「茉莉よ」

「はい、なんでしよう？」

「お主、馨にホクロの位置を知られたか？」

「ホクロ？ 馨くんには？」

さっぱりわからない。

急にニヤニヤした顔で、ホクロの位置を知られたかどうか、と聞かれても意図を図りかねる。ただホクロに纏わる話題と言えば……と茉莉は思考を回転させる。

（ホクロ、ホクロ……あのニヤニヤした顔と浮ついた声から判断して、ムラサメ様は多分くだらないことを聞いてますね。ワタシと馨くんの話題で、ホクロの位置だから——）

と、そこまで考えてはたと気がつく。

ホクロの位置を知るというのは、ホクロの位置を知られるというのは、絶対的に裸を見なければならぬ。……顔や手足を除けば、だが。つまりムラサメの問いとは、暗に「茉莉、馨とまぐわったじゃろ」ということを指している——

カアツと頬が熱くなる。この少女はいきなり何を聞いてきてるんだとか色々とあれこれ湧き上がるが。

「なっ……なんてことを聞くんですかムラサメ様あ!? そそっ、そんな破廉恥な！」

あたふたと慌てながら思い切り抗議する。

横からそのやり取りを見ている芳乃は、ホクロの件がわかってないのか「ホクロ……ホクロがなんで破廉恥？」と呟いているのだが、今

の茉子は気付かない。

ただムラサメとしては、破廉恥など言われても主の横で夜な夜な才ナ忍者な茉子の方が破廉恥なわけであって。

「破廉恥なのはお主じゃろ!? 毎夜毎夜慰めおってからに！ 芳乃に泣き付かれた吾輩の身にもなってみろ！」

「へっ!? き、気付かれていたんですか芳乃様!？」

「……うん？ 気付いてたって、何が？ 茉子、何か私に隠してたの？」

ムラサメからの一撃を、うっかり芳乃へとキラーパスする茉子。

まさか、夜中の自慰がバレていたのかと焦りのあまり自爆しながら渡されたパスを、ホクロについて考えるあまりボンヤリと受け取って、芳乃は言葉を咀嚼し始める。

（気付いていた？ 私が……茉子が隠すような……いや待って。破廉恥という言葉から考えていけば、もしかして——!?)

訂正。

咀嚼どころではなく、綺麗に飲み込んで消化したレベルで理解していた。

そして……自爆した。

「まままままままさかそんな！ 気付いてないわよ!? 私ぐつつり熟睡してたもの！ だから横から聞こえてきた発情期の猫みたいな鳴き声とか切なげに馨さんの名前を呼ぶ声なんて聞いてないからね茉子!？」

「バツリバリ起きてるじゃないですかあ!? 芳乃様の嘘つきいつ!」

嘘が下手で、中々言えないのは美德だけれど、せめてここは見えて見ぬフリか忘れていてくださいよう——いくら我慢できずに致している自分が悪いとは言えども、流星に全部知ってますというのを白状されるのは辛い。泣きそうだ。

二人して顔を真っ赤にしながらお互いを見る。横から見ているムラサメは楽しげだが、アホアホ男二人はそんなことはまったく知らず、相も変わらずギャーギャー騒ぎ立てながら鍛錬を続けている。

「遅すぎるんだよ！ 突くにしろ斬るにしろもつと疾く！ 鋭く！」

「無茶言うな！」

「日頃から叢雨丸を使っておけ！ 素振り藁斬り型の研鑽を積み重ねろ！ 一矢でダメなら二矢三矢、討ち滅ぼすは敵手の未来だ！」

「簡単に言ってくれるなア!!」

……実に元気そうである。

一方、芳乃と茉莉は知られたくない真実の件でお互いに赤面して目を伏せるしかできていない。沈黙の痛みが長く続く中で、やつこのことで芳乃の口を開いた。

「あの、茉莉……?」

「はっ、はい……」

「栗を剥くって、何?」

「芳乃様にはまだ早いです」

(初日からですか!? 馨くんがワタシが致していたことを知った時に微妙そうな顔をしたのってもしかして——うわああああ!? 教えてよお!)

芳乃は環境もあつてか、性知識にかなり疎い。一方茉莉はいらん事まで知っている。そんなのだから馨からエロ忍者とか言われるのだが、彼女がそれに気付くのは果たして。

ムスツと不満気な顔をしている芳乃の夢を壊さない程度に、どうやって伝えたいものか。茉莉は、初体験の時とほぼ同じくらいにガチガチに緊張していた。

主にバレた件で。

「振った吾輩が言うのもあれじゃが、一応声は潜めてな」

「本当にどうかと思えますよムラサメ様……なんでワタシ、こんな辱めを受けなきゃいけないんですかあ」

「すまぬ。でもやめられぬのだ。楽しくて」

ロクデナシめと、初めて茉莉はムラサメへの悪態を内心でついた。しかし意を決して全てを飲み込み、大人しく芳乃と普通の会話をしようとした途端——

「……それで茉莉、馨さんと……え、えっ……いや、えっ……す、スることにしたの?」

「へ? ……あつ……」

向こうから仕掛けてきた。

……ここで嘘を言っても仕方ないし、もう諦めてしまおう。色々と疲れ果てた茉莉子は、後で絶対に馨に癒してもらおうと考えながら、

「……シ、シちやいました……えっち……あは」

小さく、それを認めた。

言ってしまうと案外気楽なものだが、しかし、恥ずかしいものは恥ずかしい。頬が熱いし視線は上げられない。というかなんでワタシは芳乃様からこんな辱めを受けなきゃいけないのか——真面目に馨に泣き付かないとやってられない。

ただ一方、芳乃は興味津々であった。なにせいつか自分たちが致すであろう行為を先にやった先達なのだ。

「どどどど、どつ、どうだったの!?!」

そりゃあ赤面しつつも、どもりつつも尋ねてしまうわけで。

「どどどどどどどど、どうって言われましても!?!」

深掘りされることは一切想定しなかった茉莉子は言葉を濁す。誰だって自分の性体験を赤裸々に語りたい筈もない。

「私その辺り全然知らないけど! でもなんだか痛いとか聞いたことはあるわ!」

「確かに痛かったですけど!?! でもそれ以上に、それ……以上に……うう……っ」

興味津々の目。

好奇の熱がすっかり宿っているそれ。そんな目を向けられては……従者としては……そして何より愛しい人に抱かれた一人の女としては……目の前の人に素直に伝えたっていいかなあとか思ってしまうわけで。

「幸せ……でした……」

……茉莉子は遂に折れた。

「そ、そうなんだ」

「……はい」

「……どうやって持ち込んだ?」

「こ、恋人らしいことをもつとしたいって言ったら……向こうから、誘ってくれました……」

「ふむふむ。それでどんな風に始まったの？」

「キス、からです。そのえつと、舌を入れる方ので……うう、ここで話す話題じゃないですから、そのう……またいつかでお願いします。せめて二人きりとかで」

「あつ、そ、そうよね！ ごめんなさい、茉子。私ったら好奇心が勝つて茉子にとんだ辱めを……」

「い、いえいえ。大丈夫です、大丈夫ですよ芳乃様。ワタシちよつと涙目になって馨くんに甘えたいくらいボロボロになっただけですから」「重傷じゃないっ」

疲れ果て、涙すら浮かべた茉子に対して芳乃はひたすらに慌てながらあれこれと慰めの言葉をかけるも効果は無し。火種となったムラサメは――

「茉子、すまぬ。芳乃の見くびっておった」

「ふふふ……ムラサメ様も芳乃様に振り回されましょう？ あは」

「いかん。早急に馨成分を摂取させねば。じゃが――」

なんとかかして元の調子に戻してやりたかったのだが、しかし。

「だーかーらー！ なんて突きに刀身を滑らせて鏢迫り合いに持ち込まないんだよ！」

「んな人外技できるわけねえだろ！ 俺は普通だつての！」

「俺なんてお前より才覚ねーぞ!？」

「嘘だ絶対に嘘だ！ 俺よりよっぽど強いじゃないか！」

この有様である。

「……あれでは、向こうも落ち着くのに時間が必要であろうなア……」

芳乃。とりあえずあの二人を止めるのじゃ。吾輩が馨を止めるから、

芳乃はご主人を頼む」

「はい、わかりましたっ」

そして二人がそう決めた瞬間、またアホアホ男どもは竹刀片手にギャーギャー言いながら鍛錬という名の八つ当たりを始めようとして――二人はため息を吐いたとき。

ちなみにこの後、馨は茉莉を慰めるために全力を尽くしたという。

最初

……不意に目が覚めたと同時に、奇怪な感覚を覚えた。

これは夢だ、というあり得ざる確信。夢を夢と断定できるには、中々に苦勞するものだ。夢と現実、その境に気が付くのは大抵が遅くなる。

故に。

何者かに夢を見せられている、と言ったところであろうか。

(……なんで俺ばっか?)

だからこそ将臣は決まって俺だよなあ……とも思う。適任は他にも沢山いる筈なのに、なんでか単に叢雨丸の担い手に過ぎない自分ばかりそんな役割。

「……マサオミ? マサオミでありますよね?」

「あれ? レナさん?」

そんなところに現れたのはなんとレナ。

彼女もまた誰かに夢を見せられている感覚を覚えながら、しかし何故か夢であるのにも関わらず明確に意識があった。

夢の中に男女二人。まったくもって不思議なものである。

……さて、この状況とはなんだろうか。

レナも将臣も、お互いに同じ夢を見る接点が無い。だからこそ二人は困惑するし、この状況に気味の悪さを感じる。

「……あれ? ここは……森の中ではありませんか?」

「これは森じゃなくて山の中だよ。それしたって、何処かで見た覚えがあるな……」

二人の視界に映るものが、突如として山中の景色へと変わる。しかしその山中の景色は、過去に二人が見てきたものとは比べ物にならない程に、幻想的であった。

文字通り、完成された光景。

絵画か何かと言われても何の違和感無く受け入れられる程の、美しい過ぎる光景。

神秘、あるいは幻想。神の領域——そんな感想が浮かんでは消え

る。

その中に浮かび上がるように佇んでいるのは、深々と編笠を被り、垂れる布故に顔が見えぬ一人の天女が如き人物と、一匹の純白の大狼であった。

「マサオミ、もしやあれが……」

「うん。崇り神になる前の犬神と、彼の姉だろうな」

「姉、でありますか」

そういえば、菜子から「ちよつと夢見が不思議かもしれない」と昨日の朝に言われていたことを将臣は思い出す。その上で、犬神の姉についてもちよこちよこ、芳乃と共に教えてもらっていた。

彼が恋に何かを探る、その大きな理由である……と。

それを軽くレナに説明しつつ、一匹と一人の様子を伺っていると――

「……姉君、こう言うのはなんですが、そろそろあの侍を覗き見して悦に浸るのはおやめになりませんか」

「コマ!? いきなりひどいわね!」

「毎度毎度、姉君から如何に、直接会って話したこともないあの侍が誠実な人間かを聞かされる身にもなってください。あなただつて言葉を投げたこともありません。それに朝起きてから夜寝るまで見続けるというのは、獲物を観察する狩りの主が如き有様。少々、苦言を申させていただきます」

(……は?)

生前(?)の犬神から放たれた言葉は、あまりにも人間臭くて、恐らくは女神であろう存在が、特定の人間をストーキングしているという事実で、もはや何がなんだか。

というか、更に二人を混乱に落としているのは話される言葉、そして聞こえてくる言葉そのものは大仰で古風なものであるというのにも関わらず、意味は現代語で理解できるといふある意味の気色悪さだ。

「何故あの侍の前に立つことを避けるのですか」

「いいのよ、あれで。私はそれでいいの」

「側から見れば狂人が何かですよ」

「いいつたらしいのっ」

「姉君、人を装えば良いではないですか」

「そういうわけではないの!」

「ではどういうわけなのでしょう!」

とても仲の良い姉弟だ。

こんなデコボコ加減は二柱が神であることすら忘れてしまうような、それほどまでに微笑ましいものだ。

困った顔の女神に向かつて、呆れた表情の犬神は告げる。

「確かに姉君は、種の営みに深く関わることなかれ、と申されました。人が獣を喰らうように、獣もまた草木を食み、時には同族を食む。この自然輪廻に神として口を挟むことはできぬと。必要以上に感情を入れるべからずとも」

などと言っているが、大半不服そうな犬神の表情から、二人は彼がとても眷族想いであることを察する。恐らく侍という言葉から判断するに、犬追物などを見て心を痛めているのだろう。

反面、この犬神の言葉を借りて判断するなら、女神は眷族と人との関わりを必要なものと切って捨てられる、我慢できる精神性をしていると言ったところか。

どこまでも正反対な二神である。

「ですが姉君、あなたも存じておりましたよ。生きている以上死は絶対なのです。死すれば黄泉の国へと魂は導かれてしまいます。彼の国へ降りるのは我ら神とて何が起きるかわかりませぬ。故に生きている内に、何を心に秘めているかはわかりませぬが、それを確かめに接するというのはいかがでしょう」

「ううっ……でもコマ、私は——」

「玉石より生まれた神だからと言って、何もそこまで冷え切る必要もありませんまい」

悩む姉の背を押すような言葉の数々。しかしながら犬神の纏う雰囲気は完全に疲れ果てた苦労人のソレで。

つまるところ、これは——

「マサオミ、この犬神さま、もしやおノロケされてて面倒だからお姉さんをその人と合わせようとしているのですか？」

「ああ、多分……そうだろうなあ。ほらあれだよ、俺たちが馨と常陸さんの中途半端な関係をむず痒く思ってたのと同じでさ」

「納得しました。あの二人のアレを……ああ、確かにわたしもそうしてしまいそうです」

馨と茉莉の関係性でえらい目にあつたレナだからこそわかった。なるほど、これはこの犬神を責められない。砂糖を直接食べてもなお足りない甘い惚気を聞かされて疲れ果ててしまったのだろう。

そしてこれが、彼が祟り神になる由縁——その始まりであるのだと、何故か本能的に理解すると同時に浮遊感が二人に纏わり付く。

これは夢から覚める時の感覚に似て、だがどこか異なるもの。景色も白くなりつつあり、この記憶の再生が終わろうというのか。

「ええっと……とりあえずレナさん。また学院で」

「はい、またでありますよ。マサオミ」

夢の中でまたねというのは奇怪な感覚だと、二人は笑い合いながら、古い記憶の夢から現実へと目覚めるのであつた。



へこんだ茉莉というのも新鮮だったが、あまりにも見てられなかったので愚痴を聞きつつ、田心屋に行って甘いものを食べたりしたりで、早く元気になって欲しくて送ったりなんざりしてたのだが。

「へこみすぎたからって着替え持って寝泊まりしに来るかフツ」

送った後、家に帰って汗を流して一息ついたら、急に玄関の鍵が開いたのだ。てつきり親父とお袋が帰ってきたものと思い、パタパタと走って向かい——

『おかえりっ。父さんっ、母さんっ』

なーんて言った、のだが……いざ目の前に現れたのは驚いた顔の茉莉で。

ついつい小っ恥ずかしくなって、照れ隠しのように視線を逸らしな

がらこんなことしか言えなかった。

『……ウチに、何……しに来た?』

『お泊り』

そして真顔で即答された。

……それが昨日の全てである。

同じ卓で飯を食って、同じ風呂に浸かって、同じ布団で眠った。

「だって、やっぱりワタシおやすみからおはようまで一緒にいたかったんだもん」

「嬉しいけどさあ。まあ、色気もクソも無い理由なのは、ちよつと」

そして朝。

同じ布団で目が覚める。

横で寝っ転がったままの茉莉は、そんな俺の言葉に不思議そうに首を傾げた。

「ダメなの?」

「俺だって年頃の男の子だぜ? 自分の彼女が家を尋ねてくる理由に夢を見てもいいだろ」

「あは、可愛い人」

「ククツ、可愛いだろ?」

「笑い方が悪いから可愛くないよ」

「ひでえな。まっ、いいさ」

よっこらせと身体をおこして、伸びを一つと深呼吸。茉莉の匂いと共に朝の部屋の匂いが身中に染み渡って色々と滾っていたものが落ち着いていく。

ふう、と一息吐くと共に、布団を出て――

「ん、起こして」

笑顔で手を伸ばしてくる茉莉の姿を見ることになった。大変可愛らしく、その上困るほどに愛してしまいたいほどだが、生憎そこまで世話を焼いてられるほど俺は優しく……

「お前なあ……」

「いいじゃん。馨くんには言わないよ、こんなの。それに起こしてくれたらワタシ、もっと好きになっちゃうよ?」 馨くん

「ああもう！ ほら、手貸せつ。必要なら風呂まで着いて行ってやっからさつ」

そんなことを言われてしまえば、俺はもうこんな具合に手を引つ張って菜子を起こすしかできない。

惚れた弱み……だろうか？ いやもう、菜子ならなんでもいいや。

「俺ももつと好きになるから……だからその……困ることはやめてくれっ。どうしたらいいか、わかんなくなるからさ」

「ありがとつ、馨くん」

「……菜子なんか大好きだ」

「嫌いって言ってくれてもいいのに」

「嘘でもお前を嫌いになんてなれるかっ」

そんなやりとりをしつつ、もう菜子に裸を見られたっていいやの精神で寝間着をその辺にほっぽり投げる。後ろから「もう」という声が聞こえるが無視しつつ、とりあえず風呂場へと向かおうとしたら、ヒョイと下着だけになった菜子が隣を通り過ぎる。

「んあ？」

「ワタシもシャワー浴びるから」

「襲われても知らないぞ」

「襲ってくれるの？」

「……ごめん朝からは無理」

「……そういう返しされると逆に困るよ」

「とりあえず、沸かし直すか」

「そだね」

なんだっていいかと、俺たちは風呂を沸かし直して、また同じ風呂に入るのだった。

……昨日、別に何かあったわけでもないぞ？

「あ、それ取って」

「ああ」

菜子と二人きりで朝飯を食べるというのは初めてだ。ましてや自宅と付けば、更にあり得ない話ともなる。それがまさかこうもなろう

とは……

菜子がわざわざ俺の為に作ってくれた麩の味噌汁に喜びながら、二人で作った朝飯を食べる。それなりに時間はあつたから、和物を揃えるのも楽勝だった。

ああ、将臣の鍛錬は俺と玄さんの代わりばんこでやることになっている。昨日が俺だから、今日は玄さん。よって今日はフルで一日を菜子のために使うことだってできる。

「相変わらず美味しいな、菜子の飯は」

「それ毎回言ってるじゃない？」

「毎回言いたくなるんだ」

「けど馨くんの作った卵焼き、妙に美味しいんだけどどうしたの？」

普段は甘いか辛いかの二択なのに」

「お前と一緒にだから気合入ったんだろ」

「そっか。馨くんは可愛いね」

てつきりからかって流すと思っていたものだから、優しくはにかむ菜子にどう対応したものか悩みつつ、箸を進める。

……うん、美味しい。

「あー、そういやさ。昨日の夜中、お前犬神がレナと将臣に夢を見せるとかなんとか言ってたけど、本人たちには伝えたのか？」

「有地さんには伝えたけど、レナさんには……あつ」

「……お前なあ」

はあ、と一つため息を吐いてから、もう起きちまったものはどうしたようもないと割り切ってしまう。後で伝えりゃいいだろう。

「とりあえず、事後承諾だなこりゃ。今日ちゃんと謝っておけよ」

「うん、そうする……昨日へこみすぎて忘れちゃってた」

「……まあ、ありゃへこむわな」

何が悲しくて自分の性事情を話さねばならないのか。とんだ辱めである。おかげで菜子がとことんまで甘えてきてホントにもう……役得だった。

元気になって欲しいと思つて菜子の好きなおかず作ったり、菜子好みの風呂の温度にしたり、菜子に求められたら応えてみたり……なん

か看病してるみたいだったが。

「ふう、ぐちそうさま」

「ぐちそうさまでした。……洗い物は？」

「家帰ってからやる。流石に朝やると時間がもつとギリギリになるし」

朝飯を真面目に用意して、その上弁当まで真面目に作った以上、学院までの時間を考えると楽勝で遅刻しかねない。だったら水に浸けて帰ってからの方が確実だ。

「んじや、支度すつか」

「うんっ」

やっぱり、茉莉の笑顔は素敵だ。

「茉莉」

「なに？」

「いや、呼んだだけ」

登校するいつもの道。

けれど唯一違うのは、茉莉がいること。手を繋いで歩く道すがら、彼女の名前をただ、呼んでみた。

……なんと狂おしいほどに、愛おしくてたまらない響きなんだろうか。茉莉が俺の名前を呼ぶだけの気持ちが理解できる。なんかこう、呼ぶだけってのも悪くない。

しかし、言われた彼女とさえば――

「あはあく」

それこそ花の咲いたような笑顔を見せながら、口癖を一つ。

……とても可愛い。

「なんだよ」

「やっぱり、可愛いね」

「……うっせ」

照れ臭くなつて微笑む彼女から視線を逸らして、けれどギュツとより強く手を握る。

……ああまったく、なんて愛おしいんだろうか。

愛おしい、愛おしくしてたまらない。

言葉を尽くしてもなお足りない、行為を尽くしてもなお足りない。そうだ、俺オレが彼女に捧ぐ愛はたった一つの行動でのみ示されるのだから……

心中から溢れ出す愛情が、狂おしいほどに俺オレの中に眠る■■■に従って今すぐに彼女を——

——兄弟？ おい兄弟、しつかりしろよ。そこまで堕ちちゃあいないだろ——

……刹那。

兄弟虚絶の声が煙りに揺らぐ俺オレに届く。そうだ、お前は……

——何のためのオレだよ。そういうのはまだオレに任せて、オマエはただ菜子を愛していればいい。オレの役割だろ？ なあ、馨——

兄が弟を宥めるような、あるいは弟が兄を宥めるような、優しい声。自分によく似て、だが決して違う何かを秘めた声が己に響き渡る。煙りが消え果てる。

愛情の中に眠っていた闇の情動が静まり果てて、気付いてはならぬものがまた再び気付けなくなっている。

……ああ、そうか……なんとなく、魔人の言っていたことが理解できた。

俺に眠るものが何なのかは知らないが……そういえばそうだ。

俺は殺せてしまうからと言って、しかし小春ちゃんを殺そうとも思わなかった。

——矛盾している。

幼少の頃、俺は確かに魔人であると理解したからこそ己を殺そうとした。

何故だ——？

何故俺は魔人であるのだ？

俺は何を、忘れていた？ 最初が必ずあるはずだ。そう、最初……一が生まれるには零がなくちゃいけない。なら俺の零はじまりは、一体何だ？

「馨くん……？」

不安げな表情の菜子が、俺の顔を覗き込む。あつと驚いて一瞬手を

離しかけてしまったが、気を取り直して笑顔を作りつつ手を握り直す。

もちろん疑問に満ち溢れた視線が投げ返されるので、ここは言葉で示すでしょう。

「大丈夫だ、茉莉」

「ホントに？」

「ああ。マジだ」

「……ちやんと言つてよね」

「わかつてるよ。もう隠し事はしない。ただ今やっと気付いたばかりなんだ。整理するのに時間をくれ。な？」

それなら……と渋々な雰囲気隠すことなく納得してくれた。色々、茉莉を不安にさせてばかりだからな。どこかで安心させないと、彼女に好かれた男として面目が立たない。

……しかし、俺の過去か……

あの日、入水自殺を決意した理由である筈の魔人足り得る何か、そして殺せてしまうからというソレ。

やはり、何故だけがない。純然たる法則のように殺せてしまうから、己が魔人だからという答えだけがあつて、そこに至るまでの途中式が無い。

俺が魔人だと己を確信して、人として決して生きられないから死ぬとまで考えた理由は何処だ？

その大事な理由を——己が魔人たる由縁を。

俺は、一体何処に……捨て置いてきてしまったんだ？

さて、そんなこんなで学院の時間が流れていく。

そして昼休み、復帰した廉と小春ちゃんも混ざっていつもの面子で飯を食べる。——実に平和だ。

「ふいふ、いや非日常から日常に戻るとトコトン安心するなあ……」

「ホントね〜……いたたつ、あの人私の身体でどんな動きしたのかなあ。まだちよつと痛むんだけど」

「んー、漫画みたいな蹴りとかしてたぞ。小春」

「うわあ……」

多少の痛みこそあれど、健康体も健康体。むしろ色々肩のコリとか吹っ飛んで快調も快調らしい。逆に怪しく思えるが本人たちがピョンピョン跳ねて証明したんだから納得するしかない。

と、ボケーつと眺めながら自分の弁当を突つついていると、隣に座って弁当を食べている菜子にレナが声をかける。

「あ、そうだ。マコ、今日夢を見たんです。あの、コマの」

「コマ……？ あつ、ああ！ ごめんなさい！ ワタシ昨日すっかり伝え忘れてて！」

「いえいえ。大体はマサオミから聞いたので問題無いでありますよ。夢の中で人と会うというのは、中々に無い体験でした」

ニコニコとしながら言うレナだが、彼女中々に適応する速度早すぎないか？

ふーん、将臣が夢にいたね。こりや詳しく聞く必要ありそうだな。駒川も呼んで、色々と資料持ってきてもらって……かな。場所は——芳乃ちゃんの家が一番都合良いか。

てことは、放課後……だな。

「なあレナ。放課後空いてる？」

「はい。そうであろうと思って既に報告してありますから、時間ならたつぷりと」

「よし来た。こりやまたみんなで作戦会議だな。聞いた？ 芳乃ちゃん」

「もちろん。私から将臣さんとムラサメ様に伝えておくから」

同じ教室にいるのに何故将臣はこの話を耳にしていなのか。実にシンプル、従兄妹に構っているから以外の何者でも無い。一番気が気でないのはあいつだったということだ。それが分かっているからこそ、この時間は触れ合いに使って欲しい。

何せ午後は長い作戦会議なのだから。

……ところが。

「……あ、カオル。キョーカに姉がいることをご存知ですか？」

「は？ いや、初耳だけど」

予想外のところから、予想外の話題。

一瞬固まってしまった。京香に問い正そうにも、肝心の京香は仕込みの関係から今はいない。

だから真偽の確認はできない……じゃなくて！

肝心なのはどうしてレナが京香の姉について知っているかだろう。

辻褄が合わない。

神関連ならわかるが……何故伊奈神の過去を知ることができた？

怪訝な顔を隠さず、不思議そうな彼女に尋ねる。

「なんでそれ知ったの」

「夢を見たんです。コマの夢を見る前、コハルが操られていた日の夢で……」

「……不思議だな。そつちも詳しく。本人も呼んでこう」

あいつに姉がいたなんて初耳だぞ……一体何を俺たちに隠しているんだ、京香。

——いや、まさか……そうありがちな話というわけではあるまいて……

事実は小説より奇なり、とは言うが。

流石にそれは都合が良すぎるといふよりも、それが仮に事実であった場合、どこもかしこも同じようなことばかりだな……と。

ただ魔人の系譜とそれが可能な筋を考えて、仮に魔人がそうであるならば。

確かに辻褄は合う。俺が敵になる理由も、魔人と京香の関係も。

魔人と京香は近すぎる——そう思えてならないんだ。

そして、放課後。

なんだか実家みたいな気分になってしまうほど馴染んでしまった芳乃ちゃんの家で、この件について情報を握っている面々が集まる。長く過ごしたというほど長く過ごしたわけではないのだが、しかし……濃密だったのは間違いない。

……だって、ねえ？ 色々忘れられんて。

「……という具合でありましたね」

「あとは俺たちの見たものが本人の記憶と合っているかだけど、常陸さんどう？」

「大体合っているそうです。そういえばそんなきっかけだったーとか
なんか。……え？ この記憶は重要じゃない？ その後が大事？」
話を聞いてみたが、確かにきつかけの話で、ここから先が重要であるのは間違いないだろう。

俺として気になるのは――

「菜子、元から二柱は穂織にいたのか？」

「はい。同じくして穂織の自然から生まれた。自分は獣たちより、彼女は玉石より生まれた神……です」

「恋が知りたいっていうのは、その姉貴殿が恋に纏わる何かで何かを
犬神に与えたからか」

「おおよそは。本人曰く色々複雑らしいですけど、理解する分には
それで良いと」

「まあ納得」

つまり事はより大きかったというわけだ。不敬も不敬、なんて領域
で済む話ではない。由緒正しい土地神様をぶつ殺して彼の持っていた
神器すら砕いたのだから。

……よくもまあやったものだ。それほどまでに憎かったのか。俺
には理解できないが。

「そういうえば、何故わたしなのですか？」

「あつ、それは金髪というのが大きいですね。記憶映しは対象者を選
ぶので、金髪である女神を連想させるのはレナさんだけですから」

消極法かい。

それなら操られた件も納得行く。恐らくは姉を求めていたのだら
う。……なんか俺みたいだな。意味は違うけど字面がね。

でもそれなら、彼の姉――玉石の女神は何処へと消えたんだ？ 犬
神は崇り神となつてなお確かに残っていたのにも関わらず、女神は完
全に犬神だけが知っていた。

つまり人の記録からは忘れ去られているということ。犬神は近代
まで残っていたのに、まるで女神は古代で消滅してしまったかのよう

だ。

「髪は金色の黄翡翠、瞳は天藍石、肉は石灰に瑪瑙、骨は鉄、肌は白……言わなくていいって、なんでですか？ 自慢の素敵なお姉さんで——ああちよつと!? 拗ねないでください！ 真面目な話に戻しますから！」

本当に玉石より生まれた神ということを解説してくれた茉莉だったが、中にいる犬神的には何か引つかかるものがあつたのか、あるいは単に恥ずかしいのか。恐らくは後者と見た。

……まあ、とにかく抗議を受けた茉莉を見て場が和やかになるというのは良いことだ。

しかしここでムラサメ様、何かを思い至つたようで——茉莉にえらく真剣な表情で問うた。

「茉莉よ。吾輩は叢雨丸が一体何故朝武が古より持っていたのかを知らぬ。だが皆があれを神刀と呼び、そして神社に納められていた。吾輩の古い記憶が確かなら、神社で奉られていた神は——安産の神であつた……筈だ」

……めちやくちやに初耳である。

芳乃ちゃんも茉莉も目を丸くしている。

だがそんな様子も関係無く、ムラサメ様は言葉を続ける。

「……あの刀の方が先にあつたとすれば、玉石の女神が土地神であつたとすれば、神刀叢雨丸とは、もしや——」

「ソノ先ノ答エハ記憶ノ中ニアルゾ、人柱トナリシ少女ヨ。焦ル事ハナイ。全テ知ルノデアレバ、纏メテ知ツタ方ガ良カロウ……」

しかしムラサメ様の追求に対して、茉莉——ではなく犬神が彼女の声を借りて確実な答えを知るべきだと答えた。つまるところ、彼は確実な答えを知っているということになる。

「……とまあ、無理に言葉にするよりも自身の魂に刻まれた記憶を見てもらう方が早いので……ムラサメ様、もうしばらくお待ち下さい」
「わかった。確かにそうじゃな、気長に待つき。吾輩、待つのは慣れている故にな」

「けど不思議なものですね。犬神の存在は昔から知られていたのに、

何故玉石の女神の存在は現代に伝わっていないのでしょうか。みづはさんに色々聞いてみようかしら」

「それがいいと思うよ、俺も」

芳乃ちゃんの提案には将臣だけでなくみんなが全面的に賛成だ。やはり正しい形で神を祀るのは当然故に。

そして——ある意味ではここからが本題だ。

俺は改めてレナと向き合い、口を開く。

「レナ……京香の姉ってのはどういう事だ？」

京香の姉。

本人は何か用事があるみたいで、また来るのに時間がかかるそうだが、とりあえず聞くだけ聞いておこう。

「いえ、よくわからないのですが……キョーカは姉、カナエがいるというか、いたというか。その人はカオルによく似ていたんです」

「俺に……？」

カオルとカナエ。

確かに響きも似ている。性別だけは違うが、レナの言葉を聞くに俺と似た外見をしていたんだろう。……まあ、確かに俺は線の細い男だからな。女装しても見分けはつかんだろう。

「……そういや、全然京香さんって家族については教えてくれないよな。夫と子供の事はそりゃ魔人関連だからって言うけど、父親とか母親とかは」

「何か複雑な事情でもあるのでしょうか？ 特に姉妹……まあ、私の家の場合兄弟でしたが、そうした身内であるからこそ言えないこととか。ねえ、茉莉」

「いやまあ確かにワタシたち身内みたいなものですけど……レナさんその辺知らないから可愛い顔してますよ？」

目を丸くしているレナはとても可愛らしくて、つつい頭を撫でたくなる小動物的な愛くるしさがある。

……おい、聞いているのか？ 京香。

——京香？

……京香!!

おかしい。

返事が何も無い。何一つ帰ってこない。

そんなことはあり得なかったのに、今日に限って何一つ無い。

そんな俺の焦燥が表に出たのか、将臣とムラサメ様が真剣な表情で視線を向けてくる。

「馨、街の中を探すか？」

「吾輩が見てきてやろうか？」

「え？ カオル、キョーカがどうかしたのですか？」

「返事が無い……芳乃ちゃんとなはここに来てくれ。俺が見てくるから。茉莉、将臣、そっちは任せた」

「あつ、ちよつと馨さん!？」

後ろから聴こえてくる芳乃ちゃんの驚きの声を無視して俺は朝武家を飛び出す。

——さつき黙っていたが、人払いの境界の起動感覚がした。

つまり……魔人がいると見て、間違いないだろう——



「……人払いの境界、か。知識では知っているが実物を見るのは初めてだな」

路地裏、同時刻。

「何処に行くつもりだ？ 逃しはしないぞ」

「ふん、どうやら鬼のお出ましか。——久しいな、京香」

鬼と魔人が、憑代となる人間を通して対面していた。

「アンタと話すことはない。再び闇に帰ってもらう」

「クククツ、つれないのも変わらずだな。まあその方がらしいというものか」

共に憑代となる人間に、自身の狂気を束ねた刀を持たせている。

だが魔人は戯けるように、京香へと語りかけた。

「その憑代——確か馨が懐いていた馬庭芦花という女子のものか。まったく、お前も相変わらずだな。無関係なものを巻き込むのは本当

に上手だ。そういうところだけは、父に似たか？」

「黙れ。この子はお前と違って、有無を言わさず憑代になつてもらつたんじゃない。丸一日話をして、その上で納得してもらつたんだ」

……馨から抜け出した京香は、芦花を尋ねた。事情、己の正体、魔人のなんたるか——知り得る限りを全て話し、そこから丸一日話し合つた結果、ある条件を付けて芦花はそれを受け入れた。

『必ず、守ってください。まー坊たちを』

必ず守れ。

実にシンプルかつ実に難題だ。

もつとも、堕ちるところまで堕ちた魔人であると己を定義する京香にとつて、ありとあらゆる手段を使ってまでこの魔人を葬り去るのは決めていたことだ。

それこそが守ることに繋がる、と。

だからこそ京香は魔人を睨みつけ、言い放つ。

「お前こそ、無理矢理に奪い取つたみたいだな……：よりもよつて馨にとつて大事な、中条比奈実の肉体を」

「ああ、これか？ たまたま近くにいる機会があつてな。その折に借りた。別に馨には迷惑となつてはいまい」

そう言つて魔人は、比奈実の顔で邪悪に笑う。

その様子に燃え盛る憎悪が極限にまで達し、京香は芦花の肉体を駆り、抜刀する。

そんな彼女に呆れるようにため息を一つ吐いた後、魔人は比奈実の肉体を駆り、抜刀した。

「再び鬼を——斬ることになろうとはなアツ!!」

「今度こそ殺してやる——!」

叫び合い、駆け出す。

そして鬼と魔人の、千年ぶりの殺し合いがついぞ始まるのであつた

魔性

激しい剣戟の音が響き渡る。

二者は憑代を駆り、移動せず戦鬪を繰り広げていた。

そんな様子がおかしいのか、もはや百を超えて千となるのかという剣戟の中で、京香は憎悪に歪んだ表情と共に吐き捨てる。

「珍しいな、アンタが気を使うなんて」

「響の影響かな。まあ、そんなことはどうでもいい。どのみち、私はいつも通りに生きるだけさ——！」

「なら尚の事、生かしてはおけないな——！」

吠える。

妖刀転生を模した狂気の刀が、憎悪と共に彼女の研ぎ澄まされた技術で振るわれる。

しかしながら、魔人は京香の手の内を知っている。知りすぎている。その憎悪と共に放たれる斬撃の数々を、難なく受け流していく。

ガキンガキンと甲高い金属音を立てて刀身と刀身が噛み合っては離れる。袈裟には袈裟、横薙ぎには横薙ぎを、時にゆらりと最小限の動きで回避し、突きを繰り出せば突きを弾くという荒業で防がれる。

狭い裏路地ということもあってか、技らしい技のほとんどは使えない。ただ純粋な斬り合いになる。体術を交えようにも、体術を交えるための動きをするには隙が大きすぎる。

よって剣戟のみに徹するというのは、必然であろうか。

「お前は父に似て剣鬼の才覚だけはあつたな、京香」

「剣くらいしか誇るものはなかったからな……！」

斬撃を受け流しては斬り返し、それはまるで舞踏のようで決してそうではない。

——二者の実力は拮抗している。

しかしこの戦いを見ている者がいるとすれば、双方の動きがある程度共通していることに気がつくだろう。

もつとも、それがなんだという話なのだが。

京香が更に踏み込み、袈裟に風ぐ。

それを魔人が敢えて踏み込み、横に流す。

最大接近距離において刀を使った怒涛の猛攻——それが二者が共通して使う剣術の基礎である。徹底して刀を振るうこと、如何にして刀を使って敵を斬ったものか、そののみを突き詰め……そして道半ばで朽ち果てたある剣鬼の技。

風を斬り、地を蹴り、刀身を噛み合わせて睨み合っては離れて斬り込み、弾いては斬り返す。同じ剣を受け、手の内、心の内を知り尽くした相手だからこそその拮抗。

現代の常人であれば、魔人にしろ京香にしろ、立ち合った時点で斬り捨てられていてもおかしくはない。それほどまでには魔人の性能は人間を超越する。その力は神の法則に近いが故に。

だが唯一の違い、それは互いに憑代となる人間の性能を熟知できていないこと。そして魔人は自身のみしか燃料がないが、京香は芦花を味方につけて、彼女の年長者としての意志、守るという強い意志を燃料としていることだ。

「く——、っ」

「せえいっ！」

京香が一步前に攻める。

芦花の意志を反映した攻めの斬撃、その軌跡には一切の迷いは無く——故に魔人は受けに徹する他はない。

その攻防は、互いの……否。魔人と鬼と人の違いを淡々と示している。

守るために殺すという人類の中でも極め付けの宿業は、人にしか為すことができない。

得るために殺すという篡奪者の宿業とは、鬼とならねば為すことなどできない。

ならば魔人の宿業とは——死を転じて生と成す、即ち転生。殺すために殺すのでもなく、単にそうしなければ生きていけないというだけ。他者の死が自身の生になれば魔人は生きていけない。彼らは星の光を喰らって生きる闇の怪物なのだ。

彼ら魔人にとって殺しとは、食事と同じだ。京香の仇は人の不幸こ

それが自身の飯なのだが、しかし時代が悪かったのか、最終的には殺す方向に至った。至ってしまった。

——攻めの斬撃が嵐となって襲いかかる。それを弾きの傘でひたすらに防ぐ。徐々に押される魔人だが、その表情に焦りはない。惑わば死ぬる、それこそが戦の中で、死闘の中で見出した答え故に。守るために殺す人、得るため奪うために殺す鬼、双方が一つとなれば何かを守るために敵手の未来を奪い殺す者となり得る。

そして京香と芦花はその方向性を合一し、平穩を守り、明日を得るために殺すという境地に至った。

よってただひたすらに殺さねば生きていけない魔人が不利なのは必然である。

守る鬼人と化した京香と芦花を超えるには、正攻法なら魔人は元来の己を取り戻さなくてはならない。もっともそれは不可能だ。京香が半分を持っているのだから、まず奪うところから始めねばならない。そこでやつと殺すなという呪縛から抜け出せられるのだから。

——罅迫り合い、互いに飛び退き、無形の構えを取り直す。その距離はおよそ畳数枚分。しかしそれでもなお、二人にとっては十二分に呼吸を戻せる距離だ。

魔人は自身の不利を叩きつけられたが、だからどうしたと忽然と事実を京香に叩きつけた。

「……守るために殺す、ああ、実に美しいじゃないか。しかし京香、お前と馬庭芦花では中条比奈実と私を切り離せない。せいぜいできるのは、私諸共殺すことだけだ」

「——黙れ」

挑発のような指摘を、そんなことはわかっていると切って捨てる。

京香には叢雨丸とは違って人を救うことはできない。

芦花には何か特別な力があるわけでもない。

結局、二人にできるのは殺すことだけ。そして日常を守る以上、殺すことはできない。

——だが、加減できる相手でもない——

(策を練らないと……でもアタシ全然わからないしなあ)

——時間を稼ぐしかないか。手荒く行くぞ、馬庭芦花——

(……お手柔らかにお願いしますねー、京香さん)

内面での会話を終えて、改めて向き合う。

勝負で言えば既に勝っているが、試合には勝てない。持ち込めるなら判定勝ち——互いに小細工をしなければ先は無い。

「……ああそうか。考え方の問題か」

突如、魔人が嘯く。

「何……？」

「殺さぬのであれば、良いのだな馨。腕の一つや二つは砕いて構わぬと……なれば——」

刹那、魔人が跳んだ。

疾い、疾すぎる。肉体が人間であるのにも関わらずその爆発力は正しく、神速。

その神速の中、京香は捉えた。

刀を持った右腕が、身体を右方向に構えられていることを。

——マズい！——

それは咄嗟の判断だった。

身体を横に逸らしつつ、脚を出したのは。

「なっ……!?! お前っ」

「ッー」

刀身を脚で踏み付け、突きを潰す——常陸家の忍び技の一つ。馨のやった猿真似を見ていたからか、あるいは京香の天性の才能によるものか。

どちらにせよ突きは潰された。

そのまま身体を更に回転させながら後頭部を峰で殴り付けんと思手に持ち帰るが、それで終わる魔人ではなく。

すぐさま両手で柄を持ち、逆袈裟のように振り上げる。

——足場がぐらつくその一瞬、京香は体勢を崩しつつも攻撃をやめ、脚を退かして確実に地に足を着ける。

刹那の睨み合い、踏み込んだのは魔人。振り上げた刀に、大きく勢いを付けた横薙ぎの斬撃を見舞う。逆手で動かし、刃と刃を擦り合わ

せるようにその横薙ぎを強引に流しつつ、僅かな隙間を縫って順手に持ち替える。

が、横薙ぎを防いだところで続く袈裟斬り。

——流せない。だから身を逸らして紙一重で避ける。

反撃に出るために、その逸らした勢いを付けた回転させながらの斬撃を繰り出そうとして……流れるような逆袈裟の、微かな起こりを見つけた。

咄嗟に刀を横に構えられたのは、彼女の経験によるものか。ギィ、イ……ンという鈍い音が嫌に響いて火花を散らす。

斬り返す為に力を入れて刀を押し出す——前に魔人が引いた。力を入れる先が抵抗を失ってバランスを崩す。そこに差し込まれる素早い二連の横薙ぎ。

——今度は魔人としての性能を完全に引き出し、憑代への負荷を無視して素早く弾く。

だが、ここで敢えて斬り返さない。

この二連の横薙ぎは、魔人が好んで使う攻撃。ここから何に繋ぐか、起こりを見極めて的確な対処をしなければならぬ。

「——っ」

息を飲む。

相手を注視する。

その軌道を予測し、怯えを支配し——見切る。

でなければ敗れる。

「——」

そして、繰り出されたのは——無であった。

スルリと魔人がまるで突きでも躲すように横にズレる。京香が好んで使う半身逸らし抜けとは違い、純粹な横移動。

そして素早く、踏み込んだ。

振り上げられる刀、見え透いた軌道——弾く。だが軽い。重い一撃を使うのが二者の流派の特徴であるにも関わらず、軽い。斬り返しはしない。

続く横薙ぎ——弾くが軽い。

まだだ。袈裟二連——弾く、更に軽い。手数と速度による圧倒……
そうとしか思えない。

斬り上げ——弾く。だがあまりにも上手く弾けた。まるで力を入
れろと言わんばかりに……!?

——そうか!——

悟った京香は踏み込んだ。

この連撃は調子を狂わせる軽い物。ならば最後に重い一撃が来る
のは絶対。ならばやることはただ一つ。

「……なっ」

その一撃を、飛ぶための線にする。

放たれる筈だった渾身の逆袈裟、それが軌跡を描く前に地面を踏み
付けて魔人の背面に跳ぶ。

死中に活を求めよ——攻撃の軌跡が生まれる前に、あるいは斬撃を
跳び躲し、背面に移り殺す……それは京香の父が彼女に刻んだ技。強
いて技の名があるとすれば、父は『裏盗り』と語っていた。

彼女の姉……つまり奏は小洒落て、さながら飛ぶ鳥の片翼を落とす
仕留めるが如き様を『鴉崩し』などと勝手に呼んでいた。

そしてそれを今、京香は披露した。

「く、ククク……ッ」

それを見て、魔人は笑う。嗤ってワラってわらって——そして、噛
み締めて。

「まさか裏盗りとはな……」

昔を思い出すぞ、京香アツ!

鬨争の狂気を纏って、魔人が咆哮ほえた。

轟、と魔人から怨恨が青黒い波動となつて狂い哭く。魔人が喰らつ
た星の光が、奈落より深い漆黒の闇が、かつて神が治めていた土地に
氾濫してなお止まらない。

それは大きな波。

飛んだ京香が空中で立て直して着地するほどの衝撃。

——あれは……まだ炎になりきってないのか——

(え、魔人ってああいうこともできるの!?! なんか漫画みたいでアタ

シ理解追いつかない……)

——尚のこと気合を入れる。貴様の意志が私の刃となるのだから——

(現実にはファンタジーなんだね、まー坊……)

もはや何が何だかな芦花は、とにかくこのファンタジー野郎を撃退せねば平穏な日々は来ないのだからと気合を入れ直し、再び守護まもらねばという意志を研ぎ澄ます。

「さあ、続きだ——」

そして、魔人は氾濫する青黒の怨恨たちを全身から立ち上らせ、たった一回の踏み込みでそれなりに空いていた筈の距離を一気に零にした。

振り下ろされる一刀。それは弾けない、受け止めるしかできない。ギギギと嫌な音を立てて、鏢迫り合いとはまた違った、十字を描き睨み合うこの状況の中で、魔人はその内に猛り狂うある感情を吐き出した。

「思い返せば京香。お前は自身に燻る魔性と向き合わなかったな。目を逸らし続けたな。適当な大義名分を掲げて人斬りを楽しみ、徹底して人斬りのみを行ってきた。それがお前の本性だ。でなければいくら生臭や賊のような塵屑とは言えども、人の二十や三十を好んで殺しはせん」

「——ッ」

それは、怒り。

魔人は京香に怒り狂っている。その弱さを、履き違えた認識を、そしてその生涯を、何もかも。

それに対して京香は何も言えない。全て事実だからだ。賊の類は死合を求めて斬り殺し、生臭坊主は技の練習台がてら斬り殺し、武士だろうと貴族だろうと平民だろうと舐めた輩は斬って斬って斬りまくってきた鬼……それが自分だ。

当時の常識で言えば何もおかしくない。だがそれでも、京香は人斬りという自身の魔性から目を逸らして『自分は剣聖になりたい』と騙し続けてきた。

「伊奈神京香という女は所詮そんなものだ。人斬りという自身の魔性を捨て切れず、飲み込むわけでもなし。目を逸らし、拳句大義名分を掲げて死んでいい奴を殺し続ける。その上極限状況に追い込まれなければ魔性と折り合いをつけることすら叶わん敗北者だッ！」

「く、っ——」

それが気に入らないと、魔人は叫ぶ。何故開き直ることもせず、何故それを認められないと否定することもせず、何故答えを出すことしなかつたのかと。

受け止めていた刀が振り切られ、力を込めた逆袈裟が放たれる。その一撃、常人であれば上半身が吹き飛ぶものと言っても過言ではない。それをなんとか受け流すと同時に斬り返す。弾かれる。更に斬り返される。弾く。斬り返す、弾かれる、斬り返される、弾く、斬り返す、弾かれる、斬り返される、弾く——!!

しかしその剣戟の中で魔人は傾向を見切り、強引に鏢迫り合いに持ち込み、睨みつける。

「そんなお前があれほどまでに悩み、そして極限状況ではなく平時で、しかも精神性は我々とは遥かに離れ、当時はまだまだ子供だというに、一つの答えを出した馨をお前が上から語るなど——ふざけるなよ京香」

そうして吐き出されたのは、羨望と憧憬が複雑に入り混じった、奈落より低い音。そこで京香も芦花も、何故魔人が比奈実の肉体を奪い取ってなお完全に主導権を握って完璧に同調しているかを理解した。

鏢迫り合いが剥がれ、そして今度は魔人が感情の赴くままにひたすらに刃を振るう。それは怒涛。死を運ぶ黒い風。ありとあらゆるものを斬り刻んで止まない刃の嵐。受けることで精一杯だ。

「お前に馨の何がわかる？ 面倒なところだけ似ただど？ 理解してすらないな。馨は大義名分があれば喜んで殺す殺人鬼などではない。あれは強く、そして優しすぎる男だよ、とても」

それは馨に対する理解。

比奈実も魔人も、馨が持つ精神性の方向を理解していて、故に京香に対する共通の感情として束ねた。

「我々の力、そして存在と魔性は他を圧倒する。それをどうするか、どう向き合うか……私は飲み込み、お前は目を逸らし、そして彼は正面から向き合った。その覚悟、その意志の頑強さ、素晴らしい。憧憬を抱くよ、羨望を覚える、尊敬に値する。そうだ——お前が思っている以上に、馨は強い子なのだよッ!!」

お前程度が馨を語るな

臆病者の尺度で測れる者ではない

この節穴め。導くことすらしないのに先祖面をするな

お前など馨の先祖に相応しくない

——ただのそれだけ。

伊奈神京香という女の全てを否定するというたった一つの感情。魔人に入り込まれた所為で比奈実に生じた薄暗い感情。馨に姉と慕われながら何一つしてあげられなかった自身と、魔人と鬼を履き違えて導くことなど初めからできやしない筈なのに導いた気になっている大馬鹿者への怒り。

それら全てを叩きつけるが如く、この怒涛の攻めは展開されている。

「それにこの件、自分で決着を付けるなどと息巻いているが、そもそもお前が私を殺せたのは、奪い取った我が『転生』の力添えがあったからだろうに!」

「だから何だ! 使えるものを使って何が悪いっ!」

吠え返す。

金属音の鳴り響く中で、魔人と鬼が叫び合う。

「お前は無力だ京香! 私より先に転生から抜け出したのは失敗だったんだよ! わかるか!? お前と私が、転生に封じられている馨の真なる魔性の蓋だったのにも関わらず、お前は自ら蓋をやめた!」

「っ、全て私の所為とでも!? 遅かれ早かれそうなるのであれば、私とお前が諸悪の根源だろう!」

「いいや、諸悪の根源は朝武と常陸だ! 私とお前はきっかけにすぎんさ!」

「何が言いたい!」

弾き、斬り返し。

眉間、左胸、手脚、肩、太腿——受ければ人体が行動不能になる箇所であったとしても、今や共に怨恨に吞まれた両者にとつては知ったことではない。

死んだら死んだ、その時だとすら考えている。

「ちよ、ちよっと落ち着いてつてば京香さん!? このままだと多分——」

——口を挟むなアツ!——

芦花の忠言にすら耳を貸さず、狂気に、魔性に従つて京香は刃を振るう。

「奴らがいるから我らは生まれ落ちた! 我ら魔人の苦しみは、奴らさえいなければ初めから存在しなかつたのだ!」

「それを私に言つて何になる!」

「何故殺さない!?!」

「あの子たちが何をした!? 何もしてないだろう!!」

「あの二人が、あの血筋があつたから馨は苦しんだ! それは事実だろうが! 魔人と人との境で苦しむ中で、奴らはのうのうと生きていた! 挙句生きると? 生きていられない地獄に落としたのは奴らだろうが!! 厚顔無恥な連中めが! 己が血族の業で滅んでいればよかつたものを!」

——馨が虚絶、即ち転生と接続している以上は、京香も魔人もその影響を多少なりと受けている。

だがこの叫びは馨の持つ闇なのか、あるいは真実を知る魔人だけが持つ闇なのか。愛する女が生まれて来なければよかつたと願うのは、決して違ふのだろうか……だがこれが真実なのかは、誰にもわからない。喋る魔人本人さえもだ。

「生まれてきたものに罪は無いだろう!」

「罪科があるとすれば、そこだけだ!」

「愛することが罪だとしても!?!」

「ああ罪だとも! 傲慢で不公平な愛が、業を無理矢理に背負わせる……業を背負い苦しみ嘆き、他と違ふ己を必死に律して精一杯生きて

いる者を横目に、奇跡とやらで救われた奴らはこのうのと生きている！これを罪と呼ばずしてなんと呼ぶ!?」

「それは——!!」

その答えは、芦花も京香も知っている。その精神は今再び合一した。狂気から守護へ、その意志は束ねられる。

凄まじい連撃、その瞬間と瞬間の隙間を奪って剣戟を弾き、意識を落とす為の刀を構える。

「——そんなもの、人の勝手でしよう!! ——」

そんなものは、勝手に人が評価しただけに過ぎない。

声が、重なる。

構えた刀を、袈裟に振るう。

峰打ち——これならば確実に意識を落とせる。

完璧なタイミングで放たれた筈のそれは。

——またしても氾濫した怨恨の波動によって、理不尽に振じ伏せられた。

……今度は無理だ。

体勢を崩し切ってしまった。刀が飛ぶ、地面に崩れ落ちる。

「……さて京香、お前の持つ私の半身、返してもらおうぞ——!」

その隙を逃さぬと迫る魔人。

向こうの方が、疾い。

そしてその刀が突き立てられんとした、その時。

「その人から、出て行けエエエエエ——ツ!!!」

魔人と人との狭間で揺れ動く男が、黒と白を伴って乱入した。

魔人が動く前に白い腕が無数に影より現れ拘束し、魔人を比奈実から強引に引き剥がす。

黒い人型が馨と瓜二つの顔になろうとも、馨は気にかけない。

「かお——」

「比奈ねーちゃんに、芦花さんに、手を出すなアアアツ!!」

魔人が何かを言う前に。

咆哮と共に、虚絶の刃が憑代から引き剥がされた魔人に、突き立てられた。

……好奇心も妬心も堕ちたか——
——やれやれ、困ったものだ……だがこれで必要な分は揃った——
——京香に捕捉されたのは偶然だったが、まあいい。後は機が熟すのを待つだけだ——



——その光景を見た時、身体は勝手に動いていた。
比奈ねーちゃんの中に魔人がいて、芦花さんを手にかけようとしている。

ならば魔人を葬る。

そう決めて、速攻で乱入して、実際に腕を使って引き剥がして、世辞の句一つ詠ませることなく、仕留めた。

突き立てた俺そっくりな顔が消え去ると同時に、右腕に大きな裂傷が生まれた。……もちろんそれは簡単に癒えていく。

こうして見つめる自身の異常性に吐き気がするが、しかし今はそれどころではない。

何故か刀を持っていた芦花さんに目を向ける。——無傷だが、しかし不安だ。気を失っている比奈ねーちゃんは虚絶に抱えさせて、俺は芦花さんに声をかける。

「大丈夫？ 遅くなってごめん。あと将臣じゃなくてごめん」

「……いやまあ、アタシ別に白馬の王子さま役はまー坊がよかったーとか思っていないけど。とにかくありがとう、馨。お姉さんなのに助けられちゃった」

「気にしないでくれ。これも仕事だ。でもどうして刀なんて持つてるんだ？ そんな……何処のどいつに唆された？ ぶちのめしてくる」
「待つて待つて！ 顔怖いよ！ それにこれは京香さんが——」

「京香？」

なんでここで京香の名前が……と考えて、ああと納得する。なんてことはない、憑代に選んだのは芦花さんだったのだ。

全く無関係な人間を巻き込んで大変ムカつくが、事情を知っていてそれなりに体格の近い人物となると消極法でこうなるのは必然か……微妙な顔をしているのだろう。芦花さんは「たはは」と笑っている。

——まあ、今やることは一つだけか。

「とりあえず駒川のトコ行くよ。比奈ねーちゃんを安静にさせないと。それから芦花さんも診てもらえよ？」京香に動かされたんだろ」「そこまで大袈裟でも……ま、行つた方がいいかな？」

「いいや大丈夫だ。馨から借りてた燃料を回復に回した。問題無い」

「……京香」

刹那、芦花さんから分離した京香が姿を現わす。……やはり俺から完全に離れていたらしい。ここに来るまでに虚絶が教えてくれた。

俺から離れた以上は、もはや言葉を交わすことは実体を通じなければ不可能だと。

「根掘り葉掘り聞かせてもらおうぞ」

だからこそ、もう聞かないというのは無しだ。

いい加減話してもらおう。人にぶつちやけちまえと散々言つてたんだ。自分がそういう側に回るくらい、甘んじてもらおう。

それにもう、事ここに至つては個人の話ではない。喋りたくないは通用しない。

口を割らせてやる。

割らぬというなら裂いてやる。

いい加減にな。

駒川の所にねーちゃんを預け、俺は芦花さんと京香を連れて朝武家に戻る。

そして戻つて早々、みんなの視線が右腕に集中していた。はてなんだつけど見てみると、制服の右袖は血塗れになっていた。……ああ、すっかり忘れてた。

「や」

「や、じゃないでありますよカオル!? みみみ、右腕！ 右腕は大丈夫

でありますか!？」

「ん？ ああ、これ？ ファッション。あるいは手品。それかケチャップ」

あたふたと慌てるレナに笑顔を見せつつ、事情を知る面々には「黙っててー!」と視線を投げしておく。別に俺の内面の話はどうでもいいが、虚絶の代償は流石に面倒だ。命に関わる話だからな。

「なあ、なんで芦花姉が？」

「んー、簡単に言えば京香が芦花さんに取り憑いて魔人に取り憑かれた比奈ねーちゃんを迎撃してたから」

「……そう、か」

将臣の表情はとても複雑そうだ。気持ちはとてもわかる。無駄に色々と事態をややこしくしたくないというのは、俺も同じだからな。

ただ憑代として選ばれた人が意外だったのか、芳乃ちゃんは大層驚いていた。

「中条先生が……？ ということは、とても近くにいたってことよね……」

「間違いなくね。で、事情を知ってる京香。いい加減全て話せ。俺たちは知らなきゃいけない。魔人が何者で、何を狙っていて、俺たちはどうしなきゃいけないのか。あとお前の姉について教えろ」

そうして視線が集中する。

そして京香は顔を歪めて——黙った。黙り込んだ。黙り込んでしまった。苦い顔で。

いやおい……てことはあれか。

……まさかなあ。

助けを求めるつもりで芦花さんに視線を投げてみると、彼女も苦い顔をした後、黙り込んだ。

いや、いやいやいや。

「京香？」

「……………」

「芦花さん？」

「……アタシはちよつと、色々言い難いというか……知ってるには

知ってるけどさ」

「こ、困ったな。」

「どうしよう、か……な。」

「……ええつとき、二人とも?」

「いいや、馨……わかつているんだ。もういい加減認めないとダメなのは知っているんだ。だけど、やっぱり私も必要なんだ、時間が……明日だ。明日言うよ、全てを。芦花ちゃん、言えなくなったら頼むよ」

「本当にいいんですか?」

「いいんだ。いい加減に、あの人は転生したことを、私も認めなきやいけない」

「……とにかく、明日か。」

微妙な顔をしたまま芦花さんの中に戻る京香を見送った後、ジツと視線を向けられる芦花さんはポリポリと頭を掻きながら、困ったように一言。

「み、見ないで欲しいな……なんて」

「言い方がやらしいわね」

「ええ、やらしいですね」

「やらしいよな」

「やらしいでありますね」

「やらしいよ芦花姉」

「やらしいね芦花さん」

「みんなでやらしいって言わないでよ!?!」

涙目になった芦花さんは可愛かった。

「……ついつい見惚れていたのを茉莉にバレないか不安だが、まあ、うん……許してくれるよね?」

今日の夜は芳乃ちゃんの家でいつも通りにお勤めをすると茉莉は言って、またねと手を振って別れた。

お互いに名残惜しいが、しかし今日考える時間をくれと言ったのは俺だ。

魔人の件もあって、レナを送ってから帰ることにした。

珍しくレナと俺だけの時間。そんな中で彼女は俺の顔を見ると、クスクスと笑った。

「ふふつ、なんだか面白くなさそうですね」

「そうかア？ ……まあ、菜子と長くいれないからかな」

「本当に、カオルはマコが好きなのですね」

「ああ。俺の……」オレ”の、運命だからな」

運命。

我が運命——そう言っても過言じゃない。菜子の存在は、俺の中のほとんどを占めている。

そんな言葉に暖かいものを感じたのか、レナは優しく微笑みながら、単なる好奇心からか、こう言った。

「カオルは……どのようになれば菜子を一番愛せるのですか？」

「菜子を、一番……愛せる？」

「その、ほら、色々あるじゃないですか。せつ、セツ……くちゅ……とか」

「あつ、ああー、そういうことね。そうか、菜子を一番愛せることか……」

菜子を愛せること。

俺の愛を、如何にして菜子に証明するのか。その答えは——なんだろうか。

……少し考えて、彼女の白く細い首が思い浮かんだ。何度も何度も、行為をする中でも、彼女の首に手を当てて、ゆっくり撫でていた。

——俺の、愛とは。

——オレは、彼女を愛している。

——愛しているからこそ、闇の情動に従って。

闇？

いいや、そんなものじゃない。

己の衝動とは。

——彼女を、常陸菜子を、最愛の人を。

——殺すこと——

……そこでああ、と納得した。

オレの魔性は、オレの始まりは、オレの自死の選択は、そこにあった。

オレの魔性……それは愛す≡殺すこと。

愛しているからこそ殺したい。

殺したいから愛しているのではない。愛している、だから愛を捧ぐ為に、愛を証明する為に殺す。

茉莉を愛したからこそ殺したいという矛盾して矛盾しない魔性を見て、オレは自身を魔人だとはつきり認識したのだ。愛することは罪だと思ったから。

……なんて、今更な。

「カオル？」

黙ったオレを、レナが覗き込む。

「……ああ、いや……茉莉の側にいて、茉莉と一緒に月を眺めることが、一番愛せることだよ」

それとなく誤魔化しつつ、オレは魔人の分体を喰らったことで一つ蓋を手に入れたことですねと魔性を自覚して、ついでに言えば抑えも効いている。

……さて、これで魔人を倒せばオレは恐らく……抑制されていた愛するが故に殺すという魔性の感情が荒れ狂うだろう。だがオレは茉莉を人として永く愛すると決めたのだ。魔人の愛し方では茉莉を永く愛せない。刹那的すぎる。それではダメだ。人の愛し方ではない。だから愛す^{殺す}ことは決してしない。そう決めた。ならば貫き通すだけ。どれほど手が出そうになっても問題無い。その程度なぞ簡単にねじ伏せれる。そもそも虚絶に大半が持つてかれて、オレに残っているのは残滓だけだ。

だが、虚絶によってそれが増幅されていた場合が面倒だ。しかしあくまでも虚絶の仕業。叢雨丸で断ち切れば、オレは解放される。もしそれに失敗すれば……茉莉を殺してしまうだろう。生きろと言われ生きると決めたなら生きる。それが善でも悪でも関係無い。オレの

悪い癖が悪い形で発現しそうだ。

兄弟……虚絶の意志はオレを本質から遠ざけようとしたのだろう。今ならわかる。全て理解した。これがあつてはオレは決して生きていけない。あの自殺の一件以降、これを外していたのはまさに神の一手だ。今ならだからどうしたと受け入れられるが、かつてでは無理だったろう。

——だから将臣、頼んだぜ。

約束を果たす時が来たなら、その時はオレを倒せよ。

「レナも、きつと何処かで会えるさ。オマエの運命つて奴に」

「わたしの運命……おお、ロマンチックでありますね！ でもそんな風に、素敵な恋愛をしたいものですよ」

「絶対にできるよ。オマエなら」

レナはきつと、運命に会える。

間違いない。

それがいつになるかは分からなくても、きつと彼女は運命に出会える。

「……つと、もうか。参ったな、オマエといえるのも心地が良いからすぐに時間が経つちまう」

「そういうことを言つて、マコにジェラシーされても知りませんよ？」

「本音を言つちや悪いかい？」

「カオルはダメでありますよ」

「ひっでえや」

ケラケラと笑うと、レナも釣られて楽しげに笑う。

そしてひとしきり笑った後に、笑顔で彼女に手を振る。

「また明日、レナ」

「はい。また明日でありますよ」

そうしてオレは一人帰路に着く。

……オレの為すべきことは、もうわかった。

……この数奇な運命に感謝を。

そして魔人よ、オレの前に立ちはだかるといふのならば超えてやる。

オレがかつて選んだことのツケを払えというのなら払ってやる。
オレが茉莉を害する魔人となるのであれば喜んで将臣に斬られてやる。

……オレが求めても得られなかったもの。手に入れる前に消え去ったもの。忌まわしい力と記憶をもつてしても、触れる前に深淵へと溢れた無数の星屑——その鬱積を、そこで焼却する。

その最果てにオレは、彼女と一緒に、人になる。

暴走

今日もまた夢を見る。

そしてすぐに入ってきた光景が穂織の山中ともなれば、自然と共に見る人も想像が付く。

「マサオミー」

「ああ、うん。なんて言えればいいのかな」

「おはよう、は違いますでありますからねえ」

なんて挨拶したものか、と頭を悩ませつつ、記憶の再生が始まるのを待つ将臣とレナ。

そうして一際大きなノイズが走ると、そこには犬神と玉石の女神の姿が。

「姉君、怯えることもありませんまい」

「わかってる……わかってるわよ」

犬神の言葉に頷いてゆつくりと歩いて、コソコソと隠れながら山中でも明るい場所に向かっていく女神。その姿は全然神様らしくない、まるで初心な少女のような。あるいは、何処かのヘタレで告白も中々できない男のような。

それほどまでに親近感の湧く、そんな姿であった。

「神様って人間臭いもんなんだな」

「なんとというか、とても可愛らしいです」

「うん。これは可愛いよね」

威厳無く、なんとというか、可愛い。

そうして女神はおっかなびつくり移動して——目当ての場に着いたのか、チラチラと木の陰から様子を伺い始めた。

将臣もレナも、彼女に倣って様子を伺ってみるとそこには……

「……は？ 俺？」

「おおー……」

もう一人の将臣がいた。

いいや、正しく言うなら将臣とよく似た人物がいたと言うべきか。意味不明な光景過ぎて訳がわからない。開いた口が塞がらないし

目を丸くしてもし足りない。

将臣に比べて髪は乱雑でボサついていて、顔立ちは似ているんだか似ていないんだか。目つきは鋭く、よりがっしりとした身体、着ける衣服はみずぼらしい和装で、握る刀は太刀の類。

（俺に似てるってことは、鞍馬のご先祖様か？ いや、でも……）

確かに似ているのだが、何故か根本的に違う何かを感じる……不思議とそんな感情が湧き上がる。さっぱりよくわからないが、恐らくこの侍が女神の――

「……む」

愚直に素振りを続ける侍が、チラリと女神の姿を捉える。視線が合えば、彼女はすぐさま隠れてしまう。

「その御仁」

「……っ」

「……ふむ、狸にでも化かされたか。まあ、よい」

いやよくねえよと言いかけて、これが記憶の再生であることを思い出した将臣は、大きいため息を吐いた。

……絶対これ面倒臭い奴だ、と。

「ねえ、レナさん」

「はい」

「俺、なんだか先が思いやられるよ」

「奇遇でありますね。わたしもですよ」

真顔。

初心すぎる女神の行動を見せつけられるのは、御免被りたいが……それが全てというなら見るしかあるまいて。

チラリと女神が覗く。素振りを止めて男が視線を向ける。女神は慌てて隠れる。怪訝な顔を見せてから素振りを始める。

覗く。向ける。隠れる。素振り。覗く。向ける。隠れる。素振り。覗く。向ける。隠れる。素振り。素振り。覗く。向ける。隠れる。素振り。覗く。向ける。隠れる。素振り――

「鬼ごっこかな」

なんだろう、この隠れんぼ。

恋愛劇の類ではと思っていたが、これでは小学生が気になる子にチラチラと視線を向けている絵面と何が変わろうか。

それから何分、何十分その光景を見せ続けられたのだろうか。だいぶ気が重くなってきた頃、侍は素振りをやめ——去っていった。

「帰っ……ちやっただでありますね……」

「帰っちゃったね……」

女神は止めない。ジツと見ている。

そうして見送った後に——

「……ど、どうしたらいいのかしら。あんなの初めて……」

初心も初心かよ。

二人はポカンと口を開けて、間抜け面を晒した。

女神はあたふたとしながらも山中へ戻り——それから、二人(?)の奇妙な関係は始まった。

侍が素振りをしに来るのを覗き見る女神。

それが何日も何日も続いて——一月にも及ぼうかというくらいに時間が経ってから、彼女は漸くもう一步踏み出してみようと考えた。見るだけでも楽しかったが、その先が欲しいという心に従った。

しかし。

「……」

——不動。

その有様は岩石の如く。

覗き見たまま動かぬ。

最早何と言ったものか。

……恋するが故に恋に臆病過ぎる少年とも言えるようで、あるいはヘタレの中のヘタレとも言えるようで。いやはやその様、何処ぞの稲上さん家の馨君が一番拗らせていた頃にかなり似ている。

こつちの方がかなりマシだが。

「……ねえレナさん」

「ジゴクでありますかね。恋愛的な」

「地獄か。地獄だな」

「おや、おサムライさんが気が付いたみたいですね」

「あ、ホントだ」

二人はそのなんとも言えない感じな大昔の方々に目を向ける。

「——その御仁。ここのところ毎日のように見かけますが、某に何かご用がおりでしようか」

遂に侍が女神に声をかけた。

大方、気が散って仕方なかったのだろう。狸に化かされているわけでもなしと判断して声をかけたのだ。

すると女神はおずおずと木の陰から現れて、威厳を保つように佇まいを直すと彼に問いかけた。

「何をしていらっしゃるのですか」

「ご覧の通り、剣術の鍛錬を」

「……何故鍛錬などするのかと聞いています」

「某は郎党。一度主命が降れば戦にて敵を討つ故、備える必要があるのです」

「やはり、この近くの者でしたか」

——郎党。

の、割にはかなりみずぼらしい。

当然ながら女神と並ぶと雲泥の差だが、これでは普通に郎党の中でも下っ端の類だろう。

だからこそであろうか、侍は物凄く怪訝な顔をしながら女神に尋ねた。

「しかし……やんごとなき姫君とお見受けしましたが、女人一人で山中とは危険でありますよう。某でよろしければ、お帰りになられる道中、ご同行いたしますが——」

が、女神はさつきまでの恋愛弱者的な態度とは一変してきっぱりと。

「結構」

「……ええと」

「結構だと言いました」

まあ当然のことだ。何せ彼女は神。神とは人智で測れぬからこそ神であり、そもそもこの山は彼女の庭。危険など荒神でも現れぬ限

り存在する由も無い。

ただそれを言うにはあまりにも突拍子が無いので、このような態度になったのだらう。この辺りに神の人の差を感じるレナと将臣であった。

「それにそなたがいるではありませんか。日がな一日、剣を振るう剛の者。危険が迫ったとて、問題無いでしょう」

「某は未熟者ですぞ？ 姫君、本当に帰らぬのですか」

「ええ。帰りません」

「見たところで何も無いはずぞ」

「それでもいいのです」

「……わかりました。ならば何も言うますまい」

侍としてはこの気が散る奇妙な相手を、さっさと帰らせて素振りに集中したかったのだが、生憎と女神はそういう彼の姿が見たいので……それつきり二人は話すことなく、奇妙な状況のまま、時間が流れていく。

「……そういえば、某が鍛錬を終えるのは夕刻手前なのですが……」

「問題ありませんよ。私は」

「姫君、少々危ういのでは……？」

「わかっています。夕刻であろうとも平気です」

「姫君」

「それよりそなた、鍛錬は？」

「あつ、いえ、はい……？」

なんだろうか、このデコボコ感。

見えて微笑ましくて、けれど何処かもどかしい。

二人はこうして初めて言葉を交わした――

「なんていうか、あったかい雰囲気になっとなってくれたなあ」

「そうでありますね。けど……」

あの犬神が「恋を知りたい、そこから得られるものを知りたい」という理由。

……そして女神は現代には存在しないこと。

恋に纏わる何かで、恐らく……女神は。

引き戻される意識の中で、二人はこの恋がせめて穏便に終わっていればいいと、次に待ち受ける恐怖を忘れるように、既に終わったことだというに、祈っていた。

■

……目が覚めた。

深呼吸を一つ。

瞼を閉じた瞬間、思い描かれたのは茉莉子の白く細い——首。

情動にも等しい殺意／愛情が湧き上がるのを感じるが、愛するのだとねじ伏せる。

「……いかな」

困った。

蓋が蓋として、そこまで機能してくれていない。無いと困るのだが、これでは有って無いようなものだ。湧き上がるのは気持ちだけで、それをねじ伏せるのは容易くまた実行に移さない程度なのが救いか。

「……今日はオレか」

少し方向性を変えておこう。

オレのやり方を徹底して叩き込めば、オレを打ち破るのはそう難しくない筈だ。更に言えば相性そのものも最悪。受けに回れば潰されるのが目に見えている。

『オレならこうする』『だからこうすればオレを倒せる』——その思考を鍛えねば。たぶん、魔人はオレと京香で当たることになるからな……当てたもの勝ちの将臣を消耗させる訳にはいかな。

むしろオレが消耗していれば万々歳だ。魔人を葬った後には恐らく、暴走するだろうし、その点を考えればこれがベストだろう。

「……行くか」

なればこそ手を抜けん、ということか。

アイツを、全力で鍛えてみせるさ。

——オレを、倒せる程に。

「よう、将臣」

「おう、馨」

ムラサメ様を連れて現れる将臣。

夢見は……良きそうで何よりだ。寝不足といった様子も無い。

——まあ、オレの方はわかりやすかつたんだろう。ムラサメ様は怪訝な顔を少しだけ見せて、だがそれも一瞬で消えた。

「馨、話せよ」

……訂正。

この場で聞くことをやめただけだった。まあ別に、喋らない理由が無いし、むしろ喋らなくてはならないことだし、必ず話すつもりだったが過去の自分の言動故にこんなセリフを言われるのだろう。

「わかつてるさ、ムラサメ様」

「……？ なんのこと？ ムラサメちゃん」

「後でわかる。気にするなご主人」

腑に落ちなさそうな将臣だが、仕方ない。話せば恐らくこの鍛錬の時間が丸々なくなつちまうからな。竹刀を投げ渡しつつ、オレは自分の竹刀を——構える。

「構えろ将臣。小技は後で教える。昨日まででどれだけ変わったか見せてみる」

「急だな」

そんなオレに対して不思議そうにしながらも構え——全身から闘気を漲らせる。その闘気の中に『こいつものすぐく面倒くさい奴だから何が何でも聞くぞ』というようなものを感じる。

……そんなにオレ信用無いかねえ？ 信用ねえわ。それも将臣とムラサメ様からここまで思われるくらいなら、茉莉と芳乃ちゃんは——ああ、考えたくないなア。二人には悪いことをし続けたし……

「……馨？ いつやるんだ？」

「へ？ ああ、うん。じゃあムラサメ様。審判を」

「よかろう。では——始めっ」

凜とした声と共に、オレたちは駆ける。

——いや、オレが早かったが、これは将臣が遅かつたんじゃない。

”遅らせた”んだ。受けに回るといふことは、シンプルに一手遅い。だがその遅さを逆手に取って、殴り合いに有利に立つ。とてもわかりやすい戦法だ。

……オレは受けが下手だからな。先手を取ってから戦術を組み立てる。

茉莉に攻められてても途中で妙に負けん気が湧き上がってこう……じゃねえ!!

さあ、どうする将臣——!!

……そして。

朝の打ち合いは。

大体オレが悪い方向な結末を迎えた。

「ねえ馨くん」

「何か」

「なんであんなに有地さんとムラサメ様は微妙そうな顔してるの？」

「……それは、ええつと……」

「やりすぎたとか」

「うん」

「そっかあ」

通学路。

主にオレの所為で微妙な顔をしている将臣とムラサメ様を見て、茉莉がなんだか呆れてんだかよくわからない顔をする。

——ニコニコと、芳乃ちゃんが振り向いてやけに明るい声でオレに尋ねる。

「馨さん、私の彼氏に何したの？」

怖い。

「何もしてないよ!? ただちよつと……素手で竹刀を破壊して驚かせただけで」

「馨さん」

「はい」

「鍛錬なのに何故竹刀を破壊するって言葉聞こえるのかしら」

「……ごめんなさい」

折られた。

こういうところ、子供の頃変わってないよなあ。ホント、姉貴みたくに中々頭の上がらない人だよ。というわけで茉莉に慰めて欲しくて視線を向けたのだが——生憎と更に微妙な顔をされた。

「茉莉、オレに優しくしてくれ」

「いや全面的に馨くんが悪いから」

「茉莉……」

「そんな捨てられた子犬みたいな声と目と表情されても困るよ」

本気で困ったと言わんばかりにスタスタと先に歩いて行ってしまふ茉莉を、ああ待ってくれと追いかけてつ、その通りすがりに幼刀主従へ向けて。

「マジごめん」

「いつか仕返ししてやっからな」

「許して」

「吾輩はどうでもいいのじやが、ご主人」

「許さん」

どうやらご立腹のようで。

いやまあ、確かに無手にされたからって竹刀をへし折って刀身もぎ取ったオレもオレだが、いいじゃん別に……

うむむと唸るオレ。知らんと拗ねる将臣。知ったことかと先に向かうムラサメ様。実にオレらしくない光景だ。

「将臣さん、置いていきますよ」

「先行ってるよ馨くん」

途端無言で走り出すオレたち。

彼女に置いていかれるのは、少し嫌だ。将臣がどうなのかは知らんが、とにかく嫌なのは確かなようだな。じやなきやあオレより早く行く理由も無い。

それから何事も無く過ごして、昼。

オレと茉莉はいつものように二人きり。学院の裏山で腰掛けなが

ら、飯を食べていた。

だが――

「菜子」

「なに？」

「いや……その、アレだ。スカートの中、見えそう」

「下着なんていくらでも見たよね。なんで今更恥ずかしがってるのかな」

「学院、だし」

「ふーん」

なんでも無いようにふーんとだけ。あとは知らんと箸を進める。

コ、コイツ……!!

オレを誘ってるのか、あるいは本当に気にしてないだけなのか。いや恐らく菜子のことだ、気にしてないのだろう。だってコイツ家の中じゃだらしのないタイプだし。まっさか、オレの家とは言えどもパンツ一丁で過ごされるとは思わなんだ……

無防備すぎる。心配だぞオレ。

「……あ、先食い終わっちゃまった」

「中々馨くんと同じ速度で食べれないね」

「オレが早すぎるだけだよ。いいじゃないか、ゆつくり食べたって」

「ただお弁当食べてるワタシを見ても面白くないでしょ？」

「？ オレは菜子を見てるだけで楽しいけど……」

「ワタシが気にしちゃうかな」

「わかった」

困ったように言われては、目を逸らすというもの。オレは菜子が食べ終わるまで周りの景色を眺める。

……しかし、実際落ち着くな。木々の揺れる音、川のせせらぎの音、鳥の飛ぶ音、虫の鳴き声……なんとというか、いい具合に心地良い騒々しさがあって好きだ。

いいな、本当に。

まあでも、結局オレは菜子との二人きりの時間が欲しくてたまらないのであろうが。そんなわかりやすい自分を自嘲しつつ、チラリと菜

子を覗き見る。

……別段何か変、というわけでもない。普段と何ら変わりない菜子の姿だ。

視線を戻し、空を見上げる。

いつかの空のように、青い空。

人の悩みも何もかも、知らぬとばかりに澄んだ青空。

「何見てるの?」

「空」

「……とつても青くて綺麗だね」

「そうだな。綺麗だ」

ここでオマエの方が綺麗だよなんて気取ったことを言うのは三流だ。人の話を聞いていないのか……自己満足だとか、そういうことだと取られても不思議じゃない。

「食べ終わったのか?」

声をかけてきた菜子だったが、オレは特に何も知らないのとおりあえず聞いておく。

「うん。だから……こうしちゃう」

そうして返事と同じくらいに、彼女がオレの膝……というか腿に頭を乗せてきた。えらく幸せそうな顔している。男の膝枕なんて、面白くもなんともないと思うのだが。

菜子の髪を崩さないように気を付けながら、ゆっくりと撫でる。サラサラとしていて、いつまでも触っていたい気分だ。

「菜子、オレの膝でいいのか?」

「全く良くないね」

「おい」

「冗談だよ。あは」

「……オマエの冗談は判断に困るよ。んで、どうなんだ実際」
「んー、有り難みがよくわからないかな……」

頭撫でられるだけなら、そう変わらないし……と複雑そうなことを言いながら、けれども言葉とは裏腹に割とだらしない顔でスリスリと顔を寄せる。しかしながら技術の無駄遣いを感じる身体の倒し方だ。

……おかげで色々大変である。

「なあ、楽しいのかそれ」

「全然」

「だろうな。……ほら」

いい具合に寄りかかれそうな木が後ろにあっただので、少し背を預けつつ軽く腕を広げる。それを見るや否や、茉莉は身体を起こし、姿勢を変えてオレの胸に顔を沈めてきた。

……暖かい。茉莉の温もりだ。

「馨くん」

「どうした?」

「呼んだだけ。あは」

「そーかい」

視線を落として、目が合う。

吸い込まれるような瞳に見惚れていたら、茉莉が微笑む。そんな様子がとても愛おしくて、ぎゅっと抱き締める。

「……ふふつ、すりすりーっ。……あは」

スリスリと胸板に顔を寄せて楽しげにしている茉莉。何が楽しいかわからないけれど、きつとオレが茉莉の胸に触れている時のようなものなのだろうとテキストに考えておく。

「えへへっ、あったかーい。馨くんの温もり、大好き」

「そうか? 自分じゃよくわからん」

「ワタシはどう? あったかい?」

「ああ。とつてもあったかい。安心する」

「そっか」

「うん。あと柔らかい」

「やらしいよ」

「やらしいさ」

だがオレは失念していた。

あくまでも奴の分体は、薄い蓋。

本来の蓋である魔人は外れかかっている上、京香に至っては完全に外れている。

がない。

どうすれば——!?

——その行為を他のに置換するんだ——

その時、兄弟の声が聞こえる。

置換、置換……この感情は愛情なのだから、逆を言えば——そうか。

「ごめん、茉莉——」

「急にどう……んっ……!?!」

有無を言わず抱き寄せて、唇を重ねる。あまりにも急なことで、いつもなら茉莉だつて応戦してきたり身を寄せてきたり……とにかく恋人としてのアレコレな感じなのに、今回に限ってはひどく驚いた顔で、オレにされるがまま。別に舌を突っ込むわけでもないけど。

……まあ当然だ。

普段は控えめだし、オレ。

行為の時くらいしかがつつかないと思っていた茉莉が驚くのは当たり前前だ。

——愛情に由来する殺意なれば、愛情に由来するものに置換すれば一時的に解消される。愛情に由来する独占欲とか、性欲とか。とにかく何でもいいから愛するが故に何かをすれば良い。

……なんてことはない、普通に愛することこそが魔性を消し去る唯一の方法、という訳か。

ゆっくりと唇を離し、ジッと茉莉の瞳を見つめる。……落ち着く。魔人としてのオレは鳴りを潜め、人としてのオレが戻ってくる。

……参ったな。魔人を葬るためとはいえ、オレが茉莉を殺める危険性があるなんて。こればかりはさっさと言わなければならぬ。

「……びっくりしちゃった。どうしたの? 急に。今日はすごく情熱的だね」

頬を朱に染めて、瞳は少し潤んで、驚きながら、けれども満更でもなさそうな微笑みを浮かべて、ちよつとだけ身動きして、優しく問う茉莉。

いやホント、度し難い魔性を持って生まれ出てきてしまったものだ。家族愛、友愛、異性愛——ありとあらゆる愛情が殺しによってし

か表現できないし、表現してしまうなど。神話の登場人物か何かかオレは。

「あー……悪い、我慢できなくなった」

「珍しいね」

「オレだって男だぞ?」

「……なんだか、雰囲気変わった?」

「変わったというか……」

少し、言い淀む。

けれども、いつかは言わなきゃいけないこと。それに——茉莉子を、愛しているから。

「……オレ、さ」

……ゆつくりと、意識を整えるように言葉を紡ぐ。

「実はその……人とは愛するつてことが微妙に違つて……」

そうして紡がれた言葉は、あまりにも抽象的すぎて茉莉子もさっぱりわかっていない。

だから勇気を込めて——

「ええつと、その……愛しているからこそ殺したいっていうか、殺し愛というか……とにかく、オレの魔人たる由縁はそれなんだ」

オレのハラワタの中に潜む、最も悍ましい感情を、告白した。

不思議なものだ、一度語ればスラスラと言葉が出てくる。それこそ罪の自白のように。

「悪いことだと分かっている。してはいけないと知っている。けれどもそうするのが普通で、そうしなければ生きていけないからやってしまう。でもそれは人の生き方じゃないし、生きるのならばそれを貫き通してしまふから、死を選んだ」

キミと同じで人として生きて人として死にたかった。

キミと同じ世界に生きて死にたかった。

——けど、できないからオレは……

「……まあ、まさか虚絶によって生存の邪魔だからって大半を持ってかれてたなんてのは、気付かなかったけどサ。だから虚絶と接続している限り、完璧な形でこの魔性は存在する。自分で止められるけど、茉

子を愛^殺そうとする衝動そのものは消えない」

結局オレは死ねなかつた。

虚絶によって生かされた。

そして、宿痾は遠くへ。しかしオレを蝕み、様々なものを捻じ曲げて補完し、核心を隠しつつ、確かにそうである理由をオレは与えられた。

それが巡り巡って……こんな風になろうとは。止められるけど消えないまま。オレは彼女を、愛^殺そうとしてしまう。

「つまり、馨くんはワタシを殺したいの？」

なんでもないように、確かめるように、茉莉は真剣な声色で問う。だがその答えは決まっている。悩むより先に、言葉が出てきた。

「バカ言うな。オレはオマエを愛している。だからこそ愛^殺したいとほんの少しだけ思ってるだけで、けれどそうしたらオレは人として生きられないし、オマエを人として永く愛するって決めたし、人として死ぬんだけって決めてるから、茉莉を殺すなんて有り得ない。絶対にしない。する筈がない」

……とは言ったものの、先ほど手を出しかけた。

「……信用、できない……よな」

そんな男を、どうやって信用も信頼もできるといふのか。

「怖いなら逃げてくれ。オマエの選択だ、オレは納得する」

ゆっくりと彼女を押し、身体を離しながら、逃げたって構わないと、彼女とずっと一緒にいたい本心を押し殺して言う。

一秒か、十秒か、一分か、十分か——わからないくらいに長くて短い時間が過ぎ去って、それこそオレは今にも首を斬られる罪人のように、彼女の言葉を待つ。

そうして。

「答えなんて決まってるよ」

なんだか予想と違ったことが聴こえて。

「それが、どうしたの？」

——は??

「……えっ?」

いやそれがどうしたって……

さも当然のように、というかむしろなんでそんなことで悩んでいるんだオマエはみたいな雰囲気できっぱり斬られてしまった。

その証拠に茉莉は一切離れることもなく、普段通りの雰囲気です。ジツとオレを見つめている。

「だって馨くん、これって前にあったことじゃん」

「いやでもそれは——」

それはオマエを殺すための存在だからというだけであって、いや確かに殺せてしまうからと遠ざけていたけれど。理由が違う。こっちはウン十倍も気持ち悪い。

パラノイアすぎる。

「愛しているから殺したくて、でも愛しているから殺したくない……ワタシにはさっぱりわかんないけど、状況そのものは告白する前なんにも変わってないよ。だから気にしないで。悩まないで」

「茉莉……あのな」

「だって、愛は狂気なんだもん。愛する者に正気なんてない。ワタシもアナタも、お互いがお互いに狂ってるから」

「けど……オレは……」

そう言われてもと、言葉を詰まらせてしまう。

だから——

「……あは」

そんな小さな呟きは聞こえなかったし、彼女が首に手を回してきて、距離をゼロにするなんて、想像もしていなかった。

「——」

予期せぬいきなりの行動に、オレは唾然とする。

そして数秒だけ重なっていた唇を離して、茉莉は微笑んでいた。

「……オマエ、何してんだよ」

「少なくとも公衆の面前ですることじゃないこと」

「そうだけど意味は」

「したいからした、それだけだよ。馨くんのそれと同じ。止めようと思えば止められること」

「だからって——」

確かに問題としては同じだがレベルが違う。そういう域ではない。キスしたいという衝動と愛殺したいという衝動では話が違いすぎる。

だから言い淀んでいると、茉莉は拗ねたような顔をして、オレに向かつてこんなことを言った。

「……というかワタシの目が曇ってるって言いたいなの？」

……全然そんなつもりなかったけど。

更に言い淀む。茉莉は続ける。

「ねえ、目を見てよ」

言われた通りに合わせてみるけど、罪悪感がすごい。

「馨くん。好きだから、愛しているから殺したいんだよね」

「そうだけど、気味悪く思わないのか」

「思わないよ。そんなもので離れるくらいなら、あの日ワタシはアナタに、あんなダメな告白してない」

あれは、墮天のお誘いだ。

想いを伝えるには自分は呪いを振り撒きすぎている。だからせめて、お互いの気持ちに気付いているから、時折だけ、愛し合おう——一歩前に踏み出せなかった茉莉なりの告白。

……だがあの時受け入れたのは処刑人のオレで、このオレの魔性については話が違う。

「けどな茉莉、オレは——」

「ワタシの知ってる馨くんは、手を出せないへタレだけど、約束はちやんと守ってくれる人。だからもう気にしてない」

「言い方がひでえな」

「でもこれくらい言わないと、馨くん信じてくれないでしょ」

「……」

ぐうの音も出ない。

「止められるんだよね」

「ああ」

「なら、心配なんてしてないから。信じているから」

「それでいいのか？」

「それでいいんだよ。でもワタシを信じてくれなかったのは、ちよつとショックだったなあ」

悪戯っ子のようなニンマリとした笑み。

はてさてどうしたものか……どうやったら許してもらえるものか。

「何をどうしたら許してくれるんだ」

「ワタシ、元気が欲しいな。愛情^{殺意}だけじゃなくて、もつと別のもので……ね？」

より身体を寄せながら、蠱惑的な言葉が紡がれる。

甘い吐息混じりの、耳元で囁かれるその言葉。

さて、オレだって男だ。そんなことをされてしまったら当然。

「論理的に意味がわからん」

茉莉はオレが彼女を信用、信頼していなかったことにショックを受けた。そしてオレはどうやったら茉莉に許してもらえるかを聞いた。

なのにどうして元気が出てくるのか。まっつたくわからない

……

「アナタがそれを言う？」

「なんで元気が欲しいなんだよ。そっちだよ。オレの思考が論理的に意味がわからん代物なのは分かりきってる」

とりあえず素直に言っておく。

そうしたらよりぎゅつと抱き着かれたので、応えるように抱き締める。

「……変なところで馨くんって真面目だよね」

「そっちで拗ねるなっば。とかいかいきなりキスしてごめんな。ああでもないといっ爆発するかわからなくて」

「ふーん……っ？」

背中に回されていた手が、頬に添えられる。からかう時の声色のまま、茉莉は都合が良いと言わんばかりに――

「じゃあ、何の問題も無いね」

「いや問題だらけだろ主にオレ」

「全然無いよ。だって馨くん、そういうことで爆弾にならずに済むんだから」

「……そうだけどさあ」

「ね、もつと顔を見せて。ワタシ、馨くんの目が見たい」
「どーぞ」

直後もう一度、唇を重ねられる。

甘い味だ——溶け落ちる程に甘美な、愛の味。

茉莉のいい匂いがグズグズと理性を崩していく。

……つか、顔を見せろと言っておいて目を閉じてるのはツツコミ待ちなのだろうか。なんか舌突っ込んできてるし、オレが無防備に受け入れてばっかだし。

「ん……は、む……ん」

あのさあ、茉莉。

おかしいなあ、シリアスな流れだった筈なのになんで普段イチャついている時みたいになってるんだろう。

……まあ、それがオレも彼女も望んでいること。したいこと。欲しいこと。魔性なんか忘れて、溶け落ちるまで愛し合いたい……それが結局答えだった。

考えてみればそうか。

茉莉がこの程度でオレから離れるのなら、彼女が犬になった時点でもう離れている。

……みんなオレと違うのに、ついついオレの思考をベースに考えてしまうのは悪い癖だ。

「ん……あ、馨くん……」

ゆつくりと離れる、ちよつと蕩けて薄赤くなった茉莉。

——流石にもう無理だ。ここまでされたら応えざるを得ない。火が入った。据え膳食わぬは男の恥……というよりも、オレがただ単に茉莉の蕩々になった顔が見たい。

「ん……っ」

三度目はどちらからともなく、言葉もいらさない。

貪り喰らうように唇を重ねて、舌と舌を絡めて、自分色に染め尽くしてしまいたい、相手色に染め上げられてしまいたいと唾液を交換しては飲み干して——

もつと、もつとと言葉無く互いを貪る。淫らな水音が響いて、喉の鳴る音がする度に掻き立てられるものが、意識を塗り潰していく。

この先にある、汗に濡れた身体で蕩けた“女”の顔をした菜子が見たいと……そのまま喰らい尽くしたいと……そう思っ、呼吸の為にキスを止めた時押し倒そうとして。

キンコンカンコンと、聴き慣れすぎた音が耳に入った。

「今のは……チャイム？　ってことは、昼休み終わった？」

「あ……あ、あは……お、終わっちゃったね……」

急いで身を離して、顔をお互いに真っ赤にしながらなんとも言えない感覚に蝕まれる。

身体はその気なのだが、心は完全に平時のそれに戻ってしまった。心と身体が矛盾している所為で、この狂熱の行き場がすっかりなくなっている。しかもここから授業続きで、更にオレは将臣との鍛錬があつて京香からの報告で……ひどいおあずけである。

「なんか不完全燃焼だな」

「そうだね。授業、また遅刻になっちゃった」

女の顔と少女の顔——色々とそういう意味では扇情的な顔をしながらも、モジモジと身じろぎしながら、困ったような表情の菜子に、オレも苦笑しながらポリポリと頭を掻く。

「ま、しょうがねえさ。オレたち、バカだもん」

「もつといい言い方無いの？」

「無い」

遅刻になつてしまったし、冷静に考えると制服でやつてしまえば物凄くその……後の授業もそうだが制服のスペア的な意味で大変だ。愚かな男としてはそうした背徳感も楽しみたいところではあるが、まあここは大人しくお預けを食らつておこう。

——そんなわけで、お互いに渋々と、食後のデザートを食べるをやめて弁当箱を回収して校舎に向けて歩き出す。

しかし……あのままチャイム聞こえてなかったら多分……ヤっちゃつたんだろうなあ。幸か不幸か言い訳はあつたことだし……学院の裏山で、授業サボつて青姦とか業が深過ぎるだらおい。

「夜、いい?」

途中、顔も合わさず彼女は言った。

「ああ。行けばいいか?」

——断る理由など無い。

「うん。迎えに来て」

「わかった」

これから張り切れそうだ。

なおこの次は比奈ねーちゃんの授業だったので、オレだけこっ酷く叱られた。邪推できるようなことをするとか何とか……大きなお世話と言えないのも事実なので素直に受け止めた。

「——馨? 聞いている?」

「中条センセ、学院つスよ」

「あらやだ……とにかく、二人とも気を付けてください」

「申し訳ございません」

「へーい」

「稲上君っ」

「わかってるよ比奈ねーちゃん、それよりほらさ、授業」

「稲上君、学院ですよ」

「おおっと……とにかく、すみません。以後気を付けます」

ちなみに比奈ねーちゃんは足を引っ掛けて転んで短時間気絶したという体で駒川が誤魔化してくれた。

……いやあ、確かにオレもやったけどさア……転んでちよつと気絶。

無理ねえか? 駒川ア。

「……くくっ」

「……あはっ」

チラリと目が合つて、茉莉と笑い合つて——

「二人とも?」

また、怒られた。

敵名

放課後。

「つまりなんだ？ 殺し愛？ あとダム決壊みたいなの？」

「そうなる、なっ」

「っと……どうだったムラサメちゃん」

「ふむ。動きそのものは問題無いが、強いて言えば返された時に少々危ういくらいか」

将臣との鍛錬の中で、オレの魔性について軽く説明していた。

「オマエが見た恋歌、ありやオレだろう。愛するが故に殺したいと謳うのであればな。怨霊はオレのそうした面を持っている虚絶の中にいた。となればそう不思議じゃない」

「そんなもんっ、か？」

「そういうもの、さっ！」

「うお!?!」

弾きながら、恋歌の正体に言及しつつ、まあオレだけどとあっさり告げておく。

「そういうや芳乃ちゃんはどうした？」

「ん？ ああ、駒川さんが呼び出した。何か違ったものが見つかったらしい。だから常陸さんもそっちだ」

「ふーん……違ったものってなんだろうな」

「さあな。ただ二人を呼ぶってことはそっち関係だとは思っただけど」

「だよなあ」

……なんだろうか。

芳乃ちゃんと葉子だけを呼ぶ、というのは中々に謎だ。いや、確かに安晴さんと呼ばば神社に人がいなくなるから問題だけど。

「それよりほら、まだやるぞ。今日は見物客もほとんどいないんだし、気が散ることもあるまい」

「わかつてるよ」

再び構えて向き合い——不意に奇妙な感覚を覚える。

……ムラサメ様だった。感じたのは、なんとさえいいやら。矛盾、という言葉が一番近いかもしれない。そこにいるはずなのにいない……何処か遠くに彼女を感じた。

——だがそのことは後でいい。

……多分芳乃ちゃんはそれで呼ばれたと思う……きつと。

それからしばらくは打ち合いを続け、ああでもないこうでもない動きを研ぎ澄まさせていく。これなら京香にも頼めば、オレを超えるのもそう難しいことではないだろう。

ただ問題があるとすれば、完全な形となったオレが未知数であるということくらいか。消耗を狙えるほど加減できる相手でもないのが、辛いところか……

「……こんなところか」

「な、なんか……この前よりキツくなってね？」

「そうか？ ま、最後にオレをどうにかしなきゃいかんのは事実だからな。気合い入ってるんだろ」

「そつか……そうだよな」

「次からは京香も呼ぶぞ。アイツの方が色々知ってる」

マジかあ……とかゼーハーゼーハーしながらグツタリしている将臣を見ながら、最近コイツとは真面目な話しかしてないなあと気が付く。

——そうだな、たまには年頃の友人らしく、下世話な話でもしてみるか。このむつつりスケベに。

「なあ将臣」

「あんだよ」

「芳乃ちゃんとはしつぽりしたのか？」

「ぶっふおっ!？」

あ、吹いた。

飲んでいたスポーツドリンクが綺麗な放物線を描いて飛ぶ。そんなに驚くようなことか。見る、ムラサメ様だって面白そうな顔を……「なんじゃその目は」

「いや、別に。あの日夜中に葉子が押しかけてくるほど疲弊したこと

忘れてないからな。オレの可愛い菓子を辱めて……やっていいのはオレだけなんだぞ」

「なんかお主、その辺フツーに歪んでおらんか」
「自覚はしてる」

呆れた態度のムラサメ様だが、これがオレだ。仕方がない。菓子が好きで好きで仕方ないんだから。

ジト目を受けつつ視線を戻せば、落ち着いた将臣が馬鹿じゃねえの？　と言わんばかりの顔を向けていた。

「お前いきなり何を言ってるんだ」

「健全な男子らしい下世話な話だろ」

「さっきまでの雰囲気と言うことかそれ」

「オレは昔からこんなのだよ。で？」

そんなにオレは真面目な男として認識されていたのか。残念ながら割と愉快的な性格であるし、ロクでなしの不真面目君だ。

……さて、そう言われた将臣はものすごく微妙そうな顔をしながら、一言。

「まだだよ」

「え、マジ？」

「逆に聞くけどそんなことしてる場合か今」

「毎日氣イ張ってるよかマジだろ。一回だけでもさ」

「魔人はどうするんだよ」

「……あー、ヤツねエ……」

なんだか少し前のオレみたいな考えしてるな。確かにオレもあの時、その……一歩前に進むには時間を置く必要があるのか思ってたけど向こうはそうじゃなかったし……てかコイツ芳乃ちゃんが興味津々なのを知らないのか。

……とは言え、そうか魔人か……

同じ視点に立ったからか、あるいはヤツの分体を食ったからか、それともオレとヤツの間に繋がりがあからか。どれなのかは正直わからないものの、オレはヤツが、絶対に真実を知り終えるまでは手を出してこないと確信がある。律儀、とは違うが決戦ならば正々堂々正

面から……という具合か。

完璧主義者？ まあやや違うか。とにかく、ヤツは間違いなくオレと同じでそうした区別をつけたがる。そういうものだ。

「ま、あの魔人は全く動かんさ。事が終わるまで」

「わかるのか？」

「ああ。ヤツはオレと同じで区分を付けたがる。これが終わるまではこれをしない、とかな」

「……悪い、正直信用できない」

「譬、それは楽観的すぎではないか？ 相手は人の理屈が通じぬ魔人じゃぞ」

まあ当然、そっちの相棒コンビからすれば狂人の理屈。苦い顔で否定されても文句を言えない。オレだって同じだろうな、立場が違えば。

「オレだって魔人だよムラサメ様」

「そういうことではない！」

「さして気にする必要も無いですよ。アレにとってオレたちは、謂わば熟す前の果実。美味くなるのがわかっているのに、渋く青いままのソレを食べる理由は無いでしよう」

それを言い出したら自分だってそうだ、という旨の発言だったのだが、それがまた自虐に取られたらしくムラサメ様はまるで母親のように声を上げた。

ならばと言葉を変えたが、二人とも納得はしてくれなかったものの、半信半疑だ。

オレも含めて確かに理屈の通じない怪物だが、しかしながら「他者を害さねば生きていけない」という点以外は魔人だって普通の人間とそう変わらない。

オレのように殺すのを嫌がるヤツもいれば、京香のように逃げ続けたヤツだっている。誰だって好き好んで殺したいわけじゃない。殺さないのが一番いい。

”——だが殺す。そうしなければ生きていけないから”

……なんともまあ、あさましいことで。

「アレは他者の絶望を喰らって生きる者ですが、無益な殺生は行いません。魔人にとって殺しとは必要なものであつて好きでやっていることではない。あんなのでも、最小限の死で済むように気を遣っているんです」

オレたち魔人は殺す事を除けば普通だ。あの魔人は殺人に行つてしまうのが問題で、それ以外なら単に人の不幸をなじる嫌なヤツで終わりだ。オレが愛しい人を殺したいと思つて実行しようとしてしまうのが問題で、それ以外はさしたるものでもないように。

「なんじゃそれは……理解、できん」

「オレたちのような怪物を理解する必要などありませんよ。真つ当な人間であるアナタたちにとって毒でしかない」

やりたいことが人を殺すことでしか表現できない。狂っている、壊れている。だがそれが当然で、かつそうしなければ生きていけない。業深き存在、魔人以外の何者でもない。

「毒つておい——馨」

「将臣、ムラサメ様。オレが魔人であることは誰にも否定させやしない。たとえアンタたちであつたとしてもだ。魔人だからここまでやれた。ここに至るまでの全てに価値があつた。無意味であつたものもあるけど、無価値だつたものなんて一つもない」

……そうだ。

この数奇な運命だからオレはここに至れた。それだけは誰にも否定させない。オレが欲しいのは魔人じゃないなんていう気休めの言葉じゃない。

オレはオレでしかない。

オレは……稲上馨だ。

ただの稲上馨だ。

が、しかし。

不思議なものだが、どうしてかこういうことを言う時、茉莉の前だけは大きく恥ずかしくないのに、コイツらだとても恥ずかしく感じた。

のでそつぽ向きつつ、早く話を戻そうとテキストに締めておく。

「まあ、あれだ。自虐でもなんでもないとだけ」

まあ、実際毎回毎回自虐だと思われても鬱陶しいしな。

「なるほどな。そうか、いやすまん馨。お主がそういう意味で言っていたとは」

「変わったな、お前」

「そうだな……変わったよ、色々」

……ちくしょう、なんかこっぴどくかしい。こんなのオレのキャラじゃない。

——その時であった。

「……馨、お主照れてるのか?」

「はっ!? いや、そんなわけねえからな!」

「ははあん、相変わらずお前そういうところでカッコつかないよなあ」
なんでか一瞬でそれを見抜かれて、おかしいな、さっきまでの雰囲気何処か行っちゃったよ。それがオレたちらしいと言えばそうなのだが。

視線を戻せば「まあ奥さん、この子照れてますわよ」みたいな将臣とムラサメ様。そのニヤケ面がクソほど腹立つ。でも照れてるの事実だし……ああもうどうすりゃいいんだ。

「愛い奴よのう」

「そういうところ歳下成分あるぞ」

「ぐぬぬ……そこまで言うか! ええいクソ、なんでしまらねえんだオレっ」

ケラケラと笑われながら、己の不甲斐なさというか、そういうところに複雑なモノを感じる。二、三回ほど咳払いをしてから、改めて下世話な話を始めようと口を開く。

「もうオレのことは置いとけ。んでさ将臣」

「いやあのさ」

「一日くらいバチ当たたんねーって」

「でもなあ」

「次代に生命を繋ぐ立派な行為だぞ」

「……つまり?」

「色々変わるからやっておけってこと。向こうも望んでるみたいだし、理解できるもので頭悩ますよりいいだろ。没頭しちまえばほら」
……しかし将臣。

途端、間拔けな表情を見せる。よくよく見ればムラサメ様も啞然としてるし……ええ？

「待て将臣、オマエ知らないのか？」

「そんな様子何一つ見えなかったんだけど」

「ムラサメ様」

「流石に言えぬわ」

ばつさりと斬られて、ええ……と頭を抱えながら思考を回す。

流石に言えないのはわかるけど、将臣って鈍感じゃないのに……ここで気付かなかったなんて。余程芳乃ちゃんの隠し方が上手かったか、魔人の存在が大きかったか……恐らくは後者と見たいのだがしかし。

「あー、まー、うん」

「なんだよ」

「いや、その……ええつとな……というか……」

訝しまれた。なんて言おう。

……助けて菜子。

「……芳乃ちゃんがむつつりスケベなのは血縁の菜子を見れば一目瞭然だと思う」

「ああ……そういや随分前に射精管理ならぬ排尿管理とかぶっ飛んだこと言ってたな」

「は？ オレの菜子にナニ言わせてんだ殺すぞ。いつの話だ？ いや言わなくていい。多分オマエと芳乃ちゃんが同棲を始めた頃の話だな」

「ガチ勢すぎて怖い」

とビビる将臣だが、ここで不意に思い出す。

コイツ、来た頃は怪我してばっかりだったなあと。

……菜子に看病された？ あの後？もしかして着替えさせた？

菜子に裸を見せたのか？ よし殺そう。

「将臣」

「んだ」

「遺言は？」

虚絶を呼び出して鯉口を鳴らし、ギロリと睨みつける。焦る顔だがナニ考えてたんだか。

「待て待て待て待て待て待て!? 急にどうした何があった!？」

「茉莉に裸を見せたな？」

「見せてない! ただちよつと蠱惑的だったからこう……小悪魔常陸さんを想像して……」

有罪。

「オマエはここで死ぬ! 消え去れゴミが!!」

その叫びと共にグアアアアーツと抜刀。とてもわかりやすい軌道で飛びかかりながらの兜割りを繰り返す。もちろん将臣は横へひとつ飛びしてそれを回避。

「てめっ、そりやねえだろ!」

ヤツが踏み込んでくる。勢いを活かしての、横に滑らした竹刀の一閃と共に。

それをオレは——鞘で防ぐ。

噛み合う竹刀と鞘。驚愕の視線も一瞬、離れた竹刀が上段に振り上げられる。後方へ飛び鞘に刀を納めて、腰に挿して無手で再び接近。腕を掴む為に手を伸ばす。

そこで将臣は竹刀を左腰に構えつつ、背撃と共に踏み込む。……ああ、いい判断だ。よつて最大接近距離のオレは短刀を使うしかないのだ——

大人しく受けて、首に竹刀を突き付ける将臣に対して両手を上げるのだった。

そんなオレを見て、将臣がとても微妙な表情をしている。横で面白げな顔をしているムラサメ様とは大違いだ。

「手、抜いたな」

「バレたか」

「そりやああいう状況から裏周りしたり、もつと出の早い一撃を牽制に入れたりしてくるのがお前だしな」

「軽い運動だ。手を抜いたりだとかは気にしないでくれ。さあて戻るか。今日も色々あるし」

「だな。帰ろう、ムラサメちゃん」

「うむ。……ところでご主人。今夜まぐわうのか？」

「……………その話するう？」

この幼刀、スケベすぎる……というのは冗談。ただ興味津々すぎるだろう。げんなりした将臣だが、どうなのだろうか。するのだろうか。

というか。

「……あとさ、将臣。芳乃ちゃん性知識があんまりなくてこの前菜子に羞恥プレイを強いてただけど、オマエその事も知らない？」

「おう、知らん」

「……明日休みにしてもらおうか、鍛錬。てか今日の夜と明日丸一日は芳乃ちゃんの為に使え。それがいい。恋人をあんまり寂しくさせるな」

「けど……」

「うっせ。決めたんだから従え。玄さんにはオレから言っておく」

真面目な話、将臣と芳乃ちゃんは平和な時に付き合い始めたが、最近はある時間を取れていない気がする。

ここはやはり、一日くらい恋人との心安らぐ時間を持つべきだろう。で、恋人らしいことをするべきだ。うん。

「あとで芳乃には吾輩からそれとなく知識を聞いてみよう。基本もわかってないようじゃと、ご主人が苦勞するじゃろうしな」

ムラサメ様はそうなった場合に備えてか、対策をするのだと薄い胸を張られている。大変可愛い感じが……その、割と生々しいというか、教えるのは絶対に菜子になりそうだから彼女が萎えた時どうやって慰めてあげようかとか色々問題が……いや、いずれ来ること。菜子には犠牲となってもらおう。

そんなこと忘れるくらいに、オレが愛^殺してやれば――

「……………」

「馨っ？」

「いや……オレの宿痾がちよつとな」

不安そうなムラサメ様に笑顔を見せつつ、その感情を振じ伏せる。

……本当に早急な解決が必要なだ。

この暗い雰囲気を変える話題と言えば……そうだ。

「将臣、殺し文句くらい考えておけよ」

「いきなりだな!? お前はどうかだったんだよ」

「オレ? ……いや、まったく言っていない。せいぜい全部まとめて愛してやるくらいしか」

「誘い文句は?」

「向こうから」

「……廉太郎に聞くかア」

役に立たない男ですまんなどは中々言えない。

なんでって、そうするのがそんなに難しいとは思えないので……

そうして歳相応の話をしながら朝武家に向かえば。

「……よう、来たか」

——京香が待っていた。

その表情は意を決した表情でもなんでもなく、ただひたすらに疲れた顔。自身に噛み付く因果に疲弊している人間がそこにいた。

魔人になり損なつた鬼、それが京香だ。

……本能的にわかる。コイツは出来損ないだ、食えたものではない。魔人の精神性を否定すれば最後、人のような何かに変わり果てる。この女はそれを選び……だがその選択を、誰が責められるものか。

「レナは?」

「レナちゃんならあの二人と一緒に本殿。なんでも見たこともない御神体がどうかこうとか」

「御神体? ムラサメちゃん知ってる?」

「いや、吾輩も初耳じゃな。京香よ、そなたは?」

「私も初耳」

御神体……誰も見たことはないってのは中々不思議なもんだ。普通、御神体なんだから清掃するなりなんなりする中で目撃する筈なん

だが……何を隠しているやら。

建実神社の御神体なんて、逆に中々想像できない。何の神様を奉つていたかも曖昧だとな。

そんな風に考えていると、噂をすればなんとやら。三人が戻ってくる。

「お待たせしました……あれ、京香さん。馬庭さんは？」

「芦花ちゃんはほら、お仕事あるし。心配されちゃったよ。けどもう大丈夫さ」

まずは今日の夢の話から。

将臣とレナから話を聞いて――

「将臣さんそっくりな人、ですか」

「うん。ただなんかこう……鞍馬の先祖とは思えないんだ」

どうも馴れ初めだったらしいが、しかし将臣そっくりな男が出たらしい。そういう昔、虚絶が男の選り好みとか言ってたような……叢雨丸も女性だしとか感じたな。

……まあ血縁関係的には、そう不思議でもないか。

「でも今日の収穫はこれくらいでありますね。この次がきつと重要かと」

「なるほど。そろそろ安晴も呼んでの報告をするべきじゃろうな」

「ですね。ただ最近はどうも多忙みたいですし……芳乃様、何かご存知で？」

「うーん、確かに最近夜遅くまで起きてるみたいだけど、どうしたんだろう」

十中八九、財政難の可能性についてのことだろう。あれ以来これと行って情報が流れてこないのは、魔人対処に忙しいオレたちを気遣つてか……まあ、次の報告会の時にでも聞いてみればいい。

「まあまあ、安晴さんを交えて話す時にでも聞けばいいさ。なあ将臣」
「だな。無理に今聞く必要もないだろうし」

――さて、と視線が京香に向く。

向けられた彼女は、疲れ果てた表情のままため息を一つ吐き、そして……

「魔人は何者なのか、でしょ?」

無言で続きを促す。

「……いいよ、教えてあげる。あんまり言いたくないけど」

そうして京香は、まるで罪人のように。

「魔人は……私の、姉だよ」

——そう口にした。

オレはなんとなく想像ついていたから、そう驚く話でもなかったが、他はそうでもないらしい。信じられない真実を知った顔だ。当然か。今より魔人は、ただ滅ぼすべき存在ではなく、妹の夫子を殺した化け物となったのだから。

血族が血族を殺す。血族殺しより始まった朝武のお家騒動と同じく、魔人に纏わる因縁もまた始まりは身内の争いだったのだ。

「名を伊奈神奏。他者の絶望を喰らってしか生きれぬ魔人——私の夫と子供を殺し、父母を殺した。それが私の姉だ」

——伊奈神奏。

それが京香の姉にして魔人なる者の名。オレたちが滅ぼすべき亡霊。

オレの先祖で、オレの影で、オレの中にいた魔物。立ち塞がる宿敵。「穂織のお家騒動を笑えないくらい、こっちもお家騒動……いや、お家騒動なんかじゃなくて……ああ、本当にままならないね……どうして……姉様……」

嘆くような京香だが、しかし嘆きたくなるのは死ぬほどわかる。誰がこんな形で生んでくれなんて頼んだ。どうせなら生まれてきたくなどなかった……嘆く理由は星の数より多い。

チラリとレナを覗き見れば、心底から絶望したような表情を見せている。どんな平和な記憶を見たのだろうか? ……きつと仲睦まじい記憶を見たのだろうか。それがまさか、殺し合う関係など——想像できるものか。

「レナちゃん。キミが夢か何かで私と姉上の過去を見たのであれば、それは前に虚絶がキミに取り憑いたからだろうね。残滓ってのは結構残るから」

「……あんなに仲の良い姉妹でありますのに、何故……何故なのか……？」

「それが魔人の宿痾よ。身内だろうと何だろうと殺害対象になれば、どんな思いを抱いていようと殺す。——ごめん、お前の心臓を抉らせてくれ。必ずその死を己の生に変えるから。片時も忘れず背負うから……ってね」

——本当にこれだから救いようがない。確かに構図的にはそう変わらないが……よくまあ、茉莉も受け入れてくれたもんだなあ。こんな悍ましいものを……そこまで愛してくれているってまあなんかその……嬉しいケド。

「レナちゃん、こんな亡霊の過去は忘れてしまいなさい。ヒトには理解できない怪物の過去なんて毒よ」

悍ましい絶望、そんなものは忘れてしまえとあっさり切り出す。だがレナは即座に反発した。

「忘れろって、どうしてですかキョーカ！ 見たもの聞いたもの、どうするかはわたしの自由でしょう！」

「そうね。自由ね。でもそれはキミを蝕む。星の光を喰って生きる生命体なんて、呪いよりもタチが悪い」

「たったそれだけではありませんかっ」

「こんなものを覚えていたがるなんて全く理解できない。……馨、彼女の記憶を——」

「断る」

何をバカなことを言ってるやら、そんなのはこっちもごめんだ。使命として見てももう遅い。彼女は既に渦中において渦中そのものだ。それにオレは彼女の記憶を弄りたくない。彼女は望んでここにいる。だからそうする必要なんてない。

「京香、ソイツはオマエが思っているほど弱い女じゃない。でなければりゃここまで来ないさ」

「……」

「オマエがもし実力を行使するのであれば、オレは身内の恥を消すでしょう。とまあレナ、さして気にしないで欲しい。そのアホが何か

したらならオレに言ってくれ」

「あつ、はい」

呆氣に取られていたレナだが、これと言って問題無いようだ。よかつたよかつた。

というか、まあ予想していたことだし、大した話でもない。この湿っぽい空気をさっさと変えてやらねば。

「ま、アレだ。ウチの身内沙汰で申し訳ないが付き合ってくれ。なあに、ただ単にしがみ付く悪霊払いだ。そう気にする要素もあるまいさ」

「……その、馨さん……えらくさっぱりしてるのね」

「予想付いてたし。要はご先祖様がやべー奴だから止める。そら、何も変なことじゃないだろ？ キミらが頑張ってたのと同じさ、芳乃ちゃん」

そう、だから不思議なことではないんだとさっと流しておく。とうかこんなことで一々気を揉まれても困る。死んだ人間に振り回されるというのは面倒臭いのでこれくらいでいいのだ。

同情も何も要らない。謂わば生存競争だ。

「んでさあ、京香。オレ思うにあの奏って奴はかなり区別をつけたがるタチだと思うんだけど合ってる？」

「は？ ああいや、確か姉上はそういう人だ。律儀というか……実るまでしつかり待つというか」

「なるほどな。よかつたな、お墨付きだぞ将臣」

「嬉しくねえ！ この流れだと果てしなく嬉しくねえ！」

「お墨付き……？ マサオミ、何がお墨付きなのです？」

「えっ、あつ、いや……その……馨！」

「オレしーらねー。あ、芳乃ちゃん。明日将臣はトレーニング休みだから」

「あら、それなら二人でゆっくりできそうね」

「……うわあ、馨くんとってもいい笑顔してる……」

「吾輩より悪い顔じゃな」

一転してわいのわいのと騒がしくなる。

そうだ、湿っぽい空気なんて全く似合わない。前に進むんだ、オレたちは。過去の因縁が何だという。断ち切って進む、もう囚われな
い。それだけだ。

「なあ、馨」

「なんだよ京香」

「人間って、強いな……」

「そうだ。オレたち魔人よりもずっと強い」

だから早く終わらせて、コイツも眠らせてやろう。



「茉莉。どうしたの？ やけに浮ついて見えるけど」

唐突に芳乃は、みづはから御神体の事を聞いた時——いやその前から、具体的には昼過ぎの授業に遅刻して出てきたくらいからやけに浮
ついている茉莉に色々聞くことにした。

ちなみに件の男連中は何処かのアホが「よし将臣、積もる話もある
から風呂借りようぜ」とか抜かして、言われた側は「お前に言われる
となんか後ろが怖いんだが……まあいいけどさ」と同意したので仲良
く風呂場だ。

「言われてみればそうでありますね。カオルもマコも、時間にはうる
さいの今日は遅れてきましたからね」

もちろん、そこに食い付かないレナではない。

（やつぱりですかあ……）

やったことはやったことだしやろうとしたことは大問題だ。まあ
誤魔化せばいいかと思いつつ、この戦いに臨む。

「別に大した話ではありませんよ。愛しい人と一緒にいられるから、
嬉しいだけです。あは」

色々と言葉を抜いたが、嘘は言っていない。それに蠱惑的な笑顔を
浮かべながら、唇に人差し指を当てたポーズ……これは勝ったなど確
信しながら茉莉は次なる一手を待つが——

（何か隠してるわね。あんなに見つめ合って微笑むなんて、こんな浮

つき具合はデートの時と一緒よ)

何十年の付き合いだと思っっているのか、内心をあつさり見抜く芳乃。どうやって彼女の牙城を崩したのか……と刹那、沈黙考する。

時間にして一秒にも満たないほんの小さな溜め。そして先に仕掛けたのは――

「まあでも、幸せ加減では毎日リビングでちゅっちゅっなされている芳乃様には負けますが」

茉莉子だった。

しかもこの場においては最大級の爆弾を片手に攻め入った。何故ならこの前の仕返しも兼ねているし、朝っぱらからイチャつかれるのを見せられていることのアレコレもある。

「んなあっ!?!」

一方芳乃はまさかそんなことを言われるなどとは想像しておらず、その爆弾の対処を完全に失敗した。

もちろんそれを逃すほど甘くはない。

「いやあ、どう思います? レナさん」

「毎日ちゅっちゅっ……毎日キスでありますか。ヨシノはとても立派な淑女レディなのですわね」

「れでいは所構わずするものではないと思うがの」

「あつ、ムラサメ様! 助けて下さい、茉莉子がっ」

野暮用を終えたムラサメが戻ってきた途端に泣き付く芳乃。それが悪いとは言わないが、しかしムラサメ的にも毎日見せつけられるというのはあまりにも甘すぎる。

ので、ここは一つからかってやろうと思いついたのだ。

「まあお主たちのそのイチャこらっぷりは吾輩的にも気になっていたのじゃ。ならばこそ芳乃よ、――ここは一つ、まぐわってしまうのはどうじゃ」

「まぐ……っ!?!」

死角からの一撃。牙城崩れり。

もはやこの勝負は芳乃の敗北が決定していた。いや勝負でもなん

でもないけど。

ただしかし、失念していたことがあるとすればレナのことである。

「マグワイ？ マグロの親戚でありますか？」

「あつ、いえ。まぐわいというのはですね——」

いそいそと耳打ちする茉莉。それを聞いてレナはふむふむと頷き

……

「なるほど、いわゆるセツ……せつくちゅ!？」

ボンツと真つ赤になって、ブンブンと頭を振って煩惱を払った。そんな様子はあまり見たことないので怪訝そうな視線を向けられるものの、そういえば言ってなかったなと事情を説明した。

「……申し訳ありません。わたし、どうしてもその辺りの知識があまり無くして」

「謝ることはないと思いますけど……殿方勢はお風呂ですし、いつも芳乃様の部屋で勉強会します？ 芳乃様もほとんど欠けているみたいですし」

「そうね。求められた時、どうしたらいいかわからないとアレだし。どうか私がしたいし」

「で、ではわたしも！」

（おつ、意外と良い方向に向かっているな。これなら吾輩が妙な方向に持って行かなくても良さそうじゃ。さて、いい機会にご主人の本音を教えてやれば——）

……そんな感じで始まった勉強会。

風呂に浸かってバカをやっている男どもはそんな事とはいざ知らず、アホな会話をしているのだが彼女はそんなことを知る由も無し。

——そうして、純朴な少女たちに対して割とエグい知識が織り込まれたのであった。

■

……その後？

まあ特に何かあったわけでもなし。

オレはちよつと将臣に話があったから二人で風呂に浸かりながら

軽く話ただけで、女子勢は何をしていたのかは知らない。

ただ風呂から上がってみればどういわけか、芳乃ちゃんとレナの顔が赤かった。めっちゃ。何があったのか聞こうとしたらムラサメ様に止められるので、色々謎だった。

ああ、京香はさつさと帰った。

ムラサメ様に御神体の推測を話して、だが。

軽く玄さんに色々吹き込みつつ明日のトレーニングを休みにしてもらって……自宅の清掃を始めた。いやほら、割とこう……色々気になるし。しかし自身の本質を自覚すると向き合い方が変わるなあ。昔はよくわからないまま、最中に首を絞める作品を手に入れていたものだが、今考えるところというわけだったとは。

しかし時間とはさつさと過ぎ去ってしまうもの。気が付けば夜になり、気が付けば飯を食べて——気が付けば、茉莉の元に向かう時間になってしまう。

別に気合を入れるというわけでもないけれど、お気に入りのジャケットを着て夜道を歩く。

そうして足を進めて行けば、自然と見える彼女の家。ただノックをするのは何かと躊躇って立ち往生してしまう。悩んで悩んでその末に——呆れた顔の茉莉が、玄関から姿を見せた。

「や」

「どうしたの？ 立ち往生なんて」

「いやノックするのを躊躇ってさ」

「恥ずかしい？」

「うん」

「そっか。行く」

「ああ」

手を繋いで、歩を合わせて進む。

確かな温もりが伝わって、こんなにも愛しい人の命を愛しているからこそ手折りたい己の宿痾に、心底から呆れる。

「なんて言い訳してきたんだ」

「朝帰りしてくるって言った」

「……バレてるのかア」

それはそれで、なんかこう微妙だが既にそういう仲なのは知られてるし……フクザツ。

「意外と秘密主義？」

「言外にそういうことしますってオレは中々言えないよ」

「だからなんだ」

何を思い出しているやら。

大変面白そうな顔をしていらっしやる。

「なんだよその顔」

「別になんでもないよ。あはっ」

「オマエなあ……」

まあ、可愛いからなんでもいいか。

キュツと強く握られるから、ギュツと強く握り返す。

それから言葉を交わすこともなく、誰もいない夜道を、月に見守られながら、二人だけで歩いていく。

慣れ親しんだ道もまるで特別に感じられて、心底から彼女との時間を楽しんでいるんだろう。

少しだけ茉莉を見れば、普段通りだけど、浮ついた雰囲気を感じる。そこまで嬉しく思ってもらえるのなら、男冥利に尽きるというか何と

いうか。

そうして――

家に着く。

――着いてしまった。

部屋に着く。

――着いてしまった。

「……なあ、茉莉」

「――なんで止まってるの」

振り向いて、優しい笑顔とは裏腹に、衣服は肌蹴て情欲の証明が滴れている。

「ずっと待ってたの。火照って仕方なかった。早く責任取って欲しかった」

「え、そんなに」

「そんなにつて……三度目のキス、どれだけ激しかったと思ってるの。あんな風にヨダレまで飲まされて……夜まで待てばって我慢してたのに」

「あつ、拗ねるなよ。悪かったつて」

「……アナタが欲しい。心の底から、アナタを求めている。アナタだけを……」

「ね、ワタシ……えっちなこと、してほしいな。馨くんのしたいように、ワタシを可愛がつて……ね？」

「わかった——啼かせてやる」

「……ワタシ、もうダメ」

「オレも無理……」

時間すら忘れて貪りあつて、理性らしい理性が帰ってきたのはお互いに色々と尽き果てた後だった。

布団の上で横たわりながら、顔だけを向き合っている。

「ね、もうその……元氣にならない？」

「まだやるのか!？」

「そんなわけないよ!? ただ近くに行きたいから、聞いただけで……」
「そっか。ほら、おいで」

悪戯っぽく聞いてきた割には、そういうことかよと彼女のチグハグさに何とも言えなさを覚えつつ、身を寄せて来た彼女を抱き締め、同時に静かに背中が手が回されたのを感じる。

「二人とも裸だから、お布団しっかり被らないとね」

「そうだな。風邪ひいても嫌だし」

手を動かして布団をひつ掴み、茉莉が風邪をひかないように、気持ち多めに被せる。オレは別に頑丈だからどうでもいいが、茉莉にひか

れちゃ困る。そんなオレの気遣いに気付いたのか、嬉しそうに胸に顔を寄せて来た。

「まあでも、オマエに風邪移されるのなら悪くないかな」
「なにそれ？」

「色々複雑なのさ、魔人は」

「気持ち悪いかも」

「ごめんな、こんな男で」

「でも、そんな馨くんだから好き」

「言われると恥ずかしいな、なんか」

「恥ずかしいが、気分は良い。」

「……ね、馨くん」

「どうした」

「ワタシね、全部終わったら……お嫁さんになりたいな」

「気、早くない？」

「芳乃様と有地さんって例があるじゃん」

「あの二人は特別だろ」

「それはそうだけど……」

「不服そうな顔。」

「小動物的で大変可愛らしいが、気が早いのも事実だと思う。」

「……責任取らせる男が本当にオレでいいのか？　まずそこだろ」

「馨くんじゃなきゃヤダ」

「わかったよ。逃げ道塞がれたなア」

「逃げる気なんてないのに」

「あ、バレた？」

「気付かないと思ってたの？」

「ケラケラと笑いあって、今日はあれこれもう話す必要も無いかと、自然に瞼が重くなってくる。」

「……おやすみ」

「おやすみ……」

「殺してしまう程に愛するというのも、悪くない……」

「この腕の中にある確かな愛しい温もりを感じながら、お互いに眠り」

の海へと泳ぎ出すのだった――

混線

いつものように見る、過去の夢。

ただ今日は、二人の纏う雰囲気違っていた。黙々と刀を振るうことも、それを延々と眺める光景も無かった。

はて、と首を傾げながら様子を伺うと、女神が口を開いた。

「賊の征伐、ですか」

「ええ。某も行かねばなりません」

時代的にはよくあることだ。

取り立てて騒ぐ事でもない。だというのにまるで今生の別れかのような、そんなものを感じずにはいられなかった。

「賊は手練れらしく、無事ではすまぬと考えております。生きて帰れるかも怪しいかと」

「……………」

当然彼女は知っている。

彼が征伐せねばならない賊は戦いに強いのではなく、戦が上手い。正直な話、侍の所属する郎党の征伐隊ではかなり危ういであろう。死が大口を開けて迫っているのと変わらない。

それに侍とは言えども言わば雇われのようなものだ。逃亡し野盗に落ちて生き延びることも珍しくない。

——彼の落ちぶれた姿なんて見たくない。

——彼に死んで欲しくない。

——どうせなら、いつそ……

危険な考えが脳裏をよぎる。

神の力を持つてすれば、”その程度”は容易い……が。

——神は人に関わってはならない。

わかっている。それが彼女を戒める。だがそれならば何故、このように会話を楽しみ鍛錬を眺めて悦に浸り、あまつさえたった一人の人間を一柱の神が”心配”しているのか……この感情を、何だと言うのか。

何故、何故、何故——

「……いつ、出向くのです?」

「明後日には」

感情を押し殺して尋ねても、帰ってくるのは硬い決意のそれ。一体頭領にどんな恩義があるのかは知らないが、侍は命の使い所であると考えているようだ。

「雲行きが怪しくなってきたですね」

「うん。こりや死に所って考えてるのと生きて欲しいって考えてるの
でまーたなんか面倒そう……」

それを眺める将臣とレナだが、このチグハグな食い違いはよく知っ
ている。どっかの二人がやってた食い違いだ。

女神はただ無言を貫き、侍もまた無言を貫く。しばらく無言で見つ
め合った後、女神が小さく、呟いた。

「……明日も、来てくれますか」

「望むのならば、暇を見つけて」

「ならば必ず来てください」

「は……」

そうして別れた二人だが、女神は犬神と山中で佇んでいた。

「ねえ、コマ。あの人はきつと……」

「姉君、それほど心配であるならば手元に置けば良いでしょう」

「ダメなの、それじゃあ。手元に置いて愛でたいんじゃないの。でも、
死んで欲しくないの」

「姉君……」

なんでなのかしらね……と寂しげに呟く女神の姿は、誰がどう見て
も恋する乙女だ。犬神はその真意を察したのか、黙ってしまった。

そうして沈黙が支配した後に、彼女が呟いた。

「……我が身より剣を削り出せば、守り刀として誤魔化せるわね」

肉体が玉石で出来ている女神にこそ許される荒技であり——同時に、
神が身を削るなどというのは中々に珍しいこと。故にさしもの犬
神として動揺を隠さずに尋ねた。

「自身を削ると言うのですか」

「他に方法があるとも?」

「止めませぬ、が……」

それはあなたの主義に反しているのではないか。我々が関わり過ぎてしまっているのではないか。様々な言葉が反復しては消えて行く。やがて続ける気を失い、犬神はただ何でもありませぬと続けて、女神の行為を止めなかった。

「すごい……」

レナがそう呟くのも無理は無い。人の身体であるというのに、本当に玉石で出来ていたのだから。凄まじい光景だ。身を削るというのは痛みを伴うだろうに、呻き一つ出すことなく削り出して刀を作り上げる。

そうして生まれた刀は――

「なんだか、ムラサメちゃんのだ刀そっくりですねぇ」

「確かに。でもあれは大太刀の類……ああ、色々刀には種類があつて、叢雨丸は短めの打刀に区分されるから違うと思うけど」

叢雨丸を大太刀に変えたような、そんな刀。

馨の振るう虚絶／転生のような異形刀ではなく、正真正銘の大太刀。見る者を圧倒する美しさを備えたそれは、紛れも無い神刀であった。叢雨丸と比較しても劣ることは無く同等かそれ以上の格であろう。

そうして夜が明けて――一人と一柱はまた再び、山中に現れた。

「……姫君、その剣は」

当然ながら影も形もなかった刀など持って現れた女神に驚く侍。だが女神は忽然とした態度でその刀を差し出した。

「我が家に伝わる守り刀です。あなたに、持っていていただきたく」

「っ!? 何故そのような大切なものを某なぞに!」

そりやそうなるだろうという当然の反応。こればかりは見ている二人もウンウンと頷く。よくわからない姫君が下つ端の自分の鍛錬を見に来た挙句に、賊の征伐に向かう前日に家に伝わる守り刀まで渡してくる。いやいくら世間知らずと言っても無理があるというもの。

が、女神はムツとした雰囲気で言葉を続けた。

「かつ、勘違いしないでください。別にあなたに差し上げるという

わけではありません！ 単に私の暇を潰す存在がいなくなつては困るから、死なれるよりマシだと思つて貸して差し上げるのです！」

「は、はあ……」

「ツンデレ？」

「ツンデレ」

超が付くほどわかりやすい、テンプレを極めたようなツンデレ。感心するほどにツンデレ。

一方、鈍感な侍といえはやはり何処か納得の行かなさそうな顔したものの——ふっ、と笑つてその刀を受け取つた。

「ならば必ずや生きて戻り、この刀をお返しいたしましょう。そう言われてしまうと、断れませぬ故」

そうして少し刀を振るい、その見事なまでの業物ぶりに感服した後、静かに尋ねた。

「この刀の名は？」

「名などありませんから、好きに名付けてください」

「ふむ……ならば、この刀は“叢雨”と。そう呼びましょう」

(ムラサメだつて!?)

さざりと命名されたそれが、今自分の手元にある神刀である……と
いうのは、物凄くなんとも言えない。その中で将臣は、いつぞや馨が
自分に言つたことを思い出す。

——選り好みをしてるんだとき——

全文は違つたが、おおよそそんな意味だつた気がする。つまり自分が叢雨丸に選ばれたのは、この侍と似ている部分があつて……そして叢雨丸とは、元々はたった一人を守るためだけの、ある種純粹なまでに研ぎ澄まされた愛情（狂気）の刃であるということ。

……ただそれでも、将臣はこの叢雨丸を尊いものだと思つた。誰かを愛することを、罪だとは思えなかつたから。

「——マサオミ」

同じことを察したのか、レナが静かに声をかける。

「ああ。打ち直しされたのか……じゃあ、あれが叢雨丸の最初の姿で……この女神様は多分、建実神社が祀つてる神様だ」

「なるほど。何やら複雑な経緯というわけでありませぬ。女神様から生まれたものが、このおサムライさんに渡つて、何処かで祀られて、ヨシノのおうちの一件で渡つたという形でしょうか」

「多分ね。まあ……その辺りは聞いたり見たりすればいいんじゃないかな」

絶妙に不透明さが残るものの、ある程度の全容が明らかになってきた。ただ何処かに違和感があり、どうしても素直には受け止められない二人。

しかし侍と女神の会話はまだ続く。

「……貴女の、名は？」

——高貴な女性に名を尋ねること。

それは途轍もない”無礼”である。夫以外には本名を名乗らないのが当然故に。

それを知らぬ侍ではない。だが無礼を承知でそうしたのだ。衝動に逆らうことなく。

「——叢雲」

そして、それをわからぬ女神ではない。

——だがそれでも、彼女は己の名を……神の名たる叢雲を告げたのだ。それがどれほど己が定めた戒めに反することを知りながら、その名を告げる。

「とても、良き名でありますな」

「ありがとう。それで、貴方は？」

「某は……■■■■と申します」

——破壊的なノイズ。

雑音すら壊れた何か。主観となっているのは犬神の見たものと憑代が記憶しているものなので、触れられたくないものだけは、どうしてもそうなってしまう……と、二人の頭の中にそんな知恵が流れ込んだ。

「……良い名ですな」

二人はそれきり話さず、ただ無言で別れた。

——そして侍は生き延びた。
生き延びて、首級を取った。

「……姉君より生まれし剣があるのであれば、その程度は当然か」
その様子を見ていた犬神は、さもありませんと言わんばかりに呟く。
面白く無さそうな雰囲気の中で、しかし、一筋の迷いのあるその様子。
「コマ、あの人は!？」

一方の叢雲は女神としての威厳など捨て去った、”女”としての面を剥き出しにしている。分かりきったことを何故そこまで気にするのか……その辺りだけはイマイチわからないものの、姉の想い人の現状について教えねばと、彼は語った。

「無事ですすよ、その上大将首を取る大手柄だとか」

「首なんてどうでもいいの! ……よかった、無事で……」

「——姉君……」

この時から薄々と犬神は勘付いていた。

首を取る、手柄を立てるということは、つまり——姉たる叢雲とあの侍が、無意識の内に心惹かれ合っていたとしても——侍には縁談の一つや二つがいつかは流れるであろうということ。

そして彼はそれを叢雲に言いに行くだろう。更に言えば叢雲はきつと、それを知れば身を引くだろうし、あの侍もまたその意を汲んでしまうだろう。

——想い合うが故に拒み、想い合うが故に去る。

(……私は、どうすればいいのだ……)

犬神には——コマには。

……恋などわからぬ。したこともない。ただ姉と朽ち果てるその時まで静かに暮らしていればそれでよかった。姉の悲しむ姿など見たくなかった。

だから彼は——”黙った”。

ちよつと考えれば、姉も分かることだろうとして。

……恋は盲目、という言葉がある。

叢雲にしろ、侍にしろ——”それ以外考えたくない”から”そうならない筈”と思うのも、無理はなかった……

「叢雲さんの恋、か」

「……わたしの国でもそうですが、神様と人の恋とは大抵悲恋に終わってしまいます」

異種の愛は成就しない。

——そして叢雲が現代どころか、過去の記録にすら存在しないこと。

将臣もレナも……この過去の思い出は、苦い記憶になりそうだと
思った——その時である。

突然その世界は変わった。

「……ここって、前にマサオミたちと行った川でありますね」
「そう、だね」

唐突に変わったその場所は、穂織の山中であるものの、先程まで見
ていた太古のものに比べれば見覚えのある光景になっている。

そして目の前には底の深い川。そう、ちようど”子供一人が沈んだ
ら死んでしまいそうな”——

（——待てよ……？ 馨は確か、入水自殺って言ってたよな……）

「マサオミ？ どうしたんです？ そんな怖い顔して」

「ああ、いや……えっと」

不思議そうにするレナは馨の過去は知らない。だから言うか言わ
ないかを迷って、どっち付かずの中途半端な態度を見せてしまう。何
かを隠している——途端レナの様子が不機嫌な物に変わる。彼女自
身でも驚くほど、黙っていられるというのは中々に気に食わないらし
い。それも、自分を気遣ってというのは——

「マサオミ、何か知ってるんですね」

なら教えてください——そう、続けようとした刹那。

……ゾブリと、川底から黒い腕が二本生えた。

「——ツツ!?!」

「ひっ!?!」

心底からの恐怖。強張る身体。漏れたのは祟り神に殺意を初めて
向けられた時と同じような情けない声。

その黒は闇より深く、そして恐ろしい。あまりにも恐ろしい黒。

禍々しい黒の腕が、川の淵を掴んで這い上がる。

ザパア……と音を立てて這い上がった腕の持ち主は——十代程度の少年であった。茉莉の忍び装束の紺色によく似た色のジャケットを着た少年。全身はずぶ濡れて、空気を求めて咳をしている。だが背中から悍ましい黒の腕を生やしていて、それは紛れも無く魔人以外の何者でもない。

「……おいおい」

そして紡がれる声は幼いものの、聞き覚えのある声。

腕が動き、少年は地面へと降り立ち——そしてその左腕に、打刀とも太刀ともつかぬ異形の刀を赤黒の光と共に呼び出して。

「魔性と向き合って死を選ぶか、小僧。故に転生は私を目覚めさせ、生存させた……と。ふむ……放っておいては死を選び続けるな」

ゆつくりと振り向いた少年は——幼い馨だというのに、魔人……奏に取り憑かれた小春と酷似した様子を持っている。

(……おかしい。馨の過去と辻褃が合わない……)

その様子を見て将臣は冷静に矛盾を理解する。この夢で見た光景と馨が語った過去は辻褃が合わない。

これは恐らく奏が起こされて自殺をやめたのだろう。だが本人はみづはに救われたと言っていた。ならばこれは——

「ま、マサオミ……？ カオル、でありますよね？ あの、男の子は」

そこまで考えて、恐る恐るとした声が耳に入って——見れば心底から理解できない。否、理解したくないという表情をしたレナ。

当然だ。いくら自己否定を拗らせていたとは言っても、自殺を選ぶほどではなかったのに……と。いやそれ以前に友人が自殺を選んでいたので誰が知りたいだろうか。

「それ、は——」

「……キョーカの姉のカナエは、その……マジンなるものでしたよね。なら、カオルも……？ 二人が似ているのは偶然ではなくて……」

二人の思考はまとまらない。答えを出すことを拒絶している。

だが渦中の馨らしき人物は——

「しかし、愛するが故に殺すとはな……小僧、お前も中々に魔人足りう

るといふことか。そんなにもその”茉莉ちゃん”なる女を殺したくないか。いやはや可愛いな、健気だよ」

「——ならば、生きろ。そして苦しみ続けろ。それが私の生になる」

その言葉を最後に、二人の意識は強烈な程に覚醒へと誘われた——

そして、同時刻。

「——こんな所にあつたとはな。なるほど、見つからぬわけだ」

黒、あるいは魔人。

そうして呼ばれる者。星の光を喰らい生きて、絶叫する奈落の使徒。

——その名は伊奈神奏。

黒い貴族的な、だが動きやすさを考慮した和装を纏った、色白の黒髪黒目の女。馨と酷似している……否、馨が酷似しているそれは、建実神社の本殿、御神体の前にいた。

しばらく眺めていた奏は、その詳細を察して腕を組んで頭を悩ます。

(……確かに器だ。私が求めているものだ。だがこれでは貧弱すぎる、動かしているだけで殺してしまうな……やれやれ、使い物にならないと知っていたら、ああも使い捨てはしなかったというに……)

過去にやってしまった分体の使い捨てを悔やみつつ、奏は一体どうやって最高の愉悦を味わおうか、どうやって楽しんで、どうやって手折るべきかに思考を向けた。

(方法としては色々あるが……やはり明確な敵として現れた方がよからう。憑代を人質とするなど品が無い。それに今は神と人の恋物語を追っている最中、しゃしゃり出るのもつまらんだろう)

影となって外に出て、再び人の姿を取る。月光に照らされるその姿は、正しく男女どちらとも取れる魔人。他を圧倒する死を振り撒く者。——あるいは怪物。

「……ならばあれしかないか。京香、私とお前は姉妹だ。家族というもの困っている時に助け合うし、それに……何をすることも遠慮は要

らん仲だろう」

悍ましい企みを呟きながら闇に、黒霧として溶ける……見つめるのは月光のみ。

(……しかし困ったものだ。私は美しいものより醜いものが好きだが、それを殺さねば生きていけぬ。この身は馨に縛られている以上、他者を殺せぬが……それがこうまで口惜しいとはな。生み出すものを殺してしまつては、いずれ餓死するだけであろうに)

生きる為には死を求めねばならない。

だが死を与えれば必然的に他者を喰らえない。

初めから滅亡するしかない、異形の血族。

(まあ、生きてやるさ……まだ私はこの世にいる。なら生きるだけだ。

馨——お前と同じようにな)

そんなものは関係無いとばかりに斬つて捨てる。

奏は生きる。他者の苦痛という星の光を喰らい、そして殺してまでも。必ず。徹底して。そんな彼女を、今の穂織では祓えない。倒せない。勝てない。——出来るのは、殺すことだけ。

もつともそれさえも、出来る者が限られるのであろうが……

(傍迷惑な愛を美化して感動でもしててくれ。私は理解したくもないし、考えたくもないが)

魔人が這い上がり眼前に現れるまで、あと僅か。

——そしてセピア色の世界。

——古い記憶の、似姿となるもの。

茉莉は自分の意思でもつて、この世界に降りてきた。ここへ来たいと強く願ってみれば存外、潜ろうと思つて潜れるものだなと感想を抱きながら、意外そうな雰囲気を出している犬神と向き合った。

「お前から出向くとはな」

「何か、知っているんじゃないんですか？」

何故。

何故そうなったかの理由。

彼はそれを知っている筈だと……茉莉は覚悟を持つて尋ねた。そ

れがどれだけ残酷なことであつたとしても、魔性を抱える彼を愛した一人の女として、それを知る必要がある……と。

「……何故も何も、それが……あの一族の宿命だからだ……」

帰つてきたのは普段とは全く違う、歯切りの悪い、悪すぎる言葉。

ああそうだ、犬神は否定した。否定してしまつた。戯言である。

ところが出てきた真実は戯言と切つたもので、そして魔人の正体を知つた今、黄泉の鎖と杭を宿す存在——つまりイナガミが何故生まれ、この一件がどうして起きたのかを悟り……何も言えなくなつた。

真相にいち早く辿り着いてしまつた犬神には、どれが善くてどれが悪しきかなど定義できなくなつていた。

全てたらればの話、誰が何と言おうと起きてしまつたものは起きてしまつたのだ。それも……最悪な形で。

誰が悪い？

誰も悪くない。

誰がというものでもない。

起きてしまつた事実、生まれてしまつた事実、そしてそうなつてしまつた事実……

(姉君……私は、何と伝えれば良いのでしょうか……この事実を……)

もはや遙か古に消え去つた姉に尋ねてしまうほどに、犬神は悩んでいた。“それ”を言つてしまえば……彼女たちは己を責めるかもしれない。もう呪うことなどしたくない。守ることなどしたくない。疲れ果てた。ただ真実を知らせ、後は虚に溶けて眠りたい。後世に遺恨など残したくない……が。

遺恨が自分からここにるのであれば、どうしたら良いのか。

もしあの男に“それ”を伝えたら……己の首を斬るだろうか？

憎まれて当然だが、しかし……

「……ままならんな……」

「……」

「……いや……因果なものだと、思つたまでだ。お前たち一族も、奴らも、私も、姉君も……」

——罪深き宿痾。

——呪わしき因果。

——忌まわしき輪廻。

——悲しき福音。

いくらでも言葉を尽くせば出てくる。

誰もが被害者で、誰もが加害者であるこの虚しさ。罵詈雑言を吐かれるだけの者はいて、吐くだけの者もいる。ただそれだけ。罪の在り処は問えず、ひたすらに間が悪かった。

纏う沈黙が今までの物とは違う……鋭敏に感じ取った菜子は、思わずこんなことを口にしていた。

「犬神様……大丈夫ですか？」

（神様……だと？）

——そんな風に、この血筋に言われるのはもう何百年ぶりだろうか。実に懐かしい。この懐かしさを選んだ理由はなんだったか。そうだ、それも全て誰の為でもなく——

（私は、私の為すべきことを為したのだったな……）
為すべきと思つたことを為す。

本当にただそれだけ。

ならば、今の自分が為すべきことは何か……その答えは自然と出てきた。言うべきこと、伝えるべきこと、そして——清算するべきこと。クツクツと笑う彼を、心底不思議そうに見つめる菜子。そんな様子がおかしくって更に笑いそうになるが、何とか堪えて——

「問題無い。魔人に……伊奈神奏に気を付ける。それだけだ」

そんな風に、菜子を心配した。

「はいっ、わかりました」

その態度に何を感じたのか、けれど確かに暖かさだけでも感じたのだろう。菜子はとても柔らかく微笑んで、犬神はパイとそっぽを向いた。



——人肌の温もりで眼が覚める。

柔らかな香りが鼻腔をくすぐり、規則正しいやすやすとした寝息が聞こえる。

「……」

「すう……すー……」

所謂、朝チユンという奴だ。

朝一で茉莉の寝顔が見えるというのは二度目だが、中々慣れない。ボヤけた頭がすぐにさっぱりしてしまう。

……というか、今日は布団洗わなきゃ……色々とマズい。この布団で寝れるのかオレ……

「……うわ……違和感ありまくりだア……」

下半身に慣れない感覚が未だに残ってる身を動かして脱衣所へ向かう。シャワーを浴びて出てきた後、リビングで時間を確認。……普段通りだな。睡眠時間的には普段より少し遅く寝たくらいか。まあ昨日の夜って言っても、往復挟んでそっからだから……盛り過ぎだろオレたち。

……まあ、いいか。

今日はオレが全部、やるとしよう。茉莉にはゆっくり眠ってもらって――

「かおるくん……どこ……？」

「……やれやれ」

寝惚けた茉莉の声が、遠くから響く。

まったく……寝てくれないのか、コイツは。世話も焼かせてくれないなんて、本当に酷い彼女だ。

きつと苦笑しているのか、頬が緩んでいるのを感じる。アイツの着替えは……あつたあつた。渋々ではなく嬉々として、オレは着替えを片手に部屋に戻るのだった。

「まっさかオマエ、風呂場で呼ぶから何事かと思えば身体拭いてだ下さ着けてだ……寝惚けて甘え過ぎだろ」

「うう……しよーがないじゃん。こんなに甘えるのアナタだけだも

ん」

「……それでいいのかねエ？」

普段通りの……もう慣れてしまった茉莉子との通学の最中、誰もいないからと今朝の一悶着というか何と言おうか……とにかく、起きたコイツに散々甘えられて驚いた時の話題を振ってみたら、バツの悪そうな態度された。

「ダメ？」

「ダメじゃないけど」

「そっか。うん」

拒む理由も必要も無ければ、オレが拒みたくない。全然ダメじゃない。……むしろ何故拒まれると思ったのだろう、茉莉子は。

握った手をより強く握って、彼女もまた強く握り返してくれる。

ただ――

「ね、馨くん」

「なんだよ茉莉子」

ニコニコと微笑みながら首筋に視線を向ける茉莉子。硬く慣れない、新品の予備制服の息苦しさとは別に、もう一つ普段と違う理由がある。

今日に限って、第一ボタンを留めているのだ。このオレが、である。

……実はその……今朝シャワーを浴びるべく脱衣所に向かった時に気が付いたのだが、どうも……付けられてたみたいで、キスマーク。首筋に薄く浮かび上がる桃紫の唇の痕――最愛の女からの接吻、独占欲の証明。これを嫌がる男もいるまいて。

が、しかし……今日は普通に学校がある。首元を開けていると完全に見えてしまう。閉じておけばギリギリ見えはしないが……かと言っつていつも開けている俺が閉じれば、それはもう異常なわけで。

――どうしたもんかな、と悩んだ末に閉じることにした。

おかげでこうしてニコニコと微笑まれながら視線を感じる羽目になった。

「隠しちゃうんだ」

「……まあ」

堂々とできるほど、度胸があるわけではない。それが分かっているのに、茉莉は残念そうに言った。意地悪な……好き。

そんな時、急に茉莉が近寄ってきて、首元のボタンを外す。視線がキスマークまで移り……彼女は蠱惑的な微笑を浮かべた。

「あは……」

「えつと、なんか、楽しい?」

「うん、楽しい」

まあ、茉莉が楽しそうならなんでもいいか。いそいそとボタンを留めつつ、茉莉に手を引かれながら、いつか必ずオレが世話を焼いてやるのだと心の中で気合を入れるのだった。

「でもなんで急に付けたのさ」

「ん……マーキング?」

悩みながら帰ってきたのはそれだった。悩んでいる様子も大変可愛らしいのだがマーキングってオマエ……もうちよいなんかなかつたのか。

「オマエ以外の所になんて行かないよ」

オレが惚れた女はオマエだけだ、と伝えてみても何故か信用無さげな視線をぶつけられる。なんかもうちよつと可愛がったりするべきかなあ? とか考えていたら――

「でも鼻の下伸ばしてたじゃん」

ジト目。

ひどい話である。というか鼻の下の話はややこしんだがとりあえずこれだけは言わせてくれ。

「誰にだよ」

「レナさんとか柳生さんとか」

……あの二人はクラスの中でも一、二を争うほどで……いや、そうじゃない。ここで言うべきはそうじゃない。色々と言いたいことがあるが、兎にも角にも本音を――!

「……男の子は基本的に大艦巨砲主義なんだよ」

「ていつ」

「あだっ!? 蹴った! つま先で脛を蹴った!」

無慈悲が過ぎる。遠慮無く蹴りやがったコイツ。そういうところも好き。ちよつと膨れた頬に加えて如何にも「ワタシ怒ってます」みたいな雰囲気、嫌いになれない。好き。そして彼女は拗ねた口調でこんなことを言った。

「ロリモノ持つてるくせにつ」

「あ、あれは描いてる先生が好きなんだよ！ オレにそっちのケは無
い！ オマエ一筋だ！」

「ありがとう！ 好きだよ！ でも比率的にはロリ3、妹2、姉2、巨
乳3じゃん！」

「ほとんど見てんじゃねえかオマエエーツ!!」

なんだか途中ですごいこと言われた気がするけど、茉莉の言葉を聞
いて思わず動揺して吠えてしまう。

いやだつて……な？ つまり……オレが隠していた『お義兄ちゃん
とイケナイ関係』とか『白衣先輩』とか、『ぺたんこ！ ギターレッス
ンパート』とか『全力発情魔女さんのヒミツ』図書室の机の角編く』と
か『従姉妹の味』とか『三味線の練習だったのに!』とか……全部見
られたつてことじゃん!?

け、けど内容が過激な『いっぱい食べる君が好きく男の娘とア×ト
ラル』や『抑えのなつていない生意気オナ忍者をわからせるだけの
本 with 緊迫敗北プレイ』とか『幼妻よ永遠なれ』とか『地味なあ
の子がイメチェン！ やらしい巫女服、婦警服に……?』とか『巨乳
のすゝめ——来世の分の乳まで借りた女——』とか『無乳のすゝめ——
—前世に来世の分の乳まで持つていかれた女——』とか『同級生の素
晴らしい性癖。または私が如何にして男装女子に目覚め、彼女にバブ
みを見出したのか』とか、その辺のは見られてないっばいし……首絞
め全般はバレてないみたいだな……うん。まあバレたつて構わない
んだけど。理解あるし、茉莉は。

けれども中々に見せたくないというか、なんというか……

「馨くん？」

「あつ、いや……家の薄い本、どれだけオマエにバレてねーかなーつて
……」

うっかり眩いてしまった後で気付いた。途端、茉莉の表情はニンマリとした意地の悪い笑顔で――

「ふーん。ふーん?」

「もう好きに見てくれ……」

「見られて困るものは上手に隠してるくせに」

「じゃあかしい! マジエロ茉莉め!」

「んなあ!」

「うっさいぞそこのバカップル! ウチの店の前で痴話喧嘩するんじゃない!」

「すつ、すいません!」

……怒られちゃった。

……学院に着いてから、チラチラとレナからの視線を感じる。何か心配するような、あるいは――まあ、意外にもオレの記憶でも垣間見たのか。

虚絶はオレの一部も持っている以上、そうしたものを見ても不思議じゃない。何を見たのかは知らないが、オレの過去なら隠さず伝えよう。

――ただそれ以上は何もなかった。

これはオレから行くしかないか。茉莉に後で言っておこう。

しかし何とも言えない時間は中々に過ぎてくれないもので、昼飯を食い終わってブーツとしていると、同じく暇そうにしていた将臣が意外そうな顔をして覗き込んできた。

「お前がボタン閉めてるの珍しいよな」

「まあ、な……廉は、近くにいないな?」

「え? そうだけど、どうした」

プチプチとボタンを外し、首元をチラリと見せる。

「これ」

オレの肉体が人外れた性能である所為で若干消えつつあるが、しかししっかりと証拠は残っているという有様。将臣も実際に見るのは当然始めてだからか、ガン見してるのがよくわかる。

「キスマーク、だな」

「昨日……二人で寝ただけで、そんな時に付けられた」

「つまりその、アレ……？」

「そうなる………んで、隠してた」

「満更でもなさそうだよな」

「惚れた女に独占欲ありますって示されて嬉しくない男がいるか」

「わかる。俺も芳乃にそんなことされたら、すごく嬉しい」

「だろ？」

ボタンを閉めながら少し茉莉に視線を向ける。

——視線が合う。

微笑まれる、微笑み返す。

「将臣」

「なんだ馨」

「心が溶けるぞ」

「マジか」

「……でもオレたちみたいになんだかインモラルな雰囲気と行為はやめといた方がいい。些細なことでも温もりを求めたくなる」

「ナニがあった」

「オレと茉莉は……姉弟か兄妹みたいな関係性だったから……ちよつとその、互いに、温工口を求めているようなフシもあって……」

「あー、そういうことか」

「けれどそのお……まあ、ちよいな……啼かせ過ぎたり、貪られたり、貪ったり……うん」

「——あいつ変わらず参考にならねえなお前」

「マジで参考が欲しけりや廉に聞け。恋人に首かぶかぶされるのも可愛くていいぞ」

「インモラルめ」

「じゃあかしい。……で、レナがなんかよそよそしいというか視線感じるんだけど何か知ってる？」

「あー……それはお前の過去を見たんだ、夢で。しかも一番アレな場面」

バツの悪そうな小声で言われたのは予想通りにして中々に予想外な話。うむむ……誤解されてる？ やっぱオレから行かなきゃな。だが。

「どの道ほら、見た記憶についても言わなきゃいけないからそっちは平気だと思っけど……」

「あ？」

「……お前の自殺、みづばさんに救われた筈なのに自力で助かったぞ」

「何……？」

——悩んだ顔してる将臣から言われたのは、そんなこと。辻褃の合わない記憶。辻褃の合わない展開。おかしい。

……問い詰めてみる、か。

「わかった。それは駒川に聞くさ」

まさか……なあ……

とかく、信じれるものを信じるしかない。優先順位はレナだ。友達だし、隠し事は無しで行こう。それがいい。

叢雨と叢雲／否神と不安

まあ放課後まで、大したことはなかった。

とりあえず茉莉に軽く話しておいて、誤解は産まないようにしておいたくらいか。万が一の場合はオレが茉莉に殺される。

やれやれ……今日一日くらい、せつかくだからゆつくりしたかったのになア。

そして今は――

「……」

「何さ、レナ」

「いえ……」

距離感を測りかねているレナから視線をチラチラ受けながら、朝武家に移動中。やりづらい。このやりづらさは……前に茉莉にポロつと過去を漏らした時とよく似ている。かつてと違って、今はさもありなんと受け入れ……てはいないが、しかしこの痛みがオレを形作るものなのだとわかっている。

心配そうな顔や雰囲気という訳ではない。何故？ というようなものだろう。彼女はあくまでもオレが単なる『始末屋』だと思っていたから、ああいう形でというのは予想外だった……と見たが如何に。始末屋で魔人で潔癖症でヘタレでパラノイアで茉莉だけが知ってるあれやこれやとか属性過多すぎるのではないかオレよ。いやそもそも先祖からして属性過多だった。ダメだ。

「むう」

言ってしまうか？

いや切り出し口をどうするかだよな。

そういう話をする――とは言ってもマジで気にしないでくれ、もう済んだ話だ、茉莉可愛いよ茉莉だし……

レナがあんまりそういうのを気にしない人だとは理解していても、友人の自殺だしなあ……言葉しくじるとえらいことになるぞこれ。

「なあ、レナ」

「なんでありませんようか」

「……人ってさ、秘密知られると中々にどうしていいかわかんなくなるよな」

「……それは……そうでありますね」

「でもそれが今では「ああそんなこともあったなあ」って処理できる話なんだけど重いとかだと余計に困るよな」

「……っ」

息を飲むのが聞こえる。目に見えて動揺している。けれどそれはとつくに答えを出している事であつて、さて……ならあれか。もう、切り出してしまおうか。聞かれたところでいくらでもやりようはあるんだから。

「将臣から聞いたよ。まああれだ、色々と気にするな」

なので、単刀直入に言うことにした。

しかし物言いに問題があつたのか、あるいはあまりにもさつくりと流したのが問題だったのか——とにかくレナはその言葉を聞いてからしばらく立ち止まって啞然とした後、ワナワナと震えながらグツと迫ってきた。

「気にするなつて言われましてもっ！」

……正直、レナがどんな想定と想像をしているのか全くわからない以上、どんな言葉が一番良いのかというのは分かりかねる。

「もう過ぎたことだ。それに他の人から散々叱られた話だし、そもそもアレは潔癖症を拗らせたオレが選んでしまっただけに過ぎないなあ」

そうは言っても物凄く心配そうな態度をされてしまう。言葉選びをしくつた感が強い。……レナを納得させられるものはなんだろうか、納得させられる言葉……あ、そうだ。一番いいのあるじゃん。

「……っーか、なんだ。昔そうしても今こうしてることとは大丈夫つて証拠だろ」

「いやそれ無茶苦茶ですよ」

「ですよねー。さて、本当にオレは問題無いんだが信用は……あんまり無いよなア」

——らしくないレナの視線から感じるものは、不安だ。それも確証

が無いから不安になる……といった具合だろう。

けれどオレの信用が無いのは折り紙付きだ。その上、レナ自身もきつと自覚しているだろう。オレは大抵の場合誤魔化したり言葉を濁したりで、本音を言うのが少ないというか、本音を巧妙(?)に隠しがちだから、信用するに足り得る理由が見つかりづらい。

忘れがちだが、オレとレナの付き合いは短いし、距離はそれほど近くない。オレの根幹に近くところをレナは微かに知っているけど、オレは彼女のことをさほど知らない。ただなんとなく、人の温もりを求めている節が見えるくらいか。

なら、言うべき言葉はただ一つだ。

彼女を安心させられる言葉。彼女は何故を求めている。今もそうするのではという不安を消したいだけだ。

姿勢を直し、改めて向き合って、そのびっくりするほど端正な顔をジツと見つめて――

「レナ。オレにはもうああいう選択肢は無い。だって言われたんだ。駒川には「生きろ」、茉莉には「生きて」って。ならもうほら、そんなことできるわけないだろ？　だってオレはあの人には頭上がんないし、彼女を愛殺したしているんだからさ」

どうして今も尚、自分という存在に複雑な思いを抱いているオレが、拗らせた潔癖症に従って死を選ばないのか――その理由を、簡潔に伝えた。

「生きろ」と言われて生きていた。

「生きて」と言われて生きると決めた。

生きてやる、生きてやるも……と。

レナはそれを知らない。けど、オレにとって駒川と茉莉が重要な意味を持つ人であることは知っている。

だからこれを言うことが、一番いい。

ただ少し――悍ましい想いが溢れているけど。

「ほっ……」

そんな言葉を聞いてやっと信用できたのか、ホッと胸を撫で下ろした。けれど少しだけ、彼女の、その瑠璃色の瞳が……オレには悲しみ

の色を宿しているようにも思えた。

それは一体、何に対する憐憫なのか。

「なんかごめんな、見苦しいものを見せる形になって」

しかし見せるものではなかったと思うのは事実。見てしまったにしろ、見せられたにしろ、レナにとっては要らぬ不安だ。オレの口から飛び出て来たのならこうはならなかったろうが……将臣め、素直に話しても良かったというに。

まあ、無理も無いか。

「いえ、わたしが見ちやつたのが悪いのですから」

「……見せられた、という可能性もあるけどな」

「カナエに、でありますか？」

「まあね」

見せても何か楽しいことあるか？ という点になるのだが。見せる理由など無いだろう。もたらされる結果としては全く面白くない。おかしいな、同族の筈なんだが……

「——友達を置いて逝くのも、失礼というものだろう」

「へ？」

まあわからんものはわからんと切って、素直な本音を伝えてみたら、これまた意外そうな顔をされた。ポカンとしている。可愛い。

——許せ茉莉、オレは今レナの可愛さにときめいている。

「惚れた女もそうだけど、友達つてのはとても大事なものだ。オマエもその一人だよ、レナ。殺したい程に愛おしい友人だ」

「お、おおう……なんだかちよつと不気味でありますね。素直な力オルフって」

「そつちななの!? 殺したい程に愛おしい友人じゃなくて!?!」

「? それがかオルなのでしよう? マコだって受け入れているようでありますし、部外者のわたしがトヤカク言う必要は無いかと」

「あ、うん」

哑然としていたのに、なんとも言えない笑顔を浮かべて、そして最後にはケロツと真顔。

マジかよ、そんな軽く流されるとこっちが拍子抜けだよ。

まあ、レナからして見ればオレが葉子を置いて死ぬのではとも思っただろう。あんなものを見せられてはそうもなるうか。

「けれど良かったでありますよ。わたしが想像してたことと全く違って」

「悪いね、いやホント。ちなみに手が出そうになる件については割となんとかなってる」

割となんとかなっているし、どうにかなりそうな感じはあるのだが、そのどうにかなるまでに一悶着ありそうでおつかない。

「じゃあ、改めて……よろしくな、レナ」

「はいっ。よろしくお願いしますですよ、カオル！」

眩しい笑顔のレナを見て、内心で自嘲する。

……考えてみれば、オレも田舎に毒されていたようだ。新参者にそこまで対応が上手く出来ていないところとか。

元都会暮らしが聞いて呆れる。なら今度は、またなんかみんなで行ワイしてみるか。

……そうだなあ、田舎っぽいことじゃなくて、なんかこう……本当にバカやったりとか、そういうのがいい。

ハズレ入りの菓子食べてみたり、くだらないことで一喜一憂したりとか。

——夢のある話だ。

頬が緩むのを感じる。

ビンボーくじは男勢が引けばいいだろ。その方がバカな反応が出るから。

——その為にも、オレは過去に打ち勝たねばならない。そして最後に、立ち塞がって超えられねばならない。

オレを超えろ、オレを倒してみせろ、オレに唯一無二の終焉を与えてみせろ。オマエたちが人間であるのなら……

怪物を超えるは、人の誉れだろう？

「レナ、決着ついたらさ、今度また何か遊ぼうぜ。みんなで。んでアホなことしよう」

「おお、是非是非！ 必ずでありますよ！」

「ああ、約束だ」

——そうして小さな決意と、和解(?)をしてから、オレたちは朝武家にたどり着いた。既に同居組と茉莉は私服。羨ましい。

多忙な安晴さんまで呼んで報告とは、と思ったが、何でも叢雨丸の元々の所在とかその辺もあって呼んだという。

で、話を聞けば何と叢雨丸は叢雲という神サマが、惚れた男を守る為に身を削って作った刀であるという。

——それを聞いて、茉莉も芳乃ちゃんも、ムラサメ様もその一途な想いに感服していたが……

「む、どうした馨。苦い顔をして」

「ムラサメ様……どうしてもオレは——叢雨丸の誕生経緯もそうだけど、叢雲つて神様の行動が総じて気に食わない」

すべからく気に食わない。

行動、言葉、態度——何もかもが絶対的に気に食わない。人伝に聞いてなお気に食わないし、隠しているが心底では、非常に強い不快感を感じる。

何故かはわからない。

理由が思い当たらない。

同族嫌悪などではない。

羨望でもないし、ましてや理解出来ないとか、腹が立つとかではない。

——心底から気に食わないし、吐き気がする程に不快だ。

叢雨丸を尊いものとは思えない。選り好みする愚かな妖刀にしか思えない。悍ましい想いの形としか思えない。

何故？ 何故オレはもはやい神の行動に、親の仇のような反応を示している？ 理由が無い。理由が無いのにここまで不快感、気に食わなすぎ、そして何よりも先に来る感想——何を勝手に救われている？ という、他人の物のようで自分の物であるこの憎悪。

オレであってオレでない者が、奈落の底から憎悪の絶叫と共に狂い哭いている。魔性ではない、根本からしてオレはこの叢雲という神と

相容れない。

——訳がわからない。

が、なんとなく理屈じゃないことだけはわかる。

オレが魔人である限り、異形の血族である限り、そして稻上馨という存在である限り……叢雲という存在とはどうしても反りが合わないのだろう。

効率的とか効果的といった言葉は馬耳東風、好き嫌いというものもは理屈や道理を拗らせる。なるほど、オレと叢雲は生まれながらに不倶戴天なのだろう。

ただ、それならどうしてその弟たる犬神にはこの咆哮を上げない？

だから余計にわからない。単なる宿命、というわけではなさげだが

……

……いや、待てよ……？ 魔人足り得る由縁は、そこにあるのか？

「訳わかんねえけど、生まれながらに不倶戴天なんだろう。オレの血が魔人である理由もその辺にあるとは思うけど。とにかく、なんか気に入らないってだけ。いやさ、個人としては心底から好きな人を愛^殺せるなんてすごいなあと思うけど……どうもね」

酷いしかめっ面で、自分でもわけわからんけど、とりあえず気に入らないだけで何かするわけではないと伝えておく。確かに魔人として一族が生まれた理由なんて誰も知らないのです、みんな「まあそういうこともあるだろう」と一応の納得はしてくれた。

「しかし神の身を削って生まれた刀かあ……これは祀り方が正しかったかどうか、しつかり確かめないと。ああ仕事が増える……」

なんだか日に日に疲れが増しているように見える安晴さんが、凄まじく疲れた声でそう言った。いや大丈夫かよアンタ。

見ろよ芳乃ちゃんを。めちゃくちや心配そうにしてるぞ。昔と立場逆つすよ。

「お父さん、一日くらい休んだら？」

「今までのみんなの頑張りに比べたらこの程度大したものじゃない。それに人の都合で迷惑かけたんだ、正しい形で祀らなきゃ大変失礼だろう」

「それって……え？ それはいいからそつちの問題を先に片付けろって……？」

「あー、茉莉君。彼にはひと段落ついたら手を変えてみると伝えてくれ」

「はい、わかりました……？」

さっぱりわかってなさげな婚約者組やムラサメ様から判断するに、安晴さん、まだ言っていないのか。

多分犬神を祀る為にもう一つくらい作る計画でも立ててるな？

で、その上で将来的財政難への対応策の検討までしてると……いくつかの家に対策そのものは分散してるとはいえ、未だ中心は彼だ。その疲労は途方も無いものだろう。

オレンちは、経過は報告されるも基本的には製造にならん限りは話が飛ばん。レプリカ製作だって費用の方で見送られたんだ。あとはただの意見飛ばしで終わりだろう。親父とお袋ならともかく、オレは役に立たんし、それに渦中にいるからなあ。

「……とりあえず、僕はそつちの資料をほじくり返してみるよ。あとは馨君、みづはさんから後で来いって」

「は？ オレ？ なんで？」

「君の血筋の話とかなんとか」

「わかりました。終わったら行きます。てか、倒れるのは勘弁してくださいよ？ ちゃんと休んでください。つまらんことで川に行ったら秋穂さんにどやされるのアンタなんですからね？」

「そうよ、お父さん。倒れたら私泣くからね」

「あははは……泣くのは勘弁してよ、芳乃。お前に泣かれると、昔から僕はどうしていいかわかんなくなるんだ。けど、そうだね。今日は早めに切り上げるかなあ……将臣君、もし芳乃が泣いたらよろしく」

「ええっ!? なんで俺!?!」

「ご主人が恋人じゃからじゃろ」

婿殿に対してなんて無茶振りな……まあ、そういうこともあるか。

「……レナさんも、しっかり休息を取ってくださいね？ 過労で倒れるととても大変ですから」

「マコ、実感こもりすぎでは」

「……その昔、修行でぶっ倒れたオマエを介抱してやったのは何処の誰でしたっけなア？」

「そんなこと言わなくていいから!？」

マジで昔、茉莉がぶっ倒れた時があった。あれは生きた心地がしなかったなあ。レナならきつと大丈夫だと思うが、人間、存外に脆いから気を付けてくれると嬉しいもんだ。

そうしてオレは――

「やっぱり着いてくるのな」

「ちよつとでも、一緒にいたいから」

「オレもだよ」

「ホント？ 嬉しいな。あは」

「うひひって言わないんだ」

「……それは忘れて」

やっぱり着いてきた茉莉と一緒に、診療所へと向かっていた。

ちなみに、たまにうひひというのは茉莉曰く「クセみたいなもの」らしいけど……オマエ、クセってなア。まあ可愛いから良いんだけど。というか。

「やけに強く手を握るな」

「だって馨くん、レナさんには妙に甘いじゃん」

「否定しないけどさ。昨日あんなだけしてまだ不安なのか？」

「恋人が異性と二人きりだよ？ ほんの少し不安になったっていいでしょ」

「ま、そうだな。ぐうの音も出ない。ごめんよ、茉莉」

「あは、しょうがないから許したげる」

えへへと笑う茉莉は素敵だ。

オレは本当に、この笑顔に心の底から惚れたんだなあ……と、言葉に出来ない嬉しさを感じながら強く握り返す。

「茉莉」

「何？」

「……好きだ」

「……うんっ」

なんでもないやり取りの筈なのに、なんだか言い表せない恥ずかしさを抱き、頬の熱を感じながら俯いて——けれど、手だけは決して離さないで。

茉莉はどんな顔をしてるかな。照れてるのか、それとも笑顔なのか。確認すればいいだけなのに、なんでか出来ない。

「ね」

「ん」

「芳乃様と有地さん、大丈夫かな？」

「散々お膳立てしたし、都合良く安晴さん熟睡してくれそうだし、ムラサメ様は察してくれるだろうし。平気さ」

「だといけど……ちよつと気になる」

「ま、あの二人心配する必要は無いだろ。だって将臣と芳乃ちゃんだぜ？ 見てるこつちが砂糖吐きそうなくらいに甘いんだ。大丈夫だろ」

ぶつちやけそれほど心配はしてない。

というか、絶対に生きて帰るのだという理由くらいさつきと作って欲しい。オマエら健全な年頃なんだからもつとこうがつついていいじゃないか——と考えて、自分を柵に上げてることに気が付いて、肩を落とした。

当然、茉莉に笑われた。可愛いから許す。

「……ふーん、熱いねえ」

そして診療所に着いて早々、ムカつくくらいニヤついた表情の駒川に出迎えられた。

「うっせえ。好きな女の子を感じたくて何が悪い」

「素晴らしいじゃないか。というかそろそろ手を離れたらどうだい。資料とか色々あるから」

「だってさ、茉莉」

「帰りもだよ」

「わかつてる」

「ひゅーひゅー」

「うっせえ!!」

「馨くん、落ち着いてよ。もう」

そんなこんなで用意されてた椅子に腰掛けて、駒川が雑に取り出したファイルを受け取る。横から茉莉が覗き込んでくると同時にくだったか、そこで――

「あ、それ君のご先祖様に関する情報だから」

「……え？ マジ？」

「マジもマジ、大マジさ」

啞然としながらパラパラと中身を捲る。けれど動揺が出てくる所為か中々こう、最初のページにたどり着けない。目次も前書きも要らんのだ。

「ここだよ馨くん」

「サンキュ。どれどれ……ん？ 否神？」

やれやれといった雰囲気の子に教えられて、ああここかと目を通した時に真っ先に入ったのは否神という文字。伊奈神なんて何処にもない。

「私の友人が京都にいるから、ちょっと探してもらったんだ。見事に出てきたよ。この否神いながみがね」

……イナガミ。

稲上、伊奈神、そしてこの否神か……なんつーか、段々と言葉が定着してきたみたいな感じだな。茉莉の良い匂いと柔らかさに気が散らないように気を付けながら読み進める。

「かつて、幼少より老境の極みに至りし神童あり……か。名は、久楼くろう否神いながみ公きみ暁……また長えな。しかもこの否神いながみつてのは単なる自称だつて？ じゃあなんだ、コイツは久楼くろう公きみ暁あきつてなるし、ウチは本来久楼さん家つてわけか」

「そうなるね。久楼馨、結構似合ってるよ」

「やめろよそういうの。んで？」

「この人物は、常日頃から神童つて呼ばれることに辟易してたのか、よ

く「否、我は神に非ず。昏き力を宿す人なり」と言つてたらしい」

否、我は神に非ず——故に、イナガミの名を冠する。
なるほどな……

「そして彼は自身が当主になると久楼の名を変え、伊奈神を名乗らせた。我々は神の如き者に非ず、我々は人に非ず、我々は昏き魔人なり……とね」

当時の常識に沿って考えると、かなり殊勝なことだ。神童だなんだと持て囃されて、神の如き者ではなく、単なる人でもなく、魔人であると名乗り、そして戒めとして己の名を変える……だから否神か。

「けど、時代的には幕府成立前後だろ？ 新天でも名乗って反逆しそうなもんだがな、魔人を名乗るのであれば」

「そこに関してだがこの否神公暁、何故だか知らないが、天皇をやけに……というか人一倍尊んでいたそうだ。更に言えば天皇に否定的な人間に対して天誅を加えたりと、過激派と言つても過言では無い言動だったとある。理由も無くね」

「となれば奴の魔性は、自己が崇める者に対する絶対性と言つたところか。あるいは……神に対する強烈な憧憬や崇拜か」

「彼の死後、伊奈神からはそんな風に理由無く何かをするという人間は出なかつたわけじゃない。剣鬼 伊奈神雅隆に代表されるように、時折殺しを求める人間が生まれてた」

「剣鬼ねえ、物騒な奴だ」

「物騒も物騒だよ。ただひたすらに剣を極める為に実家から出て行って全国人斬りの旅。ちなみに家督は弟の雅義が継いだ。それから彼はしばらくして、さる町娘と結婚して娘が二人できたと実家に文を送っていたようだ」

「その娘の名前は？」

「長女は奏、次女は京香だつてさ」

「奏と、京香……つまり奴らの親父か」

だがこの資料はそこで終わっている。

しかし、これだけあれば十二分だ。何故ならたった一つとは言えども、知らなければならぬことは知れた。

「つまりだ駒川、ウチの血が魔人足り得る由縁は、この公暁って奴が出てくるまで欠片も無かつたんだな？」

「そうだね。まったく。突然変異のようだ」

「……人が突然変異って、例えば鬼と結婚したりとかですかね？ ほんら、昔から天女と人間の悲恋とかよくあるじゃないですか」

「茉子がさも名案かのように言っているが、千年前の京都だぞ。鬼とかのもののが生きていられるか。無茶言うな。そら見ろ、陰陽師の子孫である駒川だって頭抱えてる。」

「あ、あれ？ 違いました？」

「……どー考えても血が混ざったはねーだろ」

「資料よく見なよ。ちゃんと人間だって書いてあるから」

「いやいや、歴史に隠された真実みたいに！ 鬼の一族とか！ そういうのロマンありません!？」

「茉子、流石に創作物にしか許されねえ展開だよ」

「……話、続けていいかい？」

「駒川に言われて気を取り直して言葉を待つ。」

「とにかく、稲上の魔の流れは唐突に現れたみたいなんだ。それも、原因が全く不明でかつ、馨や報告にあった奏と同じように何かを殺すことにやたらと執着している」

「……昨日、茉子を迎えに行く前に駒川には伝えておいた。自分がどんな宿痾を持っているのかを。」

「けどこうして見ると、オレは先祖返りなどしていなかったのかもしれない。オレは先祖返りなどではなく、ただ単に血の中に眠る魔性が目覚めただけなのかも、と。」

「しかし、最初の魔人もそうだが、みんな生まれながらに殺しに生を見出そうとしているのか。そうしなくては生きられないからとは言えども、それは生物としてあまりにも破綻した在り方——」

「……恐らくは京香さんもそうだろうね」

「けど、アイツは理由を知らないみたいだった」

「……ならイナガミとは一体何者なんだろうね」

「さあな。気にしたって仕方ねーさ」

今を生きるのもう大変なんだ。

血の源流だとかはもう、考える必要も無いだろう。

……そして、オレは。

「菜子、少しだけ外してくれないか？ 駒川にちよつと話があつてな」

「大事な事なんだね。わかった。外で待つてる」

菜子はそう言つて、部屋の外へ出て行く。

中はオレと駒川だけ。

「なあ、もしかしたらオレ……」

言葉が、中々出てくれない。

まるで罪を自白する時のようだ。

「オレ、アンタの記憶を弄つてたかもしれないねえ……」

「ああ、そのことかい？ 何となく検討は付いてたよ」

……はい？

目を丸くして驚いていると、やれやれとため息を吐いた駒川は、呆れた態度を隠すことなくこう言った。

「あの日、君に説教した後には気付いたよ。そもそも馨が山に向かったなんて、時間帯から逆算しても誰も知る筈が無いし、ましてやあの時間、私が山に行く理由すら無い」

「えっ……あの……」

「ま、だからなんだって話だ。嘘の記憶が植え付けられたところで、私が君を心配してああいう言葉をかけたのは事実だからね」

—— だって大人は、子供の助けになるものだろう？ ——

なんでもないように、この人はそう言った。

もうそう言われてしまつては、オレは何も言うことはできない。だってそれでいいんだ、って言われてしまったから。

「嘘が始まりでも、今に至るまでの全ては本物だ。そうだろうか？」

「……申し訳無く思ったオレがバカみてーじゃん」

「そういうところが君の美点だろ。魔人であつたとしても、君は普通の人と同じように、人を心配したり、優しく接することができる子だ」

「……」
やめてくれとは言えない。

ホント、この人だけには素直になれない。真つ赤であろう顔を背けて黙るしかできない。

そんなオレを見て、駒川はさぞ面白そうに笑った後、扉を指して――

「ほら、さつきと戻りなよ。常陸さんとの時間、大切にするんだぞ」

「わかってるよお……ありがとな、騙されてくれて」

「気にしないでくれ。私が好きでやったことだからさ」

「……うん」

――本当に、敵わない。

大人というのは、強いものだ。

手間のかかる子供を見る目で見送られながら、オレは菜子の元へと戻った。

――家に帰ってきた。

何故か菜子も着いてきた。なんでも「芳乃様には晩御飯までに戻るって言ったから」らしいが、割と時間が無いことを知った上でそうしているのだろうか。

まあ、構わないのだが。

結局新品の制服にも、ボタンを閉めることにも慣れなかったなあと思いつながら私服へと着替えて、二人だけで、軒下から静かに庭を眺める。

「雨だな」

「雨だね」

ザアザアと曇天の中で雨が降り注ぐ。風があるわけでもなし、ただ降り注ぐ雨と、水滴が水溜りに落ちる音だけが聞こえる。

「菜子」

「なあに？」

心中に息づく、微かな不安。

――不安だから、欲しくなった。

彼女の、温もりが。

菜子に抱きついて、心中の不安を温もりで消すように、彼女の鼓動

に耳を澄ませる。

「……寒いんだ。オマエの温もりを、分けてくれ」

「ん。いいよ」

瞼を閉じる。

鼓動がより鮮明に聞こえる。温もりをより鮮明に感じる。頭を撫でられてるのだろうか、髪に手が触れる感触がする。

「茉莉の鼓動が聞こえる」

「あんまり聞かないで。ちよつと恥ずかしいから」

「でも、なんか安心する」

「そっか。よかった」

しばらくそうしていると、急に茉莉が少し離れた。そして――

「………茉莉?」

「うひひ、キスしちゃった……あは……」

ほんの少しだけ重なった唇。けどそれは、更なる温もりを宿していた。

「……なにさ、急に」

「寂しそうだったから」

「なんだよそれ」

微笑む茉莉に半分呆れながら、でもその優しさに甘えて、今度は自分から彼女を求める。

――僅かな時間でも、確かな温もりだった。

「……茉莉の唇は、相変わらずあつたかいな」

「そう? ワタシじゃわからないけど」

「あつたかいんだ、とつても」

「ふふ、じゃあワタシも今度馨くんはどうか確かめてみようかな」

「そっか」

それからオレたちは、時間が来るまで――側にいた。

逢魔

夢を見る二人の前に現れたのは、戦場跡に一人佇む黒衣の女であった。

——馨と酷似したそれは、魔人たる奏。血塗れの姿である彼女は、まるで総てから外れて忘れられた、螺子の一つのような雰囲気を感じていた。

「……これは、魔人の記憶……？ 叢雲さんや白猫さんは出てこないな」

「何故マサオミまで？ わたしだけが見るのでは？」

うむむと二人とも、何処と無く気持ち悪さを感じながら、一応見続ける。

「つまらないな……」

退屈。そして飢餓。

自分の生を実感するほどのことではなくなってしまった。ならばやってないことをやるしかない。

……父母を喰らってみたい。

その感情が芽生えた瞬間に、彼女は帰郷した。

——そうして、帰郷してから瞬く間に屋敷の人間に対して殺戮の限りを尽くした奏は、静かにその中心にある大部屋へと向かった。

もつとも、殺戮をした場面は見えていないが、血の海に倒れ伏した人間を無視して歩く場面を見れば、想像に難しくないだろう。

火の手が周り、パチパチと焼ける音が響く中、太刀とも打刀とも付かぬ異形の刀『転生』を携えて、静かに。

その足がピタリと止まる。

視線の先には正座をして待つ壮年の男性。傍らには太刀を置き……それはまさしく、老けた馨と言っても過言ではない見た目だが――

「奏よ」

声は、人の温かみなど持たぬ鬼のそれ。悪鬼羅刹、冥府魔道に生きる怪物。人ですらないナニカ。馨と比較するのが失礼なくらいのも

の。ガワだけが同じに過ぎない。

魔人の理解不能さと比較してもなおおぞましい。歪んでいるのに真つ直ぐだから。様々な物に絡み付いて真つ直ぐではなく、根本から歪んでいる。理由などなく、そういうものだから。

「やはり、そう”成った”か」

「父上」

ゆっくりと太刀を携えて立ち上がり、その狂気のみを宿した鬼が魔人を楽しげに見つめる。

「――至りしお前を斬れば、儂は更なる人斬りの極致に達せる……そう思っただけだが、我が大願は成就せりということか」

「なんだ、更なる進化の為に母上も弟子も斬り捨てたのか。なあ父上、私も大概外道であると理解しているが……それ以上の魔物、鬼だなそれは」

戯けたように肩を竦めつつ、心底から軽蔑した態度を取る奏だが、理解できない魔人の言葉には同意しかできない。

しかしそんな言葉を一切聞こえていないかのように、静かに太刀を抜き――絶対の殺意と更なる高みに至りたいという、臭気さえ放つような深く濃い執念を、複雑に混ぜ合わせてぶちまけた声で。

「さあ……斬つてやろう、魔物よ。我が糧となる栄華と共に死ね」

人を捨て去った鬼に、完全に成り果てた。

「笑えない冗談だ、魔物はそっちだろう。滅びよ、ここはお前の住む世界ではない」

そう吐き捨てて、転生を構え直す。

横に流した無形の構えを持つ鬼と魔人が立ち合う。

一際炎が燃え盛り、その刹那。

炸光する火花、弾け飛ぶ対の魔刀。^{きば}

荒れ狂う炎と死に彩られた白黒の思い出で、歪んだ求道鬼と真つ直ぐな魔人が――趣味と義務が、激突した。

紅蓮に染まる中で鬼の爪牙と魔人の爪牙が金切り音を鳴らしては

離れる。

互いに全く同じ動き——しかしその攻撃の中に潜む妄執は桁外れに違う。それこそは、ただ生きる為に他者を殺すしかない魔人と、更なる高みへ登る為に望んで他者を殺し尽くす鬼の、文字通りの次元の違いだ。

「フンツ、ハアアアア——ツ!!」

「ク、っ……ちいっ!」

渾身の上段唐竹割りを防いでなお放たれる上段唐竹割り。一刀両断……その二連という魔剣を、呼吸をするかのように繰り出す雅隆。

——あの奏が、魔人が、顔を歪めて必死になって応戦している。

刀や鎧、果ては兜や馬ごと叩き斬って死に至らしめるような、恐ろしいまで無駄を削ぎ落とした一太刀一太刀を、これまた無駄をそれなりに削いだ軌跡で迎撃するが——

(……レベルが違う。この二人の戦いは、見た目通りの年齢で行えるものじゃない……!)

その剣戟を見る将臣の心中に渦巻くは、恐怖。

疾く死ぬ、我が糧となれという我欲と妄執を隠さぬ悍ましく醜いが故に美しいその太刀筋と、ただひたすらに生きることと専心を置いた、がむしやらかなまでに真つ直ぐな太刀筋のぶつかり合いは、彼らの見た目で行えてよいものではない。

奏の年齢を、京香の享年から逆算して行けばわかるが、彼女は30代にも満たない。芦花とそう変わらないか、一つ下くらいの年齢だ。それに彼女の父政隆もまた、40代に入ったばかり程度。

そうでありながら、神々の闘争が如き魔技のぶつかり合いを見せている。

「し——ッ!」

剣戟の最中に放たれる、不意を突いた筈の突き。奏の動きは見事だった。的確に隙を突いて重い一撃を差し込む。実に基本に忠実で、見ている将臣もレナも感心するほどに綺麗な動作だった。

流麗という言葉を尽くしてなお足りないほどに流麗——

「ぬウアツ!!」

だがそれを、雅隆は防ぐのではなく攻撃の軌跡で叩き落とした。逆袈裟の斬撃で突きを”破壊”し、更に横薙ぎの素早い二連撃。これを弾いた奏に——息を吐く間もなく放たれる流れるような背撃が襲いかかる。

(この動き、馨の——)

トレーニングの最中に馨の放ってきた技と全く同じ動作。馨は対人においてこれを好んでいるが、なるほど、流れるように放つのであれば確かに有用だと感じる。

しかし、過去に見たそれとは完成度は段違いだった。

いいや、同じ技なのかどうか一瞬だけ迷った。

何故なら——起こりが、無い。

(……怪物め)

斬撃から背撃に繋ぐには、どうしても身を捻る必要がある。だといふのに、その捻りが瞬間と瞬間の隙間で発生して目視で確認した時には既に”放たれている”。

なんだそれはと。

理不尽だ。人間の為せることでは無い。どれほどまでに極めても、見えないほどの速度で行動するのは困難を極める。現実でそんなことをやれば、何十年かけて形になるか……

人刀一体という境地、それをも超えた人間という名の刀。この男は、最早鬼でも人でもない。伊奈神雅隆生きた妖刀という一振りと化している。

その背撃が奏をくの字に折り曲げる。苦悶の声が一瞬だけ漏れるが、彼女はギロリと眼前の鬼人刀を睨み付けて踏み止まり——

刹那、流れる動作の中で、雅隆の空の左手が何かを撒くように動く。それは——炎。呆気にとられる奏。炎を撒くなどと、まるでフィクションから飛び出してきたタチの悪い現実だ。タチの悪い現実である魔人すら啞然とする怪物がここにいる。

そうして撒かれた炎をなぞるように、刀身が滑る。すると如何なる魔技か、炎が炸裂し爆発を生んだ。

「……は？」

「え、エンチャントファイヤーでありますか……!?!」

爆発する剣閃。

粉塵爆発とかいう話ではない。

魔技すら既に通り越した。

——これは、ただの不条理だ。

「む……」

だがその爆発剣の後には、影も形も無い。

——いや、違う。

黒い霞が頭上を取っている。

それが人の形を取り……奏を作り上げると同時に上空からの勢いを付けた兜割り。当然ながら落下スピードの方が早い。さしもの雅隆もこれには大きく飛び下がり——畳に斬撃痕が刻まれた。

「また妙な術を使うものよな……」

「炎を操るか、妖め……!」

「貴公ほどではない——」

奏が踏み込む。

掬い上げるような力強い斬り上げが、斜めに防ぐ刀身に、ガキンと音を立てて噛み合う。そこで離れることはなく、むしろ滑らせて刀を自由にして——更に素早く連撃を重ねる。

真空波すら生じると誤認しそうな高速怒涛の剣舞。袈裟に横薙ぎ、逆袈裟だけだが、たったその三つも極めれば絶死の爪牙と成り得る。

ふわりと浮くように、舞うように、しかし敵手を八つ裂いて殺すように。

——一撃。

——二撃。

——三撃。

——四撃。

——五撃。

——六撃。

全て防がれる。弾かれる。その精度、その無駄の無い動き、全てが異次元。普通高速で放たれる連続攻撃を完璧に防ぐことなど不可能だというにこの怪物はやってのけた。

だが、しかし。

放たれる渾身の七撃目。

回転しながらの逆袈裟斬り——その刀身に、黒い輝きが宿った。

それは闇の焰。

喰らい殺した魂の怨恨。

死の炎を操る鬼を超えるべく無意識に編み出した、闇の焰。

その刃が太刀に激突した時、雅隆は太刀ごと吹き飛ばされた。いや、吹き飛ばされたというには語弊がある。防いだものの、威力を殺し切れずに後ろへ押されたのだ。

「はあああ——ッ」

その隙を逃す奏ではない。

神速で踏み込み、転生を構え直し——突き入れる。

「ぐ、——ッ!？」

突き入れられた刀身が鮮血に彩られ——る前にその刀身を掴み心臓に直撃する軌跡をズラしたのだ。正に神業。浅い入り、そして仕留めそびれたと判断するや否や引き抜き、二者は大きく距離を取る。

いくら魔人とは言えども、身体に刀を突き入れては損傷が大きい。ましてや、馨のように再生手段が無いとなれば……

「まだだっ、奏……!!」

刹那、雅隆が吼えた。

吼えて耐えた。出血と痛みすら気合と根性で耐えて、そのまま太刀を大きく振り回す。すると刀身に炎が巻き付き、大きく構えて。

「でエエエエエエアツ!!」

——それを、振り下ろす……!

炎の太刀が地面に着いた瞬間、炎は線となって奏に襲いかかる。それを大きく横に跳び回避し、直後跳んで接近する。刀身に宿る闇の焰と共に、勢いに任せた、大振りの袈裟斬りが振り下ろした隙を狙って差し込まれる。

が、これを身を横に逸らす事で回避する。しかしこの斬撃を完全に回避したというわけではない。着物に斬痕が生まれ、微かに血が溢れる。

「は——！」

続けて横薙ぎの斬撃を放つ奏。

闇の焰が刀身に迸り、それは光波となって放たれる。魔技の中の魔技。それに対抗するのは——

「かアツ！」

炎を纏った上段唐竹割り、光波を両断する。

「せエイツ！」

そして間髪入れずに繰り出される大振りの横薙ぎ。しかしその横薙ぎの軌跡を追って、地を焼き払うように、炎が荒れ狂う。

受けを選択せず、雅隆の背面に飛ぶ奏。すかさず雅隆が太刀を横に構えて、振り抜く。ただ踏み込みながら横に斬るというだけの単純な動作ながら、まるで漫画のワンシーンの、長い距離を斬り抜けるかのようだ。

両者に再び距離が開く。畳には夥しい量の、双方の血がへばりついている。

「……マサオミ、これと同じことをカオルもできるのですか？」

「多分、もつとすごいことできると思う」

「わあ……マジン、まるでマンガであります」

レナは本気の殺し合いを見ながらも、その現実離れした光景故になんというか正気のようなものを保っている。

一方将臣は、魔技に隠れた圧倒的なまでに研ぎ澄まされた技の数々に魅了され——同時に、恐怖していた。

(……俺はこんなものにはなれない)

たとえば、剣士としての才覚に優れていようとも。

このような怪物には成り果てたくない……心の底からそう感じた。それならばまだ魔人でありたい。”人”でありたいと……

なるほど、馨の気持ちがよくわかる。

「し、イイイイ——」

斬り抜けた体勢から素早く納刀。

抜刀術を繰り出すべく力を込めるものの、その太刀に炎が集まってい

そして。

「はア——ッ!!」

周辺を薙ぎ払う、長射程の抜刀回転斬りが繰り出された。

信じられないほどの射程。炎を纏ったその斬撃により、屋敷に広がる炎が更に荒れ狂う。

……その魔技に対応できたのは、奏の凄まじい生存本能によるものか。咄嗟に転生を構えて、その一撃に大きく吹き飛ばされながらも耐え切ってみせた。

転生を地面に刺して勢いを殺しながら、ギリギリと踏み止まる。

刹那、踏み込み一つで距離を潰してその勢いのままに斬りかかる雅隆の姿。刃が奏に通る前に、黒霧となって消え、奏は斜め左後方に出現。斬りかかるが凄まじい精度で弾かれ、続け様に放たれる掌底からの突き。それを後方へと跳んで避けて、素早く納刀し、踏み込んで十字斬りを放つ。

あまりにも疾すぎる十文字。

雅隆であつても防ぐことができず、傷を負う。だからそれでも倒れない。

そして大きく彼も跳び離れ——

「……もうなんでもありだな。お前もそうだったな馨……」

「あ、マサオミが遠い目を……」

思わずそんな会話が発生するような、異常が起きた。

左上段からの横薙ぎの構えを空中で取り、刀身に炎が巻き付いて巨大な炎熱刃を形成した。それは神の如き炎の剣。

……魔人の破茶滅茶さが群れをなして押し寄せている。理解などしたくない。

そして対する奏は左下段からの斬り上げの構えを取って、その刀身に闇の焰を——否、怨恨の瘴気を滾らせて死滅の奔流による赤黒の大刃を形成する。

「おオオオオオ——ッ!!」

「はアアアアア——ッ!!」

咆哮と共に振るわれる炎熱の大刃と瘴気の大刃。異形の鏝迫り合

いが発生し、しかしあまりにも絶大な、一撃絶命の威力を秘めたその大技故に一度の衝突で双方の大刃が崩壊する。

「ふんッ——」

素早く着地した雅隆は、続く二の太刀で仕留めんとした……その時。

彼の視界に入ったのは、転生を右に構えて突進してくる奏の姿。

着地してから、というシングルアクションを要求される政隆よりも疾く、鋭く——踏み込んだの突きを選択していた。

繰り出される絶死の一突き。

それをいなせたのは、剣鬼としての経験故か。

……だが、人を足場に飛ぶ、などという荒業は想定することは、できなかつた。

「これで——」

雅隆を踏み付けて中空に飛び上がる奏。

僅かな時間で赤黒の瘴気を刀身に迸らせ、大刃は作らず純粹な威力向上に用いる。

「——倒れる」

降下しながらの回転斬りを叩き込み、大量の鮮血が舞う。胴を深く斬り裂かれたのだ。しかも威力を引き上げられた刃で。

「ひ……っ!?!」

レナの悲鳴が小さく漏れる。

「見ちゃダメだ!」

すぐさま将臣は彼女の前に背を向ける形で立って、それを見せないようにした。そしてそれは正解だったと、すぐに思い知った。

崩れ落ちるのを踏み止まる雅隆だが、着地と同時に奏は勢いのままに突撃。咄嗟の反撃として放たれた突きを、更に裏に回り跳び込む形で回避しながら、素早く転生を振るい右腕を斬り落とす。そのまま流れるように左胸から首にかけてを斬り裂きながら背後に着地し、逆手に持ち替えた転生を、心臓へと突き立てた——

「鴉崩し……手向けと知れ」

「お、のれ……」

——お前が教えた技で死ぬ気分はどうだ？
——最悪だ。

そういうやり取りだったのであろうか。転生を引き抜くのではなく、心臓から左脇まで引き裂くように斬り抜いた。

……屋敷は更に荒れ狂う炎に包まれ、奏はふらふらと部屋の出入り口へと移動する。

雅隆は確かに剣鬼だった。他を圧倒する魔人だった。が、しかし、一線を退いて自分好みの強者を探るべく指導者となっていた彼には、戦場に出て殺し合いをする……その感覚が鈍っていた。

奏はそれを理解していて、敢えて大技を使い体力を消耗するように仕掛けて——まんまと乗ってくれたので、こうして殺せたのだ。もつとも、炎を操るのは想定外であったが。

「……っ」

あまりにも現実離れた殺人劇。

そんなものを直視してしまった将臣は、なんとかあくまでも夢だとして処理しても——誰かと触れ合って、忘れたかった。幸い朝はトレーニングがある。相談も忘れることも、しやすいだろう。

そして、二人に背を向けて佇む奏。

「ああ……」

漆黒の和装に、漆黒の髪は闇の中でもなお黒い。

その黒に浮かぶ白の素肌はまるで白夜のよう。

妖しくも神秘的な刃紋は炎によって映し出されている。

「私は今……生まれたんだ」

楽しげな、愉しげなその声と共に、その刀を軽く振る。

それは血振りにして杜撰で格好をつけたものだが、奏が行うことであり得ない程に恐怖を掻き立てられるものになっている。

それを何と表現すればいいのかを問われれば、きつと——魔人以外の何者でもない。

浮上する意識の中で、魔人の背中では、彼と彼女の脛に、鮮明に焼き付いた——



雨音の響く朝。

窓の奥の曇天を寝惚けた目で見て、此処にはいない温もりを求めて、動かした手が冷たい床に触れて意識がぼんやりと浮き上がる。

「……まっ……」

狂おしく愛おしい彼女の名前を呟いて、重い体を動かして――

「茉莉……」

この腕の中に、その温もりが無いことを……オレは、不安を感じた。

――オレが死ねば奏が自由になって殺し始める。

――奏が死ねばオレが完全回帰して殺し始める。

かと言つて奏を放置してはならない。ヤツはオレだけは殺せるのだから。恐らくオレに引つ張られているのだろう、この辺りは感覚でわかる。理屈ではない。

オレが奏を殺し、回帰したオレを将臣が倒す。なんとしても成功させなければならぬ。これに失敗すれば、穂織に未来は無いから。そしてオレにも未来は無い。

……茉莉と芳乃ちゃんが出るような事態になったら詰みだ。彼女らではオレを倒せない。打ち合える茉莉は根本的な対処法が無く、根本的な対処法を持つ芳乃ちゃんは打ち合えない。そんな隙だらけの布陣、愛す^{殺す}ことを目的としたオレが喰い破れない筈がない。

――失敗は許されない。

恩人と、恋人と、友人と、家族とで、先に進む為に。未来を掴む為に。この地を守る為に。約束を果たす為に。

……だからオレは不安だ。みんなを信じることはできても、合理が嫌な事ばかりを考えさせる。茉莉と共に……いや、誰かと一緒なら、そうならないのに。ああ、まったく……嫌な性格だ。

茉莉のいない食卓――

茉莉のいない玄関――

茉莉のいない時間――

茉莉のいない空間――

茉莉のいない……

雨は通り雨で、あつさりど止んだが——オレの中の曇天と通り雨は晴れていない。

フラフラと外を出歩きながら、ぼんやりと散歩をして気を散らせようとしていた。苦痛ではないが、とても気が重い。

というよりも、先述の理由からとにかく他人と触れ合いたい。そうすれば何も考えずに済むから。……そうか、虚絶と——

内面に声を送る。

けれど帰ってくるのは何も無い。何故かと考えて——今の虚絶には統括人格を起動させるだけの核が無いことに気が付いた。そうか、そうだよな。オレのパーツも、奏も京香もないんだ。当たり前だよな……

一人を無数に分割して、何人もいるように見せかけていただけ。実際にいたのは、オレと奏と京香と……あとは犬神くらいか。あとは有象無象の亡霊たち。なんて虚しい人形遊び。

もう一度、オマエの機械的な声が聞きたい。なア、オレの端末よ——

いや、ダメだ。

人の普通ってのはこういうのなんだ。無心でいる。茉莉のことを考える。茉莉のことだけを。そうして逃れる、心中の不安から。

——オレがこの地を愛^{殺して}してしまう可能性から……

「ちくしょう、どうしてこうも……」

「どうしたの？」

「大した話じゃない」

「全然そんな顔してないよ？ 大丈夫？」

「大丈夫だけど……オレ、どうしても嫌な想像ばかり頭に浮かんじまう。嫌なもしもばかり考えちゃうんだよ。しかも先の事で」

「そっか……でも、そればかりは仕方ないよ。ワタシだってそういうこと、考えちゃう時あるから」

空いている手に彼女の手が絡み、彼女の温もりを感じる。途端安心する自分に、なんだかなあという自嘲が溢れて——

「「じー……っ」」

「なっ!? いっ、いつからだオマエら!? てかトーテムポールスタイルやめろ! 怖い!」

いないと思つてた三人がトーテムポールでコッチを見てるのに気が付いてビビつた。いやもつといいのなかつたのかね……

「馨さんの柔らかい雰囲気が見たいって将臣さんが」

「馨のデレた姿が見たいってムラサメちゃんが」

「馨の昔みたいなきがが見たいと芳乃が」

シレッと全員が全員、「私関係ありません。どうしてもつて言うから付き合つたんですー」みたいな捻た口調とおちよぼ口で、かつ下手くそな口笛吹きながらそんなことを抜かしやがった。

ため息を一つ吐いた後、茉莉に視線を向ける。オマエは? と……

「ワタシは特に理由無いよ。だつて馨くんと話したかつただけだし」

なんでもない様に言つて、小さく微笑む茉莉。とても可愛い。

「茉莉は許す。でもオマエら後で覚えてろよ」

「なんでだよ馨!」

「横暴です!」

「吾輩たちに何の否がある!」

「うっせえ! 弱みを見せるのは茉莉の前だけつて決めてたのにイ!」

「そういうところですよ馨さん! ちゃんと相談とかして下さい!」

「そうじゃそうじゃ! お主、本当にそういうところじゃぞ!」

「いい加減、もつと周り頼れよ馨……」

……まあそうだな。

コイツらの言う通り、もつと他人に弱みを見せたつていいんだよな。

「……で、休日なのにオマエら何しに来たの?」

「買い物をしてたら、シケた顔したお前を見かけて声かけたただけだ」

「そうか」

ゾロゾロと大人数なこと。

「つーか、茉莉はなんでいるんだよ。オマエ土日は休みだろ」

「馨くんに会いたかったただだよ」

「……ありがとう」

……嬉しい。けど恥ずかしい。

ムラサメ様めつつつつちやニヤついでる。そんなにこんなオレがおかしいか。おかしいな。

「……」

けど、まだ昼前だ。

——あの日は、昼過ぎからデートした。初めて身体を重ねた時は……時間なんてほとんど忘れてた。どうしようかな。本当に。

また茉莉とデートするのは悪くない。

「なあ茉莉、今日……」

そこまで言いかけて、不意に茉莉だけじゃなくてもっと多くの人と話していたという本心に気が付いた。

だからそこで言葉が途切れると、少しだけ茉莉は不満そうにしたけれど、昨日の事で不安があるとわかってくれてるのか、続きを促すように優しく待ってくれてる。

「……いや、それは後でいいや。今日は特に何もしない。オマエらについて回って買い物でもしようかねエ。そのほうが、後で茉莉に色々作ってやれる」

「パンケーキとクレープ、忘れてないからね」

「はいはい……というわけで同行させてもらうぞ。お三方」

まあ幸い財布は持ってきた。

ややボロつちいジーパンにテキトーなTシャツと、ちとだらしない格好だがまあいい。和装？ いやあれは果てしなく面倒なので。羽織とか色々持つてるし、廉が着てる甚兵衛みたいなのも持つてるけどさ。着るの面倒だもん。

洋服みたいになさっさか着れるかどうかで言えばあんまりそうじゃないし。別に着流したっていいけど。

「後……ぶくくり」

「ちよつと芳乃ちゃん？」

「えっ!? あっ!? なんでもないわよ!?!」

「……あ、そ」

大丈夫かこれ……と、何やらとても微妙そうな顔をしている将臣とムラサメ様に視線を投げてみたら、そっぽを向かれた。オイ。

「ま、昨日の体験が強烈だったんでしょうね」

「聞かないつもりだったのにイ!？」

やめてくれ茉莉子。

どうやら巫女姫様は幼刀の精霊と同じくらいムツツリスケベだったようだ。

……てか、さ。

オープンスケベオナ忍者にエロオヤジムーブの精霊にムツツリスケベの巫女姫、そして目玉焼きに練乳をかける胡散臭くないんだけど胡散臭いのが似合いそうな神主……うわあ。

オレの属性過多が軽く見えるぞう。

そうして買い物に同行したのだが――

「馨、大丈夫か？ 吾輩の目にはかなり重そうに見えるのじゃが」

「魔人舐めんな。オレあ魔人だぞ。刀だつて片手でぶん回せるんだぞ。この、オレが……!!」

……物を、買いすぎた。

いや、単純な話で外に出て「あれなかったなあ」「これ減ってたなあ」と思い出して買って買って……そして気付けばムラサメ様に心配されるくらいに両手がふさがった。

重量配分の関係上、非常に重い。手が疲れてくる。

「ぐぬぬぬ……っ」

「なあ馨よ、適当に置いて待つてても問題無いと思うのじゃが」

「ダメですムラサメ様！ これは意地なんです！」

「意地じゃと!? お主そんなきやらか!」

「こんなのですよオレは!」

本気で心配しているムラサメ様にそんな反応をしつつ、うおおおとおおと力入れてキャベツとか大根とか卵とか小麦粉とか薄力粉とか肉とか長持ちするおかずとか後々の為の米とか色々入ってる複数のビニール袋を持ち上げる。クツソ激烈に重い。

「お待たせ……って、何してるのよ馨さん。そんな脂汗流して」

「ハツハツハツハツ。芳乃ちゃん。よくぞ聞いてくれました。漢には意地張る時つてものが——」

「菜子ー。持ってあげたら？」

「そうします」

そして戻ってきた芳乃ちゃんたちに呆れられながら、有無を言わず菜子がオレの片手からより重い方を奪い取る。

啞然とするオレに微笑みを向けるがはてさてその感情は如何に……

なおニヤニヤしている将臣とムラサメ様は言うまでもない。芳乃ちゃん？ いやあ、ナニ想像してんだかって感じ？ なんかもう巫女姫様って感じじゃなくてニヘラ……ってしてるよね。だらしのないよね。

しかし重かったのか、菜子の微笑みが一瞬で崩れた。

「うわ、重い……どれだけ買ったの？」

「そこには米と大根とネギと後縦に入る諸々が入ってるから割と重いつて。今日使ったり明日使ったりあるいは生活必需品が入ってるコツチ持て。な」

「……ありがと」

「気にすんな。そういうのはオレの仕事だ」

ちよつと不服げな菜子だが、オレの性能で重いつて言ってるんだから軽い方取って欲しかったなあ……と思うのは少しアレだろうか。

「あ、そうだ馨くん。買ってにおいてなんだけど晩御飯、ウチで食べない？ お父さんとお母さんが話あるつて」

そして唐突な処刑宣告である。

……逃げるという選択肢は、当然ながら無い。そしてSHINOBIX EXECUTIONがオレを待っている。オレが二度死ぬ三度死ぬ。菜子の作ったおはぎ食べたい。言えぬ、開かせぬ、できませぬ……がちよつとでも通ればいいな。

「……こりゃ本当におじさんとおばさんに殺されるかもしれんな……わかった。行くよ」

恐怖心を押し殺しつつ領けば、花の咲いたような笑顔を見せてくれる。ああ、その笑顔さえあればオレはそれでいい。

しかしそんな会話が あった所為か、先頭を歩く女子がガールズトークを開始している。オレと将臣は所在無さげに後ろに着いて歩いているだけだ。

途中、ここそと声をかけてきた。

「なあ常陸さんのご両親って怖いのか？」

……聞いてやがったな。

「いや全然。お袋さんは少しおっとりしてて、親父さんはぶきつちよで口数が少ないってくらいかな。ま、二人とも立派な親バカだよ」
「ならなんでそんなビビる」

将臣は何もわかっていないようだが、そもそもおじさんもおばさんも忍びである。あの二人が本気になればオレ程度ものの数秒で始末するであろう。なんでも最近衰えてきたとかなんとか聞いたけど……

「……いいかそもそもな。莱子の師匠なんだぞ、二人は。オマエも知ってるだろ、莱子の凄まじい技術の数々。それら全てを叩き込んだのがあの二人なんだぞ。そしてオレは娘の命を手折ろうとすることでしたか愛せないおかしな彼氏。ここまで言えばわかんだろ」

「……そうかあ？ 考えすぎだろ」

考えすぎと言われても正直困る。

それにもし実際に会って交際に反対されたらどうしようか……いいいや朝帰りは伝えて引き止められなかったみたいだから認められてはいるんだけど……

「怖いもんは怖い」

「そっか。で何処行ってるんだ？」

「さあ？ 案外足りないものとかあつて買いに行くとか。もしくはついでになんか買うとか。何も聞いてねえ」

「ま、荷物持ちでもいい修行か」

「ポジティブな。オレあ家帰りたいよ」

「常陸さんと一緒じゃなくなるぞ」

「そりや困るな。帰れない」

ケラケラと笑い合いながら、彼女たちの後ろを着いて歩く。そうして本屋やら何やらを回って、今は適当なベンチに腰掛けているところだ。

「昼どーすつかないア」

外にするか家に戻って作ってしまおうか。幸い帰って作り始めても凝ったものでなければ問題無い。

しかし、ここで別れる必要も——ということであり、かと言って大量に色々持つてるわけだし。すぐに帰って来れるんだが、さて。

「思えば俺、外で食ったことはあんまりないなあ」

「あくまでも将臣さんは泊まりに来てただけですもんね」

「そうそう。だからどつかでこっちの夕食をもう少し開拓したいところなんだけど……」

横から聞こえてきた言葉にそういえば……とあることを思い出す。

ふむ、たまにはいいかもしれない。

「芳乃ちゃん、将臣とムラサメ様借りていい？」

「わたしや茉莉には内緒で美味しいところに連れてくんでしょ」

「まあそーだけどさ。てか何、その顔」

大変不服そう、というかとても複雑なものだ。なんとというか、微笑ましい思いがあるけどそれはそれとして私の彼氏を取るなみたいなの。

「私の将臣さんなのに」

「だとよ彼氏殿」

「なんか、恥ずかしいな……じゃあ、何？俺の芳乃って言えばいいのかな」

「ふふっ、嬉しいです」

あ、二人の世界入った。

「茉莉ー」

「なにー」

「構ってー」

「吾輩にも構えっ」

刹那、つまらなさそうな声と共に小さい手刀が頭に落とされて――

「いった!? ……は?」

「……え?」

「……馬鹿な」

訳が、わからなかった。

——ムラサメ様は、オレに触れたのだ。オレは特に何もしていないのに、ムラサメ様に触れられたのだ。恐る恐る振り向けば、彼女もまた動揺を隠すことなく見せている。普段なら滅多に見られないものが……と茶化すところだがそうはいかない。

「ム、ムラサメ様……何か、した?」

「何もしてないぞ! そ、そうじゃ茉子。茉子は——」

「……手をすり抜けましたね」

茉子がダメで、オレは触れられた。

将臣は憑代を腹の中に宿していた所為だからというのによくわかる。そしてレナもまた憑代に近かったからこそ見えるというのはいくわかる。

……では何故オレは触れられたのだ? しかも、今更になつて。いや、実はオレたちが知らなかっただけで、最初から触れられた……? ではそうするとオレも何か、そうした神の時代の遺物を腹に宿していることになるが……

「? 何かあつたの?」

「ご主人、芳乃。吾輩が馨に触れられたのだ。しかし茉子は無理だった」

「馨さんが……? それは不思議ですね。だって触れられるのは将臣さんだけなのに」

「何か当ては——つて、無いよな。ムラサメちゃんだって触れられないものだとばかり思ってたわけだし」

全員が全員頭を悩ませる。

が、即座に悩もうがもうどうしようもないとオレは理解したのでベンチから立ち上がった。

「帰る。飯食う。もう知らん」

「ちよつと待て、お主それでいいのか!」

「お腹空いた。そっち大事」

「ええ……」

「あー、ムラサメ様。疲れたり面倒になったりした時の馨くんはこんなのです」

「つーわけでさいなら」

そうして菓子が持つてるビニール袋を回収して帰ろうとしたのだが――

「あつ、待った馨。飯食い行く。ムラサメちゃんも連れて」

「なんでさ」

「色々実験」

「あー……うん。わかった。でもとりあえず物を冷蔵庫とかにしまつてからな。合流はここでいいか？」

「おう。そういうわけだから、芳乃。埋め合わせは後で」

「わかりました。――絶対ですよ？」

「うん」

微笑み合う二人。本当に絵になる。オレみたく変に拗れないで本当に良かった……しかし所構わずお熱くなれるのはちと思うものがあるのですが。ねえ？ ムラサメ様物凄い顔してますよ。「吾輩のご主人じゃぞ。兄か弟のような相棒じゃぞ。たとえ芳乃とてもうちよつとこう」みたいな。

とか思ってたらそつと側に寄って来たのは菓子。

「時間になったら電話入れるね」

「ああ。ま、テキストに待ってる」

「泊まってもいいんだよ？」

「……考えとく」

それだけ言つて、彼女は離れた。

……相変わらずドキドキさせてくるなあ。

その後、一旦帰宅して物をしまつてオレは将臣とムラサメ様を待つ。

「待たせたな」

「気にすんな」

軽く言葉を交わして案内を始める。その道中、ついでだからと何を実験する気なのかを尋ねた。

「何するんだよ」

「馨は魔寄りだつて言つてたよな。だからもしかしたらムラサメちゃんにスプーンとかで食べさせられるかなあつて」

「聞いたかよムラサメ様」

「まあ、ご主人とて流石に恋人の前で、相棒とは言え他の女に指を啜えさせるのは気にするのじやろう」

「いや、そうじゃない」

——しかし将臣はこれを否定した。

そういうくだらない理由じゃないというのならばなんだというのだろうか。そうして怪訝な顔をしてみれば、帰ってきたのはとても真面目な顔。

「……俺の身体の中には憑代があつたからムラサメちゃんに触れられた可能性がある。なら同じように触れられて、かつ俺の上位互換みたいな性質を持っていたとすれば、馨の”中”により純度の高い何かあるんじゃないかな……つて」

「なるほど。確かに」

「それに俺とレナさんは見たんだ。今日……お前の先祖の夢を。京香さんの姉が……奏が実の父を殺す場面を」

だから買い物物の最中もちよくちよく玄さんに電話かけてレナの様子はと聞いていたのか……納得。そしてコイツなら間違いなく——トドメを刺す場面は直視させてないだろうな。

けど話を聞くに、レナはあんまり覚えてなかったとか。何か超次元バトルがあつた、くらいしか記憶が無いらしい。

「そこで父親の方は太刀に炎を纏わせていたり自在に操つたり、奏の方もまだ呪物になっていない虚絶で瘴気の大刃を形成したりしてた。だからこう、何かそういう不思議なものを為せる理由は虚絶だけじゃないと思つたんだ」

「ご主人の言う通りじやな。というわけで馨よ。色々試してみるがい

い。じやが何処ぞの無礼者の様に人様の胸を触っておきながら硬いとか抜かすなよ?」

「うぐ……………」

いや何やってんのよ将臣くん。キミそんなセクハラしてたの?

なるほどなるほど……………これは芳乃ちゃんにメールしておこ。あ、帰ってきた。なにになに……………? 「ありがとう。後でちよっとお話するわ。あと意外とすごいよね、最近のその……………えっちな本って。参考のために読んだのだけれど、おススメないかしら」……………はい?

「……………こんなところでそういうの知りたくなかったよう」

とまあ、内容はともかくにも一応和気藹々としながら、店に着く。オレ……………というか、親父とお袋が30年近く通っている店だ。よってオレも顔見知り。奥の方の目立たない席を選んでも文句を言われないうというのは、今は都合が良い。

「何屋なんだここ」

「一応定食屋」

「どう見ても居酒屋みたいなメニューしてんだけど」

「……………あの人オレに甘くてな……………」

「納得。夜のメニュー出されてんのな」

そしてオレはサバ味噌定食を頼み、将臣は唐揚げ定食を頼み、ムラサメ様にスプーンが当たることはなかった。どうもオレも将臣と同じらしい。原因は違いど。

ちなみに初めてムラサメ様に物を食べさせたが——とても犯罪的であった。あまりにも犯罪的だった。何か別の、とんでもないものが目覚めそうになった。それほどまでに可愛かったのだ。

「ムラサメ様って……………大変、可愛らしいんですね」

「なんじゃ急に」

食べ終わった後、店を出て思わずムラサメ様に向かって笑顔で言ってしまった。

「ぷにぷににしてて、手のひらとか柔らかくて暖かくて……………でもちよっと指を啜ってる姿がとてもその……………全体的になんていうか、ロリオカソって感じで……………」

「響ってロリコン?」

「オレは茉莉一筋だ!!」

「そうじゃろそうじゃろ。吾輩は柔らかいのじゃ。ぷにぷになのじゃ。わかったかご主人。硬いなどとふざけたこと抜かしおってかに」

「えっ、俺が悪いのこの流れ」

「オマエ女の子に向かって硬いはねーだろ」

「だって胸が……」

「馨」

「御意」

怒り心頭のムラサメ様の意に従って将臣の腕をキメる。

しばらくは将臣の叫びが響いていた。



——急な連絡だった。

帰ってきた将臣を弄りつつ、そして午後のトレーニングの時間になればちよつとでも一緒にいる時間が欲しくて送って行き、さて戻るかと芳乃が帰路に着いた時だった。

唐突に、レナから電話が入ってきたのは。

「もしもし? どうしましたか、レナさん」

『……』

「レナさん?」

『あつ、間違い電話です。ごめんなさい、ヨシノ』

「気にしないでください」

その短いやり取りで電話が終わったが、芳乃の胸には小さな疑問があった。

(レナさんが間違い電話なんてするかしら)

いくら急いでいても現在のスマートフォンでかけ間違いなどするだろうか? レナはしっかり者だ。間違いに気付けばすぐに訂正する性格なのに、芳乃の声を聞くまで返事は無かった。

(間違い電話っていうには、何か不思議ね)

間違い電話と言ってもだ、声が聞こえた段階ですぐに反応できるし、かけてきたんだから何か先に言っても不思議ではないのに、まるで確かめるかのように待っていた。

——こんな話、前に何処かで聞いたような……

「おや、ここにいたか——」

刹那。

ゾワリと、異質な……けれどごくごく平凡な声が耳に届いた。

聞き覚えは——当然無い。

「久しいな、朝武の倅よ」

この平坦で、冷酷で、恐ろしい程に俯瞰して達観して超越した声。聞き覚えなんて無いはずなのに、身に覚えの無い感覚が脳内を駆け巡る。

振り向いて見れば、そこにいたのは——

黒、黒、黒、黒……そして白。

貴族的な意匠を持ちながら動き易さも考慮された黒い和装、暗闇の如き黒い目、濡鴉の如き黒い髪——不気味なほどに美しい色白の素肌と相まって闇に浮かんでいるような、あるいは光が蝕まれているような、そんな感想すら覚える。

そんな、黒衣の女。

黒衣の女が、夕闇の空を背負って佇んでいる。

(……あれ？ この人の顔、何処かで見たことがあるような……？
憶えがある……けど)

奇妙なことに、この女性の顔に見覚えがあった。

もちろん、芳乃はこの女性とは初対面だ。だが何故だろうか、何故か憶えのある顔だった。とても身近に感じるような、そんな面影が見える。

しかし、知り合いではないのもまた事実。奇妙な感覚だ。

知っているのに知らない、知らないのに知っている、見たことがあるのに見たことがない、見たことがないのに見たことがある。

そして。

その女は、

「——あの川」以来だな。ああ、お前には彼岸の茶屋と言った方がわかりやすいか？」

そんな意味不明なことを言つて——軽く、笑つた。

刹那、脳髓を掴み引き摺り下ろされるが如き異物感。

魂が拒絶する、心が恐怖する、理解出来ない何故何故何故——!?

この女は、会つたことがある。

芳乃の中に、現世と常世の狭間での記憶が再生される。怨霊祓いの罅際、死にかけて時に見た、あの——!!

驚愕に染まる表情と、それを楽しげに見つめる表情が交差する。

「あな、た……は……っ!?!」

「思い出したか。縁が深くなければ持ち帰れぬ、と言つたろう？　そもそも我々の縁はその始まりからして深きもの……こうなるのは必然だ」

クツクツと笑うその女。

今ならわかる。その顔が一体誰に似ているのか。

「……なら、なら何故！　あなたと馨さんはそんなに似ているの!?!」

——馨だ。

この女は、馨に酷似している。女体化した馨と言つても過言では無いし、この女が男体化したのが馨と言つて過言では無い。

相互補完するかのような噛み合う陰陽——まるでそれは対極の如きもの。

つまりその正体は……

「気付いていないのか、知らないふりをしているだけなのか。どちらにせよ、ならばよかろう。我が名を知るがいい——」

不敵な笑み。

正気きょうきの瞳。

それは正しく——魔人の貌。

そして、まるで歌い上げるかの如くその名は紡がれた。

「我は久楼否神公暁が孫、伊奈神雅隆……その娘が一人、伊奈神京香の姉にして、稲上馨の祖なる者」

他者の死を転じて己が生と成す者。

星の光を喰らいて生きる、人と相容れぬ怪物。

曰く、破綻者。

曰く、否神。

曰く、魔人。

肉親を殺し肉親に殺され、子孫と繋がった呪物によって、何の因果かこの現世に舞い戻った闇。他者を貶めねば生きていけぬという宿痾の持ち主。人にして人ならざる、決して相容れぬ異端。

「我が名は奏。」

——伊奈神奏——

その名は伊奈神奏。

鬼殺しの魔人。命を感じる為に命を手折り、死の中に生を見出し生の中に死を見出す矛盾螺旋の体現者。妖刀転生の担い手。

「穂織に潜むいながみ否神の魔人だよ。朝武芳乃」

玉石の女神——叢雲の起こした行動により生まれ堕ちた絶叫する奈落の使徒。否神いながみを名乗る異形の血族にして黄泉の鎖と杭を宿す者。あるいは禍津の尖兵。

穂織を滅ぼすと予言されし存在が、逢魔時に巫女姫の前に姿を現した……

魔人／交差

「どうした？ 何をそんなに恐怖している」

冷たい声が響く。

「先程も言っただろう。私が殺せるのは馨のみだ。馨を殺さねば、馨の呪縛から解放されん」

淡々と真実が述べられる。

「お前は死なぬよ。私が馨のどちらかが消えねばな」

「……」

「それとも、この場というのが気がかりか？ この田心屋に私がいるというのは」

そして此処は田心屋。

閉店ギリギリではあるが、それでもこの奏は芳乃を連れて無理矢理に押し入り、そして言い放った。

「馬庭芦花、京香に言っておけ。借りてるぞとな」

——一方的な言い草。しかしそれは当然だ。奏にとって穂織などすべからくどうでもいいのだ。ただ一人、同族を除けば。

そうして芳乃は、魔人と対峙している。

「何か喋れよ。つまらんだらう」

「……どうして、あの時……」

「それか？ 真実を知ったお前が苦しんだ顔でも見せてくれれば腹が膨れるのでな。その下準備だ」

ただのそれだけ。

馨や京香と同じ顔で、しかし正反対の言葉。人間的行動とは裏腹に理解できない魔物の感性。

芳乃の疑問にすらつまらなさそうに答えた奏は、背後から睨みつける芦花に視線を向けた。

「いつまでそうしている。茶くらい出せ。客だぞ私は」

「……姉上」

芦花と京香が切り替わる。

その声を聞いた途端、不快そうに顔を歪めながら彼女は言った。

「私をまた殺すのか」

「何度だって殺してやる」

「ククツ……ああ、一つ教えてやろう。今私は適当な憑代を使っていな。私を殺せば憑代も死ぬぞ」

「チツ……」

「安心しろ。お前への再戦は後で申し込むさ。今は何もできん。で、だ……茶を出せ」

そうしてまた切り替わり、無言で芦花は茶を出す。湯呑みを手に取り、優雅な動作で一口飲むと、再び芳乃へと視線を向けた。

「あの後、大事は無いか。あの時は魂を転生に困って繋ぎ止めたが、もしもということもある」

「特には、何も」

素直に答えたのは、敵意も何も無い純粋な疑問だったからだろうか？ あるいは彼女にもわからぬ別の理由なのか。何かそこだけ、奏ののっぺりとした悍ましさは無かったと、そう言える。不思議なことだが。

「ならば良い」

「何が目的なんですか」

——意を決して尋ねた。そしてその表情がまったく理解できないと言わんばかりに変わり果て、そしてしばらく黙った後に、再びの無表情に戻って、一言。

「目的など無い。強いて言えば生きるだけだ」

「……生きる？」

「馨と同じようにな、私も人を殺めねば生きていけぬのさ。殺さねば、殺したくない、だけど殺さねばならない、生きるためには死が隣にいないてはならない」

そうして紡がれたのはまったく理解できない、したくない、根本から外れた生命としても歪な本能。

「言い方を変えれば……自分が最も生きていると感じることに、死がなくてはならない。わかりやすいのは馨だな。愛おしい者の側にいる時が最も満たされるが故に、その者を殺さねば気が済まない」

暗い愉悦を満たすだけで生きていけるのが彼女と同じ性質を備えた人間だが、魔人たる奏は暗い愉悦を満たした後に人を殺さなければならぬ。それを彼女は当たり前のように受け入れたから、他者だけでなく肉親を殺し始めた。

「必要なのは生と死、その二種類が同時に存在する矛盾した螺旋」

生を実感する行動を取ったと同時に命を手折らねば気が済まないし、その行動を止められない。余程特異な状況でもなければ。それが魔人の宿痾であり、同時に魔人足り得る由縁。伊奈神が抱え続ける永遠の呪縛。

「殺さねば生きていけない。生きるためには殺さねばならない。宿痾に呻くのが魔人の宿業だからな。ま、世界の何処に、自ら餌を全滅させる捕食者がいるのかという話だが。言うなれば桜の木か、我々は。周辺の植物を毒殺し、辺り一面の栄養を我が物としながら全身に殺意という害虫を潜ませ人間に迷惑ばかりかける……見た目だけは良いのもまた同じだな」

種を繋ぐなどという行為は初めから存在しない。この一族は生まれながらに滅び行く者である——芳乃はその事実すら心底からどうでもいいという態度を崩さずに話した奏を見て、確信した。

そして彼女にとつて大事な弟分である馨もまた、これと同じである……と。

「——そうだ。思い出したか？ 神と人の小さな愛の物語を」

唐突に、奏がそう尋ねた。

確かにすべて思い出した。所々は臆げだが、目の前の女から神と人の小さな愛の物語と、その裏側でとぼつちりを食らった者がいる……というの聞いた。そしてそのとぼつちりを食らった側の存在であるとも。

「それが何か」

だから芳乃はその先を考えないようにしていた。

「最近そんな話を聞かなかったか？ 例えばそう……女神と侍の恋物語と、それ見続けた犬神の話とかなア……」

そして奏はそれを知っている。知った上で教えたのだ。そういう

顔が見たいから。そうなるかわかった上で、そうしたのだ。当然、腹が膨れるから。芳乃であろうと菓子であろうと、誰であっても馨以外ならその真実を言えば、後々伝えられるであろう真実と勝手に合わせ、勝手に考えて勝手に苦しんでくれるから。

「っ!? それがなんだって言うんですか!」

聡明な芳乃がその答えに至らない筈がない。邪悪に笑う奏が、心底から意外そうな顔をして嘲るように言葉を紡ぐ。

「クツ、クハハハツ……! どうした? 何故そんな顔している!?

そんな、まるで己こそが全ての元凶であったと言わんばかりの顔を!

そして何故それを教えたのかという顔を! なんだ? 私はあくまでも似たような話としか言っていないぞ? 何と何を結び付けてそんな考えに至ったんだ? 教えてくれよ、私にはわからないからなア! カカカツ、ハツハハハツ!」

わからない? 嘘を吐け、知っているからこそ、このようになるように教えたのだろうか——!! 芳乃は目の前の存在を、心の底から憎悪した。その反応からして己の推測が正しかったのだろう。でなければこんな楽しそうに、こんなにも邪悪に、その顔をここまで歪めることは無い。

「姉上!」

その反応に何か憎悪めいたものを宿したのか、苜花から強引に切り替わって吐き捨てるように京香はそう叫んだ。

「……チツ、水を刺すなよ」

「あんたが憑代を借りてるっていうのなら、戻さないと面倒じゃないのか」

心底から嫌そうに吐き捨てた奏に対して、至極真つ当な言葉をかける京香。彼女らがここで戦闘をしないのは、将臣と違って自身が誰かを救える存在でないことが大きい。本音を言えば、憑代ごと殺してしまいたいほどなのだ。

ただ時間的にはかなりギリギリ。陽が沈むのもそう時間はかからない。

「それもそうか……代金は馨から筆っておけ。生憎無一文でな。では

さらばだ。また会おう」

さりと最低な事を言つてから、芳乃へと視線を向ける。

「……本当に、大きくなったわね。芳乃……」

「え……っ?」

「ククツ、なんでもない」

何か小さく呟いた後、奏は何処かへと去つて行つた。芳乃もいい加減に戻つて晩御飯の支度をしなくてはならないのだが、生憎と彼女には確かめなければならぬことがあつた。

「……馬庭さん」

「ちよつと待つてて。——京香さん?」

意を汲んだ芦花が声をかけると、切り替わるのではなく直接京香は現れた。

「知つてるんですか、全部」

思い至つた答えが正しいのか。それを確かめなければならぬ。そしてそれが正しいのならば、自身はどうすればいいのか。芳乃はあの意味では罰を求める罪人のように尋ねた。

「ああ」

「初めから?」

「ああ」

歸つてきたのは、肯定の言葉。

感情は一瞬で昂り、掴みかかつてまでその先を求めた。

「なら私の考えてることは——!」

「私にとってはどうでもいい。姉上にとつてもどうでもいい。そして馨にとつてもどうでもいいことだよ」

だがなんでもない表情と共に、なんでもない声色と共に語られたのは、心底からどうでもいいという種のある種の答え。それを背負うことそのものが間違つているといふ、とぼつちりを受けた側なりの気遣いなどではない。純然たる答えとして、京香は言い切つた。

そして彼女は、それら全ては過ぎ去つたものに過ぎず、その罪科など問う必要は無いと、手を払いながら更に続けた。

「福音が生み出した輪廻の中で、怨恨の輪廻は渦巻いた。もし神サ

マッて奴に博愛精神と平等さつて奴があれば、私たちイナガミは矛盾螺旋の宿痾を抱えずに生きていけたんだろう。キミたちとも会わずに、決して交わることもなくね。

——でも、そうはならなかった。ならなかったんだよ、芳乃ちゃん。だからこの話はここでお終いなんだ。誰の所為でもない。間が悪かったか、これも運命だったか。本当に、それだけのことなんだよ」
……朝武／常陸と久楼／稲上は表裏一体。片方が無ければ片方も無い。穂織に二者が集つたのはある意味で運命だったとも言えよう。だからこそ京香は憎まない。子孫の友人を身勝手に憎むなど、そんな鬼のようなことはできない。罪の無い者を憎むなど、そんな事ができるはずがない。

「こんなこと背負うな、芳乃ちゃん。キミたちに罪が無ければ罰も無い。誰も悪くないんだ。じゃあ芦花ちゃん。フォローよろしくね」
「えっあつちよつと!? ……はあ、戻っちゃった」

しかし、本人たちは全力で否定するだろうが、言いたいことだけ言つてさつさと戻るのは姉妹してよく似ている。全くどちらがどちらに似たのやら……と半ば呆れながら、唾然とする芳乃に対するフォローという無理難題を押し付けられた芦花は一つため息。

「はあ……あの人は本当に。巫女姫様、気にしたって仕方ないですよ、こればっかりは」

「そんなことはできません！ だってあの子は、馨君はずっと悩んでた！ 私たちの知らないところで苦しんでた！ その原因が私たちなら……！」

……そう言つて、芳乃は初めて気が付いた。自分に何ができるのかと。その答えは単純。

——何もできない。

罪というほど罪ではない。

そもそも芳乃が悪いわけでもないのだから。誰が悪い？ 誰も悪くない。良かれと思つてやったことが、裏目に出るなどよくあること。ただ後味と胸糞悪さだけが残る。不毛な空回り。原因など何処にもいなかつたのだ。

彼女の表情に影が差し、曇り果てる。

そんな様子を見て、芦花はやはりこうなったかと内心面倒なものを押し付けられた気がしてならなかったが。

「……気になるなら、言えればいいんじゃないですか？　なんとなくどうなるかはわかってるんでしよう？」

「そう、ですけど……」

「そんなに不安なら、まー坊に相談すればいいんですよ。アタシはほら、又聞きですから」

不安そうな彼女を安心させるべく、笑顔を見せているが――

(ごめん、まー坊。アタシ……巫女姫様の事よく知らない……！)

シンプルに、無理難題であった。

考えてもみよう。普通、友人が幼馴染に関しての負い目を持ったとしても……互いを知って間も無いのであれば、然るべき言葉をかけられるだろうか？　否、無理だ。

よって無理難題を強いられている芦花はそうするしかなかったし、それを察した芳乃もまた、芦花に無理をさせたくはなかった。

「……すみません、馬庭さん。お時間を取らせてしまつて」

「いいんですよ。アタシ、お姉さんですから」

「……芦花、お姉さん……」

芦花お姉さん、ちよつといいかも……

それはある意味、一種の下心めいたものだったかもしれない。

「はい？」

「あつ、いえ！　別になんでもありません！　あと私のことは気軽に呼んでください。巫女姫様とか呼ばなくていいですからっ」

「????」

何気に歳上の女性に甘えるというのは彼女はあまり経験したことはない。その上、歳の近い、それこそお姉さんのような存在というのは中々にレアだ。

なるほど、これは馨が姉性を求めるわけだと一人納得し、不思議そうな芦花に誤魔化しつつ、家に戻るのだった。

ピンポーンと、インターホンが鳴る。

急いで玄関に向かうと、そこには茉莉がいた。

「……遂に？」

「何が遂になのかは知らないけど迎えに来たよ」

「ちよっ、ちよっと待っていてくれ。上がっていいから、オレ少し髪だったりとか服だったりとか整えてくる！」

「あっ……行っちゃった」

ドタドタと戻りつつ、お気に入りの紺色のジャケット（実は茉莉の忍び装束と同じ色で同じのを何着も持っているのはナイショだ！）を着て、鏡を見て髪を少し整えて——そして向かうと。

「……その髪型、似合っていないよ」

不思議そうに見つめられながら、そんなことを言われた。

「マジ？」

「ホント。いつものが一番いい」

「そっか。じゃあ……」

ブンブンと頭を振って普段の髪の配分(?)に戻す。元々髪の毛の量が多く、人より伸びる速度が早いので、こんな風に頭振るだけで普段の髪型に戻るのだ。

「こっう？」

「そう」

「そっか」

「うんっ」

短いやり取りを終えて、家の鍵を閉めてから手を繋いで道を歩き始める。ただどうしても緊張してしまい、それが態度に現れて強く握ってしまう。

そんなわけで、茉莉から途轍もなく訝しんだ目を向けられているのだ。

「……そんなに緊張しなくても」

「わっ、わかってるけど。オレ彼氏だし。オマエ彼女だし。彼女の両

親に挨拶行くような感じだし」

「考えすぎじゃない？」

ジト目を向けられた拳句にこの言い草。いやキミね、オレ異常者よ、狂人よ。だから色々怖いのよ。

「まあ、考えすぎでもいいけど。ワタシは馨くんといられるだけで幸せだし、もしお父さんとお母さんが反対してもワタシから馨くんに向かうから」

「お、おう……頼もしいな」

「ま、二人ともそんな気全然無いと思うけどね。話振ったら大喜びだったし」

「マジで？」

「うん。そんなのだからお母さん、今日の晩御飯は気合入れて作っちゃってる」

「そっか」

なら大丈夫かな……？

まあ大丈夫だろう！ 茉莉の事だ、言っていない筈がない！ きつと言った上でそういう反応だったんだらう間違いない！ あはははは

！ はははははは……、はは……怖い。

「で、結局泊まるの？」

「いいや、泊まる気はあんまり。一応泊まっても問題ないようほっぴり込んであるけど」

かけてある小さめのバッグを持って軽くアピールし、しかしそこまですべて考えていないと言うと、しよぼんとしたのは一瞬。すぐになんでもないように振る舞った。

そんな様子が大変可愛らしくてケラケラ笑うと、ムスツとした顔が向けられる。

「何その顔」

「怒るなよう」

「怒るよ」

「許してくれって」

「泊まったら許してあげる」

「うーん、真剣に考えさせて」

「あんまり待てないよ」

「言い方」

「言い方？」

「うん、気になるんだ」

「あは、気にしちゃうんだ」

「だってなあ……いやわかるだろ」

「わかるけど……終わったじゃん」

「——待たせてごめんな」

「——いいよ全然」

次待つてもらおう、待たせる時は必ずすぐに……小さな決意を、この手の温もりに誓って。仕方なさそうに微笑む彼女は何より愛おしく感じて、お互いに強く、ぎゅつと繋いだ手に想いを乗せた。

二人で夕闇の残る空の下を歩く。それは特別な時間。楽しそうな彼女を見て、オレも微笑む。

そうして歩き続ければ、自然と茉莉の家に辿り着く。

「ただいまー。連れて来たよー」

普段ならまったく聞くことのない調子の声。こんな茉莉を見れるのはオレだけだろうと思うと少し優越感が湧く。そして足音が聞こえてきたので、深呼吸を一つ。なんて言おうか。お付き合いさせていたでいてますか？ それとも将来を前提としていますか？ ……うーん。——だが、しかし。現れたおじさんとおばさんは……

「久しぶりだな馨。どうだ、調子は」

「久しぶりね馨君。また大きくなった？」

「あっっ」

……その、せんせい師匠。

手に持ったクナイはなんですかね……？ あとおばさん。その握り拳は一体……？

「馨くん、上がらないの？」

「……わかった」

——死が、すぐそこまで迫っていた。

「……あー……美味しかった。けど妙に疲れた」

「ご飯食べて、菜子の好意で彼女の部屋に入れてもらい、ものすごくぐったりしていた。」

「お父さんもお母さんもどうして威圧するのかなあ」

「オレおばさんに「義母さんでもいいのよ？」なんて言われた時にはおじさんの視線怖くて愛想笑いしかできなかったよ」

「どう考えてもオレを葬るための必殺技の準備してたってアレ……」

「お母さんは割と本気だったと思うけど」

「……マジかア……」

「……まあ、別に何をされた訳でもなく、付き合いは順調かーとか、最近元気かーとか、そういう話題だったし、疲れはしたが久しぶりに会って色々話したりすると、やっぱり楽しいもんだ。」

勝手にオレがビビってただけだし、二人は昔のように、暖かく迎えてくれた。おじさんは相変わらず不器用で、おばさんは相変わらずおっとりしていた。——昔と何も変わってない。

「……オレたち子供には、そういう面を見せないようにしてくれていたのだろうか。そう思うと、感謝の念しかない。」

ただ疲れたのも事実。ので、ここは一つ至福の時を過ごさせていた
だこうかな。

「菜子、膝貸して」

「いいよー。……はい」

正座した菜子の膝に頭を乗せて膝枕。ああ、素晴らしきかな。眼福。そのたわわな果実の双丘を下から見るという幸せ。頭の下に感じる程よい弾力と柔らかさ。そして何よりも彼女の匂いがすごい。幸せ……

「顔、だらしないよ」

「えっ、ホント?」

「ホントホント。ワタシ以外にそんな顔見せちゃだだよ?」

「ちよつと拗ねたような感じで、そんなことを言われたが、だらしないというよりも幸せ雰囲気たつぷりの顔されながら言われても説得

力が無いから、ついつい笑ってしまおう。

茉莉も釣られて笑っていて、まったく如何に自分たちが完全に心を許しきっているのかをしみじみと理解させられる。嫌じゃないけど。

「な」

「ん」

「決着着いたらさ、オマエと行きたいところがあるんだ。穂織の外で」

——そう、オレは決着を着けたら行かねばならない場所があるのだ。魔人の末裔として、稻上の末裔として、彼の地にだけは必ず行かねばならない。

……まあ、それだけではないのだけれど。

「デートのお誘い?」

あつさりの内心を見抜かれ、優しい顔をした彼女にそう言われてしまおう。

「それもある、かな」

「わかった。一緒に行く」

「ありがとう」

「ワタシ、楽しみにしてるから」

「ああ。裏切らない」

頭を撫でられながら、というのであまり格好は付かないが心地良いから仕方ない。眠くなってしまうそうだ。このまま一眠り、というのも悪くない。

だが、茉莉は覚えていて、オレは忘れていた。

「で、結局どうするの?」

「あつ」

——緊張で全然考えてなかった。

事実なのだが言い訳じみっていて、こんなことを茉莉に言ってしまうば一体どんな報復が来るか想像するだけで恐ろしい。

ささっと身体を起こして、きよんとした茉莉を見つめながら、動揺を完全に隠しつつ、意地悪彼氏ムーブで誤魔化そうと決めて。

「……茉莉は、どうして欲しい?」

ゆつくりと頬に両手を当てて、左手はそのまま肩へと流し、右手は

彼女の長い髪に流す。

じつと見つめてみれば、困ったように、照れたように視線を逸らされる。なんだか複雑そうにきゅつと結ばれた唇は、呆れとか嬉しさとか色々な表情を見せている。

「……イジワル」

そして、大変可愛らしい抗議の声。

そんな様子を見せられては、コツチも色々と思うものがある。そう、内心に湧き上がる加虐心とか。

右手は髪から離して、彼女の手を握る。すると強く握り返されて――

「帰って欲しくないに決まってるじゃん……馨くんのバカ」

「ごめんごめん。もう意地悪しないからさ」

……いつ、言えねえ……

実はただの緊張で完全に忘れてたことの誤魔化しでしかないとか絶対に言えねえ……ごめんよ菜子。手を離しつつ、肩に流していた左手はそのままにしておいた。

でないとあんまりにもあんまりだろう。オレはとても酷いことをしたのだから。

「泊まることは後で二人に言わないとな。んで、オレどこで寝りゃいい?」

「ワタシの部屋でいいでしょ」

「まあそうなんだけどさ……」

なんでもないように言ってくれたが、しかしキミ……オレが男だつてこと忘れてないかね。確かに初体験とかもう終わったし、今更そんなことを気にしてもって話なんだけど、けどその……ね? ムラつたら……ね? 割と自分の抑えが効かないのはこの前知つたし。

ただ少し、怖いのが。

「オマエ、オレが寝てる隣でオナるなよ?」

「あはは、する訳ないじゃん……ってナニ言ってるのっ!」

バツと距離を離されて、顔を真っ赤にした菜子に思いつきり抗議される。が、こつちとしては芳乃ちゃんちにいた時、人の枕勝手に持つ

て行って慰めてた話があるのでそれくらい普通に警戒する。盛られても困るし、それに彼女の両親がいる中でやるのは……ねえ？

「ナニの話」

「上手いこと言っただつもり？」

「ごめん」

「よろしい」

しかし、恋人になってもこういう風にやり取りが一瞬で終わるのも昔と変わらない。

さて話題も無くなり、さつさと泊まる旨を伝えるかなあとか考えた時に、不意に気になったことがあった。

「なあ菜子。この前大艦巨砲主義の話したらオマエ蹴ったろ」

「そうだね」

「気にしてんの？」

……比べる相手が悪い気がするというか、別にオマエの胸が小さかろうと構わないのだが、何故あの場で蹴ったのか。それが不思議でならなかった。

一方、問われた菜子はしばらく黙った後、少し面白くなさそうに呟いた。

「だつてさ、あの時つてえっちした後でしょ。それでアナタに基本的にそういうものだからつて言われたら思うものあるよ」

「そういう嫉妬かいな。可愛い奴。じゃあなんだ、大きき云々は気にして——」

と、言いかけて言葉が止まった。

ほんの一瞬の事だった。一瞬で、オレの右手に衣服越しの柔らかな感触が生まれた。

……見れば菜子がオレの右手を掴んで自分の胸に押し当てている。

「ワタシだつて……結構あるんだよ」

ちよつと照れくさそうに、けれどふふんと勝ち誇ったように。そんな事を言った菜子が、普段以上に可愛く思えて。

おかしいな……菜子の胸を触った回数は結構あるし、なんなら裸も見たとそれ以上に乱れた姿だつて見たのに、どうしてオレは今こんな

にも照れているのだろうか。

冷静に考えればこれ以上のことをしたのに、なんで今更こんな……とか色々頭の中に生まれては消えて——右手に感じる結構な大きさの果実の感触が余裕を全て奪ってく。

「ほ、ホントだ……茉莉、着せ痩せするタイプだったのな」

「あは。夢中だね。やらしー顔してるよ」

「うっ、うっせ！ だって……」

「なーにー？」

「だって、今まで意識したことなんてなかったし……」

というかオマエ、忍者で胸も尻も結構あつてキュートでセクシーな太もも持ちとか最強かよ。なんてことだ、素晴らしいじゃないか。やばいなオレの彼女。

とかなんとか考えてたら、茉莉は不思議そうにしていた。そして一言。

「押し倒さないの？」

「いやあくまでも胸の大きさを知るといっただけだから。これそういうことじゃないから。オレはあくまでも胸の大きさをオマエに教えられただけだから」

「あは、やらしー」

「どこ見て言ってる!？」

ええい、オレは誘われてるのか!? からかわれているのか!?

楽しげに目を細めながら、ニンマリとして猫みたいな口をした茉莉の態度からは全く読めない。けどどういうやらしいことではなかった筈だ。そもそもこれはただ単に胸の大きさを教えるための行動であつてだな……

まあ、互いに変なスイッチが入っていたのは事実だろう。だから普通なら気付くはずの足音に気付けずに——

「ねえ茉莉、馨君は結局どうする……って……」

「——あつ」

「……へ？」

普通にオレが空けていると思っただけだろう。何のラグも無し

に入ってきたおばさんが目を丸くしている。
当たり前だ。

娘の部屋で、娘が自分の胸を彼氏に掴ませているのだから——!!
しばらく視線が行ったり来たり。

オレたちは固まったまま。何も言えず何も出来ず。そして——

「うわあああつ!!」

「はにやあああつ!!」

大急ぎでバツと離れたのだが、おばさんはとても優しく微笑んで。

「ごめんなさい、お邪魔しちゃった」

「ちっ、ちがつ!! お母さん違うからね!! これ全然そういうこと
じゃなくて下心なんて何もないから! 馨くんからも何か言つてよ
!?!」

「えっ?! あっ、いやその……本当に違うんです! あと泊まります
結局!」

……お婆さんの誤解を解くのが大変だった。オレたちの反応から
本当にそういうものではないと察したおじさんのフオローが無けれ
ば、どれだけ大変だったことか。

そうして結局、オレは短い間だけとは言え世話になることとなっ
た。

「……葉子はさ、あの時どうして欲しかったんだ?」

「んー、内緒っ」

「えー」

「乙女の秘密だよ、あはっ。じゃあ電気消すねー」

「はいはい。おやすみ」

「おやすみ」

……本心は分からずじまいだが、いいさ。
たまにはこういうのも、悪くない。



——何故、祈りと呪いは表裏一体なのか。

芳乃の語った言葉を聞いて、将臣もムラサメも頭を抱える他なかった。

「……なんだよ、それ」

「なんじゃ、それは……」

……ままならない現実。

どうしようもない福音という名の呪い。

「……芳乃。馨はきつとこれを知っても、常陸さんのことも、芳乃のことも憎まないよ」

「なんでそう、言えるんですか？」

「……俺はあいつがどうして自殺しようとしたのかを知ってる。馨は人間として生きて死ぬ、それが出来ないと悟ったから死を選んだんだ。理想像になれないのならば死ぬべきって」

いつぞや聞いていたことを、ここで話すことになるとは。中々に因縁を感じつつ、稲上馨という男の芯の部分を語ってみれば、そんなことを全く知らない芳乃とムラサメは目を丸くする。

当たり前か、と思いつつながら将臣は言葉を続けた。

「——あいつは多分、自分でも止められなかったから死を選んだんだ。止められたら死ぬ筈なんかない。今は止められるし、全てに意味があったと悟っている。だから憎まない。俺はそう信じている」

もちろんそれが無責任な言葉であると知っている。
「もし違ったら、俺を恨んでくれていい。嘘つきだと罵ってくれていい」

だからそうなったら、遠慮無く拒絶してくれと、真剣な顔で伝えた。
「ムラサメちゃんも、そう思うだろ？」

「まあ、そうじゃな。馨は魔人ではあるが、抱える宿痾を除けば人だ。芳乃を憎むことはなからう。それに、裏返せば朝武がいなければ稲上も存在しないのだし、言ってしまうえば茉莉やお主もいないのだ。お主らを大切に思っておるあやつが、そんな理由で意見を変えるものか」
そもそも馨が殺そうと思つて殺すのは愛おしい者だけであり、それ以外が普通である彼の精神性と性格から考えれば、例え恨んだり憎んだりしても特に何かということも無い。

そして馨は、そんな根本的に誰にもどうしようもなかったものを、血族だからと言って責任を追求する人間ではないと二人は信じている。

だから二人は、芳乃が相談したのはごく単純に不安だからという理由であると即座に理解した。弟分のような幼馴染が苦しんだ理由は自分の血にあった、と言われれば責任感の強い彼女が悩むのは必然。「芳乃、このことは馨に伝えよう。多分あいつにとっても、芳乃にとっても、それが一番だ」

「そう、ですよ。私の知ってる馨さん……ううん、馨君ならきつと——」

許す許さないのではなく、認めた上で、受け入れた上で、さてどうするかを考えるのだろうか。彼はそういう人だから……

「決まりじゃな。しかし……魔人が知っていたということは、白猫たる犬神が知らぬ筈も無からう。つまり向こうが伝えてる可能性があるのじゃが」

「二あつ」

……そもそも知っている可能性を考慮していなかった為、二人して間抜けな表情を見せてしまう。そんな二人に少し呆れ、しかし事情が事情だしと納得しながら、ふとムラサメは気が付いた。

もし言つてなかつたとして、だ。

……言つたところで信じてもらえるかということである。奏の戯言と取られてしまえば、騙されているんだ気にするまで流されて終わりである。

将臣とムラサメは信じれる材料を持っていて、芳乃は奏の反応が根拠となった。だが実際に記憶を見ているわけでもなし、その上奏と直接相對したことの無い馨がこれを信じるかと言われれば……

「物事には順序が、ということじゃな。吾輩たちが語るより、まずは実際の真相を伝えた上で白猫たる犬神から伝えなければ、馨がまず信じないじゃろう」

「も、もしかしてムラサメ様。これって……」

「魔人の手のひらでいいように転がされた形になるか。悪趣味な輩め

……」

悩みそのものは確かに早急に解決しなければならぬ問題だったが、伝える伝ええないの話に移行した途端に、そもそも信じてもらえるだけの材料を相手が持つてないという点が浮き上がる。

だが芳乃ならばそれに気付かないと踏んだ上で伝えたのだろう。なんと悪趣味な。

がつくりと肩を落としてもたれかかる芳乃と、それを受け止めてまあまあと慰める将臣を横目に、ムラサメの心には一つの疑問が浮かび上がっていた。

(魔人とは黄泉の杭と鎖を宿すが故に生と死の矛盾螺旋を求める……じゃが、確かに千景にはそんな宿痾は無かった。馨が突然変異を起こした形になる)

父である千景は魔人ではなかったのに、子である馨は魔人であった。つまりその魔人の宿痾は確実に消え去りつつあったというわけだ。

ならば何故、馨は魔人として生まれたのか――

(馨が魔人である理由とは、なんじゃ……?)

人に返りつつあった稲上が、突如馨の代で魔人に回帰した理由。そこだけが見えないことに、更なる闇を感じずにはいられなかった。

特に、芳乃が悩んでいた事などが比較にならない程に、身近な闇を

……

「そ、それで将臣さん。今日も一緒に寝ていいですか?」

「全然平気だよ」

「やったっ」

(なんでこんなにまだ初々しいのかのう……?)

そしてそれとは別に、結構経っているのにまだまだ初々しさの消えない将臣と芳乃の恋人関係に、色々と思うものがあつた。もちろん後には気を使ってさっさと退散したが、ちよこちよこ覗きに行ったのは言うまでもない。

ムラサメは馨の評価通り、エロオヤジ気質なのだ。

疑惑と決意

今日もまた夢を見る。

前回とは異なり、それは誰かの見た記憶。入り混じった呪わしく罪深い記憶ではない。

あの侍が、上司であろう人物に呼び出されている場面であった。

「……縁談？ 某にでありますか？」

「うむ。貴様も覚えていよう、あの家からだ」

「——彼女ですな」

彼の実直で誠実な人柄に対して、当然ながら好感を持つ者が多い。あの叢雲がそうなったように、人の中でもそうなった者がいて当然だ。それに功績も上げれば、まあそれは必然的に縁談の一つや二つ上がるわけだ。

「……考える時間をくれませぬか？」

「よかろう。急な話なのは変わらぬからな。だが、無礼はするなよ」

「しかと存じております」

そうして彼が穂織の山へと向かうのを見ながら、二人はさてこれが誰が見ていたものなのかと、少し疑問に思った。

「土地神がそう簡単に動けないだろうから、これはあれかな、使い魔的な存在が見てたのかな」

「ツカイマ？ ……実は空から見たとか、そういうものではないのでしょうか。って、あつ」

そうレナが驚いたのに合わせて、将臣も彼女の見ていた方向を見る。すると如何なる術か、空に浮かんでいる叢雲の姿が。つまり彼女は想い人に縁談が行くのを直に見たわけであつて……

(しんどいだろうなあ)

(思うものがあるでしょうね)

そういう答えに行き着くのも、必然であつたろう。それほどまでに、”そんな口元”をしていたのだから。

まるで腹を貫かれた痛みを噛み締めて耐えるような——

そうして二人は久し振りに顔を合わせた。

叢雲にとって、それは眩い幸福だった時間なのに、今は闇の底へと消え去った。まるで罪を懺悔するように、心と呼べるものが痛みにのたうち回って狂い哭いている。

それでも、平常である己を仮面として貼り付けられるのは、彼女の芯の強さの証明であろうか。

「――叢雲殿」

「■■■■■■■■■■」

「なんて事の無い名前の呼び合い。

「我が妻になってくれまいか」

そして切り出される本題。単刀直入な入り方に、思わず「おお……」と感心してしまう。雄々しさというものは、見る者を圧倒するだけでなく一種憧れめいたものを心中に息づかせる。

「……」

「突然で大変申し訳ない。無礼であるのも承知の上。しかし某は、そなたこそ運命だと感じたのだ」

真剣に告げる彼に対して、彼女は如何なる思いを抱いて何を考えたのか。それは恐らく、犬神ですらわからないだろう。彼女にしか、その全てはわからない。

ただ――

「……はっ、下賤な輩が何を言っているやら。あんな無名のなまくらを渡して、暇潰しに使っただけで何を勘違いして――愚かしい」

偽悪的に告げられたその言葉から理解できたのは、拒絶の意がある……ということのみ。これには見ていた二人も首を傾げる。なるほど、付き合いが浅ければこれで激怒して帰ってくれるだろうか……その男が彼女が無理をしていることを察せない程の鈍感であろうか？

「偽悪的に振る舞うのはよしなされ。叢雲殿がそのような悪女などになれぬことを、某が見抜けぬとお思いか」

答えはもちろん、否。

「拒絶するならば、せめてそなたの本心からの言葉で拒絶してもらえぬか」

ただ彼は汲み取ってしまった。前へ進まなかった、

彼女の意志が否定する側であるが故に、言える部分だけでいい。せめて真相を教えてくださいと留まった。

ある意味ではそれが、お互いの決定的な別れになったのかもしれない。

「……遅すぎたのです、何もかも」

「遅すぎた？ それは……」

「私には私の道があつて、あなたにはあなたの道がある。私たちは決して交わつてはならなかつた——」

「何を……!？」

悲しげに紡がれた言葉に、何故だと問うべく一歩進んだ途端。

「来ないで！」

叢雲は、まるで懇願するようにそう叫んだ。

ただならぬ声故に、侍もまた止まつてしまう。

「叢雨はあなたが、あなたの思う使い方を……それがせめてもの……」

「叢雲殿……」

「あなたは、人間の中で生き続けて。私たちは二度と会うことも無い……触れ合うことも無い……それで、いいのよ」

—— 心中に渦巻く想いは、語れずじまい。

夢が終わり、夜が明け、朝に目覚めるように。

「承知した……それがそなたの望みならば」

互いを想うが故に、彼らは身を引きあつた。

「さよなら、 ■ ■」

「さらば、叢雲殿」

(きつと……初恋だったわ)

(恋というものであれば、叢雲殿が初めてだったろう……)

人と神は交わつてはならない。

言いたかつた言葉は決してこんなことではなかつた。だがこうしなければならぬ。

永遠に広がる苦い味と共に、彼らの初恋は夏の雪に溶けて消えた……

「何故です姉君っ。あの男はあなたを求めていた、あなただつてあの男を求めていたつ。だというのに、たかが想いを寄せる一人が現れるだけで何故そんな簡単に諦めてしまうのです」

「だつて、だつて……」

全てを見ていた犬神は、侍が去つた後、叢雲に尋ねた。背を見せ続ける彼女の表情はわからない。

「……私は、あの人に相応しくない。あの人の伴侶には、なれないのよ……女として子を産むこともできない、夫を支える妻にもなれない。私は神で、あの人は人。そして何よりも……私は玉石なのよ、コマ」人には人の生活が、神には神の生活が。そんな当たり前の事を考えた途端に、冷たい身体を持つ自分が暖かい身体を持つ人間の隣にいることは、絶対的に不可能であると、彼女は悟つた。彼女自身が言つていた、『必要以上関わるべきではない』という言葉が、まるで戒めのように彼女を押し潰している。

「抱き締めても温もりを感じさせてあげられない。冷たい玉石の身体を持つ人外の存在が、人間の伴侶として相応しいとでも？ ……無理よ、相応しくない。私はあの人を騙し続けるのも、あの人を不幸にするのも、あの人の血を絶やすのも……そんなことなんて、したくないの……っ！」

そしてなによりも、本気で幸せを願える相手に対して自分と共に不幸になってくれなどと、彼女には言えなかった。

「姉君……」

犬神は、彼らの行動が理解できなかつた。

身を引き合う男女。求めれば答えるのに、互いを思いやるが故に傷付き合つて離れていく。

何故だと問おうにも、叢雲は相当に無理をしている。だから彼は、後に尋ねようとした。

——そして侍は、縁談を了承し結婚した。

無論、彼女もそれを“見ていた”。見続けていた”。名残惜しむように。祝福するように。あるいは、それらを反転させるように。

「異なる種族で、命の連続性を考えたから身を引くか……」

「一つの愛の形だと思えますですよ。自分とでは幸せになることはできない。だから身を引くというのは」

「そう、だね」

世の中には色々な愛の形がある。

異形の愛もあれば、ごく普通の形の愛だってある。将臣もレナも、それがわからぬ子供ではない。

薄れ行く意識の中、その失恋に対する悲しみが、小さく心中に生まれた――

……目が醒める。

ゆつくりと瞼を開ければ、規則的な寝息を立てて眠る――馨の姿。

「……あは……」

甘い声と共に笑みが零れたが、さして気になるものでもない。このままチラリと肌を覗かせる胸元に顔を埋めて二度寝と洒落込んでもいいのだが……

「……」

茉莉子は、深呼吸を一つ。

愛おしい彼の匂いに満たされる。なんと、心地の良いことか。

「寝顔、昔から何も変わってないね」

馨の寝顔を見て、優しく頬に触れながら人知れず呟く。

「ホント、可愛いのは寝顔くらいなんだから……」

昔からそうだ。茉莉子が見る馨の可愛い姿など寝顔か甘える時くらいしかない。まだ彼が茉莉子のことを茉莉子ちゃんと呼んでいた頃からそこだけは変わっていない。

（あ、でも可愛いところと言えば子供の頃夢がお花屋さんになりたい……とかかな？）

なんでも花を育てるのは嫌いじゃないし、自由気ままに咲いて枯れる姿が美しいとかなんとか……今思えば魔性の片鱗が見えていたのだろう。そうしたやり取りに。

「……ワタシより、ずっと大変だったんだね」

お疲れ様、と労うと同時にそんなことしか言ってやれない自分の無力を痛感する。だが、他に何が出来たかと言っても何も出来ない。だからそのことに気を病むのは、お門違いというものだろう。

そう、わかっているのだが……それでも。

暗い気持ちを振り払うべく、胸元に顔を埋めて馨成分を補給。そして不意に、過去の事を思い返していたからか、茉莉は馨との思い出を再生し始めた。

(一時期、常陸って呼ばれてたっけ)

秋穂が亡くなつてからしばらくの間、馨は芳乃と茉莉から距離を置いていた時期があった。その時から急に『芳乃ちゃん』『茉莉ちゃん』と呼ぶことはなくなり、彼は意図的に冷たい声で『芳乃様』『常陸』と呼ぶようになった。

そんな様子に寂しさを覚えて、いつだったかは忘れたが、こんな風に迫ったことがあったのだ。

——そんな辛そうな顔してワタシや芳乃様の名前を呼ばないでよ、馨くん——

思い返すだけで恥ずかしくなってくる。茉莉だつて自分の素を見せないように努めて、馨相手にすら敬語を使って猫を被っていたのだが、あの時はそれすら投げ捨てて迫った。

以来馨は芳乃だけはさん付けだが、茉莉だけは呼び捨てにしていた。

思えば、自分は猫被りのままで彼だけに素を求めるのは卑怯だった。あそこでもつと素直になれていけば、とも思うが……

「大変だったりしたけど……ワタシ、幸せだよ」

それだけ大変だったのは過去の話だ。今はとても幸せで、まるで暖かな夢のようだ。少しばかり問題があるが、それは必ずなんとかできると信じている。

根拠なんて、好きな人の言葉だけで十二分だ。

前なら、色々と根拠が無ければ何とかなる、なんて考えもしなかった。けれども今は根拠の無い自信であつても信じられる。なんていうか、楽観的になつてしまったような気がする。でもそれが心地良

い。

そうなつてしまったのは全部馨の所為だ、ととりあえず押し付けて、ついでに顔を埋める。

(……またキスマーク付けちゃおっかな)

別に平気だとは知っているが、乙女心とは複雑なもの。独占欲に従って付けても向こうが満更でも無いのは知っている。さて、どうしたものか。

「かーおーるーくーんー……？」

「……」

起きない。

ツンツンしてみても、起きない。

起きてくれたらそれで終わりだったが、起きてくれないとなればいたずら心に火が付いてくる。

「……えいつ」

寝間着の中に手を突っ込んで直に背を触ってみる。

……なんていうか、殿方つて感じだ。

感動はしなかった。ある意味で夢が壊れたかもしれない。馨の見た目は細いのだ。

——おい——

(どうしました?)

そんな風に色々と幸せタイムを過ごしてはいたが、唐突に犬神が声をかけてきた。その声はやけに真剣で、彼にとって何か大切なことを語る時のそれと同じだ。

——魔人……何故奴らがそうであるのかについて、私はこの男に話さねばならぬ——

(ならないって、なんでそんな責任あるみたいな言い方を)

——あるのだ。私には。……姉君の名代としても、この男には……イナガミ一族には伝えなければならぬし、その果てに私を殺すというのであれば、甘んじて受け入れなければならぬ——

……どういうことだ、と叫びそうになった自分を止められたのは、ある意味ですごいことだったかもしれない。先程までの幸せ時間は

何処へやら、茉莉の表情は、崇り神と立ち合うそれとなんら変わりない。

(どういふことなんですか、それは……?!) だってアナタは穂織の土地神でしょう! なんて京都の伊奈神一族が魔人である責任が、アナタにあるんですか!?)

——神に距離など関係無い。あるのだ。私には。気付いてやればよかつたのだ。目を逸らさずに……——

動揺を押し殺して当たり前の何故を問えば、神の不条理が答えとして返ってくる。その冷たく、しかし確かな決意を秘めた声は、彼にとって一つ、ある種の後悔を意味していた。

——背負わなくていい苦労を背負わせた挙句、姉君の献身があまりにも美しかったから、そんなものはいないに決まっていると判断して気付きもしなかつた——

(……気付いたところで、何かしてあげられたんですか。人を殺さなければならぬ宿痾を持つ、魔人に)

——少なくとも、その魂に刻まれた宿痾を和らげ、黄泉の杭と鎖を取り除いてやることくらいは——

つまるところは。

犬神が気付いてさえいれば、伊奈神と稻上で起きた諸々の悲劇は無かつたのだと。

故に彼は罰を、裁きを求めている……茉莉にはそんな風に感じられた。彼は姉を、叢雲の恋するが故の行動を止められなかつたことに悔いがあつたのだろう。そしてその死を無価値にしたくなきなどなく、名代を務めていたのだろう。だがその果ては酷い裏切りと、彼自身が怨嗟の魔物へと成り下がるという悲劇。

やがてそれなりの誠意を見せられて、多少なりとその怨嗟を沈めれば、かつて見た美しい献身の眩しさ故に見えぬフリをした現実が最悪の形で現れて——

(アナタは……)

何も悪くない。心がある以上はそうなってしまうのだから仕方ないのだ、と続けようとしたのに、言葉は紡げなかつた。

それら全てが、最愛の人が人として生きられずに絶望して死を選んだ理由なのだから。心の何処かに暗い炎が燻るのを理解する。が……

(……ワタシは、何も言えません。アナタが悪いだとか、そういうのは。ただそれを伝えた結果、どうなっても構わない?)

——そうだ——

(ワタシは……アナタに消えて欲しくないと思ってます)

——……………は?——

あ、こんな声も出せるんだ……なんて、場違いな感想が浮かぶほどにその声はあまりにも唾然としていた。威厳ある神とは思えないよな、ちよūd彼らの姉である叢雲の見せた醜態の時のような声で、菓子も意を決して本音を伝えたというのに、ついクスツと笑ってしまった。

(だって、やっと訪れた機会ですよ)

——そうなのだが。いやそうなのだが。お前、私がどういう存在かわかって言っているのか——

(わかっています。わかっているけど、それでもワタシはアナタと過ごした時間もあって、アナタに消えて欲しくないと思ってるんです)

——…………—

一体どんな表情をしているのかは皆目検討もつかない。だけど菓子には、何故か本気で困惑している彼の姿を鮮明に思い描けた。

正直に言えば、友達のような感覚があるから……というところだろうか。菓子自身もよくわかっていない。ただ消えて欲しくないと思つた。そして馨が彼を斬るならば、それを止めようとも。

確かに恨めしくは思うところはあるが、しかし諸々が重なってこの現実には迫り着けたのだと考えると、不思議と負の感情は湧いてもすぐに消えるのだ。

犬神はしばらく黙った後、少し感心したような声で言った。

——まあ、お前の意見は頭の片隅に置いておこう。だが、私が奴に真実を伝えた時、奴がどうするかは知らぬ——

(そう、ですよね……)

——……あの男が、伊奈神馨が例え私を斬っても、恨むなよ。奴にはそれだけの権利と義務がある——

そんな内面を見抜いたのか、告げられた言葉はシンプルなもの。恨むな——とは、簡単に言ってくれ。ああ、まったく……どうしてワタシばかりこういう板挟みに。と嘆いたのは一瞬、茉莉は確固たる信念を、”そうなたら止める”と定め、その話は切った。

の、だが——

「……なあ」

「……なに」

「いつぞやみたく寝惚けてる訳でもなさげだから聞くけどさ」

「うん」

「いつまで人の寝間着に手突っ込んで背中を直に触って、顔を胸元に埋めてんの。ちよつとさ、そういうことされるとオレも我慢できなくなってくるんだけど。誘われてるの？　これ」

「……は？　いやいやなに言って……」

なに急に訳の分からないことを、と目を合わせた。

——そう、目を合わせた。茉莉は、目を合わせたのだ。誰と？　もちろん、いつの間にか起きていた馨と。どこか呆れた表情でありながら、少しばかり餓えた狼の面が覗いている馨と。

頬が急に熱くなる。

もつと恥ずかしいところを見られたことがあるのに。それ以上に熱くされたり、蕩々になった顔を見られてイジワルをされたことだつてあるのに。何故か、その時以上に恥ずかしさを覚えた。

プイ、とそつぽを向く。とにかく顔を見られたくない。

「おい」

「うつさい」

「……へソ曲げるなよ。しかも急に。なんだ、可愛い茉莉にゃんはくんくんしてたら馨君起きて拗ねちゃう茉莉にゃんなのか」

「……」

だいたい当たってるのがムカつく。

——どうした？——

(いえ。そののアホに内心当てられてプンプン菜子にやんなだけですよ)

——しっかりしろ。傷は浅いぞ——

(……ワタシ、何言ってるんでしようね……)

——いや私に聞くな——

(ですよねえ)

犬神の物凄く困惑した声を聞いた後、菜子は……

「……にや」

「うあ……っ!? どこ触ってんだっ」

ちよつと、かりかりと引つ掻いた。

猫みたいに。



……朝っぱらからペタペタ触られて気が気でなかったし、よりにもよってアイツ……ええい、菜子に弄られて最近妙に感度が良いんだよ……

なーにが「馨くんも胸感じちやえばいいんだ」だ。おかげで次の日色々辛いんだよ。コツチはオマエのそこ弱いからってあんまり弄らないのにまつたく。

……今度する時は開発し返してやる。先つぼだけで下が啼くまでやってやる。「ゴメンナサイ」って泣きながら言うまでやってやる。

なんとというか、二度目でだいぶ攻めてくるようになられた。往來の悪戯つ子精神やらやや強めの姉性やら、あるいは甘えん坊な面やら……とかく、受け攻め両方ともお望みなもんだから、付き合うコツチも大変だ。

ま、そんな菜子が好きなんだから別段、大変とは言っても本当にそういう訳ではない。むしろばっちこいだ。

「……けど、急にどうしたの? 家に帰るって」

「色々思い出したことがある。だからそれを確かめたいんだ」

常陸家で朝飯を食ってゆっくりしていたが、昼前にはおじさんとお

ばさんにお礼を言ってから帰宅することにした。相変わらず菜子は着いてくるが、別に何かエロ本処理とかそういうのではないのでモーマンタイという奴だ。

家に着いてきつさと書類置き部屋に行き、ガサゴソと漁り始める。年代的には古いから、あるとしたらここにしかないんだが……

「菜子、探すのにだいぶ時間かかるから、帰ってていいぞ」

「一人で平気？」

「いつまでも、オマエに甘えるオレじゃないさ」

「そつか。じゃ、またね」

「ああ。また明日」

フリフリと手を振る菜子に手を振り返し、気合いを入れ直す。さあて、どれがどれやら。オレの探す物は、過去の記憶と照らし合わせれば、いくら古い物とは言えども確実にあるはずなのだが……

「どこだア……？」

漁る。漁る。漁る。漁る。

探して探して探して、埃まみれになつても魔人の性能に物を言わせてごり押していく。花粉症にだって滅多なことではならないし、風邪だって引いたことは全くない。筋肉痛とだって無縁だ。

昔、ばあちゃんが言つてた。この部屋にはご先祖様の残した日記のようなものがあると。それも、この地に来た時のご先祖様の物が。

……今のオレなら、何かわかる気がして仕方ない。だからこうして漁っている。見たら、きつと理解できるのだと確信しながら。

だがしかし、やはり見つかりにくい。棚をひっくり返すように、書類の古さから逆算して何年くらいだと推測。そして一番古そうなのを取って——あとは感覚に頼る。

何故感覚？　と思うかもしれないが、オレと虚絶は言つてしまえば表裏一体。身体が覚えている、みたいな感じでなんとなく「これはそうだ」「これじゃない」とか、わかるのだ。そういうのが。

便利なリーダーという程でもないけどな。

さて、そんな感覚に従つて多分これ、というものを集めたところで我が身は埃まみれで腹も減った。ので軽くシャワーを浴びてから着

替えて飯を作り、食って休んで……そして再開する。

もちろん古文が全部読めるとかそういうわけではない。いくら様々な亡霊より技を盗めると言ってもベースがオレなんだから無理なものは無理だ。もちろんこれまたなんとなくわかるレーダーに頼るしかない。

「……これか」

目当ての書物を発見したのは、再開してから一時間と十五分程度であった。随分ボロボロになっていて、内容が読めるかどうかも怪しい。フイーリングで読み取れるとは言っても、「文字が見える」は何よりの前提条件だ。それができないのならば、当然何もわからない。

「頼むぜ……」

中身の無事を祈りつつ、まずは捲って文に目を通して——
はあ？ と。

オレは、心底から困惑した。

想像できるだろうか。京都生まれ京都市育ちのご先祖様、つまり現代的には都会っ子の定義に当てはまる存在が、だ。

『ビバ穂織。実家に帰ってきたような安心感と帰郷感に満たされて幸せである。約束が意味をなさなくなっても我が血骨は穂織に埋める。穂織バンザイ』

……意味は大体こんな感じ。

あとはつらつらと穂織バンザイとか結婚した町娘の可愛さとかが書いてある。それでいいのかがご先祖様。あ、崇り神については……

『なんか黒いのいた。実家からかっぱらってきたあの無銘の名刀で斬ったら殺せた。ヨシ！ 報告しとこ』

いやなんかもう……フリーダムだなこのご先祖様……

『なんか神様なんだから祀ればなんとかなるんじゃないやね？ とか抜かしてたのでお前ら建実神社に祀ってる安産の神様に崇られてんじやねー。無理っしょって言ったたら城下町から出て行って言われた。うっせー！ 出てってやるよ！ 俺はあくまでも穂織にいたいだけだからな！ 常陸殺さねーからな！』

不敬すぎる。

そりや城下から出てけ言われるわ。首切られただけマシだわ。

『なんか朝武の姫さんに犬耳生えてたらしい。きつと長男の崇りに違いないとか言ってる。いや知らんがな』

まあこつちに言われてもだな。

『訳もわからず朝武の姫さんがぼっくり逝ったそう。あー、こりや常陸に疑いかかるかなあ？　なんか黒いのも最近昼間見かけるようになったからそつちに因果関係あんじゃね』

そうでしたね、はい。

『なんか鎮まりたまえ踊りしてた。そんなんで鎮まるなら誰も苦勞はしねーっつ。滅ぼうがどうでもいいわ。土地に殺されるなら、土地から生まれたものとして本望だろうよ。殺されるなら穂織がいい。穂織バンザイ』

……うわ口悪いなコイツ……

てか穂織への執着心がすごい。……ん？　何か、違和感が……

『最近、頭領が神刀とやら担いで新しい姫さんが巫女の真似事、そして常陸が忍びびとしてあの黒いの……崇り神とやらを祓ってる。ごくろーさん。俺？　要請求だけど本業常陸の監視と処刑なんで知りませーんって突っぱねた。どうでもいい。そんなことよりウチの嫁と息子が可愛い』

根に持ってるのか。

『なーんか崇り神殺しなくなったんで殺しに行ったら助ける形になった。べ、別にあんた達を助けようと思って無銘刀持ち出したんじゃないんだからね!!　……まあ出来んのにしないってのも気分悪いし、手伝ってやるか』

将臣みたいなこと言ってるけど心に響かねえ。

『神刀の為に人柱使ったとか草。もう妖刀じゃん。その人柱もきつと化けて出るぜって言ったなら「彼女はそんなことを言っていない」とか言ってやがった。遂に頭まで逝ったかア?』

本当にいるんですよ……

『いや聞いたけど草しか生えねーわこんなもん。兄貴が傍若無人だか

ら当主にしなかつたら他国に唆されて下克上しましたとか当たり前じゃん。なんで殺さなかつたの？ ウチの一族なら嬉々としてぶつ殺してるねまつたく。あー、なんで穂織にこんな奴らいるんだろ。俺の楽園が……』

恐らくこうなつたのは、奏の件が尾を引いてると見た。しかし、穂織が本気で好きらしい。だがそこを治めている人間に対する不平不満が強すぎる。異常だぞ、何か。

『鞍馬んところを筆頭に祟り神の為人柱になれとか言つてきやがったから居合でビビらせたら尻尾巻いてさっさと逃げやがった。草。これだから時代遅れの田舎侍どもは……』

追記 朝武の頭領が謝りにきた。やけに焦つた様子だったが内部分裂でもしてるのかね。謝られても溜飲は下がらない。何故？』

……なんだ、なんでコイツはこんなにも朝武を嫌っている……？
それからしばらく読んでいても、穂織への強い執着心に、穂織に住む人々……というよりも、朝武を始めとした上位階層への異常なまでの嫌悪感が綴られている。最初の頃は何処の家の誰々さんが優しかったとか書いてたのに、途端に無くなっている。奥さんについてもだ。

そして、あるところでオレの手が止まった。

『遂に頭領がくたばつた。流行り病でぼっくりだ。それにここ近年ずっと朝武は女子しか生まれてない。つまり断絶の危機だ。』

——素晴らしいじゃないか。

早く死んでくれ。穂織諸共滅んでくれ。我々に謝罪しながら死んでくれ。死に絶えろ、死に絶えろ。総て残らず塵と化せ。

我らに宿痾を与えながらのうのうと生きてきた一族に相應しい末路だ。自分たちの神を殺したが故に神に祟られて消える。こんなにも面白いとは。

ああ、惜しいな。俺の身体はもう持たん。歩くのも億劫だ。刀も握れぬ。息子に伝えなければ。孫に伝えなければ。我が伊奈神の真なる使命を。

かつて我ら魔人の始祖、久楼否神公暁が探していた影なる我らと対となる光なる一族……朝武と常陸こそがそれであるのだ。そして我らと奴らは同じ始まり——だが奴らには宿痾はなかった。我らだけに埋め込まれた。

ならば真なる使命とは、その滅びを見届けて溜飲を下げることに他ならない。奴らの死に様を見つめ、嘲笑し、助けを求める手を斬り飛ばせ。そして残った草の根の一本に至るまで死滅させ、我ら伊奈神の復讐を成し遂げるのだ。

もし神に滅ぼされぬのであれば、我々が滅ぼしてやろうではないか。

だから奴らに祝福呪いの輪廻を。

——赤子の赤子、ずっと先の赤子まで。

……しかし何故あのような女に子を孕ませたのか。穢れた血だと知っていれば、他を選んだものを。

まあいい。

これより我が伊奈神一族は、神人恋花を殺す永劫の病とならん』
……なんだこれは。

狂気だ。あまりにも恐ろしい狂気だ。信じられない。何かに取り憑かれたように、ひたすらに穂織と朝武常陸両家が滅亡することを望んでその狂気をぶちまけている。こんな悍ましいものを、オレは望んでいたわけではない。

自身の先祖、その変貌ぶりに恐怖しながら残された古い書物の数々に手を伸ばし、中身を見れば全て同じだ。同じように穂織への強い執着心と朝武常陸両家に対する奇妙な嫌悪感、そして最期には滅亡に取り憑かれて己が血族に、恋花の終滅を見届けて溜飲を下げろと語っている。

子を成した相手を穢れた血と呼び、死後にすら会いたくないとまで言い放っている。

……だが、明治くらいから狂気に塗れた呪いを書き綴ったものが途端に少なくなつて……やがて大正となつた途端にそれはなくなつた。

……皆が同じことを言っていた。

宿痾があるのは、魔人なのは朝武と常陸が悪い。だから奴らは滅ぶべきだ。自らを守っていた神の手によつて滅ぶべきだ。その終焉を見届けてやつと溜飲を下げてやろう。もし終わらぬのならば我ら伊奈神が終わらせるのだ……

しかし、明治初期から段々と本当にそれが正しいのかという疑問を抱き出して、それを確かめるのだという言い方に変わり、宿痾から解放された大正初期のそれはこう書いていた。

『もはや我らが呪う理由などない。溜飲は遙か過去に下がっていたのだ。もはや滅亡を望み続ける伊奈神ではない。穂織と共にある稲上を名乗ろう。我々も本家も、もはや魔人ではないのだ。忌まわしい歴史は消さねばならない。先祖たちの世迷いごとくも、何もかも。』

——せめてこれからの子供たちだけは、この怨恨の輪廻から外れますように』

……呪いが祈りになつた瞬間だったとも言えよう。200年以上の歳月をかけて、稲上は魔人から人へとなつたのだ。

だが、現にオレは魔人として生まれた。何故、今更になつて……それに伊奈神はずつと、朝武常陸を呪い続けていた……それは魔人の宿痾が奴らにあるからと。でも、何故そう言うんだ。始祖 久楼否神公暁が探していた光なる一族だとなんでわかつたんだ？ コイツらは何を見てそうなつた？

何もわからない。何もわからないが……だけどオレにわかることが一つだけある。

コイツらは魔人として覚醒していない。魔人としての宿痾が中途半端に覚醒し、それが穂織への憎悪という形で現れたんだろう。やるやらないではなくて、やつてしまうのが魔人だ。本物の魔人なら、既に穂織を滅ぼさんとしても何もおかしくない。

オレでさえ、幼少期に菓子への強烈な愛情と己の手で愛さなければという衝動を抱いたんだ。滅亡が見たいという憎悪で止まっている

辺り、中途半端な覚醒だったのだろう。

……だが、何故皆、朝武常陸が悪だと断言しているのだろうか。オレには彼らがそうしている理由が、何も理解できなかった。

未完の魔人だからだろうか？ いいや……それだけじゃない筈だ。もつと大きな、何か理由がある筈なんだ。

「……聞く、か……」

本音を言えば、少し怖い。

自分もそうなるのでは？ と思ってしまうところもあるだろう。

だが、オレはそれ以上の狂気^{アイ}を正気と成している自らを知っている。自死を選ぶほどに彼女を愛している。穂織への憎悪？ 本当に両家が悪かったら？ ……その答えはただ一つ。

オレの半分は、芳乃ちゃんと茉莉のものだ。

彼女たちの望みを叶える為に、彼女たちにできないことがあるのなら、オレが実行しよう。

オレはそう決めていたんだ。

オレは彼女たちの力となり助けで在り続けるって。

最初にガツンと決めたことを、徹頭徹尾貫き通す。そうしなければオレの気が済まないから。

人としては生きられなかったが。

だがそれでも、この誓いだけは決して破らない。

オレがオレである以上、どれほど誰に何を言われようとも何を知ろうとも、揺らぐ事のない絶対的な答え。ならば迷う必要も無い。オレは、オレの為すべきことを為すだけだ。狂い哭いて死んだ先祖たちなど関係無い。オレがそう決めたのだからそれが真理だ。

「答えてもらうぞ、犬神」

そう呟いて、心中は決意で満たされた。

逃げる必要も、言い訳も要らない。そうと決めたら、貫き通す。ただそれだけ。

オレはもう悩まない。前に進むだけだ。

否神／朝武

色の無い世界。すべからくに生きる意味を失った虚無の空。哀しい程にがらんどうで、冷たい程に何も無い。

——宙ぶらりんになった星月。

消えた夜空の瞳。

冷えた黒昼の涙。

燃えた白夜の笑顔。

なんて苦しく、そして悍ましい程に美しい砕けた思い出の夢幻。

けれどその中で色を持つのは純白の大狼。

なるほど、確かにこれは神サマだと納得する。善し悪し双方を備えてこそ神というわけか。濃密なまでの、かつての残滓がわかる。

オレは特に何か感じるわけもなく、気軽に声をかけた。

「よお、会いに来たぜ」

「お前……!?! どうしてここに……っ」

「そんなに不思議か？ オマエのチャンネルは覚えた。虚絶と繋がっているオレなんだ、それくらい引っぱり出せる。それに、結構な頻度で菜子側のチャンネルを観測できたからな。この程度なら容易い」

実際、チャンネルが分かれば後は回線を絞るだけ。なんてことはない。魔人である以前に、オレは虚絶に選ばれた者なのだ。後は意識を落としてチャンネルの中に入れば……ほら簡単。いつぞや、京香がオレを呼び出したのと同じ理屈だ。

だからそんなにも驚いている犬神が、あんまりにもおかしくってケラケラ笑ってしまう。こりや菜子が愛着を持つ訳だ。コイツ、結構面白い。

なんていうか……オレと同じで弟っぽいというか。

「でだ。わざわざオマエの領域に入り込んで来たってことは、要件はたった一つしかない。わかるな」

「つまりは——」

「まあその前に」

一旦言葉を切り、恭しく頭を下げ——

「お初にお目にかかります、犬神様。オレは稲上馨。異形の血族、その末裔にして——穂織の住まう地に潜む呑神の魔人でございます」

オレは、改めて己の名を名乗った。

「……皮肉のつもりか」

「へ？ あ、いえ、純粹に敬意を払わねばというだけですが……？」

「そうか」

皮肉って……まさか本当に、か。

だとしてもオレのやることは変わらない。

「さて、教えてもらおうか。オレの……呑神の誕生由縁を」

「待て。何故私が知っているかわかったのだ。何も言っていないぞ」

「ご先祖様たちは穂織に長いこといる中で、突然朝武と常陸が宿痾の原因だと叫ぶようになってな。そんな記録が残されてた」

「……ふむ」

この反応、オレたちと穂織の成り立ちは切っても切れぬ因果で結ばれているのは間違いないと見た。

犬神は歯切れが悪そうにしばらく黙った後、何かをもう一度確認するような深呼吸をした後、オレと本気で向き合った。

そして。

「語る前に、一つだけ約束してもらおう」

「何だ」

ヤツは——その覚悟をオレに示した。

「この真実を知り、そしてお前が刃を向け、殺すならば私だけにしろ。代わりに、この地と住まう者たちにだけは絶対に手を出すな」

それは……

つまりそういうこと、なのだが……

オレの呼吸である愛^{殺す}すということをするな、ということだ。それをするな、と言われてしまえば死ねと言われているようなものだ。返答に困ってしまう。

「……確実に破らざるを得なくなる」

「わかっている」

「なら何故」

「お前はあの小娘も、そして土地も愛す^{殺す}だろう。それに関して私は何も言えない。だが、憎しみに駆られて殺すのであれば――」
「なら約束する。絶対に真実を知って憎み殺すのであれば、オマエだけだ」

「……感謝する」

なあんだ、そんなことか。

愛す^{殺す}のとは別口の話だったのか。それなら出来る。何があっても既にそう決めたから。

「それでまず、なんでオマエとオレらに関わりがあるのか教えてくれ」
「何処から話したのか……正直なところ、今のままでは説得力に欠けるのだ。何せ姉君の行動により魔人たる由縁が生まれたのだからな。何故姉君がそうしたか、等の話も含めるとお前が信じれるかどうか……」

ただ何やら言い渋る理由があるようで、それがオレが信じられない可能性を秘めているという。しかし生き証人たる大神の言うことだ。間違いない。それに、自分の命を懸けてるんだ。嘘を言う理由も無いだろう。

「我が身可愛さに嘘を言うようなヤツじゃない。オマエはそういう性格なんだろう？ 約束もある。信じるさ」

「よいのか」

「はっ、良いも悪いかあるか。言えよ」

「では単刀直入に行くぞ。姉君が行った黄泉下りで、あの一族は生まれた。そしてそれと同時にお前たちも生まれたのだ」

……理解が追いつかなかった。

てつきりもつとこう、具体的な話とか何々が原因で――とかで来ると思っていたのだが、いやまさかこんな答えだとは。

それに、なんとというか……嘘ではないのはわかるのだが、何故？ という疑問しか出てこない。

説得力が無い。これは言い渋るのにも納得だ。意味がわからん。というか、魔人の由縁に一見何の関係も無いようにすら思える。

「待て。何故そうなる？ 因果関係がわからん。どうして叢雲のやつ

た黄泉降りがご先祖様の魔人たる理由なんだよ」

穂織と京都がどれだけ離れてるってんだ。それに、そもそも何の関係も無いだろう。朝武と稲上は。

訳がわからないので説明を要求する。

そして犬神は――

「……黄泉とは織細。些細か事で子供を？ぎ止める鎖と杭は外れかねない。お前の先祖は、姉君の自己犠牲の裏側で黄泉から鎖と杭を宿したまま生まれたのだ」

……まあ要するに。

オレたちはとぼつちりを受けていた。それも、大層くだらない理由で。その結果が誰にも見向きされることなく忘れ去られ、生に死を、死に生を見出す矛盾螺旋の宿痾に呻きながら”生きて”いた。

――つまり、オレは。

「……オレは……オレを地獄に叩き落としかつた奴らにいいようにこき使われてたってことか」

「……そうだ」

叢雲によつて朝武が生まれた時、同時にそのとぼつちりを受けたのがオレたちイナガミというわけだ。素晴らしいな、オレは死を選ばせるだけの由縁を作った連中の子孫や、その庇護下にある連中に生きろだなんだ言われて従つてたつてののか。笑わせるぜ。

しかもその中で自分から恩を仇で返した奴の末裔に惚れただつて？　なんだそりや、冗談にも程がある。

ああ、まったく――これは傑作だ。

「……」
だからなんだ？

因果なもんだと、それだけだ。

態度も変える必要は無い。何でもないように斬つて捨てた。

別にそれが何か、というわけでもあるまい。根本はそうだったとしても――今更それを知つて、言われたところでオレはただひたすらに生きるだけだ。

それに、この数奇な生まれにオレは歓喜している。

だって、好きになった女の子とこんな運命的な関係だったなんて、惚れられた男として喜ぶしかないじゃないか。茉莉子とオレが陰陽の関係で、いやまったく……クククツ、乙女座でよかった。センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない。

「は、あ——!?!」

けど、そんなのまったく考えてなかったようで、とても間抜けな顔を見せてくださった。

「いや、だから何よってハナシ。オレは確かにこんな運命にした神がいるなら死ねばいい、この手でブチ殺してやりたいと思ってたさ。けど片方はもう死んでるし、オマエは恩を仇で返されてるし……本音を言えばそもそも別にどうでもいい」

報いであれば十二分に受けただろう。それも最悪の形で。だからオレがどうこう、ということはない。する必要も無い。

それにオレにとってみれば、コイツらがいなければ始まりもしなかった。それを今この場で殺せと言われても……オレにはそうする理由なんてどこにも無い。

「……と、いうよりもだ。オマエらがいないと茉莉子も芳乃ちゃんもない。もちろんオレもない。確かに憎む気持ちはあるよ。よくもまあノコノコと顔を出した挙句にオレの惚れた女に取り憑きやがってぶつ殺すぞとかさ」

でも、色々と思うところがまったく無いと言えば、それは嘘になる。

オレとて人の子だ。苦しみ呻いた者たちを知るが故に、この傲岸不遜で後片付けもしなかったコイツらへの憎しみは当然ある。恨みだつてある。

オマエなんでそんな肝心な事黙ってたんだよ忘れてたとか都合良いこと言うなよ、とかとか。

オマエの姉貴の不始末がオレのレールを壊したのならば茉莉子から引き摺り出して虚絶転生に閉じ込めて望まぬ永遠をくれてやろうかとかとか。

だが——

「けど、色々な事を考えても……憎悪よりも殺意よりも、オレには感謝

の方が強い。だってこの数奇な運命に導かれなければ、オレはこうして——好きな女の子と一緒にいられなかったんだから……」

——ただ、今こうして呪いは消えて、正しい形で神様を祀れそうで、そして色々と大変ではあるけれど、確かに幸せではある。苦しむことしかできなかつた穂織の存在が、こうして幸せを噛みしめることができている。オレはやや例外的だが、それに本家は既に魔人足り得なくなっている。この地に住まうオレだけが、言ってしまうえば最後の魔人だ。

全てに意味があつたと。傷だらけでも間違いだらけでも、誰かの希望も絶望も、歓びも嘆きも、決して無駄ではなかったんだと。確かに幸福とは呼べない過去だったけれど、それでも不幸ではなかった。オレはそう信じている。確かに無意味だったものはあるかもしれない、でも無価値だったものなんか決してないと信じているから。

……それに恋だって、成就したし。

「——あつべ、恥ずかしくなってきた……ちよいタンマ」

「何故だ？」

「クツセエ事言つたからだよ……」

「恥ずかしがることか？」

「そういうものなの」

「……そんなことだから睦言にも小言を言われる」

「うるせえな！」

余計なことを言いおつてからに……！

やかましいんだよっ。

羞恥心とか色々を収めるためにコホンと一つ咳払い。改めて向き合つて、オレは語る。

「——とにかくだ。諸々の理由もある。アンタに誓おう。必ずや魔人の……伊奈神奏の息の根を止めると」

「出来るのか」

「オレを何だと思ってる。殺人に関する才覚は一族の中でもそれなりの方だぞ。”殺す”ことに関しては、奏や京香より優れている」

そもそも勝ち負けの土台においては、オレは将臣にすら勝てんの

だ。というかまだ廉が剣道を辞める前に少し打ち合いをしたことがあるのだが、まあ、負けた。

ルールの中で勝つというのは、存外に難しい。ましてや、そのルールを守る為に力を抑えなければならぬ魔人の身では。

だが殺し合いの場であれば、オレの右に出る者はそうそういないだろう。生まれつきの殺人適性者というのは、そういうものだ。”殺す”だけなら、今現在穂織に存在する何よりも誰よりも優れている。

そしてオレの半分は、彼女たちのものだ。久々に力として、この殺人を為せる。オレは被る者でもなければ、守る者でもない。殺す者なのだから。

「まあ、そういうことだ。少なくともヤツだけはオレの手で殺す。オマエも理解してるだろうから言うけど、オレでなきや奏は殺せない。そして奏を殺せば、オレは真実魔人として回帰する。どの道魔人——イナガミとの決着は、果たされねばならない」

だが、オレがヤツを殺すということは、オレが最後の蓋を外すことに他ならない。しかしその蓋がすべからくを殺そうとするのだから殺すしかない。そしてそうしたらオレもまたそうなる——

「つまり、穂織の未来に立ち塞がる最後の敵はオレだ。ならその時は遠慮無く愛殺させてさせてもらおう。この地に生きる者が、オレに生きると言ったのでな」

友としては、確かに信じている。

だがオレに生きろと言ってくれた者たちの為にも、オレは”生き”なきやならない。

「千年の恋花が、たかが十年の愛情に喰い尽くされるのであれば、所詮そこまでの話だ。そうでないというのであれば、怨嗟の断末魔たるオレ程度、軽く超えてもらわなきやならん」

呪まじないと呪のろいが混在する千年の恋鎖れんさ。その中から生まれた神の愛を受けた人々と、殺しの宿痾を持つ魔人。それらにも意味があった、価値があったとするのならば、ヤツらはオレを超えられて当然だ。

「今までの幸福、かつての絶望、これまでの贖罪……千年だ。もう休暇は充分だろうか？ ——白山豹男神」

もはやこの神の真の名すらわかってしまうほどに外れかけた己を
実感しながら、だが被害者としてそれなりのケジメはつけさせてもら
うと宣言した。

もしそうでないというのであれば、証明できないというのであれ
ば、オレがすべからなく、まとめて愛^殺してやろう。

この狂い咲く十年の愛を以ってして、あの咲き誇る千年の恋を、喰
らい尽くしてやる。

それがオレなりの、伊奈神としての復讐だ。

「……要件はそれだけだ」

「そうか。そうだ、一つ言い忘れていたのだが」

「あ？」

「すまなかつた……」

「……今更過ぎるんだよ」

誰もが加害者で、誰もが被害者だった。

この件は、そこで終わりだ。

だが曰く、「恋は現実の前に折れ、現実^は愛の前に歪み、愛は恋の前
では無力となる」という。

既に恋は現実^に折れたが、しかし愛は現実^を歪ませた。ならば、オ
レという異形の愛を無力化するには千年の恋しかあるまい。この三
竦みが正しいのならば。

——待っている奏。

オレがオマエを殺してやる。

戻り行く意識の中、もう自分が後戻り出来ない程に魔人になりつつ
——正しい形になりつつあるのを実感した。

魔人君臨

「……朝……？」

ムクリと身体を起こし、伸びを一つ。

殺風景な自室は何も変わらないのだが、オレにとっては気分が良い目覚めだった。

とても頭がスッキリしている。

——ああ、本当にオレはそうなってしまったのだ。

「……」

魔人。

生の中に死を、死の中に生を見出す矛盾螺旋の使徒。

オレがそれを自覚した時から刻々と進行していたが、遂に奏が最後の枷となった。

「茉莉」

彼女の名を呼び、心中に息づく衝動が黒い炎となって胸を焦がすのを実感する。この手で手折りたい、だが永遠に愛していたい。

矛盾するこの想いこそ、まだ人と魔人の狭間にいる証明。しかしオレはこれからそれを捨てなければならぬ。

——最早迷いは無い。

為すべきことを、為すのだ。

オレにしては珍しく早起きだったと察したのは、着替えて家を出てからだだった。普段より人の数も少なければ、開店の支度がまだまだ始まったばかりだったり。とかく、察するに芳乃ちゃん達が出て行くのと同じくらいか。

ので、少しいらん気を回して待つことにした。地理的な関係上、オレの方が待ち合わせ場所……ああ、主に茉莉の帰りに顔を出すときくらいにしか使ってないけど……に着くのが早い。

そんな訳で婚約者様御一行とオレの可愛くて愛おしくてたまらない彼女を待っていたのだが——

「あれ、キミだけ？　なんかあったの、芳乃ちゃん」

「おはよう、馨さん。今日は少し、1人になりたくて」

「ふーん……？」

珍しく芳乃ちゃん一人だけ。しかもオレを見るなり笑顔を“作った”。声の調子だった普段と比べれば少し暗い。ちようど祟りが発生してた頃みたいな感じだ。

つまり何かあったと見るのが妥当なわけで。更にそれが将臣や菓子と距離を置いて一人になりたいとくれば、彼女自身に何かがあったのか。

「どしたの、微妙な顔してさ」

「あ、いや……その……」

ちよつとカマをかけてみたら、相変わらず嘘が言えない人の良さを見せてくれる。しかしその瞳に何か、罪悪感めいたものが垣間見えるのは何故だろうか。

まあ最近のネタと言えばアレだし、考えてみれば奏は物凄く近くにいたのだ。あの性悪が何かをしない筈もない。そして知らない筈がない。地頭だけで辿り着いていても不思議ではない。

一番面白そうなのは……確かに芳乃ちゃんだ。

彼女は真面目だから、なんというか……唆し甲斐があると言えはいか。オレも腐っても魔人だ。何とは無しに想像はつく。

「知ったのか、知らされたのか？ 性悪のやることだ、なんとなく予想がつく。そして色々考えたけど……ってところかな」

どうせ誰もいないのだしと軽く聞いてみれば、とても複雑そうに俯いて、彼女は小さく頷いた。

「……そうよ」

「そっか。でもさ、芳乃ちゃん。この話つてのはあんま大した話じゃないんだ」

そう言うと、まるで信じられないものを見るかのようにオレに視線を投げてくる。そんなに意外かね？ とも思うが、そりや意外か。彼女から見れば、実際オレが死ぬ由縁は彼女たちにあったのだから。

——とは言えども。

「誰もが被害者で、誰もが加害者だった。オレは好きな女の子と同じ

生まれで、対になる存在だった。それだけさ」

「事实はほんの、これだけのこと。」

オレたちの世代が、もつと言えど今を生きる人々にすれば何の関係の無いこと。確かに知らなければならぬだろうが、だからと言って何かをする必要な無い。

「気を病む必要は無い。美しい悲愛の裏側で、ありふれた悲劇を誰かが背負っただけのこと。あるいは、生まれるはずのなかった者が、そのお零れに預かった結果、対価を払っただけのこと。よくある話だ。——そう、そこで終わりなんだよ」

犬神に対してああは言ったが、実のところオレたちが勝手にお零れに預かって生まれただけで、宿痾も正当な対価であるとは認識している。だが納得が行くかと言えば、少し違う。けれど気にするほどでもない。心とは不思議なものだ。

理解している。わかっている。だが思うものがある。しかしさして牙を剥くに値することは無く流せてしまう。なんて面倒な話。

ああ、まったく——厄介な感情だ。

「キミらがいないけりやオレらはいない。だから気にするな。むしろキミらからすれば、オレたちは本来なら無かったはずの余計なものだろう。だから憎まれるのが当然で、オレらが憎むのは筋違いだ」

彼女らは何も知らなかった訳だし、今更出てきてオレたちが被害者面をしているのも事実だ。だからオレが彼女を憎んだりする、というのは根本的に間違っている。

強いて憎めるとすれば、それは犬神くらいだろうが、彼を憎むのもまた筋違い。

——結局、誰も何も悪くなくて、間が悪かったというだけに過ぎない。この話は全て、そこに帰結する。もはやどうしようもない以上、このどうしようもない現実を受け入れて次をどうするかを考えるのだ。

過去ばかり見ているダメなんだから。

「恨むとか憎むとか、そういう問題じゃないもん……」

珍しく子供っぽい口調。そしてちよつと拗ねた顔。彼女のこんな

様子なんて、ここ数年見たことも聞いたこともなかった。

将臣と茉莉には悪いが、かなり可愛かった。

いや場違いな感想だが。

では、オレも素直に言おう。

「じゃあ、言葉を変えよう。生まれてくれて、ありがとう。おかげでオレたちはこうして出会えた」

——嘘偽り無い本音。

魔人だろうと人間だろうと、オレがオレである限り、これは永遠に変わることない感謝だ。

オレたちはぐちゃぐちゃに絡み合った雁字搦めの鎖なんかじゃない。未来を織り成す一本の糸で、それらが交差して彩ったタペストリーだ。

ただどうも、彼女のには何か腑に落ちないのか、何とも言えない雰囲気だ。芳乃ちゃんの落とし所と、オレの落とし所は当然違う。だからどうしたらいいのかなんてわからない。

「納得いかないかい？」

なら素直に聞けばいい。それだけの話だ。

「まだ、少しだけ」

「ならオレの気持ちも。——悩まないで、芳乃ちゃん。キミとオレは友達だ。それに、直接何かをされたわけでもないのに、友達を嫌いになるなんて難しいよ」

理由も無く友人を憎めるか？ 嫌えるか？ 例え受け入れ難い要素があつたとしても、それだけで蛇蝎の如く嫌えるか？

——無理だ。何事も積み重ねなのだから。

良し悪し双方積み重なって初めて憎んだり嫌ったり、愛したり好きになつたりできる。

ならば、悪しが積み重なっていないどころかそもそも無い状況で、何故友達を憎めるのか。

オレにそんなことはできない。

オレにとつても、芳乃ちゃんは大切な人だから。

「それも、そうよね……私、なんでこんなことに気づかなかつたんだ

ろ」

「見落としがちになるもんさ。特に、色々複雑な場合は。オレなんて特にそうだろ」

「笑えない冗談はやめてよっ」

「あはは、ごめん」

憑き物が落ちた、と言うわけではないが、何か一つ納得がいった様な彼女を見てホッとする。ついでに見落としがちな件でジョークを飛ばしてみたが、割と本気の声で避難されたので謝しておく。

……菜子への好意についてのつもりだったんだけどなあ……

「さて、これくらいにしないと将臣に妬かれちまいそうだからやめておこう」

まあ、人様の彼女と人様の彼氏が二人だけで話し合うというのは側から見たらまるで逢瀬みたいだし……と考えるオレの頭がスケベなだけか。少なくとも芳乃ちゃんはまったくそうは思ってたさそうだし、「別にこれくらいで妬く人じゃないけど……」って言ってるし。

ただ彼女としてはこれが気がかりだったのだろう。やけに心配そうに言った。

「ねえ、菜子には？」

「伝える。お互いに答えは変わらないだろうけど」

アイツに伝えるのがオレなのか、それとも犬神なのかは話し合って決めるとしよう。

菜子の言う通り、オレと彼女が殺し殺されの相思相愛である事実は何の変わりもない。ただそこに、ちよつとだけ妙ちくりんな話が加わるだけだ。

最初こそが、オレたちにとって大きな壁だったのだから。

「それでもちろん、将臣にもだ。ヤツとオレは最後、戦わなければならぬ。オレが魔人である以上は」

「必ず帰ってくるわよね？」

「連れ戻す将臣を信じなよ」

「……帰ってくる気、無いの？」

「あ、それ？ まあ後で。大事な話だし、みんながいるところでさ」

——帰って来る気はあるが……オレ一人では帰れない。
生きろと言われたとき、オレはどう生きればいいのか。

それを決める、大事な事だから、みんなに知っていてもらいたい。
オレがどうしてそうなって、何故そうするのかを。

「……って待って。なんで馨さんはそれ知ってるの?」

「ん? 昨日、直接コマちゃんと話したのさ」

「は? え?」

「魔人である以前に、オレは虚絶に選ばれた存在だ。だからそつちも
できる」

へへんすごいだろーと胸を張ってみると、帰ってきたのは微妙な
視線。胸が痛くなった。

「芳乃……と、馨? どうしたお前。やけに早いな」

「ま、色々とね。な、茉莉」

「いやワタシ知らないよ」

「馨、お主そういうところだぞ」

「何がよ」

今日もワイワイ……だが。

さて、そろそろ記憶も終盤だ。仕掛けて来るならここらだろう。

受けて立つぞ——同族よ。

そして、何事も無く昼休みを迎えた。

今日も変わらず夢を見たそうなので、放課後にはその報告を——と
将臣とレナは言っていた。

……二人だけの時間。茉莉の事だけを考えられる時間。

今日は茉莉から声をかけてきた。

「ね」

「ん」

「……犬神様から、少しだけ聞いた。話したんだってね」

「ああ、そっか」

仔細は後で、だが。

彼女は犬神と昨日話したということ、本人から聞いたようだ。

「オレから聞く？ それとも彼から？」

「ちよつと考えさせて。別にどつちでも納得するし、主観を消して言ってくれるのはわかってる。でも少しだけ怖いのに」

「怖い、か」

「うん。なんて言えばいいのかな、ワタシが自分の血の業を知った時も、受け入れるまで少しかかったから、それと同じような気がして……」

少しだけ視線を落とし、彼女は困ったような声でそう言った。

なら、オレはこう言うべきだろう。

「待つよ。オレは菜子を待つ。今まで散々待たせちゃったから、今度はオレの番だ」

「ありがと」

「気にしないで」

微笑む彼女は、相変わらず可愛らしい。あんまりにも愛おしくて、綺麗で、可愛くて、思わず手を首に伸ばしてしまった。

指先が彼女の首元に触れ、そのまま上げて中心で止まる。困ったような、嬉しいような、両者が複雑に混在する視線と笑顔が向けられて——ストンと身体を預けてきた。

「なんだよ」

「なんでも」

……お預けか。酷いな。

ああいや、酷くない。それでいい。

早く彼女を愛さなければならぬのだし、早く彼女を愛さなければ失礼だろう。何を考えている……？ オレはまだ道を定めていないというに。それに彼女を愛してしまえば永く愛せないだろう。

ぐちやぐちやになる思考。

異なる愛が狂い哭いて止まらない。

ああ、まったく——吐き気がする。

菜子の背に手を回しても、満たされる自分と餓える自分があるのがよくわかってしまう。彼女はそれを知っているのか、知らないのか、満足げに目を細めている。

茉莉の頭を撫でながら、どっちつかずの宙ぶらりんでは、こんなにも苦しいものかと心中では苦しく思う。

早くオレの生きるべき方向を定めたいものだ。もともと、その為には引っ張ってもらわねばならないのだが。

「茉莉」

「なあに」

「……オレはオマエを愛してる」

「……うん」

「けど、その愛はどっちだと思う」

「どっちでも——ワタシは応えるよ」

「ありがとう」

そしてオレたちは、強く抱き締めあつた。

——遂に、放課後を迎えた。

恋物語も最終盤ともなれば、話すことも少なくなってくるだろう。しかしさっさと行くに限る。オレの大事な話もあるのだ。

そうして全員で向かつて、本殿に集まる。

今日に限って安晴さんは何やら用事があるようで、この報告は後でということだ。

彼も知る権利と義務があるのだが、まあ仕方あるまい。それはそれ、これはこれだ。

「ご主人、レナ。頼むぞ」

「ああ、それじゃあレナさん」

「はい、マサオミ」

と、二人が何処から話すかを少し考えた途端。

——……では神の愛、その終焉を明かし語ろうか——
……低く、恐ろしい声だけが、空間に響いた。

キョロキョロと辺りを見回しても、その声の主はいないし気配も何も感じない。声だけが響いているのだ。

——黄泉に繋がれた愛しい相手の子供をこの世へと送り出す為、冥界に降りて死神の怒りを買ひ、叢雲は死んだ。そして玉石となつて弟たるに受け継がれ、彼は生まれた子……後の朝武の守り神となつた。叢雲は安産の神としてこの神社で祀られ続けた——

その内容はおおよそ犬神より聞いた通り。

だがしかし、この声は何故それを知っているのか、そしてこの声の主は誰なのか。オレたちには分からず、一箇所にとまつて辺りを警戒するしかできない。

レナを守るような形になるのは、自然の流れだ。

茉莉もクナイを抜いて構えているものの、やはり何も無い。

——その裏側で、否神は誕生した。叢雲の介入一つで連鎖的に子が現世へ出てくるほどには黄泉は繊細だからな。そうだ、馨が自死を選ぶほどの宿痾はお前たちが生み出した。そして馨が魔人となつたのも、お前たちの所為だ——

「何を……!?! オマエ、ふざけるな……!! 彼女たちは何も関係無いだろう!」

叫んだところで何が帰つて来るわけでもなし。

淡々とその声は続ける。

——何処ぞの大馬鹿者が犬畜生の首を斬り落として亡骸を砕いてから、巫女姫は異様に短い生死の輪廻を積み重ねた。結果、稲上の血に潜んでいた黄泉の杭と鎖が目覚め、矛盾螺旋の宿痾が宿つた。喜べよ——

嘘だと言うには、それはあまりにも真実味を帯びていた。杭と鎖を宿すオレたちの存在が、死を求めるのであれば、言わば野生に戻つたようなものであり……だが他のみんなにとってみれば、単なる戯言に映つたようだ。

そしてこの声は何者なのか、薄々と察し始める。

——……そして、穂織は滅びる。滅ぶべくしてな——
穂織を滅ぼす者。

滅ぶべくして滅ぶというのはたった一人しかいない。

——万の咲き誇る千年恋花は、今宵すべからく死に絶える……この

地に根を下ろした桜花まじんに食い潰されてな——

「……奏……!」

我が先祖、我が同族、我が先達。

——魔人、伊奈神奏。

京香の姉であり、彼女の全てを奪った怪物。

そして、オレと対極に位置する魔人。

「カナエ……って、キョーカのお姉さんでありますか!」

「そうだよ、だから動くな! 将臣、叢雨丸を……っ!」

レナの驚愕に答えつつ、指示を出そうとした途端、身体が倒れ込んだ。

「馨!? おい馨!! どうした!」

「な……」

焦ったような将臣になんでもない、とも続けられない。

身体の奥が、魂の中から、疼いている。叫んでいる。狂い哭いている。衝動の中の衝動。

もはや意識を保ってられない。崩れ行く自分を自覚しながら、オレは奏が何処にいたのかをやつと理解した。

奴は——すぐ、近くに……



「カオル!」

「馨さん!」

奏の声が響く中、突然に馨が倒れた。

何が起きたのかもわからない。突然に宿敵、怨敵とされる者の声が響いて、過去を暴き立てて、そして馨が倒れる。どうという因果でそうなったのかは、誰にもわからない。

——いち早く冷静さを取り戻したのは茉子だった。倒れた馨の脈と様子を確認し、それが単なる気絶であると察する。

「皆さん落ち着いて、馨くんはただ気絶しただけです」

「ならばご主人! 叢雨丸を!」

「ああ！」

——おいおい、勝てもしない癖に挑むつもりか。この私に。舐められたものだな、まったく……——

その言葉が響いた途端、将臣の足が止まった。そして脳裏には、魔人同士の殺し合いが再生される。

ただの人間である自分が、あれに勝てるのか？ 殺せるのか？ ——無理だ。彼我の戦力差というものではない。将臣自身にも分かっている。

自分などものの数秒も持たずに死ぬ。自分の上位互換と呼べるような相手と真っ向からやり合って勝てるか？ 結果は火を見るより明らかだ。

——死——

彼ら魔人の生まれ故郷に連れ去られる。

いくら相性が良かったとしても、根本的に研鑽に素質、経験……ありとあらゆるものが不足している。届かない。それは生まれた時代の違い、環境の違い、そして刃を振るい他者の生命を喰らうことへの思い込みの違い。

絶対的な事実として、有地将臣では魔人たちを可能性は僅かでも倒せはするだろうが、決して殺せない。

「……くっ、くそ……」

——賢明な判断だ。私とて無益な殺生は好まん——

苦虫を噛み潰したような表情で吐き捨てれば、楽しげにその選択を褒められる。

吐き気がする。

「ご主人、何故止まる！」

「……ムラサメちゃん、魔人ってのはなんでもありなんだよ……」

知らないのだからムラサメの態度は当たり前だが、将臣の心中にあるのはある種の諦めだった。

自分では何の役にも立たない。恐らく馨か京香でなければ、この怪物を討ち破れない。自分が対処できるとしたら、あくまでも馨か崇り神だけ。

「何故、ですか。何故あなたはこうしてっ」

奏と浅からぬ因縁のある芳乃には、この状況が普通に考えればさほど面白くないことに気が付いた。

真実を明かすのであれば、諸々を告げた後の方が良かったはずだ。彼女は「助けた者が実は被害者だった」という状況を組み上げて腹を満たすような性格なのに、何故この場ではこんな……言ってしまうえば短絡的な行動に出たのか。

だが。

——いやいや大した話ではない。気付いただけだ、もつと面白いことにな——

そう、楽しげに告げて。

「見知った顔が殺し合うのを直に見れば、満たされそうなものなのだな」

レナであつてレナでない声が、彼女たちの後ろ側から響いた。

馬鹿など振り向けば、楽しげに、愉しげに笑うレナがいる。腹を抱えて笑つて、嗤つて。

いや——レナの肉体に憑依している、奏が……!!

「どうした？ ククツ、この肉体を使っていることが不思議か」

今度は芳乃を庇う形に将臣と茉莉が立ち塞がり、奏を睨みつける。

そんな様子を楽しげに、満たされるようにジロリと眺めて、まずパチパチと拍手をした。そうして大仰な身振り手振りで、彼らに話しかける。

「こうして直接顔を合わせられて嬉しいよ。くだらんお家騒動の生贄に、巻き込まれただけの可哀想な男、そして罪人の末裔に誰かに助けてもらわねば生きていけない脆弱な一族が、一堂に会するとはな」

「貴様……っ！」

「馨はお前たちに生まれてきてくれてありがとう、と思つているようだが、実は私も同じだね。感謝するよ本当に。おかげでこうして、まだまだ私は生きていられる」

皮肉たつぷりの感謝。この場にいる誰もが、攻撃という選択を選ばなかったのは奇跡に等しい。倒れた馨の存在と、人質に等しいレナの

存在があつたからだろうか。

それとも、迂闊な行動は死に繋がると知っていたからか。

「リヒテナウアーはとても良い隠れ蓑になってくれたよ。いつぞや、転生に用があるとされた時は流石に焦ったがな」

やれやれと肩を竦めながら、しかしそれさえも楽しげに語り、そして遂に奏はジロリと視線を倒れた馨へと向けた。

「……まさか、私が出てくるだけで共鳴して倒れるとはな。杭と鎖の片割れが、勝手に外に飛び出せばそうもなろうか。そういうのは困る。殺すならば殺し合いの末に殺すものを」

「馨くんは、何をしたんですか——!!」

刹那、茉莉が跳んだ。

周りがダメだとも言えない程の速度で背後を取る。

取り憑いているのならは無力化すればいい。祓えばすぐに終わる。事実そうである。そしてこの場にいる誰よりも戦力として優れていた。

何でもあり？ ならばそれより早く動けばいい。何もできなければ木偶の坊と何も変わらないのだから。

何処かの誰かに毒されたのか、そうした選択を取れるようになっていた。

「ほお、来るか」

関心したような一言。

迎撃の体勢すら取っていない余裕の表情。

「だが所詮——」

背後に回った茉莉に、脚を引つ掛けて体勢を崩させる。神速で放たれる揺らぎを生み出すための小技。

あつ、と声を漏らす間も無く、彼女がちょうど床と平行になった時、奏はその頭を掴んで床へと叩き付けた。

「茉莉!?!」

「常陸さん!?!」

「幼児の手遊びに過ぎんよ。だからこのような小技一つで意識を落とされる。ああ安心しろ、まだ馨に縛られているのでな。傷も付かんし

後遺症も残らぬ程度の威力だ。まあ、気絶はしているが」

瞬く間に茉莉を無力化した奏は、少し身体を動かして「ふむ」と呟き、満足そうに手を握ったり開いたりしている。

現状の最強戦力二名が、何も出来ずに無力化された——残った将臣と芳乃とムラサメは、余計に動けなくなっていた。

「……さて」

そしてその視線が遂に三人へと向いた。

ムラサメが目眩しが出来るようにと手に神力を集中させる。将臣はすぐに抱えてでも逃げられるように芳乃の腕を握る。

そんな様子を察したのか、奏は絶対的な差を見せつけるように——「無駄な事はよせ。私の方が疾い。お前たちなど瞬き一つする間も無く無力化できる。だがそれでは面白くない」

尋常ならざる速度を以って、彼らの背後を取りそう告げた。

「……っ！」

「なんだ綾。そんなに睨みつけて。お前は我々と似たようなものだろう？ 何故そこまでこの地と朝武一族に肩入れをする」

さらりとムラサメの本名を呼ぶ奏だが、ムラサメの逆鱗を踏む形となり、彼女は怒りを込めて叫んだ。

「お主がその名で、吾輩を呼ぶな！」

「だからムラサメで呼べと？ おい、お前は自分の名前をなんだと思っている。親から頂戴した大切な名前だろう。死人だからその名を名乗るに相応しくない？ 愚かな。お前はお前だ。どれほど名を変えようとも、それが偽りの名に過ぎず、真名まなが綾であることには変わりない。適当な言葉で誤魔化すな」

「親殺しがそれを言うのかよ！」

「その何が悪い。すべて私の餌にすぎんよ」

ムラサメの心の傷に塩を塗って、樂しげに嗤っているのが気に食わない。だから声を上げたというのに、完全に人から外れた倫理観で応戦してくる。

——魔人。完全なる魔人とは、ここまでのものか。だから馨は死を選んだのか、ここまで狂ってしまう前に……

「……しかし、獲物を前に舌舐めずりしか出来んのはつまらんなア……」

いつの間に擦り取ったやら、奏はクナイを自分の首に当てて叫んだ。

「出てこい京香！ 早く来ないとこいつが死ぬぞ！」

すると突如として本殿の床、三人を守るような形で一本の日本刀が飛来して突き刺さる。

そして黒い粒子が人の形を形作り——芦花が、否、京香が現れた。全身から凄まじい殺意と憎悪を滾らせて。

「——姉上！」

「京香……！」

異なる肉体で、同じように複雑で読み解けない感情が混ざり合った声が響く。

三人を一瞥すると、京香は低い声で呟く。

「あの二人を頼む。後は私が」

倒れた茉莉と馨に駆け寄り、抱える形で出口付近まで向かう三人を見送ると、楽しげに顔を歪めた奏から姉妹の再会は始まった。

「久しぶりだな、我が妹よ。全てはお前の蒔いた種。あの場で一族郎党を皆殺しにしないからこうなったのだぞ」

「論戦をする気なんて無い。姉上、今度こそ消えてもらおう。黄泉比良坂に帰るがいい」

「はっ、最高だな。だが生まれ故郷に帰るのはお前の方だ」

共に黒——即ち呪力を刀の形に変えて握り、全く同じ刀を横に流した無形の構えを取る。

千年前の死闘をなぞるように。

「しかし、お前と刃を合わせるのは何度目だ？」

「さあな。子供の頃からだ。数えちゃいない」

「ふん、それもそうか。——ならば失望させるなよ。後ろについて回った子犬とは違うということとを、証明してもらわねばな」

その声をキツカケに、両者が刀を振りかぶり——漆黒の呪刀きぼが鏗迫り合って睨み合う。癖も、欠点も、長所も、何もかも知り尽くした相

手との二度目の死闘。

肉親同士の殺し合いが原因となって地を蝕む呪いが生まれた土地で、彼らの裏側に相当する存在たちが再び殺し合う。その因果な事実歪める顔は、果たして。

鏢迫り合う刃を滑らせて、入れ替わるように動き、そして弾き合う。準備運動は終わった。後は……

「これが最後だ、姉上」

「いいや、終わらんさ。私とお前、どちらが勝とうが辿り着く結末は同じだ」

駆ける。

この戦いを制して――

「だが姉は私だ……妹には負けん！」

「ほざけ、そうそう好きにさせるかよ！」

”生きる” 為に。

切り結び合う両者。遂に千年越しの、敗者復活戦が幕開けた……

伊奈神奏

——かつて討ち倒した者と、かつて討ち倒された者。

どれ程の年月を重ねようとも、その構図は変わらない。

肉親同士の争いは、その結末すら過去をなぞった。

幾千、幾万……数えるのすら億劫になるほどの剣戟。彼女らの勝敗は、三人が去った後、ほんのしばらくの間で決まろうとしていた。

時間にしておよそ数十分にも満たない僅かな時間だ。たったそれだけの時間で、片方が膝を折った。

「……はっ、はははは……くっ、は——……」

制服に染み付く流血。床に広がる血の斑点。

神聖であるはずの本殿は、いとも容易く凄惨な戦いの場に変わり果てていた。

柔肌は斬り付けられ、膝を折り、脂汗を流して、レナに潜む奏は苦笑いを続ける。

対する芦花に潜む京香は、傷一つ無く涼しい顔でその呪刀を突き付ける。

「は——……は——……やれやれ……お前、いくら私だからと言って、リヒテナウアーの……肉体、だぞ……？　諸共に殺す気、か……？　くっ、ククク……は——……っ」

レナの肉体が奏の無茶苦茶な動きに対応できる筈がない。今まで潜むことを優先していたのだから、知識では把握していても実戦で動かす感覚は一切無い。ましてや未だ馨に縛られたまま。十全とは程遠く、更に言えばその状況で芦花の肉体の能力を完全に把握して加減無しで動ける京香に勝てるわけもなし。

必然的に——彼女は今、命の危機に瀕していた。

「黙れ。あんたはここで死ぬ」

響く声は冷たく、憎悪と殺意が渦巻いて止まらない。千年の怨恨、その刃は無限の螺旋を描いていたのだから当然だ。何度でも殺したい相手なのだから。

——詰みだ。様々な意味において、二人は詰んでいた。

「……死ぬ？ 私が？ ……死んだ者を殺して、それを死と言うか。しかしお前……リヒテナウアーを殺すのか……？ やめておけよ……馨の、友人だぞ……」

それは死を恐れる心か、それともただの親切心か、あるいは縛られるが故の心にも無い言葉か。もつともどれであつても何も変わらない。それは当人も理解しているし、言葉で解決できる段階はとうに過ぎた。

「——知るか。死ぬ。姉上」

悪鬼羅刹の貌を見せ、魔人としての性質が最悪な方向に向かわせている。究極的な死を与えるためにひたすらに暴走している。

「……馬庭芦花とて、人殺しはしたくあるまい……？ それでいいのか……おい」

とはいえ、奏のやることも京香のやることも、何も変わらない。互いに互いのやるべきことをやり続けるだけ。やらねばならないから、やるだけ。

睨み合う二者は、互いを無視して叫び合う。

「知ったことか。私に殺されるよ姉様。私から全てを奪ったお前は死ね。静寂を乱した姉様は、死ぬべきなんだ」

「リヒテナウアー……！ お前はここで死ぬのか……？ お前とて、懐いた女に殺されるのはごめんだろう……！」

——叫び合う二者はそこで止まり、視線を交わす。

「——どうする……京香」

「どうする？ 決まっている」

振り上げられる刃。

殺意に塗り潰される世界。

「何を望む」

「夫子の復讐だ」

「馨すら捨てて、か」

「馨なんて関係ない。私が優先されるんだよ姉様！」

「そう、か……ならば……」

遂にとどめを。

致命的な間違いは犯されようとして……

——お前は本当に愚かな妹だよ——



——我が端末、我が半身、我が担い手よ——

——目覚めよ。今こそ我らの使命を果たす時だ——

「……っ、はっ!?!」

身体を起こして辺りを見回す。

……芳乃ちゃんの家の居間だ。何故？ オレは本殿で……

「そうだ、奏は！」

「奴ならば今、京香が抑えておる」

「ならんとか……ん？ どうして茉莉がいないんだ、ムラサメ様」

「……奏に気絶させられた。まだ目を覚ましていない」

「そう、か……」

——わかる。わかっている。

奴ならばあくまでも意識を落とすだけに留めるだろうと。だから茉莉は平気だ。それでも……心配で、今すぐにアイツの様子を見に行きたい程ではあるけれど、今はそうしている場合じゃない。

ただ、ムラサメ様はそんなオレの心中を見透かしたように。

「行けよ馨。惚れた女が倒れておるのに、無理に合理に努める必要もあるまい」

「いや、でも……奴が」

「ええい、行け！ 吾輩はご主人と芳乃を呼んでくる！」

……行っちゃった。

残ったのはオレ一人。だが——

——担い手よ——

わかっているさ……

——ならば——

ああ、行こう。虚絶。今の京香じゃ奏に勝てない。

奏と京香は殺し合う運命だが、でも奏は今殺せないけど、京香は

殺せる。互い憑代となつていゝ存在に人格がある以上、やりたくないことを強行すれば引き剥がれる。

芦花さんに人を殺せるわけがない。いや、そもそも穂織に住む人々の中で、そこに至れる奴なんて片手ですら十二分な程だ。

その肉体を使つてレナ諸共殺そうとすれば、当然抵抗するだろうし、剥がれる。

だから――

この機を逃すわけにはいかない。

――然り――

……ごめん、茉莉。ごめん、みんな。

何も言わないで悪いけど、オレは行くよ。

あの日掴んでしまった蜃気楼を、また掴むために。夢を見るのをやめて、現実を見るために。死んだままの身体から、生きている身体に戻るために。

全てを振り切るように本殿へ向かつて、まず見たのは倒れた血塗れのレナと同じように倒れた無傷の芦花さん。

そして――

「やはり……愚かだよお前は。自分たちがどういふ存在なのかを忘れたか」

黒い和装を身に纏つた、オレと同じ顔をした魔人――奏。

白桜色の和装を身に纏つた、オレと酷似した顔を持つ魔人――京香。

そう――

「おかげでこうして、全てが上手く運んだ」

「あね、さま……ア……ッ――！」

黒き刀を胸に突き立てている。

誰が誰に？

――奏が京香にだ。

「――さて、回帰と行こうか」

黒が氾濫し、両者を包んで繭となる。

それは一秒か二秒か三秒か、はたまた一分かそれとも――鈍化して

加速した時間の中で、遂に魔人が再臨を果たす。

黒い繭が消えて、中から現れたのは——生者だった。

「……やはり、この身体でなくてはな」

歓喜に打ち震えてなお足りないその声は、ある意味でオレに強烈な羨望を抱かせる。

オレの選ばなかった、選べなかった未来。全てを飲み込んで、ありのままに生を叫んで謳歌するその姿は、悍ましい筈なのに、どうしてか美しい。

それこそ、好き勝手に咲き誇り栄養を独り占めする植物のように。

「血沸き肉踊ってこそその、人生だ……私は今、生きている——！」

狂喜。

素晴らしい程の狂喜。見ているこつちが感動する程のそれ。叫びだ。究極的な叫びだ。

開花している。花が咲いている。狂い咲いている。

——完璧だ。まったく羨ましくて仕方ない。本当に、凄まじい。

「……ふつ、年甲斐も無くはしゃいでしまったか。いかな、これでも淑女だというに」

ギョロリとその視線がオレを射抜く。

何処が淑女なのか言ってみやがれ。

「……おい、言葉くらはは交わしたのか？」

「アンタを逃すわけにはいかないからな」

「風情が無いぞ馨。最愛の女を放って私とは。浮気か？」

「好きも嫌いもない女に浮気もクソもねえよ」

「やれやれ……だがまあ、因果なものだな」

虚絶を抜こうと鯉口を切るが、まあ待てと奴は言い、血塗れで倒れるレナに手を伸ばした。

「やらねばならんのでな。すぐに終わる」

「……どうやって治す？ オレら寄りじゃないんだぞ」

「こいつは神力を宿している。しかもそれなりにな。大方、神の遺骸と共にあったからだろうが……まあ、それを刺激してやるのさ。あとは勝手に治るだろうし、足りなければ他から取ってくるさ」

「そうかい……ん？ 待った。他つてどこだよ」

「他は他だ。あるのさ、神力を宿す場所が今なおな」

妙な含み、そしてなんとも言えない感覚を覚えながらも見守つてみると、見る見る内にレナの傷は消えて行つた。まるで時間が巻き戻るかのような。大抵裂傷というものは傷跡になるもんだが、一つも見当たらないという辺りどういふことやら。

それと同時に、何か……近くに物凄く身近な気配を感じた。オレの心はそれを知っているが、肝心のオレが何なのかを知らない。たまたまコイツの事だ、何か面倒な事を仕込んでいるんだろう。そしてきつと答えない。

——ならばオレの腹に戻すまでだ。

「……こんなところか。制服に関してはお前が持つてやれ。責任があるだろう？ まあ、持つてやれる状況にできればの話だがなア」

「くだらねえ戯言だ。さっさと構えろ」

「待て待て。これは私とお前の決闘だ。愚か者の前で行われていいものではない。然るべき場所、然るべき時間帯に行われるべきだ」

そう言い放つて、奏は視線を山の方角へと向けた。奴らしくない、なんというか真剣な表情。

……らしくない、というのは間違いだな。これもまたコイツなんだ。殺戮の限りを尽くすコイツでも、決闘とかそういうことをするのであれば、それに相応しい時と場をと考える。礼節を重んじる——と言うことや異なるが、まあ形から入るタイプってことだ。

「——着いて来い。我らの決闘の場に相応しい場所はただ一つだ」

「あー、どのくらい？」

「我らの能力であれば十分とかからん。が、五分は要するな」

「遠いんじゃないか」

「一つ聞いておこう。着替えは？」

「はあ？」

「するならば早くしろ。いつまでもそのだらしなく着崩した制服のままなのか。と言うよりもその格好で決戦に臨むのならばあまり格好がつかんぞ」

真顔で言われた。

……いやオマエな。それ言うのか。まあそう言うのなら……

「虚絶。ジャケツト」

——あいわかった——

ささつと行つてきてもらい、お気に入りの紺色のジャケツトに袖を通す。制服の上は……ちよつと割と危険な感じに胸が見えそうなレナにかけておく。これで安心。

さて……

「案内しろ」

「行くぞ」

本殿を出て行き、跳躍により木々の間を駆け抜ける奏をオレは、同じように跳んで追つた。

——必ず戻ってくる。どんな姿になつても。どんなモノになつても。

だから茉莉……オレはオマエを、もう待たせない。

「ここだ」

五分とかからなかった。

いや。それはオレの錯覚かもしれない。実際には五分以上だったかもしれない。

「……なんだここ」

相応しい場所、なんて言うからてつきりすごいところかと思つたが。いざ目に入る景色は、実に寂れた場所だった。

寂しさを覚えると同時に、奇妙な帰郷したような感覚。確かにそうだ。ここが相応しい。

ただ——何もない。ごく普通の……木々も少ない山の一角。多少の赤い草はあれど、それも長いわけでもなし。大きめの岩が墓標のようにあるくらい。

決戦のバトルフィールドというには、あまりにも寂しすぎる。

「生まれ故郷だよ、馨。叢雲が黄泉へ降る時に使った入り口だ。よく見ろ、彼岸花が狂い咲いているだろう？」

「……いや確かにそうだけど。——随分踏み荒らされてるんだな」
「大した話ではない。かつて、ここが崇り神との死闘の現場になっただけだ」

かつてに比べれば細々と狂い咲いている程度の彼岸花。なんともはや。

しかし感傷に浸っている暇は無い。虚絶を抜き、右に流す無形の構えを取る。

「……やる気か」

「相応しい時と場所だ。やるしかねえよ」

「確かにな」

奴もまた黒い柄も鏢も無い異形の刀——真なる転生をその手に握り、右に流した無形の構え。オレのと比較しても、やはりその姿に僅かな隙も存在しない。

ひゆう、と一陣の風が吹く。

時刻は夕刻、逢魔時。そして場所は黄泉降りへの入り口。魔人の殺人現場にはこの上なく相応しい。

——奏は決闘なんて言っていたが、これの何処が決闘だ。生存競争じゃないか。それに、決闘なんてものができるほどオレたちは秩序的な存在じゃない。そんなこともわからないなんて耄碌したな。

殺し合いにルールなど無い。ただ敵を殺すだけ。手段を選ばず、無秩序に、理由無く命を刈り取る。

決闘？ 冗談じゃねえ……オマエにとっては決闘かもしれないが、オレにとっては違う。

オマエ風情がオレの決闘相手を務められると思うな。

コツチの気なんて知らずに、向こうは気合十分みてえな顔してやがる。ああクソ、そういうところが羨ましい。

魔性と向き合った時に飲み込んで、その通りに生きていられる。自分の感性も性格も全て無視して魔性を飼い慣らして魔人となれる、一種の才能。

対してオレはどうだ。魔性と向き合った時に死を選んで死ねなかった。飼い慣らすより先に自分の感性や性格が先に来て話になら

ない。

本当に羨ましくて仕方ない。ふざけているよ、まったく。

「おい、名乗れよ。戦の作法も知らんのか」

「……」

真面目な声と顔。なんていうか、やり辛い。

というか気が散る。が、形から入っていい気分になって、勝手に油断なりなんなりしてくれるならやってやるさ……

「魔人、稲上馨」

「魔人、伊奈神奏」

ただどうも、オレも男の子らしい。

こういう場面に立つのが、いざ自分になると――

「――参る……！」

どうしようもなく、心が躍るな……!!

脚による推力が爆ぜて葬り去るべき敵手へと向かう。

左手に短刀を握り、右手には虚絶を握る。――殺すために。

……殺人と戦闘の違いとは何か。

それは、戦闘には目的が複数存在し、殺人は殺人という目的のみであるということ。

要するに。

殺人に優れていたとて戦闘に優れているわけではない。その逆もまた然り。更に言えば戦闘者の才覚は格下殺し、同格殺し、格上殺しの三種類に分けられる。そして磨いた技の練度、適性距離、得物、体調、気分、空気――それらが組み合わさってその戦闘者を作り上げる。

「――ッ、！」

「……っ」

ギン、と鈍い音を立てて左の短刀が奴の袈裟を噛み止める。

――流石親父だ。魔性が開花しつつある身だからこそできる病的な仕事への打ち込み。こうして奏の斬撃を短刀で止めているが、生半な物では二撃と耐えられずに両断されたろう。

「その短刀……お前の父親、千景の作だな。なるほど、微妙だが確かな執念。年月こそ少ないが立派に呪物だ」

「ほざけ……！」

虚絶による逆袈裟。無論後方へのひとつ飛びで避けられてしまう。また再び、中間距離での睨み合い。

……話を戻そう。

奏のスタイルは中間距離からの睨み合いを起点とし、隙を掴めば踏み込んで斬る。そうしたものだ。ただのそれだけ。

はつきり言おう、奴もまた戦闘者としては二流だ。全距離において強力な攻撃を常に放てる京香、剣の才覚がずば抜けた将臣……いや、オレの知る限りの戦闘者全員と比べた時、奏は底辺に属する程、戦闘者ではない。

ならばコイツは何者か。

その答えはシンプルに——蹂躪者である。

殺人などではない。真綿で首を締め付けるように、ジワジワと相手の長所を削り削り削り削り……最後に短所を剥き出しにした相手を喰い尽くして殺す。

逃げ回る弱者、心折られた強者——総じて弱いとされる者を踏み躪る事に特化している。

「……」

睨み合いの中でも隙を見せないようにジリジリと距離を詰める。

コイツとの戦いは、如何にして向こうから手札を切らせて行くかにある。何せ向こうの方が技の練度だけでなく経験も上だ。

対するオレは殺人者としては優れた才覚を持つものの、言うほど技の練度があるわけでもなし、経験だって対人戦は数える程しかない。

よって切れる札は、オレでしかできない技になる。初見殺し——突破されればもう使い物にならない。だからこそ、最後の切り札にするものは慎重に選ばなくては。

今しばらくは、奴の土台に乗って観察に徹する……

「——来ないのか？ 殺す殺すと言いなながら、怯えているのか？ クツ、存外つまらん男だったということか、馨」

雑音など耳に入らない。

研ぎ澄ませ、集中しろ。怯えを支配し予測しろ、骨を用いて虚を目指せ——切るべき札を”失敗するな”。

「来いよ。いつまで殻に閉じ籠っている」

「……」

奴の手の内と札は分かっているが、どのタイミングでどのようにとの目的で札が切られるのかはわからない。ならば誘導するしかない。

——どうやって？ こちらから仕掛けるか、向こうから仕掛けさせるかの二択。

基本的にオレの方が不利。

……この状況、将臣ならどうした？ 茉子ならどうした？ おじさ

んやおばさんなら？ 親父なら？ ——芳乃ちゃんなら？

彼女だったら自分が最大火力であることを理解しているが故に待ちに徹して、噛み砕く。

少なくとも意識を向けさせなければ攻められない。ならば……牽制。

「は——！」

跳ぶ。

特に何をするわけでもなく、跳ぶ。そして左手を振り上げる。

ああそうだろう、短刀を振り上げて斬りかかる？ しかも跳んで？

訳の分からない、破れかぶれとも取られて仕方ない行動。

だから奏だつて怪訝な雰囲気を出している。命を捨てるかのようだから。

刹那、左手に握る短刀の重さが増し——振り下ろす。

”それ”に気付いた奏は横に跳ぶが、その動作を狩るように左手の”それ”を肩に乗せつつ踏み込んでの横薙ぎと袈裟の斬撃……双方

とも弾かれる。

「——十文字、片鎌槍とはな……！」

珍しく奴が驚いているが、コツチの奇襲をあっさりを受け流しながら言わないで欲しい。

なんてことはない、オレがやったのは奴らが刀を形成するように、

短刀を核に黒い槍を形成しただけだ。

……十文字槍。ただし片鎌槍の形状ではあるが。過去に喰らった魂の中に、槍の名手がいたらしい。ソイツの持っていた槍を形成したが、オレの身の丈以上もあるし重い。

片手で振り回そうにも、そうそう上手く行かんが……札は一つ切った。後は攻めるのみ。

「ふん——っ」

シンプルに前進、槍を霧散させながらの斬り込み。なんでもない、分かり切ったその一撃は当然受け止められる。素早く左手を動かし、逆手の短刀で刺突——僅かに身を逸らして回避される。続け様に力の緩んだ鍔迫り合いから虚絶を抜いて逆袈裟——後ろに回避される。更に縦振り——届いたが防がれる。弾かれてはいない。

……やはり奴の方が三拍速く、オレの方が四拍遅い。性能は互角。ならば鍛えた技とその使い方の差。千年の蓄積は十年の蓄積に勝る。当然の帰結だ。

だが弾かれていない、完全に対応できていないというのは都合が良い。打ち続けられいずれ対応されるのは自明の理。なればこそ、そうそう打つべきではない。いや、次にやっても完璧な対応をする可能性すらある。

槍の使い勝手は微妙。火力と長さを求める時だけ使う方針で攻める。というかあんまり趣味じゃない。世の中じゃかつてポールウエポンが猛威を振るったそうだが、よくまあ猛威を振るう程使えるなど感心する。

……趣味の差かな。さっさと後ろ回って殺しちまえばいいのに。いや戦なんだし正面も当然か。

「——想定以上、か。お前の愛がそれ程とは」

「違うな、愛してもいない相手を愛するものか」

「ではどうだと言う」

「下らんな。死ね」

背後に駆け跳ぶ。

「筋はいい」

振りかざした首斬りの短刀一閃、刀身を掴み取られる。

「だが京香の方が素早いぞ——！」

「だろうな……！」

読めない、とても。

槍に変化させ、奏を蹴って離れると同時に大きく薙ぎ払う。

ブオン、と大仰な音がすると同時に遠心力に任せて奴を振り払い吹き飛ばす。

「チツ、イ……」

舌打ち。そして着地。しかし隙らしい隙も無く、追撃はできない。技量と経験の差が如実に現れている。

が、流石の奏とて飛ばされた状況から反撃はしない。踏み込めば槍に出会うというのは、コイツとて警戒に値することなのだろう。

——しかしそんなものは刹那の感想。

素早く左へ踏み込み、次いで右に切り返しながらコッチに来る。

緩急を付けた動き……次なる一手を待ち構えず、コチラも敢えて迎撃に出る。呪力で短刀を形成、指に挟んで奏目掛けて投げ付ける——と同時に踏み込み、追って虚絶で斬り込む。

しかし向こうはそんなことは無意味だと言わんばかりに飛んだ。跳ぶのではなく、飛んだ。上空を取られた。

斬り込んだ後隙を晒すオレを串刺しにせんと、奏は逆手に刀を持ち替えて落下する。

前？ 遅い。踏み込まれて首を斬られる。後ろ？ 遅すぎる。頭をブチ抜かれる。横？ 前と変わらん。と、なれば不条理を以てして対応する以外に道は無い。

「……来い……」

この身に宿る怨念を一つ、掬い上げて形成する。織り成されるは苦しみ嘆けと怨嗟吐き出す漆黒の顎門。浮かび上がる絶望宿す赤光の瞳。”奴”がもういいとしても、それでも五百年に渡り刻まれた怨嗟の宿り木は死を求める。

——そして繋がっているのは何もオレだけではない。この虚絶、転生にも繋がっている。人智を超え、不条理の域に達した速度で対応す

るべく、渦巻く怨嗟が顎門に宿り己の命を喰らった魔人に復讐せんと咆哮する。

顎門が刃を喰い止める。

と同時に奴はその身を大きく動かすことで順手へ戻し、そのままの勢いで転生を振り切る。顎門の隙間を刀身が滑り、当然ながらオレは飛ばされる。

空中で体勢を立て直しつつ、背から黒の腕を生やして地面に爪を立てることで勢いを殺しつつ、追撃に迫る姿を見る。

——袈裟斬り。

素早く虚絶を逆手に間違えて軌跡に噛みあわせるように振るい、強引に防ぐ。……だが流石は常在戦場の時代の人間。目にも留まらぬ速さで刀を操り、鏢迫り合った状態からなんと虚絶を弾くと同時に、オレの肘から下を切り落とした。

痛みを殺す。怨恨に指示する。

迫るトドメの一撃を短刀でまずは弾き、腕を消しつつ姿を蹴ると同時に指の間に形成したクナイを投げ付ける。

——素早く下降してそれが避けられる。怪物め。物理法則を無視しやがって。

そうして再びこちらの懐に飛び込もうする姿の背中を……

「な……っ……!?!」

「まずは一手」

斬り落とされたオレの右腕が虚絶を握って斬りつけた。恐らく角度的には浅いが、一撃を与えたというのが重要なのだ。

唾然とする奴を無視して右腕を呼び戻す。今更帰ってこれなくなるとかそういうことを気にする必要は無い。既に魔人なのだから。

怨恨と怨恨が結び付き、肘から上と再会した肘から下は、その肉体が覚えている記憶を頼りに一本の腕として再誕する。

……しかし、困ったなあ。

「オマエの所為で、お気に入りジャケットが一つダメになった。右肘から下の裾が無くなったじゃねえか」

「ククツ、先鋭的ファッションだろう?」

「オレの趣味じゃねえな」

ケラケラと笑う奴を睨み付けながら、確実に殺すための思考を回し始める。

蹂躪者を殺すならば、常に己を強く持たねばならない。

「槍に狼に腕にロケットパンチか。人間びつくり箱過ぎて私は心配だよ。馨」

「言ってる。奏」

虚絶を強く握り締め、短刀を構える。

武器は出し尽くした。これ以上を求めると隙を晒すことになる、あとは……技を出すだけだ。

どれだけの時を過ごそうが、どれだけの物を見ようが、知っただけも初めて見るものには対応できまい。

「だが私にも火が付いたぞ。生きる為に、本気で行かせてもらおう！」
「舐め腐って一撃貫ってから本気出すような奴が、オレを殺せるものかよっ」

——交差する視線。

第2局が始まる……！

魔人回生（十年の愛よ、億の死として狂い咲け）

——何度目の激突、何度目の接敵、何度目の離脱だろうか。

……強い。

強すぎる。

刃を合わせる度に、刃を躲す度に、技量と経験の差を叩きつけられる。振る角度、抜く角度、速度、判断、切り返しの方……どれ一つ取つてもコツチとの隔絶した差を実感させてくる。

京香の剣とは違う、粗雑で力任せ。技なんて身体裁きくらい。だけど濃密な死闘によって得た経験でそれを完璧な形で研ぎ澄ませて”技”にしている。

技を技として究極的に研ぎ澄ませたのが京香ならば、力を技の域まで鍛え上げたのが奏だ。

ギンツ、と金切り音が響き、火花が散る。

……重い。一撃一撃が桁外れの威力。

戦況は変わらず。一撃なんとか当てたところから防戦一方を強いられている。

だが奏が攻め一辺倒になっているという事実は素晴らしい。理想的な状況である——が。

「……くっ……い！」

「ふんっ……い！」

削られる。

削り続けられる。

虚絶と短刀を駆使して防ぎ続けるが、息を吸って吐く暇すらない。圧倒的な猛攻、疾く死ねと言わんばかりの空気を殺す殺意の氾濫。これと互角以上に渡り合った京香の凄まじさが、身を以て理解できるといふもの。

——これが本気という奴か。凄まじい。まるで天災だ。刀一本で二刀を押し込んでいる。

素早く短刀で切り返しても、最低限の動きでこちらより速く切り返してくる。切り返しの中に挟まれる切り返し……もはや滅茶苦茶だ、

冗談じゃねえ。

虚絶で防ぎ、後ろへ退がる。すかさず距離を詰めながら、転生の猛攻が迫る。両刃を駆使して防御に徹しながら、奏の隙を伺う。

甲高い不快な金属音の連続、地面を踏みしめて蹴る音、空を切る刃の風切り音。

……戦場。決闘。

是が非でもその現実を突き付けてくる。オレがどれだけ望んでいなかろうとも、奏とオレは決闘をしている。心底から認めたくないが。

切り返した短刀が弾かれる、槍に変化させて刺突。身を逸らして避けられる。片鎌部分で切り裂くように引き戻す。大きく後ろに飛ぶことで回避される。——振り出しだ。

「……不思議だな、何故お前ともあろうものが逆手二刀で攻めてこない」

しかし振り出しに戻った途端、奏は不思議そうにそんなことを呟いた。怪訝な表情までしている辺り、コイツは本気でオレがそつちを使っていないことがわからないらしい。

「さあな」

「……」

逆手二刀を携え、様々な忍具を用いて削りつつ接敵。そして最大接近距離で取り回しに優れた短刀を使い手足を潰し、残った首を虚絶で叩き落とす——それがオレの、慣れ親しんだ殺し方。最も真価を發揮できる殺し方と言っても過言ではないそれをしないことが、そんなに不思議なのか。

かつておじさんや玄さんは、オレの殺し方に狩りのそれと同じものを見たと言っていた。今になって考えればそれは当然だが、当時はさっぱり分かっていなかった。

……まあそれはどうでもいい。重要なのは、狩りに二度目は無いということだ。一度の狩りに失敗すれば、その獲物は当然ながらその狩りにはどうすればいいかを知る。もし再度仕掛けるならば、同様の方法では余程の運がなければ通用しないだろう。

「自分で考えたらどうだ」

「まあ、見切られるのを嫌ってなのだろうが」

バレている程度は読み通り。

まあ口喧嘩に付き合ったところで不利になるだけだ。戦わなければ活路も無い。

「……ならば！」

今度はコツチから仕掛ける。

槍を消し、短刀を戻して踏み込む。虚絶を両手で正眼に構え、一刀を叩きつけ殺す為に刹那で飛び込む。殺すことだけを目的とした剣——玄さんの振るった剣のなぞり。唐竹割りを物凄い速さで振れば、それだけで相手を葬り去る。

上段に振り上げるそれを、神速で振り下ろす——！！

鈍く破壊的な、不快の音色。

全力を込めた一撃ともなれば、流石の魔人として弾けずに防ぐ形となる。再び上段に上がるオレの腕。しかし身体をぶらさなければ、体幹を揺らさなければ、続け様にもう一撃を放てるということだ……！
先程と寸分違わぬ軌道で、もう一度虚絶を振り下ろす。

「——はっ」

そして、完璧に見切られた上で。

最小限の動きで、最大限の反動をコチラに伝えるような、絶技で弾かれる。

ああそうだ、そりやそうだよ。アイツの方がオレの何百倍も強いし経験だってあるんだから当たり前だよ。わかっている結果だ。オレも、奏も。

——だから。

「まだ——」

弾かれて体勢を崩す自分を律しつつ、その反動に身を任せて身体を捻る。その最中、鞘を手に取り虚絶を納めて。

鞘の中に充填させていた、怨恨の焰を刀身に纏わせる。

そして、抜刀して振り抜く……っ

「——だ、アッ！」

縦に持った鞘からの抜刀斬り。

怨恨の焰を纏った刀身が、接近する奏目掛けて振り下ろされる。刹那、斬撃の先に斬撃が生まれ、絶死の二重層を織り成す。なんてことはない、怨恨で射程を伸ばした斬撃の着弾点に怨恨による斬撃を生成しただけのこと。

血飛沫が舞う、しかし二重斬撃を受けてなお奏は止まらない。千切れかかった左腕が即座に修復される——オレと同じように。

——だが我らの方が速い——

だろう、な！

内面に潜む相棒からのお墨付き。ならば最早迷う必要なんてない。素早く繰り出される突き。速さだけで言えばオレに対応できる道理は無い……が、狙いが分かっていたら対応など簡単だ。

心臓狙いのそれを、右手を盾にする形で受ける。勢いは死に、貫いた刃はオレの胸に浅く突き立てられる。

「ちィッ」

舌打ち、当たり前だ。

右腕と胸に刺さった刀剣。引き裂いたり引き抜いたり出来ても、その為には一拍を必要とする。そしてそうする為には——

握った虚絶を落とし、途中で左手で掴み取る。

オレより速く動けなければならない——！

素早く振るい、奏に突き立てる。突き立てた刃を動かして、胴から首元まで搔つ切らんとして……止まった。

虚絶が、止められた。

恐るべき腹筋と背筋の拘束によって。

バカなど叫びたくなるが、ふざけた具合ではオレの方が上になるので別に問題は無い。

止められた状況、もはや武器を引っ張り出すよりこの場合は——殴った方が、速い。虚絶を離して左手で奴の顔を殴りつけた途端、腹部に鋭い痛みが走る。視線を刹那だけ落とせば、腹に突き刺さった奏の拳……考えることは同じらしい。

しかしその衝撃で互いに離れてしまい、互いの肉体には敵手の得物

——元を辿ればどちらも奏の得物だが——が突き刺さったままの形になる。

すぐさま右腕と胴を固定している刀を抜き、虚絶を片手に迫る奏へと投げ付ける。ガイン、という音が響いて刀は弾かれた。

「破れかぶれかア……！」

嘲笑、接敵——速度を上げて首を落とすべく踏み込んでくる。

横に倒される右腕……横薙ぎか。突きは踏まれるとでも思ったのか。実際来たら踏んで跳ぶのだが。さてここからどうしたものか？ そんなことは初めから頭に入っている。

力が込められる。更に踏み込む。狙われるは首斬り一閃……確実に仕留めるつもりだ。

だからこそ。

「来い相棒っ！」

——応っ！——

——叫ぶ。

赤光が溢れて、右腕に感じるずっしりとした重さ。

目を見開いて驚いている姿があまりにもおかしくって。面白くて。

何の躊躇いもなく、その刃を振り抜いた。至近距離、首元から胴にかけての袈裟一閃。肉を裂き、命を刈り取る、確かな感触。流れるように逆手に持ち替えて心臓に突き立てる。

……殺った！

心臓と肺は潰した。後は頭部を破壊するだけ。素早く引き抜き、改めて頭部を破壊するべく上段に振り上げて——

「まだ——死ねないんだよオツ!!」

オレは《あり得ない現実》を突き付けられた。

咆哮と共に、大きな力の奔流がオレを弾き飛ばす。この感覚……そして、おおよそ邪気とは呼べず、圧倒的な神威と力強さを感じさせる、暖かみを持った青白い焔の奔流。

間違えるはずなどない。——神力だ。

——半身よ。奴は恐らく、神力を宿すに相応しい何者かが素体となっている——

てことは燃料は歴代の巫女姫の誰かってワケか……！ 杭と鎖は!?

——貴様の物を半分、自身の物を半分と伊奈神京香の物を全て。だが同時に貴様の中にある半分は奴の物だ——

互い不完全なのは違う物が刺さってるからか……

しかし、もしかすると”彼女”かもしれない。ならばあの手が使えない。もしダメだったとしても、それはそれでだ。奴は彼女を殺せない。故に行動が固定される。

……流石に、500以上を殺すのは無理がある。どれだけのストックとどれだけの怨恨が詰まってるやら。

——どうするつもりだ——

手段は選んでられない。

要するにオレの部品を持つてるから好き勝手出てこれんだろ？

——……確かにそうだ。杭と鎖が正しい形に収まれば、貴様が最上位個体として管理できる。が……——

わかってるよ。

その時は、アイツらに任せる。——今はコイツだ。

青白い輝きが刀剣を形成し、その手に握られる。出力が桁違いだ。完全開放した叢雨丸には及ばないが、それでもその束ねられた生の奔流は崇り程度なら、一太刀で六度殺してなお釣りが来る。それほどまでの出力を誇る魂など巫女姫の中でも限られてくるか、あるいは生への執着心が強すぎる、まだまだ成仏できないと思うような……

「……ああ、わかつていいるさ……死ねないとも。死ねるわけがない。まだまだ見ていない、足りないものな……」

奴の呟きが聞こえるが、はてさてそれは誰からの言葉への対応なのか。

それともオレの想像通りなら……オレの知っているあの人か。別に誰だっていいが、それならそれで確実性が増すというもの。

「名付けるとしたら、神刃・転生とでも言ったところか」

「やれやれ、楽しそうだなア……」

「楽しいさ、楽しいとも。こんなに楽しいのは久しぶりだ」

「そうかい」

——神刃を名乗らせるには、彷徨える靈魂だらけという点はどうするやら。

……さて、諸々のことを考えると、ここからは切る札を選びすぎる必要はなくなったというわけだな。切って切って、あとは盤上をひっくり返して机蹴っ飛ばして射殺すりゃいい。

短刀を逆手に取り出し、遂に虚絶を逆手に持つ。戦いではなく、殺すために……いいや。

——”勝つ”のは、オレだ。

”勝って”、茉莉の所へ戻る。そして……オレの望んだ未来を得る。

「逆手……本気か」

凄まじい警戒の念。それほどまでオレの逆手を恐れているのか。それとも遊べるのが待ち遠しくて仕方ないのか。

それを敢えて、このオレが今、確かめてやる。

跳ぶ。

左腕ごと胴切りの軌跡で虚絶を振るうと同時に、短刀による右肘から下の切断と胸突きを連続して行える軌跡。二者択一、どう受ける。

——取られた選択は、受けないだった。

敢えてそうする必要も無い筈なのに、奴は受けなかった。後方に大きく跳び躲す奏は、その防御力も攻撃力も技量も使うことなく、ただひたすらに避けることを選んだ。バカな、とも思う。オマエの技量であればこの程度、返すくらい余裕だろうと。

それが間違いだつたと気付いたのはすぐ後だった。

後方へと跳び離れながら、その刃に神力を収束させている。なんと
いうか、有り体に言えばレーザーブレードみたいな……威力と射程を
向上させればどつかで当たるだろみたいな……ん？ 待て、何か……
？

——しかし現実は何も待ってくれない。

放たれる長射程の横薙ぎ。回避は間に合わない。ならばどうするか。

左肘にかの怨嗟の咆哮を宿らせ、振り切られる青白の滅殺剣と同じ軌道で左手を振るう。すると斬撃より早く、狼の顎が喰らいつく前に、広がった口が更に広がり菱形を形成。そこを出口兼媒介として使用して、オレの奥の奥……心の深まで繋げて、”それ”を引っ張り出す。

十二分な長さで、十二分な強度と性質を備えた”それ”がしなつて青白の光刃にぶつかれば、それは霧散して何かが爆発したか弾けたような轟音を立てて、お互いが弾き飛ばされる。

——鎖を現世へ取り出して、それである神力の奔流を弾くとはな。流石は我が半身、見事なものだ——

珍しい相棒の賞賛を聞いて少し嬉しいが、しかし敵手は一切動揺していない。これすら予想の……いや、防がれることは想定済みか。しかしあれほどの神力、オレで受ければひとたまりもない。防ぐならば……杭か鎖で受けなきゃならん。——タイミングを間違えれば死ぬ。

次の一手を打つ前に、向こうが攻撃態勢に入った。

一気に距離を詰める、素早い跳躍。最低限の動きで斬りに来る……かと思いきや再びの収束。そしてそれを振りかぶっている。

——どういうことだ？ 何を考えている？

そんな、力押しの極みみたいなのをする必要があるのか？ 奴が？

冗談ではない。する必要など無い。剣技で弱らせ、神力で仕留めればいい。奏にはそれだけの力と技がある。だというのにこうした一気に叩き潰すようなことを選んだ。

……焦り？ いやそんなものはない。あるはずがない。奏の戦闘能力はオレを大きく上回っている。だから焦りを感じる必要は無いし、ましてや神力を奔流にして殴り付けるのは非合理だ。ブタ以下のクズ手——ではないが、少なくともオレを相手にする時にこれを選択するのは悪手。それがわからない相手ではない。

だというのに……そんな手を選ぶ。あり得ない。理解できない。

飛び込みながらの唐竹割り——二刀ならまだしも一刀では後隙の補助手段は少ない。だから確実に仕留められる時にだけ使うのが一

番だ。

左横っ飛び。数秒前にオレがいた場が”消し飛ぶ”。

一体何が……？ 何か違和感がある。それもとても大きな。

奏はオレと同じように他人を宿している。それをねじ伏せられない奏ではない。オレと京香に出来て奴が出来ないなどあり得ない。

ならば、何故だ。何故こうも火力頼りの一辺倒を。技量を選べばよ
り確実だというのに……？ それがわからない者なのか？ それと
も振り回されて……奏だぞ？ 振り回される筈がない。ならば……

——確かめてやる。

鎖に潜む怨恨の焰を双方の刀身に宿らせる。青黒い輝きを纏い、生
を喰らい死をもたらす闇色の刃を形成する。

もしもそうなれば、そうであれば……そうだとすれば……”既に”
バレているとしたら、確実にどうにでもなる。ならばそれを踏まえて
考えれば……

敢えて更に飛び込む。行うのは最大接近距離での剣戟。

接近戦では分が悪いのは目に見えているからこそ。得意な土俵で
最適解が打てなければ——

右は逆袈裟、左は横薙ぎ。早いのは左の短刀。受ければただですま
ないのが右の虚絶、一拍ズラしたこの二撃。——それを、奴は。

キン、と音が鳴る。肉を裂く感触がする。

防がれたのは逆袈裟。腕で受けられたのは横薙ぎ。

すぐさま短刀を槍へと変え、その状況から大きく薙ぎ払う。首狩り
など容易いが、側転で避けられる。更に側転から体勢を立て直しつつ
逆手に替えて斬りかかってくる——やはり神力は束ねられている。
この槍を消すには通常の物で十二分だというのにもだ。

振り切った状態から突きを放つ。

槍の先端を綺麗に逆手振り抜きで迎撃され、霧散する。その状況か
ら順手に持ち替えて兜割り——受ければ頭が割れて死ぬ。

ならばと後方へと宙返りしながら跳びのき、同時に形成した手裏剣
を投げ付ける。互いの狙いは外れ、攻撃は明後日の方向に飛ぶが仕切
り直し。

……中身の方は、どうも戦い慣れていないようだな。そのくせ何やら奏に強く影響を及ぼしている。

力押しを選択するほど不慣れ、かつ奏の意志を押しつけようとするほどに強力……そして死ぬことへの強い拒絶と慣れ親しんだこの神力の感覚は——

……まさか、アンタなのか？

だが迷っている時間は無い。

足で地面を踏み鳴らす。すると漆黒の大狼が現れる。動く怨嗟の獣——崇り神、その残滓。獲物を咬み裂くべく、人智では到底辿り着けぬ速度で駆け抜ける。

それと同時にオレも虚絶を右に構えて、呪力を爆散させて飛ぶ。二段構えの連続攻撃、どうする——！

確認するは横に倒した左上段の構え。神力が収束し奔流となつて解放されんとしている。

あのままだと、斜め左上からの斬り上げか。——ここでケリを付ける。行けるよな、相棒！

——応ッ——

神力の一閃。斜め左上段の斬り上げだ。

崇り神は吹き飛び、オレは前に飛んで避ける。

振り上げた続け様に今度は袈裟の構え。二撃での必殺。纏い斬りとでもいうべきか。

どの道オレでは不利だ。だが、こちらには切るべき札がある。

そう——切り札が。

虚絶を切り離し、実体化させる。

それを奏の前に出現させる。何も持たせずに、手を広げてまるでそれを制止するようなポーズで。

……そして。

「やめてっ、——」お母さん！

ピタリと、奏の動きが止まった。

——芳乃ちゃんの姿と声をさせた虚絶の一言で、あの蹂躪者の動きが止まった。

ニイ、と唇が釣り上がるのを感じると同時に、左腕を伸ばす。すると鎖に繋がれた杭が飛び、奴の胸に突き刺さるのと同時にオレの下へと引き寄せられる。

「——やっぱりアナタだったか、秋穂さん。芳乃ちゃんに直接接触したのと知った神力の感覚……忘れられる筈もない」

「馨……貴様、人でなしか？ 親子の情を利用するなど……愛し方にも限度があるろう」

「そんなもので現世に留まったのが悪いんだろう。あと別に、オマエなんか愛したいワケでもねえよ」

別に大した話ではない。

秋穂さんなら偽物の芳乃ちゃんまで止まると思った。他の巫女姫でも目の前に子孫が急に出てきたら止まるだろう。だからその隙を突いた。

——そもそも奏が杭と鎖を武器にすればよかったのに、それをしなかったことがずっと気がかりだった。何故かと思っていたが、その答えはごく単純で燃料となる魂が、現世に留まらせている魂が、神力……つまり生命力ベースであったこと。最初の奔流で確信したから、そのベースは恐らく巫女姫だろうと当たりを付けて、後は絞り込む。隙を生ませりや殺すのは容易い。ただそれだけ。

オレは勝つ為に手段を選ぶつもりはない。それに何故殺したい相手を愛してやる必要があると思ったのか。

殺すと愛すは全くの別だ。そんなこともわからなかったコイツの落ち度だ。オレが非難される謂れなどない。

毒を持って毒を制す——ただそれだけのことである。
僅かな問答。

引き寄せ切った瞬間に地面めがけて落下。組み敷いて逆手に持った虚絶を胸に突き入れ、オレの杭と鎖をこちら側に共振させて引き戻す。それと同時に上位権限がコチラに移行。すぐさま伊奈神姉妹を元通りの位置に戻して、散らばってた靈魂を循環の中に戻す。

——オレが回生するまでは数秒と無い。

何もなくなつた状態から立ち上がり、暗い雲を見上げる。雨でも降

りそうだ。

「相棒」

「なんだ」

「最後まで付き合え」

「よかろう」

瞼を閉じる。

——ああ、茉莉。

オレの愛しい、茉莉。

待っててくれ。すぐに行くよ。オレが必ず、誰よりも、何よりも――

そう。

早く、彼女を愛殺ささななけけれれば……！

……馨がいなくなった。

その事に気が付いて、気配がものすごい勢いで山の中へ移動して
いつていたと知ったのは、常陸さんが目を覚ました直後だった。二人
には無理をしないように言って――

——必ず連れ戻すから。

——必ず馨と戻ってくるから。

そしてそう約束して、俺は叢雨丸を手に取って、ムラサメちゃんと
共に駆け出した。

……薄々と勘付いてはいる。あいつなら絶対に勝つだろうし、俺を
待っているだろうと。

「ご主人、馨はこの近くじゃ」

「そっか」

「二つあった気配は、一つになった。恐らくはどちらかが……」

「馨だな」

「吾輩もそう思う」

こんなことで少しでも紛れたらいいなと思って、不安そうなムラサメちゃんの頭を少し撫でると、彼女はまるで猫みたいに瞼を閉じた。でもほんの少しの間。俺が手を離すのも、彼女が瞼を開けるのも、同じくらいほんの僅かな時間の出来事だった。

「ご主人、吾輩たちで連れ戻すぞ」

「ああ。必ずだ。俺たちであいつを、連れ戻す」

その道をまっすぐに歩いていくと、背を向けて佇む男の姿があった。曇った空を見上げて、たった一人で。

……いや、一人でというには語弊がある。

もっと大人びた常陸さんのような姿でその側に立つ、あいつの相棒の姿もあった。

——その男を一目見た時、俺は言いようもない感覚を覚えた。

あの日、俺が初めて見た時と同じ感覚だ。それが何なのか、未だにわからない。もしかしたら答えなんてないのかもしれない。

それにもうそんなことは重要じゃない。だからこのままでいい。

そいつは——

好敵手、友人、気がかりな同い年……いくらでも表現できるけど。

今この場においては。

この場だけは。

「あの日出会った平凡な男が、オレの最後の試練になるとはな」

ゆっくりと振り向き、とても穏やかな顔をした馨が。

「馨……」

「数奇なもんだ。オレも、オマエも。互い知らぬ所で交差していて、対極の存在としてここに居る」

——穂織に仇なす魔人だと、俺は断言する。

「告白するとな、好きだぜ将臣」

なんでもない穏やかな言葉。

それがどういう意味か、俺にはわからないけど、少なくとも俺が常陸さんに、馨が芳乃に殺されるようなことではない。だってこいつにそのケは無い。常陸さん一筋だ。純粋なまでに。

「だからオレに愛^{殺させて}させてくれ。好きだから、愛しているから、これが必

要なんだ。いけないことだとわかっている、悪いことだと知っている。でも必要だから仕方ない。だってオマエらはオレに生きろと言った。ならオレは生きるだけだ。生きる為に殺し続けるだけだ。それが嫌ならオレに新しい生をくれ」

次いで紡がれる狂気にして正気の叫び。

——これが稲上馨に宿る宿痾。

これがあいつの、魔人足り得る由縁。愛するが故に殺す。それこそが自分の愛に他ならないから。

「愛する者に正気無し——オレに人間の正気などあると思うな。オレにはオレの狂気しょうぎがある。穂織という千恋万花に燻る千死万禍——それがオレたち否神だ。咲き誇る恋の花と、狂い咲く死の花。はてさてどちらが咲き続けるべきか。それが今、ここでわかる」

どっちが咲くとかそういうのは俺には俺にはわからない。でもどんな理由であっても、俺のやることはたった一つだけ。

馨に人を殺させるわけにはいかない。

馨に常陸さんを愛殺させさせるわけにはいかない。

それは馨が望んでないことだから。あいつは人として生きて、人として死にたいんだから。

「虚絶……！」

「任せろ、我が半身よ」

「ムラサメちゃん——っ」

「応さ、主人」

共に相棒へと声をかけて、同じ青でも致命的な違いを宿した青を自分の武器へと宿らせる。

——俺は叢雨丸に青白い光を。

——馨は虚絶に青黒い光を。

両手でしっかりと握った正眼の構え。

片手で右に流した無形の構え。

「さあ、始めようか」

「ああ、終わらせてやる」

お前のその悩みを。

愛する為に殺すことを。

俺たちで終わらせて、人としての生を掴ませてやる。

だからこそ――

「行くぞ、馨っ！」

「来い、将臣っ！」

最初で最後の、真剣勝負だ――！！

――ワタシの好きな人を、馨くんを、お願いします。

――信じてますから。必ず二人で帰ってくるって。

芳乃の為に、常陸さんの為に……いいやそれだけじゃない。

お前の為にも、お前を必要としているこの土地のためにも、俺はお

前を超えるよ……馨っ！

魔人 稻上馨

右袈裟に振りかぶって、駆け出す。

——だけどあいつの方が、動きが速い。

でも見慣れた軌道と、振りかぶられた軌跡。

だから初手で殺られなかったのは、必然でもあって偶然だろう。

「……腕を上げたな。一太刀で落とすつもりだったが」

「誰が俺に戦いを仕込んだんだよ……！」

「確かに、オレだなッ」

鏑迫り合いを滑るように離脱し、勢いを乗せた回し蹴りが飛んでくる。回避も対応もできない時は、衝撃を受け流して距離を取る……馨と常陸さんから教わったことだけど、馨相手に実践することになるなんて。

鈍い痛み——受け流す、というのは難しいがなんとかそれっぽくはなつたらしい。ゴロゴロと転がりながらも距離を取って起き上がる。剣戟からの体術……こいつの得意技。今までに受けたものの中でも群を抜いて痛みを与えてくる。

——考えを改めろ、迷いを捨てろ有地将臣。馨は殺す気にいる。俺を殺す気にいる。加減とかそういうのを考える必要は無い。全力で討ち滅ぼせ、眼前の敵を……！

でなければ約束を守るところの騒ぎじゃない！ でなければ馨を救えない！

「たアッ！」

踏み込む。

斬らねば斬られる。ならば斬るしかない。人を斬る、という抵抗を無理矢理にねじ伏せて、馨に斬りかかる。

ギィ……ンと鈍い音が響けば火花が飛び散る——弾かれた！

グツと堪え、大きく外側に弾かれた腕に力を込めながら、ふらつきを止める。

姿勢を戻す勢いを使って、前に進みつつ切り返しの横薙ぎを二連——ゆらりと背後に下がってそれを避けると同時に避けた瞬間に踏み

込んで袈裟を狙ってくる。

……起こりが、見えはするんだ。

——来るぞご主人！——

「っ、ー！」

でも、疾い。疾すぎる。

ムラサメちゃんに言われなかったらまたギリギリでしか対応できなかったろう。なまじ見える分、逆に困る。

軌跡を予測し叢雨丸を横に構えて移動させ——不快な金属音を立てて。たったの、袈裟の一撃だけで後方へと押し込まれる。まるで泥で滑るように、俺の身体が後ろに流れた。

理不尽にも思えるふざけた速度と威力。鉄の棒か何かをひたすらに力任せに、疾く重く振っただけの一撃で、刀で防いだ人間が後ろへと吹き飛ばされる。

……魔人。人にして人ならざる何者か。他を圧倒し自らの生存の為に他者を滅ぼし続ける、異端の生命。

半ば衝動で動いていた崇り神より遙かに恐ろしい。人なのに人じゃなくて、そいつは俺の友達で——俺よりもずっと強い奴。

——呑まれるなご主人っ。強弱は勝負の話だ！ 戦いに勝つのであれば、強弱よりもどのようにして敵手を討ち滅ぼすかであろう！——

その言葉にハツとして、勝てる勝てない強い弱い思考を無理矢理に打ち切る。

そうだ、悩んでいては何もできない。悩むな。動け。目の前に敵が現れたなら、叩き斬るだけだ。それができなければ俺は死ぬ。

——馨に愛殺されされる。

……もう一度構え直す。目の前の”敵”を睨み付ける。

「は、——」

跳んだ。跳んでくる。迎撃しろ。どうやって？ 起こりを見るな。今日に至るまでに打ち合った全ての経験を総動員しろ。

馨ならどうやってくる？

馨ならどうやって打つ？

馨ならどうやって対応してくる？

馨ならどうやって次の手を用意する？

敵は馨だ。

馨とは何回も打ち合ったしなんならそれなりにやる気の馨とも一回だけ戦った。

なら――

決断は済ませた。

それに賭ける。

迎撃するべく、叢雨丸で――突きを繰り出す！

「血迷ったか……」

すぐに踏み付けて止められる……そうだな。そうだよな。お前はそうするよな。わかっているよ。確実に踏んで飛ぶよな。

――わかっているからこそ、俺は力一杯に踏み付けられた叢雨丸を振り上げて足を振り払う。

「……何!？」

驚愕の声……当たり前なのかもしれない。踏まれるのを前提に振り上げて隙を作るなんて。そういうのは馨のやることだから。俺なら堅実な手を選ぶと思っただらう。

――悪いけど、俺だって博打やるんだよ。

振り上げた腕を、右袈裟の軌跡に振るう。

避けさせやしない、必ず捕まえるための素早い斬撃。だがいなさせてはいけない、それなりの力を込めた一撃。

後ろに下がるより早く、横に流れるより早く、踏み込まれるより早く――

虚絶で防がれる、と同時に滑らせるように動かして鏢迫り合いを離脱させ、流した状態から斬り返す。

まだ指が触れた程度だ。ここから胸倉を掴み上げて引き寄せる……!

左袈裟――ダメだ重さが足りない。カキンと小気味良い音と共に完璧に流された。だが重さが足りない事が幸いして、向こうとこつちの反撃までの時間差は少ない。

互いに構え直してもう一度踏み込む。逆袈裟の軌跡を描いて、向こうは横薙ぎの軌跡を描く。

「……っ」

「——ふん」

重さは足りても、速さが足りない……！

馨の方が早かったからと、無理矢理に防いだ結果、鼻で笑われるような無様な攻めに。流れを掴まれている。

——ご主人、虚絶の刀身にヒビが……——

……疲弊してこれか。

お前は本当にすごい奴だよ。だけど、こつちにだって負けられない理由がある……！

——ムラサメちゃん、できる？

——……できるできないではない。やってみせよう。ご主人、こちらに任せた。吾輩は待とう——

お願い。そしてごめん。いつも無茶なことばかり言ってて。

——ふふっ、気にするな相棒。吾輩とそなたは一心同体じゃ。ならばこそこの戦い、必ず勝つのじゃ——

……ああ！

相棒に答えて、勢い良く攻勢に転じる。押されていた太刀筋を、押し付けるように力強く叢雨丸を振るう。切り返した一瞬と一瞬の間、馨が素早くその隙間を縫って虚絶を振るう。

ガイン、ガインと甲高い金属音を立てて刀身と刀身がぶつかり合う。火花散らして刃を叩き付けて、俺たちはひたすらに刃の応酬を繰り広げる。

——反撃や防御に移るだけなら、俺の方が早い。でも馨は反則級の性能差でそれを埋めている。だから全力を尽くしてひたすらに技量を研ぎ澄ませて行くしかない。

振るう、弾かれる、踏み込む、振るう、弾く、更に踏み込む、振るう、弾かれる、振るう、弾かれる、振るう、振るう、振るう振るう振るう振るう振るう!!

疲弊も差も知らぬとばかりにひたすらに剣戟を続ける。捕まえた

ら離さない。離したらダメだ。掴み続けて引っ張り上げる。でない
と――

衝撃。

剣戟の最中、俺を蹴って後方へと飛んだ。

離される……！ そう思った時には無我夢中で動いていた。左手を柄から離してズボンに付けていたホルスターの中身、”それ”に手を伸ばす。そして――投げる。

ヒュツと風切り音を鳴らして飛んだ”それ”……手裏剣に目を丸くする馨。飛ばした手裏剣に追い付いて斬るように踏み込む。

二段構え。どちらかに対応すればどちらかが辛い二者択一。

……が、奴は対応してみせた。

短刀を素早く投擲し手裏剣を迎撃して、斬り込む叢雨丸を虚絶で無理矢理に防ぐ。鏢迫り合った状態から離脱し、横薙ぎを構える。対する馨は逆袈裟の構え――

ならばと横に構えたまま更に踏み込む。

もはや剣の間合いじゃない。短刀の間合いだ。袈裟にしる逆袈裟にしる、これじゃ当てたとしても柄で殴る形にならざるを得えない。それがわかるから馨は格闘に移行しようとするし――俺は肘を刺す。

ガクンと馨の体勢が崩れる。踏み込む俺の方が距離が近い。

「はあっ！」

その体勢から逆袈裟を一閃……！

途端、肉を裂く嫌な感触。自然と浅い、と感じてしまった自分に対して嫌悪感すら覚える。

肉の塊を切ることはあれど、包丁がどんな入りをもさして浅いも深いも感じなかったのに……今ハッキリとわかった。

――自分の性格とは真反対な素質、適性。

わかりたくないのにわかってしまう、そうではないのにそうである、矛盾しない矛盾。

散々馨は「オマエの方が剣の才覚は上で、オレはゴミみたいなモンだ」って言ってたけど……どうもそういうことらしい。

確かに俺は……剣の才覚もあれば、剣に適した素質があるようだ。まともに動物すら斬ったことなんてないのに、そんなことがわかるなんて。

「ちィー！」

「——っ！」

僅かな隙。

それを逃してくれる馨じゃない。被弾した瞬間には切り返し、胴が袈裟に斬り裂かれる。ただ咄嗟の反撃だったのか、流血こそしているものの動かして痛みを伴うわけではない。

互いに大きく離れて、一息。

そして同時に、踏み込んで同じ動作をした。

突きを迎撃する突き。片手で放つそれは、突き刺して斬り捨てる為の第一歩。

けれど両者が同じ動きをすれば——

激痛が左肩から走る。見る必要なんて無い。虚絶の刃が俺の左肩の上部を斬り裂いたんだ、

それと同時に、馨の左肩に叢雨丸の刀身が滑り混み、刃の部分で肩の上部を斬り裂いた。

熱い血が出るのを感じる。それでもと堪えるが膝は崩れ落ちる。

追撃をさせない為に無理矢理に左への横薙ぎ——当然ながら後方へ飛ばれて回避される。

鮮血の滴る叢雨丸を見て、ああなんて罰当たりな……なんて内心で苦笑する。

神剣で友人の身を断とうとするとか、首を斬られても仕方ないくらいに酷い事だ。——けれど、そうしなきゃ馨の本当の願いは叶わない。

……それが、イナガミたちからの罰なのかもしれない。苦しんで殺し続けていたのを露知らず、生を謳歌していた罪への。

でもそんなことはどうでもいい。

罪とか罰とか知ったこっちゃない。過ぎ去って飲み込んで終わつた程度の話が、今を生きる俺たちの邪魔をするんじゃない。

俺は馨の手を引つ張って、常陸さんの所へと連れ戻す。ただそれだけだ。

その次の瞬間、左肩が燃えるように熱くなった。

何事かと目を動かせば、青白い輝きが湯気のように昇っている——傷口が神力で無理矢理に治されている。

——ご主人！ 叢雨丸が吾輩の制御を振り切って……！ まだ平気じゃと言っておろう！——

そっか。

……なら、わかった。制御に集中して。あつちは、今はいい。火力は俺一人でなんとかする。

——……信じておるぞ——

任せろ。俺はお前の相棒だぞ。

互いに向き合う。そして睨み合う。向こうも肩が治っていやがる。当たり前か。そういうのが出来て当然なんだから。

「……将臣、どうもそのじゃじゃ馬がオマエの顔を見て中々に暴れるようだな」

「だったらどうする」

「オマエたちを愛す殺すのはこのオレだ。他の誰かに愛殺されるのは我慢ならんさ。だから……もしもそうなるならば、対等に行こう」

「対等だと……!?!」

「ムラサメ様が離れ、その神力の矛を収めるならオレもまた虚絶を離し、この呪力の矛を収めよう。——互いに純粋な剣戟勝負だ」

ここでようやくわかった。

本当に馨は……愛情表現が殺人だけなんだ。殺したいから殺すんじゃないくて、愛することが結果的に他者を害することになってしま——う——だから。

「断る」

俺は俺にとって有利になる筈の提案を、真っ向から即答で切っ捨てた。

それでは殺し合いだ。だから戦いのまま——勝負のままではなくてはならない。

そんな俺が不思議で仕方ないのか、馨はしばらく間抜け面を見せた後、ややあつてから言葉を紡ぐ。

「……何故だ？ 有利に動ける筈だろう？」

「かもな。でも俺はお前を殺したいんじゃない。連れ戻したいんだ。あと、そういう反応に困ること言うのはやめろ。俺が芳乃に殺される」

「ああ、芳乃ちゃんは結構嫉妬深いもんなア。ま、そんなこと言い出すとオレも茉莉に合わせる顔が無いんだが……」

ついそんな返答があんまりにも普通過ぎて、お互いに吹き出してしまふ。

「目の前の敵より、遠くの愛か……ホント、恋愛つてのは頭をバカにさせてくれる。オレもオマエも、どうしようもない」

「そうだな。本当に俺も色々変わったよ」

構え直す――

わかったよ、馨。お前に殺す気が無いなら、存分に隙が生まれそうだ。遠慮無く突かせてもらうぜ。

「もう二度と、茉莉を待たせたくないからなア……行くぞ将臣イツ！」

「――!?!」

来い、から、行くぞ。つまりそういうことだった。

――さつきとはまるで違う。気迫から何から何まで。

そして、迫る。隙だらけの振りかぶり。だが疾い。無茶苦茶な性能にモノを言わせた突撃。一切防御を考慮しない、極めて雑だが凄まじい一撃……捨て身の剣！

――ご主人！ 受けるな！――

ムラサメちゃんの叱責と同時にその一撃の破壊力を知ることになる。

「墮ちろオツ！」

避けられないと思って盾にした叢雨丸が、鈍い音を立てて地面に叩き落とされた。腕は痺れ、痛みすら感じ……魔技と呼ぶべきか力技とすべきか。

たった一撃。たった一撃で武器を一時的に失うことになった。

……ただの唐竹割りだっていうのに、なんて威力だ。

だが素手での戦いなら――

素早く掌底を繰り出す。

馨は振り下ろしからの横薙ぎである以上、繰り出された掌底に対しては避けるか受けざるを得ない。

それを馨は……肩で無防備に受けやがった。だが動じていない、怯んでもいない。押し殺したんだ、その性能で。

即座に投げに移行するべく、掴み上げる。そのまま背負い投げるように身体を動かして――

「が、は……っ!？」

俺が、地面に仰向けに寝そべっていた。

こつちの頭を潰す軌道を描く踵落としが迫る。転がって距離を取ることとそれを避け、ついでに落ちていた叢雨丸を拾って立ち上がる。

土を踏み抜く音と共に、振り下ろされる足が、一瞬でも判断を誤ったら死んでいたことを如実に伝えてくる。

……あいつ、投げられかかった体勢から、ただ性能にモノを言わせて背で投げ返しやがったのか。

「馨くん? ……まあ、無茶苦茶ですよ。はい。無茶苦茶です。なんかもう、酷いんです」って常陸さんが言うわけだなこりやあ。なんつー無茶苦茶さだ。

構え、駆ける――それよりも疾く迫ってくる。

中途半端に構えたまま、繰り出される威力と速度を両立した、極めて雑な斬撃をなんとかして受け流す。

そこから始まる弾けない程の威力、切り返せない程の速度を誇る剣戟と対峙する。合わせた刃の数を数えることすら難しい猛攻――それをひたすらに耐える。俺が防げるのは、まず間違いなく馨に、刀剣を扱う才覚の無いことが理由だろう。

何度目かのぶつかり合い。敢えて鏝迫り合いを選ぶ。振り回されちゃ勝ち目が無いとして、借りて来たクナイで一撃与えるつもりだったが――

ガキンと大きな音が鳴った途端、腕が動かなくなった。……いいや違う。虚絶で叢雨丸を絡め取ったんだ……！ 一瞬の空白、同時に頬に痛み。今度は殴りか……！

左手を離して負けじと殴り返す。回避不可能な距離だから別段避けられるとかは考えなくていい。当然向こうも殴り返してくるが、こつちも避けられないのだから殴られる箇所を予測して流せば——痛いけどまあ、斬られるよりマシか。

しばらく殴り合っているが、これでは決定打にならないと互いに判断して、互いに蹴つて離す。

……仕掛けるなら、そろそろか。ムラサメちゃん！

——間隔は？——

あいつは大体二拍で動くから……先を向くのは三かな。

——あいわかった——

……今度はこちらから。

敢えて呼吸を整えること無く接敵する。一見して無謀。向こうの方が各種性能に優れているんだから、劣るこつちが、自己のコンディションを常に最善に保たないのは不思議だろう。

だが、それが狙い目だ。

全体重をかけての袈裟。フェイントも無しに放ったそれなんて、磐にあつさり横に流れて回避される。

位置を確認——刀身は馨と平行。

……一拍！

敵手を確認——踏み込む前。まだ観察。

……二拍！

手元を確認——虚絶が左に構えられると同時に脚に力が込められる。……三拍！

「——今！」

刹那、俺たちの間にムラサメちゃんが現れる。

「ぼ、……っ——!?!」

目を閉じると同時に、そうしているにも関わらず光っていると分か

るほどの強烈な閃光が発生する。そして返す刀で構え――

――今じゃご主人！――

ムラサメちゃんが戻ってきたのと同時に踏み込む！

……やったことは単純極まりない。ムラサメちゃんの目くらましを打っただけだ。ただ馨は目くらましができるなんて知らない。だからこの手を使った。

そして叢雨丸を振りかぶる。それでも馨はもうすぐ完全に復帰する。だからこの一撃で。

「でエイッ！」

叫んだ。

叢雨丸が横一文字を描いて風を斬ると同時に、ヒビの入った虚絶の刀身に当たって――甲高い音と共に、虚絶の刀身が砕け折れた……！
「くっつ！」

だが刀身をへし折って打刀の平均的長さを保っている。異形の刀剣は未だ健在――だったら！

続け様に二撃目の横薙ぎを放とうとして……

「！？」

咄嗟の横蹴りで、こっちの刀身をへし折られた。

なんてデタラメな……!?

蹴り折るとかお前、本当に無茶苦茶だな！ しかも蹴り方的に言えば無理ある体勢だったのに……！

――だけどっ

循環していた神力が急に溢れ出し、暴走する神力の奔流を刃の形に無理矢理に形成し直させる。

……どうも、向こうも同じ考えだったらしい。

虚絶を構えて、その刀身に青黒い瘴気の奔流を纏い滾らせている。この感覚は崇り神と対面した時に覚えるもの――つまりあいつは、己が得物の内に燻る呪いを咆哮させている。

そして振るわれる。

青黒の、瘴気の大刃が。

左中段からの斬り上げ――斬撃を極限まで殺人に特化させた技。

瘴気を纏わせ、叩き斬る。それだけだけど人間なんて一太刀で十は殺せる……！

咄嗟に出力を上げて袈裟に振り下ろせたのは、ある意味で火事場の馬鹿力だったのかもしれない。

雷鳴のような、あるいは轟音が月下に轟く。

青白い神力の大刀と、青黒い瘴気の大刃が噛み合って弾け飛び——その衝撃でお互いに吹き飛ばされた。

「ご主人!? おいご主人! 起きんか!」

「……っ、う……いつ、てえ……」

ムラサメちゃんに引き上げられながら身体を起こして——あれ? なんでムラサメちゃんがこっちに……?

「……得物の力が強すぎて制御役が飛ばされたのさ。オレにしろオマエにしろ、得物の方が張り切ってるからなア……」

「……そうか」

互いにふらふらと立ち上がり、なんとか呼吸を整える。

天気が悪くなったのか雨まで降り始めた。開いてしまった傷に雨が染みて痛みを訴えるが、全て無視する。

「ムラサメちゃん、戻れる?」

「戻るには戻れる。じゃが、戻ってしまえば馨を殺す程の出力になりかねん」

「そっか……わかった。ここからは俺一人でやるよ」

「すまぬ、ご主人。肝心なところで役に立てないで。吾輩がもつと優れておれば……」

「ありがとうな。ここまで連れて来てくれて。裏返せば、この状況なら止められるってことだろ?」

構え直そうとして、ガクンと視界が下がる。どうも短期間で濃密な死闘を繰り広げた影響か、身体の方はもうボロボロらしい。ただけまだ終われないと気力一つで無理矢理に立ち上がらせて、改めて折れた叢雨丸を正眼に構える。

同じように立ち上がって構える馨もまた、疲労の蓄積か、あるいは相反する神力と何度もぶつかり合ったからか、見た目以上にボロボロ

みたいだ。

ただ向こうは相棒と特に何かを語らうことなく、ジツと俺が戦闘態勢に入るのを待っていた。

「——正直な事を言えばな、将臣。さっきの撃ち合いにこれまでの被弾で、杭と鎖の結合がまた弱まり出してる。ああまったく……言わば瀕死だ」

「え……？」

「クククツ、奏の中にさ、いたんだよ。まあ、今はオレの中にいるって事だが。そんなわけで実のところ、オマエと打ち合う度に虚絶を通してオレの魔人足らしめている理由が削られていつてな。大した話じゃない。オレはこの衝動に抗えるくらいには落ちたよ」

戻りかけていることをつまらなさそうに語り、そして——

「だが、オレはオレの意志でオマエを討ち破ろう」

表情を一変させた。

それは、覚悟の表情。過去の記憶の中で見た、色んな人たちが見せていた死を覚悟しながら、生を掴み取るその表情だ。

「抗えない？ 仕方ない？ もうそんなくだらん理由など存在しない。衝動だからとかそういう戯言を言う時間は終わった。魔人の生は、これが最初で最後だ。」

——オレは魔人として、人間のオマエに勝ちたい。

だからオレは、この戦いに魔人であるオレを賭けよう。オマエもそうだろう？ 自分が倒れるより先に、外敵を打ち倒す。

……オレたちの敵はオレたち自身だ。自身を賭けた決戦だ」

「確かに人としての生を求めている。魔人としての生はオレは欲しくない。でもな、魔人である以上は、魔人としての生を謳歌させてもらう。オレの意志で」

「オレが茉莉よりも、自分を優先させるのはこの刹那だけ。愛も憎しみも、今だけは何も関係無い。あるのは意地だけだ。」

さあ、オレのわがまま本音に付き合ってもらおうぞ——将臣」

遂に、馨が虚絶を逆手に持ち変える。

……本気だ。

そして衝動に抗えない自分じゃなくて、自分自身の決めたこととして、俺を倒して常陸さんを愛す^{殺す}つもりだ。魔人として、刹那にも満たない魔人の生を走り切るつもりだ。

走る気力もほとんど無い。

聞こえるのは雨音だけ。見えるのは敵手だけ。下がるはずの体温も訴えるはずの痛みも何もかもが過ぎ去っている。

馨がジリジリと近寄ってくる。だから俺に出来るのは、構えを維持して全力で迎撃することだけ。

そして……一気に踏み込んでの首狙いの一閃。起こりをしっかりと見極め、研ぎ澄まされた一撃をなんとか横に風ぐ軌道で受け流した。

続け様に順手に切り替えての横薙ぎ——疲労が先に来て防ぐには防げたが、後方へ押し込まれる。

追撃の袈裟。この一撃で倒すと決めて、馨よりも疾く、鋭く、袈裟を打つ。

「ぬうう……っ！」

鏢迫り合いは一瞬だけ——限界が来てお互いの得物が弾かれて飛ぶ。

瞬間、馨は足元に落ちていた短刀を蹴って上へと飛ばし——掴んで突き出す。

俺が姿勢を低くして懐に飛び込んだのとほぼ同じ。一旦下がると思っ放った突きだったのか、左頬をその刃が斬り裂いた。

修復するだけの神力を失って開き出した傷の痛みと疲労を無視して、右袖に仕込んでいたモノを取り出して手に握る。

……それは常陸さんから手裏剣と一緒に借りてきたクナイだ。それを馨の腹に突き立て——決着は一瞬だった。

多分、馨は勝ちを急いだんだろう。だから俺より早く動き過ぎて、悪手を取った。

とても分厚い紙一重の差。頬の傷の痛みでわかる。この一撃は、届いていれば俺の息の根を止めていたということに。

何で敗れたのか——その答えを探す為に視線を落とした馨が、ふっ

と笑って。

「……ま……こ……」

そう呟いて。

クナイを引き抜くと同時に、仰向けに倒れた。

「……ムラサメ、ちゃん……後は……」

お願い、とも言えずに。

俺もまた、身体が崩れ落ちると同じくして意識を失った。

Chapter 7 福音輪廻

目覚

あれから一週間も経たないうちに彼らは目を覚まし――

……馨が閉じ籠った。

――またかと。

――もう何回目だと。

――本当にこいつはと。

――いい加減にしろよと。

……まあ、どうせ自分は許してしまうのだろうか。

馨が引き籠もった話を聞いてみづはは、あの何とも言えない少年が、それこそ勝手に物を買ってしまった幼子のように「ごめん……オレ……」と俯きながら呟く姿を幻視した。

……可愛くない。

「……あー、全くあいつは……」

「でもみづはさん、あんまり馨くんを責めないであげて下さい。きつとワケが――」

「流石にわかってるよ。でも閉じ籠るってさ……」

茉莉の擁護を理解できるが、それにしたってお前家に閉じ籠るとかなんだよ本当……と思わざるを得ない。大方あのバカの事だから、茉莉達が見舞いに来たタイミングで狸寝入りでもかましていたのだからと当たりを付け――ため息を一つ。

馨と将臣の意識が回復したのはほぼ僅差というか一日違い。二人が連れ込まれた時、もう既に傷の大半は塞がっていたが、意識そのものは回復してないのでとりあえず寝かせておいたのだ。

そして馨は将臣より二日早く目覚めて夜中に帰宅。将臣が目を覚まして、リハビリ――というほどでもないが――を始めたくらいに連絡を一報入れたが、それからというもの、一切顔を出すことはなく。

ましてや、茉莉が訪ねても顔を出さなかったというのだから、その重症っぷりは推して知るべしというところだろう。

「カオル……大丈夫でしょうか」

「どうだろう……流石にアタシ達じゃ理解できないことだろうから」

茉莉にも応えず、記憶がかなり朧げなので話してくれと願うレナや芦花にも応えない。芳乃が電話をかけても「ごめん」とだけ。

将臣に問題無いと判明したのと同時期にそんなことを知ってしまつたみづはの心労は察するに余りある。

まあそんなわけで将臣、芳乃、茉莉、レナ、芦花、ムラサメは頭を抱えて、泣く泣くみづはを頼りに来たのだった。

「みづはさん、馨さんは……」

「ああ、当たりは付いてます芳乃様。それにさしものあいつとて、私か中条先生からの電話には必ず出ますから」

不安そうにする芳乃にいつものことだからとさっと流し、しれっと馨という人間の持つなんとも言えない点を暴露しつつ、電話をかける。

「もしもし？」

『……駒川……？』

聴こえてきたのはひどく震えた声。本当に悪事のバレた子供のようだ。訪ねてきた全員には静かにするようとジエスチャーして、こっそりハンズフリーに切り替える。

「馨」

『うん』

「どうしたんだい」

『……なんでも』

しよげた声でこの反応。切り込むしか無いと判断してみづはは一気に踏み込んだ。

「これで何回目かな。心理的な面でも物理的な面でも閉じこもるの
は」

恐らくは心理的には閉じ籠ったフリをしているのだろうと当たりを付けつつ、更にズカズカと土足で踏み込む。稲上馨という人間が如

何に面倒くさくて、勝手に迷走して勝手に変な事を始めるのかを知るからこそ、強引に引つ張ってやらなければならぬとわかっているからこそ、彼女は逃すわけにはいかないと言っていると踏み込んで行く。

「話したくないのはわかるさ。色々思うところあるんだろ。でもいい加減みんなに顔だけは見せたらどうだい。家出少年じゃあるまいし」
せめて顔は見せろと。その上で待つてくれなり言えればいい——それができない人間ではない筈だと伝えてみると、帰ってきたのは長い沈黙。

ややあつて、何かを観念するかのようになり、馨は“それ”を語り始めた。

『手に、残ってるんだ。斬った感触と一緒に、歓びが。これこそが魂が求めていたものだつて。オレは今、生きてるつて——そう思った。誰かを愛して、誰かに愛されているつて思った。こんなにもすごいんだつて、魔人の生命つてのはこういうものなんだつて……』

それは完全に手にすることになった、魔人の性の甘美な愉悦への恐れ。恐らくは止められるとしても、完璧主義的な面が邪魔してその可能性すら恐れているのだろうと読む。

『……オレはオレが怖い』

そしてそれは当たっていた。

震えた声は何よりも如実に語っている。

取らぬ狸の皮算用に近い感情を持って余して、処理しようにもそれが愛情だからと困り果てている。茉莉に求めれば応えるだろうと、彼女を理解しているが故の恐怖。

「そうか。でもそれは仕方ないんじゃないか。元より君はそういうモノだろう？　そこにそうしたものを見出すのは自然なことだ」

『だから怖いんだよ。とても自然だから』

「止められるとしても、起こり得るもしもを恐れている——なるほどね。でもさ、有地君に負けた君に常陸さんが負けるかい？」

ただ。

純然たる事実として。

——全てにおいて有利であった将臣との対決に、愛す^{殺す}ことを目的に

挑んだ結果、敗北した譬である。茉莉との模擬戦では何度か勝っているが、あくまでも愛情表現に過ぎない攻撃とまるで性行為にただならぬ拘りを持つかのような態度では、茉莉にその刃を届かせられるかどうか怪しい。

『……いやまあ、そう言われると確かにそうなんだけど……』

もちろんそれがわからない譬ではないので、モゴモゴとした返答。聞いた全員がもう「ああ、こいつ何も変わってない」と思う。また勝手に拗らせて悩んでいるだけだ。いい加減に相談というものを覚えて欲しい。

……勝てるかどうかで言えば五分五分。互いの手の内を知り尽くしている為、勝敗を分ける差は取る戦術と対応を間違えないか程度。話を聞いている茉莉だって、殺し殺されでは譬の圧勝だが、殺る気の無い戦闘では負ける筈は無いと確信している。

——何故なら、負けた模擬戦は大抵譬が「勝ち」を狙ってくる……つまり勝利条件を満たすことを目的としてその性能を発揮するからだ。

単なるルール無用の殺し合いが彼の愛情ならば瞬く間に愛される。だが、対等な立場と対等な能力での戦闘の結果殺すことが愛情ならば……どうして負ける要素があろうか。

秩序の中の無秩序こそ最強たる稲上譬の強みを投げ捨てているのだから。

さでどう置んだものと頭を回転させた時。

『だから言っただろう？ お前が殺せるのは私のような怪物くらい人間を殺すには致命的に向いてないとな』

——唐突に聞こえる最凶最悪の魔人の声に、全員が困惑した。

……何故、彼女が……？

(私に聞くな！)

(ムラサメちゃん、あれって……？)

(ムラサメ様、何故……？)

(知らぬ！)

菜子は犬神に、将臣と芳乃はムラサメにコソコソと尋ねるが一柱と一人とて何でいるのかなんて知らないので宜なるかな。

で、茶々を入れてきた相手に対して渦中の馨といえは。

『うっせえ。人が話してる時に勝手に出てくるな。てかなんだ、そんなしたり顔して』

まるでそこにいるのが自然なようにあつさりど流したどころか普段の彼では出てこないような……強いて言うなら廉太郎とふざけた会話をしているような雰囲気に対応していた。

『……やれやれ、そんなに自分に自信があるのか？ 本来なら疲弊くらいしかハンデの無かったお前がああして負けたのだから、実質的に不可能だろう』

『不可能かどうかなんてわかるわけないだろ』

『確かに我々は人を殺すことなど、虫を潰すこととそう変わらん。性能だけで見た場合はな。だがお前に常陸菜子が殺せるか？ 魔人として愛せるか？ ——無理だろう。可能だったらお前を死を選ばずあの日、彼女を殺していた』

だから自分が目覚めるような事態になったんだろうと奏は語り、クツクツと笑う。

みづはは、とりあえず理解が追いつかなくなったのでその声の主が誰なのか、まずは問い直すことにした。

「……どなた？」

『伊奈神奏だよ。引き籠もったこいつに餌付けしてた』

『黙ってる！ つか人の制御を振り切るな！』

『というか生きるのだろう？ だったらなんで今更知った甘い味を振りきれんのだ。もつと良い味常陸菜子を知っている癖に』

『でも可能性が一つでもあるなら……それは消すべきだっ』

『別の意味で口ばかり。都合の良い存在などこの世の何処にも存在しないと何故わからんか……とにかく、この阿呆の引き籠もりを止めなければ無理矢理でも押し入って来い。相変わらずのヘタレなのでな』
『余計なこと言うな！ というか駒川が押し入って来れるわけねーだろが』

「そんなことは私の管轄外だよ有地君。とにかく行ってみたら？　アレ、まーた拗らせてるみたいだし」

それだけ言って、みづはは客人を追い出した。

そして彼女は、グツタリと突っ伏して一言。

「……酒の席に付き合わせるぞこのバカあ……」

立ち直ったら酒に付き合わせて愚痴の一つや二つ言ってやろう……そう決めて、身体を起こした。

「やあつと来たか……遅すぎるぞ」

特に何事も無く到着した稲上家。

その玄関の前には、あの忌まわしき伊奈神奏の姿が。漆黒の和装に身を包んだ、中性的かつ病的な美しさを持つ彼女が。

一週間程前、穂織を恐怖に落とし込んだ存在。それが何故こんなところでこんなに疲れた顔をしているのか。世の中とは不思議なものである。

「ん？　リヒテナウアーと馬庭芦花は来なかったか。まあ、彼女らとて今の馨の相手は好き好んでしたくないだろうな。とかく、やっとの客人だ。歓迎しよう」

ちなみにレナと芦花は「自分たちが行く必要の無い、出番の無いことだから」と普通に帰った。というか全身に光学迷彩付き地雷を装備した馨に発破をかけに行くには経験が浅すぎると判断してのことである。

……まあ彼女らの本音は「どうせ惚気見て終わりそうだからいいやもう」だったりするのだが。

「あんたが静かにしてるってのは、なんか不気味だな……伊奈神奏」
「嫌われたものだな。いやお前たちに好かれるつもりも元より無いが」

声をかけた将臣をまるで勝手に住み着いた野良猫か何かをあしらすように対応して、奏はジロリと菓子へ視線を向ける。ただ興味がありそうだったのは一瞬の事で、次の瞬間には視線を芳乃とムラサメに向けた。

「……なんだ、まだ気付いてないのか」

「なにがじゃ」

「まあ、諸々のことは後にしよう。私や京香が何故消えていないかなどはな」

「やはり何か企んでいるのですか」

警戒心を露わにした態度。思わせぶりな言葉を吐き続けるこの女へは妥当な対応であるが、言われた当人はさしてどうでも良さそうに受け流し、訝しむ視線に対しては堂々と告げる。

「いやまったく。敗者には敗者の矜持がある。故に大人しくしてるさ。それに、生存競争にも敗れた。ならば勝者の助けになるように動くのが、敗者の務めというものだろうか？」

敗者の矜持——彼女は己を敗者と位置付けた。かつて血を分けた宿敵に敗れ、敗者復活戦の機会を与えられてそれには勝ったものの、生きる事を求める子孫に敗れた。

自身が何者か……その存在として相応しく生きるモノ。星の光を喰って生きる魔人ならば他者を踏み躪り、敗北者ならば敗北者らしく逆襲を試みて、生存競争に負けた弱者ならばそれらしく勝者の養分となる。

伊奈神奏とは、つまりそんな性格の存在であった。

「さあ行け。私は寝る。流石に疲れた」

それだけ言って彼女は消えた。

大方、馨の中に戻ったのだろうか……

とにかく彼女は放っておいて、答えを目前とすると尻込みするヘタレのケツを蹴りに行くかと家に入っていくのだった。

勝手知ったると言わんばかりにリビングを抜け馨の自室へ。先頭の菜子は有無を言わせずに扉を開けると、そこには観念したように馨がポツンと布団の上に座っていた。

「……馨くん」

「別に大した訳じゃないんだ。今更、自分の在り方に悩んだとかそういう訳じゃない。でも……」

視線を動かして、小さく呟く。

「茉莉の事を想うと、この手に残る、あの暗い愉悦を嫌に感じて……それを求めてしまわないかって、怖くなった。だから閉じ籠った」

「相談したっていいじゃないですか。水臭いですよ」

「そんなこと言われても、だろ？」

「まあそりゃ否定できないけど、しないよかマシだろ馨」

「ごめん」

悔やむような謝罪。

そして馨は何かを振り切るように立ち上がった。

「……けど、オマエを見てよくわかった。怖いこととか、なんかどうでもよくなつた。茉莉——オレやっぱり、オマエとずっと一緒にいたい」

ゆっくりと茉莉へ近付いて、向き合つて。

意を決した表情で——

「二度と離さない、離れない。正しいことは痛いから……オレを人足らしめてくれ、苦しめてくれ、茉莉」

「うん。わかつた。ワタシはずつと、アナタにとつて苦しめ続けるモノ都合が悪い女の子にいるから。だから、ワタシを殺そうとして、馨くん」

互い、本音の愛情イカれた感情をぶちまけた。

既に腹は決まっていた。だつていうのに中々擦り合わないのも、人間ということだろう。

永遠の愛を誓い合つた夫婦でさえ、喧嘩の一つや二つするのだから。馨と茉莉の付いては離れてはの距離感など、別段亀裂が入るほどのことではなかった。

これでひと段落か……と、ここで茉莉は気になっていたことを尋ねた。

「でもなんで目が覚めた時にお見舞いに来たワタシに気付かなかつたの？ みづはさん不思議がつてたよ？ ほとんど同じ時間だったのにつて」

「へ？ 駒川が来た後のことか？ あー……そんな時、二度寝してたわ——は？」

魂だけの存在だからな。回線も違うし、階層も違う。自発的に出すのが手っ取り早い——

そーかい……なんか、そっくりだなあ。ホント。

ちなみにレナと芦花さんは休憩時間の合間に尋ねてたそうで、記憶がぷつぷりと途切れている事の真相はまた後で聞くとのこと。忙しい二人に無駄な時間を使わせてしまったな……如何にしても謝罪したもんか。

——私は謝らんどぞ——

オマエの所為だよバカ!

「二度寝して顔を合わせなかった影響で一週間近く閉じ籠ったのかい……僕が言うのもアレだけど、馨君は人に遠慮無く相談した方がいいよ。何でもかんでも自己完結し過ぎだ」

「はい……」

「それでええつと……結局のところ、伊奈神奏は消えてないと」

「おいおい、消えた方が良かったとでも? 私がいなければ、二度寝が原因でこいつはまた死んでいたかもしれないア? ——二度寝はもういいだろボケ! つか出てくるなアホ!! 死んでろバカ!!!」

——小学生の罵倒だなまったく」

勝手に口を取って喋り出すこのご先祖様にはいい加減にしていただきたいものだが、どうせ聞かないんだろうなあ。側から見ればただの一人芝居なので、芳乃ちゃんに至っては吹き出してる。将臣は……なんだろう、昔の事でも思い出してんのかな。遠い目してる。菜子は優しいから……あつ、生暖かい視線はやめて。

なおムラサメ様。やめてください。

「で、でもこの傍迷惑なご先祖様は静かにしてますし、消す手段はあります。オレの方の問題は……まあ、菜子と一緒に上手く付き合ってくださいよ。コイツばかりはどうしようもないので」

「そうか……色々とありがとう」

「これが仕事ですから」

事の流れは知っていても、奏に関してはオレしか知らないなのでオレの説明が無かったら完璧な把握ができなかったようだ。なのでオレ

の言葉を求めて……一方オレはと。はあ。

「馨……本当にお主なのか？ 化けられたりせんよな？」

「マジでオレですから安心して下さい —— まあ私でもあるが——
だあってろ!! —— 暇だ—— チツ。……よし。これでいいか。大丈夫です」

「のう、吾輩の勘違いでなければ全然大丈夫には見えぬのじゃが」

「大丈夫です」

「ま、まあムラサメちゃん。今はほら、なんかよくわからないけど敗者の矜持とか言ってたし」

……負けたから負けたなりの立場で色々しますってだけだろアレ。
わざわざ矜持とか言う程か？ カッコ付けやがって。

—— 黙れ。私はお前に負けてなどいない。私は朝武秋穂に敗れたのだ——

はいはい負けてない負けてない強いいでーすねー。

——……というかまさかああいう隠し方をして、こっちの端末を減らすとはな。お前の案か？——

は？

——ん？ 御神体とやりに綾……ムラサメの肉体を隠したのはお前らではないのか？——

「はあ?! おい待て?! ムラサメ様の肉体が御神体に保存されてる!？」

奏オマエなんだそりやア?! 初耳だぞ?!」

思わず訳がわからずに家にいる時のように叫んでしまう。当然みんないるのでそれが聞こえる訳で——

「吾輩の肉体じゃと?! もう何百年も前の肉体が何故あるのじゃ！」

おかしいじゃろ!？」

「確かに僕らは御神体の中身を確認するなんてこと、恐れ多くてやったことなかったね」

「それが本当なら、ムラサメ様を元に戻して差し上げることができるかも……?？」

「二つ区切りもありますし、ここは確認してはどうでしょうか。……あと大きな独り言だね馨くん」

「なんだこの……なんだ？　なんか事態が今日は急転してばっかだなあ……二度寝といいムラサメちゃん肉体といい……」

てんやわんやと、オレたちは本殿に急いで……そしてオレたちは、ムラサメとなる前の彼女を見た。

——正しくは幼女の裸体を見た、だな——

やかましい！

再び居間に戻って、オレたちは次に舞い込んできたとんでもな話の対応を考えざるを得なくなつた。

「あれ程の神力に満たされた空間なら、時の流れを遅くするのも訳ないと思ひました」

「オレは祈りにも似た憎しみを感じた。あれは間違いなく……アナタの両親の抱いた感情だ。娘を生かしてやることできない憎悪を、神力に転じて”生かし続ける”方向性に変えてる」

——凄まじい神力だった。

奏がレナの治療に使つた神力の出所はあそこだろう。足りない分は近くから取る、とは言つていたが結構な量を取つたにも関わらずなお余りある量。ただしそれが暗い感情を転じて祈りと成しているからこそ、オレは別段不調を起こすことはなかつた。

アレがもし正の感情に由来していたら、踏み込んだだけで死にかけたやもしれん。

「……脅威は去りました。ムラサメ様、人にお戻りになられてはいかがでしょう。あなたには人の幸せを掴み、人としての生を歩む権利がある」

「お主そこまで……じゃがな安晴。吾輩の肉体は病に侵されておる。それも医者が匙を投げたほどだ」

ムラサメ様の言葉はごもつともだ。

……当時の状況では、と付くが。

「ならばムラサメ様、ここは黄泉に近い存在に聞くとしようぜ」

「いきなりなんじゃ馨」

「はい虚絶——」

すると出てくるのは大人になつた茱子みたいな見た目をした我が

相棒。今更気が付いたが……まあそういうことか。

ちくしょう、顔が良いから見惚れちまう。やめろ流し目するなエロいんだよ！

「……あの肉体であれば、そう簡単に死にはすまい。だが放っておけば、だろいな。人間の治療技術の発展に期待か」

「だ、そうだ」

「要するに生かすも殺すも貴様ら次第——せいぜい悩め」

あつ、奏が出てきやがった。

……まあ虚絶は解説を終えるとすぐに戻ったので煽られることもなかったのだが。

さて、悩んでいるムラサメ様にオレなりに背を押すのでしょうか。

「ムラサメ様、いつぞや言いましたが、オレはアナタに幸せになつて欲しい、生きて欲しいんですよ。先にオレとか言つてたの覚えてますからね。次はムラサメ様ですよ」

「吾輩は逃げたのじゃぞ。そんな吾輩が……」

「当然に理由はわかりますがね、押し留めるのはよくないですよ？」

「うぐつ……いつぞや言つたようなことを……」

あの時は恋心だったけど、本質的には大して変わりない。ああクソ、なんか鏡見てるみたいでムズムズする。

困つたようなムラサメ様を見て、すかさず他の面々が畳み掛ける。

「500年ですよ。ムラサメ様は今すぐにでも報われるべきです。報われてくれないと私、困っちゃいます」

「俺はムラサメちゃんやんが人として、色んな人と接するのを見たいな。俺たちだけじゃなくて、もっと多くの人とさ」

「ワタシも戻るべきだと思います。それに彼だって、もうこんなことに付き合う必要は無いつて言ってますから」

「確かに吾輩は生きたい。じゃが、永くを生き過ぎた。突然に機会を与えられてもやはりこう……躊躇してしまうのじゃ」

すぐくわかるが故に、それにウンウンと頷く。急に機会が降つてくるとうとうして中々、秘めたる感情を発露させたくても発露できないのだ。

——いやホント、なんか自分を見ているようだ。

「まあまあ、みんな一旦落ち着いて。急な話です。それに確実に治るという保証も無いから、一度診てもらってから、改めて考えればいいんじゃないかな。それでよろしいですか」

「うむ。まあ、それならば整理も付きやすいじやろうな」

安晴さんの提案に同意して——それを翻訳するのはオレたちだが——そんな訳でとムラサメ様がオレを見る。

「馨よ」

「なんすか」

「……で、どうやったら吾輩は自分の肉体に戻れるのじゃ？」

「あ、それ俺も気になった。戻る前提で話してたけど、その辺全く前例とか無いだろう？」

……え？ マジ？

もう面倒くさくなったのでご先祖様を無理矢理に叩き起こす。

「——何、簡単だ。肉体と靈魂が接触すれば惹かれ合う。特に生前の肉体とその肉体が似ていれば問題無く戻れるだろう。私がリヒテナウアーの肉体で、馬庭芦花の肉体を使う京香に敗れたのはそういうわけだな。勝手が違うと肉体も魂もすぐにズレる。だが当人のモノであれば」

「すんなり行く、じやな」

「そういうことだ。おい、起きろ馨。わからんからと私に押し付けるな——こき使われるくらい了承しろっての」

ただ問題は、だ。

「なあ将臣」

「なんだ馨」

「いくら彼女同伴と言ってもよ、少女の裸体を見るのはマズいよなあ。肉体年齢は然程変わらないだろうし」

「だよなあ。安晴さんだと親子くらいの差があるから平気なんだけど」

オレたち男組にムラサメ様の白く美しい肌は、少し刺激が強すぎる。

新しい扉が開きそうなくらいには……

人返

——肺炎。

てんで病という物に縁の無いオレだが、婆様が終わり側に患っていた病であるが故に、その存在は深く印象に残っている。

あの後、肉体に帰還したムラサメ様は激しく咳き込んで事態は一刻を争うものへ。心配のあまり将臣は着いて行ったが、待機したオレは大方そんなこともあるうかと予測してあらかじめウチが懇意にしているタクシー会社に連絡をして既に車を回していた。

それにさっさと連絡できるように茉莉の影に虚絶を潜ませているのも吉と出た。

そんなわけで駒川の所には移動中に急患だと告げておいて、到着次第診てもらったところ、ムラサメ様が患っていた病が合併症まで起きている肺炎だと判明したのだ。

ただ比較的深度は浅かったのか、現代医学ならば投薬しつづ一ヶ月程安静にしていればなんとかなるといふ。——医学の進歩は素晴らしいものだ。

しかし時間を巻き戻すかのように作用していた神力の影響なのか、それとも……まあとにかく、なんというかぎっくり言えば奇跡のような状態を保っていたということらしい。

なおオレの件については一言。「覚悟しておけよ」と。……はい。

「とりあえず、ムラサメ様はまだ重病人だ。薬でだいぶ楽になることを考えると、治る兆しは十二分にある。けど衛生面にはきつちり気を使ってくれ。風邪なんてもらって来られたら本当に困る。私も定期的に診に行くよ」

「はいっ」

駒川の報告と警告に勢いよく返事をする将臣。実のところ、滅茶苦茶に動揺していたのはコイツだった。それはもうすぐくて芳乃ちゃんも微妙な顔をして妬くくらいには動揺していた。

「どうか仕方ないことなのだが、朝武親子はこういうことに嫌な慣れ方をしているので自然と冷静になるのだろう。」

オレや茉莉は……冷静を失ってはならないと幼少から叩き込まれていたのが原因か。

「けど、よかった……本当によかった、ムラサメちゃん」

「ご主人。そんなのでは芳乃に妬かれるぞ？」

「俺はお前の相棒なんだぞ。心配に決まってるだろ」

「まあまあ。さて、虚絶を貸し出しやあ大体の問題は解決できるな。いつまでもオレたちが一緒って訳でもないし」

「そうじゃな。しかし吾輩、何処で安静にしておればよいか。馨の家はそもそも遠いし汚いしエロ本転がっておるし」

「言わないでえ!? 掃除するから! 後で手伝って茉莉お!」

「わかってるから大丈夫だよ」

しようがないなあ、といった感じの優しい表情の茉莉とは対照的に、いい加減にせんか阿呆、と言わんばかりの表情をしているムラサメ様。いやホントごめんなさい。ズボラでごめんなさい。あとエロ本についてはスルーしてください。

「まあ、この面子の中だと僕らの家だろうねえ。遠いことには変わらないけど。部屋は……」

「将臣さんの部屋でいいんじゃないかしら」

安晴さんの言葉に反応したのは芳乃ちゃん。しかし一人部屋と言わずに将臣の部屋をチョイスするのは中々意外というか。そんな感じで視線を集めているが、彼女は至って普通に。

「だってムラサメ様、一人だと不安でしょう?」

「芳乃……お主……」

「私と将臣さんが隣にいますから」

とても綺麗な笑顔でムラサメ様に語りかける芳乃ちゃん。善意100%なのは目に見えてわかるのだが、彼氏彼女の男女に面倒を見られるというのはムラサメ様的には色々あるようで、相棒である将臣と一緒にいられる嬉しさを見せるものの、なんとも言えない複雑な色もある表情に。

「吾輩ダシにされてるような気がしてならないのじやが」

「ダシ……?」

「忘れるのじゃ」

芳乃ちゃん……キミつて奴は……

見ろ、安晴さんなんて言ったらいいかわからない顔してるぞ。オレと茉莉子？ 面白いからニヤついている。

——おい、良いのか。あの女が人に戻れば私と京香を消すことも、ましてや転生をどうにかすることも困難になるぞ——

その件？ とうに代役は決まっただろう。そんなに嫌なのか？

——いや、別に……——

煮え切らない態度。同情なぞしないが気持ちはわからんでもない。

「オレはオレで色々やらなきゃな」

「ん？ ああそうか。千景さんまだ戻れないんだっけ」

「ああ。数が結構多いって話だからな、今年の秋口にや帰ってこれるらしいけど……ウチは現状役立たずだ。話は流してるが、さて」

しかし、諸問題が解決してムラサメ様の一件も終わりを告げたら、今度こそ向き合わなきゃいけないのは穂織の今後だ。

そもそも現状ですら目玉の刀がなくなっただけで客足が遠のいている以上、全く楽観視はできない。

さて、どうしたものか……オレも会議に顔を出さなきゃならなくなってきたし、茉莉子に黙ってることで邪推されるのも面倒だな。

「なんの話だ？ 馨」

「ま、後で。とりあえず今はムラサメ様が先だ。安静にしてもらおうぜ」

だが余裕の無さで言えばムラサメ様の方が余裕無い。実際優先するべきはムラサメ様だろう。

そんなわけでオレたちはまたタクシーで戻るのであった。

しかし——

「ご主人、大丈夫じゃと言っておろう」

「でも心配なんだ。いいだろ？」

家に戻っても将臣はムラサメ様に付きっ切り。心配性というか、甲斐甲斐しいというか。

布団にねっ転がったムラサメ様が苦笑しているのに、将臣と言えば

本気でハラハラしているというかなんとか。一緒にいる芳乃ちゃんも少し困ってる。

「もう将臣さん、心配すぎですよ」

「けど芳乃、ムラサメちゃんは病人なんだし……」

「ご主人、落ち着け。吾輩はここにいる」

「いや、だつてさ」

オロオロとしている将臣だが、見てる分には微笑ましい。だがまあ笑い事ではないのはオレもわかる。

弱い面を見てきた相棒が再び肉体を得て病と向き合うのだ。そうした場面になれば、多分オレだって色々気になってウロウロする。一瞬菜子が風邪引いた姿を想像したがそれだけでだいぶ焦りを感じるんだし。

ムラサメ様の手を取り、頭を撫でてる将臣だが、良き兄貴分に見える。もしかしたら小春ちゃんが風邪引いたりしてた時なんて、廉と一緒にこんな風に看病してたのか。

キュツとムラサメ様は手を握り返し、少し照れ臭そうにしながら、ちよつと芳乃ちゃんに対して申し訳無さげに――

「なあ、ご主人。……」綾、と呼んでくれぬか」

「――綾ちゃん？」

「ちゃんはやらぬ……と言いたいが、ああ、これは心地良い響きじゃ」

満遍の笑みでそう言うムラサメ様は、心の底から安心しているような雰囲気だった。本当に安心し切って、とても心地良さそうに。

「ほれ、芳乃も呼んでくれぬか？」

「綾様……でいいですか？」

「硬い。もつと菜子や馨に呼びかけるように柔らかくじゃ」

「あ、あ……綾、ちゃん……？」

「うむ。うむ。ありがとう、芳乃」

恐る恐る、と言う感じに。だけど何処か嬉しそうに。

またムラサメ様が笑顔を見せて――今度は離れて見守るオレと菜子に視線を向けた。

「馨も菜子もじゃ」

「綾ちゃん?」

「ふふっ、良いぞ良いぞ。さあ茉莉」

「では、綾さんと」

「むっ、少し他人行儀な……いや、これはこれで良いぞ」

更に顔を綻ばせるムラサメ様だが、ウトウトし始める。

「吾輩は少し、眠る……」

「うん。わかった」

「ああ、こうして人に見守られながら眠るなど……もう……ないかと……」

そうしてスースーと可愛らしい寝息を立てて、満足そうに眠るムラサメ様を見て、将臣は頭を撫でながら穏やかな顔で一言。

「——おやすみ」

様になっっている将臣と芳乃ちゃんを眺めながら、オレは横にいる茉莉に声をかける。

「いやあ、すごいな。ものすごく兄貴か親父って感じ」

「本当に板に付いてるといいうか、すごいよね。なんだかお父さん思っ出しちゃった。今日は寝付くまで頭撫でてくれたりする?」

「するよ。手も握るし、添い寝だつてする」

「ふふ、ありがと。あはっ」

嬉しそうに微笑む彼女がとても可愛い。

オレの彼女がこんなにも可愛いらしいのは天使の生まれ変わりか何かなのですか?

茉莉たそや、ああ茉莉たそや、茉莉たそや。

愛おしい程殺したくて、彼女を愛したくて仕方なくて、とても愛おしくて仕方ない。

……支離滅裂だな。いや狂気なんだからそんなもんか。

「……寝ちゃいましたね」

「俺はもう少し側にいるよ。芳乃たちは戻ってていいから」

「いえ。私も側にいます。約束しましたから」

「ならオレらは撤退するか。お邪魔虫だし」

「だね。ではお三方、ごゆっくりー」

そんなわけで顔を赤らめた二人に手を振りつつ、オレたちは居間に戻る。

そして気になったことを尋ねる。

「えっと、オレンち？」

「？ お掃除するんでしょ？」

「んまあ、それもそうか。パンケーキ、作るよ」

「あとでムラサメ様にも作ってあげてよね」

「わかってるって」

甘い物を食べられることからか、茉莉は中々見れないほどに喜んでいる。

食事も久方ぶりなんだ。いい具合に飯が食えるようになったら作ってあげよう。それに芦花さんに頼んでパフエとかいいかもなあ。ま、その辺りは将臣が甲斐甲斐しくやるだろうな。

……本当に、人生何があるかわからないモンだ。

複雑に絡まっていた糸は解けたし——その途中で余計なモノまで出没したが——一筋縄ではいかなかったが、しかし良い方向に向かつて行ったし、これからも向かって行くだろう。こうなった理由と言えば将臣の登場であって……ふむ、運命の思し召しという奴かなコレは。

だが事態をややこしくしたのはオレたちでもあるから少しこう、詫びたい。

そんな感じで思考を回していると、ヒョイと顔を出した安晴さんが声をかけてきた。

「あ、馨君。千景からは？」

「持ち帰って伝えてますが、浮かぶのは採算が取れないものばかりと」「そっか……まあ難しいよね。古いのがウリなところで新しいのって言ったってねえ」

「あの、二人は何のお話を？」

「その件だけど、茉莉君。晩御飯の時にムラサメ様も交えて話をするよ。それでいいよね、馨君」

「流石に硬直してしまってますしね。少しでも視点が欲しいのは確かでしょう」

さつくりと話をまとめて、直後自分もここで晩御飯を食べることになっていることに気が付いたが、流石にこのタイミングで色々突っ込むのは野暮ってモノだろう。というか前にも似たようなことがあったが、あの時と違って敢えて離れる必要も無い。

「隠さないでよ」

……が、隠し続けるわ一人で抱え込むわの実績をほぼ常に積み重ね続けて生きていたオレなので、菜子から物凄いジト目と低い声で念を押されてしまう。自分の蒔いた種とは言えども頭が痛い。

「ちゃんと話すから勘弁してくれその顔は。……でも掃除とパンケーキは後日な」

「あ、それもそっか。でも別に今日お泊りしてもいいよね。着替え置きっぱだし」

「もうウチ住むか？」

「あは。まだ心の準備出来てないから、待って」

可愛らしいウインク付きのお願い、という両手を合わせたジェスチャー。同居がダメで泊りが良い理由がイマイチわからないが……こんなにも可愛い彼女のお願いだ。受け入れる以外などあり得ない。

「はいはい」

わかってますよという意を込めて、苦笑するようにそう言ったが――しかし何故、笑いながらこう言うと菜子は決まって、何処か楽しそうな顔をするのか。

いや楽しそうというか、満足げというか嬉しそうというか……なんて言うか、ネコが足にスリスリし終わった後の雰囲気というか。そんな感じの顔をしている。

……もしかして、オレがはいはいって言うの……好き、なのか？

不思議だなあ。オマエのバリエーション豊かな「あは」より可愛くもなければレパートリーも少ないんだが。

……ま、ヒトとは不思議なものであるってとこか。

そんなわけで夕食。

実はオレ、お粥というものを食べたことがほとんど無いにんげ……

魔人だ。

七草粥かレトルトのお粥しか食べたことがなく、体が弱ってる人にお粥を作る場面を見たことはあれど、そういう風に作ることも食べることもしたことはない。

——なので朝武家で食べる菓子の作ったお粥というものは、貴重な体験だった。

「それで安晴、話とは？」

とても安心した雰囲気のムラサメ様（綾ちゃんと呼ぼうとしたら「言いづらいじやろうから今まで通りで構わぬぞ」と言われたので遠慮無く様付けさせてもらってる）は、特に何も聞いていないので真っ先に疑問を投げかけた。

「今までは事が事でしたし黙ってましたが、実は穂織の経済が右肩下がりでして」

困ったように言った安晴さんのその言葉に、一気に衝撃を受ける面々。知ってるオレは別に驚くことでもないのでお粥を食べ続ける。

「まだ深刻ではないけど、樂觀視はできない状況です」

「な、なんと……そのような」

「穂織がそんな状況だなんて……早く教えてくれてもよかったのに」

「これより大変なことがあるお前に、余計な重荷を背負わせたくなかつたんだ」

「それもそっか。ありがとう、お父さん」

……笑顔が多くなったな、芳乃ちゃんも安晴さんも。

オレの中で見てるあの人は、満足そうだが……決して姿を表すことはないのだろうな。それくらい、許されるだろうけれど。けど、彼女はきつとそうしたら……

——何考えてんだろ、オレ。

言わないって約束した。だから流石にこれだけは黙る。それだけの筈だ。だっていうのに、どうしてオレは……この人に、秋穂さんに、もう一度って……そんなことをしたら、彼女に迷いを生んでしまう。彼女の決意を汚してしまう。だから、だから……

チャンネルは向こうが合わせる気が無い。だからこの思考は通じ

てない。でも、だからって約束を反故にするわけには……

「馨くん？」

「あつ、いや……ごめん。美味くってボケつとしてた」

訝しむ茉莉を適当に誤魔化しつつ、また悩みがちな自分に嫌気が差す。クソツ……ままならねえ。

とりあえず、あの件は……京香を引つ張り出してレナと芦花さんと話させてから、ムラサメ様の事が落ち着いてからだ。そうでもしないとオレがパンクする。これこそ余計な話だ。

とりあえずのゴールを定めて無理矢理に様々な念を振り払い、飯と話に集中する。

「その原因って？」

「あー……これ将臣君に言うのも、あれなんだけど……実は叢雨丸のイベントが失くなったからなんだよねえ……」

「え」

申し訳なさに満ち溢れた一言を受けてピタツと固まる将臣だが、冷静に考えれば当たり前のことだ。いくら古く芸術的な町並みや景色、独特の雰囲気と文化、中々にすごい温泉と言ったところで……アクセスが最悪という一点で競合他者に敗北する。

小京都と呼ばれる町並み？ ——なら京都で良くね？

独特の雰囲気と文化？ ——いや大正浪漫的なモノが欲しくても

他で手に入るし？

温泉？ ——日本は温泉の名所いっぱいあるよ？

舞？ ——他でも見れるじゃん？

……ぶつちやけ、鼻屑目に見ても穂織という土地に魅せられた人々がリピーターになるくらいで、基本は物好きの来るド田舎という評価からは逃げられないだろう。住めば都とは言うが、他の田舎と比べてやや不便であるのも否定できん。それに田舎だから……人間関係も閉鎖的だ。比較的人付き合いの下手くそなオレですら、穂織に住む人間の顔と名前は完全に一致させることば容易い。

しかしそんなアクセス最悪で他所でもそれなりに見れたり楽しめたりする物だけだとしても、唯一無二の存在がある。

それが叢雨丸を引き抜けるかチャレンジイベント——まあ実情は一気に神力、生のエネルギーを溜めるためにやってただけなんだが……とにかく、岩に刺さった由緒正しい神刀に触れる機会など、世界の何処を探したって一握りの筈だ。伝説の一端に物理的に触れる事ができる……これが穂織の唯一の長所にして、最大の武器だ。

この最強の剣が、舞と温泉と景色と雰囲気と独自文化と悪魔合体することによって圧倒的なパワーとお得感に繋がり、アクセスの悪さを踏み倒してまでもかなりの観光利益を産んでいたのだが……それが失くなればただの京都のような町並み、美しい景色と温泉、大正浪漫的な服がまとめて楽しめるだけの、アクセス最悪のド田舎である。

言ってしまうえば、穂織に利益をもたらしているのは、穂織という歴史そのものなのだ。

その歴史の一つが……しかも最大戦力が欠けた。それが穂織の今だ。

「……そっち、だったのか……っ」

「そっちだったんだよね……」

それくらいしかないからそれら全てが大事。しかしどれが一番比重を置いていたのかは失って初めて気が付いた。

こういうと格好いいが事態は全く笑い事ではない。別の意味で存続が難しくなりつつあるのだ。

唾然とする将臣とそんな将臣を見てオロオロするムラサメ様。かける言葉が見当たらないという奴か。

しかし、この話を聞いた直後から沈黙を貫く芳乃ちゃん表情が、何処か決断的だったなど、お粥というものを夢中で食べるオレは気付くよしもなし。(よし、だけに)

多分、久方ぶりの生身での食事に舌鼓をうつムラサメ様と同じくらいには、夢中だったんじゃないかな。

一方で菜子は箸を止めてオレを見た。

「もしかして馨くん、ワタシが子犬になる前の、あのお祝い宴会の時くらいから知ってたの？」

「具体的には憑代完成の前から知ってたぞ。オレ、親父とお袋の代理

だし」

「そつか。そうだよね。だから茶封筒をあの時——」

「そういうこつた」

ま、言うつもりは毛頭無かったが。

だってオレはあくまでも代理。決定権も何も無い。イタズラに夕子の悪い法螺を吹くのは得策じゃないし。

——一難去つてまた一難。無情な現実よな——

オマエより夕子悪いよ。

——ま、殺せば済む私と比べて、永劫的に向き合わねばならぬというのは確かにそうだな——

で、京香は？

——ダメだ。物は試しと罵詈雑言をぶつけてみたが、うんともすんとも言わん。完全に閉じ籠ってる——

はあ、わかった。

「楽観視はできないけど、頭を回している最中さ」

「そうだったんですか」

「迷走してるのは否めないんだけどね。ははっ」

「笑い事ではなからう。いや笑わねばやれんのか……ともあれ、穂織のその後か。難題じゃのう。茉莉、おかわりを——」

「ダメです。いくらムラサメ様の肉体が当時そのままだとしても、万が一肉体と精神の齟齬が起きては困ります」

「そこをなんとか。そうだ、後でお主の知らない馨の可愛いえびそーどを教えるでどうじゃ」

「じゃ、じゃあ……ちよつとだけですよ？」

「ちよつと欲望に素直過ぎないかしら。茉莉」

「仕方ないじゃないですか。だって、恋人の話ですよ？」

ん？　なんかオレの話題で買収されたような。いや、気の所為だな。

運命とは皮肉なものだと。

——伊奈神奏の人生もまた、皮肉に満ちていた。

自分の為に肉親を殺してみたら、血を分けた妹に、彼女自身の為に殺された。死んだと思えば何故か幽霊になって生きているし、その後を追ってきた妹に封印される。

そして実に千年ぶりに目が覚めてみれば、殺す為ではなく反対の生きる為に求められる。何やら無念を抱えた残留思念が虚絶転生にいたから無理矢理に核にしてみれば、その核となった残留思念は自身の対となる一族の者。

……一々数えてたらキリが無い。

そう思い、思考を打ち切る。

(しかしお前はいいののか？ 別に、ガワを作り表に出て声をかけても、誰も文句を言わんだらう)

ただ、その核とされた者——すなわち朝武秋穂は、徹底して表に出ることはなかった。たった一度だけ出て、それで終わりである。なんののかんの言つて十年の付き合いで、自分という魔人との賭け……穂織は愛されるか否か……に勝った勝利者。その勝利者が報われること無い、というのは奏としては気に入らない。

全ての行動には、それ相応の対価と報酬が与えられるべきである。それこそが彼女の根幹だからこそ。

(別にいいの)

(何故だ？ 会いたいのだろう)

(ええ。でも会ってはいけない)

(なんだ意固地か。どいつもこいつも……)

(そういう訳ではないのよ)

京香を引つ張り出すことに疲れ、やってられるかとくつろいでいる中で不意に当たった疑問。誰だつて大切な者と再会したいだろうと語る奏だが、秋穂はそれを否定した。

(たった一度だからこそ、尊いものでしょう?)

(わからんでもない。が……だから諦めるといふのか。お前とて本心はそうではなからう。会えるならば会いたいはずだ)

(そうやって会ってしまえば、貴女たちが眠ることもできなくなるかもしれないわ)

(脅す気か)

現状この穂織に存在する亡霊たちは皆、全て虚絶転生と紐付いている。聖邪問わずだ。それもその筈、虚絶転生は単なる妖刀ではない。確かに生まれながらに呪いを込められ、数多の命を喰らい祟り神にすら通る刃となったが、そもそもその刃が殺めたのは黄泉の魔人。その魂——すなわち黄泉の杭と鎖が宿るモノなど、もはや一種の冥界と言っても過言ではない代物だ。

虚絶転生もまた負の方向性とは言えども正真正銘の神刀である。それ故に断ち切れればその対価を求め、敵手だけでなく担い手すら蝕み破壊する。

本来ならば一殺に一生の終焉を求めてなお有り余る死神の刃、死の権能……それが誰が使おうとも肉体の損傷で済んでいるのは、その対価を蓄積された魂たちが支払っているからに他ならない。

——ただ、完全なる魔人として在るイナガミならば、その対価を払うことすら必要無い。黄泉の魔人が何故、その杭と鎖の力を振るうのに対価を支払わねばならぬのか。

……それ故に、虚絶転生がある限り不穩の芽は摘まれない。奏と京香もまた、虚絶転生がある限りこの世に存在するし、狂った死の輪廻渦巻くコレに呼応して、稲上が魔人として完全に回帰しかねない。

——朝武にかけられた呪いによる、壊れた生死の輪廻の積み重ねにより覚醒した馨のように。

この神代の遺産を消さない限り、真にこの一件に纏わる負の面を消すことはできない。そしてそれができるのは、はるか格上でより純度の高い神の骨そのものとなる叢雨丸以外存在しない。

だがその管理者たるムラサメ……いや、綾は遂に解放されている。よってその真の能力を使うにはまた再び人柱が必要になる。

その人柱を、秋穂を統括人格とした、虚絶転生の中に潜む巫女姫の残留思念たちが代行する。しかし代わりに、自身のことは決して語るな——それが馨と秋穂の交わした”契約”である。

流石に生き恥ならぬ死に恥ばかり晒して、いい加減死にたい奏も、その奏を消して死にたい京香も、この“契約”を破って死にそびれるのはごめんだ。だからこのように脅しだなんだと言葉が出てくる。

(……まあいい。おい、お前も手伝え)

(京香さん、か)

(ああ。罵詈雑言飛ばしても出てこないならどうすればいい。煽ればいいか)

(私が言っても聞かないだろうし、さて困ったわね)

内面に潜む者たちもまた、そうした者固有の悩みを抱えるものだ。

(それと……念入りに、不意に繋がらないようにしておかないとな。流石に私とて出歯亀するつもりはない。お前だって、流石に自分の娘の友人たちの夜の営みなど見たくないだろう)

(それは……ええ。そうね)

そして現在宿り木となっている馨が、茉子ガチ勢すぎるというのもまた、一つの悩みだ。



その後は別に何かあったわけでもない。

ものすごく名残惜しそうなムラサメ様に後ろ髪引かれつつも、オレと茉子は朝武家を後にした。

「ムラサメ様、やっぱり寂しかったんだね」

「だろうな。見えても触れられない、見続けるだけの人生だったわけだし」

「思いつきり甘えてたよね」

「そうだな。甘えてたなあ」

「良いのか？ 泣くぞぞ？ 吾輩泣くぞぞ？」と言いなから将臣と芳乃ちゃんとで、三人で川の字になって寝ることを要求するムラサメ様を思い返すが、滅茶苦茶張り切ってるというか、甘えてるというかなんというか。

……とかく、楽しそうだったのは事実だ。

「馨くんだったって、甘えてくれていいのに」

そんなムラサメ様と比較してか、オレに対して抗議したような視線とムスツとした表情を浮かべてくる茉莉子。

「そりゃあ……アレだよ。オレほら、存在そのものが傍迷惑だったからさ」

きつとオレは、困ったような顔をしているのだろう。

人を頼ったことはあれど、真の意味で人に助けを求めたことはない。自分にできないことならできる人間を頼ればいい。挑戦して助けてくれ、なんて言ったことはない。

むしろ助けを求めるくらいなら万全を期するのが手間が省ける。実にドライな思考だ。

その上、他人に相談したところで元々どうしようもないものと昔から付き合ってきた。他者と致命的に異なる部分のことで助けを求めたとしても、どうやって助けたものかと向こうを悩ませるだろうから言わない。

ホント、よく今まで生きてこれたと自分でも感心するし、よく今まで見捨てられなかったと安心する。そして、茉莉子がこんなオレのことを好きでいてくれたことに心から感謝している。

けど口では、きつと愛してくれてありがとうなんて言えないんだろう。茉莉子だけじゃなくて、親父とお袋にも。

「……まあ、これからやってみるさ。オレなりに」
今でもたまに夢に見る。

もしも自分が至って普通で、魔人なんかじゃなかったらって。けどオレもようやく心底から渴いていた”普通”をこの手に掴めたんだ。やれてないことを、ゆっくりとやっついていこう。

——歩くような速さで。

「でも掃除とかはもう明日な。流石に遅い」

ただし。結構遅くまで居て風呂まで借りたのだ。後は寝るだけ。

茉莉子と同じ風呂に入るのも、回数を重ねれば何とも思わなくなってくる。少し寂しいが、少し嬉しい。彼女の側にいるのが当たり前になっけてきているのだから。

だが茉莉はなんでもないので、シレッと。

「パンケーキ」

「言いたかないけど太るぞ」

「有地さんは良くてワタシはダメなんだ」

「……わかったよう」

意地悪な笑顔で、意地悪な言葉に、意地悪な声色と、意地悪な仕草。そんなことをされたら断れないって知ってるだろうにそれをしてくるなんて、ホント困った女だ。

「しようがない、夜更かしだ。付き合えよ」

「うんっ」

オレはつまらないことしか言えないけど、彼女はとても可愛らしい笑顔を向けてくれる。

——恋人との夜更かしか。

今日もいい思い出に、なりそうだ。

咆哮

「馨くーん？ 朝だよー」

「……え、ん……んん……っ」

微睡みの中、愛しい彼女の声が聞こえる。

「起きないと朝ご飯食べれないよ」

そんな言葉を聞いて瞼を開けて、視線を時計へ移した。——余裕はまだある。

「……まだ、あと二時間寝れる……」

「起きようよ。ワタシ、一緒に朝ご飯とお弁当作りたいなあ」

しよげた声で、しよんぼりした表情。一瞬起きてもいいかなって思っただけ、まだまだ寝てたい。

「……ん」

「なあに？」

「寝る……」

「ダメだよ」

「……まこ……」

「甘えるように呼んでもダメだよ」

「ケーチー……ねむいー……」

だって眠いんだもん。

というか、寝てたら余計なモノを見た。だから寝た気がしない。寝る。

「起きて欲しいな」

優しく微笑みながら、まるで甘やかすように彼女はそう言った。流石にそうまでされては起きざるを得ないがこのオレのスーパーすやすやタイムを奪うのだから当然対価を払ってもらおうじゃあないか。

「……じゃあ、なんかして。後で。ケーヤク」

「安い契約だね。するから起きて」

「ん……おきるー……」

まったく酷いな。安い契約とは。

苦笑している菜子だが、その表情が何処か嬉しそうなを見ると、

コイツも物好きな奴だなとやはり思った。

……何を考えてるやら。まあ、そんなところが好きになったのだが。

——久しぶりの通学路。久しぶりに通す制服。

やや眠いが、気分はいい。晴れた気分とでも言う奴か。いやまあ、確かに迷いの霧は晴れて、頭を悩ませているのはいつまで経っても目を背け続けるご先祖様と、オレの大切な友人の母親の件だけだ。

穂織のアレコレについては、悩ませる事というよりも付き合わねばならないこと。さして重荷というわけではない。公私の切り替えは大事なことだ。

しかしご先祖様については……うん、オレは奏は好きでもなければ嫌いでもなく、ただの先祖という名の障害物程度にしか思っていないし、奴もまたオレを子孫という名の障害物程度にしか思っていないが、この件に関してはお互いに”あんなもの”とよくそこそこ上手く付き合えたものだとお互いを褒め合った。

——京香の魔性とは、”強い者の未来を奪いたい”という代物。

しかもこの強い者とは単なる武力だけでなく、精神が強い者や才能に優れた者すら入ってくる。つまり……未来が明るい者に違う道を勧めて他者からの期待を裏切らせたいと言ったところか。

殺人者としては頭一つ抜けたオレを、いつぞやの茉莉とのデート前に朝っぱらからボコしたのも一部、「殺人者としてよくできたオレを戦闘者として踏み躪ることで、自分にはそんな才覚は無いと思わせて茉莉との恋愛に腑抜けていく様が見たい」という欲望に由来するのだろう。

まったくタチの悪い……

結局結婚して子を成したのも、それが理由だろうが、同時に深く愛していたのだろう。でなければ全てを捨てて今に至るまで復讐を続ける筈もない。奏を封印し続けたのは、愉悦こそあれど本心からの復讐心だろう。

……これが魔性と、宿痾と向き合って「だがそれでも」とならばカッコいいのだが、今になつてもまだ認めたくないらしい。

何故ならば、殺そうとした相手に見せる顔がわからんという。

そんなモノ決まってる。オレたち魔人が殺そうとして殺せなかつた相手に見せる顔など、何食わぬ顔以外存在しない。誰だつて親しい人など殺したくないが——殺さなくては生きていけないのが我々だ。ならばもうそういうものだからごめんねと、けどどうにかしようとしてるんだと。そうするしかない。

……と、夢で「レナに合わせる顔ないから声かけないでよね？」とかほざいた京香にこれと共に「オレもオマエもヤツも、皆人を殺さねば生きていけない魔人なのだからいい加減認めろ」とか返したところ、キレ散らかされて夢から追い出されたのだ。

だから二度寝したかつたのだが、茉莉とケーヤクをした以上は起きるしかない。

——やれやれ……認めなければまず話にならん……——
それからどうするか、が大事なのになあ。

——出来ない妹め。それでアレに関してはどうする——
どうもこうも。

醜い部分と向き合わない限り消さんさ。流星にオレとでもご先祖がああまでダメだと逆に消したくなくなる。

——……とにかく、別に責めているわけでもないと知ってもらわねばな——

そうだなあ……クソ、めんどくせえ。

——本当にだ、めんどくさい——

……ああ、茉莉が欲しい。食べたい。

——別に、食つたところで私とあの女は繋がらないようにするから問題無いぞ?——

でも我慢しなきゃ。

まだ始まったばかりだ。ひと段落ついてない。

——我慢は身体に悪いぞ。どうせあの娘も獣のように蹂躪された
い被虐願望持ちだしいいんじゃないか——

いやいやいや！ ダメだから！ そういうの良くない！ それはなんかこう……付け入る感じがして良くない！ オレが求めたとしても、その時の気分で断られるような……そんなのでいいの！ 肉欲なんて！

——お前……それでいいのか？ 思春期男子が意中の女を喰らうことに何を躊躇う？——

いやだつてね？ ……エッチするとき、オレ人変わるやん？

——人が変わるといいうか……我々魔人は感受性が高く、それ故に色々察しやすいといいうか。なんといいうか、性感帯とかわかりやすいといいうか。お前で言えば一発で色々わかってしまうエロゲ主人公的な……

嫌だなあ!? めっちゃ嫌だなあ!? 色々嫌だなあ!? なにその、えっ!? 抜きゲーの主人公ですかオレは!? どう考えても抜きゲーの主人公にあるまじき過去と性癖ですよ!?

首絞めツクスすこ勢とかリヨナゲーですか!? 純愛リヨナとか意味不明すぎるだろ!?! あ、オレの存在が純愛リヨナみてーなモンか。

——私も嫌だよ。何が悲しくてこの宿命にして矜持ある魔人の生が、性処理用のゲーム主人公めいた特性となつて発揮されねばならんのか——

あ、オマエもヤなのね。

——嫌に決まっているだろう！ お前！ 流石にお前！ 抜きゲーだぞお前！ お前としてその愛情にして殺意なる感情がよりにもよつて抜きゲーの主人公みたいなアレに例えられるとか嫌すぎるだろう!?!——

嫌だよオレも!!

でもそれで葉子が啼いてくれるなら嬉しいんだよ！ 男の子の悲しい性だよね！

——複雑だな馨——

テメエが言わなきゃ知らなかったよお！

——すまん。でも楽しかった——

ロクデナシめがーアツ!!

「馨くんってば」

「んにゃ!? あっ、いや、なんでもないよ!?!」

ずっと黙ってるオレを不思議に思ったのか、茉莉がヒョイと顔を覗き込んでいた。慌てて弁明するも、何やら隠してるのかと怪訝な表情を向けられる。

「本当は?」

「なんでもないって!」

「馨くんってさ、嘘を吐く時目を逸らす癖があるよね」

「マジ? そんなに?」

「ウソ」

「そっかウソか……ってカマかけやがったなっ」

してやったり、と言わんばかりの顔。好き。

でもこれでオレは嘘を吐いていたことがバレてしまったわけだ。なのでどうやってここから切り抜けるかが大事。

……オマエとシたいなんて、外じゃ恥ずかしくて言えねーつつの。遠回しすぎる誘いしかできないぞオレ。

もう勢いで押し切ろう——そう考えて、オレは茉莉の手を取った。

「ま、大したことじゃないさ。だから気にしないでくれ。それよりほら、行こう。遅れるぞ」

「あっ、引つ張らないでよ。自分で歩くってばっ」

「嫌だ。今日はオマエの手を引いて行きたい。普段はオマエにリード任せっぱなしだからな。これから、オレにも手を引かせてくれっ」

嘘じゃないが、考えていたことではない。

なんとというか小賢しいテクニクで茉莉のご機嫌をとることで追求から逃げることになるとは。

チラリと様子を伺う。——満更でもなく、嬉しそうだ。オレからだからだろうか? まあ、オレだつて彼女の手を握っている今、顔が綻んでいるのだが。

ああ、笑顔はいいものだ。

それからというもの。

特に何事も無かった……訳ではない。レナから意味深な視線を投

げられて、観念したように両手を上げて「後でね」と言った以外は。「本当に大丈夫？」

「だから平気だって。駒川から聴いてるでしょ？ ピンピンしてるってき。比奈ねーちゃんは心配性だなあ」

……だが他の人から見ればそうではなかったよう。まあそもそも4日ほど診療所で寝たきり、退院して一週間閉じこもりだし。学院に顔を見せた途端に「稲上が帰ってきたぞー」とかどんちゃん騒ぎ。廉と小春ちゃんからは「そんなにピンシヤンしてるなら、本気で心配して損した」とまで言われた。

ついでに休み時間に比奈ねーちゃんに捕まって本当に大丈夫なのか？ と問い詰められていた。

……いや本当、ごめん。

「……でも、心配かけてごめん。けどオレ、本当に大丈夫だから！ あんまり油売つてると遅れるからほら」

「それもそうね。常陸さんに迷惑かけないようにするのよ？」

「ゼンシヨシマス……」

「まったく……」

呆れながら去って行つたが、いや本当にごめんとしか言えないし、善処しますとしか言えないのだ。オレ傍迷惑な存在だし。迷惑かけ続けるオレなのでひっじょーにその言葉には……領けない。

ごめんなさい、本当にごめんなさい……！

「ごめんね、ねーちゃん……」

マジでごめんね。

ボクは人を殺さねば生きられない人生迷惑大魔人です……！

「カオルー、もうすぐ授業でありますよ」

「あつと、悪いレナ！ もう行くよ」

ああ、レナに色々言わなきゃなあ。

京香とか京香とか京香とか京香とか……奏とか。

「あークソツタレ」

アレ、どうするんだよ本当に。

——……さてなあ？——

マジどうすんだよ。
アレどうすんだよ。

——ま、リヒテナウアーには我々がオーロラの向こう側からやってきたとでも言えば通りがいいさ——

……オーロラ？　なんでオーロラ？

——クククツ、どの国にも死者の国はあるということさ。そしてほら、我々は死者の国の王子……いや、下っ端？　奴隷？　……なんて言おう？——

あつ、なるほど。

……いや本当になんて言おうかね。

——……とかく、我々がオーロラの向こう側からやってきた魔人としか言えないだろうなア——

魔人って通る？

——デーモン？——

どうだろう？

——……なるようにしかならん！——

だな！

——で、食べる？——

オマエいきなりすぎない？

——食べようぜ？——

Z E ! ?　オマエ軽いな！

——だってほら、食べたいんだろ？　聞いてみたら？——

……まあ、そう、する……欲しいし。

でも色々聞かなきゃな。うん。色々、色々……廉と将臣に聞かなきゃ。

——聞くって……何を聞くんだよ——

男のアレコレ！

——……それでいいのかお前——

いいの！

そうと決まれば即断即決！

今日の昼飯は男飯だオラ！

——飯はまだ先だぞ——

うるせー!

しらねー!

——……こんなんだったかなア? こいつウ——

オレはあああああああああああああああああああああああああずうーつとこんなので
すうううううううううううううううううううううううううううううううううううううう

——やかましい!——

——うるさい!——

——うるさいよ馨君——

あつ、ごめんなさい。

!!!!!!!!!!!!

……響いたチャイムの音。

先生が今日はここまで、と告げて去る。それと同時に我々学生は飯
だなんだと急ぎ始めるのだが——

「廉兄、お弁当」

「ん? あり、またか? いかんねどうも……ありがとよ、小春」

「しっかりしてよね。いつまでも私が世話するのはごめんだからさ」

「へいへい。俺だっていつまでも妹の世話にやごめんだねつと。ん
じゃ食おうぜ将臣」

「おう。なんなら小春も含めてみんなで——」

と言いかけた将臣と、弁当を開けようとする廉の首根っこをむんず
と掴みズルズルと引きずり始める。

「唐突ですまないが今日は野郎飯だキサマら。オレのお悩み相談に付
き合ってもらおう」

「ぐ、ぐえ……おい、かつ、馨っ! 首……イ!」

「あぶつ、あぶつ!? お前また殺す……気かつ!」

「そんなわけで女性諸君。今日は女子会と洒落込んでくれ。……茉
子、埋め合わせは後でな」

「はいはい。あと、その掴み方だと首キマっちゃうからやめてあげて
ね」

「ん。またな」

忠告通り持ち方を変えて、ウインクを一つ。

微笑む茉莉が可愛くて仕方ないが、そんな彼女には言うことができない。だからこの男どもを頼ろうか。

茉莉を除いて唾然とする女性陣を背に、騒ぎ立てる友人二人を引きずっていくのだった。

「……多分外の腰掛けられる場所で食べるでしょうから、追いかけて隠れて聴きながらお昼ご飯にしますか？」

「行わよ茉莉。レナさんも小春さんもどうですか？」

「……どうしますであります？」

「あの馨さんがあんなテンションしてるのおかしいから、ぜひ見に行きませんか？」

「おお、ソナタもワルよのおでありますね。もちろん行くでありますよー！」

……なんてなったのはさっぱり知らなかったが。

そうして拉致して来て。

外のまあ……というか校舎のすぐ側にある物置の横に設置してあるベンチに腰掛けた。

「んでいきなり何よお前。顔出して早々テンションおかしいぞ馨」

「廉。オレのテンションが狂ってるのはいつものことだ。だから気にするな」

クツソ不満げな廉にそう言うてから、同じくなんか不思議そうな将臣の方に視線を向ける。すると帰ってきたのはこんな言葉。

「芳乃から俺を引き剥がす程のことか？」

「それ程のことに決まっているだろう。オレが自主的に茉莉から離れるくらいだぞ」

「説得力ねーぞそれ……まあいいや。で？　なんだよお悩み相談って急に。あの話だったら俺からも話あるんだけど」

む、その話か。それはそれで聞かなきやな。

だが、今はオレの話を優先させてもらおう。ちまちまと弁当を食べ進めながら、オレは二人に向けて単刀直入に切り込んだ。

「そうじゃない」

「ならなんだ？」

「茉莉とえつちしたい」

「ぶ——っ!？」

「ば——っ!？」

ゲホゲホと咽せながら「お前何言ってるんだ」と視線で訴えかけてくる。というか将臣に至っては睨みつけてきている。

一息付いた二人は互いに困惑した視線を交差させて、とりあえずどういふことだと廉が代表して、訳がわからんと尋ねてきた。

「……もう、一回くらいやってんだよな？」

「まあな」

「だったらなんでそんなこと聞くのよ」

「オマエも知ってるんだろ？ 穂織の財政の話」

「まあ祖父ちゃんから少しはな。けどお前にやさほど関係無いんじゃない？」

「いやあね？ オレほら、代行だし？ 茉莉も知ったから少し悩んでんじゃないかなーって。それにムラサメ様も人にお戻りになられたし、色々立て込んでるじゃん？」

「——わかったぞ。廉太郎、こいつ物事が落ち着くまで手を出したくないんだけど、それはそれとして常陸さんの事が欲しいんだ」

「ははあ。ま、要は馨が真面目なだけって話か」

それこそ心配して損したと言わんばかりに、馬鹿馬鹿しいと二人は一瞬で興味を失った。ひでえなコイツら。

心底から呆れながら、廉が容赦無くジト目を向けながらオレに告げる。

「そんなんだったら誘えばいいじゃん。それで断られたら諦め付くだろう？」

「……ダメだ。茉莉はやら……優しいから誘ったらきつと受け入れちゃう。なあなあで流しちゃいけないんだよ。だって貪るわけだぞ」

「いや俺の時は相手とある意味なあなあでしてたぞ。考えすぎじゃねえのか？」

「違う！ そういうものではない！ 男女の付き合い！ 物事には節

度を持って！　そういうことだ！」

「でも？」

「茉莉をトロトロにしたいですハイ」

「じゃあ誘えよ」

「けど色々あるじゃん」

「……おい将臣、お前がやる決心付いた時こいつなんて言っただけ？」

「一日くらいバチ当たんねーって」

「なんで知ってるの!？」

「俺がレクチャーしたからだよ！　なんでおめーは煽るだけ煽っておいて、なんも教えねえんだ！」

「だってなんか感覚で上手くイっちゃったんだもんっ」

「役に立たねえなっ」

「うるせえ！」

ギャーと吠え合うオレら。もう無視して芳乃ちゃんの愛妻弁当を無心で食べ続ける将臣。そしてなんかやけに今日は風の音がする。こう、ザワザワって。

ひとしきり吠え合った後、心底どうでも良さそうな感じの将臣が一言。

「てか、お前からじゃなかったのか？　抱いたの」

「……………お誘いは茉莉

からで、オレはあくまでもスタートダッシュを先にしただけだ」

「つまり何？　馨は人をけしかけておいて自分は女の子からアプローチされて、それで乗っただけだと」

「はい」

「少しでもエロ老師だと思った俺の気持ちを返せへタレ攻め」

「へタ……ッ!?　オレの何処がへタレ攻めだ!？」

「そういうとこ」

「クソがアツ!!　てかエロ老師とか不名誉な事言うな！」

「じゃあなんだ、女の子が家に来てもエロ本出しっ放しのエロエロ魔人？」

「やめろ！ 魔人の字をそう使うな！ 許さん、オマエが茉莉をお姫様抱っこしたことを芳乃ちゃんに言うぞ……！」

「あつ、えっ!? あれは常陸さんが高い所から降りるのに受け止めただけで——」

「オレが彼女にやってないことをするな！」

「理不尽な！」

「愛は狂気だからな！」

今度お姫様抱っこしてやろうつと。どんな時に？ うーん……せつかくだからシチュエーションにもこだわりたいよな。茉莉、結構ムードとか気にするタイプだし。

と、頭を悩ませていると急に廉が神妙な顔で口を開いた。

「……なあ。常陸さんつてさ、攻めつ気ある小悪魔系のカワイイタイプのの子じゃないか」

「そうだな。全面的に同意する。……が、一つだけ訂正しろ。茉莉は意外と受け身だ」

「なるほど……やっぱ可愛いな常陸さん。それでその……どのよう
に、攻められたので？ 具体的な可愛いシーンとかは？」

「——ほう？」

……どうやら死にたいらしいな？

「……まあ、いいか。そんなに知りたいなら教えてやろう」

「えっ!? お前いいのかよ!? さっきまで独占欲ダダ漏れだったのに——」

「その身体にな」

「……へ？」

「廉、夜開けとけよ？ わからせてやる」

ジリジリと距離を詰め、顔を近づけながら迫ると廉がすごい勢いで仰け反りながら焦った表情を見せてくれる。からかわれていることに気付かないのだろうか。割とマジに見えるのだろうか。オレは茉莉一筋なのに。

「まつ、待て待て待て!? お、お前には常陸さんいるだろ!? てかここでホモ展開はマズイって!!」

「ん？ 愛に同性も異性も関係あるまい。生殖本能に逆らうことにはなるが、別にいいだろう。愛にしろ憎悪にしろ、狂気には変わらない」
「お、おい馨！ なんて廉太郎の股間に手を伸ばす!？」

「別に。その気にさせておいた方が、廉も夜が待ち遠しくなるかと思ってるな」

「え、遠慮しておきます！ 常陸さんに悪いから！ 俺教室戻るわ！
そういうのやめろよな！ 尻がおつかねえわ！ じゃあな！ あ
としばらく背後に立つなよ!？」

「なら背後で勃たせてるよ」

「やめろ！ やめろオ！」

ドタドタと飯を持って走り去る廉。ふん、誰がお前なんぞに茉莉の
そういう顔を教えるものか。

そして残された将臣は、恐る恐るオレを見て。

「……あの……冗談……だ、よ……な……?？」

「アイツを愛^殺してたらそうだったんじゃないの？ オレほら、そういう
ところあんまり気にしないし。惚れた相手が男だろうと女だろう
と、別に好きな相手を好きである事に貴賤はないだろ」

「そういうところ魔人って感じがするよ」

「魔人だしな。まあ、オレが愛^殺すのは後にも先にも茉莉だけだが」

「馨は常陸さん一筋だからな」

「オマエはムラサメ様に芳乃ちゃんに、それから芦花さんに小春ちや
んにレナだもんな。選り取り見取りってヤツだ」

「そつ、そんなわけないだろ！ 芳乃一筋だよ！」

「どーかねえ？」

コイツ、割と鼻の下伸ばしてるんだよなあ。

どれ、確かめてやるか。

「ムラサメ様のカワイイところ」

「意外とイタズラ好きで甘えん坊なところ」

「芦花さんのカワイイところ」

「結構お姉さん風吹かせてるけど割とプンプンとか言ってるどころ」

「小春ちゃんのカワイイところ」

「美味しいモノには目の無いところ」

「レナのカワイイところ」

「ポワポワした感じから一気にカツコよくなるどころ」

「それで芳乃ちゃん一筋たあね。よく見てる」

「……それとこれとは関係ないだろ」

ケラケラ笑っているとしても不満げ視線を投げられる。主にかかったことについての不満だろうか。

「そんな目するなよ。悪りい悪りい。冗談だ」

「で、結局どうするんだよ」

「押し倒すか壁ドンしてから考えるさア」

結局何も得られなかったこの不毛な会話の真の目的に関係したことを尋ねられ……オレは目を逸らしながらも投げやりそう答えた。

「結局それ、断らせる気無いんじゃないか」

「菜子なら逃げられる」

「……それでいいのかなあ？ 常陸さん、抵抗する気とかまったく無いと思うぞ」

「——ま、その前に色々あり過ぎてオレが萎えるさ。帰りがけには……あー、レナに色々話さなきゃ。ちようどいい、お前らも付き合えよ。放課後、田心屋行こうぜ。ムラサメ様へのお土産とかさ」

「そりゃいいな」

虚絶のヤツ、ちゃんと世話してるだろうなあ？

昨日から切り離してムラサメ様の影に潜ませているのだが、さて上手にやってるだろうか。



くだらないことかと思えば、よりもよって性事情。しかも自分を抱きたいが事態がややこしいのでどうしたら良いのか。

——あまりに酷い羞恥プレイだと、トボトボと戻りながら、菜子は赤面しながら俯いていた。その周りをいたたまれない表情で囲む三

人。

「茉莉、その……」

「ええ、はい、わかってます、わかってます芳乃様。ワタシは殿方の秘密話に首を突っ込んで自爆した愚かな女の子です」

「あ、あんまり気にしない方がいいんじゃないかしら……?」

「無理ですよ」

お前が欲しい、トロトロにしたいなどと。そんなことを言われてしまえば一人の女の子としては疼かざるを得ないが——言われ方も最悪である。

「……そういうことをするのに、どちらから誘うとかあるでありますか?」

「多分、馨くんが気にしてるんじゃないですかね。本当に今までの二回とも、ワタシからでしたし」

別に茉莉としてはどちらだろうと、抱かれることには変わりないのだからどちらにせよ構わないのだが、馨と変な意味で付き合いの深いレナは、恐らく馨的には自分からこう……男らしく行きたいのだろうと当たりを付けた。ちなみに目を回す前に帰還したので問題は無い。

「……けど馨さんってあんな感じなんですね。今まではなんて言うか、クールだけどいたずらっ子な先輩だと思ってましたけど——」

馨との付き合いは長いものの、その素顔と呼べるものをさっぱり知らない小春にとってみれば、この……なんとも言えない、途中で切り上げた盗み聞きは、馨のロクでもない素顔を知れた良い機会だった。

「馨くんは昔っからあんなのですよ。私生活は自堕落で、何も考えたくないし何もしたくないとか言いながら、事あるごとにワタシと行動したがるし、独占欲結構あるし、そのくせ女心をくすぐるコトいっぱいするし——」

「おっ、お腹いっぱいですから常陸先輩っ」

「……あは、申し訳ありません。惚気てしまっつて」

しかし自然な流れで惚気られては小春とて困る。ただ向けられた少し恥ずかしげだけど、好きな人の事を語れて嬉しかったと言わんばかりの笑顔を見ると、小春は全てを許してしまった。可愛いは正義な

のだ。

「……けど、カオルって中々こう、ソーシヨクケイなのですね」
「本性は凄まじい肉食なんですけど、全然それを見せてくれないんですよね。ずーっと隠して、本当にその……そういう時くらいしかそういう顔を見せてくれないんですね」

まあ、実際には殺し愛情を隠すのが当たり前になっているが故に、なのだろうがと察してはいる。けれど押し倒して欲しいと思う複雑な乙女心とかあるわけで。茉莉的には割とウエルカムで誘いがてら家の中を下着姿でウロついてみたりもしたのだが無反応だったこともあり、割と諦めていたところもある。

ただ、彼から求められていると知れたことはいいいことだろう……それでもまったく手を出してくる気配が無さそうなのが悲しいところだが。

とか色々考えていたら。

「ごっ、小春！ 兄さんを助けてくれ！」

「……はい？ いやどうしたの廉兄」

割と青い顔をした廉太郎が弁当を片手に小春の背に隠れるように走ってきた。

この兄がそれほどまでにか、と小春は思いながらも、まあ事情を聞いてやるかと声をかけた。

そうして語られたのは――

「か、馨に……掘られそうになった」

「はっ」

「あつ、いや、違うんだよ常陸さん。馨がアブノーマルとかそういうのじゃなくてっ！ ちょっと惚気でも聞こうかなーって思って、どんな風に可愛がったのかとか怒られる前提で聞いたんだよ！ そしたらあいつ……！」

「レンタロウ、ホられるとはなんですかね」

「へっ!? あつ、いや……て、貞操の危機？ とにかくあれだよ、危なかったんだよ。冗談抜かせとか返ってくるかと思ったら、あいつ、身体に教えてやるから夜開けとけとか言いやがった！ しかも目が割

とマジだったんだよ怖えんだよ尻が！」

——刹那、茉莉は怒った。

「廉太郎さん……なんでアナタなんですか!？」

「ひよわ!？」

「ワタシ冗談でもそんなこと言われてないのに！ どうして！ 非生産的な殿方同士の冗談みたいな会話で！ ワタシが欲しくて止まなかった言葉が出てくるんですかアツ!!」

「えっ、いや、悪いのはあいつでしょ!？」

「ワタシだって言われたこと無いのに！ ズルいですよ!！」

ビビる廉太郎。盾にされて右往左往する小春。一連の事情を察して薔薇色の妄想をしてぶっ倒れるレナ。なんでワタシじゃないの！

と怒り狂う茉莉。

……もう面倒見切れない。

(恨むわよ——馨君)

面倒事を引き起こすのだけは上手い弟分への怒りを滾らせながら、芳乃は事態の收拾を付けるべく渋々動き出したとき。

協力

——甘いもの。

古くには、とんでもない価値を誇る代物さえあった。
故に。

——なあ——

——もつと、寄越せ——

キミ、もうちよい静かにしてくんない？

……ご先祖様は今更になって味わった現代の甘味をもつと欲しておられるようだ。

「おい馬庭。馬庭っ。まだか！——やめろオマエ！——黙れ、甘いもの食べたいんだよ！ 食わせろもつとだ！ 飢える心に蜜を垂らして私を満せ！——財布が軽くなるのは嫌アツ！ くだらん、金などお前いくらでも作れるだろう！」

「何アレ」

「カナエが暴れているであります」

「馨さん弱すぎない？」

「奏……さんが強すぎるかと」

「……いやはや、進化というのはすごいものだ。知識としては知っていても、いざこうして実際に触れてみるとではワケが違う」

荒ぶるご先祖様をどうにかして静かにさせた後、疲れ果てたオレはぐったりしながら対面に座る三人を眺めていた。

え？ なんで四人じゃないのかって？ 隣に茱子がいるからさ。

「しかし、穂織を立て直すにはいささか厳しかろうさな——まったくだな。何やつても上手く行く気がしねえ——取り柄は古さだけ。他には何も無い。そこに新しいモノを生やそうなどと」

辛辣な言葉だが、同時に事実だ。

ここに骨を埋めなければ、ここを何とかして生き残らせる方法を探らねばならない。

「そのことだけど、馨」

「なんだよ」

「俺たちも協力させてくれないか。この話、廉太郎も小春も乗り気だし、芦花姉も別口が欲しいって言ってたし」

……瞬間。

何言つてんだコイツはと、本気で思ったオレは悪くないと思う。ま
ず何処から？ というのもあるがそもそもオレはただの代理。確かに
意見を出すことを求められて、あーでもないこーでもないとアレコ
レ言つてはいたが、所詮それぐらい。正直親父とお袋の意見を代わり
に述べる機械ぐらいの役割だ。

いやオマエ……何故オレに言うんだよ。

「あのな？ 何故にオレよ」

「お父さんの差し金よ」

「言い方。しかし……そっか」

大方、大人としてはそんなこと気にして欲しくないが、さりとて何
かしたいと願う彼らを無下にはできない。ならば友人の手伝い、とい
うことで間接的ながら直接的に関われるようにしたい——なんて
いったところか。

けどその判断をオレに一任するのはどうかと思う。

……けど、そうか。

……実のところ、町内会にオレが出たのはオレが自分から代行を
志願したからにすぎない。親父もお袋も、町の大人たちも、オレにそ
んなことをしなくていいと言ってくれていた。それはこちらの仕事
だからと。

しかしオレは、かつての頭で「殺す為の裏切り者である俺にできる
ことが一つでもあるなら」とまあ、贖罪のように参加することを決め
た。

……だが知恵も無く、何も無いオレにできたのはせいぜいが茶々を
入れること。無力を思い知ったのだ。

そして魔人へと回帰した途端に、オレは再び死というモノを身近に
想えるようになった。だからわかる。

——どの道、何をしようが穂織は終わる。穂織を穂織足らしめる理

由が無いのだから。

穂織とは神と人の愛が生み出した土地。

穂織とは人と人の呪いで成長した土地。

穂織とは神と神の愛で生き長らえた土地。

二柱の神によつて支えられていた土地が、その二柱を失えばどうなるか。子供でも容易に想像できる。

故に生き長らえさせることはできず、やれるとしたら黄泉帰らせることだけ。だが黄泉帰りの手段など、無い。

故に……

「ダメだ」

「こんな、自分勝手な拷問に付き合う必要など無いと、オレは切つて捨てて――

「まあ、お前が拒絶するのは勝手だが……いい加減に助けを求めろよ」

同居人に、口を割られた。

「くだらん。自分で選んだ拷問だと？ 我々の人生など常日頃から拷問だ。死滅に向かつて疾走する魔物の生など、付き合う側にとつても拷問だ。何故それがわからん。今更なのだよ」

呆れた言葉。

確かに今更なのだが、それでもと思うのだ。

「……というかお前なア。明日を掴んだこともない男がいきなり両足で立つてその手を伸ばして未来を掴めるとでも？ 常識的に考えろ。お前は今まで選択はしたが、与えられてきたただけだ。それは普通の人間の生活か？ 飢える心が求める理想か？ 掃除屋のお前はもう不要だ。生き方を見つめ直せ」

……実にごもつともだ。

「いつぞやお前に言った事をまた言つてやろう。バカになれ。ちつとはヒトらしくしてみる。人の真似事りそをしてみてもバチは当たるまい。世の中なぞ、そんなもんだ」

む……と呟いたが、しかしまあ確かにその通りだ。

こんなもの気にしないでのびのびと過ごして欲しいと思う心もあれば、挑むならば挑めと思う心もあるし、そしてみんなで色々悩んで

みたいとか思う心もある。

「……オレは……」

きつと普通に過ごすことなんて無理なんだろう。
挑むしか無いのだろう。

そしてオレは、彼らと共に歩みたい。

「頼む……手伝って、くれ」

だからやつと、自分から手助けを求められた。

みんな嬉しげに頷いてくれた……と、思う。ただ笑顔だったのは確かだった。

「それでその、積もる話とはなんでありますかね」

ちよつと間を置いてから、改めてレナがオレに尋ねた。

別に大した訳ではないのだが、と前置きをしてからここに来るまでの間に考えていた通りに言葉を発した。

「まあややニューアンスが異なるんだけど……オーロラの向こう側から戻ってきた一族。それがオレらイナガミのルーツでさ」

「オーロラの向こう……死者の国でありますか!？」

酷く驚いた顔のレナは新鮮だ。

当たり前前だ。今まで単なる鞘の中の刃としかわかってなかった所に、実は死者の国から戻ってきたおかしな一族なんて情報がブチ込まれたんだから。

……別にこの辺は言う必要無いのだが、包み隠さず行くと決めたのだ。

友達に対して隠し事の二つや二つくらいある人だっっていると思うが、これは……知って欲しいと、オレは思った。

「なので死を求める性質がある。だから葉子を……愛殺したい。もちろん、それをしてしまうと愛せないからやらないように気を付けてるけどな」

二律背反——あるいは、矛盾。

口にするだけで吐き気がする。まともな人間ならこんな馬鹿げた感情なんて自覚した時点で飲み込まれるか死ぬかしている。

それをせず、ただ当たり前のように「なるほど、オレはそういう生き物か」と感じられる。何度も口にしても「当然だ。己は魔人、狂人、あるいは馬鹿なのだから」と自嘲するしかできないこの感性が——ああ、嫌いだ。

しかしレナは、そんな事実にはまずは驚いてから、しばらく黙って考えて——いつもの顔で、一言。

「つまり……愛情表現が殺人、ということでもありますか」

「まあ、そんな感じ。だからオレのご先祖様である奏も京香も、似たように人殺しをせざるを得ない性質なんだ」

せざるを得ない……というのは重要だ。

誰だつて自殺に走りたくない。ましてや、食べるからと言って保存食も用意せずにひたすらに喰い散らかすか？　どんな動物であつても、咄嗟の時に食べるものは残すだろう。

……オレたちにはそれができない。生きる為に喰らうというよりも、喰らう為に生きているようなものだ。だというのに喰らわねば生きていけない——

「……ただ、京香はそれを認めたくないらしい。意地を張って何が何でも、絶対にだ。それが原因で、オレたちの様に”殺したくないけど殺そうとしてしまうから開き直って殺そうとした相手に素面で接する”ことができない」

だからもう、罪悪感こそ感じるがそれを表に出しながらもやめることはできないのだ。殺そうとした相手に対して開き直って接する事を否が応でも強いられる。

そんな己を自嘲しながら、内に燻る生存本能と折り合いを付けていく——それしか道は無い。

だというのにアレはそれが嫌なのだ。どの道人としてなど決して生きられないというのに、何故未だに人として生きていられると思ひ込んでいるのか。

「そんなわけで閉じこもってるのさ、アイツ。なんで色々聞きたいこととか、あると思うけどしばらく待ってくれ」

だがここでレナ。オレたち魔人の中で一人だけ出てないことに気

が付いたのか、まるで一人だけ忘れてないかみみたいな雰囲気を見せながら、不思議そうにオレに尋ねた。

「あの、前までのキョーカは？」

「虚絶と呼んでやってくれ。アレは……オレの半分だよ」

「半分……へ？」

「今はムラサメ様のお世話をしてる。手が誰も空いてないからな。あとで様子でも見に行くか？ 見舞いに行けばさぞ嬉しそうな顔するぞ、ムラサメ様が」

「半分、ハンブン、はんぶん……？」とボヤきながらウンウンと悩んでいる彼女には届いていないようだ。半分と聞いて芳乃ちゃんと菜子も首を傾げている。将臣は——見てわかってるからか、オレに「分かりづらい説明するな」と言わんばかりの視線を浴びせている。

「カナエはカナエで、キョーカはキョーカで、カオルとキョゼツは二人で一つでありますか……？」

む、ニアリーイコールだな。

「んにや、厳密に言えばオレたち全員の部品を持っていて、オレたち全員の人格を混ぜこぜにしたような……オレたちが虚絶であり虚絶がオレたちだ」

オレ×京香×奏÷2+菜子の外見∥虚絶という方程式が一番近い。めつちや濃い原液を三つ混ぜたら大人しくなるのと同じみたいだな。

言うなれば……餃子？ 海老餃子とか……いやなんか違うな。いい例えが出てこねえ。継ぎ接ぎじゃなくて……カマボコ？ カニカマ？ 海老チャーハン？ 混ぜ物だけど異なるみたいな……こう……ピザまんは肉まんじゃないみたい……

あれ？ 言ってるオレまで混乱してきたな……ダメじゃん。

なんというか、飲み込みづらそうなレナを見ていると罪悪感が……ここはアレだ、もつと簡略化していこう。それがいい。

「あー……オレにできないことをするオレ？」

「ならマコに似ているのは——」

「趣味！」

「わあっ!？」

「好きな女の子を真似た外見にして何か悪いか！」

「いえ全然っ！」

「ならばヨシッ！」

……お互いに全部即答だった。

横で茉莉が恥ずかしげにしているのは何故だろうか。理由がどちらなのかわからない。

「……さてムラサメ様んここに顔出すか。子犬みたいにパタパタ尻尾振ってくれそうだし」

「ん？ そうか。ムラサメちゃん、喜ぶだろうな」

「ま、パフェには負けるだろうケド」

「なんでそう自分を下げてるのよ、馨さん」

「そういう意図じゃないよ、もう」

甘いものと何とも言えない男では、前者に軍配が上がるのは当然だろうて。

「さて、どっかで会議するか。付き合ってくれんדר？ オマエら。んじやまあ……場所の確保はオレに任せろ。ちよいと静かな場所の方が入りやすいすしな」

……まあいつもの場所になりそうな予感あるが。さて色々と情報をまとめなければならぬか。何がどうとか何が出たとか——まあ色々かな。

「ま、どっかまた別な日にだけどな。流石にほら、少し時間が欲しい」
別に焦ることでもない。

焦ったところで何ができるわけでもない。

ドンと構えても、そう悪くないだろう。

ムラサメ様の見舞いには、流石に無理に暇を作ったレナは行けないとのこと。

去り際に見せた寂しそうな彼女の表情に見惚れてたら、茉莉に手の甲をつねられた。

……ごめん。



「外に出たい、とな」

「だ、ダメか……?」

「ふむ——」

見舞いに来た馨も帰り、後は世話係の虚絶が帰るだけ、という時にムラサメは本音を告げた。

「今はダメだ。もうしばし安静にせよ」

が、当然ながら虚絶は至って普通の視点からそれを拒否した。

しかしその表情と言えばさながら妹のわがままに困る兄のような、困った表情であったが。

「我は半身の——馨の願いや想いも持つ。故、そなたに無理をして欲しくないと感じている。だがそなたの意志を尊重したいのもまた、事実。無理のない範囲で動けるようになるまで、さして時間もかかるまいよ」

宥めるようなそんな発言。

わかっていてもムラサメとて複雑な感情を抱かざるを得ない。

「じゃが……困っているのじゃろう」

「それとこれとは話が別だ。……どうしても言うのならばまあ考えなくもないが、大人しくせよ」

むむむと唸るムラサメを諦めろと言わんばかりに見つめた後、虚絶は闇に溶け落ちていくように消失する。

——しかし、消失と同時に人影が作られて、

現れたのは奏であった。

「よお。元気か」

「お主、何しにきた」

「冷たいな、綾」

「……やかましい」

憎い訳ではないが、好きになれない。馨ほど人間味に溢れているわけではないからだろうか。その訳はムラサメ自身もさっぱりわからない。

苦虫を噛み潰したような顔ではないが、面白くなさそうな顔をして

いるのも事実だろう。

「奴らはどこだ」

「ご主人たちか？」

「ああ。助言をとな」

「穂織の今後の件じやな」

「その通り。……少し思ったことがあつてな。お前も聞くか？」

「あとで構わん。吾輩は静かにしてると言われたのでな。皆ならば居間におる」

感謝するよ、と空っぽの声で反応してから去る奏を見送った後、ムラサメは布団に入り——甘いもの食べたさに動こうとして、虚絶の発言を思い返し、煩悶を振り切るように瞼を閉じた。

一方、居間にいる者たちと言えば。

「邪魔するぞ」

唐突にやってきた奏に怪訝な視線をぶつけていた。

「有意義な話だから安心しろ。私とて敗者、勝者の糧になる為に色々とするさ」

どの口が言うやら、とも思うがしかしまあ一応聞いてやろうとまずは聞くことにした。

「本題だが、馨がああの反応をしたということは黄泉帰らせる手段がある——ということかも知らん」

「どういうことですか？」

真つ先に反応したのは芳乃だった。

あの反応？ とか何故だとか色々と思うことはあるが、とにかくにも詳しい話を聞かなければと感じた。

芳乃も現状に責任のようなものを感じている。故にそれがあるのならば、と。

「馨の愛とは殺しだ。穂織という土地に対して多少なりと愛情はあるだろう。裏返せばあいつが、現在の詰みのままを維持しようとしたのは愛しているからであつて——死から解放される、愛することをやめさせるような何かを発想されては困る可能性もある」

馨の愛が現在進行形ならば、それを止めてしまう何かを彼らは持つ

ことになる……それが奏の導き出した結論だった。

「私と奴の方向性は違うが、他人が関わることで自分の愉悦が失われるなら適当な言い分で遠ざけるのは同じだろう。確実を好むあいつが私に言われるまで、一人で行う考えを改めなかったのは何故なのか……そう考えたら、なんとなくそう思ったままだよ」

馨は硬直した現状を維持するような愚かな男ではない。それが分かっているからこそあそこで助太刀の申し出を切ろうとした理由がつかない。

奏はそれを、魔人の宿痾と結び付けて考えて——この答えを導き出した。

「ま、馨は役に立たんだろう。我々は殺す者なのだから。黄泉帰りも、生かすことも、お前たちの仕事だ。せいぜい足掻けよ、人間」

助言なのかそうでないのかさっぱりわからない言葉をかけて、そして奏は去ってしまった。

役に立ったのか役に立たないのか、どっち付かずだがとりあえず芳乃はまず状況を整理することにした。

「馨さんが”死んでいる”と見たなら、既に死んでいると考えて何も間違いじゃないわね」

冷酷に使命を遂行できる程冷徹な馨が穂織を死んでいるとした。ならば死んでいるのだろう。

そして黄泉帰りとしたならば、黄泉帰らせねばならないのだろう。血脈だからそういう理由ではなく、芳乃はシンプルに信じる価値があるとした。友達がそう言ったのだから。

「けど、穂織にしかない過去の遺産を使う……か」

だが芳乃とて穂織の地に渦巻く古の遺産の大半が、大手を振って「美しいものだ」と言えるものではないと自覚している。

虚しい頭目争い、呪い、神と人の悲恋、神と神の悲哀、冥府からの使者たち——脚色しようにも無理な物は無理だ。

それに新しいものではなく切っていない手札を切らなければならぬ、というのものを頭を悩ませる。

(……あの方には申し訳ないけど、それも方法ね……)

茉莉の中で眠っている彼に対して非常に申し訳ないとも思うが、彼と女神と侍の複雑な関係を物語として打ち出すのも手だろう——が、それだと穂織が外向けに打ち出していた歴史とは大きく異なる結果になる。

叢雨丸の扱いが矛盾すると、如何にも「商売向け」という雰囲気が出てしまう。そんなものでは人は来ない。

建前で隠しながら、上手に内心を実現し、それをわかられたとしてもさして気にされない関係性が商売として実に理想的な関係だ。互いに理解しながら、それはそれとして認識できるという関係——理想的なのはそれだ。

「これ、確か町の人たちが硬直しますね。事実を知っていると尚更ですよ」

「町おこし、蘇りかあ……悩んでるならって気軽に踏んだけど、本当に難題だな。何をやっても何処もやってるで終わっちゃう」

「穂織らしさ、か。こんなの一人で抱えてたら絶対にドツボにハマって何もできなくなるに決まってるじゃない。あの子は本当に——」

そもそもが難題過ぎる上に、本質的に絶対答えが出せない。まさしく自分で選んだ拷問というに相応しいだろう。

「まあ、しばらくは穂織の切つてない札で勝負でしようね。馨くんは……多分言わないし言えないだろうし」

「長くなりそうだね。ムラサメちゃんにも色々聞こうかな」
しかしだからと言って立ち止まる理由も無い。

決意を新たに三人はああでもないこうでもない、一応の意見を完成させようと努力するのだった。

飴玉

——人間、不思議とダメな時はダメである。

朝遅くに起きて、毛布踏んで滑って、弁当作ってたら指を切つて（血を舐め取る間も無く治つたが）、家を出た瞬間つまづいて、通学路半ばで弁当を忘れたことに気が付いて戻り、その気になれば余裕で行けるにも関わらずなんか眠いからと遅刻して、朝一で茱子の顔を見れない。

何か良いことないかしら、とか呟きたくなるついてなき。今日は朝から自分の血の業を見せられているようだ。……まあ少し言い過ぎだが。

「……むむむ……」

そして。

「レナ、レナ」

「？ カオル？」

「……これサルミアツキ？」

「はい、サルミアツキでありますよ」

おお、神よと頭を抱える。

——今日、レナが持ってきたのはサルミアツキやベリーソースなどであった。理由は穂織のアレコレについて何かこう、料理面から参考になるかという話のタネついでもしかない——つまり特に理由は無い。彼女のには色々な事へのお礼程度でしかないのだろう。

が、サルミアツキ……サルミアツキとは。

何処ぞの阿呆がレナの記憶を引っ張ってオレに流し込んだ所為でわかるのだが、世界一不味い飴とされるサルミアツキの味は想像を絶する。

疑似体験も可能と言えば可能なのだが——それをやってしまうと恐らく……

「どうしたの馨くん。そんなにしかめっ面して」

「サルミアツキ、サルミアツキかア、サルミアツキねエ……サルミアツキい……」

「馨くんってば」

「——ん？ あっ、うん。ごめん。ちよつと」

そんなオレの内面もつゆ知らず、茉莉子がヒョイと覗き込んできた。適当に反応しつつ、本気で悩む。

「お兄ちゃん、廉兄。アレ本当に飴なの？ なんかへんな臭いが……」

「気の所為じゃないか？」

「気にしても仕方ねえと思うぞ」

何もわかっていないすつとごどっこい兄妹＋αは楽しそうだが、しかし……しかしだ。

この飴の恐ろしさを、誰かが示さなければならぬ。

……いや向こうの納豆的ポジションと同じようなモノだろうが。

チラツと芳乃ちゃんに視線を向ける。

「馨さん、これ知ってるの？」

無垢な瞳がオレを見ている。

——嘘は言えない。

「……知ってる。巷じゃ世界一不味い飴って噂だよ」

「世界一……で、ありますかねぇ？ 変な味なのは否定できませんけど、そこまで言われるほどではないと思うでありますよ」

何とも言えない顔で言ったらしい。でなければレナが宥めるように言う筈もないし、それに困ったような顔している筈もない。

しかし、基本的に弱気になるのは茉莉子の事か自分の事だけのオレが、たかが飴一つにそんな顔をしているのがとても珍しいのもまた事実。

そして何より、飴にビビる魔人だ。普段のオレを知る人からすれば

「あは、怖いんだー？」

「オマエは気楽だな」

「レナさんがそんなへんなの持つてくると思う？ 大したことないに決まってるじゃん」

「言ってくれるなア」

ヘラヘラつと笑いながら「ヘタレー」と言外に告げてくる愛しい彼

女。付き合う前にふざけていた頃の、イジワル姉的な雰囲気を感じる。最近マウント取れないからこういうところで取ろうとしているのか？

そんなところが可愛いのだが……サルミアツキを食すには勇気が必要だ。

「馨さん、馨さん。たまには菓子にカッコいいところ見せたら？」

「え、芳乃ちゃん？ ちょっと？」

「どんな飴かわからないけどいいじゃない。チクつとするくらいだと思っわ。だから犠牲になつて」

「キミは相変わらずひでえな……！」

ニッコニコの笑顔。この人本当にそういうところだぞ。将臣にそういうところを見せてるのか？ 見せてないとキミの恥ずかしエピソード沢山言つてやるぞ？

チラリと視線を移そうとして、肩に手を置かれた。置いたのは——廉。コイツもニッコニコだった。

「ま、飴だしいいんじゃない？」

「オマエ切り替え早いな」

「いや冷静に考えればお前が常陸さん以外を好きになることなさそうだし、冗談だなつてなつただけだ」

「それもそうさな」

……まあ、好きになったのがどちらかであれば、どちらかになつていたのだろう。あり得ないIFの話だが。

しかしオレと廉……ならばあと一人、来てもらおうじゃあないか。

「将臣、オマエもだ」

「そんな気はしてた。まあ、うん……もし馨の言う通りだったとしたらその時はその時。貴重な体験をするよ」

諦めた声。

ただし割とビビってるようだが、それを咎めることはできまいて。オレも色々後手に回っているのだから。

「では、どうぞ〜」

笑顔で差し出されるサルミアツキを貰って、それぞれ口に放り込

む。

「うん？ 少し癖のある味——」

「しょっぱくて苦い、なんか薬みたいな——」

「……………」

味は……確かに苦くてしょっぱい、独特の味。

しかし——

「————グゲエツ!？」

「廉兄!? 廉兄いーっ!？」

「————アッ!？」

「将臣さんっ!？」

二人が倒れたが、オレはそれに反応することすらできなかった。

な、なんだこれは——ツ!？」

清涼感と共に腐乱臭が全身を駆け巡る！ 不味いんじゃないやなくてこれ臭いがヤバいんだ！ ミント味やハツカ飴みたいに鼻にスーッと来るあの感覚に、なんでアンモニア臭が乗ってくるんだよ!? 世界一不味いどころの騒ぎじゃねえ！ 不味くないがヤバいだろうが！

「…………うぶ…………」

ヤバい。ヤバいぞ。幼少から慣れているならともかくこれは慣れてない人間に食わせるには段階を踏む必要がある……! それこそ納豆や山葵と同じ立ち位置だ！

だ、だがオレとてその昔捨てられた冷蔵庫を好奇心で開けて大惨事を起こした人間——こ、この程度…………!」

…………いや、なんか…………アレらに比べたらだいぶマシか？ 何せ視界に広がる暴力は無く、そういうものだど理解しているのだから。そう考えると案外…………悪く…………悪く…………悪いわ！ てかこれ後味も最悪だな！ 清涼感は結構口に残るのにそれと共に腐乱臭が残るのかよクソが！ ああちくしよう！ これ腐乱臭さえなければ結構良いのに！ちくしよう！

「…………か、馨くん？ 馨くんってば」

茉莉子が心配そうに覗き込んできた。

…………可愛いな。見ているだけでなんか気分良くなってきた。

「馨くんっ！」

口が慣れてきた。

ので、ゆっくりと。

「飲み物、残ってる？」

「へ？ あるけど」

「くれ。あと廉と将臣の分も。金は後で。出来るだけ味と臭いの強いやつ」

と言いながら茉莉の持っていた水筒をひったくって中身を飲む。
……お茶か。

別に今更恥ずかしがることでもないのに、なんでか少しそんなオレの口元に視線を落とすと、茉莉はトタトタと購買に急いだ。

「お、オーロラが見える……あれ？ なんでひい祖父さんが？ 祖母さんは？ おーい、どうなってるんだー？」

「オーロラ、オーロラがすごい……」

倒れた二人はまあ……うん。

あ、将臣は芳乃ちゃんから往復ビンタ食らってる。廉は小春ちゃんにガクガクとゆさぶられている。

その内帰ってくるだろ。

「……レナ。これさ、喩えて言うなら山葵とか抹茶みたいなポジションだね」

「それだけ馴染み深いと!？」

「違う、そうじゃなくて……オマエがほら、山葵食べたらキツかったって話を前にしてたじゃないか。あんな感じ。慣れば大丈夫だけど……つてヤツ？」

「あ、ああ。なるほどであります。確かにそう言われればものすごく納得ですね」

うんうんと頷くレナ。覚えがある分とてもわかってくれるだろう。馴染みが無い分強烈だが、馴染んでしまえばさして気にならない。まさしく各国が誇る変な食べ物とそう変わらない。ただ飴、という点においては確かに世界一変な味だろう。

購買から戻って来た茉莉が飲み物を介抱している二人に渡した頃

には、ダウンしていた男連中は一応立ち上がった。

「……すげえな、世界……」

「……正直甘く見てた……芳乃がいなかったら帰って来れなかったかも……」

「味そのものはさして、だ。苦みが強いくらいで。が、後がすごい。清涼感と共に生臭さが鼻に来て舌に残るんだよ」

「そんなに……!?!」と戦慄し愕然とする小春ちゃんとは対照的に、芳乃ちゃんは――

「そんな筈ありません！ 大袈裟なだけです！」

と言ってから貰って放り込み。

「……オーロラがキラキラしてきれいでしゅう……おじいちゃん、おばあちゃん……あははは……」

「芳乃様アツ?! 帰ってきて下さい！ ワタシたちにとって洒落になつてませんから！ お願いします！」

見事にオーロラを見ることになり、茉莉に往復ビンタされていた。往復ビンタをする茉莉、可愛い。

「……あ、あれ？ 茉莉？ 私、オーロラが見えて……あれ？」

「よ、よかったあ……洒落になつてないからやめてください、そういうの……」

洒落になつてないどころか笑えないので勘弁して欲しい。なにぶん、オレはあの時何が起きていたのかなまじ知っている分、余計に。

――私を救済者と崇めて欲しいものだな――
黙つてろ。

――つれないなア――

……で、アイツは。

――いやまつたく。お前から行くか――

そろそろ。

――ふむ。まあ、鬱陶しいだけだしな――

そろそろ落ち着いたろ。

……なら、一人だけ安全地帯にいるヤツに、コツチ来てもらおうか。
即断即決、オレは茉莉の手を引っ張り寄せた。

「さて、茉莉。オマエも食べようぜ」

「えっ!? い、いやワタシは遠慮しておこうかなー……なんて」

「人には怖いのかとか言いながらいざ自分の番になると怖がるのかあ。ひどいなあ、オマエ」

と、ニヤニヤしながら言ってみたが。

「それは……あ、あはく……」

誤魔化すような「あは」。

そういうところも好きだが、オレは生憎とここで引き下がるほど聞き分けの良い男ではない。

背に空いている手を回し、顔を寄せると頬を赤らめて逸らされる。なので甘い声を作って耳元で囁くことにした。

「大丈夫だよ、茉莉——怖くなんてない」

「それでも、その……ね?」

「茉莉」

「う、うう……ズルいよう……」

茉莉を喰べて以来、彼女が耳元で囁かれるのに弱いのは知っている。ズルいと言われたところで、別にオレはズルをしていない。単に弱点を突いただけだ。

ズルというのは口移しとか、そういうことを指すんだ。ていうか一番ズルいのは茉莉だぞ。何がズルいつてオマエの甘え方めっちゃズルいんだぞ。

ここはオレが攻め。茉莉が受け。故に主導権を渡さない。

「ダメ?」

「ダメ……じゃない、けど……」

「ならほら、口を開けて——」

ちやつかりくすねていたサルミアツキを差し出しながらそう言うと、諦めたように口を開けてくれたので。

「ほいっと」

なんか普通入れてやるのも癪なので、ちやうど口内のいいところで止まる位置に飴玉を指で弾いた。倒れることはないだろうと手を離して離れる。

そうしてしばらくの沈黙の後、茉莉はしつかり味わってくれたように――

「……………うえつぶ……………ひどいよ、馨くん……………」

「人をけしかけたんだから甘んじて受け入れろ」

恨み言を言われたところで、オレをけしかけた報いだとしか思わない。

ただ鞭の飴をあげたのに、飴の鞭をあげないのも不公平か。ジト涙目で睨みながら抗議する茉莉の頭をくしゃくしゃと撫でると、気持ち良さそうに、猫のように目を細めたのも束の間。一瞬でキリツとした表情に戻り、手を退けて名残惜しそうな視線を投げた後、オレから離れた。

「手慣れてるなあ。あんなに上手に常陸さんを手玉に取るなんて」

「ナンパの時とは大違いだなあいつ。まあ、相手が常陸さんだからだろうけど」

「つまり馨はやっぱりヘタレか」

「誘い受けだな」

しかし。

そんなオレたちに珍獣か何かを見るような視線を投げる男が二人。何をう、と反論しようとしたが言いくるめられそうなので放っておこう。

勝手に言わせておけばいい。別に何と言われようがオレは魔人。人間の評価など――

「ただの飴なのに……………すつごくエツチだったわね。なんであんなにやらしいのかしら」

「すごくオトナって感じのやり取りでしたもんね、先輩。本当に馨さんって不思議な人だなあ。へなちよこなのか廉兄みたくガンガンなのか」

「あ、あわわわわ……………アダルティなやり取り……………カオルってばプレイボーイ、ハレンチですう……………」

「待って」

なんで？

なんで???

なんで???

いや待ってよ。なんで？ は？ エロい？ なんで？ いや待って。

「……そんなにおかしかった？」

呆然とするオレは間抜け面を晒しているのだろう。

そ、そんなにこう……取り立てて騒ぐほどのことなのか？

いやそりゃ「ホントいつでもどこでもイチャついてオタクらさあ」くらいは覚悟してたのにまさかオマエ、エロいって……なによ。

エロ？ ……エロって……えー。

「茉莉さんや」

「知らないもん。馨くんのバカっ」

「あつ、はい」

Pruittとそっぽを向かれてしまう。

……参ったなあ。そんなつもりなかったのに。いやでも……まあ、うん……？ オレ、悪い……のか？

「え、えつと……あー……えーつと……」

おかしい。

何も言えない。別に言い澁むようなことではないし。単なる感想なのだから適当に対応すればいいのに、何故かそれができない。思い返して恥ずかしいとかじゃないけど、なんでか茉莉にバカと言われて動揺している。

な、なんだよ。なんでだよオレ。そんな恋愛弱者みたいな——恋愛弱者だったわ。

「おつとそうでした。サルミアツキだけじゃなくて、他にも色々あるんですよ。例えばクツキーでしたりとか」

そんなオレを見兼ねてか、それともただ単になんとかなくなのかわからないが、とにかくレナが色々違うモノを見せてくれる。

助かったと言えば助かったが……なんでだろうな。負けた気がするのは。

「あ、ベリーソースもらえる?」
しかしパンケーキに合う、と聞けば黙っていられない。
気を取り直して、色々と楽しむことにした。



——人間、不思議と可愛いものを見ると一時、心が沸き立つものだ。
「のう、虚絶よ」

「如何にした、ムラサメよ」

「何故、吾輩を膝に乗せる?」

「理由がいるのか」

「いや……お主……お主なあ」

「そなたを愛でて、何が悪い」

「……やれやれ、馨の妙なところも引き継いだか」

何故かムラサメは膝の上に乗せられていた。

……虚絶の膝の上に。

「おい」

「なんだ」

「頭を撫でるでない」

「ダメか」

「ダメというわけではないのじゃが」

「……嫌か?」

「そうではないのじゃが!」

「では何故だ?」

はあ、とため息を吐く。

……流石に困った。困ってしまった。

”こうしたいから、そうする”。至って普通の考えで、至って普通の理由。馨の裏側に相当するこの存在は、些細な理由で自分のやりた
いことをほとんどやらない馨と違って、本当に何か特別な理由でもな
い限りやりたいことをやるという素直ちゃんになっていた。

それがなまじ分かるものだが、ムラサメも強くは言えない。

「虚絶よ。お主はどうするのじゃ」

「消えるべき時が来たら、消えるまで」

「それで良いのか？」

「そなたが生きるように、我らは消える。それだけのことだ」

「じゃろうな。しかしその時、吾輩が戻らねばならんか——」

……それを知っているのだろうか？

「馨は知っておるのか」

「当然だ」

「そうか」

「なんと？」

「そうしなければ芽は消えぬと」

「……そうか」

会話をした時間も僅かだが、しかし彼女もまた馨の側面を持つ存在。ムラサメから見れば親戚の叔母のような——あるいは、親戚の子供の姉か。彼女という存在を知れば知るほど、何とも言えない独特な間柄を実感する。

「その時は、寂しくなるのう」

「元よりありはしない者、そう思うならば——む、そういえば彼奴はどうするのであろうか。あれ以来静かだが……」

「犬神のことか？ 確かに茉莉からも何も聞いとらんな」

「……もしや、いや……とかく、この一件に関しては向こうからの行動があるだろう。気にしても仕方あるまい」

薄々とは読めるが、実際にどうするかは彼自身の意志だ。静かに朽ち果てるのか、それともまた永き時を歩むのか。

しかし虚絶にはわかる——彼は朽ち果てる道を選ぶのだと。今の彼は確かにかつての面影を強く見せているが、本質的には恐るべき祟り神である。狂った生死の輪廻があれば魔人として覚醒する稲上同様に、現在穂織に潜む危険であることには変わりない。

古くにあった悲恋より生まれた、悪しきモノを真に滅ぼすには。

穂織を蝕み脅かす脅威を、根本から取り除く為には。

虚絶に眠る怨恨の魂たちを完全に祓い、そして茉莉の中にいる祟り

神を祓わなければならぬ。

深く姉を愛していた彼が、自らが姉の愛を否定する存在となつてしまつていたのであれば、狂気に身をやつした状態ならば呪い続けるし、ある程度の正気を取り戻したのであれば、潔く眠りを選ぶだろう。似たような精神構造をしている存在と深く繋がっている虚絶には、なんとなくではあるが、ある種の確信めいたものがあつた。

（貴公は……死を望むのであろうな。”俺”もわかるよ。だが”私”にはわかる。常陸菜子は貴公の死を望まない。”私”と”私”と”俺”は彼を眠らせるべきだと思うが——オマエはきつと、それに対して心の底から反対して、心の底から『生きて』と祈るのであれば……）
どうしたものか。きつと馨は困るだろう。それでも彼はその首を落とすことを選ぶ。選べてしまう。他ならぬ自分がそうした存在だから。

（……さて穂織よ、どう選択する？ 過去と未来、どちらに重きを置くのか）

だが虚絶は何を問うわけでもない。

黙々と主の定めた終末へ向かうだけ。既に終わったモノなのだから。そしてもうすぐ終わるモノなのだから。

（馨……そなたのような愚かしい者が、最期の主人になろうとは。ククツ、我は好きだったよ、そなたのことを——実に、冥府の住人らしい思考でな）

——はてさて、馨という存在と共鳴したのは、ある種の運命と呼べるものだったのか。

元来ならばただの怨恨に過ぎない一本の妖刀が、ここまで不可思議な因果と内面を持つことになつた由縁を考えて、虚絶は一人、静かに笑つた。

（さて、では……我もまた、”私”を起こすのでしょうか）
そしてその為にも。

愛しさのある愚かしさではなく、呆れしかない愚かしさを持ち引き籠もり癩癩を起こしている女に、彼女自身も対処してやろうと動き出すのであつた。

(……なにしてるんだろなあ、ワタシ)

自分でもバカなことをしている自覚はある。

「……はあ」

この身の内で疼く欲求なんて、自分で自分を慰めてしまえばそれで済む話なのに、「それだと何か違う」という理由だけで何もしないで、貰ったシャツだけを羽織って布団で寝転がるだけ。

有り体に言えば。

茉莉は、別段性欲に流されることもなく、ただそれはそれとして悶々としながら何かを求めるわけでもなく、ただただ普段通りの日常を送っていた。

「……ホント、何してるんだろあ」

どっちつかず。自分で慰めるのか、あるいは抱かれに行くのか。どちらもせずにどちらかを求めている不思議な心。

ちよつと誘えば馨は建前を失うだろうことはわかっている。だと言うのにそれができない。

——何かが違う。そういうのじゃない。

(予想もしてない時に馨くんを押し倒されたい……なんて、うう……：我ながらなんて倒錯した考え)

いやまあ本音なんてこんなある種の性癖なのだが。

——人間とは、実に難しいものだな——

(起きてたんですか!? というか最近黙りっぱなしで心配しましたよ。もう)

——心配とは。お前は本当に変わった奴だ。手前勝手な呪いを、苦しみを、当人ではなく一族に押し付けた私の心配など——

(しちやダメなんですか?)

——お前の愛する男が魔人である原因でもあるぞ——

(それは違うでしょう)

——私があの時、首を縦に振らなければ……——

(本気の恋をしていたアナタのお姉さんに、大切な人の幸せを心から望めるアナタがそんなことできるワケなんてないんじゃないんです

か?)

——……自己嫌悪くらいさせろ——

(して欲しくないですよ、ワタシは。だってアナタは自分が正しいと思っただけからそうしたんでしょう? 見守ることも、呪うことも)

——……——

恨む恨まないというのは話が違う。

そうもなるという理由がわかっていて、そうなってしまったのだから、これでその話は終わりだ。

今は、未来に目を向けて進むべきだ。

(これからどうするんですか?)

——知るべきことは知れた。理解はできないが納得はした。私がこうしてお前の中にいる理由は無くなつたのは事実だ——

(もしかして、消え——)

——答えは出ていない。しばらく考えて、その上で言う——

(……ワタシは、アナタに消えて欲しくないですよ)

——ふん、勝手に言っている……——

しばらく二人の間を沈黙が包む。

困ったのはどっちやら、と思いつつ息を一つ吐いて。

(ホント腹立つくらいに、黙ってれば顔はいいよね馨くん……)

いくらサルミアツキを食べさせるためだけとは言え、ああしてくるバカはそういまい。魔人としての運命なのか、見てくれだけは非常にいい。喋り行動すれば途端にヘタレのゴミカスだが。

(黙ってれば綺麗な人。でも喋ればどうしようもない人だし、何かをする度になんかズレてる。それが悪いわけじゃないし、むしろ大好きだし、愛おしいし……もつとして欲しいとか思ってるけど……可愛いし、カッコいいし、甘やかしてくれるし、意地悪だし……)

モヤモヤとして思いを抱えながら丸くなる。

(ああもうっ、なんなの馨くん。馨くんなんなのっ。好き、大好き、愛してる)

——……まあ、わかるぞ——

(!?)

悪態なのか、それともただの惚気なのか。自分でも訳が分からなくなつて、それでもただただ好きで好きで仕方なくて……そう思い考えれば、思考が流れ込んだのだろうか。犬神は珍しく茉莉に同意した。それも、完全にだ。

——向こうはまったくそんなつもりがないのだろう。だがこちらとしては、それどころではない。その一挙一動に心が揺さぶられ、ふざけているとわかつているのに声を聞けば考えが止まり、顔を見れば何を言おうか忘れてしまう……——

(わかります……！)

——こちらの気を知らないでと思いながらも、しかし何故か許してしまう。おすわり、などと言われてもする筋合いがないのに、どうしてかやつてしまう——

(ええ、ええ！ わかります！ 自分で取ればいいのに取つてと頼まれると、文句とか色々考えしまうけれど……わかりますよ！)

——わかるぞ。何をとか思いながら結局はしてしまうし、されてしまう——

(で、内心に不満を持つてるとそれを見透かしたようにこっちの心をくすぐるようなことをしてくる。たまったもんじゃないですよ)

——本当にたまったものではない。どれだけ鬱陶しく思おうにもその人との時間が心地良くて何も言えなくなる——

(ほんつっつとわかります……！)

——ああ、本当にそうだ。本当に……——

それがたまらなく愛おしい、と二人は言葉も無く同意した。

(ホント、どうしようもないですね。お互い)

——まったくだ。どうしようもない——

惚れた弱みという奴なのだろうか。いやまったく、互い身に覚えがあるどころの騒ぎではないので、クツクツと笑い合う。

本当に、愛してしまうということは大変だ。狂気に等しい感情だから理屈なんてどこにもない。

「……どうしようかな」

さてはて、こつちもこつちで好き放題やらせてもらおうかなど。
茉莉は楽しげに微笑んだ。

■
帰宅後。

「馨、我が半身よ」

「なんだ」

「ムラサメに取り憑き、外殻の役割は果たせるだろうか」

「……それ難しくねえ？」

——相応に無茶な話だ。

そもそも基本構造の違いから始まる。アンドロイドにぬいぐるみのガワを被せたところでどう足掻いてもアンドロイドなのと同じように、人間に虚絶を重ねたところで、普段人間がやることの難しいことができるようになる程度ことでしかない。

言うなれば、松葉杖とかそういう立ち位置だ。ガスマスクにはなれない。

「わかっているが、なんとかかしたい」

「駒川から許可出たら普通に散歩かせて差し上げればいいだろう？」

「先日、外へ出たいと」

「無理の無い範囲でなら駒川だって認めるだろうけどさ」

そもそも医学的に見て安静にしている、と言われているのだから安静にしている欲しい。それに加えて元々が神力などという訳の分からないモノで維持されていたのだ。いささか無茶というものだろう。

「ダメなものはダメだ。大人しくしてろ、オマエも」

「むう……」

「むう、じゃない」

「しかしだな」

「オレならわかるだろう」

「だが我は我、汝は汝。半身であるというだけで同一個体ではあるまい」

「屁理屈捏ねるな！ 往生際悪いぞ」

しかし虚絶、オレの発言に対して何を感じる訳でもなさそうに。

「——正直なことを言えばな。我は、朝武秋穂の一部を宿している以上、我がいつ朝武安晴の前で”私”の言動をしてしまうか心配なのだ。我らの契約内容、忘れてはいまい」

「あー……つまり顔を合わせたくない」と
「有り体に言えばそうだ」

——そう言われてしまえばオレとて黙らざるを得ない。

「考えておくよ。ただ流石に安定を取らないってのは病人に失礼な話だ。難しくなるな」

「然り。まあ、我とて解している。故、不可能であつたとてさして気にせん」

「頼むよ。……まああれか、交渉そのものは終わったし、あとで駒川に聞いておくとするか」

流石に許可無く外出させるのもいかんだろう。

「……しっかし、減ったなあ」

具体的に言うとおれのワイシャツが。

なんでかと言うと茉莉が部屋着にすると行ってもう着てないヤツを何着か持つて帰つたのだ。

……一部はオカズ用だとか聞こえたような気がしたが忘れておいてやろう。彼女を愛する彼氏としての優しさだ。

正直を言えば別に構わないしな。オレを想つて慰めてくれるなら、そりや嬉しいってもんだし。

「……けどあれだな、待たせるのは……あれか」

聞いてたのは知ってる。

誘つてたのも知ってる。

……彼女が欲しいというの気持ちに偽りなどないのだから。

「……切つとけよ」

「わかつておる。近々、だろう?」

茉莉を、滅茶苦茶にしたい。

彼女を、喰らい尽くしたい。

——茉莉、愛おしい茉莉。

キミが、欲しい——

待っていてくれ、茉莉。
必ず、絶対に、オレはオマエを、喰らうから。

表裏

——茉莉子の思い出と言えば、当然だけど色々ある。

楽しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、悔しかったこと、腹立ったこと……本当に数え切れないくらいに、たくさん。

けれどオレが一番彼女との思い出の中で、最も印象に残ってるものは。

幼い日、彼女がオレに指切りを強請った時のことだ。

指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます……なんて、オマエは笑顔で言っただけ。

その笑顔はよく憶えているけれど、内容は何のことやらさっぱり。今日を迎えてもわからないけれど、とても嬉しそうな笑顔を見せて、楽しそうに小指を結んだ。

『かおるくん、明日もだよ？ 明日も絶対に——』

……さて、本当になんだったのか。だけど次の日に拗ねられた記憶も無いからオレはずっと、彼女の約束に応え続けていたのは確かだろう。茉莉子のとても喜んでいた顔がよく思い出せる。

オマエはオレに何を求めていたのか？

そんなに喜ぶのであればきつと、何かオマエにとって特別なことだったのか？ 今は違うことなのか？ ……まあ、思い出さない限りそれを問い直すこともできないのだろうが。

けれど今も喜ぶのであれば、オレは茉莉子にそれをしたい。彼女の喜ぶ姿が見たい。

それとなく聞いてみようか。茉莉子も忘れていたら、新しく思い出を作ればいい。なぞるのも悪くないが、なぞり過ぎるのは少し面白みに欠けるから。

しかし今日は——

「会議って言ってもねえ……」

既に死んでいるのだ、穂織は。

死んでいるものを生かしたところで、それは単なる骸遊び。必要なのは黄泉帰り。だが黄泉帰らせる術は無い。どうしようもないので、

どうにもできない。

——さて、何をしたものか。

とりあえず……行くか。

そうして。

「第一回どうしましょう会議、はーじまるよー」

あまりにも雑すぎる始まりと、あまりにもテキトーすぎるオレに呆れた視線が突き刺さる。

「はーい馨君や」

「なんざんしょ廉君や」

「危機感あるの？」

「どうしようもねーから割と無い」

「てかなんで志那都荘なんだよ」

「だって集中できるもん」

空き部屋があるのは知っていたし、家だとそういう気には中々なれないので弦さんを言いくるめて借りているというのがこの話のオチだ。

すると廉はオレの対面に座ってる茉莉子を指差す。

「常陸さんいるのに集中できるのかお前」

「なんだとう。茉莉、おいで」

もちろんそれを今から証明しよう。

なのでそう声をかけたら。

「えっ」

心底から「何言ってるの？」という顔を向けられた。

「おいで」

「……やだよ」

「えっ」

「みんな、見てる」

「……ああ、うん、そっか」

「馨くんたまにおかしくなるよね」

たまにで済ませているところにそこはかとなない優しさを感じる。

はつきり言って365日毎日おかしいと言われても不思議ではない
生態してんだしオレ。

「それで……何をするでありますか？ 話し合い、会議と言われましても」

「というか馨。アタシや小春ちゃんまで呼んで何を話し合うの？」

レナと芦花さんからの質問に。

「雑談」

——オレは、こう即答した。

「くたばれバカ」

「帰っていいか？」

「もう終わりでいいわよね」

「ワタシ買い物行ってくるね」

「わたしお仕事戻るでありますね」

「じゃあお姉ちゃん帰ろっか」

「そうだね。いくらお客さんが少ないって言っても店の仕事もあるし」

そしてその返答を聞いた瞬間全員が即座にやる気を無くしてさつさと帰ろうとする。当たり前だし、実際手伝ってくれと頼んでからこのザマともなればこの反応は致し方ない……が、即答なのは勘弁して欲しい。オレが悪かったから。

「待って！ みんなごめん！ 茉莉、オレを捨てないで！ 茉莉！」

台詞回しに違和感があったのか、茉莉が物凄く微妙な顔をしながら振り向いた。

「捨てるって……そういうこと言わないでよ。本当に外出られなくなるじゃん」

「え、出る気だったの？」

「フリじゃなかったの？」

「……行かないでくれ茉莉お……」

「はいはい」

渋々と言った様子で茉莉がトテトテと戻ってきてくれる。大好き。

「本当に馨くんは手間がかかるね」

「手間のかからないオレなんかオレじゃないよ」

「あは、そうだね」

笑顔の菜子を見てオレも微笑む。

しかし周りは無視って帰ろうとしている。これは大問題なのでなんとか留めなければ――

『……のう、馨よ』

「なんざんしょ」

『お主、本当に何がしたいのじゃ』

実はビデオ電話繋いでたムラサメ様から容赦の無い一言が飛んでくる。

「えっ、ムラサメちゃん!？」

『おう、そうじゃご主人。このてれびでんわなるもので顔を出してみろと虚絶に言われてのう。ま、いざ繋いでみればこのザマじゃが』

このザマとは酷い言い草だが、いや事実なんだけどもう少し何か手心を……

『そこの阿呆に呆れて帰るのは仕方ないが、せめて吾輩と少し話をしてもらえないじやろうか。暇なのじゃ』

「そうですね！ 馨さんに呆れるのは家でもできますが、ムラサメ様とのお話は中々貴重ですよ皆さん！ ですのでムラサメ様とお話しましょう！」

芳乃ちゃんの鶴の一声で、「おー」とみんなが声を上げて戻ってくる。

ふふふ……オレは寂しくないよ。

「ねえ馨くん。大丈夫？ 泣いてない？」

「泣いてないし……!！」

――泣きそう。

さて、ムラサメ様はみんなと一度は顔を合わせている。と言っても見舞いがたら程度で、あんまり長く話してもいないのだ。

そういうこともあって、今日はあえて志那都荘を借りることになっていた。あとウチの中をあまり見せたくないというのが大きな本音。というか大半がそれ。弦さんはそれを察しているのは知ってたけど

ごり押しした。

みんながわいのわいのとムラサメ様と話している中、まるで後方彼氏面みたいに遠巻きに眺めている将臣へと声をかける。

「席やろうか。将臣」

「席ってなんの」

「町内会のオレの席。口利きしてやつからさ」

「俺面倒事押し付けられてない？」

「何も思い浮かばないオレよりいいだろ」

「ならお前の横に座らせろ」

「は？ 茱子専用なんだが？」

「そういう意味じゃねえアホ！」

「うっせ、わかってるよ」

要はオレにサボるなど言いたいわけか。

けど役に立たないのは事実だし、役に立つ筈もないし、正直変わってくれるなら喜んで席を譲るんだけど。サボるサボらないじやなくて、やることないし何もできない。だからやることあつて何かできる奴に譲った方が有意義だと思つたからに過ぎない。

もちろん協力しろと言われればできる限り協力するし、できることはするのだが。

『そうじゃ、芦花よ。お主の店のぱふえには毎度世話になつておる。美味しいぞ、とても美味しい。できればご主人に内緒であと2、3個ほど……』

「たははは……聞かれていますよ？ ムラサメ様」

「ムラーサーメーちゃんー？」

『じよ、冗談じゃご主人』

『……貴公は自らを病人と忘れてはいまいか』

『忘れておらんわ！ ただどうにも何もせず寝転がつてるだけだと甘味くらいしか無くてのう……』

『ふむ、我が半身の家からゲームでも持ってくるか……』

そうか。ゲームか。確かにお袋が買ってた記憶あるし、持っていくのもありやもしれん。

……とはいえ、穂織だから都会よりも二、三代も遅れている。今じゃオンラインが主流らしいが、オレがやったことあるゲームと言えば所謂過去の名作だし。

しかし流行らないのは色々古いのが影響してゲームやる環境ではないのと、ど田舎過ぎてたとえ持っていたとしても機種も世代もバラバラだ。壊れてもそう簡単に直せないというのも大きい。あとソフトがさっぱり手に入らない。ので、漫画やらアニメやらが基本的な話題だ。

「お前んちってゲームあるの？」

「もう何年も前の奴だけだな」

「ハードあってもソフト手に入り辛いよな」

「如何にも。そしてその逆もまた然りだ」

あつたらめつけもん。あつても宝の持ち腐れ。二律背反にすらなりやしない、どうしようもなさ。

なんというか、穂織という土地がどのようなものがはっきりわかる。

……時代遅れもいいところだ、まったく。

とんだクソゲーだ。

どの道何をしようが復活しない。失われた命を返還しない限りは。そして命は決して返還されることはない。返還される命がそれを選ばないのだから。

「……さて、どうしたもんかな。オマエ考えとけよ将臣」

「わかってるよ。てか今日言おうとしたのにお前が遮るのはどうなんだよ」

「知らん」

「常陸さんに言うぞ」

「やめろ」

茉莉に怒られるのだけは嫌だなあ……うん、とつても嫌だ。

「で、この集まりはどうするんだ？ もう続けられる雰囲気が無いだろ」

「そうさなあ、なら後はムラサメ様との触れ合い会にするしかなかる

うて」

「それでいいのかなあ」

「いいだろ別に」

どの道、答えはあるができないのだ。

——それをしてしまえば、必ず穂織は”黄泉帰る”からだ。

死んでいてくれない、殺されていてくれない、愛殺させせてくれない。

オレは穂織を愛殺している。

そして穂織はある意味オレが愛殺したようなものだ。

だから愛殺し続けたい。それがオレの愛だから。

だから——愛する者よ、死に候え。

死に続けろ。

殺され続けろ。

オレにオマエたちを、愛させてくれ——

「……馨？」

「ん？ ああ、いや、なんでも」

——これは、全て終わった後の感想になるが。

結局オレはこの考えに気付けなかった。

オレは内心で穂織の死を望んでいたのだとは、最後の最後まで気付かなかったのだ。実に間抜けな話になるが。

……それもまた、魔人のサガだろう。



——やつと開いたか……——

苦労する妹だ、と。

やはり心底からそう思う。

——仕掛けて、なんとかか。しかも一度きりとは——

色々と面倒極まり無い……500年で何をしたかと思えばくだらない。閉じこもり続けることだけ極めて、これがこうなるとは。なんというか、あまりにも情けない。

我が妹ながら随分とまあ……と嘲笑しながら開いたとだけ馨へと

伝える。

——どうなるかしら——

——さてなあ？ 奴がどうするのかなんて我々にはわからん。馨が何をさせる気なのかはわかるが——

——……本当に、あれがいいことなの？——

——あれしかないさ。魔人が内なる悪魔と向き合うには——

秋穂にはわからない。魔人ではないからこそ、奏の言っていることが理解できない。宿痾、内なる悪魔と向き合うために、彼らが行うことが何一つ理解できない。

まるで自滅だ。傷は知覚するから痛みを覚えるのなら、自分は傷を負っていることを自覚するために敢えて傷口を覗き込み塩を塗り込むのと同じように。

——ま、くだらん話だ。なるようにしかならん——

だがそれらをまとめて通過儀礼やくだらん話として切り捨て、そうして何のためらいもなく実行しどれほど己がさもしくて、浅ましい存在かを知って——それからはなるようにしかなれない。悲しい生き物でもなんでもなく、魔人とは初めから生まれるべきではなかった鬼だ。

——で、どんな気分なんだ？——

——それを聞いてどうなるの——

——私が楽しい——

——言う必要は無いわ——

——つれないな——

ケラケラと笑う奏と、それに呆れる秋穂。彼女らの間では珍しくないことだ。

——おやおや？ おい。なにやら面白いことになっているぞ。白

狼の奴から聞こえてきた——

——どうせ馨君の話してるんでしょ——

——まあまあ。お前も聞いてみるって——

ただ彼女自身、退屈であるのは事実だった。宿主である馨に面白いことなど基本的に無いし、話し相手と言えばこの十数年間奏だけだ。

タネも尽きた。

ので渋々と、しかし久しぶりの面白みに触れられる嬉しさを隠しながら、その言葉に従って視界と聴覚を紐付けして……心底から後悔することになった。

もちろん奏は爆笑していた。

「……髪をほどこしてもらおう?」

「そう。茉莉はしてもらったことない?」

「ないですけど、急にどうしたんですか」

この人いきなり何を言ってるんだ。

それが茉莉の素直な感想であった。二人だけで話したいことがあると言われて人気の無い裏口まで付いて行って、開口一番これであるとなんだか不安になる。

しかし芳乃と言えば至って普通の表情。天然ボケの気があるので、何か普通の話題なのだろう。

「別に大したことじゃないんだけどね、その……初めてシた時、私色々勘違いして巫女服姿で行っちゃって」

「その折にほどこしてもらったと」

「うん。それがなんだか、とつても嬉しくって。茉莉はどうなのかなーって思ったから聞いたんだけど、そっか」

そう思っていたらこれである。助けて馨くん、と思いつながらも平静を保ち……少し気がかりな言葉があったことに気が付く。

勘違いをするような説明してない、寝間着でいいって言った筈なんですけど……と茉莉は思い出すが、しかし何処かの幼刀が脳裏を過ぎり、何を吹き込んだやらとため息を吐く。面白半分であれこれ有る事無い事言っただろうと目星を付けた後、少し冷静になってみた。

「……というか巫女姫が巫女服で初夜を迎えるってだいぶマズいのはありませんかね」

「き、着たままとかそんなことするわけないじゃない! すぐに汗かいちちゃったから全部脱いだもん!」

「とりあえずワタシが危惧していたことはないみたいでよかったです」

す」

着たまま……と言えば、結局自分の初体験はそこまで時間が無かったという理由こそあれど、露出は最低限だったなあと回想する。「脱いだ方が良くないか？」と言った馨に対して「裸だと恥ずかしいから……」と切り返したのは記憶に新しい。

その反応にもものすごく困った顔をしていた馨が意外だった。てつきり男の子なんだから着衣エロとか好みかと思っていたのだが。実際家にあつた本には——と思いついて、関係無い話題だと切つて捨てた。というか思い出し続けたら多分、自分が我慢できなくなる。

(……ワタシってこんなのだったかなあ……?)

はてさて、忍者で抑え過ぎた所為なのか、元来の性癖なのか……

「でも実際……いいわよ」

「なにがです?」

「お仕事の服を着てると気を張るじゃない。それを大好きな人にほぐされて、いつの間にか一人の女の子にされちゃうっていうのは、なんていうか——」

「あ、もういいです。猥談はもう疲れました」

「ひどい!」

主人から猥談を振られる従者の身にもなつて欲しい。——しかもど直球で割となんとも言えない類の話題を。

しかし、しかしだ……

——常陸茉莉子。

忍びと従者の道に青春を捧げ、割とあんまり手を出してくれない初恋の人と結ばれて持て余しているのもまた事実。

「……けど、馨くんは忍び装束を……」

故に、少し考える。

最愛の人の手によって、忍びとしての自分があつという間に少女に戻される瞬間を。

「いい、かも」

何もかも捨てて、自由になれそうな——そんな甘くて、心底から蕩けるような……

「でしょ？」

「なんでそんな破廉恥なコトを思い付くんですか芳乃様は……」

「ん………実体験？」

そりやそうだろうけどと思うがしかしそれを従者に勧めるのは何か違うような。というかそれは一般に背徳感と呼ばれるようなものではないのか？ 茉子は訝しんだ。

「ねえ茉子。惚気聞かせてくれないかしら」

「は？ えっと、何故ですか。お花のこと以外だと、面白くないと思いますよ」

「お花のことは素敵だけれど、普段の様子 of 惚気とか聞いてみたいのよ。それに、私ばかり惚気て、たまには仕返しとかしたいでしょう？」

ふむ、と。

思い返してみれば。

——将臣さんの寝顔が可愛いのよ。

——将臣さんったら意外と子供っぽいのよ？

——将臣さん、前はだいぶ生活習慣がアレだったとか。

——将臣さんがこの前膝枕してくれたのよ！

……聞いてもないのに結構聞かされた。

ワタシ全然してないのに。

「……いいでしょう。芳乃様がそこまでおっしゃるのであればやぶさかではありません。わかりました、では惚気ましょう。常陸茉子、参ります！」

「参りなさい、茉子！」

何かを根本的に間違えている始まり方をしたが、茉子は芳乃に宣言し、芳乃はそれに受けて立つ。ここに奇妙な惚気対決が幕を開けることになった。なんだろう、この……この……

「コホン。ではまず……馨くんったら基本的に私生活アレ過ぎて、ワタシものすごく幻滅してます」

「幻滅だなんて、そんな茉子ってばだいた——」

「えっ、幻滅？」

……はて？ 幻滅が惚気になるのか？ 芳乃は何を言われたのかしばらくわからなかった。しかし茉莉は彼女なりの惚気を続ける。

「はい。幻滅です。ワタシが泣いているとすぐに何があつたのか聞いてくれて、何かを言うわけでもなく黙って聞いてくれた後に、一緒に綺麗な場所を見に行こうと、下手くそだけど素敵な笑顔を見せてくれた馨くん像はもうカケラも無いですね」

過去の王子様はいつの間にか行方不明に。今はどうしようもないダメ男しかいない。存外、初恋なんてこんなものかと思うし、それが嫌というわけではない。むしろそんなに綺麗すぎるものよりも、程よく汚い方が安心感がある。

「あと家の中で下着姿でうろつき回っているどころか、白シャツにズボン履いただけで買物行こうとか普通にしようとしてましたね。休日のおじさんか何かなんでしょうか」

ただそれはそれとして苦言を申したいところは沢山ある。これなんてその一つで、言い出せばキリがない。馨はいいところよりもダメなところが多すぎる人間なのだ。しかも低血圧でもないのに朝は何もしたくないと二度寝するわ寝惚けたフリをするわで本当に酷い。

「せっかくイイ顔と声と身体をしているのに全部台無しです。昔の可愛いところとかほとんどないですね。代わりに成人向け雑誌の杜撰な隠蔽が発覚した時とか、一緒にお風呂入った時とかに今の馨くんだからこそ可愛いところを見せてくれるようになりましたけど」

まあ可愛いと言っても当社比。

ぶっちゃけ可愛くないのが本音でもある。そんなのが好きなのが。

「ですが、ワタシはそれがいいんです。そんな馨くんが好きなんです。ひたすらに不器用だけど自分らしく生きている馨くんが、とつてもかつこよく見えるんです。だからワタシも彼と同じように自分らしく生きて、そしてずっと隣にいたいって——」

自分らしく生きる、それが例え血塗られて呪われた道だとしても、彼はそれを選んで貫いている。馨のそんなところに茉莉は心惹かれたのだ。

「だって思い出の中の美化された馨くんより、現実のダメダメでどうしようもない馨くんの方が、生き生きとしてますから」

思い出は思い出に過ぎない。色々と不都合があったり腹の立つ行動をしてくる現実の方が、それこそ生きているってものだ。

だからそんな、不完全で、不器用で、甲斐性があんまりない、そんな稲上馨という人間が一番魅力的に見える——茉莉は、本気でそう思っている。

「なるほど……なるほど。茉莉はそういうところが好きなのね」

「はい。愛するって、難しいですね。ダメなのに……愛してしまう」

好嫌入り混じる感情を抱いても、それでもこの人がいいという譲れない想い。よく馨が言っているが、愛するとは難儀なことだ。

そして、愛する人を殺すことこそが愛の証明となるような狂人を愛するなど。けれど……本気で好きになって、愛している。愛とは狂気、そして愛する者に正気などない。

どこか納得したような芳乃は茉莉に向かって微笑んだ。自分の所為で何もできなくなった彼女が、ここまで色々と思えるようになったのが、嬉しいからこそ。

「で、茉莉。実は——」

そして。

とても神妙な顔で告げられたその一言に。

茉莉は、心底から驚愕した。



やっと開いたのか、というのが正直な感想だった。

まあいい加減寝る度に妙なものが流れ込んでくるのにも飽きていたところだ。そろそろ強引にでも向き合っていたらこう。

——さて、ムラサメ様との愉快的会議と言えばもうみんながてんやわんやと楽しいげに雑談して終わり。シレッと玄さんが混じっていたりしたが、まあまあということだ。

けど芳乃ちゃんと茉莉は何を話してたんだ？　なんだか物凄く微

妙な雰囲気あったけど。ちよろつと聞いても教えてくれなかったし。……聞かれたくないようなことでも話してたのかなあ？ オレ、その辺割とニブチンだからわかんねえや。

それはそれとして、大問題がここで存在する。

まず京香の精神状態はロクなものではないと推測する。そしてオレがやろうとしていることは、現状を単なる火事とした時、そこに油を一日中注いで街一つを火の海にするかの如き愚行だ。

——彼女は古き時代の人間だ。その生死観はオレや同年代であるはずの奏よりも酷い。ここでオレの愚行を笑って許すほど、京香は優しい人間ではないし、やってしまえば何が何でもオレを殺そうとしてくるだろう。自分が生きるために。

一時的とは言えども完成された魔人に、オレや奏では辿り着けない技のキレを持つ京香がなった時、まず問題としてあるのがオレの死である。

はつきり言おう、殺される気しかない。

勝てる勝てないではない、殺されるのだ。殺人者としての才覚が、とかではない。純然たる事実として単に殺しの才覚に優れただけの存在が、心技体の揃ったベストコンディションの存在に殺されるか殺されないかと言えば、誰しもが後者を選ぶ。

死なないように立ち回っては勝てる道が無い。殺すように立ち回っては本末転倒。だがベストコンディションとなった京香とまともにより合えるとしたらオレしかない。

完全な性能を発揮した魔人は異常な程の能力を誇る。常に死に瀕した人間と同じ能力というだけではない、そこから更に死に瀕すれば瀕する程のより際の際に——よりふざけた能力になってしまう。

……二、三は死ぬ前に心臓を再生することは確定だな。

そしてここが大問題の中の大問題。

——京香を止める。

そう、止めるのだ。殺すことは論外。止めて納得させて、死ぬことを認めさせなければ祟り神の類になりかねない。そもそものが生き怨霊で、いくら杭と鎖が溶け落ちているとは言えどもその存在は神代の

ものだ。十二分に留意しなければまた祟り神騒ぎを起こしてしまう可能性が付いて回る。

正確な順序を経て、正しい方法と正しい存在が正しいもので祓わなければ完全に消えることはない。まったく面倒だが、オレもそうだから困ったものだ。

……まあ依り憑く先があれば、の話だが。残すつもりもないし、そんなものを作るつもりもない。もし何かの間違いで亡霊として彷徨うことになったら、然るべき手段を持つ人間に頼んで大人しく消えるさ。

みんなも、茉莉もない世界に興味はない――

「はあ……」

気が重い。

面倒な先祖を抱えたものだ。

「大丈夫？」

「ううん。全然大丈夫じゃない」

流石に気が滅入るので、隣にいる茉莉に素直に言うておく。

「何かあったの」

「別に何も無いよ。――いや、何かあるな」

「なにそれ、結局誤魔化してるじゃん」

「ごめんね」

ムスツとした顔を見た途端に謝ってしまうオレ。そんなオレを見て彼女は本当に不機嫌そうに目を細めた。

「ごめん、言えなくて」

「言いたくないんでしょ？」

「それは、そうだけど。正直、言ったら心配かけちゃうから」

「言い訳も下手くそだね。もう心配になってきちゃったよ」

「ごめん。でも、オレはオマエを巻き込みたくない」

「もう巻き込まれてます」

「……ごめん」

久しぶりの敬語。

けれど謝ることしかできない。

「忘れて、は無理だよな」

「無理だよ、だって恋人が心配になるようなことになってるって言うてたんだし」

「でも、上手くいけばもつと上手くいくんのだ」

「何そのバカみたいな説明」

「と、とにかく上手くいけばそれで終わりなんだってば!」

「上手くいかなかったら?」

「迷惑かけます……」

呆れた溜め息。とは言えどもすんなり説明している分マシになつたような気がしないでもない。さて茉莉子から見た時はどうなるやらだが、ただそれ以上何も言つてこないの、ある程度は見逃してもらえているのか——それとも。

とかく、オレは改まつて立ち止まり、茉莉子と向き合う。茉莉子の顔を見て、意を決する。

「オレはやる。そう決めたから、何をしてでも、必ずやる。必ず上手くいかせる」

そして宣誓した。

もう引き返せない。だがそう決めた、ならばやり遂げる。ただそれだけ。ありとあらゆる手段と方法を用いて、京香を納得させてみせる。

……けど、茉莉子からしたって何も言つてくれない訳だし、急に宣誓されてイマイチよくわからない感じだし、ふむ、ここは——

「だから、終わつたらご褒美くれ。ケーヤク」

「あれまだ生きてるんだ……」

「冗談だと思われてたのかよ」

ケーヤクつたらケーヤクなんだぞ。

「ご褒美つて、何がいいの? ワタシにできることならなんでもするよ」

「なんでも?」

「うん、なんでも」

「……女の子が男の前で迂闊になんでもするって言うもんじやない

ぞ。例え恋人相手だとしてもさ」

まったく、不安になるだろ。オマエ可愛いんだから。

見るからに微妙な表情でもしていたのか、茉莉子はクスクスと優しく笑っていた。なんだか手玉に取られているような感じがして、少しそっぽを向く。

「言わないよ。馨くんだから言うの」

「知っててもさ」

知ってても納得がいけない。我ながら難儀な性格だこと。

……ただなんでも、なんて言われたら。

「……ちよつと」

「どうしたの？」

茉莉子の手を引っ張って路地裏に入る。

前に告白しそびれた所と同じく、特に人が来ない場所。

そこでオレは彼女を、抱き締めた。

「茉莉子、なんでもするんだよな」

「う、うん……なんでもする、けど」

戸惑った声が聞こえる。表情は知らない。

わかるのは体温と鼓動と柔らかさだけ。

「じゃあ、ご褒美は朝まで付き合ってくれ」

「朝までって……何を？ 何に？ ねえ、馨くん」

「——言わせるのか。言って欲しいのか」

ジツと見つめる。視線が逸らされる。

「……くっくっ」

他には何も言わないでいると、ナニを想像したのやら、茉莉子が赤くなった。まああつてるんだけど。

「茉莉子」

「……待ってる、から」

「いい子だ、愛してる」

おかしいな、頑張ったご褒美の筈なのにどうして我慢できた茉莉子へのご褒美みたいになってんだコレ……？

なんとというかなんとも言えない小さな疑問を抱きつつ軽く頭を撫

でて、触れ合うだけの小さなキスをして、終わったらねと別れる。

そして家に帰る——のではなく、敢えて裏山を訪れる。もう何度も足を踏み入れた筈なのに酷く懐かしい気分になるのは何故だろうか。

四つ数え、息を吐き、全てを切り替える。

オレという存在が殺すためだけのものに変わる。袖口から短刀を取り出し、両手に握る。

——今からやるか——

「即断即決、やる。——さあ、目覚めの時だ」

腹の底から引き摺り出すことをイメージしながら、オレの中に存在するオレでないモノを見分けていく。そしてその中で一際大きなモノを取り出し、付いているゴミを削り落としていくように——

刹那、視線の先に漆黒の渦が巻く。やがてそれは人の形を象り、黒一色から色を持ち始めていく。様々な色が人間という形で彩り、そして遂に京香は——外に出された。

開かれた瞳に映っていたのは、途惑いと怒り。愛憎混じった複雑な感情。そして羨望と嫉妬……退屈。

「よう、元気？」

「そう見えるなら目が腐ったな」

「ははは、違う。死んでるように生きてるもんな、オマエ。いい加減認めろよ。ワタシはレナに謝りたいですって」

「そんなことはわかってる」

「もちろん謝るのは実はワタシ自身が殺したかったからです……だから？」

コイツがレナを羨んでいたのは知っている。

いや、羨んでいるのは自分以外の全てだ。自分以外の、当たり前前の生活が送れて輝かしい未来を持っている者全てが。

——そして、それを潰したい。殺したい。鎬を削り、果てに追い落とす。そこに生を感じるから、そこに死が無くてはならない。

レナを手にかけてしようとした理由は、復讐心だけではない。

「貴様……！」

「認めろって。それで終わりでもいいじゃないか。度し難い怪物って認

めりやすぐに謝れるよ、ご先祖様」

「……私は、人間だ……！」

「戯言を」

姉貴と子孫が魔人なら、オマエだって魔人だろうに。

「人間ならそもそも素直に謝れる筈だ。罪の意識から逃れたいなら、殺してくれでも何でも言えた筈だ。それが言えないなら——何故言えない」

まあ、結局そこなのだ。

やらかしたことに対して責任が取れない女ではない。自分の首すら遠慮無く差し出せる程の女が、何故それができないのか。

「罪の意識からか？ いや、罪の意識があるなら素直に断罪を求められる。だっていうのにオマエは何も言わずに消えたがる。何故だ？ 許さなくていいから一言謝りたいと言えるオマエが。その答えはただ一つ。

——自分がそういうものだとして理解しているからだろ。ご先祖様」

姉への復讐心だけでなく、羨望と歪んだ愉悦を満たす為に殺そうとした。全てに優先するのは自分だとして。それが答えだ。

「謝ることはそれを認めることになる。だから何も言わずに消えた。情けないじゃないか、ご先祖様。人にはあれこれ言いながら、自分はそんなもの関係無いってのは、汚ねえやり口だ」

これを認めさせてより消えることを望ませない、変に残ってえらいことになりかねん。それは避けなければならない。

……なんて考えてたら首根っこを掴みあげられた。鬼気迫る表情に、全身から滾る怒りと憎悪と——実に複雑だ。

「……おいおい、なんだ急に」

「貴様……！ ならば貴様はどうした！ 貴様はその醜いものをどうして受け入れられたのだ！ 答えてみせろ！ ええ!? どうせ誰かに支えられたとか、今を生きる者だからこそ受け入れられたんだろう!？」

……なんだ、そんなことか。

「醜いこれをどうやって受け入れられたか？ ははは、オレは最初か

ら自分の魔性を、宿痾を否定なんかしてないぞ。初めからまあそんなもんかと思ってた」

「そうだ、オレは。」

「最初に普通の人間として生きて死ぬって決めたから普通の人間として生きたかっただけで、オレはそれが叶わないから死のうとしただけだ。」

——魔人であることは否定していない」

コイツは魔人として生きたくないから目を逸らして人の真似事を続けてるだけ。

オレは普通の人間として生きて死ぬことが望みの魔人で、それができないから死のうとしただけ。

……根本からオレと京香は、似ているが正反対。認めるか認めないかの最初が違う。ついでに言えばオレと奏は同類だ。しかしヤツとは正反対の道を選んだ。

葛藤などオレは、初めからしていない。オレが葛藤したのなど、菜子と芳乃ちゃんに関係したことくらいなものだ。オレに対する葛藤など、雀の涙程もない。

「魔人だと知って、だから何だとまずは思った。普通の人間として生きて死ぬことくらいはできるだろうと。だが真つ先に菜子の命を手折って、愛殺したいしたいと感じた。もちろん何かの間違いだと思った。だからまずは頭の中で想像した。彼女を愛殺すすオレを。——とても満足そうだったよ」

理解できなかつたが、自分の感性が人と外れていたのは自覚していた。だからまあそんなこともあるとして……だがそれが本当に起きたらどうなるのか？ 起こそうとして起こすものなのか？ これは普通の人間という夢を奪うものなのか？

そこそが問題だった。

「本当にそうならば、確かめる必要がある。それが現実ならオレは普通の人間として生きて死ねないことの証明だからな。だから次の日、菜子に手合わせをお願いして、そのドサクサに紛れて愛殺そうとした。もちろん、実直な愛情殺意を向けたからあつさりと見切られて負けたよ」

そんなに勝ちたかった？ と呆れられながら言われたが、当のオレは――

「終わってみて、オレを襲ったのは後悔だった。もつと強くならねば茉莉を愛^{殺せ}せない。対等な立場で、対等な戦いで、対等な実力で、お互いに傷付け合い命を賭してこの愛情を証明し合う逢瀬は、強くならねば得られない。魂が叫んでいたんだよ、もつと力をつけてな」

人を愛する……普通の人間として当たり前前のができない。つまりもう普通の人間ではない。オレは――殺すことでしか愛せない魔人だ。

「――その時点でオレは自分自身の望みが一切叶わないと知った。ならば答えは一つ、今すぐにも死ぬしかない。理想になれない？ ならば即座にその命を神に返せ、生き恥を晒し続ける道理もあるまい。それに、茉莉には死んで欲しくない、茉莉は茉莉の幸せを掴んで欲しい、大好きな人にオレの醜^尊い求愛^{殺意}が知られたくない、オレのことなど忘れて長く生きて欲しい……そう思ったよ」

疎ましく、悍ましく、呪わしく、忌まわしく、罪深いこの宿痾。

これを受け入れなければまず死を選択できない。自身が異常であることを知って、それがどうしようもないから死ぬことを是としただけだ。

他にやり様があつたら、曲げたくないこの感情を適当な大義名分で納得させて、内心は不満タラタラのまま生き続けていただろう。

「奏は宿痾を知って飲み込んだ。だからアイツは立場に応じた態度を取るだけ。謂わば一種の仮面の付け替えに等しい。」

対してオレは宿痾を知ってこれもまたオレだと認めたが、理想そのものになれないからと死を選んだ。どんなにイカれた奴でも、感性が真つ当なら、自分が誰かを害する前に自殺の一つや二つくらいするだろうか？

そしてオマエは、宿痾を知って目を逸らして、誤魔化しているだけだ。

オレたちはな、殺したいから殺してるんじゃない。そうしなきゃ生きていけないから、殺して”しまうんだ”。生を感じることに死がな

くてはならないこの矛盾螺旋——だがオマエはどうだ？

オレも奏も生きるために死に向かつて疾走する患者だというのに、オマエだけは死に向かつて疾走せず、生に向かつて足踏みをしている。

いつぞや言われたことをそっくりそのまま返すぞ、伊奈神京香。

……大きく出たな小娘。宿痾と向き合うことなく必要と不要を履き違えた愚者が。魔人を名乗るなよ貴様。雑兵狩りで驕ったつもりか」

自分が”生きるために”殺している。

決して趣味じゃない。本音を言えばやりたくもない。何故ならそれが自分の首を絞めることに繋がっているからだ。だがやってしまおう、それが魔人だ。

だがコイツはどうだ？ ”生きるため”の殺しを全て”趣味の殺し”に置き換えている。これでは殺された者たちも浮かばれない。自分の命が有益に消費されいるかと思えば、無駄に消費されているどころか何の役にも立ってないとは。

せめて殺した者の命は有意義に消費するべし。奏が殺人を続けていて、オレに敗北するまでそうしようとしていた理由はソレである。「わかったか、愚か者め。やりたいと思っただけでやるならただの殺戮者だ。やりたくないがやってしまうこそが、魔人なんだよ」

——そこを間違えてはいけない。

人を黜りたいだけで殺すつもりは毛頭無いが殺してしまう奏。人を愛したいだけで殺すつもりは毛頭無いが殺してしまうオレ。

オレたちは……殺したくなんかない。けれど殺す。殺してしまう。そんな虚しい生き物、愚かな生き物、決して生まれるべきではなかった生き物。

それがオレたち——ヒトの恋に寄生して生まれた化け物 魔人 だ……

「……だから、認めろと？」

「オマエが変に残っても面倒だ。残りたくもないだろう」

「……」

「だが、これは邪魔だと切り捨ててしまおうとそれが余計な意志を持つ

可能性がある。だから認めて、これを持って行って欲しいのさ。いい加減楽になりたいんだろうし」

手を離し、沈黙する。

そして——剣が突き付けられる。

誰に？ オレに。

「八つ当たりに、付き合え」

血を吐くような、低い声。

「私を魔人だとするなら、それ相応の対価を払え。5分だ、5分間八つ当たりにつき合って死ななければ……私は私の宿痾とやらを、認めてこいつを地の底まで持って行ってやる」

「偉そうなことを言うなあ、オマエ」

「黙れ」

「まあ、いいさ……5分だな？」

互いに得物を構える。

「殺すぞ、馨。その面見てるど姉様思い出して癩に触るんだよ——」

「やってみろ、出来損ない。茉莉からオレを奪ってみろ……奪えるものならばな——」

ささて……最後の仕事だ——！

落差

血が吹き出す。刃が煌めく。火花が散る。

「——死ね」

何度聞いたか忘れるくらいに聞いた声。何度も何度もその面を見せるな死ねと聞いて、いい加減聞き飽きたところもある。

……だが。

「クソ……」

開始して1分も経たずに、二本の短刀は破壊された。何合と打ち合った訳ではない。僅か3合目で破壊されたのだ。まさか正面から刀身を両断されるなんて。

——ははは、流石は私の妹だ。この化け物の如き圧倒的な戦闘能力。さて何度死ねば足りるかな？——

呑気にそんなことを言っている阿呆を無視して現状を分析する。

……手元には虚絶が一本、それだけ。彼我の戦力差は歴然。オレを殺せば済む京香とひたすらに耐えなければならぬオレ。

色々と解放して、小細工を使うという手もあるがさてそう上手くは行くまいよ。

「何故生きてる。疾く死ね、馨」

「悪いな、そうそう簡単に死ねないんだよ……」

「知らん」

両手で握り、正眼に構えて。

まったくらしくないことをしているなあと自嘲して——こちらから踏み込む。牙である短刀は完全に破壊され、あくまでも首斬り道具に過ぎない虚絶を持ち出している以上は、やるべきことをやらねばならない。

「ふ、っ……!」

「……」

冗談ではない。

完璧な一撃だった。踏み込む距離、振り下ろす速度……間違いなく人生最高だったのにも関わらずまるで邪魔な小枝でも退かすように、

軽く流された。馬鹿正直に真っ向から受ける訳でもなく、刀身が振り下ろされる瞬間に横から刀身で押すだけ。文字通り、流した。

「脆弱」

流したそのまま、袈裟が襲う。

不安定な体勢で、弾くには遅すぎる。短刀も無い。故に受けるしかなくて――

「ぐ……っ！」

冗談ではない。

一撃が、違いすぎる。被弾した時、奏の剣には痛みを覚えた。将臣の剣には引き剥がされるような感覚を覚えた。だが、京香の剣は違う。

痛みなどない。気付けば肉体が裂けている。

――1分15秒――

袈裟に押され、後方へと下りながら修復を優先する。が、修復が始まるよりも先に京香が踏み込んでいた。

咄嗟に盾代わりに虚絶を構えて――音を立ててへし折られる。

一閃。

たった一閃で、しかも構造的に弱いところでもなんでもなく真っ向正面から、文字通り向こうの刀剣でへし折ってみせた。

――1分17秒――

「……さあ、どうする」

「まだだ」

だからと言って止まるわけにはいかない。大人しく首を差し出してやるわけにはいかない。オレは生きてと言われて、生きろと言われてたんだから。

……オレがオレでなくなる可能性を秘めたことに手を出さねば5分生き延びるのは至難の業だろう。だがそれでも――魔人から完璧な魔物に堕ちるのだけは、選ぶわけには。

「なら苦しんで、死ね」

「――っ」

だがそんなことを悩んでいる暇があるのか？

一撃絶命の威力を秘めた斬撃を必死になって回避しつつ、今になってそんなことを悩んでいる自分に問いかける。

……今更手段を選べるほどオレは聞き分けの良い男だったか？
余力を残してどうする？ コイツさえどうにかすれば、後は穂織に生きる人々が何とかしてくれるのに？ それは無責任だが、しかし……
迷いながら、必死になって避ける。

修復しても必ず一拍遅れる。

だったらどうすればいい？ 手段を選ばなければいい。だがそれをしてしまえばどうなるかわからない。自信が無いというわけではない。純粹に、わからない。

——いや待て。

何故オレはわざわざ相手の土俵に乗ってこうも頭を悩ませているのだ。示された条件は5分の生存以外無い。そしてどうせ殺せないのだ。だったらコチラも八つ当たりしてしまってもいいんじゃないだろうか。いや、するか。

「なあ」

「……」

「オマエが何を考えてるかは知らん。わからん。そして理解できんだろう」

「命乞いか」

「いや」

空いた距離を一瞬で詰められる構えをされながら話を振ると、何を考えているのかわからないといった視線と言葉。

「オマエの八つ当たりなんかオレ受けたくねえ！ ついでに言えばオマエの面ア見るより菜子の裸が見てえんだよ！」

「何を言ってる……」

本気の困惑が見えた刹那。

オレは——

「喰らえエッ！」

その場から飛びかかり、腕に負の神力を纏わせて引き裂くように振るう。

「——ッ、卑劣な……」

如何に同質の力とは言え、受け流せるものではない。腕を切り落とす以外に潰す方法はなく、さしもの京香とて回避に徹する他ない。この隙を逃さぬと徒手空拳で攻撃を続ける。

「うつせえ！ 5分も命かけられるか！ 割に合わねえわ！ いつまで経ってもウダウダウダ悩みやがって！ どうして素直にごめんなさいって言えねえんだ！ クソが！」

「私が魔人だと言うのであるならば、その命を使つてでも未来が欲しいならば、そう難しいことではあるまい……！」

「難しいね！ 誰だつて自分の命は惜しいんだよ！」

「一度死を選んだ男が何を言う！」

「オレの半分は駒川のモンで、もう半分は茱子のモノだ！ オレの命はもう誰かの所有物だ、許可無く死ぬるかバカ！」

回し蹴りを防がれ、切り返される。無手で斬撃を防げるほどオレはすごいわけでもなんでもない。ただわざわざ色々考えるのも面倒になつたのは事実。ので——

行け、潰せ！

——ええ？ 私を働かせるのかあ？ ……あつ、動かされてる。ちえ——

奏の戦闘技術と意識を乗せた“尾”を背中から出現させ、京香へと襲いかからせる。無論切断される……が、所詮負の神力で作り上げたエネルギー体めいたもの。いくら破壊されようが動力源がある限り問題無く動く。

武器が壊されるなら、壊されても問題無いものにすればいい。腕なぞ生やせばいい。尾なぞいくらでも作れる。要はやり方の問題なのだ。

「……殺さないとか考えてなかったのか。耐えなければと考えてなかったのか」

「確かにオマエに対して色々考えてたが本気で殺すつもりで来るのならコツチだつてもうどうでもよくなる。言いたい放題言いやがって死ねだの殺すだのくたばれだの……ああ!? ふざけんなつ、くたばる

のはオマエだろうが！ 子孫の為にカツコつけて成仏してみせろ家の恥晒しどもが！」

「それは姉様だ、私は悪くない！」

「知るか！ オレからすりや全部引つ括めて恥晒しだド阿呆！ 二人して大人しくくたばってりやいいものをよお!!」

”尾”を戻したと同時に反撃の斬撃が飛んでくるが、避けることに専念すればいいのだから前よりもより正確に——とは言えども紙一重なものには変わりないが——回避していく。

なんとというか、一度死ななきやコイツの目は覚めないような気がしてきた。殺さないようにとか、止めなきやとか、なんかもう全部どうでもよくなった。どうせ殺しても死なんのだ。人であつて人ではないのだ。ならば殺してわからせるのもアリだ。

「貴様の宿痾を抑えられたのは、何処の誰のおかげだ！」

「虚絶のおかげだよ！ テメエらはほとんど関係ねえ！」

「ならば常陸菜子への告白を決意したのは！」

「ありがとうオマエのおかげだよ！ 菜子と恋人になれたのはオマエの後押しあつてのことでしたね！ ありがとうありがとう！ 感謝してるからさっさと宿痾を持って死ね!!!」

「貴様アアアツ!!」

「テメエツ!! このオ!! 死ねエーツ!!」

叫びあつて殴り合う。向こうは絶対にコツチと同じか、後に行動する。何故ならオレが素手である以上、得物を掴まれては困るというものだろう。得物を放すというのは相当にリスク、オレの面倒くささを理解しているなら絶対にしない。

……だからこそその狙い目なのだがな。

”尾”は払うか突くか斬るかしかできない。

それで十二分で、かつ定期的に破壊される方がいい。食い込まない、という認識は重要だ。振り切ってしまうのだから——それが大きな隙になる。

まあ、あれだ。勝つのはオレだ。その為なら何だつてしてやるさ。だから。

「オマエも手伝え、奏……！」

何度も繰り返した拳と”尾”の応酬の中で、敢えて対処されるような軌道を取った”尾”に刃が食い込んだ瞬間、それを奏に変えた。

あつ、という気の抜けた声が響くと同時に刃は奏の肉体に食い込んで動かなくなつた。振るだけで切れた”尾”と異なり、しつかりと肉と骨で構成された肉体は、丁寧な技術が無ければ切断できない。だから止まる。

この一瞬で、オレは奏を切り離す。

京香が完全に停止している状況ならば、確実に攻撃が当たる。そしてこの場合における最大の攻撃を行うことにした。

——五分の生存ならば。

「な……っ！」

「行けエッ！」

手を伸ばし——鎖に繋がれた杭を二人目掛けて飛ばす。

黄泉の杭と鎖は、宿主であるオレの物だ。虚絶に紐づけられているものも含めて、オレが主人である。故にその全能力の使用など容易く、またその使い方も全て理解している。何が出来て、どう使えるのか——

飛んだ杭が”開き”、檻を形成する。

そして檻は二人を包み込み、鎖はオレの中に戻った。

「……五分生きてりやいいんだろ？ だったら出てこれなくしちまえばいいだけの話だ」

もう付き合つてられん。それが正直な本音だった。

だからオレの管轄下では無かった京香を奏と同じところに入れて、オレの許可がない限り出られないようにした。ついでに言えば文句も聞こえないようにした。あとは勝手に姉妹で殺し合っていてくれ。

……第一、なんでオレがご先祖サマの癩癩に付き合つてやらにやあかんだ。八つ当たり先はいるんだからソツチを殴つてくれ。

「……駒川ンとこ行こ」

この話、葉子には聞かせられないなあ……

まさか五分間生き残れつて言われて、別の誰かに押し付けて閉じ込

めるとか、カッコよくないし。

——ま、本音を言えばどーでもいいがね。

「……で、君は傷だらけなわけだ。まったく一言言いいなよ。何も聞かされてないと心臓に悪い」

「ごめんごめん」

傷だらけの身体でフラツと現れてみれば、いつものように小言を言われながら、診てもらおう流れ。ただオレから来るのはよっぽど珍しい……いや実際珍しいな。とにかく、駒川はやや怪訝な顔をしていた。「しかし、どういう風の吹きまわしかな？ 君がこんな風に治療されにくるなんて」

「流石に同胞からの攻撃だし、不安も残るさ」

「私は喜ばいいのか、悲しめばいいのか」

「素直に頼ってるんだぜ、喜んでくれよ」

前までなら自分で治してそれで終わりだったよ、と伝えてみるとそれもそうかという視線が返ってくる。

「やれやれ……ま、頼るようになった辺り成長か」

「成長って認めてくれるのか？ ありがとな」

「背伸び程度だけどね」

「結構伸びてんじゃない」

「そんなのは詭弁だよ」

「ひでえ」

口ではそう言うが、自分でも詭弁なのはわかっている。背伸びは結構伸びるが、結局何も変わってない。所詮まだスタートラインに立つたくらいだ。

「いつつ……！ もうちよい優しくしろよ。痛いもんは痛いんだ」

「十分優しくしてる。それと痛みは生命反応の証、生きてる証拠だよ」

「生きてる、ね」

「納得はした、理解もしている。けれど胸のつつかえは取れない？」

「いや——生きるのって、難しいなって」

「みんなそんなものさ。君も、私も、この土地も」

——生きるのは難しい。誰でもみんな難しく生きている。楽には生きているかもしれないが、簡単には生きていない。

……しみじみと噛み締めていると不意に頭をよぎったのは、経過の話と色々頑張ったご褒美だった。そう……その、治った後とはいつからでとか。そういうの。

今まで放っておけば治っていたが、実際何があるかわからない時は、駒川に見せるのがいい。のでここに来たのだが——

聞くしかない。意を決して尋ねる。

「……なあ」

「ん？」

「経過は2日にいっぺんくらい見せに来るとして」

「どちらかと言えば不調の確認とかそういうのだろう。見た目は相変わらずだけど、今回はレアケースだ。それくらいで頼むよ」

「不調とか、5日くらいなければ激しい運動とかオツケー？」

「そりゃね。でも君にとっての激しい運動って私たちにとっての限界稼働じゃ——」

しかし。

ここまで言いかけたところで、駒川は何か物凄く言いづらそうな顔をしてから、しばらく沈黙考して、そしてとても嫌そうな……そういうとやや語弊があるが、絶妙な顔であったことは事実だった……そんな顔をして、ため息を一つ吐いてから。

「——まさか、夜の運動そういうことか言わないでくれよ」

単刀直入にぶっ込んできた。

「あつ、はい。おっしゃる通りです。下ネタそつちです」

何一つ言い返せないの、大人しく白状した。すると今度は眉間を抑えてまた一つため息を吐き、なんだか諦めるように一言。

「……性欲強いのかね……」

「菜子は否定できないな……オレは知らん。あの時だって——」

「そんなこと聞きたくないから言わないでくれ。何が悲しくて人の性事情を聞かされなきゃならないんだ馨」

「あ、ごめん駒川」

「私ならまだしも、それ外で言うなよ?」

「言うわけないだろ!？」

「さてどうだか」

……そのなんだ、まるで一度そんな相談されたみたいな顔。え、なに、オレの知らんトコでバリバリそんな相談されたの? うわ可哀想だな……

ていうかささてどうだかってオマエ。オレは弁えてるタチだぞオイ。そんな所構わず発情するような変態じゃない。

「よし、こんなもんかな」

「ん、サンキューな。……治療って、こんななんだな」

「そうだ。治りかけばかり見せていた君には久しぶりなんじゃないか」

「むず痒いな。他人に自分の傷を任せるって、むう……」

「慣れない?」

「……なんだろう、連中が色々言ってる気がするんだ。やれ自分で治せないのかとか色々さ。いや、まあ……あんなの治るもクソも無いんだけど」

——うるさいと言えばうるさい。

——静かと言えば静か。

——うつとおおしいと言えばうつとおおしい。

——が、そこまで嫌いにはなれない。彼らは彼らなりの考えでそれを発言しているのだから。

「彼らはよく喋るのか?」

「喋るといふよりも、コメント残してく感じ?」

「好き勝手?」

「めっちゃ好き勝手。奏と京香見りやわかるけど」

「なるほど」

「まあ、最近は静かなんだけどね。その気になれば黙らせられるし。そう難しいものではないさ」

「京香さんはどうするんだ?」

「勝利条件は満たした。それでギャーギャー言われるならいくらでも

どうとでも対処してやるさ。ただアイツは——姉と同じであるとは認めたくないんだろう」

……結局はそこなのだ。

自分が仇と同じ。自分が最も嫌う存在と方向性こそ違えど自分は全く同じ。認められるか？ 認められる筈がない。

「父と母を殺し、夫と子供を殺した血の繋がった存在。魔人の宿痾は認められる。だけど憎き仇と同じだとなれば、当然認めるわけにはいかない」

「……色々アイツに向かって言ったけどさ、オレはアイツが人の幸せを望めない奴だと思ってる。ただ……認めてくれないと、なあ。オレたちは死に汚いし生き汚い。納得してくれなきゃ素直に消えてくれない」

彼女はそれを望んでいない。

だが、それから目を背け続ければそれが起きる。

だから荒療治でもやらなきゃいけない。

「ま、そんな感じ。色々だよ色々」

そうそう上手くはいかないと思うが、やるだけやってみせよう。

——半身よ、ある程度は落ち着いたぞ——

……もう？

——この短期間で奏を二百六十八回ほど殺して多少は気分が晴れたらしい。奴曰く「意味のある死なら少しはマシだ」と——
そういうものか？

——らしい——

……慣れた死だからかね。

さて、行くか。

「次の仕事だ。頑張るよ。遠慮無く心配しててくれ」

「まったく、とんだ悪ガキだ」

「言うだけマシだろ」

「スタートラインに立っただくらいで誇られてもね」

ケラケラと笑い合い、そして席を立つ。

「世話になった。また来るわ」

「今度は風邪とかで来てくれよ」

「善処する」

おつかないが、仕方ない。

オレと茉莉が、呪いの禍根にならないためにも。



「……気は晴れたか？ 魔人殿」

「理性ではわかっている。だが、感情は認めたくない……」

納得ができないとは面倒だ。

魔人なのは認めよう。だがこれと同じと言われれば、それだけは認めたくない。そんな子供じみた感情が、今回の騒動を引き起こした。

「ま、それでいいじゃないか。個人の感情なぞ。ただ問題は、敗者の分際で勝者の行く手を阻んではならないことだ。お前とてそこは弁えているだろう？」

「……ああ」

ただ感情あるものにそれをするなと言うのが無茶な話だ。

「して、どう納得するか——だよなア？」

「……」

「そんなに私と同じが嫌か。そう嫌うなよ、血の繋がった姉妹じゃないか。似ているからこそ憎み合うもの。家族などそんなものだ」

「あんたがそれを言うのか!? 私から全てを奪ったあんたが！ それを!？」

「知らんよそんなもの。お前の全てが私に奪われる程度のものであれば、所詮その程度に過ぎなかっただけの話だ」

「……くだらんと嗤い、奏はつまらなさそうに椅子を作り上げて座る。」

「ま、その辺はどうでもいいか。ところで京香、実は問題があつてな。それも、我々の消滅に関わる大問題だ」

「はっ？ どういうことだ、姉上」

「いやなに、どうも何処ぞの娘に母親を気取られたらしくてな。この

「ままだと契約が不成立になる可能性がある」

「どちらの意味でだ」

「向こうの意味でだ。こちらはささして関係無いが、向こうにとっては中々に愉快だろうさな。なにせ死んだ女の残影だ、ククツ……二度も三度も見殺しにしたくなかろうて」

ケラケラと邪悪に笑い、名残惜しさも隠さずにそう呟く。一切隠さず剥き出しにした魔性の宿痾が、悍ましさを纏って当たり前の感情を食い物にせんと牙を研ぐ。

それに対して京香は顔をしかめ。

「ゲテモノ食いめ」

「お前に言われたくない」

結局、ブーメランを投げ合うしかなかった。

ただブーメランの投げ合いなどしたところで、問題そのものについては何も解決していない。

「さて、どうしたものか」

「どうって……」

「彼女と話すか？」

「話したところで意味ないだろう。必要なのは向こうへの対策だ」

「無理だろう。大人は知ったとて上手くやれるだろうが、子供ではな」

「狛犬を通して彼女も勘付いているんじゃないか」

「だろうな。結局、奴も甘い」

……やれやれとため息を揃って吐く。

隠し通すと一番楽なのだが、勘付かれているとなると何処かで追求される。しらばっくれられるかと言えばそうではない。何処かでボロが出かねない、まったく面倒な話だ。

「はあ……まったく、やつと死ぬるのに、この仕打ちとは。死後の裁きを受けさせるのが正当な罰なんじゃないのか？」

「知るかそんなもの。あとは……警に任せるしかあるまい」

「そうだ、警にはどんな言い訳するんだ、お前？」

「……考えて、ない……」

困ったような声が返ってくると、奏はあんまりにもあんまりなので

爆笑した。

——せいぜい困れよ、と。

ところ変わって茉莉の家。

今彼女は、尋常ならざる状況に苦悩していた。

(秋穂様が、虚絶の中にいるかもしれない……)

芳乃から言われたその一言は、茉莉に大きな衝撃をもたらした。理論的には納得は行く。あの剣は死者の念と共にあり、可能性としては大いにある。その真偽を知っているのは、馨だけだが——

(きつと教えてくれないだろうなあ。……芳乃様には、それとなく聞いてみるとは言ったものの、こういう時の馨くんは手強い。どうしよう、何で引き出そう)

本気で何かを隠している時の馨は、その何かが初めから存在しないように振る舞える。長い付き合いである茉莉にとって、よく知る事実だ。滅多に使うこともないが、それ故に本人以外わからない。

記憶の改変からいわゆる二重思考——やれるのだからやれるのだとあっさり披露してみせていたが、今考えれば虚絶の補助あってこそのものであったのだと理解する。

しかし、それが相手になるとどうやって漁ったものか、さっぱりわからない。

(色仕掛け……？ ううん、ダメ。絶対本来の目的忘れちゃう)

そんなことをしたら片方が気絶するまで夜通しアレ確定だ。茉莉だってどうやったたら馨がその気になるか熟知している。しょーもない性癖から何まで割と知っているのだ。それをちよつとでも付けば大変なことになるのは確実。

と、なれば正面から攻めることしか残ってない。真正面から行ってもあしらわれるのは間違いないだろうが——

いや、待てと。

正面から行くのは案外悪くないんじゃないか——？

「正面……」

直球勝負はお互いにしたことがない。

ならば、ここに勝機を見出すのは的確ではなからうか。

「よし、なら」

そうと決まれば行動を遅らせる理由が無い。

茉莉はすぐさま携帯を取り出して馨へと電話をかける。

「……」

しかし茉莉の行動に反して向こう側の対応はやけに遅かった。馨らしくないとも言えばいいか。基本電話はすぐ出るか留守電で無視するかは二択である彼が、何か留守電にもならない。つまり留守電を入れていない。基本は入れているのにも関わらず。らしくもない。

4分くらい経っただろうか？ やつと馨との通話は繋がった。

『……もしもし？』

「馨くん？ 今大丈夫？」

『うん、大丈夫なだけどさ。悪い、今からオレんち来てくれない？』

実は――

ウチの倉庫、崩れちつてなあ。オレ今瓦礫の中なんだわ』

……なんて？

顛末

初めてその者を見た時、何とも言えぬ感覚を覚えた。

——なんと、矛盾した存在なのだろうか。

——なんと、壊れた存在なのだろうか。

生を是としながら、死を是とする奇怪な精神構造。ありふれた凡人と同じ趣味嗜好でありながら黄泉の魔人に相応しい、尾を喰らう蛇が如き自己矛盾。そんな異常さに心惹かれた。美しいと思っただし、それが良いと思っただ。有り体に言えば、魅せられたのだ。

その在り方が、あまりにも己の美学に沿っていて——いや、それは美学すら超越していて、魅せられたという言葉すら生易しかった。

彼の者が愛した存在に自らの骨刃を託したのが、今更になつて理解できた。それほどまでの存在だった。

だから目覚めさせてはならぬ者を目覚めさせてまでも生き延びさせたし、ある程度の方向性は与えた。その最中に重しとなつていた者が目覚めたのは想定外だったが、自己と噛み合わせることで認識の矛盾を——決して言うてはならないことを言わせないようにした。

それが良いか悪いかなどどうでもいい。それが結果的に心惹かれたものを壊し殺すことになつてしまふがそうしなければ生きてくれない。そのために使われた側が不満を募らせようが知つたことではない。そうまでしても、生きて欲しかつただけだ。ただひたすらに。

有り体に言えば——反省はしていない。

必死だったのだ。極限状況で出した答えと行動なぞ、平時で見れば反省点しか浮かばんだらう。なればこそ、反省なぞする必要は無いのだ。

極端な答えとは、得てしてそんなものだ。

??

——ウチの倉庫が崩れた。

老朽化していたところがあったのだろうか。たまたま。本当にた

またま、その時そこにいたオレは倉庫の崩壊に巻き込まれてあわや死にかけた。

咄嗟に神力を使って結界を張り、身を守ったはいいものの、無理矢理身の安全を確保したせいで神力の結界を解けば瓦礫に押し潰されるという状況。困りに困って菜子に連絡したら、警察に始まり近所の人たちというか、街のほとんどの人が野次馬含めてやってきた。

……まあ。

クソほど恥ずかしかった。

奇跡的に無傷ということと事情聴取も終わり、マジものの事故として処理されて親に連絡して、保険の話とか色々出てきて、親父とお袋も流石にということとで帰ってくる運びになった。

まあ諸々の都合も相まって2日ほどかかるようだが。

「……ねーわ」

——老朽化とはな——

——とりあえず生きててよかったじゃない——

——半身よ、肉体に問題はない。完全に保護することに成功した——

別に何がしたかったわけでもない。

倉庫の中身を掃除しながら、京香に声をかけてみていただけだった。そんな折に崩壊して死にかけるなど誰が想像ついたらうか。いや本当に運が無い。生きているだけでめっけもんだが……その、個人的にはすごくアレな気分。

「……本当に大丈夫なのか馨。お主、まさかそんな……」

「いやその、えっと、あれですわムラサメ様……あんまり、気にしないで?。」

マジものの事故だ。

気にしたって仕方ないというかも何も言えないというか……はてきて。

「いや、菜子君から聞いた時は冷や汗をかいたよ……」

「だからって何も走って現場に来ないでも。こういう時はどっしり構えてくださいってば」

まさか、街一つを巻き込んでてんやわんやになるとは思わなかった。比奈ねーちゃんなんて血相を変えてたし、ご近所さんたちもみんなぞろぞろやってきて「大丈夫か！ 生きてたら返事しろ！」とか声をかけてくれたし……いやマジで菜子への連絡聞かれないでよかった。

しかしまあ、菜子は随分と話を大きくしてくれたようで。まさかあの電話一本で関係各所ほぼ全域に連絡していたとは。おかげでドタバタと職務をほっぽり出して安晴さんまで来ちゃったじゃないか。

「……そんな大事でもないだろこんなの。たかが瓦礫に埋もれただけじゃないか。別に大した話でもない」

冷静に思い返しても、なんでこんなセリフが出てきたのかわからない。とりあえず冷静ではなかったのは事実だ。

ただまあ、このあとめちやくちや説教されたとだけは言っておこう。

「……みんなそんな怒るなよ……」

——いや君ね、怒られて当たり前でしょ——

「わかってるけどさあ……てか、なんだオマエ、出てきたのか」

——腹は決まったからね——

……京香の腹が決まった？ どういうことだった、早すぎる。悩んだのか？ 悩まなかったら逆に驚くぞ。そう簡単に答えが出せるのか？

無理だろ。

——私は……君に生きて欲しいと思った。それだけだよ——

は？ 生きて欲しい？

——大したことじゃない。殺しかけて、死にかけて、わかった。君はどことん様々な素質をドブに捨ててる。それが私にとってはおかしいんだ。だからこの手で終わらせたくないと思ったし、もしも面倒事が私の所為で起きたらそれはそれで困る。まあ、あれだ。私は私の為に消えることにするよ。それに死後の楽しみも無いなんて、つまらないからね——

姉妹揃って最低だなオマエら……

——褒めろよ。こうやって納得したことに——

はいはいすごいねわーぱちぱちー……って言や満足か？ 今更すぎるんだよ。

——けど間に合った。だろ？——

そーかい。まあ……うん……ありがとよ。

——……ま、褒められたもんじゃないのは十二分に理解してるさ。けど馨、それ以上に厄介なネタがある。姉上から聞いてるか？——

いや、何も。

——なら私から。……朝武秋穂の存在を、どうも芳乃ちゃんに気付かれたみたいだ。まだ確証は無いみたいだけど、こりや時間の問題かね——

……は？

いや、どう……するの？ これ。 いやマジでどうするのこれ。

え、契約内容には向こうからとか無いけどこれアウトじゃね？

——シラ切れる？——

無理だろ。できるわけない。

近過ぎるとわかるんだ。無理に決まってる。

シラは切らないけど詭弁を弄してなんとかはできなくもない。屁理屈で逃げ切れるかどうかは……怪しいけれど。彼女は知ってるのか？

——全然。これは姉上が先に気が付いた——

なるほどね。

……黙ってやがったなオマエ。

——いや、ついこの前だぞ。流石にくたばる機会を逃すなどという愚行はせんよ——

基本的に奏の反論には感情も何も乗ってない。ある種反射的に出てくるものであり、その出来事にほとんど関心が無いことの証明だ。だが、そんなコイツが拒否の感情を思いつきり表に出すなど……こりや事実だな。

……聞いているのか？

——いや、切ってる。答えは分かるのでな——

——馨だつて理解してるでしょ？ 彼女は絶対に首を縦に降るはずもない。無駄なことだ。だけど芳乃ちゃんだけは別だろう——

安晴さんへの対処は必要無いんだな？

——必要無いというよりも、彼は大人で人間だ。敢えて亡霊と会話するつもりもないだろう。割り切れるし、聞いてしまえば崩れてしまふからやらない——

けど、芳乃ちゃんは違う。彼女なら……踏み込むだろう。してどういう踏み込みが——？

そう考えていたとき、鍵の開く音がした。とうに夕方を過ぎて、沈み損ねた部分だけが浅く空を照らしている時間に鍵を開けられるのはたった一人だけ。

茉莉だ。

「どしたー」

「聞きたいことが、あつて」

「今更聞きたいことつてなんだ？ もう隠してることなんて本命の工口本の場所くらいなんだけど」

真面目な話、ほとんど話した。

残ってるのはマジでこれくらいしかない。しかし茉莉の表情は何処か迷いを抱えているようで、それはかつての——素直になる前の彼女が時折見せていた表情そのものだった。

はて、そんなに悩むようなことがあつたのか？ と思いながら、茉莉を急かさず言葉をただ静かに待つ。

「あの、馨くん。虚絶の中に——」その答えが知りたければ自分で来いと芳乃ちゃんに伝えろ。オレが好きになつた朝武芳乃は、従者に重荷を一方的に背負わせる女じゃないともな」

自分でも驚くほどにスラスラ出てきた言葉は、紛れも無いオレの本音だった。オレが好きになつた、姉と慕つた、支えたいと思つた芳乃ちゃんは、この事実を足を踏み入れることに躊躇わない人物だったからこそこんな言葉が出てきたのだろう。

実のところ、何故こう即座に切り替えせたのか。後々になつて思い返しても全くわからない。少なくとも誰の意志でもない、オレ自身の

意志での発言だったのだが。

「茉莉。分かるはずだ。これは彼女だけの問題だ。如何にオマエとて、首を突っ込んではいならない。オレが言えるのは、それだけだ」
「……わかった。そういうことなんだね？」

「そうだと思つたなら、そう思えばいい。オレは何も言えない」

——実際、本当のことなどヒトには理解できないのだ。自分のことすらわからないヒトという存在が、どうやってこの世ならざる力によつて発生した様々な出来事の詳細を理解できるというのか。

結局、何も言えない。オレに言えるのは彼女はおそらく本人の残骸に本人の客観的な記憶がくつついて出来た『本人というにはあまりにも遠くて、別人というにはあまりにも近い』存在だということくらい。

……何を言われても、そう言うしかないんだ。

「ところで」

「ん」

しかしそんなオレの内心とは裏腹に、茉莉は話題を変えた。しかもなんだがちよつと不機嫌そうな、不安そうな、あるいは——なんだかちよつとモヤついているような、そんな顔をしている。

……はて、何かあつたのだろうか。

「好きになつた、つて何？」

「え？ ……芳乃ちゃんのことだよな？ 別に、何つてわけでも。好きだよ、オレ。友達として。まさか茉莉、嫌いとか言うなよな？」

「ああ、うん……そっか。そうだよね。うん。そんなことだろうと思つた」

「逆に何だと思つたんだ」

「教えてあげない」

……いや、大体わかるけどサ。

オレが芳乃ちゃんを好きと言うのが引つかかるだけだろう。でも仕方ないことだ。オレは彼女が”好き”だ。それこそこの手で愛^殺したい程に——友達として。

「そんなに嫌なのか？ オレがオマエ以外を好きつて言うこと」

「嫌……じゃないよ。でも嬉しくないかな」

「乙女心は複雑ですな。まああんま目くじら立てんでくれ。オレが惚れた女の子はオマエだけだ」

「いい？ 馨くんはね、そう言っても全然信用ないんだよ」

「!? なんで！ オレ、茉莉だけだもん！ なのにどうして!？」

「……レナさんかムラサメ様にでも聞いたら？」

ジト目。ついでに低い声。

「露骨に不機嫌にならないでよう」

——というかなんでその二人なんだ？

芳乃ちゃんとかそつちじゃない？

「わかんないならわかんないでいいよ」

「ええ、なんだよそれ。わからないままだとオマエが気分悪いんじゃないのか？」

「ううん。そんなアナタを好きになったから」

「……まあ、なんだ。ありがと？」

「はあ」

すごく複雑そうなため息を吐かれた。

……どうもオレが何か悪いらしい。まったく心当たりが無い。何だというんだ、可愛い子に可愛いと素直に言っただけ。別に誤解を招くようなことでもないだろ。

オレ、茉莉のことを好きだっただけで公言してるし。

「馨くんはさ、どうしてナンパとかしてたの？」

「可愛い女の子やら綺麗な女の子やらがいたら声かけちやダメなのか？」

「見た目が好みとか、そういう理由でさ」

「彼女が欲しいとかじゃなかったんだ」

「ただまあ、一般的な思春期男子的な感情は無きにしもあらずってことで」

「本当に、普通なんだね」

「そりや一部が致命的に狂ってるが故に魔人だ。それさえ除けば至って普通。そんなものだよ」

……そういえば、彼はどうしたのだろうか。

「んで、犬神サマはなんて？」

「えっ?」

「……いや、なんでもない」

何を言っているのかわからない顔を向けられれば察するというもの。

アイツ、何も言っていないのか? いや、多分まだ言うつもりないだけだろう。ヤツが今更現世にしがみつく理由なんかはないなんて、ちよつと考えればわかる。

ただ菜子には甘いからな、少しくらいは——とか考えてそんなものだ。

「それより菜子、ムラサメ様は?」

「ムラサメ様? 何も問題無いし、すごくピンピンしてるよ」

「そっか。よかった」

とりあえずムラサメ様に何の問題もなければそれでいい。彼女の無事はなによりも優先されるべき事態だ。

……嫌だな、穂織を生かすことが困難だからって、優先順位決めて最悪見捨ててもいいなんて考えて。これでどのツラ下げてここに残りたいて思ってるんだ、オレは——

ああクソツ、悪い癖だな!

「また怖い顔してる」

「ごめんよ」

「……やっぱり、自分が嫌い?」

「嫌いじゃないよ。好きじゃないだけで」

「それを嫌いって言うんだよ」

「違うさ」

嫌うのは好きだから。好きだから嫌える。愛しているから憎み、憎んでいるから愛する。嫌いでもなければ憎んでもいないなら、それはきつと——

「でき」

「うん」

「オレ頑張ったよね?」

「え? そう、なのかな?」

「めつちや頑張った。命賭けてあのバカと向き合った」

「ご褒美？」

「うん」

「……その……えっと……もう少しだけ、待って欲しい、かな」

困ったような、宥めるような声色で、そんな表情。

冷静に考えれば、確かに待つべき時だ。なのにオレは盛って茉莉に迫ってしまった。やらしいとかいう問題ではないなこれ。

「そっか。うん。じゃ、待つ」

「馨くん待てるの？」

「冷静に考えたらこの状況でやるのはなんか違うから、待てる。でもなんか今日は人肌が恋しいから……茉莉」

やっぱり死の危機に瀕するのは、怖い。

そんな時はどうしようもなく——”死”^生を求めてしまうんだ。

「馨くん……生きててよかった」

「ああ……死ななくてよかった」

ぎゅつと彼女を抱き締めて、この腕の中の命を手折りたい気持ちを改めて実感する。けれどしない。この苦しみが、痛みが、オレを人間足らしめているのだから——

——しかし、困ったことがあるとすれば。

例えもし、穂織をどうにかする術を見出したとしても、犬神の処遇に関してはまだ何も決まっていけないということ。

ヤツもまた、最後に残る祟り。

オレもヤツも、人と共に在れるがその内に小さく、しかし致命的な、極めて恐ろしい歪みを内包している。オレは言わずもがな。ヤツは——復讐鬼であること。

魂まで染み付いた憎悪の咆哮は、彼の穏やかな部分だけで抑えられる程ヤワなものではない。恐らくは些細なきっかけで出てくることだろう。自分を棚上げするつもりは毛頭無いが、どうにもならなさで言ったら犬神の方が遥かに上だ。オレは最悪芳乃ちゃんか茉莉の血を飲めばまあ……なんとか済むようにはなる。吸血鬼みいだすが仕方ない。神力とは受け継がれるもの、つまり血そのものでもあるのだ

から。自分の属性とは正反対のものを摂取する以上、やりすぎれば死ぬからあんまりやりたくないけど。

が、犬神は一度暴走を始めれば祓う以外に止める術が無い。茉莉と奇妙な友情めいた関係を築いている彼も、怒り狂って滅殺を行う彼も、どちらも同じで本物だ。今もまともな意識が残っているなんて、それこそ奇跡だろう。

片方だけ残せるなどと、都合の良いことはない。オレだって殺意／愛情を捨てたらその根底や自覚が無くなった上に虚絶の意志に強く影響を受けるようになっていたのだから。

——オマエはどうしたいんだ。

黙ってねえで、答えろよ……

そう内心で語りかけるように尋ねても、答えは帰ってこない。当たり前前だ。

オレと彼は、正反対なのだから。

……それから数日後。

ムラサメ様の具合が相当良くなり、外出許可も出たのでとりあえず例の会議へお越しいただくことになった。

服に関しては、なんでもあの素っ頓狂なデザインの服がいいとかなんとか言つて、けどそんなもの当然無いから芳乃ちゃんのお下がりを借りている。

……あんな服どこにあんだよムラサメ様あ。オレに作れとか言うなよな……言われたら作るけどさ。裁縫は割と得意だしさ。芳乃ちゃんには劣るけど。

けどムラサメ様って何着ても似合うんだよなあ。素材がめっちゃいいんだよね。結構いいトコの生まれだったのか、元が病人だったとは思えないくらい初期状態も良かったから、肉付きもいいし。

……順当に成長したらって想像するだけでヤバイな。迫られたら断れん。

——浮気者じゃない——

い、いや……その……冷静になってみるよ。ボンキュボンの高身長

に成長なされたムラサメ様に寄られて平然としてられるか？ ドキドキしちゃうだろフツ。

——じゃあ茉莉ちゃんはどうなのよ？——

いやそりやもちろん茉莉が一番で、そりや迫られたらめっちゃドキドキするだろうし食べちゃうだろうけどさ。それとこれとは、その、あれだよ違うって言うかなんて言うか。

——どー思うよ姉上え——

——どうもこうも……馨が助平なだけじゃないか——

——だよねえ。やーい、スケベ男——

うるせえ！ 仕方ねえだろ！

男なんだから女の子に心惹かれて何が悪い！

本命は茉莉だしハメなんか外さない！

茉莉第一！ 茉莉ラブ！ 茉莉以外に恋はしない！

——でも欲情する——

——度し難い——

否定できない。

否定できないからこそめちやくちや返答に困る。

——お前の初恋は彼女なのだろう？ 僅かに垣間見たその姿に、一

目惚れした——

——記憶が丸ごと吹っ飛んでたし、今になつて思い返してみてもだ
いぶ臚げでもあつてるでしょ？——

……確かにそうだ。

もう臚げな記憶ではあるが、オレはかつてムラサメ様を見たのだ。本当に穂織に來たばつかの頃に、たった一度きり。何故見えたのかは知らない。確かにオレは魔人として生を受けたが、力の使い方を知らなければ只人と同じ。つまり本当に今の今まで、見ることが叶わなかったのだ。何せ力の使い方を知った時には死を選んでいたから。

ただ——夕陽を背にして微かに見えたその姿に、幼少のオレは恋を
してしまったのだ。

しかしそれはもう思い出。茉莉に恋をしている、彼女を愛殺していた
と知った時にはもう風化していた。いや……正確に言えば、その時に

なつて愛殺したいとも思わなかつたことに気が付いた。

何故一目惚れがほんの僅かな時間で消えたかなど当然の話だ。とても綺麗で、可愛らしい笑顔を見せてくれた憧れの少女と過ごす中で、自然と何者にも代え難いくらい愛おしくなつて——幼少に見た微かな蜃気楼など、別に愛おしくもなるともなくなつていたというだけ。

……だからと言ってムラサメ様をそうした意味で特別視した行動はしてない。思い出したのはつい最近。吹き飛んだ記憶の中でも極め付けに朧げなものだ。故に彼女に対して向けていたのは純粹な尊敬の念や、報われて欲しいという思いだけで特別に思っているだけだ。

だからやつぱり茉莉に言われたことには納得行かない。そりやまあドキドキはしたけどそれはそれ。何かこう……オレとして心を強く向けているつもりは毛頭無い。レナにも同じことが言える。

しかしこう、自分では茉莉を一番にしているつもりなのだが……省みるとどうも彼女とはまた別な一番が多いと言うか何と言うか、優柔不断っぷりが凄い。あれも一番これも一番、茉莉が一番茉莉も一番……よくこんなザマで愛想尽かされなかつたと真剣に自分に感心する。ぶつちやけ、そういう人間だとわかつていてもそれを受け入れられる人間の方が少ないのではないだろうか。口ではオマエが一番で、それ以外特別なものは何も要らない。オマエだけあれば何だつていいとかほざいてる割には、行動がまったく伴っていないし、すぐに鬱ぎ込むし挙げ句の果てに誰にも相談しない面倒臭さ。

……嫌われるのが当たり前なのにも関わらずよくまあ本当に、みんな好きでいてくれたモンだ。オレ、マジで人間性があまりにもゴミ過ぎる。

——ま、私らの言えた義理でもねーけどねー——

——クククツ。選り取り見取り、愉しいよなあ？——

——姉上、死にたいか——

——ほざけ、とうの昔に殺されてるわ——

あもう、人ン中で喧嘩しないでくれませんかねエ？ そのために封

じ込めてるんじやねえからな？

——…：…へーへー…：…——

——わかつているさ。わかつているとも——
やれやれ。

中身がうるせえ。

——半身よ——

あ？

——いや、なんでもない——

????

珍しく感情を剥き出しにしているのに、何一つ感情が見えない不思議な感覚。彼あるいは彼女が何を考えているのかはわからないが、どうにも何か思うものがあるらしい。

…：… 一体何を思ってるやら。気にはなるが、敢えて突き詰める必要も無いだろう。オレはオレで、彼あるいは彼女は彼あるいは彼女だ。いくら半身と言うべき関係性であっても、そうそう踏み入るべきではなからうさな。

——…：…せめて、女扱いしてくれ——

どうした急に。

——我はこんなのでも、存在としては女性的だ——

あ、うん。わかった。

…：…おかしいな、オレから生まれたなら男寄りのはずなんだが…：…
どういうことだ？

とにかく今度から彼女ということにしよう。本人が女性と言うんだ、ならば女性なんだろう。なんか釈然としないけど。

そうして集合すれば。

「なあ将臣」

「どうした廉太郎」

「よく保ったな」

「そこまで余裕なかったしな」

リアルムラサメ様を見ていきなりである。

流石廉太郎、一切ブレない。素晴らしくアイツらしい。

「余裕が無いって割には見た限り普段通りだったけどな」

「日中は安全だったんだ。だから……気を抜いてたは違うけど、気はそこまで張ってなかったかな」

「なるほど。メリハリが付けられればそうもなるか」

「それに祖父ちゃんに早朝鍛えてもらってて。それもあつたと思う」
「そりやそうなるわな」

だから余裕が生まれていきなり芳乃ちゃんにアプローチをかけていたのだが……いや、鍛えていたとてそこまで硬いか？ 性とは厄介なものだぞ？ そう考えるとコイツすごいな。オレなら3日も保たないぞ。

「馨は慣れてるか」

「当然。今更だし」

「……嘘吐き……」

「あ？」

「なんでもない」

「そかい」

まあ、見栄を張つたのは否めない。実際その辺は人並みだし、ぼつたり菜子と全裸で向かい合った時なんて言わずもがなだ。だから小声で菜子が無言で言つてたとしても、ここは気付かないフリをしよう。

大方、嘘吐きだのなんだの言つていたのだろうが。そこまでオレもバカじゃない。

「さて、第2回じゃ！ ほれほれ、案を出さんか！」

「ノリノリだねえ、ムラサメちゃんは」

「娑婆の空気が美味しいのじゃ。それは心も弾むじやろう」

「ふふっ、よかつたです」

実際、連れてこようと説得したのは芳乃ちゃんだつた。彼女の鶴の一声が——いや、どちらかと言えば子供を擁護する母親の一声か？ それによって折れた安晴さんと将臣が送り出したらしい。

……しかしまあ、こうして元気であられると非常に嬉しい。オレとしても素直に祝福したい。

だからこそこの手で、彼女に祝福を——

「ちよつと」

茉莉に裾を引つ張られ、蠢く宿痾がピタリと止まる。

「……悪い。わかるのか？」

自制のできない自分を情けなく思いつつも、しかしそれほどわかりやすくはなかつた筈だが、と尋ねてみる。すると茉莉は少し考えながら。

「勘、かな」

「さいでつか」

なら、何も言うまいよ。

オマエの勘なら疑えない。

「意外と幼いんだ、ムラサメ様って」

「くくつ、もつと大人びたものを想像していたか？ 小春よ。しかしながらご主人がちゃんを付けるような相手ともなれば、そこまで違和感は無かろう」

「確かに……お兄ちゃんがわざわざちゃん付けで呼んだなら歳下に見えたってことだし……なるほど」

驚いた表情から一転して、ふむふむと頷く小春ちゃん。納得がいったようで何より。しかしちゃん付けをする相手が歳下限定と思ってるのは何か違うような……いや、アイツそんなんだな。うん。

「まー坊にムラサメちゃん呼びされた時どうだったんですか？」

「新鮮じゃったぞ。当たり前じゃが、そんな風に呼ばれたことなどなかったからの」

そしてしれつとニヤニヤしながら尋ねる芦花さんと、しれつと涼しい顔で対応するムラサメ様。この二人のわかつてる感がすごい。まあ、大人同士通じ合う何かがあったりするんじゃないのかね。

オレにはよくわからんが。

「レナは……なんじやろな、生身であつてもさしてこう。元々見えておつたからか」

「まあ、わたしとムラサメちゃんの仲でありますし、あれこれ言うのもヤゴでしよう？ けれどこうして元に戻れたようで、何よりですっ」

「野暮じや野暮。レナよ、ヤゴでは虫だぞっ」

野暮って……間違えるものか？ ぼ、とご、は発音的には似てるけど遠い筈なんだが……ううむ。そうやって頭を悩ませているが、しかしこの状況——ふむ、そうか。

「今日もムラサメ様と触れ合い会かね」

「まさか。今からするんですよ」

だが芳乃ちゃんはしたり顔で言う。様になっているようで様になっっていないのはある意味で彼女らしい。

「そういうわけでほれ、案を言うのじゃお主ら！」

そうムラサメ様が切り出すと、まずはドヤ顔の廉が——

「例の五輪はどうよ」

「狭すぎる」

廉、オマエそこまでバカじゃない筈だが。

「じゃあ何かレースとかどう？ ほら、あの豆腐屋さんみたいにごう」

「そんなんやったら事故るわ。芦花さんは観客ぎゆう詰めのマジキチ猛レースがお望み？」

芦花さんはまず某熱狂期を見るべきだと思う。穂織でそれをやるということとはつまりそういうことなのだ。

「うーん……ねえ馨さん、野球ならいいんじゃないかな」

「飛んだ球が民家にホームランするからダメだ」

思考回路が廉と同レベルすぎる。小春ちゃん、キミもう少し賢い子の筈だよな？ 穂織という狭い土地で甲子園的な事が出来てたまるか。そんなのが出来るならとつくの昔にどうにかなってる。

「穂織48？」

「……オレの茉莉だ。誰にも渡さない。ましてや、訳の分からん連中なんかにはな」

そして将臣は何をほざいているやら。

はつきり言っただけの恋人がアイドルやってる姿を見て正気ではない自信は無い。下手したら監禁しかねん。

——あとなんか穂織の子たちでアイドルグループ作ろうってのは……大変にいけない気がする。そう、なんというか……いや、何を考えているんだオレは？ なんかもやつく。

「所謂他のところの普通が一切ダメではないか」

「異常である穂織を立て直すなら異常をするんだよ。けど生半可なことじゃ穂織に人は戻ってこない。やるなら徹底的にだ」

しかしムラサメ様に対してこうは言うものの、肝心の内容が何も思いつかない。特にオレは。そもそも始まりが叢雨丸ありきなからだから、いわば心臓の無い人間のようなものなのだ。

「けどその徹底的にやるものが何も無い。だからどうしようもない、ですね?」

「その通り」

「いいところでありますし、星空とかキレイでありますのに」

さて、そんなことを言っているレナだが、彼女は過去の自分に気が付いているのだろうか。オレは不思議とよく覚えているタチなので、その辺には目ざといのだ。

「ていうか……レナ、キミは穂織に来るって言うよりも日本に来るって感じじゃなかったか?」

「あつ」

「釣られたのって、古い日本の姿を割と残しているからだよな?」

「……………はい」

別に責めているわけではないので、そんな申し訳なさそうな顔をして欲しくない。

結局はそうだ。心臓の無い穂織など代用品以外の何者でもない。穂織でなければならぬ理由が無いままだと、どうやっても人が戻ってくることはない。

「のう、りゃん太郎」

「廉太郎っス。なんでりゃんなんスか。せめて乱太郎とかそっちにしてください」

「すまんな。して吾輩思うのじゃが」

そんな中、ヘンテコな名前の間違え方をしたムラサメ様が廉に声をかける。敢えて将臣ではないのは特に理由はないだろう。強いて言うなら、目に入ったからとか、そんな理由だろうさな。

「美味しい食べ物を増やせば良いのではないか?」

「あの……それ、相当に無茶つす。確かに穂織には何も無いから、そういうものを作るのはアリでしょうけど、いかんせん時間が無いつすよ」

したり顔のムラサメ様に対して物凄く困った表情の廉だが、アイツの言いたいこともムラサメ様の言いたいこともわかる。

「けど実際現実的ではあるから、うちで色々開発中なんだ。その内、みんなに味見役してもらおうかなって」

「私もお姉ちゃんも色々研究してる最中だから、ほら、ご意見番欲しいなあつてなつてたの」

「……そんなものでどうにかなるものかな……」

……樂觀すぎる。そんなもの、メインがなければ引き立たないサブだろう……

「馨さ、どうしたの?」

そんなことをつい漏らしたオレを訝しんで、芦花さんが怪訝な表情で声をかけてきた。

「自分から意見は言わないのに、他人の意見は理詰めで否定的。けど諦めてるわけじゃない。ずっとそんな感じ。言ってることとやってること、噛み合ってるないよ」

「……それ、は……」

「意地悪してるんじゃない。それはわかってるよ。でも何か……」

それはおかしい——そう言われた段階で、オレの思考がぐらついた。聞いてはいけない、言っではいけない、許されてはならない。何故ならそれは。

……どうせなら、いつそこそこで。

■ 諸共に、愛してしまおうか。

ガチリと歯車が廻る。錆び付いたものが動き出す。そして——
「そこまでにせよ、芦花」

起きた衝動が、ムラサメ様の声を聞いて再び眠りにつく。回ってはいけない、動いてはいけないものから解放され……オレは自分が何を考えていたのか、わからなかった。

——オレ、何を考えてた……? 何故この声でハツとした? オレ

は……

「その件については吾輩が説明する。ただ馨は席を外せ。その方がお主にとって良い」

……釈然としない、というには違う。納得はいくのだが。

だがオレ自身に違和感があった。何故の答えは出ないまま、とりあえず任せようと部屋を出るのだった。

左手

……わかっていても、追い出されるといふのは悲しいくらいに心に
来る。

端的に言えば、凹んでいた。

「はあ……」

なんであんなこと言っちゃったんだろう、とか。

もうちよいやりようあつたんじやないか、とか。

もう過ぎたことだし仕方ないんじゃないか、とか。

けど単なる事実だとしてもそれはそれでショックだなあ、とか。

つまり、だ。

「……やっぱオレってダメだなあ」

——性格に首を傾げても仕方なからう、半身よ——

「それでも首を傾げたいの」

——自虐が趣味ではあるまい——

「……自分を傷付けて見えるものもあるのさ」

そんな言葉に呆れ返ったのか、深いため息が聞こえると彼女は自然
と抜け出てきた。

「鬼にならねば見えぬ地平はあるが、自らを痛め付けて見えるのは己
が限界と嗜好だけだぞ。馨」

「オレはマゾじゃねえよ」

「さてな。存外、常陸菜子に攻められて楽しかったのではないか」

「……菜子にならな……」

「ならば我はどうだ？」

「やめてくれ。一種の自虐もいいところだ」

「フッフ………違うない」

——まったく、困った奴だ。

そういう言葉を、そういう顔で言われてしまえば、コツチも微笑ん
でしまうのは知っているだろうに。

「んで、どうした急に」

「何、寂しいのだろう？」

「まあ、なんだ、ありがと」

「別に良い。我と貴様の仲だ」

感謝を言い合う仲では無いとでも言いたいのか、はたまた別な感情なのか。実のところ、オレもよくわからない。自分のことは自分が一番よくわからない——そんなものだ。

無表情で隣に座り込んで来たコイツを見て……やっぱ顔だけは茉莉と同じだなと強く認識する。けれど、見てもこの手で殺めたいとも思わない。決定的な違いを感じる。

でも顔はいい。腹立つ。

「オマエ、顔いいよな」

「貴様が愛した女の顔だからな、当然だ」

「よく言えるな」

「単なる事実だ。身体の方は……奴よりもやや豊満か。趣味がわかるな」

「よしてくれ」

「大艦巨砲主義は男の性ではなかったのか」

そこを突かれると何も言えなくなる。すぐくなくも言えない。そりゃ巨乳は好きだし色々と妄想したいさ。でも茉莉の胸が大きかろうが小さかろうが、それが茉莉の一部というだけでそれらが全て些事になるほどに愛おしいのだ。

「とは言え、等身大の彼女の方が好みなのだろう」

「そりゃな」

いくら虚絶がオレの思い描く理想の茉莉の形をとっていても、オレが愛しているのは茉莉なのだ。姿形ではなく、オレは彼女の——格好いいところに惹かれたのだから。

「オレ、寝る」

ただまあ、なんかふて寝したい気持ちもあつて。

「剣は誤魔化しておこう」

「頼む」

壁を背にし、片膝を立てて刀を立て掛け、瞼を閉じる。

……本当なら、こんな風に無理矢理に寝るのは好きじゃなかった。

けれど長い時間を過ごす中で、寝れない時に寝るためのものになっていった。今はとにかく寝ていたい。寝て忘れたい。

「……なんで、こんな風にしか生きられないんだろ……」

ああ、畜生。

人間が羨ましくて、仕方ない。



「それはな、半身よ。お前がこの地を愛しているからさ——」

愛しているから壊してしまう。

そんな単純な答えが全てであり、それだけの話だったが、それだけのことだった。

「……難儀なものだ。死んだものを死に続けさせたとして、それは殺したということになるのか」

馨は穂織を嫌いなのではない。むしろ好きだ。彼もまた、一族の例外ではなく穂織という土地に心惹かれていた。だからこそ壊そうとするし、まともな案を出そうともしない。天邪鬼のようだが、別に故意にそうしているわけでもなく、無意識的にそうしている。無論そうするのは——

「不要になったものを元に戻せば良い。穂織とは人と愛と、そして神の三位一体だ。神たる剣が欠けたならば、神たる剣を納めれば良いだけのこと」

叢雨丸が失われたことで危機に陥った。

ならば叢雨丸を元の形に戻せば良い。

現物はあるし、担い手すらいるのだ。何も困ることもない。何をやってもダメなのだから、何をするまでもなく元に戻すだけ。

何も不思議な話ではない。

穂織と神は切っても切れない縁がある。穂織には神が必要だし、神には穂織が必要なのだ。

それを本能的にわかっているから、それを想起させるようなことを言わないし言えないだけ。

「まあ、言ってる道理も無いが」

虚絶にとつてはどうでもいいことだ。

正解を知つてようが、言つてやる必要など無い。何故なら彼女もまた馨の一側面である。愛情と殺意は両立する——それが答えだった。姿を消しながら、彼女は自分に眠る妬心をどうしたものかと考える。

——常陸茉莉子……何故貴様なのだ——

虚絶自身の意志として、理想そのものと呼べる馨に選ばれなかったことが未だに響くのだ。

——何故我ではない。何故何もしなかった貴様が……——

虚絶は別に穂織の人々が嫌いなのではない。茉莉子のことでも好きだ。馨なのだから。しかし、生まれた時から共にいた自分が選ばれなかったことだけが、どうしても気に入らないのだ。

何故茉莉子が、何もしなかった茉莉子が選ばれたのか？ せいぜいが言葉をかけてやるくらいしかできなかったのに、何故だ？

——……何故だ、何故貴様なのだ……貴様でなければならぬ理由などないだろう……何が違うのだ。我と貴様の何が違う。共に寄り添い、心底に触れている。だというのに何故貴様だけが……——

渦巻く感情、荒れ狂う思考、纏まらない答え。

虚を絶つ刃に芽生えていた意識は、ひたすらに廻る。何故を求めてグルリと回つて……

無明長夜の昼行灯であるそれはまだ、答えを出せない。

「さて、まず馨についてじゃが——あれは無視せよ。そういう生き物じゃ」

馨を追い出したと思つたら、いきなりムラサメはあつけからんと言いつつ放つた。飲み込めていない芦花、小春、廉太郎らに対して、更に噛み砕いて言葉を紡ぐ。

「まあ”そういうこと”で”そういうもの”じゃ。変わらぬし、変えられぬ。先祖から考えればそういう答えじゃ」

「……つまり、何かしらおかしなところがあるって……」

「吾輩たちから見たらな。馨たちから見れば正常——それで終わりだ」

稲上馨は、人には理解できない。例え菓子でさえも。

ムラサメは言外にそう言いつつ、芦花に視線を向けた。

「芦花よ。先程否定する割には何も出さないと言ったな？　それが馨だ。否定はできるが、肯定と改善案だけは出せん、ま、要は使えん男じゃ」

「使えないって……いや、まあ、そうですけど」

「ただ本人には言うなよ。言つてしまえばまたぞろ面倒なことになりかねん。あれは基本的に自己否定と自虐の塊ぞ？　本気で穂織の今後を考えたいのに自分が元々そういうことができないモノと知つてしまえば、大方また引き籠もるくらいのは平然とする」

ムラサメとて馨の根本が自己否定にあることくらい気付いている。穂織に住む人間の中で——現在過去含めて、あれほど狂気に満ち溢れた者はそういまい。

そもそも馨は魔人であつて、人間ではないのだ。絶対に人間とは相容れない。

「ただ少なくとも、合理の点で否定しているのは事実だ。馨は頭ごなし……ではあるが、理由も無く否定しているわけではない。そうじゃな……あやつが特に難色を示すものが、恐らくは穂織に必要なものとなるだろう」

「んん？　つまりあれっすか、馨が絶対にできない、あり得ないみたいな反応をしたのが正解つてことになるんすかね？」

「正解かどうかはわからぬ。が、それが効果のあることであるのは間違いないじゃろう」

死こそ愛——その根本的歪みを逆手に取った判別方法。正直い気分はしないが、死そのものと極めて近い存在が「殺し続けようとしているのではないか？」と漏らすのだ。やってみる他ない。

「理科の実験みたいですね」

「言い得て妙だな。確かに理科の実験を思い出すよ、俺も」

「リトマス試験紙の反応実験だろ？　にしては随分な大事だけだな」

小春の眩きにそうだそうだと反応する廉太郎と将臣。

「お兄ちゃんも廉兄も、馨さんを何だと思ってるの」

確かにいい加減なところもあるし、正直に言ってるろくでもないところが大量にあるのが馨だと小春も認識しているが、それにしたつてもうちよつと何か言いようかあるのではないか——兄貴と兄貴分の結構ズバツとした言い方に、思わずツツコミをせざるを得ない。馨の事情は欠けらくらいしか知らないが、色々知ってそうな将臣からもこんなセリフが出てくるとは……

しかし言われた方と言えば。

「え？ ……って言われてもなあ、将臣。あいつだもんなあ」

「まあ、なあ……馨だもんなあ……」

「めんどくせえし」

「ヘタレだし」

「ガサツだから変に思い切りがいいし、捻くれ者だから中々素直になろうともしないし、そのくせ繊細だから悩み事とか指摘すると、捻くれ者特有の誤魔化しをしながら自己嫌悪をするんですよ。本当に面倒くさい人なんです」

「み、巫女姫様まで……」

「この中で馨君と付き合いが一番長いのは私と茉莉ですから」

「アタシ全然その辺知らなかったけど、聞くだけで根本的に滅茶苦茶面倒くさい性格してるってよくわかるよ……」

げんなりした芦花を見ながら、何故か芳乃は誇らし気にドヤ顔をしながら言った。

「まあ、馨君の面倒くささを語らせたら茉莉の右に出る人はいませんよ」

「芳乃様、ワタシの感じてる面倒くささはちよつとズレたところですから」

「ホント?」

「ホントです。けど流石に秘密にさせてください。本人から『言わないで』って念を押されてるので……あ、ちよつとワタシ、席を外しますね。家から電話が。馨くんは任せました」

そうして葉子は外に出ながら、内面に意識を向ける準備を整える。

——電話、などと言ったが違う。彼女の中の潜む犬神が、久々に声をかけてきたのだ。人気の少ない場所に足を運び……そういう必要は無いが、なんとなく気を使いたかった……自分の深層へと更に潜って行く。

(どうしたんですか?)

——単刀直入に言う。私を祓え——

(っ、何故ですか?)

そんな気はしていたが、言われるとやはり動揺する。これまで何度とあったがいつまでも慣れない。これもまた、そんな話だった。

——単純な話だ。私はこれ以上の生き恥を晒す気は無い——

(生き恥って——)

——いや、死に恥か? まあいい。とかく、それが答えだ——

そう言われても、と言葉を続けようとしたが事情が事情であるが故に閉口し……彼は更に言葉を続ける。

——よもや、生きろと言うつもりではあるまいな? 私は……白山
狗男神は既に死んでいる。この私は死んだ時に焼き付いた強い思念
のようなものに過ぎない。もはや生も死も無く、ただそこに揺蕩うだ
けの亡霊だ——

そもそもこの犬神は本当にそれそのものなのか、という問題につ
いて彼は触れていく。

——それに危険性もある。私という存在はどこまで行っても人間
への憎しみで動く祟りだ。些細なことでもまたぞろ面倒な事態に発展
するのも疲れるだろう——

そして告げられる、一番もつともな理由。

——恋人と明日を迎えたいのだろうか? その明日に、私はいないの
だ。私は既に昨日なのだから。今日であるお前たちとは異なり、昨日
こそが全てなのだ——

死んだ存在はそこで終わり。

彼の言いたいことはそういうことだ。所詮そこまでの存在。己は
そうなってしまったのだと。

——それにな、もういい加減、疲れた——

そして、彼は本音を呟いた。

死ぬのは怖いが、長く生きるのは疲れる。生きるとは傷付くことであると、他ならぬ彼や馨が示しているように。

……もう疲れたから休みたい。長くを生きて、長くに死んでいた者の悲痛な叫び。それを聞いて茉莉子は、無理に引き留めたくはないが——それでも自分の心は全く違うことを言っている。だから……

(ワタシはアナタとも一緒にいたいですよ)

——一族を呪った相手がいいだと?——

引き留めたいという意志はあるということだけは伝えることにしたが、帰ってきたのはごくごく当たり前の答え。何を言っているんだお前はという呆れもよく伝わってくる。ただそれでも、茉莉子は自分が何故そう思っているのかを素直に伝える。

(それとこれとはまた別です。だって何も悪くないんですよ、アナタは。それに、一緒にいて楽しい。だから一緒にいたいって思うのは不思議なことですか?)

——奴はそう思わんだろうな——

(……馨くんは関係ないでしょう)

——大いにある。奴は今後のことを考え、私を祓う気にいる——

黙りこくる。わかっていても考えてこなかったこと。馨なら必ずそうすると知っているから。茉莉子だってそれはわかっている。わかっているけれど……それでも、とってしまうのだ。

——むしろ、あれが私を残しておくでも思ったのか? お前も奴

がどういうモノかを理解しているだろうに——

(馨くんは確かに、そうします。でも——……いや、だからこそなんでしょうね……)

——そんなに気になるのであれば、聞けばいい。話せばいい。その果てにどのようなことになるかは知らぬが、お前の望みが私がここにいることであれば——

……ある意味ではずっと避けていたことをしると、彼は告げて沈んで行く。

怖いけど、行かなければならない。
ただそれでも、時間は欲しかった。



眼下に広がるのは辺り一面の屍の海。

知ってる顔、知ってる顔、知ってる顔……全員知ってる顔だ。実に素晴らしい光景、実に愉しい光景、実に虚しい光景、実に悍ましい光景、実につまらない光景。

だってこれは――

「……いい夢だ……吐き気がする」

夢なのだから。

夢の中だが、それが夢であることを理解していた。そもそもオレでは絶対にできないことだ、そんなオチだと知っている。

とはいえこんな夢を見るといふことはつまりそうしたのであって。こういう光景を見れば多幸福感に包まれるのもまた事実であって。

「……めんどくせえ」

そういう風にしか生きられない己の虚しさを嫌悪しながら、決して現実にはならない夢を刻み付けようと覚醒を拒む。ちよつとくらい、いい夢を見てもいいじゃないか。どうせ何をしようとも人として生きて死ぬのだ、魔人としての生は掴み取らない。ただ夢に見たなら刻み付けてもいいだろう、自慰と何も変わらない。

だから本当に一瞬でも長くこの地獄を目に焼き付けようとして――

「――」

……誰だ？

誰かが揺さぶっている。声をかけている。瞼が重い、開けたくない。
い。

けれど起こしているんだ、起きなければ――

そうして半分以上、イヤイヤで目を覚ましてみれば映ったのはレナの綺麗な顔だった。

「……レナ……う？」

「はい。レナですよ」

寝起きにレナは、強烈だな。本当に綺麗で——ああ、確かにこれなら女神に見える。

見惚れたし、思わず首に手が伸びかけた。本当に綺麗な女の子だよ。こんな友達を持ってオレは幸せ者だなあ。

……なんて半分寝惚けた頭で考えているオレと違って、レナは至って真剣に心配している表情だ。

「寝てたのですか」

「ふて寝してたよ」

「フテネ？」

「ふてくさって寝た」

合点がいったような、いかないような顔。

不思議と可愛いものだから、ついついクスツと笑ってしまう。そんなオレになんだか微妙な視線を向けてから、レナは心配そうに言った。

「やっぱりショックだったんですか？」

「いや。納得してるし、使えない奴を弾き出すのは当たり前だ。別段、何か文句を言うつもりは無い」

事実、文句は無い。使えないのに口先だけ立派では、空気を悪くすることくらいしかできない。オレ抜きの方がよほど建設的だろう。

「けど、珍しいな。レナじゃなくて、菜子が来るものかと思ったけど」

「マコは何やら用事があるようで、一人でいたいそうですよ」

「なるほど。で、他の奴らはオレがめんどくさいからって消極法で？」

「いえ、わたしが様子を見たかったからです」

……レナが？

普通に何故と、疑問が湧いた。

「なんで？」

「トモダチでありますし、それに……まあ、わたしにも少し残っているので、アテがあるといえますか」

「そっか。なんかごめんな」

「すぐに謝るの、悪い癖だと思います」

「そうかな？ 実際悪いことしてるし」

「カオル——もしかして、自分が理由なら何でも悪いと思っていません？」

「実際、害悪だし災害だし無条件で悪いだろ」

……ため息を吐かれた。事実の筈なのだが、しかし、レナ的には何かもう色々違う模様。ああ、なんかこの顔……呆れた時の比奈ねーちゃんみてえだ。

けどそんなのも一瞬。レナはすぐに表情を変えて——とても難しそうな表情だったが——オレに尋ねた。

「……ところでカオル、一番マコを愛せるのはその、傷付けることでありますよね？」

「うん？ そりゃ……まあ、そうだけど」

「例えばですけど、マコではなくわたしに対して友情を示すのであれば、どのようにするのですか？」

ふむ、と悩むまでもない。

オレはそもそも、ありとあらゆる愛情表現が殺害なのだからその答えはたった一つだけである。菓子だけじゃない、オレが好きなものには、何一つ例外はない。

「もちろん、愛す^{殺す}ことだな」

「ではわたしが生きていないとそれはできませんよね」

「まあな。生は死を以て生を確立し、死は生を以て死を確立する。殺すのであれば生きていなければならぬし、生きているから殺せるのであって」

「では死んでいるものを愛するとしたら？」

「……ふむ」

死んでいるものを？

矛盾だな。

「愛しようがない。仮に死んでいないだけであるなら、完全に息の根を止めるが愛することにはなるけど……なんだ急に。理解できないことを理解する必要はどこにもないんだぞ？」

「いえ、カオルのおかげで何か見えてきそうです。ありがとうございます。」

「??? ……まあ、なんだ、どういたしまして……なのか?」

こんなことが何の役に立つのかさっぱりわからん。ただレナは何かわかったらしく、合点の行った顔をしている。はて、なんのことやら。本当によくわからないから悩んでいると、レナが頬に手を当てて視線を合わせてくる。

柔らかいな……喰い千切って壊したい。白い肌を赤く染めたら、どれだけ綺麗になるんだろうか。それだけの痛みを伴えば、彼女にオレの気持ちは伝わるだろうか――

――そこまで。妄想だけにしな――

……わかつてるよ。手は出さない。そう決めた。

――別にいいんじゃないか? 全て愛せばお前は死ぬのだろうし

やめると言ったらやめる。

決めたのなら貫き通す。

――チツ、面白くない――

それがオレだ。四の五を言うなら祓わず殺すぞ。

――わかつてるわかつてる……うるさいなア――

まったくうるさいヤツだ。そんなのだから妹に殺される。もう無視しよう。

さて、視線を彼女に向ければそこにあっただのは……何故か照れ顔。

「か、カオル……その……あんまりそういう目で見られると困るであります……」

――固まった。

恐れでも嘆きでもなく、羞恥とは。まさかこれほどまでに理解されているとは。そこまで実直な感情を向けているつもりはなかったんだが……

「わかるの?」

物は試しと聞いてみると、まるでエロ本の隠し場所を見られたオレのようにあたふたしながら頬を赤く染めたレナは、モゴモゴと呟きだ

した。

「なんというか、熱っぽいというか……マサオミがヨシノを見る目にそっくりというか……でも怖いようで優しいというか……あつ、いえ違って……その！　そういう目、マコ以外に見せちゃダメですよ!？」
「ウワキです!？」

「……そんなに?」

「はい、そんなにです」

——はつきり言い切られてしまった。

ふむ、困ったな。これを葉子に知られれば殺される。間違いない。しかもそこまでの目を向けたともなれば……

「あー、ごめん。そんな風にするつもりはなかったんだけどなあ……」

「カオルって、かなり怖いですね」

「怖いだろ?　魔人だし」

「いえ、怖いくらいに平等に誰かを好きであるということが」

——特別の無い、極めてのつペリとしたその感覚が怖いのだと彼女は極めて普通の人間らしい観点から、オレの恐怖を告げた。

「……そうきたか」

「マコが特別だということはわかります。けれど方法は同じだから、平等過ぎるように見えるんです」

「特別な愛し方……か。どんなのがあるんだろうな?　ヒトは抱くなり、婚姻するなり、色々あるけどオレには——全部、手にかけることでしか表現できない」

——それらは本当に愛しているのか?

オレは自分自身が本当にその人に愛を伝えている実感が、それらの行動では浮かぶのかどうかさえわからない。ただ漠然と……怖い。

「レナ。オレにはわからないんだ。どうしてオマエたちは愛する者に順序を付けられる?　愛は平等に不平等だからか、それとも有限に限だからか?　好きに、愛に一番も二番もあるものか。愛とは執着だ、狂気だ。そんなものに順番が付けられるならば、それは愛ではない——ただ優先順位が一番のものを愛と呼んでいるだけだ。愛に理

屈も順番も無い。老若男女も関係無い。愛おしいもの全部平等に……それを、オレが……!」

左手に握る虚絶の鐔を鳴らす。

右手を柄に添える。

全てがゆっくりと流れている。レナが呼吸を一つする間に彼女を——愛せる。渾身の愛を込めて、一息に、刹那に全てを賭けて、この友愛を異国の友人に、オーロラの向こうの住人として、最高の想いを。瞬きすらさせない。

柄を握り、力を込めて鞘から悍ましくも神秘的な刃文を現世に抜き放つ。

そして、

そして。

そして……

そして——!!!

「馨、ダメだ」

血が吹き出る。

オレとよく似た顔をした魔物が、オレが振るった刃をその身で受け止めている。肩の筋肉だけで受け止めるなんて、まったくバカらしい。レナを庇って、本気で怒った顔をしている。

庇われた彼女は唾然としながら、オレたちを見ている。なんで、とかそういう声も無い。突然向けられた殺意と行為に、怯えることすらできていない。いや、怯えていないんだ。怯えないで受け入れてはいるんだ。もつとも急すぎて対応もできていないとも言えるが。

——悍ましい血で彩られた白い刃は、美しさの欠片も無い。

「……悪い。京香」

やれやれ、とため息を吐いてヤツは中に戻る。

吐き気がする。

こんなことをしても何の意味が無い。自慰にもならない、自傷にもならない、こんな、こんな、こんな……苛立たしいのに嬉しいなんて……!! ああクソツ、邪魔しやがつて! ……でも、邪魔されなければオレは……レナを殺していた。そんな自分に嫌気が指しながら、そ

ここまで堪え性のない性格してたかと自己嫌悪して——とにかく謝ろうと行動に移った。

「ごめん、レナ。つい手が出ちゃった」

しないと決めて貫き通すとしたのにこのザマ。腹切って詫びるべきだと卑下するがそれ含めてオレはもうそういうものである。とにかく謝るしかできない。

……ああもうままならない。格好も付かない。間抜けめ、ゴミめ、クソが。

「つい、で他の女の子にそうなるのはいけないですよ」

宥めるような声色と表情。

どういうものでどういうことかを理解しているからこそこの言葉だが……さて、実際若気の至りとかそういうものでオレはこう言うしかできない。

「わかってんだけど、ね?」

「可愛くありません。マコが一番とは言いますが……それで最初がわたしなのですか? 何か違いますですよ」

「——いや、それは……茉莉は一番だけど、でもほら、確かにこう、色々……平等だし、そもそもすべからく愛するのであればこの手で殺すわけだし……」

「わたしを一番最初に殺しては、ウワキです。その……せつくちゅ……みたいなものでしょうし……」

「そう、だな。うん、そうだね。うむ。ごめん。マジでごめん」

いかん。それはいかん。

やばいな、いかな。浮気だわ、不倫だわ、やばい。茉莉に殺される。

そんなオレを見て、彼女は答えを得たように告げる。

「ジセイできないのではなくて、する気がないのでありますよカオルは。ありのままの自分でいい、と受け入れてくれた人たちが大好きだから、自分の愛情を全て平等に与えようとしているんです」

ふむ……そう言われれば確かにそうだ。みんなオレを否定せず受け入れた。それでいいと言ったんだ。だからオレは無邪気に振り撒

こうとして——なるほど。」

「……言われてみれば確かに」

「それはいいことですけど、それではダメです。その中でもマコが特別である、ということをお忘れてはいけません」

「でも大切なものに、オレは順番なんて付けたくないよ」

ただなんだか順番を付けるのは嫌だ。

「付けなさい」

「レナ」

「付けられなければヒトではありません」

「けど」

「ヒトとして生きて死ぬ、そう決めたのでしよう？　ならツゴウの良

い言葉を並べて逃げるのはやめましょう、カオル」

「……逃げる？　オレが？」

「はい。逃げてます」

「黙れ。オレは逃げてない」

「ならこう言いましょうか。できないのではなくやっていないだけです」

「っ……テメエ……」

「全部を平等に愛せるものがあるとすれば、それは神話の中のキャラクターだけです。でもカオルはそうではない。平等に愛情を示したのにマコという特別がいる。ならヒトとして生きるのであればマコという特別を、もっと特別に愛しなさい。マジンとか色々格好付けて言っただけで何もしていないです」

「——言ってくれるな、小娘が」

腑が煮え繰り返り、友情を振り切って激情が行動を起こす。胸ぐらを掴み上げ、睨み付ける。人間風情が、オレの何を知っているつもりだ。

「言いますよ。カオルはヒトとして生きたいのでしよう？」

「……待て、なんでそれ知ってる」

「秘密であります。ま、わかっているとは思いますが」

余計なことしかししないな、あの女……

苛立ちも少しは落ち着き、離してから内面にいる同居人への愚痴を
心中で吐き捨てていると、レナは何やら思い付いたように一言。

「外に出るようになってから、マコと恋人らしいことしてないでしょ
う？」

「そんなことしてる暇はない」

「そんなこと？ わたしから見ればそこがおかしいんです。殺すこと
で愛するというならば、何故マコを殺そうとしないのですか。怖い
から？ いえ、そんなはずはありません。今のカオルなら何の迷いなく
マコを愛せるはずです。ならば——何故しないか。カオル、他に何か
を愛殺してしていますね？」

「他に？ いや、待つてくれ。戻ってからオレが本気で愛殺そうとした
のはオマエが初めてだよ。これはウソじゃない」

……他に愛しているものがあつた？ しかも行動を起こしている
？ どういうことだ？ 明確に行動を始めたのは今回が初めてだぞ
？ 彼女は何を言っている？ オレがもう既に行動を起こしている
なら、それはとつくに死んでいなきや辻褄が……

「……なるほど、そういうことですか。今わかりました」

思考の渦に沈んでいると、またレナが声をかけてきた。

「とりあえず、マコと過ごしてください。マコにその愛情を示して上
げてください。でなければ少しかわいそうです。あんなに心配して
たのに……それでこの件、ヒミツにしてあげます」

「ごめん……」

「あとちゃんと恋人らしいことをしたと報告してください。でない
とバラします」

「うん」

「……それと、もう一つ。終わったらワイワイしよう、と言ってました
ね？ それを計画してくれませんか。言い出しつぺのナントヤラ、で
あります」

そんなのでいいのか？

「……まあ、いいけど……それだけでいいのか？」

「それだけのことですから」

「日本語、もっと上手になったなあ」

「オカミがよく教えてくれたので」

満遍の笑顔と共に上手い返しをされてしまった。

……しかし、自制する気が無いか。言われてみれば自制するしない以前の自然な考えだ。やはり……菜子の命を狙うしかないな。重さを自覚的に知ろうとして実感すれば、オレがそうする頻度も少なくなるだろう。

思えば前に一度やっただけだし、それに今確かめたのは将臣とレナだけだ。足りない。許せ菜子。オレは——そういうモノだ。

「さて、オレ戻っていいのかい？」

「いっそ帰ります？」

「あ、わかる？ 正直面倒だ」

「まあ好きなように」

「じゃ帰るわ。オレは要らんだろうしき。みんなによろしくー」

呆れたような顔だが、まああの様子だとオレが空気の読めないことを延々と言うだけだ。帰ってグータラしてる方がよほど建設的だろう。

ばいばいとレナに軽く手を振って、オレは自宅への道を歩き出した。

無明

「は？ 帰った？」

芳乃の冷たい声が響く。

「……馨くん、いい加減すぎない？」

茉莉の嘆くような声が響く。

結局、中々話はまとまらなくて、今日はやめようと結論が出た。諸々の都合でさつさと場を去った芦花と小春、そして自分は自分で何か探してみると家に戻った廉太郎。

残ってあれこれと話していた面々は、しかしレナの発言で凍り付いた。

「はい。なんだか面倒くさそうな顔してたので帰るか聞いたら帰りました」

そんな彼らに半ばわかってただろうにと思いつながら、顛末を明かすレナ。第一、馨は単純労働は好きだが複雑な労働は趣味ではないのだ。半分繋がっていてあれやこれや残ってる部分がそれを教えてくれたから、そうやって提案した。

そして帰った。それだけの話だ。

「言い出しつぺ、あいつなんだけどなあ」

言い出しつぺがこれか……と馨のある種の自分勝手さに嘆きながら、まああいつだしと無理矢理納得する将臣だが、それにしても妙だとも感じた。具体的には何一つ言わずに帰ったという点だが。

「あとそうですねえ。多分寝惚けてたからだと思うんですけど、ちよつと喧嘩してしまいました」

「喧嘩、ですか。レナさんと馨さんが」

「はいです。なんとというか絶妙に違った気がしたので」

なんだその解釈違いみたいなの……と色々渦巻く。特に茉莉は馨が絶妙に違うとかなんぞいやどっこいこらみたいなきこりである。

「けれど、色々わかりましたよ。カオルは間違いなく穂織を殺して……いえ、愛しています」

「なんじゃと？ どのようにして——そういうことか。吾輩たちに蘇

る方法を気付かせないことが、穂織を愛することか」

「穂織は既に死んでいる、だから馨さんは蘇らせないように殺し続けている……思考させないことで」

あつさりとした答えではある。

ただ本人の合理的な思考と、極めてややこしいグチャグチャなあれこれが複雑に絡まり合い、それが魔人故の否定なのか合理の否定なのかはまったく見えなくなっていた。

なるほど、穂織を殺し続けるならば——それは立派に愛だ。

ムラサメも、芳乃も、茉子も、将臣も。そしてレナも馨のそうした行動は当然の選択だろうと理解する。恐ろしい程に純粋で、おぞましい程に一直線……実直な愛情。

「気付いては、いないんですよね？」

「気付いてたらもつとロコツに隠すか告白するでしょう。そういう人ですし」

それもそうか、と茉子は納得する。

隠すか明かすか、どつちかだ。どちらもしないなら無自覚のまま、なら当たり前の話だ。

しかし自分ではなくレナが気付いたのか……と、茉子は少し複雑な心境になった。理由は想像が付く。だがそれでも気になるものは気になるのだ。厄介な乙女心である。

「レナさんのこと、ちよつとだけ羨ましいです。ワタシ、馨くんの気持ちとかそこまで鋭敏にわからないので」

「カナエがわたしの中にいたからでしょうね。カオルのパーツも合わせて入っていたようですし。マコと比べれば反則のようなものですね。りますよ」

理解したとかではなく、知っているからわかるだけだということを知るような優しい表情と共に伝える。付き合いで言えば茉子が一番長いのだ。当然、茉子よりも詳しいなんて言えばそれこそ先祖ズヤら虚絶やらになってしまう。

でも茉子は茉子で、知らないことを知っているレナが羨ましいのだ。

「それでもです」

「あはは。マコは欲張りさんですね。けれど、全部手に入らないからこそいいものなんですよ?」

「……でも欲しいじゃないですか」

「本当に? カオルの全部手に入っちゃったら飽きちゃうかもですよ」

「そんなことないもん!」

「もしかしたら、わたしがそこで貰っちゃったりしちゃうかもしれませんがね」

「絶対あげませんから!」

キツと睨むように叫んだ茉莉子に対して微笑みながら「ジョーダンでありますよ」と宥める。

もちろん馨に対してそうした感情は無い。と断言できるが、脇の甘さが否めないのだからかってやろう……というのは、レナ自身らしくないことだと自覚している。

レナも中に奏が入っていたことが原因なのだろうと推測しているが、魔人への理解がやや深い。手に取るようにわかるといっわけではないが、その思考がどういうものなのかはある程度理解できる。それ故なのだろう、どうにも馨に対して、弟や兄のような親戚めいた感覚を覚えるのだ。

「あとは……マコ、もしカオルに襲われても責めないでください」

「へ? 襲われ……って、えっ!? あっ、あのどっちの意味ですか!?!」

「大変申し訳ありませんが、命の方です……。ちよつと喧嘩したときに、色々言いたいことを言ってしまった」

——ふむ。命の方? 稲上馨という魔人にとって命の方な話が出るということはつまりそういうことであって。

恋人が他の女性を……愛^殺そ^ううとしか可能性が極めて高い。

「——もしかして、レナさん」

「はい」

「愛されそうになったんですか?」

「モクジケンを行使します！」

「黙秘権ですね」

「もくじけん、って木人拳でもあるまいしのうち……」

「すげえアクロバティックな間違えだな」

横のツツコミに律儀に反応するのがレナだが、今回は違った。

「絶対にムー！ でありますよ！ 約束したので！」

大きく手でバツテンを作りながら、絶対に言わないと言いつつ実際何があったのかを伝えてしまっている。

要は、馨がやろうとしてしまったということだ。

（ま、誰彼構わず口説くから仕方ないかな……とはいえ、彼女放つてそれってどうなの？）

やれやれと思いつつながら、ワタワタとするレナをどう落ち着かせたものか。そちらに思考を回し始めた。

そのあと。

「ワタシじゃなくて有地さんとレナさん、かあ……」

——妬心か——

「そう、ですね。いや、わかつてはいるんですよ」

帰宅した菜子は、内より浮上した犬神の声に応えていた。

——何故あの時抱かれなかった？——

「……なんというか、無機質な感じがしたんです。約束したからこうする、というだけのような気がして。意志が抜け落ちているような気がして……ちよつと、怖かった。それで逃げてしまったんです」

——なるほどな——

情欲の無い無機質な目だった。

あの日拒んだのは、確かにあんなゴタゴタがあつた後にそういうことはできない……という菜子の気分的な問題ではあつたが、それ以外にも菜子を求めている筈なのに『求めているように振舞っている』ように見えて、その姿に恐怖を覚えたという理由もある。

「……決めた。謝罪も兼ねて誘います」

——誘えるのか？ 今の奴を——

「少なくとも性行為を要求するくらいには魔人だって性欲あるわけですし、大丈夫です」

——……まあ、特に言うべきこともないが……——

「そうと決まれば夜這いです。えつと……どんなのがいいかな？」

どんなシチュエーションがいいか、どんな服装がいいか——そこま
で考えて、不意に頭をよぎったのは、芳乃の言葉だった。

（そういえば芳乃様は初体験の時、巫女服で……ということは、ワタシ
の場合は……忍び装束かな）

そして着替えてみる。

鏡を見る。

「……背徳感がすごい……なんだか良くないような……いや、でも、元
はと言えば夜這いは婚姻。つまりは神聖なもの。そして犬神様の時
代なら一般的……」

——何を急に言っているんだお前は——

「お祓いの衣服で抱かれるわけですよ？ 勘違いで巫女服で突撃した
芳乃様と違って、ワタシはわかってやるんですよ？ 色々不安になる
じゃないですかっ」

——そんなことを言い出したら、奴の格好はどうなる。普段の衣服
で祓魔を行なっていたのだぞ——

「……それは確かに」

——その衣服で行為に及びたいのであろう？ ならば何を迷う必
要がある——

「いいですか!? 神聖な衣服です！ 先祖代々受け継がれてきた、由
緒正しいお祓いの服装なんです！」

——だからなんだ——

「それをその……と、とにかくセックスのために使うって大変いけな
いように感じるんです！」

——抱かれない格好で抱かれることの何が悪い。第一、お前はそう
した場合の妄想を「わー!? わー!! やめてください!! お願いしま
すから!!」……やかましい——

やぶ蛇を突いて面倒なことにしてしまったと犬神はあたふたと慌てる葉子を見無視しながら自戒する。愚かなことをしたものだ。

(……というかこの女、何故そもそも誰にも相談していないのだ)

しかし、何故なのだろうか。何故葉子は誰にも言っていないのか。犬神はさっぱりわからなかった。

まさかその理由が、ただ単に「復興を見届けてもらった後に、諸々を決めた方がいい」という心遣いであったとは気付かずに。

——別に、犬神からすれば穂織なぞどうでもいいのだ。

彼には女神と眷属たちしかいなかったし、それ以外には興味も無かった。彼が穂織と朝武の守護神をしていたのは、女神への義理立てである。

だから正直土地そのものがどうなろうと知ったことではない。わからないことを知ろうとしてわからなかったという結論は出たし、十分に償いは出来ていると思っっている。それだけのことだ。

実に奇妙なすれ違いである。

方や何も言われてないから贖罪を完遂していないと思っ全部を見てもらおうとして、方や十分だからさっさと眠ろうとする——なんともはや。

しかしそれが、相互理解の居心地良くも最悪な点なのだろう。

■

「やっちまったなあ、馨？」

からかうような奏の言葉には反論できないが、しかしやはり疑問が大きい。

「あんな堪え性無かったか、オレ」

まだいくつかに分裂しているのだ、そうそう牙を剥くことは無いと思っっていたのだが——堪える気が無いということは理解した。しかしそこまで誰彼構わずだったか？　とも思う。

「まあ概ね彼女の言っただ通り、素直になっただけだよ。堪える堪えない以前の話だ。だから堪えることはこれからになるね」

「参っだね」

「笑う泣く、楽しむ悲しむ——それら全てが殺人でしか表現できない

以上、こうなるのは予想できたでしょ」

「……ぐうの音も出ないな」

素直になるということとはこういうこと……そう心の中で理解していても、ここまでは酷くないだろうとタカをくくっていた。

やれはて、やってられん。

「あーあ、どーしたもんかなー」

「で、どうやって止めて欲しい?」

「止めようあんのか」

「そりゃ私たちが出りや奪うよ」

「……やっぱやめだ。自分でなんとかする」

「そうこなくちや」

まあ、なんとかはできるだろう。なんとかは。

その先が問題なのだが。

「よし、とりあえずオレあ役に立たねえから何もしねー。元は外野だしな」

「元を辿れば同一であるはずなのだがな」

「うっせ。オレらは京都人だろ」

「まあ意見に対して現実的に言っておけば? 全否定にはならないようにね」

「善処するわ」

こちらに関してはおもう性格の問題だ。細心の注意を払い、常にその危険性を留意して——それからあと、発言する前にはその内容の確認だな。とはいえ性格は性格だ。完璧な対処は難しいだろう。本気で対処をしようとしたら、さて……それはオレなのか。まるでテセウスの船だ。そういう意味で、俺はオレと比較してもほぼ変わりなかった。

「ところで馨よ」

「んだよ」

「あの田心屋で新しい甘味の開発が行われているそうだな」

奏はなんで真剣な表情と声色でこんなこと言ってるんだ?

「らしいな。なんか言ってる」

「……味見係とか……」

「まあ、立派に敗者の務めを果たしてくれてるしいいよ」
「よしっ」

コイツ、ホントに甘味好きだな……。ガッツポーズして喜んでる奏なんて中々見れないし、こんなの見たらムラサメ様が「吾輩は巨乳だった……？」とか発狂なされるだろう。

「となると……芦花さんに謝りに行かないとな」

「何故謝る？」

「結果的とは言え、嫌な役させちまったのは変わりねえからな」

それくらいはして当然だ。礼節は重んじるべきなのだから。

……何故奏は朝武と稲上の真実を知っていたかと言えば、それは秋穂さんの存在が大きい。彼女と契約したことから、そちら側——つまり歴代巫女姫への接続ができた。そっちから仕入れた情報と自分が知り得る限りの情報を結び付けてある程度を推測。その後犬神の残滓が残るレナに取り憑いたことから犬神側の知識を覗き見して、自分たちの正体を割り出したそうだ。

ヤツとしては実のところ、ほとんど当てずっぽうだったらしい。自分がこいたテキスト——

で、芳乃ちゃんたちが苦しむ姿を見てニコニコしていたかつたらしいが、これが事実で死ぬほどつまらなくなったとかなんとか。

閉じこもってた1週間の間に教えてもらった。

「……それにしても、奴は静かだな」

「虚絶が静かっつてのは確かに妙だね」

しかし本気でどうしたものか、と考えている二人を見て何故そんな話をしているのかと考える。

すつとぼけた顔をしているのだろうか。京香はオレの顔を覗き込みながら一言。

「いいかい、馨。キミの半身なんだよ？」

ほーん、と流す。

オレの半身、オレの半身……ふむ。

オレの半身であれば——

「確かに……確かに！」

「お前ぜんっせんわかってないだろ」

「バカツタレわかつとるわんなもん」

「ホントか？」

「ホントホント」

「嘘つけ」と二人が容赦無く切り捨てる。

……まあ、それもそうか。

虚絶とオレは別で、奏と京香とも異なる。故にオレたちが納得しても――

「厄介な話だが、奴は奴独自の意志を持っている。それが我々と同じ目的であるとは限らんのが面倒な点だ」

「要は消えたくないって思うかどうかか」

「然り」

とはいえ、問題はそれではない。

京香にしる奏にしる、静かなことが気掛かりなだけであり、どんな行動をするのかどう対処すればいいのかなど、初めから決まっている。

アレがオレなら、オレとしてやるべきことはただ一つなのだから。そうしてオレは虚絶について飲み込み、改めて腰を下ろす。

ヤツが静かであろうがなかろうが、オレたちの間で交わすべき言葉は愛や情などではない。互いに食い潰し合う刃の応酬だけが、オレたちの会話だ。

「で、だ」

急にニヤニヤしながら奏がグイと顔を寄せてくる。

「何故あの時常陸菜子を強引にでも抱かなかった？」

「まあ気分じゃなかったってのはあるが、それ以上に要求した以上はつてだけだ。拒まれても強引に行く理由が無い」

ああいうの、結構盛り上がるんじゃないかって思ったけど義務感でやるのは違うと思った。なんというか――楽しくも愛しくもなく、そういうものは感じられない

有り体に言えば、趣味ではなかった。それだけの話だ。

「じゃあ今は？」

「食いそびれたことは後悔してつからフツにやりたいよ、オレ」

「素晴らしく欲に従ってるね」

「むしろ欲に従わない理由とかなくない？ オマエらだってそうだろう」

「そうだな。大義名分など必要ない。我々は欲に従って生きるものだ。だろう？」

そこで黙り込んでいる京香もそうだが、欲望には素直なのがオレらだ。何を当たり前のことを……そう顔をしかめた時、奏は冷たく言い放った。

「そこまでわかっていながら、敢えて確かめるのか？ 堪えることができるのかなどと」

「それは……」

「そこだ。堪えることができるかどうかに託けて、常陸某子を殺そうとしているのではないかな？」

……事実、オレの愛は殺害でしか表現できない。

確かに人の愛し方はできなくもないが、それで伝わっているかどうかはオレ自身にはわからない。ぼんやりとしか。

だからオレは彼女を手にかけてしようとしてしまうのか——そう考えた時、スツと飲み込めた。

「否定できねえ」

「堪えるなどと、確かめる必要はないからな。それができない存在が」

「謝ろ」

「なあんだ、つまらん」

気付かずに殺して欲しかったのか。

それこそつまらなくないか？

「……とはいえ、今日やれることはもうないな。普通に飯食って普通に寝よう」

「え、甘味は？」

「明日」

「……」

「あ、し、た」

「……うん」

「バカな姉上だこと」

バカを言うな、今日は顔を合わせづらいんだよ。

事が事であり、茉莉に泣き付きたいところではあるが、今は一人がいい。素振りでもして、いらん煩悶を忘れるとしよう。

■ —— なんて言えなかったんだろうとふと思う。

でも言えないのは心配かけたたくないからであつて。

それは心配であるかもよく分からなくて。

……だからこうして、昔から心安らげる男性の側にいる。

というか夜這いをしている。

「馨くん？」

「……くう……」

（寝てるし）

宣言通り、忍び装束で夜這いをかけた茉莉。

が、当の馨は完全に寝ていた。

（……どうせモヤモヤして寝れずにいるのかなとか思ったけど）

見ればまあ——よく寝ている。

完全に熟睡している。それはもうぐつつすりスヤスヤと。

しかし茉莉の存在に気付かないというのは不思議なものだ。眠りが浅いとも深いとも付かない半端な馨だが、それは別として自分の中にある崇りに気付かないということはないだろう。

……気付かないほど寝ているのか。

「気づい、てる？」

「ぐう」

「ホントに寝てる……」

「ぐう」

——うむ、熟睡しているな——

中の人のお墨付き。完全に眠っている。

（あの、こんなに眠り深いのか）

——ただ寝付きがいいのだろうか——

(そんなだったかな……)

——己が欠けた状態から元に戻ったのだ。まともに寝ることも難しかったろうしな——

(つまり、寝てなかった分長く寝てるだけですか)

——うむ——

(そっかあ)

若干心配したが普通に平常運転だったらしい。こんな風に熟睡している印象などなかったのだが。

いや、そもそも馨に対する印象は——手間のかかる弟みたいなものだった。常に何かをしていて、落ち着きがない。そんな印象。

「起きてよ」

とりあえず軽く揺すつてみる。

馨を起こさねば話にならないのだ。今夜の目的は夜這いよりも相談なのだから。

でも反応は無い。

「馨くん？」

「……」

「ちよつと、起きて欲しいんだけど」

「……」

「起きてっつば」

軽く叩いた瞬間。

「——っ!?!」

——反応したようだな……——

黒い影でできたような無数の手が、茉莉を絡め取った。素早く手足を縛り上げて、身体中を這い回って弄る。

「ちよつ、そういう反応じゃ……ひゃあっ!?!」

這い回る手とかそういう反応が欲しくなかったと文句をつけようとして、敏感な箇所になんか触れて嬌声が漏れる。サワサワと触れるだけで別段何をするわけでも無いのだが、焦らすような動きに、身体は勝手に反応していく。

「何処に手を入れ……あう、つ……！」

上半身を這い回っていた手は下半身へと移動していき、秘所すら弄り始める。

「まっ、待ってやだ……っ、せめて起きてからにして……おねがい……かおるくん……っ」

——無手であれば武具を調べるであろう？ それだけだ——
……は？

茉莉の熱が急速に冷めていく。

つまり、つまりだ。これはあくまでも寝込みを襲われていると判断されたからこういう対処をされただけで、勝手に盛り上がったのはこっちで——

「危害無し……か。だが拘束はさせてもらう。悪くおも——」

ムクリと身体を起ここした馨は、しばし呆然とした後、その影の手を消してから間の抜けた声を発した。

「……茉莉？　なんでオマエ……」

「そ、それよりも——影の手、何処に突っ込んでナニしてるの！　バカア!!」

「へ？」

つい頬を引つ叩いた茉莉は、身体中を弄られた挙句、すつとぼけた顔でなんぞなどどほざいた馨が悪いと、ちよつとでも期待した自分を恥じながら責任転嫁とわかりながらも、それでも責任転嫁した。

乙女の心は、複雑なのだ。



……つまり、茉莉は触手腕に弄られたと。

ふむ——

「うわ、えっろ」

「……言うに事欠いてそれなんだ」

「じゃあ、えっち」

「そういうことじゃない」

「えっど」

「濁点着ければいいもんじやないからね」

「え、ダメ？」

「ダメ」

「……忍者が触手負けてお約束だと思いがね」

「ふんっ」

「あでっ!? 脚踏むな!」

プンスカと怒った菜子に脚を踏まれるが、そんなに怒るものかね？

オレとしては役得だったからまあ……

「ナニ鼻の下伸ばしてるの」

「いやあ、感触は直に伝わって来てるんでな」

「ていつ」

「ごっ……!?! 鳩尾は、やめろって……」

更に怒った菜子に腹パンされる。そんなに気にすることかね今更。オマエの身体で触ってないところなんて尻の穴くらいしかないんだし、別にどうだって構わんじやろが。

「んで、何の用だよ」

「えっと、彼は——自分を祓えって」

「いつ言われた」

「夕方ごろ。夕飯前くらいに」

「オレ以外には？」

「誰にも。……今、馨くんと言ったのが正真正銘初めて。大好きな馨くんに聞くのでも、怖かった」

ほーん。

誰にも言わず伝えず、まずオレに言うためにわざわざ夜這いかけて

……あ？

「あ？」

待て。

コイツ、なんて言った。

「今なんて？」

「馨くんに聞くの、怖かったって」

「その前だその前」

「……誰にも言つてなかつた？」

いや、オマエよお？

「まさか、オレがこれを言う日が来るとはねえ……なんですすぐ言つてねえんだよ。言うチャンスあつたら。というか言えよ、伝えろよ。これオレに言うより他に言わなきゃ意味ないだろ」

「だ、だつて皆悩んでたしっ」

「正直言あ、穂織の今後よりよっぽど答えでる話題だぞオマエなあ」

とてもシンプルに、どうしたらいいかすぐに出てくる話題なのに、どうして何も言わないんですかね菜子さんや。オレだつたらさつきと言つてるぞ。オレ一人でもどうにもならんしき。

「ヒトには言えだなんだ言つておきながらそれつてき、ちよーつと良くないんじゃあないかね？ 菜子ちゃん」

「でも、でも！ だつてさ！ 馨くんでも悩むでしょ!？」

「そりや悩むさ。でもな、オレ一人で決められるなら言わねえけどそれが無理なら言うぞオレ。まあ滅多にないんだけど」

そしてそれが問題だとよく理解している。それが原因でいらんことが無数に起きたのだから。

「オマエの考えはわかるよ。送るなら送るで、せめて穂織をなんとかしてから送りたいんだろ？」

「もちろん。大切な思い出が無くなるかならないかの瀬戸際つてところで送るなんて、ワタシにはできないよ」

「だと思つた。それをみんなに言えればいいのになんで言わねえんだ」

「余計悩ませそうだったし」

「だからつて一難去つてまた一難なのか？」

「うう……」

「つか、オレが役に立たないのは知つてるだろ。冷やかしに過ぎないんだ、菜子がダウンすると問題が多いんだよ」

側から見てたら知ってるくせに、と少しご立腹。

しかしこれは本題ではない。モゴモゴとした菜子に、知つてしまつた以上、このスタンスであることだけは明言しておかねばならない。

「……まあ、オレはアイツの側に立たせてもらうぜ。それが答えだ」
「っ、だよな」

「生きて欲しいよな」
「うん」

「明日、駒川のとこ行くぞ。色々情報が欲しい」
「え？」

「オマエたちとオレたちの意見は違う。でも、だからってできるできないを明確化しないのは筋が通らん。立場は変わらないが」

「……いいの？」
「それはそれで、これはこれだ」

オレの気持ちはオレの気持ちだ。

それに向こうがどうするかなんぞ向こう次第。道の開けないことで右往左往するよりも、まずできることからやっていけば問題あるまい。

「更によえば、みんなにも言うぞ。オレだけ知っても意味が無い」
「えっ」

「なんだその顔。気まずいのか？ でも言おうぜ。この話題は、避けては通れない」

「も、もうちよつと後に……」

「どうせ結論はみんな同じだろ。送るなら送るでせめてってな。なら悩むこともない」

「そうじゃなくて、そのう」

「彼を祓うとか祓わないとか、そういうの聞きたくないのか」

核心を突くと、彼女は顔を伏せた。

「……うん」

小さく呟かれた一言には、強い拒絶の意志がある。

「ま、面白くねえわな。否定しないよ。でも、彼は祟り神に変質している。それは事実だ。今はどれだけ落ち着いていようが、いつ何が起きてどうなるかなんて想像も付かない。嫌だろうけど、それだけは忘れないでくれ。頼むよ菜子。彼の為にも」

「わかってる——」

……なんて言っているが、茉莉子の表情は浮かないままだ。

——まあ、なんだ。人間、色々と便利なもので。慰めるともなれば、別に言葉だけでなく行動ですればいい。ということもある。

「あー、茉莉子」

「何？」

「いやな話したし、ちよつと、楽しいことするか？」

「楽しい……？」

「あー……そりゃあ、アレだよ」

しかし、何故かはわからないが今日の茉莉子の服装に違和感を覚える。

なんか、違うのだ。いつも通りの忍び装束とは言え、なんだろう——何かが違う。髪型とかじゃなくて、服装がほんの少し。

「……茉莉子、なんか色でも変えた？」

「今日、実は……スパッツ、履いてるの」

「え、なんで」

「好きでしょ？」

「……もしかしてオマエ、誘ってた？」

コクコクと頷いて、裾の部分をたくし上げる茉莉子。

……当然中身をオレはガン見である。

スパッツだ。黒スパッツだ。エロい。

「……あと、下着も着てないよ」

「ウチにオマエの下着の予備あったっけ」

「この前持ってきたじゃん」

「まあ、オレとしては下着は着けてて欲しい派なんだが……ノーパンノーブラも夢っちゃ夢か」

「なんで下着着てる方がいいの？」

「純粹に半脱ぎが好きだから」

「でもその手の雑誌はほとんど全裸だった気がするけど」

「そりゃあ、あれだよ。あの、あれだあれ。裸体がいい女と半脱ぎがそる女はまたべっこって話で」

純粹な趣味嗜好でしかないが——それが彼女にしてみれば、久しぶ

りに楽しくなるネタだったようで、急にニコニコしながら胸元に手を掛けながら迫ってくる。

上気した肌に、何を使うまでもなくわかる淫猥な雰囲気。コイツと寝た回数は数えるほどだが、その全部が茉莉子からというのは……男として少し情けなく思う。

とはいえ、誘われた回数より溶かして鳴かせた回数の方が多いのも事実だが。

「ワタシはどっちかな？」

楽しい質問。

——困る。裸の茉莉子も全部好きだから。

視線を逸らして、素直に呟いた。

「……どっちも」

「あは、そんなにワタシが好きなんだ」

本当に嬉しそうな女の顔と声だ。ただそんな彼女にどうしても恥ずかしさを覚える。大抵こんな話をする、決まって彼女は「やーらーしー」とか言うのだ。

「やらしい男で悪かったな……」

もう先手打ってしまおうと、どうにでもなれの問題でまた呟く。

「じゃあ、そんなやらしい馨くんにご奉仕してあげようか？」

「え、なに、急にノリノリになって」

「いっつも責められてばかりだし」

「気にすることかそれ」

「別に」

「じゃあなんで」

「……そんな気分なの」

「茉莉子……」

「ね？」

「じゃあ、頼む」

「仰せのままに、ご主人様。あはっ」

楽しいに、淫らに微笑みながら、茉莉子はそれらしく始める。他人に脱がされるのは妙に恥ずかしい。

……こんな女だったっけなあ？

昔はもうちよい色々と清楚で真面目なヤツだと思ってたんだが……どうやら淫らに真面目なヤツだったようだ。

夢が壊れたようで、けれどそれが心地いい。

惚れた弱みをしみじみ感じながら——今日だけの従者の奉仕に身を委ねた。

「……青姦って、馨くんも結構アブノーマルだよね」

「ウチの庭なんだから別に青姦ってほどでもねーだろ。なんだ、山奥の方が良かったか？ それとも、路地裏でハメる方が夢だった？」

「ワタシ、見られる趣味なんかないからねっ」

ものすごく抗議したそうな目線を送りながら、心底から何を考えてるんだオマエという言葉をぶつけられる。

なんてことはない。

オレだけの淫らな従者に、「ちよっと外でシようぜ」と誘ってみた。そしたら難を示しながらも下は素直だったから、結構強引に行ったらイけた。

……しかし、尻もいいもんだな。中とは違った愉しみと良さがある。菜子も随分ヨガってたし、そっちの才能あるみたいだ。

ふむ、開発してやるか？ いや……たまにでいいな。気に入ったけど、色々ハマってしまうと問題だ。

主にオレの方が。思ったよりキタ。

クツクツと笑っていると、それとは対照的な彼女と言えば。

「バレちゃったかもしれないんだよ…」

本気でその辺りを気にしながら、羞恥に頬を染めて困ったように咳く菜子。

「気にするな。寝静まった時間だし、オマエも声を抑えて愉しんでたじゃないか。初めてやった時と同じくらいだったぞ」

「言わないでよっー！」

「それにあんな猫撫で声を出しちやってさあ」

「……あの流れで有地さんにお姫様抱っこされた時のことを引っ張り

出されたの、本当に驚いたんだからね」

別に大した話でもないが……ヤつてる最中に、そのことを引つ張り出して問い詰めただけだ。主従プレイのついでに、オレ自身嫉妬したのも事実だったから色々ところ……楽しかった。

「ホントはさ、実は将臣に気があつたんじゃないか？」

「確かにいい人だなあととは思つたけど、いい人の先を見つける前に芳乃様とくつついたからわかんないよ」

——さてどうなのだろうか。今更そんなことを気にしても仕方ないとは言えども、一人の男としてはやはり気になるものだ。惚れた女が視線を向けている先とかその辺は。

けれども、茉莉自身どうなっていたかは想像も付かないようで、実際困つたような表情を浮かべている。純粋にわからない、そんな感じだ。

腹立たしいことは腹立たしいが、将臣とくつつ付いても上手くやれていたのであろうとは想像がつく。腹が決まればグイグイ行く男と、腹が決まればグイグイ行く女。転がるように結ばれるのは想像に難しくない。

……ただ、それは茉莉が素直になるだけの理由がなければならぬ。たとえそのカケラを、恋をしたいという願望を知っていても、将臣がその気であつても、茉莉の心の壁を乗り越えるには、一つ二つの助力が必要だろう。

くつつ付けば幸せであろうが、くつつ付くまでが難問の男女か。そういう意味ではオレと変わらん。しかし、茉莉の心の壁は厚いからな。オレみたいな幼馴染で、かつ幼少期から互いをよく知り、それ故に甘さも辛いも分かち合うような間柄でもない限り、茉莉から何かアクションをするということはないだろう。

……これ、仮に実現するとしても茉莉が素直になるようにするため、第三者の介入が必須じゃないか……？ 結構、綱渡りな気もするな。

「……ふうん。まあそういうことにしておいてやる。けど忘れるなよ。オレはオマエの男でオマエはオレの女だ、茉莉。魔人だって、他

の男に目移りすりや嫉妬するし、腹も立つんだぜ」

別に今となつてはどうでもいいが、それはそうとしてこの最愛の少女がオレ以外へ目を向けるのは色々思うところがある。故に釘を刺すというほどでもないが、前に言ったようなことを敢えて、カツコ付けてもう一度言つてみた。

ところが茉莉子は、それを聞いて少し呆れたような態度を取つた後、ニヤリと笑いながらオレに顔を寄せてきた。

……はだけた衣服と事後の汗に濡れた朱に染まる身体をグイグイ近づけられると、またやる気出そうなんだけど……狙つてんのかこの女。楽しそうにしやがって。

「だったらアナタに、ワタシこそ最初に愛す^{殺す}べき人だつてちゃんと自覚して欲しいな。朝から晩までずっとワタシを犯し続けなければナさんよりも早く——殺そうとしてくれる？」

イジワルな笑みを浮かべて、イジワルな言い方で、イジワルに尋ねてくるキミが、とつても可愛くて——こんなキミが見たかつたと強く感じて——オレが大好きなキミを見るには、オレの愛を伝えちやつたら見れないから——

「そっか、わかつたよ……そういうことか」

……バカじゃないのか。こんなのが答えか。

素直になる、殺したくない、イジワルで可愛いキミが見たいから、なんて。

複雑に絡まりすぎてる。しかもそれら全て行動として基本的には同じという、訳の分からなさ。

オレがオレとして生きるといふだけで、オレが生きているという行動に全部覆い隠された……実にバカらしい。

「好きな子には、意地悪したくなる……たつたそれだけのことだったんだ」

「え？」

「なんでオマエに色々する気があつたりなかつたりするのか。ごく単純な話だつたんだよ。好きな子に意地悪する子つているだろ？ オレも例外じゃなかつたつてだけだ」

「……わかりづら」

「言わんでくれ。自覚してんだ」

「意地悪も含めて愛情表現だって、一応覚えておいたげる」

「あんまり嬉しくないもんな、フツ。気をつけるよ」

「ね」

「ん」

「ワタシ、アナタだけのメインヒロインになれたかな？」

「本来ヒロインってのは女の主役って意味だぞ。単に主人公と深く絆を結ぶ女を指す言葉じゃない」

「ふーん。それで？ どうなの？」

「しつこいな」

「忍者だから」

「忍者関係ねえだろが……昔からずっとメインヒロインだよ」

「好きな人に身を引かれそうになるメインヒロインっている？」

「そこにいんだろ」

「……あ、そ」

「何拗ねてんの」

「拗ねてないもん」

「じゃあなんだその反応」

「なんでもないよーだ」

二人で笑い合う。

結局オレたちは、似た者同士なのだろうな。